

罪の向こう、愛の絆

千野 伊織

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『NARUTO』の二次創作作品です。

※R18指定をしておりますが、毎回のお話に性描写が出てくるわけではございません。

主人公は「橘芙蓉（たちばなふよう）」という女性。

舞台は木ノ葉の里創設前、柱間・マダラが幼少時代々木ノ葉創設期です。

原作のストーリー、時代設定、キャラクター設定に沿って話を進めておりますが、私の創作の都合上、設定変更やオリジナル設定もあります。

物語は7歳の芙蓉が千手仏間に引取られ、幼少の柱間・扉間・板間3人の許嫁になる

所から始まります。

物語の最初は仏間の若き時代、芙蓉の母親・水蓮とのお話も同時に進みます。

芙蓉とマダラが出逢った後は、芙蓉・マダラ・柱間・扉間の4角関係、芙蓉と4人それぞれとの恋愛を描いています。

恋愛だけではなく、原作に沿ってオリジナルの展開も交えながら、柱間とマダラが対立・決別していく様子とバトルも描いています。

【扉間の旅】では芙蓉の死後、扉間が二代目火影になるまでの短い期間のお話を書いています。

【六花の森】ではマダラが柱間に倒されてから数十年後を舞台に、雲隠れのクーデターと扉間の死、主人公・芙蓉の秘密を書いています。

愛とは、罰とは、償いとは、罪の報いはあるのか・・・

今後、物語の中盤〜後半からは、うちはカガミ、猿飛ヒルゼン、志村ダンゾウ、コハル、ホムラも登場します。カガミは重要人物として活躍してもらうため、年齢はヒルゼンたちと同じ年に、そして扉間の弟子の設定にしております。

ヒルゼンは35歳前後で三代目火影に就任した設定です。

※このシリーズの番外編も多く書いておりますので、ぜひ目次よりご覧くださいませ。

★こちらはpixivにもsukechanの作者名で私が投稿している作品でございませうが、改めて書き直した場所、追記した箇所もございませう。より良くなつたと・・・
★思ひませう★

目次

- (1) 芙蓉く柱間・扉間・板間との、はじめ
1
- (2) 柱間とマダラの決別。幼少期の終わり
50
- (3) これからどう生きるかを考えるとい
うことく芙蓉の場合
89
- (4) これからどう生きるかを考えるとい
うことく仏間と水蓮
118
- ◆ 作者からのご挨拶・作品紹介
150
- (5) 芙蓉の成人
154
- (6) うちマダラとの出会い
187
- (7) マダラとの恋。千手とうちのは決戦
187
- (8) 芙蓉・マダラ・柱間・扉間。夢の現
223
- (9) わだかまり
286
- (10) 結実と決別
312
- (11) 背徳の求婚。柱間の愛
338
- (12) 樹のために・・・
365
- (13) 揺らぐ心。決まる心
392
- (14) 再会の行方。マダラvs柱間・扉間の戦い
412
- (15) 契り。マダラとの新たな生活
442
- (16) マダラ、死す
476

(17)	それぞれの新章	507
(18)	芙蓉と扉間ふたりの咎人・マダラの真相	531
(19)	集い・扉間の弟子たち	552
(20)	扉間の情愛、椿の怨嗟	572
(21)	帰り道を失くして	594
(22)	芙蓉が失くしたもの	626
(23)	過去と未来の辻褄	650
(24)	この身は覚えていて。扉間との関係	674
(25)	卑劣様、素直になる	700
(26)	すべて思い出した	726
(27)	マダラとの必然	749

(28)	扉間の求婚。マダラの意味	772
(29)	永遠に、さようなら	801
(30)	芙蓉と扉間。紅葉の帳が下りる頃	830
(31)	罪の向こう、愛の絆	853
	嗜欲の奴隷・柱間	877
	心の上に刃を置いて・仏間と水蓮	890
	芙蓉と樹のすれ違い	911

「if you XXX No. 3」	マダラと一緒にお風呂タイム	1099	六花の森(1) お前の名は……	1079
	木ノ葉の里に観光協会を!	945		
「if you XXX No. 4」	うちはカガミが見つけた答え	966	六花の森(2) 六花とマダラ、終わりの始	1091
			まり	
「if you XXX No. 5」	劣使いの嫁(も卑劣) 前編	993	六花の森(3) 金銀兄弟のクーデター、扉	1111
			間班の戦い	
「if you XXX No. 6」	劣使いの嫁(も卑劣) 後編	1017	六花の森(4) 扉間から全てを取り戻す為	1134
			に	
扉間の旅(1)		1037	六花の森(5) ついに覚醒の時	1160
扉間の旅(2) くあまつさえ		1052	六花の森(完) その結晶はいつかまた輝く	1185
扉間の旅(3) 扉間の選択		1065		
扉間の旅(完) 続け、物語……		1071	六花の森(番外編) 六花とマダラ。五月雨	1204

のふたり

1227

「 if you XXX No. 7」犯

してでもく夏の白昼夢く樹と芙蓉

1244

マダラと扉間の共闘(1)く過去の傷跡

1275

マダラと扉間の共闘(2)く本当の敵

は・・・

1287

マダラと扉間の共闘(完)く交差する殺意

1299

続・六花の森(1)序章くマダラの輪廻眼

1318

続・六花の森(2)うちはオビトの開眼

1331

続・六花の森(3)く対面くオビトとマダ

ラ、六花とヒミコ

続・六花の森(3)く対面くオビトとマダ

ラ、六花とヒミコ

続・六花の森(3)く対面くオビトとマダ

ラ、六花とヒミコ

続・六花の森(4)く新たなる救世主の誕

生

続・六花の森(5)く六花VS大蛇丸!!

1455

続・六花の森(6)く陽だまり。ミナトと

クシナ

1469

続・六花の森(7) ～九尾の出現!

1481

続・六花の森(8) ～その名は、うずまき

ナルト

1497

続・六花の森(9) ～『暁』のメンバーに：

1514

続・六花の森(10) ～六花とトビのコン

ビ。最後の任務

1525

続・六花の森(11) ～さようなら、ナル

トくん・・・

1542

続・六花の森(12) ～うちはイタチの裁

断と大罪

1556

続・六花の森(13) ～オビトvs六花の

闘い。そして、六花の夢

1569

続・六花の森(14) ～暁に入りて暁達す

1583

続・六花の森(15) ～流されながらも舵

を取る

1601

続・六花の森(16) ～全てを背負う者。

うちはサスケVS六花

1617

続・六花の森(17) ～マダラとの再会

1639

続・六花の森(18) ～信じる心を守る為

に。マダラとの対決!!

1656

続・六花の森(19) ～失意～マダラの語

る計画の裏側

1673

続・六花の森(完) ～その結晶が朝陽で昇
華するとき—— 1768

【続・六花の森番外編】ふたりのマダラ

(一) ～目印—— 1716

【続・六花の森番外編】ふたりのマダラ

(二) ～二十四時間—— 1726

ふたりのマダラ(3) ～追憶と現実

1737

【続・六花の森番外編】ふたりのマダラ

(完) ～選択—— 1753

【六花の森番外編】大海の木ノ葉(一)

1767

【六花の森番外編】大海の木ノ葉(二)

1807

【六花の森・番外編】雨名月——

【続・六花の森・番外編】1時間 46分

59秒—— 1849

1840

(1) 芙蓉く柱間・扉間・板間との、はじまり

戦国時代。国と国、組織と組織、個人と個人。その対立と憎しみを背負い、駒となつて戦う。そして自らも愛と憎しみを抱え、対立する忍を敵として、終わりの見えない、血で血を洗う戦いを続ける。それが、この時代の「忍」であつた。

「瓦間……」

いくつもの棺が土葬されるなか、兄弟三人と父が小さな棺を見送る。

「忍が嘆くな！忍は戦つて死んでいく為に生まれてくるものだ。」

我が子の棺を見つめながら父は、自分の言葉を自分に言い聞かせているかのようだった。涙こそ浮かべないがそれ以上言葉が続かない。だがすぐに我に返り、強い眼差しで言葉を続ける。

「遺体の一部が帰つてきただけでもありがたいと思え！今回の敵は、うちは一族と羽衣一族だったからな……。特に奴らは子供とて容赦などしない。」

父の僅かな変化に気づかず、泥をかぶつていくその棺を見つめながら長男が言葉を続ける。

「瓦間はまだ七つだった！こんな……こんな争いがいつまで続くのですか☒」

「敵という敵を亡き者にするまでだ。戦いの無い世界は簡単な道程ではできぬ！」
「子供を犠牲にしてまで……？」

ガンツ！

父は長男を殴り、その手が震えるのを気づかれないように言う。

「瓦間を侮辱することは許さぬ！奴は子供としてではなく、一人前の忍として死んだのだ！」

殴られてもなお、長男は父を睨みつける。

「何が愛の千手一族だ！何が一人前の忍だ！大人が寄つてたかつて子供を死に追いやってんじやねーか！こつちだつて、相手に同じことしてるしな！」

その言葉に父は黙って背を向ける。

「それが相手への敬意だ。たとえそれが赤子とて武器を持てば敵とみなす。」

ふいに強い風が吹き抜け、次の言葉を遮ったが、それでも父はすぐに言葉を続けた。

「そして、子を一人前にしてやることこそ、親の愛だ！」

長男は父を更に強く睨みつけた。

そんな愛など、到底受け入れられるわけがない。受け入れて、たまるか。

死んだ弟の棺がついに、全て土を被った。再び風が吹き、土煙を舞上げる。それはまるで、土に埋められたくないと弟が叫ぶ声のようだった。

「こんな忍の世界はぜってー間違ってる!!」

長男は俯き、強く目を閉じてそう叫んだ。

父は子に今の全ての感情を隠さなければと思いつながら、その言葉に怒りを抑えることができなかった。

“こんな忍の世界なんて、私は絶対認めない”

遠い昔に聞いたあの女の声が、後ろから聞こえた気がした。

「お前のような奴をガキというのだ!」

目の前の息子に、その女の姿が重なる。

再び父は長男に拳をあげようとしたが、とつさに次男が二人の間に入って止めた。

「父上、兄者も今日は気分が沈んでるんだ…もう許してあげてよ…」

さつきまで吹いていた強い風が、凪いでゆく。

「…少し頭を冷やせ。柱間!」

「……」

仏間は一人、重い足取りで家に戻り玄関の前で深い溜息を吐いた。

「仏間さま、おかえりなさいませ。…お疲れ様でございました。…お子様方は?」

庭で洗濯物を取り込んでいた女中が、申し訳そうに声をかけてきた。仏間の妻は三年

前に病で亡くなっている。

「椿か……。子供らは暫く帰ってこんだろう。瓦間の死が相当堪えた様だったからな……。」
「そうですか……。無理ありません。数多の死を目にしてきたとはいえ、戦で身内を亡くすのは初めてでいらつしやいますもの……。」

椿はそつと涙をぬぐった。

「椿、お前も、夫と娘を戦で亡くしているのだつたな……。娘はいくつだったのだ？」

「五つです。村全体、忍び以外の人間が無差別に殺された戦いだったので……。忍の修行中とはいえ、まだ幼すぎでした。私と夫が守れていれば……。あの子は……。」

「すまぬ。お前にまで辛いことを思い出させてしまったな。」

「いいえ。私は大丈夫です……。今は仏間さまのほうがよくぼどお辛いでしよう。」

「そう言つて椿はまた涙を拭った。そして、ハッと何かを思い出し顔を上げ焦つたように言う。」

「あの……。こんな日にお伝えするのは、その、申し訳ないのですが……。」

椿の様子を見ていた仏間は、良くない要件だとすぐに察し真剣な顔をした。

「構わぬ。申せ。」

椿は洗濯物を抱えたまま小走りで仏間に近づき、俯いたまま口早に用件を伝える。

「水蓮さんが昨年、亡くなられたようです。それで最後に残っていた一番下の娘が、父の

：兆さんの姉に引き取られているそうです。それで、その子がもうすぐ他国の大名へ売られるようです…」

「水蓮が・・・そうか。」

椿がはいと答える前に、仏間は玄関の扉を開けゆつくりと家の中へ入っていつてしまつた。

椿は仏間の背中をただ黙つて見ていることしか出来なかつた。

仏間は自分の部屋に入ると着替えもせず座り込み、畳に目を落とす。夕方に差し掛かる前の黄色い光が障子から差し込み、仏間のかたちの明るい影を作る。

「なんとという日なのだ。」

仏間の頭の中は、仏間と繋がりを作つてきた様々な人物の顔が浮かび、交錯する。

今日は冷たい土の下に埋葬された愛する息子の顔しか思い出したくはない。なのに、なぜあの女のことまで思い出し、心を乱されなくてはならないのか。

いづどんな過酷な情報が入つても来るかも分からない日常には慣れている筈なのに、今はこんなにも心を乱されている。

仏間は自分自身を嫌悪した。

しかし同時に、そんな自分を嫌悪したところで失つた息子は戻つては来ないし、あの女にも二度と会えはしない。過去には戻れないのだ。

◆ 今できることは何か。乱される感情と同時に、仏間は冷静に考え始めていた。

数日後、仏間はひとり、領地の外れにある大きな屋敷の前に居た。

仏間が長を務める千手一族の領地内には、一般市民も多く住み、農業・商業・工業・武器の製造、学校、病院など、千手一族を支える形で中規模なコミュニティが出来上がっていた。また、千手一族もそれらの市民を守るといふ関係性で支え合つて暮らしていた。

その市民の中には、外との交易や商売で財を無し、金銭面で千手一族を支え特別な加護を受けている者もいる。仏間が立っているこの屋敷の主人も、その一人である。

使用人が大きな扉を開け、仏間が玄関に入ると、そこに主人である中年の女が立っていた。

「あらあら。仏間様みずから、しかもお供も連れずにお越し下さるなんて、申し訳ないですわ。こちらからお伺いしましたものを。ささ、どうぞ中に入つて下さいな。……さつ、仏間様をお通ししな。」

女は眉間にしわを寄せて迷惑そうな笑顔を作り面倒臭そうにして、先にそそくさと中へ入つて行つてしまった。

使用人の男は慌てる様子もなく、無言で仏間を屋敷の奥へと案内した。

「芙蓉、この方が仏間様だよ！さっ、しつかりご挨拶をし！」
舶来品の家具や調度品で派手に飾られた部屋の床に、少女がちよこんと正座していた。

女の言葉と同時に慌てて立ち上がる。

「こ、こんにちは。はじめまして。橘 芙蓉と申します。よろしくお願いいたします。」
少女は大きな声で言うのと、緊張で体をこわばらせながら仏間の顔と床と、交互に視線をそらしながら挨拶をした。

「なんだいこの子は。おどおどするんじゃないよ！なんでいつも行儀良くできないんだい！こんなんじゃないや大名様に気に入ってもらえやしないよ！もう！私に恥をかかす気かいー！」

「ご、ごめんなさい。伯母様……」

少女は涙目になり俯いた。仏間はその様子を見て、伯母と少女の関係性は想像していた範囲内だったが、少女のほうは想定外に弱弱しく、少しばかり驚いた。

・・・これがあの女の娘か？いや、やはりあの男の娘だな・・・

仏間は少女のことを改めてじっくりと見て、そう思った。

少女の髪は明るい栗色でくせ毛なのか毛先が遊んでいる。大きな二重の瞳は深い琥珀色。痩せた肌は真っ白で、一見病弱そうにも見えなくもない。

あの男の容姿を即座に思いだせるほど似ている。あの女と似ているといったら、俯いた時の長いまつ毛と血色のいい小さな唇だろうか。

「主人、この子がどんな子かもう分かった。今日はこの子を譲って貰えるか、その話をしに来たのだ。二人で話せるか。」

「あら？ そうですのです？ 水蓮の子だから、容姿が良ければそれで良いってことかしら？」

女は意地悪そうにそう笑って見せた。仏間は無言で女の顔を見つめ返す。

「そ、そんな怖い顔で睨まなくたっていいじゃありませんの。私は水蓮の義姉であり、芙蓉の伯母ですよ。お譲りするにも、きちんと仏間様のお気持ちを確かめなくちゃなりません。さつ、芙蓉、もう下がっていいわよ。」

女主人は仏間の睨みに少し焦った様子で、少女を部屋から出した。

少女は部屋を出る時、仏間の前で一礼をし、目を合わせずに静かに出ていった。

仏間は趣味の悪いゴテゴテとした椅子に腰かけ、居心地の悪さを感じながら、女主人と二人で話しを始めた。

「で、芙蓉をお譲りして、こちらにはどれくらいメリットがあるのかしら？」

「条件は先日、使いの者に持って来させた筈だが。」

「もちろん読みましたわよく。姪っ子が千手一族の長の妻になれば、確かに私共もこの先ここで商売していくのは安泰ですわね。でも、忍の一族の長の妻と、大名の妻。どつ

ちが将来より安泰かしら？」

女は茶を一度口にして、仏間の言葉を待たずにまた言葉を続けた。

「それに何より、ご子息が将来、千手一族の長になれる保証なんてどこにありますの？なれなかつた場合、私が損するだけじゃありません？それとも……ご自分の妻にでもするおつもりだつたりして。オホホホ！」

仏間は少し黙つてから、静かに話し始めた。

「あの大名は、うちは一族と強固な繋がりがあつた。現在（いま）、千手とうちはの大きな二つの勢力の対立で戦つてゐるのは知つておるだろう。もし、うちは勢力がこの大戦に勝つならば、千手勢力から貰つた嫁の立場はどうなるだろうな？嫁は殺され、それと繋がりのある商人らも切られるだろう。うちはの奴らは容赦の無い奴らだ。いっぽう、我ら千手勢力が勝てば、うちはを使つていた大名が没落するのは火を見るより明らかだ。……まさか主人、そんなことも知らずに、あの大名に嫁がせようとしておるのか。」

仏間の話を聞きながら、女は次第に顔色が悪くなり、話を聞き終わると血相を変えてこつと言つた。

「そ、そんなことくらい知つてますわよ！で、でも、我々商人のお金が忍の世界を支えているのも事実ですよ！お金を優先して、何が悪いっていうのかしら……ま、まあ、そちらからもそれなりのお金と、これからの加護を保証して下さるそうですから、それも

悪くありませんわねえ！」

「主人。ところで、話は変わるが、おぬしらが陰で武器の横流しをしておるといふ情報があつてな。今、そのことについて調査を進めているところだ。今日はそのことについても話を聞くつもりでわし自ら来たのだが、どうなのだ？」

立場は完全に仏間のほうが上になっていた。

女はうなだれたかと思つたら、すぐに顔をあげ、態度を変えた。

「いつ芙蓉をお渡しすればよろしいかしら？こちらはいつでも結構ですわ！それにお金は結構です。私たちが商売できるのも、千手の皆様にお守り頂いているからこそですものね！それをこれからも加護して戴けるのですから、それだけで十分ですわ！」

仏間は一年弱とはいえ、こんな伯母に育てられた少女のことが少し心配になった。



「大人はほんとに勝手だよな…。許嫁なんて時代遅れだろ。ブスだったら最悪だ。」

「僕も結婚相手くらい、自分で決めたいけどなあ…」

「俺は別にいいぞ！妹ができるようなものぞ！」

次男の扉間、四男の板間、そして長男の柱間が森の中の広場で話している。

三人は昨夜、父仏間から両親を亡くした七歳の少女を引取り、彼ら三人の許嫁にすると思かされた。その少女の両親と仏間は古い友人だという。

「妹なんかじゃない。その芙蓉つて女が十八歳になったら、俺たちの誰と結婚するか決める。それまでは女中として一緒に住む。まあ、普通に考えて結婚するのは長男の兄者だろうが。」

「ひとつ屋根の下、一緒に暮らしていくんだ。家族同然だろ！それに結婚の事は先の事なんだし、そんなに気にせんでも：お前たち、優しくしてやらなきゃだめだぞ！」

そう言う柱間も、内心では父の勝手な決断に反発を感じていた。

しかし、その少女の境遇を聞き、哀れに思った。少女もまたこの戦国の世に生まれた子供の一人なのだ。そして、偶然にも一ヶ月前に亡くなった弟と同じ年ということもあり、妹同然の存在だと感じた。守るべき存在ができることが、純粹に嬉しかった。

「兄者はこれ以上、大人の勝手な都合に耐えられるのかよ。確かにその女にも同情するが、それとこれとは別問題だ。いつものように孤児院に入れればいいだけだろ。なぜ俺たちの許嫁にする必要がある？俺はごめんだからな。それに：瓦間が死んでまだ一ヶ月しか経ってないんだぞ：どうかしてる。」

扉間が草むらに乱暴に石を投げた。石の当たったタンポポの綿毛が舞い、風に流されてゆく。

森の木々が作る丸く青い空には、のんびりと雲が流れている。ヒバリのつがいが囀りながらその空を横切った。それをぼんやりと見上げながら、板間が洩らした。

「瓦間はどう思っているかなあ……まあ僕は家事をやらなくて良いのは助かるけど。」
柱間は第二人を静かに見つめながら、先日、河原で出会った少年のことを思い出していた。

河原で水切りをしていたあの少年も忍のようだった。彼はどんなものを背負って生きているのだろうか。忍として、大人と共に戦の時代をどう生きているのだろうか。さつきまで丸い空に浮かんでいた雲は消え、真つ青な空になっていた。

◆ 芙蓉は左手を楯に手を引かれ、右手には荷物とも呼べないほどの少ない手荷物を持ち、初めて見る風景に目を奪われながら歩いていった。

「こちら。よそ見しないでちゃんと前を向いて歩きなさい。人にぶつかってしまいますよ。」

「はい……ごめんなさい。あの、あれは何をしているのですか？あの建物は……？」

芙蓉はこれからの不安よりも、今は好奇心が先行していた。見るものすべてが新しく、何でも知りたい衝動に駆られる。

「まだあなたが知る必要は無いものよ。あなたが町を歩くことはもう当分無いのですから。」

その言葉に芙蓉は、また家の中に閉じ込められて暮らすのだろうかを察した。

目の前の新しい世界をできるだけ目にすまいと、俯き気味に歩き出した。

どれくらいこの時間だろうか。それほど長い時間では無いはずだが、幼い芙蓉にはそれは半日ほどの長さを感じた。何度か道端で休憩を取りながら、太陽が南中になり強い日差しが良く晴れた景色を色濃く映し出す時間に、そこへ到着した。

高い石垣の坂を上った所にその家は建っており、大きな木の柱がいくつもある平屋づくりの屋敷だった。重厚な門をくぐると玄関があり、広い庭がある。奥まったところに白い敷石と縁側が見えた。庭の生垣や草の緑は濃い、春だというのに花は一つも見当たらない。

「ただいま戻りました。」

椿が玄関の扉を開け、芙蓉を先に中へ入れ、握っている手を離れた。芙蓉は不安げに、斜め後ろの椿の顔を見上げる。

椿の視線の先に、家の奥から仏間がゆっくりと現れた。

「ご苦労だったな。問題は無かったか。」

「はい。何も。」

仏間は、芙蓉の顔から足の先までを見て言う。

「あがりなさい。」

「…はい。」

芙蓉は仏間の強面で固い表情に怖れを感じつつ、緊張しながら履物を脱ぎ揃え、小上がりに上がった。そして椿がそつと芙蓉の背中を押す。

「さ、行つて。まずは仏間さまのお部屋でお話を聞きますよ。」

椿は仏間の後に付いて部屋へ向かった。近くで見ると仏間はとても背が高く、広い背中をしている。後ろ姿だけでも迫力があつた。伯母の家で何度か忍の男性を見かけたことはあるが、こんな大柄だつただろうかと思ひ出す。

そうするうちに仏間の部屋に着いた。芙蓉の後ろに居た椿がさつと仏間の前に出てしゃがみ、重々しい襖を開ける。仏間が中に入つて座布団の上に腰を下ろした。それを見届け、芙蓉もゆつくりと部屋に入った。

部屋の障子窓からは日差しが少し差し込んでいるが、中はヒンヤリとしている。

「座りなさい」

芙蓉が恐る恐る畳の上に正座しようとするのと同時に、椿は襖を閉めてどこかへ行つてしまった。芙蓉はますます不安になり、襖の向こうを見つめる。

「今日からお前は、この家の女中として暮らすことは分つておるな。∴わしには、三人の息子がおる。上から一二歳、一一歳、九歳だ。」

すると、先ほどとは逆の方向の廊下から何人かの足音が近づいてくる。

それが仏間の息子ちの足音だと芙蓉にもすぐに分つた。

「うむ…ちようど来たようだな。入れ。」

「失礼します」

黒いおかつぱ頭の仏間によく似た少年が勢いよく襖を開け、その音に芙蓉はドキリとした。

その少年の隣りに二人、銀髪で切れ長の赤目をした少年、そして背の低い銀と黒の短髪の大人しそうな少年が立っている。その後ろには椿がおり、三人に中に入るように促した。三人は中に入るとすぐに脚を組んで座った。

三人揃ってこちらをじつと見ている。

芙蓉もそれぞれの顔を何度か見たが、恥ずかしくて俯いた。

「わしの手前から長男の柱間。次男の扉間。四男の板間だ。皆、忍だ。」

「よろしくな！」

ニコニコと元氣よく挨拶をしてくれたのは、長男の柱間だった。

その表情に芙蓉は少しほっとして、ハイとはにかんで答えた。続いて四男の板間がよろしくと小さな声で会釈をしてくれた。優しそうなひとたちで良かった…。

芙蓉は次男の扉間を見て、自分からよろしくお願ひしますと微笑んだ。扉間は少しだけ口を開けぼーっとしたまま芙蓉を見つめていたが、はつと我に返つて厳しい表情を作り、芙蓉の言葉を無視して父に向かって言った。

「父上、もう下がっていいですか。」

「まだ話は終わっておらん。一緒に聞け。」

「そうだと扉間！自己紹介とかまだだし！」

「名前以外に自己紹介する必要あるの？僕たちこの子の名前、もう知ってるじゃん…」
板間が不思議そうに柱間に言うが、仏間がゴホンと咳払いをして会話を遮る。

「芙蓉。お前は女中として働くだけではない。将来、お前が十八歳になった時に、この三人のどれかの妻になるのだ。つまり、許嫁だ。」

「え！許嫁のこと、こいつ今知ったの？父上、どういうこと？」

芙蓉が仏間の言葉に驚くより前に、扉間が驚いて身を乗り出した。

「ここに来るまで言う必要が無かったというだけだ。」

「うっそ…許嫁の件、オーケーだから家に来たんだと思つてたぞ…芙蓉、大丈夫か？」

柱間も驚いて身を乗り出して芙蓉の表情をうかがう。

「…だ、大丈夫です。私はこちらに引き取って頂いただけでもありがたく思っております。よろしくお願いします。」

そう言つて芙蓉は深く頭を下げた。

幼い芙蓉には結婚がどういふことなのかの現実味は無く、いつものように、大人に言われることに、ただ従うしかない。

母が逝つてしまつて以来、本能的に、生き抜くために大人に黙つて従うことを覚えた。芙蓉は子供ながらに、幼い自分の非力さは痛いほど理解していた。

そんな芙蓉に許嫁になることを拒否する理由は無い。

「この三人はいずれ千手一族を率いてゆく者になろう。その妻に相応しくなるため、これからお前にはしつかりと勉強をせよ。女中の仕事もその一つだが、わしと椿が教養を教える。時期が来れば学校にも行かせる。全てにおいて完璧に励むのだぞ。よいな。」

「はい。解りました。：仏間様。」

ほんの少し無言の時間が過ぎ、仏間は兄弟たちに声をかけた。

「お前たち、芙蓉はいずれお前たちどれかの妻になる。だが、それまでは他人だ。解つたな。」

「・・・はい・・・」

芙蓉は自分の部屋を与えられた。

同じ女中の椿と同室なのかと思つていたが、そうではなかつた。部屋は正方形のこじんまりとした部屋だったが、真新しい畳の井草の匂いが心地よく、床の間や遠い棚まであり、まるで客間のようなだ。だが勉強するために用意されたのか、部屋に対しては大きな机の上に、灯りと、筆記用具が一式揃つていた。ただ、外の風景は見えない。しかし

障子が貼られた格子窓から陽の光が透けて入ってくるため部屋の中は明るかった。

芙蓉は荷物を畳の上に置き、へなりと座った。緊張の糸が解け、いけないと思いつつ、横たわる。胎児のようにぎゅつと身を丸め、そつと目をつぶると、母が亡くなったあの日を自然と思い出していた。

蛍の舞い始める頃だった。

「今日はまだ蛍あんまり飛んで無かったね。明日はもつと増えるかな？」

「うん…きつと明日はもつと飛んでるよ。」

「ね！お母さま、明日も絶対一緒に見に行こうね！」

「うん…晴れると、良いわね。」

芙蓉は母と同じ布団の中で、ぎゅつと母の手を握った。母が眠りについてしまうのが怖くて、友達の話や絵本の話、記憶には無いが父の話など、思いつくままに延々と話を続けていた。うん、うん、と優しく頷く母を見ながら、安心と寂しさ、病気の母を眠らせてあげなくてはならないのという罪悪感が入り混じり、自分でもどうしていいのかわらなくなっていく。

・・・だつて、でも、もしかして、お母さまがこのままずっと眠つてしまうなんて嫌だもん。怖いもん・・・

「お母さま、お願い…ずっと、ずっと私と一緒にいて。早く元気になって！一人にしない

で

いつの間にか眠ってしまった母の横顔を見ながら、芙蓉は小さな声で、だが懸命に訴えた。

しかし翌朝、母は目を覚まさなかった。

昨日まで、おんぶしてくれたのに……今日も虫一緒に見に行こうって、約束したのに……。母には親兄弟はいなかった。母と父の間には、芙蓉とは十歳く十五歳年の離れた姉が四人いるが、その全員が他国の大名や豪商のもとへ嫁ぎ、戦乱のこの時代その安否や行方は分からず生き別れとなっており、幼い芙蓉に母の死を知らせるすべはなかった。

葬儀や埋葬は母の友人や付き合いのある人々がなんとかしてくれた。

そして、母の埋葬が行われる日、父の姉が久しぶりに芙蓉の前に現れた。

「芙蓉。あんたは今日から私のところに来るのよ。」

伯母は、母に対して生前から冷たい態度を取っていたことは幼い芙蓉にも解っていた。芙蓉もそんな伯母を怖れていた。しかし母は、自分に何かあつたら伯母を頼るようにならなくても芙蓉に言っていた。

「伯母さんはね、お父さまのお姉さんなの。冷たく見えるけど、心の中では絶対に芙蓉のことを大切に思ってくれているから。」

なぜ母がそんなことを言うのか、母の見舞いにも来ない伯母になぜ頼れというのか、

芙蓉には全く分からず、不安しかなかった。

「あの…私…ヒナさんと一緒に住むの…だから、行かない。」

母が亡くなった日、母の死を芙蓉以外で最初に確認したのがヒナという女性だった。ヒナは芙蓉の母・水蓮とは仕事先の茶屋の同僚で、戦争で夫と子供を亡くしていた。水蓮とは親友として仲が良かった。母とは貧しいながら助け合い、芙蓉のことも自分の娘のように可愛がってくれており、母の死の当日、真つ先に一緒に暮らそうと申し出てくれたのだ。

「ああそうそう、そのヒナって人にも用事があんのよ。どこにいるかしら？呼んできて。」

芙蓉は急いでヒナを呼んで連れてきた。

「あなたが芙蓉ちゃんの伯母さんですか…。芙蓉ちゃんは私が引取りますのでご心配なさらないでください。ご迷惑はおかけしませんので。」

「いいえ。芙蓉は私が引取るの。水蓮ともそういう約束になってるのよ。そうそう、これ、水蓮からあなたに手紙。自分が死んだら渡してくれって。きつとその手紙にもそう書いてあるはずだから早く読んで頂戴。自分で言えばいいのに面倒なことするわよね。」

ヒナは手紙を急いで開けた。そこには確かに水蓮の文字で、芙蓉は伯母に任せるので

心配しないでくれと書いてあった。そして、いま付き合っている男性と幸せになつてほしいと書いてあった。ヒナの涙が手紙に落ちて字が滲んでゆく。

「ね？分つたでしょ？そういうことだから。」

「私…ヒナさんと一緒がいい！」

「そ、そうよ！あなたのような金の亡者で家族を売るような人に、芙蓉ちゃんを渡すわけにいかないわ！芙蓉ちゃん、行こう！」

伯母はアハハと大きな声で笑つたあと、怒りに満ちた顔で芙蓉を睨みつけた。

「あなたの母親はね、橘一族の子孫を増やしていくことを、自分で、選んだの。私の弟に一番愛されてるなんて勘違いしちゃつて。馬鹿だよねえ。私は女の体じゃなく、この才能と金で橘一族を存続させてんだよ。才能も無い女どもに馬鹿にされる覚えはないね！」

そう言つて、芙蓉に封筒を投げつけた。

芙蓉は急いでそれを拾い、中身を確かめた。それは母からの遺言が入っていた。

…これからは、おばさまにお世話になりなさい。良い子にするのですよ。…ずっと一緒にいられなくてごめんなさい…

長く色々書いてあつたが、芙蓉はその最後の文章をやつと読めたところで、伯母がその手紙を奪い取つた。

「やめて！返して！」

「分かっただろ！あんたは今日から私のモノなんだ。言うことをききな！」

伯母はそう言つて無理やり芙蓉の手を引つ張つた。

「やめなさいよ！芙蓉ちゃんは絶対あんたなんかには渡さない！待ちな……」

ヒナが伯母に掴みかかつた瞬間、男の忍が二人、ヒナを取り押さえた。

「心配しなくていいよ。芙蓉を殺したりなんかしやしないよ！私の大切な姪っ子だからね。大切にするさ。ただ、これ以上私らに関わるなら、あんたがどうなるかは知らないがねえ。」

「やめて！ヒナさんに乱暴しないで！わたし、わたし、伯母さまと一緒に行くから！」

泣きながら叫ぶ芙蓉の手を引つ張つて、伯母は馬車の中に芙蓉を押し込み、それを確認すると馬車は足早に出発した。

「芙蓉ちゃん！！」

ヒナの悲痛な声が響き、二人の忍びがその口を押え、ヒナをどこかへ連れ去つてしまつた。

……ヒナさん、元気かな……

「起きなさい。お行儀が悪い子ね！いくら疲れているからお昼寝なんて許しませんよ！さ、晩御飯の支度をするから服を着替えて。」

夢を見ていたのか、想い出なのか、ぼんやりとした曖昧な意識の中を漂っていると、椿からたたき起こされて叱られた。先ほどまでの意識は一瞬で消え、現実に戻る。

目の前に出された服に急いで着替え、椿と共に台所へ向かう。今から仕える主のための夕食を作るのだ。そして夕食の後は片付けと掃除、風呂を沸かし、寝る前には仏間からの勉強が待っている。



「うおおー！想像以上だったな！超可愛いぞ！なあ板間？」

「そうかな。僕にはよく分らないけど…でもブスじゃなよいね。ね？扉間兄者。」

「お前ら、ガキ相手に可愛いとか気持ち悪いな。俺はガキに興味無い。」

「僕らもまだガキじゃない？」

「いや、兄者なんて五歳も年下の、七歳の女の子のこと可愛いとか、気持ち悪いだろ。」

「そーかあ？可愛いぞ？俺のタイプだ！五歳差なんて、お互い大人になったら誤差みたいな感じだろーし。」

「やめろ、気持ち悪い…てか忍が誤差とか言うなよ。」

「でも大人は十歳差とかで結婚してる人、多いよね。」

「うん、多いぞ。まあ…女が少ないから…。扉間は古いつて言うけど女を確保するために許嫁いる奴、忍じゃ珍しくもねえーしな。」

「ふん！馬鹿らしい。金で買ってきた物みたいじゃないか。そんな物に俺は興味無い。」
晩春の夕暮れはまだまだ冷える。縁側に座っていた三人はぶるつと震えて立ち上がる。

その時、板間がニヤリとして柱間に耳打ちした。

「でも扉間兄者、さつきあの子に見惚れてたよ？」

ニシシシと柱間も笑った。もちろん、柱間も扉間が芙蓉に見惚れていたことくらい気づいていた。板間は普段おっとりしているが、ちゃんと立派な忍だと兄として嬉しくなる。

「見惚れてなんかねーよ!!馬鹿!!」

扉間が二人を掴んで思いつきり睨みつけた。二人は楽しそうに逃げ回る。まだうつすらと向こうの空が明るい、空には十六夜の月が浮かんでいた。

それはまるで、夜空が微笑んでいる様にも見えた。



柱間は急いでいた。一秒でも早く！一メートルでも前に！…

「待つてろ、…ぜってー助けてやるからな！…死ぬな！」

樹齡千年を超える大木が無残に切り倒され、行く手を阻む。立っている大木の枝は天まで伸び、生い茂る葉で太陽の光は遮られている。ジメジメとした地面は苔むしていて、気を緩めればすぐに足元をすくわれてしまいそうだった。その上、倒れた大木の間には所々に大きな岩が転がっている。

板間はその岩の後ろで一人、上がった息を必死に鎮めようとしていた。

なんとか一人で切り抜けなければ、瓦間と同じ運命になる。

冷静になろうとしても、それに反して心臓の鼓動は早くなり、息も上がってくる。

「兄…者…」

気づくと、五人のうちわ一族の忍に囲まれていた。

どの忍も写輪眼を開眼した大人の忍である。

「お前にも兄が居るのか。…俺の兄は、千手に殺された。」

柱間は先ほども感じられていた板間の場所に、やっこの思いで辿り着いた。

しかし、柱間の目には信じたくない、現実の光景が飛び込んできた。

「板間あーっ!!」

動かなくなつた弟を抱きしめ、柱間は泣き叫んだ。

あと一分、あと一秒早かったら、板間は助かっていたかもしれない。

戦いが終わったその森は、無数の死体が横たわり、柱間の泣き声だけがこだましていた。



柱間は緩やかに横たわる川の流れを見つめていた。

空は鉛色で、普段透き通っているその川の水も曇天を写して濁っているように見える。

「よう…久しぶりだな…えっと…」

「…柱間だ。」

「なんだよ。今回はいきなり落ち込んでんじゃねーか…何があつた？」

「逆になんだよ…俺は元気ぞ…！」

「…うそつけ。なんだつたら話してみろよ…」

「…別に、何も…」

「いいから…言えって…」

「ホント、なんでもねえーって…！」

「いや、引つ張りすぎ…聞いてやるつつつてんだから、早く言えって…」

「なんでも…ねえんだぞ…？」

号泣した顔で柱間が少年のほうを振り向いた。

「あーもう！さっさと話せええ!!」

「……弟が、死んだ。」

「……!!」

柱間は再び川のほうを向き、涙をぬぐった。

「ここへ来るのは……川を見てると心のモヤモヤも流れていくような気がするからだ……」

そう言うと、柱間はへへつと笑い、少年の方を再び振り返って言った。

「マダラだっけか……お前もそうだったりしてな……」

マダラは同じ忍の子供である柱間の背中に、いつかの自分を、見たように感じていた。

「……お前、兄弟とかいるのか?」

「俺は……五人兄弟……」

マダラは河原の石を拾って、手の中でもてあそびながら答えた。

「だった……」

「……!!」

「俺たちは忍だ。いつ死ぬかも分からねえ。ただ、お互い、死なない方法があるとするりゃあ……敵同士、腹の中を見せ合って隠し事をせず、兄弟の杯を交わすしかねえ」

マダラは手に持っていた石を握り直し、身構え、続けた。

「けどそりゃ無理だ……人の腹の中の奥……腑までは見ることではできねーからよ」

そう言つて川に向かつて水切りをして見せた。

「本当は、煮えくり返つてるかも分からねえ……」

マダラはそう言つて水面を飛び跳ねるように進んでゆく石を、力強く見つめた。柱間もその石の軌道を見つめながらマダラに尋ねた。

「……腑を……見せ合うことはできねーだらうか？」

「分からねえ……だがいつも俺はここでその方法が在るか無いかを、願掛けしてる」

マダラの投げた石は対岸にコンと音を立て、届いた。

「今回は、それがやつと在る方に決まつたみてーだぜ。」

マダラと柱間は届いた石を一緒に見つめた。

「お前だけじゃねえ……俺も……届いた。」

マダラのその言葉を聞いて、柱間は静かに立ち上がった。

戦乱のこの時代を変えようと、同じ考えをもつ馬鹿な子供が……柱間以外に居た。

柱間は驚いたというよりも、マダラは神の啓示だと思えなかつた。

「……腑を見なくても分かるんだけどよ……お前……」

「何？」

「髪型といい、服といい、ダッセーな！」

そう言つてマダラは大笑いし、柱間は全てが同じ考えではないのだなと少し落ち込ん

だ。

鍋がくつくつと美味しそうな音を立てている。芙蓉はその様子を見るのが大好きだった。心がほどけていくような幸せな感情になれる音…。

「芙—蓉—！今日の晩飯はなんぞ？」

柱間がひよいと芙蓉の顔の横から身を乗り出し、鍋を覗き込む。芙蓉は驚き、心臓がドキドキと音を立てるのを感じながら答える。

「柱間さまおかえりなさいませ…今夜は肉じゃがでございます。」

「もー腹が減って我慢できんぞ〜。今日も良く修行したからなあ！芙蓉は今日はどんな勉強をしたんだ？」

「もうすぐ出来ますので、少々お待ちくださいね…。えつと今日は、仏間さまから書と剣と、計算を教えて頂きました。あと椿さんからは裁縫を…。」

「そんなにしたのか？すげーな。ていうか、剣までやるのか？それ必要なのか？剣なら俺が教えてやるのに。」

うふふと芙蓉は微笑んだ。その可愛らしい微笑みに柱間はドキツとした。

「家事をするにも体力が必要でしょう？剣は護身だけではなく体力作りにもなりますから。」

それに体を動かすのは楽しいです。」

「言ってることは分るけど、重い物は俺が持つてやる！芙蓉は無理しちやダメだぞ。それに…楽しいつていつても、父上の剣の稽古は芙蓉には厳しすぎやしねーか？」

「ありがとうございます。柱間さま…お優しいんですね。」

そう言つて芙蓉は柱間の顔を正視してニッコリと笑つた。柱間も頬を赤く染めてアハハと笑つて見せた。

「最近、兄者明るくなつたな。まあ良いけど…」

二人の様子を居間から見ている扉間はホツとしながらも、まだ芙蓉の笑顔を自分だけが見られていないことに心が少し痛んだ気がした。

そこへ仏間が突然声をかけてきた。

「扉間。柱間のことで話がある。」

楽しそうに台所で話している二人を振り返りながら、気づかれないように父の後に続き別の部屋へ向かった。



季節はすっかり秋を迎えていた。稲穂はこうべを垂れ、収穫の時期を待っている。赤トンボが舞い、ヒグラシの声は遠ざかってゆく。

二人の少年は今日も、忍の技を競い、拳を合わせ、夢について語り合っていた。

「でも具体的にどうやったたら変えられるかだぞ。先のビジョンが見えてないと…」

柱間がマダラに問いかける。ゴクゴクと喉を鳴らして水を思いつき飲み干したマダラがそれに答える。

「まずはこの考えを捨てねえことと、自分に力をつけることだが。弱い奴がいくら吠えても何も変わらねえ！」

「そうだな…とにかく色々な術マスターして強くなれば、大人も俺たちの言葉を無視できなくなる。」

「苦手な術や弱点を克服するこつたな。まあ俺はもうその辺の大人より強えーけどよお。」

「…：…本当に止まるんだ、小便。」

「だから俺の後ろに立つんじゃねえー！小便したばっかの川に投げ込むぞゴリア!!」

「あ、弱点みつけ。」

二人は会うたびに仲良くなっていった。そして互いに心身ともに成長していった。

「くそーぜってーお前の弱点もみつけてやる！あ、そのダセー髪型、すでに弱点じゃん。お前、女にモテないだろ？」

嫌味な笑みを浮かべるマダラに対して、柱間はフツツと不敵な笑みを浮かべて反論する。

「俺、イイナズケ、いつからさ！」

「はあ？お前に許嫁？ぜってーブス！ブスに決まってる。」

「それがさあく超絶可愛いんだよなあ…天使。もう天使だぞ！あれ！」

「信じられるか！…まあどうでもいいけどよ。」

「似顔絵描いてやるぞ。顔は小さくて、髪の毛は長くて、目が大きくて、まつ毛が超長くて、いつもニコニコしてて〜それでそれで…」

柱間はマダラの関心が逸れたことを気にせず地面に小枝で似顔絵を描き始めた。マダラは最初それを無視したが、つい気になつて覗き込んでみる。

「ぶぶっ！やっぱ超ブスじゃねーかよ！笑わせるな。ぎやはははは。」

柱間の絵があまりに下手すぎて、芙蓉の容姿がマダラに伝わることは無かった。

「この可愛さが伝えられないとは悔しいぞ。俺の弱点は絵心の無さかもな…」

必要以上に落ち込みうな垂れる柱間に、マダラが言い放つ。

「お前の弱点は、その落ち込み癖だ！」

秋の日暮れはつるべ落としてである。すでに辺りは真つ暗になっていた。最近良く出かける柱間だけではなく、今日は扉間まで帰りが遅い。何かあったのだろうか。

板間の死は芙蓉にとって深い悲しみとなり、今も消えない。沢山会話をしたわけではないが、芙蓉と一番年が近いこともあり、親しみはあった。優しいおっとりとした笑顔

を今でもすぐに思いだすことが出来る。長男と次男の緩衝材といった感じで、いつも優しく仲裁していた。その子供が戦争で亡くなる現実を目の当たりにし、芙蓉は自分がどのような世界に来たのかを知らしめられたのだった。

・・・もう誰も死んでほしくない・・・

芙蓉は二人が心配になり、玄関を出て外の門まで出てみた。門の外へ出ることは仏間から固く禁じられている。でも少しなら・・・

ギイイ・・・

そつと門を手で押して外を覗いてみた。門の外を見るのはこの家にやって来たあの日以来だが、すでに辺りは真つ暗で、坂道を照らす灯が僅かに揺れている様子しかしか見えぬ。

「そこで何をしておるのだ！」

凄い剣幕で仏間が後ろからやって来た。芙蓉は恐怖で声も出さず、微動だにできずに、ただ仏間が近づいてくるのを見つめるしかない。

「決して外へではならぬと言ったはずだ。何をしておる。」

芙蓉の倍はあろうかと思われるほど、仏間が大きな恐ろしい怪物に見えた。

「あ、あ、あの・・・お二人が、お二人のことが心配で・・・申し訳：ありま：せん：・・・」

仏間の顔がずんつと近づいてきて、芙蓉は思わず両手で頭を押さえ、目をつぶり叫び

そうになった。仏間は芙蓉の頭上から腕を門へ伸ばし、門を少し開いてその隙間から外を覗いた。芙蓉は恐る恐る両手を下ろして、仏間の顔を見上げる。だが、暗くて仏間の表情はよく分らない。

「心配いらぬ。あの二人は強い。特に最近、柱間の成長は目を見張るものがある…もうすぐ帰って来るであろう。さあ、家の中へ入りなさい。」

仏間は穏やかな口調でそう芙蓉を諭し、芙蓉の背中を押して先に行かせた。

「はい…。」

芙蓉は小さな声で答え、俯きながら歩き出した。芙蓉は父親がどんな存在か知らない。だがきつと今の仏間のような姿が、父親というものなのだろうと思った。

一方、仏間は芙蓉が柱間と扉間のことを心配してくれたことを嬉しく思うと同時に、言葉では芙蓉にああは言ったものの、心配な気持は拭えなかった。たとえ柱間と扉間でも、手練れのうちわ一族に囲まれたら…考え出したらきりがない。ただ信じて待つしかない。

間もなくして先に扉間が帰宅した。

扉間は帰るなり仏間の部屋へ直行する。芙蓉は、扉間は遅くなったことを詫びるのだから、あまり叱られないといいがと心配しながら、台所で椿と無言で夕食の支度を再開する。

そして柱間も、間もなくして帰宅した。

「ただいまー。」

芙蓉は台所からおかえりなさいと声をかける。玄関に迎えに出たいのだが、扉間と仏間が先に行くかもしれないと思い我慢をする。すると柱間が台所にひよっこり顔を出した。

「ただいまつ。遅くなっちゃったぞ…父上、怒ってる？」

へへつと苦笑いをして芙蓉に尋ねる。

「だ、大丈夫だと思えます…」

すると仏間と扉間が二人そろって居間に入ってきた。最初に口を開いたのは扉間だった。

「兄者、遅すぎるぞ。なにをやっていたんだ。」

「遅くなるのなら出かける前に言え。そうでなければ何としても早く帰って来い。」

仏間と扉間が、何事も無かったかのように食卓に着く。柱間は拍子抜けしたが、まあいいやと自分の部屋に着替えに向かう。芙蓉はその様子を少し不思議に思ったが、とにかく扉間も柱間も無事に帰宅して良かったと、ほっと小さな胸をなでおろした。



「マダラ…俺、すっごい術を考えてきたぞ！一緒にマスターしようぞ！」

「へー…どんなだ？」

この日も二人は会っていた。

会うたびに二人は仲良くなつてゆく。ただ、お互いの姓だけは明かせない。

「名付けて、体術奥義超火遁幻術斬り大手裏剣二段落しの術!!」

「…いや、全然イメージ出来ねーよ。」

「詳しく説明すると…」

「うるさい!今日は直角崖上りを競う!」

柱間はまたいつものように、必要以上に落ち込んでうな垂れた。

「あーもー!だからいちいち落ち込むなっつーの!やつぱそれがお前の弱点だな!」

「アハハハ〜お先〜!!」

柱間はマダラよりも先に崖を直角に走り始めた。

「あつ!てめえ、落ち込むフリしやがったな!」

そう言うマダラも崖を走り始めた。マダラが追いつきそうになったところで、柱間が一足先に崖の頂上に登り着く。

「ぜいぜい…はあはあ…二人の息が最高潮に上がっている。」

「…俺の勝ち…」

「そりやそだろ…先にスタートしたんだからよ!」

二人の目の前に深くて広い森が広がり、ここからはその森全てを見渡すことが出来た。森の向こうの高い山々まではつきりと見てとれる。

「……ここだと森が一望できるな。」

「オウ……遠くまで良く見える。」

マダラは柱間のほうを向いてニヤツと不敵な笑みを浮かべて続けた。

「目の良さならお前に負けねえ自信がある。勝負すつか？」

「急になんぞ？ やけに目にプライドもってんな。」

「そりやそだろ！ なにせ俺は写……」

そう言いかけて、マダラは言葉を飲み込み、黙り込んだ。

「どした？」

「いや……そーでもねーな。やっぱ。」

「何だぞ？ お前にしては珍しく素直だな。」

マダラは目を伏せ、俯いて言う。

「……だったら兄弟は死んでねえ。見守ることもできなかつたくせに……何が……何が……」

瞳を開け、じつと地面を睨みつけている。どうやら兄弟の死を思い出している様子だった。

「もう兄弟はいねーのか？」

「いや、一人だけ弟が残ってる…」

地面を強く掴み、強い意志のこもった瞳でマダラは言葉が続ける。

「その弟だけは何があらうと俺が絶対に守る。」

柱間はマダラの真剣な横顔を見つめた。柱間もまた、マダラと全く同じ気持ちだった。

だからこそ、二人がいつも語り合っている夢は、必ず実現させなければならないのだ。
なんとしても…

「ここに俺たちの集落を作ろう!!そこは子供が殺し合わなくていいようにする!!」

柱間が森に響き渡るほどの大きな声でそう叫んだ。そして続ける。

「子供がちゃんと強く大きくなるための学校を作る!個人の能力に合わせて任務が選べる!依頼レベルをちゃんと振り分けられる上役を作る!子供を激しい戦地へ送らなくていい集落だ!!」

マダラがじわりと笑顔に戻って柱間に言う。

「フツ…そんな馬鹿なこと言ってるの、お前くらいだぞ…」

「お前はどうかんだよ☒」

「ああ、その集落作ったら今度こそ弟を…一望できるここからしつかり見守ってやる!」
柱間とマダラは互いに顔を合わせ、満面の笑顔を見せた。

それは、屈託の無い子供の笑顔だった。

柱間とマダラが見渡すこの森は、のちに木ノ葉隠れの里となる場所だった。

柱間はこの時、覚悟を決めた。

先を見るために、耐え忍ぶ覚悟を。

パシヤー！パシイ！

「二人とも届いたな。」

「その石、水切りするには良い石だ…次に会うまでお前に預けとく！」

二人は互いに水切りした石を受け取り、そう言つて別れた。

・・・今日は早く家に着ける・・・

柱間はムスツとした扉間と、芙蓉の笑顔を思い出しながら心の中で呟いた。ふと家の方向を見ると、目の前に扉間が居た。

「どうした！扉間。」

「兄者…話がある。」

柱間は嫌な予感が頭をよぎったが、黙つて扉間のあとに着いて仏間の待つ部屋に向かった。

「お前が会っている少年がいるな…」

「…なんでそれを…」

柱間は仏間の言葉に驚きを隠せない。なぜ分ったんだ？焦る柱間に扉間が言う。

「父上の命で兄者をずつと尾けてた…感知なら俺のほうが上だ。最近やたらと出かけるから何かあると思ってる…」

「あの少年をわしが調べた。うちは一族の者だ。」

柱間はマダラがうちは一族だと、うすうす気が付いていた。だがそれを父に知られたことで、体に冷たいものが走った。

「我ら一族の大人の手練れ達もやられている。生まれながらに忍びの才能をもつ少年のようだ。」

・・・やっぱそうだったのか・・・

「大して驚かないところを見ると…お前たちすでにお互いの一族の名を知っているんじゃないだろうな？」

「…いや、知らなかった。おそらくあいつも…」

仏間は声を荒げずに、しかし、怒りを込めて柱間に言う。

「…これがどういふことか解っているな。千手の者たちにはまだ言っていない…スパイ呼ばわりされたくなければ、次にあの少年に会った後、奴を尾行しろ。」

柱間はどこかで想像していたことが、現実になってゆくのを感じた。だがこれ以上は

…

「うちは一族の情報を持って帰れ。これは任務だ。気づかれた時は…殺せ。」

柱間は父の口から語られた現実が、自分の中の現実になるのが怖い。震えた声で父に問う。

「ほ…本当に、うちは一族なのか？」

「そうだ…お前が千手だとバレていれば…こちらの情報を盗むために気を許したフリをする。信用するな。」

「い、いや…あいつはそんな…」

柱間の動揺した様子を見て仏間は苛立ちを抑えきれず、大きな声で柱間の言葉を遮る。

「腹では何を考えておるのか分つたものではない!!もし騙されれば、千手の皆を危機に陥れることになる。」

柱間は口ごもったまま、その言葉を飲み込み、落ち着いたフリをして父の瞳を見つめた。

「念のためわしと扉間も付く…分かつたな!」

夜風が冷たい。いつの間にか秋も深まっていた。鈴虫が命を燃やし懸命に鳴いている。

思えば、マダラと会うようになって、あつという間に時間が過ぎていたように感じる。

楽しい時間は、なぜにこれほど早く過ぎ去ってしまうものだろうか。その時間がずっと続くと、いや、続けていかなければならないと思っていたのに…。

柱間はマダラから受け取った水切りの石を見つめた。

・・・あいつも今頃・・・

「柱間さま、どうされたのですか？風邪を引いてしまいますよ。」

柱間は急いで石を服の中に隠し、振り返る。

「芙蓉…お前こそ温かくしろよ。」

いつもと違う柱間の様子に、芙蓉は不安そうに見つめた。

「何か…あったのですか？」

「いや！別に！なんでもないぞ。もう部屋に戻るところだったんだ。」

「そうですか…。あの…元氣、出して下さいね？」

「お、俺は元氣ぞ！アハハハ…。」

芙蓉は少し困ったように微笑んで、ゆっくり柱間に近づき、柱間の右手をそつと握った。

「絶対、大丈夫です。柱間さまなら。」

柱間は驚いた。芙蓉にもマダラとのことは全く話してはいない。まして忍の任務や戦のことは決して芙蓉に伝わらないよう家族の中で決まりがある。それなのに、芙蓉は

全部てを知つていて、それを知つたうえで自分を励ましてくれているのかと、一瞬錯覚した。

「……」

「あつ、申し訳ありません。勝手にお手を握つてしまつて……あの、昔、母が私にこうしてくれた記憶があつて。芙蓉なら、絶対大丈夫だよつて……たぶん。ごめんなさい……もうあんまり覚えていないですけど……」

黙り込む柱間の様子に、芙蓉はいけなしい事をしてしまつたと思ひ焦つて手を放した。

「いやーすっげー嬉しかったぞーすっげー元氣でた！ありがとなー！」

柱間もその芙蓉の様子を見て焦つてそう言つた。二人は少し氣まぎらなつて俯いた。

「芙蓉も勉強はそこそこにして、早く寝るんだぞ。じゃあまた明日！」

柱間は大股で歩いて自分の部屋に向かつた。その後ろ姿を見送りながら、芙蓉は柱間の為祈つた。柱間に何があつたかは分からない。でも、きつと柱間なら大丈夫だと。



川はこの日もいつものように、ゆるやかに流れ、心地よい川のせせらぎが聞こえる。

マダラのほうから先に、対岸に居る柱間に話しかける。

「さつそくだがよ……まずは挨拶がわりに水切りからいくか。」

「おう……」

二人はおもむろに、交換していた水切りの石を懐から取り出し同時に水切りをした。バツシャ！二人の石が同時に川面に着き、飛び跳ねる。

パシイ！全く同時に二人は互いが投げた石を受け取った。

「！」

二人は石を見て、ハツとする。

「柱間あ…悪い…今日はダメだ…急に用事思い出してよ。」

…マダラの側にも俺の正体が知られているのか！…

「そ、そうか…では俺も今日は帰るとするぞ…」

“ニゲロ”

“罨アリ去レ”

二人が互いに受け取った石には、偶然にも同じことが書かれていた。

ジャツ！

河原の石が同時に鳴ると同時に二人は背を向け、弾みをつけて飛び、走り出した。

「このスピード、逃げる気か！柱間め…教えたな！行くぞ扉間!!」

「はいー！」

木の影から柱間とマダラの様子を監視していた仏間と扉間が、マダラを逃がすまいと川に飛び出す。

バシヤ!!

川面に足を着けたのは仏間と扉間だけではなかった。

「考えることは同じようですね…千手仏間!」

「それと、扉間だったか。」

柱間とマダラが立ち止まり振り返ると、そこには川の上で対峙する互いの父と弟、四人の姿があった。

「…のようなのう、うちはタジマ!」

「それから、イズナだな。」

偶然にも、うちは側も同じ考えだったようだ。仏間と扉間が対峙しているのは、マダラの父親・タジマと弟のイズナだった。

まったく同じ状況…

仏間はタジマに、扉間はイズナに飛びかかった。

扉間もイズナも、自分の背と変わらない大きさの刀を振りかざす。

千手仏間とうちはタジマはほぼ同じ力だということが、互いに幾たびの戦いで解っていた。

忍は何があろうと戦場で心を乱さない訓練をされる。一瞬の心の乱れが好きを生じ、生死を分ける。

「やめろーっ！」

柱間とマダラが同時に叫んだのと同時に、扉間とイズナの刀が交わる。

ギシイーン！

二人は互いに押されないように力を込める。刀がギリギリと音を立てて震えている。大人ふたりは解っている。

もし目の前で我が子が殺されれば、ほんの僅かだが己の心に乱れが生じるであろうことを。つまり…どちらかが先手をとることで勝負が決まる。

バツ！

扉間とイズナがいったん刀を離し構えを整え、再び川の上で対峙した。

・・・ガツツ!!・・・バシヤツ!!

扉間の頭上にはタジマが放った短刀が、イズナの頭上には仏間の放ったクナイが飛んできたのを、柱間とマダラが水切りの石を投げて防いだ。その短刀とクナイは川に落ち沈んでゆく。二つの水切りの石も一緒に川の中に姿を消した。

「！！」

扉間とイズナ、そして大人ふたりにも何が起こったのか分からない。

バシヤアン!!

柱間とマダラが互いの弟の前に飛び出し、対峙した。

「弟を…傷つけようとする奴は誰だろうと許さねえ！」

マダラが叫ぶ。

柱間とマダラ…マダラのほうが強く柱間を睨みつけている。

そして、全て諦めたように視線を落として、言った。

「俺たちの言つてた…バカみてーな絵空事には…しよせん…届かねーのかもな。」

扉間とイズナを襲った二つの武器と、それを防いだ二つの水切り石は、ついに川底に沈んでしまった。

「…マダラ…お前…!!」

「少しの間だったが楽しかったぜ…柱間。」

川のせせらぎの音が沈黙を作る。

「三対三か。…どうだ、いけるかマダラ。」

「いや、柱間は俺より強い。このままやればこっちがやられる。」

「え×兄さんより…強い子供が？」

「…そうか…それほどとはな…。」

マダラは柱間たち三人にすつと背を向ける。

「じゃあな…引くぞ。」

柱間は胸から喉に熱いものがこみ上げ、喉がつかえそうになりながら、すがるように

マダラに向かって言う。

「マダラ、お前……！ ホントは諦めちやいねーよな……☒お前はやつと俺と同じ……」
その言葉を遮つてマダラが言う。

「お前は千手……できれば違つて欲しかった。俺の兄弟は千手に殺された……」
その言葉を聞いて、柱間の頭に死んだ瓦間と板間の顔が浮かぶ。

「……だからさ、お互い、腑なんて見せる必要もねーだろ。」

柱間はマダラに近づこうと一歩前に出ようとする。それを制するようにマダラが更に続けた。

「……次からは戦場で会うことになるだろうぜ。千手柱間……。俺は……うちはマダラだ！」

そう言つて振り返つたマダラの瞳は、先ほどとは違つていた。

「見て！ 父様！ 兄さんの目！」

マダラの瞳を見て、嬉しそうにイズナがタジマに向かって言った。

「フフツ……千手の情報は手に入らなかつたが……代わりに良いものをこちらは手に入れたようだ……」

仏間も、マダラの瞳を見てマダラが今、写輪眼を開眼したことに驚いた。

そして柱間はその時、写輪眼の開眼が何を意味するのか……分かつたような気がした。

川は静かに流れ続ける。さつきまで聞こえなかつた鳥のさえずりが聞こえる。

そこにはもう、千手の者も、うちはの者の姿も無かった。

それは最初から何もなかったように、何も変わらない美しい風景であった。

(2) 柱間とマダラの決別。幼少期の終わり

柱間は急いでいた。一秒でも早く！一mでも前に！…

「待つてろ、…ぜってー助けてやるからな！…死ぬな！」

樹齢千年を超える大木が無残に切り倒され、行く手を阻む。立っている大木の枝は天まで伸び、生い茂る葉で太陽の光は遮られている。ジメジメとした地面は苔むしている、気を緩めればすぐに足元をすくわれてしまいそうだった。その上、倒れた大木の間には所々に大きな岩が転がっている。

板間はその岩の後ろで一人、上がった息を必死に鎮めようとしていた。

なんとか一人で切り抜けなければ、瓦間と同じ運命になる。

冷静になろうとしても、それに反して心臓の鼓動は早くなり、息も上がってくる。

「兄…者…」

気づくと、五人のうちわ一族の忍に囲まれていた。

どの忍も写輪眼を開眼した大人の忍である。

「お前にも兄が居るのか。…俺の兄は、千手に殺された。」

先ほどまで感じられていた板間の場所にやっとの思いで辿り着いた。

しかし、柱間の目には信じたくない、現実の光景が飛び込んできた。
「板間あーっ!!」

動かなくなった弟を抱きしめ、柱間は泣き叫んだ。

あと一分、あと一秒早かったら、板間は助かっていたかもしれぬ。

戦いが終わったその森は、無数の死体が横たわり、柱間の泣き声だけがこだましていた。



柱間は緩やかに横たわる川の流れを見つめていた。

空は鉛色で、普段透き通っているその川の水も曇天を写して濁っているように見える。

「よう……久しぶりだな……えっと……」

「……柱間だ。」

「なんだよ。今回はいきなり落ち込んでんじゃねーか……何があつた?」

「逆になんだよ……俺は元気で……!」

「……うそつけ。なんだつたら話してみろよ……」

「……別に、何も……」

「いいから……言えって……」

「ホント、なんでもねえーって……!」

「いや、引つ張りすぎ……聞いてやるつつつてんだから、早く言えって……」

「なんでも……ねえんだぞ……?」

号泣した顔で柱間が少年のほうを振り向いた。

「あーもー! さつさと話せええ!!」

「……弟が、死んだ。」

「……!」

柱間は再び川のほうを向き、涙をぬぐった。

「ここへ来るのは……川を見てると心のモヤモヤも流れていくような気がするからだ……」

そう言うと、柱間はへへっと笑い、少年の方を再び振り返って言った。

「マダラだっけか……お前もそうだったりしてな……」

マダラは同じ忍の子供である柱間の背中に、いつかの自分を、見たように感じていた。

「……お前、兄弟とかいるのか?」

「俺は……五人兄弟……」

マダラは河原の石を拾って、手の中でもてあそびながら答えた。

「だった……」

「……!」

「俺たちは忍だ。いつ死ぬかも分からねえ。ただ、お互い、死なない方法があるとするりやあ…敵同士、腹の中を見せ合つて隠し事をせず、兄弟の杯を交わすしかねえ」

マダラは手に持つていた石を握り直し、身構え、続けた。

「けどそりや無理だ…人の腹の中の奥…腑までは見ることはできねーからよ」

そう言つて川に向かつて水切りをして見せた。

「本当は、煮えくり返つてるかも分からねえ…」

マダラはそう言つて水面を飛び跳ねるように進んでゆく石を、力強く見つめた。柱間もその石の軌道を見つめながらマダラに尋ねた。

「…腑を…見せ合うことはできねーだらうか？」

「分からねえ…だがいつも俺はここでその方法が在るか無いかを、願掛けしてる」

マダラの投げた石は対岸にコンと音を立て、届いた。

「今回は、それがやつと在る方に決まつたみてーだぜ。」

マダラと柱間は届いた石を一緒に見つめた。

「お前だけじゃねえ…俺も…届いた。」

マダラのその言葉を聞いて、柱間は静かに立ち上がった。

戦乱のこの時代を変えようと、同じ考えをもつ馬鹿な子供が…柱間以外に居た。

柱間は驚いたというよりも、マダラは神の啓示だと思えなかつた。

「…腑を見なくても分かるんだけどよ…お前…」

「何?」

「髪型といい、服といい、ダッセーな!」

そう言つてマダラは大笑いし、柱間は全てが同じ考えではないのだなと少し落ち込んだ。



鍋がくつくつと美味しそうな音を立てている。芙蓉はその様子を見るのが大好きだった。心がほどけていくような幸せな感情になれる音…。

「芙—蓉—!今日の晩飯はなんぞ?」

柱間がひよいと芙蓉の顔の横から身を乗り出し、鍋を覗き込む。芙蓉は驚き、心臓がドキドキと音を立てるのを感じながら答えた。

「柱間さま…肉じゃがでございます。」

「もう腹が減つて我慢できんぞ。今日も良く修行したからなあ!芙蓉は今日はどんな勉強をしたんだ?」

「もうすぐ出来ますので、少々お待ちくださいね…。えつと今日は、仏間さまから書と剣と、計算を教えて頂きました。あと椿さんからは裁縫を…。」

「そんなにしたのか?すげーな。ていうか、剣までやるのか?それ必要なのか??剣なら

俺が教えてやるのに。」

うふふと芙蓉は微笑んだ。その可愛らしい微笑みに柱間はドキツとした。

「家事をするにも体力が必要でしょう？ 剣は護身だけではなく体力作りにもなりますから。」

それに体を動かすのは楽しいです。」

「言ってることは分るけど、重い物は俺が持つてやる！ 芙蓉は無理しちゃダメだぞ。それに…楽しいっていても、父上の剣の稽古は芙蓉には厳しすぎやしねーか？」

「ありがとうございます。柱間さま…お優しいんですね。」

そう言つて芙蓉は柱間の顔を正視してニツコリと笑つた。柱間も頬を赤く染めてアハハと笑つて見せた。

「最近、兄者明るくなつたな。まあ良いけど…」

二人の様子を居間から見ている扉間はホツとしながらも、芙蓉の笑顔を自分だけが見られていないことに心が少し痛んだ気がした。

そこへ仏間が突然声をかけてきた。

「扉間。柱間のことで話がある。」

楽しそうに台所で話している二人を振り返りながら、気づかれないように父の後に続き別の部屋へ向かった。

◆
季節はすっかり秋を迎えていた。稲穂はこうべを垂れ、収穫の時期を待っている。赤トンボが舞い、ヒグラシの声は遠ざかってゆく。

二人の少年は今日も、忍の技を競い、拳を合わせ、夢について語り合っていた。「でも具体的にどうやったら変えられるかだぞ。先のビジョンが見えてないと…」

柱間がマダラに問いかける。ゴクゴクと喉を鳴らして水を思いつきり飲み干したマダラがそれに答える。

「まずはこの考えを捨てねえことと、自分に力をつけることだが。弱い奴がいくら吠えても何も変わらねえ！」

「そうだな…とにかく色々な術マスターして強くなれば、大人も俺たちの言葉を無視できなくなる。」

「苦手な術や弱点を克服するこつたな。まあ俺はもうその辺の大人より強えーけどよお。」

「…本当に止まるんだ、小便。」

「だから俺の後ろに立つんじゃねえー！小便したばつかの川に投げ込むぞゴラア!!」

「あ、弱点みつけ。」

二人は会うたびに仲良くなっていった。そして互いに心身ともに成長していった。

「くそーぜってーお前の弱点もみつけてやる！あ、そのダセー髪型、すでに弱点じゃん。お前、女にモテないだろ？」

嫌味な笑みを浮かべるマダラに対して、柱間はフツツと不敵な笑みを浮かべて反論した。

「俺、イイナズケ、いつからさー！」

「はあ？お前に許嫁？ぜってーブス！ブスに決まってる。」

「それがさあゝ超絶可愛いんだよなあ…天使。もう天使だぞー！あれー！」

「信じられるか！…まあどうでもいいけどよ。」

「似顔絵描いてやるぞ。顔は小さくて、髪の毛は長くて、目が大きくて、まつ毛が超長くて、いつもニコニコしててくそれでそれで…」

柱間はマダラの関心が逸れたことを気にせず、地面に小枝で描き始めた。マダラも最初は無視したが、つい気になって覗き込んでみる。

「ぶぶっ！やつぱ超ブスじゃねーかよ！笑わせるな。ぎやはははは。」

柱間の絵があまりに下手すぎて、芙蓉の容姿がマダラに伝わることは無かった。

「この可愛さが伝えられないとは悔しいぞ。俺の弱点は絵心の無さかもな…」

必要以上に落ち込みうな垂れる柱間に、マダラが言い放つ。

「お前の弱点は、その落ち込み癖だ！」

秋の日暮れはつるべ落としてある。すでに辺りは真つ暗になつていた。最近良く出かける柱間だけではなく、今日は扉間まで帰りが遅い。何かあったのだろうか。

板間の死は芙蓉にとって深い悲しみとなり、今も消えない。沢山会話をしたわけではないが、芙蓉と一番年が近いこともあり、親しみはあつた。優しいおつとりとした笑顔を含んで思ひ出すことが出来る。長男と次男の緩衝材といった感じで、いつも優しく仲裁していた。その子供が戦争で亡くなる現実を目の当たりにし、芙蓉は自分ができるような世界に來たのかを知らしめられたのだった。

・・・もう誰も死んでほしくない・・・

芙蓉は二人が心配になり、玄關を出て外の門まで出てみた。門の外へ出ることは仏間から固く禁じられている。でも少しなら……そつと門を押して外を覗いてみた。門の外を見るのはこの家にやって來たあの日以来だが、すでに辺りは真つ暗で、坂道を照らす灯が僅かに揺れている様子しか見ええない。

「そこで何をしておるのだ！」

凄い劍幕で仏間が後ろからやって來た。芙蓉は恐怖で声も出さず、微動だにできずに、ただ仏間が近づいてくるのを見つめるしかない。

「決して外へではならぬと言つたはずだ。何をしておる。」

芙蓉の倍はあろうかと思われるほど、仏間が大きな恐ろしい怪物に見えた。

「あ、あ、あの… お二人が、お二人のことが心配で…。申し訳…ありません…」

仏間の顔がずんつと近づいてきて、芙蓉は思わず両手で頭を押さえ、目をつぶり叫びそうになった。仏間は芙蓉の頭上から腕を門へ伸ばし、門を少し開いて外を覗いていた。芙蓉は恐る恐る両手を下ろして、仏間の顔を見上げた。だが、暗くて仏間の表情はよく分らない。

「心配いらぬ。あの二人は強い。特に最近、柱間の成長は目を見張るものがある…もうすぐ帰って来るであろう。さあ、家の中へ入りなさい。」

仏間は穏やかな口調でそう芙蓉を諭し、芙蓉の背中を押して先に行かせた。

「は……」

芙蓉は小さな声で答え、俯きながら歩き出した。芙蓉は父親がどんな存在か知らない。だがきつと今の仏間のような姿が、父親というものなのだろうと思った。

一方、仏間は芙蓉が柱間と扉間のことを心配してくれたことを嬉しく思うと同時に、言葉では芙蓉にああは言ったものの、心配な気持は拭えなかつた。たとえ柱間と扉間でも、手練れのうちわ一族に囲まれたら…考え出したらきりが無い。ただ信じて待つしかない。

間もなくして先に扉間が帰宅した。

扉間は帰るなり仏間の部屋へ直行する。芙蓉は、扉間は遅くなったことを詫びるのだ

ろう、あまり叱られないといいがと心配しながら、台所で椿と無言で夕食の支度を再開する。

そして柱間も、間もなくして帰宅した。

「ただいまー。」

芙蓉は台所からおかえりなさいと声をかける。玄関に迎えに出たいのだが、扉間と仏間が先に行くかもしれないと思ひ我慢をする。すると柱間が台所にひよっこり顔を出した。

「ただいまつ。遅くなつちまつたぞ…父上、怒ってる？」

へへつと苦笑いをして芙蓉に尋ねる。

「だ、大丈夫だと思ひます…」

すると仏間と扉間が二人そろって居間に入ってきた。最初に口を開いたのは扉間だった。

「兄者、遅すぎるぞ。なにをやっていたんだ。」

「遅くなるのなら出かける前に言え。そうでなければ何としても早く帰って来い。」

仏間と扉間が、何事も無かつたかのように食卓に着く。柱間は拍子抜けしたが、まあいいやと自分の部屋に着替えに向かう。芙蓉はその様子を少し不思議に思ったが、とにかく扉間も柱間も無事に帰宅して良かったと、ほっと小さな胸をなでおろした。



「マダラ…俺、すつごい術を考えてきたぞ！一緒にマスターしようぞ！」

「へー…どんなんだ？」

「この日も二人は会っていた。」

会うたびに二人は仲良くなってゆく。ただ、お互いの姓は明かせない。

「体術奥義超火遁幻術斬り大手裏剣二段落しの術!!!」

「…いや、全然イメージ出来ねーよ。」

「詳しく説明すると…」

「うるさい！今日は直角崖上りを競う！」

柱間はまたいつものように、必要以上に落ち込んでうな垂れた。

「あーもー！だからいちいち落ち込むなっつーの！やっぱそれがお前の弱点だな！」

「アハハハくお先くく!!」

柱間はマダラよりも先に崖を直角に走り始めた。

「あつ！てめえ、落ち込むフリしやがったな！」

そう言うマダラも崖を走り始めた。マダラが追いつきそうになったところで、柱間が一足先に崖の頂上に登り着く。

ぜいぜい…はあはあ…二人の息が最高潮に上がっている。

「…俺の勝ち…。」

「そりやそだろ…先にスタートしたんだからよ！」

二人の目の前に深くて広い森が広がり、ここからはその森全てを見渡すことが出来た。森の向こうの高い山々まではつきりと見られる。

「…ここだと森が一望できるな。」

「オウ…遠くまで良く見える。」

マダラは柱間のほうを向いてニヤツと不敵な笑みを浮かべて続けた。

「目の良さならお前に負けねえ自信がある。勝負すつか？」

「急になんぞ？やけに目にプライドもってんな。」

「そりやそだろ！なにせ俺は写…。」

そう言いかけて、マダラは言葉を飲み込み、黙り込んだ。

「どした？」

「いや…そーでもねーな。やっぱ。」

「何だぞ？お前にしては珍しく素直だな。」

マダラは目を伏せ、俯いて言う。

「…だったら兄弟は死んでねえ。見守ることもできなかつたくせに…何が…何が…。」

瞳を開け、じっと地面を見つめている。兄弟の死を思い出している様子だった。

「もう兄弟はいねーのか？」

「いや、一人だけ弟が残ってる…」

地面に強く掴み、強い意志のこもった瞳でマダラは言葉を続ける。

「その弟だけは何があらうと俺が絶対に守る。」

柱間はマダラの真剣な横顔を見つめた。柱間もまた、マダラと全く同じ気持ちだった。

だからこそ、二人がいつも語っている夢は実現させなければならぬのだ。
なんとしても。

「ここに俺たちの集落を作ろう!!そこは子供が殺し合わなくていいようにする!!」

柱間が森に響き渡るほどの大きな声でそう叫んだ。そして続ける。

「子供がちゃんと強く大きくなるための学校を作る!個人の能力に合わせて任務が選べる!依頼レベルをちゃんと振り分けられる上役を作る!子供を激しい戦地へ送らなくていい集落だ!!」

マダラがじわりと笑顔に戻って柱間に言う。

「フツ…そんな馬鹿なこと言ってるの、お前くらいだぞ…」

「お前はどうかんだよ☒」

「ああ、その集落作ったら今度こそ弟を…一望できるここからしっかりと見守ってやる!」

柱間とマダラは互いに顔を合わせ、満面の笑顔を見せ合った。

それは、屈託な子供の笑顔だった。

柱間とマダラが見渡すこの森は、のちに木ノ葉隠れの里となる場所だった。

柱間はこの時、覚悟を決めた。

先を見るために、耐え忍ぶ覚悟を。

パシヤー！パシイ！

「二人とも届いたな。」

「その石、水切りするには良い石だ…次に会うまでお前に預けとく！」

二人は互いに水切りした石を受け取り、そう言つて別れた。

…今日は早く家に着ける…

柱間はムスツとした扉間と、笑顔の芙蓉の顔を思い出しながら心の中で呟いた。ふと

家の方向を見ると、目の前に扉間が居た。

「どうした！扉間。」

「兄者…話がある。」

柱間は嫌な予感がよぎったが、黙つて扉間のあとに着いて仏間の待つ部屋に向かっ

た。

「お前が会っている少年がいるな…」

「…なんでそれを…」

柱間は仏間の言葉に驚きを隠せない。なぜ分ったんだ？焦る柱間に扉間が言う。

「父上の命で兄者をずっと尾けてた…感知なら俺のほうが上だ。最近やたらと出かけるから何かあると思って…」

「あの少年をわしが調べた。うちは一族の者だ。」

柱間はマダラがうちは一族だと、うすうす気が付いていた。だがそれを父に知られたことで、体に冷たいものが走った。

「我ら一族の大人の手練れ達もやられている。生まれながらに忍びの才能をもつ少年のようだ。」

…やっぱそうだったのか…

「大して驚かないところを見ると…お前たちすでにお互いの一族の名を知っているんじゃないだろうな？」

「…いや、知らなかった。おそらくあいつも…」

仏間は声を荒げずに、しかし、怒りを込めて柱間に言う。

「…これがどういふことか解っているな。千手の者たちにはまだ言っていない…スパイ呼ばわりされたくなければ、次にあの少年に会った後、奴を尾行しろ。」

柱間はどこかで想像していたことが、現実になってゆくのを感じた。だがこれ以上は

…

「うちは一族の情報を持って帰れ。これは任務だ。気づかれた時は…殺せ。」

柱間は父の口から語られた現実が、自分の中の現実になるのが怖い。震えた声で父に問う。

「ほ…本当に、うちは一族なのか？」

「そうだ…お前が千手だとバレていけば…こちらの情報を盗むために気を許したフリをする。信用するな。」

「い、いや…あいつはそんな…」

柱間の動揺した様子を見て仏間は苛立ちを抑えきれず、大きな声で柱間の言葉を遮る。

「腹では何を考えておるのか分ったものではない!!もし騙されれば、千手の皆を危機に陥れることになる。」

柱間は口ごもったまま、その言葉を飲み込み、落ち着いたフリをして父の瞳を見つめた。

「念のためわしと扉間も付く…分かったな!」

夜風が冷たい。いつの間にか秋も深まっていた。鈴虫が命を燃やし懸命に鳴いている。

思えば、マダラと会うようになって、あつという間に時間が過ぎていたように感じる。楽しい時間は、なぜにこんなにも早く過ぎ去ってしまったものだろうか。その時間がずつと続くと、いや、続けていかなければならないと思っていたのに…。

柱間はマダラから受け取った水切りの石を見つめた。

・・・あいつも今頃・・・

「柱間さま、どうされたのですか？風邪を引いてしまいますよ。」

柱間は急いで石を服の中に隠し、振り返る。

「芙蓉…お前こそ温かくしろよ。」

いつもと違う柱間の様子に、芙蓉は不安そうに見つめた。

「何か…あつたのですか？」

「いや！別に！なんでもないぞ。もう部屋に戻るところだったんだ。」

「そうですか…。あの…元氣、出して下さいね？」

「お、俺は元氣ぞ！アハハハ…。」

芙蓉は少し困ったように微笑んで、ゆっくり柱間に近づき、柱間の右手をそつと握った。

「絶対、大丈夫です。柱間さまなら。」

柱間は驚いた。芙蓉にもマダラとのことは全く話してはいない。まして忍の任務や

戦のことは決して芙蓉に伝わらないよう家族の中で決まりがある。それなのに、芙蓉は全部てを知っていて、それを知ったうえで自分を励ましてくれているのかと、一瞬錯覚した。

「……」

「あつ、申し訳ありません。勝手にお手を握ってしまつて……あの、昔、母が私にこうしてくれた記憶があつて。芙蓉なら、絶対大丈夫だよつて……たぶん。ごめんさい……もうあんまり覚えていないですけど……」

黙り込む柱間の様子に、芙蓉はいけない事をしてしまったと思ひ焦つて手を放した。「いやーすっげー嬉しかったぞーすっげー元気でた！ありがとなー！」

柱間もその芙蓉の様子を見て焦つてそう言つた。二人は少し気まづくなつて俯いた。「芙蓉も勉強はそこそこにして、早く寝るんだぞ。じゃあまた明日！」

柱間は大股で歩いて自分の部屋に向かった。その後ろ姿を見送りながら、芙蓉は柱間の為に祈つた。柱間に何があつたかは分からない。でも、きつと柱間なら大丈夫だと。



川はこの日もいつものように、ゆるやかに流れ、心地よい川のせせらぎが聞こえる。マダラのほうから対岸に居る柱間に話しかける。

「さつそくだがよ……まずは挨拶がわりに水切りからいくか。」

「おう…」

二人はおもむろに、交換していた水切りの石を懐から取り出し同時に水切りをした。バツシャ！二人の石が同時に川面に着き、飛び跳ねる。

パシイ！全く同時に二人は互いが投げた石を受け取った。

「！」

二人は石を見て、ハツとする。

「柱間あ…悪い…今日はダメだ…急に用事思い出してよ。」

…マダラの側にも俺の正体が知られているのか！…

「そ、そうか…では俺も今日は帰るとするぞ…」

“ニゲロ”

“畏アリ去レ”

二人が互いに受け取った石には、偶然にも同じことが書かれていた。

ジャツ！

河原の石が同時に鳴った。二人は背を向けた瞬間に弾みをつけ飛び、走り出した。

「このスピード、逃げる気か！柱間め…教えたな！行くぞ扉間!!」

「はいー」

木の影から柱間とマダラの様子を監視していた仏間と扉間が、マダラを逃がすまいと

川に飛び出す。

バシヤ!!

川面に足を着けたのは仏間と扉間だけではなかった。

「考えることは同じようですね…千手仏間!」

「それと、扉間だったか。」

柱間とマダラが立ち止まり振り返ると、そこには川の上で対峙する互いの父と弟、四人の姿があつた。

「…のようだのう、うちはタジマ!」

「それから、イズナだな。」

偶然にも、うちは側も同じ考えだったようだ。仏間と扉間が対峙しているのは、マダラの父親・タジマと弟のイズナだった。

まったく同じ状況…

仏間はタジマに、扉間はイズナに飛びかかった。

扉間もイズナも、自分の背と変わらない大きさの刀を振りかざす。

千手仏間とうちはタジマはほぼ同じ力だということが、互いに幾たびの戦いで解つていた。

忍は何があらうと戦場で心を乱さない訓練をされる。一瞬の心の乱れが好きを生じ、

生死を分ける。

「やめろーっ！」

柱間とマダラが同時に叫んだのと同時に、扉間とイズナの刀が交わる。

ギシイン！

二人は互いに押されないように力を込める。刀がギリギリと音を立てて震えている。

大人ふたりは解っている。

もし目の前で我が子が殺されれば、ほんの僅かだが己の心に乱れが生じるであろうことを。つまり……どちらかが先手をとることで勝負が決まる。

バツ！

扉間とイズナがいったん刀を離し構えを整え、再び川の上で対峙した。

・・・ガツツ!!・・・バシヤツ!!

扉間の頭上にはタジマが放った短刀が、イズナの頭上には仏間の放ったクナイが飛んできたのを、柱間とマダラが水切りの石を投げて防いだ。その短刀とクナイは川に落ち沈んでゆく。二つの水切りの石も一緒に川の中に姿を消した。

「!?」

扉間とイズナ、そして大人ふたりにも何が起こったのか分からない。

バシヤアン!!

柱間とマダラが互いの弟の前に飛び出し、対峙した。

「弟を…傷つけようとする奴は誰だろうと許さねえ！」

マダラが叫ぶ。柱間とマダラ…マダラのほうが強く柱間を睨みつける。

そして、全て諦めたように視線を落として、言った。

「俺たちの言つてた…バカみてーな絵空事には…しよせん…届かねーのかもな。」

扉間とイズナを襲つた二つの武器と、それを防いだ二つの水切り石は、ついに川底に沈んでしまった。

「…マダラ…お前…?!」

「少しの間だったが楽しかったぜ…柱間。」

川のせせらぎの音が沈黙を作る。

「三対三か。…どうだ、いけるかマダラ。」

「いや、柱間は俺より強い。このままやればこつちがやられる。」

「え×兄さんより…強い子供が？」

「…そうか…それほどとはな…。」

マダラは柱間たち三人にすつと背を向ける。

「じゃあな…引くぞ。」

柱間は胸から喉に熱いものがこみ上げ、喉がつかえそうになりながら、すがるように

マダラに向かって言う。

「マダラ、お前……！ ホントは諦めちやいねーよな……☒お前はやつと俺と同じ……」

その言葉を遮ってマダラが言う。

「お前は千手……できれば違つて欲しかった。俺の兄弟は千手に殺された……」

その言葉を聞いて、柱間の頭に死んだ瓦間と板間の顔が浮かぶ。

「……だからさ、お互い、腑なんて見せる必要もねーだろ。」

柱間はマダラに近づこうと一歩前に出ようとする。それを制するようにマダラが続けた。

「……次からは戦場で会うことになるだろうぜ。千手柱間……。俺は……うちはマダラだ……」

そう言つて振り返つたマダラの瞳は、先ほどとは違つていた。

「見て！ 父様！ 兄さんの目……」

マダラの瞳を見て、嬉しそうにイズナがタジマに向かって言った。

「フツツ……千手の情報は手に入らなかつたが……代わりに良いものをこちらは手に入れたようだ……」

仏間も、マダラの瞳を見てマダラが今、写輪眼を開眼したことに驚いた。

そして柱間はその時、写輪眼の開眼が何を意味するのか……分かつたような気がした。

川は静かに流れ続ける。さつきまで聞こえなかつた鳥のさえずりが聞こえる。

そこにはもう、千手の者も、うちのは者の姿も無かった。

それは最初から何もなかったように、何も変わらない美しい風景であった。



芙蓉は愛おしそうに、自分の背と同じくらいある、新緑が芽吹いた木に水をやっていく。

「だいぶ大きくなったよなーその木！」

「はい。今年は咲くといいいのですが……」

しゃがんだまま柱間を見上げて、嬉しそうに言った。

「その木、芙蓉と同じ名前だよな。父上もああ見えて、やるよなー。」

「わ、私がこの木と同じ名前と言ったほうが正しい気もしますけど……仏間さまにせつかく頂いたものですから、大切に育てます。」

芙蓉は優しく葉を撫でた。

この木は昨年、芙蓉の誕生日に仏間が庭に植えてくれたものだった。

「でも木って凄いですよね……この木は何年生きられるか分かりませんが、なかには千年も生きる木もあるそうです。あと、接ぎ木ってご存知ですか？切った枝を植えたらそこから根が出て新しい木として生きるんです。木の生命力って凄い……」

「へー。分身の術みたいだ……確かに、それってすごい生命力だよな。あと、木々は寒い

冬を耐えて、また芽吹く。そして花を咲かせる。なんて歌もあるよな?」

柱間も芙蓉の隣りにしゃがんで、その木を眺める。

「ふふ。それは花木や広葉樹だけですけどね。常緑樹や針葉樹は一年中緑ですわ。」

「わ、分かっているぞ。お前、なんか最近扉間に似てきてないか……」

「ごめんなさい。でも厳しい自然のなか、寒さ・暑さ・嵐にも耐えて立ち続けているので

すから、どの木も凄いです。花を咲かせなくても、実が生らなくても……」

二人は顔を合わせて笑い合う。

以前よりも二人の目線の高さの差が少ない。

芙蓉はこの一年で背がずいぶん伸びた。もうすぐ十歳になる。

そして二人は一緒に立ち上がった。

柱間はその瞬間、ふと閃いた。

「木……水……土……生命力……。木遁!……うん……やってみるか。」

「何をですか?」

「ああ、新しい術を思いついてな!」

芙蓉はそうですかと静かに微笑んで目線を逸らした。

「芙蓉ありがとな!……あのさ……昔やってくれたあれ、またやってくれないか?」

柱間は照れくさそうに、右手を芙蓉の前に差し出した。芙蓉は少し驚いた顔をしたあ

と、にこつと笑顔になり、そつと両手で柱間の右手を包んだ。

「…絶対、大丈夫。柱間さまなら。」

芙蓉をまっすぐに柱間の目を見て言った。柱間は芙蓉の瞳に吸い込まれそうになるのを感じ、改めて芙蓉の顔の全体を見る。そして、握られた手を見つめた。

・・・夢のために耐え忍ぶ・・・

あの日、マダラと話した日の決心は、いまでも揺らいでなごいなかった。

「ゴホン！」

縁側で咳払いをした扉間に気づき、二人は焦つて手を離れた。

「あ、いや、えーつと。扉間！俺、新しい術を思いついたぞ！あつちで話聞いてくれよ。」

「は？…この状況でどーやって新しい術なんて思いつくんだよ…つたく。」

柱間はアハハと苦笑いしながら、先に自分の部屋へと行つてしまった。そして芙蓉もじょうろを拾い上げ、その場を離れようとした。その背中に向かって扉間が言う。

「おい。ガキのくせに色目使つてんじゃねーぞ。お前、許嫁の前に女中だつてこと忘れるな。」

芙蓉は少し悲しそうな笑顔で振り返り、困つたような笑顔で再びじょうろを地面に置いた。

「はい。解っております。それに、何もやましいことなどしておりません。」

笑顔で、でも気丈にそうハッキリと答える芙蓉を見て、扉間はイラつとした。「じゃあ何してたんだよ。」

芙蓉は扉間に近づき、縁側の下から手を伸ばし、扉間の右手をとった。

「な、何すんだよ！」

芙蓉は気にせず扉間の右手を両手でぎゅつと握りしめ、その手を見つめる。なぜか扉間はその手を振り払うことができず、ただ立ち尽くしてその光景を見ていた。

「…絶対、大丈夫。」

芙蓉は扉間の顔ではなく、扉間の右手を見つめながらそう言った。

「な、何なんだよそれ。意味がわからん。」

芙蓉は手を握ったまま、扉間の顔を見上げて微笑む。

「おまじないです。私が戦いに行くお二人にできることは、こんなことくらいしか無いですから…」

「く、くだらない。なにがまじないだ。忍にまじないなんて…冗談にもなっていない。」

「ごめんなさい。でも…人の想いつて、何より強いと思うから…」

扉間は何も言えず、沈黙が生じる。

「…人の想い？俺のことも、想ってくれているっていうのか？…」

そして扉間は黙って芙蓉の手を振り払い、行ってしまった。

一人残された芙蓉は、少し寂しそうに芙蓉の木を見つめていた。

「ずいぶん大きくなりましたわね。芙蓉の木。花を咲かせてくれるのが楽しみですわ。……仏間さまも女心をちゃんと解っていらつしやるのですね。うふふ。」

庭の見える部屋で椿が仏間の着替えを手伝いながら、冗談っぽく仏間に言った。

「たまたま見つけただけだっ……芙蓉が我が家に来たことの単なる記録だ。」

椿がうふふと再び笑って着物を畳む。仏間は芙蓉の木を見つめて、昔のことを思い出した。

「私にも木登り、教えてくれない?」

木登りの修行中の仏間に、見知らぬ一人の少女が話しかけてきた。真つ黒な長い髪を後ろでまとめており、肌は真つ白。長いまつ毛の大きな瞳とこぶりの口で満面の笑顔を作っている。

木登りといっても、仏間の行っているのは、足の裏にチャクラを集中させて木を垂直にかけ登る、チャクラのコントロールの修行である。

「……大人の女のひとに教えてもらえばいいだろ。」

「だって私の一族、忍じやないもん。」

仏間は面倒なことになりそうだと思う、一気に木の上に登った。

「わあく！すごい！楽しそう！」

「あのなー。別に楽しくてやってんじやないんだけど！…いいな一般人は呑気で…」

「え？なに？最後聞こえない。…でもさ、ちよつとは楽しいんじやないの？それ。」

仏間は少女を見下ろし、心の中で確かにそうかも…と思った。

「お願い！木登りだけでいいの！教えてー。」

仏間はハアとため息をついて少女に訊いた。

「普通に登ればいいじゃないか。なんでチャクラで木登りしたいんだよ？」

「だってー、楽しそうだし！それに普通に登ってもそんなに上までは登れないでしょう？一番高い所から、遠くを見てみたいのー。」

仏間は無言で木から飛び降り、少女の隣りに着地した。

「わあ！すごい、すごい！」

そう言つてはしやぐ少女を仏間は無言で抱きかかえ、一気に木登りした。

「キヤーツ！」

少女が叫び終わる前に、仏間は木の頂上の先端まで登り着いた。

「ほら、これが頂上からの景色。分つた？もういい？」

そこには豊かな森が広がり、遠くに家と畑が見えた。さつき通つてきた川には青空が映り込み、青くキラキラと光っている。空は目線の高さに大きく広がり、白い雲が浮か

ぶ。

「…綺麗…。あなた、いつもこんな景色を見てるの?…いいなあ。ね!私にも教えて!」
 仏間は少女がその高さに怯えて木登りを諦めるか、景色に満足して諦めるだろうと思っていたが、楽しそうにはしゃいで、嬉しそうに仏間の顔を見る少女に驚き呆れた。「あのさ、そもそもお前、チャクラ使えるの?チャクラ発動できないなら絶対無理だけど。」

「え?…そつかあ…。残念。」

仏間はやつと諦めたかとほつとして、木の下へ降りようとした。

「じゃあさ!チャクラ使わなくていい忍術教えてくれない?」

仏間は少女の想定外の言葉に木から落ちそうになった。どこまで諦めないんだ…?そもそも「チャクラを使わなくていい」忍術なんて、無い。そう言いたかったが無駄だと思っただ。

「…体術か、剣術なら、できるかも。それなら…」

「じゃあそれ!それ教えて!」

体術か剣術なら一般人でも教えてくれる人間はいるだろうから、少女が他を当たってくれるだろうと思ひ発言したものの逆効果だった。とりあえず、地面に降りることにした。

「なんでそんなに忍の術が使いたいの？別に楽しくなんてないよ？」
「…知りたいの、忍について。嫌いになるにも、知らないで嫌いになるのは、私、イヤなの。」

悪びれる様子もなく、そう言つて少女はニッコリ笑つた。

「なにそれ意味分かんねー。とにかく、他当たつてよ。俺、忙しいから。」

仏間はムツとしてそう言い放ち、その場から姿を消した。

次の日、仏間は昨日と同じ場所へ修行に来ていた。またあの少女が居たら面倒だとも思ったが、見知らぬ非礼な女のせいで、せつかく気に入っている修行場を変えるのは癪だった。

…忍が嫌いなんて、よく平気で本人に向かって言えるよな。ああいう無神経な奴、大嫌いだ…。

修行に熱中し、いつの間にか少女のことも忘れていた。夕日が沈みかける川を眺めながら家路を歩いていると、昨日の少女が河川敷で木の棒を振っていた。あ、結局自己流でやるんだ。そう思つて少し少女を見ていると、どうやら本を見て剣術を練習しているようだ。すると仏間が知っている型を練習し始めた。

…そこは違う。もつとこう、腰を入れて、左手は…。

気が付けば練習する少女を見つめながら、心の中で間違いを指摘していた。そんな自

分に気が付き、頭をブンブンと横に振って、仏間は走って家に帰った。

次の日も、少女は同じ場所に居た。

やつと間違いに気づいたようで、昨日よりも型が良くなっている。だが自分と同じくらしいの十二〜三歳の少女だ。その年頃の女なんて、すぐに飽きて辞めてしまうに決まっている。そう思つて仏間は、ざわつく胸の中を無視してその場を後にした。

ある日、仏間はいつもの森の修行場で手裏剣の修行をしていた。

木から木へと飛び移りながら、標的に手裏剣を当てる。すでに標的の中央にはいくつもの手裏剣が突き刺さっている。だが仏間は納得がいかない。もう一度…そう思つて手裏剣を投げようとした瞬間、木の間から鹿の親子が現れた。思わず手元が狂い、手裏剣は的から外れて森の奥に消えた。

・ ・ ・ 鹿に驚いて手元が狂うなんて…最悪だ。こんなことじゃダメすぎる…

そう思つたと同時に、森の奥からキヤーという悲鳴が聞こえた。

まさか、さっきの手裏剣が人に当たったのか？ 仏間は急いで声のする方向へ向かった。

「…いててて。あーもービックリしたあ…」

そこには、あの少女が地べたに座り込んで腰をさすっている。少女の前に在る大木には、仏間が投げた手裏剣が突き刺さっている。

「だ、大丈夫か?! 怪我は☒」

仏間が慌てて少女に近づき、少女の顔を覗き込む。

「あ…うん。大丈夫…急に何か飛んできたからビックリしちゃって、転んじゃったの。」

「ごめん…俺の投げた手裏剣なんだ。当たらなくて良かった…」

ん? 待てよ。なんでこんな森の奥に、一般人の少女が一人で居るんだ? 手裏剣の修行

をするからと、いつもより森の奥に入っているんだぞ…?

「つて、なんでお前、こんな所に居るんだよ?! 危ないだろ!」

「え☒なにそれ! 逆ギレ? あんたが悪いんじゃない!」

少女はそう怒ったが、すぐに俯いて、仏間に謝ってきた。

「…ごめん。河川敷で剣の練習したら、あなたが橋を渡って行くのが見えたの。それ

で、今日はどんな修行してるのか見たくて着いて来ちゃった…邪魔してごめんなさい。」

ふと少女の隣を見ると、剣の練習で使っていた木の棒が転がっている。

「…俺も悪い。ごめん。でも忍の修行は危険なんだ。着いて来ないでくれ。…その代わ

り…剣術、教えてやってもいいけど…」

少女の顔がぱつと明るくなって仏間を見上げた。

「本当に? 嬉しい! ありがとう!!」

本当に嬉しそうな少女の笑顔に、仏間は少しドキドキした。顔が赤くなっていないか

心配になって、そっぽを向く。

「私、水蓮っていうの。あなたは？」

「…仏間。千手仏間。」

「仏間ね！よろしく！」

それから毎日、仏間の修行の後、水蓮に剣術を教えることになった。真剣は危ないため、家にあつた木刀を水蓮に譲つたところ、水蓮はとても喜んだ。

「おぬし、なかなか筋が良いのお。」

「…誰に向かつて何を言ってるんだ。教えて貰ってるの、そっちだろ！」

「アハハ。一度言ってみたかったの、これ。」

「もうホント、お前って意味分かんね…！」

そう言つて呆れるふりをしたが、仏間は水蓮のそんなちよつと変わった面白い性格が好きだと思つた。それとは対照的に、真剣な眼差しで向かい合う時の水蓮の顔は、怖いくらいに美しい。なぜこんな少女が忍術や剣術を会得したいのか、そしてなぜ忍が嫌いなのか。

「隙アリー！」

水蓮が仏間の脇腹を狙つて木刀を振り降ろそうとした。

仏間は我に返り、素早くそれを防ぐ。

ガン！…ヒュンヒュン…ゴロンゴロンゴロン…

水蓮の木刀はその勢いで手から離れ、空中で回転し、地面に落ちた。

木刀を手放した水蓮の掌には、豆が出来ていて血がうっすらと滲んでいるのが見えた。

「あー惜しかったなあ。もう少しだったのにー！」

嬉しそうに地団太を踏む水蓮を見て、仏間が訊いた。

「なあ。なんで忍のことが嫌いなんだ？」

ポツ、ポツ…ポツポツ…ザー…

仏間は着替え終わり、膝を組んで思い出に浸りながら芙蓉の木を見つめていると、いつの間にか雨が降っていた。

「あら、さつき芙蓉さんが水をあげたのに…まあでも全ての草木には恵みの雨ですね。」

椿がお茶を持って来て、仏間に話しかけた。

仏間は水蓮と登ったあの木は、まだあの場所に立っているのだろうかと思つた。

翌日。夜のうちにすっかり雨は上がり、朝には土も乾き青空が広がっていた。

「きやつー！」

庭から芙蓉の悲鳴が聞こえて柱間は走って向かった。

「立て。早く刀を持つのだ。」

「父上！いくら何でもやりすぎだろ！」

柱間は芙蓉に走り寄って急いで抱き起した。

「大丈夫か？怪我してないか？」

すると仏間が木刀で柱間の背中を叩いた。

「痛つてえー!!なにすんだよ!!」

「稽古中だ。余計なことをするな。」

「柱間さま…ありがとうございます。…痛つ。でも、手出しは無用です。」

そう言つて、芙蓉は少し歪んだ笑顔を見せて刀を拾つた。

縁側の隅に座つて稽古を見ていた扉間が柱間に声をかける。

「兄者、本人がそう言っているんだから、やらせとけばいいだろ…」

「お前！居たのかよ！やらせとけつて…お前まで何言つてんだ！父上、芙蓉は怪我してんじやねーか！忍でもないのに、なんでここまでする必要があるんだよ！」

仏間が大きなため息を吐く。そして扉間が小声で柱間に言う。

「俺だつて、やめろつて言つたんだ…でも芙蓉が…」

そう言うのと、ふてくされたように頬杖をついて扉間はそっぽを向く。

「柱間。忍の妻になる女は、守られているだけではだめだ。それに何より、強い精神力が

必要なのだ。解つたらどけ。」

「私……負けたくないです。頑張ります……」

「うむ。それで良い。さあ芙蓉、かかつてこい！」

木刀を構え仏間を見据える芙蓉の目には、年端もいかない少女とは思えない力強さが漲っている。柱間は一心不乱に仏間へ向かつていく芙蓉の姿に、もう何も言うことができず、ただ立ち尽くすしかなかった。

……俺は芙蓉にそんなもの、望んでなんてない。俺が芙蓉を守る！……

不必要に思える厳しい稽古に反感を感じつつも、芙蓉がここまで頑張っているのは自分のためなのかと考えると少々嬉しくもあり、柱間は芙蓉の将来が楽しみになった。

そして、そんな芙蓉と共に生きられる今という時間を愛おしく思った。

一日一日、芙蓉の成長と共に、木刀がぶつかる音が大きくなってゆく。

机の隣りに並ぶ本の数も、その種類も、日々増えてゆく。

その本に挟まれる葉が、その時、その時の出来事と記憶を記録していく。

庭の芙蓉の背丈も伸び、年々花数を増やし、美しく咲いては消えてゆく。

一方、絶え間なく続く戦の炎は、消えることは無い。

記憶の花びらと戦の火の粉が、止めどなくひらひらと舞い散る。

それらは、止めることのできない時の流れに静かに押し流されてゆく。

(3) これからどう生きるかを考えるということゝ芙蓉の場合

見上げれば桜がちらほらと咲き始めており、遠くの畑からは菜の花の甘酸っぱい香りが漂ってくる。

家の門から外へ出るのは、どれくらいぶりだろうか。

芙蓉は思いっきり深呼吸をして、地面を一步一步しっかりと踏みしめながらゆっくりと歩く。空も家の庭から見るとは比べ物にならないほど、広い。

外の世界はこんなにも広く美しいものだっただろうか。

「ふふ。キヨロキヨロする癖は、変わっていないのね。」

芙蓉の隣で椿が笑った。

「だって、本当に久しぶりだもの……」

「そうね……私も本当に仏間さまがこんなに長く、あなたを外に出さないなんて思わなかったわ。でももう、こんな歳になったのね……」

椿が目を細めて、自分よりも背が高くなっている芙蓉を眺める。

芙蓉は十五歳になり、女学校へ行くことになった。

その学校は三年間の課程で、良家や豪商の娘のための高等教育と花嫁修業、そしてくノ一のスパイ任務のための教育を行っている。千手一族の加護もあり、この学校に在籍することで女子の価値が高まることから、遠方からわざわざこの学校で学ぶためにやって来る女子もいるほどだった。

「おー！袴がよく似合ってるな！芙蓉！」

正面から大声で手を振りながら、柱間がやってきた。その声に数人の通行人が振り返る。

恥ずかしくなった芙蓉は、さっと椿の後ろに隠れた。

「ちよつと、柱間さま…声が大きすぎます！」

椿が柱間に文句を言った。てへへと苦笑して、柱間は芙蓉に歩み寄る。

芙蓉は萌黄色の合せ襟の上着に、濃紺の袴、僅かにふくらはぎが見える足には編み上げの革靴を履き、手には学校鞆を持っている。幼少の頃よりも少しばかり黒さを増した髪は腰まで長く伸び毛先はくせ毛で緩く巻いており、サイドアップにして飾り紐を付けている。

「こんなことで恥ずかしがってたら、友達なんてできんぞ！」

「柱間さま、そういう問題ではありません。芙蓉さんが目立ってしまったては困るのです。お解りでしょ？」

「うーむ。確かに分らんでもないが、芙蓉が町を歩く時点で目立つのは避けられんだろう。これだけ美しいのだから、すぐに評判になるだろうし。大丈夫！任務の時以外は俺が送り迎えするのだし、心配はいらぬぞ！」

柱間は大きくアハハと笑い飛ばした。椿は呆れたような顔をし、芙蓉も困った顔で俯いた。

「そうだ、学校まで背負って送ってやろうか！」

「ありがとうございます。でも、今日は歩いて行きたいので……」

「兄者、うるさいし、うざい。」

後ろから、腕を組んで扉間が歩いてきた。

「おお！扉間ではないか！う、うざいとはなんぞ……まあじゃあ、四人で歩いて行こうぞ！」

「……」

椿は、これでは目立つために歩いているようなものでは無いかと、ツツコみながら仕方なく歩き始めた。

柱間は『木遁の術』を発明し、次の千手族の長として誰もが期待する、強い忍となっていた。扉間も柱間に並ぶ実力者になっており、その二人が並んで歩けば只でさえ目立ってしまう。

「学校かー。俺たちは行つてないからどんな場所かよく分らんが、同じ目標をもった同士が同じ場所で共に学ぶとは、素晴らしいな！」

「忍にも専用の学校を作る案、あれなかなか通らないな。年寄たちは相変わらず馬鹿だ。」

柱間と扉間が二人並んで前を歩き、後ろを椿と芙蓉が並んで歩いている。

「誰が馬鹿だと？」

今度は正面から仏間が現れた。これではまるでRPGである。

扉間がゲツつという顔をして横を向く。

「父上！もしかして、父上も芙蓉の入学式に参加するのか？」

扉間が嘘だろ？という顔をする。

「保護者だからな。」

仏間は表情も変えず普通に答えた。

「…至極まっとうな理由だな。」

「では五人で歩いて行こうぞ！」

椿はうな垂れた。あまり目立つなど言った本人まで登場して、五人で歩いて登校するなんて…芙蓉の今後の学校生活に支障が出ないか心配になる。芙蓉はそんなことは想像もできないのか、五人揃って歩けることをとても喜んでいる。椿はその様子を見て、

これからの未来のために何が大切なのか考えると、これでいいのかも、と苦笑した。

◆ 「ねえ芙蓉さん、これ図書室に戻しておいて下さる？」

三人の生徒が、ドンつと辞書や本の山を芙蓉の机の上に載せる。

「ええ、いいですよ。」

そう言つて芙蓉は微笑み、立ち上がつてその本の山の一つを持ち上げようとした。

その時、一人の生徒がやつてきてその本の山を上から抑えた。

「ねえ！なんでアンタ達の借りた本を、芙蓉ちゃんが返さなきゃならないわけ？昨日も、その前も返させてたでしょ。自分で返してきな！」

「あら、樹さん。芙蓉さんが引き受けてくれてるんだから、いいじゃない。ねえ？」

他の二人の生徒が頷く。樹がそれを無視して芙蓉に向かつて言う。

「芙蓉ちゃんも芙蓉ちゃんだよ！嫌なことはちゃんと断らなきゃ、ダメ！」

芙蓉はポカンとして樹を見つめた。

「……もしかして、助けてくれる？……」

「いいわ。今日は私と芙蓉ちゃんがこの本を返してあげる。ついでに、アンタ達が毎日こんなに沢山本を借りまくつて次の日には返すを繰り返して、熱心に勉強してることを、図書委員長と先生にちゃんと伝えておくから。」

それを聞いて三人の生徒は顔を見合わせた。

「…わ、分ったわよ！自分で返すからいいわ。行きましょ！」

三人組は急いで本を持って教室を出て行ったが、廊下で大きな声で喋りだした。

「あーあ、これだからくノ一って嫌よね。下品で！」

それを聞いて、樹はアハハと大きく笑った。そして芙蓉を見て舌を出して言った。

「エへへ。ごめんね。下品で。」

「…樹さんは下品なんかじゃないと思います。とつても素敵ですよ。」

芙蓉はニツコリと笑顔で返した。そうして二人で笑い合った。

「ねえ、敬語なんて使うのやめなよ。私たち同級生なんだしよ。」

「え？ハイ…あ、う、うん…。ありがとう。」

それから芙蓉と樹は毎日話すようになり、樹は芙蓉の初めての友達になった。

樹は名門くノ一家の娘だった。背が高く、髪は金色で青い目の美人だが、どこか男性的な涼しげな顔をしている。体育の時間では同じくくノ一の女子たちと活躍し、黄色い声援を受けるほど女子たちの人気者だった。

「ねえ。芙蓉、今日一緒に帰ろうよ？途中まででもさ。」

「あ、ご、ごめんね…その…帰りは、家の人を迎えに来るから。」

「もちろん。知ってる。で、私も、一緒に帰ってもいい？」

芙蓉が千手仏間の家で暮らし、柱間と扉間の二人の許嫁という事を学校で知らない者は居なかった。勿論それは、入学式に仏間・柱間・扉間が揃って出席して大騒ぎになったことが原因である。樹も千手一族なのだが、芙蓉の存在はごく一部の者にしか知らされていなかった為、入学式で芙蓉のことを始めて知りずつと気になっていたのだ。

・・・あの柱間様と扉間様の許嫁つて、一体どんな子だろう・・・

「どうかな・・・今日は柱間さまが来てくれるはずだから、大丈夫だと思っただけけど・・・ごめん、ちよつと分らない。でも：私も樹ちゃんと一緒に帰りたいな・・・」

「でしょ☒よし！こうなつたら直談判ね!!」

芙蓉はドキドキしながら樹と一緒に校門へ向かう。柱間さまなら許してくれるはず

：

「おお！芙蓉、ご苦労だったな！帰るか。」

毎度のこととはいえ、校門を通る生徒や生徒を迎えに来た関係者たちは柱間を見てざわついている。そんなことはお構いなしに、いつものようにこちらに大きく手を振っている。

「：柱間さま。あの、こちらお友達の、千手樹さんです。」

「千手？おお！くノ一か！この学校で学ぶとは優秀なのだ。ていうか、芙蓉の友達☒そうか、そうかく良かったな！いいに決まつてるぞ！さあ一緒に帰ろうぞ！」

「はじめまして。千手樹です。芙蓉さんにはいつも仲良くして頂いております。ご一緒に帰らせて頂けて、嬉しいです。」

そう言つて樹は柱間のことをじっと見つめた。柱間はその視線の強さに違和感を覚えつつ、あまり気には留めずに三人で歩きだした。

柱間の斜め後ろを、芙蓉と樹が並んで歩く。道行く人が柱間に会釈をしたり、声をかけてきたりする。そのたびに柱間は明るく対応している。芙蓉はその様子を優しい眼差しで見ている。樹はそんな芙蓉の横顔と、柱間の様子を交互に見ていた。

…二人並んだ感じは、なんだか不釣り合いな感じね…

「芙蓉、こんな美人の友達ができて本当に良かったなあ！俺は、芙蓉に友達ができるって信じてたぞ！よろし、これで扉間との賭けには勝ったぞ!!」

…はあ賭け!? 許嫁に友達ができるかを弟と賭けるって、なにそれ!

しかもそれを芙蓉本人と私の前で言うなんて、どれだけ無神経なの…

樹は早足になつて柱間の前に出る。

「お言葉ですが、柱間様。芙蓉さんは学校で人気者ですよ。優しいし美人だし、友達になりたくても「私なんて相手にされない」って近づけない子もいるくらいです。友達ができないほうが不思議です！私、芙蓉さんの友達になれて誇らしいですわ。」

先ほど感じた強い視線が、更に強くなっている。瞳の奥に怒りの炎が見える。

「おお、そうなのか！そういう意味ではなかったのだが…」

…そういう意味じゃなかったら、いったいどういう意味だったのよ!!

どんなに強くても、こんな無神経で、毎日一緒に居るのに芙蓉の価値が分からないよ
うな、馬鹿っぽい男が、芙蓉の許嫁だなんて…私は認めない!!…

樹は更に強い視線を柱間に送った。

「い、樹ちゃん、ありがとう…柱間さまも賭け事なんてやめてくださいね。」

芙蓉は樹を庇うように樹と柱間の間に入る。だが樹は背が高く、更に背の高い柱間とは芙蓉の頭越しにぼつちり目が合っている。

「…ま、何はともあれ、芙蓉にこんなに優しい友達ができて、良かった良かった!」

柱間はワハハと笑って見せ、再び樹の目を見た。

…この娘、俺に嫉妬しているのだな。悪いが、芙蓉は渡せないぞ…

そう心の中で呟き、樹にニヤリとして見せた。

樹には、その不敵な笑みがどんなことを伝えたいのか、すぐに分った。

「い、い、い、めんなさい…私、つい熱くなっちゃって。」

…今日のところは様子見よ…柱間。芙蓉の為に引き下がっていてあげるわ…

「いやいや、俺の許嫁に、良い友達ができて、心から嬉しいぞ!ありがとう。」

そう言って樹の横を通って柱間は再び歩き出した。その背中を樹が思いつきり睨む。

「樹ちゃん…ありがとうね。嬉しかったよ。」

樹の様子に気づかない芙蓉が、樹の手を笑顔で握ってきた。樹はその手を見つめて、柱間には絶対に負けないと誓った。芙蓉はそのまま樹と手を繋いで柱間の後ろを歩きだした。

「いやあく扉間。ライバル現る、だぞ！」

「は？ 兄者にライバル？ マダラ以外に？ いったい誰だ。」

「俺たちに、だ。」

そう言つて柱間は、忍具の手入れをしている扉間の肩をポンポンと叩いた。その表情が嬉しそうな表情だったため、どうやら敵ではなさそうだ。

…なら…ああ、そうか…

「…俺たち、じゃないだろ。」

そう言つて立ち上がる扉間を、柱間は見上げた。

「なあ、お前は芙蓉のこと、好きじゃないのか？」

「好きじゃない…昔から言つてるだろ。金で買つてきた物には興味ないつて。」

「お前はまたそういう言い方をして…なぜもつと芙蓉に優しくできないんだよ。」

「フン。そもそも家に来た時から兄者と結婚することは決まつた様なもんだろが。」

「そんなことないぞ。選ぶのは芙蓉だ。」

「…うるさい。俺は芙蓉のことなんて、好きじゃない。」

「そつか。じゃあ、俺とそのライバルとの一騎打ちだな！」

柱間は、扉間が本当は芙蓉のことが好きだということに、ずっと前から気づいていた。そして扉間が昔から自分の気持ちに素直になれないことを気にかけていた。芙蓉のことは愛しているが、弟とは正々堂々、恋愛の勝負をしたかった。

扉間は黙って忍具を柵に収納し始めた。その背中に向かって柱間が言う。

「俺が二十歳でお前が十九か…もう立派な大人ぞ。だが大人になると、なかなか素直でいられなくなる。後悔、しないようにな。」

「……………」

「あ、そうそう。芙蓉に友達ができたぞ！賭けは俺の勝ちだな！今日、芙蓉とその子と三人で途中まで帰ってきた。良い子だぞ。お前が迎えに行く日も一緒に帰ってやれ。」

「……………ああ。」

柱間は、扉間が樹に刺激されて少しは素直になってくれることを期待した。

「ねえ。今日も柱間様がお迎えに来るの？」

「ううん。今日は扉間さまだよ…」

「そうなんだ！今日、一緒に帰ってもいい？」

「え？扉間さまと?!…う、うん…。お願いしてみる…。」

樹は先日柱間と一緒に帰ってから、それ以降何度か柱間の迎えの時は一緒に帰るようになった。基本的に、大半が楽しい会話なのだが、たまに樹は、やけに柱間に対抗したり反抗的な言動をとるので芙蓉はその度に冷や冷やした。

あんな態度を扉間にもとつたら、樹はどうなってしまうだろうか。

芙蓉はやはり一緒に帰るのは無理だと言おうとしたが、理由が見つからない。

扉間は怖い人なので無理：そんなことは言えない。そうこうしているうちに、気づけは三人一緒に校門の前に立っていた。

「あ、あの…扉間さま。こちら、お友達の…」

「知っている。千手樹だな。帰るぞ。」

「え？」

芙蓉と樹は顔を見合わせて驚き、先に歩き出していた扉間を急いで追いかける。

「あの。はじめまして。ご存知頂いているなんて、光栄です。」

「千手一族のくノ一の数は少ないからな。なかなか才能があるそうじゃないか。」

「いいえ。とんでもない：私なんてまだまだです。」

「樹ちゃん、やつぱり忍としても凄いなだね！カッコいい。」

芙蓉が嬉しそうに言う樹言への葉遣いを聞いて、扉間は驚いた。

・・・芙蓉が椿以外にタメ口使ってるの初めて聞いた・・・

「あ、ありがと。でもホント、まだまだ大したことないんだよ。扉間様には遠く及ばないし。」

「そう簡単に及ばれても困る。」

それを聞いて、フフツ、あはははと芙蓉と樹が顔を見合わせて楽しそうに笑った。

・・・ウケるつもりで言ったんじゃない・・・

「あの、扉間様。樹ちゃんは学校でもとても優秀なんですよ。勉強も運動も成績は素晴らしいし、皆からもとっても人気があるんです。」

「そうか。それに胡坐をかかず精進しろよ。」

「はい。」

・・・なんか、噂通りのクールっぷりね。でも私のことも知ってるし、冗談も言えるし、柱間よりはマシかもしれない。でもルックスがワイルド過ぎなんだよね。

芙蓉との見た目全く釣り合っていない。これじゃ不良とお嬢様の組合せじゃん!・・・

「芙蓉さんだつて凄いですよ。文武両道ですし。特に、あんなに剣術が上手いなんてそこいらの忍なら、簡単にやつつけちゃいそうですよ。」

「芙蓉は七歳の時から仏間直伝で剣術を習っているからな。まあ、当然だろう。」

・・・淡白な反応だなあ・・・

「そ、それに何より学校一の美人だし!こんな人が許嫁の扉間様が羨ましいですわ!」

「芙蓉、そういえばお前、真剣で剣術は習ったのか？」

…む、無視して、照れているのかもしれない…

そう思つて少し前を歩く扉間の顔をうかがおうとするが、表情まで分からない。

「いいえ。仏間さまから真剣の稽古は必要ないと言われましたので。」

「当然だな。忍でもないお前に真剣は危険すぎる。」

「扉間様、芙蓉さんを気遣つていらつしやるんですね。お優しいわ！」

「お前だつて忍ではない女が真剣で剣術をしたら止めるだろう。それが友なら尚更だ。」

「あ、はい…：そうです、よね…」

そんな会話をしているうちに、樹は芙蓉と別れる場所に着いてしまった。樹はなんだかモヤモヤしながら思つた。

…扉間様つて芙蓉の事いっただう思っているんだろう？…

樹と別れ、芙蓉は扉間と二人で歩きだした。

扉間と一緒に居るとつい緊張してしまう。疎まれていると解つてはいるが、できれば扉間とも仲良くしたい。何か話さない…：何か…：何か…

「あ、あの。ダメなら結構なのですが、帰ったら剣術の稽古を付けて頂けませんか？」

芙蓉から思いもよらぬ事を突然言われ、扉間は思わず立ち止まり、芙蓉の方を見た。

芙蓉はいつものように少し困つたような笑顔でこちらを見ている。

「俺で、いいのか?…兄者に付けてもらえばいいだろ。」

「扉間さまにお願いしたいのです。ダメですか?」

『扉間さまにお願いしたい』…扉間はその言葉がとても嬉しく、自分の口角が上がるのを見せまいと俯いて、先に歩き出した。

「俺は手加減しないからな。」

「はい!」

家に着くと、二人は術着に着替え、木刀を持って庭に出た。少し風が出てきた。

「お願いします。」

「来い。」

芙蓉は真剣な表情で自分の剣先と扉間の剣先、そして扉間の顔を見る。

…こいつ、こんな顔もするのか…

思わず目の前の芙蓉の顔に、家に来たばかりの頃の幼い芙蓉の顔が重なる。来た時より、ずっと、美しくなっている。

芙蓉が無駄な音も立てずに木刀を振り降ろした。

カン!カン!キシイ…

打ち合いが始まり、乾いた木の音が鳴り響く。

芙蓉が立ちまわった瞬間、後ろに束ねた亜麻色の長い髪が一緒に揺れる。白いうなじ

が見えた。視線が行く。それをごまかすように、扉間は芙蓉に叫ぶ。

「そんなに逃げ回っているだけでは稽古にもならんし、俺には勝てんぞ。」

「……。」

扉間が芙蓉の頭上に木刀を振り下ろそうとした瞬間、芙蓉はすつと腰を落とし、扉間の腹めがけて木刀を突きだした。

剣先が僅かに扉間の術着をかすめそうになった所で、扉間の木刀が芙蓉の木刀に追いつく。

カアアアン！……ドシャツ！

扉間は芙蓉を木刀もろとも弾き飛ばし、芙蓉はかなりの距離を飛ばされて地面に倒れた。

ハア：ハア：ハア：ハア：

扉間の息が上がっている。体を動かしたからではない。

……俺は、芙蓉が好きだ。

扉間はこれまで頑なに閉じていた心の蓋を、芙蓉と一緒に無理やり弾き飛ばしてしまった。誤魔化すことのできなくなった気持ちをどうしてよいか分らず、ひどく戸惑っていた。

「……。」

芙蓉は静かなまま、動かない。

扉間は我に返つてすぐさま芙蓉に駆け寄り抱き起した。

「大丈夫か！……おい！」

芙蓉はうつすら目を開けているが返事をしない。

「おい……おい……しつかりしろ!!」

扉間はこれまでになく動揺していた。目の前がぼんやりと滲んでくる。

「……あ、扉間さま……。大丈夫です……。ごめんなさい。」

芙蓉は徐々に目を大きく見開き瞬きをした。

それを見ると、扉間は思わず芙蓉を抱きしめた。

「と、扉間さま……？」

「ほ、本気になりすぎた。すまん。……お前、強いな。」

「だって……手加減なしという……お約束でしょ？」

扉間は芙蓉を抱きしめる腕を緩めて、芙蓉の顔を再び見た。

「怪我！怪我はしてないのか！」

芙蓉は初めて動揺している扉間の様子を初めて見て驚いたが、急いで怪我は無いと答え、ニコツと微笑んで見せた。

ポタツ……。

芙蓉の頬に温かいものが落ちた。

扉間の涙だった。

「…扉間さま、本当に大丈夫です…ありがとうございます。そんなに、心配してくれて…」

そう言つて、扉間の目に残った涙をそつと指で拭つた。

扉間はその瞬間、自分が泣いていることに気がついた。慌てて袖でゴシゴシと顔を拭く。

「目に、ゴミが入つた、だけだ。」

「ふふ。そうでしたか…良かった。」

「良くない。」

「あ、ごめんなさい…良くないですね。いま目薬を…」

「だ、大丈夫だ！動くな！」

夕方の涼しいそよ風が、庭の芙蓉の木の蕾をそつと揺らしていた。



今年も芙蓉の木が美しく花を咲かせた。白く大きな八重咲の花びらは中央に向かつて薄い桃色になっており、夏の庭を見事に華やかにしてくれる。

木の背丈も大きくなり、二メートル以上になっていた。

先日、芙蓉は十六歳の誕生日を迎えた。

芙蓉は、その木の手が届きそうで届かない所についているまだ蕾の花を摘もうと、一生懸命に花鋏を持って手を伸ばしている。

ヒョイツ。

後ろから軽々と芙蓉を持ち上げたのは、柱間だった。

「ほれ。これで届くぞ。」

芙蓉は持ち上げられたまま、恥ずかしそうに柱間の方を振り返った。

「あ、ありがとうございます…助かります。」

急いで蕾の枝を一本切り取った。それを確認すると、柱間はゆっくりと地面に降ろした。

「ありがとうございます…重かったですよね。」

芙蓉が柱間に向かい合い、上目遣いで恥ずかしそうに柱間を見上げた。

「むしろ軽すぎてビックリしたぞ…ん？なんで蕾の枝なんか欲しかったんだ？こんなに沢山咲いてるのがあるのに。」

「この花は、開花したら一日、二日でしぼんでしまうんです。だからお部屋に飾るにはまだ蕾のほうが良いと思って。」

そう言って、芙蓉は愛おしそうに、そつと蕾を撫でた。

伏目がちになった芙蓉の目は長いまつ毛が一層長く見え、艶々と光っている。鎖骨が見える薄着の肌が、夏の朝の光に照らされ、色白さが際立っている。唇は紅をさしたように赤く、柔らかそうなことが伝わってくる。

「でも、実はまだどこに飾ろうか、決めていないんです。良かつたら柱……」
そう言いかけて柱間を見上げた瞬間、柱間の顔が近づいてきた。芙蓉は思わず固まる。

「……芙蓉。愛しているぞ。」

そのまま口づけをした。

芙蓉は突然のことですらどうしていいか分からず、柱間の後ろの風景を見ていた。

そして目をつぶらなければならない事を思い出し、きゅつと目を閉じた。

扉間は自分の目を疑った。

柱間と芙蓉の光景に。

昔、柱間と芙蓉が手を握り合っていた同じ場所で、いま、二人が口づけをしている。

胸が苦しくなる感覚と同時に、頭はとてもしつこい冷静だった。

許せない。

芙蓉が。

お前さえ、この家に来なければ、こんな苦しい想いをし続ける必要なんて、なかった。

扉間は背を向け、二人に気づかれぬようその場を離れた。

◆ 芙蓉が女学校に入学してから一年が過ぎた。短いようでもあり、もう何年も前からここに居る気もする。

「どうしたの？最近浮かない顔すること、多いね。」

昼休みの教室の机に座ってぼーつと外を眺める芙蓉の顔を、樹が覗き込んだ。

「私ね…最近…お母さまのことが、顔が、もう思い出せないの…」

芙蓉の目には涙が溢れる。樹は焦ってハンカチを取り出し、芙蓉の涙をそっと拭いた。

「そうなんだね…それは、辛いね。仏間様は芙蓉のお母様のこと、知らないのかな？」

「話して、くれないの…。私ね、七歳の時に引き取られてくる前は、伯母様の所に居ただけど、でももうそこがどこだったのか、伯母様の顔すら思いだせない。…忘れないように、毎日思い出すようにしていたはずなのに…」

樹は芙蓉の境遇を思うと、それは仕方がない事だと思った。

幼い子供が女中として働かされ、その上勉強や稽古までさせられて、そんな忙しい毎日で遠い記憶を忘れてしまうのは無理もない。

「でも全部忘れてはないでしょ？何か思い出せない？なんでもいいから。」

「確か伯母様も私と同じ橘の姓のはず…父の姉のはずだから。そこは想像なんだけど。あと、伯母様の所から家へは歩いて来たんだけど、今思うとそんなに遠い距離じゃなかった気がするの。」

「どんな家だったのかも、思い出ない？」

「外観は覚えてない。でもとにかく部屋が沢山ある家だったような気がする…」

「部屋が多いってことは、かなり大きな家のはずだよ。そしてこの千手領地で橘の姓で、かつ大きな家に住んでる人なんてそんなに多く無いだろうし、探したら見つかるかも！」

「でも、私は勝手に家以外の場所に行つてはいけないし…それに仏間さまに内緒で伯母様に会うなんて…そんなこと出来ないよ。」

「じゃあ芙蓉は、このままお母様のこと忘れちゃつてもいいの？」

「それは……」

もう殆ど母の顔も声も思い出せないが、このまま忘れ去つてしまいたくは無かった。

だが、自分は千手に貰われてきた身であり、勝手に自分の過去を探ることには罪悪感がある。

「大丈夫！私も協力するから！まずは伯母様の家を探してみよう。行くかどうかはそれから決めればいいじゃん。」

それから樹は芙蓉の代わりにこの集落にある橘姓の、大きな家を探してくれた。忍で
ある樹には、それくらいの情報収集はたやすいことだった。

それらしい家は数軒見つかった。どこも商業と交易を行う一家ばかりだった。その
中の一つで集落の一番端にあるその屋敷にはそれらしい年頃の女主人がおり、確かに芙
蓉の住む今の場所まで歩けない距離ではない。

次の日、樹は芙蓉にそのことを報告した。

「芙蓉！それらしい家、見つけたよ！」

「ほ、ほんと？！」

「昔から他国と交易や商売をしている一家みたいで、十年弱前にその家で小さい女の子
を良く見かけていたっていう話も聞いたよ。それってたぶん芙蓉のことじゃないか
な。」

芙蓉は徐々に伯母の家の様子を思い出ししてきた。確かに色んな人たちが絶えず出入
りする家で、自分もよくお茶出しをさせられていた気がする……

「樹ちゃん、ありがとう。でもやっぱり黙って勝手に行くことは出来ないよ。仏間さま
に正直に話してみても、許しを得られたら行ってみる。」

「で、でもさ……たぶん、仏間様は許してくれないと思うよ。今まで芙蓉のお母様のことや
お父様のこと、全く教えてくれようとしなかったんでしょ？……いいじゃん！二人で黙っ

て行こう。そのほうがいい。」

「で、でもー!」

「もし芙蓉が仏間様にすつごく怒られて家を追い出されたら、私が一生芙蓉のこと面倒見てあげる!…芙蓉は、あの家の許嫁でいるより、私と一緒に暮らした方が幸せになれると思う…うん。絶対に幸せにするから!」

樹の真剣な眼差しの訴えには友達以上の感情がこもっていることに、芙蓉は気づけな
い。

・・・樹ちゃんが私のことを真剣に考えてここまで言ってくれている。私も勇気を出
さなきゃ・・・

「樹ちゃん…ありがとう。私のことそんなに考えてくれて…嬉しいよ。…私、たとえ叱
られても追い出されることになっても、やっぱり自分の過去を捨てたくない。」

芙蓉の目に強い意志が宿っていた。

もし本当に家を追い出されることになれば正直辛いし、困る。でも、今まで大人の言
うことにただ黙って従ってきて、これからもそれに従って生きていくだけの人生はもう
嫌だった。

芙蓉はこの一年間、樹やその他の友と過ごし、色んな価値観に触れ、変わった。

生徒たちは皆、自分と同じく自由は無けれど、それなりに一人一人が夢や信念を

もっている。何より、親友の樹の、強い信念と意思をもつ生き方に、自分もそうありたいと思うようになっていた。

次の日。この日の迎えは柱間だった。

お人好しの柱間になら、短い時間でも嘘が通じる可能性があるかと二人は踏んでいた。

その日最後の授業中、芙蓉は腹痛を理由に保健室へ行きたいと訴えた。樹はそれに付き添うと一緒に教室を出て保健室に向かうフリをし、校舎の裏の物陰で制服を脱ぎ、動きやすく目立たない普段着に着替えた。樹は芙蓉をおぶって、チャクラを使って走り出す。

教室を出て着替えてから四十分ほどで、その屋敷の前に着いた。

「いっただよ……」

「……あ、……見覚えがある……」

二人が暫く屋敷を見上げていると、仏間よりも少し年上に見える派手な格好をした女性が出てきた。芙蓉は思い出した。伯母だ。

「すみません……こんにちは……私……橘芙蓉です。覚えていらつしやいますか？」

女は目を丸くして驚き、芙蓉の姿を上から下まで見た。

「あんた……芙蓉かい？……なんでここに居るのさ！もうあんたと私は赤の他人なんだ。二度と来ないでおくれ！さっさと帰りな！」

芙蓉は女の劍幕に怯みそうになったが、なんとか言葉を続けた。

「すみません！母と父について教えてくれませんか？それだけ聞いたら帰ります。もう二度と来ませんから。どうかお願いします！」

「仏間様とあなたには二度と会わない、何も教えないっていう契約になってんだよ！」
樹が一步前に出て女に言う。

「あなたの事情も解ります。でも、この子にも知る権利があるんじゃないですか？」

女が一瞬怒りの顔を緩めて、芙蓉を見た。

「…お前たち、いい加減にしろ！」

その声に芙蓉と樹は驚いて振り返った。

そこには扉間が仁王立ちになって、こちらを睨んでいた。

樹には扉間のチャクラが怒りで荒だっている様子が分り、恐怖で息が止まりそうになる。

「あら。扉間様…さっさとこの小娘どもを連れて帰って下さいな。」

そう言つて女は早足で去つて行つてしまった。

「芙蓉…お前、自分が何をしているのか解っているのか。」

「……。」

「扉間様！私が悪いんです。私が勝手に芙蓉さんの伯母様の家を見つけて、連れてきた

んです。芙蓉さんは何も悪くありません！」

樹が芙蓉の前に出て、両手を開き守るようにして言った。

「確かに芙蓉ひとりでこんなことは出来ないだろうから、お前も共犯だろう。だが、着いて来た芙蓉、お前に責任がある。…来い！」

扉間は一瞬で芙蓉の前に立ち、抱きかかえたとと思った瞬間、二人はその場から姿を消した。

「ふ、芙蓉…ごめんね…私のせいで…」

樹は自分の軽率な行動をひどく後悔し、地面にしゃがみこんで泣いた。

忍術なのだろう。気が付くと、家の玄関の前に居た。

扉間は芙蓉を抱えたまましゃがみ、敢えて地べたに乱暴に降ろした。

キヤツと小さな悲鳴をあげて芙蓉が尻から落ちる。

「お前には心底幻滅させられる…千手一族を裏切るのか。」

「う、裏切るだなんて…ただ、私は自分の母と父の事を伯母に訊きたかっただけで…」

「この家の決まりを破ることは、我ら一族を裏切ることと同じだ。」

玄関の扉が開き、仏間が中から出てきた。

「学校からお前が居なくなつたと連絡があつてな。大切な制服を脱ぎ捨てて…どこへ行っていたのだ。」

仏間は芙蓉に制服を差し出し、静かに、しかし怒りのこもった声で芙蓉の目を見て問う。

「・・・伯母の所です・・・」

「あれほど、ここに来る前の事は忘れろと言ったはずだ！」

仏間が芙蓉の上着を掴み、無理やり立たせる。

「忘れることなど、できません。私は母のこと、父のことを知りたいのです。」

芙蓉は恐れることなく気丈に、まっすぐ仏間の目を見て言った。

「知る必要はない。」

「いいえ。あります。自分の出生、両親のことを知ることは、私自身が何者なのかを知り、これからどう生きるかを考えることになるからです。」

仏間は芙蓉の上着の両襟を更に強く掴んで芙蓉を睨みつける。上着がズボンから飛び出し、下着まで捲れ、白い腹が露になる。

それでも芙蓉は怯むことなく仏間を睨み返した。

「…父上、落ち着いて。やり過ぎだ。」

さつきまで同じく怒っていた扉間が見兼ねて止めに入る。

仏間は掴んでいた襟から乱暴に手を離れた。芙蓉の上着が全開になり釦が取れて地面に転がる。胸元が広く開いて下着が見え、肌はわずかに赤くなっている。

芙蓉は乱れた髪をかき上げ、肩で息をしながら、尚も怒りの表情で仏間を睨みつけている。

・・・こんな芙蓉は初めて見る・・・

仏間と扉間は表情には出さないが、内心でとても驚いていた。

「お前の罰は考える。それまで部屋に居なさい。」

その後、芙蓉は一週間の休学を命じられた。

勿論、外出も禁止。一方、樹にはお咎めは無かった。

「あの時、俺が家に居てやれば、こんなことにはならなかったのにな……」

柱間はあの日、急用で芙蓉の迎えを扉間に代わり、出かけていた。

芙蓉の部屋の方を見たが部屋からは物音一つ、聞こえない。

(4) これからどう生きるかを考えるということ～仏間と水蓮

芙蓉が初めて自分との約束を破って伯母に会いに行き、自分に対してひどく反抗したあの日以来、仏間は芙蓉の言葉の言葉の中で反芻していた。

『これからどう生きるかを考えること』

目を閉じると、また遠い日の思い出が蘇ってきた。

「忍は、私たちのことを商品としてしか見ていないからよ。」

仏間が水蓮に忍を嫌う理由をたずねて、返ってきた答えだった。

「人身売買、政略結婚、スパイ、子供を産む道具、そして売春ね。他にもあるけど。」

十二歳の無垢で可愛らしい顔をした少女には似つかわしくない言葉が並んだ。

「私たち、橘一族のこと、知ってる？」

「い、いや……ごめん。知らない。」

「だよ。知ってたら、仲良くなんてしてくれなかったと思うし。」

水蓮はニコニコと笑顔で話す。

「ねえ、私って、可愛い？」

「は？なんだよ、いきなり…わ、わかんねーよ。」

「私の一族はね、ほとんどが美男美女なの。そういうふうには、進化してきたからよ。」

「進化？」

「そう。私たちはね、人間が美ものに惹かれるという一番弱い本能を誘惑し、利用するために進化してきた、『人形』なのよ。」

「何それ…」

「そして、その人形を商品として買い、売りさばくのが…忍。」

水蓮は飛んで行ってしまった木刀を拾いに行つた。拾い上げると、笑顔で振り返る。

「私もいつか、誰かに買われるか、どこかへ売られちゃうのよ。」

仏間は何も言えなかつた。やつと仏間にも水蓮の言っている意味が、解つた。

そして、はつと気が付いてこう言つた。

「確かに、悪い忍も居るかもしれねー。でも、ほとんどの忍が家族と仲間と、一般市民を守るために戦つてるんだ。俺だつてそうだ。」

「そう、守るため。守るためなら多少の犠牲は当然だつて思つてる…」

「その犠牲が、お前たちだつていいのかよ。」

「もうやめようよ。私は忍が嫌い。でも仏間の事は好き。ね、仲良くしよ？」

そう言つて再び木刀を構えて、来—いと叫んだ。仏間も構え直し、水蓮に向かつて

行った。

それからの二人は、仏間が任務や同胞との訓練以外の時は、頻繁に会うようになっていった。

剣術をしたり、かけっこをしたり、時には波々ままごとにもつき合わされたりしながら、二人はどんどん仲良くなった。会えない日が続くこともあった。一週間、二週間：一カ月、長い時には二カ月：しかし二人は再会した時には会えなかつた日々を埋めるかのように、二人だけの時間に夢中になった。

仏間は水蓮と一緒に居ると心が休まり、楽しい気持になり、美しいその姿に胸がときめく。

自分のことを人形だと言つた水蓮を、仏間は自分が必ず守ると心に誓っていた。

仏間が十四歳になった日の事だった。

父親に許嫁を決めると言われた。すぐに結婚するわけではないが許嫁が決まればもう、将来、水蓮と一緒に居る未来は無くなる。

「嫌だよ。許嫁なんか：俺は普通に結婚するし。」

「我儘を言うな。許嫁が決まっても、結婚する十八までは自由がある。」

「じゃ、じゃあさ、自分が好きな相手と許嫁になるのは、いいのか？」

「何だお前：もうそんな相手が居るのか。まあお前は優秀だし大人にも負けぬ実力があ

るから文句は言わん……。で、どういう家の娘だ？」

「橘一族の子……俺と同じ十四歳。まあまだ、只の友達だけど……」

「橘だと?!……そうか。金がかかりそうだが、まあ良いだろう。申し込んでみてやる。」

仏間は父に水蓮の名前を教え、父は水蓮の両親を訪ねた。

「まあ、うちの子と鏡間様のご子息が顔見知りだったなんて！失礼はなかったでしょうか。」

「いやいや、息子は水蓮さんのことをとても気に入っているようで、水蓮さんでなければ婚約しないと断っておるのですよ。」

「千手一族の長のご子息と娘が婚約となればこちらも光栄です。見合いが決まっても娘には見合い当日まで知らせない決まりですので、きつと娘も見合い相手が仏間様だと分かったら大喜びしますよ！」

「ハハハ。それなら良いのだが。それで、十四歳の女子だと金額はどのくらい……」

こうして仏間と水蓮は見合いすることになった。仏間はよっしゃ！と喜んだ。だが、残念なことに、水蓮に見合い相手はお前だ、と伝える事は禁じられた。

水蓮も俺のことは好き……だと思っし、たぶん大丈夫だろう。

「水蓮。お前の見合いが決まった。一週間後だ。しつかり支度しておきなさい。」

「えっ……」

「心配要らないわよ。お相手はこの領地内の忍で家も近いし、遠くに行く必要はないの。何より、あなたと同じ年で将来有望な方よ！良かったわね。」

「……………」

嬉しそうな両親を見ても、水蓮は嬉しいはずが無い。

見合い。

それはイコール、高い金で買われていくということだ。

橘一族は代々、子供を高い金と引換に嫁がせ、政略結婚でコネクションを作りだし商売をしてきた。忍との結婚では強い加護を約束してもらい、大名や国の役人との結婚では政（まつりごと）にも関与し、商売を有利に取り計らって貰っていた。そうして一族を存続してきた歴史があった。

橘一族は女兒の出生率が圧倒的に多く、そしてほぼ例外なく、美男美女が産まれてくる。生まれ持った美貌と、英才教育で培う高い知性と教養。それを武器にしてきた。他の一族と結婚してもほぼその遺伝は受け継がれるため、忍をはじめ、橘一族の事を知る一部の他国の大名などからも橘一族の娘を買いたい、利用したい、妻にしたいという需要は多かった。

そして、千手一族の領地内では橘一族を利用して国や他国、他の一族と取引を行う慣習までが出来上がっていた。

水蓮にとって見合いの話は、即ち、命令である。子供に拒否する権利は無いのだ。待ち合せはいつもの修行場だった。

今日は水蓮を抱っこして木登りをしてやる約束だ。

仏間は、今日は自分が水蓮に何か面白い冗談を言つて笑わせてやろうと思いを巡らせていると、後ろからいつもの足音が聞こえてきた。

「遅せーよ！」

遅刻してきた水蓮に文句を言うが、仏間の声はついつい弾んでしまう。

「木刀をね、木から切りだしていたら遅くなっちゃつて。ごめんね。」

「定食屋で魚釣りに行つてたら注文が遅くなりました。的なノリで言うんじゃねーよ。もうホント、お前つて面白いよなあ……。つてオイ。今日は木登りするんじやかつたのか？」

「うるさい。今日は最初に剣術の練習をするぞ！よいな！」

「あーハイハイ。仕方ねーな。」

仏間は木の隙間に隠しておいた木刀を取り出し、渋々構えた。

水蓮はいつになく真剣な表情だったが、仏間はその変化には気づけなかった。

カン、カン、カン！

水蓮が仏間の隙が出来るを待ちながら、リズムカルに木刀をぶつけてくる。

仏間は正直、真剣に勝負をする気は無かった。真剣に向かつてくる芙蓉の様子を楽しむように見ていた。どうせ今の水蓮では、俺には勝てない。

・・・それにもうすぐ、水蓮は、俺のものになるんだ・・・
ヤアアーツ!!!

水蓮は仏間に隙が出来た瞬間を見逃さなかった。

目を見開き、渾身の力で仏間の左脇腹を打ちに行く。

「痛——っ・・・」

仏間は脇腹を抑え地に膝をついた。

痛みに堪えながら、歪んだ顔で水蓮を見た。すると、仏間から初めて一本取ったにも拘らず、その顔はとても悲しそうな表情だった。

今にも涙がこぼれそうだった。

「仏間！なんで本気で来ないのよ！こんなんで勝つても全然嬉しくないんだからね！」

「…い、いや本気だったし…お前が…強くなったんだろ?…」

「仏間の馬鹿っ！」

「・・・?」

水蓮は仏間に背を向けて、鼻をすすった。泣いているようだった。

「おい…どうした?何かあったのか?…」

「可愛い、可愛い、お人形を…買ってくれるのは誰かなあ〜って!!」

仏間は水蓮が、未だに自分が誰かに買われていくことを不安でいるのだと思った。

水蓮の後ろに歩み寄り、おもむろに抱きあげた。

「誰にもお前を、買わせたりしねーよ!」

仏間は水蓮を抱きかかえ、猛スピードで垂直木登りをした。水蓮は目をつぶり、仏間の首に回した腕をぎゅつと強める。甘い香りが微かに仏間の鼻をくすぐる。

「ほら!今日は夕焼け綺麗に見えてるぞ。」

「…私が遅刻してきてあげたお陰でしょ…」

「相変わらず可愛げがねーな。もう…」

水蓮は夕陽に手をかざし、その隙間から仏間の顔を見た。

「私…そんなに可愛く無い?」

水蓮はかざしていた手を除け、眩しそうにも悲しそうにも見える表情で、仏間をじつと見つめた。

水蓮の顔は夕陽に照らされて肌も瞳も長いまつ毛も輝いている。後頭部で高く結ばれた黒く長い髪は、風に吹かれて僅かに靡いている。

「…そんなことない…可愛い。」

その言葉を聞くと、水蓮は仏間の頭を抱き寄せ、仏間の唇に口づけをした。

「…やつと可愛いって言ってくれた…何年待たせるのよ。馬鹿…」

「お、男がそんなに軽く、女に可愛いとか言うほうがおかしいだろ！」

仏間は高鳴る鼓動で心臓が口から飛び出しそうになりながら、正面を向いた。

もうすぐ、山の稜線に太陽が沈む。

そしてまた、美しかった一日が過ぎてゆく。

冷める雨の音が、水蓮の心をとてつもなく冷たく、悲しくさせる。

美しく着飾り薄い化粧をした水蓮は、前後を父と母に挟まれて廊下を歩いていた。

雨に濡れた庭の芍薬がこうべを垂れている。まるで今の自分の姿を見ているようだった。

部屋に入り、見合い相手が来るのを待つ。両親は終始、嬉しそうな顔で会話している。

見合い相手はどんな忍の男子なのか…そんなことは水蓮にはどうでも良かった。

「お待たせしたな。」

父と同じ年くらいの大柄の男性が、頭をぶつけないよう少し屈んで部屋に入ってきた。

その後に、少し遅れて見合い相手の少年が入って来る。

水蓮はどうでも良いと頭で思っているながらも、つい恐る恐る、その少年の方を見た。

「ぶ、仏間…な、なんで…！」

「ハハハ。驚いたか。仏間様とお前、友達なんだろう？ 仏間様のほうから、許嫁にするなら絶対お前が良いと言つて下さったんだぞ。良かったなあ！」

父が明るく母に、なあと笑顔で同意を誘い、母も笑顔で何度も頷く。

「水蓮ごめん…驚かせて。」

「友達とはいえ、見合い相手が仏間だったとは、さぞ驚いただろう。すまなかつたね。私は父の千手鏡間だ。…それにしても、まったく仏間には勿体ない美人だな。」

水蓮の心臓はバクバクと鳴る。だが、自分以外の全員が笑顔だ。

「ということ、私たち大人が居る必要はないだろう。さ、二人でゆっくり話なさい。」

「水蓮、千手一族の長・鏡間様のご子息に見初められていたなんて、やるじゃない！ 仏間様、よろしくお願いします。ウフフフ。」

大人たちは楽しそうに談笑しながら、部屋を出ていった。

「……。」

「いや、だから悪かつたつて！ 俺だつてお前に見合いのことは言うなつて言われてたんだから、仕方ないだろ？ 機嫌直せよ。ほら、ここの和菓子うまいんだぜ。食えよ。」

「あんた、私と見合いをするつていうことがどういうことか…解つていて私と見合いをしているの？！」

「当たり前だろ。お前と、将来、け、結婚しようつて話だ…。」

仏間は足を組んで座っていたが、急に正座に座り直し、まつすぐ水蓮を見据える。

「ちゃんと言う。水蓮。俺の許嫁…いや、俺と結婚してくれ！」

そう言つて仏間は深く頭を下げた。

「ごめん。出来ない。」

「……！！」

仏間は急いで顔を上げ芙蓉の顔を見た。想定外の水蓮の返答に動揺している。

「あんたは人形の私を、親に買つて貰うのね。」

「は？ 違う！ 俺が、自分で許嫁は水蓮が良いつて言つたんだ。確かに見合いは父の指示ですることにはなつていたけど、俺は、水蓮以外と結婚する気はないんだ！」

「…答えになつてないよ。こんなに長く一緒に居て、私の事、私の一族の事、理解してくれていなかったんだね。」

「いや、待てよ。俺は…」

仏間はハッと気が付いた。自分は確かに、親の指示で許嫁を決めることになり、たま水蓮と見合いができただけだ。

しかし、水蓮は一族を高い金で売る、橘一族の娘だ。

…水蓮と見合いで結婚するということは、結局、俺は、水蓮を…

「すまない。俺が軽率だった…。でも！ たとえこんな形だとしても、結果が良ければそ

れでいいじゃないか。俺たちが結婚すること、その結果が一番大切だろ？」

「自惚れ無いで!!!」

「…お前も俺の事、好きでいてくれると思ってたけど、違うのか…」

「……………」

ザ——…二人の沈黙に、春の終わりの冷たい雨の音だけが答える。

「…すまない。俺の勝手な思い込みだったみたいだな。やめよう、こんな見合い。」

…‥‥どうして私に直接求婚してくれなかったの? …‥‥

水蓮はそう喉まで出かけたが、必死に抑える。

仏間の事情はよく解る。忍の男子は十四歳になると許嫁を見つける慣習があり、まして千手一族の長の息子の仏間なら、それを拒むのは無理だっただろう。

金で買われて結婚することをずっと嫌悪してきたが、仏間の言う通り、仏間と結婚できるといふ結果だけを受け入れるべきなのかもしれない。むしろ相手が仏間だったことを幸運な奇跡だと歓迎すべきだろう。それにどちらにせよ、自分に断る権利は無い。「そんな」とない…私も、仏間の事、大好きだよ。…見合いなんて絶対にしたくないって思ってたからついムキになっちゃった…。仏間の言う通りだよね! 私たちが結婚できるなら、それでいいよね!」

そう言う水蓮は、歪んだ笑顔で俯いた。

「いや、俺が悪い。許嫁を決める時、俺が、自分で水蓮に直接申し込むべきだった。嫌な想いさせて本当にごめん。でも俺、絶対に水蓮のこと幸せにするから!」

仏間は心を込めて水蓮に謝った。

本来なら見合いはやめて、改めて求婚すべきなのだが、見合いは家と家の決めごとである。金銭も絡んでいる。今さら取り消せばこの先二人の結婚に障害が出る。

仏間は不本意だったが、このまま見合いで水蓮と結婚するのが最良だと判断した。

トントントン。襖を叩く音がし、まもなく大人たちが入ってきた。

「どうした?二人とも顔色が悪いが。」

「大丈夫です父上。無事に、良い返事を頂きました。」

「おおそうか。良かったな。水蓮、これからは許嫁として仏間を支えてやってくれ。」

「は、はい……こちらこそ、不束者ですがよろしくお願いいたします。」

水蓮は鏡間に向かって深く頭を下げた。それを見て両親は心底安心し、顔を見合わせた。

「これで新しい事業の雲の国との交易を実現できるな。」

「あちらの商人達にはうちは一族を雇っている者も多いみたいだし、こちらは千手一族に守って貰えるなら安心ね。」

「たとえ仏間が次の長にならなくとも、彼は一族のかなりの実力者として認められてい

るし、鏡間、仏間どちらが戦死したとしても、結婚するメリツトは大きい。」

「ねえ、そろそろ水蓮にあのことを教えたほうがいいかしら？」

「そうだな…まあまだ十四だから早い気もするが、若造のほうが効果はある。仏間は芙蓉に惚れているようだから手が早いかもしれないし、早く教えておいた方が良いな。」

水蓮が寝る前に妹たちと自室で遊んでいると、母から別室に来るように言われた。

小さな灯りが揺れる部屋に入ると母は芙蓉と膝を突き合せて座り、手を握って話し始めた。

「男女の営みのことはもう教えているから知っているわね。」

「う、うん…」

「これから最も大切なことを教えるから、よく聞きなさい。我が家の、橘一族のこれからに關わる大切な事よ。」

芙蓉はごくくりと唾を飲み込む。男女の営みに、他になにどんな重要な意味があるというのか。恥ずかしい気持でドキドキした。

「男女が初めて交わる時。その時だけ、使える力があるのよ。」

「…?」

「私たちは忍じゃないけど、それを『傾国の術』って呼んでいるわ。傾国の美女は知っているわよね。そう、私たち女が、男を操れる術よ…」

そう言つて母はほくそ笑む。

「どうやって使う術なの？」

「ふふふ。初めて交わつた瞬間、これから実行したいことをイメージして、それを伝えるつもりで男の目をみつめるの。その時相手は決してあなたから目を離せないわ。それで口づけをしてやりなさい。そこで性行為を止めてはダメよ。男が果てるまで最後までするの。」

「……」

生々しい表現に、水蓮は赤面して俯いた。

「一種の幻術みたいなものね。性交中のあなたの瞳孔からは相手の頭の中の脳内物質を刺激して中毒性を発生させる信号が出る。洗脳するのよ。あなた自身が強く相手をもどうしたいかを脳内で考えることで、洗脳の効力も強くなるの。」

「それが、何だつていうの……？」

「仏間と初めて性交する時に、『私の言うことは絶対。私に一生従いなさい』、そう仏間の瞳を見て伝えながら抱かれなさい。」

「…な、なに言つてるの！ やめてよ。私たち結婚するまでそんなことしないし、それに仏間を洗脳だなんて…なんで？」

「そうね。だけど仏間に抱かれそうになったら、拒まず抱かれなさい。一刻でも早く、男

を自分の虜、思い通りに洗脳するのよ。貞操なんてどうでもいいわ。洗脳することが一番重要な事なのよ。大丈夫、妊娠は自分で望まない限り絶対にしないから。」

「…父上も…母上に洗脳されてるの…?」

「私はこの家の当主として父上を婿養子に貰ったから、父上にその話は伝えたくて結婚しているわ。でも、本人が相手を洗脳するつもりで性交しなくても、男は皆、橘一族の女を抱いてしまえば本能的に、絶対に逆らえなくなるものなのよ…フッフ。」

見たこともない不敵な笑みに、母が悪女のように見えてきた。

橘一族の女に、そんな能力があつたなんて…水蓮は驚愕した。

「その洗脳、絶対にしななければならないの?それに、なぜ仏間にする必要があるの?」

「千手一族を陰から操るために決まっているでしょ。」

「……!」

「罪悪感なんて持つ必要は無いわ。忍のほうだって、私たち一族を利用して居るじゃない。これが忍の居るこの世界で、橘一族が生きていくための方法なのよ。」

水蓮は結局寝付くことが出来ず、気づけば窓の外は青く明るくなっていった。

隣で寝ている妹たちを起こさないようにそつと部屋をでて、広い庭にある東屋まで歩いて行つた。徐々に群青色は薄れ、木々や物の形が鮮明になつてゆく。

水蓮は混乱していた。

橘一族の女は、ただ金で売られ、買われてゆく人形ではなかった。

売られていくように見せかけて、自分で相手を洗脳して利用する悪魔だった。

だがその事実は、これまで人形である自分の運命を嘆いてきたことから救ってくれる気持にもなった。

それでも仏間との結婚は、仏間と千手一族を、橘一族が利用するための手段なのは間違いない。

自分のことを純粹に好いてくれる仏間を、自分は、橘一族の為に利用しなければならぬ。

でも、そこに愛があれば、それでもいいのかもしれない。

そう、結果さえ良ければ。

「ううん。そんな結果、良い結果なんかじゃない。私、仏間を洗脳したくない。仏間をだましながら一生一緒に生きていく自信なんて無い！」

芙蓉は声に出して言った。両手で抑えた顔から、涙がこぼれ落ちてゆく。

「本気で言っているのか！」

「婚約破棄なんてしたら、家や一族がどうなるか解ってるの。仏間様以上にあなたにとつて好い相手なんて、居ないのよ!!」

「仏間のこと……私じつは嫌いな。それならまだ、ほかの人と結婚したい。」

パシン！母が水蓮の顔を叩いた。

「いいから、仏間と結婚しなさい。あなたに選ぶ権利なんてないのよ！」

左頬を抑えながら、水蓮は母を睨みつけた。

「そんなに仏間のことが好きなの？純愛……そんなものでこの結婚をやめたら、後で後悔するのはあなた自身よ！好きな男と結婚できるなんて奇跡なの！目をつぶりなさい。」

母には水蓮の考えていることが全て解っていた。

その言葉を聞いて、また芙蓉の心に迷いが生じる。

母の言う通り、好きな男と結婚できる、それ以外の事は見ないフリをすればいいだけなのか。

「橘の女は皆、自分で結婚相手を選ぶことなどできない。だが仏間様が水蓮を選んでくれた。お前も仏間様を愛している。これは奇跡だ。もうそれでいいじゃないか……」

水蓮の気持ちを後押しするように、父が優しく言った。

それから水蓮と仏間は、寒い冬には体を寄せ合って歩き、春には満開の桜の下で口づけを交わし、夏には川で水を掛け合って笑い合い、秋には二人で夜空を見上げて星を眺めた。

そうして、二人の愛溢れる美しい時間は過ぎて行つた。

二人が十七歳になった夏、浴衣を着て二人で夏祭りへ出かけた。

子供がはしゃいで走り回り、人々は遊びや食べ物に夢中になって楽しそうに笑っている。

水蓮よりも二十センチ以上背が伸びた仏間が、隣を歩く水蓮のほうを見る。浴衣の抜き襟から白いうなじが見え、大きく膨らんだ胸を隠すように浴衣の襟元がきつく締められていた。

「なあ…今日家に父上も母上も居ないし、何か食うもの作ってくれよ。」

「なにそれ。今ここで何か買って食べればいいじゃない。」

「そうだけど、夕飯！今食べたって夜は腹が減る。」

「リング飴でも食べてれば。」

「おう。じゃあリング飴五十個買うから、家で一緒に食べようぜ！」

「あ、下手だけど冗談言えるようになったんだね。分った分かった。作ってやる！その代わり、お代は高いわよ？」

「おう。こないだの任務の給料入ったばっかだから大丈夫だぞ。」

「いや、そこ冗談だから。」

仏間の両親は留守で、兄弟は数年前に全員、戦で亡くなっていた。

食材を手下げ、二人で誰もいない家に入ってゆく。

「わあ綺麗ね。仏間のお家はいつ来ても色んなお花が咲いているから大好き！」

水蓮は庭が見える部屋に入って、競うように咲く花たちに見惚れている。すると、仏間はそつと後ろから水蓮を抱きしめた。水蓮の心臓がドキリとする。

「あ、私の着替え、どこに置いて貰っているか知ってる？ 浴衣じゃ料理しにくいし…」
誤魔化すように言つて仏間の腕を除けようとしたが、仏間は更に強く水蓮を抱きしめた。

「・・・抱きたい。」

水蓮の心臓が止まりそうになり、そしてまた更に鼓動が速くなつてゆく。

仏間の右手が浴衣の襟の隙間をすり抜け、芙蓉の左胸をとらえる。先ほどから仏間の熱い息がかかつている耳たぶを仏間が唇で噛む。そのまま唇で真つ白な首筋をゆっくりなぞる。

「や、やめて…」

やつとそう言葉を洩らすと、その言葉を無視して仏間が帯を解き始める。

「だ、だめだよ…こんなこと…」

「結婚するまでなんて、我慢できない。」

「だめ！我慢して！」

水蓮は三年前に知つてしまった事実を、これまで心の底に深く沈めてきた。

今こうなつてしまつては、もう本当にどこにも逃げられなくなるという恐怖が湧いて

きた。仏間に抱かれたら、仏間はどうなってしまうのだろうか。恐ろしかった。

だが、仏間の体格と力に敵うはずもなく、考えているうちにどんだん浴衣が脱がされてゆく。気が付けば畳の上に横たえられ、仏間の手が最後の砦である肌襦袢の紐に手をかけていた。

スルスルスル…ついに腰紐が解かれ、水蓮の白くて大きな胸が露になった。仏間が無言でその胸に吸い付く。

・・・どうしよう。どうしよう。どうしよう・・・

仏間の手が水蓮の股間に届きそうになった時、水蓮は叫んだ。

「今日！月の物（生理）なの！だから、無理！」

仏間が顔を上げて残念そうに水蓮の顔を見る。

「そ、そんなのか…悪い。」

あまりに高鳴る胸の鼓動で、目の前まで揺れてしまいそうになりながら、水蓮は急いで肌襦袢を体に巻き付け、起き上がった。腕がされた浴衣を羽織り、急いで帯を巻く。

その様子を見ながら、仏間が水蓮に向かって静かに言う。

「お前が嫁いで来たらさ…お前の好きな花も、沢山植えたらいい。」

「うん…ありがとう。そうだね…私、急に用事を思い出したから、帰るね。」

水蓮はまともに着付けられなかった浴衣のまま、急いで外へ飛び出していった。仏間

が焦つて後を追いかける。

「そ、そんなに嫌だったのか?…ごめん。もうしないからさ。送つて行くよ。」

陽は傾き、ヒグラシの声が聞こえてくる。

「ううん。仏間は悪くないよ。まだ明るいいし、一人で帰る。じゃあまた。」

そう言つて走つて行つた。これ以上、仏間と一緒に居たくなかつた。

「ただいま…」

「あら。帰つてきたの?せつかく二人きりにしてあげたのに。…つて、あら。あなた、ついにしてきたの?」

自分の姿をまじまじと見る母の視線に、水蓮も自分の姿を見た。急いで着つけたので浴衣はガタガタ。しかも纏めていた髪の毛もずいぶん乱れていた。

「し、してるわけないじゃない!結婚するまでしない!」

そう言つて母の横を走つて家の中へ入つて行つた。

「あの子も頑なね…もう一度、最初から抱かれ方を教えた方が良くかしら。」

水蓮は今日の出来事を思い出していた。

実際に仏間に抱かれそうになってみて、これまでの不安が一気に実感に変わり、再び仏間との結婚に迷いが生じ、心に葛藤という嵐が訪れた。

この三年間、仏間は心から自分を愛してくれた。水蓮もまた、仏間を愛していた。

だから、抱かれることで仏間に威力は弱くても「傾国の術」をかけてしまうのは仕方がない事だと自分に言い聞かせてきた。むしろ、「ただ一人、私だけを一生愛して」そんな風に術をかけるのもいいかもしれないときえ思っていた。

しかし、男が女の体を求める時の姿を知ってしまった、恐怖にも似た不安が沸いた。仏間が自分の虜…一生言いなりになる。それを自分と、自分の一族が利用する…愛のなかで露になる人間の欲望と本能、そしてそれを生きるために利用する欲望と本能。

嫌悪感で吐き気がした。

自分が仏間を変えてしまう恐怖。仏間が変わってゆくのを見る恐怖。

そして、自分がいつか仏間を愛せなくなってしまうかもしれないという恐怖。耐えられなかった。

「おい…嘘だろ?」

「もう無理なの。解つて…頂いたお金は、必ず返すから。」

「無理矢理抱こうとしたことは反省してる。もう二度としない!」

「違うの…私の気持ちの問題なの。もう仏間を愛していく自信が、無いの…」

「一時的にそんな気持ちになっただけだ。待つから…お前が自信が持てるまで。別れるなんて、やめてくれ。俺は、心からお前を愛してる。」

「私が橘一族で、あなたが忍でなければ良かったのかな…」
「・・・？」

仏間は水蓮が何を言っているのか、さっぱり解らなかつた。意味不明なのは昔からだ
が、これは笑えない。ハッキリ理由を教えてほしい。だがそれが怖い。

「お前は橘一族だが、もう人形なんかじゃない。俺とお前が結婚して、忍が橘一族を利用
するようなシステムを二人で変えよう！」

売られ、買われる・・・人形。

ううん。私は人形のフリをした、悪魔だわ。

なぜ…なぜ、私はなぜ橘一族なの？

なぜ、私たちは忍を利用し、忍は私たちを利用するの？

なぜ、そんな生き方でしか、生きられない世界なの・・・？

水蓮は無言で仏間に背を向けて歩き出した。

「待てよー」

仏間が水蓮の腕を掴む。

「…私は…こんな忍の世界なんて、絶対認めない…」

その言葉に仏間は何も言い返せず、ただ去ってゆく水蓮を見送るしかなかった。

その後、仏間側から破談を申し出た。そして水蓮の両親もそれを受け入れた。

雲の国との貿易ルートはこの三年間で完成しており、正式に雲の国から承認まで受け、もう千手一族の加護を得る必要性は少なくなっていたからだ。

だが、破談が申し込まれる前に、水蓮が仏間と別れたいと申し出したせいでかなり揉めた。仏間も何度も水蓮を説得しようとしたが、水蓮は頑として受け入れなかった。そのことにより、少なからず千手側としこりが残ってしまった。橘一族の間でもその事は大きく問題視され、一族会議で水蓮に責任を取らせることが決まった。

「破談をあちらから申し出て下さったのは、仏間様の最後のあなたへの優しさね…。でもこんなことになっては、あなたにはきちんと責任を取って貰うわよ。」

「解っています。」

「同じ橘一族で、忍相手に遊郭を営んでいる家がある。お前にはそこで働いてもらうことになった。」

「……。」

その遊郭で働く遊女に橘一族の女は当然、一人もいない。

そこで橘一族の娘が遊女として働くことは最大の屈辱である。まして客は忍である。

「解りました。」

抗うことなく、水蓮は小さく返事をした。

水蓮は両親に連れられ遊郭を営むその家にやってきた。

かなり大きな屋敷で、遊郭のほかにも商業・貿易・宿屋の経営など手広くやっております。羽振りがいいようだ。

「いらつしやい。」

背が高くひよろつとした青年が出てきた。

「ああ、こちらが水蓮さんですね……どうぞ、どうぞ中へ。あ、僕は密です。よろしく。」

男は優しく微笑んで三人を招き入れた。

「……で、いつ水蓮をこちらへ差し上げましょうか。」

父が重苦しい口調で男の表情をうかがう。それに付け加えるように母が言う。

「……実はこの子、まだ未経験で……罰とはいえ、その、お手柔らかにお願いいたします……」

水蓮は赤面することもなく、無反応で自分の膝を見つめている。

男が首を傾けて微笑む。

「あの、僕が娘さんと結婚させて頂くことはできないでしょうか。」

男の、その作り笑いにも見える笑顔から、思ってもよらぬ言葉が飛び出し両親は驚く。

「ど、どういうことでしょうか？」

「ですから、僕と娘さんを結婚させて下さい。あ、いや、娘さんを僕に下さい。うーん違うか。えっと、娘さんは僕が一生守ります、いや、娘さんは僕が必ず幸せに……」

「この子は罪として遊郭で働くということですからこちらに差し上げるのです。あなたと結婚

するとは、どういうことになるのでしょうか。」

母が天然ボケしていそうな男に冷静に訊いた。

「ああ、すみません。説明が抜けていましたね。一族の会議の時、水蓮さんを見て、僕、一目惚れしちやつたんですよ。でもあの時、みーんな水蓮さんに罰を与えろ！つてうるさかったでしょ？だからうちの遊郭で働かせたらどうかつて言えば、水蓮さんが僕の所に必然的に来る羽目、いや失礼、来てくれるかなあと思いました。あはは。」

男は悪びれた様子もなくヘラヘラと笑っている。

「では、水蓮は遊郭で働かなくても良いということでしょうか。」

「ええ、勿論ですよ。でも一族の手前、働いていることにしておきましょう。家は綺麗どころが沢山揃ってますからね。誰かに水蓮さん役を頼みましょう。あ、遊郭では源氏名を使つてますから誰でもいいんですけどね。はは。」

「水蓮、こう仰つておられるが、お前はどうかんだ？」

父が少し動揺しながら芙蓉に訊く。水蓮はゆつくり密の顔を見る。

二重の目を細めて口角を上げニッコリと自分に向けて微笑む男の顔は中性的で、まるで女のように綺麗だ。肩にかかるくせ毛の髪は栗色で、瞳は深い琥珀色、肌はかなりの色白、骨ぼつたい細くて長い指、背は高そうだが痩せている。

黒くて直毛の長髪に、大きく切れ長な瞳、太い眉、厚い胸板、太い指…仏間とは正反

对だ。

「私の……どこがいいんですか？」

「お美しいところです。あと……信念を曲げないところです。」

水蓮は仏間を失つて以来、感情が希薄になつていた。マヒしてると言つたほうが正しいかもしれない。遊郭に行くことになつても、そこまで辛くも無かつた。この男が突然求婚してきたことも、そんなに驚きもしなかつた。

だが、*“信念を曲げないところ”*と言われ、急に胸が熱くなつた。

自分を理解してくれる人がいたのだと、心が震えた。

「……結婚、お受けします。」

「それがいいわね……想定外でも驚きましたけど、本当に助かりました。ありがとうございます。ございます。どうか、この子をよろしくお願いいたします。」

「あー良かった！嬉しいなあ。こんな美人と結婚できるなんて。まあこの状況じゃ断れないでしょうけど。あ、すみません。アハハ。」

「最近、あそこの遊郭に、橘一族の美人が入つたら嬉しいぞ！」

「マジかよ！でも買うにも高そうだな。」

「ああ。でもあの橘一族の女だからな。俺たちみたいにな下つ端の忍には縁がねえ存在だし、大金出してでもやりたい奴で順番待ちらしいぜ。」

千手一族の会合の後、近くでそんなやり取りが仏間の耳に入ってきて、思わず反応した。

・・・まさか：水蓮じゃないよな・・・

急に心配になり、居ても立ってもいられず、遊郭へ走った。少しでも水蓮の責任が軽くなるように自分から身を引いたが、水蓮がなんらかの罰を受けるであろうことは想像できた。まさかそれが：

遊郭の前に着くと、開店前にも関わらず多くの忍がたむろっていた。

ここまで来てみたものの、頭が混乱してこれからどうしてよいか分からず立ち尽くす。

そのうち開店の時間になり、ひよろりとした色白の男が扉の鍵を開け、一礼する。

「皆さま、お待たせいたしました。今日は三人も新しい子が入りましたよ。ぜひ見てくださいね。」

・・・そのうちの一人が水蓮だったら！・・・

仏間は胸が苦しくなる。だが確証は無いし、ここでむやみに本人の本名を出して所在を訊くのは、個人情報周囲に知られてしまう危険がある。

・・・どうやって確かめればいいんだ・・・

「千手仏間様じゃないですか？婚約者に振られて寂しさを埋めにいらつしやつたとか

「？」

気づけば開店をした店主らしき男が仏間の前に立ってニコニコ笑っている。たむろっていた忍たちは全員店の中に入っており、店の前には仏間とその男二人だけだった。

初対面にも関わらず、なんて失礼な奴だ。しかもなぜその事を知っているんだ。

「なんていうのは冗談ですよ。あはは。気になる事があつて来られたんでしょ？私もお話があります。ここじゃ人目がありますから、中で話しましょう。」

仏間は領き、男の後ろに着いて店の入り口とは違う入り口から中へ入った。

「水蓮は、ここで働いているのか？」

「働く、予定でした。でも変わりました。ん？いや、それも違うな。予定通りになったというほうが正しいなあ……」

「どっちなんだ！早く答えろ！」

思わず声を荒げるが、男はうろたえる様子もなく、笑顔のまま答えた。

「あ、はい、はい。私と結婚したんです。」

「……！！」

「水蓮さんは貴方と婚約解消したせいで、一族から重い罰を受けることになりました。その罰を決める会議で、僕がうちの遊郭で働かせたらどうかって提案したんですよ。」

「お前が水蓮と結婚……しかも遊郭で……」

「いやいやいや、ちよつと話は最後まで聞いてくださいよ。」

こちらを睨みつけ今にも襲い掛かってきそうな仏間に、掌を向けて男がまた笑う。

「と、提案したのは、実は僕が水蓮さんと結婚したかったからなんです。遊郭で働くよう偽装して僕と結婚してもらったというわけです。勿論遊女になんてなつてませんよ。」

……この男は水蓮の刑罰を利用して、水蓮を自分の物にしたのか！……

仏間の怒りは頂点に達した。こぶしを握り立ち上がる。

「あの、お気持ち良しく解ります。でも、僕が水蓮を助けなかつたら、もつと酷い目に遭つていたかもしれませんよ？ 貴方は水蓮を捨てたんですよね？ あ、水蓮が捨てたのかな。まあどつちでもいいですけど、水蓮はもう僕の妻です。ということ、もうここには来ないでください。それをお願いしたかったです。はい、では、お帰り下さい。」

男に全く悪びれた様子は全くない。口数が多く、仏間の気持ちを逆撫でばかりする。

ニコツと笑つて立ち上がり、笑顔のまま部屋の扉を開け、どうぞと仏間の帰りを促す。

「まだ話は終わつてない。芙蓉とお前は以前から知り合ひだったのか？」

「いいえ。一族の会議で初めてお会いしました。一目惚れつてやつですね。もういいですか。私も仕事がありますので。」

「仏間……もうやめて。」

水蓮が仏間の前に現れ、悲しそうな顔をして立っていた。

「水蓮。出てきちやだめって言ったじゃないか。二人で喧嘩とか始めないでね……」

「夫は私を助けてくれたの。だから結婚した。もうあなたと私は他人よ。二度とここには来ないで。」

「フツ。お前……こんな奴と結婚したかったのか？」

仏間は水蓮のことを引きつった笑顔で、軽蔑した目で見る。

「ええ。私にとって最大の理解者よ。同じ橘一族だしね。」

真顔のまま、表情を全く崩さない水蓮……あの頃、仏間が惹かれた笑顔はそこには無かった。

仏間は何も言わずに水蓮の横を通って出て行った。

「……あれじゃもうとうぶん立ち直れそうにないね。可哀想に。あはは。」

密は相変わらずヘラヘラと笑っていた。

何も言わずに抱き締めて欲しかった。でももう、それも叶わない。

季節が廻る度、時は二人を永久へと遠ざけていった。

◆作者からのご挨拶・作品紹介

皆様、こんにちは。

千野伊織と申します。

『罪の向こう、愛の絆』、拙い文章にも関わらず、読んで戴いている皆さま、

本当に、ありがとうございます。

この小説を書こうと思ったのは、1番はやはり、NARUTOの創設期あたりの話が好きだからです。

橘芙蓉というオリジナルキャラクターを主役にしたのは、色々と理由があります。

まずは、大好きなキャラクターたち（マダラ、柱間、扉間）との恋愛模様を書いてみたかったから。

ただ、単なる恋愛・官能小説ではなく、もつと深いテーマも入れて書きたいなって思いました。

それが「罪・罰・償い・報い」です。

罪にも大・小ありますね。

嘘、悪口、騙す、陥れる、強盗、窃盗、殺人、・・・

何もしない事、傍観、目をつぶる、自分恩利益を優先させる、自己防衛、誰かを守る為、他にも色々。

そして、人を愛することで罪を犯すことも・・・

この物語の主要登場人物は大なり小なり、見方を変えれば皆が何かしら罪を犯しています。

「悪いことをするとバチが当たる」「自業自得」「因果応報」いろんな言葉がありますが、罪に対して報いはあるのか、罰は下るのか、それを表現しようと頑張ってみました。

そしてもう一つの理由。

山崎まさよしの『ファットママ』という曲がありますが、その歌詞に、

大胆不敵なF A T M A M A 天下無敵のF A T M A M A

余裕しやくしやくでF A T M A M A 歴史の影にF A T M A M A

愛すべき人

という歌詞があります。

「歴史の影に、女アリ」

まさに、歴史上の男性の偉人・芸術家・文豪・・・その影には必ずと言っていいほど、女性がいいます。

現代は男女平等、女性活躍、ダイバーシティ：なんて言いますが、まだまだ男性優位

の社会構造は変わりません。

ただ、女性は弱いばかりではないということです。

男が女を思い通りにしているつもりでも、実は女性に掌で頃がせられていたり、糸を引かれていたり・・・

身近な例でいうと、夫婦関係なんてそうですよね（笑）

また女性ならではの美（外見や性的魅力）で男性を魅了してみたり・・・
 実は女性が恋愛に溺れるより、男性が女性に溺れるほうが多かったです。
 つまり、女性は男性に「愛された」瞬間、男性より優位に立つのです。

NARUTOの舞台、木ノ葉隠れの里の創設期時代。

もし、その立役者の男性たちの心を奪い、惑わす女性がいたとしたら・・・？
 そう考えたら面白いかなって思いました。

あと、すみません、単純に濡れ場・官能的な文章が書きたかったのもあります…（コ
 ラ）

※樹と芙蓉の関係も含めて。

物語はまだまだまだ、長々と続きますが、どうか最後までお付き合い頂ければ嬉し
 いです。

最後までお読みいただきましてありがとうございます。

★蛇足

本編完結後、番外編もUPする予定です。

(5) 芙蓉の成人

平和に見える日常は、いまだ戦乱の中の綱渡りの日々でしかなかった。

この日もまた、柱間と扉間は戦場に居た。

そしてその戦いの相手は、うちは一族だった。

「木遁・木竜の術!!!」

「火遁・豪火滅失!!!」

柱間とマダラ、二人が初めて戦場で戦った日に交えた刀のぶつかる甲高い音は、今は、音速をも超える術と術のぶつかり合いに変わっていた。

マダラは友となった柱間のことを、あの日以来、完全に消すことに決めていた。

柱間もそんなマダラに応えるように戦った。戦わなければならなかった…守るために。

来る日も、来る日も…戦い続け、気が付けばお互いに『最強の忍』と呼ばれるまでに成長した。そして二人は一族の長となっていた。

柱間が、マダラが、成し遂げたがった夢からは一番遠い所に居た。

「飛雷神斬り!!!」

「!?」

柱間とマダラの戦いの傍で戦っていた扉間とイズナ。

勝負を決したのは、扉間だった。

「イズナ!!」

ゴフツツ：吐血し倒れそうになるイズナをマダラが急いで支えに入る。

それを見ていた柱間が、上がる息を抑えながら、マダラに言った。

「マダラ…お前は俺には勝てない…もう…終わりにしよう。」

柱間はまだ、夢を捨てきれないでいた。

マダラと目が合う。

「忍最強のうちはと千手が組めば…国も我々と見合う他の一族をみつけられなくなる…そうすれば、いずれ戦いも浄化されていく…」

イズナの傷はかなり深かった。マダラは自分の服にイズナの血が染みてくるのを感じた。

マダラの目の前の焼け野原には、選択のカードが散らばり、早急にその選択を迫っている。

「…さあ…」

柱間がマダラに静かに手を差し出した。

迷っている時間は無い。弟の、命が危ない。

柱間の差し出した手をマダラは見て、無意識に一步、足が前に出そうになる。

「…ダメだ兄さん…奴らに騙されるな…」

弟の言葉に、ハッと我に返ったマダラは弟のほうを見た。

イズナは必死に目でマダラに訴えている。

マダラは弟を連れてその場から煙のように消えてしまった。

柱間は二人が居た場所を、黙って見つめるしかなかった。



夏の初めの夕暮れ。庭の芙蓉の花が白から薄紫に色を変え、妖艶な姿に変わってゆく。

芙蓉はその様子をなんとなく怖ろしく感じながら、氷水の中で布巾を固く絞る。

その布巾を、床に横たわる仏間の額にそっと置いた。

仏間は横たわったまま、枕元の柱間に訊く。

「…最近、千手へ亡命して来るうちは、が居るそうだな。」

芙蓉は戦の話になったので急いでその場を後にする。柱間は芙蓉を目で追ってから言う。

「ああ。明らかに戦況はあちらが劣勢だ。今は休戦状態だが、この間にも、あちらの戦力は下がっていくだろう。」

「ついに…そこまでやったか。柱間、最後まで気を抜くでないぞ。」

「ああ…でも父上も早く元気になってくれよ。父上には芙蓉を狙う奴らを追い払ってもらねばな。」

そう言つて陽気にワハハと笑う。

「なんだ、まだ他国から芙蓉をよこせと言つてくる奴らがおるのか…それはもう、お前の役目だ。芙蓉ももうすぐ十八だからな…」

「毎日遣いやら手紙やら沢山くるぞ。こちらは戦で忙しいのに、参つたものだ。」

芙蓉が通う女学校には花嫁候補を探そうと他国からも大名や豪商など名士が毎日訪れる。芙蓉は柱間と扉間の許嫁だが、それを知らずに求婚してくる者、知つていて脅しで奪い取ろうとする者がここ最近増えていた。

「お前は芙蓉を愛しておるか。」

「は？ワハハハハ。なんぞいきなり。勿論だとも！愛しておるぞ。」

「扉間はどうなのだ？ここ数年、急に芙蓉に対して当たりがきつくなつておるが…」

「…どうだろうな。俺にも、芙蓉を拒絶しているように見えるが…本心は…」

「お前が芙蓉と結婚しろ。大切にしたりやいなさい。」

「…そ、それは、芙蓉が選ぶという約束ではなかったか？ま、まあ俺を選んでもらえれば、もちろん一生大切にするぞ。約束する。」

「そうか…」

そう言つて仏間は目を閉じて眠りに入った。

フツと軽く微笑み、父の寝顔を確認すると、柱間は立ち上がった。

台所へ行くと芙蓉が粥の準備をしていた。プツプツと音を立て食べ頃を知らせている。

「父上は寝てしまったから、まだ暫く食事は出さなくともいいだろう。」

「そうですか。では暫く経つてからにしましょうね。」

芙蓉は同時に進めていた柱間たちの夕食の準備に手を付ける。

「今から芙蓉の花を取つて来るから、粥を運ぶ時に一緒に持つて行つてやつてくれ。」

「それはいいですね。あ、蕾のものをお願いしますね。」

「芙蓉…お前の母と父の事、父上にもう一度聞いてみてはどうだ？」

「いいんです。もう。私、あれから考えたんです。人には言いたくない事もあります。もしかしたら仏間さまにとって、私の両親の事がそうなのかもしれない…。だからもう無理に訊こうとは思いません。それに、いま仏間さまは大変な状態ですし、それどころではありませんわ。あ、でも私、諦めてはいません。自分で調べますから。」

そう柱間に微笑みかけながら、手早く山菜を刻んでいく。まな板の隣には鮎も並んでいる。

「そっか。俺も調べるのを手伝うぞ！」

「あ、ありがとうございます！嬉しいです！」

芙蓉は盆の上に柱間が取ってきた蕾の芙蓉の花枝、粥、山菜の入った味噌汁、漬物を載せて仏間の部屋に静かに入った。

「…失礼します。仏間さま、お食事をお持ちいたしました。召し上がられますか。」

仏間の枕元に膝を寄せ、芙蓉は仏間の顔をうかがう。うむ、と返事をした仏間の背中を支えながらゆっくりと起こす。

「…ああ、芙蓉の花か。まだ蕾だな。」

「あの花はすぐに咲いてすぐに萎んでしまいますから、蕾のほうが長く楽しめると思います。柱間さまが取ってきて下さったのですよ。」

芙蓉は花の入った花瓶を手に持ち、仏間に近づけて見せた。

仏間は優しく蕾を触った。まるで若い女の肌のように柔らかく、滑らかだ。

「…芙蓉。お前の母の事を話そう。」

「え？よ、よろしいのですか？で、でも、今は仏間さまのお身体に障ってはいけませんし

…」

「時は残酷だ。だが、美しい。」

「……？」

「お前の母はな、いつも人を笑わす冗談ばかり言っていて、男勝りで、自分の信念を曲げない、だが思い遣りのある、とても優しい女だった……。」

それを聞いて、芙蓉は仏間が母に対して愛情をもっていたのだと思い遣った。

「……そして忍のことが嫌いだった。この忍のいる世界が、嫌いだった。」

「……！」

「お前の存在は水蓮が死んだ時に知った。お前が他国に売られてゆくことは、水蓮が一番悲しむことだと思った。だが、結局、あいつの嫌う忍の家で育て、許嫁にまでしてしまつた……あいつは今頃、悲しんでいるだろうか……」

仏間が遠くを見つめながら訥々と話す横顔を、芙蓉はじつと見つめていた。

「悲しんでなどいらないと思います。今の私を見て、きつと喜んでくれています。だって、仏間さまのお陰で私は今、こんなにも幸せに暮らしているのですから！」

「……幸せ、か……それならば良かった。」

今夜は夏の夜にしては涼しく、蛙の声も少ない静かな夜である。

「お前の父も、水蓮と同じ橘一族で、名を密という。お前の伯母の腹違いの弟だ。水蓮とお前を残して先に死んでしまつたのだから、わしはあいつのことが許せぬがな……」

「ど、どうして、仏間さまと母は、結婚しなかったのですか？」

芙蓉は想像からつい、先走った質問をしてしまった。

「ははは…感が良いのも水蓮に似ておるな、お前は。正直な所、わしにも解らぬのだ。確かにわしらは愛し合っていた。婚約までしていた…ただ、あいつは、わしのことを守ろうと思つて身を引いたのだと、思う。」

芙蓉は、母の人柄が目に浮かぶようだった。

きつと仏間とは本当にお似合いの二人だっただろう。

「…ところで許嫁の件だが、お前が柱間と扉間、どちらも選べぬ場合は、解消して構わぬ。」

「え×それで、これまで育てて頂いた御恩が…」

「なに。結婚だけが恩返しでも、支えることでもあるまい。大切なはずつと繋がっていることだ…どんな形でも。わしはそれすら切ってしまったがな…。」

「…仏間さま…」

芙蓉の目からそれまで堪えていた涙が溢れ、流れ落ちた。仏間はそんな芙蓉の頭を優しく撫でた。

幼少の頃よりもずっと黒さが増した艶やかな髪が肩から滑り落ちる。

「お前は水蓮によく似ておる。顔も、背格好も、そして性格もな。」

芙蓉は顔を上げて、仏間の顔を見て再び大粒の涙を流した。手に持っている芙蓉の蕾が、芙蓉の涙に打たれて揺れた。



芙蓉は十八歳の誕生日を迎えた。

だが、そこに仏間の姿は無かった。二十日ほど前に、戦が原因の病で亡くなった。

「芙蓉！誕生日おめでとう！今日は盛大な宴をするぞ！」

「兄者、まだ父上の喪も明けていないんだぞ。やめろ。」

「そ、そうです…お気持ちはありませんがたいですけど、やめましょう。」

「何を言うておる。芙蓉が十八になるのを誰より楽しみにしておったのは、父上ぞ。その誕生日を質素になどしたら、それこそ父上は怒ると思うがのう。」

「私も柱間さまに賛成です。仏間さまだつて芙蓉さんの晴れ姿を楽しみにしてたんですから。」

そうと椿は自分の後ろに置いていた桐箱三人の前に出し、開けて見せた。

「ほらー！」

『うわあ〜！』

思わず三人が身を乗り出し、桐箱の中に入っている晴れ着に見とれた。

鮮やかな濃い桃色の地に、白や薄紫、桃色の大輪の芙蓉の花が染色されていた。一緒に入っている帯は金糸で織られ蝶が舞っている。

「これを仏間さまに着て見せないでどうするんです？ 仏間さま、怒りますよ〜？」
ウフフと椿は笑った。

「…仏間さま、私の為に、こんな素敵な晴れ着を用意して下さっていたなんて…」
「父上、やっぱりやるなあ！ やはり父上には敵わぬな！ ガハハハハ」

「フン。最後までキザなことを…」

「ほらほら、芙蓉さん泣かないで。目が腫れてしまったら化粧が映えなくなるわよ。」

芙蓉は椿に着付けをしてもらいながら、仏間と一緒に過ごした日々を思い出した。

「…仏間さま。私、仏間さまのこと、本当のお父さまみたいに思っていたんですよ？ ……」

化粧と着付けが終わり、縁側を通して扉間と柱間が待つ仏間の部屋へ向かう。

自然と庭の芙蓉の木が目に入ってきた。着物に描かれた芙蓉の花同様、どの花も競うように咲き誇っている。芙蓉は再び胸が熱くなって、ぐつと泣くのを堪えた。

「うおおおおお！ 綺麗だのう!!!」

「うるさい！ 声がデカすぎる。大げさだな…」

扉間もそう言いつつ、思わず頬が緩む。

「どうでしょう？・仏間さま……」

芙蓉は仏間の位牌の前に立ってみせた。

後ろで椿が鼻をすする。柱間と扉間もその姿を優しく見つめる。

「よし、出かけるぞ!!」

「え？どちらへ？」

「これまで毎日毎日、俺たちのために美味しい飯を作ってくれておるからの。今日は芙蓉に料亭で美味しいものをたらふくご馳走するぞ！」

「嬉しい！ありがとうございます！」

「皆で外食するなんて、芙蓉の入学式以来だな……」

扉間は、芙蓉が入学したばかりの頃、一緒に庭で剣術の稽古をした日のことを思い出し、僅かに胸が痛んだ。

「……なあ扉間？芙蓉って酒飲んだらどうなるだろうな？ウシシシ……」

「お前、いかががわしいことしか考えてないだろ。」

柱間と扉間の二人を先頭に、四人が並んで町を歩く。

最近では戦況もだいたい落ち着き、それまでの戦の間に千手の集落に避難・移住してきた

人々の流入で人が溢れ、建物や商店なども増え皮肉にも町は賑わっていた。

「うん……この光景だけ見れば、平和な世に見えなくもないのう。」

「兄者は本当に呑気だな。難民や移住民による犯罪も増えているんだぞ。警備も自治体制も、早急に整えなければならん。」

「……それには、うちとは休戦協定を結んで新しい集落を作ることが一番なのだがな。」

「まだそんな絵空事を言っているのか。うちはもう崩壊寸前だ。このまま降伏させる。」

「あ、あの……そのお話は……」

椿が申し訳なきそうに二人の間に割って入る。

「あ、ああ。そうだったな。でも……俺はそろそろ芙蓉には忍と戦の事を知って貰っても良い頃だと思うのだが。なあ扉間？」

「……俺は、うちはを降伏させ、戦に決着がついてからでも遅くないと思う。」

「扉間。俺は出来れば協定を結び、平和的に解決したいと思っておる。」

「まだ言うか。いい加減に……」

「お二人とも！もう今日はそれくらいにして下さいっ。」

椿が小声で二人をたしなめた。芙蓉はこれまでの会話をなるべく聞こえないように、賑やかな町の様子をキョロキョロと眺めていた。今なら椿にも怒られないし……

見る方向、見る方向の人たち全員と目が合う。見られて、る…？

「町に入ってからずっと大勢に見られているな。悪意の有るものから無いものまで、色々な視線を感じる。」

「そりやそうだ！こんな美人がこんな美しい姿で歩いておるのだから、当然だ！見ないほうが不思議ぞ！ガハハハハ」

「笑っている場合か。一瞬でも気を緩めるなよ。フン。」

・・・確かに芙蓉さんの美しさに見惚れる人も多いけれど、千手の長とそのナンバー2がその美女を連れて歩いているのだから、そりや目立つでしよーよ・・・

椿はいつかのデジャビュを見たような気がした。

「では、芙蓉の十八歳、成人の誕生日に乾——杯！おめでとう！！」

「カンパ—イ。」「乾杯！」「ありがとうございます。」

大人の三人が、酒が並々と注がれた大ぶりの盃をぐーっと一気に飲み干す。

芙蓉はその様子を覗てただ感心していた。

「さ、芙蓉も飲んでみる。美味いぞ！」

「芙蓉さん、ゆつくり、最初はちよつとだけ。口を付けるだけでいいのよ。」

「身体に合わないかもしれないしな。倒れられても困る。」

「は、はい…」

芙蓉は緊張気味にそつと小さな盃に口を付ける。その様子が何とも艶めかしく、美しい。

「……」

「どうだ?! 美味いだろ?」

「……ええ……甘くて、後からきりつと辛みが来て、最後はすーつと、ハツカみたいな後味です。すね……美味しいです。」

「さすが芙蓉! 味レポまで完璧だあ!」

「あ、味レポ?……まあ子供にはまだ分らんだろ。調子に乗つて一気に飲むなよ。」

芙蓉はぼつと顔を赤らめて、ふんわりとした心地よい気持になる。

柱間、扉間、椿との話がいつもより愉快に聞こえて、よく笑つた。

目にも美しい料理の数々は、どれも今まで食べた物で一番美味しい気がして食が進んだ。

「くっ、苦しい……」

「だ、大丈夫か芙蓉?! もう酔つたか!」

「いえ、食べ過ぎて、帯が、苦しくて……」

「クツ。フッフフ、あはははははっ! 馬鹿だなあ!」

扉間が大笑している姿を、芙蓉は初めて見た。その様子を見て、芙蓉も一緒に大笑い

した。

「あらあら。じゃあちよつと向こうで帯を緩めましょうね。」

芙蓉と椿が手洗に立った。

「芙蓉、可愛いな。いや、美しい。なあ、扉間。」

「ずいぶん…成長したよな。」

「胸が、か？ガハハハハ」

「黙れ！お前と一緒にするな。…家に来た時はオドオドした、痩せっぽちのガキだったのが、今は頭も切れるし剣術もなかなかだ。立派になった。」

「ははは。今日は流石に素直だな。つて、お前、いつ芙蓉と剣術したんだ？」

「うるさい。兄者には関係ない。」

そう言う扉間を見て苦笑すると、柱間は盃に残った酒をぐびつと飲み干してから真剣な顔をした。

「俺は今日、芙蓉に求婚するぞ。」

それを聞き、扉間は目を少し見開き黙ってゆっくりと兄の方を向いた。

「お前は、しないのか？」

その問いに、扉間は黙って盃の酒を飲み干す。そして再び盃に酒を注ぎながら答えた。

「しない。なんで俺が：芙蓉に求婚するんだ。結婚するのは、兄者だろが。」
「前も言っただろ。決めるのは芙蓉だ。」

「ああ、それは何度も聞いた。だからと言ってなぜ俺まで求婚する必要がある？」
「お前も、芙蓉のことを愛しているだろ。」

そう言われ、扉間は口に盃を近づけた手を止めた。

「愛してなどいない。それに、芙蓉は間違いない、兄者を選ぶ。解るだろ。」

「それでも、ちゃんと気持ち伝えるべきだろ？ いい加減素直になれよ！」

その言葉に扉間はカチンときて立ち上がった。

「しつこいぞ！ お前に何が解る。勝手に二人で恋愛ごっこでもやっている。帰る。」

「お、おい！ 扉間!! 待て！ 今日くらい……」

扉間は無視して店を出て、早足でズンズンと歩きます。

間もなく賑やかな町が、その姿を見えなくした。

「あら。扉間さまはどちらへ？」

「気分が悪くなつたから先に家に帰るだと。あいつ酒に弱くなつたかな。アハハ。」

「大丈夫でしょうか？ お一人で……」

「ガハハハ。酔っついていても扉間は千手ナンバー2の忍ぞ。大丈夫だ！」

数多の過酷な戦いを生き抜いてきた扉間が、酒酔いで一人で帰宅することを心配され

るとは、なんとも面白い。柱間は今の芙蓉の言葉を扉間に聞かせてやりたいと思った。

その夜は満月だった。

月明りで星は見え、その代わりに地上の木々や建物が明るく照らし出されている。酒を飲んだせいだろうか、風呂上がりのせいなのか、いつもより蒸し暑く感じる。

芙蓉と柱間は二人で縁側に居た。二人の間で小さな灯りが揺れている。

「今日は本当に楽しかったです。柱間さま、本当に、本当にありがとうございます。私、今日の事、一生忘れません。」

満面の笑顔で柱間に礼を言う。橙色の灯りに照らされた笑顔は、より一層温かい。

「うん。楽しかったな。やはり、家族はいいものだ。芙蓉も酒の味を覚えたしな。」

「……家族。その言葉に芙蓉は心がじんわりと温かくなった。ふと目を細め灯りを見つめる。」

「ちよつと灯りを消しても良いか?」

「え? あ、はい……」

柱間がスツと手をかざすと、炎は小さくなつて、静かに消えた。

暗闇に目が慣れるまで沈黙が続く。

「今日は月明りが明るいのですぐに目が慣れますね。柱間さまの顔が良く見えますよ。」

「あ、ああ!……それだと困るんだが……」

「え? なにか仰いました?」

柱間は、芙蓉が膝の上に重ねていた両手を優しく握って、深呼吸をした。

「芙蓉。」

「はい?」

「俺と結婚してくれ。」

「……!」

驚いた芙蓉の表情が月明りに照らされ、柱間にも見てとれた。

芙蓉は言葉が出ない。何度も瞬きをして柱間の顔を見るしかなかった。

すると、柱間は胸元からキラリと光るものを取り出し、芙蓉の左手薬指に通した。

「す、少し小さかったかのう。アハハハハ……すまん……」

指輪は左薬指の第二関節で止まっている。柱間はずーんと首をうな垂れて落ち込む。

「あ、いえ、あ、はい……あの、柱間さま……私……」

「そうだ! ちょっと待っててくれ。」

柱間は急に立ち上がり、自分の部屋のほうへ消えた。

ついに柱間から求婚を受けた。

・・・でも、なぜ迷っているんだろう。柱間さまのことは、好き。愛している。それなのに素直に喜んで受けられないのは、なぜ？

「まだ」結婚したくないだけ？それとも「まだ」子供で居たいだけ？・・・

芙蓉は左指の指輪を強く握りながら混乱していた。

「すまん、すまん。・・・ちよつと貸してくれ。」

柱間が戻ってきて、芙蓉に渡した指輪を受け取った。

：シヤリン。柱間は銀の細い鎖に指輪を通して、それを芙蓉の首にかけた。

「暫くこれを着けてくれ。また新しい指輪を用意するぞ。」

「あ、はい・・・ありがとうございます・・・あの・・・」

「返事はまた今度でいいぞ。他にも求婚したい奴が居るだろうからな！ウハハハ！」

大きく笑ったかと思ったら、ふいに芙蓉を抱き寄せた。

「愛している。芙蓉。」

「・・・」

芙蓉もそつと、柱間の背中に手を回した。

ヒュン！ヒュン！ヒュン！

天中に達した月の下、扉間は真剣を振っていた。

動くたび、剣先がキラリと光る。扉間の銀髪も月明りを受け更に銀色に輝いている。はあ、はあ、はあ・・・

まだ酒が残っているせいなのか、いつもよりも早く息が上がる。汗が地面に落ちる。扉間が切っているもの。

それは切つても切つても、目の前から消えない、芙蓉の顔だった。

初めてだった。酒の助けもあつてか、あんなにも芙蓉と笑い合つて話したのは。その時の明るく美しい笑顔が目の奥に焼き付いて離れないのだ。

・・・もつと、もつと、自分だけにその笑顔を向けて欲しい・・・

「違うー俺は・・・芙蓉のことなど、もう・・・」

地面に手を着く。

ポタリ。ポタリ。・・・ポタツ。

汗なのか、涙なのかもう分らない。

『俺は今日、芙蓉に求婚するぞ。』柱間の声が蘇る。

今頃、芙蓉は喜んで兄の求婚を受け入れているのだろうか・・・

扉間は、居ても立ってもいられなくなる気持ちを抑えて、再び剣を振り始めた。

月が西の空に傾いていた。

翌朝。日が高くなつてから扉間は帰宅した。

「あれ？扉間さま！昨夜先にお帰りになっていたのでなかったのですか？」

玄関で鉢合わせした椿が、洗濯物の山の間から顔を出す。

「……」

扉間は無視して自分の部屋へ向かう。すると廊下で芙蓉が拭き掃除をしていた。今一番会いたくない相手だ。

「あ、扉間さま。おはようございます。昨日はありがとうございました。本当に楽しかったです。あの、二日酔いとか大丈夫ですか？」

芙蓉は扉間が今帰っていたことも知らずに挨拶をする。

「ああ。」

そう言つて通り過ぎようとしたとき、芙蓉の胸元に光る首飾りに気づいた。首飾りには金色の指輪が通されている。

「……兄者か。でもなんで指輪を首からかけているんだ？……」

その視線に気づき、芙蓉は指輪を触つて見せながら言った。

「あ、こ、これですか？……昨日、柱間さまから頂いた誕生日祝いのお品です。サイズが小さくて指に入らなかつたので、こうして着けています……」

そう言つて恥ずかしそうで気まずそうな顔をする。

「フフツ……兄者らしいな。」

思わず笑ってしまった。

あ、そうだ。自分はまだ祝いの品を渡していない。いや、渡す必要などないではないか。

「フツッ。そうですね。でも女学校にも着けて行けないですし、金色で恥ずかしいので丁度良かったかもしれません。……って、あ。今言った事は秘密でお願いしますね。うふふ。」

……秘密。二人だけの？……

「ふ、芙蓉。俺はお前の欲しいものをやる。何が欲しい？」

気づけばそんなことを芙蓉に訊いていた。

「え？ いえいえ、結構です。扉間さまがいつも元気でいて下さるだけで充分です。」

「いいから！ 何かないのか！」

芙蓉は扉間の大声に驚く。そして、うーんとしばらく考え込む。

「この指輪は左手用で頂いたのですが、右手用の指輪を買って頂けないでしょうか？」

そう言つて右手の甲を扉間に見せる。

……兄者と同じ、指輪を。か……。……

「だ、ダメですよ。やっぱり。同じ指輪だなんて……」

「いや。いいぞ。俺は兄者のようなアホなことにはせん。一緒に買いに行くぞ。お前の指

にピッタリ合うものを買う。いいな！」

「え？あ、はい！ありがとうございます！嬉しいです！」

その翌日。

空は澄み渡り、雲一つない快晴だった。処暑を迎えたとはいえ午後はまだまだ暑さが厳しい。

「用意できたか。行くぞ。」

「はい！よろしく願います。」

芙蓉は合襟の半袖の白いブラウスに、ひざ丈のふんわりとした翡翠色のスカートを履いており、腰は黄色い半巾の帯で巻かれている。

扉間は、まさに乙女といった清楚な服装をした芙蓉を見て、胸が高鳴る。

芙蓉は扉間の少し後ろを歩きながら空を見上げて言った。

「今日は珍しく雲が無いですね。空がいつもより広く見えて、なんだか得した気分です。」

扉間も常に天候は気にして入るが、そんな事は考えたこともなかった。斬新な考えだ。

「お前はこんなことで得をした気分になれるのか。安いものだな。」

「あはは。そうですね。だからこうして扉間さまとお買物に行けるなんて、夢みたいな

「んですよ。ありがとうございます……」

「……いちいち礼を言うな。買って貰ってから言え。」

「はい。」

そう言つて芙蓉は嬉しそうに微笑んだ。胸元には柱間から貰つた指輪が揺れている。

町は一昨日の夜とは違い、女や子供が多く、新鮮な野菜や魚、花など色彩鮮やかだ。

「芙蓉さん！こんにちは。あれ？今日は柱間様とじゃないんだね……」

「あら芙蓉さん。今日は……扉間様と一緒に？珍しいね。柱間様は風邪でも引いたのかい？」

「芙蓉ちゃん！あく今日は柱間様じゃないの。柱間様に良い酒入つたつて伝えといてや。」

「あ、と、と、扉間様……こんにちは。……今日は柱間様じゃないんですね……」

……

「悪いか!!」

扉間は四人目でついに、キレた。

「ひ、ひくすみませ〜ん!」

声をかけてきた店主は引つ込み、通行人も驚いて思わず除け反る。

「と、扉間さま!!」

芙蓉は柱間と一緒によく食材や日用品の買物をしにこの辺りの市場に来ている。市場の店主や店員とはもう殆ど皆顔見知りで、既に柱間とは夫婦のように見られているようだった。

扉間はムスツとしたまま、早歩きで歩き出す。芙蓉は急いで後を追いかけた。

「いらつしやいませ。お待ちしておりました。扉間様。中へどうぞ。お席でゆっくり商品を見てください。扉間様と芙蓉様のために、急遽新しい商品もご用意しました。」

店に着いてようやくまともな接客を受けて、扉間はホツとする。

二人は店内の接客用の席に座った。出迎えてくれた上品な若い男が店主のようだ。二人の目の前に沢山の指輪が並んだ大きなビロードの平箱が置かれた。

「うわあ…凄い。とっても綺麗…」

芙蓉は小さな子供ののように目を輝かせる。扉間はその様子を見て既に満足な気持ちになる。

「芙蓉様はお美しいですし、指も長くて綺麗でいらつしやいますからどんな指輪でも似合われると思いますよ。扉間様、いかがでしょう？気になる物はございますか？」

店主は芙蓉ではなく、扉間にそう訊いた。やはり指輪は男が選んで女へ贈るものらしい。

「そうだな…これなんてどうだ。」

扉間が指さしたのは、銀色の地金に植物の蔓のような模様が彫られたものだった。

「さすが扉間様。お目が高いですね。これは野薔薇が彫られています。薔薇は愛の象徴と言われております。白金なので変色しにくいですしおススメですよ。」

・・・あ、愛!!・・・心の中で扉間は焦った。

・・・さすがにそれは直接的すぎるだろ・・・

「あの、私も一目見てそれが良いなって思ったんですけど・・・」

芙蓉の言葉に驚いて思わず険しい顔で芙蓉の顔をじつと見る。

「あ、だめですか・・・えっと他で良いのはありますかね・・・」

困った顔をしている扉間を見て、芙蓉は急いで髪を耳に掛け直し、並んだ指輪を目で探る。

「ではせっかくなので、試着だけでもしてみてはいかがですか？サイズの微調整なら直ぐにできますので。」

店主がすかさずフォローした。

「・・・それ着けてみる。芙蓉。」

芙蓉が自分で右手の薬指にその指輪をはめる。扉間はそれを見ながらサイズが合うのか、芙蓉に似合うのか、それより、それを本当に買うのかドキドキしながら見つめる。「ピッタリですね。お似合いですよ。どうぞ鏡を。」

芙蓉が鏡よりも先に、扉間に右手を見せる。

「ど、どうですか？ 似合いますか？」

とても似合っていた。きつとどの指輪を着けても芙蓉なら似合っているだろうが。

「ああ。サイズは合っているのか？」

「ええ。ピッタリです。」

それからほかの指輪も試してみたが、やはり扉間は最初に入つたあの指輪を選んだ。芙蓉も同じく、それが一番気に入っていた物のようでも喜んで。

「扉間さま。本当にこんな高価な品を買って戴いて良かったのですか？ なんだか申し訳無い気が……」

「女はそんなことを気にするな。」

「ありがとうございます。ずっと大切にしますね！」

芙蓉はそう言って嬉しそうに指輪が入った紙袋を扉間に見せる。

しかし扉間は恥ずかしくなり顔を背けた。いまの自分の顔は、誰にも見られたくない恥ずかしい顔をしていそうで心配だった。

それから芙蓉と雑談や仏問との思ひ出話など、色々な話をしながら歩いた。その時間はとても楽しく、芙蓉の自然な笑顔は間違ひなく自分だけに向けられていた。

なぜ、もっと早くこうして芙蓉と話をしてこなかったのだろう。扉間はひどく後悔し

た。

ポツ。ポツ。ポツ。ザー——

しまった。話に夢中で夕立の雲が近づいていることにも気づかなかつた。

ゴロゴロゴロゴロ……遠雷も聞こえる。

「芙蓉。掴まれ。」

扉間は返事も待たずに芙蓉を抱えて、飛雷神の術で家に戻った。

着いた場所は扉間の部屋の中央だった。

腕の中の芙蓉は既に濡れてしまっていて、髪から雫が滴った。それでも腕で紙袋が濡れないようにしっかりと抱えていた。

扉間はその様子を見て、たまらなく、芙蓉のことが愛おしくなった。

「すみません……紙袋、だいぶ濡れちゃいました。せつかく綺麗に包んで頂いたのに。」

そう言つて扉間を申し訳なさそうに見上げる。

気づけば、芙蓉の唇に口づけをしていた。

芙蓉は突然のことに固まっている。

扉間は夢中で口づけをした。

自然と畳に芙蓉を下ろし、四つん這いに覆いかぶさっていた。

芙蓉が不安そうな顔をして扉間の顔を見つめる。軽く開いた口と潤んだ瞳が、扉間を

誘っているように見えた。紙袋が離れた胸元は汗と雨で濡れていて、うつすら下着が透けている。

もうこのまま止められる自信が無い。

もう一度口づけをしようとした時、芙蓉が叫んだ。

「い、やつー！」

芙蓉が顔を横に背けるが、扉間は顎を掴んで無理やり口づけし、芙蓉の口を塞いだ。

右手が芙蓉のスカートの中に伸びる。滑らかな太もをなぞり、尻を掴んだ。柔らかい尻に扉間の指が心地よく埋もれる。

「んーん!!」

芙蓉が抗おうとする。唇を離して芙蓉を見る。

「はあ、はあ……止めてください。お願いです……」

涙目になって扉間に懇願する。息を切らしたその様子が更に扉間の興奮を掻き立てる。

今度は胸に手を伸ばし襟元を無理やり開き、手を入れて乳房をまさぐる。乳房は見た目以上に柔らかくハリもある。

もう止められない。芙蓉のすべてが欲しい。

「俺の女になれ。」

「……………」

「柱間のことが…好きなのか？」

「……………」

「俺のことは…？」

「……………」

芙蓉は最後の問いにも何も言わず、固く目を閉じて顔を背ける。

扉間はその様子を見て急に気が抜け、体を離れた。

「…いつたい俺は何をやっているんだ…」

激しい後悔が襲う。

芙蓉は起き上がり畳に落ちた指輪の入った紙袋を拾い上げ、再び抱きしめた。

「私…柱間さまのことも、扉間さまのことも、大好きです。でも…今は…誰とも結婚したいと思えないんです！」

扉間はムカムカとするものが胸にこみ上げてくるのを感じる。

「…こいつはなんて自分勝手なんだ…」

「自分勝手なのは良く解っています。でも、でも…こんな気持ちで結婚なんてできません！」

怒りの脈が速まり、大きくなる。

「俺の気持ちか解るか？ 最初からお前は柱間のものだったじゃないか！ 俺は、お前のこととをずっと諦めながら生きてきたんだぞ！」

その時、廊下から柱間の足音がして、部屋扉が開いた。

「おい！ どうしたんだ！」

柱間は芙蓉の乱れた服と髪の毛を見ると、反射的に扉間を殴った。

「何をしたんだ。」

柱間のすさまじい怒りが扉間に伝わる。今は兄でも弟でもない。男と男だ。

「答えろ!!!」

「何でもありません！ 誤解です！ あの、突然雨が降ってきて、それで、扉間さまが術で連れて帰ってきて下さったんです。けど、その時、私が扉間さまの上に落ちてしまつて、それで、怒られてたところだったんです。本当です……」

芙蓉の言葉は最後のほうは震えていた。

こんなに怒りを露にした柱間は見たことが無い。とても怖かった。

「……扉間、本当か。」

「本当です！ 扉間さまを責めないで!! 喧嘩、しないで……」

柱間は泣きだす芙蓉を見て、扉間の胸ぐらから手を離した。

「そうか……悪かったな。芙蓉、お前濡れているじゃないか。早く着替えたほうがいい

な。」

「は、はい」

芙蓉は急いで部屋を出て行った。

「…これがお前のやり方か？」

怒りを隠さない柱間は、扉間を強く見据えて言う。

「…そうだ。だったらなんだ。」

柱間は再び扉間を殴ろうと手をあげたが、扉間が腕でそれを防いだ。

「安心しろ。抱いてない。未遂だ。」

扉間はニヤリと笑って見せた。柱間は扉間の腕を払いのけ、思いきり殴った。

「芙蓉を傷つけるな。たとえ弟でも芙蓉を傷つける奴は許さん。」

「フン…そんなに入れ込むなんて無様だな。」

「その言葉、そのまま返す。」

そう言つて柱間は部屋を出て行った。

チャリン…

芙蓉は銀の鎖に扉間から買つて貰つた指輪を通し、柱間から貰つた指輪と重ね、再び首に着けた。

しかし、自分のせいで柱間と扉間の仲に亀裂が入るのではないかと不安でならなかつ

た。

思えば、扉間が自分を疎んじてくれたままのほうが良かったのかもしれない……

芙蓉は自分の心の中にあつた小さな闇を見つけた。

板間が死んでから、家の中ではいつのまにか自分の結婚相手は長男の柱間だという空気が強くなつていった。その空気に染められ、自分自身もそう思つて、扉間のことは異性として見ないようにしていた。家族として仲良くなりたい気持ちはあつたが、どうか自分を好きになら無いで欲しいと、心のどこかで常に願つていたのだ。

やはり、仏間の遺言通り、二人のどちらとも結婚しない方がいいのだろうか。

(6) うちはマダラとの出会い

柱間と扉間に、再び戦いの日々が戻った。

千手一族のほうが優勢とはいえ、マダラとうちはの上忍たちとの戦いは一筋縄にはいかなかった。

そんな中、新たな手を探そうと、柱間は空知一族の居る国境付近の駐屯地へ赴くことにした。

交渉術では扉間のほうが上であり、本来なら二人で行ったほうが良かったが、戦以外で二人揃って領地を空けるにはリスクがあった。

先日の一件から扉間は芙蓉を避け続けている。

柱間は二人を一緒に残して行くのは心配だったが、一刻も早く行って戻ってこうと準備を整え、幾人かの部下を連れて出発した。

「芙蓉。話がある。父上の部屋に来てくれ。」

久しぶりに扉間から話しかけられて驚く。何の話だろう…様々な想像が頭を巡り、緊張しながら仏間の使っていた部屋に行った。

扉間が畳に腰を下ろす。芙蓉も向かい合って正座をする。

「兄者のことだ。」

ドキリ…芙蓉は柱間の身に何かあったのかと、不安になる。

「いま、兄者は国境沿いに駐屯している空知一族の所へ戦の協力を仰ぎに行っている。そこで交渉のため、あるものを要求された。それを今から兄者に届けてほしい。」

そう言つて巻物を取り出し、芙蓉の前に置いた。

「私に…務まるでしょうか…?」

「部下だけの小隊に持つて行かせたいところなのだが、いま有能な者がいる小隊が動き、うちの忍にそれを気づかれたら面倒なことになる。最悪、この巻物まで奪われては秘密が漏えいして一巻の終わりだ。兄者の身にも危険が及ぶ…忍とは関係無いお前にか頼めないのだ。勿論、部下を護衛に着け、見た目上は要人の護衛任務に見せかける。」

「わ、解りました。」

不安はあったが、やっと忍の許嫁として役立つことが出来る、恩返しができる時が来た。芙蓉はその任務を引き受けた。

翌日、芙蓉は荷物を纏め、夜明け前に扉間の部下二人、片方はくノ一を伴つて出発した。

「行つて参ります。」

「頼んだぞ。…気を付けてな。」

「はい。ありがとうございます。必ず柱間さまにこれをお渡しいたします。」

扉間は芙蓉の後ろ姿が見えなくなるまで見送った。

野宮は初めてだった。好奇心の強い芙蓉は不謹慎にもワクワクしてしまふ。

「あの、お二人は何歳から忍をされていらつしやるのですか？」

移動中は会話は禁止されていたため、やっとまともな会話が出来る。

「あははは。忍は生まれた時から、忍ですよ。柱間様も扉間様もそうでしょう。」

「そ、そうなんです…すみません。無知な質問をしてしまつて。」

「いえ。でも女の場合は忍の家に生まれたからと言つて必ずしも忍になるわけでは無いので、別におかしな質問では無いですよ。」

「あの…今回は私の為に一緒に来て頂いてありがとうございます。感謝しております。」

芙蓉は深く頭を下げた。二人の忍は顔を見合わせる。

「い、いえ。頭を上げてください！僕らも任務なので。お礼なんて言わないでください。」

「それでも、護衛して頂けて本当にありがとうございます。」

芙蓉は再び礼を言つて優しく二人に微笑む。

「忍は基本、任務に当たつては三人一組みのチームで行動します。私たちも柱間様に巻物を届けるという同じ任務のため集まつたチームですよ。」

そう言ってくノ一は芙蓉に微笑み返した。

「チームですか…なんだかそういうの嬉しいです。必ず、一緒にこの巻物を柱間さまに届けましょう！」

何も知らない芙蓉は本当に嬉しそうに笑っていた。

夜になり、最初の見張り役だったくノ一は芙蓉の寝姿を見て、先ほどの会話を思い出して、少し胸が痛んだ。

・・・こんなに良い子なのに、どうして扉間様は・・・

任務で私情は禁物である。すぐに考えるのを止めて、再び辺りを警戒した。

ザザザザツ。ガチン！キイイイイン。

突然の事だった。

芙蓉たちはうちは一族の忍たちに奇襲され、男の忍がそれを防いだ。

「芙蓉様、私の背中から離れないください！」

芙蓉は恐ろしくて体が固まりそうになりながらも、くノ一に背中合わせでくっついてた。

手裏剣が飛んできくる。同時に刀が芙蓉の頭上に振り下ろされる。

くノ一が刀で手裏剣を全て払い除ける。

「お前たち千手一族だな！こんな所まで入って来るとは許せん…消えてもらおうぞ。」

「フツ！ たった三人、しかも女二人の班でうちはの地に踏み入るとは愚かだな。」

芙蓉を護衛していた二人とうちはの忍二人、二対二で戦い始めた。

四人の姿が森の奥へと消える。

芙蓉は動揺しないようにと努力した。何としても、この巻物だけは渡すわけにはいかない。巻物の入った鞆をぐつと強く抱きしめ、辺りを警戒する。

ビュン!!! グサツ!! ボト…

一瞬だった。芙蓉の左肩をクナイが貫通し、地面に刺さった。

芙蓉は地面に倒れ、これまでに体験したことのない強い痛みで動くことが出来ない。

何分経っただろうか。朦朧としてきた目の前に、先ほどのうちはの二人の忍が立っていた。

「おい。お前の仲間は二人ともとつと逃げて行つたぞ。」

「覚悟しろ。」

そう言つて近づいてきた。

「おい…よく見たらこの女、えらいイイ女じゃないか?」

「ああ、なかなかお目にかかれない上玉だな。」

「どうせ殺すなら…その前に楽しませて貰おうか…」

そう言つて、動けない芙蓉の服を脱がせ始めた。

・・・助けて：柱間さま：扉間さま・・・

芙蓉の意識が完全に無くなりそうな時だった。

「お前たち。何をしている。」

二人の男たちよりも大柄で、黒く長い髪を靡かせた男が現れた。

「マ、マ、マダラ様！」

「い、いや：あの、こいつ千手の忍です！さつきこいつの仲間二人と戦闘していたんですが、仲間は逃げてしまつて・・・」

「怪我をした女を裸にして、何をしていると聞いているのだ。」

そう言つてチャクラを荒立てる。

「す、すみません。見逃してください！」

「たとえ相手が千手のくノ一だったのしても、蹂躪することは許されない。それでもお前たちは誇り高いうちはの忍なのか！」

「ゆ、許してください！」

「俺たちが悪かったです：すみません！」

男たちはマダラが術を練るのを察して急いで逃げ去つた。

マダラは芙蓉に近寄る。チャクラは全く感じられない。死んでるのか。

・・・いや違う。こいつは忍じゃない！・・・

マダラは急いで回復術で傷の手当てを始める。

芙蓉は既に意識を失っていた。

出来る限りの回復と手当を終えると、剥がされていた芙蓉の服を着せ、抱き上げた。猛スピードで木から木へ飛び移りながら移動する。

芙蓉は意識を取り戻した。

・ ・ ・ 温かい ・ ・ ・

朦朧としながら目を開けた先には、端正だが少し強面の男の顔が見え、自分を抱きかかえて移動していることが分かった。

「た…助けて…ただだいて…あ…りが…とう…」

「しゃべるな。手当をしたとはいえまだ危険な状態だ。目をつぶって居ろ。」

芙蓉は再び瞳を閉じて、マダラに体を預けた。



新緑の少し酸っぱい香りが風に乗って窓から入ってきた。芙蓉は懐かしい気持ちになる。芙蓉は病院のベッドの上に横になっていた。

窓からは満開の桜の木の枝が見える。

本来なら、今頃は樹と一緒に女学校の卒業式を迎えているはずだった。

・ ・ ・ 樹ちゃん…会いたい ・ ・ ・

「痛みはどうだ。少しはマシになったか。」

声のほうに顔を向けると、自分を助けてくれたあの男が立っていた。そして芙蓉と目が合うとベッドの横にある椅子にドスンと座わった。

「悪かったな……俺の部下たちが酷いことをした。許してほしい。」

「……。こちらこそ、助けて頂いて、ありがとうございます。」

芙蓉はあの時の恐怖を思い出し、思わず男から視線を逸らした。

「お前忍じやないな。何者だ。なぜうちはの領地に入ってきた。」

「……。」

「答えろ。答えによって対処が変わるぞ。」

「……届け物を、する途中だったので。」

「誰にだ。」

「言えません。」

「お前の荷物から、唯一チャクラを感じるこの巻物が出てきた。何だこれは。」

「そ、それは!!!」

どうしよう。うちはの人間に巻物のことがバレてしまう!

「封印を解いて見させてもらったが、白紙だったな。」

「え! そんな! 白紙だなんて……あつ、いえ、その、それは……」

芙蓉は意外な事実を知り戸惑う。だが白紙でも柱間には読める物なのかもしれない

「正直に言え。誰に届けようとしていたんだ！」

「言えません・・・」

「お前。誰かに嵌められたな。」

そう言つて男はほくそ笑む。

「…嵌められた？」

「そうだ。これを届けるように頼んできた忍か、その忍に依頼した誰かだな。お前を護衛していた二人の忍がお前を置いてさっさと逃げたのもその証拠だ。」

「嘘！そんな、だつて扉間さまが柱間さまの為にそんなこと・・・あつ!!」

芙蓉は嵌められたという話に動揺し、思わず柱間と扉間の名を口にしてしまった。

「大丈夫だ。チャクラから扉間の物だとすぐに判つていた。おそらく届け先は柱間だろう？お前を誘導尋問して確認しただけだ。」

「.....」

男にはもう既に全てバレている様子だった。

「あの...その巻物、本当に白紙ですか？なんの情報も、価値も無い物ですか？」

「ああ。全くの紙切れだな。価値があるとすれば新しい情報を書き込める白紙だという

「ことくらいか。」

「そ、そうですか……。それが大切な届け物だってことは、嘘だったんですね。」

「だろうな。残念ながら。」

「良かったあ……」

芙蓉は心からホツとしたように笑顔になった。

「は？」

マダラは芙蓉の想定外の反応に驚いた。いったい何が嬉しいのか。

「実はこれ、柱間さまが空知一族との話合いで必要な物で、うちは一族の方に見られたら一卷の終わりだつて聞いていました。だから……嘘で本当に良かったです！」

「お前……馬鹿なのか？ 扉間に嵌められて殺されそうになったんだぞ？」

「ええ。そうかもしれないけど……。私が死んでいても、この巻物がうちの方に見られても、柱間さまも千手の皆さんも困らなかつたのなら良かったです。安心しました。」

「……」

マダラは呆れて言葉が出なかつた。もしかして千手一族に洗脳でもされているのか？

「あの……すみません……」

「なんだ？」

「貴方様のお名前を、おうかがいしてもよろしいですか？ 私は橘芙蓉と申します。」
「俺は、うちはマダラだ。」

「マダラ様…ですね。改めて、助けて頂いて、ありがとうございました。」

「…なにかおかしくないか？…」

なぜ礼を言われているかよく分らなくなってきた。

「…というか、俺のこと、知らないのか？！…」

「ハア。お前な…自分がこれからどうなるかとか、気にならないのか？」

「あ、そうですね！すみません…マダラ様はとっても良い方だから、勝手にどうにかなるって思っています。アハハ。あ、どうなるんでしょう私…？」

芙蓉は笑ったかと思ったら、思い出したように急に不安そうな顔をした。

「捕虜だ。と言っても、殺される予定だった奴を捕虜にしても価値は無いだろうが…まあ、お前は千手の領地から来ているようだし、知っていることは全て吐いてもらってください。」

「…分かりました。でも言えない事は、言えません！」

「お前、捕虜の意味、解ってる？」

芙蓉は、自分が扉間に騙され殺されそうになった事実を知り、本当はとても動揺した。

信じたくなかった。だが、マダラの前で動揺を見せれば、更に追及されていただろう。芙蓉にとって言えない事、それは、自分は柱間と扉間の二人の許嫁であることだ。うちは側にとって自分が「価値のある捕虜」になることだけは避けなければならぬ。

芙蓉の頬から涙が伝って、真っ白なシーツの上に落ちた。

桜の花びらが、ひらりと芙蓉の枕元に舞い降りる。

◆ 柱間は空知一族との協議を終えて領地に戻る途中、部下から芙蓉が行方不明になっていると報告を受け、急いで先に一人で家に帰ってきた。

「扉間！芙蓉の事は何か判ったか！」

「いや、居なくなる前に荷物をまとめた形跡があつた事だけだ。」

「お前の感知でも感知できぬとは、どういうことだ！」

「考えられるのは、感知が及ばない遠く離れたところに居る、または結界の中に居る、或いはもう、死んでいるかだな。」

「……。とにかく、全力で探すぞ！」

「ああ。」

十日が過ぎても芙蓉は見つからなかった。目撃情報すら無かった。

柱間は自分の部屋で突っ伏して、声を殺して泣いていた。

「芙蓉……すまない。俺が、俺が居れば、こんなことにはならなかったのに！どうか無事でいてくれ。必ず、必ず見つけてやるからな！」

そんな柱間の様子を感じしても、扉間は何も感じなかった。



桜は葉桜になりかけた時期が一番美しい。そう言ったのは誰だったのだろうか。そんなことを想いながら、芙蓉はのんびりと野原を散歩していた。

芙蓉は数日前に退院し、マダラの屋敷の一角にある離れに住むことになった。

マダラの監視が行き届くうえ、マダラの雑用使いにもなるということからだ。

ふと目線の先に、子供たちが何やら言い争っている様子が見えた。恐る恐る近づいてみる。

「トメが二つで、俺が一つっておかしいじゃん。」「私にもちようだい！」「俺、そつちの味が欲しい。一つ分けてよ。」

どうやら飴を人数分どうやって分けるか揉めている様だった。

「こんにちは。なに？皆で同じ数で飴を分けたいの？」

「ねえちゃん誰？そうだけど、関係ないだろ。あんたにはやらないよ。」

「どれどれ、ミカン味が五つにリング味が六つ、それに葡萄味が四つかあ。人数は？」

ち、にいい、さん…五人ね。これは難しいね。」

「おねえちゃん、分けれる?」

「うん。教えてあげるから、見てて。…まず、 $5+6+?$ \parallel 15 個。人数が5人だから、 $15 \div 5 = 3$ 人 \parallel 3 個。一人3個づつだよ。味の組合せはこうして、こうして、あとはじゃんけんで勝った人から好きな組み合わせを取って行ってね。」

「ねえちゃん、すげーな!」

「すつごーい!」

「そんなことないよ。皆もすぐ覚えられるよ。」

「…おい!芙蓉、そこで何している。」

気付けば芙蓉の後方にマダラが立っていた。

「ま、マダラ様だ…こ、こんにちは…」

子供たちは急に緊張して整列し、マダラに挨拶をした。

「うむ。礼儀正しくてよろしい。芙蓉、帰るぞ。」

「あ、はい…じゃあね。皆、仲良くしてね。」

芙蓉が立ち去ろうとした時、一番小さな女の子が駆け寄ってきて、芙蓉に小声で何か言ってきた。

「おねえちゃん、さっきのアレ、計算?こんど私にも教えて。」

「う、うん……いいよ。また会えた時にね。」

「絶対だよ。」

芙蓉は少し困ったように頷き、マダラの所へ走って行った。

麻紐で無造作に一つに束ねられた長い髪が頭の高い所で揺れる。これまで髪を一つに束ねてうなじを出す髪型は、剣術の時以外許されていなかった。

服装はふくらはぎ丈のズボンに、上着はうちは一族の装束を着ている。すべて男物だった。袖が長すぎるのか、手の甲が隠れている。

「おい。何をしていたんだ。」

マダラがとても不審そうな、疑う顔で芙蓉を見る。

「あの子たちが飴を人数分で分けようとしていたので、手伝ってあげていました。」

「そうか……余計なことは話すなよ。特に、千手のことはな。」

「はい……。あの、あの子たちも忍ですか?」

「ああ。だが皆、戦で親兄弟を亡くした子たちだ。」

「……!」

芙蓉の脳裏に、板間の顔が浮かんだ。

「兄弟も、ですか……」

「そうだ。皆、千手一族の忍たちによつてな。」

「・・・・・・・・。」

板間は、うちは一族に殺された。

自分は今、戦争相手の領地に居るのだと、改めて実感する。

ふと、斜め前を歩くマダラの表情を伺った。厳しい表情をしているように見える。

しかし芙蓉には、ただマダラの背中を見つめることしか出来なかった。

「は☒教師がしたいだど!!」

マダラは茶を吹き出しそうになった。

「はいーここで働いて、助けて頂いた御恩を返したいんです。私に出来る事と言ったら、家事と勉強くらいですので、家事は今してしていると、勉強を活かして働けたらなつて。」

「ハイ、お前の立場は?」

「『捕虜』です」

二人の声がかうまい具合に重なる。

「解っているなら、大人しくしている。いくら一般人だと言っても、また襲われる可能性もあるんだぞ。」

「心配して下さってるんですか!」

「ち、違う！ だいたい千手側で育ったお前が、うちの地で教鞭を取るなど、許可できるわけないだろうが。」

「算数・国語だけでもダメですか？ 忍の子も、そうではない子も、基礎的な教養が無いと、その先大人になって自身が困ることになります。申し訳ないですが、ここには基礎力の無い子が多いように見えます…。」

マダラは少しムツとしたが、戦に力を注力しているせいで、子供たちの教育には気を配れていない状況なのは確かだった。

「親の居る子ならまだしも、親兄弟が居ない子は誰かに教えてもらう必要があります。せめて孤児院の子たち限定でも教えさせては戴けませんか？」

マダラは不覚にも、芙蓉の長期的で堅実なものの考え方に感心した。

だが、なぜか芙蓉は、忍に関してだけはまるで知識が無いのだ。商人の一人娘とは、そういうものなのだろうか。

「お前、あつちで教師だったのか。」

「いいえ。もうすぐ女学校を卒業するところでした。」

「教えた経験も無いのに、よく言うな」

「でも最近、毎日近所の子供たちに算数と国語を教えて練習していますので！ あ…。」

「あれだけ止めろと言ったのに…お前は…。ていうかお前、実はけっこー馬鹿だろ！」

「あははは…すみません。どうしてもって子供たちにせがまれちゃいまして…」

「…いちおう、一族の会議で議題に挙げてみてやる。たぶんダメだろうがな。まず長の俺が反対だ。」

「え☒マダラさまって、うちは一族の長でいらつしやったんですか!」

「まずお前には、一からココのことを叩きこんでやろうかあ…ああん!!」

「それはありがたいです。お願いします。」

芙蓉は真面目に答え、マダラの怒りを見事にスルーした。

マダラは気が抜ける。

・・・本当にこの、うちはマダラを知らないとは、こいついったい何者だ?・・・

マダラは一族の会議で芙蓉が孤児に対して勉強を教えても良いかを議題にした。

予想に反し、賛成意見のほうが多かった。

うちでは最近亡命者の数が増え、教師を出来る者がほぼ皆無な状態だった。子供たちの教育をおろそかにすれば一族の未来も危うい。みな合理的な理由で賛成した。

そうして、芙蓉が教師になることがあっさり認められた。

「…教えていいぞ。」

「何をですか?」

「いやだから、勉強!お前が自分で言ったんだろが。」

「本当ですか？嬉しいです！私、頑張ります！」

弟・イズナの服を着て、無邪気に喜ぶ芙蓉の様子に、マダラは思わず心が和んだ。

入院中の会話といい、この天然さ。かと思つたらいきなり教師がしたいなどと言いつ出す。

決して馬鹿ではないのだが、芙蓉の変わり者ぶりに、いつの間にかマダラの警戒心は薄まり、心を開いてしまつていた。

◆

芙蓉が孤児院の教壇に立つ初日。

マダラは、芙蓉が本当にきちんと教えられるかどうか確かめに来た。

芙蓉はそれほど緊張していない様子だ。どうやら人前に立つことに慣れているようだ。

「…では、今日は算数の授業から始めます。教科書の一ページ目を開いて下さい。」

教室には六く十二歳までの幅広い年齢の孤児たちが二十人ほど並んでいる。全員が一斉に、芙蓉が手製した教科書を広げる。

「皆さんは計算が出来たら便利だなんて思う時は、どんな時ですか？」

教えるのが初めてとは思えない慣れた様子で、余談や雑談を挟みながら授業を進める。

生徒の席を回って、器用に年齢に合わせた教え方をする。

マダラはその様子に感心していた。

芙蓉ほど聡明な女をこれまでに見たことが無い。やはりただの商人の娘とは思えない。

・・・本当にいったい何者なのだ・・・

「マダラ様、この女、本当に何者ですか。初めて教えるには上手過ぎやしませんか？」

心の声が代弁されて驚き、そう言った部下のほうを見る。

「まさか、スパイつてことないですよね。」

もう一人の部下が言った。

「そうだな：確かにこれはスパイの可能性もゼロでは無いレベルだ。だが、スパイが堂々と教師がしたいなどと言い出すかは、疑問だ。」

「しかし、警戒するに越したことはありません。なにしろ千手の側から来た女です。」

「そうだな。」

マダラは芙蓉と出会ってからこれまで、つい芙蓉に対して警戒心を解いていた。

芙蓉からはチャクラの気配は微塵も感じられず、忍という可能性は極めて低い、もしそのような能力だった場合は…

急速に芙蓉への警戒心が復活してくる。

・・・なによりこいつは、あの千手側から来た人間だ・・・

マダラはそう自分の中で眩き、芙蓉を強い視線で睨んだ。

芙蓉がその視線に気づいてマダラを見た。

ニツコリ。

今度はチャクラを込めて更にきつく睨んで見る。

…ニ、ニツコリ・・・タタタタツ！

生徒たちの間を小走りで抜けて芙蓉がマダラに駆け寄ってきた。

「あ、あの。何か間違っていた箇所、ありました？」

マダラも部下二人も、思わず身構える。

「な、無い。続ける！」

芙蓉は教壇へ戻ろうとしたが、急に振り向いてニツコリとしてマダラを見る。

「あ、今度何か気になる事があった時は、睨まずに、手を挙げてから発言してくださいね。」

教室が大爆笑した。これには流石にマダラもその部下も頭を抱えた。

マダラは机に片肘をつき目を閉じて部下の話の話を聞いている。

「あの女、天然なのか演技なのか、チャクラが全く無いので解りませんね…」

「いや逆にそれを利用し、一般人のあの女をスパイとして使っている可能性も。」

マダラは目を見開き、真つ直ぐ前を見た。

「仕方ない。写輪眼で見てみるか…」

「忍でない女に写輪眼で幻術をかければ、命の危険もありますが…」

「そんなことは承知の上だ。単なる疑惑でもうちはの危険になりうるものは全て消す。」

「私もマダラ様に賛成です。千手側の人間など皆信用はできません。」

マダラは芙蓉の笑顔を一瞬思い出し、また目をつぶった。



芙蓉は自分の部屋で今日の授業の振り返りをしていた。

淡いだけの、叶うことのないと思っていた夢が、実現したようで少し浮かれていた。

子供たちの笑顔や、問題を解くときの真剣な顔、ハイと手を挙げる姿…

そして、身が凍り付きそうな恐ろしい、マダラの顔…

…何がいけなかったのかなあ。計算は間違っていないかったし。何かまずい事、言っ

ちやつたのかなあ…

そんな事を考えながら、気づけば立ち上がり窓から月を見上げていた。すると…

「あ、マダラさま！お帰りなさい。あの、今日の授業、どこが悪かつ…」

目の前で見覚えがある幼い少女が泣いている。

そこへ自分にそっくりな女性が近寄り、しゃがんで少女に何か言っている。

『大丈夫。大丈夫。芙蓉なら絶対に』

…あれは、私？じゃあ、あのひとは、お母さま…？

二人に近寄ろうとした瞬間、目の前に大きな柵が落下してきて芙蓉の行く手を阻んだ。

よく見ると、檻だ。閉じ込められた!!

違う！私が檻の中を見てるんだ!!

すると、檻と、その檻の中に居たはずの幼い芙蓉と母親の姿が煙のように消え、真っ白な世界だけが残った。

「芙蓉。」

後ろから声がして振り返ると、マダラが居た。

「マダラさま！ここは…？」

「お前の心の中だ。幻術でお前の意識の中に、俺の意識を侵入させた。」

「す、すみません。私、忍術の事は分らなくて…」

マダラは芙蓉と目を合わせて、写輪眼を発動させた。

…シン…

「あの…マダラさま？すみません、幻術ってこの白い世界の事ですか？」

その白い世界にも、芙蓉自身にも、何の変化は起きなかった。

「……」

何も答えずマダラは上下、左右、前後、全てを見回す。

本当に真つ白なだけで、何も見当たらない。

それを見て、芙蓉も同じように辺りを見回してみた。やはり何も見当たらない。

「何も無いな。」

「はい……」

「掌を見せろ。」

そう言つて芙蓉の両手を取り、掌を開く。細く長い白い指がマダラに向く。

両手の薬指には、左に金、右に銀の指輪がそれぞれ着いている。

「この指輪はなんだ？」

「これは……」

説明しようとしたが声が出ない。

暫く指輪を見つめて、これが何なのか、自分にも分からないことに気づく。

「これは、何か私にも分かりません。」

この世界、つまり芙蓉の心の中の世界で芙蓉は嘘をつくことは決してできない。

「お前は、千手のスパイなのか？」

「違います。」

芙蓉はマダラの顔を見て真顔で即答した。

「扉間とお前はどのような関係だ。」

「私は扉間さまのお家の女中です。」

マダラは合点がいった。

なるほど、女中の芙蓉と扉間の恋愛のもつれといったところか？

そのとたん、芙蓉がふらつとして倒れそうになった。

それをマダラが即座に支える。もうこれ以上は無理か…

夜風がふわりと芙蓉の頬をかすめていった。春の風はまだ冷たい。

しかし芙蓉の体は優しい温さに包まれていた。

そつと目を開けると、目の前にマダラの顔があった。

芙蓉はマダラに抱きかかえられた体勢で、自分の部屋の畳の上に横たわっていた。

「ま、マダラ…さま…つて、わーっ！すみません、私、あれ?！」

急いで起き上がろうとしたが、頭が痛く、目の前が回るような感覚に、再びマダラの腕の中に戻り身を任せた。

「いいから。大人しくしていろ。」

マダラはそのまま芙蓉を抱きかかえると、布団の上に芙蓉をゆっくり横たえ、隣に

座った。

「なにも覚えていないか？」

「は、はい……うたた寝でもしちやつてたかな……すみません、ご迷惑かけて。あの……私に何か御用でしたか？」

芙蓉は自分が幻術にかけられていたことも、幻術中のことも覚えていない様子だった。

「お前、扉間の女なのか？」

「はい☒……ち、違います！前もお話しした通り、ただの女中です。」

「一方的に好意を持たれていたとか、お前もあいつのことが好きだったとかは？」

「……」

……『俺の女になれ』……

芙蓉はあの時のことを思い出した。

「扉間さまは……もしかしたら私のこと、好いてくれていたのかもしれない。全く気が付きませんでしたけど。」

そう言つて芙蓉は目を伏せた。

芙蓉はこれだけの美人だ。しかもかなりの聡明さ。

扉間が芙蓉に一方的に好意を抱き、だがそれに応じなかつた芙蓉を、あの冷酷な男な

ら始末しよう考えるのは全く不思議ではない。むしろ、らしい、とすら感じる。

そう考えると、たかが色恋が原因で殺されかけた芙蓉は、かなり哀れだ。

マダラはそう思い、悲しそうな顔をして横たわる芙蓉の姿を見た。

寝る前だったのか寝間着を着ている芙蓉の胸元は少しはだけており、真つ白いふつくとした胸の谷間が見えていた。出会ったあの時、芙蓉を介抱した時のことを思い出した。

・・・俺、こいつのほぼ全裸、見てるんだった・・・

マダラは急に恥ずかしくなつて急いで立ちあがり、そそくさと出口へ歩いて行つた。

「…なかなか良かったぞ、今日の授業！ ゆっくり休め！」

「はい！ ありがとうございます!!」

さつさと出てゆくマダラの姿を見ながら、芙蓉は嬉しくて堪らなくなつた。



芙蓉が孤児院で勉強を教え始めると、その存在がたちまち知られることとなつた。

芙蓉は一応、ここでは「うちはと千手のいざこざに巻き込まれ負傷しているところを

マダラに助けられた、辺境の国の商人の娘」という設定だ。

扉間に嵌められて殺されそうになつた経緯は、マダラしか知らない。

「芙蓉ちゃん、いつ見てもメチャメチャ可愛いよなあ…」

「いや、彼女こそ絶世の美女だろ！」

「でもさ、なんでいつもうちは男着てるだらうなあ？そこも萌えるけど。」

芙蓉が休み時間や放課後に庭で子供たちと遊んでいると、男たちが芙蓉を一目見ようと集まってくるようになっていた。ただでさえ少ない女の数が、最近ますます減っており、美しい芙蓉は男たちの目の保養と心の潤いとなっていた。

マダラは芙蓉を見物に来てざわつく男たちを見て、芙蓉と出会ったあの時のことが頭をよぎり、少しばかり心配になった。

・・・同じ敷地に住まわせているとはいえ、俺もなるべくあいつに付いてやったほうがいいかもしれない・・・

「ねえ芙蓉さん。さすがに子供たちの前で男物の服をずっと着ているのも難だから、良かったらこれ、着て。死んだ娘ので良かったらなんだけど。」

孤児院で働く年配の女性が芙蓉に包みを渡した。

「…まあこんな素敵なお洋服を、しかもこんなに沢山。ありがとうございます！…でも、私なんかを着て、娘さん怒りませんかね？」

「ううん。喜ぶわ。娘もね、あんたと同じくらいの歳だったのよ。くノ一だった…」

「そうですか…。それではありがたく、使わせて頂きますね。」

芙蓉が少し複雑そうな顔で包みの中を覗いていると女性が続けた。

「そうそう、今あんたが着てる服も、マダラ様の弟さんの物だよ、きつと。」

「え？そんなんですか？マダラさま、弟さんがいらっしやったのですね。全然話して下さらないから、知らなかったです…」

「でもね、マダラ様はね…『弟殺し』って陰口言われてるよ。」

「…！」

「昨年、最後の一人の弟さんが亡くなってね。その死の原因が…」

女性がそう続けようとした時、芙蓉の見張りの上忍が間に入ってきた。

「芙蓉さん。帰る時間です。用意して下さい。」

そう言つて女性のほうをキッと睨む。女性は慌ててじゃあねと言つて姿を消した。

芙蓉がマダラの屋敷の居間に入ると、マダラが両目を抑えて苦しそうにしていた。

「だ、大丈夫ですか！マダラさま！」

芙蓉は慌ててマダラの背中に手を当て、顔を覗き込んだ。

「な、なんでもない。少し、痛んだだけだ…」

そう言つて手を除けると、目の前に芙蓉の顔があつて目が合う。

心配そうにマダラの顔を見つめている。琥珀色の大きな目に吸い込まれそうだ。

マダラは恥ずかしくなつて顔を大きく逸らした。

「目が痛むなら、冷たいおしぼり、作りましょうか……?」

まだこちらを見ている。思わず芙蓉を見返すと、見慣れない服を着ていた。「なんだ、その格好は。」

「孤児院の職員の方が下さったんです。亡くなった娘さんのとかで……」

袖が広がった長袖で胸元に花の刺繍が入った紺色の合襟の上着に、丈の短い女物の黒いズボンを履いており、腰は絹の紐でぎゅつと縛っている。とても女らしい服装の芙蓉に、マダラは思わず見惚れる。

「ダメですかね? あ、お借りしていた服はお洗濯してからお返ししますね。」

「あ、ああ。」

弟のことを思い出すと辛くなるが、思い出さないのも辛かった。

芙蓉が弟の服を着ている姿を見ると、少年の頃の弟を思い出した。

たった一人残った弟を絶対にと誓った頃の気持ちを思い出すことで、自分を戒めていたのかもしれない。

マダラの寂しそうな表情を芙蓉は見逃さなかった。

「でも時々、またお借りしてもいいですか?」

芙蓉はニコツと笑って見せた。

「…勝手にしろ」

マダラは芙蓉に背を向けて座り、書類の整理を始めた。任務に関する書類、うちは領地市民の暮らしに関わる書類、戦に関する書類：様々な書類を自宅に持ち帰り一人で処理をしているようだ。

芙蓉はその背中を優しい瞳で見つめる。

いつの間にか、芙蓉は心からマダラの力になりたいと思うようになっていた。

「お味はいかがでしたか？」

「悪く無かった。」

それを聞いてほっとしながら、芙蓉はマダラの食器を片づけ始めた。

芙蓉がマダラに幻術をかけられたあと、芙蓉はマダラの食事の用意も任せられるようになっていた。どうやらようやく無害な人間だと信用してもらえたようである。

「そういえば、マダラさまの好きな食べ物って、なんですか？」

「…いなり寿司…」

「なんだか可愛いですね！もつとこう、生肉！とかかと思っていました。あははは。」

「か、可愛いって…お前殴るぞ！」

「えっと、私が好きなものは…清酒かな。つてあ、それ食べ物じゃありませんね。あは。」

「訊いてねえ!!」

芙蓉は一人で憤慨するマダラを気にせずニコニコし、食器を重ね盆に載せ、自分の住

む離れへ持つて行こうとした。

「…お前も、俺と一緒にここで食べばいいだろ。」

「え、でも、失礼じゃありませんか？」

「俺がそうしろつつつてんだから、何も問題ないだろが。」

「では、明日からそうさせて戴きますね。あの、料理と片付けも、こちらでさせて貰える
とありがたいのですが。」

「好きにしろ。…そのかわり…明日は、いなりにしろ。」

「あはは。ハイハイ、分りました！」

「ハイは一回でいいっ！」

・・・やっぱこいつ俺のことナメてる気がする・・・

トントントントン…クツクツクツ…

芙蓉の手際の良い包丁の音と、空腹を刺激する美味そうな香りに、マダラは思わず少
し微笑んでいた。台所に目をやると、芙蓉がいなりの皮に酢飯を詰めている。

「あつそうだった…マダラさまは、いなり寿司の中つて、混ぜ寿司が良かったですか？」

「いや、混ぜ寿司は邪道だな。まあ不味くはねーけどな。」

「ああー良かった！普通の酢飯で作ってました。焦りました。」

そんな他愛もない会話が続き、夕食が整った。

いなり寿司の他にも、ほうれん草のお浸し、豆腐と山菜の吸い物、岩名の煮付け、牛の時雨煮、カボチャの煮物…色鮮やかな品が並んでいる。

「お口に合うといいのですが…」

マダラはさつそく、いなり寿司を口に入れる。

・・・やっぱつ。うつまつ！なんだこれっ!!!・・・

「…わ、悪く無いな。」

・・・毎日いなりでも良いな・・・

「良かったです。どれどれ…うん、美味しい。お店で出せそうです。」

「自分で言うか。」

「うふふ。学校でよく親友にお弁当を作って行ってあげていたんです。その子がいつも、『お店で出せるよ』って褒めていてくれたものですから。つい。」

芙蓉は樹の笑顔を思い出して、少し寂しい表情で微笑んでいた。

「親友か…どんな奴だったんだ？」

芙蓉は樹が千手一族のくノ一ということを思い出し、少し緊張する。

「背が高くて、手足も長くて、金色の長い髪に、青い目、凄く美人なんです。ちよつと男の子っぽいというか、とても頼もしい性格で、どんな時も私の味方をしてくれて、でもダメなことはダメって叱ってくれるし、本当に優しい子です。」

「大好きなんだな……」

「はいー」

マダラは少しその少女のことを羨ましく思った。

芙蓉は再びその少女に会えるのだろうか。



扉間はあの日、芙蓉に自分を拒否され、柱間とも自分とも結婚したくないと言われてから、芙蓉への愛情が憎しみへと変化していった。

いつそのこと、柱間を愛しているから結婚すると断言してくれたほうが良かった。

これから先、またどれだけの月日を、芙蓉を見て苦しみ続けなければならないのか……

いや、誰か、ほかの男に芙蓉が取られたら……

そんなことを何度も何度も考えているうちに、いつの間にか扉間は、芙蓉の存在を消すことを考え始めていた。

「手に入らないのならばいっせ、死んでくれ。」

簡単に殺して、死体を柱間に発見させるのもいい。兄の嘆き悲しむ顔も見てみたい。

しかし、今や千手のナンバー2として長の柱間を支え、うちは打倒の為、千手と共に生きる者たちの為、扉間は責任を果たしていかなくてはいけない立場である。そんな短絡的な殺人で、この大切な時期に失権するわけにはいかない。

そこで、芙蓉には「不確かだが、実質的な死」を与えることを思いついた。空知一族との協議は、扉間が取り付けたものだった。

実際にその協議は千手にとって必要なものであり、行うべき協議であったのだが、それを長同士レベルで設定し、自分ではなく、柱間が一人で行くように仕向けた。

柱間の留守、それが実行の時だった。

芙蓉は柱間のためだと言えば必ず従うので簡単に騙せる確信があった。

それに反することなく、芙蓉は素直に応じ自分の足で領地を出た。

領地の外で付添いの部下に殺させても良かった。だが、それではすぐに柱間に見つかってしまうし、柱間ならすぐにその犯人も突き止めるだろう。

不確かだが、実質的な死に必要なものとは何か。

それは、置き去り。

それも、敵地内への置き去りである。

うちの領地内に置き去りにすれば、千手を恨む忍たちに殺されるだろう。

すぐに殺されなくても、捕虜になり拷問の末死ぬか、それとも一生奴隷にされるか：

そして芙蓉はあれだけの美貌だ。戦況が不利な中で女に飢えたうちはの忍が、芙蓉に指一本触れないわけが無い。

・・・あの時、俺に抱かれなかったことを後悔すればいい・・・

いずれにせよ、芙蓉は二度と千手領地に帰ってくることは無いだろう。

柱間は今も扉間が芙蓉のことを愛していると全く疑っていない。お人好しで真つ直ぐな性格の柱間ならば、まさかその扉間が芙蓉を消すことを企てたと疑うことも無いだろう。

それはもう、疑いも無く“殺人計画”だった。

今年も庭の芙蓉の花が、何事も無かった様に美しく咲いている。また夏が来た。だがそこに芙蓉の姿は無い。

柱間は忍術書を広げた前で、うな垂れていた。

「兄者！落ち込んでいる場合ではないぞ。次こそ、うちはと決着をつける。」

「・・・ああ。解っておるぞ・・・でもお前は、芙蓉の事が心配ではないのか？」

「心配をしたからと言って帰ってくるわけでは無い。俺も感知や部下を使って探している。それに今は戦争中だ。戦に私情を持ち込むな。たとえ兄者だとしても死ぬぞ。」

柱間は庭の芙蓉を見つめた。

・・・もう愛する大切な人を失いたくはない・・・

(7) マダラとの恋。千手とうちはの決戦

戦闘服姿の忍が町中に増えた。どうやら戦が近づいているらしい。

芙蓉は胸が苦しくなった。

いったいどういう気持ちで居ればいいのか、分らなかった。

今日の授業でも少し集中力に欠けた。それは、何人かの忍の孤児が、戦の準備のために欠席しているからだ。

「アメ、今回は親父さんの仇を取れるといいな。」

「私のお父さんとお兄ちゃんの分も、仇を取るって言ってくれたよ！」

「アメモシラキも二人とも写輪眼開眼してるし、ぜってえ仇の千手を見つけれらるって
！」

「今度こそ、千手の忍を全員やつけて、皆の仇を取ってくれるといいなあ」

休み時間、そんな会話が聞こえてきた。

芙蓉はこれが銃後の状況なのだと初めて知った。

自分は忍の長の仏間に育てられ、柱間と扉間と共に育ったにも関わらず、何も知らなかった。

知ることを禁じられてきたとはいえ、忍の家族や子供たちがこんなふう生きていたなんて：知らなかった。とてもショックだった。

自分も、柱間と扉間がうちにはよつて殺されていたら、こんな風に憎んでいたのだろうか。

芙蓉はこれまで、幾度となく繰り返し返されている忍の戦に対して、なぜ話し合いで平和的な解決が出来ないのだろうかと考えてきた。

だが、そんなに簡単な事では無いのだとようやく理解できた気がした。

うちはと千手は、互いに相手から大切な人を守る為に戦い、相手の大切な人を殺す。そしてまた新たな憎しみが生まれ、憎み、恨み合う。

その連鎖は簡単に止められるものでは無い。

しかし、このまま戦い続けて相手を降伏させても、目の前のこの子たちと同じ存在は消えない。憎しみは、消えないだろう。

芙蓉は重い足取りで家に帰ると、庭でマダラが見慣れない忍具を振り、動きを確認している様子が目に入ってきた。

すぐにマダラが芙蓉の姿に気づく。険しい表情でこちらを見た。

「ただいま帰りました：すぐにお食事の準備をしますね。」

つい忍に関する事は見聞きしてはならないという癖で、見てはいけないものを見た

という感覚になり背を向けた。

「これはなあ、うちはの長に代々伝わる神器でな……」

マダラは気にせず芙蓉に言った。芙蓉は恐る恐る振り返った。

「お前。もしかして、敢えて自分で忍の事から遠ざかってきたんじゃないかねえのか？」

「……そうかも……しれませんね……」

芙蓉は悲しそうな笑顔で地面に視線を落とす。

マダラはその神器を持ったまま、芙蓉に近づいて行つた。芙蓉は驚いて後ずさる。

「怖いかな？」

ドキドキと心拍数が速くなる。恐る恐るその神器を見た。

「怖いです……もしかして、大切な人を……失うんじゃないかって。」

マダラは神器と自分のことが怖いかと訊いたつもりだったが、芙蓉の答えは少し違う

ようだった。芙蓉は涙ぐんでマダラの顔を見る。

芙蓉もまた、戦で大切な人を亡くしたのだろうか、マダラは思った。

「俺はな、弟たちを千手の忍に殺された。最後の一人の弟は、扉間によつてな。」

「……！」

マダラの目は怒りを写したかのように真っ赤に染まっていた。瞳には幾何学的な模様
様が浮かび上がっている。

マダラは芙蓉の前まで歩み寄った。

「弟は俺にこの目を残した。うちは一族を守るためにな。」

芙蓉は無言でマダラの顔を見上げ、瞳を見つめた。

「…綺麗な瞳ですね…弟様は今でも、マダラさまと一緒に生きていらつしやるのですね…」

綺麗。

写輪眼を見てそんな風に言われるとは想定外だった。しかも畏れないとは。

芙蓉にとって忍とは一体どんな存在なのだろうかとマダラは戸惑う。

「弟様は今も、マダラさまと一緒に綺麗な風景を見て、一緒に書類に目を通して、一緒に戦い、そして一緒に涙を流してくれているんですね。とっても優しい弟様ですね…」

芙蓉は涙を浮かべて微笑みながらそう言うと、マダラの写輪眼がふと消えた。

マダラは茫然とした表情で芙蓉を見る。

弟殺しとして仲間からも陰口を叩かれ批判されることが増えたマダラにとって、弟は共に在ると言ってもらえたことは、弟と自分を認めてもらえたような気持ちになった。

芙蓉は弟が今も、自分と一緒に生きていることを認めてくれたのだ。

嬉しかった。

だが、なぜここまで他人を、忍を理解することが出来る人間が、全く忍についての知

識を持っていないのか。

この時マダラの中に以前からあつた疑問が再び浮かび上がってきた。

「お前の大切な人つてのは、忍か？」

「・・・はい」

「なぜ忍であるそいつのこと、知ろうとしなかつたんだ。」

「・・・知るのが怖かつたから。色んなことに目を背けていたからです。」

そう言つて芙蓉は俯く。

「きつと、相手の忍の家族も、私と同じく大切な人の帰りを待つていたんです・・・それを考えるのが怖かつたから・・・だから、私はただ信じるしかなかつた。大切な人が、誰かの大切な人を殺してるなんて、考えたくなかつたから！」

芙蓉はそう言うとうずくまつて、泣き始めた。

マダラは片膝をつき、芙蓉の頭にぼんと手を乗せた。

「そうだつたんだな・・・お前も、辛かつたな。」

心外にもマダラは、柱間と夢を語り合つていた日々を思い出してしまった。

柱間が千手でさえなければ、もしかしたらあの夢を二人で叶えられていたかもしれない。
い。

芙蓉に、仲間に、兄弟に、こんな思いをさせずに済んだかもしれない。

だが今は、マダラは大切な兄弟全員を千手によって失ってしまったのが現実だ。今はもう、柱間を消し、一刻も早くこの戦いを終わらせるしか、うちはを守る道は、無い。

「明日、千手との戦に出る。」

「……!!」

「お前の大切な忍も死ぬかもしれないな。」

芙蓉は思わず顔を上げる。目は充血し、顔じゅう涙で濡れている。

「私は二人とも仲良くしてほしい！二人とも死んでほしく無いです！マダラさま、どうかご無事で帰ってきて下さい！」

芙蓉の言っていることはマダラにとって支離滅裂である。だが、自分のことも心配してくれているらしい。

「ああ。解った。」

マダラはそう言うのと芙蓉に手拭いを差し出した。

「拭け。お前いますぐ不細工な顔してろぞ。フフツ。」

「……。」

芙蓉は頬を膨らまし、急いで手拭いで顔を隠した。



「なんだと?! 柱間が居ない? しかもほぼ全てが空知一族だけの小隊とは…こちらとは、決戦しないつもりか!」

「そのようです。あちらは国からの任務を優先させたようです。しかも同時に我らの後方支援の道を破壊されました。既に退散し始めています。」

「おのれ柱間…総力決戦と見せかけて、こちらの戦力を見るだけのつもりだったのか…。空知一族は小隊での連携プレー能力はかなり高い。空知一族と会談していたのはこの為か。まあいい…。空知一族を捕まえて作戦の情報を吐かせろ!!」

うちは一族側は今回の戦いに総戦力で向かっていった。

現在の戦況はうちのほうが劣勢なのはマダラ自身も分っており、その上での作戦を練って挑んでいた。

しかし、千手側は正面から決戦することは無く、うちは一族が陣営を組んで一ヶ所に集まっている隙に、他国へ向かって火の国からの任務を空知一族の力を借りて実行したのだった。

「許さんぞ…柱間!」

マダラの目は怒りで写輪眼が浮かび上がっていた。



柱間と扉間、そして空知一族の長・カワモとその部下が千手一族の指令室で話してる。

「うちはの今の総戦力が解ったな。しかも迅速に任務を実行したお陰で、あちらの国のうちはへの後方支援の道と宿場を破壊することができた。今後の戦いが更に有利になったな。」

カワモが作戦図を改めて眺めながら、満足そうに言った。

「カワモどの、今回の協力感謝する。さすが空知小隊の連係プレーは最強ですな。」

「我ら空知一族も、これで千手の領地に駐屯地を構えられ戦力を強固にできる。そうなれば女子供も安心して暮らせる。ありがたい。」

話が終わり、カワモが柱間と二人で話しがしたいと、他の者たちを外に出した。

「柱間どの。これに見覚えはないだろうか？」

カワモは袋から何かを取り出して、柱間に見せた。

「……こ、これは！芙蓉のものです！」

「やはりか……今回の任務中、うちはの領地境界付近を捜査していた小隊が見つけたのだ。金の指輪の裏に、柱間どのと芙蓉どのの名前が書いてあったので、そうだろうと。」

それは芙蓉が首にかけていた、指輪の首飾りだった。

「……な、なぜそんな所で……詳しく聞かせてくださいなれ！」

「森の中で戦闘の痕跡があり、それを調べていた時に見つけたのだ。足跡やチャクラ、臭いは無かったから、もうかなり前の痕跡だろう。この首飾りが落ちていた草木には僅か

だが血が残っていた。だが周囲には死体はなかった。…推測だが、芙蓉どのはうちは領内に連れ去られたのかもしれない。」

柱間が手にした首飾りは鎖が切れ、血が付いて黒くなっている。嫌な予感しかない。

「カワモどの。その場所を教えてください。」

「勿論だ。だが、今行くのは止めた方が良く。今回のことでうちははかなり憤慨しているはずだ。領地内外の警備を厳しくすることは当然だが、もし芙蓉どのが生きてうちは領地に居るとしたら、どんな目に遭うかも分らん。刺激するような事はやめた方が良く。まずは、その場に行くよりも他の策を練る事だ。」

焦っていた柱間は我に戻り、カワモの意見に同意した。

「……じゃあどうすればいい。どうすれば……」



「扉間！これを見てくれ。芙蓉のものだ。空知一族の小隊がうちの領地境界付近の森でみつけたのだ。」

柱間は扉間に芙蓉の首飾りを見せた。そこには自分の買ってやった白金の指輪もあった。

「……間違いないな。」

「何か感知できないか!!」

「……この血は、芙蓉のものだな。」

「やはりか……芙蓉はうちの忍に危害を加えられた可能性が高いな。だが、なぜ芙蓉がそのような場所に居たんだ……。扉間、お前本当に心辺りはないのか？」

「無いな。だが芙蓉は自ら荷物を纏めて出て行っている。出て行く理由があったのだから。」

……そういえば、芙蓉は以前、俺に兄者とも俺とも結婚したくはないと言っていた。兄者が留守中に出て行くとは、それが理由かもしれないな。」

「なぜそのことを早く言わんのだ！」

「なぜ俺がわざわざそんなことを報告せねばならん。俺にはどうでも良い事だったから今まで忘れていただけだ。」

「そう言っていたのはいつ頃だ？」

「……昨年の夏。俺があいつと一緒に指輪を買いに行った日だ。」

……あの日か。そういえばあの日以来、扉間は芙蓉を避けるようになったな……

「結婚、したくない、か……」

「ほかに男が居たのかもな。」

「……!」

「男と駆け落ちして、うちの領内に入ってしまった所、襲われた…」

「ま、まさか！そんな！」

「推測だ。だが今は捜索に行く時期ではない。」

「解つておる…。やはり、うちには休戦協定の申込をするしかないな。」

「女一人のために休戦協定か。兄者、どうかしてるぞ。うちにはマダラを倒して降参させるほか道は無い！」

「いや。芙蓉のためだけではない。もうあちらも限界なはずだ。現に今回の総戦力の数もたったあれだけだ。亡命者や難民も日に日に増えていく。これ以上犠牲を出すわけにいかん。出来れば休戦協定から条約を結び、この戦を終結させたい。」

柱間はそう言うと、再び一人で指令室へ戻って行った。

◆ 稲穂が黄金に染まった田んぼが広がり、山には山葡萄や棗、あけび、柿が鈴生りになっている。

日暮れもずいぶん早くなり、十六時にはもう夕陽になっていた。

その日、初めてマダラが孤児院に芙蓉を迎えに来た。

「マダラさま〜！」「わ〜い、マダラさままだあ！」「マダラさま、元気でしたか〜？」

子供たちがマダラに群がる。

芙蓉の授業初日での出来事以来、マダラが学校へ行つて芙蓉との漫才のようなやり取りが何度も繰り返されるうち、それを見ていた子供たちにとってマダラは身近な存在となり、すっかり懐かれていた。

「マダラさま、もう授業おわっちゃったよ?」

「ばか! マダラさまは、先生のこと迎えにきたんだよ。」

・・・ば、バレてる・・・

「そうそう! 陽が沈むの早いから、先生ひとりで帰らせるの危ないもんね!」

・・・完全に、バレてるな・・・

「わたし、先生呼んできてあげるね。センサーイ! 彼氏が迎えにきてるよー!!」

マダラがズツコケそうになる。

・・・か、カレシ!!・・・

「違う。俺は、彼氏じゃない!」

「え? 違うの? 私ずつとマダラさまって先生の彼氏だと思つてた。」

「オレも。マダラさまにだったらセンサー譲つてやつても良かったのになあ。」

・・・さ、最近のガキはああつていうか、芙蓉はどんな教育をしているんだつ!・・・

「あ、マダラさま! どうなさったんですか? 何か御用ですか?」

「先生のこと迎えにきたんだよ。ねえ?」

子供のほうが先に答える。

「あら！ありがとうございます。ではすぐに準備しますね。」

「ねえねえ、先生はマダラさまの彼女じゃないの？ケツコンしないの？」

「？」

「マダラさまは先生の彼氏じゃないんだってさ。」「そうそう。」「ざんねーん。」

芙蓉は恥ずかしそうにしているマダラの顔を見て、ニツコリ笑って言う。

「マダラさまはとつても偉い人だから、先生なんて釣り合わないのよ。皆もマダラさまにあまり失礼なことを言つては駄目よ？」

「なんだってマダラさまは最強の忍だもんなあー！カッコいいよなあー！」

・・・だつたらもつとリスペクトしような！涙。・・・

「じゃあさ、先生は、最強の先生だよ！だつてマダラさまに対抗できるのつて、うちはじゃ先生しかいないもん！ねえ？」

アハハハハと子供たちに爆笑が起きた。

夕陽が傾き、辺りはオレンジ色になつてきた。二人の影が長く伸びる。

芙蓉はいつものようにマダラの斜め後ろ、三步ほど後ろを歩いている。

「おい…隣、歩けよ。」

「え？でも…男性の、しかもマダラさまの隣りを歩くんて…」

「俺は後ろに立たれるのが嫌いなんだよ！」

「そ、そうでしたが…分りました。じゃあ失礼します。」

芙蓉は大股で三歩歩き、マダラの隣りに立ち、マダラの顔を見上げ、嬉しそうにニッコリとした。

二人は再び、ゆっくりと歩きます。

風が吹き、小さなモミジの葉が飛んできてマダラの頭頂部の髪の毛にくっついた。

「マダラさま、髪の毛にモミジの葉っぱが付いていますよ。」

芙蓉は自分の頭の頂点を指さしてマダラに教えた。マダラは手で髪の毛をはたいたが、ギザギザした葉のモミジは、逆にマダラの髪の毛に絡んでいく。

「まだ取れてません…もうそのままでもいいのでは？可愛いですよ。ウフフ。」

「お前なあ！一番俺に対して失礼なのは、ガキどもじゃなくて、お前だろが！だからガキどもが俺に対してだな…」

「じゃあ取って差し上げましょうか？」

芙蓉が楽しそうに笑って言った。

「ああ…じゃあ、頼む。」

そう言うマダラは芙蓉の腰を持って体を持ち上げた。芙蓉の顔がマダラの顔の高さと同じ高さになる。

芙蓉は思ってもみないマダラの行動に驚き、固まる。

「…あの、なぜ持ち上げられているんでしょうか…?」

「なんで俺がお前に頭を下げなきゃならねーんだよ。ほら、いいから早く取れ。」

芙蓉は、ああなるほど、と思いつながら髪の毛に付いたモミジをそつと取り除いた。

それはとても鮮やかな赤色の美しいモミジだった。

「見てください。凄く綺麗なモミジですよ。」

芙蓉は抱えあげられたまま、マダラの顔の前にそれを差し出した。

思わず、モミジ越しに目が合う。

琥珀色の芙蓉の瞳は、夕日に照らされて黄金に輝いている。

芙蓉は優しく微笑み、モミジを自分のほうへ戻し、目線を落としてマダラに降ろして

もらうのを待っている。

その伏目がちな目のまつ毛はとても長く、夕陽を受けてキラキラと輝いている。

きゅつと結ばれて口角の上上がった唇はわずかに濡れて、こちらも輝いている。

チュツ・・・

二人の影が完全にひとつになる。

マダラの口づけはとても優しくかった。

むさぼるわけでもなく、吸い付くわけでもなく、そつと芙蓉の唇を包み込んでいる。

芙蓉は突然のことに驚きつつも、うつとりとした気持になり、目を閉じてその感触に浸った。

自分の心臓の音が聞こえてきそうなくらい、胸が高鳴っている。

・・・好き・・・私、マダラさまのことが、大好き・・・

そつと唇が離れ、再びマダラと目が合う。

マダラの端正な顔は近くで見るとますます美しく、芙蓉は恥ずかしくなる。

普段髪の毛で良く見えない大きな目はくつきりとした二重で、意外にまつ毛も長かった。吸い込まれそうな美しい瞳をしている。

芙蓉はマダラに見惚れそうになって、はっと我に返る。

「あ、あのーお、重くないですか!!私!」

「いや全然。」

芙蓉をぼんつと地面に降ろした。

マダラも自分の行動に動揺していたが、一方で達成感にも似た爽快な気分だった。

はと芙蓉の反応が心配になり、芙蓉のほうを見る。

先ほどのモミジを夕陽に照らしてみたり、よく観察してみたり、嬉しそうにしている。

「このモミジ、葉にして使おうかな。」

芙蓉も赤く染まったマダラの顔を見て、満面の笑顔を向けてきた。

「フツ・・・」

マダラは照れ隠しに笑ってから、前を向いて歩いた。



先のうちはの作戦の失敗により、マダラはますます一族の中で孤立していた。

「弟を殺して目を奪っておいでもこの程度なのか」

「あまりに独断が多すぎる。目的のためなら仲間も犠牲にするのか」

「こんな戦いが、いったいいつまで続くのか」

こんな意見がささやかれ、亡命者も更に増えた。町も明らかにすすんできた。

犯罪も増え、一般市民が犠牲になる事件も増えた。悪の連鎖でますます人が減ってゆ

く。

しかし、マダラは焦りではなく、怒りを感じていた。

千手を倒し、親兄弟の仇を討ってこの戦いを終わらせようという気概のある者は減り、

それどころか千手に亡命をする。うちは一族の誇りはどこへ行ったのか。

…コンコンコン…

指令室の扉を叩く音がした。マダラは入るよう促す。

「先ほど千手側から、このような書簡が届きました…」

部下がマダラに書簡を手渡す。マダラは封印を解き、書簡を開く。

それは、柱間からの休戦協定を申し込む書状だった。

マダラはそれを握りつぶす。

「なにが休戦協定だ…俺一人になっても必ず、千手を、柱間を倒してうちは一族を守る。」
マダラは書簡を破り捨てた。

最近では学校に来る生徒の数も減っていた。休校にさせられることも増えた。

芙蓉はこれからどうなってしまうのか、不安だった。

その心を写したように、空には鉛色の分厚い雲が垂れこめている。

「これ以上戦わずに、和解する方法は無いのかしら…」

誰もいない教室で一人、芙蓉は降りだした雨を眺めながら考え込んだ。

ガシツ！

「……!!」

突然後ろから何者かに抱き締められ、口を押えられた。

「静かにしろ…」

聞き覚えの無い若い男の声だった。強い力で抑えられており、体が全く動かない。

男が後ろから芙蓉の口に布を巻き、次に目にも布を巻かれた。

床に体を倒される。

・・・怖い！助けて・・・！

四つん這いで芙蓉に覆いかぶさり、芙蓉の両手を抑えて男が耳元で囁く。

「あんたのこと、ずっと好きだったんだ。俺はいつ戦で死ぬか分らない。一度でいいんだ。想いを遂げさせてくれ・・・」

男は忍のようだった。芙蓉の帯を震える手で解き始めた。芙蓉は必死に抵抗しようとするが、男の忍術で動けない。

こんな時なのに、床の冷たさに、生徒たちと床に円になって座って遊んだ時のことを思い出す。

教室の後ろにはマダラも居て、優しく子供たちを見ていてくれた。

・・・みんな・・・マダラさま・・・助けて!!!

ガツシャーン！「うおっ・・・」ドサツ！

ガラスの割れる音がして、同時に自分に覆いかぶさっていた男が居なくなる。

「芙蓉！大丈夫か！」

マダラの声だった。凄い速さで目隠しと口の布が外される。

芙蓉の顔を確認してすぐにマダラが芙蓉を抱きしめた。

「・・・マダラさま・・・怖かった・・・怖かった・・・」

芙蓉は何とか言葉を洩らし、マダラの腕の中で泣きだす。

「もう大丈夫だ。心配ない。」

マダラは優しく言い聞かせ、芙蓉の頭を撫でる。

芙蓉を襲った男はうちはの若い忍で、すぐに上忍たちによって連行された。

芙蓉は、襲われた日からマダラの住む建屋の一室に住むことになった。

新しい部屋はとても広く少し居心地の悪さを感じたが、隣の部屋にマダラが居ると思うと嬉しかった。

今日もまだ、マダラの部屋には灯りが付いている。

襖の間から伸びる細い光の筋に芙蓉の顔が重なる。マダラの様子までは流石に見えない。

思い切って布団から出て襖をノックしてみる。

「あ、あの…マダラさま？まだ起きていらっしやいますか？」

「ああ。」

「入ってもよろしいですか？」

「構わん。」

芙蓉は上着を羽織ってからマダラの部屋に入った。

マダラは忍術書や地図、計算が書かれた紙などを見ながら考え事をしていた。マダラの隣りには本と巻物が山積みされている。

「まだお仕事されているのですか？」

「ああ。もう少しやっつてから寝る。」

「お茶でも淹れましょうか？」

マダラは少し考えたあと、答える。

「茶も良いが、酒でも飲むか。お前、好きなんだろう？」

「え？あ、はい。でもよろしいのですか？」

「台所の食器棚の下に色々ある。お前の好きなの持ってこい。」

芙蓉は台所に行き、酒の瓶を開け香りを嗅いで、一番甘い香りのものを選び、一号徳利に酒を入れ、猪口と一緒に盆に載せて持ってきた。

「花陰か。お前なかなか良い酒選んでくるな。俺もこれ好きだぜ。」

「一番甘い香りがしたので、これにしてみました。」

芙蓉はマダラの猪口にそつと酒を注ぐ。

注ぎ終わるとあ！つと何かを思いついた。

「マダラさま！今日はとつても綺麗な満月なんですよ。月見酒にしませんか？」

そう言うのと襖を開け、縁側に出て空を指さした。

マダラも縁側に出る。

空には大きな満月が浮かんでいた。

辺りは月明りで明るく照らされ、庭のススキが銀色に輝く様がとても美しかった。「本当だな。そうしよう。」

芙蓉は盆と座布団を縁側まで移動させ、二人で座った。

改めてマダラの猪口に酒を注ぐ。酒の表面がゆらゆらと輝く。

「貸せ。注いでやる。」

「ではお言葉に甘えて。」

マダラによつて芙蓉の猪口にも酒が注がれる。

マダラはゆつくりと丁寧に注いでくれた。こういう所作に、マダラの繊細で優しい性格が垣間見れる気がする。

「乾杯」

二人は月を見上げて猪口に口を付ける。

「美味しいですね、これ！」

「ガキのくせに分かるのかよ。お前甘けりやあ何でもいいんだろ。梅酒でも飲んでろよ。」

「私ちゃんと成人してますよ？十九歳ですもん。その梅酒って美味しいんですか？」

「今度飲ませてやるよ。」

「…月、本当に綺麗ですね。あの、本当に月に人って居るんですかね？」

「かぐや姫ってやつか？どうだろうなあ。まあ俺たち忍が居るくらいだから、居るだろ。」

二人はたわいのない話を続けていたが、ふいに沈黙が訪れた。

最初にマダラが口を開いた。

「千手に最終決戦をしかける。」

「……そうなんです。」

あまり驚かない様子の芙蓉をマダラが見る。

「私、うちはと千手が戦わずに和解できる方法は無いか考えてみたんです。」

「……。」

「私の答えは、休戦協定を結んで、条約を作る事です。」

「解ったような口をきくな！」

「はい。私の正しいと考える道と、マダラさまが考える道は違います。でも自分が正しいと思う方を選んで、きつと私、心ではうまくはやれないと思うんです。」

「……？」

「私、マダラ様の事、大好きです。だから……愛する人の信じる道が、私の道なんです。」

マダラは茫然として、芙蓉を見つめた。

「あ、すみません……女から告白なんて、はしたないですよねっ。すみません……」

「今更はしたないもあるかよ……これまで散々俺のことおちよくつといて」
「……すみません。」

マダラは芙蓉をきつく抱きしめた。マダラの目には涙がうつつすらと滲む。

こんな心の奥から感じる温かさは、いつ以来だろう……

「俺も、お前を愛している。芙蓉。」

二人は見つめ合い、互いに気持ちを確認した後、口づけを交わした。

マダラは抱きかかえていた芙蓉をそつと布団の上に降ろして横たえる。

再び口づけをした。

芙蓉は緊張で息が早くなり、少し不安そうにマダラを見つめる。

「怖いか？」

「ちよつとだけ……」

「俺もだ。」

そう芙蓉の耳元で囁くと、その唇は芙蓉の首筋を伝い、何度も優しく口づけをする。

「んっ……あつ……」

思わず芙蓉は吐息を洩す。

マダラは芙蓉の帯を解き、寝間着を脱がすと芙蓉の真っ白い肢体が現れる。

月の光で青白く輝いて見える。左肩には出会った時の傷跡が残っていた。

マダラはその傷跡に口づけをした。その頬を、芙蓉は掌で優しく撫でる。「跡が残っちまったな。」

「でも、私とマダラさまが出会った記念だし……」

「記念って……。お前なあ……」

マダラは呆れた顔でクスツと笑い、自分も浴衣を脱ぐ。そして芙蓉の手を取り、細くて長い指をしゃぶる。

「ああんっ……」

指をしゃぶりながら芙蓉を上目遣いで見ると、目が合う。芙蓉は恥ずかしそうにそつと目を逸らした。

左手で芙蓉の右手を握ったまま、今度は芙蓉の右の乳房に吸い付く。

「ああっ……んっ……はあはあはあ……」

芙蓉の息がどんどん上がってゆく。

芙蓉の手を離し、腰から太ももにかけて優しく愛撫する。芙蓉の滑らかな肌は絹のようだ。

びくん、びくんと芙蓉の身体が上下する。

愛撫する手を芙蓉の股間に伸ばす。

ねっとり濡れて、それはマダラがくるのを待っていたように思えた。

濡れた場所を優しく何度も触る。

「…恥ずかしいです」

恥ずかしがる芙蓉を見て、更に愛おしさが増す。

「芙蓉、綺麗だ。」

胸の中央からへそまで舌でなぞり、次にわき腹から乳房まで舐める。

「あん…っ…マダラさまっ！」

マダラは芙蓉の両ひざを持ち、脚を開いた。

「いやっだめ。見ないでっ。」

「芙蓉、美しい眺めだぞ…お前は俺のものだ。」

芙蓉の膣の入り口に硬いものが当たる。

「い、いたいっ…」

芙蓉がマダラのほうを見ると、マダラの太い男根が自分に突き刺さっている。

「まだ奥まで入ってないぞ。」

マダラは芙蓉の腰を両手で掴み、ゆっくりと腰を前後に動かす。

その度に芙蓉の乳房が一緒に揺れる。その様子を見てマダラの腰の動きが速くなる。

痛みとともに、感じたことのない快感を感じる。

脳が痺れるような感覚である。そして芙蓉の膣がどんどん濡れてゆく。

「……あっつん！」

マダラの男根が芙蓉の子宮口まで達する。

芙蓉とマダラの鼓動が近づく。

そして、頂点で一つになった。

芙蓉は願った。

『マダラさまと二人で、一生一緒に生きてゆけますように。』

二人は裸のまま布団の中に居た。

芙蓉はマダラに抱きついて胸に顔を埋める。

「必ず、生きて帰ってきて下さいね。」

「当たり前だろ。いなり作って待ってるよ。」

「ふふっ。はい。」



「イズナはどうした。」

扉間が柱間の横でマダラに問う。

「この前の傷が元で弟は死んだ……うちはを守るために俺に力を残して！」

マダラが写輪眼を発動した目で扉間を睨みつける。

柱間が一步前に出て、落ち着いた様子でマダラに言う。

忍び寄る、眨める、騙し討つ、裏切る、嘘をつく…

柱間と扉間とマダラ。

三つ巴の戦いと同時に、うちのは忍と千手の忍たちの戦いが始まる。

これまでの戦い以上に、急速に壮絶さが増していく。

千手もうちはも皆、この戦いで雌雄を決する覚悟で戦っていた。

ついに柱間とマダラのサドンデス。

相手の一挙手一投足が、戦法を次から次へと塗り替えてゆく。

冷淡な時と引き換えに、思考、神経、チャクラが容赦なく犠牲になってゆく。

…いい加減、解つてくれよ…

唾とその感情を飲み込み、柱間は容赦なくマダラに攻撃をする。

…容赦などしない。邪魔だ、殴りたい、蹴りたい…

マダラは冷静さを失いそうな感情を飲み込み、柱間に反撃する。

一分一秒が、“知”で知を洗う戦い。

解決策はもう、相手が倒れるまで戦う他は無いのだ。

ならばその前提で賽を振るしかない。

サドンデスの行方は…？

二人の戦いは、もう扉間が手出しできるレベルの戦いでは無かった。

最高位の術と術のぶつかり合い。術が繰り出されるたび周囲の景色が豹変していく。部下たちに二人から遠ざかるように指示を出す。

「兄者…頼むぞ。」

…全部、意味が分からない。お前のその理屈も、正義も。

俺が正しい。お前を消す。ただ、それだけ…

本当にそれだけ、なのか？…

一日中続いた戦いの末、マダラは初めて地面に背を付けた。

「マダラ…終わりだ。」

扉間が刀をマダラの咽喉元に突っ立てる。

「…待て扉間。」

「なぜだ兄者！今がチャンスだろ…!!」

「手出しは許さん。」

柱間の静かだが大きな威圧に扉間が後ずさる。

「フン…いつそ…一思いにやれ…柱間。お前にやられるなら…本望だ。」

マダラは覚悟を決め、動かない体で目だけを柱間に向ける。

「かっこつけても無駄ぞ。長であるお前をやれば…お前を慕う若いうちのはの者が暴れ出す。」

「もうそんな芯のある奴はいねーよ……」

「いや、必ず居る。」

ザー……

柱間の背後から水の流れる音がしている。

「また……昔みたいに水切りできねーか？ 一緒に……」

「……そりゃ無理つてもんだぜ……俺とお前はもう同じじゃねえ……」

柱間がその言葉に反論しようとするのをマダラが遮る。

「今の俺にはもう兄弟は一人もいねえ……それに、お前らを信用できねえ……」

「どうすれば……信用してもらえぬ？」

その言葉に少し驚いてマダラは柱間のほうへ顔を動かす。

マダラの心はもう、何も感じられないほど傷ついていた。

頭ももう正確に回りそうにない。

誰が味方で、誰が敵なのか。

もう、みんな、消えてくれ。

『じゃあ、夢を諦める覚悟はある？』

一瞬、そう問いかけてくる芙蓉の顔が浮かんだ気がした。

「腑を見せ合えろとしりゃあ……」

今、弟を殺して見せるか…己が自害して見せるか。

それで…相子だ…そうすりやお前ら一族を、信用してやる。」

「ふざけた事いつてんじゃねーぞ、この…」

「…」

部下の一人がマダラに怒鳴るのを柱間がスツと手を挙げて止めた。

「言っていることが無茶苦茶だ！どうするんだ兄者！！…この俺を殺すのか？それともこんな奴の為に死ぬのか？…バカバカしい。こんな奴の言葉に耳を貸すな兄者！」

柱間は少し微笑んで立ち上がった。

「ありがとう。マダラ。やはりお前は情の深い奴だ。」

ガシャンツ！柱間は身につけていた甲冑を外して地面に落した。

「！」

「いいか扉間…俺の最後の言葉として心にしっかりと刻め…俺の命に代える言葉だ。一族の者も同様だ。」

そう言つて扉間と部下たちを見渡した。

「俺の死後、決してマダラを殺すな。今後うちとは千手が争うことは許さぬ。」

柱間はクナイを自分の心臓の前に構えた。

「皆の父とまだ見ぬ孫たちに賭けて誓え。…さらばだ」

柱間の目からは一筋の涙が流れた。

両親、兄弟、仲間たち、そして芙蓉の顔が浮かぶ。

川面に水切り石が投げられた。

届け・・・届いてくれ・・・

ガシッ！

マダラが心臓を突き刺す寸前の柱間の手を掴んだ。

「・・・・・・・・！」

「もういい・・・お前の腑は・・・見えた。」



「マダラさま!!」

芙蓉がマダラの姿が目に映った瞬間、マダラに向かって駆け寄り、抱き着いた。

「お、おい：恥ずかしいからやめろ。皆見てるだろが。」

「ご無事で良かった・・・お帰りなさい・・・」

周りに居た部下や市民、そして芙蓉の生徒たちがヒューヒューと歓声をあげ拍手する。

「やっぱり二人とも恋人だったんだね！」

「先生、マダラさま、おめでとう！お似合いだね、最強同士！」

「あー！マダラさま顔が赤ーい！あはははは。」

生徒たちが二人を取り囲んで囃し立てる。

「…お、俺の威厳が…涙。」

そう言いい苦笑しつつも、マダラも嬉しそうである。

・・・俺が消したかったのは柱間じゃなく、捨てきれない夢だったのかもな・・・
子供たち一人一人の屈託のない笑顔を眺めながら、マダラは思った。

食卓には大量のいなり寿司と、様々な料理が豪勢に並んでいる。

「そうですか…それは、本当に良かった。」

芙蓉はマダラの盃に酒を注ぎ終わると、感慨深い表情でその盃を見つめた。

長かった戦が、終わった。

マダラは和解決した経緯を芙蓉に話した。

芙蓉は少し不安そうな表情で箸を止め、その話を聞いていた。

「柱間とは再び友に戻ったのだ。うちはと千手は手を組む。そしてこれから、新たな里を作る！」

マダラは嬉しそうに盃を飲み干す。

芙蓉は、柱間が弟の扉間を殺すのではなく、自害を選ぼうとしたことに胸が痛んだ。……いかに柱間さまらしい。本当に優しく立派な方。そういう所が大好きだった。でも……

浮かぬ表情をしている芙蓉に気づき、マダラが言う。

「これでまた、お前も親友に会えるな。」

「え？あ、そうですね。元気にしてるかな……樹ちゃん。早く会いたいなあ。」

戦が終わわり、千手とうちはが手を組むことは心から嬉しい。

だが、これでマダラとの生活も終わってしまう。

自分が柱間と扉間の許嫁ということは、きつとすぐにバレてしまうだろう。

そうなれば、マダラは自分を嫌うに違いない……そう考えると芙蓉は泣きたくなくなった。

「お前……新しい里でも、俺と一緒に暮らさないか？柱間には俺から事情を話す。」

芙蓉はその言葉を聞いたとたん、思わずマダラの首に抱き着いた。

……許嫁のことがバレるまでの少しの間だけでもいい。

もう少しだけ……一緒に居させてください。マダラさま……ごめんなさい……

芙蓉は罪悪感に潰されそうになりながら、マダラの言葉にすがりついた。

「私も、ずっとずっと一緒に居たいです。マダラさま……愛しています。」

マダラは芙蓉の自分への愛情の深さを感じ、これからの新たな里づくりのなかに、自

分だけに降り注ぐ、まっすぐに温かい光を感じた。
「俺も、愛している。」

マダラも芙蓉を抱きしめた。

(8) 芙蓉・マダラ・柱間・扉間。夢の実現

初冬の良く晴れた日。千手一族とうちは一族は平和協力条約を締結した。

柱間とマダラが握手をすると大きな拍手が起こる。

「ようやくここまで来たな。」

「ああ。やつとな。」

こうして新たな里づくりが始まった。

火の国とも手を組み、国と里が同等の立場で組織する平安の国づくりも始まった。

条約締結後、少しだけ落ち着き始めた頃。

柱間はマダラに話があると喋ってうちへの領地にやってきた。

「今日は里づくりとは別件で、話があつてな。」

「おう。なんだ？」

「橘芙蓉という女を知らないか？」

「……！」

「今年の春から行方不明だな。空知一族との作戦の際、遺留品がうちへの領地内で見つかったのだ。」

柱間は、黒くなった鎖に金と銀の指輪が通された首飾りを取り出して見せた。

「……知っている。ここに居るぞ……」

「ほ、本当か!? げ、元気なのか!?!」

……金と銀の指輪。芙蓉の意識の中で見たのはこれだったのか……

「ああ。いま俺と暮らしてるぜ。」

「……!」

「春に芙蓉と千手の忍二人が領地内に侵入したところを、部下が見つけて攻撃した。それで怪我をしていたところを俺が偶然保護したんだ。まあ、二人の忍のほうは芙蓉を置いてさっさと逃げていたがな。……一般人である芙蓉を誤って負傷させた責任はこちら側にある。申し訳ない。謝罪する。」

「そ、そうだったのか……お前に保護されたことが不幸中の幸いだったぞ。いやーありがとう! で、さっそく芙蓉に会わせてくれんか?」

前のめりになった柱間の言葉を無視してマダラが答える。

「……一般人の芙蓉が、うちのはの領地内まで、何をしに来ていたと思う?……」

「……?」

「柱間、お前に重要な巻物を届けるためだ。」

「なんだと……!?!」

「何も知らない様だな。」

「誰が、芙蓉にそんなことを…！」

「扉間だ。」

「………!!」

柱間は思わず、床に視線を落として愕然とする。言葉も出ない。

「扉間がなぜ芙蓉にそんなことをさせたかは知らん。だが、間違いなく、芙蓉をうちには消させるつもりだったんだらうなあ。」

マダラがほくそ笑む。

「扉間……あいつ……」

「安心しろ。この件で争うつもりはない。」

「芙蓉は…何と言っておるのだ？」

柱間がマダラのほうへ身を乗り出して尋ねる。

「新しい里で、俺と暮らしたいとき。」

「……そう……か……分った。すまなかつたな……色々面倒をかけたよう。こちらこそ謝罪する。すまなかつた。芙蓉のこと、よろしく頼む。」

柱間は心ここに在らずといった感じだった。

「お前。たかが女中に、やけに熱心なんだな。」

・・・芙蓉。許嫁のことは言っていないのか。正解だ。バレていなくて良かった・・・
 「たかがとは何ぞ。子供の頃から家で手伝いをしてくれていた兄弟のようなものぞ！」
 「…そうか。お前がここに来たこと、芙蓉に伝えても？」
 「ああ。頼む。心配していたが無事で安心したと伝えてくれ。」
 「分った。任せろ。」

外は雪が積もり始めていた。風呂の湯気が窓の隙間から漏れては消えてゆく。

風呂場で芙蓉はマダラの背中を流していた。

「そうですねか…わざわざ柱間さまが来て下さったのですね。」

「あいつも、お前のことが好きだったりしてな！」

「…そ、そんな…それはないですよ。」

いま顔を合わせていなくて良かったと芙蓉は少し安堵する。

「ガキの時からずつと一緒なんだろう？それに天然な所はお前たちけっこ似てるしな。」

「…やめてください。嫉妬、してるんですか。」

「ハア!!ん、なわけねーだろ。なんで俺が…。いいからお前も一緒に服脱いで入れよ。」

「こんなに湯船広れーんだからよお！」

「それは無理です。」

「チィ。ホント頑なだよなあ。ほぼ毎晩、裸見てるし見られてるっつーの。」
バシヤアア！

「つつつめてえっ!!」

「いい加減にしてください。」

背中越しに芙蓉が不機嫌になっている様子が伝わってくる。

「・・・お前。本当に千手の領地に帰りたいと思わないのか？」

マダラは呟くように芙蓉に訊いた。

「はい・・・私はこれからもずっとマダラさまと一緒に居たいです。」

「そうか。じゃあ里に俺の家が建って住める状況になるまでここに居ろ。俺もここから里に通うから。」

「ありがとうございます。でも、通うのは大変では無いですか？」

「なに、忍の足なら里まで三十分あれば着く。大丈夫だ。」

「マダラさま・・・」

芙蓉は濡れたマダラの背中に抱き着いた。

「ほら濡れた。だから一緒に入ればいいだろ？」

「あり得ないです。」

「いや、太陽が西から昇ることレベルで拒否するなよ・・・」

マダラはけっこう凹んだ。

◆ 屋根には雪がうつつすらと積もり、落葉した芙蓉の木も白くなっている。

「どういうことだ、扉間。」

柱間がチャクラを荒だてつつも、冷静に扉間を見据えて問う。

「・・・あいつ自らが望んだことだ。断ろうと思えば断れたはずだ。」

「お前っ!!」

柱間は扉間の返答とその態度に激高し扉間を思いつき殴った。扉間は激しく床に倒れる。

「俺を殺すのか？あの時殺さなかったからな。」

「…なぜだ。なぜこんなことをした！芙蓉にいつたい何の恨みがあるというのだ！芙蓉を傷つけるなどあれだけ言っただけ！運よく助かっただけで、死んでいてもおかしくなかったんだぞ！現に左肩に重傷を負い、危ないところだった！」

「恨み？…あるな。あいつが俺たちの前に現れたこと、あいつの存在自体だ。」

扉間は体を起こし、口から流れる血を拭いた。

「お前、芙蓉を愛していたんじゃない？」

「言っただろ。あいつは、俺も兄者も二人とも好きだと言った。なのに、どちらとも結婚

はしたくないと言うんだぞ。俺の…今までの我慢はなんだったんだ！」

いつも冷静沈着な扉間が声を荒げ床をドンと叩いた。

「扉間……」

柱間は扉間が兄である自分に遠慮して、芙蓉への想いを我慢した結果、愛情が憎しみに変わったのだと悟った。

「…もう芙蓉はこの家には戻らない。だが二度と芙蓉に近づくな。いいな。」

「兄者は…いいのか？芙蓉が他の男のものになっても。」

「芙蓉が望むなら、仕方がない。」

「だったら…芙蓉の存在が消えた方が良いと思わないか？」

「扉間!!」

「けど実際は芙蓉が生きていることを知った時、安堵した自分も居たんだ。俺はずっと、芙蓉にどう接して良いのかすら分からなかった。いつも突き放すことしか出来ず、そのたび自己嫌悪になった。だが想いだけは募った。苦しかった。芙蓉が俺のものにも兄者にもならず、どこかへ行ってしまうかもしれないと考えた時、芙蓉を消そうと思っただ。…だが、芙蓉を消したところで芙蓉への想いはどうやら消せないようだ。…俺はもうやり直すことなど出来ない。だがせめて兄者は…芙蓉の気持ちを繋ぎとめてくれ…」

・弟をここまで追いつめたのは、この俺だ・・・

二人の間に沈黙が訪れる。

音もなく激しく降りしきり積もってゆく雪が、更に音を奪ってゆく。

芙蓉の木には厚く雪が積もり、その重さにじつと耐えているようだった。



「はい。それではここでの授業はこれで終了です。皆さん、今までありがとうございます。ありがとうございました。」

パチパチパチパチ…。

新緑が光り、庭にはハナミズキの花が満開に咲いている。

教室には生徒の他に、生徒の家族、一族の議員、上忍、そしてマダラが参観に来ていた。

最初は孤児院の教室から始まったこの学校も、今やうちは一族の殆どの子供たちが学ぶ立派な学校になっていた。

条約締結から半年ほどが経ち、新しい里づくりも順調に進んでいる。

そしてうちはこのこの学校も今日で閉校になる。二週間後からは里に出来た学校で千手の子供たちと共に学ぶことになっていた。

「芙蓉先生、これまで一年以上、本当にありがとうございました！」

孤児院の職員たちと子供たちから、大きな花束と寄書が芙蓉に贈られた。

「(こちら)そ…ありがとう(ござ)います。」

そう言つて涙ぐむ。そして姿勢を正して言う。

「ちよつとだけ私の話をさせて下さい…」

実は私、教師になるのが夢だったんです。でも絶対叶わないつて諦めてました。けどその一方、夢が捨てられなくて、勉強を続けていました。だから、このお仕事を任せて頂けて本当に嬉しかったです。マダラ様、上忍の皆様、議員の皆様、私みたいなよそ者に大切な役目を任せて下さり、本当にありがとう(ござ)いました。

皆さん、夢を持つてください。どんな小さなことでも良いです。そしてそれを叶える努力をゆつくりでもいいから、止めずに続けてください。例えもしその夢が叶わなかったとしても、それまでの努力はきつと次の夢への足掛かりになります。諦めないでください…つて、あ、ちよつとじゃなくなっちゃいましたね。あはは。」

教室から拍手と笑いが起こる。

マダラも大きな拍手を送った。

・・・芙蓉の夢が叶った。

そして、今度はこの子供たちの夢が叶う世界を、俺たちが作る。

責任重大だな・・・

マダラは改めて気を引き締めた。

「…以上、次の学校についての説明は終わりです。何か質問がある人はいますか？」

「ハイ！」

「はい。ミモザ君、どうぞ。」

「先生とマダラさまはいつ結婚するんですか？」

「えっ。ええええええ…」

教室から黄色い悲鳴が上がリ、生徒が一斉にマダラのほうを振り向いた。

「…ええええええええーっ！今それ俺が答えるのか？…」

マダラは固まるしかない。

「はい。授業と関係の無い事は放課後か休み時間に質問してください。次の学校でも
！」

「スルーかよ。つまんねー。」

「そっだよ。もう授業終わってるんだからいいのにねー。」

そーだ、そーだと生徒たちが質問したミモザに賛同して騒ぐ。

「…する。」

その声に生徒が静まり、教室に居る全員がマダラのほうを一斉に見た。

「新しい里が完成したらする。以上！」

マダラは腕を組んでそう叫び、真つ赤な顔で教室をツカツカと一人で出て行つた。教室がどつと沸く。子供も、大人も大騒ぎしている。

「芙蓉先生おめでどう！良かったわね！花嫁衣裳は任せてね！」

「せんせーおめでどう！今度はマダラさまの花嫁さんになるんだね！」

「先生の花嫁姿、超たのしみくお祝いしよーよ！」

芙蓉は苦笑するしかなかった。

一人自分だけを残して出て行つたマダラを恨む。

どうやら今、マダラに求婚されたらしい。

◆

「芙蓉——っ！」

「樹ちゃん!!」

二人は強く抱き合つた。

芙蓉は里に出来たマラダの家に引越し、ようやく樹と里で再会した。

実に一年以上ぶりの再会だった。

「芙蓉……良かった。良かったよ。私、芙蓉が居なくなつてからずっと生きた心地がしなくて、柱間様から芙蓉が無事って聞いて……早く会いたかつたんだから!!」

そう言つていつも気丈な樹が涙を見せた。

「樹ちゃん…心配かけて本当にごめんね。私も樹ちゃんに会いたかったよ…樹ちゃんは元気だった？」

「芙蓉が居なくて元気なんか出なかったよっ！あ、そうだった…」

樹が思い出して鞆の中から黒い筒を取り出した。

「卒業証明書。芙蓉のだよ。」

「ありがとう…でも、私も樹ちゃんと一緒に卒業したかったなあ…」

「うん…でもさ、聞いてるよ。あつちで学校の先生やってたんだって？芙蓉いつも先生になりたいって言ってたよね。夢が叶って良かったじゃん！」

「うん！女学校で勉強していたお陰だよ…」

「それが何よりの卒業証書じゃん？」

「そうかもしれない。ありがとう！」

樹は、以前よりもすいぶん大人びて色っぽくなった芙蓉の笑顔に、胸がときめく。

二人は木陰のベンチに腰掛けて、これまでの事を語り合った。

「それでさあ…柱間様と扉間様、どっちと結婚するのか、もう決まったの？」

「…どちらとも結婚しないつもりだよ。」

「ええ！なんで？」

「結婚したいとは、どうしても思えないからかな。二人の事は好きだよ。でもね、それっ

て恋愛じゃなくて、家族として好きっていうことが、この一年で分ったの。」

「そっか…やつと芙蓉も気づいたか！そうだよ、やつぱ許嫁なんてそんなもんだよ。芙蓉の気持ちに正直になるのが一番。私はいつでも芙蓉の味方だよ。」

「ありがとう…あのね、樹ちゃん。それと…私…」

「ん？どうしたの？何かあった？」

「好きな人ができたの。」

樹は後頭部を金槌で殴られたような衝撃を感じた。

「え…うそ…だ、誰？」

樹の動揺した、不安そうな顔を見て芙蓉は少し心配になりながらも答える。

「…うちはマダラ…さま。」

「マダラ!!嘘でしょ!!なんで敵だったうちはの長のマダラなんか…」

樹は芙蓉がこの一年間うちは領地内で保護されていたことは柱間から聞いて知っている。だが、まさかよりもよって、あのマダラを芙蓉が好きになるなんて…

「本当に優しい人だよ。樹ちゃんも会えばきつと分つてくれると思うの。」

「嫌だよ…だって、千手の忍はマダラに沢山殺されているんだよ。それにあいつだって自分の兄弟が千手に殺されたこと恨みまくってる。芙蓉はそれを知ってるの？今は和解してこうしてここまで里を作り上げてきた人だけど、私はそんな人、止めた方が良い

と思う。さつきはああ言ったけど、芙蓉が不幸になりそうな方向に行くのを黙って見てられないよ！」

樹が自分のことを心配して言ってくれていることは良く解っている。

「知ってる。でも私はマダラさまのことを、マダラさまが選んだ平和への道を信じてる。」

「芙蓉。それってさ、命を助けてもらって気持ちが一時的に傾てるだけだよ。ねえ、もう一度柱間様のことと見てみたら？あの人はこの里創設の一番の立役者で、必ずこの里の長になる。柱間様のほうが芙蓉に釣合う。悪いこと言わないからマダラはやめときな。ね！」

「でも、もう柱間さまのことは……」

芙蓉は罪悪感で少し心が痛み、困った顔をして俯く。

「仮にも芙蓉は柱間様の許嫁だよ？千手でその事を知らない人なんて殆ど居ない。それがもし、うちの長のマダラと結婚なんてことになったら、祝福してくれる人なんて誰も居ないと思う。芙蓉は芙蓉自身が思っている以上に本当に素晴らしい立派な女性なの！芙蓉は柱間様の、この里の長の妻になるべきだよ……もつと自分を大切に……お願い。」

樹が涙ぐみ、俯く。

「ありがとう。樹ちゃん。樹ちゃんは本当に優しいね。でもね私、マダラさまの心から愛しているの。初めて自分で決めた道なの。たとえ人から見て間違っているって思われる道でも、自分が決めた道を歩いて行きたいの……これからは。」

芙蓉がそう言つて、樹を抱きしめた。

「本当にありがとう。樹ちゃん、大好き！」

樹はこの芙蓉の『樹ちゃん大好き』発言にとても弱い。

結局、樹はこの発言に負け、今度マダラに会う約束をしてしまった。



芙蓉は樹と話をしたこともあり、やはりこのまま柱間に会わずに済ませることは出来ないと思つた。

まだ正式に婚約解消を申し込んでない。それに一応まだ、あの家の女中だ。育てて貰つた恩もある。不義理なことは出来ない。

芙蓉は思い切つて、柱間の所へ会いに行くことにした。

里はたつた半年で以前の千手領地よりも多くの建物が立ち並び、既に沢山の人が生活をしていて賑わっている。店も沢山ある。以前顔見知りだった店主たちが居ないか探してみるが、あまりに人と店が多すぎて見つけられなかった。

どうやらここまでの急速な発展は、柱間の木遁術の力によるところが大きいようだ。

「柱間の居るらしい里の管理施設にやってきた。建物は三階建だった。

芙蓉は上を見上げる。すると、ちょうど二階の窓から柱間の顔が見え目が合った。

芙蓉は一礼して、また柱間を見た。

「芙蓉…おかえり。」

「御心配おかけして、申し訳ありませんでした…」

柱間の居る指令室は広くは無いが、里を広く見渡すことが出来る。

日差しが椅子に座っている二人の足元を照らしている。

「いや。謝らなくてはならないのはこちらだ。扉間がとんでもないことを…」

「いいんですもう。むしろ私、扉間さまに感謝しているんです。」

そう言つてニツコリと微笑む。

「…?」

「今日は正式に、柱間さまと扉間さまとの婚約解消のお願いに上がりました。」

「芙蓉…ちよつと待つてくれ！俺は、今もお前のことを愛している。俺が扉間の考えに

早く気づけていれば、お前はこんな事にならなかつた。すまない…俺を許してくれ！」

「やめてください。柱間さまは何も悪くありません。私、気づいたんです…柱間さまと

扉間さまの事を愛している気持ちは、家族としての愛情だったのだと。」

「ならいいではないか。夫婦になり、新たな家族を作ろうぞ！」

そう言つて、以前芙蓉に贈つた金色の指輪を差し出した。

芙蓉は少し困つた顔をしてその指輪を見つめた。

「…この一年間でお前が変わつてしまつたのは仕方がない。だが、この新しい里で俺をひとりの男として見て交際してほしい。もちろん、女中としてではなく。」

「ごめんなさい…私もう…柱間の事を男性として愛することは出来ないと…思います…」

「…マダラのことを…愛しているのか？」

「…そうです。」

芙蓉の瞳から大粒の涙が流れて落ちた。心からの言葉だつたのだろう。

「そうか…確かにあいつは良い奴だ。まあ、俺には劣るがな！アハハハ…」

柱間は無理に笑顔をつくり笑つて見せた。その顔に芙蓉は更に心が痛む。

「お願いします。婚約を解消してください…どうか、お願いします。」

芙蓉は痛む心に負けてしまいそうになりながら、重ねて懇願した。

「分つた。解消しようぞ。だがな、俺もそう簡単にお前を諦めることはできぬぞ。マダラと比べて構わない。また俺のことも見てくれぬか？」

このまま身を引くことが芙蓉の幸せかもしれない。

だが、柱間の愛情も、そう簡単に諦められるほど簡単なものでは無かつた。

「…わ、分りました。」

本当はマダラと柱間を同時に見ることなど出来ないし、したくない。

だがここはこう答えるほか、芙蓉には言葉が見つからなかった。

「…それから、これまで育てて頂いた御恩をお返ししたいと思つています。」

「そんなことは気にしなくていい。充分尽くしてもらつてきたからな。」

「仏間さまが亡くなられる前に私に仰つたんです。恩を返すのは、何も結婚だけじゃないと…繋がりを持ち続けることが大切だと。」

「父上が、そんなことを…」

「だから私も、里の為、柱間さまの為にお役に立ちたいのです。それが私にできる恩返しだと思つて…」

芙蓉は窓から見える里の風景を眺め、目を細めた。

「うむ…では考えてみよう。だが…里の為に働くとなると、どうしても扉間と顔を合わせることになるが…大丈夫なのか？」

「正直少し不安です。でもお仕事ならば私情は持ち込みません。」

柱間は、芙蓉がずいぶん遅しくなつて驚いた。

「芙蓉自身は何かやりたい事はあるのか？」

「はい…できれば、教師として里の子供の教育に携わりたいです。」

「聞いておるぞ。うちまでの活躍ぶりは！そうだな、芙蓉には里でも教師として働いて

もらうのが良いかもしれん。どうだ、忍者アカデミーの教養科目の教師というのは？」

忍者アカデミーはうちでは教えていた子供たちが多く通う忍の学校である。芙蓉は心が弾むのを感じた。

「あ、ありがとうございます。ぜひお願いします！」

「では会議で芙蓉をアカデミー教師に推薦してみようぞ。」

芙蓉の嬉しそうな笑顔を見られて、柱間はほっとした。

話が済むと芙蓉は深々と頭を下げ、帰っていった。

帰る場所。それはマダラの家だ。

柱間はやりきれない思いで遠ざかる芙蓉の後ろ姿を窓から見つめていた。

友への信頼と嫉妬、芙蓉を助けられなかった後悔、弟への恨みと理解、芙蓉への変わ

らぬ愛……複雑な感情が入り混じる。

遠ざかる芙蓉の後ろ姿にはもう、女学校へ送り迎えをしていた頃の少女の面影は無かった。

まだ慣れない台所で芙蓉は苦戦しながら料理をしている。その背中にマダラが話しかける。

「今日、柱間の所に行ったんだってな。」

「あ、はい……」挨拶に……」

芙蓉は首だけマダラに向けて、料理を続ける。だがマダラから何を言われるのだろうか
と不安がよぎる。

「聞いたぞ。教師をしたいと申し出たそうだな。」

「はい。私も里の役に立ちたくて……まだ出来るか分らないですけど」

「会議で俺からも推薦しといてやるよ。お前なら大丈夫だろ。」

その言葉に芙蓉は人參を手にしたままマダラの方をぱつと向いて喜ぶ。

「ありがとうございます！嬉しいなあ。」

そう言つてまた、まな板の方を向いて人參を切り始める。その後ろ姿から芙蓉が嬉し
そうな様子がマダラにも伝わってくる。マダラは立ち上がり、台所の芙蓉に近づいてい
く。

「……他には、何を話したんだ？」

芙蓉の手が止まる。

「扉間さまの件で……私は気にしていませんと、お伝えしておきました。」

「教師になれば里の会議などにも出席することになるが、扉間と顔を合わせても大丈夫
なのか？」

芙蓉は再びマダラの方を振り返る。

「はい…お仕事ですから私情は挟みません。里の為、私もマダラさまと頑張ります！」
「無理、すんなよ。」

マダラはそつと後ろから芙蓉を抱きしめた。

「あの…マダラさま。実は私、マダラさまに言わなければならないことがあって…」
「なんだ？」

芙蓉は料理の手を止め布巾で手を拭き、マダラと向かい合う。

「私と柱間さまと、扉間さまの関係の事です。」

「……。」

「私が仏間さまに引き取られたことはお話ししましたが、女中という立場だけではなく、柱間さまと扉間さま、そして当時ご存命だった板間さまの許嫁として引取られたんです。」

「……！」

「今日は、お二人との正式な婚約解消のお願いに行ってきました。」

「……幻術で芙蓉の心の中で芙蓉に質問した時、確かに許嫁などとは言わなかった。なぜだ？あの世界では決して嘘などつけるはずはないのに！」

「そうか。あの時見た金と銀の指輪は、柱間たちから貰ったものだったのか。」

「しかし、その指輪も何か判らないと答えていたが……」

「それをずっと俺に隠してたってわけか。」

「申し訳ありません！私が許嫁だと言えば、私が取引の材料にされて柱間さまや千手の皆さんにご迷惑をおかけすると思っただんです。そして、保身のためです。うちはの領地内で生きていくにはそうするしかないと思いました。マダラさまのことが好きになつてから、ますます言えなくなつて…本当にごめんなさい！」

芙蓉の話を聞きながら、マダラは柱間との昔の会話を思い出した。

『俺、イイナズケ、いつからさ！』

・・・そうか。あいつの許嫁は芙蓉のことだったのか。

確かに可愛いし、美人だな。柱間・・・

あの時の柱間の嬉しそうな様子を思い出し、目の前の芙蓉を改めて見据える。

「マダラさま…怒つてらっしやいますよね…？」

芙蓉がすがりつくような目でこちらを見ている。今にも泣きそうだ。

・・・俺は友の愛する女を、知らなかったとはいえ奪つたのか・・・

マダラは胸にちくりとするものを感じる。

・・・皮肉にも弟を殺した扉間の謀がなければ、俺たちは出会わなかったってことか・・・

マダラは、芙蓉との出会いは弟・イズナの導きだったのかもしれない、そんな風に考えた。

「お前の事情は理解できる。それに今はもう俺の女だ。そうだろ？」

「……マダラさま……私を許して下さいるんですか？」

「……ああ。」

「私、ずっとマダラさまを騙しているようで辛かったです……何をどうするのが正しかったのでしょうか……」

マダラに許してもらったとはいえ、芙蓉は落ち込む。

「俺がお前でも、同じことしたと思うぜ。そんだけお前は馬鹿じゃないってことだ。いいだろ、もう。」

芙蓉は恐る恐る、マダラに抱き着く。

「許す代わりに、今日一緒に湯船に入れ。もちろん裸でな。」

「ええええええええ……そんなあ……」

その夜、芙蓉は泣く泣くマダラと一緒に入浴した。



柱間と扉間は、里に出来た新しい屋敷の部屋に居た。

庭には柱間が移植した芙蓉の木が植えられている。蕾はまだついていない。

「今日、芙蓉が来たぞ。婚約を解消してほしいと言ってきた。当然だな……。」

「兄者はいいのか。」

「お前が芙蓉にしたことを考えれば仕方ないことだ。だが……これからは許嫁ではなく、ただの一人の男として見てほしいと伝えた。」

「そうか……」

扉間は柱間から顔を背けて頷いた。

「それから芙蓉は里の為に自分もなにか出来ないかと言ってくれたぞ。出来れば教師として教育に携わりたいそうだ。明日の会議で芙蓉を忍者アカデミーの教師に推薦しようと思つてゐる。だが、扉間、お前はもう芙蓉に仕事以外で近づくなよ。」

「分つてゐる。だが、俺は忍者アカデミーの教師にするのは反対だ。あいつは女学校のほうが向いてゐる。いくら基礎教科目のみを教えるだけだとしても、忍の知識が全くない奴がアカデミーの教鞭をとることは、里の教育方針に合わん。」

「教育方針にのつとつて授業をすれば問題ないではないか。」

「アカデミーには既に忍の教師が揃つてゐる。それに教師というのは授業だけして終わりの仕事ではないだろう。子供の成長への影響力が大きい。」

「要は芙蓉の人格では、アカデミーの教師に相応しくないと言いたいのか?」

「そこまでは言つてない。だが里設立の大切な時期だ。素人よりも忍に、忍の里としての在り方を教育させるのが正解だ。」

「うむ……俺は芙蓉にはぜひ忍者アカデミーで教えてほしいのだが……」

「それは個人的な感情だろ？感情で決めるな。とりあえず議会で決める。」

柱間は扉間が起こした謀を、罪に問わなかった。

扉間がした事は許されることではないが、それをさせた責任が自分にもあると感じていた。また、いま扉間に居なくなられたら里創設に多大なる支障が出る。

柱間は事件に目をつむった。

扉間は柱間の優秀な補佐として力を発揮し、今もこうして柱間に対して当然に意見する。

「資料で配っている橘芙蓉を忍者アカデミーの教師に推薦したいのだが、皆の意見を聞きたい。」

「我々うちは側からも、同じく彼女を推薦する。」

「……！」

柱間の言葉に続いて発言したマダラの言葉に、千手の上忍たちがざわつく。

「彼女はうちではで保護をしている期間中、多くの子供たちに国語と算数、理科を教えて貰っていたが、とても優秀だった。適任だと思う。」

マダラの発言に、うちは側の上忍が揃って頷く。

「俺は反対だ。一般人であり、忍について全く知識のない橘芙蓉の指導では、十分に里の

教育方針に即した指導が出来るとは思えない。橘芙蓉には……」

扉間は昨夜柱間に反論した意見と同じことを言い、反対に女学校教師に向いている理由を説明し始めた。

「……よって、橘芙蓉は女学校の教師として適任だと言える。」

マダラは無表情で、芙蓉を女学校の教師に推す扉間を見ていた。

「マダラ様の意見も解るが、扉間様の意見のほうが良いと思うな。いくら優秀でもあの花嫁学校同然の女学校で主席だったのなら、なおさら女子相手に教えた方が良いのでは？」

「橘芙蓉は、女学校に行く前から父・仏間から長年勉学の指導を受けており、剣術にも優れている。忍の知識はなくとも忍の一家で育ち、忍の精神は解っているはずだ。」

柱間が議員に反論する。

「俺は実際に芙蓉の授業を見てきたが、頭脳明晰で学問の知識に於いては並の忍よりも断然優れている。これからの忍は忍術だけではなく、学問も学んで忍術に活かすべきだと思うがな。」

柱間の意見に賛同する形でマダラが発言した。

「でも、そうは言ってもアカデミーの教師はもう足りているんでしょう？ならばそこまですべてアカデミーの教師にしなくても。」

「確かに。橘芙蓉がアカデミーに必須な人材とまでは言えないな。」

「やはり扉間様が仰るように、女学校の教師のほうが彼女にとつてもいいのではないかな？」

多数決を取ることになった。

その結果、扉間の意見が支持され、芙蓉には女学校ならばと教師の許可が出された。

「残念だったな。柱間。」

「そうだな…。せっかかうちは側も推薦してくれたのにな。」

「俺がもつと口が達者なら、芙蓉の素晴らしい教師っぷりを解説できたんだがな。」

「お前、それ以上達者になってどうするんだ。充分達者ぞ…」

「まあ芙蓉が望んでいた教師って仕事には就けるんだ。あいつも喜ぶさ。」

「そうだな。芙蓉に…伝えてやってくれ。」

「ああ。」

そう言つて右手を挙げて歩いてゆくマダラの背中を見ながら、柱間は自ら芙蓉に報告できないことを悲しく思った。

マダラの帰る場所には、芙蓉が待っている。

(9) わだかまり

今年植えられたばかりの紫陽花が咲いている。

梅雨に入ったのだろうか。雨の日が続き、建設ラツシユのスピードも一時的に緩やかになって見える。

傘を差して行き交う人のなか、樹は紫色の和紙が張られた傘を差し歩いてきた。

「緊張するなあ……。ああ、何しやべろう。」

この日樹は芙蓉に招待され、マダラの家に向かっていた。

片手には、芙蓉の好きなおはぎが並ぶ箱が入った風呂敷包みを下げている。

ふと足を止めて次から次へと雨が落ちてくる空を見上げた。

マダラと二人で暮らしている芙蓉の姿を想像するだけで、心配と不安、そして嫉妬で胸が苦しくなり、足取りまで重くなる。

なぜ自分は男に生まれて芙蓉に出会えなかったんだろう……

芙蓉に初めて出会った時から、何度も何度も考えてきたことを、また考えてしまう。

「樹ちゃん、いらっしやい！雨の中来てくれてありがとう。濡れたでしょ？」

芙蓉は手拭いで樹の肩や腕、脚の水滴を拭いた。

樹は芙蓉に触れられて緊張している胸が更にドキドキする。

「あ、ありがとう！あ、これ、芙蓉の好きな蝶屋のおはぎだよ。玄関先でごめん。」

「わあ！嬉しいありがとう！蝶屋、里にも出来たんだね。今度一緒にお茶に行こう？」

「うん！」

「おう。お前が樹か。よく来たな。まあ上がれ。」

・・・うわっ！いきなり本人出てきたよ・・・

マダラが廊下を歩いてやってくる。

「初めまして。千手樹です。お招き頂きましてありがとうございます。ごさいます。」

樹は芙蓉の話で聞いていた通り、背の高い美人だった。

だが思っていたよりもしっかりした性格に見える。意志の強そうな切れ長の青い目

と面長の凛々しい顔、スツと伸びた背筋の姿は、まるで男装の麗人のようでもある。

「マダラさま。樹ちゃんがおはぎを持って来てくれましたよ。」

「樹。感謝する。」

マダラの後ろを芙蓉と並んで歩き、部屋に入る。

客間の座卓の上に芙蓉の作った色鮮やかな料理がずらりと並んでいる様に、樹が驚く。

「うふふ。樹ちゃんが来るのが嬉しくて、つい張り切っちゃった。里が出来て色んな所から色んな食材が集まるから、料理するのも楽しくなったしね。」

「と言つても作り過ぎだろが、これは。：樹、沢山食つてくれ。」

「は、はい。」

芙蓉はマダラの隣りではなく、樹の隣りに座った。樹の顔を見てニツコリする。

「：マダラさまの隣りに座らなくていいの？」

樹が小声で訊く。

「：うん。樹ちゃんの隣りに居たいから。」

そう言つて芙蓉は微笑み、樹のぐい呑みに酒を注ぐ。

「そう言えば、樹ちゃんとお酒を飲むのは初めてだね！」

「あ、そうだね！外じゃお酒飲めないしね。」

二人が楽しそうに会話し始めたのを見て、マダラが咳払いする。

「お前たち、俺が居ること忘れてるだろ。」

「あら。マダラさまが拗ねちゃった。すみません。でも今日は樹ちゃんが主役ですよ。」

・・・そ、そうなのっ？俺だと思つてた・・・

マダラは焦りつつ酒を飲み干す。

「樹ちゃん。気にしないでね。マダラさますぐ拗ねるから。」

「おい！なんだそれ！変なこと言うな。」

マダラが文句を言いながらさっそく好物のいなりを口に運ぶ。

「芙蓉の作つたいなりは絶品だぞ。お前も食え。」

「いただきます。：うん、すつごく美味しいね。芙蓉の作るものは何でも美味しいけど、これはかなり美味しい。これもお店で出せる！里の名物になつちやうかもよ？」

・・・あ、本当に出た。『店で出せる』発言・・・

「もう！樹ちやつたら褒め過ぎだよ。ありがとう。樹ちゃんも沢山食べてね。樹ちゃん好きな南瓜の従妹煮も作ってるからね。」

「：あの、マダラさまは好きな食べ物は何ですか？」

樹はマダラとの話の糸口が見えず、思いついたことをとりあえず言ってみた。

「……………」

・・・あ、黙った。なんかまずいこと言ったかな。・・・

「マダラさまの好物はね、それ。今食べている、いなり寿司だよ。」

「なんか、可愛い。」

思わず樹は思ったことをそのまま言ってしまった。

「でしょ!!可愛いよね。顔に似合わず。」

「顔に似合わずは余計だ！てか、その可愛いってホントになんだよ！俺を誰だと思って

るんだ。……ったく。」

芙蓉と樹は顔を見合わせてクスクス笑う。

「……いえいえ、そのギャップが良い感じですよ。ほら、忍には意外性も大切だって言うじゃないですか。」

「そんな意外性で戦に勝てるか!」

あはははは!

二人が大笑いし場の空気が一気に和む。話が弾みはじめた。

「あの、芙蓉がうちではで教師をしていた時のこと、教えて貰えませんか?」

「ああいいぞ。芙蓉はな、*「最強」*の教師だったんだ。だよな?」

酒が入ったマダラが、楽しそうに芙蓉に同意を求める。

「もう。子供たちの言葉を鵜呑みにして……」

「最強?なにそれ?」

「芙蓉は最強の忍の俺に対抗できる、唯一の教師だったんだ。」

そこからマダラの話が始まった。

芙蓉が教師をしたいと言い出した時の話、教師初日の話、子供たちとの関係、そして頭脳明晰で素晴らしい指導ぶりだったことを樹に語った。

目を輝かせて話すその様子は、心から嬉しそうだった。

樹はそのマダラの話の聞きながら、マダラがどれだけしつかりと芙蓉の事を見ていて、理解

していたのかを実感し、嬉しかった。

「この人は、本当に芙蓉のことが好きなんだ。私と同じくらい、芙蓉の良い所、よく解つてんじゃない。」

「芙蓉……本当に良かったね。芙蓉のことを、これだけしつかり解つてくれている男性（ひと）に出会えて。」

マダラの話が終わわり、樹は芙蓉を見て微笑みながら言った。

「うん。ありがとう。樹ちゃん。」

「マダラさまも！こんな超美人で、スタイルも良くて、色白で、優しくて頭が良くて、料理が上手くて、剣術も上手くて、歌も書も絵も上手くて……世界で一番素敵な芙蓉と出逢えて良かったですね！」

樹は少し涙ぐんでマダラに微笑みかけた。

「……ああ。そうだな。ありがとう。樹。」

マダラも少し笑顔になって樹に答えた。とても優しい笑顔だった。

「これ、なんかいなりに似てないか？中、酢飯じゃないよな？」

「言うと思つた笑。」

この時マダラは黄粉のかかったおはぎを初めて食べた。

マダラの問いに、二人は声を揃えて笑って答えた。



樹は書類の整理をしながらブツブツと呟く。

「なーんで私が柱間なんかの秘書をやらなきゃいけないのよ！もう芙蓉と婚約解消したんだしよ。私じゃなくても他のくノ一でいいでしょ！」

「ん？どうした、樹。一人で何をブツブツ言ってるのだ？火の国へ持って行く書類は纏めてくれたか？」

「あーはいはい。出来てますよ。」

不機嫌そうに書類を柱間に手渡す。

「なんだか今日は機嫌が悪いようだのう。どした？俺で良かったら相談に乗るぞー！」

樹は柱間に直々に頼まれ柱間の秘書になった。

断りたかったが両親が大喜びして絶対に断るなど迫られ、しかたなく今ここに居る。

「……私から芙蓉のことが聞きたいんでしょ？魂胆見え見えだつーの。未練がましい奴！……」

「なんでもありませんー！あの、もう仕事も全部終わりましたし終業時間なので帰ってもいいですかー？」

「ああ。ご苦労だったな。ん、この資料良く出来ておるな！さすが優秀ぞ。じゃ、明日もヨロシク。…あ…そのお…最近、芙蓉は元気か？」

…ほーら、来た…

「最近会ってませんので。彼女もうちの学校で教師を始めて忙しいですから。」

嘘だ。先日マダラと芙蓉の住む家に招かれて行ってきた。

樹はマダラが芙蓉の事を心から愛していることを知り、芙蓉のとても幸せそうな顔を見て以来、二人の關係に賛成している。

「そうか…じゃあ明日にでも学校を覗いてみるかな。」

「個人的な用事で職場に押し掛けるのは芙蓉に迷惑になると思いますが？」

「いや、違う、その…俺は芙蓉の仕事ぶりを確認するだけで…」

全然誤魔化しきれていない。

「芙蓉の仕事が信用できないんですかあ!! あり得ないし…あ。芙蓉の仕事ももう直ぐ落ち着くだろうし、そろそろ結婚するんじゃないですかねー。あの二人。」

樹は嫌味を込めて言った。本当はもう柱間に敵対心を持つ必要は無いのだが、自分を利用して芙蓉の情報を得ようとしているところが気に入らない。

「け、結婚!!」

「マダラさんと芙蓉、お似合いですよねえ。美男美女で。」

「二人は結婚するのか！」

「知りません。ただそんな風に思うだけです。…もう、いい加減諦めたらどうですか？」

「……………」

柱間はずうーんと、かなり落ち込んでいる。

「あの！学校でそういう話、芙蓉にしないでくださいね。公私混同禁止ですから！」

「わ、分つておるぞ…大丈夫ぞ…」

「ならいいですけど。これ以上芙蓉を困らせたなら私、いくら柱間様でも、許さないんで失礼します。」

◆ 　　そう言い放つて樹は帰って行つた。

真つ白な半袖ブラウスの襟元に紺色のリボンを結び、萌黄色のスカートを履き、編み上げの革靴を履いた少女たちが、まだ木の香りが残る校舎を行き交う。

里に移転した女学校は、これを機に新しい制服に変わっていた。

楽しそうな少女たちの笑い声が、平和を象徴する鐘の音のごとく響きわたる。

「芙蓉先生、数学で解らない所があるのですが。今質問いいですか？」

「いいですよ。…ああ。この問題はね、まず分数から解いていきます。次に…」

芙蓉が女学校で教師を始めて、もうすぐ二ヶ月が経とうとしている。

数学の質問をしてきた生徒に、廊下で教えている時だった。

見覚えのある、いや忘れることのできない銀髪が目に入ってきた。

扉間が校長とくノ一専門教科の教師、三人で何かを話しながら歩いてくる。

「芙蓉先生、どうかしました？…あつ！扉間様だ!!相変わらずカッコいいなあ〜！」

芙蓉が生徒のノートに視線を戻し説明を再開する前に、生徒が扉間の存在に気が付き浮かれ始めた。

廊下に居る少女たちも扉間の登場に色めきだつた。

どうやら扉間は女子生徒たちから人気があるようだ。

そんな少女たちなど気にも留めず、扉間は話を続けながらこちらへ近づいてくる。

芙蓉は心が苦しくなる感覚を必死に堪え、扉間に会釈をした。

扉間はすれ違いざまに芙蓉を一瞬見たが、何も言わずに通り過ぎて行った。

まだ芙蓉の心臓はバクバクと音を立てている。

「もう扉間様、行っちゃいましたけど…？」

頭を下げ続けている芙蓉に向かって生徒が不思議そうに言った。

「あ、ごめんなさい。えっと、それでさっきの問題の続きね…」

「あ、もう大丈夫です。解りました。…あの、所で芙蓉先生って以前、扉間様の許嫁だったんですよね？私の姉が先生の後輩なんです。ていうか今も先生の入学式の話、この学

校では伝説ですよ。なんで許嫁を解消しちゃったんですか?」

この年頃の少女は好奇心旺盛で、特に恋愛話は大好物だ。遠慮することもなく、芙蓉に直球で質問する。芙蓉はたじろいだ。

「わ、私が扉間さまと、柱間さまに振られたんです。それ以上は秘密です。」

「へー!先生みたいな超美人を振るなんて理由が気になるう!あ、でもそのお陰でこの学校の生徒、柱間様と扉間様の妻の座を狙ってる子、大勢いるんですよ。」

生徒はそう言つて、扉間の通り過ぎた廊下で未だ色めきだっている生徒たちを見回した。

「そ、そうなんですネ…じゃあ、私も皆さんが素敵女性になれるようにしっかり指導しないとな。」

「そんなことより、扉間様と柱間様の好きな女性のタイプとか教えて下さい!あ、ちなみに私は扉間派です。ウフフツ。」

「…そ、そういうことは教えられません。恋愛もいいけど、勉強もしっかりね。」

「ハァーイ。ありがとうございます。失礼します。」

「言葉遣いもね!」

芙蓉の注意を無視するように生徒は小走りで教室へ戻っていった。

薄々感じては居たが、ここではやはり自分の許嫁の件を知っている生徒が殆どのよう

だ。

そしてしかも、それが少女たちにある意味希望を与えていたとは、複雑な気持ちになる。そして扉間が生徒たちから人気があることにも、どこか不安を覚える。

仕事を始めるにあたって覚悟はしていたが、女学校で扉間と顔を合わせるなんて……まだ少し動揺が収まっていない。

「気にしない。気にしない……」

自分にそう言い聞かせながら、芙蓉は荷物をまとめ職員室から出て、校門まで歩く。

ふと昔、週に何度も柱間と扉間が交代で迎えに来てくれていた事を思い出し、立ち止まる。

「扉間様、カッコ良かったよね！今度はいつ来てくれるかな？」「ていうか先生として毎日来てほしいよね」「あくお話してみたいなあ」「あのクールな所がいいよねえ」

少し離れた所で生徒たちが話す声が聞こえてきた。

「扉間様に手紙渡してた子何人かいたよね？いいなあ私も渡せばよかった」それを聞いて思わず芙蓉は声を出してしまいそうになった。

一度目をつぶり深呼吸をする。急いで走って校門を抜け、マダラと住む家を目指して走りだした。

夕顔が咲く緩い坂道を下り、ノウゼンカズラの絡むあの家を曲がれば家に着く。

息を切らし、額から伝う汗を拭う。一瞬、ノウゼンカズラの花に目をやったその時だった。

「きやつ!・・・あつ、す、すみませんっ」

ぶつかりそうになった瞬間、その人物は芙蓉の両腕を持って受け止めた。

恐る恐る顔を見上げると、そこに居たのは、扉間だった。

「・・・!」

「感知でお前が走ってくるのが分かったから、受け止めた。」

「な、なぜ、こんな所に居らっしゃるのですか・・・」

「今日女学校へ行っていた用件で、うちのスパイ部門担当者に話をしに行っていたのだ。ここを通ったのは偶然だ。」

扉間はそう言うとき芙蓉から腕を離しその場を後にしようとしたが、二歩前に出たところで、立ち止まった。

「お前には謝罪してもしきれないことをした。許してほしいとは思っていない。」

芙蓉の顔を見ずにそう言うとき、再び歩き出そうとした。

「あの・・・」

扉間が立ち止まる。

「なぜ・・・あのようなことを、したのですか?・・・」

芙蓉は思わず、これまでずっと考え続けてきた疑問を口にしてしまった。

扉間は振り返り、一度目線を地面に落とした後、芙蓉の顔を見て答える。

「お前は兄者とも俺とも結婚したくないと言った。お前が兄者でも、俺でもない誰かのものになるくらいなら、消えてほしいと思った。」

「……」

「俺は、お前を恨んだ。恨むべきは、自分自身だったのにな……」

「扉間さま……」

芙蓉は、千手の家で柱間と扉間と過ごした日々を思い出した。

扉間は常に兄を支え、一族の為、領地の市民の為、一生懸命働き、数多の戦で戦っていた。忍のを知ること禁じられていたとはいえ、芙蓉もその事はよく解っていた。

そんな生活の中できつと、扉間は自分の感情を閉じ込めてきたのだろう。それが自分の軽率な発言のせいで扉間を悪い方向へ向かわせたのかもしれない。

扉間の苦しみが少し想像できたたん、芙蓉は急に寂しい気持ちになった。

「でも私は、扉間さまには感謝しているんです。扉間さまがうちは領地に行かせてくれなかつたら、マダラさまには出逢えなかつたんですもの……」

芙蓉は困ったような笑顔で言った。

芙蓉は扉間をフォローするつもりで言ったのだが、扉間には、どんな厳しい言葉で責め立てられるよりも、それは胸を切り裂くような辛い言葉だった。

「……………」

「正直、私を殺そうとしていた貴方とこうして面と向かっているのは怖いです。許せない気持ちもあります。でも、ちゃんと理由が聞けて良かった・・・失礼します。」

芙蓉は一礼して扉間に背を向け歩き出した。

扉間はただ黙って、その背中を見送るしかなかった。

扉間は家に帰り、今日女学校で生徒たち数人から渡された手紙を順に開いて読んでいく。

「読んだからと言って返事をするわけではないし、まして女生徒たちを女として見る事など決して無い。」

扉間にとつて、今でも女は芙蓉一人だった。

芙蓉に優しく出来なかったどころか、殺そうとしてしまった自責の念だろうか。

扉間はまだ少女である生徒たちが勇気を出して自分に渡してきた手紙を、読まずに無下に捨ててしまう事はできなかった。

だが手紙を読みながらも、先ほどの芙蓉の言葉が頭の中でずっと繰り返されている。

『扉間さまには感謝しているんです』

芙蓉がマダラと恋仲になり一緒に住んでいる事は、芙蓉が里に越してきた時にうちは一族の者から聞いた。その時の驚きと苦しい気持は今でも何度も思い出す。

しかし先ほど芙蓉に『感謝している』と言われた事は何より辛い事だった。

扉間の考えでは、マダラと芙蓉が対面すれば、千手を恨むマダラは芙蓉を殺すと思つていた。

それなのに・・・よりによつて愛し合うようになるとは。

こんなことなら、己の手で芙蓉を殺したほうがマシだった。

気が付くとまた悪い方向へ考えが向く。

頭を振つて我に返ろうとした。

「いや…マダラと芙蓉が出会つて愛し合っている事こそ、俺への最大の罰だな。」

そんな扉間の苦悩など知る由もなく、少女たちの言葉は情熱的で可愛らしい物ばかりだった。

これまでいつたい何度見てきただろう。

扉間は庭の芙蓉の木をまた、見つめた。

◆ 今年も変わらず美しい花を無数に咲かせている。

軒先の風鈴が涼やかに鳴り、その向こう側には入道雲と青空が広がっている。

セミの声も聞こえ、店の前には向日葵が太陽に向かって咲いている。虫取り網を持った少年達が笑いながら店先を通り過ぎた。

「こうして二人でデートするなんて、久しぶりだのう！」

山盛りのかき氷を目の前に、柱間が満面の笑顔で言う。

「で、デートだなんて…。私はそんなつもりでは…。」

芙蓉はみつ豆につけようとしていた手を止めた。

「マダラに怒られるか？ちゃんと芙蓉を借りると断つてあるぞ。」

そう言つて嬉しそうにかき氷を口に運ぶ。

柱間は樹に芙蓉とマダラがもうすぐ結婚するのではないかと言われ、とてつもなく焦った。

だが芙蓉がマダラと暮らしたいと言つて千手領地に帰つて来なかつた時から、柱間は芙蓉を諦めなければならなくなる日が来ることを半分は覚悟していた。

しかし扉間の謀のために二人が引き裂かれたまま、本当に別れてしまうのは悲しかった。

せめて最後に二人で思い出を作りたいと思ひ、マダラに許可を得て芙蓉をデートに誘つたのだつた。

・・・マダラは本当に良い奴だ。マダラになら芙蓉を任せられる。それに・・・
「で、でも、こんな所をうちの生徒に見られたら学校で大変なことになる。柱間さまはうちの学校でのご自分と扉間さまの人気ぶりをご存知ですか？皆、なんとかお二人の妻になれないかと色めきだっていますよ。私がお二人の許嫁だったことも学校で知らない者はいませんし、嫉妬されることもありませう・・・」

「そうなのか？知らなかったぞ。モテているとは嬉しいぞ！ワハハハ。だが芙蓉が嫉妬されて意地悪などされては困るのう。もし今日のデートを見られて生徒から意地悪されるようなことがあれば、俺が注意しに行く！だから大丈夫だ。」

・・・全然大丈夫じゃないんだけど・・・

芙蓉はうな垂れた。

「柱間さまこそ、お忙しい中、こんなことをしていて大丈夫なんですか？」

「俺にとつては仕事と同じくらい大切な時間だ。芙蓉の顔を見るだけで元気が出るしな！」

相変わらずお人好しで優しい柱間に、芙蓉は思わず微笑んだ。

この性格と優しさに、これまでどれだけ救われてきただろう。

あの家で幸せに暮らせてきたのも、柱間が居てくれたからだ。そう思うと、芙蓉の胸は罪悪感で締め付けられた。

…ザーーー…

いつの間にか外は夕立が降りだしていた。涼しい空気が窓から流れてくる。

「柱間さま、私、ごめんなさい…。」

「そんな顔をするな。今日は楽しくデートすることが目的ぞ。向こうの空は明るい。夕立も時期通り過ぎるだろう。そうしたら外も涼しくなるし少し外を歩かないか？」

「はい…。」

三十分もしないうちに雨は上がり、まだ太陽は雲に隠れているものの、雲の隙間から青空が見えていた。

二人は店を出て、柳の植えてある小川の遊歩道を歩き始めた。

「この遊歩道はなあ、恋人たちがこうして仲良く肩を並べ、愛を語らいながら歩ける場所を作りたくて俺が作ったのだ。実は完成したら、芙蓉と一緒に歩きたかったんだ。」

「…綺麗な遊歩道ですね。きつと沢山の恋人たちが、これからここを歩くんでしょね。」

「長かった戦で数えきれない恋人たちが引き裂かれた…もうそんな悲しい別れが無いように、俺はここに願掛けしている。」

芙蓉は昔のように柱間の三步斜め後ろを歩いていたが、早歩きで柱間に並んでみた。

「引き裂かれた恋人たちも、また巡り合って、こうして並んで歩いてほしいですね。」

芙蓉は少し寂しげな笑顔で柱間に言った。

その笑顔を見て柱間の決心が揺らぎそうになる。

「芙蓉……本当にもう、やり直せないか？」

「私、仏間さまが亡くなってから、ずっと妄想してる事があるんです。私の母と仏間さまが結婚して、柱間さま、扉間さま、瓦間さま、板間さま、そして末っ子に私が産まれていたら良かったのになって……。柱間さまも、扉間さまも私の優しいお兄ちゃん、私が彼氏を連れ来たら反対して、でも最後は認めてくれたりして……そんな楽しい毎日を妄想していました。許嫁、失格ですよね……本当に。」

「芙蓉……」

「私は、マダラさまのことを心から愛しています。」

夕立で冷えた空気の風がひらりと柳の枝を揺らしていく。

それと同時に芙蓉の長い髪もさらさらと靡いている。

「分った……俺は引き下がることとしよう。マダラは俺の真の友であり、本当に優しい男だ。そしてこれから里を代表して背負っていく者だ。しっかり支えてやってくれ。」

「柱間さま……ありがとうございます。」

これが最初で最後。

二人は片を並べて遊歩道の端までゆっくりと歩いて行った。

◆ 「覚えているか…ガキの頃にここで話したこと。」

「ああ…」

柱間がマダラに訊く。二人は子供の頃に夢を語り合い、共に修行をした崖の頂上に立ち、ただの森だった場所から始まり、めざましい発展を続けている里を見渡す。

「アレはただの夢の話だと思っていた…掴もうと思えばできないことは無かつたつてのに、俺は…」

「これから夢が現実になる。」

柱間は大きく息を吸い、思い切ったように続ける。

「…火の国を守る影の忍の長…名を火影！どうだ？」

「何だそれ？」

「火の国から里の代表を決めるよう要請があつたんだ。お前に里の長をやつてほしいと思つている…火影を。」

「…！」

マダラは柱間の思いもよらない言葉に驚いた。

「もうお前に兄弟はいないが…この里の忍たちは皆お前の兄弟だと思つてほしい。しっかりと見守つてほしい。皆を、この里を…」

マダラは何かを考え込むように里のほうを見ながら柱間の言葉を聞いていた。「うちは兄弟すら守れなかったこの俺に……」

そう言つて目を閉じる。

「弱気になつてゐる暇なんてないぞ！うちはに千手は勿論として、猿飛一族も志村一族も仲間に入りたいそうだからな。」

驚いたマダラは顔を上げて柱間を見た。

「嘘だろ……ホントかよそれ！」

驚きの中にも、喜びがにじみ出る。

「その他にもまだまだ……この里はどんどん大きくなるぞ！」

マダラの心の中に希望の光が広がつていくように感じた。

「そろそろ里の名前も決めないと。何か案あるか？」

その時、一枚の落ち葉がマダラの前に飛んできた。マダラはそれを手に取る。

葉の中央には丸く穴が開いている。

マダラはおもむろにその穴から里を眺めてみた。

その小さな穴から見ると、より大きく、広く、頼もしいものに見えた気がした。

「木ノ葉……隠れの里……つてのはどうだ？」

「……単純ぞ……見たままぞ……なんの捻りもないぞ……」

柱間はマダラの案に期待してただけに、安直な答えに必要以上にずうくと落ち込む。

「火影とどう違うんだゴラア!! てかまだ治ってねーのか、その落ち込み癖!!」
柱間はハハハと笑って見せた。

長い時間がかかったが、ようやく二人は昔の仲に戻れた気がした。

「火影つてのは里にずっと居て皆を見守る役目つてことか?」

「それもあるがそういう意味だけじゃない。これから里づくりが本格化するにあたって火影も忙しくなる…」

柱間は一歩前に出て両手を大きく広げる。

「だから、お前のデカイ顔をこの足元の岩壁に彫る! この里の象徴ぞ!」

「・・・冗談だろ・・・」

マダラは正直、柱間の意見に若干引き、苦笑いするしかない。

「顔が厳つ過ぎるから若干手は加えるけどな!」

「てめえなあ・・・」

「芙蓉の事も! 頼んだぞ。」

「…柱間、お前やつぱり芙蓉のこと…」

「こんな所でなに油売つてる! 火の国の大名たちがもうすぐ会談に来る頃だぞ!」

扉間が急いだ様子で二人の後ろに現れ、大声で声をかけてきた。

「…扉間か…」

マダラと扉間の目が合う。

互いに口には出さないが、互いに対して思っている事は同じだと二人とも確信していた。



「火影だど!!何を勝手なことを!」

柱間と扉間は千手の指令室に居た。扉間が柱間に強く反論している。

「マダラを里の長の候補として推薦するまではいい…だが決定は火の国と里の民意を聞きつつ、上役と相談して決める!もう父上の時とは違う!」

「…しかし…」

「そして、うちはマダラが長に選ばれることはまずない。皆解っている…里を作った立役者は兄者のほうだと…それは…うちはの者たちまで言っている事だ。」

柱間は腕を組み、扉間の言葉に返す言葉を考える。柱間の言葉を待たずに扉間が続ける。

「それに…兄者はうちの噂を知らないのか?」

「…?」

「奴らの瞳力は憎しみの強い者ほど強く顕れる…写輪眼がそうだ。何をしでかすか分らぬ連中だ…これからの里にとつて…」

「そういう言い方はよせ！扉間！」

柱間は扉間を強くたしなめた。

ミシツ……

柱間の背後の窓の外から音が聞こえた気がした。柱間は立ち上がり窓を開ける。

「ここに誰か居たような気がしたぞ。扉間、お前なら解るだろ。」

「いや…今はチャクラを練っていない…話を逸らすな兄者！」

扉間は苛立った様子で柱間に話を続けるよう促す。

「！」

柱間が窓を閉めようとした時、瓦の上に見覚えのある木の葉が落ちていた。

手に取ってみる。

中央に丸く穴の開いた木の葉。

「……！」

ふいに風が吹き、木の葉はハラリと碎けて散ってしまった。

「これからは民主的な運営をやっていく…異議はあるか？」

柱間の様子に気づかない扉間が念を押した。

「
.
.
.
.
.
いや.
.
.
それでいい。」

(10) 結実と決別

芙蓉が女学校での仕事を終え家に帰ると、この日もまた置手紙が置いてあった。

『一〜二日留守にする。用心して過ぐせ。』

置手紙には撫子が生けられた一輪挿しが置いてある。

マダラの繊細な心遣いが嬉しくもあり、寂しくもある。

暑さの残る九月。

最近、里の代表や里の名前を決めるといふ話が聞こえてくる。もうすぐ里の大梓が完成する。

だが最近、マダラはすべき事があると言ひ、うちのはの領地や各地に頻繁に出掛けては、一人で何かを調べているようだった。何について調べているのかは教えてはくれない。

芙蓉は一人で家に居る寂しさを紛らわそうと、買物に出掛けた。あいにく樹は柱間の秘書として火の国の大名の所に使いに行つてしまつてゐる。

芙蓉はうろこ雲が浮かぶ空に手を伸ばし、深呼吸をする。

「きつとマダラさまには何か考えがあつての行動なんだわ。絶対、大丈夫。」

帰宅し夕食の準備をする。一人分の食事は作り甲斐も無いし、面倒にも感じる。食卓

に少ないおかずを並べ、芙蓉は食事を始めた。

人間とは本当に都合が良い生き物であると芙蓉は思う。

こんな時に昔、仏間・柱間・扉間・椿と共に食卓を囲んでいた頃のことを思い出すなんて…。

食事を終えて縁側から夜空を見上げると、上弦の月が浮かんでいた。

「マダラさまは今頃、どこでこの月を見てるのかな…次の満月は一緒に月見酒、したいなあ…」



芙蓉は急いで玄関で靴を脱ぎ揃えることもなく家に入る。

廊下を走る芙蓉の足音に、マダラが何事かと自室の扉を開けて顔を出す。

「マダラさま！里の長になるんですか！！」

「…推薦されてるだけだ。まだなるとは決まってるじゃない。」

「里の長を決める投票があると今日学校で聞いて、それでマダラさまも候補のお一人だって聞いて、私、嬉しくて！」

芙蓉は息を切らしながら嬉しそうにマダラの顔を見た。

「おそらく俺は選ばれない。」

「そんなことないですよ。だって…」

「お前に何が解る。忍についても、うちについては何も知らねえくせに。」

芙蓉はいつもと違う様子のマダラに戸惑う。

「す、すみません…：そうですね。ごめんなさい。」

先ほどまでの浮かれた気分は一気に消え去り、芙蓉は沈んだ表情でマダラの部屋をあとにしようとした。

「…悪かった。言い過ぎた。」

「そんなことありません。マダラさまの仰る通りです。勝手に浮かれてしまつて、すみません…」

芙蓉はマダラに背を向けたまま、小声で返した。

マダラは立ち上がり、芙蓉を後ろから抱きしめた。

「里を作つた立役者は柱間のほうだ。それに…：扉間は、うちはを危険因子とみなし信用していない。俺は長になれなくてもいいんだ。ただ、柱間が長になり、千手一族と扉間が里の運営の主導権を握ればうちは一族は間違ひなく排除されていく。それを危惧しているんだ。」

マダラは静かに、冷静な口調で芙蓉の耳元で話した。

芙蓉は扉間の名前が出たことに更なる不安を感じる。扉間ならやりかねない。

「うちは一族の皆さんは、その事ご存知なのでしょうか？」

「いや。まだ直属の部下にししか話していない。それに平和に浸っている一族の者たちに、今そんなことを言っても誰も信じないだろう。」

でもなぜ扉間は、平和協定を結んだにも関わらず、そんなにもうちは一族を目の敵にするのだろうかと思つた。

そして、忍について無知である自分と無力さに悲しくなる。

「私……何もできなくて……ごめんなさい。」

「お前が謝ることじゃないだろ。こうして俺の傍に居てくれればそれでいい。今、俺はうちはを救う手立ては無いか探している所だ。お前には寂しい思いをさせるが、こうしていつもお前が待っていてくれると思うと、希望が湧いてくるんだぜ？」

二人は向き合い、しっかりと抱き合つた。芙蓉は目を閉じて思う。

……たとえば全世界がマダラさまの敵になつても、私は絶対に味方だから……



「号外だよ！号外！火影は柱間に決定！里の名前は木ノ葉が隠れの里に決定だー！」

一週間前、里に住む忍と一般市民による、長の候補者への投票が行われた。

その結果をもとに火の国との会談、そして里の上役たちによる話合により柱間が里の長・火影に決定した。

里じゅうが柱間が火影になる事を歓迎し、歓喜で溢れかえる。そこには千手の者と共

に喜ぶうちは一族の姿もあった。

次の日、さつそく岩壁に柱間の顔岩を掘る作業が始まった。

誰も落選したマダラに目をやる者も、声をかける者も居なかった。

冷たくなってきた晩秋の風が芙蓉の頬をかすめてゆく。

降りた髪がさらさらと顔にまとわりつくのを手で押さえながら、芙蓉は柱間の顔岩を見上げている。

マダラは相変わらず、家を空けることが多かった。

女学校では柱間が火影に決まってから生徒たちが色めく雰囲気 가속するとともに、芙蓉への言われなき中傷も増えていた。

今日はようやく樹に会える日だ。

しかし、芙蓉はいま樹の顔を見たら泣きだしてしまいそうだった。

「芙蓉——お待たせ——」

顔岩を見上げていると、間から樹が大きく手を振りながら走って向かって来る。芙蓉も樹の方へと駆け寄った。

「樹ちゃん！」

泣くまいと思っていたものの、樹に抱き着くと、自然と涙が溢れてきた。

「ごめんね……笑顔で会わなきゃって思ってたのに、私……」

「隠そうとしても無駄！私には芙蓉の顔見たらすぐ、どんなことがあつたかくらい分かるんだからね。」

「ふふっ。さすが……くノ一最強の樹ちゃんだね。」

芙蓉が泣きながら笑顔を作る。

……くノ一だからじゃないよ。私は芙蓉の事、心から愛してるからだよ……

二人は公園の東屋に入つて向かい合つて座つた。芙蓉は樹にマダラの状況や自分の気持ち、学校で中傷されることが増えたことなどを正直に話した。樹は話を遮ることなく、うんうんと芙蓉の話をじっくり聞いている。そして一通り聞き終わると話し始めた。

「正直私も最初はうちは一族の事は信用できなかつたし、ほら、マダラと芙蓉の事も認められなかつたよ。でも実際にマダラと何度も会つて話したり、あとは仕事でうちは一族の人と一緒に働いてると、悪い人たちがじゃないって解つたんだ。愛の千手なんていうけどさ、うちは一族の方がよっぽど親切な人が多い気がするし。きつとまだうちは一族やマダラの良さが里の人たちに知られてないだけなんだよ。これから一緒に暮らしていくうちに、必ず本当の意味の和解ができる気がする。」

「そうだよね……扉間さまと同じ意見の人ばかりじゃないよね。樹ちゃんみたいな忍の人も沢山居るはずだよね。」

樹は大きく頷いてから話を続ける。

「それと学校での中傷の件。単なる嫉妬じゃない所が辛いよね。さっきの話と同じく、うちは一族のことを良く思っていない生徒や保護者が多いんだよ。だって千手設立の完全なる千手の学校だからね。柱間と婚約破棄してマダラと暮らして居る芙蓉の事を良く思わない人が多いんだろうね。」

「うん…それは自分でも解つてるつもり。教師は続けたいけど、私があこの学校に相応しくない人間なら、辞めた方が良いのかなって思うこともあるの。」

「それも悔しいよね。何も悪いことしてないのにさ。でも、芙蓉が無駄に傷つけられるのも間違っているし、別の学校に移るとか考えた方が良いのかもしれないね。まあそれには柱間と話さなきゃならないだろうけど…」

樹は悔しそうに地面を見つめる。芙蓉もその目線の先を一緒に見つめる。

視線の先には寒さに負けまいと黄色いタンポポが地面に張り付くようにして咲いていた。

芙蓉はそのタンポポを見て決心し、樹に言う。

「私、やっぱり負けたくない。たぶんいま女学校以外で働ける学校は無いだろうし、せつかく叶えた夢だもん。もうちよつと頑張つてみる！」

「無理しちゃダメだよ？私にも力になれることが無いか考えてみるから。」

「ありがとう。樹ちゃん…本当に大好き！」

いつものように芙蓉が樹に抱き着く。

樹はこのまま芙蓉をさらってしまいたい気持ちになる。

二人だけで、誰も知らない場所へ行きたい。忍なんて里なんて関係ない場所へ…

樹は言葉にできない気持ちを伝えるように、強く芙蓉を抱きしめた。



ボウボウ、パチパチ…

松明の音と光だけがその世界を支配している。

柱間とマダラは、うちは領地と里の境にある南賀ノ神社の地下に居た。

「これはうちには代々伝わる石碑…他族に見せたことは一度も無い。解読するには特別な瞳力が必要な読み物だ。」

二人の前には松明に照らしだされた石碑がある。

「今俺が解読出来る所までにはこう書いてある。〃一つの神が安定を求め陰と陽に分極した。相反する二つは作用し合い森羅万象を得る。〃…これは全てに当てはまる道理だ。」

マダラは火影の服を纏う柱間を見つめて話し続ける。

「つまり相反する二つの力が協力することで本当の幸せがあると謳っている…だが…別

のとらえ方もできる。」

「……?」

「柱間、俺が何も知らないと思うか?」

柱間はマダラの問いに視線を落し、少し黙り込む。

「…扉間のことは俺に任せてくれ!」

柱間はマダラの言わんとしてしていることは解っていた。

「…お前なしではやれない…火影の右腕として、兄弟として共に協力してくれ!…いずれ民もお前の良さに気づく。その時二代目の火影として…」

「お前のあと、おそらくあの扉間が火影となるだろう…そうならばははいずれ消されてゆく…」

柱間は反論しようと口を開くが、マダラが再び遮り話を続ける。

「それが分かかっていて里を出るよううちは他の者に声をかけたが…誰一人俺についてくる者は居ないようだ。」

マダラは石碑に視線をやり、更に言葉を続ける。

「弟も守れなかった…一族を守ると弟と交わした約束も守れそうにない…守りたい同族からも信用されていない…」

柱間はついに大声を出してマダラの話の話を遮って言う。

「そんなことは無い！皆、直ぐに…」

「あの時…お前に『弟を殺せ』と断言すべきだったのかも…」

「……！」

「お前は俺を兄弟と言う…だが里の為にどちらを切れる？」

「………」

「…俺はお前のことを良く解っているつもりだ。これ以上は無理だ…俺は里を出て行く。」

柱間はマダラの考えていることがだんだんと解らなくなり、かける言葉が見つからない。

「俺は別の道を見つけた！」

マダラは笑みを見せ、手を広げる。

「…腑を見せ合ったからこそ見えた…協力とはいわば静かな争いでしかない。」

柱間も大きくマダラに手を広げて反論する。

「そんなことは無い！俺がそうしません！」

その言葉を跳ね返す様にマダラは柱間に背を向けながら言う。

「現実をどう捉えるかだ柱間…ただ、卑屈なのはヤメにしよう…」

マダラの背中に向かって柱間が叫ぶ。

「俺の話聞いているのか!! マダラ!」

「この世はただの余興と見る方がまだ健全だ…俺と対等に戦えるのはお前だけだ。」

「……」

マダラはいったい何を考えているのか、また争うというのか。

柱間には全く解らない。

「本当の夢の道に行くまでの間…お前との戦いを愉しむさ…」

「本当の夢ってなんだ?! 俺たちの目指したモンはここにあるだろーが!!」

マダラは顔だけを柱間に向けて答える。

「お前は…見えないのさ…さらに先が…先の夢が。」

マダラの瞳には写輪眼が浮かび上がる。

柱間は写輪眼を開眼した時のマダラと、それが何を意味するのかを思い出した。

「…だったら…その先の夢っていうのを教えてくれ。この里の夢と繋がるなら…導き役としてお前が必要だ…上役としても…」

柱間はマダラに近づく。

「…そして、友としても。」

マダラは振り返り柱間と再び対峙する。

「フツ…繋がりになどない。そしてお前には決して届かない。俺の後を追いかけても無駄

だ：お前なら知ってるだろ：俺の後ろに立てる奴など居ないと。」

最後にそう言うときマダラはその場から姿を消した。

「マダラ!!」

柱間の声だけが地下室に反響し続けた。



冷たい満月の夜。

いつか見たあの夜と同じように、辺りは青白い光に照らし出され、家々の屋根瓦とスキがキラキラと光っている。

「.....」

「そんな顔をするな。必ず迎えに来る。できるだけ早くな。」

芙蓉は言葉が見つからない。だが本当は引き止めたくてたまらない。

しかしマダラを愛した時から、マダラの選ぶ道、選ぶ正義が自分の道と正義であると決めていた。それに、例えば芙蓉が泣いて止めてもマダラは出て行くだろう。

「時が来れば伝書鳥で手紙を送る。どこに居てもお前の所に届くから安心しろ。ただ言ったように、柱間や里の幹部に俺の動きを悟られぬよう、お前は俺から捨てられた可哀な女を演じるんだ。いいな。」

「...はい。分っています。」

芙蓉は悲しい顔をして目を伏せる。風でスキの擦れる音が物悲しく感じる。

マダラは芙蓉の両肩を掴み芙蓉を見つめて言う。

「芙蓉。お前と俺はこの先の夢の世界で生きるんだ。そこへ行けばもう犠牲などという概念すらなくなる。」

芙蓉は顔を上げてマダラを見つめる。

月明りがあるとはいえ、マダラの顔をはつきり見ることが出来ず、更に寂しさと不安がこみ上げてくる。それを押し殺そうと言葉を発する。

「マダラさま…私、マダラさまのことを信じています。私は一生貴方の味方です。愛しています…」

「また先に言われたな。俺も芙蓉を愛している。」

二人は暫く静かに抱き合い口づけを交わした。

そして何も言わずにマダラは月夜の闇の中に消えていった。

◆

子供が学校帰りにはしやぎながら走って行く。夕方の商店街は多くの人たちで賑わい活気に溢れている。家には明かりが灯り始め、どこからか夕食の香りが漂ってくる。

マダラが里を出て行ったことを気にする者は、誰も居なかった。

女学校でもそれを知る者は居らず、何かを聞かれることも言われることもない。

マダラと柱間、二人の力で今の平和な時があるはずなのに、里の人は皆、まるで最初からマダラという人間など居なかったように振舞っているように見えて仕方がない。

もうすぐ夕陽が山の入端に沈む。

芙蓉は土手でそれを見届けようと一人で眺めていた。

「芙蓉……」

自分の名を呼ぶ声の方を向く。柱間が居た。

「柱間さま。こんばんは。」

芙蓉は驚きもせず、なぜ柱間が現れたかも考えず、ただ状況に合わせた言葉を言う。

「突然すまないな。家に押し掛けるのも難だと思つて……その……一人で大丈夫か？」

柱間は自分を心配している。なぜ？

……ああ、私は捨てられた可哀想な女なんだっけ……

「悲しいですけど……大丈夫です。昼間は学校もありますし。」

「その……嫌でなければ、家に来ないか？マダラが居なくなつてすぐにそんな気持にもなれないだろうが、広い家に女一人は不安だろう。家の離れを使つてくれ。もちろん扉間とは顔を合わせないようにさせるし、前のように働いてくれなどとは言わない。好きなだけ居て、好きなように使つてくれればいい。」

芙蓉は考え込む。

「ここで断れば柱間に怪しまれるだろうか。だが一緒に住む気は無いし、第一、流石に柱間の家に居ては伝書鳥から手紙を受け取れないだろう。」

「お氣遣いありがとうございます。でも今はそんな氣持になれませんので。すみません。」

「そ、そうだな。悪かった。だが何かあればいつでも来てくれ。：俺は、今でも芙蓉の事を家族だと思つている。だから。」

陽は沈み空だけが赤く光り、辺りは薄暗い紫色の世界になっていた。

「柱間さまは本当にお優しいですね。」

「いや、そ、そうか？。：おお、もう陽が沈んでしまったな。家まで送ろうぞ。」

「では、お言葉に甘えます。」

二人は並んで歩き出した。

柱間はマダラの言つていた夢について芙蓉に訊きたかつたが、今の芙蓉の氣持ちを考えると訊くことは出来なかつた。

それに現に、こうして芙蓉が置き去りにされている状況は、その夢に芙蓉は必要が無いとマダラは考えたからではないかと思えた。

だが、あのマダラが愛する女を本当にこうも簡単に捨てていくだろうか。僅かな疑問も残る。

柱間はそつと芙蓉の横顔を見た。薄暗い中でも芙蓉の表情が曇っていることが分かる。

「私……マダラさまに捨てられたんです。信じていたのに……。これから先の夢に、私は必要ないそうです。」

芙蓉は柱間の考えていることが分かっているかのように語り始めた。芙蓉は昔から人の気持ちを時々先取りするので驚かされる。

「やっぱり、うちはの人を信じて愛してしまつた私が間違つていました。でも、まだマダラさまのことを嫌いになることも、忘れることも出来ないんです。」

涙声でそう言うと、芙蓉はそつと涙を拭つた。柱間が立ち止まる。

「いや、お前は何も間違つていない。マダラだつて、自分のことを信じて愛してもらえたこと、嬉しかったはずだ。ただ、夢もお前も両方を選ぶことが出来なかつたのだろう……あいつの事だ、お前をこれから多難な道へと道連れにしたくなかつたのだ。きつとそうだ。」

どこまでも人の好い柱間は、自分のことを全く疑つていないようで芙蓉は安心した。

芙蓉はそつと微笑んだ。

「ありがとうございます。柱間さまにそう言つてもらえると嬉しいです。マダラさまのこと嫌いにならずに済みますもの。私も、新しい道を見つかけたいと思います。」

気丈に振舞う芙蓉の姿に、柱間は胸が苦しくなる。

今にも抱き締めて家に連れて帰りたい。

・・・もう一度、やり直したい。一緒に居てほしい・・・

思わず言葉にしてしまいそうになるのを何とか堪え、芙蓉が家の中に入るのを見届けてから帰路についた。

辺りは真つ暗だった。空に月は無い。新月だった。



二人はお互いの姿が目に入るとすぐに走りだし、駆け寄って抱き合った。

抱き合う二人の息が白く立ち上る。辺りの木々は全ての葉を落とし寂しげな姿である。

「・・・芙蓉。ごめんね。一番辛い時に一緒に居てあげられなくて・・・」

「ううん。だって、任務なんだから仕方ないよ・・・でも早く樹ちゃんに会いたかった。」

「ごめんね。本当にごめん・・・」

涙目になりながら痛々しい笑顔を見せる芙蓉の顔を見て、樹は自分の不甲斐なさに対する悔しき、そしてこれまでの芙蓉への気持ちが一気に溢れてきた。

・・・チュツ・・・

芙蓉は一瞬何が起きたのか信じられなかったが、これがどういふことなのかと考える

よりも、目を閉じ樹の優しさに身を任せることを自然に選んで目を閉じた。

芙蓉が嫌がらずに自分に身を委ねてきたことを感じると、樹は芙蓉をきつく抱きしめ、芙蓉の後頭部を撫でながら口づけを続けた。

樹は二人の気持ちを通じ合ったような気がしたが、もしも自分の思い込み、ただの気のせいで終わるのが怖く、口づけを止めることが出来ない。

芙蓉は甘く優しい口づけに心まで溶けてゆく気がしていたが、直ぐにマダラへの罪悪感が蘇ってきた。

「…樹ちゃん。」

芙蓉から口づけを止め、体を離れた。

「ご、ごめん…嫌だった？き、気持ち悪いよね。ごめん。本当に…」

「ううん。嬉しかったよ。でも私…やっぱりマダラさまのこと、愛してるの。だから…」
芙蓉が自分を拒否する理由がマダラへの罪悪感と知ってほっとする反面、もどかしい気持ちに苛立ちが湧いてくる。

だが、芙蓉が突然里を抜けたマダラに捨てられてからのこの三カ月間、自分は任務で火の国の大名の所へ行っており、芙蓉を支えることが出来なかった。

芙蓉が一人でどれだけ辛い気持ちで過ごしてきたかを考えれば、捨てられてもなおマダラを慕う芙蓉を責める事など、出来ない。

自分が今すべきことは、芙蓉の傷ついた心に寄り添い、癒すことだ。

「そうだよね……そんなに簡単に忘れられるわけじゃないよね。でも芙蓉ならきつとその思い出と一緒に新しい世界を見つけることができるはずだよ。焦らないで、大丈夫だから。」

「解つてくれて。嬉しい。樹ちゃん……大好き。」

芙蓉はそう言つて再び樹に抱き着いた。

樹は芙蓉のマダラに対する愛情と、自分に対する「大好き」の気持ちが違うことは解つている。

いつか、そういつか、マダラに向けるのと同じ愛情を芙蓉が自分に向けてくれたら……こんな状況でもつい自分本位に考えてしまう。

でも、例え大好きのままでも構わない。

芙蓉が自分の傍に居てくれさえすれば。

「大丈夫。離れていても私はずっとずっと芙蓉と一緒にだからね。私も、芙蓉のこと大好きだからね。」

二人は見つめ合い、微笑み合つた。

いつの間にか小雪が舞い始めていた。だが二人の空間だけは春のように暖かい気がした。



「これは…樹のチャクラか。任務から帰ってきて以来ほぼ毎日来ているな。もしや樹も関わっているのか？」

扉間はマダラが里を出てから、時折、芙蓉の住むマダラの家を感知能力で監視をしている。

マダラは里を出る前、柱間に不可解な言葉を残した。

それがどういいう意味なのか扉間にも理解できなかつたが、マダラがこの里を否定している事には間違いなかつた。

そうであるならば、いつかマダラが里を襲ってくる日がやってきても不思議ではない。

その為に芙蓉を里に残しているのではないかと扉間は考えていた。

だがそんな事を考えているのは扉間、ただ一人だつた。里のほとんどの忍と住民、そしてうちは一族ですら、マダラが居なくなつたことに無関心だつた。柱間も芙蓉は捨てられた哀れな女だと思つて疑われないし、家に一緒に住まわせるとまで言っている。

「弟と一族を守ることにあれだけ執着し、その為にどんな手でも使つてきたあのマダラが、そう簡単に愛する女を手放すなど考えられない。必ず何かあるはずだ。」

柱間にもそう進言したが、お人好しで馬鹿な所がある兄にそれを言つても当然、信じなかつた。

議会で話しても良かったのだが、変に騒がれるよりも、感知能力においては右に出る者が居ない扉間自身が一人で隠密に調査したほうが適切だと判断したのだった。

扉間はこの日、マダラの家から五十mほどの距離まで来ていた。この距離ならば、芙蓉と樹の会話が聞こえる。

「ちよつと、芙蓉。これはいくらなんでも作り過ぎじゃない？ 私こんなに食べられないよ？」

「だって、今日はマダラさまのお誕生日なんだよ？ 例えマダラさまが居なくても、お祝いしてあげたいの。沢山作れば気持ちも届くかなって。えへへ。」

「あのねえ。流石にこんなに沢山作ってるとは思ってないと思うけどお？」

「マダラさまが帰ってきてくれれば、問題ないのにね…」

「ハイハイ。ストップ。またその思考にいくんだから。期待はしないって決めたでしょ？」

「う、うん…そうだね。ごめん。」

「しようがない。これ柱間んとこ持つてくよ。いい？ この後仕事だからさ。芙蓉が作ったって言ったらあの人泣いて喜びそうだよ。あ、芙蓉からって言わない方が面白いかな。」

「言っても言わなくてもいいけど、持つて行ってあげて。」

・・・火影のこと呼び捨てかいつ・・・

扉間はつい心の中でつつこんでしまう。

・・・今日も特に異常無しか。樹も今のところ何か知っている様子では無さそうだ。だが、いつ芙蓉が樹に協力を申し出るかわからない。注視しなければ・・・

「じゃあ、また明日来るよ。戸締りしつかりしてね。柱間からは稲荷の代金徴収しとくから。」

「やめて、お金なんて！」

「じよーだん。でもそれくらいしても良いと思うよ。この味！」

「ありがとう。樹ちゃん。樹ちゃんが手伝ってくれたからいつもより美味しく出来たよ。お仕事、がんばってね。」

「うん。いつてきまーす。」

樹が出てくのを確認し、扉間も柱間の所へ向かった。

「なんだこれは！超美味いぞ！どこの店のだ？」

「橘屋です。」

「はて？新しく出来た店か？次々店ができておるからわからんのう。」

「まだ開業未定、ですけどねー。ということで、開業資金の為に一個一〇〇円頂きますん

で。よろしくお願いしますね。」

「ひゃ、百円だと！高くないかっ!?!」

「じゃあ食べなくてもいいですよ。せっかく橘芙蓉店主（予定）が作ったんですけどね。」

「食う!!!全部買うぞ!!!一個、二〇〇円で買う!」

「ほーんと分りやすいなあ・・・」

ガチャ。扉間が部屋に入ってきた。

「あ、扉間様。お疲れ様です。扉間様も召し上がりますか？橘屋のいなり寿司。一個二〇〇円ですけど。」

「お、おい、樹・・・」

柱間が制止しようとする前に、扉間と芙蓉の事情を知らない樹はずかずかと扉間に近寄りいなり寿司を差し出す。

「…ああ。ちようど腹が減っていたところだ。貰おうか。」

柱間が複雑な表情で、扉間が芙蓉の作ったいなり寿司に手を伸ばす様子を見ている。扉間は無表情でいなりを口に運んだ。

・・・うわあああすっげーうまいんですけど!・・・

「うん…二〇〇円は高いが、まあ美味しいな。」

そう言つてもう一つ手を伸ばす。

「ちよ、扉間！全部食うなよーっ！」

解りやすい兄弟だなあと呆れつつ、本当にお金を払つてきた二人に対して少し反省する樹だった。



芙蓉はいつものように空を見上げた。

気づけば年が明け、いつの間にか庭の梅の花がほころび甘い香りが漂っている。

樹が毎日のように家に来て泊ってくれ、芙蓉自身も女学校で放課後に料理倶楽部を作り数人の生徒に教え始めたことで、マダラからの伝書鳥がまだ来ない事を余計に気にせず居られた。

だが、それでも芙蓉は毎日の習慣として空を見上げて待つていた。

天気は良いものの気温は低く、芙蓉は羽織っていたストールをしっかりと巻き直し、少し身震いしながら家の中に入ろうとした。

ツイピーツイピーツイピー

芙蓉の後ろで鳥が大きな声で鳴く。振り返ると梅の枝にシジュウカラが止まって居る。

よく見ると、足になにか白いものが巻き付いている。

「……」

芙蓉は急いでシジュウカラに近づくと、鳥の方も芙蓉に寄ってきて芙蓉の手の上に乗った。

すると自分で自分の足に巻き付いている白い紙を蹴り、芙蓉の掌に落とし、シジュウカラは芙蓉の肩に止まってまたツイッピーと鳴く。

芙蓉は急いで掌に落ちた白い小さな紙の包みを開こうとした。

気が急ぐのと緊張で手が震え、うまく開けない。

やつのことで紙を広げると、それはマダラからの手紙だった。

『芙蓉。元氣か？五月一日。午前七時。檜枝岐神社の社で待つ。この手紙は三分で燃えてなくなる。気を付けろ。』

マダラの文字を見て、そしてマダラに会えることに芙蓉は体が震えるほど嬉しくなり、短い手紙を何度も何度も繰り返して読み返す。

するとあつという間に三分が過ぎ、紙の四隅から発火し始めた。焦って手を離すと手紙は燃えて白い灰になりながら天へ消えていった。

待ちに待っていたマダラからの肉筆の手紙が消えてしまう様子を寂しそうに見つめたが、マダラに会えるという喜びに胸が躍り始める。

「やったあー！」

握りこぶしにした両手で顔を隠し、芙蓉は小さく歓喜を上げる。

・ ・ ・ でもあと二カ月半かあ。長いなあ ・ ・ ・

芙蓉は家の中に入って居間に座り、マダラがいつも座っていた場所を眺めた。

・ ・ ・ またマダラさまと一緒に暮らせる。ついにマダラさまと結婚できる。

・ ・ ・ でも ・ ・ ・

芙蓉の眼には、樹、柱間、仏間、椿、扉間、そして学校の生徒たちや里で関わる知人の顔が次々と浮かんできた。

里を出れば、もう二度と里に帰ってくることはないだろう。

だが、マダラの言う夢の世界が実現する日にはきつと、また会える ・ ・ ・

それまで、マダラが否定するこの木ノ葉の里が平和であってほしいと芙蓉は切に願った。

(11) 背徳の求婚。柱間の愛

「いらつしやい。樹ちゃん。…どうしたの？そんな悲しそうな顔して！大丈夫？とにかく早く中に入って。」

玄関に立っている樹は、今にも泣きそうな顔をしていた。

芙蓉は心配しながら樹を部屋に通し、少しでも落ち着いてもらおうと緑茶を淹れて樹の前にそつと差し出した。

「芙蓉……私……火の国の大名の娘の侍女になることになった。」

「え？でも、時々は帰省はできるんでしょう？」

「ううん……この七月にその娘が水の国の大名の息子と政略結婚することになって、それで侍女として私も水の国に付いて行くんだ。侍女っていうのは隠れ蓑で、実際は火の国のスパイなんだよ……だから、里に帰ってくることはかなり難しいと思う。」

樹の眼からは大きな涙がポロポロと零れ落ちた。芙蓉は急いで樹の肩を抱き、自分の袖口でその涙を拭う。

「……いつ帰って来られるか、分らないってこと？」

「うん……」

「そ、そんな・・・それにスパイだなんて危険だよ！」

樹は天井を仰ぎ、涙を拭いて平常の顔を作つて言う。

「しようがないよ。だつて最初からこうなる運命なんだ。だからあの学校に通つてスパイ教育と高等教育を受けさせられてたんだしね。その結果を出す任務つてわけ。」

「なんとかその任務を断ることは出来ないの？だつて樹ちゃんは柱間さまの側近として活躍しているじゃない！樹ちゃんが居なくなつたら里は困るよ！」

「ありがとう。芙蓉。でもね、残念ながら私の代わりは沢山居るんだよ・・・そう、火影以外の人間はみんな、代わりなんていくらでもいるんだ。」

芙蓉の眼からも大きな涙が零れ落ちる。樹にすがつて懇願する。

「お願い！スパイだなんてやめて！私にとつて樹ちゃんの代わりなんて居ないの！樹ちゃんにはずつとずつと、この里で幸せに生きていてほしいの！」

樹が芙蓉を強く抱きしめる。

しばしの沈黙が訪れる。緑茶からほのかに湯気が立ち上っている。

「・・・ありがとう。でも私は忍だから。この任務は火の国のためだけど木ノ葉隠れの里を守る。芙蓉を守るための任務なんだ。だから、芙蓉の事を守るためなら私、頑張れる。」

「嫌つ・・・嫌だよ・・・行っちゃだめ！」

子供のようにくずる芙蓉が樹はたまらなく愛おしくなり、胸が張り裂けそうになつた。

ふいに芙蓉は顔を上げ、気丈な顔をして樹に言う。

「私、柱間さまに直接お願いしてみる。」

「芙蓉…ありがとう…」

例え柱間に直談判したところで、火の国の大名と官僚、そして里の上層部とスパイ部門で決定したことが覆ることは無いだろう。

任務を回避できる可能性はほぼゼロだと分かっているが、芙蓉の自分への気持ちを大切にしたいと思ひ樹は芙蓉の言葉を否定しなかつた。



次の日。芙蓉は火影になつた柱間の居る木ノ葉の里本部に來た。

建物を出入りする忍たちが芙蓉の美しさに見惚れて立ち止まる。そんな視線を気にすることもなく、芙蓉は一直線に火影室へと向かつた。

「貴方は確か…ああでも、火影様とのお約束はしてありますか？」

火影室の前には監視役の忍が二人立っており、当然ながら火影になつた柱間は、もう簡単に会える存在ではなくなつていた。

「…約束はありません。でも、どうしても柱…火影様に聞いて戴きたい大切なお話があ

るのです。中に入れて下さい。」

「ではまず一階の窓口で用件を言つて下さい。火影様にお伝えする内容かどうかを審査した上でお伝えします。どうしても火影様に直接進言したいというなら、許可書を提出して下さい。それにも審査はありますが。」

・・・芙蓉が来たつて伝えて下さい・・・

思わずそう言いそうになるが、ぐつと耐える。もうここはきちんとした決めごとによりシステム化された里なのだ。柱間の元許嫁だった自分が駄々をこねるわけにいかない。

芙蓉は監視役に言われた場所へ行き、火影との面会許可書を提出する手続きをしようとした。

「うーん。既に火の国側で決まった人事を火影様に文句言われてもなあ。無駄だと思うよ。」

「だとしても火影様に面会させてください。私がちゃんとご説明します。」
「でもねえ、火影様も忙しいんだよ。面会希望者だつて大勢順番待ちしてんだよ。こんな用件なんじゃ面会の許可はできないなあ。」

「こんな用件なんて言い方はないんじゃないやありませんの!!」

芙蓉は思わず、悪態をつく中年男の忍に対して大きな声を出してしまった。

周りに居た忍たちが一斉に注目する。室内と廊下に居る忍が芙蓉の場違いな美しい容姿と、その大きな怒りの声にザワザワと騒ぎ出す。

「なんだ？この騒ぎは。」

近くの階段を通りかかった扉間は異様なざわつきを不審に思い、隣に居た忍に尋ねる。

「あの、たぶん芙蓉さんだと思うんですけど、申請課でなんか揉めてるみたいです。」

扉間は急いで階段を駆け下り申請課の窓口へ向かった。

「どうした？」

「きやあつ！と、扉間さま!!」

「…驚きすぎだ。俺は化物か何かか…で、どうした。何を揉めているんだ。」

「それがこのお嬢ちゃんがくノ一の人事を変更しろって、火影様に直談判したいみたいでして。そんな用件じゃ面会でできないって言ってんですけどねえ、全然聞かなくてえ。」

窓口の男が扉間に大げさに困った顔をして見せた。

「樹の件か。あれはもう火の国とこちらで決定したことだ。変えられん。」

「でも！樹ちゃん柱間さまの秘書で優秀な人材のはずです！スパイよりも秘書の方が絶対合っています！」

扉間まで登場し、ますます忍たちがその場に群がり大騒ぎになってきた。

「フー……ここで叫んでも仕方ない。他の者にも迷惑だ。ちょっと来い！」

扉間は芙蓉の左腕を無理やり掴み、引つ張つて別室へ連れて行こうとした。

確かにここで言い合いをしても解決しない。ここは扉間に従う方が正解だろう。

芙蓉もそう思つて黙つて引つ張られていく。

・・・バタン！

会議室と書いてある部屋に連れてこられた。

芙蓉はここに来て、無理に手を引つ張らなくても良かったのではないかと少し怒りを覚える。

「座れ。話は俺が聞いてやる。」

「でも、柱間さまじゃないと・・・」

「俺は火影の相談役。右腕だ。」

そう言つて芙蓉を睨みつける。芙蓉は柱間だけではなく、扉間もいまや千手ではなくこの里の権力者ナンバー2となり、遙か高い場所にいつてしまったのだと実感した。

しゅんとして芙蓉は膝に目を落とす。

「さつきも言つたが、樹の人事を覆すのは無理だ。これは忍の任務だ。感情論で覆すことなど絶対にあり得ない。」

「感情論……確かにそうかもしれませんが。私にとつて樹ちゃんは唯一の親友です。ずっと

幸せでこの里に暮らしてほしいと思います。でも、樹ちゃんは里の設立時からあんなに尽力して、とても貢献してきたではないですか。そんな人をスパイにしてしまうなんて、里にとって損害だと思います。」

「フツ…仕方がないとはいえ、お前はやはり忍のことなど全く解ってないな。マダラと二年も一緒に居てこの程度とはな。」

「……！」

芙蓉は唇を噛み、扉間を睨みつける。

「里がほぼ完成した今、樹の役目はもう終わったのだ。そして次はスパイとしての任務を命じられた。忍はそれを遂行するのが務めであり、その為にこれまで厳しい修行と勉強をしてきたのだ。」

「…なぜ樹ちゃんじゃなきゃいけないんですか？忍には代わりが沢山居るんじゃない？じゃあスパイ役だって他に代わり居るはずですよ。」

「優秀だからだ。」

「……。」

芙蓉は言葉を失った。

優秀。

そう、樹はその優秀さゆえに第一線で任務をこなさなければならぬのだ。

芙蓉の眼にうつすらと涙が浮かぶ。

「代わりが登場する時は、その優秀な人材が使えなくなってしまう時だけだ。」

芙蓉は定まらない視点を泳がせながら、暫く何かを考えている様だった。

「解つたらもう諦めろ。じゃあな。」

扉間が立ち上がり、部屋を出ようとした時だった。

「あの一！今日、お家に伺つてもいいですか？柱間さまはいつでも来て良いって仰つていました。」

芙蓉も立ち上がり、扉間の背中に叫んだ。その声に扉間は呆れて振り返る。

「ハア…諦めが悪すぎるぞ！馬鹿な兄者にお前が泣き付けば状況が悪化し、火の国との関係にヒビが入りかねん。来るな！」

「違います。今のお話はしません。他にお願いがあるんです。」

「なんだ。言ってみろ。」

「柱間さまご本人にしか言えません。」

「なんだと？お前、ふざけるなよ。」

ガチャ!!

突然会議室のドアが開けられた。

「扉間、もういい。」

入ってきたのは火影の制服を身にまとった柱間だった。

芙蓉の騒ぎが柱間の耳にも入り、扉間と会議室に入ったと聞いて急いでやってきたのだ。

「いやーすまんな芙蓉！火影つてのも面倒なもんだ。普通に我が家に来てくれれば会えたものを。大変だったなあ。」

扉間が柱間をキツと睨む。

「あの！柱間さま、お話があります。今日、お家に伺つてもよろしいですか？」

「もちろんだ！大歓迎だぞ！今日は五時には帰宅する。その頃来てくれぬか？」

「兄者！樹の人事の件はもう決まったことだ。覆すことなど出来ぬ。解つておるな。」

「ああ…そうだな。だが芙蓉の話としてしつかり聞くことも必要ぞ？まあそう固く考えるな。」

ハアーと大きな溜息をついて、扉間が先に会議室を出て行った。

「すまなかつたな…芙蓉。嫌な想いをさせてしまった。」

「いいえ。大丈夫です。扉間さまも、この忍の方たちが仰ることも正論です。ただ、私の意見を火影である柱間さまに聞いて戴きたかつたんです…。でも個人的な感情で言うのではなく、正しい手順で論理的に進言したくてここに来ました。」

芙蓉は柱間の眼を見てしつかりと言った。

「そうか……いや、別にいいのだが、ではなぜ今日これから家に来るのだ？」

「それとは別にお願ひがあるのです。個人的な事ですからここではお話できません。」

「もしや！ やつと一緒に住んでくれる気になったか？」

「ですから、ここではお話できません！」

「ああ、すまん……あははは……」

柱間はずうくとあからさまに落込んだ。

◆ 二月半ば。冬至からまだ二ヶ月も経つておらず五時にはもう完全に暗闇になっていた。

前の家とは違うはずなのに、家の門に向かう道の灯がどこか懐かしい。

門まで来ると門番が重い扉を開けた。家は外側から見えたよりもはるかに大きく、前の家よりもずっと大きい。

やつと玄関に着くと、庭に見覚えのあるシルエットの葉を落とした木があった。

「……これ。もしかして、芙蓉の木？……」

芙蓉が呟くと同時に玄関が開き、中から柱間が出てきた。

「芙蓉！ よく来たな！ 寒かったであろう。さあ早く中に入つて。」

恐る恐る玄関の中に足を踏み入れると、そこに扉間も居た。

「俺も一緒に聞くからな。」

「えっ……。」

「すまん。どうしても一緒に聞かせろと五月蠅くてな。なに隅っこに置いてくだけで何も口出しはさせせん。気にしないでくれ。」

「フーン！」

マダラと芙蓉の繋がり疑っている扉間は、樹の件とは別件で話があると言う芙蓉に対して疑いの念しかなかった。

同席を拒否する柱間には、その疑いを晴らす為にも一緒に同席させろと言って押し切った。

「……分りました。大丈夫です。その代わり扉間さま。どうか私の話を最後まで聞いてください。お願いします。」

「……分った。」

扉間は芙蓉から視線を逸らし、不服そうに返事をした。

「その前に、腹ごしらえせぬか！腹が減ってはなんとかと言うではないか。な！」
「結構です。お話しただらすぐにおいとましますので。」

「まあまあそう言うな。この前のいなり寿司の礼だと思ってくれ。芙蓉の手料理の味には及ばないかもしれぬがな。」

「確かに腹減つたな。そこは俺も兄者に賛成だ。」

「・・・なら、お言葉に甘えて・・・」

「よし！おーい、オトミ、オシオ、花守寿司のやつ、部屋に運んでくれ！」

中年の女性と若い男が出てきて一礼し、台所へと向かった。

廊下を歩いていると、使用人たちに加え、部下や弟子思しき若い忍たちを数人見かけた。火影という存在の大きさを感じる。家の中には以前の家の面影はまるで無い。

そして大好きな椿の姿も…。

椿は平和協定が結ばれた直後、芙蓉を守れなかったことに責任を感じて女中を辞めたと柱間から聞いていた。それ以来、椿がどこへ行ってしまったのか分らない。

厳しくも優しく、いつも傍に居てくれた椿の事が心配になる。

感傷に浸っていると柱間の部屋に着いた。

広々として畳と板間の二つの床があり、板間には大きなテーブルと大きな布張りの椅子が両側に三脚ずつ向かい合って置いてある。

「さ、芙蓉は左側、奥の椅子に座ってくれ。扉間は右側の隅っこな。」

「隅つて…さほど距離変わらないだろこれ。」

三人が椅子に着くと、先ほどの使用人二人が盆に寿司や料理を載せて運んできた。次々とテーブルの上に色鮮やかな品々が並んでゆく。料理好きな芙蓉はつい観察して

しまう。

「おお、先にこれを持って来ぬか。じゃん！芙蓉の好きな「清酒・いろは」だぞ！」

柱間は使用人から手渡された清酒の瓶を嬉しそうに芙蓉に見せた。その清酒は芙蓉が成人した祝いの席で初めて飲んだ酒で、それ以来時々晩酌に出してもらっていた。

「馬鹿か！話があるって来てるのに酒飲ませるとかおかしいだろ。」

「で、でもせっかくご用意いただいたので一口だけ頂きます。ありがとうございます。柱間さま。」

柱間は勝ち誇った顔で扉間を見てニヤついた。扉間は腕を組みそっぽを向く。

「乾杯!!」

「何にだよ。」

「・・・乾杯。」

「扉間、お前は乾杯しなくていいぞ。」

「はあ!!」

「・・・ふうふう。」

芙蓉は思わず二人の様子に笑ってしまった。二人は昔のまま、仲のいい兄弟だった。

その笑顔を見て柱間と扉間もふつと顔が緩む。

この二年間の時の流れも、悪い出来事も、全て無かったように、昔のまま今があるよ

うに感じてしまう。

三人は食事を始めた。

芙蓉は美しい飾り切りの南瓜や胡瓜、大根を皿に取り、じつくりと観察してから口に運ぶ。

柱間はその様子を微笑みながら見ていた。ふと、芙蓉の箸を持つ指先に目がいく。ガサガサとした見た目でとても荒れている。同じく手の甲も粉を吹き荒れが目立っている。

・・・マダラが居なくなつて治癒を施す者が居ないからか。苦勞しているんだな・・・芙蓉。この前のいなり寿司は絶品だったぞ！あれは樹が言うように専門店が出せるな。」

「兄者……！」

無神経に樹の名前を出す馬鹿な兄に扉間がそれとなく注意する。

「ありがとうございます。樹ちゃんつたら本当にお金まで頂いてしまつて……扉間さまも、ありがとうございます。」

「いいのだ！また作つてくれ。今度は一個三〇〇円で買うぞ。」
「高けえーよ。」

柱間の無神経な話題を中心に会話をしながら食事を終えた。

すると柱間はおもむろに立ち上がり、芙蓉の傍へ行き、膝をついた。

「芙蓉。手、出してみ。」

「え? え? なんですか? やめて下さい。立つて下さい!」

「いいから、いいから。」

柱間は戸惑う芙蓉の両手を優しく取り、そつと自分の両手の上に重ねた。

「あ……」

みるみるうちに荒れた手が、白く滑らかで美しい手に治っていく。

「これからはこんなになる前に俺に言ってくれよ!」

「……」

芙蓉は荒れた手を柱間に見られていたことに恥ずかしくなり、顔を赤らめて俯いた。

「そんなこと言つて触りたいだけだろ。フン。」

そう皮肉を言う扉間は、自分には出来ない柱間の行動に胸がモヤモヤとする。

「さて。ではそろそろ芙蓉の話を聞こうかのう!」

テーブルの上は使用人たちにより綺麗に片づけられ、三人は畳の上に場所を移した。

芙蓉と柱間が向き合つて座り、扉間は広い部屋の隅、板間と畳の中間に片膝を立てて

座っている。

「柱間さま……あの……私……」

「うん。」

「あの……その……えつと。」

「……あーもうじれつたい！早く言えよ!!……扉間が心の中で呟く。

「私と、結婚して下さい。」

「はあ!!」

柱間と扉間の声が揃う。

「私なんかは今さら、こんなことを言える立場ではないことは重々承知しています。でも、マダラさまが居なくなつて私、恋しかつたのは柱間さまのほうだったんです。それで本当に私のことを愛して、大切にしてくれるのは柱間さまだけだつて解つたんです……。私も……愛しているんです。今でも柱間さまのこと……。」

「ぶざけるな！何言つてんだよ！」

怒鳴る扉間が強いチャクラを込めて睨んだ。

ゾクツ……扉間の背中に冷たいものが走る。

「芙蓉。ありがとう。頭を上げてくれ。」

芙蓉は恐る恐る顔を上げ、柱間の表情を伺つた。柱間の返事はどうなのだろうか。

「俺も芙蓉の事を今でも心から愛している。友であるマダラと愛し合っていることを知つた時、身を引く覚悟をした。だが、気持ちは変えられなかつた。まさか芙蓉の方が

ら俺の元に戻ってきてくれるなんて信じられないぞ。」

そう言つて少し涙ぐんで柱間は優しく微笑んだ。

「結婚しよう。芙蓉！」

「柱間さま……！」

「ちよつと待て！おかしいだろこの展開。兄者も馬鹿か！冷静になれ。芙蓉、お前何を企んでいるんだ。マダラと組んで何か企んでいるんだろ？白状しろ！今なら見逃してやる。」

立ち上がり、芙蓉にそう迫る扉間の顔を見て芙蓉は悲しそうな顔を見せた。

「疑われても仕方ないと思います。都合が良すぎですし。でも、私は本当に柱間さまと結婚がしたいのです。一緒に居たいのです……」

「扉間、お前の気持ちも解る。だがもともと俺と芙蓉、二人で話をする約束だったのだ。それに、自ら勝負を棄権したお前には口を挟む権利はもう無いはずだぞ。」

「兄者……」

扉間はやり場のない怒り、嫉妬、そして疑念をなんとか抑え、黙つて部屋を出て行った。

柱間と芙蓉は抱き合つた。

「柱間さま……今まで本当にごめんなさい。」

「お前が謝ることはない。なに、ちよつと遠回りしただけだ。問題ないぞ。」

柱間は芙蓉の顎をそつと支え、口づけをした。

芙蓉が十五歳の時、芙蓉の木の隣りで初めて口づけを交わしてからもう五年が経っていた。

柱間はまるで芙蓉の花が満開に咲いているあの暑い夏に戻ったかのように、体が熱くなるのを感じていた。

そつと目を開け唇を離し、柱間は芙蓉の顔を見る。

涙が滲んで潤む大きな琥珀色の瞳と長いまつ毛、真つ白な肌にすつと通つた鼻筋、上品な唇……十五歳の頃のあどけない可愛らしい少女から、今は立派な大人の女に変わっていることに改めて気づかされる。

これまで子供だと思つて我慢していた芙蓉に対する欲望が一気に溢れ出してくる。

「芙蓉……もう絶対に離さない……」

気づけば芙蓉の頭を座布団の上に載せて畳の上に横たえていた。

芙蓉の長い艶やかな髪が畳に不規則に広がる。

柱間は芙蓉の唇をむさぼりながら、この現実を思う存分噛みしめる。

……どれだけ長い間、この時を待っていたか……

一方、芙蓉は何も考えないように心を殺そうと必死だった。

マダラへの罪悪感。

柱間への罪悪感。

強い自己嫌悪。

そして恐怖。

だが、それらを全て無視してでも守りたいものがある。

そして、守れる強さが、今の自分にはある。

柱間の唇は芙蓉の首に移り、首筋を優しくなぞっている。

「芙蓉、愛している。」

どこかで聞いた言葉と声とが、柱間が甘く囁く言葉に重なる。

先ほど自分の手を癒してくれた大きな掌が、今は芙蓉の胸を包み込み揉んでいる。

上着が脱がされ、白い胸が露になる。柱間はそれを確かめるかのように、胸の谷間に

口づけをした。そしてスカートが脱がされる。今度はへそに口づけをする。

それから身体全てに唇と舌、指先の愛撫の雨が降り注ぐ。

そのしぐさから、柱間の自分への愛の強さが伝わってくる気がした。

「あんっ……っ」

我慢していた声が思わず洩れる。

「木通でこの部屋の密閉性を上げているから、いくら声を出しても大丈夫だぞ。」

柱間は芙蓉の乳首を弄びながら耳元でそう囁いた。

「違つ…そんな、私は…」

芙蓉は思わず気持ちと正反対の身体への反応に対して言葉で否定をしてしまった。

「恥ずかしがらなくてもいいんだ。芙蓉の感じている声を聞かせてほしい。」

柱間はそう言つて、とても優しい笑顔で芙蓉の顔を見る。

芙蓉は快感と嫌な気持ちで顔を少し歪ませ、目を潤ませる。

柱間はその表情を見えますます体が熱くなる。

芙蓉の全てを征服してしまいたい欲求に駆られる。

そして芙蓉の首に強く吸い付く。

「ああんっ。いやっ…。」

白い首に、うっ血した丸い跡が付く。芙蓉は少し怯えたような顔をしている。

そして下着を脱がし、足を広げ、顔を埋める。

「いやっ…だめ！柱間さまっ！やめて…っあんっあーっ！」

芙蓉の陰部の一部が固くなるのを舌で確かめ、さらに激しく刺激する。

菜の花のような甘酸っぱい女の香りは男を狂わせる香りだと聞いたことがあるが、そ

の表現は大きさでは無さそうだった。

思考回路にはもう、理性という言葉は無い。

柱間はとろりと濡れた芙蓉の膺を指で確かめると、芙蓉の腰を左手で掴み、自分の物をそこへ押し当てた。

「柱間……さま……」

芙蓉が助けを求めるかのように柱間を呼んだが、聞こえない。

「ああんっつ!! いたっ……」

芙蓉の叫びに近い声が響く。

柱間は構わず両手で芙蓉の両腕を掴んで畳に押さえつけ、芙蓉の身体を一気に貫いた。

「……!!!」

芙蓉の頭はおのずと真っ白になった。

恐ろしい太さの柱間の男根が激しく芙蓉の子宮を突き上げる。

「あんっあんっ……ああっ! ああっ!」

鈍い痛みが次第に快感に変わってゆく。

……嫌なのに、嫌なのに……

芙蓉が果ててしまいそうになるのを見て、柱間は動くのを止めた。

苦しそうに困ったような顔で柱間を見る芙蓉の顔を見て、柱間が問う。

「そんなに俺が欲しかったのか？」

「……………」

芙蓉は顔を逸らして何も言わない。

柱間はおもむろに芙蓉をうつ伏せにし、尻を持ち上げて後ろから挿入した。

「芙蓉、欲しいならちゃんと言葉にして言うんだ。」

「……………ください。柱間さまを……………私に……………」

芙蓉はあまりの屈辱に死んでしまいたい気持になる。目からは涙が流れ落ちた。

先ほどまでの優しい愛は、強い支配欲と欲情に変わっていた。

「あんっあんっあんっあんっ……………」

柱間の腰の動きに合わせて、芙蓉の胸がゆさゆさと揺れる。

屈辱的な気持に反して憎らしい快感が押し寄せる。

……………いや！いきたくない……………

「芙蓉……………っ！」

巨大な男根はさらに膨らんだかと思うと、びくびくと激しく芙蓉の中に液体を注いだ。

「っ……………あああっんっっ！」

それと同時に、芙蓉も果ててしまった。

芙蓉の白いすべすべとした背中に柱間がかぶさつて寄りかかる。

はあはあはあはあはあ……

二人の呼吸が呼応している。

柱間は仰向けになり、芙蓉を自分の胸の上に抱き寄せた。柱間の心臓の音が聞こえる。

……もう、後戻りはできなくなってしまった。取り返しもつかない……

これ以上悩むのは無駄なだけだと芙蓉は自分に言い聞かせ、そつと目を開ける。

柱間の厚く頼もしい胸板にはいくつか小さな古い傷跡があった。

そつと、その傷跡のひとつを指でなぞってみる。

……この傷のどれかは、マダラさまが付けたものかしら……

柱間はその指の動きを見ている。

「その傷はいつのだったかな……もう戦は沢山だ。これからは誰も傷つかずに暮らせる世界を作るぞ……なあ芙蓉。」

そう言うのと柱間は、微笑みながら芙蓉の手をぎゅつと握りしめる。

「それはどんな世界なんでしょうか。」

「一言で言うのは難しいが、しいて言うなら争いと憎しみの連鎖が無い世界か。そのためにこの忍族連合体による里システムをより強固にする必要がある。」

「・・・そのためには多少の犠牲もいとわれないと?」

「樹のことか?…政略結婚とスパイ活動…それも水面下で争いの種を摘むには必要なことなのかもしれぬ。俺個人としては互いに腑を見せ合い、協定を順守してゆけば、そんなことは必要ないと思っているのだがな…。俺はこの里の長になったが、支配者ではない。導き役にすぎぬ。俺一人の意見で物事を決める事はできないのだ。」

芙蓉は柱間の手を外し、ゆっくりと起き上がり俯いた。

柱間も起き上がり、その肩に自分の着ていた上着をかける。

「樹のスパイ活動の内容についてなら変えられるかもしれん。考えてみる。」

芙蓉はその言葉を聞き、更に策略を巡らせた。

柱間と婚約し、抱かれて信用させるといふ計画は成功した。

次の手だ。

この二ヶ月半の間に、必ず樹を救ってみせる。

◆ 芙蓉は柱間に背を向けたまま、強い視線で畳に散らかる自分の服を見つめていた。

梅の花が咲いているとはいえまだ寒さの峠は越えていない二月。

この日は朝から雪が降っていた。芙蓉と樹がこたつに入って蜜柑を食べている。

「あのね、樹ちゃん。今日は大切な話があるの。」

「ん?何?どうしたの?」

樹は急いで蜜柑を飲み込み、正座をして芙蓉を見る。芙蓉も正座をして樹に向き合
う。

「私、柱間さまと結婚することになったの。」

「……はあ!!」

樹は一瞬、芙蓉の言っている言葉が理解できなかった。

「……ほ、本当に?」

「うん……。五月に挙式する予定。」

「なんで私に何も相談してくれなかったの!なんで!」

樹は芙蓉に怒りを感じ声を荒げる。

「ごめんね……。でも結婚しようって決めたのは昨日なの。昨日柱間さまの家に行って私
から求婚してその場で決まったんだ。だから相談できなかったよ。」

「なにがどうなったら、昨日思いついてその日に求婚できるのよ!意味わかんない!」

樹の怒りは収まるはずもない。むしろ聡明なはずの芙蓉の考え無しとも思える行動
にますます腹が立つ。

怒る樹をよそに芙蓉は落ち着いて話を続ける。

「それでね、樹ちゃんに私の侍女になって欲しいの。お願い。柱間さまにはまだお願い

してないけれど、きつと大丈夫だから。」

「でも私は火の国の……」

……!……

樹は芙蓉が自分がスパイにされる事を阻止しようとしているのだと気づいた。

「芙蓉……もしかして、私のために?……」

芙蓉は樹の顔を見てニツコリと笑顔になる。

「私、昔から樹ちゃんに守られてばかりだった。ううん。樹ちゃんが存在自体に助けられてきた。樹ちゃんに出会わなければ、大人や周りの言うことに黙って従って、生きてるか死んでるかも分らないような人生を送っていたと思うの。だからね、樹ちゃんは私の命の恩人なんだよ。今度は私に樹ちゃんの事、守らせて。お願い。」

「芙蓉……なんで……私なんかのために……」

樹の眼からは涙が零れ落ちる。

「なんか、つて言っちゃダメ。昔から樹ちゃんが私に言ってくれる言葉だよ。樹ちゃんみたいに素敵な女の子、他に居ないよ?うふふ。」

「でも、だからって、好きでもない男と結婚するなんて……私は芙蓉が不幸になるのなんて見たくない!」

樹の涙がより一層激しく流れ落ちる。芙蓉は立ち上がり、樹の傍へ座り樹の涙を拭

う。

「大丈夫。まだ柱間さまのこと愛してる気持ちが残っていたって気づいたの。何より柱間さまは私のこと心から愛してくれてる。不幸になんてならないから大丈夫だよ。」

「なんかさ．．．いつのまにか私のほうが泣くこと多くなってる？」

二人は顔を合わせてふふつと笑った。

芙蓉はマダラを追って里を出て行くと決まった今、柱間を騙してでも樹だけは必ず守ると決めていた。

そのためには、どんな手でも使う。

たとえ罪を犯してでも．．．

(12) 樹のために・・・

木ノ葉隠れの里が創設されて以来、他国から視察に来る忍が増えていた。それに伴い人の交流や物流も活性化され、様々な人々が里にやってくる。

一方それは里の治安問題にもなっていた。

その為、まずは視察団を受け入れるシステムと施設が作られた。

里本部の近くには視察団専用の宿泊・研修施設が建設され、それに伴い周囲には視察団相手の店が増え、新たな繁華街も出来上がっていた。

その日、その繁華街に芙蓉の姿があった。

ストールを頭から顔、首にかけて巻き、マントを羽織って人波をかき分けて歩いている。

人混みを抜けると、三階建の民宿の前に出た。ここは他国から来た一般市民や商人たちが良く利用している民宿だ。芙蓉はおもむろに中に入る。

一階部分は銭湯と食事処が併設されており、中央近くには番台があった。芙蓉は番台に向かって歩き出す。

「今日泊まりたいんだけど、空いてるかい？」

「いらつしやい。女用の相部屋が空いてるよ。それでいいかい？」

「ああいいよ。あのさ、あたし水の国から来たんだけど、同じ水の国の客を誰か紹介してくれないか？女一人旅は心細くてね。出来ればイイ男がいいんだが。」

「おいおいお客さん。ここはそういう店じゃないよ。まあでも女一人には事情があるんだろ。うし同情はするよ。：アンタ顔良く見えないけど不細工では無さそうだし、そういうの目的なら視察団宿場に行つてみなよ。今年火の国と水の国の大名の子供同士が結婚するらしくてさ、それで水の国の忍が頻繁にここに視察に来てるみたいだし。」

「そうなのか？だが、あたしみたいなごろつきの女が入れるかね？」

「さあね。でも娼婦のやつらはウロウロしてるからそれに混じつてみるとか。」

「はは。そいつはいいや。ありがとう。感謝するよ。」

芙蓉は宿泊手続きを済ませ、部屋に向かった。

部屋の扉を開けると、五人ほどの女が思い思いに過ごしていた。

「よう。邪魔するよ。あたし水の国から来たコウつて言うんだ。よろしくな。」

部屋に入るなりいきなり勝手に自己紹介をする芙蓉に対し、無視する者、笑顔で挨拶をする者、ちらつと見るだけの者、無言で一礼をする者、五人はそれぞれその反応をした。

すると笑顔で挨拶してきた女が芙蓉に話しかけてきた。

「私も水の国から来たの！出身はどこら辺？私は濃霧地方。」

「あたしは湖水地方だ。近いな。よろしく！あんた、里には何の用で？」

「忍の夫の視察に着いてきたの。でもあの宿場には妻は泊まれないから。せつかく新婚旅行も兼ねてるのに、最悪よ。」

「はは。夜這いに行つてやつたらどうだ？旦那喜ぶよ？」

「やだーもう！でもそういうのなんか萌えるかも。うふ。」

芙蓉は笑いながらストールとマントを取り、その女の隣りに座った。

「あんたとは気が合いそうだよ。こんなに可愛らしいし。旦那の顔も見てみたいな。」

「あら。あならこそ凄い美人じゃない。独身？」

「ああ。男はご無沙汰だね。寂しくつてしょうがないよ。」

「うっそー信じらんない。あのさ、この後夕食を旦那たちと一緒に食べるのよ。あなたも一緒に来ない？男ばかりじゃつまらないし、独身男が多いから喜ぶわよ。」

「いいのかい？そいつは嬉しいな。ぜひ。そうだ、あんたの名前を聞いていなかったよ。」

「キヌアよ。一人で寂しかったから同郷のコウに会えて嬉しいわ。」

「…あの、私も水の国の出身なんですが…」

先ほど芙蓉に一礼してくれた女が突然話に入ってきた。

「あ、そうなんだ！水の国が三人揃うなんて凄いな！」

「そうですね…。私、ネイっていいですよ…。弟と一緒に絹の買い付けに来てます。」

「そうだ、あなたも一緒に食事どう？弟さんも一緒にいいわよ。」

「ありがとうございます…。弟は接待なんで、私一人で参加させて頂きます。」

こうして芙蓉とキヌア、ネイの三人は水の国の偵察団の忍たちと夕食をとることに
なつた。

芙蓉は思いもよらず二人もの水の国の女性に出会えただけではなく、こんなにも早く
水の忍たちに近づけるとは、天が自分に味方してくれているような気がした。

サラサラサラ・・・

小川に優しい音を立てて水が流れている。近くには松明も焚かれ部屋は暖かい。

水床のあるこの料亭は水の国の人間にとっては心が安らぐようで、すっかり水の国の
人間御用達になつていてという。

「水の国に乾杯！」

水の国の忍の男四人、芙蓉を含め女三人。全員で盃を持ち乾杯した。

別室ではその忍の上司たちが食事をしていてという。

「いやー男ばかりだったから、美人の女性が二人も加わつてくれて嬉しいな。」

独身三人の男たちは喜び勇んで芙蓉とネイを質問攻めにした。

「おい、キヌア。あんな美人二人、本当に偶然同室になつただけなのか？」

キヌアの夫が小声で質問する。

「そうよ。すつこい偶然よね。いいえ、これはきつと運命よ！誰かと結婚するかも！ウフフフ。」

「お前はすぐそういう話題に…一応いまは任務中だぞ。つてまあ確かにそうなつてくれると俺も嬉しいけどさ…」

食事の場は大いに盛り上がった。芙蓉も書物だけとはいえ事前に調べた水の国についての知識でなんとか話題に着いていくことが出来ていた。

食卓の上の皿が空になり、酒も空になりかけた頃、芙蓉が話し始めた。

「なあ、せっかく盛り合っている所悪いんだが、水の国の忍さん達に会えたから、伝えときたいことがあるんだが聞いてもらえないか？」

全員が芙蓉に注目し、頷く。

「この前、この里の女二人が激しく言い合っている場面に出くわしたんだ。人の話を盗み聞きする趣味は無いがあまりに大声で言い合ってるもんだから、止めに入ろうかと思つたんだ。そしたらその会話を耳を疑つたよ。」

「何だ？」「何だつたんですか？」「それで？」・・・

「どうやら一方はくノ一で、これからスパイになるつて言つたんだ。今度水の国の大名の息子と火の国の大名の娘が結婚するらしく、くノ一はその侍女のフリをして火の国の

スパイになるってわけだ。政略結婚だが水の国が裏切らないか情報収集する目的なんだろうな。」

一同は険しい顔になり、互いに顔を見合わせる。

「で、なぜ二人は言い合ってたんだ？」

「もう一方はそのくノ一の友らしく、スパイがバレれば死刑。場合によつては命に代えて任務を遂行する必要がある。友はそれを心配してくノ一にスパイを止めるよう説得してみたいだ。だが火の国直接命令らしく、任務は断れないと言つて揉めてみたいだな。」

忍の男たちが更に険しい顔で考え込む。

「その情報、信ぴょう性は？」

「わからない。あたしはただ立ち聞きしただけだからな。だから特に誰かに報告しようとも思わなかった。けどその女二人の会話でしか聞いたことが無い大名家同士の結婚を、さつき宿の店主から聞いて驚いたよ。女二人の話と辻褄が合うし、あれは本当じゃないかと思つたんだ。今日こうして忍の皆さんに会えたから一応伝えた方が良くかと思つてね。ごろつきみたいなただけど、母国には愛着もつてるんでな。」

「いや、情報提供ありがとう。一般人からのそういった何気ない情報が、実は重大なこともある。後で上司にも報告しておくよ。」

キヌアとネイは心配そうに顔を見合わせた。

「その話が嘘でも、やっぱり火の国の侍女に火の国側の人間、木ノ葉隠れの忍が侍女になつて付いて来るのはなーんか信用できないかも…」

キヌアが分析したかのような顔で言う。

「そうですよ…水の国に嫁入りするわけですから水の国の侍女を使うべきです…疑われて当然の行為ですよね。」

ネイもキヌアに同調する。

こういう時の女の分析は結構正しい。男たちはそう思った。

芙蓉は二人の意見を聞き、ほんの少しだけ口角が上がる。

・・・やった・・・

芙蓉たちは民宿へ歩いて帰りながらスパイの話や結婚の話で盛り上がった。キヌアもネイもどうやら相当に水の国への愛国心が強いらしい。

芙蓉は風呂に入ったあと、布団に入った。

自宅以外の布団で寝たのはマダラと出逢つたあの日が初めてだったことを思い出す。

マダラが今の自分を見たらどう思うだろうか…

そんなことが気になったが、コウ役を演じきり目的を果たした安堵でいつの間にか眠りに落ちていた。

◆ 「柱間さま。樹ちゃんを私の侍女にしてくれませんか？」

「芙蓉：気持ちちは解る。だが樹のスパイ任務は変えられんのだ。解ってくれ。」

「しつこいぞ芙蓉。お前はもう黙ってる。」

芙蓉と柱間、扉間は火影室に居た。婚約者となった芙蓉は、もういつでも火影室へ入れるようになっていた。

「私は火影の妻になるのです。妻を持てば弱みを作るということです。私が誘拐され強迫されたらどうしますか？柱間さまに選べますか？里の利益を優先させ、私が死ぬことを。」

「いや、それは！もちろん何としてでも芙蓉を救う。そして里も守る！いや、まず誘拐などさせはしないぞ！」

「なら、里で最強のくノ一を私に付けるのは当然ではありませんか。」

扉間は、いい加減な柱間が芙蓉に言い負かされるのを黙って見ていた。

しかし、扉間の目には芙蓉の言動は妻になるという立場に少々驕っているようにも見える。そしてついに口を開いた。

「確かに兄者にはお前を見殺しにすることは出来ないだろう。そうして判断できないうちに里にも危険が降りかかるのは火を見るより明らかだ。だがな、お前は大きなことを

一つ忘れてる。」

芙蓉は忘れてなどいない。一番厄介で心配な事だからだ。

動揺もせず無言で扉間の次の言葉を待つ。

「俺が火影の相談役、右腕だつてことをな。」

・・・どや顔で言われなくても分つている。・・・

だが、時が来れば否応なしに樹をスパイ任務から降ろさなければならなくなる。

その為に芙蓉はこれまで準備を周到に進めてきたのだ。

扉間が一人で偉そうにしようが、議会に芙蓉の意見が上がれば、議会はリスクを考慮して樹を自分の侍女にする事を考えざるを得なくなる。

だがそれよりも前に、水の国自ら樹を拒否してくるはずだ。すべては計算済みだつた。

二人とも、やめぬか。芙蓉、樹のスパイ任務については危険が少ないものにならないか今話し合っているところだ。もう少し待っていてくれ。」

「フン。議会で一蹴されたくせに。」

芙蓉は目を伏せたかと思つたらすぐに顔を上げて二人を交互に見て微笑んだ。

「分りました。お忙しい所、申し訳ありませんでした。失礼します。」

部屋を後にしようとする芙蓉に柱間が慌てて声をかける。

「まだ、そっちの家の片づけは済まないのか？いつ…一緒に住めるようになる？」

「まだ時間がかかりそうですね。」

芙蓉はニツコリと笑顔でそう返すとさっさと部屋を出て行った。

「下心が丸見えだぞ。みつともない…別に結婚するまで同居しなのは普通の事だろ。」

扉間が呆れた顔で柱間を見る。いつものようにずうくと落ち込み額を机に着けていた。

◆

三日後の事だった。

水の国から樹を侍女から外すように要請があった。

侍女は水の国の女に限ると決めたようだった。火の国はこれに反対したが、スパイ活動の情報はどこからか水の国に漏れたことが分かると、すぐさま水の国の要請を飲んだ。

「芙蓉！樹が侍女とスパイ任務から外されたぞ！良かったな！もう樹にも伝えてあげて。」

芙蓉が柱間の屋敷の玄関に入った途端、柱間が目の前に立っていて、突然芙蓉の両腕を掴んで言った。

「本当ですか!!・・・良かった・・・良かったですっ」

芙蓉は思わず涙ぐむ。柱間が慌てて芙蓉を抱き締めた。

「泣くな！もう大丈夫ぞ。お前の侍女になる話は俺から樹にしてやるからな。」

芙蓉は柱間の胸を押し、体を離す。

「私、樹ちゃんの所に行かなきゃ！」

柱間が引き留める暇もなく、芙蓉は玄関を出て行った。

「芙蓉——もう樹には伝えてあるぞーっ！明日でもよかるーっ」

後ろから柱間の声が聞こえるが無視して走り続ける。

スカートが捲れ、白い足が露になる。道行く人が思わず芙蓉の足に注目する。そんな

ことは構わずに、一秒でも早く樹に会いたい気持ちで必死に走った。

ハアハアハアハア……芙蓉は屈みこんで何とか唾を飲み下す。

樹の家の前に着いた。

やはり二人には強い絆があるのだろう。ちようど樹が家から出てきた。

「芙蓉……どうしたの！」

「樹ちゃん！良かった！」

芙蓉は樹に飛びついた。樹は芙蓉をしつかりと受け止め、そして抱き締める。

「……ありがとう。芙蓉。これですつと一緒に居られる。」

「……樹ちゃん。大好き！」

夜になり、二人は寝間着で一つの布団の中に入っていた。

この日、芙蓉は柱間の家に泊る約束だったのだが、無断で樹と一緒に自宅に居た。

二人は互いに片時も離れたくなかった。

「樹ちゃん・・・侍女の話は断つてくれても大丈夫だよ。侍女にならなくても、これからもいつでも会えるんだし。」

「ううん。侍女になればもつとずーつと芙蓉と一緒に居られるじゃん。私やるよ。」

「でも・・・柱間さまや扉間さまも一緒に住んでるよ？他にも沢山使用人やお弟子さん達もいるし、お家にもなかなか帰れないし、大変だよ？」

「平気だよ。そんなの！」

「ごめん・・・あのね実は、私から侍女をお願いしておいて申し訳ないのだけど・・・本当は樹ちゃんには私の侍女になって欲しくないの。」

「えっ！なんで！」

「だって・・・その・・・見られたくないの。知られたくも無いし・・・」

「何が？お風呂だって一緒に入ってるじゃん。トイレ見られたくないとか？」

「それもだけど・・・柱間さまと・・・その・・・」

・・・なるほど。そういうことか・・・

確かにそれは樹にとってもかなり辛い事だ。

目の前で見えるわけではないにしても、同じ屋根の下、いや隣りの部屋で芙蓉が柱間に抱かれている所など考えたくもない。

芙蓉が樹に抱き着いてきた。芙蓉の胸が樹の胸に当たる。

「た、確かに……それは私も……すごく辛いし、嫌、かな……」

樹は芙蓉の背中に手を回し、背中をさする。

「だから、ごめんね……断ってくれる？」

「うん……分った。」

樹は不覚にも芙蓉が柱間に抱かれる場面を想像してしまい、急いで掻き消そうとした。

「……ねえ芙蓉……キスしてもいい？」

芙蓉はドキリとしたが、以前樹から突然口づけをされた時、とろけそうになった感覚を思い出した。

芙蓉はゆつくりを樹の顔を見上げた。ただ真っ直ぐに自分を見つめている青い瞳に吸い込まれそうになる。美しい……芙蓉はそっと目を閉じた。

「芙蓉、愛してる。」

樹はそう言つて芙蓉の唇に口づけをした。

樹の唇は芙蓉の頬に移つてゆく。そして樹の長い指が芙蓉の唇をなぞっている。

芙蓉は男女でするような事を女性の樹からされることに少し疑問は感じつつ、不思議と嫌な気持ちは全くしなかった。

それはセックスが愛情表現の大切な手段だということを、芙蓉は身をもって良く理解していたから：そして、マダラに対するものとは違うが、芙蓉にも、樹に対する愛情があつたからだつた。

女学校で教わつた男女の営みは、子供を作る手段、男を満足させる手段として教わつた。

もちろん建前で『愛情表現』と言われたが、やはり学校で教わつたそれは、どこか昼間の生活とは別の世界の話のようで、まるでその時だけ違う世界に行つてしまうような感覚だつた。

しかし芙蓉はマダラと暮らし、セックスは紛れもなく実生活の一部であるものだと身をもって理解した。

愛するマダラの端正な顔、眼差し、逞しい身体、何気ない繊細なしぐさ、会話の端々の中に、芙蓉の身体を熱くさせ何かを期待させるものがあつた。

それはマダラに触れたい、触れられたいという欲情だつた。

そんな事を考えていると、樹が芙蓉の寝間着のボタンをひとつ外した。芙蓉が嫌がらないことを確認し、次々と外していく。真っ白な胸が現れる。

見慣れている胸だが、触るのは初めてだった。柔らかそうに見えていた芙蓉の胸は実際はハリがあり樹の指を跳ね返す感覚がした。

「樹ちゃん……いいよ。樹ちゃんの好きなようにして。」

芙蓉は樹の頭を撫でながら優しく言った。

「芙蓉……」

樹はその言葉を聞くと胸がぎゅっと締め付けられた。衝動のまま芙蓉の乳首に吸い付く。

「あんっ……」

芙蓉の甘い声が洩れる。芙蓉の息は速くなり、胸が上下に大きく動く。

樹は自分も服を脱ぎ、裸になる。そして芙蓉のズボンと下着を脱がした。

「寒くない?」

「うん。樹ちゃんの忍術のおかげで部屋、いつも暖かいもん。」

風遁が得意な樹は、暖かい風でいつも部屋を温めていた。

「印を結ぶときの樹ちゃん、カッコいいよ。」

「ありがとう……」

美しい肢体を樹にさらしている芙蓉にカッコいいと言われて、樹はとても嬉しくなる。

再び芙蓉に口づけをする。そして芙蓉の股間に手を伸ばす。

「あっ・・・ああんっ」

唇を離し、芙蓉が快感にもだえる顔をしっかりと見つめながら芙蓉の固くなった部分をこすり続ける。

芙蓉がもだえる顔を想像しながら何度自分を慰めたか分らない。実際の芙蓉の表情はとてもしゃらしく、普段の清楚で可愛らしい顔は面影も無い。

・・・こんな顔、マダラはいつもこうして見ていたんだ・・・

嫉妬と悔しさがこみ上げてくる。夢中になって芙蓉の乳首を吸いながら刺激を続ける。

芙蓉の膣からは男を迎え入れるための蜜でとろりと濡れている。

樹はその膣にゆっくりと指を入れた。

「ああんっ・・・」

芙蓉のいやらしい声が洩れる。

同じ女である樹にはどこを触れば絶頂にいくのかよく解っている。その場所に指が辿りつくと、絶妙な力加減で刺激する。

「ああーっっっ・・・樹ちゃん、だめっ・・・恥ずかしい・・・」

「いっぱいいっぱい気持ちよくしてあげるよ。芙蓉・・・」

芙蓉はこれまで感じたことのない強い快感に、頭がおかしくなってしまうようになる。

「……っ……いつ樹ちゃん……気持ち良すぎておかしくなりそう……」

樹は芙蓉の言葉に嬉しくなり、自分も大きな快感を感じていた。空いている片方の手で芙蓉の美しくくびれた腰を愛撫する。

「芙蓉……とつてもいやらしくて綺麗だよ。もつと綺麗になつて……」

更に速く指を動かし、芙蓉を追いつめる。

「ああああっっん……あつ……あつ……ん……ん……」

芙蓉は身体をびくびくと痙攣させて果ててしまった。

樹は芙蓉を強く抱きしめる。脱力したままの芙蓉は樹の腕にぐったりともたれる。

「芙蓉……愛してる。愛してる……」

「樹ちゃん……私も……愛してるよ。ありがとう。」

……芙蓉を誰にも渡したくない。

誰よりも芙蓉を愛している自信がある。

大切にする自信があるのに、なんで自分は男じゃないんだろう……

樹の眼にはうつすらと涙が滲んでいた。



チユンチユン：朝陽と共に、スズメの鳴き声が部屋に入つて来る。

「遅い！遅いぞ！芙蓉はまだか！・・・もしかして、もう戻つて来なかつたらどうしよう・・・」
「ほんと昔から芙蓉の事になると兄者は馬鹿が更に馬鹿になるな。もうとつくに朝だぞ。もう既に『戻つて来なかつた』状態だろうが。」

柱間は、樹の事を聞いて屋敷を飛び出していったまま戻つてこない芙蓉のことを、一晩中寝ずに待つていた。

「仕方ない・・・迎えに行くか・・・」

「いやいやいや、ついに頭がおかしくなったのか？樹と一緒に家に居るのは分つているんだから、一日くらいそつとしておいてやれないのか。」

柱間は真剣な目つきで扉間を見て言い返す。

「昔、『ライバル出現』つて言った事、覚えてるか？」

「・・・あ、ああ。確か芙蓉が女学校に入ったばかりの頃の事か。それがどうした。」

「あれな、樹のことぞ・・・」

「兄者、とりあえず寝ろ。うん。」

「芙蓉は気付いておらぬようだが、樹は、俺やお前の様に芙蓉を愛しておる。それがダメだとか不道德だとか言いたいのではない。そういう愛もあるだろう。ただ、一生の別れになるかもしれない危機から脱した今の樹は、俺と結婚する芙蓉のことをどうしたいと

思うかと考えるとな…心配なのだ。お前なら解るだろ？扉間。」
「……………」

扉間は言葉に詰まる。

…自分のものにならないのなら、誰かに取られてしまうなら、いつそのこと…芙蓉を消そうとした時の気持ち扉間は思い出していた。

「…告白も出来ない、友情を壊すことも出来ない。樹はそれでもずっと芙蓉の親友として傍に居る。愛する人が他の男を愛する姿を目の前で、ただずっと見せつけられても…辛かっただろうな。扉間、改めてお前のことも考えた。お前も樹と同じだったな。辛かっただろう…気付いてやれず、すまなかった。」

扉間は朝陽の差し込む窓辺に立った。

「いや、樹と俺は違う。樹は一生告白できないかもしれないが、俺はしようと思えばいつでもできたはずだった。許嫁の男なものにな…」

柱間はそう言う扉間の背中を見つめた。

…やはり扉間は今でも芙蓉のことを愛しているのだな…

「とにかく。心配しすぎだ。樹は親友として芙蓉をずっと守り抜いてきた。スパイ任務に不服を言わなかったのも、任務だから盲目に従ったわけではないはずだ。国を、里を守る事が芙蓉を守る事だと考えていたのだろう。だから…傷つけたりなどはしな

い。」

「…そうだな。やっぱりお前の方が、よく芙蓉のこと見ている。」
「うるせえ。」



その日の夕方、芙蓉が大きな荷物を持って柱間の屋敷に来た。

「おお芙蓉！つて、そんな大きな荷物、先に言えば俺が持つて来てやったのに。」

「あの…昨日は申し訳ありませんでした。どうしても樹ちゃんと一緒に居たくて…」

「それはいいのだ。学校で授業もしてきたのだろうか？疲れただろ。早く入って休むとい
い。」

屋敷に戻ってこなかった事も、樹と何をしていたのかも追及して来ない柱間の優しき
に、芙蓉は少し胸が痛んだ。

柱間は芙蓉の荷物を持ち、芙蓉に手を差し出してきた。

「おかえり。芙蓉。」

芙蓉は柱間と手を繋いだ。二人はそのまま中に入って行った。

長い廊下の先、屋敷の端の部屋に連れてこられた。

「ここが芙蓉の部屋だぞ。自由に使ってくれ。」

柱間がなぜかニヤニヤしながら扉を開ける。

「えっ……これって……」

その部屋は以前の芙蓉の部屋とほぼ全く同じ間取り、床の間や遠い棚まで同じだった。

そして勉強机や芙蓉が気に入っていた鏡台がそのまま同じ位置に置かれている。ただ一点違う所は、窓が作られている所だった。

「ワハハハ。驚いたか？いつ芙蓉が帰ってきてきても良いように、この家を建てた時から用意しておいたのだ。以前は窓が無かったから窓だけ付け加えたがな。」

そう言つて芙蓉にウインクする。

芙蓉は心に温かいものを感じた。消えかけていた灯りがともつたような感覚だった。

「柱間さま……ありがとうございます。」

目の前の景色が滲む。気が付くと芙蓉は涙を流していた。

今でも勿論マダラのことは心から愛している。

しかし、芙蓉は心の中に柱間への想いという灯りが、しっかりと残っていることに気が付いた。心の消えかけた灯りは、紛れもない柱間への愛情だった。

マダラに対する愛情。それは恋焦がれる情熱的な愛。説明のできない欲求の追求。

だが、柱間に対する愛情は、大きな優しさと大きな愛に包まれる安心と信頼だ。

以前はそれを家族愛だと納得していたが、やはりそれとは少し違うようだ。柱間の自

分に注がれる愛は特別で芙蓉だけに注がれている。そしていつも直球である。

初めて柱間に抱かれた時は樹を守る為とはいえ、酷く屈辱を感じた。だがそれも良く考えてみればこれまでいつそうなってもおかしく無かつたはずなのに、柱間はずっと結婚まで芙蓉の貞操を大切にしてくれていたのだろう。芙蓉に触れないことも柱間の強い意志と愛情だつたはずだ。今の気持ちに気づいた上で抱かれていたら、もっと違っていたかもしれない。

「芙蓉？大丈夫か？おお泣かなくてもよかろうに。よしよし。そんなに喜んでくれるとは、俺も毎日掃除していた甲斐があるぞ。ワハハハ。」

芙蓉の考えている事を知る由もない柱間は、芙蓉の頭を撫でながらいつものように豪快に笑っている。

だが、やはりマダラへの罪悪感で素直に柱間に抱き着くことが出来ない。

一体これから自分はどうなってしまうのだろうか、言いようのない不安が襲う。

いや、正確に言うと、自分がどうしていけば良いのか分らなくなりそうで不安なのだ。頭を撫でてでもピクリとも動かずに涙を流し続ける芙蓉の様子に、柱間は手を止める。

「・・・芙蓉。どうした？なにかあったのか？」

そう言つて柱間は芙蓉の前に出ると芙蓉の目線に合わせて腰を曲げ、ハンカチで芙蓉の涙を拭つた。心配そうな顔で見つめてくる。

「す、すみません。大丈夫です。感動しすぎちゃって…」

芙蓉は焦って、無理やり笑って見せた。

「芙蓉。昔お前は俺に『絶対大丈夫』って言ってくれたな。俺はその言葉でここまで生きてこられた。だがな、人間誰しも大丈夫じゃない時もあるぞ。そんな時の為に、家族や友達、恋人が居るのだ。我慢しなくていい。無理はするな。」

芙蓉はその言葉を聞くと、柱間に抱き着いて声を出して泣き始めた。

柱間は黙って芙蓉を抱きしめ、頭を撫でる。

「…ごめんさい。私、これまで柱間さまのこと、いっぱい裏切ってしまった。それなのに、私はこれからも貴方を裏切るかもしれませんが…だから…」

「いいんだ。俺は裏切られたなんて思っていない。芙蓉はただ素直な気持ちで選択してきただけだ。俺はそれを認めている。どんな選択をしようが、俺は芙蓉をずっと愛している。」

どこまでも優しすぎる柱間に芙蓉は溺れてしまいそうだった。

「…私が溺れずに、柱間さまの為にできることは何?…」

芙蓉はこれから毎日、それを考え、実行していこうと決心した。

庭の芙蓉の木の新芽はまだ固く、早く春が来るのを待ちわびている様だった。



その夜、芙蓉は珍しく夜中に目が覚めてしまった。

再び目を閉じて眠ろうとしたが、眠れない。隣で眠る柱間を起こさないように静かに起き上がり、部屋を出て手洗いに向かう。

そして再び部屋に戻ろうとした時、廊下で扉間の部屋から洩れる明かりに目が留まった。

木ノ葉の里が完成し柱間が火影になってから、扉間は更なる激務に追われているようだった。きつと今夜もまた仕事をしているのだろう。

芙蓉はふと、夏に扉間とノウゼンカズラの咲く坂で会った時のことを思い出した。

扉間はいまも、自分の感情を抑えているのだろうか。

自分が柱間と婚約し、この家に一緒に住んで居る事をどう感じているのだろうか…。

そんな事を考えながら灯りを見つめて立っていると、部屋の扉が少し開いて扉間が顔を出した。芙蓉は驚いて思わず固まる。

「いつまでもそんな所に突っ立ってないで早く部屋に戻れ。風邪引くぞ。」

扉間は芙蓉が部屋から出て手洗いに立ち、廊下で足を止めていることに気づいていてた。

「…すみません。眠れなくて…扉間さまはまだお仕事ですか？」

「ああ。眠れなくても横になっている。兎に角早く部屋に戻れ。」

「あ、あの、お茶でも淹れましょうか？」

「ハア……じゃあ、頼む。」

扉間は芙蓉が部屋に戻りたくないのだと察し、仕方なく芙蓉の申し出を受けた。

芙蓉は台所に行つて湯を沸かし、急須に茶葉とお湯を注ぎ、湯呑と一緒に盆に載せて扉間の部屋に持つて行つた。扉をノックする。すぐに扉間が扉を開けた。

「お待たせしました。ほうじ茶です。」

「身体が冷えただろ。部屋に入つて少し温まつて行け。」

「…はい。ありがとうございます。お邪魔します。」

芙蓉は緊張した面持ちで部屋に入る。

机の上には大量の書類や本が積まれており、床にも資料や忍術の巻物が入つた箱が並べられている。想像以上に仕事は大変そうな様子だ。

「散らかつていて悪いな。まあ座れ。」

扉間は座布団を二つ、火鉢の隣りの畳の上に並べ、その一つの上に座つた。芙蓉は扉間の目の前に盆を下ろして座り、急須から湯呑へほうじ茶を注ぐと、湯気がふわりと立ち上り香ばしい香りが部屋に広がる。

「こんなに遅くまで、大変ですね…」

「今日は特別だ。火の国に提出する書類の期限が迫っているからな。あと、どうしても

早く完成させたい忍術もある。」

話が続かず、二人の間に気まずい沈黙が訪れる。

「・・・あの、ご無理、なさらないで下さいね。健康第一ですので・・・」

「ああ。」

シン・・・。冬の夜は静寂に包まれている。

「あの、もし私にお手伝い出来る事があれば何でも言つて下さい。」

「ああ。このお茶で充分だ。」

芙蓉は伏せていた目をそつと扉間に向けてみた。

扉間は静かにお茶をすすっている。湯呑はそんなに小さくはない筈だが、扉間が持つとずいぶん小さく見えることに気が付いた。今更ながら扉間の体格の大きさに驚く。柱間に劣らずとても頼もしい。

そして、扉間は優しい。

芙蓉は、改めて反省した。

扉間だけではなく、自分も扉間と向き合うことを避けてきたことを。

いつからか扉間に恋をしてしまうことを恐れ、そして扉間から愛されることを恐れ、扉間が自分に対して冷たく接してくることを敢えて深く考えないようにしていた。

それを考えてしまえば、二人の心は通じ合ってしまったかもしれないから・・・

しかし、きちんと向き合っていれば、扉間も自分もこんなに辛い想いをしなくて済んだのかもしれない。

扉間が芙蓉の視線に気が付いて、目が合う。反射的に二人は目を逸らした。

「……身体が温まったら、戻って寝ろよ。」

「はい。もう温まりました。ありがとうございました。もう一杯お注ぎしますね。」

芙蓉は再び扉間の湯呑にお茶を注ぐと、空になった急須を盆に載せ立ち上がった。扉間は芙蓉の顔を目だけで見上げる。

「おやすみなさいませ。」

芙蓉は静かに部屋を出て行った。

扉間は閉められた扉をしばらく見つめたあと、湯呑の中の茶に目を落とした。

扉間の、芙蓉がマダラの企みに加担しているのではないかという疑念はもう消えていた。

柱間との婚約・同居、芙蓉が樹を守ろうと必死になっている様子、里の為に役に立ちたいと一生懸命働く姿を見ているなかで、ついに疑う根拠を見つけられなかった。

一方、個人的な感情としては芙蓉がマダラと愛し合うことが自分への罰だと思っていたが、芙蓉が兄と結婚する今、何を罰だと思えばいいか分らなくなっていた。

やはり、芙蓉とは永遠に結ばれることが無いことこそ、罰なのだろうか。

(13) 揺らぐ心。決まる心

今日から三月。この日はずいぶん暖かな日だった。

芙蓉は、柱間と二人で柱間が建設した柳の遊歩道を散歩している。

芽吹いたばかりの柳の若葉の黄緑色が眩しい。

隣の柱間を見上げると、柱間も芙蓉の方を見た。目が合い、互いに笑顔になる。優しい柱間が美しい柳の風景の中で更に優しく見える。

この道を歩いたのは、去年の夏だっただろうか…もう二度と柱間と歩くことは無いと思っていた。

「披露宴の衣装は芙蓉の気に入るように、好きに選んでいいんだぞ。」

柱間は結婚が決まりすぐにでも挙式をしたが、芙蓉は新緑の美しい五月に挙式と披露宴がやりたいと柱間を説得した。しかし、芙蓉はまさか、自分がマダラと里を出て行く五月一日になってしまふとは思わなかった。

「はい。でも、本当にこじんまりとしたいので、衣装もそんなに拘りは無くて。披露宴も同じ衣装でいいかなって…」

「芙蓉。それはないぞ。里の皆にサプライズで発表するのだから、こうドーンとインパ

クトのある豪華な衣装でない！お前の美しさが最高に際立つような、すつごいやつだ！」

「あはは……いえいえ。質素儉約のほうが里の皆さんにも好印象だと思えますよ。」

芙蓉は一度柱間と婚約破棄しマダラと同棲していたせいで、女学校では更に中傷され、嫉妬されていた。女学校以外でも同じことを思っている人も居るだろうということも理由にし、芙蓉は結婚の発表は挙式後にしてほしいと柱間に頼み認められていたが、それより少しでも花嫁に逃げられる柱間の傷を浅くしたいという思いがあつた。

芙蓉は柱間を騙している罪悪感で再び胸が苦しくなり、足元に視線を落としたりするとそこにはカタクリの花が咲いていた。

……カタクリ。確か花言葉は「初恋」と「寂しさに耐える」だったっけ……

芙蓉の初恋の相手は柱間だろう。そして、寂しさに耐えながら待っている相手はマダラである。

しかし、いま芙蓉の目の間に居るのは、自分を愛で包んでくれる柱間という現実。自分が望みさえすれば、その現実がこの先も続くのかもしれない。

芙蓉は自分にとって本当に大切なものは何なのか、分らなくなっていた。

「どうした？そんな顔をして。何か心配な事でもあるのか？」

いつの間にか自分がとても悲しい顔をしていたことに気が付き、焦って顔を上げる。

「だ、大丈夫です。もうすぐ女学校を辞めるのがちよつと寂しいなって思つて……」

「そうだな……だが、お前に女学校は合つていなかったのではないか？俺は今でもお前にはアカデミーの教師をしてもらつた方が良かったと思つておる。母校とはいえ嫌な想いをして大変だつたな。樹からも常々話は聞いていたのだが……申し訳なかつた。」

「そんな。私は夢だつた教師の仕事が出来ただけでも本当に幸せでした。ありがとうございます。」

そう言いつつも、芙蓉はうちの領地で子供たち相手に教えていた時のことを、一番楽しかつた教師経験として思い出していた。

女学校では残念ながら、あの子たちのような無邪気な笑顔にはあまり出会えなかつた。それだけが心残りだつた。

◆ 女学校最後の日。

芙蓉の最後の授業が終わつても生徒たちから惜しむ声は無く、いつもと変わらない風景のままだった。

……私が伝えたかつたことは、この子たちには伝わらなかつたのかもしれない……芙蓉は残つていた荷物を纏め、教員室を出た。

するとそこに四人の生徒が花と風呂敷を持って芙蓉を待つていた。

「芙蓉先生！」

一斉に芙蓉に駆け寄って来る。

芙蓉が驚いて固まっていると、花束を持つ生徒が芙蓉にそれを手渡した。

「芙蓉先生。今までありがとうございます。私たち、先生の料理倶楽部に入って本当に良かったです。」

「先生の教えてくれる料理、家でも凄く好評なんですよ。もつと沢山色んな料理教えてほしかったのに……。これ、四人で作ったいなり寿司。食べて下さい。」

「先生のお話、いつも為になりました。私も親に決められた道だとしても、夢を持って生きていく希望が持てたんです！」

「私たちはこの学校で先生の一番のファンですから！そして先生は一生の恩師です。本当にありがとうございます。」

四人は芙蓉が放課後に始めた料理倶楽部に入ってくれた生徒だった。自分を好ましく思っていない生徒しかいない中、入学してくれただけでも嬉しかったのに……。

「……皆さん、そんなふうにも思ってくれていたんですね。私、凄く嬉しい……。ありがとう。本当にありがとう。」

芙蓉は大粒の涙を流して花束といなり寿司の入った風呂敷を抱きしめた。

四人も芙蓉に抱き着き、皆で泣いた。

芙蓉が校門を出ていくまで、四人は校舎の窓からずっと手を振って見送ってくれていた。

・・・ありがとう。本当に、ありがとう・・・

教師は生徒に何かを教えるだけではなく、生徒からも学び成長させられるものだと、芙蓉はこの時知った。

・・・この思いをいつかまた、教師の仕事に活かせる日が来ますように・・・

◆ 「芙蓉、そこまでして働かなくても良くない？ 挙式の準備もあるんだからさ、家でゆっくりしてなよお。」

木ノ葉の里本部の中の食堂で味噌汁を作っている芙蓉に、樹は困った顔で言った。

「ありがとう樹ちゃん。でもお昼だけだから大丈夫だよ。家でじっとしているよりも、里のため、柱間さまのため、そして樹ちゃんのために少しでも役に立ちたいんだあ。」

芙蓉は柱間への罪を少しでも償えるように、そして木ノ葉の里に少しでも役に立とうという想いで、木ノ葉の里本部の食堂で働き始めていた。

そして樹も、芙蓉の侍女になる話が無くなり再び里本部の秘書室で働き始めていた。

侍女が居ないのは問題という話になったが、代わりに扉間がこれまで通り柱間の屋敷に同居することで侍女無しが上役会議で認められたのだった。

芙蓉の扉間への恨みは、もう殆ど消えていた。

自分の命を奪おうとしたことは許せないが、そのおかげでマダラに出逢えたのは紛れもない事実である。

そして、心からマダラを愛したことで人を愛する苦しみも知り、少しだけ扉間が理解できた気がしていた。

「芙蓉！今日のメニユーはなんぞ？」

柱間がニコニコしながら大手を振って歩いて来る。

「火影様。そこにちゃんと書いてあるんだから読めばいいでしょ。芙蓉だって忙しいんだし。」

「そう言うお前は芙蓉と楽しそうに話しておるではないか。」

「私はいいです。ねえー芙蓉？」

「あはは。大丈夫だよ樹ちゃん。私一人で作っているわけじゃないし。」

「芙蓉が来てくれるようになってから皆が喜んでおるのが分るぞ。飯が更に美味くなつたうえに、目の保養までできるんだからなーでもまあ、芙蓉の手料理を俺以外に食べられるのもちよつと複雑だが。」

「えー。火影様もそんなこと想うんだ。意外。ただの超博愛者だと思つてた。」

「そりゃあ…芙蓉は俺の嫁だからな…つ。」

柱間が小声で恥ずかしそうに樹に言った。

「もうすぐ出来ますから、もうちよつと待つててくださいね。」

芙蓉は手際よくほうれん草の胡麻和えが入った小鉢を並べ、奥にいる三人の中年女性にその他の料理を確認しに行った。

「良かった。芙蓉、学校辞めたらどうなるかと思つたけど元気そうですね。」

「うむ。芙蓉自らここで働きたいと言い出した時は驚いたが、家庭以外でも必要とされる存在であることは励みになるしな。良かったぞ。」

「火影の妻の手料理かあ。超ありがたいですよ。値上げしたらどうですか?」

「ワハハハ。さすが樹! 良い事言うのう!」

食堂の営業時間が始まり、続々と忍たちが入つて来る。

芙蓉は勘定所に立ち、忍たちから金を受け取る。釣銭を渡す時そつと相手の掌の下に触れて小銭が落ちないようにして渡している様子を、柱間が明らかに落込んだ様子で肩を落として見ている。その様子を横で見ていた樹が柱間に言い放つ。

「火影室に食事を運んでもらえるのに、わざわざ毎日ここに来るのつて、芙蓉がナンパされたリセクハラされないか心配だからでしょ?」

「・・・つ、そ、んな、ことはないぞ! 里の忍たちは皆・・・紳士だからな。」

「わつかりやすい。あ! 今あの人、芙蓉の手、超触つてた!!」

「芙蓉——！勘定は俺がやるぞっ！」

柱間は立ち上がって叫んだ。

「はああ？」

樹は隣で呆れた。実は自分も柱間と同じ目的で毎日食堂に通っているのだが……食堂に居る忍たちが目を丸くして、食事の箸を止めて柱間に注目している。

柱間は芙蓉の所へ行き、勘定所に立つ。

「いらつしやいませ。任務、ご苦労であつたな！」

「あの人、本当に馬鹿かもしんない……」

樹はこんな天然男と芙蓉が結婚することに不安がよぎる。

「は、柱間さま！やめて下さい。急にどうしたんですか？」

芙蓉も勘定を待つ忍たちも戸惑い固まっている。

「芙蓉、俺にも手伝わせてくれ。お前は休んでいなさい。」

「バー……カっ!!」

食堂の入り口からその様子を見ていた扉間が腕を組み、呆れた顔で叫んだ。

「おお、扉間！丁度いい、お前も手伝え！」

「いつもどおり勘定の兄者に勘定役が出来るか！というか火影の立場をもつとよく考えろ！皆の者、済まないな……芙蓉、勘定を続けてくれ。」

「あ、は、はいっ。」

「…やっぱり柱間のツツコミ役は扉間しかないな。うん。」

樹はほうれん草の胡麻和えを突きながら、苦笑して観ていた。

芙蓉が勘定を続け、柱間と樹がそれを見ながら食事をしていると、さつき出て行った扉間が何かを手にとって芙蓉の所へ近づいて行く。

「?」

柱間と樹が箸を持ったまま顔を見合わせる。

「ん。これを使え。手で金を受け取るよりも衛生的だし、小銭を落す心配もないだろ。」

扉間は木製のトレーを芙蓉に手渡した。

「なるほど！気が付きませんでした。ありがとうございます！扉間さま。」

芙蓉は嬉しそうに笑い、それを両手で優しく受け取った。

「…ふつうこれくらい気づくだろ…フン。」

扉間は少し照れくさそうに目線を逸らし、ポケットに手を入れた。そして小銭を取り出し、そのトレーの上に載せた。

「二人分な。」

「あ、はいっ！ありがとうございます。」

その様子を見ていた柱間と樹は、感心して見惚れていた。

特に樹は、なぜそんな単純なことに気づけなかったのかと自分が情けなくなり、凹んだ。

そのうち扉間は盆に料理を取り、気づけば柱間と芙蓉のテーブルに歩いて来て座っている。

「流石ですnee。扉間様。扉間様が火影やったほうがいいじゃないんですか？」

「扉間！あの手があつたとは全然気づかんかったぞ！なるほどな！」

「お前たちは気付かなかつたのか？馬鹿だな…。ということ毎日ここに来て見張る必要も無くなったわけだし、兄者は火影室で仕事しながら飯食えよ。」

「えーいやそれはだなあ…：そうだとしても、やはり芙蓉の顔を見ながら飯をだな…」

「黙れ。」

◆ 柱間がいつものようにずうくと落ち込む。樹は無視して食事を続けた。

桃の花が咲き、もう風には冷たさは無い。いよいよ桜の季節が目の前に迫ってきた。

芙蓉と、柱間、扉間、樹たちの関係は日に日に良くなるように感じられた。

柱間は芙蓉との愛の契りを果たし、もうすぐ正式に夫婦となることが嬉しかった。そして里も順調に成長し、他の忍族が里システムを真似しようと木ノ葉の里へ視察に訪れ、他里の基礎も出来上がりつつあることを喜ばしく思っていた。

扉間は芙蓉への罪悪感は消えることはないが、芙蓉がマダラではなく柱間の妻になり、自分も傍に居られることを内心とても嬉しく思っていた。そして馬鹿な兄の火影を支える参謀・相談役の仕事もまさに天職であり、忙しくもやりがいを感じていた。

樹は芙蓉と愛し合ったあの日、本気で芙蓉を連れて里を出ようと計画する気になった。だが芙蓉本人の言葉通り、芙蓉を見ていると以前に増して柱間を大切にし、愛していることが伝わってきた。芙蓉は火影になった柱間と結婚し、自分は一生親友以上の親友として傍に居る方が良いと悟っていた。

一方の芙蓉は・・・

庭の沈丁花の香りが、部屋の中まで漂ってくる。

大きな鏡の中に、純白の花嫁衣裳を纏った芙蓉が居る。

そこに柱間も一緒に写り込み、芙蓉の両肩に手を置く。

「・・・美しいのう。良い衣装じゃないか。よく似合っておる。」

「・・・ありがとうございます。」

衣装は左合わせの襟には銀糸で刺繍が施されており、襟は首の根元まで見えるほど襟抜きされている。手先に行くほど広がる袖口は、薄い絹が幾重も重なっており、そこにも銀糸の刺繍がある。スカートの裾はストンと下に落ち、後ろの裾が長くドレープを描いている。

「ほーんと！完全にお姫様だねこれは。似合いますぎ！この衣装にして良かったじゃん。」
樹が隣りでしゃがんで芙蓉を見上げている。

「樹ちゃんも一緒に選んでくれて、ありがとうね。」

沈丁花の香りが風に乗る、一層強く香ってくる。

芙蓉はその香りと自分の花嫁姿に、今にも泣きだしてしまいそうだった。

「あと一カ月ちよつとかあ…早いねえ。芙蓉がお嫁に行っちゃうなんて悲しいよ。しかも柱間様って相当馬鹿だからすつごく心配…はあ。」

「コラー！俺は火影だぞ。馬鹿では火影にはなれん。よつて俺は馬鹿ではない。」

「そういう所ですよ、そーゆートコ！自覚ないんだ…」

「樹ちゃん、言い過ぎだよ。柱間さまだつて一応火影なんだから。」

「芙蓉、あんたが一番失礼じゃん。天然同士、大丈夫かねえ…」

「樹、おぬしも居るし、扉間も居るから大丈夫だ。アハハハハ！」

・・・良かった。樹ちゃん、柱間さま、ありがとう。・・・

もう少しで泣きそうになった芙蓉は、樹と柱間のやり取りで笑うことが出来た。

しかし、芙蓉の迷いは更に迷宮に入り込んでいた。

大好きな人たちと共に暮らす平和で温かい生活。木ノ葉の里の役に立つ喜び・・・それを捨てたくはない。

芙蓉は、マダラと里を出て先の分らぬ人生を歩むことに迷いを感じ始めていた。

・・・いつたい自分は、マダラと柱間、どちらを選ぶべきなの?・・・

柱間を選び、この生活を続けることは言わずもかな幸せだろう。

しかし、マダラはどうだろう。両親も兄弟も失い、同胞から見放された。

芙蓉以外に誰がマダラを愛し、支え、傍に居ることが出来るだろうか。

・・・もしマダラさまが里に戻って来てくれるなら、私は柱間さまもマダラさまも選ばない。

例え二人の愛を失ったとしても、マダラさまと柱間さまが再び手を取り合ってくれるなら、私は迷わず愛を手放すのに・・・

芙蓉の中での願望と決意は固まるばかりだが、一向に結論は出せないでいた。



ついに、桜が開花した。

里でも人々の話題の中心は桜の満開予想だった。今年の花見はどうしようとか、どこ
の桜が綺麗だとか、皆楽しそうである。

「あの、扉間さま・・・ちよつとよろしいですか?」

芙蓉が珍しく扉間に声をかけた。扉間は読んでいた本を閉じる。

「構わん。なんだ。」

「お願いがあつて・・・ダメならいいんですけど・・・あの・・・」

「なんだ。ダメだと思ふなら言うな。」

「・・・ですよ。すみません。」

芙蓉はおずおずと部屋から出ようとした。

「あーもう！いいから言え！気になるだろ！」

扉間は相変わらず素直になれず、つい芙蓉に皮肉を言つてしまふ。

「・・・剣術の、稽古を付けてほしいんです。・・・昔みたいに。」

「は？嫁入り前の女が何言つてんだよ。怪我でもしたらどうすんだ。兄者も怒るぞ。」

「大丈夫です。花嫁衣裳は首元と顔くらいしか肌でないのです。」

そう言つて芙蓉は、自分の顔と首の後ろを指さした。

「そういう問題じゃない。断る。」

「前みたいに真剣勝負じゃなくていいんです。型だけでいいんです。だめですか？」

「型だけなら・・・。だが、なぜそこまで俺と今、剣術がしたいんだ？」

「決着をつけたいんです・・・過去に。」

「・・・。」

扉間は芙蓉を見つめたまま言葉が出ない。芙蓉のその言葉には、実に色々意味が込められているのは明らかであり、重たいものだった。

芙蓉も真顔でじつと扉間の瞳を見つめている。

「分った。じゃあ、型だけだ。」

「ありがとうございます。」

庭には雪柳が滝のように美しく咲き誇っている。芙蓉の木も、ようやく若葉を茂らせ始めている。

最近昼間はぐつと気温が上がり汗ばむ陽気が続いており、この日も、とても暖かい昼下がりであった。

二人は久しぶりに剣術着に袖を通し、庭に出た。

「序の参の型でいくぞ。いいな。」

「はい。よろしくお願いします。」

二人は刀先を突き合わせる。三秒数えて打ち合いの型を始める。あくまで定型の打ち合いであり、勝敗が決まる戦いではない。

二人は無言で型を続ける。

芙蓉の瞳はまるで真剣勝負のように真剣である。

あの日と全く同じ瞳だった。

だが扉間は心を乱すことなく、その瞳からすぐに目を逸らし型を続ける。

芙蓉の額に汗が光る。暖かな日と、見た目以上にきつい型のせいだった。

扉間は汗ひとつかかず、表情一つ変えない。

いよいよ最後の動作だ。ここからは強く打ち合う型である。

カンカンカンカン！

刀が何度か交わり、交わったまま静止する。

「私は貴方を許します。だから、扉間さまも私のこと、許してください。」

「俺がお前を許すだと？・・・勘違いも甚だしいな。」

「？」

「俺にはお前を許さなければならぬ事など、最初から何もない。」

かつて扉間は、芙蓉への愛情に蓋をしてそれを認めようとしなかった。

しかし蓋の中で恋心は膨らみ、最後は自爆した。芙蓉に責任など無かった。

扉間は、芙蓉が生きることが分かった時から、ずっとそのことに気が付いていた。

それからこれまで、扉間なりに自分の行いに悔い、悩み、苦しんでいた。

だが今ようやく、そのことを自然と認めることが出来た。

そして言葉にして芙蓉に伝えることが出来た。

「・・・ありがとうございます。扉間さま。」

芙蓉は、ほっとしたように笑顔で言った。

扉間は無言でその笑顔を見つめていた。

「扉間さま流石ですね。汗ひとつかいてない。でも暑いでしょう？冷たいお水を持ってきますね。」

芙蓉は自分の顔の汗を術着の袖で拭うと、台所へ向かった。

・・・これからは、素直に芙蓉と笑い合えるだろうか・・・

扉間は手に持った刀を見つめ、心の中で呟いた。



桜：咲いてしまえば、満開になるまでにそう時間はかからなかった。

まだ明るい夕暮れの空にはもう月が現れている。

沈みかけた夕陽を浴びた桜は眩しく光り、陰の部分は青白く光ってる。

芙蓉はその桜の下に一人で立ち、森の向こうに浮かぶ月を見上げていた。

花冷えの風が吹き抜けると、一斉に桜の花びらが宙に舞い、芙蓉の顔や髪の毛をかすめてゆく。

芙蓉の心は決まっていた。

「マダラさまに着いて行く。」

里の人々と触れ合い、柱間、樹、扉間と共に生きる温かい生活、里の為に役立つ喜び。

どれも芙蓉には手放したくないものになっていた。

しかし、手放したくないものが増えれば増えるほど、それと同じものをもたないマダラの事を考えると胸が苦しく、時には胸が強く痛み、うずくまってしまふほど苦しくて堪らなくなつた。

そこにはマダラへの同情もあつたかもしれない。

しかし何よりも、芙蓉にとってマダラの居ない人生など考えられなかつた。

いくら楽しくても、穏やかでも、安心できても、マダラが居なければきつと全てが虚しくなる日が来る。芙蓉はそう感じていた。

そして今のマダラを理解し、隣で支えらるのにはやはり、自分しかない。

一方で、自分が一緒に居ることでマダラがいつかまた、里に戻ってくる気持になつてくれるかもしれないという淡い期待も完全に消し去ることは出来なかつた。

芙蓉は目を閉じる。

いまだ止まぬ冷たい風に、芙蓉の髪が靡き、桜の花びらが芙蓉を包み込むように舞い上がる。そして夕陽の方を向き、目を開けた。

芙蓉の琥珀色の瞳が、黄金に輝いている。その瞳には強い決意が宿っていた。

太陽が山の稜線に沈むのを確認すると芙蓉は歩き出した。

芙蓉は一步一步、踏みしめるように歩いた。

「思い残すことは残しておこう。いつかまた皆に会える日まで。」

芙蓉はまっすぐ前を向き、いつのまにか走り出す。そして柱間の居る屋敷に戻って行った。



山の新緑は一層濃くなり生命力が溢れ出ている。春の終わりを惜しむように、最後の馬酔木の花が揺れている。

この日、芙蓉は食堂の仕事を休んでマダラの家に来ていた。最終的な片付けと、里を出るための荷物を纏めるためだった。必要最低限の荷物を鞆に入れていく。

「いれも……」

先日樹と一緒に買った温泉旅行で買った石鹸を鞆にそつと入れた。

「ふふ……樹ちゃん、売店で美男子さんって間違われてたっけ。楽しかったなあ……」
 楽しかった想い出と共に辛い気持ちをぐつと胸の奥で抑えた。泣かないと決めていた。

マダラの家は服や食器、布団や生活雑貨などは全て収納に入っており、花瓶や座布団、掛け軸などはすべて処分した。部屋にはテーブルと椅子しかない。

「……思えば、ここに二人で引っ越して来た時が一番幸せだったかもしれない……
 ついそんな事を考えてしまう。頭を振ってその思いをかき消した。

立ち上がり、纏めた荷物を玄関近くの引き戸の中に締まった。

マダラとの再会の日まで、あと四日。

芙蓉は汗ばんだ掌を握り締める。

無事に、マダラと再会することはできるのだろうか。

(14) 再会の行方。マダラ vs 柱間・扉間の戦い

春の夕暮れ。薄暗くなってきた頃。

芙蓉は所々草が伸びる細い砂利道を足早に歩いていった。

顔と頭は以前芝居で使った時のストールで隠し、マントを羽織って鞆を斜めに掛けている。

数人の通行人とすれ違ったが芙蓉に気づく者は居ない。この道を通るのは旅人くらいだ。

まだ陽は出ているとはいえもう林の奥は暗く、芙蓉はそれを見て更に歩みの速度を上げる。

数羽の鳥が林から飛び出し、カアーカアーと鳴きながら飛び飛び去った。

芙蓉はその鳴き声にビクツツとして思わず足を止めた。

大好きな樹も、柱間も、扉間も、今の芙蓉にとってはもう、いま一番会いたくない相手になっている。

だが、それに反して、気を抜くと三人の顔が頭に浮かんできて恋しくなり、引き返したくなる衝動に駆られてしまう。

そんな感情に流されてはならないと、芙蓉は必死に歩みを前に進める。何としてでも、誰にも見つからず日没前に神社へ到着しなければならぬ。

ハアハアハアハア・・・

芙蓉は林の中の一本道で息を切らし、立ち止まって前屈みになった。

急いで鞆から水筒を取り出して水を飲む。

上を見上げると黒い木々が薄暗い空を隠していた。

・・・もう少し。この道を抜けたら着く・・・

太陽は沈み、林の中はなんとか前が見える程度の明るさだった。

芙蓉は一本道のシルエツトを辿りながら再び走り出す。

パキッ！

道に落ちた小枝を踏みよるめいた。

なんとか体勢を崩すまいとするが、斜め掛けにした鞆でバランスが取れない。

ドシャツ！「きやつ！」

芙蓉は道の上に倒れた。なんとか受け身を取ったので足に怪我は無かった。

地面についた右肘が強く痛んだが、なんとか立ち上がる。

芙蓉の目線は、ただひたすら、道の先を見据えている。

ゆつくりと歩き出す。そして再び早足で歩きだした。

右肘の痛みが、心の痛みを麻痺させてくれるように思えた。

「……あれだわ！着いた！」

芙蓉の目の前に、白い鳥居四つに周囲を囲まれた小さな神社が現れた。うす暗くて細かい外観は分らないが、古びていることだけは分かる。

芙蓉はとにかく急いでその社の扉を開ける。

すると、同時に社の天井の四隅に小さな灯りがともる。マダラの忍術だろうか。

芙蓉は社の外を見回し、誰も居ないことを確認して扉を閉め急いで内鍵をかけた。

振り向いて、ようやく部屋の中を改めて見回す。

神棚の他には何も無かった。木の床が灯りにもされ艶々と光っている。芙蓉はその様子を見て、マダラはここにいつも来ていたのだろうかと思う。

そして部屋の中央におもむろに座り込む。

ふと振り返って見上げると、入口の扉の上に時計があった。

二時間はかかる道程を一時間半足らずで来たことに気づく。だが芙蓉にとっては、それ以上にとつともなく長い道のりだった。

芙蓉は暫く放心状態で固まっていたが、もう安心して良いのだと気が付き、ようやくストールとマントを取り、鞆をおろした。

「ふうー……」

芙蓉は強い脱力感に襲われ、床に横たわる。

すると、初めて仏間の家に来た日の事を思い出した。

あの日もこうして床に横たわった気が…。

しかし、もう母の顔も声も全く思い出せない。昔、何を話したかも。

病床の仏間が話してくれたあの日から、母の人物に想像を巡らせてきた。

しかし、いまの自分はきつと母とは全く違う生き方をしているのだろう。

母は父と愛し合っていたのだろうか？それともずっと仏間のことが好きだったのだ

ろうか。父は、いったいどんな人だったのだろうか…。

結婚…これから、マダラとどんな人生が始まるのだろうか…。



芙蓉が神社に到着してから一時間ほど経った頃。

「芙蓉のことは何か分ったか？樹の家には行っていたのか！」

芙蓉は昼過ぎに樹の家に行くと言って出かけてから、帰宅予定の時刻を一時間過ぎて
もも帰って来ず、柱間と扉間が芙蓉を探し始めていた。

「いや。樹の家には行つてなかつた。今、樹も里じゆうを探している。俺も感知で探しているが、そもそも忍ではないから気配が殆ど分らない。ただ残っている気配から、里の中を歩いていたのは間違いない…もしかしたらもう里には居ないのかもしれない。」

「……誘拐か！」

「その可能性もある。明日、兄者と結婚することが何者かにバレて、芙蓉を利用しようとしているのかもしれない。だが：芙蓉が自分で出て行った可能性もゼロじゃない。」

「芙蓉が自分で出て行くわけがないだろ！芙蓉はあんなに里の為に役立つと働き、結婚も自ら望んでいたのだ。樹とも一緒に居られると喜んでいた。出て行く理由が無い！」

「……とにかく、今は探すしかない。誘拐にしろ、自分で出て行ったにしろ、まだそう遠くへは行ってはいけないはずだ。俺なら感知で追える。兄者はここで上忍や樹からの情報を集約していくれ。誘拐なら犯人から要求が来るかもしれない。」

「……あ、ああ。わかった。」

既に戦闘服に着替えていた扉間は家から一瞬で姿を消した。

「芙蓉！いったいどこに行ったの？！私が必ず見つけてあげるから、待ってて！」

樹は必死にチャクラを練り、風遁の風操作の感知術で里中を搜索していた。だが、ただでさえチャクラが無い芙蓉を感知するのは樹には相当に困難だった。

やはり感知のエキスパートの扉間しか頼れる人間はいないのか：いや、感知がダメでも私は足で探してやる！

樹は芙蓉が行きそうな場所にもう一度行き、走り回って探した。

・ ・ ・ 芙蓉が居なくなったら、私は生きていけない ・ ・ ・
樹は不安と恐怖に押し潰されそうになりながら必死で芙蓉を探していた。

扉間はチャクラを最高に練り上げ、芙蓉の気配を感知しようと印を結ぶ。

・ ・ ・ 里のどこにも感じない。やはり里の外なのか ・ ・ ・

芙蓉が誘拐されたとすれば、犯人は他族の忍か。

それとも ・ ・ ・

まさか ・ ・ ・ マダラ ・ ・ ・ !!!

扉間はマダラのチャクラの感知を試みた。

だがやはり里のどこにも感じない。他にも邪悪なチャクラは無いか感知してみたが、異常は無かった。

・ ・ ・ 他族の誘拐ならば、まもなく要求を突き付けてくるはず。

ならば今やるべきことは、マダラの可能性を探る事だ。 ・ ・ ・

扉間はうちはの領土へと飛んだ。

うちはの領地は千手の領地と違い、住人のほぼ全員が里に移り住んでおり、町はわずか一年で随分と荒廃した風景になっている。

そんな事には気にも留めず、扉間はマダラのチャクラを感知しようと試みる。

・・・僅かに、感じる。だがこれは以前のものが残っているだけなのか？・・・
チャクラを感じる方へ向かった。

そこはマダラの元屋敷だった。かなり大きい。

大きなその門の上に飛び乗り、そして屋敷全体を見渡し感知する。

芙蓉の気配をうつつすらと感じた。

扉間は気配を消し急いで家に近づく。

だが、マダラが居たらどうする・・・一人でやれるだろうか。

家の中を覗く。

真つ暗で誰も居ない。物音ひとつしない。

どうやら芙蓉の気配は以前ここに住んで居た執着心のようにだ。

マダラもこの家で生まれ育ち、その間に染みついたチャクラだろう。

扉間は誰も居ないことを確認し、家の中に入ると起爆札に炎をつけ灯りにする。

部屋は荷物は殆ど運び出され大物の家具しか残っていない。

慎重に明かりを照らし、何か手掛かりは無いかと搜索する。

すると部屋の隅に置いてある机の上に書（しよ）を書いたでだろう跡が残っていた。

しかもただの書ではない。

暗号や伝書で使う為の自動消滅式の印を付けた、忍しか書けない手紙だった。机には

墨の他に、それを書いたマダラのチャクラがすっかりと残っている。

「マダラの奴め、里を出てここに居たのか。いったい誰に伝書を書いていたんだ：」

・・・まさか。やはりマダラと芙蓉は繋がっていたのか？・・・

だがそう決めつけるのは早合点だ。誰に書いていたのかまでは流石に分からない。だがこのチャクラからして、マダラは近くに居るのかもしれない。

扉間は一瞬だけ動揺したがすぐに冷静さを取り戻す。

芙蓉とマダラの関係が続いているのかは分からない。だが無関係とも言い切れない。マダラが芙蓉を誘拐した可能性も大いにある。

とにかくマダラの居場所を引き続き感知してみる事にした。

うちは領地、千手とうちはの領地の間に広がる森、そして千手領地も全て。

時間はかかるが、夜が明けてマダラが動き出す前にしらみつぶしに感知するしかない。

扉間はチャクラを練り、感知をしながら夜の闇に消えていった。

柱間の所へは上忍たちからの情報が集まってきていた。

殆どは意味の無い情報ばかりだったが、一つ大きな情報が入ってきた。

「マダラの家から頭と顔を布で隠しマントを着た人物が走り去るのを見たという市民が

居ました。背格好や履物から、おそらく女だろうと言っておりました。」

「それは何時頃だ？」

「十六時〜十六時半の間だそうです。」

もしその情報が正しければ、芙蓉は自分で姿を消した可能性が高くなる。

それとも誰かに手引きされたのか…。

「もう一度マダラの家を搜索してみようぞ。俺が行く。扉間と樹が来たら伝えてくれ。」

「はい。承知しました。誰か部下を共に行かせましょうか。」

「いや、俺一人で行く。」

そう言う柱間は忍具が置いてある部屋へ行き、戦闘服に着替える。

考えたくはないが、マダラが関わっているのかもしれない。

そうなれば戦いになる可能性が高い。

柱間はマダラが里を出て行く前に自分に言った『それまでお前との戦いを愉しむさ』

という言葉を考えていた。

扉間がずっと疑っていたように、芙蓉とマダラは今でも繋がりを続けているのだろうか。それとも、マダラが芙蓉を手引きしたのか…

どちらにせよ、マダラの家から芙蓉が出て行ったのは、マダラに何かしら関係している事があるのかもしれない。

柱間は屋根伝いにチャクラを使つて走り、一分ほどでマダラの家に着いた。家に明かりは無く、静寂の闇に埋もれていた。

闇の中をチャクラを使つて歩き、柱間は家のほぼ中心にある居間に辿り着く。

柱間は極秘に修行中だった「仙法」を使うことにした。

仙法とは然エネルギーを利用し、忍術・幻術・体術の全てを飛躍的に強める力である。

この仙法を使えば、この木造の家、庭の木、花、草、石……人間と動物以外の自然物からならそこに残っている『記憶の声』を聴くことが出来る。さらに木遁を併用することで更にその精度は上がる……はずだ。

「仙法木遁 残心兆話……」

両手を顔の前で合わせ目を閉じると、顔に朱色の隈取りが現れる。

静寂に包まれている部屋のそこから中から、僅かだが人の話し声や生活音、鳥の鳴き声か聞こえてくる……柱間はその音を精査していく。

一番大きく聞こえるのは芙蓉と樹の楽しそうな笑い声……これはつい最近の鮮明な記憶だからだろう。

そして次に大きく聞こえたのは、庭から聞こえるシジュウカラの鳴き声だった。

柱間は縁側まで行き、雨戸を開ける。そして庭に向かって両手をかざし、庭の木々、土、石、花の記憶を聴く。

目をつぶると、シジユウカラのツイツピーという鳴き声、そして芙蓉が驚く声が聴こえた。次にクシヤクシヤと紙を広げるような音が聞こえる。芙蓉は何かを読んでいるのだろうか。

『マダラさま！ やつと会えるのね！』

芙蓉の喜びで上ずる大きな声が聴こえた。柱間は耳を疑うと同時に、疑惑が確信に変わり、愕然とする。

．．．シジユウカラはマダラからの伝書鳥か．．．

シジユウカラはうちは一族がよく伝書に使う鳥だった。

しかし扉間は落ち込む間も無く居間に戻ると、床に手を付け、更に残った記憶の声を探す。

ガサゴソ、ガサゴソ、トントン．．．鞆に何かを詰めているような音だ。

『柱間さま、樹ちゃん、扉間さま．．．ごめんなさい。さようなら。』

芙蓉の小さなつぶやき声のあと、芙蓉の足音が玄関へ消えてゆく。

．．．やはり、芙蓉は自ら里を出て行ったのか．．．

柱間は床に付けた掌を強く握りしめてうつ伏せる。

「芙蓉．．．お前がマダラに捨てられたのは嘘だったのか．．．！」

術で聴いた記憶の声の数々から導き出された結論は、芙蓉はマダラと別れたわけでは

なく、紛れもなく今も二人は繋がっているという事だった。

そして芙蓉はマダラに会うため、自ら里を出た。

柱間は考える。

芙蓉は何としてでも連れ戻す：

里で自分と結婚し暮らすことこそ芙蓉の一番の幸せだ：

愛するマダラの傍に居ることが芙蓉の一番の幸せなら、追わずにいるべきだ：

柱間は決められない。

マダラを引き止められなかった、あの日の事を思い出す。

・・・俺はなんと無力なのだ。

友を、愛する女を、引き止め、繋ぎとめることも出来ないとは・・・

まだ無意識に仙法を続けていたため、うつ伏せていると、床からマダラと芙蓉の幸せ

そうな笑い声が聴こえてきてしまった。

・・・芙蓉は男の前で、こんなに大きな声で笑うことが出来たのか・・・

・・・マダラも顔に似合わず芙蓉の前ではこんなに馬鹿笑いしてたのか・・・

『愛しています。マダラさま』

「もういいいい！！」

柱間は、床から聴こえる芙蓉の声をかき消そうと大声で叫んだ。

芙蓉はマダラとの愛を貫く為に、自分を愛したフリをしていたのか。

俺を……騙っていたのか……

柱間はこれまで、芙蓉がこんな巧妙な駆け引きができる女だとは、想像すらしたことが無かった。未だに実感が湧かない。

芙蓉をそこまでさせるマダラの魅力とはなんだ？

マダラに在り、俺に無いものとは、いったい何だ？

ガタン！……

玄関から扉間が灯りを持って入ってきた。柱間の姿が闇に浮かびあがり影が伸びる。

「兄者！マダラのチャクラを感知したぞ！奴は近くに來ているかもしれない。だが、うちのは領地、千手の領地、その周辺の山や森、里中を感知したが、芙蓉の気配は全く見つけられなかった。チャクラが無いとはいえ臭いや体温がある以上、俺が最高精度で感知すれば見つから無いなど考えられない。まさかもう……」

柱間は、扉間に振り返らずに言う。

「……もういい。探さなくていい。芙蓉は自ら出て行ったのだ。」

「……何か、分つたのか？」

「仙法木遁 残心兆話を使った。マダラと芙蓉は伝書鳥で連絡を取っていた。そして、芙蓉は自ら荷物を纏めて出て行った。」

「……本当なのか？」

「ああ。間違いない……。もう、芙蓉を自由にしてやろう……。」

それを聞いた扉間は小さく溜息をつき、灯りを柱間に向けて言う。

「兄者らしくないな。仙法で何を聴いたか知らないが、ここに在る記憶だけが全てとは限らないだろ。マダラは意味不明な言葉、里を否定するかのような言葉を残して出て行ったんだ。芙蓉を騙し、里を潰すための道具として利用しているのだとしたら、どうする？」

「……そんなことがありうるだろうか。二人は本当に心から愛し合っていたんだ。」

扉間の目には、柱間はただもう、友も、愛する女も、諦めて早く楽になろうとしている様に見えた。

「馬鹿が！うじうじ落込むのは後にしろ。芙蓉が自らの意思で里を出たとしても、本当にそれでいいのか？とにかく芙蓉を見つけるぞ！話はそれからだ。」

柱間はゆつくりと扉間の方を振り返り、少しだけ弱気な目で扉間の顔を見た。

仙法で聴いたことなど関係無いと言わんばかりに、芙蓉を見つけることを諦めない強い意志が扉間の瞳に写っている。

その強い瞳を見て、柱間は冷静さを取り戻した。

……このまま芙蓉を手放すわけにはいかない。……

「そうだな…お前の言う通りだ。つい取り乱してしまった…情けない兄で、すまん。」
「いつもの事だろーが。行くぞ!」

二人は家を出て、いったん自宅に戻った。

そして未だ誘拐犯からの要求が無い事を確認すると、マダラを追う事を最優先とした。

すると樹も柱間の家に戻ってきた。

「火影様!何か分かりましたか?!こちらは何も見つけれませんでした!」

「樹、ご苦労だったな。詳しく話して居る暇は無いが、芙蓉は自ら里を出て行ったようだ。マダラが関係しているかもしれない。これからマダラを探しに行く。」

「そんな!芙蓉が自分で出て行くなんてあり得ない!…私も付いて行きます!」

「ダメだ。もしマダラと戦闘になればお前は足手まといになる。」

扉間が樹の申し出に間髪を入れず答えた。

「でも…!」

「樹、気持ちは解る。だが一刻を争うのだ。お前はここで芙蓉のことを待っていてやってくれぬか?頼む。」

樹は火影である柱間に頼むと言われ、引き下がるしかなかった。

柱間と扉間、もう二人を信じるしかない。

「芙蓉のこと、よろしくお願いします!!」

「ああ」

柱間と扉間は家を出て、マダラのチャクラを感知した方向へと向かって行つた。



山入端が青く繋がってゆく。辺りの景色も藍色に染まってゆく。

夜明けが近い。

柱間と扉間はマダラのチャクラの在る場所を見つけたが、既にそこにはマダラの姿は無かつた。

だがチャクラの強さから、そこに居たのはさほど前ではないようだった。チャクラの痕跡を追えば、マダラの居場所に辿り着ける。完全に夜が明けてマダラが動き出してしまう前に、一刻も早く、マダラと芙蓉を見つけ出さなければならぬ。

「兄者、この方向、里に向かつているな。」

「ああ。だが少し違うな。若干うちのは領地の方向に近い。」

「やはりマダラはまたうちは領地の家に戻るつもりなのか？」

「その可能性は高いな。うちのは領地は荒廃している。マダラが暮らしていても気づく者などいないだろう。やはりマダラの屋敷に先回りしてみるか。」

二人は方向を変え、マダラの屋敷へと向かった。

◆ 一つの間にか、長い眠りに入ってしまったようだ。

芙蓉が時計を見上げると、朝五時だった。

社の中からの様子には分らない。ただ天井の四隅の灯りだけが優しく揺れている。

「……あと二時間……もうすぐ、マダラさまに会える……」

芙蓉は鞆の中を覗き、風呂敷に包まれた小さい重箱を見た。中にはマダラの好物であるいなり寿司が詰めてある。こけてしまった時に崩れてしまっていないか心配になった。

鞆から取り出し、風呂敷を解いて蓋を開けた。

「良かった。ぎゅうぎゅうに詰めてたおかげで何ともない。」

芙蓉はそれを見て一人で微笑み、再び蓋をして風呂敷で包む。

マダラが美味しそうにいなり寿司を頬張る顔が浮かんでくる。

その顔を想うと、マダラが来ないかもしれないという不安など感じなかった。

◆ ただただ、約束の時間になることが待ち遠しい。芙蓉は緊張感と共に、一晩寝たところで消えるはずのない罪悪感を感じながら、そつと目をつぶった。

◆ 夜明けが迫り、チャクラと灯りを使わずとも部屋の中が見えるほど明るくなってい

た。

柱間と扉間はマダラが居ないことを確認し、マダラの屋敷の中に入っていた。

先ほど扉間が見つけた、手紙を書いた形跡のある机に、仙法を使う柱間が手を当てる。すると机には手紙の文字が浮かび上がり、仙法を使う柱間にのみそれが読み取れた。

「扉間：マダラの伝書は芙蓉に宛てたもので間違いない。五月一日。午前七時。檜枝岐神社で待つと書いてある。」

「今日じゃないか！しかももうすぐだ！あの神社は神樹で建造され、うちは一族の秘術のが行われてきた神社だと聞いたことがある。そこならマダラが結解を張っていて芙蓉を感じできなくても不思議じゃない。マダラが現れる前に芙蓉を連れ戻すぞ！」

「：いや、マダラに会うのが先だ。」

「何を馬鹿な事を！要らぬ争いなどしてどうする！」

「マダラのことだ。結界を破り芙蓉を連れ帰れば、奴も芙蓉を取り戻そうとするだろう。里で戦いになることだけは避けねばならん。奴が張った結界とはいえ、結界を解かぬまま神樹で出来た社の中を写輪眼で見るとは出来ぬだろう。芙蓉は来なかつたとマダラに伝え芙蓉を諦めさせる。」

「それも解る。だが諦めるどころか里に芙蓉を奪いに行こうとしたらどうする。」

「その時は全力で止める。今のマダラに・・・芙蓉は絶対渡さない。」

扉間はようやく柱間が芙蓉を本気で連れ戻そう、マダラに渡すまいとしていることに安堵した。

たとえ芙蓉が自ら里を出たとしても、マダラと共に居て幸せになれるはずはない。

芙蓉は兄と、自分と、そして樹と里の皆と共に居るべき、唯一無二の人間なのだ。

二人は床に足を組んで座る。

柱間は完全にチャクラを消し、扉間はわずかなチャクラを一定に練って感知を続け、二人はじつとマダラを待った。



ジャラリ・・・

マダラが崖の岩の上に立つと、背中に背負う武器の鎖が鳴る。

空は朝陽に照らされ水色に染まり、森の奥の平野にはうつつすらと靄（もや）がかかっている。

その平野の更に向こう側の森の中に、檜枝岐神社が在る。

「芙蓉・・・」

マダラの頬と髪を涼やかな風がかすめてゆく。その心地良さは、芙蓉を抱きしめた時に感じるものに似ていて、マダラは思わず目を細める。

この数か月間、マダラは「その先の夢」のため、そしてその夢を芙蓉と共に実現して

いくための拠点づくりをしていた。

この世界の終わりりと新しい世界の始まりには、芙蓉が隣に居なければ意味が無い。マダラは崖を垂直に飛び降り、森に向かって走り出す。その顔は微笑している。

森を走り、木から木へと飛び移り、平野に出た。

緑の平野には白い花が沢山咲いている。

芙蓉が見たら喜びそうだと思い、しゃがんでその花に触れようとしたが、途中で手を止め、再び立ち上がって前を見て身構える。

燕が飛んでゆくのが見えたかと思うと同時に、目の前に良く知る二人が現れた。

「マダラ・・・残念だが、芙蓉は来ぬ。」

挨拶も無く、単刀直入に言葉を発したのは柱間だった。

・・・やはり柱間には隠しきれなかったか。だが、こんなことくらい想定内だ・・・

「お前は一人で先の夢とやらを追うために里を出たのだろう。芙蓉を巻き込むな。」

扉間が無言のマダラに向かって言った。

ザザッ！

マダラは更に無視をし、二人を飛び越え平野の向こう側の森へと向かって行った。

二人も後を追う。

「扉間、なんとしても神社に着く前にマダラを止めるぞ。」

「解っている。任せろ。」

扉間はあらかじめマーキングしたクナイが置いてあった場所へ飛ぶ。

マダラの目の前に扉間が現れる。

「水遁・水陣壁！」

扉間がすかさず術を發動する。

大地から森を取り囲むように天高く、ぶ厚い水の壁がマダラの前に立ちはだかる。

マダラが足を止めると、後ろに柱間が立った。

「・・・柱間。俺の後ろに立つんじゃねえ。」

「マダラ、芙蓉は今日、俺と結婚するのだ。芙蓉はもうお前の事は愛していない。」

「お前と結婚？ハハッ。なかなか面白い冗談だな。」

「冗談ではない。お前が里を出てから芙蓉の気持ちは俺に戻ってきたのだ。」

「芙蓉の気持ちが変わる事などあり得ない。芙蓉は永遠に俺のものだ。」

そう言つてマダラは柱間の言葉に動揺するどころか、笑い飛ばした。

「仕方ない… 木遁・花樹界降臨！」

大地から無数の木の根が湧き出し、そこからみるみるうちに幹と枝が伸びる。

そしてその枝に着いた花の蕾が次々と開き、花粉をまき散らす。その花粉で平野に咲く白い花が、あつという間に萎れていく。

マダラは扉間の結界と柱間の樹海に挟まれ、樹海の枝を切り倒して防御する。「毒の花粉か。俺には効かん。こんなもので大地を汚すな！ 火遁・豪火滅却！」

ボオオオオオオオ……！バキバキバキ……

マダラは萎れる白い花を横目で見た後、口から噴き出した火炎で樹海を一気に焼き払った。

柱間はいったん後ろに下がり、炎を避ける。

その隙にマダラは扉間に飛びかかる。

「水遁・水龍弾の術！」

水陣壁から龍のかたちをした水の塊が飛び出し、扉間はマダラを迎え撃つ。

バツシャーーン！ゴボオオオ！

龍がマダラに命中した途端、マダラの姿が消えた。

「くそ！影分身か！」

本物のマダラは扉間の頭上に浮かんでいる。

「行かせはせぬ！」

柱間がマダラの目の前に現れ、背中から抜いた刀をマダラに振り下ろす。

ガシイイインツ！！

マダラは、神器うちはでそれを防いだ。

刀とうちはが交わり、震えている。

「フツ。解りやすいな。そこまで必死に俺をこの先に行かせないようにしているということは、芙蓉が居ると言っているようなものだぞ。柱間……」

「芙蓉は里に居る。この先は里だ。芙蓉と里には手出しはさせん！」

「安心しろ。里はまだやらない。今日は芙蓉を連れて行くだけだ。」

「里に仇なすお前に、芙蓉が渡せるか！」

「言っただろ。芙蓉は俺のものだと。芙蓉の意思は俺の意思だ。まだ意味が解らないのか？」

「まさか……お前!!」

ギシイイン!!

マダラは、うちにはに鎖で繋がっている鎌で柱間の刀を薙ぎ払った。

柱間から離れた瞬間に、地上から扉間がマダラに向けて攻撃をする。

「水遁・水断波！」

扉間の口から放たれる水柱が物凄いスピードでマダラに向かってくる。

「火遁・豪火球の術！」

マダラが口から吹き出した火炎がその水柱とぶつかり、炎と水は相殺され、水蒸気になって辺りを煙らせた。

一瞬、柱間と扉間の視界が奪われる。

「火遁・龍烙業歌！」

その一瞬の隙に、マダラは水陣壁に向かって龍の火炎をいくつも繰り出し、その火炎は水陣壁を貫き穴を開けた。

マダラはその穴に飛び込んで走って行く。

穴の開いた水陣壁は徐々に薄れ消えてゆく。

「扉間！マダラは芙蓉に何か術をかけているようだ！」

そう言う柱間はマダラを追う。扉間もそれに続いた。

朝陽が差し込む森の中を、神社に向かって突き進むマダラを柱間と扉間が追いかける。

ついに三人の目の前に、芙蓉の居る神社が現れた。

「木遁・木呪包囲！」

マダラが印を結び神社の結界を結界を解こうとした瞬間、柱間の木遁で樹木が変形し、マダラに襲い来る。

思わず印を結ぶ手を解き、手で木々を薙ぎ払い、マダラは地面に足を着けた。

「柱間：神社の結界が解かれていなかったということは、お前も芙蓉には会っていないようだ。丁度いい。俺たちの前で芙蓉本人にどうしたいか聞こうじゃないか。」

「今芙蓉に問うたところで、お前に着いて行くと答えるだけだろうな……」

「……ここまで来てしまった以上、もう芙蓉が来ていないことを否定できなくなっていた。解つてるじゃねえか。じゃあお前が身を引け。芙蓉は俺と一緒に居る事を望んでいる。」

「それは芙蓉の意思じゃない。平和協定を結ぶ直前、お前が亡命しようとした数名の腕が立つ部下たちにした事。同じ事を芙蓉にしたのだろう。違うか？」

「……まさか！あの禁固呪の札か!!」

マダラは冷静な柱間と驚く扉間を見て、ニヤリとする。

「俺と芙蓉を繋いでいるだけだ。芙蓉が迷子にならないためにな。」

「なぜだ！お前は芙蓉を愛しているのではないのか！」

柱間は怒りを込めてマダラに問う。

「ああ。愛しているとも。だからこそ芙蓉のことを一番理解しているのは俺だ。芙蓉がどんな性格で、どんな所が欠点なのかもな。その欠点に躓かず、正しい道に導くのが俺の愛だ。」

「何が愛だ！ただ自分を裏切らない操り人形にしたいだけだろうが!!」

陽が昇り、森には木漏れ陽が雨のように降り注いでいる。

鳥たちは姿を消し森は静寂に包まれ、扉間が叫ぶ声だけが響く。

「フン……この数カ月、芙蓉がお前たち兄弟と樹、女学校、そして里の人間に囲まれて生きていけば、芙蓉の心が揺れ動くことくらい解っていた。禁固呪の札は、芙蓉が自分を傷つけてしまわないよう守る為のものだ。愛する者の苦しみを取り除きたいと思うのは当然のことだろう？ なあ、柱間よ。」

「俺には理解はできぬ。そんな危険なものを愛する女の身体に仕込むなど、そんな卑劣な事など理解できてたまるか！」

「捉え方の相違だな。俺と芙蓉は愛し合っているんだから何の問題も無い。」

「一方的にお前が芙蓉を鎖で繋いでいるだけだろうが！」

「マダラ、愛は一方的に相手を何かで縛るものではないはずだ。そんなもので芙蓉の気持ち縛って、愛されて幸せか？」

「俺の夢には芙蓉が必要だ。お前には届かない夢さ……もうすぐだ。もうすぐ届くんのだ。」

マダラはそう言って両手の掌を天に向けた。

「なあ、その夢を教えてくれないか。里の皆で共にその夢を叶えさせてくれ。お前が考えるその先の平和に導いてくれ！芙蓉を愛しているなら尚更だ！今ならまだ間に合う！」

「兄者！こいつに何を言っても無駄だ！早く倒して芙蓉を助けるぞ。」

扉間の言葉を聞いて、マダラがハハハと笑う。

「扉間！芙蓉を殺そうとしたお前がなぜ芙蓉を助ける。俺のものになるのがそんなに嫌か。」

「お前に答える義務はない！」

「マダラ、芙蓉はこの数ヶ月間、里の為に尽力してくれた。芙蓉は里の発展と平和を心から願っていた。芙蓉は、本当は里でお前と一緒に暮らすことを一番望んでいるのだ！お前の味方は芙蓉だけじゃない。里の皆がお前の兄弟であり家族だ。頼む、戻ってきてくれ！」

マダラの瞳の写輪眼の巴が変化した。

「須佐能乎！」

柱間の言葉を無視して術を発動させる。

バキバキバキ!!!

巨人が現れ、持っている剣で樹海ごと後ろの神社の結界を切り裂き、神社の屋根が吹き飛んだ。

「しまった!!!」

柱間と扉間が行動に出る前に巨人の手が伸び、社の中に居た芙蓉を握り持ち上げた。

「キャ——ッ!!!」

芙蓉の悲鳴が森中に響き渡る。

「手荒い再会ですまん。芙蓉・・・少しじっとしていてくれ。」

「ま、マダラさま・・・それに、柱間さま、扉間さま・・・！」

何が起こっているのか芙蓉に全く理解できない。ただマダラの言葉に従いじっとしている。

「やめろ！マダラ!!!」

巨人が黒い炎を纏った巨大な槍を取り出し、西の方向へ投げた。

「さあ里のどこへ着地するかな？早く追わないと人が死ぬぞ。」

「くそっ！」

扉間が飛雷神の術で消えた。

「柱間さま！早く里へ行つて下さい！私は大丈夫ですから！」

「・・・必ず助けるぞ。芙蓉！」

柱間も急いでその槍を追って行った。

「・・・すまん。こんな再会になってしまった。」

マダラは須佐能乎を解いて芙蓉を自分の腕の中に受け止め、抱きかかえながら言った。

「……」

「怒んなよ……なあ。」

芙蓉は怒って苦い顔をし、そっぽを向いたままだ。

「なあっ！」

マダラが芙蓉の頬を人差し指でつんと押した。

その行動に芙蓉は思わず笑ってしまった。

「も、もうっ……マダラさま、やり過ぎです！本当に人が死んだらどうするんですか！」
「大丈夫だ。柱間はそこまで無能じゃない。俺と対等に戦えるのはあいつだけだからな。」

芙蓉はマダラの首に腕を回して抱き着いた。

「マダラさまにも、怪我が無くて良かった……早く、会いたかった……」

マダラも芙蓉をきつく抱きしめた。

「俺もだ。お前が隣に居ないと変な感じだったぜ。」

「寂しかったって、素直に言えばいいのに。」

「……」

マダラは少し恥ずかしくなり遠くを見る。そして芙蓉の腕を解いて顔を合わせる。

チュツ……

二人の唇が重なる。

会えなかった時を埋めるかのように長い口づけが続く。

芙蓉はこれまで迷っていた気持ちなど無かったかのように、マダラに会えた喜びを噛みしめていた。

・・・やっぱりは私はマダラさまを心から愛してる。

もう離れたくない。私の居場所は、ここよ・・・

森には再び鳥たちが戻り、二人を讃えるように様々なさえずりが音色を奏でていた。

(15) 契り。マダラとの新たな生活

柱間は自分の顔岩の上に来ていた。

胡坐をかいて座り、里を見渡している。

五月に入り、里には初夏の香りが漂っており、人々の活気も一段と増している。

田植えが終わったばかりの稲が風に靡き、白鷺が餌を求めて周りを飛び回っている。

しかしそこに、友も、愛する人も、もう居ない。

あの日、マダラが放った須佐能の槍は柱間と扉間が破壊し、里には被害は無かった。

その後再び檜枝岐神社に戻り、マダラについての情報を調べたが、何も分からなかった。

芙蓉の搜索に当たった上忍や、里の上役たちへは、芙蓉がマダラに術にかけられ連れ去られたと報告し、これから芙蓉の搜索も続けていくと伝えた。

しかし大半からは反対された。

マダラと芙蓉は元々恋愛関係にあり同棲もしていた。

今回の誘拐もただの恋愛のもつれだと判断され、忍でもない芙蓉がマダラに渡ったからといって里に被害は無く、搜索は無駄であり、マダラと鉢合せするリスクのほうが危

険だという意見が大半だった。

柱間の結婚を知る者からは同情的な意見もあったが、火影として冷静な判断が求められ、組織として芙蓉を捜索することは諦めざるを得なかった。

一方、マダラに対しては奇襲に備える対策室が作られることが決まった。

数カ月前にマダラが里を出た時は殆どの者が気にもしていなかったが、今では里に仇なす者として敵視され、すっかり忌み嫌われる存在に変わっていた。

「マダラ・芙蓉・俺はお前たちに対して本当に無力だな。マダラ、俺はお前の苦しみを理解したつもりでいただけだった。扉間と里の者のうちには対する偏見も消すことも出来なかった。・・・芙蓉、俺がもつとしっかりしていれば、お前の気持ちを一度も手放さずにすんだのにな。」

柱間の目の前が滲む。

急いで涙を拭う。そして再び里を見据える。

今自分にできること、そしてやるべきことは、里を守ることだ。

後悔に涙を流している暇は、無い。

「兄者・・・またここに来てたのか。もうすぐマダラ対策会議が始まるぞ。」

「ああ・・・分った。」

「落ち込むなど言っているだろ。芙蓉はマダラを倒さなければ取り戻せない。だから今

はマダラを倒すことだけを考えろ。」

「解っておる。だが、なんとかマダラを説得し、里を守る方法は無いものか……」

「まだそんな下らない事を言っているのか！ そんな事はあり得ん。あの時……マダラに留めを差していれば良かったのだ。その甘さがこうして危機をもたらしているのだ。」

「……」

無言で返してくる柱間の背中に、扉間は自分が感情的になつて不必要な事を言つてしまったと気づき、焦つて言葉を続ける。扉間は芙蓉を失つて以来、時々こうして感情的になる。

「言い過ぎた……先に行つて待つているぞ。遅れるな。」

「……扉間。お前も少しは休めよ。」

甘い性格と紙一重だが、心優しい柱間の気遣いに扉間は胸が痛んだ。

一番辛いのは柱間だろう。

柱間は木ノ葉の里本部に戻り、会議室へ向かう廊下を歩いていると、樹が正面から早速でやってきた。

「火影様！ お願ひします。私もマダラ対策本部に入れて下さい！」

「前も言ったようにお前は本来の業務を行つてほしい。マダラの事は俺たちに任せ

てくれ。」

「でも！一刻も早く芙蓉を救い出したいんです！どうか捜査部隊も結成して下さい。」

「お前の気持ちはよく解る。だが私情は禁物だ。お前にこの任務は適しておらん。それにマダラを捜査するための部隊も結成するつもりだが、マダラの感知能力は扉間に匹敵する。俺以外の忍がマダラに見つかれば殺されて終わりだ。こちらは迎え撃つ準備をした方が得策なのだ。解ってくれ。」

「……何もできないなんて……私だって上忍なのに……」

「そんなことは無い。この里を発展させていくことも大切な任務だ。芙蓉が帰って来た時、今以上に里を発展させて驚かせてやろうぞ。」

「……」

樹は納得がいかない様子だったが、会議の時間が迫っていたため柱間は樹の肩をポンと叩き、早足で行ってしまった。

樹は、芙蓉がマダラに禁固呪の札を仕込まれて思考や行動を縛られていたと知り、芙蓉が里を出る前提で、樹を守る為だけに柱間と結婚しようとしていたことによく気が付いた。

たとえ芙蓉が本当に柱間を愛していたとしても、禁固呪の札の束縛により、結婚して里に住み続けることは絶対に出来なかったからだ。

その事が樹にとって、これまでの人生で一番辛かった。

柱間を騙して結婚の準備までしていた芙蓉の心は、どれだけ痛んでいただろうか。

マダラ以外の男に抱かれて、どんな想いだっただろうか。

樹は、芙蓉の心の痛みにひとつも気づけなかった自分自身が憎くてたまらなかった。

いや、本当は、樹は気付いていた。

侍女になってほしいと芙蓉が言ってきた時、気づいていたのだ。

芙蓉が心から柱間を愛し結婚したいとは、思っていない事を：

しかし、樹はスパイ任務を回避し芙蓉と一緒に居たい一心で、芙蓉の行動に頼り、芙蓉の心には目をつむったのだ。

愛する欲求を優先させ、結局は愛する人を苦しめていた。

樹は、それは自分が犯した罪だと思った。

◆
・・・せめて、せめて私のこの手で芙蓉を見つけて、禁固呪の札を、そしてマダラから芙蓉を解放してみせる。・・・

「今日も良いお天気！」

五月晴れの空の下、海風に吹かれて靡く髪を抑え、芙蓉は気持ち良さそうに目を細める。

芙蓉が里を出て一ヶ月が過ぎていた。

マダラのアジトは「山岳の墓場」と呼ばれる場所に在った。

そこは火の国に隣接しているものの、木ノ葉の里からはかなり離れた、海に突き出た半島の先端に在る。

この場所には抜け忍や闇商人たちのアジトも多かつたが、ここで争いを起こせば仕事や商売に支障が出るため目立った争いは少なく、一般市民も混じって一見は地味な普通の港町ができて上がつっていた。

だが、ここでは互いが他人同士、全く無関心である。

人と関わらない、深く詮索しないのが暗黙のルールだった。

誰もマダラのこととは知らないし、芙蓉のことも知らない。例え知っていても関心を向けることはまず無い。ここではそれが自己防衛でもあるからだ。

マダラのアジトは町から少し離れた地下に在ったが、二人で暮らす家は人がまばらな町の外れに小さな家をマダラが用意していた。その家とアジトは地下で繋がっている。

芙蓉はアジトの真上の地上に出て、海を見ている。

カモメが数羽、鳴きながら目の前を横切っていく。棚田の向こう、遠くの沖に漁をする船が見える。

初めて海を見た時の感動は一カ月経っても、毎日見ても、全く色褪せない。

「また見に来てるのか。」

後ろからマダラが歩いて来て、少し呆れたように微笑んでいる。

そして芙蓉の隣りに立ち、目を細め、一緒に海を見渡した。

「よく飽きないな。」

「飽きませんよ。だってこんなに綺麗なんでもん。それに……こうやってマダラさまと並んで海を見られるのが嬉しいから、まったく飽きません。」

そう言つて髪を靡かせながらマダラを見上げ、嬉しそうに微笑んでいる。

「でも俺は、ああも魚料理ばかり続くのは飽きるがな。」

少し照れくさそうな顔をして、マダラは芙蓉へのささいな日頃の不満を交えて答えた。

「フフフ……じゃあ今日はお肉にしましょうね。」

マダラは芙蓉の肩を抱き寄せた。芙蓉の頭がマダラの厚い胸板に触れる。

この幸せが、一生続くようにと芙蓉は願う。

いや、必ず続くに決まっている。



その日はマダラと芙蓉が再会して初めての満月の夜だった。

小川では蛍が月明りに負けじと光りながら舞っている。

しかし芙蓉はもう、蛍を見ても母のことを想うことはなくなっていた。記憶のさざ波と激動の時の流れが、否応なしに母の姿と幼少の記憶を消し去っていた。

そして二十一時を過ぎると、蛍は、ぽつぽつとその姿を消していった。

月明りが差し込む寝台の上に、マダラと芙蓉は並んで腰かけ、斜めに向かい合っている。

いつもの事が始まるのかと、芙蓉は目を閉じた。

するとマダラが芙蓉の左手を両手で握ってきた。

目を開けてマダラの顔を見て微笑む。

「芙蓉・・・散々待たせて、悪かったな。今夜、結婚しよう。」

照れ屋なマダラが、珍しく真面目な顔で芙蓉の眼を真つすぐ見て言う。

「は・・・はいっ！」

「証人はいないが、今宵の満月が証人だ。」

マダラはこの満月の夜を求婚のする日と決めていたようだった。

そう言うときマダラは立ち上がり、台所へ向かう。

「マダラさま！何か用意するなら私がしますよ？」

「いいから、俺に任せてお前は座ってる。」

マダラを台所に立たせて何かをさせることに、後ろめたさを感じながら芙蓉は待つ。暫くすると、マダラは盆に小さな白い盃と白い銚子を載せて芙蓉の所へ運んできた。

「白い花萩焼の盃と銚子で酒を飲み交わすのが、うちは一族の結婚の儀式だ。酌人も居ないが、俺たちにとってはそのほうが丁度いいだろ。盃に酒を注いで貰って飲んだら相手に注ぐを三回交互にする。いいか。」

「解りました…それにしても素敵なた萩焼ですね。よくこの様な物が手に入りましたね。」

「里を出る時に持ってきた。」

「え！…この為になんぞわがざわがざ…嬉しい！…。」

芙蓉は驚きと喜びで胸が熱くなり、涙が込み上げてくる。

「おいおい泣くなよ。せめて盃を交わしてから泣いてくれ。」

「は、はい。」

「じゃあ、俺から注ぐぞ。」

芙蓉はそつと盃を手に取り、マダラの方へ差し出した。

マダラが持つ銚子から酒がゆっくりと注がれてゆく。三分の一くらいの量で止まる。

盃の中にゆらゆらと月が浮かぶ。思わず芙蓉がわあ…と見惚れる。

「最高の月夜だな…。」

マダラの言葉にハットとしてマダラの顔を見た。儀式を続けなくては。

「結婚、喜んでお受けします。一生マダラさまに着いてゆくことを誓います。」

マダラの目を真つすぐ見てそう言うのと、そつと盃に唇を付けて静かに酒を飲み干した。

そしてその盃をマダラに手渡す。

今度は芙蓉が銚子を持ってマダラの盃に慎重に酒を注ぐ。

「夫として、妻である芙蓉を一生幸せにする。この月に誓う。」

マダラも芙蓉を見つめてそういうと、一気に酒を飲み干した。

酒の飲み交わしをあと二回続けて行い、儀式は終わった。

芙蓉は喜びと安堵、そして達成感を感じ、晴れ晴れとした気持ちになる。

マダラと今、ようやく夫婦になれた。

これまでよりも強く、二人が結ばれた気がした。

月は高くなり、月明りも更に明るくなっていた。

ふと、芙蓉の両目から涙がこぼれ、頬を伝っていく。月明りで涙がキラリと光る。

「フツ…お前は相変わらず、泣き虫だな…」

そう言うマダラの目も、気のせいか、かすかに潤んで光っている。

二人は抱き合った。

マダラも芙蓉も、まるでこの世界にたった二人だけのよう感じていた。

だがそれは寂しいものではなく、もう二人を邪魔する者は何も無い、マダラの実現させたい夢の世界に居るかのようだった。

・・・平和というのは、人が愛し合う場所に在るものなのね・・・

芙蓉はそう思った。

二人は互いに服を脱がし合い、寝台の上に自然と横たわる。

芙蓉の上に覆いかぶさるマダラが口づけする。

何度繰り返しても、行為の始まりの合図には緊張して心拍数が上がる。

だが今日は少し違う。

緊張というより、マダラを求める欲望と興奮が優っている。

そんな気持ちに芙蓉は恥ずかしさを覚えながらも、夫婦になった喜びがそれを加速させる。

「これまでと変わらないが、これで本当にお前の身も心も俺のものだな。」

マダラはそう言って、優しく芙蓉の頬を両手で包み込む。

そのままマダラの唇は乳房に降り、舌先で乳首を弄び始める。両手も乳房に移り、優しく揉みしだいている。

「ああんっ・・・」

いつもよりも大きな芙蓉の吐息に、マダラは芙蓉が興奮していることに気づく。少しきつく乳首を吸う。

「はああんっ！」

芙蓉はマダラの肩に爪を立てた。

マダラはその片方の手を外し、自分の乳首を触らせる。固い胸板とは対照的に柔らかな乳首の感触に、芙蓉の指先がジンジンと感じてくる。そして優しくさすってみる。

そのままマダラは芙蓉の首筋に吸い付き、むさぼる。

「いやんっ！あんっあああっ！あーっ！」

芙蓉の身体はどこも敏感だったが、首筋が一番の性感帯のようだ。

今にもいってしまいそうな芙蓉の様子に吸うのをやめる。

肩で息をして物欲しそうに眉間を寄せている芙蓉を見つめながら、芙蓉の右の人差し指にしゃぶりつく。

「・・・っ！」

唇で吸いながら指を口から出し入れする。そして中指も一緒に二本の指を同時にしゃぶる。

じゅるじゅるじゅるじゅる・・・

舌をからませながら唾液を垂らし、わざといやらしい音を立てながら出し入れする。

「あああんっ！あんあっ!!」

その光景としゃぶられる感覚に、芙蓉は挿入されている時を思い出し、頭が痺れてしまいそうないやらしい快感に襲われる。

「欲しくなってきただろ?」

マダラがニヤリとして言う。芙蓉は恥ずかしそうにマダラの目を見て小さく頷く。

「その前に、お前の中に入るものに奉仕しろ。」

「・・・?」

芙蓉は意味が解るようで解らず、マダラを見ながら何度も瞬きをしていた。

マダラは芙蓉の身体を起こして座らせ、自分は仰向けに横になった。

いつも恥ずかしくて、手で触れたとしても見ないようにしてきたマダラの男根が、長さも太さも巨大に膨らみ、腹の方に向かっていきり立っている。

芙蓉は恥ずかしさに目を逸らす。

「芙蓉、俺のを舐めるんだ。」

そう言つて、寝台についた芙蓉の右手を引つ張り自分の男根に近づける。

その時、女学校で教わつたことを思い出した。

性行為で稀にある事で、要求されれば状況によって行うべきものとして教えられた事が、そういえばこれだった。

芙蓉は恥ずかしさと、何かいけないことをする罪悪感、そして近くで見る男根の大きさに怖れを感じる。

「怖いかな？」

固まる芙蓉にマダラが優しく言う。

「……いいえ。良く解らなくて。でも、私もマダラさまを気持ち良くしたい。」

夫婦になるとうのは、体でも深く繋がるといふことなのだろう。マダラが望むなら、マダラが気持ち良くなるのなら、それを追求しようと思ふ芙蓉は決心する。

長い髪の毛を紐で束ねると、教えられた通りにマダラの股の間にうつ伏せになり、肘をつけて両手で男根を握る。

破裂しそうにパンパンに張り、本当に人間の身体なのかと思うほど硬い。

こんなものが入っても自分の中に入っているのかと思うと驚きである。

だがその先端の亀頭だけはむにと柔らかい。

芙蓉は恐る恐る、亀頭に顔を近づけ舌を出してペロリと舐めた。

いきなり口の中に、想定外のしょっぱい味が広がる。亀頭の割れ目から染み出る液体の味だった。もう一度舌を出して亀頭全体を舐め、そして筋をなぞるように舐めてみた。

「うっ……」

初めて愛する女に男根を舐めさせている支配欲と満足感に感じやすくなっていたマダラは、拙い芙蓉の舌遣いでも大きな快感を感じて、思わず声を洩らす。

「いいぞ……芙蓉。上手だ。」

芙蓉の頭を優しく撫でる。目をつぶって自分のものを一生懸命舐めている姿は、たまらない。

マダラは芙蓉に出会うまで、女とセックスするのは子を作る為か、無自覚に溜まる性欲を処理する行為くらいにしか思っただけだった。

愛しているからセックスがしたいと思っただけのは、芙蓉が初めてだった。

そもそも、他人を心から愛すること自体が初めてだった。

血の繋がらない他人に対して、家族とはまた違った深い愛情を抱く自分に、マダラは最初とても驚いていたものだった。

それが今、こうして夫婦になり、お互いにより深く愛情を伝え合っている。

喜びと共に、心の奥底に沈んでいた優越感がどす黒く顔を出す。

芙蓉の初めての相手は俺だ。

芙蓉は誰をも魅了する美女。優しく聡明な性格……その女の愛情は俺だけのものだ。

芙蓉は柱間と扉間の許嫁だった。

だが俺に恋をし、愛し、俺を選んだ。

誰も手が届かなかつた女神の秘部や痴態を、今こうして自分の妻として目の前で見て
いる。

「芙蓉、啜えるんだ。」

芙蓉は恥ずかしそうに一瞬マダラの顔を見て、再び男根に視線を戻し、口を開ける。
小ぶりの芙蓉の口には、亀頭くらいしか入らない。

困つたような表情で啜えたまま、上目遣いでマダラを見る。

「頑張るんだ……そうだいいぞ。」

芙蓉は身体を少し起こして、男根に対して垂直に啜えてみた。すると少し下まで口の中に入った。芙蓉なりに舌を使いながらしゃぶってみる。

賢い芙蓉は飲み込みが早く、コツを掴むのも早いとマダラは感心する。

「さつき俺がお前の指をしゃぶつた様にやってみろ。」

一度口を離し、前髪が垂れないように指で押さえ、片方の手は男根の根元を握りしめ、息を吸つてから芙蓉は再び啜える。そして舌と唇を使いながら頭を上下させて、口から出したり入れたりをゆっくりと繰り返す。

「ううっ……ああ」

余りの快感にまたマダラから声が洩れる。果てる時とは違うマダラの声に芙蓉は驚きつつ、マダラが感じていることがとても嬉しかった。そして自分も感じてしまい、膣

がどんどん濡れてゆくのがはっきりと分る。

芙蓉の唾液がマダラの臍丸まで伝っていく。

懸命にしゃぶっている芙蓉の姿に愛おしさが込み上げ、再び芙蓉の頭を優しく撫でる。

「ありがとう。気持ち良かったぞ。」

そう言うのと起き上がって芙蓉を抱きしめる。芙蓉はうつとりとして身を委ねる。

枕に芙蓉の頭を置いて仰向けに横たえようと、芙蓉の膝を立て、左右に脚を広げた。

膣から溢れる蜜は尻の方まで滴っている。マダラを待ちかねていたのが分る。

亀頭を膣の入り口に僅かに入れると、芙蓉が蕩けた甘い声を洩らす。

相変わらず狭い膣の中にゆっくりと挿入すると、中は膨張していて男根に吸い付いて来る。

思いきり子宮の入り口まで突き上げる。

「あああああんっ……き、気持ちいい……」

蕩けた瞳でマダラを見て微笑んでいる。みだらでいやらしい顔だ。

あとはもう、二人が互いの肉体で快感をむさぼるだけだった。

月は西に傾き、ぼんやりと滲んでいた。

しかし二人は、月が山入端に沈むまで互いの身体を何度も何度も求め続けた。

◆ 木ノ葉の里ではマダラ奇襲対策室が立ち上がり、里の防衛が更に強化され、戦や忍術に関わる周囲の地理や自然環境の徹底的な調査が行われていた。

同時にマダラ捜査室も作ったが、マダラはあまりにも桁違いの強さの忍であるため、柱間以外は近づくことは危険とされ自然消滅していた。

そして、木ノ葉の里の周囲の地理を調査しているうちに、マダラとは違う脅威が発見された。

〃 尾獣 〃

それは九匹の怪物たちの総称であり、それぞれ一本から九本の尾を持ち、自然発生的に現れては人々を襲う強力な自然エネルギーの塊だった。

柱間は、その尾獣のうち三体ものエネルギーを各地で発見したのだ。

「まさか、マダラ対策の中で尾獣を発見するとはな…どうする兄者。回収を急いだ方が良いのではないか？」

腕を組んで柱間の机に腰かけている扉間が問う。

「うむ…まだ尾獣はどれも実体化しておらぬし、尾獣回収のために俺とお前、上忍を連れて不在にしている間にマダラに奇襲されては元も子もない。尾獣は幸い里から離れて

いる場所だし、しばらく様子を見よう。念のため尾獣が実体化した場合の封印手順書を作っておく。」

「そうだな。そうしよう。」

尾獣対策室が立ち上げられ各地の監視に当たったが、それよりもマダラ対策が優先され、更に里の防衛は強化されていった。



陽が短くなり、秋が深まって冬の足音がそこまで迫っていた。

外は冷たい海からの北風が吹きすさんでいたが、地下に在るマダラのアジトは年中気温は一定で、むしろ今時期は温かく感じるほどだった。

この日、芙蓉はマダラに見せたいものがあると云われアジトに一緒に来ていた。

マダラの命令で入り口に繋がる大部屋以外には立ち入ったことが無かったが、この日はその奥の部屋に初めて通された。

その部屋には何も無く、ただ正面に大きな岩で作られた扉があり、その扉の表面には術式のようなもので埋め尽くされている。

そして、その部屋だけ妙に寒かった。

いや、寒いというよりも、寒気のあるような何か言い知れぬ嫌な感じがする。

芙蓉は怖くなり、マダラの腕にしがみつく。

「この扉の向こうに見せたいものがある。」

「…何なのですか？」

「これから里を襲う為のとおきの兵器だ。まあお前は怖がるだろうな。だが今は危険は無いから安心しろ。」

「……。」

「悪いが少し離れててくれ。この扉を開くには印を結ばねばならん。」

「はい……」

芙蓉はマダラの腕から離れて後ろに下がった。

「子・寅・巳・辰……」

マダラが素早く印を結ぶと、扉が轟音をあげながらゆっくりと左右に開いてゆく。

扉の入り口には封印札と呪印が蜘蛛の糸の様に張り巡らされている。

その奥、暗闇の中に何かが見えているのが見えた。

グルウウウ……

何か、獣の鳴き声のようなもの聞こえた。

芙蓉は口の前に握りしめた拳を付けて怯えている。

マダラが灯りで奥を照らした。

「きゃっ!!」

そこには巨大で凶暴そうな狐が寝ていた。

尾は一本ではない。一、二、三……七本以上あるように見える。

芙蓉はマダラに駆け寄りしがみ付いた。

「フフ……これは尾獣という九匹いる怪物の一匹で、九尾というんだ。尾が九本ある狐のバケモノみたいなものだ。邪悪なチャクラを持ち人間を襲う。並の忍びが束になっても敵わない強さだ。今は縮小化しているが、実物はこの十倍の大きさだぜ。」

マダラは九尾を見てほくそ笑みながら芙蓉に説明する。

「この子に……木ノ葉の里を襲わせるのですか……？」

「そうだ。正確には俺がこいつを操って柱間と戦うんだけどな。」

「操ることが出来るんですか？マダラさまって本当に凄いですね……」

「あのな、俺は九尾よりも強い忍だぞ。九尾など、この永遠の万華鏡写輪眼の瞳力があれば簡単に操れる。」

マダラは芙蓉に万華鏡写輪眼を発動させて見せた。

「写輪眼ですね。本当にいつ見ても綺麗……柱間さまと扉間さまと戦っていらつしやつた時にもこの眼をしていらつしやいましたよね。」

そう言つて微笑んでマダラの瞳を見つめる。

「相変わらず俺の眼は怖がらないんだな……しかも綺麗つて……たいいていの忍はこの眼を見

たら生きて帰れないと恐怖すんだけどな。」

マダラが呆れた顔をする。

「そ、そうなんですネ…でも本当にとつても綺麗ですよ。カッコいいし！」

忍ではない者にはそう見えるのか、それとも芙蓉にだけそう見えるのか。

どちらにせよ、芙蓉にカッコいいと言われて嫌な気はしない。マダラは少し得意げな顔をして見せる。芙蓉はその様子を見てクスツと笑う。

「…つと、流石にこの状態で長く居るのはまずい。その日まで再び封印だ。」

芙蓉はマダラが印を結ぶのを察してまた後ろに下がると、マダラはまた素早く印を結び、扉を閉めて九尾を再び封印した。

「あの、写輪眼は忍の修行をして会得したものののですか？」

「お前、本当になーんにも知らないんだな。」

芙蓉とマダラはアジトの大部屋に戻って机の椅子に座る。

「す、すみません…。」

「柱間の家に十年居てここまで何も知らないで居られた事に驚くつっの。逆に凄えよ。」

「私、十五歳になるまで屋敷の敷地の外に出たことが無かつたし、屋敷の中では絶対に忍についての話は聞かせられないようにされていましたので…それにしても無知すぎで

すよね。自分が恥ずかしいです。」

俯いて落込む。

「いや。別にいいんじゃないかねえのか。困らんし。まあ最初会った時は俺が忍最強の男で、うちは一族の長だつて〜ことくらいは知つてて欲しかった気もするが…今となつちや逆にそれで良かったって思うぜ。」

「ありがとうございます！やっぱりマダラさまはお優しいですね！」

落込んでいた芙蓉の顔が急に明るくなって、満面の笑顔で少し首を傾けた。

「ゴ、ゴホン…で、写輪眼の説明の続きだが、写輪眼はうちは一族だけが持つ遺伝能力だ。強い瞳力で忍術と体術全ての力を増大させられるんだ。万華鏡写輪眼は写輪眼の進化系って感じだな。」

うちはが誇る写輪眼、弟に貰った永遠の万華鏡写輪眼の説明がこんなんでいいのかとマダラは自分自身にツッコんだ。

「マダラさまって本当に、本当に、すっごい忍なんですわね！」

「うん。解ってる。」

純粹に感心している芙蓉に、引きつった笑顔で返した。

「でも…出来れば里の人には手を出さないでくれませんか？…」

マダラは急に不機嫌な顔に変わる。

「まだ言うか。敢えて殺めるつもりはないが、里の者など死んでも構わん。」

「腹癒せ：ですか？うちは一族を差別し、マダラさまの忠告を聞かなかつたことへの：」
芙蓉は机の上を見つめながら、小さな声で呟くように言った。

「解つたような口をきくな！：言つただろう。目的は柱間と戦うことだ。奴とは本気でやり合わなければ意味が無い。」

「ならば里の人は関係無いじゃないですか。夢の世界では里の人たちも幸せに暮らせるのでしよう？。だつたら傷付けないで下さい。」

「里を傷つければ否応なしにあいつは本気になる。それには多少の犠牲は仕方ない。なに、死者も残された者も、皆夢の世界では幸せになれる。」

「だとしても！：：：：」

「お前は黙つて居ろ。お前は俺と夫婦の誓いを立てたはずだ。忘れたのか。」

「．．．．．」

芙蓉はマダラのためなら悪にでもなる、神にも背くと決心していたものの、やはりマダラの非業を黙つて見ていることなど出来なかつた。

愛する人が正義を振りかざして悪に手を染めるところなど、見たくない。

「平和のための戦いなんて矛盾しています。平和のために必要な犠牲など無いはずで
す。」

「お前は……俺の死んだ兄弟たちのことまで否定するのか？ 平和協定はまやかしの平和だが、あれは多くの犠牲の上に成り立っている。多くの忍や一般人の死だ。」

「そ、それは……」

「これ以上言うと、たとえお前でも許さんぞ……」

マダラは怒りを込め、写輪眼の瞳で芙蓉を睨みつけた。

ゾツ……芙蓉の背筋に冷たいものが走る。美しいだけではない、写輪眼の力が分かった気がした。

芙蓉は涙目になって俯く。そして席を立ち、走ってアジトを出て行った。

マダラは追いかけず、腕を組んでただ黙って座っているだけだった。

当初、マダラはこれからの計画について芙蓉には何も言わず実行しようとも考えた。

優しい芙蓉がこのような反応をするのは容易に想像がついたが、結婚して半年近く経ち、流石に理解していると思っていた。それにこの先の計画を進めるうえで、芙蓉にも知らせておかないわけにもいかなかった。

「計画が進んでいけば、いずれ芙蓉も解るだろう。」

芙蓉の涙の訴えを見ても、マダラは自分の計画を変える気は微塵も無かった。

芙蓉は冷たい海風に吹かれながら灰色の海を見た。

マダラには、里の人たちと共に自らの夢を叶える気など更々無い。それどころか里を潰しても良いとさえ思っている。

思いつかないようにしていた樹の顔が浮かんできた。そして自分を慕ってくれた数少ない女学校の生徒たち、親切にしてくれた里の人々……

傷つけたくない。死んでほしくない。

……今、マダラさまの計画を知っているのは私しかない。

どうにか里の人たちに知らせる事は出来ないかしら……

そう思った瞬間、急にとてもつも無く心臓の辺りが痛くなり、思わずその場にうずくまる。

以前から時折何度か味わってきた痛みだが、今回はそれ以上の痛みだった。

……苦しい……マダラさま助けて！……

そう思った瞬間、胸の痛みは消えた。

何だったのだろうか。

「どうした！大丈夫か！」

いつまでも戻ってこない芙蓉を流石に心配したマダラがアジトから出てきて、体を震わせうずくまっている芙蓉を見て駆け寄る。

芙蓉はゆつくりとマダラの顔を見上げる。

「急に胸が苦しくなって……でも大丈夫です。もう治りましたから。」

「そうか……。だが早く家に帰って横になるんだ。」

「はい……」

芙蓉の身体を支えて歩きながら、マダラの頭に芙蓉の胸の痛みの原因が浮かぶ。

……まさか、芙蓉は俺のことを……

マダラは急いで芙蓉の横顔を見る。

芙蓉は眉間を寄せ険しい顔で胸に手を当てている。

……いや、芙蓉は俺を裏切ったりはしない……

マダラはまた前を見てゆつくりと芙蓉を支えながら歩いた。

「ごめんなさい。心配かけて……」

芙蓉はそう言うのと寝台に横になって目を閉じた。マダラが隣に座り、芙蓉の頭を優しく撫でる。

芙蓉の胸はもう痛みはしないが、疲れていたのか、マダラの掌の温もりに導かれるように眠りに入った。

目の前にマダラが背中を向けて立っている。

近づきたいのに近づくと出来ない。愛おしさと寂しさが芙蓉を襲う。

マダラの見つめる方向の風景が、次々と変わる。

満開の桜の木の下には黄色の菜の花が広がり蝶が飛ぶ。

次は眩しい太陽に青い海、セミの声が聞こえる。

かと思うと錦に紅葉した山々が現れ、モミジが舞う。

最後は真つ白の雪原に数本、葉を落とした木が影を伸ばしている。

芙蓉はその様子を見て、季節と共にマダラが去って行くのだと思った。

マダラには二度と触れられないことを覚悟した。

目が覚めると、芙蓉は自分が泣いていることに気づく。

マダラは芙蓉の眠る寝台の隣りに椅子を持ってきて本を読んでいた。

部屋の中が灯りで照らされている。どうやら暗くなるまで寝てしまったようだ。

「マダラさま……私、寝すぎちゃいましたね……」

「目が覚めたか。気分はどうだ？……おい、お前泣いてるのか。どうした!」

「なんだか凄く寂しい夢……マダラさまが居なくなってしまう夢を見ました……」

そう言って、芙蓉は両手をマダラに向かって伸ばした。

マダラは芙蓉を抱きしめる。芙蓉も腕をマダラの背中に回し抱き締めた。

「もう大丈夫だ。そんな夢はすぐに消える。」

「私……心からマダラさまを愛してるんです……だから……」
「解っている。」

マダラは芙蓉の言葉を遮るように言った。芙蓉が言おうとしている事はなんとなく分った。だが、何を言われようとこれからの道を変えるつもりはない。

芙蓉には、ただ自分を信じて付いてきてほしかった。

誰に道を邪魔されようと薙ぎ払えばいいだけだ。

だが芙蓉にだけは邪魔されたくない。

愛しているから。

「…私の母は、忍が嫌いだったそうです。忍が居るこの世界を認めないって。はじめはその意味がよく解りませんでした、今なら解る気がします。」

「お前も嫌いになったのか。」

「いいえ。きつと、終わりになき戦いが続くことが嫌だったのになって。だから、私もマダラさまの夢を応援しています。マダラさまならきつと実現できるって信じています…」

芙蓉は身体を少し離し、潤んだ目でマダラの目をじつと見つめた。

マダラはそのまま芙蓉を抱き起して寝台に座らせ、少し俯いて芙蓉に問う。

「芙蓉……なぜ忍はこの世に生まれたと思う？」

「なぜ、忍びが生まれたか……。何か大きな敵が現れたため、でしょうか？」

「いや違う。人々はまだチャクラという概念すら無い時代からずっと争い続けていた。」
その言葉を聞くと芙蓉は俯き、顔を斜めに逸らして言う。

「・・・やっぱり、忍が存在しているから争いが続いているわけではないのですね・・・。」
僅かな沈黙の後、マダラが語り始める。

「その昔、神樹という神の力を宿した木が存在した。その木には千年に一度、実が生るのだが、その実には決して手を付けてはならないと伝承されていた。だが、ある時、その実を取り口にした者がいた。」

お伽話のような話にし少し首をかしげながら、芙蓉はマダラに問う。

「なぜその人はそんなことをしたのでしょうか？その人はどうなったのですか？」

「人々の争いを鎮め、自ら国を治めるためだ。名は、大筒木カグヤという。カグヤは神樹の実を口にしたことで神の力を得た。そしてその力を利用し、たった一人で争いを鎮めたという。その後、人々に女神として崇め怖れられ、一人で国を統治したのだ。」

「もしかして、そのカグヤさんが得た力というのは…チャクラなのですか？」

マダラは芙蓉の顔を見て、フツと少し笑い芙蓉の推測力に感心する。

「その通りだ。カグヤがチャクラを最初に手にした人間だった。そしてカグヤはその後、二人の息子を産む。二人は生まれながらにその身にチャクラを宿していたのだ。」

「……」まで聞いてもなお、芙蓉にはそれがお伽話に思え、現代となかなか繋がらない。

「だが、そのチャクラの実を奪われた神樹は、実を取り戻そうと動き暴れ出した。」
「！」

「それが十尾だ：暴れ出した神樹の姿だ。それを止め、封印したのがカグヤの息子の一人、ハゴロモだ。ハゴロモは十尾を九体の尾獣の姿に変え封印した。そのうちの一体がさつき見せた九尾だ。そしてハゴロモは、チャクラの概念を人々に教え広める忍宗というものを始めたのだ。」

「つまり、そのハゴロモさんが最初の忍？」

「正確には、忍の祖。すべての忍術を作った、伝説の六道仙人と呼ばれている男だ。」

先ほど見た禍々しい大きな狐の九尾の姿を思い出し、そして目の前の最強の忍であるマダラの顔を見て、芙蓉の中で全てが繋がった気がした。そこでようやく驚きが沸き起こる。

「・・・そう、なのですね！そのお話は忍のなら皆さん知っている事なのですか？」

「いや。現世で知っているのはおそらく俺だけだな。だからこそ、俺にしかこの先の夢の世界は作れないのだ。」

「え!?じゃあ、マダラさまはなぜその事を知っているのですか？」

「うちには伝わる碑石に刻まれている事実だ。うちはこの瞳力が無ければ解読できないものだ。しかも俺のレベルの瞳力を持つ者でなければな。」

芙蓉は、マダラがよく家を留守にし調査に出かけていた時のこと、そして離れていた数ヶ月間のことを想い出し、考えた。

「碑石にはこんな事も書いてある。『相反する二つは作用し合い森羅万象を得る』……これは全てに当てはまる道理だ。つまり、相反する二つの力が協力することで本当の幸せがあると謳っている。」

それを聞いて、芙蓉は木ノ葉の里のことが真つ先に頭に浮かんだ。

長きに渡り戦い続けてきた千手一族とうちは一族が協力して生まれた平和の場所だ。

やはりマダラは今でも里のことを想い、これからの柱間と協力し合うことを考えていてくれたのかと嬉しくなる。

芙蓉の心の中の霧が晴れ、希望の光が灯った気がした。

「相反する二つの力が協力……つまり、争い合っている同士も、手を取り合えば本当の幸せがあるということですね！」

明るい表情でマダラの手を両手で握りしめ、身を乗り出して問いかけてくる芙蓉から目を逸らしマダラが続ける。

「だが、別の捉え方もできる。」

「……？」

「その両方の力を手に入れられた者は、幸せになる……」

「どういふ……意味ですか……?」

「うちは俺が、千手の力を手に入れるということだ。」

芙蓉は希望の灯りが再び遠ざかってゆく感覚に、眩暈がした。

マダラの手から手を離し、自分の膝の上で拳を握りしめる。

「相反する二つによつて森羅万象が形作られているならば、それは永久の真理です。その二つが一つになってしまえばその真理は成り立たなくなり、必ずそこには歪が生まれます。千手の力を手に入れるのではなく、手を取り合い協力することが真理のほうです。」

バタツ!

マダラは芙蓉を寝台に押し倒し、両手を抑えて無理やり口づけをした。

「男の俺と女のお前はこうして一つになれるじゃないか。それが一番の幸せのほうだ。」

「それは私たちが愛し合っているからです。一方的に奪うのとは違います。」

部屋の灯りが芙蓉の瞳に映り込み、まるで瞳の奥に炎が燃え滾っているように見える。

「お前はなぜ俺の考え、俺の行動にそこまで文句をつける。俺の意思はお前の意思ではなかったのか?」

「そうです。マダラさまの夢は真の平和ですよ。私も同じです。マダラさまなら、

もつと良い方法でそれを実現できると思うからです。」

「それが俺に反抗しているというのが分らねえのか。俺のやり方に文句をつけるな！」

「……今の里は、千手一族だけが統治しているのと変わらない状態です。それも先ほどの真理に当てはめれば、きつといつか歪みを生み破綻の道を歩むでしょう。そこにはうちは一族の力、マダラさまの力が絶対に必要なはずですよ。」

「解つたような口ばかりききやがって……俺に指図するな！俺は、里などに興味は無い。俺が目指すのはこの世すべての平和だ！」

マダラは芙蓉の服を無理やり剥ぎ取り、再び無理やり口づけをし芙蓉の脚を開いた。

「お前は誰のものだ？答えろ。」

「マダラさまのものです……」

芙蓉は怒りで写輪眼が浮かび上がったマダラの目を、僅かに涙で潤む、強い目で見つめ返した。

マダラと芙蓉の身体がひとつになる。

一つになった二人の影が無言で壁に蠢いていた。

(16) マダラ、死す

小春日和だった。晩秋とは思えぬ暖かさに冬が来るのを忘れてしまいそうになる。

空には刷毛で塗ったような白い巻層雲が高く浮かんでいる。

あの雲の上には、一体どんな世界があるのだろうかと思ふ。

「手筈は言った通りだ。三日後の夜までには必ず戻る。部屋の鈴が鳴ったらアジトに来い。俺が帰るまでは町には出かけるなよ。」

「分かりました。……マダラさまも、お気を付けて……」

「なに、直ぐに終わらせて帰って来る。柱間の肉体の一部を奪うことが目的だ。まあだが柱間との戦いも存分に愉しまなければならぬがな。」

「……」

マダラは俯く芙蓉の頭をくしゃくしゃと撫でた。

「行ってくるぞ。いなり作って待ってけ。」

「はい。」

芙蓉は寂しそうな笑顔でマダラを見送る。

それはいつもの見送りと変わらない、特に別れを惜しむでもない、あつけないものだった。

生暖かい秋風がマダラの姿を消し去ってゆく。



「なんだと！芙蓉を見つけた？！それは本当か？！」

柱間が椅子から立ち上がり、部下の上忍に向かつて身を乗り出す。

「はい…間違いありません。あれは芙蓉様です。あれほどの容姿の女性はなかなかいませんし、あんな場所に居るというのもマダラと一緒に居るのならば納得がいきます。」

「マダラの気配はあったか？」

隣に居る扉間が冷静に問う。

「いえ。私の能力では感知することは出来ませんでした。」

その上忍の部下は、里で不法な薬物を取引していた商人のルートを根絶させるため、山岳の墓場まで追跡していた所、町で芙蓉を見かけたという。

柱間の直属の部下の一人であるため僅かな間だが芙蓉とも同じ屋敷で暮らしており、芙蓉の容姿・背格好・声は良く知っていた。

「あそこは悪党共のアジトが多い。マダラと芙蓉が住んで居る可能性が極めて高いし、俺の感知なら見つけられる。」

「マダラが居るなら俺も一緒に……」

「俺一人で行く。まずは芙蓉が居るかどうかを確かめる。マダラもな。行動を起こすのは正確な居場所が判って作戦を立ててからだ。」

「そうだな……深追いはするなよ。扉間。」

「分っている。それに帰りは飛雷神の術で帰って来る。」

扉間は早急に準備を整え、柱間との会話から一時間も経たないうちに山岳の墓場へ向けて一人で出発した。

里を出て、火の国の国境までは昼間でさえ光がほとんど届かない深い森が続いていた。

走っている途中、何度か屍を見かけた。里が出来る前の戦いでは、この辺りでも激しい戦闘が続いていたことを思い出す。

子供の頃、柱間と板間の三人で大人の忍たちを批判し、在るべき忍の世界について討論していた頃の事も思い出した：その後間もなく、芙蓉が家にやってきたのだった。

実現するとは思っていないが、未来が、里が今、出来上がっている。

そこに芙蓉の姿が無いのは、絶対に許されない。

罪を犯したからこそ解った芙蓉の存在の大きさ、大切さが、扉間の胸に突き刺さって

いた。

「ザザアーン・・・」

昼前の明るい日差しを受けて青い海面がキラキラと輝き、白波が砂浜を潤す。久しぶりに見る海だ。

きつと芙蓉は海をここで初めて見たのではなからうかと思いつながら、扉間は芙蓉の気を慎重に感知する。すると芙蓉ではなく、マダラのチャクラを見つけた。だが、チャクラの強さから本人はそこには居ないようだった。そのチャクラを追えば、芙蓉は居るはずだ。

扉間は雑多な町を歩いた。悪党の集まる場所だというのでどれだけ荒れているのかと思えば、意外にもものんびりとした普通の港町に見える。活気は無いが、行き交う人々の顔には明るさがあった。

自分のチャクラを消しながら、更に繊細にチャクラを練って感知を続けて歩く。町を抜けると家も疎らになり、稲が刈り取られた田畑が広がっている。

東の方向に、マダラの強いチャクラを感じた。

「・・・これは・・・結界か。」

やはり、どうやらマダラ本人は居ないようで、マダラの作る結界のチャクラだけを感じる。

ここまで強い結界を張っているのならば、芙蓉一人で留守番をさせられているのかもしれないと考える。慎重に結界のある方向へ向かうと、小さな家が見えた。

案の定、そこにはマダラの結界が張られていた。

結界のせいで、扉間が居る場所からは家の中の気配までは感知できない。

扉間は林に身を隠し、しばらくその家の様子を見てみることにした。

小一時間経った頃だっただろうか。

見覚えのある、いや、ずっと探し続けてきた姿が目の前に現れた。

芙蓉だった。

やつれた様子も無く、美しさは変わらないどころか更に美しくなっているように見える。

長い髪の毛を後ろで無造作に丸めてかんざしで留めている。暖かそうな白い上着を身につけ、長いスカートを揺らしながら洗濯物を丁寧な竿に干していく。

扉間は、懐かしくもあり、初めて見るかのような光景を静かに見つめる。

芙蓉が洗濯物を干し終わり家に入ったのを確認すると結界の間近まで近づいた。

今一度、マダラが中に居ないか感知を試みる。

結界は対・忍用のものであり、芙蓉にだけ無害なように印が組まれているようで、強固なものではなく、扉間のレベルであれば簡単に解除できる程度のものであった。

そして家の中には、やはりマダラは居ない。芙蓉一人だけだった。

扉間は素早く結界を解除する印を結んだ。

音も無く、あつけなく結界が消えていく。

家の玄関に立ちそつと扉に手をかける。扉は僅かに動いたがそれ以上は動かない。鍵がかかっていた。しかし開錠術などたやすい事だった。再び手をかけ扉を静かに開いた。

目の前には台所があつた。芙蓉の姿は無い。

短い廊下を曲がると部屋の扉が現れる。中で芙蓉の足音がする。

ス——ツ

芙蓉は、部屋の扉が開いたことに気づかず、背を向けて本棚の整理をしていた。

手前に在る机の上には、沢山の本が積まれている。

「芙蓉。迎えに来たぞ。」

ビクツ！ ドサドサドサドサツ！

「……」

芙蓉は驚いて本を全て床に落とした。そして扉間の姿を見ると驚きすぎて声も出せず固まった。何が起こっているかも全く分からない様子である。

「……お前を迎えに来た。里に戻るぞ。」

扉間は固まる芙蓉にズカズカと歩み寄り、躊躇なく抱き上げた。抱きかかえられて初めて芙蓉が悲鳴を上げる。

「キャッ！」

「飛雷神の術……」

大きな風を受けて宙に浮いたように感じたあと、扉間の顔の後ろの光景だけが一瞬にして変わった。これは以前と同じ術だと芙蓉にも分った。

芙蓉の長い髪がほどけて扉間の腕に流れる。

「芙蓉っ!!!」

大きな声の方を向くと、柱間が立っている。そして自分のほうへ駆け寄ってきた。扉間は芙蓉をゆっくり下に降ろして床に立たせる。

「芙蓉!!無事で良かった……」

すぐさま柱間が芙蓉をきつく抱きしめる。苦しい。

「おい兄者、それ芙蓉たぶん息できてないぞ。」

「おお!すまん!つい嬉しくてのう!!」

ぷはっ!芙蓉は大きく息を吸ってから、柱間の顔をゆっくり見上げた。

「芙蓉。元気だったか?……おお、髪がこんなに乱れて……」

芙蓉の乱れた髪を整えようと柱間は指を通した。

「触らないで！……私はもう、マダラさまの妻です。」

柱間は手を止め、芙蓉の髪から指を離した。そして芙蓉を挟んで目の前にいる扉間と目を合わせ、そして目をつぶって大きな溜息をついた。

「そうか……結婚したのか……」

「マダラに騙されているだけだ。まあ当分目は覚めないだろうけどな。そもそもお前の戸籍は木ノ葉の里だ。抜け忍なんかと結婚できるかよ。」

扉間が呆れたように言う。

芙蓉は、柱間と扉間はまだ自分がマダラに操られているのだと思っていて、ここへ連れ戻したということは理解できた。だが、どうやってその誤解を解こうかと考える。

「芙蓉。今のマダラは里を潰そうと動いている。それはお前も知っているのではないか？ そのような奴とお前を一緒におらせるわけにはいかぬぞ。」

柱間が真剣な顔をして言った。

「マダラさまは里に興味などありません。あなたと戦いたいだけです。そして平和という夢を実現させようと尽力されているんです。」

「平和か……それがマダラのその先の夢なのか……この里に無い平和とはどんなものなのか……芙蓉。答えられる範囲で良い。マダラが今どこに居るか何をしようとしているのか……」

「よせ兄者！」

扉間はマダラによって芙蓉の心臓に仕込まれた禁固呪の札のことを気にして柱間の言葉を遮った。もちろん柱間もその事は気にしていた。

「昨日、木ノ葉の里に行つて柱間さまと戦つてくると言つてお出かけになりました…。マダラさまは平和を心から願っています。今回もその為の行動なんです！」

「平和を願っているだど？笑わせるな！ただの戦闘狂だろーが！また兄者と戦つて何がしたいのだ。それにやはり里を潰そうとしているじゃないか！本部に伝えてくる。」

「待て扉間…。芙蓉、教えてくれてありがとう。ところで、マダラがお前にかけている術の事なのだが…。」

ドゴオオオン!!!

巨大な爆発音が窓ガラスを揺らした。三人が外を見ると正面に炎が上がっている。

「マダラの奴めっ!!」

すると遠くからこちらへ向かつて巨大な手裏剣が飛んで来るのが見えた。

「扉間！芙蓉を頼む！」

ドガツ！ガツシャーッ!!

柱間が手をかざすと柱間の足元から巨大な木の枝が伸び窓ガラスを突き破り、その手裏剣を寸でのごとく止めた。

「よう。柱間。」

マダラが木の枝の上に現れた。

「……って、まずはなんでうちの嫁がここに居るのか答えてもらおうか。」

芙蓉を守っていた扉間と、その腕の中に居る芙蓉がマダラのほうへ振り返る。

「俺が見つけて連れてきたのだ！芙蓉は悪く無いぞ！」

柱間が芙蓉と扉間の前に立ちはだかり叫んだ。

「……本当か？芙蓉。」

「本当だ。さつき俺がここへ飛雷神で連れてきたのだ。」

「お前に聞いていない。答えろ！芙蓉!!」

「…本当です。家に居たら扉間さまに連れて来られました…」

「そうか……荷物が増えてしまったな。今日の所は引き上げる。退け柱間！」

マダラは神器うちはを振りかざし柱間に飛びかかる。

柱間は木遁で強化した腕でそれを受け止めた。

「水遁・水断波！」

扉間が放った水柱がマダラを退かせ、後ろの壁がその水柱で真つ二つに割れた。

「マダラ！悪いがお前たちの結婚は祝福できん！芙蓉はもう渡さんぞ！」

柱間は部屋に置いてある大刀を手にしてマダラに向かって構える。

「嫉妬か？無様だぞ柱間。芙蓉は俺のものだとまだ解らんのか。」

マダラは宙に浮きながら三人を見据え、ある事を思いついた。

「…そうだ。良い事を思いついたぞ。今日は柱間とやれない代わりにお前を殺してやる。扉間！芙蓉の目の前でな！…フッフ。芙蓉、お前も憎い扉間の死を観たいだろう？」

「マダラ！何を言っている！お前の相手は俺ぞ！」

マダラは柱間の言葉を無視して瞬間移動で扉間の隣りに立った。

その目には万華鏡写輪眼が現れている。

「天照！」

マダラは瞳術を発動させると、扉間はその場を離れようとしたが芙蓉のことを気にしてしまい間に合わず、左肩に黒炎が現れた。

「ぐっ…っ!!」

扉間は床に倒れた。

「この黒い炎は全てを焼き尽くし灰さえ消滅させるまで消えない。お前が憎み、愛する芙蓉の目の前で消え去れ扉間ア！」

「水遁・全滅消！」

柱間は口から霧状の水柱をその黒炎に向けて放った。炎はあっという間に消えてし

まった。

「天照の炎が消えただと！・・・」

「封印術を合わせた水遁だ。消えない炎は無い。火遁が得意なお前用に特別に作った術だ。ありがたく思えよ！」

柱間は刀を構えてマダラに飛びかかった。マダラはうちはでそれを防ぐ。

「…今日はお前とやり合う気は無い。お前とはお互い全力で戦わないと意味が無いんでな。」

マダラはうちはと刀越しに柱間を見てニヤリとした。

ビュン！

仰向けに倒れている扉間に向かってクナイが飛んでいく。

グサツ…ドス！

「・・・芙蓉・・・なぜだ！これくらい、俺なら避けられたのに!!」

扉間に覆いかぶさった芙蓉の左肩をクナイが貫通し床に突き刺さった。

貫通したのは、マダラが助けたあの時の傷と、全く同じ場所だった。

「おい芙蓉・・・お前何やってんだ・・・なんでお前がそいつを庇うんだよ!!!」

「マダラさまお願い。これ以上…人を殺し…たり…傷つけたり…しない…で・・・」

芙蓉はそう言う胸を抑えて扉間の上に倒れ込んだ。

「……っ……」

「マダラ！今すぐ禁固呪の札を解除しろ！！早く！！」

柱間がマダラに向かつて叫ぶ。

「……」

「オイ！聞いているのか！芙蓉が死ぬぞ！！」

「……構わん。俺を裏切るような女……もう……必要ない……」

そう言つてマダラはその場から姿を消してしまった。

「芙蓉！しっかりしろ！！今助けてやるからな！」

扉間は芙蓉を抱きしめ、必死に声をかける。

柱間が二人の前に瞬間移動し、芙蓉を床に横たえる。

芙蓉は苦しうに胸を掻きむしっている。息もまともにできていない。

「扉間。二人で解除するぞ！間違えるなよ！」

「ああ！」

扉間は涙を拭い、急いで印を結ぶ。

「酉・申・申・酉・巳・巳・酉・申・申……解つ！！」

「かはっ！！はあはあはあ……」

芙蓉がようやく息をしたが、その息が徐々に細くなり、心音も小さくなつていく。

「扉間。お前は人工呼吸だ。俺は心臓を回復術でやる。」

扉間は芙蓉の鼻をつまんで口うつしに酸素を肺に送る。

柱間は印を結んで芙蓉の心臓に当て回復術で蘇生をさせる。

トクン・トクン・トクン……

心臓の音が安定したのを確認すると、次は左肩の傷を回復させた。みるみるうちに傷がふさがってゆく。

「もうこれで命の心配は無い。助かったぞ……」

「……良かった……」

二人が床に膝を付き、安堵にうな垂れた時だった。

ドガガガガッツツ……!

先ほど爆炎が上がった近くから、今度は轟音と共に土煙が上がる。

マダラ奇襲対策本部の上忍たちがマダラ相手に奮闘している。しかし次々と建物もろとも吹き飛ばされてゆく。里の市民は悲鳴を上げて逃げ惑っている。

「……マダラの奴どこまで……。扉間！芙蓉のことは頼んだぞ。」

「わかった！」

柱間は急いで甲冑を纏い、武器を揃えてマダラの元へ向かった。

「マダラ。お前の大切な荷物は無くなったぞ。さあ、本気で来い。」

土煙の中から柱間が、マダラの目の前に現れた。

「フン・・・そうか。どうやらその顔、お前も本気の様だな。」

マダラがニヤリと笑う。

柱間は里から離れた場所で戦うため、森に向かって走り出した。

晩秋の昼下りの空は薄青く、眼下の森には針葉樹林に交じって美しい紅葉が点在している。

戦いとは無縁の自然の美しさの中、二人は死闘に向かって走っていた。

ガツツ!!

大刀とうちはがぶつかり合う。

この日、もう何度ぶつけ合ったか分らない。

秋の夕暮れは早く、太陽はとうに沈んでしまった。

いつの間にかいつもよりも大きく見える満月が浮かんでいる。

・・・子供の頃、あの時から何度こうして刀を交えたか分らない。

もう二度と交える事は無いと思っていたのに。

・・・何故だ・・・マダラ・・・

バツ!

二人は離れる。柱間は樹海の木の根の上に着地した。

マダラが着地したのは口寄せした巨大な九尾の頭の上だった。

「木遁・木龍の術!!」

「九尾、尾獣玉を放て!」

柱間の木龍が九尾に絡みつくが、九尾はそれを綱のように引つ張る。

そして口から黒い球を作り柱間に向かって放った。木龍は破壊され、その球は柱間に一直線に向かってくる。

パン!と柱間が掌を合わせた瞬間、柱間の足元から木で出来た巨大な手が現れ、尾獣玉をキャッチする。

「木遁・木人の術!!」

柱間の足元の木が更に鬼人の面に変化し、轟音を上げながら木龍と絡み合う。

そしてその鬼人の手に握られた尾獣玉を九尾めがけて殴りつける。

「須佐能乎!」

マダラは九尾に須佐能乎を装備させ、その須佐能乎は防御の印を結び柱間の攻撃を受けた。

カッ!・・・ドン!・・・ゴゴゴゴゴゴ・・・

周囲数キロを吹き飛ばす大爆発が起こった。

爆風と土煙が徐々に晴れて、お互いの姿が現れる。

「獣の難を喰らう…木遁・傍排の術か…」

柱間は巨大な阿修羅の面の中に入り防御していた。

ガコン…その面の中央が左右に少し開き、中から柱間が顔を出す。

「ぬ…尾獣を須佐能乎の鎧を着させるとはの…マダラめ…考えよる!!」

ブンツ!!

須佐能乎が巨大な剣を柱間めがけて振り下ろした。

バシイツ!!

木人の手が地中から現れ、その剣を両手でキャッチした。

「もうお前の太刀筋は読める…!!」

柱間が素早く印を結ぶと地中からマダラと九尾を囲むように巨大な木人の手が現れ、

九尾を捕らえた。

ズババババババ!

しかし九尾の尾がその手を全て切り倒し、柱間の足元の木人もバラバラに砕け散っ

た。

柱間は宙を舞う。

「このままでは陸が滅茶苦茶になってしまう…海辺に移動したほうがいいな…」
柱間は海の方へ向かって走り出した。

「逃さん！」

マダラは須佐能乎の剣で攻撃を続けながら柱間を追う。

「ちよこまかと逃げ回るだけか柱間！」

再び九尾が口から巨大な九尾玉を作り、そして今度はそれを須佐能乎の剣に突き刺した。

ブチッ！ブンッ！

九尾玉を差したまま剣を引きちぎり、手裏剣の様にして柱間めがけて投げた。

「これでもう掴むのは無理だぞ！さあどうする！！」

ザッ！

柱間は地上に着地し、指を噛んで血を流した。

「口寄せ・五重羅生門！！」

地獄の入り口に在るような禍々しい巨大な門が五つ現れ、剣の刺さった尾獣玉を捕らえた。

「これで・・・軌道は変えられたか・・・」

ゴゴゴゴゴッ・・・ドシャアアアア——！！

尾獣玉は五つ全ての門をなぎ倒し、海を切り裂きながら進んでいく。

ドン！……

「向こうの陸まで達するとは……」

「柱間……お前と本気でやるのは久しいからな……昔とは違うのが分かったろ……」

柱間はマダラの方に振り返り、両手を合わせて印を結びながらマダラに言い返す。

「……今までのことを……俺たちの努力を……無駄にするのかマダラ!!俺とお前が戦ったところで何も生まれん……この戦いは里と忍を傷つけるだけだ!俺たちの兄弟を……仲間を……そして芙蓉を、侮辱するだけだぞ!!」

「……。お前に……俺の……」

「……俺はお前を殺したくない……!」

「それは俺をいつでも殺せるってことか?」

「違う!!俺たちは友だと……」

「俺はもう、届いたのさ!」

グオオオオオオ!

須佐能乎を着た九尾が雄叫びを上げると再び須佐能乎の剣が天に向かって伸びていく。

「……仕方ない……仙法……木遁……真数千手!!」

ズオオオオ・・・

柱間の顔に仙術を使う時の隈取りが現れると同時に、柱間の足元から巨大で無数の手を持つ千手観音像が現れた。

「…行くぞマダラ!!」

「来い柱間!!」

「ウオオオオオオオ!!」

「頂上化仏!!」

「九尾玉連打!!」

ズガガガガガガガ・・・!

無数の手が九尾を連打する。九尾球はそれを相殺しようとその手を切り裂いていく。

ドッ!

爆発音と土煙が上がった。

「須佐能乎が剥がされたか…!!」

マダラに焦る様子はない。

柱間の息は上がっているが、続けて木人の手で九尾の身体を鷲掴みにした。

ガルルル!

「行くぞ! 廓庵入廓垂手!!」

須佐能乎が剥がれ、防御の結界も無くなり姿が露になったマダラに向かって、巨大な木人の手が一直線に伸びる。マダラはさっと九尾の額から飛び降り地面に着地する。

目の前には木人の手に額を押しえつけられ動けなくなった九尾が居る。

そして九尾の目に映っていた写輪眼の巴が消え、九尾はガクつと意識を失い、そのまま姿を消してしまった。

柱間も千手観音像から降り、マダラの目の前に立った。

「……！」

ザ———

月は空高く昇り、二人が対峙している谷にだけ俄雨が振っている。

・・・ハア、ハア、ハア、ハア・・・

甲冑を外しうちはを握りしめるマダラと、左肩に怪我をして一本の剣のみを持った柱間。

既に二人とも息が上がっている。

「今度は……お前が届かないのさ」

二人は互いに向かつて武器を構えて走り出した。

バシヤ!

二人同時に小川の水面に足が付く。

ズバツ!!

柱間の剣と、マダラの鎌が互いを切り裂いた。かの様に見えた。

・・・バシヤンツ!

「立っているのは俺だ・・・あの時とは逆だな・・・」

小川に倒れた柱間が上半身を何とか起こし、マダラの方を見た。

「くっ・・・届いたばかりの夢を・・・守りたいんだ・・・俺は・・・これ以上は・・・」

「・・・随分と落ち込んで見えるぞ柱間。今度こそ開き直りは出来ないか・・・?」

柱間に子供の頃マダラと過ごした日々の記憶が蘇る。

・・・腑を見せ合う事はできねーだろうか・・・

・・・まずはこの考え捨ててねえこと。自分に力付けることだろうが・・・

・・・ここに俺たちの集落を作ろう・・・

そして、マダラと二人、ようやく届いた夢を見渡した時のことを思い出す。

・・・掴もうと思えば出来ないことは無かったのに俺は・・・

・・・これから夢が現実になる・・・

柱間はぐつと強く目をつぶった。

ズカッ!・・・

「……………!!」

マダラの胸には背中から剣が貫通し、鮮血が流れる。

後ろを振り返ろうとしたが体が動かない。唇から顎に血が伝っていく。

正面の柱間を見ると、それは、木遁分身だった。

「……………俺が……………後ろを……………取られるとは……………」

「俺は、俺たちの……………イヤ俺の里を守る。何があるうとも……………里を守ることが何より人を……………忍を、子供を、そして芙蓉を守ることになると俺は今でも信じる……………!」

雨は激しさを増している。

柱間のチャクラが強く荒いものに変わる。

「たとえそれが……………友であろうと、兄弟であろうと、我が子であろうと……………里に仇なす者は許さぬ。」

ガクン。

マダラが立っている力を失い、小川に両膝を付いた。

この時、柱間は覚悟を決めた。

「今を見守る」ために、耐え忍ぶことを。

「……………変わったな……………柱間……………本末転倒だな……………それが……………里の……………闇になる……………いづれ……………」

バシヤ!

マダラは小川の水面にうつ伏せ、倒れた。

「!」

柱間が動かなくなったマダラを見つめると、一瞬空に何かの気配を感じた。

その瞬間目の前がぐらみ、片膝を湖面に付け、俯いた。

柱間もまた、すべてが限界だった。

雨は容赦なく二人に降り注いでいた。

柱間の涙も、マダラの流した血も、雨は全てを見えなくした。

こうして、二人の戦いは終わった。



真つ暗な横穴の中は土の匂いがする。掘ったばかりの穴だった。

松明の灯りは強烈で、月明りのような優しさは無く、穴の中を橙色に染め上げて景色を揺らしている。

芙蓉はそつと、マダラの頬に触れた。

「・・・マダラ・・・さま・・・」

木製の台の上にマダラの遺骸が横たえられている。

芙蓉の頬には涙の後がくつきりと残っており、そしてまたそこへ新たな涙が流れてゆく。泣き腫らした目は真つ赤に充血し、声も枯れていた。

「愛しています……永遠に……」

両手で冷たくなったマダラの頬を包み、そつと口づけをした。

唇も冷たく、固く閉じられたままだったが、僅かに柔らかかった。

こうして温めれば、次の日にはまた目を覚ましてくれる気がしてならない。

「……芙蓉、別れだ。」

マダラの遺骸はこれから柱間と扉間によつて処理される。

その前に柱間は、芙蓉にマダラとの最後の別れの時間を与えた。

柱間と扉間はその間、二人に背を向け静かに待っていた。

「嫌です……」

「気持ち解る。だが時間が無い……」

そう言つて扉間が芙蓉の両肩を持つて立ち上がらせた。

柱間は、その様子をただ黙つて見ていた。

二時間前、柱間は芙蓉になんとか言葉を振り絞つてマダラの死を伝えた。

あの時の芙蓉の表情は、きつと一生忘れられないだろう。

里の為とはいえ、芙蓉の愛する男を殺したのだ。

言葉をかけるどころか、顔を見るのさえ罪深い気持がしていた。扉間もそんな兄の気持ちを知っていた。

芙蓉は力無く扉間に引つ張られるまま後ずさっていく。

「兄者、俺は芙蓉を連れて一度帰って来る。」

「ああ…頼む。」

「マダラさまっ！」

芙蓉がマダラに向かつて手を伸ばしたが、その瞬間に扉間と共にその場から姿を消した。

「……」

柱間はマダラの遺骸を見つめて立ち尽くす。そして目を閉じる。

『…友であろうと…里に仇なす者は許さぬ』

あの時マダラへ向かつて言った言葉を心の中で反芻し、今度は自分に言い聞かせた。

移動した場所は柱間の屋敷だった。

扉間に肩を支えられながら元の芙蓉の部屋に向かうが、芙蓉は自分がどこに居て、どこへ向かつて歩いているのかさえ分からない。

部屋に着くと扉間は芙蓉を座布団の上に座らせ、天袋の中から布団を出して敷き始めた。

「横になって休んでいろ。」

座つて動かない芙蓉を扉間は抱きかかえ、そつと敷布団の上に横たえ布団と毛布を掛けた。

「何かあれば使用人に言え。いいな。」

「……」

扉間は、茫然としている芙蓉の顔を見て小さく溜息をつく姿を消した。



一日、また一日と時は過ぎてゆく。

マダラが死んだ日がどんどん過去になってゆく。

あの日、芙蓉はマダラが自分の心臓に禁固呪の札を仕込み、裏切らないように操作・束縛していたことを知った。

だが、芙蓉はそのことで自分の愛情までが操作されていたとは思わなかった。現にこうして術が解かれた今も、愛情は変わらない。

禁固呪の札を仕込んだのは、きつとマダラの弱さだったのだろう。

もう大切な人を失いたくないという怖れだったからに違いない。

そう思うとますます、マダラを論そうとばかりしていた自分の言動を悔いた。

時を巻き戻したかった。

しかし、時を巻き戻したところで、きつとマダラは変わらなかつただろう。

すなわち、マダラの死も必然なのかもしれない。

ならばせめて、自分もマダラと一緒に里に仇をなし、共に柱間に殺されて死んだ方が良かった。それでマダラが幸せだったのなら……マダラの味方は自分しかいなかったはずなのに……

そう思うと芙蓉は後悔で悲しみが強くなるばかりだった。

自分を責めることしか出来ず、誰とも顔を合わせる気にも話す気にもなれず、芙蓉はあれから一週間一人で部屋に籠っていた。

「ちよつとでいいんです！芙蓉に会わせてください。無理やりにも引つ張り出さない」と芙蓉は今、世界で独りぼっちの気持ちでいると思うんです。このままだとあの子、どうかなつちやいます……お願いします会わせてください!!!」

樹が玄関で柱間に懇願していた。

「だが本人が誰とも会いたくないと言っておるのだ……まだ暫くは一人にしてやってくださいねか。」

「……そんなわけにいきません！ちよつと失礼しますね。」

そう言つて樹は柱間の制止を押し切り家の中にズカズカと入っていく。

「ちよ、樹っ！待て！」

「兄者。俺も樹を芙蓉に会わせたほうが良いと思う。今の俺と兄者に何か出来るか？樹にしか芙蓉のことを慰めてやれる奴はいないんだぞ？」

扉間が部屋から出てきて、そう言つて柱間を止めた。

「・・・そうだな。このまま芙蓉を一人きりにさせておくわけにはいかぬな・・・」

樹は芙蓉の部屋に一直線に向かつて行つた。

トントントン。

「・・・芙蓉。私だよ。・・・入つても良い？」

「・・・樹ちゃん・・・ごめん。私もう・・・樹ちゃんには会えないよ・・・」

「どうして？私は芙蓉にずっと会いたかつたよ。ちよつとで良いから顔を見せてよ。」

「だって・・・私、樹ちゃんまで騙して・・・マダラさまと結婚してんだよ。私もマダラさまと共犯なの・・・」

ガラ！

樹は扉を開けて部屋に入り、机の前でうな垂れて座っている芙蓉に駆け寄り、後ろからぎゅつと抱き締めた。

「私は、芙蓉がどうなるかと、何をしようと、一生芙蓉の味方だよ！お願い、一人になんてならないで！」

芙蓉は樹のほうを向いて抱き着き、大きな声で泣き始めた。廊下までその泣き声が響き渡る。

柱間と扉間は顔を見合わせ、静かに芙蓉の部屋に近寄る。

「……私も……そう……思ってた……なのに、マダラさまの味方で居てあげられなかった！嫌われて見放されるくらいなら、私もマダラさまと一緒に殺されれば良かった！」

「そんな事言わないで！芙蓉は芙蓉なりに一生懸命マダラのこと愛してたんでしょ？愛している人を守りたいからこそ、時に味方できない時だってある。私だって、芙蓉が里を抜けてマダラと結婚するって知ってたら反対してた。きつと、マダラだって芙蓉の気持ちを解ってたはずだよ！それに、芙蓉は今でもこんなにマダラを愛してるじゃん。それって今でもちやんと味方ってことじゃん！」

「……私ね、マダラさまの夢は、柱間さまと扉間さま、里の人と協力して実現させてほしかったの。これ以上、マダラさまが一人で誰かを傷つけるところなんて見たくなかった……だけど、マダラさまはそれも私に認めてほしかったはずなの……なのに……」

「うん……そうだね。マダラもあんなに芙蓉のこと愛してたもんね……だけど愛する人が間違った方向に行こうとしているのを放っておくのとて本当の愛かな？さつきも言ったけど、味方できない時、反対すべき時だってあるはずだよ。芙蓉は間違ってたな

い。」

「・・・樹ちゃん・・・」

廊下で二人の話を聞いていた柱間と扉間は腕を組んで俯いた。

禁固呪の札の束縛とは関係なく、芙蓉はマダラを愛していた。

その事実と、芙蓉は里を出てもなお自分たちのことを想っていてくれた事に、二人は複雑な気持になった。

(17) それぞれの新章

「号外だよー！号外ーっ!!」

マダラに襲撃された里はすっかり元通りになり、麗らかな春を迎えた里は平穏と賑やかさを取り戻していた。

そして今日、里は祝福ムードに包まれている。

久しぶりに町を歩いていた芙蓉も、その号外瓦版を受け取った。

『火影、渦の国・うずまきミトと結婚へ』

芙蓉はそれを見ても表情を変えることなく、人混みをかき分け家に向かって歩き出した。

マダラの家はマダラ襲撃の後すぐに新地にされ、今はもう別の建物が建つてゐる。

いま芙蓉が住んで居るのは、里の外れにある小さな一軒家だ。

桃の花とレンギョウの甘い香りが漂う坂道を登ると、その家が見えた。

「おかえり。早かったな。もつとゆつくりしてくればいいのに……」

玄関を開けようとすると、庭先で盆栽の手入れをしていた扉間が芙蓉に声をかけた。

「……特にする事もないので……樹ちゃんも任務で暫く居ませんし。」

すると扉間の目に、芙蓉が手にしている瓦版の文字が入ってきた。

「…そうか。俺は夕方から出かける。夕飯は要らない。帰りも遅くなると思う。」
「分かりました。」

マダラが襲撃する前、各地で尾獣を発見した時から柱間の結婚話は上がっていた。

尾獣は単体で安定して封印することは難しく、人の身体の中に封印する「人柱力」と呼ばれる封印が一番安定して封印できることから、木ノ葉の里でもその人柱力となる為の人選が進められているところだった。

そこへ、渦の国のうずまき一族の長が、娘・うずまきミトを推薦してきた。

うずまき一族と千手一族は遠い血縁関係にあり、今でも親交があった。しかし本当の理由は、うずまき一族は尾獣を捕らえるチャクラをもち、更に封印術にも長けていることである。

ただし、うずまき一族はミトが人柱力になる為の条件を提示してきた。

渦の国への多額の資金・人材面・防衛面での支援、そしてミトを柱間の妻にすることを条件としたのだ。

里側は当初、あまりに過剰な条件に戸惑ったが、確かにうずまき一族のミトが人柱力に一番相応しかった。また渦の国との国交設立は里にとっても有益だった。そこにちようど柱間の結婚が無くなったとあって、里の上役と火の国の大名たちはこぞって賛

成した。

そうして、半ば柱間の意思とは関係無く、ミトとの結婚が決まったのだった。

芙蓉が柱間の結婚を聞かされたのは、マダラの喪が明けた翌日だった。

少々驚きはしたものの、安堵のほうが大きかった。

お人好しで優しく、大きな包容力をもった柱間ならば例え政略結婚だとしても、きつと結婚相手とは互いに幸せになれるだろう。

未だ柱間に対しマダラを殺された遺恨はあったものの、心の整理はつけられていた。里を守るために柱間はやるべきことをやっただけ。ただそれだけだ。

柱間のお陰で今も人々は平穏に暮らしている。

マダラが実現したかった平和とは違うだろうが、マダラの居ないこの里には、確かに平和がある。

それで納得しているのだが、芙蓉の中ではどうしても、マダラを殺さずになんとか二人が再び手を組む方法は無かったのかという問いだけは消えなかった。

芙蓉は、不意に居間の窓から見える空を見上げた。

いま自分は、マダラが憎んでいた扉間と一緒に暮らしている。

その現実には、芙蓉の胸をえぐるように辛い現実であった。

マダラ襲撃の後、樹と再会した直後、芙蓉は逮捕され裁判にかけられた。

芙蓉はマダラの悪事に加担していたとみなされたのだった。

例え禁固呪の札で縛られていたとはいえ、柱間を裏切つて自分の意思でマダラに着いて行つた事を糾弾された。死刑にしたほうが良いという意見まで出た。

しかし芙蓉は一切反論しなかった。

むしろ、どんな罰でも受けると言つた。

だが、芙蓉を弁護する側の柱間と扉間は、マダラの意思である禁固呪の札に反し扉間を庇い死にかけた事、芙蓉が千手とうちはの平和協定に大いに貢献したこと、里創設期に教師として働いていたこと、その後も無償で里のために働いていたことを示し、無罪を主張した。

そしてなんと、うちは一族からも芙蓉の無罪を訴える署名が集まつた。芙蓉がうちは領地で教師をしていた時から芙蓉を尊敬する者が多くいたのだ。

そのような理由を裁判官も無視することは出来ず、結果、芙蓉は釈放されることになつた。

ただし、それには条件が付いていた。

扉間が責任を持ち、同居して監視を続ける事。

芙蓉はそれを拒んだが、自分を守ろうとしてくれる多くの人たちの気持ちが無駄にすることは出来ず、最後はその条件を飲んで釈放されたのだった。

「悪いな……これも決まった事なのだ。」

釈放されたその日、扉間は芙蓉の左手首の内側に飛雷神のマーキングをした。これで芙蓉がどこへ居ても居場所は分り、すぐにその場所へ飛べる。

芙蓉が逃亡するはすが無いのだが、これも釈放の必須条件だった。

いつの間にか空は薄い水色になり、夕暮れが近づいていることを知らせていた。

「じゃあ行ってくる。……ちゃんと飯食えよ。」

居間の机に座って窓の外の空を見ている芙蓉に扉間が声をかけた。

「はい……ありがとうございます。扉間さまもお気を付けて。」

芙蓉は少し微笑んで返事をした。

「ああ。」

扉間は芙蓉の気持ちを充分解ってはいたが、それでも芙蓉と二人で暮らし、出かける時はこうして微笑んで言葉をかけてくれるだけで胸が熱くなるほど嬉しかった。

……あの日、芙蓉は命を懸けて扉間を守った。

かつて自分を消そうとした自分のことを、傷つけないでくれと言ってくれた。

芙蓉が扉間を許すと言ったとはいえ、まさかそこまでして貰えるなど想像もしなかった。

まるで、一生分の愛情を、貰ったような気持だった。

たとえこの先マダラ以上に愛されなくてもいい。こうして一緒に居られるなら、もう何も望まない。そう思っていた。

扉間の里本部へ向かうその足取りは軽かった。



「芙蓉は元気か？」

会議が終わり、火影室に戻った柱間が一緒に入ってきた扉間に問う。

「昨日も同じことを聞いただろ。変わり無い、安心しろ。それよりも芙蓉のことは口にするな。こうしてもう結婚式の日取りも、人柱力になる日取りも決まったんだ。兄者はミトとの事だけ考えてろ。」

「だが……」

「未練がましい奴だな。ミトに失礼だと思わないのか。向こうもかなりの美人だろ。面食いの兄者には良かったじゃないか。」

「いや、俺はただ、その、マダラを倒した責任がだの……」

「うげい。」

扉間はそう吐き捨てて部屋を出て行った。

柱間は落ち込んで、いつもの様にずうーんと机に額を付けた。

「俺は……確かにまだ芙蓉を愛している。心に嘘はつけぬ……だが、それ以上に責任を感じ

ておるのだ…」

そう一人で呟く。

◆ だが今の柱間にはもう、芙蓉にできることは何も無かった。

「お忙しい所、お時間頂きありがとうございます。改めまして、うちはドドメと申しませう。忍具研究開発と病院を経営しております。」

黒縁の四角いメガネに七三分け、両膝をきちんと揃えた低姿勢の中年男性が扉間へ名刺を出す。

「いやとんでもない。こちらとしてもありがたい申し出だ。ぜひ詳しく聞きたい。」

「はい。現在うちは一族専用の基礎教養科目を集中して学べる私塾を作りたくと考えております。アカデミーが出来て忍としての基礎を学ぶ場所は出来たのですが、やはり芙蓉さんがうちは領地にいらした時の、あの基礎教育がとても素晴らしく、これからの忍は学問もしっかり学ぶことが必要だと痛感したのです。それで、芙蓉さんにもぜひ、その私塾で教鞭を取って頂けないかと思ひまして…」

「私塾か…思想教育は里の方針で禁止となつていますが、分つておられるか？」

「勿論です。それに…我々は本当に芙蓉さんには感謝をしておるのです。芙蓉さんが来る直前のうちは、弟を失つて暴走気味だったマダラに振り回されていました。ご存知

のように多くの亡命者と死者を出しました。ですが芙蓉さんがマダラを、そして強硬派だったうちはの忍を変えたのです。

あの方が来なかつたら、平和協定はもつと先の事だったでしょう：いやもしかしたら実現していなかつたもしれません。ですから、芙蓉さんのような人材をまるで咎人の様にしておくなど里にとつて大きな損害です。ですが、それを解っているのはもはやうちは一族の我々だけでしよう：マダラとは色々あつたでしょうが、だからこそうちはの事も理解してくれていると思つております。どうかお願いできませんでしょうか？」

扉間は芙蓉の裁判の時にも驚いたが、芙蓉がそこまでうちは一族に慕われ、理解され、必要とされていることに改めて驚いた。

「今の言葉、そのまま芙蓉に伝えよう。きつと芙蓉も喜ぶ。」

「ありがとうございます。よろしくお願い致します。」

ドドメは何度も深く頭を下げ、嬉しそうな顔で部屋を出て行った。

部屋に残つた扉間の顔も、自然と笑顔になつていた。

「帰つたぞ・・・」

二十三時時を過ぎて帰宅した扉間は、芙蓉が寝ているかもしれないと思ひ小さな声で呟いた。

廊下に入ると居間の扉から光が洩れているのが見えた。まだ芙蓉は起きていた。
だ。

ゆつくりと居間の扉を開けた。

「おかえりなさい。扉間さま…遅くまでお疲れ様でした。」

刺繍をしていた手を止め微笑んだ。

「まだ寝て無かったのか。ちゃんと飯食ったか？」

「ええ、頂きました…でも一人だと、なんとなく不安で眠れないんです…」

「悪いな…遅くなって。」

「いいえ。遅くなられるのを分っていて私が勝手に起きていただけですから…お茶でも淹れますか。それともすぐお風呂に入りますか？」

「うん…茶を淹れてくれ。着替えてくる。」

芙蓉は台所に立ち緑茶の用意し、扉間は自分の部屋に着替えに行つた。

春とはいうものの夜になると冷える。火鉢には火が付いており、芙蓉はその上に鉄瓶を置いた。

「お前、まだ眠くないのか？」

扉間が椅子を引きながら芙蓉に問う。

「はい。そんなには…」

「土産話があるんだが今聞く？それとも明日にするか？」

「え？どんなお話ですか？今聞きたいです。」

芙蓉はとても久しぶりに目を輝かせる。

その様子に扉間は逸る気持ちを抑えようと咳払いをし、一呼吸置いてから話し始めた。

「・・・お前に、教師をしてほしいという依頼がきた・・・」

「え！私にですか！」

「そうだ。うちはドドメという人物は知っているか？その者からの依頼だ。」

「ドドメさん！はい。うちは領地の学校でドドメさんのお子さんも教えていました。それにドドメさんは学校に寄付をして下さったり、教材を提供して下さいたり、とてもお世話になりました。」

シュ——…鉄瓶から蒸気が上がり沸騰を知らせる。

芙蓉は思ってもみない話に興奮し、慌てて立ち上がると鉄瓶の取っ手を素手で握ろうとした。

「おい！素手で触るな！」

「熱っ!!!」

止めるのが遅かった。芙蓉は右手の人差し指と中指を火傷をした。

「馬鹿か！素手で触る奴があるか！」

「すみません……つい話に夢中になって」

扉間は急いで冷水を出し、火傷をした指を冷やした後、回復術で手当てをする。

手当をしながら、あの日、芙蓉に人工呼吸をした時のことを思い出し、恥かしさで胸が高鳴る。そしてあの時、芙蓉を助けられて良かったと改めて実感する。

早急な対応のおかげで、直ぐに芙蓉の指は何事もなかった様に綺麗に治った。

「あ、お茶を……」

「もういい。俺がやるからお前は座ってる。」

扉間は有無を言わず芙蓉を椅子に座らせ、自分で鉄瓶の湯を茶葉の入った陶器の急須に注ぎながら先ほどの話の続きを始めた。

「でだ、そのドドメが今度うちは一族の為の私塾を作るんだと。そこは忍術ではなく基礎教育科目だけを教える場所だ。そこでお前に教師をしてほしいと言ってきたんだ。」

「でも……私は罪人です。もう教鞭を取るなんて、そんなこと……」

「お前は無罪だ。それに忘れたのか。裁判で多くのうちは一族の者がお前を助けようと直訴したことを……」

そして扉間は、ドドメが言っていた話の内容をそのまま芙蓉に伝えた。

俯く芙蓉の前に、そっと茶の入った湯呑を差し出す。

ポチャ・・・

すると、その茶の中に芙蓉の涙が落ちた。

「お前は一人じゃない。お前を慕う人々がそれだけ多くいる。お前はそこから必要とされているんだ。もつと自信をもてよ・・・な。」

芙蓉は顔を上げ、涙を拭って、深刻な顔で扉間の目を真っすぐ見つめた。

「少しは罪を償うことは出来るでしょうか・・・？」

「償う？フツ・・・貢献だろ？卑屈になる必要なんてない。だいたいお前は罪なんて犯してないしな。あ、まあ罪を犯したと言え、お前に捨てられて落込んでいる奴が一人いるが・・・」

「・・・。」

芙蓉は本気で困った顔をして俯いた。

「最後の冗談だつ・・・そんな顔するな。とにかく、教師の件はお前がやりたいのならやれ。」

恐る恐る、上目遣いで芙蓉が扉間を見る。そして意を決して言う。

「・・・私、やらせて頂きます！」

「そうか。でも返事は良く考えてからでもいいんだぞ。」

そう言つて扉間は腕を組み、椅子に背をもたげる。

「いいえ。扉間さまの仰る通りです。私をまだ必要としてくれる人がいるなら、それに応えたいです。それに、扉間さまや多くの方が私の無実を訴えてくれましたが、私自身は罪を背負っています。少しでもその償いになるなら…」

扉間はハーッと大きな溜息をつく。

芙蓉の変わらぬ生真面目さに少し呆れつつも、その芯の強さに感心した。

「うん…なら、お前の思うようにしてみるといい。」

「はい！ありがとうございます！」

「俺は…礼を言われることはしてないぞ。」

「いいえ。さっきの沢山の言葉、嬉しかったです。それにこのお茶も。」

芙蓉は湯呑を手に取り、そつと口を付けた。

「ちよつとしよつぱい…」

「それはお前のせいだろうが。」

「ウフフ。そうでした。」

いつ以来だろうか。芙蓉のこんな明るく自然な笑顔を見られたのは…。

扉間は思わず胸が熱くなる。

「あの…でも柱間さまには、どう償ったらいんでしょうか。」

扉間はガクンと首を垂れた。話をその前で終わらせてほしかった。

「あのなあ、冗談だつて言つてるだろ。あんなエロ馬鹿のことなんて気にすんな。」

そう言つて不機嫌そうにお茶をズズつとすする。

「でも……だけど……それじゃ……」

「でも、だけど、言うの禁止っ!!」

「はい……でも私に出来る事はないか、もつと考えてみます。」

「あ、またでも言つた!……ハアア。兄者を話の引き合いに出した俺が悪かつた。本当に兄者のことは気にしなくていいんだ。むしろ、もうお前はあいつに会わない方が良い。知つての通りもうすぐ、うずまき一族の娘と結婚する……」

「……そう、ですよね……」

芙蓉はそう言いつつ、煮え切らない様子である。どうしても何かしたいのだろう。

その様子を見て扉間は思わず言葉を探し、思いついてそのまま口にする。

「その……俺は、兄者の右腕だ。俺が居なければあいつは困る。まあ火影を、火影たるものにして支えているのは俺だつてことだ。……俺を支えれば間接的に……兄者に貢献できる……」

扉間は思いつきとはいえ、自分で何てことを言っているのだと、自分自身に対して引く。

「そうですよね!なら私、これから扉間さまのことをしっかりお支えます!」

見張り役を見張られる者が支えるというのも、おかしな話である。

そんな事は充分解っていないながら、扉間はつい自分の心からの願望が前に出てしまった。

だが芙蓉はそれに気づくはずも無く、やっと自分に出来る事が見つかったと喜んでゐる。

・・・芙蓉が納得してくれるなら、それでもいいのか・・・

扉間は僅かに罪悪感に似たものを感じつつも、その感情に目をつむった。

「あら大変！もう十二時を過ぎています！私のせいで、すみません！」

「構わない。明日は一日休みを取っている。兄者の結婚の話も今日で全て決まったしな。」

「遅くまでお仕事をされてお疲れなのに、本当にありがとうございました。いまお風呂の用意をしますね。」

芙蓉がさつそく自分の為に張り切っているのが分る。

扉間は黙って風呂場の方へ消えていく芙蓉の姿を眺めていたが、その胸の内は、両腕を天に突き上げたいほど喜びで溢れていた。



「芙蓉先生！久しぶり！元気そうで良かったよ！」

最初に声をかけてきた塾生は、うちはカガミだった。

カガミはうちは領地の学校で教えていた生徒のひとりだ。今は忍者アカデミーを主席で卒業し中忍になっていたが、芙蓉が教師をする私塾ができると聞いて入塾したのだった。

「カガミ君、お久しぶり！ずいぶん背が伸びて大人っぽくなったわね。」

「そりやもうあれから二年以上経つんだぜ。成長するつつーの。」

「そうよね…。アカデミーを首席で卒業したんですって？凄いな！」

「へへっ！大した事ねーよ…。でも先生が教えてくれた勉強の成果でもあるんだぜ？」

「そう言ってくれて嬉しいな！この塾では前の学校よりも高度なことも教えるから楽しみにしていてね。」

「うん。塾に来れないダチの分までしっかり勉強して、早く上忍になってやるんだ！」

「そう。それは頼もしいわね。先生も楽しみです。」

そう言つて微笑む芙蓉の笑顔は二年前よりも美しくなっている気がして、カガミはドキッとすする。

カガミにとって芙蓉は初恋の人だった。

これまで、マダラのような強い忍になつて芙蓉に認めてもらいたいと頑張つてきた。

その努力は実を結び、メキメキと実力を付け、今ではうちのの子供の中で一番強くなっていた。

そして今は、マダラのことを芙蓉をあのような目に遭わせた悪者、うちは一族の恥さらしとして恨んでいる。

だがカガミには、一つ劣等感があつた。

それはまだ写輪眼を開眼していないことだつた。

芙蓉に褒められて嬉しい気持とは裏腹に、素直に喜べないのはそのせいだつた。

塾は平屋建てで教室が四つ、理科室、家庭科室、音楽室、講堂があり、庭には大きな松の木が数本植えられている。

教師は芙蓉の他に三人の教師が居る。

入塾するには入塾試験と一定条件が設けられたが、両親の居ない孤児は入塾試験以外、無条件で入塾することが出来た。

クラスは学力のレベルによっていくつかのクラスに分けられ、基礎的な教養から、高度な専門知識まで幅広く学べるようになっていた。

そして今日は、その私塾の開塾式と授業初日である。

「当初話を聞いていたよりも、かなり本格的で高度な教育機関になっておるな。私塾というより、もうこれは完全な学校だが……？」

開塾式を待つ扉間がドドメに向かつて、棘のある言い方をした。

「ハハハ…芙蓉さんが来て下さるといふことで張り切り過ぎました。」

「それだけでは無かるう？…うちは一族の勢力維持のためか…もう一度教育課程を提出してもらうぞ。」

「はい、承知しました。ただお言葉ですが、うちは一族の力は先の大戦で随分落ち込みました。そのせいで里創設の際もあまりお役に立つことができませんでした。うちは一族が本来の実力を取り戻し、さらに発展することは里への大きな貢献になると私は思っております。」

「…うちはの復興のために、芙蓉を利用したのか…？」

扉間がキツときつい視線をドドメに向ける。

「とんでもありません！…結果的にはそう見えるかもしれませんが、私たちが芙蓉さんを尊敬し必要としていることは真実です。いま芙蓉さんと同じ役目が出来る人は、うちは一族には殆ど居ないのです。どうかご理解下さい…お願いします。」

「…まあ芙蓉も好きな教師の仕事が出来ると喜んでいゝし、その事は感謝している。ただ、少しでも不穏な動きがあれば見逃すことは出来んぞ。」

…トントントン。ドアを叩く音がする。

「どつどつぞ」

「失礼します…あ、扉間さま、もういらしていたのですね。あの、ドドメ塾長。塾生たちに配る用紙の事でご相談があるのですが…」

「塾内を見に来る。」

「あ、ご案内しましょうか？」

「いい。お前は忙しいだろう。それに一人で見たいからいい。」

「……。」

ドドメが苦い顔をして頭を掻いている。扉間は一人で部屋を出て行った。

「塾長、扉間さまと何かありましたか？なんだか不機嫌そうでしたけど…」

「この塾が完璧すぎて塾じゃないって仰ってるんだよ。その事でうちは一族が何か企んでいるんじゃないかって疑っているんだ…参ったなあ…そんな気は無いのに。」

「…そうでしたか。でも扉間さまもそれがお仕事なので許してあげて下さい。この先、この塾から里に貢献する優秀な人材が輩出されれば、きつと扉間さまも認めて下さると思います。それまで私も一緒に頑張りますので！」

芙蓉は両手で拳を作つて胸の前で揃え、ドドメに向かって微笑みかけた。

「…そうだね。ありがとう芙蓉さん。いや芙蓉先生。これから頑張ろう！」

芙蓉の笑顔は人の心を前向きにする。ドドメも笑つて拳を作つた。

講堂の椅子には入塾生たちとその保護者、来賓が座っていた。

塾生は十歳〜十五歳までの合計四十五人。男女半々に近い比率だ。

式の最後に教師の紹介と挨拶が行われた。芙蓉は四人中、最後に挨拶をすることになった。

芙蓉が塾生の前に立つと、ひと際大きな拍手が起こり、芙蓉の名を呼ぶ声まで飛ぶ。来賓席に座る扉間はその様子を見て、改めて芙蓉の人氣に驚く。

「橘芙蓉です。まずはこの場をお借りして、私を弁護して下さったうちの皆様にお礼を申し上げます。本当にありがとうございます。」

芙蓉は深く頭を下げ、数秒間そのまま動かなかった。そして頭を上げて言葉を続ける。

「今回こうして教師として迎えて頂きましたこと、本当に嬉しくて言葉になりません。うちは一族の発展のため、そして木ノ葉の里の発展のため尽力してまいりますので、どうぞよろしく願いたします。」

さて塾生の皆さん。本業のお勉強や任務があるにも関わらずここに来られているということは、皆さん志が高くていらつしやいますね。ところで皆さんには夢がありますか？・・・どうかこの塾で自分だけの夢を見つけてください。もう夢がある人はここで更に夢を具体的にしていきましょう。そのために一緒に頑張りましょうね。」

そして再び深く頭を下げると、多くの大人がその場に立ち上がって大きく拍手する。

扉間も大きな拍手をした。自分がまだ知らなかった芙蓉を知り、心から感動していた。

・・・マダラもこの芙蓉を見て好きになったんだろうな。こんな素晴らしい女を手にかけて手放すとは、本当に愚かな奴だ・・・



五月の新緑が眩しい道を、馬車に乗った新郎新婦が沿道の多くの拍手や歓声に向かって手を振りながらゆるりと走って行く。その行く先で色とりどりの紙吹雪が舞う。

芙蓉はその様子を遠くの建物の屋上から一人で見ていた。

ここからは新郎新婦の表情までは見えない。

二人のこれからの幸せを祈ってそっと目を閉じ、背を向けてその場から去って行った。

「やっぱあいつはただのエロ馬鹿だ。デレデレしやがって・・・」

結婚式から帰ってきた扉間が、正装の上着を椅子に投げて呆れたように芙蓉に向かって言った。

「・・・でも、柱間の好みの女性だったのなら良いじゃないですか。」

芙蓉がその上着を手にとって整えながら苦笑する。

扉間はその言葉に、ミトの容姿を思い出してみる。

顔はまあ美人。背はかなり高い。赤い髪。気が強そうな目。そして胸がかなりでかい。

思わず芙蓉の胸に目がいく。五月になり上着を脱ぎ薄着になった芙蓉の胸は、その形がきれいに見てとれる。大き過ぎず丸く上品な形をしている。

「…どうか…しました?」

「あ、いや、何でもない……」

芙蓉が扉間の視線を感じて持つている上着でそつと胸を隠した。扉間も焦って顔を逸らす。

「でも良かった……柱間さまが幸せそうです。」

「……ああ。」

柱間の本心は解らない。

おそらくまだ芙蓉のことを愛しているだろうに……

「お茶でも淹れましょうね。ほうじ茶と緑茶、玄米茶がありますよ。」

「ほうじ茶……素手で触んなよ!」

「解っています。もう、あれから毎回言うんだから。ウフフフ。」

「何回でも言う!というか何なら自分で淹れるわつ。これ、引き出物の菓子だ。出して

くれ。」

「はい……あら、蝶屋の和菓子ですね。火影様の結婚式の引き出物に使われたら、ますます人気店になってしまいますわ。もう気軽に行けなくなってしまうかも……」

芙蓉は蝶屋の家紋を見てふと、樹が初めてマダラに会いに来てくれた日の事を思い出した。

……樹ちゃんがお土産に蝶屋のおはぎを持って来てくれて、黄粉のおはぎをマダラさまがいなりと間違えて笑ったんだっけ……

「そんなにまであの店好きだったのか？ たまに樹と行ってるようだが……」

マダラを思い出しているとは思わない扉間が、芙蓉のとても寂しそうな顔を見て言った。

「えっ、ええ……白玉あんみつがとっても美味しいんですよ。」

芙蓉は急いで笑顔を作って誤魔化し、台所へ和菓子を持って行く。

シュー……沸騰したお湯を注意して急須に注ぐ。皿には最中を乗せた。

扉間は着替え終わって机に着き、結婚式の出席者票をもう一度見返している。

「……うん。確かに美味しいな。ん、中に餅も入ってる。」

「でしよう？ 甘いものがお好きじゃない扉間さまが美味しいと言われるんですから、本当に美味しいんですよ！」

「・・・今度連れてけよ・・・俺も。」

「え？蝶屋にですか？」

「ほかにどこ行くってんだよ・・・」

「本当に甘い物しかないですけど、大丈夫ですか？」

「そりや甘味処だからそうだろうーよ・・・そうだ明日！明日行くぞ！」

「え？あ、はいっ！でも樹ちゃんの前定を聞かないと・・・」

「明日は今日の祝日で、千手の忍は皆休みだ。ていうか・・・」

「？」

二人で行こうと言いかけたが、やはりその勇氣はまだ無かった。

あの夏、二人で指輪を買いに行った日の苦い思い出が消えない。

「いや・・・後で予定を聞いておこう。」

「そうですね！三人でお出かけなんてすごく楽しみです！」

(18) 芙蓉と扉間ふたりの咎人・マダラの真相

「いやあくシユールですねえ。扉間様と白玉あんみつ。ていうか店内、ここだけ空気が違うんですけど?」

「うるさい。お前の分は自分で払わせるぞ!」

「でもまさか予約して下さるなんて・・・ありがとうございます。」

「昨日お前がああ言っていたから、並ぶのは面倒だと思つてな。」

「扉間さまが甘味処の行列に並ぶ・・・プフツ!めっちゃ面白いですけどお!!ていうかあ、あれえ?ここ予約不可な気がしたんだけどなあ?フフツ。そこまで白玉あんみつ食べたかつたんですかあ?」

「お前、査定下げられたいのか・・・?」

「あーそれ職権乱用つ!!」

「フフフフ・・・あはははははっ!」

二人のやり取りに、芙蓉が声を上げて大笑いした。

それを見て扉間と樹も、思わず互いに顔を見合わせて笑つた。

ようやく芙蓉の笑い声が聞けたと、二人は心から安堵した。

マダラが死んでからこの半年余り、芙蓉の笑顔は、やはりどこかいつもぎこちないものだった。

しかし時の流れと穏やかな生活、うちは私塾での教師の仕事が、芙蓉の心の傷をずいぶんと癒しているようだ。

「ごめんなさい・・・二人とも面白くって・・・ウフフツ・・・」

芙蓉は涙が出るほど面白かったようで、指で目を抑える。

「俺は…別に笑わせるつもりなんてない。」

「いやいや、扉間様は素で面白いんですよ。アハハ！」

「コラ！匙を人に向けるな！下品な奴だな。本当にお前、俺のことナメてるだろ!!」

「樹ちゃん！流石にそれ以上言ったら怒られるよ？ウフフ…」

「もうとつくに怒っとるわっ！」

蝶屋は以前から人気の和菓子舗・甘味処でこの日も賑わっていたが、流石に昨日の今日ではまだ引出物の話題は広がっていないのか、想像よりは混んでいなかった。

蝶屋側は夜遅くに扉間が直々に予約して来たとあり、予約を断るわけにいかず一番奥の目隠しの有る席を用意していた。

それでも店内に扉間が入ってきた時は店中が随分ざわついた。

甘味処とあって女子が多く、黄色い悲鳴も聞こえたほどだった。

今も店中の客が、目隠しから僅かに見える三人の姿に注目している。

「ねえねえ、芙蓉。いつものしてよ。」

「え?でも……」

芙蓉は扉間の方をちらつと見て戸惑っている。

「いいじゃん別に!誰も、見てないし。ほら扉間さまは、ただの、監視役さんなんだしさつ。気にしない、気にしない。」

「?」

「でも……うん。じゃあ一回だけだよ。はい……あーん……」

扉間の隣りに座る芙蓉が、向かいの席に座って口を開けている樹にあんみつを運んだ。

「……!!」

「ふふくん。いいでひよお?」

芙蓉の手から口に運ばれたあんみつを満足そうに頬張りながら、樹は扉間を見て自慢した。

「お前たち……いつもこんなことをしているのか。」

「ほらほら、次は芙蓉の番だよ。あくんして♪」

「え?あ、はい……うん。あ、あーん」

樹は扉間を無視して今度は芙蓉の口にあんみつを運ぶ。

大きく開いた芙蓉の口元があまりにもいやらしく、扉間は目が離せなくなる。

「あ、扉間様にもしてあげましょうか？わ・た・し・が！」

「てめえ……」

「あ、と、扉間さま？えつと、けつこう女の子同士とか、恋人同士でこうやつてる人多いんですよ？……えつとでも樹ちゃんはいい加減にしてね……」

芙蓉が明らかに怒っている扉間をなんとか宥めようとする。

樹は反省する様子などなく、チャクラを荒立ててまで怒る扉間を見てニヤニヤしている。芙蓉の前では扉間が本気で怒れないことを知っている。

それに樹としては、仕方が無い事だとはいえ、扉間が芙蓉と暮らしていることがどうしても許せず、事あるごとに扉間へ嫌がらせをしては発散していた。

……樹がライバル……なるほどな……

扉間は柱間が以前言っていたことを思い出し、なんとか怒りを鎮める。

ライバルの挑発に乗ってどうする。

「はい。私のサクランボあげますから、機嫌直してください。扉間さま。」

芙蓉が扉間のあんみつの上に自分のあんみつのサクランボを摘んでちよんと置いた。

「あーずつるーい!!」

樹は身を乗り出して反発した。

「樹ちゃんは扉間さまに失礼過ぎ！仲良くして！いい？」

・・・俺は子ども扱いか？・・・

そう思いながらも、嬉しくてつい、あんみつの上に二つ並んだサクラランボを見つめた。

・・・あははは・・・うふふふ・・・

この日、ずいぶんと芙蓉は笑っていた。

なんだかんだと楽しい時間が過ぎてゆく。

店を出ようとした時、入り口で扉間が出てくるのを待っていた数人の女子に囲まれた。

「扉間様！ファンなんです！握手して下さい！」「私も！」「私もお願いします！」

キヤーキヤーと十人ほどの女子たちに囲まれ揉まれて、扉間は握手されたり触られたり、無表情でされるがままだった。

樹と芙蓉はその女子たちをかき分け、店から離れてその様子を見ていた。

「扉間様ってすつごい人気あるんだよねー。信じらんない。どこがいいんだか。しかもさ、柱間様が結婚しちゃったもんだから扉間様に人気が集中してるんだろうね。」

「そうだね・・・前、女学校の生徒たちはクールなところが良いって言ってたけど・・・」

「クール？うーんまあ確かに。でもツツコミ好きの面白系だよね。アハハ！」

◆
夕暮れの柔らかい光に照らされ新緑が輝く木々の下、扉間と芙蓉は家に続く坂道を歩いている。

少し後ろを歩いていた芙蓉が、そつと扉間の隣りに歩み寄る。

「扉間さま、今日はとつても楽しかったです。ご馳走様でした。樹ちゃんが失礼な事ばかり……ごめんなさい。でも査定は下げないであげてくださいね。お願いします。」

「あれは、冗談だ。」

「良かった……」

二人はお互いの影を見つめながら黙って歩き続けた。

すると芙蓉が突然口を開いた。

「あの……扉間さまは、ご結婚は考えていらつしやらないんですか？」

扉間は思わず足が止まり、大きく目を見開いて芙蓉の顔を見た。

「……これは、もしかして、求婚されているのか!?!」

ゴクリと唾を飲み込み、返す言葉を探すが、なかなか見つからない。

「扉間さまは以前から女性に大人気ですよね……それなのに、私なんかと一緒に暮らしていたら女性とお付き合ひも、結婚も出来ないんじゃないかって……私、申し訳なくて……」

扉間はハアアと大きく息を吐いて、掌で何度も額を拭った。

「……勘違いだった。良かった、変に返事しなくて……」

「別に、俺はあいつらに興味ない。結婚も考えてない。お前が申し訳なく思う必要もない。それに、俺が自ら望んでお前の監視役になったんだ……」

「……好きな女性は……いらっしやらないんですか？」

「……」

扉間は無言で芙蓉に背を向けた。

「ごめんなさい。失礼な事を訊いてしまつて！でも、過去に私に対してした事に責任を感じて、義務感で私と一緒に居てくれているのなら、それは貴方の自由を奪っているよ
うで、本当に悲しいから……」

「……俺のことを、支えるつて言つたよな……？」

「はい。これからおお支えして行くつもりです。」

「……なら、俺がお前に付いてるんじゃない、ずっとお前が俺の傍に居ろよ……」

「私なんかで……大丈夫なんですか？」

「お前じゃないと……ダメだ。」

芙蓉は俯いて自分の影を見つめる。

自分にはもう柱間にも扉間にも、それ以外の男には誰からも愛される資格など無いと思っている。

そして何より、マダラ以外を愛する自信も無い。

「……私はいつの間にか、こんなにも弱くなってる。ううん。」

マダラさまと出逢って強くなった気がしていただけで、罪を犯した今、元の自分に戻っただけなのかもしれない……

そんな自分が扉間の求めに応じて、傍に居てもいいのだろうか。

芙蓉は言葉に詰まり黙り込む。

「やはり、嫌か。」

「……自信が、無いのです。」

「解っている。俺のことを愛してくれとは言わない。ただ傍に居てくれるだけで良い。」

そう言って扉間は芙蓉の右手をそっと握った。

芙蓉は一つに繋がった影を見た後、扉間の顔を見上げる。

扉間は真剣な顔で芙蓉の顔を真つすぐ見つめている。

「……解りました……」

芙蓉は少し悲しそうな顔で微笑んだ。

それを見て扉間は反射的に芙蓉を抱き寄せてしまった。

これ以上望んではならないと解っていても、もう愛する気持ちは止められない。

愛されなくてもいい。

だが、全身全霊で愛させてほしい。

「……ありがとう。芙蓉。」

芙蓉の心はマダラへの罪悪感で痛んだが、反面、久しぶりの男からの抱擁に心がほどこける感覚になる。

このまま甘えてしまいたい気持ちになり、戸惑う。

しかしもう、今の芙蓉に自らの強い意志を突き通す強さは無かった。

子供の頃のように、誰かに求められるがまま動くしかない自分がそこに在るだけだった。

気付けば夕陽の差し込む家の中に居た。扉間の部屋だった。

いつかの記憶と重なる。

これから起こることも、同じだろう。

傍に居るといふことはどこまでの行為をいうのかを考えるが、今それを考えたところで何になるだろう。

どうしたいかも、どうしたく無いかも分からない。

すべてに自信が無い。

それなら求められるまま、捧げればよいのではないか。

何より、埋まらないの心の穴を、せめて一時的でも構わない…埋めたい。

そんな事を考えているうちに、気づけば扉間の唇が芙蓉の唇を覆っていた。

扉間の唇は芙蓉の唇を確かめるように上唇、下唇と何度も優しく吸い付いてくる。そして芙蓉の腕を掴んでいた手を下ろして芙蓉の腰に回す。

「・・・嫌じゃないか？」

扉間は女にそんなことを確認するのは情けないと思いつつ、自分の願望と芙蓉の心、両方を天秤にかけて量っていた。

「私は・・・更に罪を犯すことになるのでしょうか・・・」

「俺の傍に居ることが罪だっていうなら、それは俺にだって罪があることだ。お前だけが背負う罪じゃない。これからは、お前の罪は俺が背負う。」

そう言つて芙蓉を抱きしめた。

「だから・・・お前の暗い眼差しも、苦しい胸の内も、全部俺に見せてくれ・・・」

扉間を見上げる芙蓉の大きな琥珀色の瞳からは、今にも涙が溢れそうである。

黙つて瞬きをすると、両目かっぴに大粒の涙が流れ頬を伝い、芙蓉は静かに扉間から体を離した。

悲しみを湛え、迷いで泳ぐ目は、必死に扉間の瞳を追っている。

何か言いたげに、僅かに唇が震えている。

扉間は唇に口づけをし、ゆっくりと芙蓉を床に座らせ再び抱き締める。

「お前に出会った時から、ずっとお前のことを愛していた……これまで傷つけてばかりで本当に悪かった……俺を許してくれ……」

その声は僅かに震えていた。

芙蓉はその言葉を聞くと、不意に扉間の背中に手を回して抱きしめた。

扉間の涙は、芙蓉の心の傷口に落ち、沁みて痛んだ。

その痛みは、まるで扉間の痛みが自分の痛みであるかのように錯覚させた。

……せめて扉間さまの傷は、癒してあげたい……

芙蓉は恐る恐る、扉間の頬を両手で包んだ。

傾いた夕陽が扉間の顔を明るく照らし、普段から赤目がちの瞳が真っ赤に輝いている。

「……！」

芙蓉は目を見開き思わず声が出てしまいそうになる。

その扉間の赤い瞳が、マダラの赤い写輪眼と重なり、マダラを見た気がした。

芙蓉は急に眩暈がして、同時に心に迷いが生じる。

焦って扉間の頬から手を離れた瞬間、抱きかかえられた。声が出ない。

いま自分を抱きかかえているのは誰なのか。

マダラ？それとも：柱間？誰だか分らなくなる。

寝台に仰向けに横たえられ、自分の身体の上に扉間が現れる。

「……扉間……さま……？」

「……なんだ、芙蓉？」

扉間は優しい声で芙蓉に問い返す。

目の前に居るのは間違いない、扉間だった。

「扉間さま……」

「芙蓉……」

二人の言葉が重なると同時に唇も重なる。

……もう私に失うものなど何も無いじゃないの。

なら、求められるものは全て差し出せばいいだけよ……

芙蓉は目を閉じて扉間に身を委ねた。

二人で居たあの海は、今も青く輝いてるのかしら……

貴方と二人で見るあの景色があれば、他には何もいらなかったのに……

貴方が居ないこの里は、賑やかで、生き活きしてて人々の笑顔が溢れてる。

平和よ。

なのに、私には、まるで止まった世界に見えるの。

・・・どうして？

あの頃、貴方の隣りにしか私の幸せは無いって思っていた。

なのに・・・

いま、止まった世界のこの里で暮らしていることを幸せだつて、感じる自分が居るの。こうやってまた、私は最後の何かを差し出して、新しい何かを、新しい未来を得なければ生きていけないの？

失うものなんて無い。空っぽなの。だから・・・

また誰かの愛をで心を満たし、貴方を忘れる日がくるっていうの？

ねえ？・・・

芙蓉は訊ねた相手から返ってくるはずもない答えを求めるように、自分の唇を夢中でむさぼっている裸の扉間の背中をぎゅっと抱き締めた。



部屋には本が散らばっている。

食器もそのまま、裁縫道具も出しっぱなしだ。

外には洗濯物が干されたままになっている。

散らばった本の中に、マダラが芙蓉に贈ったべつ甲のカンザシが落ちていた。

そつと、それを拾いあげる。

「……あいつ、本当に扉間に攫われたんだな。」

柱間にマダラが殺された日から一週間後。

マダラは、アジトから家に戻っていた。

そう、マダラは生きていたのだ。

あの日、あの時、マダラは息絶える寸前に、瞳術・イザナギにより僅かに時間を巻き戻し、自分の死を無かったことにした。死体を影分身にすり替え、時空間忍術でアジトまで飛んだ。

そして戦闘中に喰いちぎった柱間の左肩の肉を吐き戻し、自分の左胸に移植した。

死んだとみせかけ、マダラは柱間の肉体の一部を奪う、すなわち千手の力を手に入れるという目的を見事に成功させていたのだった。

移植直後は身体の拒否反応でまともに動くことが出来ず、一週間アジトで過ごした。無事に柱間の細胞はマダラの身体に融合し、こうして家に戻ってきた。

そして今、芙蓉が突然居なくなつた時のまま、時が止まっている部屋を見渡している。散らばつた本を拾い集め、机の上に置くと椅子に座り、再び机の上のカンザシを見つめる。両手で折ろうとしたが、ためらわれ、出来なかつた。

……芙蓉はあの時、死んだのだろうか……

『 お前の大切な荷物は無くなったぞ
柱間の言葉が浮かぶ。』

急に胸が苦しくなり、熱いものが喉元まで込み上げてくる。

「いや、あの程度の術と傷なら二人によって助かっているはずだ。」

マダラは芙蓉がまだ生きているという可能性を信じ、喉に詰まったものを飲み下した。

あの日から数日間は芙蓉に裏切られたという怒りに満ちていたが、時間が経って冷静になると、あの状況を作り出したのは芙蓉のせいではないと気が付いた。

・・・そうだ、芙蓉を攫った扉間がすべて悪いのだ。扉間が攫ったと判った時、真っ先に扉間を殺しておくべきだった・・・

そう思うと、芙蓉への怒りよりも、以前からの扉間への憎しみの炎が更に燃え上がった。

◆
・・・俺が直接手を下さぬとも、あいつだけは必ず殺してやる。絶対にな・・・
マダラは芙蓉のカンザシを握りしめた。

「先生！どうしたんだよ？なんかすっぱー悲しいそんな顔してさ。」

夕暮れに染まる里を見ていた芙蓉は、ハッと我に返つてその言葉の方向を見た。

先ほどまで塾の教室で一緒だった、うちはカガミだった。

夏至が近くなり、陽が長くなつてきたとはいえもう十九時を過ぎている。道を歩く人はまばらになっており、周りの家々には灯りがともっている。

「・・・カガミ君こそ、どうしたの？ 帰りは反対方向じゃない。」

「今日扉間さまは迎えに来ないんだろ？ 俺が送つてつてやるよ。」

「ありがとう。でもお家の人が心配するし、先生の家は近いから大丈夫よ。」

「ガキ扱いすんなよな！ 俺もう中忍だぜ？ 要人の警護だつてしてんだからな。ていうか、先生なんかあつたのか？ 大丈夫？ 俺で良かったら話聞かせ。」

カガミは芙蓉の心配を打ち消すように、言葉を續けて芙蓉に尋ねる。

「ちよつと色々思い出してただけ。大丈夫よ。ありがとうね…じゃあ、お言葉に甘えて送つてもらおうかな。お願いします。」

芙蓉もそれ以上詮索されまいと、カガミの申し出を受けた。

そしてゆつくりと歩き出す。

カガミは芙蓉の言葉を聞いて、思い出していたのはきつとマダラの事だと思つた。愛する男に殺されそうになつたのはどんなに辛かつただろうか。

十五歳のカガミにもそれは容易に想像できる。そして、もうこの世にいないマダラに

怒りを感じる。

・・・俺は必ずマダラを超える忍になってこの里を守る。そして先生のことも・・・

「カガミ君はやっぱり塾でも優秀ね。他の先生も感心していらつしやるわよ。」

「へへっ…先生の教え方がいいんだよ。」

「あら、上手なことを言うのね。フフフ。」

カガミの視線は、微妙にカガミのほうが上だった。大人びた発言と相まってカガミの成長を感じ、芙蓉は嬉しい気持ちになる。

「なあ先生。俺の夢、聞いてくれる？」

「ええもちろん！ぜひ教えて欲しいわ!!」

芙蓉が前屈みになって鏡の顔を覗き込む。その瞳は子供ののようにキラキラと輝いている。

その様子にカガミはときめいた。

カガミは芙蓉の、この大人なのにどこか子供っぽい所が大好きで庇護欲をそそられるのだ。

「・・・俺の夢は・・・火影になって里を守る事だ！」

「カガミ君・・・うん、凄く素敵だね！カガミ君なら、なれると思うよ。」

カガミは走って芙蓉の前に立った。

「俺、まだ写輪眼は開眼してないけど、開眼したらあのマダラを超える自信がある！そしてたら先生・・・俺と・・・俺と結婚して！」

薄暗い中でもカガミの顔が赤くなっているのが分る気がした。とても真剣な目をしている。

「・・・ごめんね。先生はもう誰とも結婚する気は無いの・・・。そつ、それに！その頃はオバサンだと思うし、カガミ君にはもつと素敵な女の子が現れると思うよ？」

真剣なカガミに対して自分もつい本心を晒してしまい、焦って誤魔化すように付け加える。

「オバサンって・・・俺が開眼して最強の忍になるまでどんだけかかると思ってたんの？俺が十八になるまでにはぜってーなってやるよ！そしたら先生だって気が変わるさ。」

カガミは腕を頭の後ろで組み、くるつと芙蓉に背を向けて歩き出した。

そのカガミの頭上には、青紫に染まる空に、僅かに欠けた月が浮かんでいる。

芙蓉はその後ろ姿を見てマダラを思い出し、思わず涙が込み上げてきた。

俯いて目を閉じ、その涙をぐつと胸にしまい込む。そしてカガミの後ろを歩き出した。

「カガミ君・・・ありがとう。嬉しかったよ。楽しみにしてるね。」

カガミの背中に向かって言った。するとカガミが満面の笑顔で振り返る。

「おう！楽しみにしといってくれよな！そしたら、俺のこと男として見てくれよな。約束だぜ！」

二つ返事で芙蓉が自分と結婚してくれるとは思わなかったが、カガミはどこかそれを期待していた。期待が外れて恥ずかしいやら悲しいやら、色んな気持ちが入り混じることが、芙蓉が自分に期待していてくれることがカガミの新たな希望となった。

「・・・芙蓉。ご苦労。」

すると突然、後ろから男の声があった。

見るとそこには、扉間が芙蓉に向かって片手を軽く上げて立っていた。

「扉間さま！今日は夜まで会議なんじゃ・・・」

「兄者の馬鹿が優柔不断なせいで明日に延期になった。塾に行ったら帰ったというから飛雷神で来たんだ。」

「・・・こんばんは。」

「ん？お前は確か・・・」

「うちはカガミと申します。扉間様。」

「カガミ君はうちの塾生で、アカデミーを主席で卒業した優等生なんですよ。今家まで送ってもらっていたんです。」

「ああ…貴様がカガミか…確か最速で中忍に上がり、今は上忍の候補にも挙がっている

な。確かになかなか優秀だな。」

「いえ、まだ実力不足です…なので塾で勉強しています。…私はこれで失礼します。」
カガミはそう言うのと扉間と芙蓉に頭を下げ、あつという間に姿を消してしまった。

「…ん？なんだ、ニヤニヤして。」

「え？あ、はい…カガミ君はうちの学校での私の教え子なんですけど、その夢が…火影になって里を守る事なんですって！それを聞いて私、凄く嬉しくって…」

芙蓉はそう言つて目を細めて微笑んだ。

「そうか…。子の世代が火影を夢にするようになったか…。」

扉間は腕を組み、感慨深そうに坂の下に広がる里の風景を眺めた。

「…しっかりと火の意思を受け継いでいってほしいものだ。」

「火の意思…？」

「里を守り人を守るという強い意思だ。そして…いつか全ての忍が一つとなり、平和な世の中を作るといふ夢のことだな…」

「…。」

芙蓉は少し悲しそうな顔をし、黙つて扉間の隣りで一緒に里を見つめた。しかし芙蓉が思い出していたのは、マダラの実現させようとしていた夢の世界のことだった。

「そうだ。今度俺の弟子にも会わせてやろう。お前の自慢の生徒に負けない、優秀な奴

らだ。」

「あら！それは楽しみですわあ！でも扉間さまにもお弟子さんがいたんですね。てつきり弟子は取らない主義でいらつしやるのかと思いました。」

芙蓉は扉間の突然の提案に焦って大袈裟に反応をしてみせた。

「いや、俺も後進を育てなければな。ちなみに里創立の時からいるだけだな……」

「でも扉間さまが先生って、生徒さん達は大変そうですね……フフフツ。」

「なんだよ、その最後の笑いはっ！」

空には宵の明星が輝き、夜のとぼりがすぐそこまで迫っていた。

(19) 集い・扉間の弟子たち

この家が完成した日、扉間が芙蓉の為にと植えたハナミズキが見事に花を咲かせている。

十日ほど前、扉間の想いが芙蓉に届いた頃、ハナミズキが開花した。

新緑の葉と真つ白な花のコントラストが美しい。

家の中では、芙蓉が食卓に料理を並べている。

こんなにも沢山の料理を作ったのは久しぶりだった。

ずらりと机に並ぶ品数を見渡し、芙蓉は心が躍る。

そして、ふと時計を見るとちょうど正午をさしていた。

「おいおい……ちよつと作り過ぎじゃないか？」

扉間が居間に入ってきて食卓の上を見て驚いて目を丸くした。

「そうですかね……実は温かい料理はまた後で出すんですけど……それに忍の男の子が四人も居るので、足りないよりはいいかなあつて……」

芙蓉はそう言いながら少し肩をすくめる。

「ハア……まあ余れば持って帰らせればいいだろ。お。あと三分くらいで来るぞ……」

扉間が玄関の方向をちらりと見る。芙蓉は急いで台所に戻り立ち鍋を火にかける。ガラガラガラ……

「御免下さい。扉間様。」

玄関が開く音がした後、良く通る少女の声が聞こえた。扉間が玄関に向かう。

「お招き頂きありがとうございます。」

少女が言うのと、後ろに居る少年三人も同時にお辞儀をする。

「うん。貴様ら上がれ。」

『お邪魔いたします』

四人は靴を揃えて上がり、扉間の後ろについて行く。

廊下が短いため直ぐに居間に着いた。

「こんにちは。皆さんいらつしやい。私、橘芙蓉といいます。よろしくね。」

芙蓉は四人が全員入ってきたことを確認すると、嬉しそうに挨拶をした。

「はじめまして。今日はお招き頂きありがとうございます。私は、うたたねコハルと申します。よろしくお願いします。」

コハルが最初に挨拶すると、隣の少年に目配せした。

「は、はじめまして。水戸門ホムラです……よろしくお願いします。」

「はじめましてこんにちは！猿飛ヒルゼンと申します。よろしくお願いします！」

「…志村ダンゾウといひます。よろしくお願ひします…」

四人は実物の芙蓉を目の前にし、それぞれの表情で芙蓉を見つめている。芙蓉は優しい笑顔で一人一人の顔を見た。

「ダンゾウから奥に順番に座れ。」

ガラツ・・・

四人が椅子を引いて腰かけようとした時、玄関が開く音がした。

「あ、カガミ君だわ。私が迎えに出てきますね。」

「・・・カガミつて、あの・・・？」

四人は信じられないという表情で、互いに顔を見合わせる。

「遅れて申し訳ありません！今日はお招き頂きありがとうございます。」

カガミは礼儀正しく背筋を伸ばして挨拶をした後、扉間に向かい深く頭を下げた。

「ああ。任務だったんだらう？ご苦労だったな。そこへ座れ。」

扉間はカガミに自分の一つ開けた隣の席を指さした。カガミは一つ空いているとはいえ、扉間と並んで座つていいものかと少し戸惑う。

「カガミ君、私の隣りに座つて。ね？」

芙蓉はカガミを見て直ぐに自分が先に扉間の隣りに座り、自分の隣りの椅子を引いた。

「はい……ありがとうございます。失礼します。」

少女少女がカガミを見ている。その視線にカガミも「あつ」と何かに気が付いた様子を見せる。

「じゃあ、カガミ君も皆さんに自己紹介してくれる？」

「…はい。うちはカガミと申します。現在中忍として任務の傍ら、うちはの私塾で芙蓉先生の教えのもと勉強しております。」

先に来ている四人は、意外な人物の登場に啞然としていた。

「お前があの、アカデミーをたった半年で首席卒業したっていう……」

最初に口を開いたのはヒルゼンだった。

「お前は猿飛ヒルゼンだろ？あの猿飛サスケの息子の。それとお前ら三人も木ノ葉本部でたまに見かけるから顔は知ってるぜ。」

「あなた、アカデミー在籍中に中忍になったのよね。」

コハルも驚いたような笑顔で言った。

「うちはカガミ君と、こんなところで一緒になるなんて、驚きだよ……」

ホムラも小声で言った。

「あら、みんなお互いのこと知っている同士だったのね。」

芙蓉はニコニコしながら席を立ち、台所で七人分の湯呑にお茶を入れ始める。

「それなら話は早いな。今日からカガミは俺の弟子になる。貴様ら四人の仲間だ。」
『えーっ!!』

扉間の弟子四人は驚いて思わず大声を上げた。

「そんなに驚くことはないだろ。貴様ら顔見知りだったんだろ。」

芙蓉が重そうな盆を持つてこちらに来るのを見て、カガミが立ち上がり芙蓉に近寄る。

「先生。俺、持ちます…」

「…しかし、カガミは、うちは一族じゃないですか…」

それまで黙っていたダンゾウが怪訝そうな顔で扉間に言った。他の三人も同じ意見なのか、少し俯く。

「カガミ君ありがとう。…ダンゾウ君、カガミ君がうちは一族だと何か問題があるのかしら？カガミ君も皆と同じ、火の意思をもった木ノ葉の里の忍ですよ。ね？扉間さま。」

カガミは特に表情を変えることもなく、芙蓉から受け取った盆を無言で食卓に載せる。するとコハルがその盆に載っていたお茶を扉間の方まで持つて行く。

「その通りだ。今はこの里に住むどの一族も、皆同じ木ノ葉の忍だ。里を守る、火の意思をもつ者であれば一族を越えて協力してくのは当然のことだ。」

「…さつ、食べましょう！皆さんお腹空いてるでしょ？遠慮しないで沢山食べてね。まだ茶碗蒸しや豚の角煮、シジミのお味噌汁もあるのよ。」

芙蓉がカガミの肩を後ろから両手でポンと叩いて、その肩越しに四人に向かって言った。

「…見ての通り、この量だ。貴様ら頑張つて食べよ。」

『いただきます』

扉間が箸を付けるのを見てから、他の者も箸をつける。

「お、美味しい！芙蓉さん、この菊花株の酢の物、すつごく美味しいです！切り方も凄く綺麗で本当のお花みたい。」

コハルが顔をほころばせて芙蓉に言った。

「ありがとう。お酢は疲労回復にいいのよ。沢山作ったから良かったら持つて帰つてね。」

喜ぶ芙蓉の顔を見て扉間も嬉しくなり、そつと微笑むと酒が入った猪口を飲み干す。ヒルゼンとダンゾウが、初めて見る扉間の表情に釘付けになり、箸が止まる。

「白いご飯も入れましょうね。扉間さまはまだいいですよね？」

「先生、俺も手伝います。」「私も手伝います！」

カガミが立ち上がろうとすると、コハルも立ち上がり声をかける。

「ありがとう。でも大丈夫よ。今日は二人ともお客様なんだから、ゆっくり座っていてね。」

カガミは少し残念そうにして椅子に座り、箸を持つ。

「ねえ。カガミ君はなんで扉間様の弟子になろうと思ったの?…」

ホムラの思いもよらぬ問いにカガミは少し戸惑う。

「…それは…芙蓉先生に…誘われたから。…それに扉間様は里のナンバー2だし…」

「へえ…自分の意思じゃねーんだ?」

「おい、ダンゾウ!…でもさ、どんなキツカケであれ、同じ扉間様の弟子になったんだからさ、お互い頑張ろうぜ!カガミ!」

ヒルゼンがカガミに右手の親指を立てて笑って見せた。

「…ああ。お前らと慣れ合うつもりはねーけど、お互い、扉間様の弟子の名に恥じないよう強くなろうな。」

カガミはそう言うのと、真顔で出汁巻き卵を口に入れる。するとその味に思わず顔がほころんだが、急いで再び真顔に戻り次の品に箸を付けた。

「フツ。なかなか嬉しいことを言ってくれるな。貴様ら全員、ぜひそうあってくれよ。」

『はいっ』

カガミと他の四人が元気よく返事をする。

それから自然と会話が始まり、食事をする箸も進んでゆく。

台所で料理を盛り付けていた芙蓉は、食卓の様子を見てホツとする。

カガミがうちは一族ということで先輩弟子たちと対立しないか、その不安はまだ払拭は出来ないが、カガミを受け入れようとしている子が居て嬉しかった。

過去のわだかまり、偏見、差別、思い込み：大人のそれらは子供たちにも気づかぬうちに受け継がれてしまうものである。

だが、子供だからこそ、触れ合い、話し合い、ぶつかり合うことで、お互いを理解し合えるはずだと芙蓉は信じている。

「芙蓉。もうその辺にして、お前もこっちに座って食べ。」

扉間が芙蓉の背中に向かって言った。

「はい！その前に熱燗を一本持つて行きますね。」

そう言つて熱湯に漬けられた熱燗を手を取った。

「熱っ!!」

芙蓉の声に扉間が即座に立ち上がり駆け寄る。

「大丈夫か！…馬っ鹿！お前また素手で触つたのかよ！ほら早く手をかせ。」

「急いでいて、つい…でも大丈夫です。沸騰していませんでしたし。」

「火傷を甘く見るな！最初の処置を怠ると重症化することもあるんだぞ。まったく毎回

あれだけ素手で触るなど言ってるのに……お前は鶏か！一日経ったら忘れるのか！……な
んで……」

扉間は流し台で水遁の術を使って芙蓉の手を冷やしながら延々と説教をしている。

食卓に取り残された弟子たちはその様子を啞然として見ていた。

「ねえ……なんかさ、芙蓉さんと扉間様って夫婦みたいだよね？」

コハルが隣に座るホームラにそつと小声で話しかける。

「うん……結婚しないのかな？扉間様ってもう三十歳は過ぎてるよね……」

カガミがその会話を聞いて二人を睨んだが、二人はその視線に気づかない。

「芙蓉先生……大丈夫ですか！」

カガミが台所に向かって大声で言い、扉間の説教を遮った。

……夫婦なんて……確かに仕方ないにしても……俺だつて先生のことか……

「うん。大丈夫……ごめんね心配させて。皆、気にせず食べててね。」

芙蓉は顔だけを食卓に向けて申し訳なきような顔で言った。

「カガミ、お前つてさ、さつきから気も遣えるし、優しいし、良い奴だな！」

カガミの気持ちを知る由もないヒルゼンが感心した様子で言った。

「別に……俺は当然のことしてるだけだ。」

「あーあ、アンタらにもカガミを見習ってほしいもんよねえ。」

コハルは隣の男子たちに向かつてそう言うと、三人はそれぞれの反応をする。ホムラは俯き頭をかく。ヒルゼンは「おうよ！」と笑顔で返事する。ダンゾウは黙って食事を続けている。

手当てを終えて扉間が料理と熱燗の載った盆を持ち、芙蓉と食卓に戻ってきた。コハルがその盆を急いで受取る。

「お騒がせしてごめんなさいね。私、ドジで…あはは。」

「ホムラ…俺はまだ三十前だぞ。」

『えっ!!』

一同が扉間の地獄耳と意外な事実には驚いた。その様子を見て扉間の顔が少し引きつる。

「さすが扉間さま！柱間さまよりも年上に見られてるなんて、すごい貫録ですね。やっぱり昼間から熱燗なんて飲む人は違いますね！」

「芙蓉…それ褒めてるのか貶しているのか、どっちなんだ。ていうか嫌味入ってる…。」

芙蓉と扉間のやり取りをみて一同が思わず笑いそうになり、手で口を押え顔を背ける。

「俺は笑いなど取ってないっ…。」

あはははっ。・・・クククツ・・・フフフツッ!

その言葉に芙蓉が笑うと、一同も堪えきれずに笑い出した。扉間はハアと大きなため息をついてドスンと椅子に座るが、その表情は少し微笑んでいるように見える。

それをきっかけに会話に笑いが混じり、笑顔が溢れて盛り上がった。

そしていつの間にか、大量に作った料理の皿はほぼ空になり、芙蓉も扉間も弟子たちの食欲旺盛さに驚いていた。扉間と芙蓉は顔を合わせて微笑み合う。

薫る六月の風が庭のハナミズキを揺らし、窓の間をすり抜け、食卓を通り過ぎてゆく。

「みんな良い子ですね…扉間さまのことを尊敬して慕っているのが良く伝わってきましたよ。カガミ君もきつとこれから仲良くなってくれると思いますし…」

賑やかな時間が終わり、再び二人きりに戻った家の縁側で、扉間と芙蓉は肩を並べていた。

「ああ。皆、実力と芯のある奴らだ。カガミもな…。まずは俺の弟子たちの間から一族の枠を超えた協力を成功させてほしいものだ…」

感慨深げにハナミズキの木とその向こうの青空を見つめる扉間の横顔を見て、芙蓉は微笑んだ。

いつからだろう。

扉間がこんなに優しい顔をするようになったのは……
「絶対。大丈夫……」

芙蓉はそう言うのと、扉間が膝の上に置いてある左手の上に両手を重ね、それをまっすぐ見つめる。

扉間はハツとして、自分の左手に重なる芙蓉の手を見た。

昔、芙蓉が同じことをしてくれただことの意味が、今なら心から解る気がした。

扉間も、そつと芙蓉の両手に右手を重ねる。

「そうだな……ありがとう。」

扉間の鼻が芙蓉の鼻に触れ、そのまま唇が重なる。

◆ 灯りが壁に反射して揺れ、隣には男の影が映し出されている。

「……芙蓉。まさか扉間と暮らしているとはな……」

マダラは報告書を手に行っている。あれから山岳の墓場を出入りしている能力の高い忍を何人か写輪眼で記憶を書き直し洗脳して、奴隷として使っている。そして芙蓉のこと、木ノ葉の里のことを調べさせていた。

そしてマダラは復活して約二ヶ月後、芙蓉が辿った経緯の全てを知った。

芙蓉はあの日から牢獄に入れられ、裁判にかけられたこと。芙蓉は実刑を主張したが、うちは一族が芙蓉を擁護したこと。その結果、見張り役の扉間と暮らすという条件で無罪になり釈放されたこと。

直ぐにでも芙蓉を取り戻したいが、今はその時ではない。

いま自分が生きているとバレてしまうことだけは、絶対に避けなければならない。

その為には決して自ら動かないこと。

マダラにとってそれは歯がゆく苛つくことだが、仕方ない。焦らず、用意周到に芙蓉奪還の策を考えることにした。

「芙蓉……」

マダラの目には写輪眼が浮かぶ。その瞳は静かで冷たい怒りを湛えていた。



青空には入道雲が浮かび、花壇には夏の太陽に向かって向日葵が咲いている。常緑樹の松の葉も、午後の強い日差しを受けてキラキラと光っている。

『うちは私塾』は、今日が夏休み前の最後の授業だった。

皆が忍である塾生たちにとって夏休みはあまり意味の無いものであったが、休暇を取り自分の時間を大切にするというのが塾の方針であり三月、八月、一月に長期休みが

あつた。

授業前、塾生たちは互いに夏休みの間の予定や任務の予定について話しているが、どこか緊張した空気が漂っている。

「はい。皆さん静かに。もうすぐ火影様がいらつしやいます。緊張するかもしれませんが、皆さんはいつも通り授業を受けるように。」

塾長のドドメが教室に入ってきてニコニコしながら言った。

この日は、初めて火影である柱間が、うちは私塾の授業参観に来る日でもあつた。

柱間は忍者アカデミーやその他の教育機関の運営については全て扉間に任せていたが、うちは私塾が出来、うちはの子供の忍たちの活躍がめざましいことを知り、柱間がぜひ一度授業をその目で見てみたいと言ってきたのだ。

「フウ……」

芙蓉は教室の扉の前で胸に手を当て、大きく息を吐いた。久しぶりに緊張している。ゆつくりと扉を開く。

パチパチパチパチ！

「よっ！待ってました！芙蓉先生っ！」

柱間が立ち上がって拍手をする。塾生たちが目を丸くして一斉に後ろを振り返る。

「馬鹿かつ！ここは歌舞伎の舞台じゃねえんだぞっ！黙れ！」

隣の扉間が小声で柱間を窘めながら、腕を引つ張つて椅子に座らせようとす。

芙蓉はその様子を唾然として見ていたが、少し苦笑したあと一度下を向き、再び顔を上げ、気を取り直して教壇に立った。そしていつも通りに授業を始める。

「では先週の宿題の検証から始めましょう。では最初に黒板に回答の数式を書いてくれる人、手を挙げて下さい。」

「ハイ！」「ハイ！」・・・

塾生の半数ほどが手を挙げる。

「はい。ではサザレ君、前に出て数式を書いて下さい。」

塾生が黒板に歩いて行く様子を見ながら、柱間の隣りに座っているドドメが小声で授業の流れを説明し始める。

「この授業では回答を教師が示すのではなく、生徒それぞれの回答を出し合い皆で検証します。数学は回答は一つですがそれを導き出す方法は様々です。ですからこうやって思考力を鍛えています。」

「ほほう…なるほど。教師が一方的に指南するわけでは無く、皆で回答を検証するのだな。」

柱間は感心して何度も頷きながら、芙蓉の真剣な横顔を見つめている。

その横顔を扉間が横目で見る。兄はいま、本当はどう感じているのだろうか・・・

暫く芙蓉の授業を参観した後、柱間は他の教師の授業を参観するために出て行つた。

授業が終わり、芙蓉は柱間の待つ塾長室へ呼ばれた。

そこには柱間と扉間、ドドメと三人の教師が先に席に着いて歓談していた。

芙蓉はその輪の中に入るのが少しためられたが、今は勤務中である。私情は捨てなければと自分を律して柱間に挨拶をする。

「失礼します。火影様、今日はご参観頂きありがとうございます。ごさいました。」

そう言つて深く頭を下げる芙蓉に柱間が満面の笑顔で言う。

「いやいや、こちらこそ授業の邪魔をして悪かつたのう。素晴らしい授業であつたぞ！」芙蓉は席に着き、歓談に加わる。柱間は、うちは私塾の教育方針や授業実態を知り、ますます感心していた。そしてこれからは木ノ葉の里として支援もすると約束してくれた。

その言葉にドドメも他の教師も大喜びしているが、しかし芙蓉はなぜか素直に喜ばない。そんな自分に嫌悪を抱きつつも、笑顔で柱間に礼を言った。

「では今後ともよろしくお願いいたします。本日はありがとうございます。」

ドドメが話を締めくくると、三人の教師を促して席を立ち部屋を出ようとする。芙蓉も立ち上がったが、扉間が芙蓉を引き留める。

「芙蓉、兄者が少しお前と二人で話したいそうだ。塾長にも言つてある……頼む。」

「そう言つて芙蓉を座らせると扉間は席を立つ。芙蓉は不安そうな顔で扉間を見つめるが、扉間は振り向かずに出て行つてしまつた。」

「……すまないな。芙蓉。なに、長々と話すつもりはない。少し付き合つてくれ。」

芙蓉は俯き、沈黙が流れる。

柱間と面と向かつて二人だけで話をするのは、マダラが死んだあの日以来だつた。

「扉間からお前の様子は聞いておつたが、今日の授業を見て本当に元氣そうで安心したぞ。……それで、その……どうだ？正直、扉間との生活は……？」

柱間は、かつて芙蓉を消そうとした扉間と共に生活することを余儀なくされた事を懸念していた。

自分と婚約している間に二人が和解したことは知つていたが、やはり二人で住むというのは芙蓉にとって辛いことではないかと思つていた。

「……もしかして、それを聞くために今日の参観をされたわけではないですよ？」

「まさか！それは違うぞ！確かにこんな形でお前と話をする機会を作つたことはそう誤解されても仕方がない。本当はミトの出産が終わり落着いたらお前と二人で話そうと考へていたのだ……信じてもらえないだろうがな。扉間から聞く話を信用していなわけでは無いが、やはりお前の本心はお前からしか聞けぬと思つていた……扉間がお前にした

罪は一生消えぬ。釈放される為には仕方がなかったとはいえ、お前が無理をしておるのではないかと思うと、兄として、やはり申し訳なくてな。あれからもう一年近く経つ。お前がこうして里に貢献しておる実績もある。今ならもう別居することを上役たちに提案することが出来るだろうぞ。どうだ？」

芙蓉は少し俯き気味で柱間の話を聞いていた。

柱間は嘘はついていないだろう。

だが、あの日から素直に柱間を信じられなくなっている自分に少し悲しくなる。柱間に対して償いたい気持ちで扉間の傍に居ることを決めたはずなのに…。そして、柱間の相変わらずの優しさが、ますます芙蓉の胸を苦しくさせた。

「……心配ありがとうございます。私はもう扉間さまのことは全く恨んでいません。扉間さまは元々とても優しい方です。それは火影様が一番ご存知でしょう?…実は、私は最近まで、私と一緒に居ることで扉間さまの人生を犠牲にしているのではないかと思っていました。ですが、扉間さまは私とずっと一緒に居たいと言って下さいました。私も、扉間さまのお傍に居たいと思っています…」

芙蓉は真つ直ぐに柱間の目を見て言った。だが、それはどこか悲しい表情だった。

柱間は芙蓉の話と表情から、裁判で自分の罪を償いたいと主張していた通り、いまでも償いの気持ちで扉間の傍に居ることに気がついた。

「本当にそれが本心か？それはただの償いの気持ちではないのか？」

芙蓉は何も言わず目を伏せる。

「遠慮しなくていい。無理もするな。頼む、お前の本当の気持ちを聞かせてくれ。」

「…甘えているんだと思います…扉間さまの優しさに。マダラさまのことは一生忘れることは出来ません。でも、その心の穴をそのままにしておけるほど、私は強くないんです…」

「…芙蓉…」

「だから無理はしていません。むしろいまの私には扉間さましか頼れる人は居ないので。」

二人に再び沈黙が訪れる。

「…分った。もし扉間と別居したくなつた時は遠慮なく言ってくれ。絶対ぞ？それまでどうか扉間のこと、よろしく頼む！」

柱間は机に頭がぶつかかるほど深く頭を下げた。

「や、やめて下さい！早く頭を挙げて下さい…困ります。」

「ハハハハ！すまん！でもお前が扉間を頼ってくれているのは本当に嬉しくてな。扉間も最近すこーしだけ角が取れたというか…きつとお前と一緒に居て幸せなのだろう。」

芙蓉は黙って少し困つたような顔で微笑み、再び視線を落とした。

「おこがましいですが…扉間さまをお支えすることが、火影様を支えることであり、そして里に役立つことだと思っています。私にはもう失うものは何もありません。でも出来る事はまだあるんじゃないかって…それが今の、私の唯一の希望なんです。」

芙蓉は自分のことを支えたいと思ってくれている。

だが、自分のことを敢えて「火影様」と呼ぶ芙蓉に、柱間の存在が芙蓉の中でこれまでももう違う存在なのだと思つた。それは里の皆が自分を呼ぶ名と全く同じものなのだ。

・・・もう家族ですら、ない、のか？・・・

そうなのはマダラの死のせいか、それとも、もつと前から既にそうだったのか。

いまそんな事を考えても、既に二人の関係は、まるで風に晒され風化した砂の城のように、いつの間にか姿を成さなくなっていた。

(20) 扉間の情愛、椿の怨嗟

八月下旬。曆の上では秋だが、今日は本当に秋が訪れたかのように涼しく、朝顔の花にも名残惜ししさを感じてしまう。

この日、芙蓉は扉間に呼び出され、火影の顔岩の隣りにある展望所に居た。湿度の高い空の夕焼けがとても美しい。

赤、橙、黄、桃、赤紫、紫、灰：雲と空が絶景を作っている。

眼下には夕陽に照らされ朱色に染まる里の風景が遥か遠くまで広がってがっている。芙蓉は柵に両手をかけ、身を乗り出して夕焼けに見惚れていた。

「芙蓉。待たせたな。」

背後から扉間の声がして振り向く。扉間は両手を後ろに回して、何か持っているようである。

「いいえ。お仕事お疲れ様でした。今日は夕焼けがとっても綺麗ですね。」

そう言つて芙蓉は片手を上げて掌を空にかざす。扉間は何も言わず芙蓉に歩み寄る。
「・・・お前のほうが、ずっと綺麗だ・・・誕生日、おめでとう・・・」

扉間は芙蓉の正面に立つと、後ろに隠していた桔梗の大きな花束を目の前に差し出し

た。

「……!!」

芙蓉は驚きと同時に、扉間の言葉に恥ずかしくなり、言葉がすぐに出てこない。

「あ、ありがとうございます……ございます……こんなに沢山の桔梗……すごく綺麗……」

芙蓉の瞳には夕陽が差し込み、キラキラと輝いている。

喜びが溢れるその瞳で、芙蓉は扉間をじつと見つめた。本当に感動しているようだった。

「……それを、摘んでいたら遅くなった……」

扉間は芙蓉の眩しい視線が恥ずかしくなり、思わず目線を逸らしてボソツと洩らした。

「え!嘘!これ、扉間さまが摘んできて下さったのですか!」

合理主義者でただでさえ多忙な扉間が、花屋ではなく、自らこれだけの量を摘み取ったことにとっても驚いた。

「嘘じゃない。俺だって手間と時間をかけることだって……ある……」

真剣な顔で芙蓉の顔を見つめてそう言う扉間を見て、芙蓉は思わず笑ってしまった。

扉間が花を摘んでいる光景を想像したら、どうしても不自然な絵で笑えてきてしまうのである。

「何がおかしいんだよー！」

「ごめんなさいいっ……いえ、本当に嘘だなんて思っていないですよ……ふふふ……。扉間さま、本当にありがとうございます。そのお気持ち、本当に、嬉しいです。」

芙蓉は笑うのを止め、姿勢を正し、桔梗の花束を抱きしめて扉間に改めて礼を言った。

……桔梗の花言葉通り、俺は、お前を永遠に愛する……

扉間は心の中でそう呟くと、芙蓉を抱きしめた。

「と、扉間さま！お花が潰れてしまいます……」

扉間は芙蓉の手からバサツと花束を取ると、それを持った手でもう一度芙蓉を抱きしめた。

芙蓉は、里の女性にはクールな面が人気の扉間に、こんなにも情熱的な面があったのかと驚いた。

誰も知らない扉間の情熱を知っていることに、芙蓉は言いようのない気持になる。

だが、その気持ちに名前をつけていいものか、今も判断をつけられないでいる。

しかし扉間が情熱的に芙蓉へ愛を表現すればするほど、芙蓉の心はその炎に焦がされ、苦く、そして甘い味が広がるのだった。

チュピチュピチュピジー……

コシアカツバメのつがいが囀りながら夕空を横切っていく。

夕陽に照らされ、白い腹が黄金に輝いている。そして扉間の銀髪の先端も同じく黄金に輝いている。

芙蓉は恐る恐る、その髪に手を伸ばしそつと撫でてみた。

すると扉間の目は細くなり、口角が少し上がる。

今の二人に、未来があるのか、そして永遠が在るのかは誰も知らないだろう。

それでも、二人で過ごす平穏な毎日と、里に降り注ぐ光に包まれて微笑み合えるこの瞬間があれば、それだけでいいのかもしれない。



「芙蓉先生、お客様がいらっしやっていますけど。椿さんとおっしゃる女性です。」

「えっ!!・・・椿さん?」

塾の授業が終わり、教員室で答案の採点をしていた芙蓉は、事務員の言葉を聞き驚いて飛び上がった。赤色鉛筆を置いて走って玄関へ向かう。

「ちよつと!芙蓉先生!廊下は走らないで下さいよー!」

事務員の言葉も聞こえない。椿の顔を早く見なくては!・・・

塾生が帰り静まり返った玄関に、見覚えのある一人の女性の背中が見えた。

「椿さんっ!!」

女性の顔を確かめる前に、その背中に向かつて大声で名前を呼んだ。

「…芙蓉さん…」

芙蓉へ振り返ったその女性は、千手の家で共に過ごした女中の椿、その人だった。

しかし、その姿は三年前に別れた当時よりも痩せてやつれているように見える。

芙蓉は椿と目が合うと、駆け寄って抱き着いた。だがすぐに体を離して椿の顔を見つめる。

「…椿さん！会いたかった!!…」

「芙蓉さん、私もずっと会いたかったわ。貴方が居なくなつて、どれだけ心配した事か…元氣そうで本当に良かった…いきなり押しかけてごめんなさいね…。」

「いいえ！会いに来てくれて本当に嬉しいわ！今どこに居るの？」

「故郷の村に帰っていたのだけれど、暮らしていくのは厳しくてね…木ノ葉の里でまたやり直そうと思つて戻つてきたの。私なんかにはもう、貴方に会う資格は無いって思つてきたけれど、やつぱりずっと貴方に会いたくて…やつと会う決心もできたの…」

椿はまだ、あの日、芙蓉を守れなかったことを自分の罪だと思つているようだった。

「…椿さんが千手家を出て行つた理由は柱間さまから聞きました。でも、私が居なくなつたのは、椿さんに責任は全くないの。誰のせいでも…無いの。ここでは詳しく話せないけど…」

椿の自責の念を払拭したいが、あれは扉間のせいだったとは口が裂けても言えない。芙蓉は俯いて困った顔をしたが、気を取り直して椿の顔を見て笑顔で話しかけようとした時。

「全て扉間さまの謀だったのでしょうか？」

椿が真顔で芙蓉の顔を見て言った。その声は冷静でとても冷たかった。

「・・・なぜ、それを・・・」

芙蓉は啞然としたが、咄嗟に辺りを見回して誰も居ないことを確認する。

誰にも聞かれてはならない話である。

「と、とにかくその話はここではできないわ。また改めて会って話しましょう？」

「そうね…私も芙蓉さんとゆっくり話したいわ。」

二人は後日改めて会う約束をした。

・・・柱間さまから聞いたのかしら？

だから家には来ずに塾に来たのかな。椿さんは扉間さまのことをどう思っているんだろう。もう解決していることをなんとか伝えないと・・・

芙蓉は動揺した思考回路を何とか回転させながら、一人街灯に照らされ歩いて行く椿の背中を見えなくなるまで見つめていた。



夕食を終え、洗い物も終えて、食卓の隣りの絨毯の上で、芙蓉は扉間と卓袱台を囲んで座っていた。外では鈴虫が鳴いており、いつもと変わらない穏やかな夜だった。

だが、芙蓉の心は穏やかではなかった。

先ほど椿に会って言われたことが気になって仕方がない。

それに、まだ扉間に今日椿が会いに来たことを言えずに居るのだ。

言うタイミングはいくらでもあったはずだが、椿が扉間の謀の事を知っているため、言つていいものか芙蓉は分からないでいた。

しかしこのまま黙っておくわけにもいかない。

「……芙蓉。何かあったのか？いつもと様子が違うが。」

「えっ！」

卓袱台に本を立てて読書していた扉間が唐突に尋ねてきた。刺繍をしていた芙蓉は驚いて手が止まる。針で指を刺さなかったのが幸いだった。

「あ、はい……実は……」

ここで嘘をついても鋭い扉間には直ぐバレるだろう。芙蓉は思い切つて伝える事にした。

「今日、椿さんが……塾に訪ねてこられたんです。」

「椿が……元気だったか？」

「少しやつれた感じでした。故郷の村で苦勞していたみたいで。…その、今もまだ私に對して自責の念を持っているみたいで…それに対してどう説明したらいいか分らなくて…」

扉間は芙蓉の言いたいこと、なぜ今まで椿のことを黙っていたのか直ぐに理解した。

「正直に言えればいい。俺のせいだと。」

「そんな!・・・」

「俺はいくら恨まれても構わない。少なくとも俺を恨めば、次第に自分自身を責める気持ちは薄まっていくだろう。お前が言えないのなら、俺から言う。」

「だ、大丈夫です…きちんとこれまでの経緯と、今の私たちのことを話せばきっと椿さんも理解してくれるはずです。私、ちゃんと冷静に話しますから…」

しかし芙蓉は、既に椿が扉間の謀を知っていることだけは言えなかった。

椿がそれを知った経緯を知らないからだ。扉間を必要以上に傷つけたくない。

「…だが、椿が俺と話したいと言ったら、俺はいつでも会って話すよと伝えてくれ。」

「…解りました。」

二人の間には重苦しい沈黙が訪れる。

憎しみも怒りも、悲しみも苦悩も、今はもう昇華したように思っていた。

しかし、それらの感情は二人だけが共有したもので無く、紛れもなく幾人もが共有

した感情であり、未だに消えることなく横たわっているのである。

◆ 二人はただ、黙ってその現実を見つめるしかなかった。

里の外れの住宅街。長屋や二階建ての集合住宅が隙間なく立ち並んでいる。

それらを貫く大通りでは、子供たちが走り回ったり、女性たちが井戸端会議をしたりしている。忍の姿は少ない。どうやら一般人中心の住宅街らしい。

芙蓉は地図を頼りにその大通りを歩いていった。

しばらく行くと、大きな一本の柳の木が見えた。その隣には、地図にある椿の住んで居るといふ土塀の長屋が建っていた。

その三号室の扉を叩く。まもなく扉が開き、笑顔の椿が顔を出した。

「芙蓉さん。こんなに遠い所までわざわざ来てくれてありがとう。さあ早く中へどうぞ。芙蓉さんの好きな蝶屋の和菓子も用意してあるのよ。」

椿はとても嬉しそうに、芙蓉の背中を押して家の中へ導いた。

家の中は狭く、入ってすぐに台所と四畳半の畳の部屋が在った。雨戸の向こう側は庭になっていゝらしい。芙蓉はその畳の部屋に通され、座布団に座った。

「狭くてごめんなさいね。でも中年女一人ならこれで充分なのよ。大家さんが良くしてくれてね……この住人も良い人ばかりで助かっているわ。」

台所でお茶と菓子を用意をしながら、椿が背中では芙蓉に弾んだ声で話しかける。

「それは良かったわ。お仕事は何かしているの？」

「ええ。この先に豪商のお屋敷があつて、そこで家政婦をやっているわ。その人たちも本当に良い人たちで仕事も楽しいの。」

芙蓉は椿の明るい様子と充実した生活ぶりに安堵した。

「……もしかしたら、扉間さまのことも別に恨んだりはないのかも……」

「椿さん。これ、うちの奥様方が作ったというお味噌です。最近人気でよく売れているんですって。」

芙蓉は手土産に持参した味噌を椿に手渡す。

「あらあら、お味噌は重かつたでしょう？ どうもありがとう。でも……芙蓉さんあなた、うちは一族と随分仲がいいのね。塾で教師までして……」

「え、ええ……うちは領地で保護して戴いた時、随分お世話になつたから……それで今でも。」
芙蓉の言葉を聞くと、椿の口角が下がり、冷たい表情になる。

仏間に逆らつて伯母の家まで行つた時ですら、椿はこんな顔はしなかつた。それどころか、優しく慰めてくれたものだった。芙蓉は腕にぞわぞわと鳥肌が立つのを感じる。「でも貴方が生きているからといって、扉間さまが貴方にした罪が消えるわけではないわ。」

「ね、ねえ……なぜ扉間さまの謀だったことを……椿さんが知っているの？誰に……聞いたの？」

扉間の謀は、柱間とマダラしか知らないはずである。

「仕事先で会ったマダラの元部下だった男性よ。私が千手家の女中で貴方の教育係だったことを話したら、貴方がいま扉間さまと一緒に住んで居る事をとても心配している彼が、その理由として扉間さまが貴方にしたことを私に教えてくれたのよ。私にどうにかしてやれないかって……」

芙蓉はマダラが部下に扉間の謀を話していたのか……てつきりマダラしか知らないものだと思っていたので驚きを隠せない。

「椿さん……心配してくれてありがとう……でも、私はもう扉間さまのことは恨んでいないの。」

芙蓉は動揺して心拍数が上がった胸をなんとか宥めながら、冷静な口調で言った。

「芙蓉さんは相変わらずお人好しね……。そこを、扉間さまに利用されているって、どうして分らないの？」

「……いいえ。利用しているのは私のほうよ。椿さん、私の話を聞いてくれますか？」

そう言つて芙蓉は、マダラとの出会いから、うちは領地での生活、木ノ葉の里での柱間・扉間・樹との生活、柱間を裏切りマダラと里を出て結婚したこと、そしてマダラの

死、裁判の事、無罪になる条件で扉間と共に暮らすことになった事、それでも里に対して罪を償うつもりでいること、そして現在の状況を丁寧の説明した。

椿は黙って頷きながら、しつかりと芙蓉の話を最後まで聞いてくれた。

「…芙蓉さん。本当に大変だったのね…。それなのに私は…貴方に何もしてあげられなかった。本当にごめんなさい。」

そう言うのと、椿の目からは涙がポロポロと落ちた。芙蓉が急いでその涙をハンカチで拭う。

「謝らないで。紆余曲折あったけれど、私はその中でも、ちゃんと自分の意思で道を選んで歩いて来たわ。だから、後悔は無いの…」

「だから扉間さまと一緒に暮らしていられるの？」

「…ええ。」

「だから…抱かれるのさえ、償いだと、厭わない？」

「えっ!?!」

「男と女、しかも貴方のことを執念とも言えるほど強い愛情をもっている扉間さまと、一緒に居て何も無い方がおかしいでしょう？一緒に居るといふことはそう言うことよね。」

「……………」

芙蓉は何も言えず、顔を真っ赤にして俯き、目を泳がせている。

「そんなことで兄の柱間さまに償っているつもりならお止めなさい。そんなもの、償いでも何でもないわ。ただ自分を犠牲にしているだけよ。」

「そうかもしれない……けど私自身、扉間さまと一緒に居ると……心の穴が埋まってゆく気がするの……だから、私も扉間さまのことを……利用しているのよ。」

震えた声で、自分の心の声だけにしておきたかった言葉で、芙蓉が仕方なく答える。

「そんなの、心の穴がますます大きくなるだけじゃない。違うかしら？」

「違うわ……私……私……私、たぶん、扉間さまのことが好きなの。マダラさまのことは一生忘れる事は出来ないし、マダラさま以上に誰かを愛することなんて出来ない！でも、たぶん、この気持ちは嘘じゃないの……伝えることなんて出来ないけど……」

「違う。償っている自己満足と一瞬の快樂に、そう錯覚しているだけに過ぎないわ。」

芙蓉は椿の顔を見つめたまま、何も言えない。

言い返したい言葉は沢山あるはずなのに、どう言葉にしているのか分からない。

それは、椿が言っていることは、まさに確信をついているからだった。

……でも……

芙蓉が言葉にしようとした瞬間、椿が芙蓉を抱きしめた。

「私は貴方を責めたいんじゃないの。扉間が許せないのよ。そして、貴方を救いたい

の。」

「……」

「扉間のしたことを公にしましょう。そうすれば、貴方は自由になれる。」

その椿の言葉に、芙蓉は椿の腕を急いで外し、体を離れた。

「やめて！もういいの！椿さんの気持ちは嬉しい。でも、私は自分のこと不幸だなんて思っていない。ううん。幸せよ。だからお願い！もう扉間さまを責めないで。それに、扉間さまはこの里にとつて無くてはならない人なの！どうか、そつとしておいて……お願いよ。」

椿はフウと溜息をついて目を閉じた。そしてまた芙蓉の方を見つめる。

「……私は貴方を自分の娘だと思ってる。心から愛しているわ。だから扉間のことは許せない。でも貴方がそこまで言うなら、解った。でも逃げたくなつたらいつでも私の所へ来て。今なら私は……貴方を救える。」

「椿さん……ありがとう。私のことを考えて扉間さまに対して怒ってくれて凄く嬉しかった。でも私の思うようにさせて。お願い……」

「解ったわ……貴方を信じる。……ねえ、また家に遊びに来てくれる？」

「ええ、もちろん。喜んで！」

ようやく椿と芙蓉は、互いの手を握って微笑みあつた。

言葉は無くても伝わることは多くあるが、やはり言葉に出して伝えあうことは大切である。そして、本気で自分のことを叱ってくれる存在の有難さを知る。

芙蓉はいま、椿と母と娘になれた気がして心が温かくなった。

◆

ガツシャ——ンツ!!!

マダラは、瞳に写輪眼が転写され茫然と壁に立つ中年女性の足元に向かって、思いつきり盃を投げつけた。

「芙蓉……お前……やっぱ扉間のことを……何故だ!? 絶対に許さんぞ!」
マダラの瞳には万華鏡写輪眼が浮かび、怒りの炎で燃え上がっていた。

◆

芙蓉の目の前に、初秋の青い空が遙か遠くまで広がっている。また、秋が廻って来た。果てしない青に、終わらない悲しみを重ねる。芙蓉は胸が締め付けられた。

芙蓉は昨日の椿との会話と、その会話を伝えた扉間の言葉、その両方を何度も思い出しては自分自身に切々と説明を重ね続けている。

あの後、椿が扉間の謀を知っていてそれを公にしようとしていたことを扉間に伝え

た。

扉間は覚悟していたようで、表情も変えずにその話を聞いていた。そして、椿がそうしたいのなら、自分の罪が公にされても構わないと言った。

そんな扉間を見て、失権するどころか罪に問われる覚悟で償おうとしていることに、芙蓉はますます苦しい気持ちになった。

公にする事は芙蓉が望んでいることでは無いと椿に伝え、きちんと理解してもらったことも扉間に伝えた。しかし扉間は喜ぶわけでもなく、戸惑うわけでもなかった。

ただ真つ直ぐ芙蓉と向かい合って、言った。

「俺はお前が俺を許しているからといって、俺の罪が消えたとは思っていない。

火影の右腕だからといって免責されようとも思っていない。

罪に問われれば、その罰を受ける覚悟をしている。」

マダラのことは今でも悲しい。しかし・・・

いま、一人の男に必要とされ、守られている平穏な生活がある。

心から信頼できる親友が居て、母親と呼べる人とも再会できた。

そして自分の夢だった大好きな教師の仕事をし、多くの子供たちに生きる力を貰いながら微力でも木ノ葉の里に役立っている現実がある。

・・・私は確かに、いま幸せだ・・・

芙蓉はそつと目を閉じて考える。

・・・勇気が欲しい。現実(いま)だけを信じられる勇気が・・・

もう自分には何も失うものは無いと思つていたはずなのに、気づけば失いたくないものが、一日、一日と、増えていたことに気が付いた。

芙蓉は石垣から降り、秋桜の咲く坂を上つていく。

今年の春。ここには確か、桃の花とレンギョウが咲いていた。

あのマダラが死んだ初冬の日から季節は巡り、景色が変わると伴に、季節はいつしか芙蓉の心の色をも塗り替え変化させていた。



「矢車菊ね。でもこれは初夏の花のはずだけど、九月に咲く種類もあるのかしら?」

「へへっ! 違うよ。俺の医療忍術で乾燥花の矢車菊を蘇らせたのさ。先生この花好きだろ?」

「うん。大好き! ありがとう…カガミ君。」

芙蓉は目を細め、弓矢の羽のような花びらをそつと指で揺らす。

その花びらの海のような深い青は、マダラと見たあの海の色、そのものだった。

青い矢車菊を顔に近づけ愁いを含んだ微笑みで見つめる芙蓉の横顔は、まるで絵画の様な美しい光景で、カガミは思わず見惚れていた。

「……先生？先生？……大丈夫？」

「あつ、うん！……医療忍術ってこんな事にも使えるなんて、なんだかロマンチックだね！」
戦場でいかに迅速に、最小限のチャクラで効率よく自分と味方の回復をし戦闘を続けるか。医療忍術はそれが一番の目的なのだが、芙蓉にかかると忍術までも甘美なものに変わってしまうようだ。

カガミは芙蓉らしい発想の言葉に胸が温まる。

「……やっぱり俺、芙蓉先生のこと大好きだ……」

「カガミ君。このお花、先生の大切な人にもあげてもいいかな？」

「大切な……人？だ、誰？」

カガミは温まった心の隅が急に冷たくなるのを感じる。

「うん。先生のお母さん。みたいな人……最近ね、ようやく再会できたの！」

「そ、そーなんだ！良かったな先生!!もちろんいいぜ！何ならもつと沢山作ってこようか？アハハハ……」

カガミは自分の疑いを誤魔化すように笑いながら言った。

「ありがとう。これだけあれば二人で分けるには充分よ。嬉しいわ。」

満面の笑顔がカガミに向けられる。

芙蓉の笑顔。それは何よりカガミが望んでいるものだ。

カガミの心は再び温まり、熱を上げる。

「先生をもつと笑顔にしたい。その為に俺、絶対早く上忍になる! . . .」
それから暫く、二人は矢車菊を見ながら笑顔で話し続けた。

芙蓉は、わら半紙で包み赤い紐で飾り付けした矢車菊の花束を持った反対側の手で、椿の家の扉を叩いた。

「芙蓉さん! 来てくれたの? 嬉しいわ。さあ、中に入って! 最近朝晩は急に涼しくなつたわね。寒く無かつた?」

「ええ、大丈夫よ。椿さんこれ、私の教え子が医療忍術で再生させた矢車菊なの。綺麗でしょう? お裾分けだけど、どうぞ。」

「まあ! 綺麗! 秋に矢車菊を見るのもなんだか乙ね。ありがとう!」

二人は四畳半の畳の上で卓袱台を囲んで談笑し始めた。

芙蓉はカガミの話、うちは私塾での話を、そして椿は働き先の商人の屋敷での話など、女二人でも充分に話は盛り上がり途切れない。

まるで昔に戻ったかのように、そして本当の母娘のように。

「. . .そろそろ帰らないと。また来ますね。」

「あら. . .もつとゆつくり話したいわ。良かったら今度、泊りに来てくれないかしら?」

「お泊り……うん、私も泊りに来たいけれど、扉間さまに聞いてみないと……」

「確かにそうね。でも、いくら自分が見張られている立場だとはいえ、きちんと自分の希望や言いたい事は伝えなくては駄目ですよ。卑屈になるのは絶対に駄目。」

「う、うん……解ってる。対等、よね？」

「そう、対等よ！忘れないでね。」

扉間と対等で在ること。

それは椿が芙蓉と扉間の関係を認めてから、芙蓉へ何度も言っていることである。椿にとってそれが扉間のことを認める条件のようでもあった。

まだ時刻は十七時だが、太陽は山の派に隠れ、もう随分と薄暗くなっていた。

芙蓉は早足で家路を急ぐ。

「芙蓉。迎えに来たぞ」

すると目の前に、扉間が飛雷神の術で現れた。

芙蓉の左手のマーキングは勿論、消されてなどいない。

「扉間さま……わざわざありがとうございます。」

二人は穏やかな笑顔を向け合う。そして扉間が芙蓉に歩み寄り、肩を抱いて空を見上げる。

「日が暮れるのが早くなつたなあ……」

芙蓉も一緒に空を見上げる。

「あ、流れ星！」

「お！本当だ。俺も見えたぞ。」

「何か、お願いしました？私はそんな暇なかつたです……」

「俊敏性なら俺の右に出る者はいない。出来ないわけないだろ。」

「そうなんですね！凄いで、なんてお願いしたんですか？」

「もちろん、木ノ葉の里が永遠に続きますように。だ。それと……」

「え！二つもお願い出来たんですか！」

「当たり前だ。それと……それと、芙蓉とずっと一緒に居られますように。だ……」

照れてそっぽを向いた扉間の顔を、芙蓉が笑顔で覗き込む。

「どちらも必ず叶います！」

その言葉に扉間が素早く芙蓉の方を向き、目を見開く。

芙蓉は笑顔でその瞳を真っすぐに見つめる。

「そうか……そうだな！」

そう言つて扉間は芙蓉を抱きしめた。

芙蓉と一緒に居られるようになってからというもの、扉間の心の表面は潤っていた。

乾きかける間もなく、芙蓉の存在に、芙蓉の笑顔に、裸の芙蓉を抱くたびに、その水は心の奥まで沁みて、潤っていった。

だが、心の一番奥底にある砂漠はいつも潤うことを戸惑っていた。恐れていた。しかし今、その一番底に、雫が落ちた。

落ち始めた雫はもう、二度と止めることは出来ない。

また一つ、流れ星が二人の頭上を音も無く通り過ぎ、消えていった。

(21) 帰り道を失くして

「でも…椿さんの所だとはいえ、樹ちゃん以外のお家にお泊りするなんて、緊張します。」
「じゃあやめとくか？」

「え！行きますよ！行きますよ！」

扉間が玄関の柱に手を着いてハハハと笑う。

それに合わせたかのように、紅葉したハナミズキの葉がそよ風で左右に揺れている。
「では行つてきます。明日の昼前には必ず帰りますので。」

「ああ。ゆっくりして来い。道中気を付けてな。」

一週間前、芙蓉は椿に家に泊りに来るよう誘われ、ようやく今日一泊することになった。

扉間は門の所まで一緒に出て芙蓉を見送った。芙蓉は何度か振り返りながら手を振り、坂を下りるとその姿は見えなくなった。

「…遠くの空が怪しいな。降らないと良いが…降りだしたら迎えに行くか。」
坂の向こうの空に、暗く分厚い雲の塊が見えていた。

コンコンコン。「椿さんこんにちはい！」

芙蓉がいつもの様に椿の家の扉を叩く。

が、返事が無い。

買い物物でも行つてまだ帰っていないのだろうか。家の前で待つことにした。

ポツツ。

三十分ほど経った頃、芙蓉の頭上に冷たいものが落ちてきた。見上げると暗い雲の塊が空を覆っている。

傘を持たずに来てしまった。そして長屋に廂（ひさし）は無い。

ポツポツポツ……ザ……

みるみるうちに雨脚が強くなる。目の前の大通りを歩く人たちが荷物を頭に載せたり、着物で頭を覆いながら走つて行く。芙蓉は椿も雨に濡れていないかと心配になる。

行き場が無く、思わず後ずさると芙蓉の踵が扉に当たり、ガラツと音がした。見ると扉が少しだけ開いていた。扉には鍵がかかっているようだ。

芙蓉は後ろめたさを感じながらも、仕方なく椿の家の中で待たせてもらうことにした。

「お邪魔します……」

家に入るとまず玄関で靴からハンカチを取り出し、濡れた服を拭いた。

そして四畳半の部屋へ入ろうと振り返った。

「……!!!」

半分開いた障子戸の向こうから、女の足と思われるものが覗いている。

まさか、椿さんに何かあつたんじや! ……

芙蓉は障子戸を思いっきり開いた。

そこは、血の海だった。

その血の上には、椿がうつ伏せに横たわっていて、動かない。

芙蓉は言葉が出ない。恐怖とショックで体は動かず、足が震える。そして目の前がぐらぐらとして、涙でぼやけてきて今にも気を失ってしまいそうになる。

ついに立っていられなくなり、その場にへたり込む。

「死体を見るのは初めてですか? 芙蓉さん。」

「?!」

いつの間にか、先ほどまで居なかった男が二人、椿の遺体の隣りに立っていた。

どうやら格好からして忍のようだ。一人は背が高く大柄で、もう一人はそれより背の低い痩せた男だった。二人とも頭と顔を隠していて目しか分からない。

「貴方を迎えに来ました。一緒に来てもらいます。」

「……?!」

「大丈夫です。貴方を待っている方は、貴方が良く知っている方ですよ。」

「・・・だつ、誰^{!!}そ、それに・・・つ、椿さんは、あなたたちがやったの^{!!}」

「彼女には貴方をおびき寄せせる為にこれまで長い間働いてもらいましたが、もう用が済みましたのでね。」

「な、なぜそんなことをつ・・・!」

「さあそれは知りません。ワダチという方の指示です。貴方のご主人でしよう?」

「ワダチ?…し、知りません!そんな人!」

芙蓉はとにかく逃げなくてはと思い、玄関に向かおうとした。

すると目の前に大柄の男が立ちはだかる。

「自分の主人をしらばくれるとは、確かに不貞をする女だけはある。」

芙蓉には全く何のことか分からない。言葉を発する前にその男は芙蓉を抱きかかえた。

大声で助けを呼びたいが、恐怖で声が出ない。

男が片手で印を結ぶと、芙蓉は即座に意識を失った。

・・・私は死んだの?・・・

しかし、徐々に鮮明になる意識で自分が誰かの腕の中に居ることに気が付き、その体

温でまだ自分は生きていると判った。

恐る恐る、ゆつくりと瞼を開いてみる。

「久しぶりだな・・・芙蓉。」

「・・・」

目の前にあるのは、忘れたくても忘れられない顔だった。

やはり、自分は死んでいるようだった。

「状況が飲み込めないようだな。俺は死んでいない。お前もな。ここは檜枝岐神社だ。」

芙蓉は目線だけを動かして周りの景色を確かめる。確かに見覚えのある内装だった。

だが、神社はあの時に破壊されていたはずだが…。

芙蓉は不審そうな顔を向けて言う。

「・・・本当に、マダラ・・・さま・・・?」

「ああそうだ。・・・ここは、柱間が修復したようだがな。」

マダラは天井を見上げながら説明を付け加えた。

そして再び芙蓉の顔を見つめる。しかし、それはどこか冷たい眼差しだった。

芙蓉はおもむろに左手を伸ばし、マダラの頬に触れようとした。

その手が頬に触れそうになった寸前で、マダラがその手首を掴んで制止した。そして

芙蓉を床に降ろして座らせると自分は立ち上がり、芙蓉の数歩前に出て胡坐をかい

座った。

マダラはフードの付いた黒く長いマントを身に纏っている。戦闘に行く際の赤い甲冑は身に着けていないようだった。

「随分と楽しくやっているようだな。」

沈黙を破ったのはマダラだった。

「……」

どうして生きているのか、生きていたのならなぜ早く現れなかったのか。

どれだけ自分が辛く悲しい思いをしたか、でも会えて嬉しい……

訊きたいこと、言いたいことは沢山あるのにまだ動揺が収まらず、芙蓉はそれを言葉に出来ないでいた。

「扉間との生活は、そんなに幸せか？」

「……」

芙蓉は心臓が止まりそうになった。マダラは今の自分の生活について知っているのか。

荒くなる呼吸で肩を上下させながら芙蓉は俯いた。

「俺はお前に、必ず戻ると言ったのを覚えているか？俺が例え柱間に敗れても復活するのは予定通りだった。なのにお前は、本当に俺が死んだと思っていたようだな。」

・・・あの遺骸は、何かの忍術だったのね・・・

芙蓉は顔を上げて、マダラを真つすぐ見据えた。冷たい現実が、芙蓉に冷静さを取り戻させていた。

恐ろしいほどに脈がゆっくりになっていく。

「マダラさま、本当にご無事で良かったです。私、貴方を信じられなくて、ごめ・・・」
「おい。お前は誰のものだ？」

マダラが芙蓉の言葉を遮り、問う。

「・・・」

「答えられないのか？」

芙蓉は眉を寄せ、俯いたまま答えない。

マダラは立ち上がると腰に差していた刀を抜き、芙蓉に歩み寄った。

そして、その刀を芙蓉の咽喉元に静かに、しかし威圧的に突きつけた。

だが芙蓉はそれに動じることなく、強い眼差しでマダラを見上げた。

「貴方が生きていると知らなかったとはいえ、私は夫婦の契りを破りました。もう貴方の妻である資格はありません。」

二人の視線が静かに、しかし激しくぶつかり合う。

「お前が愛しているのは、誰だ？」

「・・・マダラさまです。」

「ならば俺の前に、跪け。」

しかし芙蓉はマダラと視線を合わせたまま、ぴくりとも動こうとしない。

・・・愛の前に跪くのか、契約の前に跪くのか、それとも・・・

すると芙蓉の咽喉元に突きつけられた刀がギリりと光り、刃を返した。

「今お前が選べるのは、跪くか、死か、二つに一つだ。さあ早く選べ。」

「どちらも選べません。」

「は？」

「私は木ノ葉の里に帰ります。」

「お前、今の自分の状況分かってるか？」

相変わらずの天然ぶりに、不覚にもマダラは少し気が抜ける。

「私がここで死んでも、扉間さまが術で私の死体を見つけて里に持ち帰るでしょう。貴方に着いて行つたとしても、私は隙を見て必ず里に帰ります。」

ハア——・・・

マダラは大きな溜息を吐き、刀を鞘に収めて芙蓉の前にしゃがみ込む。

「扉間のマーキングはとつくの昔に消した。それにお前は俺からは逃げられない。・・・

もういい！黙って付いて来い。いや、連れて行く！」

「一緒に行くことは出来ません。私はもう、木ノ葉の里で、木ノ葉の里の為に生きると決めたのです。」

マダラは再び強い怒りが込み上げ、芙蓉の顎を乱暴に掴んで自分の顔に引き寄せた。

「勘違いするな。お前を幸せにできるのはこの世で俺、一人だけだ。そして、お前を不幸にできるのもなあ!!」

そう言うのと芙蓉を乱暴に押し倒し、覆いかぶさる。

「嫌っ!」

芙蓉の合わせ襟の胸元を強引に開くと、白い胸が露になる。

腰ひもを解き、巻きスカートを剥ぎ取る。

「俺以外の男、しかも扉間に抱かれているなんて、正直今すぐ殺してやりたいくらいだぜ。」

怒りに震え写輪眼が浮かぶマダラの瞳を見て、芙蓉は禁固呪の札で殺されそうになったあの瞬間を思い出した。全身の血液が凍っていくようだった。

目の前に居る男は、本当に自分があればどこまでに愛した男なのか。

芙蓉はそれを確かめようと再びマダラの頬に触れようとしたが、その手は直ぐに床に抑えつけられた。

「マダラさま……マダラさまは私のことを愛してくれているのですか?」

「そんなことはもう、どうでもいい。お前は俺のもの。ただそれだけだ。」

そう言うのと芙蓉の口を塞ぐように強引に口づけをした。長い間、強引に唇をむさぼられ、息つく暇さえなかった。

そしてようやくマダラが唇を離れた瞬間、芙蓉の口から言葉が飛び出す。

「私はっ、私は…今でもマダラさまを愛しています。でも、もう貴方と共に同じ道を歩くことは出来ません。」

「…なぜだ。」

「私は、マダラさまが創った、マダラさまが名付けた、あの里を守りたいから。…ただけど、貴方はあの里を否定する…そして全てを無にする事を夢と言う…」

「それはもう俺を愛していないという意味だな。俺はもう昔の俺じゃない。この先の夢にこそ、真の平和があると信じている。」

そして、二人の間に沈黙が訪れる。

部屋の空気がとても重く、更に冷たくなってゆくように感じる。

真っ直ぐ芙蓉を見つめるマダラの視線と彷徨う芙蓉の視線が再びぶつかると、もう一度見つめ合い、互いの瞳の中にある悲しみを見つけた。

「…その夢が実現したら、本当にマダラさまは独りになってしまいますよ?…」

小さく震える声で芙蓉が言った。

「それはそこに、お前も居ないということか？」

芙蓉は、かつてマダラがたった一人で全ての事を成そうとし、孤立していた姿を見てきた。

しかし、柱間と手を取り合った時、木ノ葉の里が生まれた。

それからマダラは多くの仲間と共に手を取り合った。

マダラが誰かと協力すれば、不可能だと言われていたことでも実現できるのだと、マダラ自身がそれを証明したことを芙蓉は知っている。

芙蓉の中のマダラへの愛情とも同情とも区別のつかない感情が、消せない希望の火を興し、マダラを独りにさせることを躊躇させた。

しかし芙蓉は、マダラが里を襲い死んだ時から、マダラの罪を自分の罪として、一生償って生きていくと心に固く決めていた。

償うこと、それがマダラへの愛を貫くことだと思っていたからだ。

マダラが生きていたからといって、今更マダラに着いて行くことなど、出来ない。

マダラのことは愛している。

だが、もうマダラの『先の夢』を受け入れる事など決して出来ない。

木ノ葉の里を、人を、守りたいから。

『そこに、お前も居ないということか』

答えは「はい」か、「いいえ」か。

いくら里に帰ると息巻いてみても、マダラの前では非力すぎる芙蓉にとつて、選択肢はマダラと共に行くか、ここで死ぬか、やはり二つに一つしかないのだ。とにかく、もう、芙蓉は里への帰り道を無くしてしまっていた。



雨上がりの朝、忍たちが慌ただしくその家を出入りしている。

柱間と扉間が現れると、忍たちは立ち止まり頭を下げ、道を開ける。

「・・・間違いない。椿だ。」

「ああ。」

二人は四畳半の部屋にうつ伏せて横たわる椿の遺体を確認すると顔を見合わせた。

つい三十分ほど前、柱間と扉間へ、長屋で中年女性の死体が見つかったという連絡が入った。

発展途上の木ノ葉の里では人口増加に伴い犯罪は増えていたが、殺人事件はまず起こらなかった。しかも、忍による一般市民の殺人とあつて二人にもすぐ連絡が入ったのだ。

扉間は、事件場所を聞いて血の気が引いた。

芙蓉の安否を確かめる為に直ぐ飛雷神の術で芙蓉の元へ飛ばうとしたが、飛べなかった。

その事が事態の深刻さを示していた。

ただ、死んでもマーキングは決して消えない。

扉間のマーキングを解除できるほどの忍が存在しているかもしれない事が、一番深刻な問題だった。

しかしわざわざマーキングを解除して芙蓉を殺し、死体を持ち去るとは考えにくい。状況からして、芙蓉は椿を殺した忍に誘拐された可能性が高かった。

「火影様、扉間様、このハンカチがここに落ちていました。死亡した被害者の物では無いようですが。」

警務部の忍が遺留品のハンカチを持ってきて、玄閔の場所を指さしながら見せた。

「兄者、これは芙蓉のハンカチだ。間違いない。」

「ああ。芙蓉の気配も残っているな……」

扉間はその場にしゃがんで目を閉じ、畳に指を着いて感知を始めた。

「チャクラの残骸を三つ感じる。一つは椿だ。あと二つは……男……千手でもうちはでもない。里に居る一族のチャクラとも違う……他国から来たのか……。?!……こいつら……まだ里の近くに居る!!」

「どっちの方向ぞ！直ぐに向かうぞ！」

「ここら4く5kmほど十時の方向：千手領地と里との境界線辺りだ。動きはない。」
「千手温泉の辺りか？」

「ああ。おそらく温泉街のどこかに居るな。」

二人は再び顔を見合わせる。

「俺がまず感知で追尾する。居場所が判り次第戻つて来る。」

「相手はお前のマーキングを消すほどの力の持ち主かもしれぬ。油断するなよ。」
扉間が飛ぼうとした時だった。

「扉間様！」

カガミとヒルゼン、そしてダンゾウの三人が駆けつけてきた。

忍による殺人事件は中忍以上に知らされ、里の警備が始まっていた。

カガミの目に、扉間の手に握られたハンカチが飛び込んだ。

忘れられない柄だった。

町で同じ撫子柄を見かけると、いつも目で追ってしまったほどに：

「ふ……芙蓉先生っ!!!」

カガミが扉間と柱間の前をすり抜けて、四畳半の部屋に走って入った。

「!!!」

血の海の上にうつ伏せに横たわる女の死体。動揺して目の前が揺らぐカガミには、それが芙蓉の姿に見えた。

「芙蓉先生え——っ!!!」

「落ちて着けカガミ!それは芙蓉じゃない!!」

死体に掴みかかろうとしたカガミを扉間が直ぐに止めた。

震えながらゆっくりと扉間のほうを振り返ったカガミの目を見て、扉間と柱間は驚いた。

「カガミ……お前、今、写輪眼を開眼したのか!」

「扉間様……芙蓉先生は?先生はどうしたんだよ!!」

そう叫ぶと写輪眼の巴が複雑に、そして鮮明になつてゆく。

「芙蓉は誘拐された可能性が高い。これからそれを俺が確かめに行くところだ。貴様も付いて来い。その写輪眼、さっそく芙蓉の為に使え。」

「……はい!」

「お、おい:今開眼したばかりで大丈夫か?それに、相手はお前のマーキングを消せるほどの忍かもしれぬのだぞ!」

柱間が焦つて二人に意見した。ヒルゼンとダンゾウも心配そうに顔を見合わせている。

「カガミには俺の感知を教えてきた。今や上忍に勝る能力だ。それにカガミは芙蓉の気配をうちは一族の中で一番知っている。それに加え写輪眼の能力を使えば芙蓉の搜索に役に立つ。カガミだから連れて行くのだ。」

「火影様、任せて下さい。写輪眼の使い方や能力はしっかり学んでいます。芙蓉先生の為に直ぐに役立ててみせます！」

柱間と三人で作戦を立て直し、扉間とカガミは二人で先遣の偵察に行くことになった。

「カガミ。お前が芙蓉のことを心から慕っているのは知っている。だがこれは任務だ。どんな場面でも感情的になるな。感情の乱れは危機を招くという基本を忘れるな。」

「はいー！」

・・・先生。俺が必ず助けるから待っていてくれ！・・・

◆ 「確かにここに居ますね。」

カガミと扉間は千手領地の温泉街にある旅館を離れた建物の影から気配を消して見ている。

椿を殺し、芙蓉を誘拐したと思われる男二人は直ぐに見つかつた。

「芙蓉の気配はしないな。どうだ？ 貴様は何か感じるか？」

「いいえ。俺にも先生の気配は全く感じません。」

「こやつら、確かに手練れの忍のようだが、俺のマーキングを消せるほどの能力があるとは思えない：写輪眼でチャクラの流れを見てみないことには分らん。よし、行くぞ。」二人は温泉街の人混みに紛れながら、旅館に入っていた。あつという間に廊下をすり抜け、男二人が居る部屋の襖の前に立っていた。

扉間はカガミに目で合図する。カガミは頷き、静かに写輪眼を発動させると、襖の間から部屋の中を見た。

そこには、大の字になっていびきをかく大柄の男と、横向きに丸くなる痩せた男が布団の上で寝ていた。芙蓉の姿は無い。

カガミは写輪眼で男二人のチャクラの流れを観察した。

チャクラに乱れない。大柄の男は水、痩せた男は風の性質のチャクラだ。チャクラの最大量が量れる心臓を見てみると、確かに木ノ葉の里の上忍レベルの強い忍であるようだ、扉間には遙か及ばない。

今度は部屋の中を見回してみる。すると、さつき四畳半の畳の上に広がっていた血と同じ血が付いたまま鞘に収まる刀があった。椿を殺したのは間違いないこの男たちだろう。

カガミは扉間の方を向き、目を見て頷いた。扉間も頷き、カガミの右腕に触れると二

人の姿は消えた。

スッ・・・

火影室の机に座る柱間の目の前に、扉間とカガミが戻ってきた。

「どうであつた?! 芙蓉は居たか?!」

柱間は二人の姿が鮮明になる前に立ち上がり、その勢いで椅子が後ろに倒れる。

「落ち着け兄者。男二人は見つけた。カガミ、写輪眼で見分つたことを報告しろ。」

「芙蓉先生は居ませんでした。大柄の男は水性質、痩せ型の男は風性質の忍です。能力は上忍レベルです。男二人が椿さんを殺したことは間違いないようです。椿さんの血が付いた刀を持っていました。幻術にかけられている様子はありませんでした。」

「そうか…ならば呪印専門の術をもっているやもしれぬな。そのような一族は…」

「呪印に特化した一族はいくつか知っているが、俺のマーキングを消せるほどの術をもった一族は居るはずがない…だが、俺たちが知らぬ所でそこまでの術を開発していたのかもしれない。」

「だが、それなら目的はなんぞ? 芙蓉を誘拐する為だけとは考えにくいが…」

「敵の狙いは扉間様の飛雷神の術を分析することなのではないでしょうか? それで芙蓉先生に付けられたマーキングを目当てに、誘拐した…」

「確かに…マーキングを付けられているのが公になっているのは、芙蓉一人ぞ…」

扉間はそう言うのと机に手を突き、俯いた。

「やはり、芙蓉はマーキングを追跡できない強力な結界の中に居るか、それとも既にマーキングが外されているかどちらかだな。」

扉間は腕を組み、目を閉じて言った。

・・・マーキングが外されたあとの芙蓉は・・・

扉間と柱間が黙り込む様子を見て、カガミが声を上げる。

「とにかく！一刻も早く男二人を拘束し、知っている事を全て吐かせましょう！」

「そうだな！よし、扉間、三人で行くぞ！」

「ああ！必ず吐かせてやる！」

カガミの声に二人は我に返った。冷静な分析の結果の中には、希望もあるのだ。

扉間はカガミと扉間の方に手を置き、再び男二人の元へ飛んだ。



「わあああーっ!!」

男二人はさつきまで旅館の部屋で熟睡していたはずが、叫び声を出して気が付けば森の中で木に縛り付けられていた。

そして目の前には、火影とその弟と、見知らぬ少年が立っている。

「……、これはこれは……火影様と扉間様ではないですか。お偉いお二人が私たちに何の

用ですか？」

痩せた男のほうが、明らかに動揺した様子で言った。

「身に覚えは無いとは言わせぬぞ。椿を殺したのはお前たちだな。芙蓉の身柄はどうした？」

柱間が男二人に近づいて問う。

「こちらにも依頼でしてね……そう簡単に口を割るわけにはいかないですよ。どんなに拷問しても無駄ですよ。貴方には遠く及ばぬとはいえ、私たちも一流の忍です。幻術にかけても絶対に吐きはしませんよ……フフ。」

「フン……アンタたちだつて依頼や任務だつたら人くらい殺すだろう……」

男二人は絶対に何も言わないという自信をもって不敵な笑みを浮かべている。

「この眼を見てもそう言えるか？」

カガミは柱間の隣りに立ち、写輪眼を発動させて男二人を睨みつけた。

「それは……写輪眼か。だがガキの……」

痩せた男がしゃべり終わる前にカガミは男二人に瞳術をかけた。二人の動きが止まる。

「まず痩せた男のほうの記憶から見ていきます。」

「ああ！頼む！」

カガミは目を凝らし、痩せた男の瞳の奥を見つめると、徐々にカガミの頭の中に男の記憶の画像が映し出されてきた。遡れるところまで遡る。

「椿さんが痩せてる男に風遁の術で拘束され、刀で刺されて倒れました。椿さんは男たちとは面識が無かったようで、いきなり襲われています…。芙蓉先生が家に入つて来て椿さんを発見し、そこに二人が現れ、大柄の男の方が先生を抱きかかえて眠らせました…。?!…温泉街の影で黒いマントの面をした男に先生を渡し、金銭を受け取りました。その男の名前は…ワダチです！……」

カガミはそこまで言うのと、ガクつとその場に片膝を付いてしゃがみこんだ。

「大丈夫か。よく頑張ったな…」

扉間がそう言つてカガミを後ろから支えた。

「大丈夫です！まだ、いけます…。」

「いや、無理をするでない。それより奴らにまだ瞳術にかけておいてくれ。『ワダチ』…扉間、お前聞き覚えはあるか？」

「いや聞いたことが無い。だが、忍ならばなぜ自分で芙蓉を誘拐しないのだ。わざわざここいつらを雇つて、どういうつもりだ。」

「おそらくワダチという名も偽名だろう。自ら動いて里に気づかれ、素性を探られるのを避けたのだろうな。とにかく、そのワダチという男を探すぞ！」

「その為にはもつと情報が必要だ．．．あれを使う。」

扉間はそう言つて木と写輪眼の幻術に縛られて茫然としている男二人を、これまでにない冷たい目で見た。

「まさか．．．穢土転生か！だがその術は．．．」

「こういう時の為に開発したのだ。今使わないでどうする。」

「．．．えどてんせい？」

「貴様はもう幻術を解いて構わん。これから先は俺がやる。」

「は、はい．．．」

扉間はカガミから手を離し、立ち上がると男たちに近寄つて行つた。

「待て扉間！うちはの上忍を連れて来て続きの記憶を見ればよいではないか！その間に俺たちでワダチと芙蓉の搜索を．．．」

「黙れ!!そんな時間は無い！兄者は本当に甘すぎる。今の状況をよく考えろ。」

怒りのチャクラのこもつた言葉にカガミがビクツとする。扉間は本気で怒っている。

．．．グサツ!!

扉間は腰の刀を抜き、無言で痩せた男の心臓を躊躇なく突き刺した。

幻術を解かれた大柄の男が、その様子を隣りで見て動揺している。

扉間は男の首に手を当て絶命したのを確かめると、今度は大柄の男へ歩み寄つた。

「俺たちを殺したとて、情報は手に入らんぞ！」

男の言葉を無視し、扉間は素早く両手で印を結ぶ。

「穢土転生の術!!」

「ぐあああああ……」

男の身体に無数の塵が集まって張り付いてゆく。それに比例して男の呻き声が薄れてゆく。

「火影様……穢土転生とはいったい……?」

後ろに下がって扉間の術を見守るカガミが隣の柱間に問う。

「……見ていれば解る。あまり良い術ではないがな……」

火影が「良い術ではない」と苦言を呈するとは、いったいどんな術なのか……。

塵に全て覆われた男の身体が縮んでゆく。すると、徐々にその塵の表面に先ほど殺された痩せた男の姿が浮かび上がってきた。暫くすると、大柄の男の姿は完全に痩せた男の姿と入れ替わってしまった。だが、その目だけは黒く濁っている。

「……!!」

カガミは驚いて言葉も出ない。

そして扉間は、術札の付いたクナイを取り出し、その男の後頭部に突き刺した。

「さあ、知っている事を全て吐いてもらうぞ。」

「い、いったい何が起きたのですか!」

「穢土転生。見た通り、生きている人間を生贄に、死んだ人間を蘇らせる術だ。そして術札によってその人格を縛り、完全な操り人形と化し情報を聞き出す……それが扉間の言う、穢土転生という禁術だ。まあ他にも使い方はあるようだが……」

柱間は少しだけ呆れたような、諦めたような口調でカガミに言った。

「ワダチとは何者だ?何を頼まれた?年はどれくらいだ?」

扉間が穢土転生で蘇った男に問うと、男は素直に話し始めた。

「……雲の国の忍だと聞いた。いつも面をしていて顔は知らない。声からして三十代くらいだと思う。妻の芙蓉が木ノ葉の里に逃げ、不貞をしているから連れ戻すように頼まれた。闇商売をしている事情で自分では動けないからと。ワダチに操られた椿は芙蓉をおびき出す役で、芙蓉が来ることを確認したら口封じと芙蓉を動揺させる為に殺し、芙蓉を連れ去る計画だった……」

「不貞の相手は聞いたか?俺のマーキングが芙蓉に付いていることを、お前たちは知っていたのか?」

「……不貞の相手は知らない。マーキングのことも知らない……」

それを聞いて扉間が柱間の方に振り返る。

「やはりワダチという男の狙いは、芙蓉か……」

柱間が顔を歪めて目を伏せる。扉間はまた質問を続ける。

「ワダチのチャクラはどんな感じだった？性質は？」

「…千手一族に似ていた。あと、そこに居るうちは一族にも似ていた…性質は分らない。弱いガキの忍並みのチャクラだったが…」

三人は顔を見合わせた。

「千手にも、うちはにも似ているチャクラだと!!…どういうことぞ！」

「木ノ葉の里が出来てまだ三年も経っていない今、両方の血を引く成人した男が存在するといふのでしょうか？」

「居ないとは言いきれないが、ほぼあり得ないことだ。」

「もし居たとすれば、千手とうちは、両方に恨みを持つ者かもしれないな…」

事態は更に深刻に、そして複雑になってきた。

ワダチとはいったい何者で、どこに居るのか。

なぜ芙蓉を誘拐したのか。

ワダチは芙蓉のマーキングを外したのか、外していないのか。

本当の目的は何なのか。

「とにかくこうなったからには俺たちだけで動くわけにはいかぬ。芙蓉の安否は気になるが、里への脅威になる可能性がある以上、いったん里に帰るぞ。」

「仕方がないな…だがもう少しこいつから情報を聞いておく。」

カガミは、扉間の残酷な禁術を目の当たりにして若干引いていた。

だが、ここまででしなくては芙蓉を助けられないのかと、自分の未熟な万華鏡写輪眼を悔しく思った。しかし悔いている暇は無い。

一刻も早く、芙蓉の行方の手掛かりを見つけてなくては…。

…この眼で必ず！…



目を閉じ、仰向けに横たわって動かなくなった芙蓉に、マダラは丁寧に服を着せてゆく。

その所作一つ一つに、これまでの芙蓉との思い出が浮かんで泡の様に消えてゆく。服を着せ終わると、最後に乱れた髪を優しく撫でて整える。

神社の小窓からは真昼の眩しい光が差し込み、部屋をほんのりと暖めている。辺りの森では小鳥が囀りながら飛び交っている。

マダラは写輪眼を発動し、異空間に飛ばしていた扉間のマーキングを取り出すと、再び芙蓉の左手首に戻した。

「これでもう、お互い苦しむ必要は無くなったな…。」

芙蓉の頬に優しく触れた後、マダラは姿を消した。

◆ その時、檜枝岐神社の上空を、冬を前に海を渡るオオルリが一羽、飛び去って行った。

柱間と扉間、カガミが里に戻ると、木ノ葉の里は一気に緊張した空気に包まれた。

ワダチと名乗る謎の忍により芙蓉が誘拐され、扉間のマーキングが外されたかもしれないという事態に、里の中忍以上の忍たちは動揺を隠せなかった。

扉間のマーキングを外せるのは、柱間と今は亡きマダラレベルの忍しかいない。そのレベルの忍が里を狙っている可能性と、呪印に特化した忍が里を襲う可能性は大きな脅威だ。

またこの事件の発生により、唯一うちは一族を除き、千手一族やそのほかの一族からは、芙蓉を監獄に入れるべきだった、死刑にしておけば良かったと言い出す者まで現れていた。

事態は、マダラの事件を彷彿とさせるものであった。

「扉間様・・・俺、どんな事態になっても感情的にならないって誓いました。でも、芙蓉先生が悪者になっているこの事態には憤りを隠せません・・・」

「貴様だけではない。俺もだ。芙蓉が戻って来てもまた、困難が待ち受けているな・・・」

二人は木ノ葉の里本部の屋上から、忙しなく行き交う忍たちを見下ろして言った。

「芙蓉先生が里に帰ってきたら、俺が全力で守ります。誰にも、絶対、先生を傷つけさせたりしない!!だから早く、早く先生を見つけないと・・・!」

カガミは悔しそうに頭を下げ、右手で柵を強く殴った。

その肩に扉間がそつと手を置く。扉間もカガミと全く同じ気持ちだった。

『・・・俺、まだ写輪眼は開眼してないけど、開眼したらあのマダラを超える自信がある!そしたら先生・・・俺と・・・俺と結婚して!』

あの日、扉間は芙蓉とカガミの会話を聞いてしまっていた。

それ以来、扉間は少年であるカガミの、芙蓉への真つ直ぐな恋心に、かつて自分が少年時代に芙蓉へ向けられなかった気持ちを重ねていた。

ピールーリー・・・

高く澄んだ鳴き声があった。

二人にはそれが芙蓉の笑い声のように聞こえ、不意に空を見上げた。

白い腹をした鳥が通り過ぎたと思つたとたん、直ぐに翻り、方向転換して青い背を見せる。

「オオルリか・・・もう秋なのに、まだ居るのか・・・」

扉間はそう言ってオオルリの姿を目で追う。すると、またこちらに向かって飛んで来る。

ちょうど扉間とカガミの頭上に来た時、オオルリの姿がキラリと光った。

するとその光だけが落ちてくるのではないか。

オオルリが光ったのではなく、オオルリが持っていた何かを落としたようだ。

コツツ。コロコロコロ・・・

扉間の左隣、数メートル先にその光るものが落ちて転がった。

「・・・!!」

扉間はそれに駆け寄り、拾い上げた。

「これは・・・芙蓉の髪留めだ!!」

直ぐに再び空を見上げ、オオルリの姿を追う。オオルリは里の端に向かって飛んでいく。

そのオオルリを感知してみるが、なんのチャクラも感じない。

だが、こんな偶然はあり得ない。誰かが意図的に、自分に向けて差し向けたに違いなかった。

扉間に駆け寄り髪留めを見たカガミも急いで写輪眼を発動してオオルリを見た。だが、やはりなんのチャクラも感じられなかった。

「扉間様、ワダチという男が仕向けたのでしょうか。」

「ああ・・・。これはもう一度、芙蓉の元へ飛べるか試してみるべきかも知らん。」

「そうですね・・・俺も、そんな気がします。」

扉間は頷き、飛雷神の術を行った。

フツ・・・ストン。

扉間の目の前の景色が変わり、着地した。

飛べた。

そして直ぐに、目の前に床に横たわる芙蓉に気が付いた。

「芙蓉っ!!!」



「・・・はい。この先、マダラさまの隣りに居ても、もう心は一緒に居られないから。」

「それが、お前の答えか?」

「・・・はい。ですから、我儘かもしれませんが、私を、マダラさまを裏切った妻のまま、

今ここで殺して下さい。」

芙蓉はそう言って、微笑んだ。

マダラはその瞳の奥に、揺るがない光を見た。

その光はマダラの写輪眼であっても、決して消すことは不可能だと悟った。

そして、その光は奇しくも、他の誰でもない、自分が灯したのだということも…。

マダラは無言でマントを脱いで床に落とし、上着を脱ぐ。

芙蓉の目の前に、恋焦がれた、愛おしく、美しい胸板が現れる。

無意識に、いつものように、芙蓉は両手をマダラに向かつて広げていた。

マダラはその腕の中に吸い込まれるように、芙蓉の胸に顔を埋めた。

白く柔らかで、滑らかな芙蓉の肌がマダラの身体に吸い付くように重なる。

マダラの指は、芙蓉の存在を覚えておくためかのように、丁寧に身体をなぞっていく。

「あああ……」

夜明け前の静まり返った空間に、芙蓉の吐息と、二人の口づけの音だけが響く。

空には月も太陽も無く、ただ瑠璃色だけが続いていた。

ハアハアハア……

二人は絶頂を迎え、抱き合って放心していた。

マダラがゆっくりと身体を離し、芙蓉の顔を見た。

芙蓉は幸せそうに微笑んでいる。

それは、マダラが芙蓉を愛し始めた頃から何も変わらない、愛する笑顔だった。

「へッ。どうせ裏切るなら、涙ぐらい見せろよ……」

マダラは苦笑いした。僅かに潤んだその目には写輪眼が浮かんでいる。

「ごめんなさい……私、最後まで貴方を困らせてばかりですね。」

芙蓉も苦笑した。

「ああ、そうだな。だがこれで最後だ。」

マダラはそう言うのと、意を決したように素早く印を結んだ。

万華鏡写輪眼が芙蓉の瞳をすり抜け、脳裏まで貫いて強烈に焼き付く。

そして声も出せないほどの頭痛が芙蓉を襲い、あまりの痛みに心臓まで締め付けられる。

『マダラさまと二人で、一生一緒に生きてゆけますように』

芙蓉が意識を失いそうになる瞬間、いつか願った言葉が通り過ぎた。

．．．あの願いはちゃんと、叶った．．．

(22) 芙蓉が失くしたものの

「芙蓉!!芙蓉!!目を開けろ!!」

誰かが自分の名前を呼んでいる。

聞き覚えの無い声だ。

・・・うるさい。そんなに大声で呼ばないで・・・

芙蓉はゆっくりと目を開けようとした。

「痛っ・・・!!」

強烈な頭痛がして再び目を閉じる。

「芙蓉。大丈夫か!どこが痛むんだ!」

「・・・頭が、頭が痛い・・・」

扉間は床に手を突き、芙蓉の頭と顔を一周見回しながら手で触った。怪我は無いようだ。

そつと芙蓉の頭を持ち上げ、後頭部を手で確かめる。後頭部にも怪我は無い。外傷の痛みではないようだ。

「大丈夫だ。安心しろ、直ぐに治してやる。」

そう優しく言うと、扉間は芙蓉をそっと抱きかかえた。

芙蓉の重さと温かさを確認すると安堵で膝が崩れそうになったが、深呼吸をして気持ちを正す。そして里へ飛んだ。

「芙蓉先生——つ!!!」

カガミが目の前に現れた二人に駆け寄る。

「芙蓉は激しい頭痛がしているようだ。直ぐに病院に向かう。」

そう言うと再び二人はカガミの前から姿を消した。

カガミはその場に膝から崩れ落ち、両手で顔を覆った。

「良かった……良かった……芙蓉先生……つ!!!」

大粒の涙が掌をすり抜け、カガミの膝を濡らしてゆく。

「ふ、芙蓉っ!!!」

柱間の目の前に芙蓉を抱えた扉間が現れ、周囲の忍たちも驚く。

「兄者！病院だ！一緒に来い！」

柱間は扉間に駆け寄り、柱間の肩に手を置く。芙蓉は扉間の腕の中で目を閉じて苦しそうにしている。その顔を見たと同時に、病院に居た。

扉間は寝台に芙蓉をゆっくりと寝かせる。

「酷い頭痛がしているようだ。外傷はない。診ててくれ。看護班を呼んでくる。」

そう言つて扉間は足早に部屋を出て行つた。

「芙蓉。頭のどこが痛い？」

「・・・目の、奥が・・・目が開けられない・・・」

「少し触るぞ・・・眼球に異常は感じ無いな。すまない、辛いと思うが少しだけ目を開けてみてくれぬか？」

芙蓉は恐る恐る目を開けてみた。先ほどまでの痛みは感じないが、目の奥がズキズキと痛む。

次第にぼんやりとしていた視界が鮮明になり、目の前に見たことのない男の顔が現れる。

「大丈夫か？無理しなくていいぞ。・・・うむ。やはり眼球にも異常は無いな。神経の問題かもしれないな。」

自分の顔に知らない男の顔が接近し、まじまじと診察している。

その視線と痛みに耐えきれず、芙蓉は再び目を閉じた。

それから柱間の医療忍術と医療班の治療が始まった。

自分を必死に治療する長い黒髪の男(ひと)、そして自分を助けてくれ、今も近くで心配そうに見つめる銀髪の赤い目の男(ひと)・・・

ありがたい。だが、二人が誰なのか分らない。

なぜ自分の名前を知っていて、なぜこんなに心配してくれるのか・・・分らない。そもそも、なぜ自分がこんな状況になっているかと思いつけない。

銀髪の男が助けてくれる前の記憶が、全く無いのだ。

覚えているのは自分の名前だけだった。



「芙蓉・・・具合はどうだ？・・・あ、俺は扉間だ。兄者、いや柱間は火影の仕事に戻った。」
目を覚ますと枕元には扉間が居た。

芙蓉が救出された日から五日目の朝だった。

芙蓉は救出された翌日、目を覚ますと激しく取り乱し、病室を出ようとして暴れた。頭痛が治り思考が正常に戻った時、芙蓉は自分の名前以外記憶が無く、自分が何者なのかも分らないことに混乱し、恐怖に怯えた。息をしていることすら辛く不安で、もう死にたいと泣き叫んだ。

柱間と扉間は芙蓉を懸命に、そして冷静に宥め続けた。次の日も、その次の日も、芙蓉が目覚ますたびに柱間と扉間、交代で宥め続けた。

しかしこの日、芙蓉は目を覚ましても落ち着いていた。

その様子には扉間は安堵し、芙蓉が起こしてくれと言うので背中を支え寝台に座らせ

た。

「…昨夜も、付いていて下さったのですか？申し訳ありません。」

「飛雷神、いや術で、家と本部と行ったり来たりしてたがな…」

「…本当に、ご迷惑おかけして申し訳ありません…」

芙蓉は落ち着いた表情で扉間の顔をじっと見たあと、軽く頭を下げて詫びた。

「謝らなくていい。お前の恐怖も不安も無理もない。だが少し落ち着いたようであつた…」

扉間はそう言つて少し微笑んだ。

「あの…ところで…貴方と私はどんな関係なのですか？」

「か、関係?!…えつと…元・許嫁だ。今は一緒に二人で暮らしているが…」

「元・婚約者ですか？じゃあ今は？」

「…それは…」

扉間は少し俯き、沈黙した。

「言えないような関係なのですか？…私、私つていったい何者なの?!」

芙蓉は再び泣きそうな顔になり手で口を押えた。

「いや、違う！俺が思っている関係と、お前が思っている関係が違っているかもしれないと思つて…すまない。俺は、いまま婚約者だと思つている。」

「……あの、私には家族は居ますか？」

「二歳の時に父親を、六歳の頃に母親を亡くして我が千手家に引取られた。かなり年の離れた姉が四人居るようだが、他国へ嫁に行き消息は不明だ。」

それを聞くと、芙蓉は悲しそうな顔をして俯いた。だが再び質問を続ける。

「あの長い髪の男性は貴方のお兄様ですよ。柱間様でしたっけ……火影ってなんですか？」

「奴は俺の二歳上の兄だ。火影というのはここ、木ノ葉の里の長のことだ。柱間はこの里の創設者だ。」

「とても偉い人なんですネ……」

「フツ。そうは見えないだろ？」

そう言つて、扉間が少し笑つて見せた。

「あ、はい……あ、いいえ！そんなことは……」

芙蓉も少しだけ笑つた。

その様子を見て、扉間はまたほんの少しだけ安心が増した気がした。

「焦ることは無い。ゆつくり思い出せばいい。お前の居場所はちゃんとあるし、お前を覚えて慕っている者がこの里に沢山居る。大丈夫だ……」

「私を、慕っている人……？」

「ああ。お前はうちは私塾という所で教師をしている。その塾生たちとその一族、他にもな。お前は勉強だけではなく、多くの者に夢を持つ大切さと、学ぶことの大切さを教えているんだ。」

「そ、そうなんですわね……信じられない。私が……そんな。」

「お前には親友も居るぞ。ハア……もうすぐ病室に飛び込んでくる頃だが……ほら来た。」

タタタタタタ……ガラッ！

「ちよつと！病院内は走らないで下さい！」看護師の声と同時に病室の扉が開いた。

「芙蓉っ!!!」

樹はその瞳に芙蓉の姿が映った瞬間駆け寄った。扉間の存在など全く目に入っていないように、扉間は突進してくる樹をさつと避ける。そして樹は芙蓉を思いきり抱きしめた。

「……??」

「ハア……芙蓉、こいつがその、お前の親友だ。樹、まだ面会謝絶のはずだが？」

「芙蓉！本当に良かった……無事で……おかえり。」

「……た、ただいま？……樹さん。」

「無視かよっ」

「ふ、芙蓉……私のことも覚えて無いの？」

樹は柱間から芙蓉が記憶喪失になっていることを聞かされていたが、信じられなかった。だが、芙蓉の反応にそれが事実だと知り、シヨックで芙蓉から身体を離れた。

「樹！今はそれを言うな。芙蓉本人が一番辛いのだ。だから面会謝絶にしておいたのに……」

「そ、そうだよね！ごめんね、芙蓉。一番辛いのは芙蓉なのに、私ったら……」

「いいえ。樹さん、私こそ親友の貴方のことまで忘れて、ごめんなさい……」

芙蓉は心配そうに、俯き涙ぐんでいる樹の顔を覗き込んだ。

「樹さんの瞳、青くてとつても綺麗。それにその金髪も……こんな美人さんが私なんかの親友だなんて私、凄く嬉しいです。」

そう言つて微笑んで見せた。

「なんか、じゃない！なんかつて言つちやダメ！自分を卑下しないで……芙蓉はとつても素晴らしい人なんだよ？私の一番大好きな人なんだよ……」

芙蓉は自分を叱つてくれたことに、なぜだがとても嬉しくなった。

「はい。分りました。ありがとう、樹さん。」

そう言つて樹の手を両手で握つた。樹の目からは大粒の涙が流れ落ちた。それを焦つて芙蓉が服の袖で拭いながら、泣かないでと慰める。

「オイ……お前が慰められてどうするんだ……。今日はそこまでだ……また来てくれ。」

樹は後ろ髪を引かれながら病室を後にした。

「芙蓉。疲れただろう。また少し休め。」

そう言われ芙蓉は再び寝台に横になると、扉間が布団をかけた。

「あの…私、いつ家に帰れますか？」

「念のためもう二、三日は入院したほうが良いだろう。早く家に帰りたいのか？」

「どんなお家なのかも覚えてないのに、変ですよ…でも無機質なこの場所に居ると、空っぽな自分がますます気になってしまつて…」

「いや理解できる。身体に異常は無いし兄者に相談してみよう…ほら、休め。」

扉間は布団を芙蓉の首の上まで上げて優しくそう言うと、芙蓉は目を閉じた。



ガシッ。

「いい加減にして下さい。」

出かけようと玄関に向かう柱間の腕を、後ろからミトが掴んだ。

「な、なんぞ？」

先ほど居間で自分を見送ってくれたはずのミトに引き留められ、柱間は戸惑う。「貴方は火影です。もつと自分の立場をわきまえて下さい…。」

ミトは眉間を寄せ、柱間を見据えて言った。

もう限界だった。

ミトはマダラの里襲撃事件の際、柱間の元許嫁・芙蓉の存在を知った。

政略結婚と割り切って結婚したものの、柱間が愛した女の存在とその二人の過去を知り、ひどく嫉妬した。だが、いまや芙蓉は罪人扱いされて扉間と暮らしており、今ではミトは芙蓉を愚かで哀れな女だと見下し、柱間との子供を妊娠したこともあり、いつの間にか芙蓉のことなど気にも留めなくなっていた。

しかし今回ワダチの事件が起こり、柱間は火影自ら芙蓉の搜索に躍起になり、そしてここ数日堂々と芙蓉の元へ通っているのだ。

妻である自分と、生まれて一ヶ月も経たない娘が居るにも関わらず、だ。

「すまぬ……ミトには不安な思いをさせているな。だが今日で終わりぞ。直ぐに帰って来る。」

柱間はミトをそつと抱きしめ、静かに言った。

・・・ずるい・・・

実は、ミトは結婚するまで恋というものをしたことが無かった。

しかし柱間と出逢い、柱間の偉大さと優しさに惹かれ、初めて恋をした。それ以来ミトは柱間の抱擁には、いつも怒りを収めてしまわざるを得ないのだ。

「わ、私はよいのです……ただ、火影である貴方が、下々から悪く言われてしまつてはこの

先支障が出ます…それを心配しているのです。」

「そうだな…気を付けようぞ。心配、ありがとう。」

「いえ…。」

「早く帰る。今日こそ三人で晩飯を食い、一緒に寝ようぞ！」

「は、はいっ…。」

ミトは嬉しきで声が上がらず、顔がほころぶ。

「ミトは笑っている方が美人ぞ！ワハハハハ。」

そう笑って後ろ手を振りながら柱間は出かけて行つた。

ミトは顔を赤く染め、その後ろ姿を見送つた。



「色々と、本当にお世話になりました。ありがとうございます…火影様。」

カーテンが開かれ、明るい午前中の光が差し込む病室。

芙蓉が柱間に向かって深々と頭を下げると、肩から長い髪がさらりと滑り流れた。

「いやいや。気にせんで良い。それより退院おめでとう！思つたよりも早く元気になつて良かったぞ。…記憶が無いことは辛いだろうが、焦らず、無理に思い出そうとしないことだ。穏やかに過ごすうちに、きっと何か思い出せるはずぞ。心配はいらぬ。お前にはお前を愛するこの扉間と、お前を慕う多くの仲間が付いておる。な！扉間よ？」

柱間は芙蓉の両肩を握って頭を上げさせると、芙蓉の頭越しに、芙蓉の後ろに居る扉間にも同意を求めた。

「は?!・・あ、ああ。そうだな・・」

「扉間。今更芙蓉を愛していることを誤魔化そうとしても無駄ぞ。ワハハハ!」

「に、二回も同じことを口に出して言うなっ!!」

芙蓉は少し不安そうな顔をして扉間の方を振り返った。

その顔を見て、扉間は芙蓉が自分に対して申し訳なさを感じていることを察した。

・・兄弟者の大馬鹿者め!・・

空高くに、刷毛で履いたような高層雲が浮かんでいる。

道端のススキが秋風で一斉に揺れ、銀色に輝いた。

その風で一緒に靡く髪を抑えて立ち止まり、芙蓉はそのススキをじつと眺めた。

「寒く無いか?無理せず、俺の術で家に帰ろう。」

病院から帰宅する際、どうしても外を歩きたいという芙蓉の望みで、いま人気の少ない細い畔道を二人で歩いている。

「扉間さま、私は貴方のことを・・」

芙蓉は少し目を細め、巻いているストールを首の上まで上げる。その右肩を扉間が抱き寄せ、ストールを更にしっかりと芙蓉に巻き付ける。

「芙蓉……確かに俺はお前を愛している。だがお前に俺を愛する義務はない。気に、しないでくれ……。」

「……でも……。」

「もう帰ろう。」

再び大きな風が二人の所へ届くと同時に、二人はそこから姿を消した。

パラパラパラパラ……

家に到着し自室へ通された。芙蓉は机の上に積まれていた数学の教科書をおもむろに手に取り、そつとめくつてみた。

そこには自分の字であろう文字で、教え方についてのメモがぎつしりと書きこまれている。

寂しそうに目を細め、芙蓉はその文字をゆっくりと指でなぞった。そして、その文字を小さな声で口に出して読んでみる。

「因数分解とは、簡単に言うなれば、足し算や引き算の形の式を、掛け算や割り算の形に書き換えることです……」

違和感は無かった。記憶はなくとも身体は覚えているものなのか、自分は本当に教師なのだろう。だが、そうだとすれば今頃、突然担任が居なくなつた教え子たちはどうしているだろうか。少なからずも勉強に支障が出ているに違いない。そう考えると芙蓉

は胸が苦しくなり、教科書を閉じて胸に抱きしめた。

物の少ない部屋には、確かに誰かが毎日生活しているようだが、どれも自分の物だと実感できる物は見当たらない。

しかし、教科書の類だけは、芙蓉に客観的にそれが自分の物であり、自分がとにかく誰かに迷惑をかけている状況を痛烈に実感させるのだった。

…コンコンコン。

いつまでも二階から降りてこない芙蓉を心配して、扉間が芙蓉の部屋の扉を叩いた。芙蓉は急いで扉を開け、隙間から顔を出した。

「芙蓉…大丈夫か？」

「あつ、はい…えつと…どの服を着れば良いか分からなくて…すみません。」

芙蓉は申し訳なきように俯いた。

「良ければ…俺が見てやろうか？」

「は、はい。ぜひお願いします。」

芙蓉は扉を大きく引いて扉間を部屋に招き入れた。

ほぼ毎日入っていた部屋なのに、記憶を無くした芙蓉の様子に、扉間は他人の部屋に入るかのような緊張を感じた。

「悪いが少々服を触るぞ。」

扉間は観音開きの衣装棚を開け、ハンガーに掛かった服を手でかき分けながら順番に見ていく。一番手前に芙蓉が良く着る服があったのだが、扉間は敢えて、自分が一番好きな服を手に取り、芙蓉に差し出した。

「これなんか、良く着ているぞ……」

「……私って、いつも家の中でこんな華美な服を着ているんですか?」

その服は鮮やかな桃色、大きく開いた胸襟にビーズの刺繍が入っている五分袖で、腰を帯で縛って着る丈、裾にもビーズの刺繍が施されている。

芙蓉はそれを見て、家着にしては派手で上等過ぎる気がして少し気まずい顔をした。「別に問題ないだろ。家事をするのに困るわけでもない。よく似合っているしな。」

そう言って芙蓉の手から服を取り、芙蓉の身体に当てて合わせて見せた。

「そ、そうですか?でも私ってどんな性格なのか、ますます心配になってきました……」

「そこまで言わんでもいいだろうが……」

「え?」

「いや……この服の気分じゃないなら他のを着れば良いだろ。心配するな。記憶が無くなくてもお前の性格は変わってない。何か分らないことがあれば呼んでくれ。」

そういう言うと扉間は服を衣装棚に戻して部屋を出て行ってしまった。

芙蓉は何も言えずにその後ろ姿を黙って見送った。

「その服を着たのか。」

「はい……こういう明るい服を着ると、なんだか元気が出てくる気がしますし！」

明らかに扉間に気を使った様子の芙蓉を見て、扉間は目線を逸らして頭を掻いた。

その服は、今年の芙蓉の誕生日に扉間が贈ったものだった。

家の中でこの服を着ている芙蓉を見たいという気持ちで贈ったのだが、記憶を失う前の芙蓉は今の状況と同じく、普段着で着るには勿体ないとなかなか着ようとしなかった。この服を着た姿を見るのは実に芙蓉の誕生日以来である。やはりその服は芙蓉によく似合っており、芙蓉の美しさを引き立て周りの空間までもが明るくなるようだった。

「……あ、やっぱり本当に着るのは、良く、なかったですかね……」

気まずさと恥ずかしさで芙蓉を直視できない扉間の様子を見て、芙蓉が不安そうに言った。

「そ、そんなことはない！よく似合っている。俺は、その服が好きだぞ……」

芙蓉はその言葉を聞き、良かったと呟いて微笑んだ。そして一步步寄り、扉間に言う。

「……あの扉間様……私について……全て教えて頂けませんか？」

「まだ早すぎる。無理に思い出そうとすれば逆効果だ。記憶喪失になった原因は俺と兄

者にも分らない。記憶を思い出そうとすることよりも先に、なぜ記憶喪失になつてしまつたのか、その原因を探る方が先だ。だが、それもお前にとつては辛い出来事を思い出し、更に傷つくことになるかもしれないだぞ。」

扉間は芙蓉に近づいて、芙蓉の両腕をしっかりと握り、俯く芙蓉の顔を見つめて言った。

「私は……私はどんな現実でも受け入れます。お願いします。」

芙蓉は顔を上げ、扉間の瞳に訴えかけるような強い眼差しを向けて言った。

「それに、現実が真実とは限らない。本当の真実はお前の中にしかないんだ。他者の言うことに惑わされ、傷つき、お前の心の中にある真実が閉ざされてしまつては意味が無いんだ。」

「……私は……そんなに弱くはありません……」

「……ふ、芙蓉?」

「……あつ、私、何言つてるんだらう……」

思いもよらない芙蓉の発言に扉間は驚き、そして、芙蓉自身も驚いた。

「そうだ! お前は弱くなんかない! ……ほら、ひとつ思い出せたじゃないか!」

扉間は芙蓉を抱き寄せ少し持ち上げると、その場で一回転しながらそう言った。溢れ出す嬉しさを隠せない様子である。そんな扉間の様子に、芙蓉も嬉しくなつた。

「そうだな。お前は強い。きつとどんなことでも受け止めて、プラスに変えていけるだろう。ならば少しずつ話していこうか。いいか、少しずつだぞ?」

扉間が芙蓉の両肩に手を乗せ、芙蓉の額に自分の額を合わせるように近づけて念を押しす。

「はいっ!ありがとうございます…よろしくお願いします!」



窓の外では霜が降りた大地が夜の月の光を受けて輝き、静けさが広がっている。

芙蓉が記憶を失くしてからもうすぐひと月が経つ。

十月後半になり、夕方にはかなり冷え込むようになっていた。

そして家の中の窓は、鍋から上がった蒸気で霜を付けている。

「芙蓉、その桃色の服、本当によく似合ってるよね。芙蓉は美人で可愛いんだからどんな明るい服を着るべきなんだよ!ねえ、扉間様?」

台所で芙蓉の隣りで樹がヒメマスの天麩羅を裏返しながら、食卓に座る扉間に言った。

「…ああ。そうだな。」

…樹、珍しくお前と同感だな…

「樹ちゃん、ありがとう。これを着てると、明るい気持になれるの!」

芙蓉はまな板の上でネギを切る手を止め、樹の方を向いて恥ずかしそうに微笑んだ。樹はその表情を見て愛おしさがこみ上げ抱きしめたくなるが、今は揚げ物をしているため、ぐつと堪えた。

扉間も芙蓉の様子を見て思わず微笑み、それを隠すように湯呑を口に持っていった。

「つーか、樹。焦がすなよ！俺が釣ってきた大物だぞ。」

「ハイハイ解つてますよー。私と芙蓉の分は、絶対焦がしませんからっ。」

「お前つ・・・焦がしたら、今度こそ査定マイナスだからな！これは任務だ！」

「フフフ。お二人とも本当に仲がよろしいんですね。」

「「違——うっ!!」」

樹と扉間は同時に大声で否定した。

「あら…：そうなんですか？確か、喧嘩するほど仲が良いって言う筈ですけど。フフフ。」

そう言つて笑う芙蓉を見て、この場で本心を芙蓉に言うことが出来ない二人は俯いた。

パチパチパチ・・・

ヒメマスの天麩羅が揚がる油の音だけが残り、気まずい空気が流れる。

「樹ちゃん、もう揚げ頃だよ。良い色だね…：美味しそう。」

そう言つて、気まずい空気に気づいているのかどうか、芙蓉が樹の顔と天麩羅鍋の中

を見ながら微笑んでいる。

樹はウンと返事をして急いで皿に天麩羅を揚げた。芙蓉も味噌汁を椀に注いで切ったばかりのネギを入れ、先に盆の上に置いてあるホウレン草の胡麻和えと、ヒメマスの刺身の隣りに置く。天麩羅を皿に盛り終えた樹は、横目で芙蓉の顔色を窺った。芙蓉は僅かに微笑みを湛えた顔で、料理を始めた一時間前と特に変わった様子は無かった。

「今日もお料理作るの手伝ってくれてありがとう、樹ちゃん。」

「ううん。私も芙蓉と一緒に料理作れるの楽しいし！」

食事を終え、芙蓉の部屋の暖かい絨毯の上で、樹は芙蓉と二人向き合って座っている。二人はたわいもない話で笑いあった。芙蓉の記憶喪失は変わらずだが、元々親友の若い二人は一緒に居るだけで話が花が咲く。

しかし、そこに芙蓉が突然深刻な顔をして切り出した。

「・・・樹ちゃん、私に遠慮せずに本当のこと教えて欲しいの。・・・樹ちゃんは扉間様のこと、好きなの？」

「そんなわけ無いじゃん!!・・・だって、私が愛しているのは・・・」

「・・・？」

「・・・芙蓉なんだよ。芙蓉だって、知ってるじゃん・・・」

だが、女である自分が芙蓉を好きだと言ったら、記憶を無くしている芙蓉は動揺するだろう。

気持ち悪いときえ思ふかもしれない。樹には言えるはずも無かった。

「ご、ごめんね！変な事を聞いちやつて。もしかして、樹ちゃんは扉間様のことが好きで、扉間様も実は樹ちゃんが好きで…もしそうだったら私、二人に本当に申し訳なくて…心配で気になってたの…ごめんね…」

「違ふよ!!扉間様が愛しているのは芙蓉だよ!!私たちが喧嘩するのは、私が日頃、上司の扉間様に仕事でこき使われているから、プライベートで仕返したくて突つかかっているだけ。…ごめんね、変な誤解させちゃってきき！」

樹は芙蓉の両手をしっかりと握って、芙蓉の顔を覗くようにしてそう言った。

「本当に…?」

「うん!本当!!それに、私には他に愛している人が居るもん。」

「そうなんだね…解った。ありがとう、樹ちゃん。」

芙蓉は少し困ったような顔で樹に微笑んだ。樹もその笑顔を見て、少し困ったように微笑み返す。

だが、その芙蓉の微笑みは、自分との想い出だけではなく、樹の芙蓉への愛まで忘れてしまっている紛れもない現実として、樹の心を切り裂いた。

だが、それでも芙蓉の前では笑顔で居なくてはならない。

親友の自分が諦めてどうするんだ：芙蓉の記憶は必ず戻る。そう信じて笑い続けていこうと、樹は心に流れる血に誓った。

「樹ちゃん、本当に一人で大丈夫でしょうか？」

「ハハッ。あいつはああ見えて上忍だ。そこいらの男よりよっぽど強い。心配要らない。玄関は冷えるから早く居間に戻ろう。」

そう言つて芙蓉の肩に手を回す扉間の顔を見上げて、芙蓉が言う。

「あの・・・扉間様。扉間様は樹ちゃんのこと、女性として好きですか？」

「樹を女として見た事は一度たりとも無い。俺が愛しているのはお前だけだ。」

扉間は真つ直ぐ芙蓉の目を見つめて言った。

その言葉に濁りは一切無く、まるで今夜の晩秋の空気の様に澄み切っていた。夜空の果てに光る星の様に、扉間の瞳も光っている。

「・・・ごめんなさい・・・失礼なことを訊いてしまつて。」

芙蓉はその瞳に吸い込まれそうになり、思わず顔を逸らして謝った。

「いや、構わない。何でも訊いてくれていい。」

二人は居間に向かつて歩き出した。しかし、直ぐに芙蓉が足を止めた。

「あの……私に、朝起きて寝るまで、以前と全く同じ生活をさせてみてくれませんか？ 外出もさせて下さい。きつと何か思い出せる気がするんです。お願いします。」

芙蓉はこの三週間余り、扉間から少しづつ自分についての情報を聞いているが、「そんなに弱くない」という性格を思い出せたこと以外、何も思い出せないでいた。

険しい芙蓉の表情からは一刻も早く記憶を取り戻したいという焦りが見てとれる。

扉間も芙蓉が言うように、以前と全く同じ生活を繰り返してみれば何かを思い出すのではないかと思っていた。

だが、里を歩けば芙蓉を良く思わない者たちに芙蓉が傷つけられるのではないかと躊躇していたのだった。

しかし芙蓉本人が望んでいるのであれば、以前の生活を送らせてやりたい。強い芙蓉を信じてみるべきなのか……

黙り込む扉間を見て、芙蓉はますます不安そうな顔になり、目は潤んでいる。

自分に以前の生活をさせることに躊躇う扉間に、芙蓉は自分がどんな人物で、いったい何が起こっていたのか、ますます不安で堪らなくなる。

とにかく、何でもいいから思い出したい。

「お願いします！早く、何でもいいから、思い出したいのです！」

「以前も言ったように現実が真実とは限らない。確かに他者から見たお前の姿も一つの

真実だろう。だが、あくまで本当の真実はお前の心の中にしかない。そこをきちんと分け、冷静に受け止められるならば、お前の望む通りしてみよう。どうだ？」

芙蓉は二度同じことを言う扉間が言わんとすることの意味が分った。

きつと自分は慕われている一方、一部の人間からは嫌われているのだらうと。

それによつて自分が傷つくことを扉間は心配しているのだ。

「はい・・・私頑張ります！」

芙蓉は涙を拭つて顔を上げ、強い意志を宿した瞳で扉間を見た。

「・・・そうか・・・分った。だが頑張るな。辛い時は直ぐに止める。いいな？」

扉間も芙蓉の瞳を見て、決心した。

芙蓉ならきつと大丈夫、そして何かあれば必ず自分が守ると心の中で呟いた。

(23) 過去と未来の辻褃

「六時半起床・朝食・弁当支度。八時・扉間出勤、洗濯、掃除。十時・塾の授業準備。正午・昼食。十三時半・買物へ。一五時・夕食の準備、家事。一六時・出勤準備。十七時・扉間帰宅、芙蓉出勤。一七時十五分・ミーティング、授業準備。十八時・授業開始。十九時十五分授業終了。十九時半・扉間と一緒に帰宅。二十時・夕食。二十一時半・入浴。二十三時半ごろ・就寝。・・・塾のある日のスケジュールは大体こんな感じだが・・・」
扉間はスケジュールを書き出した紙を机の上に広げ、芙蓉に見せた。

「はい。これをお願いします！」

「いきなりこれを一人するのは無理だ。まずは俺と事一緒に買物と、塾へ行ってみて慣れる必要がある。このスケジュールをこなすのはそれからだ。」

この日休みだった扉間は、さっそく芙蓉を連れて里に出かけることにした。
家の玄関を出ると、庭先の向こう側にゆるく長い下り坂が里の中心に向かって続いているのが見えた。

芙蓉は、きつと何度となくこの坂を歩いているはずなのに、言い知れぬ不安が過ぎり、数歩歩いて立ち止まった。

「大丈夫か？やはり今日はやめておくか？」

「…いいえ。大丈夫です。少し緊張しているだけです。」

ぎこちなく微笑む芙蓉の左手を、扉間が右手でそつと握った。

「坂を下るまで、こうして行くぞ。」

「は、はい。ありがとうございます…」

少し照れた様子の扉間の横顔を見上げると、芙蓉は少しだけ緊張が和らいだ。

・・・一人じゃない。扉間様が居てくれるから大丈夫・・・

最近ぐつと昼間の気温も下がってきたが、この日の午後は小春日和で暖かかった。

坂の隣りにある森の中に、楓の赤い葉が日を浴びて光っている。その様子を芙蓉は目を細めて見上げていた。扉間も直ぐにその視線の先にある楓を見つけて、言う。

「来年の秋には、紅葉狩りにでも行きたいな…」

「扉間様は紅葉がお好きなのですか？」

「ああ。千手温泉へ行く途中に錦谷という場所があつて…」

扉間は話の流れで『千手温泉』という名詞を口にしてしまい、芙蓉を探し回ったあの日のことを思い出し、そのまま話を続けようか戸惑つて言葉に詰まる。

「…？」

「あ、いや…錦谷はその名の通り、秋になるとブナ、楓、モミジ、ウルシなどの広葉樹と、

緑の針葉樹が錦の景色を作りだす、実に素晴らしい景色なんだ……」

扉間は気を取り直し、錦谷について説明をしながら頭上の楓を見送る。そして、そつと芙蓉の左手から手を離れた。

芙蓉は突然離され、冷たい空気で冷めていく左手に視線を落とす。

「扉間様、芙蓉先生。こんにちは。」

その声に顔を上げると、二人の前に黒いくせ毛の頭に忍の額当てを付けた美しい顔立ちの少年が立っていた。

「カガミ……帰ってきたのか。ご苦労だったな。」

カガミは、目の前に現れた自分を見て驚いている芙蓉の顔を見て、本当に芙蓉は自分のことを忘れてしまっているのだと実感し、芙蓉から思わず目を逸らした。

「芙蓉、この者はうちはカガミ。お前の教え子の一人だ。」

「……こんにちは。うちはカガミ君……。ごめんなさい……。私……」

「芙蓉……」「芙蓉先生……」

扉間とカガミが同時に発言しようとして言葉がぶつかり、二人は発言を止めた。そして扉間のほうが言葉を続けた。

「芙蓉、カガミは事情を知っている。謝る必要は無い。」

「そうです芙蓉先生。俺のことは気にしないで下さい。……そんな顔、しないで下さい……」

俺はこれからも先生の為なら何でもします。何でも言つて下さい!」

「……あ、ありがとう……」

カガミの真剣な顔に面食らつて戸惑う芙蓉の肩に、扉間が手を置いて言う。

「いちいち申し訳なく思つていたら以前の生活をしてみるなんて無理だぞ。開き直るくらいで居ろ。」

「扉間様の仰る通りですよ!先生は堂々としていればいいんです。大丈夫です。」

芙蓉は扉間の顔を見上げた後、そう言うカガミの方を見て少しだけ微笑み頷いた。

「そうですね…周りの皆さんと、私自身をもっと信じないといけないですね…」

「ああ。お前が最初に思ひだせた自分自身の強さを信じるんだ。」

そして三人は、一緒にうちは私塾へ向かつて歩き始めた。

道中、カガミが芙蓉に私塾について説明をした。芙蓉は感心したり驚いたりしながら話を聞いていた。カガミの話す自分の教師の姿はあまりに眩しく、それは少々プレッシャーにも感じられたが、自分自身を信じると決めた芙蓉は、またいつか教師として教壇に立つことを楽しみにこれから頑張ろうと思ひ直した。

私塾へはあつという間に到着し、芙蓉が思つたよりも家から近かつた。

玄関に続く通路には青々と葉を茂らせた針葉樹の松の木が並んでいる。まだ授業前の時間とあつて塾生の姿は無い。

カガミは芙蓉を玄関まで送り届けると、里本部に任務報告があると言つて去つて行つた。

「良い子ですね…カガミ君。きつと以前の私も、あの子にたくさん助けられていたんでしようね。」

「ああ。里想い、先生想いの好い奴だ。忍としても優秀でもうすぐ上忍になる。お前を助けられたのもカガミの力が大きかつたんだぞ…将来が楽しみだ。」

「そうなのですね…カガミ君…」

「カガミは紛れもなくお前が育てた忍の一人だ。お前はここで教鞭を取っているんだ。」
そう言つて扉間は、玄関の入り口に掛けられた生徒たちの名札を見渡す。芙蓉も一緒に五十枚近くある名札を見渡した。すると芙蓉の胸の奥底が急に熱くなり、言い知れぬ力が漲る。

そして二人は顔を見合わせた後、私塾の中に入つて行つた。

扉間が塾長のうちはドドメに、芙蓉が以前の生活を過す為私塾に出勤させてほしいと話すと、勿論ですと喜んで受け入れてくれた。

何なら授業もしてみたらどうだと言われたが、塾生や周りに迷惑をかけたくないと芙蓉はそれを断つた。まずは記憶が無くても出来る採点や事務作業などから始めることになり、芙蓉は私塾の仕事を再開できることを嬉しく思つた。

ドドメが扉間と芙蓉を玄関まで見送りに出て笑顔で手を振っている。芙蓉も何度も振り返り頭を下げながら手を振った。

・・・早く、ここでまた教師がしたい・・・

芙蓉は、自然と心に込み上げてくる希望に対して自分でも驚きつつ、その希望がこれからの道を照らしてくれているように感じたのだった。

住宅街を抜けると、多くの人が行き交い賑わっている場所が見えてきた。

芙蓉はその人の多さに少し驚き、思わず緊張して身構えた。その様子を察した扉間が芙蓉に言う。

「あそこがお前がよく買物する商店街だ。最近は何の人口も右肩昇りで日に日に賑わいを増している。今日は特にすごい人だな。無理しなくてもいいんだぞ？」

「い、いえ…記憶もですが、いつまでもお買物を樹ちゃんにお任せするわけにもいかないですし、自分で行けるようになる為にも頑張ります。」

「無理するなよ。あと、店の奴らにはお前の顔見知りも居るだろうが動揺するな。笑顔で挨拶してさえいいればいい。何を言われても気にするな。いいな？」

芙蓉は頷き、肩にかけた籠の持ち手をぐつと握りしめ、意を決して商店街に向かって扉間の後に続いて歩き始めた。

商店街の入り口に近づくとその場に居る幾人もが扉間の存在に気づき、道を開け頭を下げたり挨拶をしてくるため、自然と二人の目の前に通路が出来てゆく。

「……これではいつもの様にはいかん……すまない。」

「いえいえ！扉間様つてやっぱり偉い方なのです……ね……凄いです。」

商店街に入り、人が増えていくにつれ避ける人の数も減り、すれ違う人とぶつからないう様に歩かなければならなくなってきた。

それでも店の方に目を遣ると、キラキラと光る活きの良さそうな魚や、新鮮な野菜、秋の豊かな果物が目に入ってきて、芙蓉は自然とワクワクしてきた。

扉間と共にその青果店の前に辿り着くと、芙蓉は嬉しくなつて満面の笑顔を扉間に向ける。扉間もその嬉しそうな顔を見て一緒に嬉しくなり微笑み返した。

「あら芙蓉ちゃんじゃない！元気になったみたいで良かったわあ。扉間様もこんにちは。」

店の端で、恰幅の好い中年女性の店員が他の客に釣銭を手渡しながら芙蓉に話しかけてきた。芙蓉は思わず身構えたが、すぐに笑顔で大きな声で挨拶を返し、再び扉間の顔を見る。扉間は頷いた。

……この客の賑わい様なら、店員が芙蓉にあれこれ詮索してくる暇も無さそうだな……「扉間様、今日はお肉とお魚どちらがいいでしょうか？何が食べたいですか？」

「そうだな…お前が作りやすいものでいいぞ。」

芙蓉はじゃあと言つて目の前の艶々とハリのある茄子を手にとって選び始めた。

「あら、秋茄子は嫁に食わすなつて言うよく扉間様、大丈夫かい？あはははつ。」

先ほどの店員が忙しそうに歩き回りながらも、芙蓉と扉間に向かつて陽気に話しかけてきた。

「つ……。」

扉間は嫁と言われ思わず動揺してしまい、気まずそうに顔を逸らして聞かなかつたフリをする。芙蓉は店員と一緒にあははと一緒に笑っている。

「秋茄子はとつても美味しいですからね。今日は豚肉と味噌炒めにしようと思いますけど、いかがですか？」

「ああ…いいんじゃないか。任せる。」

「じゃあ後でお肉屋さんにも行かせて下さい。他の野菜はどれにしようかな…」

嫁という言葉に氣にしているのか、氣にしているフリをしているのか、芙蓉は笑らかな顔で楽しそうに野菜をかごに入れてゆく。その横顔を扉間はじつと見つめた。

『もう誰とも結婚する氣は無いの』

いつかの芙蓉の言葉が蘇る。

記憶が無くなる直前の芙蓉は、以前と同じ気持ちのままだったのだろうか。それとも

…。

思わずそんな事を考えてしまい、少し切なくなる。

「まいどあり！今日は売切れちゃったけど、今時期は良い栗が入ってくんよ。また来て！」

いつの間にか芙蓉は会計を済ませていた。扉間は疑問の答えを求めるときのように、自分のほうへ歩み寄って来る芙蓉の顔をついじつと凝視してしまう。

「扉間様っ！買えました！」

嬉しそうに野菜の入った藤の籠を見せてきた芙蓉に、今度はまたあの夏の、嬉しそうに指輪の入った袋を自分に見せてきた芙蓉の笑顔を思い出してしまった。扉間は焦ってそれをかき消し匿（しな）んだ。

「良かったな！次は肉屋だっけか？えっと肉屋は…」

扉間の僅かな動揺に気づかない芙蓉は、明るい笑顔でそつと扉間の袖の端を掴むと、肉屋の場所を探そうと辺りを見回し始めた。扉間は、芙蓉の突然のその行動に再び動揺する。芙蓉に冷静で居ると言ったものの、自分が一番動揺している状況になんとも情けなくなるが、それと同時に胸が高鳴り、温まってゆく。

暫く商店街を歩くと精肉屋を見つけ豚肉を買うことが出来た。店主と思われる初老の男は最初に「いらっしやい」と会計の時に「いつも来てくれてありがとう」とだけ言っ

てきた。どうやら芙蓉はこの店にも良く来ていたようだが、店主が無口な男で助かったと扉間はホツとした。

「あつ！扉間様、私が持ちますから！これからは一人でお買物に来ないといけないですし。」

「気にするな。一緒に買い物に来た時くらい、俺が荷物を持つ。それに、これからはもつと俺も一緒に買物に来られるようにするから…」

「お気遣いありがとうございます。…でも扉間様はお忙しいのですから、買物に時間を使つて戴くのは申し訳ないです。」

「…俺が、一緒に、来たいんだ…」

「え？」

「…お前と、一緒に来たいんだ。」

「…あ、ありがとうございますっ！」

芙蓉は本当に嬉しそうな声でそう言うと、大股でずんずんと扉間の前に歩いて出て振り返り、少し恥ずかしそうにまた扉間に向かってはにかんだ顔を向ける。

「フツ…。晩飯、食いすぎるなよ？」

「秋茄子ですか？ふふっ。どうでしょう？凄く美味しそうだったしなあ。あはは。」

あつという間に時間が過ぎ、空は夕焼けに染まっていた。

太陽の周り以外に雲は無く、秋の水のような澄んだグラデーションが広がっている。こうして二人美しい空の下で笑い合っていると、芙蓉が全ての記憶を失ったことも、結婚のことも、そんなことは大きな問題では無い気がしてくる。

この瞬間が、一番信じられる現実であり、そして、扉間の心の中にある紛れもない事実である。

はにかんだ笑顔を向けてくれた芙蓉にもきつと、同じ真実が在るのだと思うと、扉間の目頭は熱くなってゆくのだった。

芙蓉と扉間は肩を並べて家へ続く坂道を上ってゆく。



「昨日の今日で疲れて無いのか？無理するんじゃない。」

「なんていうか、昨日から間を開けたくないなって……出来る事はやりたいんです。それに、早く塾のある日と同じスケジュールを試したいですし！」

翌朝、芙蓉は出勤する前の扉間に今日は一人で買物に行ってみたいと言ってきた。

扉間は少し心配に思ったが、まずは一人で塾の無い日のスケジュールから試してみる必要もある。昨日の様子なら大丈夫だろうと思ひ承諾した。

「ただし、十四時までに帰って来いよ。急用が無ければ飛雷神で十四時頃お前の所へ行く。」

芙蓉は分りましたと笑顔で答え、出勤する扉間を見送った。

頭上には、昨日と同じ穏やかな秋空が広がっている。

そして眼下には、平和な里の風景が広がっている。

坂の上で、芙蓉は大きく両腕を広げて深呼吸をした。風が、芙蓉の後ろで束ねた長い髪を揺らしながら通り過ぎてゆく。

芙蓉は首筋に入り込んだ冷たい風の破片で少し震え、シヨールをしつかりと巻き直して歩き出した。その足取りは軽く、気が付けば歩みは小走りになっていた。

そうして、あつという間に坂を下り住宅街を抜け、昨日来た商店街の入り口に立っていた。

今日も行き交う人の数は多い。大声で客を呼び込む店員の声、笑い合う人たち、俯いて歩く人、無表情で座り込む人、母親の背中で泣きじやくる赤ん坊：人々の様々な表情のコントラストで芙蓉の心が震える。

・・・みんな生きてる。私も、いま生きてるんだわ・・・

なぜそんな気持になるのか自分でも分らない。

しかし、なぜかその当たり前の風景がとても愛おしく、嬉しく感じるのだ。

無性に誰かに会いたくなる。

・・・でも、誰に会いたいだっけ：扉間様？樹ちゃん？カガミ君？火影様？・・・
目の前に浮かぶ全員に会いたい。だが、もつと会いたい人が居る気がするが、思い当
たらぬ。もどかしくなり、芙蓉は気付けば眉間を寄せて俯いていた。

・・・だめ！こんなことで俯いてちゃ！皆に同じくらい凄く会いたいのに！・・・

芙蓉は頭を横に振り、再び前を向いて商店街の中へ歩いて行つた。

昨日と同じ青果店で栗を買い、隣の鮮魚店で岩魚を買つて、近くにあつた雑貨屋で日
用品も買うことが出来た。

芙蓉は荷物の重さに大満足し、商店街を後にしようとして歩いていった。

「よくもまあ堂々と里を歩けたもんだな。」

「里に仇名した罪人のくせにな。」

「誘拐されたまま消えればよかったのに。」

住宅街の路地に入ると突然、忍らしき男二人と女一人が芙蓉の目の前に現れ、矢継ぎ
早に言葉を浴びせてきた。

芙蓉は驚きと恐怖で声も出せず、動けない。

彼らが何のことを言っているのか全く分からないが、自分に向けられている非難だとい
うことは理解できる。しかし、返す言葉も無く、どうすることも出来ず、藤の籠を抱
き締め俯むいた。

「俺たち中忍はな、今でもお前の誘拐犯を探して奔走してんだよ。解ってんのか？」
「マダラの次は、正体も分らない外道を誘惑したんでしょ？いやらしい！」

「扉間様と居るからっていい気になんな！お前なんか居ない方が里の為なんだよ！」
更なる攻撃に、過去に自分はいったいどんな事をしたのだろうかと、身に覚えの無い事にも関わらず、芙蓉は罪悪感で胸がどんどん苦しくなつてゆく。

「おい。黙つてないで何とか言えよ！」

ドスッ！ドスッ！ドスッ！

一人の男が俯く芙蓉に近づこうと足を前に踏み出した瞬間、クナイが三人の忍の足の甲をかすめ、勢いよく地面に突き刺さった。

三人は後ずさり咄嗟に身構えると、芙蓉の隣りにカガミが現れた。

その目には、真つ赤な写輪眼が浮かんでいる。

「うちはカガミ……！」「カガミ君!!」

「お前たちに何の権利があつて芙蓉さんにこんな事をしてる？……答えろ！」

三人の忍は構えを解いて立ち上がり、目を逸らした。

「……フンッ。上忍になったからって偉そうにしゃがつて……ガキのくせに。」

男の一人が口を開く。

「扉間様に鼻履されてる同士、仲が良いのね。」

女もカガミを挑発するように言った。

「俺の任務は芙蓉さんをお守りし、そして誘拐犯を捕まえる事だ。火影命令の任務を邪魔するなら、たとえ里の忍だとしても排除する。それを解つていて俺に挑んでいるのか？」

カガミは芙蓉の前に出て庇うようにして言った。そして写輪眼の巴がゆつくりと回り始めた。それを見た三人に緊張が走り、ゴクリと唾を飲み下した。

「今後と同じことを続けるというなら、今ここで俺に勝つてからにしろ。…来い。」

カガミはそう言つて、印を結ぼうと指を組んだ。

「解つた…。俺たちが悪かつたよ…。おい、お前たち行くぞ。」「…ああ。」「」

男の一人がそう言つと、三人はその場から姿を消した。

「芙蓉先生！大丈夫？」

カガミが芙蓉の方を振り返ると、芙蓉はその場にしゃがみこんでいた。

「芙蓉…先生…」

カガミもしゃがみ、芙蓉の両腕を掴みむと心配そうに芙蓉の顔をのぞき込んだ。

芙蓉の身体は小刻みに震えており、目には涙が浮かび今にもこぼれ落ちそうだった。

「芙蓉先生。怖かつたね…。もう大丈夫だから…。俺が居るから…」

そう言つて、カガミは芙蓉を抱き寄せた。そのまま芙蓉はカガミに身体を委ねると、

藤の籠が地面に落ち、栗が転がっていく。そして芙蓉は声を出して泣き始めた。

「私…私は、いったい何をしたの？罪人って…マダラって誰？…私、私っ…」

「芙蓉先生、落ち着いて。先生は罪人じゃない。あいつらが言っていることはただの中毒だ。マダラっていうのは俺と同じうちは一族の男で昨年亡くなってる…とにかく落ち着こう。大丈夫だから。ね…」

カガミは芙蓉の背中を優しくさすった。芙蓉はカガミの言葉と優しい手によって少し落ち着きを取り戻し、暫くすると泣き止んだ。

芙蓉が完全に泣き止んだのを確認すると、カガミはそつと芙蓉から身体を離し、藤の籠を拾い上げ、周囲に転がった栗を拾って息を吹きかけ服の裾で埃を拭いた。

芙蓉はそつと顔を上げその様子を見ると、自分もゆっくりと栗を拾い始めた。

「…カガミ君、ありがとう…ごめんね…」

「謝らないでよ。さつきは任務だつて言っただけだし、俺はずつと前から芙蓉先生のことを一生守るって決めてるんだ。その為なら何だつてするぜ。やつと上忍になつたしなへへっ。」

カガミは少し幼さが残る笑顔を芙蓉に向ける。その笑顔で芙蓉の心は少しだけ軽くなるように感じた。

「芙蓉!!」

扉間が芙蓉とカガミの目の前に静かに現れた。

時刻は十四時を回ってしまつたようだ。

地面にしゃがんでいる二人を見て、扉間はすぐさま芙蓉に駆け寄り、立ち上がろうとする芙蓉の腕を掴み、ゆつくりと引き起こした。

「大丈夫か？ 怪我は無いか！ カガミ、何があつた。」

「里の中忍三人が芙蓉先生に詰め寄り誹謗中傷してました。」

「そうか・・・」

「あの、私に怪我はありません・・・カガミ君がすぐに助けてくれたので・・・」

芙蓉の目は真つ赤で、顔じゅう涙で濡れている。芙蓉にどんな事が起きたのか、直ぐに察しがついた。

「大丈夫じゃないだろ・・・悪かつたな。もっと早く来てやれなくて。」

そう言つて扉間は芙蓉の頬に残る涙のあとを親指で優しく拭つた。その際も真つ直ぐ扉間の顔を見つめていた芙蓉の目からは、再び涙が溢れ、拭われたばかりの頬を伝う。そしてなお真つ直ぐ、何か言いたげに扉間を見つめている。しかし扉間は何も答えることなく目を閉じる。

「・・・とにかく家に帰ろう。カガミ、貴様も来い。話を聞かせろ。」

「はい。」

カガミは二人に歩み寄り、真っ直ぐ扉間の顔を見上げている芙蓉の横顔を見た。さつき自分が止めたはずの涙が、再び芙蓉の目から溢れている。

それを見るとカガミの心がちくりと痛み、反射的に芙蓉から目を背けた。そして扉間の腕に指を付けた。

三人の姿はその場から消えた。



月明りの差し込む窓辺に立つ。

寒露を迎えた窓の外に見える里の風景は、まるで薄雪が積もっているかのように青白く光っている。

芙蓉は扉間から、芙蓉がマダラと出逢い、そして別れるまでの経緯を聞いた。

マダラと出逢うきっかけを作ったのは、扉間の謀だったことも…。

「私は大丈夫」そう言ったものの、やはり衝撃的な過去は芙蓉にはかなり堪えた。

気を紛らわすために頑張って作った夕食もほとんど喉を通らず、胸が苦しく、重たい。
・・・辛い・・・

過去の事実には思考が付いて行けず、ただその一言に尽きる。

『これはあくまで俺から見た事実を説明しているだけだ。お前の真実を知っているのは、お前だけだ。だからあまり考え過ぎないように。それと…俺と一緒に居たくない

のなら、俺は出て行く。遠慮なく言ってくれ。』

：先ほどの扉間の言葉を思い出す。その言葉で、扉間は心から自分のことを愛してくれているのだと、解った。

かつて、その愛情は歪んだものだったのかもしれないが、その過去を打ち明けることはとても勇気の要ることであり、辛かっただろう。そう思うと芙蓉まで辛くなる。

そして一番の問題は、マダラとの関係である。

いったいその男のどこに惚れ、自分はそこまでの行動を取ったのだろうか。想像もつけない。だからこそ、里を襲ったマダラという男と結婚した自分に強い罪悪感と悔しさを感じる。

なぜそんなことをしてしまったのだろう、と：

ただ、自分がこの里を守ることを選んだことは間違っていないかつたと確信できた。

だがそれは、今こうして好意を抱ける扉間と暮らし、カガミや樹に守られているという生活に、心地良さを感じているからに過ぎないのかもしれない。

それでも記憶を失くす前の自分はこの生活の中でさえ、マダラのことを想い、嘆き苦しんでいたのかもしれない。そう思うとやり切れない。自分が憎くて堪らなくなる。

・・・もう、何も思い出せなくても良いのかもしれない・・・

芙蓉は静かに目を閉じ、大きな溜息をついた後、またゆつくりと目を開いた。

・・・私は教師としてまた教壇に立つ。これからはそれだけを考えよう・・・
確かに、過去は、かけがえのない生きた証である。

しかし、過去を探して生きるよりも、木ノ葉の里の未来を育て生きてゆくことこそ、これから自分がすべき償いだと思つた。

それは都合のいい、自分本位の考え方だろう。

しかし、いま芙蓉が自分自身を救つてやれるのは、この考え方しかない。

芙蓉は机の上の灯りを付けた。

小さな灯りは、先ほどまで部屋を明るく照らしていた月明りを無かつたことにしてゆく。

そして、本棚の中に在つた、少し色褪せた算数の本をおもむろに手に取つて開き、ページを捲つた。

「・・・？」

いつの物だろうか。

まるでついさつき拾つて来たかのように色鮮やかな赤色のモミジが一枚、挟まつていた。

そつと、それを手に取つてみる。

「もしかして、扉間様から貰つたものかな・・・」

昨日、扉間が紅葉を見に行きたいと言っていたことを思い出し、紅葉が好きな扉間が自分にくれたものかもしれないと考える。

だがそんな都合のいい事も無いかと考え直し、再びそのページにモミジを挟んで本を静かに閉じた。

「錦谷の紅葉、まだ見られないかな…観に、行ってみたいなあ…」

火影を支えながら里の為に身を粉にして働いている扉間。

扉間はどんな里の未来を描いているのだろうか。

芙蓉は里の未来を担う扉間と一緒に、扉間の好きな絶景を見てみたいと思った。

芙蓉が階段を降りると、居間に灯りが付いている。

居間の扉の前に立つと、下部のガラス窓から食卓の椅子に座る扉間の足が見えた。少し迷いながら静かに扉を開けると、机に向かっていた扉間が顔を上げる。

「…芙蓉。まだ寝ていなかったのか…寝られなくても横になったほうが良い。」

扉間は仕事の書類を食卓の上に広げていた。それだけでは無く、扉間の腕の前には書類の山が出来ている。

「月がとても綺麗なので、ついぼーっと見てしまいました。扉間様こそ…まだ、お仕事ですか？大変ですね…お茶でも淹れましょうか。」

「あ、ああ…じゃあ、頼む。あ！火傷には気をつけろよ。」

いつもは自室で仕事をするのだが、この日は芙蓉のことが心配で、扉間は芙蓉がいつ起きて来ても良いように居間で仕事をしていた。

扉間は、台所でお茶の準備を始める芙蓉の背中に目を遣りながら、書類をかき集めて片づける。

芙蓉は火傷しないように、布巾で鉄の茶釜の蓋を慎重に開けている。扉間はホツとした様子でそれを見届けると、立ち上がり書類を食卓の端に寄せた。

間もなく炒った黒豆の良い香りが漂ってきた。その香りは、芙蓉が傍に居る安心感を確かなものにさせるかのようだ。

「夜遅いですし、覚醒作用の無い黒豆茶にしてみました。」

「ありがとう。良い香りだな…」

「ええ…ほっとする香りです。」

二人は暫く、黙ってお茶をすすった。

少し下を向き、目を伏せた二人の姿は、まるで何かを誓い合っているかのように見える。

「あの、扉間様…錦谷はまだ、紅葉しているでしょうか？」

「うん…今日は日が変わって十月二十七日か。丁度見頃の時期だろうな。」

「あの・・・もし、良かったら・・・連れて行つてくれませんか？あつ、勿論、お忙しいと思いますし、遠いかもしれないし、無理だつ」

「行こう。俺もお前と一緒に行きたい。だいぶ仕事をこなしたからな・・・明後日なら休める。」

「・・・本当ですか？・・・ありがとうございます！」

「だが、なぜ突然錦谷に行つてみたくなつたんだ？」

芙蓉は湯呑を食卓に置き、中に残つているお茶に目を落としながら答える。

「昨日、扉間様のお話を聞いて、私も扉間様が好きな景色と一緒に観てみたいなって・・・
そう言い終わると、芙蓉は少し申し訳なきような顔で扉間の顔をうかがつた。

『私も扉間さまの好きな景色と一緒に・・・』

扉間は感動のあまり、その言葉の意味がよく理解出来ないでいる。動転している。

だがしかし、芙蓉は先ほど自分が話した二人の過去を、どう考えたというのか。

「扉間様・・・あの、ごめんなさい。お気に障りましたか・・・」

「ち、違う!!だって、お前・・・俺は、お前を・・・」

扉間は食卓に肘をついたその掌を額に当て、俯いて目を泳がせた。

「私は、過去で未来の辻褄を合わせる気はありません。私はいま、貴方と一緒に居られて幸せです。それだけでは駄目でしょうか？」

「芙蓉・・・」

芙蓉は立ち上がり、扉間の握り締められたほうの手を、そつと両手で握った。

「扉間さまと同じ景色が：同じ未来が、見てみたいんです。」

扉間は顔を上げ、目を見開いて芙蓉の顔を見上げた。

芙蓉の顔は、光溢れるような優しい笑顔だった。怖いくらいに、美しい。

そして柱間は自分の拳の上に重ねられた芙蓉の白い手の甲に恐る恐る手を載せ、言う。

「ありがとう・・・」

「私のほうこそ、ありがとうございます。」

扉間は芙蓉の言葉にぎこちない笑顔で頷いた。

(24) この身は覚えている。扉間との関係

「わー！超キレイ!!絶景かな〜絶景かな〜!!」

錦谷の展望台に着いて最初に声を上げたのは、樹だった。

・・・二人で来られると思ひ込んでいた俺が、悪い、のか?・・・

樹の横には芙蓉、二人の後ろにカガミ、その一番後ろで三人を観ながら扉間は心の中で大きな溜息をつき、凹む。

・・・いや、あの流れなら普通、二人きりで行くのが当然の流れだよな・・・

「扉間様!扉間様の言う通りの景色ですぬ!!」

芙蓉が満面の笑みで扉間の方を振り返って言った。

「ああ。」

扉間は芙蓉と視線を合わせず、腕を込んだままそっけなく答えた。

「扉間様・・・?」

「あー気にしない、気にしない。あのね、扉間様は芙蓉と二人で来たかったのに私とカガミが居る事が気に入らないんだよ。ほっときやいいんだって。」

「.....」

扉間は樹に今の心境を説明され、怒りが込み上げるが芙蓉の手前、何も言い返せない。「芙蓉先生、あっち見て！カワセミがいる！」

カガミが樹の言葉を聞いて表情を曇らせた芙蓉を見て、咄嗟に芙蓉の背中に手を当てて山の方を向かせ、川を指さした。

「え？どこ？……」

「ほらあそこ、川の大きな石の上、魚をくわえてる。もう里では滅多に見られない鳥だよ。あの鳥も紅葉みたいだ……」

「……あ、みつけた。ほんと、紅葉に負けない鮮やかさね。綺麗……」
芙蓉に笑顔が戻った。

その様子を見て、樹は自分の放った言葉の無神経さに気づき、恥ずかしくなった。扉間も同じく、つい感情を表に出してしまったことを反省した。

一番大人なのは、十五歳のカガミだった。

扉間は一度俯いてふっと前を向くと、ゆっくり歩いて芙蓉とカガミの隣りに立った。そして腕を組むと、目の前に大きく広がる錦絵の絶景を目を細めて見渡した。

谷の両側の山肌は、赤・橙・黄・緑・茶で錦を作り陽を浴びて輝いている。

谷底には翡翠色の川が流れており、野鳥が囀りながら飛び交っている。そして背景の空は雲一つなく濃い青が広がっている。

扉間は両手の人差し指と親指で四角を作り、風景を切り取って、片目をつぶってその風景を眺めてみた。

「こうすると名画みたいだな。まあ人間にはこんな絶景は描けないが……」

芙蓉とカガミもそれを見て、真似してみる。

「……本当ですね。自然は天才芸術家、ですね!」

芙蓉は満面の笑顔で扉間とカガミ、両方の顔を見て言った。

「……確かに。こうすると、さつきとは違った美しさを感じる気がするかも。」

樹も小走りで芙蓉の隣りに立ち、三人と同じ事をして急いで感想を言った。

「四枚の絵が出来ましたね。」

カガミが全員で同じ事をしている様子を見て、少し笑いながら言った。

風が吹き、辺りの木の葉が揺れサワサワと優しい音を鳴らす。

山が笑っている様にも、拍手をしている様にも聞こえる。

そして四人も、互いの顔を見ながら笑った。

「……じゃあ、お昼ごはんにしましょうか!」

「わーい!」

樹とカガミが声を上げて喜ぶ。芙蓉もその顔を見て一緒に嬉しくなった。

実は当初、芙蓉も扉間と二人で来ようと思っていた。

しかし、つい浮かれて樹に扉間が錦谷へ連れて行ってくれる事を話してしまった。すると樹は、扉間の弟子たちも連れて皆で一緒に行こうと言い出したのだ。

扉間は二人だけで来たかったのかもしれないが、樹とカガミと一緒に来られて良かった、むしろヒルゼン、ダンゾウ、ホムラ、コハルが来られなかったことを芙蓉はとても残念に思っていた。

樹とカガミが持つてきたご座を敷き、クナイで四隅を地面に固定する。そして芙蓉がその上に重箱を置いて風呂敷を解き、広げて並べる。四人がご座の上に座ると、芙蓉は取り皿と箸を扉間から順に渡していく。

「美味しそーっ！でもこれだけの品数を作るのは大変だったでしょ？詰めるのも。もうこれ、おせち料理みたいじゃん。イヤそれ以上だわ。」

「ウフフ。皆で来られるのが嬉しくてつい、張り切っちゃった。でも同じ食材を使っているものも多いから、そんなに大変じゃなかったよ。」

芙蓉は重箱の蓋で顔を半分隠し、照れ笑いをした。

「いなり寿司も美味しそうですね。…キラキラしてる。」

正座をしているカガミはいなり寿司とむすびの入った重箱に身を乗りだして言った。

「お砂糖とみりんをちよつと多めにして、甘めの味付けにしているからよ。」

「お前のいなり寿司を食うのは久しいな。楽しみだ。」

「……………」

樹は三人がいなり寿司を見ながら楽しそうに話しているのを見て、複雑な気持ちになる。

初めてマダラの家に行った日の事を想い出していた。

芙蓉は、あの時マダラに向けていた笑顔を、今、扉間に向けている。

本当に芙蓉はマダラへの愛情まで忘れてしまったのだと改めて実感した。

……マダラとのことはもう、思い出さなくてくれればいいのに……

そう思いながら樹は、三人の会話に笑顔で頷いて見せた。



錦谷に行った日から四日後。

ついに芙蓉は、私塾の仕事がある日のスケジュールを一人でこなしてみる事になった。

前日の夜、扉間と芙蓉は食卓に広げられたスケジュールの書かれた紙を覗き込んでいた。

「いいか、この通りにいかななくても気にするな。出来る事だけでいいから無理だけはないぞ。何かあったらすぐ家に帰るんだ。分ったか？」

扉間は芙蓉の右肩に手を置き、少し険しい顔で言った。

「はい。分かりました。．．．ああ、やっぱりちよつと緊張します。」

芙蓉はそう言つて自分の胸をさすつて目を閉じた。

「そう考え過ぎるな。最初からうまくいく方が奇跡なんだ。気楽にな。」

「はい．．．そうですね。」

「芙蓉、ちよつと手を出してみる。」

「：はい、こう、ですか？」

芙蓉は右手を扉間へ差し出した。

すると扉間はその手を、両手の掌で包むように握りしめ、重なった二人の手を見つめる。

「絶対、大丈夫だ．．．芙蓉なら、大丈夫。」

「扉間．．．さま．．．」

扉間はフツと微笑んで芙蓉の顔に視線を戻す。

「昔、お前はこうやって俺のことを励ましてくれた。俺がお前にしたところで、励ましになるかは分らんが：。」

「そんな！とつても嬉しいです。元気が出てきました。ありがとうございます：扉間さま。」

芙蓉は僅かに涙ぐみ、扉間の目を見てニツコリと笑顔を見せた。

その笑顔に思わず、扉間は芙蓉を抱き締めてしまった。

「……………」

「扉間さま……ありがとう。本当に……」

翌日。

快晴の空に木の実を降らせる冷たい風が駆け抜ける。その風で地面の木葉が舞い、どこか懐かしさを感じる乾いた香りが鼻をくすぐる。

「扉間さま。いつてらっしやいませ。寒いのでお気を付けて。」

「ああ。お前こそ、くれぐれも頑張りすぎないように。行ってくる。」

玄関の扉が閉まると、芙蓉は深呼吸をし、胸の前で拳を作る。

「よしっ。気楽に行こうつと……」

そう呟くと、芙蓉は腕の袖を捲り上げながら風呂場へ向かって行った。

洗濯と掃除はいつもしていることなので難なく終わった。庭先に洗濯物を干して冷えた身体と指先を温めようと、居間に入って火鉢の前にうづくまる。火鉢の中の小さな火を見ていると、不思議と心が和んでくる。

消えそうで消えない、静かに燃え続ける火に、芙蓉は今の自分の意思を重ねてみる。

……火……意思……火の、意思……どこかで聞いた言葉だけ……

『火の意思』という言葉を思い出し、芙蓉はその意味と、何時何処で知ったものかを考えるが、そこまでは思い出せない。

考え込んでも仕方ないと、後で扉間に訊いてみることにして気を取り直して立ち上がる。そして自室への階段を昇り部屋に入った。

今日は授業をするわけでは無いので準備は不要なのだが、芙蓉は私塾の指導要綱を手に取り読み始めた。今の芙蓉は、教師未経験者と同然である。もう一度教壇に立つ為には、再度学習が必要だと考えていた。

以前作った授業ノートを読みふけていると、気づけはもう正午を回っていた。「頭を使ったら、いつもよりお腹空いちやたな。」

達成感と空腹がどこか心地良い。軽い足取りで階段を降り、台所で昼食の準備を始めた。食卓に着き、窓の外の青空を眺めながら食事をする。気楽に行こうとするものの、やはり気を張ってしまっているのか思ったよりも食べられなかった。

十三時半少し前、芙蓉は藤の籠を抱えて玄関を出る。風は少々強いが日差しは温かく、坂を下っているうちに身体がポカポカとしてきた。

住宅街の路地に足を踏み入れると、先日恐ろしい出来事を思い出してしまった。

しかし、芙蓉は前を見てしつかりとした足取りで歩いてゆく。もしまた同じことが起きたら……その時は、記憶が無い事を伝えて謝り、これから里の為に尽くしていくと伝え

早々にその場を立ち去ろう……そう決めていた。

この日は誰に絡まれることもなく、無事に買物を終えて帰宅することが出来た。ほっとした気持ちで玄関の扉を開けると、玄関に扉間の靴があった。

「……扉間さま？ 帰っていらつしやるのですか？」

「おかえり。買物の道中は大丈夫だったか？」

扉間が玄関に向かって歩いて来る。

「はい。無事に！ 扉間さまは何か御用で？」

「……ちよつと忘れ物を取りにな……無事なら良かった。仕事に戻る。」

そう言うとき芙蓉の肩をポンと軽く叩き、玄関で靴を履き始めた。

「今日は美味しそうなウグイを見つけたので、これから煮付にしますね。」

「うん。それは楽しみにだな。では行ってくる。」

「いつてらつしやいませ。」

芙蓉はその場で姿を消す扉間に向かって手を振った。

おそらく忘れ物を取りに来たというのは嘘だろう。

強面で口調もキツイ扉間だが、それに反して、本当に優しい。

そのギャップになんとなくむず痒いような気持になる。

樹や弟子、部下に対しても、厳しい言葉の中には確かな優しさがあることに、記憶を

無くした芙蓉もすぐに気づいていた。

そんな扉間の傍に居られることが、無性に嬉しくなった。

十六時五十五分。夕食の準備と出勤の準備を終え、扉間の帰宅を待っている。

授業をするわけではないと何度も自分に言い聞かすのだが、やはり緊張する。胸に手を当ててゆつくりと息をするが、鼓動は早いままだ。

「いま帰った。準備は出来ているか？」

玄関で扉間の声が聞こえた。返事をして急いで立ち上がり、荷物を持って忘れ物が無いか確かめる。そして小走りで玄関に向かう。

「じゃあ行くぞ。」

「はい。お願いしますー！」

芙蓉は教員室を出て、教科書を胸に抱えて一人で教室へ向かう。

あくまで、授業に向かうフリだ。教室に入って状態を確認したら直ぐに教員室へ戻る。

既に授業時間は過ぎており、他の教室では授業が始まっているため廊下に塾生の姿は無い。

授業の行われている教室に差し掛かると、中から教師の講義の音が聞こえる。時より塾生の笑い声も混じる。楽しそうな様子に芙蓉は立ち止まり、壁の向こう側を見つめ

る。

胸がぎゅつと締め付けられ、羨ましい気持ちになる。記憶が無くなる前の自分も、こんな授業を行っていたのだろうか。

再び歩きだし、目的の教室の前まで来た。中には誰も居ないはずなのに、照明が付いている。消灯しておかなければと思つて扉間を開く。

『芙蓉先生、おかえりなさい!!』

「えっ……」

なんと、十五人ほどの机全てに塾生が座っており、芙蓉に向かつておかえりなさいと言いながら拍手をし始めたではなか。

「芙蓉先生！おかえりなさい！へへっ。びっくりした？」

そう言つて、一番後ろの席に座っていたカガミが立ち上がり、芙蓉に大きく手を振る。

「カガミ君……こ、これは？」

「リハビリだとしても、やっぱり本番さながらほうが良いかなつてさ……余計だったかな？」

芙蓉が塾に出勤すると知り、カガミは塾生たちに声をかけ皆で教室に集まっていたのだ。

「みなさん……私の為に、集まってくれたのですか？……」

「そうだよ！だって早く先生に会いたかったもん。」「私も！」「俺も！」

塾生の数人が嬉しそうに芙蓉の言葉に答える。

「……あ、ありがとう。凄く、嬉しい……でも……」

芙蓉はぎこちない笑顔で礼を言ったが、そのまま俯いて悲しそうな顔に変わる。

「皆先生のことちゃんと解ってるよ。そのうえで集まってるんだ。たとえ先生が俺たちのことを忘れていても、俺たちがちゃんと、先生に教わった事、先生と一緒に過ごしてきた時間を覚えてる。今度は俺たちが先生の役に立つ番だよ。」

「カガミ君……」

「カガミ、なに先生の前だからってカッコつけてんだよく？」

ワハハハと塾生たちに笑いが起こる。

「芙蓉先生、私たちは先生のことを絶対忘れませんし、ずっと味方ですよ。先生がまた授業が出来るようになるまで協力しますから！」

「そうそう。だからそんな悲しい顔しないで下さいよ。授業のリハビリ、いつでも僕たちが手伝います。」

女子と男子が、そう言って芙蓉を励ました。そして拍手が沸き起こる。

「みなさん……本当にありがとう!!嬉しいです!私も、再びここで授業が出来るよう頑張りますね！」

「芙蓉先生、手に持つてるの、数学の教科書じゃん？ 試しに何か問題出してみてよ。」

芙蓉の一番近くに居る男子がそう言った。

「えっ……でも……できるかな……」

「おい！ カクト、何言ってるんだ。先生、無理しないでいいよ。」

「うん。でもせっかくだから……じゃあ私の好きな問題、皆で解いてみましょうか！」

わーいと塾生たちが喜びながらノートを開き、鉛筆を持った。芙蓉はその様子を見て、緊張と共にワクワクしてきた。

皆で答えを出しあつた後、二十分ほどで問題の答えの解説を終え、芙蓉は塾生たちに手を振られながら教室を出て行つた。

興奮と緊張がまだ収まらない。塾生たちには今の自分の教え方がどう映つたか心配だったが、やはり充実した時間だった。塾生たちの真剣な眼差しに、今でも心が震えている。

「芙蓉先生。授業のリハビリはどうでしたか？」

教員室に入ると、ドドメが芙蓉に向かって笑顔で言った。

「塾長……もしかして、ご存知だったのですか？」

「ああ。カガミ君と何人かが私の所に来てね、是非集まらせてくれと申し出てくれたんだよ。君に伝えようか迷つたんだが、サプライズにさせて貰つたよ。大丈夫だった？」

「は、はい！とても驚きましたけど、もの凄く感動しました！早くまた授業が出来るように頑張ります！」

「芙蓉先生なら大丈夫だよ。それに君は一人じゃない。焦らず、自分と周りを信じてごらんなさい。」

「ありがとうございます。ドドメ塾長……」

芙蓉は、それまで堪えていた涙が一気に溢れ泣き出し、ドドメは焦って慰めた。



「そうか……。それは良かったな。」

扉間は芙蓉から私塾での話を聞き、静かに頷きながら、深い喜びを込めて言った。

「はい……。もう、嬉しすぎて、胸ががいっぱいです。」

芙蓉も、食卓の上に夕食のおかずを並べながら感慨深げに目を細める。

「塾生たちのお前を慕う気持ちには、本当に驚かされるな。」

「早く以前に戻らないとっていうプレッシャーも感じますが、皆が『ずっと味方だよ』って言うってくれて、本当に嬉しくて。これからも塾に行くのが楽しみになりました！」

「うん。お前には仲間が沢山居る。焦らなくていい。お前のペースで歩いてゆくのを皆が見守っている。」

二人は目を合わせて微笑み合うと、互いに笑み笑みしながら箸を持ち夕食を始めた。二十一時半少し前。

芙蓉はこの日のスケジュールを全て終え、風呂に入っていた。

気が緩んだせいか、それまで感じなかった疲れを一気に感じる。しかし、心地よい気だるさだ。今日の大きな喜びを思い出すと再び胸が熱くなり、そつと目を閉じた。

もう一度目を開けると、柔らかい白い湯気が優しく揺らいでいる。

「……………」

芙蓉は再び扉間のことを考えた。

「良いお湯でした。ありがとうございます。」

「そんな毎日礼を言わんでもいい。他人の家じゃあるまいし。」

扉間は卓袱台の方で寝転がり、芙蓉に背を向けて本を読んでいた。今夜は冷えるようだが、部屋の中は火鉢の熱と、扉間の忍術のお陰で暖かい。

「あの……………」

「ん？」

「……………」

「なんだ？どうかしたか？」

「えつと……………」

「……言いつらいことか？」

扉間が身体をお越し、胡坐をかいて芙蓉を見上げる。芙蓉は俯き、床に目線を泳がしている。

「もう……この後は、寝るだけ、ですか……？」

「ああ。そうだが。なんだ？」

「……えつと……そう言えば！『火の意思』ってなんですか？」

「それ……思い出したのか？」

「はい！昼間火鉢を眺めていたら、何となく頭の中に浮かんできて……」

「そうか!!火の意思というのは……まあこつち座れ。話してやる。」

扉間は嬉しそうに、木ノ葉が暮れの里の忍が受け継ぐべき意思である『火の意思』について芙蓉に語って聞かせた。芙蓉も目を輝かせながら、うんうんと一生懸命聞いていた。

「私は、その火の意思を受け継ぐ子供たちに学問を教えていたんですね……嬉しい。」

「子供らだけではない。お前だって立派に火の意思を受け継ぐ者だ！」

扉間は芙蓉の肩に手を乗せ、嬉しそうに微笑んで見せた。

その言葉を聞き、そして扉間の優しい笑顔を見て、芙蓉は堪らなく嬉しくなる。

芙蓉はそつと、左肩に乗せられている扉間の手を握った。

「扉間さま……今日は本当にありがとうございました。何も思い出すことは出来ませんでしたけど、私、この先に希望がもてました。」

「何を言っている。火の意思を思い出せたじゃないか。凄いでぞ！」

二人は顔を見合わせて笑い合った。

芙蓉は、こうして二人で笑っていると不思議と全てが大丈夫だと思えてくる。

「疲れただろう。明日は俺も休みだし、八時くらいまでゆっくり寝ていいぞ。」

「はい。ではお言葉に甘えて朝はゆっくりさせてもらいますね。」

そう言うのと俯いて、先ほど扉間に言おうと思っていた言葉を飲み込んだ。

「どうした？」

「いいえ。やつぱり、少し疲れているみたいです。あはは。」

二人は揃って二階へ上がり、それぞれの部屋に入って行った。

居間の空気はすっかり冷えており、眠っているかのように静かである。

芙蓉は眠った空気を起こさないよう、ゆっくり静かに歩く。そして卓袱台のある部屋の方へ行き、縁側の扉を数センチだけ開け、そと外を見る。

外は景色が見えるほど明るくなってはいるが、全てが青い世界に染められており、太陽は顔を見せていない。鳥の声もまだ聞こえず、静まり返っている。

それを確認すると扉を大きく開け、縁側に出て群青色の空を見上げた。

芙蓉は疲れていたものの、昂っていた気持ち収まらず未明に目が覚めてしまった。疲労のせいなのか、それともやはり記憶が戻らない焦りなのか、まるで胸に靄（もや）がかかったように重い。朝陽を浴びれば、その靄が晴れるのではないかと考えて降りてきたのだ。

芙蓉はその場にしゃがみこむ。

トントントントン・・・

階段を下りてくる扉間の足音が聞こえ、こちらに向かってくる。芙蓉は扉間を起こしてしまったかと焦って立ち上がる。

「・・・どうした？まだ夜も明けぬ時間に。」

「ごめんなさい！起こしてしまいましたか？」

「お前が部屋を出て行く気配を感じたが、いつまでも戻って来ないから・・・」

扉間はワダチの事件以来、常に神経を研ぎ澄ましている。些細な事でも見落とさないように。

「ごめんなさい。気が張っていたせいか、早く目が覚めてしまつて…朝陽を見たらすつきりするかなあつて…」

「何を言っているんだ。日の出まではまだ一時間はあるぞ。風邪引くぞ。」

扉間はそう言うのと芙蓉の手を握った。

「こんなに冷たくなつて……馬鹿だな。日の出ならお前の部屋からでも見えるだろう。」

「そ、そんなんですね……」

芙蓉がその事まで忘れて一人で縁側に佇んでいたことは、扉間に、いま芙蓉が不安で居ることを気付かせた。

気丈に振舞っているものの、やはり芙蓉は不安に怯えているに違いない。

それを気付けなかった自分が情けなくなり、思わず芙蓉を胸に抱き寄せた。

「……あつたかい。」

「不安だよな……。すまない。解つてやれていなくて。」

芙蓉は、扉間の胸からそつと顔を離し、扉間の顔を見上げる。

「でも、扉間さまにこうして貰うと、とつても安心できます。」

そう言つて少し寂しそうな顔で微笑んで見せた。その笑顔に扉間は胸が締め付けられ、気づけば芙蓉の唇に自分の唇を重ねていた。しかし、不安を抱いている今の芙蓉に口づけをすることに、どこか罪悪感を感じてすぐに唇を離し、顔を背けた。

「す、すまない……」

しかし、芙蓉はその横顔をじつと見つめている。扉間はその視線に気が付き、戸惑いながらも芙蓉の方を見た。

潤んだ暗い琥珀色の瞳が、自分を真つすぐ見つめている。

扉間はその瞳から目を離すことが出来ない。

すると芙蓉はそつと瞼を閉じた。それとは反対に唇は僅かに開いている。

扉間にはその行動と表情の意味が直ぐに分った。

しかし、戸惑つてしまい何もできない。

そのうちに芙蓉は目を開け、再び扉間の胸の中に顔を埋め、ぎゅつと抱きついた。

「寒い……。」

「あ、ああ。部屋に戻ろう。」

浮かび上がる感覚と共に周りの景色が変わる。二人は芙蓉の部屋の中央に居た。

扉間が芙蓉の背中を押して寝台に座らせ、ショールを脱がし、布団をめくる。

「ほら。早く布団の中へ入れ。」

すると芙蓉は扉間の左手腕を掴み、俯いた。

「……一緒に布団に……温めて……ください。」

扉間は、先ほど芙蓉が口づけをせがんできたことに応えられなかったことを思い出し、無言で芙蓉の頭を撫でた。

「ほら、そつち寄れ。俺はこつちに入るから。」

二人は一緒に布団の中に入った。

そして扉間は芙蓉を優しく抱き寄せ、片手で芙蓉の手を握って温める。

シートも二人の足も冷たいが、高鳴る鼓動で徐々に体温が上がってゆくように感じた。

芙蓉は温められる手の指先を見つめながら、まだ冷たい足先を扉間の足先に絡めてみた。扉間の足先はもう既に温かい。

「お前、だいぶ冷えてるな。」

「・・・記憶を無くす前の私も、凍えていたんだと思います。でも扉間さまの隣りで、ずっと温めて貰っていたんですわ。きつと・・・」

「芙蓉・・・」

「お願い。もっと温めて・・・」

今にも涙がこぼれそうな瞳で懇願する芙蓉を見て、扉間にはもう、迷う暇すら無かった。

扉間は芙蓉の頭を抱き、唇を息つく間すら無いほどにむさぼる。

身体を起こして仰向けの芙蓉の上に覆いかぶさった。

そして首筋を舌でなぞり、吸い付く。

「あんっ・・・扉間さま・・・」

扉間は芙蓉の寝間着のボタンを外してゆく。目の前に真っ白な胸が現れる。

それを見て、自分も寝間着を脱ぐ。そして芙蓉のズボンを脱がせると、乳房に吸い付き、左手で反対の乳首を弄ぶ。

「はああんっ」

芙蓉は背中を反らし身悶える。

扉間は乳首を舐めながら、浮きそうな芙蓉の腰を愛撫すると、芙蓉は更に大きな声を出し、ぐつと身悶え、扉間の肩に爪を立てた。

扉間は顔を上げ芙蓉の顔を見ると、芙蓉と目が合う。

肩で息をする芙蓉の瞳は虚ろで、もっとしてとねだっている様に見える。

・・・お前が俺を求めてくれるなら、俺は全てを捧げよう・・・

扉間は芙蓉に口づけをする。

先ほどとは違い、今度はいたわる様に優しく唇をなぞり、舌を入れて芙蓉の舌に絡ませる。痺れるような快感が芙蓉の下腹部を熱くさせる。

扉間の右手が芙蓉の股間に伸び、優しく撫でる。既にとろりと蕩けており、温かな蜜が扉間の指に絡みつき、クチュクチュと音を立て始める。

それを確かめると扉間は唇を離し、身体を起こして、芙蓉の下着を丁寧に脱がした。

そして芙蓉の両膝を持ち、ゆっくりと左右に開く。芙蓉は恥ずかしそうに、握った手を口に当てて顔を背ける。

扉間の目の前には、濃い桃色に輝く芙蓉の秘部が口を開いて待っている。

扉間はその顔に舌を埋め、舌で愛撫を始めた。既に膨張した突起部分が扉間の舌に弾かれるたびに硬くなる。

「はあ、はあ、はあ……あつあつあつ……もう……だめっ……」

愛撫を止め、今度は蜜が溢れている膣に中指と薬指を入れ、出し入れする。

「やああんっ。あつあつあつ……あんっ……だめっ！だめえ！」

芙蓉の言葉を見無視して出し入れを続け、空いている手で芙蓉の乳房を鷲掴みにする。

「……止めるか？」

「……ちがつ……」

「俺はお前が望む事ならなんでもしてやる。だがきちんと言葉で言わんと分からんぞ。」

「……指じや嫌……扉間さまのが欲しい……」

「どれだ？触ってみろ」

芙蓉は恐る恐る手を伸ばす。そして、先ほどから自分の身体に何度も当たっていた硬い扉間の男根を撫でた。しかし芙蓉は、余りの恥ずかしさに扉間の顔を見ることが出来ない。

「……これです……」

「よく言えたな……良い子だ。」

そう言うと扉間は芙蓉に口づけをし、そして、芙蓉の腰を持ち、挿入する。膣の入り口は狭かったが、蕩ける蜜に誘われ、直ぐに奥まで達した。

「あああ——っ!!……」

奥まで貫かれると、余りの快感と僅かな痛みで、芙蓉の喘ぎ声途絶える。口を開け、舌を浮かせながら、いやらしい目つきで扉間を見つめる。

その表情を見て、扉間は思わず腰を早く動かしてしまう。

「あんっあんっあんっ!!……ああっ!!……」

芙蓉はシーツを掴み握りしめ、頂点に向かってゆっくりと上り詰めていくことに集中する。

扉間は芙蓉のいやらしく乱れる顔を見ながら、激しく芙蓉を迫いつめる。

一瞬、芙蓉の目にカーテンの隙間から青白い光が見えたとたん、芙蓉は絶頂に達した。芙蓉が脱力するのと反対に、扉間は体勢を変え、更に激しく芙蓉の子宮を突き上げる。

「……あああん!だめっ……そんなにつ……」

激しく突いてくる扉間の男根が、更に固く、大きくなるのを感じ、芙蓉も再び快感に痺れる。

膣がぎゅつと狭まり、扉間の男根を締め上げる。

「芙蓉……愛している」

「扉間さま……私も……愛しています」

扉間の快感も絶頂に達し、芙蓉の中に射精した。

扉間が射精した感触で芙蓉も静かな絶頂を迎え、身体がびくびくと痙攣する。

……ハアハアハアハア……

二人はきつく抱き締め合い、布団に沈む。

身体はすっかり熱くなり、軽く汗ばんでいた。

窓の外は明るくなっていったが、まだ太陽は昇っていない。

「扉間さま……やっぱり、私たち、ずっと前からこうして身体を重ねていたんですね……」

そう言って微笑む芙蓉の目から、一筋の涙が流れた。

扉間は少し寂しそうに微笑むと人差し指で優しくその涙を拭った。そして芙蓉に口づけをしてから起き上がり、今度は芙蓉をうつ伏せにさせ、白く絹のような背中を愛撫する。

芙蓉の裸の背中が服を着ている時よりもずっと細く、か弱く見える。しかし腰のくびれは見事で美しく、丸い尻もふっくらと柔らかい。

その体のラインをなぞりながら、扉間は、傷つき壊れてしまいそうにな芙蓉をいたわり、これからもずっと守り続けることを心に誓った。

芙蓉の腰を掴み、膝をつかせ尻を持ち上げ、後ろから挿入する。

いたわる気持ちに反して、これまで堪えてきた欲望が溢れ出し、腰の動きが速まる。「あああんっ．．．あっあっあっ．．．」

芙蓉の栗色の髪の毛が、背中をサラサラと滑り落ちてゆく。

いつのまにか太陽が山入端に顔を出し、淡い朝陽がカーテンの隙間から差し込んでいた。

(25) 卑劣様、素直になる

新しい年を迎えてから数カ月経つ。

どうやら菜種梅雨に入ったようで小雨の日が続いている。

霞立つ山からは鹿の求愛の声がこだまして来る。

しつとりと濡れた桜の蕾も随分と大きくなってきた。

「妻同伴か。ミトを連れて行くことに何か問題でもあるのか？」

書庫の棚に本を返却している扉間と後から入ってきた柱間が、来週に予定されている火の国の大名との懇談会について話している。柱間は「配偶者、または子息同伴で出席されたし」との要請が来たことを扉間に伝えたのだが……

「違う！お前のことだ、扉間。お前は芙蓉と出席したらどうだ？」

「俺と芙蓉は……夫婦では……ない。」

「何を言う！芙蓉とはもう夫婦のようなものではないか！里の皆がそう思っておるぞ。」

「周りがどう思おうと、俺たちは夫婦ではない。」

「だが、芙蓉はお前の求婚を待つておるのかもしれないぞお！」

「それは……。とにかく、兄者には関係無い。」

扉間は柱間の言葉に動揺している所を見せまいと、無表情で本を次々と棚に入れてゆく。

その横顔を見ながら、柱間は腕組みをしハアと大袈裟に溜息をついた。

「それは困ったのう……お前だけが同伴者無く一人で参加するとすると、大名たちからの見合いの話を山のように受ける羽目になるだろうのお。大名直々の見合い話を無下に断るわけにはいかんし。芙蓉とて、お前が見合いに明け暮れるのを見ていて好い気持ちはしないだろうのう……いや、これは困ったの!!」

そう言う柱間はニヤニヤと笑って体を左右に揺らしている。

扉間は手を止め、柱間をキツと睨みつけた。その視線を気にもせず、柱間が言う。

「ここは芙蓉に『協力』して貰うのが、得策だと思うぞ? ハハハハッ!」

「……ハア。とりあえず、芙蓉に話してみてやる。」

「うんうん! それが良いぞ!! 楽しみだのう! ガハハハハ!」

「うるさい!」



午前の仕事を終え、扉間は参謀室の机の上で芙蓉の手作り弁当を広げていた。箸を揃えて手を合わせると、小さくいただきますと呟き昼食を始める。

昆布じめを口に運び、窓の外の春霖(しゅんりん)で煙る里の風景に目をやると、ふ

と、五ヶ月ほど前の早朝を思い出した。

芙蓉を抱くことが出来るのは芙蓉が記憶を取り戻すまであり得ない、いや、あつてはならない事だと思つていた。

記憶を失くした芙蓉は本当の芙蓉ではない、あの時芙蓉が選んだことは芙蓉の本意ではないと言ひ切るつもりはなかつたが、やはり、記憶が戻つた時に後悔するような選択を芙蓉にさせてはならないと思つていた。

しかしあれ以来、芙蓉は扉間に対して「愛している」と言葉にするようになっていた。嬉しい反面、芙蓉の記憶が戻つた時気持ちはどう変わるのか、そして芙蓉が扉間を愛してしまつたことを後悔するのではないかと思うと、相変わらず今でも心が痛むのである。

そしてこの五ヶ月間、残念ながら芙蓉の記憶喪失の原因は全くもつて不明のままである。そのうえ殆ど記憶を取り戻せずに居ることも、扉間には、思ひ苦しかった。

芙蓉自身は笑顔で居るが、今でも心の中で苦しい想いをしているに違いない。

そしてまた、弁当に目を落とす。

『夫婦のようなものではないか！』

先ほどの能天気な柱間の言葉が頭にこだまする。そして目の前には、今朝この弁当を手渡してくれた時の芙蓉の笑顔が浮んだ。

・・・確かに。並みの夫婦よりは、夫婦らしい、かもな・・・

目の前の弁当は、菜の花の辛し和えや鮮やかな卵焼き、ヒメマスの西京焼き、旬の苺など、豪華かつ栄養のバランス抜群の内容だ。

まさに、芙蓉の愛情を具現化したようなものである。

そして何より、これだ。

『扉間様お疲れ様です。間もなく桜の季節。錦谷の紅葉が懐かしいですね。』

弁当の包みの中には毎日、芙蓉が書いた短い手紙が入っているのだ。

思わず扉間の顔が緩み、口角が上がる。そして、嬉しさとむず痒さで僅かに身震いした。

コンコンコン。

「・・・入れ！」

扉間は急いで弁当に蓋をし、手紙を机の中にししまう。

「あつ。お食事ちゆう申し訳ありません。」

「失礼いたします。」

「樹、お前は申し訳無いなんて微塵も思っていないだろ…つたく。何だ！」

樹とカガミが揃って参謀室に入ってきた。

「来週の懇談会、芙蓉と一緒に行くんですよね？」

扉間は肘掛に載せた肘がズルつと落ちそうになった。

「……兄者の奴めえ。もう教えたのか……」

「ま、まだ一緒に行くとは決まっております。」

「ワダチの件は未だ何も分っていませんが異常も全くありません。しかし芙蓉先生と扉間様がご一緒に里を出るとなれば、ワダチ本人が何か仕掛けてくるかもしれない。俺も一緒にいかせて下さい。」

「そういうことです！で、私も一緒に行きます！」

「ハア……あのな、まだ決まっておりますと言っているだろ。護衛は決まってから俺が決める。」

「でも、芙蓉の護衛は、私とカガミが一番適任だと思っておりますけどお？」

「わかった、わかった！考慮する。用件が済んだら早く出て行け。」

「扉間様どうかよろしくお願いします。芙蓉先生は私塾でようやく授業が出来るようになって本当に嬉しそうです。もう辛い目に遭わせたくありません。だから……」

「カガミ。芙蓉があれ程早く私塾で授業が出来るようになったのも、全て貴様のお陰だ。感謝している。芙蓉もまた貴様に信頼を寄せている。そうだな、貴様には芙蓉を同伴する際には護衛を頼むぞ。」

「……あれ？私は？」

「では、失礼いたします。お食事中失礼いたしました。」

カガミはそう言って頭を下げると早々に部屋を出て行った。

樹は自分の顔を指さしたまま、部屋を出て行くカガミの背中をただ見送った。そして指さしたまま、扉間の方を向き、再び目で訊ねる。

「お前は必要ない。」

「エ——っ！なんでですかあ！」

「魂胆丸見えなんだよ。いいから早く出て行け！」

「……わ、私だつて芙蓉のこと守りたいんですっ！それに、一番の敵は身近に居るって言うし……っていうか、扉間様は早く芙蓉のお弁当食べたいだけでしょ？バレバレですけど……！」

扉間は一度下を向き、大きく息を吸って、机に手を付いてすくつと立ち上がる。

「ああーそうだ!!早く食いたいんだよ！これを楽しみに午前中仕事頑張ったからな！それにもう俺たちは夫婦同然なんだ。お前の心配はとつくに杞憂だ！分かったか！」

「……そ、そう、なん、です、ね……」

樹は扉間の剣幕に驚くというよりも、初めて扉間が開き直り、芙蓉との仲に惚気たことに激しく動揺した。

確かに最近、芙蓉は扉間のことを嬉しそうに話す様子から、芙蓉が扉間のことが好き

なことは解っていた。いや、愛していることも解っていた。

だが、扉間から惚気られるとは、青天の霹靂のようなものだ。

面白キヤラとしては相応しいかもしれないが、ここまで直接的なのは全く笑えない。

「し、失礼します…」

樹は動揺したまま急いで部屋を出て行った。

樹が出て行った途端、扉間の顔がどつと熱くなる。ドスンと椅子に腰を下ろし、暫く茫然とした後、おもむろに弁当の蓋を開け食事を再開した。

卵焼きが、心なしかいつもよりも美味しい気がした。



扉間は年明けに創刊したばかりの『木ノ葉経済夕刊』を広げている。

芙蓉はこの日、私塾が休みだったため、のんびりと台所で夕食の用意をしている。

扉間は新聞と芙蓉の後ろ姿、交互に目を遣り、話しかけるタイミングを計っていた。

「…芙蓉、来週、四月一日と二日は空いているか？」

「ええ。土日で私塾も休みですし、扉間さまもお出掛けになるし、特に予定はありませんけれど。何か？」

芙蓉は灰汁抜きをしておいた蕨を手に、にこやかな顔で扉間に振り返る。

「それなんだが・・・お前も、一緒に来てくれないか？」

「え？あ、はい。私はいいですけど、他の方にご迷惑なのは…火影様や上役の方も一緒に緒なんでしょう？」

「…それが…妻または婚約者が居る者は同伴してくれと、火の国側から要請があつてだな…それで、その…俺は一人で行きたいところなんだが、兄者がどうしても芙蓉と一緒に来いと言つていて…嫌ならいいんだぞ！一緒に来れば妻か婚約者と紹介しなければならんし。」

芙蓉は手を洗つてタオルで拭くと、食卓に着いている扉間の方へ歩み寄つた。

「ご一緒します。だって、私が記憶を失くしたばかりの頃、私たちの関係を扉間さまに尋ねた時、『婚約者だと思つてる』つて仰つてくれたじゃないですか。今でもそう思つて下さっているなら、私もご一緒したいです。」

真つ直ぐ扉間を見つめ、そう言う芙蓉の顔は少しはにかんでいる様にも見える。

「…本当は、俺も、お前と一緒に来てくれると…嬉しい。」

扉間は新聞を食卓の上に置き、俯き気味でそう呟くように言った。

「あらあら、扉間さま、顔が真つ赤ですよ。うふふふ。」

「う、うるさい!!…来るならちゃんと準備しとけよ。」

「うふふ。はい。」

「ゴホン。」

扉間は咳払いを一つして、再び新聞に目を落とす。

・・・とうことは、芙蓉も俺のことを婚約者だと思っているのか？

ならいずれば、結婚：いや駄目だ。芙蓉の記憶が戻らない限り結婚は・・・

新聞の内容など頭に入るはずも無く、扉間は新聞で顔を隠し心の動揺も隠していた。



扉間は久しぶりに、実家である柱間の屋敷に来ていた。

ミトが昨年、柱間との長女を出産してからというものの、屋敷の中がどんどん変わってゆく。

無くなった物、登場した物、そしてなにより空気も匂いも以前とは全く違う。

どこか落ち着かなかった。

「仕方ないとはいえ、火影の妻が欠席とはな…どうしたものか…」

「ワハハハ！だが好い話のネタは出来たぞ！いあゝ嬉しいのう！」

「はあ…確かにそうだな。火影に二人目の子が産まれるとなれば、いやおうなしに話題の中心になるだろう。」

最近ミトが体調を崩していたため診察を受けたところ、昨日、妊娠初期であることが判明した。ミト本人は行きたいと言い張ったが、大事をとって里の外で行われる懇談会には欠席させることにしたのだった。

「ということ、 “夫婦接待” はお前に任せたまはれ！ワハハハハ。」

「だから、夫婦ではないと言っている！いい加減うるさいぞ！」

「だが、皆の者には何て紹介するのだ？ん？」

「・・・婚約者だ。」

「婚約者！そうかあ。ではいつ結婚するか早く決めんなあ！結婚について質問攻めに遭うのは明らかぞ？」

「うっ・・・それは・・・」

「まさか扉間、お前まだ芙蓉に求婚しておらぬのか!？」

「と、当然だ！芙蓉は記憶を失くしているんだぞ。そんな芙蓉に求婚など・・・できん・・・」

「いやいや。記憶を無くす前から長い間、一緒に仲良く暮らしておるではないか。まさか・・・同じ屋根の下に居て、何もなかったのか？」

扉間は耐えきれなくなり、席を立ちつて柱間に背を向けた。扉間の気持ちなど知る由もない小鳥のつがいが、窓の外でピチュピチュと仲良く囁き合っている。

「だ、黙れ！芙蓉は記憶を無くす前、誰とも結婚する気は無いと言っていたのだ。だから・・・」

「・・・確かに今の芙蓉に求婚し、芙蓉がそれを受けて、その後記憶が戻った時に芙蓉が戸惑う可能性は大いにある。だが、お前が自分の気持ちを押し殺して生きていくのも違うの

ではないか？」

それに対し扉間が柱間の方を振り返り、椅子の背を掴んで言う。

「俺は、もう二度と芙蓉を傷つけたくはないんだ！それに、芙蓉の望みにすべて応えながら傍に居るのが俺の幸せだ……」

「うむ……そうか。だが芙蓉の気持ちとて、一生変わらないとも言えぬのではないか？お前と暮らし、喜びも悲しみも共にすることで、結婚したいと思うようになるかもしれない。その時は芙蓉をいつでも受け入れると伝える意味で、求婚してみても良いと思うのだが……やはり少々強引かのう？……ハハハハ……」

扉間としては、芙蓉に対して愛情表現をし続けているつもりである。

結婚。

その言葉だけがタブーになっているのだ。

「俺は……俺なりに芙蓉に気持ちを伝えているつもりだ。芙蓉も、その……俺のことを、愛していると言ってくれる。って、あーっ！なんで兄者にそんな事を言わんといかんのだっ！！」

扉間が顔を真っ赤にして頭を掻きむしる。

「良いではないか！俺は嬉しいぞ！やつとお前が芙蓉に対する気持ちを素直に言葉にするようになってくれて。長かったのう……いや、本当に嬉しいっ……」

そう言うのと柱間は涙ぐみ、袖で目をゴソゴソと拭った。だが目が真っ赤になり、更に目が潤んでしまっている。

「ちよつ、泣くな！大袈裟すぎるわっ！」

「何を言うておる…兄として弟の成長ほど嬉しいものは無いっ！」

「お前は母親かつ!!」

「敵の忍からも一族からも、そしてネット民からも『卑劣様』と揶揄される冷血無慈悲なお前が、ついに愛の言葉を口にするとはっ!!…ううっ泣けるう〜！」

「それ、喜んでるのか、貶してるのか分らん…って、ネット民ってなんだよ!!」

「それになんといつても、芙蓉はお前を愛している…本当に良かったな。扉間。」

そう言うのと、柱間は扉間の顔を見ながら滝のように涙を流す。

「あーもうっ!うざいからいちいち泣くなあっ!!」

再び柱間が袖で涙を拭うと、カラツとした笑顔になり、ガハハハと笑って見せた。

「泣いたり笑ったり、忙しい奴だな…ったく。」

そう言いながら扉間は窓辺に立ち、里の風景を見渡す。そして言葉を続ける。

「…だから…結婚なんてカタチにこだわらなつもりはない。俺は芙蓉に対して償いきれない罪がある。そんな俺を受け入れてくれ、愛して貰えるだけで充分だ。それ以上は望まん。だからこれからも求婚する気は無い。」

柱間は少しだけ苦笑しながら、硬い表情で窓の外を見つめている扉間を見て言う。

「まあ、そんなに硬く考えるなよ。結婚するのはタイミングだ。きつとお前たちならそのタイミングもすぐに来ようぞ。」

「……」

「それか、卑劣様らしく、いつそのこと既成事実を作ってしまったのもアリではないか!! 今からなら俺の二人目と同一年の従兄妹に間に合うぞ〜? ウシシシ。」

「つたく、下品なやつだな。ていうか、それは卑劣というより、ただのゲスだろが!」

「お前こそ、相変わらずむつつりスケベだのう! ガハハハハ!」

・・・うん。今すぐこいつを火影の座から引きずり降ろしてやりたい・・・



会場では火の国の大名と、木ノ葉の里の上忍や上役たちが同伴者を伴い、グラスを片手に歓談している。会場はかなり広いはずだが、大名の護衛や忍たちの部下も居る為、かなりの人で埋め尽くされて狭く感じるほどだ。

その中でも人だけが出来ているのはやはり、火影である柱間の周りであった。

妻のミトが欠席とあり、大名たちの妻や娘たち女性陣がここぞとばかりに柱間に話しかけている。女好きの柱間もまんざらでもない様子で相手をしている。

扉間は一瞬、その様子を睨みつけた後、グラスを飲み干した。

飲み干すと同時に、後ろから挨拶をしてきた大名の息子たち三人と話を始める。

火影の右腕、里のナンバー2であるがゆえ、懇談会が始まってから一時間、ずっと国や里についての交渉事ばかり話っぱなしである。

扉間の隣には、芙蓉が居る。

予想通り、芙蓉目当てに話しかけてくる大名側の人間も何人が現れた。

芙蓉が女学校の頃からその美

貌と知性は大名の間に知れ渡っており、柱間と扉間の許嫁であった事を知っている大名も多い。

かつてはそれを知っていても強引に求婚して来る大名たちも多かつた。そのため、扉間との婚約に嫌味を言う者、芙蓉に求婚して断られた恨み節を言ってくる者までいた。

しかし、芙蓉は、扉間のフォローを受けながら、記憶が無いにも関わらず、笑顔で扉間のことを讃えながら上手に対応していた。そして、扉間が政治や経済の難しい話をしている時でも、隣で頷きながら一生懸命、共に考えながら話を聞いていた。

そして、十五分ほどで大名の息子たちとの会話が終わった。

「扉間さま……私、ちよつとお手洗いへ……」

「大丈夫か？……少し顔色が悪いな。食事会が始まるまであと三十分弱ある。それまで外で休んでいろ。」

そう言うと、少し離れた所に立っているカガミに向かって軽く手を挙げ、呼び寄せた。

「芙蓉を食事会まで、外で休ませてやってくれ。」

「解りました。芙蓉先生、外に休憩できる場所がありますからそちらに行きましょう。」

「扉間さま、申し訳ありません…」

「気にするな。無理しなくていいから休んで来い。」

「芙蓉先生、食事会も長いのですから、しつかり休みましょう。」

「解りました…本当にごめんなさい。」

芙蓉は苦しい表情が顔に出ないよう堪えながら、カガミに支えられて会場を出て行った。

少し湿気を帯びているが、夜風は冷たい。

庭園の桜の木が灯りに照らされ、八分咲きほど咲いているのが判る。

芙蓉は赤い絨毯が敷かれている休憩所の長椅子にカガミと並んで座った。

カガミは、用意していたストールを芙蓉の肩に掛け、温かい緑茶をそつと差し出す。

芙蓉はありがたうと言って茶を受け取り、ゆつくりとすすると、大きな溜息を吐いた。

「カガミ君…ありがたう。ごめんね。心配かけちゃって…ダメね。これしきでグツタリ

してちゃ。あはは…」

「いや、あれは疲れるよ。先生は充分頑張ってるじゃん。凄いよ…」

・・・記憶に無い事で嫌味や恨みごと言われても笑顔で対応し、扉間様の会話だつてあんなに真剣に聞いて、それでちゃんと意見も言つて・・・

カガミは心の中でそう言いながら、芙蓉の青ざめた顔を見つめる。

「ううん。だつて他の女性の皆さんに比べたら私なんて全然…それに、扉間さまは偉大な方なのに、私はそれに見合つたお役に立ててないわ。これじゃ婚約者失格ね…」

「比べることじゃないよ。先生は先生だろ？それに、扉間様が選んだのは他でもなく、芙蓉先生なわけなんだし、私なんかつていう言い方は良くないと思う。」

「そうだね…私なんかつて言つちやダメつて、樹ちゃんにも言われたんだつた。あはは…」

そう言うと芙蓉は困つた様な笑顔を見せた。

落込みながら無理やり笑う芙蓉の様子に、カガミはたまらなく切なくなる。

そして、先ほどまで扉間の婚約者として笑顔振りまいていた芙蓉を見ているのは、もつと切なかつた。

ついに芙蓉は扉間のものになってしまう。

芙蓉が目の前で辛そうにしているのに、自分にはもう何もできないのか…。

カガミは視線を自分の膝に落した。

二人の間に暫く沈黙が流れた。

「…いつも助けてくれてありがとうね。カガミ君には本当に感謝してるの。私が辛い時には、いつもカガミ君が傍に居て助けてくれる。だからね、こうしてカガミ君と一緒に居ると安心できるのよ？」

カガミは咄嗟に顔を上げ、芙蓉の顔を見つめた。

芙蓉は先ほどまでの苦し紛れの笑顔ではなく、カガミに向かって心のこもった笑顔を見せている。

カガミは芙蓉を抱きしめたい衝動に駆られるが、なんとかそれを抑えた。しかし…

「…芙蓉先生！ほんとに、扉間様と結婚しちゃうのかよ…」

思わず、カガミの口から言葉が洩れてしまった。

芙蓉は笑顔のまま、少し目を伏せ瞬きをした。長いまつ毛の影が頬に映っている。

「…扉間さまが求婚してくれたら、かな…」

「…え！まだ求婚されてないのかよ！…」

「…でも…昔もう誰とも結婚する気は無いつて言つてたじゃん…」

「そ、そうなの！私、そんな事を言つてたの？…どうして…」

カガミはしまったと左手で自分の口を押えて茫然とした。

芙蓉が記憶を失くしていることを忘れ、言うべきではない事を、つい言つてしまった。

「…た、たぶん、誰と結婚して良いか分からなくなつてたんじゃない？先生、マダラからも、

火影様からも、扉間様からも、他にも沢山の男からしつこく言い寄られてたからさあ！」
「そうなの？私か？・・・信じられない。でも私、マダラと結婚したのよね。何故かしら・・・記憶を失くす前の私はいったい誰のことが好きだったの？・・・」

・・・ヤバイ。迷宮に誘いこんでしまった！どうしよう・・・

「ごめん、先生・・・俺、余計な事言っちゃった・・・でも俺が知る限りは、記憶を無くす前の先生は、扉間様のことが好き、みたいだったぜ・・・」

カガミはそう言いながら自らの言葉に傷つく。

芙蓉が扉間を好きでいた事は間違いでは無い。

そして、自分は当然、生徒としてしか見てもらえていなかったからだった。

「うん・・・やっぱり私もそう思う。だって、扉間さまとずっと一緒に居て、好きにならないほうが不思議なもの！でしょう？」

そう言つて首をかき上げて子供っぽく笑う芙蓉の笑顔に、完全に自分は恋愛対象外だと断言されたような気持ちになり、カガミは胸が張り裂けそうだった。

「・・・芙蓉。具合はどうだ？」

すると、扉間が歩きながら、二人の背後から声を掛けてきた。

「あ、扉間さま！会場を離れて大丈夫なんですか？」

「カガミが居るとはいえ、お前のこと放っておけないだろ・・・それに、俺だつてずーっと喋

りっぱなしは疲れる。」

「うふふ。ありがとうございます。カガミ君が介抱してくれたので、随分善くなりましたよ。慣れない服と靴でちよつと疲れただけです。大丈夫です。」

すると扉間は二人の座る長椅子に歩み寄り、椅子を跨いで、芙蓉の隣りに腰かける。

「…お茶を持ってきます。」

扉間が腰かけると同時にカガミは盆を持ち長椅子から立ち上がり、扉間へのお茶を取りに行った。その背中に向かって芙蓉がありがとうと声を掛ける。

扉間は腕を組み、ただ黙って正面を見ている。

「…大丈夫、ですか？」

芙蓉が扉間の様子を心配して顔を覗き込む。

すると扉間は顔を反対側に背けた。

「…ここは、里よりも桜が咲くのが早いな…」

「里はまだ五分咲きくらいですものね。朝、明るくなつて桜を見るのが楽しみですわ。」

自分で話を振つたものの扉間は言葉が続かず、黙り込む。

「あの…扉間さま。私、扉間さまの婚約者だなんて恥ずかしいです…だって、扉間さまは偉大な方なのに、私、やっぱり釣り合っていない気がして…」

扉間は急いで組んでいた手を解き、膝に手を置き、俯く芙蓉の顔を覗き込む。

「そんなことは無い！あれだけ完璧な対応をしてくれて本当に感謝している！」

「良かった…。でも駄目な所があったらすぐに指摘して下さいね。この後の食事会も頑張りますから！」

「それに、俺には……………」

「……………はい？」

「お待たせしました。」

カガミが扉間の横にお茶を置く。

「ゴ、ゴホン！すまん。カガミ。」

ズズズツ。

「アつつつう!!」

「だ、大丈夫ですか!!熱いお茶をそんな勢いよく飲むから……!」

カガミは分かりやすく動揺しまくっている扉間を、後ろから冷やややかな目で眺めていた。

「……………どうせ、さつき芙蓉先生が扉間様のこと言ってたの聞いてたんだろ？」

確かに扉間様は良い人だけど…俺もあと少しで、やっと十六だ。

十年もしないうちに、絶対に扉間様みたくなれる自信はある。

ああ、早く、十八になりたい……

◆ 食事は歓談会場とは別の大広間で行われた。円卓がいくつも並び、大名側と木ノ葉の里側が共に同じ着席した。

芙蓉は扉間の婚約者ということで、火影である柱間、大名代表者と同じ円卓に座った。流石に多くの大名たちを取りまとめる代表者とあって、芙蓉について変な詮索をしたり無粋なことは全く口にしなかった。国政や防衛の話の合間に、時折、芙蓉の教師の仕事や、一般女性から見て里の生活はどうかなど、当たり障りのない話題を振られるのみで、終始和やかな会話だった。

そして、食事は閉会した。

芙蓉はなんとか乗り切りホツとしていたが、それ以上に、芙蓉の隣に座る扉間は大きく胸を撫で下ろしホツとした。食事が終了時の会場の大きな拍手が、まるで、この二時間弱の時間を耐え抜いた自分への喝采ではないかと錯覚するほどだった。

扉間は柱間の補佐、いや、柱間の失言、失態を監視し、自らも大名との会話に交じり対等な形勢を崩さないよう慎重に発言した。そして常に芙蓉のことも気遣い、心配していた為、食事には殆ど手を付けられなかった。

「芙蓉。お前のお陰で大名側は上機嫌だったぞ。ありがとう。」

扉間と芙蓉は、今夜宿泊する客室に戻ってきた。

扉間は藤の椅子に腰かけると、扉間の上着をハンガーに掛けている芙蓉の背中に向かって礼を言った。

「いいえ、私はニコニコしているしか無くて……扉間さまこそ、本当にお疲れ様でした!」
「いや、それが一番重要だ。お前の笑顔に、あの知的な会話……本当に完璧だった。」

そう言うのと、扉間は額の上で腕を組み、フウーつと大きく息を吐いて後ろに背伸びをした。

「……ありがとうございます。そう言つて貰えると凄く嬉しいです。でも、扉間さまは随分お疲れの様ですね。大丈夫ですか?早くお休みになる用意を……」

「いや。この後、非公式の飲み会に付き合わねばならん。兄者が何をやらかすかわからんからな。ご婦人に無礼な事でもしたのなら火影の品格が問われる。」

芙蓉はフツツと笑つた後、扉間の後ろに歩み寄り、黙つて肩を揉み始めた。

「ハア……このまま風呂に入つて寝たいなあ……」

芙蓉の力では硬い筋肉で覆われた扉間の肩をほぐすことは出来ないのだが、その手の温かさで動きで心地良くなり扉間は目を閉じて、思わず本音を洩らした。

「私……扉間さまのこと、ちゃんと支えられているでしょうか?私はいつも、扉間さまや樹ちゃん、カガミ君たちに支えられて助けられてばかりです……」

扉間は芙蓉の顔を見上げた。

芙蓉の頭上には電球が温かく光っており、その光を背負って優雅に結い上げられた亜麻色の髪がキラキラと光っている。

その様子が扉間には、天から降り立ってきた天女の様に見えた。

そして自分の肩を揉んでいる芙蓉の左手を掴んだ。

『はい。これからお支えして行くつもりです。』

ずっと前、記憶を失くす前の芙蓉に扉間の想いが届いた日の、二人の会話を思い出す。

・・・あの時、記憶を失くす前、芙蓉は俺の傍に居て支えていくと言ってくれた。

そして記憶を失くした今でも、俺のことを・・・

扉間は芙蓉の手を引き、自分の膝の上に座らせた。

「お前が傍に居てくれるだけで、俺はこの先もずっと立っていられる…頑張れる。」

「扉間…さま…」

二人は、見つめ合う。

ドンドンドン！

扉を叩く音がした。

「おーい扉間く芙蓉く！飲みに行くぞく！おーい!!」

扉間がガクつと首を垂れる。それを見て芙蓉も苦笑する。

「うっさい！そんな大きな音と声で呼ばんでも聞こえるわっ！ちよつと待つとけ！…すまん。行つてくる。先に寝ている。」

扉間は芙蓉を膝から降ろし、仕方なく立ち上がつて扉へ向かい、扉を開ける。

「これからが懇談会の本番ぞ！気合入れて飲むぞっ！なっ！芙蓉？」

開けたとたんに柱間が顔を覗かせ、扉間越しに芙蓉に向かつて陽気に手を振る。

「行くのは俺だけだ。さ、行くぞ。」

「はあ！芙蓉が一緒じゃないと意味が無いぞ。盛り上がらぬぞ！久しぶりに芙蓉と酒が飲みたいぞっ！」

「最後のが本音だろーが！芙蓉は記憶が無いにも関わらず、ここまで頑張つてくれたんだ。もう休ませてやれ。いいな！」

それを聞いて柱間がずうーんと首を垂れて、あからさまに落ち込む。

「…そ、そうだのう…その通りだ。芙蓉に無理をさせてはならんのう…でも…寂しいのう…」

「あ、あの！私もお邪魔でなければ、ご一緒します。」

「馬鹿！芙蓉に気を遣わせてどうする！芙蓉、いいんだ。このエロ馬鹿の戯言など気にしないでいい。ゆっくり休むんだぞ。何かあればカガミを呼べ。」

バタン！

扉間は柱間を無理やり押し出して扉を閉め、出て行ってしまった。

甘い時間から一転、突然部屋に独り残され、芙蓉は茫然としていた。

ふと我に返り、扉間と二人で座っていた藤の椅子の向かい側の椅子に腰かけ、さつき目の前の椅子に在った扉間と自分の姿を思い浮かべてみる。

・・・あれ？何か、何か思い出せそうな気がするんだけど……でも、扉間さまとの想い出じやない……

芙蓉は頭を抱え、俯いて床を睨む。

はつきりした過去の記憶ではなく、かつて感じただろう感情だけを想い出す。いつ、誰と、どんな風に、こんな感情になったのか？

しかし、それが扉間との間でのことでは無いのは確かだった。

・・・もしかして、マダラっていう人と……

その予感に、不安と、恐怖、そして罪悪感を感じ芙蓉は強く目を閉じる。

ガタガタガタ……

春の強い風が窓ガラスを鳴らした。芙蓉は自分の身体も震えていることに気付く。震えながら身を起こし、恐る恐る窓を見た。

カーテンが開けられたままの窓ガラスには、苦しそうな表情の自分が映っている。

『現実が真実とは限らない。確かに他者から見たお前の姿も一つの真実だろう。だが、

あくまで本当の真実はお前の心の中にしかない。』

いつかの扉間の言葉が頭に浮かぶ。

これまで幾度となく思い出してきた言葉だ。

時に支えになり、時にこうして芙蓉を苦しめている言葉である。

・・・今の私は幸せ。それは、真実を知らないから？

真実を知れば、この幸せが壊れてしまうのかもしれない…。

それなら一生、真実なんて知らなくていい！

今が唯一の真実のままでもいい…そうよね？・・・

芙蓉は窓に映る自分にそう言い聞かせた。

(26) すべて思い出した

翌朝。

芙蓉が目を覚ますと、隣の布団で扉間が寝息も立てずに熟睡している。

何時に部屋に戻ってきたのだろうか。芙蓉も疲れて熟睡していたため、全く気が付かなかった。

芙蓉はゆっくり起き上がると、優しい眼差しで扉間の健やかな寝顔を見つめた。

普段強面の扉間だが、寝顔は優しく、そして美しい。

まるで扉間の内面が寝姿に現れているようだった。その姿を自分だけが知っていることが、嬉しい。

扉間が閉めてくれたのだろう。昨夜開いていた窓のカーテンが閉まっている。

芙蓉は昨夜気になっていた桜が見たくなり、布団から出て立ち上がり窓辺に行く。そして、ほんの少しだけカーテンを開けて覗いてみた。

昨日の夕方は懇談会の準備で忙しくていたため全く気付かなかったが、部屋の窓のすぐ側にも桜の木があった。庭園で見た桜に比べ、建物に近いせいか、この桜はほぼ満開だ。

朝陽を浴びて花びらの一つ一つが瑞々しく光り輝いている。

芙蓉は輝く無数の花を見て、あまりの美しさに溜息をついた。

「……んん。芙蓉。もう起きてたのか……」

扉間がカーテンから洩れる朝陽で目を覚まし、布団の中から芙蓉に声を掛ける。

「あつーごめんなさい！起こしてしまいましたか。」

芙蓉は急いでカーテンをしつかりと閉めた。部屋の中が再び薄暗くなり、二人の表情がはつきりと見てとれなくなる。芙蓉は急いで再び自分の布団へ戻った。

「外に、何か気になる物でもあったか？」

「はい。すぐそこに、ほぼ満開の桜の木があつて、朝陽を浴びて凄く綺麗でした！」

「どれ……俺も見てみるか……」

「扉間さま、昨夜は遅かつたのでしょう？まだ横になられていたほうが……」

「フツ。俺は忍だぞ。大丈夫だ。」

そう言うのと扉間は起き上がり、窓辺へ歩いて行く。芙蓉もその後ろから歩み寄る。
シャー——ツ！

扉間が勢いよくカーテンを開けると、目の前にまばゆい桜の花が飛び込んできた。

「おお。本当だ。これはもう満開だな。窓、開けても良いか？」

「ええ。開けてみましょう！」

二人はワクワクしながら窓を慎重に開けた。

大きな風が二人の頬をかすめ、カーテンを翻して部屋を駆け抜けてゆく。その風は、山の新緑の甘酸っぱい香りまで運んできた。

芙蓉はその香りに胸の奥がきゅんとして、どこか懐かしい気持になる。再び風が向かってくる。

その風に乗って、早くも枝から離れてしまった桜の花びらが数枚飛んできて、芙蓉の胸に流れる髪の毛に着地した。

扉間はその光景を見て微笑む。芙蓉には本当に、花が似合う。

芙蓉も、その花びらを嬉しそうに見つめた。

ドクン……

『貴方様のお名前を、おうかがいしてもよろしいですか？ 私は橘芙蓉と申します。』

『俺は、うちはマダラだ。』

突然、芙蓉の目の前に、過去の記憶が流れ始めた。

一度流れ始めた記憶の潮流は止めることは出来ない。

芙蓉の意思とは関係なく、様々な光景が頭の中と目の前に浮かんでくる。

ハアハアハアハア……

動悸が激しくなり、息が上がる。

「おい！芙蓉！！どうしたんだ！！大丈夫か！！」

扉間が慌てて芙蓉の肩を支える。

ガッ・・・クッ・・・

芙蓉は立っつていられなくなり、両手で頭を抱えてその場に座り込む。

「芙蓉！！」

「・・・マダラ・・・さま・・・」

「マダラ？・・・芙蓉！何か、思い出したのか？」

「・・・」

芙蓉は目を見開き、焦点が合わないまま床を見つめ、ゴクリとつばを飲み込んだ。すると、次第に上がった息が収まってゆく。

不思議と、何も感じない。

悲しくも、辛くも、そして嬉しくも無い。

きつと突然多くの事を思い出し過ぎたせいで、心が麻痺しているに違いなかった。

「芙蓉、とにかく椅子に座れ。さあ」

扉間が芙蓉の脇を抱えて立ち上がらせようとした。

ビクッ！

芙蓉の身体が拒否反応を示す。

「だ、大丈夫です……自分で、立てますから……」

扉間は芙蓉の反応に驚き、ただ茫然と、芙蓉が自力でゆっくりと立ち上がるのを見ていた。

よろよろと藤の椅子に向かって歩きだす芙蓉の背中を見て、扉間はハッと我に返り寄つて肩を支える。

「……」

嫌がりはいしませんが、芙蓉は無言で床を見ている。

芙蓉は浅く、藤の椅子に腰かけた。

「芙蓉……本当に大丈夫か？」

扉間は大丈夫かとしか訊くことが出来ない。

芙蓉の反応からして、思い出したのはマダラの事だけではなく、自分が芙蓉にした非業かもしれないからだ。

「はい……。ごめんなさい。色々いつきに思い出したせいで、ちよつと混乱して……本当に大丈夫です……」

「いま直ぐ里に、家に帰るか？」

「でも……私だけ先に帰つては……」

「懇談会は昨日で終わっている。帰りは各々自由だから問題は無い。兄者にはあとで伝

えておくから心配するな。」

「……いいえ。少し落ち着けば大丈夫ですから。」

そう言う芙蓉の口調はとても落ち着いていて、冷静に見える。とはいえ芙蓉を家に帰し一人きりで居させるわけにもいかない。懇談会は終了しているとはいえ、扉間にはまだ挨拶回りや細々とした所用が残っている。

「そうか……無理はするなよ。具合が悪ければ直ぐに言うんだぞ。」

「はい。ありがとうございます、扉間さま。」

芙蓉はいつも通りの優しい微笑みで扉間を見上げた。

「……」

しかし、扉間は素直にその微笑みを受け取ることは出来ず、眉をひそめて芙蓉の顔を見つめていた。



「皆の者、ご苦労であった。お陰で懇談会は大成功だったぞ！さあ存分に食って飲め！芙蓉、突然来させたにもかかわらず、素晴らしい対応をしてくれてありがとう！さ、お前も昨夜飲めなかった分、飲め飲め！」

「馬鹿か！朝から酒を飲む忍がどこにいる！」

「扉間は頭が堅いのう。今日はもう里に帰るだけなのだから良いではないか。しかも、

お前の飛雷神で楽々ぞ！ワハハハハ」

「芙蓉、無理して飲まなくてもいいんだからな。貴様らも里に帰るまでが任務だ。酒はほどほどにしておけよ。」

芙蓉と扉間、そして護衛のカガミと柱間の護衛として連れてきた直属の部下三名が柱間の部屋に集められ、朝食兼、慰労会を行っていた。

「こんな事でもない限り、芙蓉と一緒に酒を飲むことなどできぬのだ。たまには良いではないか！のう？」

「は、はい……では少しだけ頂きます。」

柱間が芙蓉の隣りに座ると、芙蓉は急いで盃を手にし、柱間はそこへ豪快に酒を注いだ。

しかし八部目ほどの所で扉間が柱間の手を強引に止めた。柱間は口をへの字にして扉間を恨めしそうに睨む。

「懇談会の成功と、芙蓉と扉間の婚約に乾杯!!」

「乾杯」

カガミ以外の大人たちが一齐に盃に口を付ける。

芙蓉もそつと、盃に口を付けて飲むふりをした。純米酒の豊潤な香りが鼻をくすぐり飲みたい欲求が湧き、やはり、少しだけ酒を口に入れてみた。

芙蓉の気持ちは、この冷酒以上に冷たく、ひどく冷静だった。さつき、桜の花びらを見た瞬間、マダラとの記憶を思い出した。

そして、幼少期の記憶以外、断片的であるがほぼ全ての記憶を思い出したのだ。

それなのに、なぜこんなにも冷静に居られるのだろうか。自分でも不思議だった。

まだ過去の真実に気持ちが追いつけていないせいだろうか。

それとも、想像していた以上に真実が冷酷なものだったからだろうか。

「芙蓉先生……大丈夫ですか？ なんだか顔色が善くありませんが……」

食事が始まり、柱間を中心に部下たちが盛り上がり始めた頃、カガミが芙蓉にお茶を運びに来て、そつと小声で話しかけた。芙蓉は冷静にゆつくり箸を動かしていたつもりなのだが、カガミから見た芙蓉は明らかに様子がおかしかった。

「え？ そ、そう？ 大丈夫よ。昨夜の疲れが残っているだけよ。カガミ君も疲れていない？ 大丈夫？ いっぱい食べてね。」

誤魔化すようにカガミのほうを心配する芙蓉の様子に、カガミはますます不安になる。

「俺は忍ですから大丈夫です。それに今はまだ任務中ですし。先生、扉間様に言い難い事なら俺に遠慮なく言っして下さいね。」

「うん、ありがとう。心配してくれて嬉しいよ。ウフフ。」

勿論、芙蓉の隣りに座る地獄耳の扉間には二人の会話は丸聞こえであるが、敢えて聞こえないフリをしていた。

「おい！カガミ。なにお前だけ楽しそうに芙蓉とコソコソ話しておるのだ！ずるいぞ！俺も芙蓉と話したいぞつ。芙蓉くこっちに來て酒を注いでくれ〜」

酒が入った柱間が、からかうように、しかし本気の嫉妬を込めて叫ぶ。

「ガンツ！と扉間が柱間の頭を拳で殴る。

「イデツ！よつ、良いではないかあ〜一杯くらい。里ではこんな機会、絶対無いんだぞ！！」

「黙れ！部下の前で恥ずかしくないのか！羽目を外し過ぎだ。芙蓉は芸子ではないんだぞ。」

柱間の部下たちは、いつもこんな感じだけどな、と心の中で呟き苦笑する。

「こうしてまた一緒に酒が飲めただけで良しとしろ…」

「うーむ…そうだのう。確かに。次に揃って飲めるのは…お前たちの結婚式か？ワハハハハ！」

・・・いま一番、口にされたくない言葉を言いやがってえ・・・

扉間に沸々と怒りがこみ上げ、何と言い返そうか慎重に考えていると、芙蓉が先に口を開いた。

「火影様。私のことを本当に扉間さまの妻に相応しい人間だと思いいですか?・・・私の過去を、含めて・・・」

カガミと部下たちは手を止め、気まずい顔をして俯く。

扉間は驚いた、そして悲しそうにも見える表情で芙蓉を見た。

「勿論だ! いや、むしろ、扉間に芙蓉は勿体ないくらいぞ! ワハハハ。それに、過去があるから今があるのだ。人は皆、輝かしい過去ばかりではない。だが間違はなく、その過去があつて今二人はこうして愛し合い、共に在る。それで良いではないか…なあ、扉間よ?」

「…あ、ああ…」

扉間は俯いて、小声で答える。

それを向かいの席で見っていたカガミは、頭を殴られたような衝撃を受けた。

解つてはいたものの、目の前で扉間が芙蓉のことを愛していると認める姿など、見たくなかつた。

「扉間く顔が赤いぞ。ガハハハハ! うんうん。良い事だ!」

「うるさいっ!!」

そう言うとう扉間は一気に盃の酒を飲み干す。そして席を立ち、部屋を出て行くとうとした。

「どこに行くのだ？この状況で芙蓉を一人にするとはひどいのう。」

「手洗だ！フン!!」

・・・一番ひどいのは、お前だろ・・・

扉間がそう思いながら部屋を出て行ったあと、柱間が既婚の部下たちに結婚生活について話を振り、笑いながら盛り上がり始めた。

一方芙蓉は、柱間が自分の問いに答えているあたりから茫然としていたが、おもむろに食膳に目を落とすと、茶碗を持ち、箸でゆつくりと白飯を口に運んだ。

だが咀嚼するたびに、苦々しい思いが胸に込み上げてくる。

柱間からの答えを聞き、麻痺していた心がようやく感覚を取り戻してきたようだ。

罪悪感。

苦々しい味と、胸を突き刺すような痛みは、紛れもなくそれだった。

芙蓉はなんとか白米と一緒にそれを飲み込んだ。

しかし、胸は更に痛み、何かつかえている感覚だ。それをなんとか飲み込もうと、またゆつくりと次の一口を口に運ぶ。

カガミは先ほどから感じている芙蓉の異変が気になって仕方がなかった。

しかも、皆の前で、酔った柱間の冗談に対し、あのような問いをするなんて芙蓉らしくない。

だが、食事に箸を付けて食べている様子から、体の具合が悪いわけでは無さそうだ。昨夜、扉間と喧嘩でもしたのだろうか…。

カガミはつい、昨夜の二人の様子を想像してしまう。裸の二人が抱き合う場面が頭に浮かぶと、胸から下半身にかけて急に熱くなり脈を打つ。

・・・何を想像してんだ！俺は！・・・

しかし、本能的に芙蓉を見てしまう。

背筋を伸ばし上品に食事をしている芙蓉の姿には、カガミが想像してしまった夜の芙蓉の片鱗はどこにも無い。

・・・芙蓉先生はあれの時、どんな顔をしていて、どんな声を出すんだろう・・・

つい、邪な想像が広がってしまい、再びカガミは自分を咎め、急いで味噌汁をすすった。

こんなことを考えてしまったのも、柱間が二人の結婚の話など、こんな場所でするか。ただでさえ二人の結婚なんて考えたくないのに…。

カガミは柱間を恨めしく思った。



扉間は昨夜、芙蓉とカガミと三人で休憩をした庭園の休憩所に座っていた。

部屋から見えた桜同様、ここの桜も随分花ひらいて満開に近い。その枝では数羽のメ

ジロが仲良く遊んでいる。

・・・芙蓉はいつたい、何を思い出したんだ？

マダラの名前を呟いていたが、マダラとの記憶なのか？

兄者にあんな問いをしたところを見ると、やはりそうなのか？

同時に俺がした事を思い出し、俺に嫌悪したのだとしたら？

やはり本人にきちんと聞くべきなのか？

「扉間さま……やはり、ここにいらしたのですね。」

芙蓉が数メートル先から扉間に声を掛けた。少し微笑んでいる。

そして扉間と目が合うと、小走りで近寄ってきた。自分に駆け寄るその姿はいつ見ても愛おしく、立ち上がり、大手を広げて受け止めなくなる。しかし今の扉間に、それはできない。

「食事は終わったのか？」

「はい。火影様はまだ飲んでいらつしやいますけど。部下の方たちはそれに付き合わせていますよ。フフツ……」

一見、いつもと何も変わらない芙蓉の様子に、扉間は思わずホツとしてしまいそうになる。

芙蓉は桜を眺めながら、ゆっくりと扉間の左隣に腰を下ろした。

「扉間さま、私、マダラさまとの事を全て思い出したんです。その他の記憶も、断片的ですが、かなりたくさん思い出せました・・・」

早朝よりも風は弱まり、今は心地良いそよ風に変わっていた。

その風が、目を細め真つ直ぐ正面の桜を見ている芙蓉の髪の毛を優しく揺らして行く。

「そうか。ついにか・・・」

扉間はそう言つて芙蓉の静かで美しい横顔を見つめるが、それ以上訊くことが出来ない。

「私は、とんでもない女ですね・・・。マダラさまを一生愛すると夫婦の契りまで交わしておきながら、裏切つて、貴方を愛してしまふなんて・・・」

「裏切つた？裏切つたのはマダラのほうだろ。それに、お前は奴に術をかけられていて正常な思考は出来なかつたんだ。お前は何も悪くない。」

「私の心が真実だとおっしゃいましたよね・・・なら、私がマダラさまを愛していたのは、紛れもない真実です。」

「芙蓉・・・」

「私、マダラさまが亡くなつて、もう誰かを愛することなんて出来ないし、そんな資格も無いと思つていました。それなのに、貴方の優しさに甘えて、心の穴を埋めようとして、

気づけばそれを愛情にすり替えてた……」

「俺のことは……愛しては、いないということか?」

「それは違います! 記憶を失くす前から、私は扉間さまのことを愛していました。でも、それを認めることさえ罪深い気がして……でも今ははつきりと愛していると言えます……」

でも、マダラさまのことも今でも……それが、そんな自分勝手に不誠実な自分自身が許せないのです! これじゃあ昔、扉間さまに嫌われた頃の私と一緒にじゃないですか!」

そう言うところ、芙蓉は両手で顔を覆って、息を詰まらせながら泣き始めた。

扉間はその芙蓉の両肩を掴み、自分のほうを向かせ、言う。

「芙蓉、それでいいじゃないか……俺はお前の過去を含めてお前を愛している。マダラ以上に愛されなくても構わない。お前が俺の罪を許し、俺を少しでも愛してくれるならそれでもう、俺にとってこれ以上の幸せなんて、無い。」

扉間は芙蓉をきつく抱きしめた。

「頼む……自分を責めないでくれ。俺の傍にいる自分を認めてやってくれないか……」

芙蓉は必死に声を殺しながら、扉間の胸に顔を埋めて泣いている。

扉間はそれ以上は何も言わず、黙って芙蓉の背中を優しく撫でていた。

先ほどまで桜の枝で戯れていたメジロたちは、いつの間にか飛び去っていた。

空に浮かぶ小さな雲が形を変えた頃、芙蓉が泣き止んで顔を上げた。

「少しは落ち着いたか？」

「・・・はい。ごめんなさい・・・」

「なぜ謝る。服の事か？着替えればいいだけのことだ。」

扉間は袖から手拭いを取り出し、芙蓉の泣き濡れた顔を優しく拭き始めた。

「扉間さま・・・」

「こんなひどい顔を見たら兄者が血相を変えて心配する。お前は今すぐ家に帰れ。」

そう言う間もなく、扉間は飛雷神の術で家に飛んだ。そして家の居間に着地する。

「・・・でも本当に私だけ帰って来ても大丈夫ですか？荷物は？」

「問題無い心配するな。俺もなるべく早く帰って来る。あまり考え過ぎるなよ。」

そう言う間と再び扉間は戻って行った。

扉間は宿泊している客室に戻ると、芙蓉の涙で濡れた平服の上着を脱ぎ、昨日着ていた礼服に着替えようとしていた。

ドンドンドン！ガチャ、ガチャ、ガチャ！

「おい。扉間あゝ芙蓉おゝ！何してるんだあゝ？兄者をひとり放っておいて！」

扉間は大きな溜息をつくと服を着るのを中断し、上半身裸のまま扉を開けた。

「お、おおっ・・・やっぱり取り込み中であつたか・・・」

柱間はニヤニヤしながらそそくさと部屋に入ると、居間の向こう側の寝室を必死に覗

こうとする。

「殺すぞ！着替えていただけだ。芙蓉は体調が悪いから先に帰らせた。」

「そ、そうなのか…残念。い、いや、それは心配だのう！」

「お前、心配してないだろ…ハア。慣れない場だったからな。疲れ過ぎているようだ。」

「心配ぞ！その…流石に調子に乗り過ぎたかと思うてな…お前たちの結婚を焦らせるようなことを言つて、二人が険悪になっておらぬかと…」

「言いそびれた俺も悪いのだが…今朝、芙蓉の記憶が一部、戻ったんだ。」

「何!?なぜそれを早く言わんのだ！」

「…何の記憶を思い出したのか、俺からはどうしても訊けなかったからだ…。さつき、芙蓉の口からマダラとの記憶が全て戻ったと聞いた。」

「…道理であんな質問をしてきたのか…おい、芙蓉を一人にして大丈夫なのか!」

「ああ。今は落ち着いている。だが早く用事を済ませ帰りたい。」

「分かった！芙蓉は辛いだろうが、この調子で全ての記憶を取り戻せると良いのだがな…」

◆ 二人は一瞬考え込んだ後、それぞれ里に帰る準備を始めた。

気付けば時計の針は正午をさしている。

太陽は南中に昇り、窓から伸びる光の長さは縮んでいた。

芙蓉は居間の食卓の椅子に座り、思い出した記憶を一つ一つ、なぞっていた。

それはまるでそれは、床に散らばった本を拾い上げてはページを捲つて、中身を確認しながら一冊一冊本棚に収納していく作業に似ていた。

・・・散らばった、本・・・

マダラが死んだ日。

あの日、芙蓉はマダラと暮らす家で本棚の整理をしていた。そこへ扉間が突然現れ、驚いた芙蓉は本を床に落としてばら撒いてしまった。

・・・あの時、私が扉間さまに里に連れ戻されていなければ、今もマダラさまの妻として、一緒に居られたのかしら・・・

そして、湿った土の匂いがする穴で木製の台の上に横たえられたマダラの顔と体の冷たさを思い出す。

すると体が震え、涙が止めどなく溢れてきてしまった。

・・・あの時、一生マダラさまだけを愛していくと誓ったのに。それなのに、私は：
よりもよつてマダラさまが恨む扉間さまのことを・・・

芙蓉はマダラとの記憶を全て思い出していたと思つている。

しかし、自分が記憶を失くした原因。

つまり生きていたマダラがワダチと名を語り、雇った忍に椿を殺させ、芙蓉を連れ戻しに來た事件のことは思い出せてはいなかった。

芙蓉はマダラとの記憶をなぞるうち、当然のことながら、マダラへの罪悪感がどんどんと膨れ上がっていった。

しかし、だからといって、扉間への愛情を否定することも出来なかった。

芙蓉は、いつの間にか扉間のことを心から愛してしまっていたのだ。

『…過去があつて今二人はこうして愛し合い、共に在る。それで良いではないか…』
『俺はお前の過去を含めてお前を愛している』

芙蓉は柱間と扉間の言葉を思い出す。

それは自分自身を慰める為なのか、それとも言い訳をするつもりなのか。

いやその両方かもしれない。

しかし芙蓉は、その言葉に、せめて現在（いま）の自分だけは許したいという気持ち
が大きくなっていく。

自分が過去に囚われ苦悩すれば、支えてくれている人たちは悲しむ。

マダラの事は辛い。だが、反省は出来ても、もう今更過去は変えられない。

その両方もまた、自分に対する言い訳である。

それでも芙蓉は、いま、そしてこれからどうしたいのかを心に問いかける。

・・・扉間さまと、そして大切な人たちとずっと一緒に木ノ葉の里で生きてゆきたい。それは我儘かもしれない…。だけど、私を必要としてくれる人が居る限り、もうその人たちのことまで、裏切りたくはないもの・・・

こうして芙蓉は、なんとかマダラへの罪悪感に心が押し潰されるのを逃れた。

洗面所へ行き、泣き濡れた顔を洗う。鏡を見ると、家に帰って来る前から繰り返し泣いているせいで目は真つ赤に腫れ、顔も浮腫んでいる。

「酷い顔…こんな顔、扉間さまに見られたくないな…へへっ。…よし！頑張つて晩御飯のお買物に行つてこないと。」

そう思つて洗面所を出ようとした時、玄関から扉間の帰宅を知らせる声が出た。

芙蓉は急いで玄関に向かう。

「おかえりなさいませ。扉間さま！」

芙蓉の元気な声と明るい表情に、扉間は自然と嬉しくなるが、すぐに心配な気持が込み上げる。芙蓉は顔を泣き腫らしている。無理をして明るく振舞っているのは間違いない。

「遅くなつて悪かつたな…芙蓉。」

「いいえ。扉間さまこそお疲れ様でした。柱間さまやカガミ君たちは大丈夫でしたか？」

小上がりに腰かけて靴を脱ぐ扉間の背中に、芙蓉が優しく言う。

「ああ。問題ない。芙蓉…なにもそんなに明るく振舞わなくてもいいんだぞ。俺の前では無理はするな。」

扉間は小上がりに上がり芙蓉の顔を見ると、眉をひそめてそう言った。

芙蓉は一瞬唖然とした表情をした後、少し目を伏せ、悲しい瞳とは反対に口元はニツコリと笑顔になる。

「…この先、きつと何度も気持ちは揺れるのだと思います。落込んだり、前向きになつたり…でも、とりあえず今は前向きなんです！」

そう言つて満面の笑みで扉間を見上げ、言葉を続ける。

「そんな私のこと…許して下さい。」

満面の笑顔のまま、瞳が潤み、言葉の最後のほうは震えていた。

扉間は芙蓉を抱き寄せ、ああ、と答える。

一人で居た一時間余り、芙蓉が何を考え、どう前向きになれたのか…

知りたいが、今はそつとおこうと思つた。

「扉間さま、お昼ご飯は？お腹空いていませんか？昨日の食事会も、今朝の朝食もあまり召し上がられてなかつたみたいですけど…」

扉間は昨夜からの緊張感で、食欲など忘れていたことを思い出す。

芙蓉からそう言われると、家に帰って来た安堵感もあり、急に空腹を感じる。

「そうだなあ……確かに腹減ったかも。」

「今何も食材が無いからお蕎麦くらいしか作れないですけど、いいですか?」

「ああ。助かる。」

扉間は自室へ戻り着替えを始めた。ふと、衣装棚の鏡に映る自分の姿が目に入る。

……相手は自分を映す鏡とはよく言ったものだ……

扉間は、現在の幸福の甘味と、過去の後悔の苦味を感じ、そつと目を逸らす。

芙蓉と暮らし始めてもう一年以上が経つ。

その間、大きな事件で芙蓉は記憶を失ってしまったが、その前後を通して変わらないものがある。

それは、芙蓉の笑顔だ。

そして、扉間自身の笑顔。

昔、千手家で共に暮らした頃、扉間は芙蓉と向き合おうとはしなかった。

自分の素直な気持ちを伝えることも、芙蓉に優しくすることも出来なかった。

結果として当然、芙蓉と扉間の間にだけ見えない壁が出来ていた。扉間は、その壁を芙蓉が破ってくれることをどこかで期待していたが、その期待を裏切られたと勝手に勘違いをし、芙蓉を消そうとした。

しかし、二人で暮らし始めてから扉間は、芙蓉と必死に向き合おうとしてきた。

自分の気持ちも伝えた。そして、今まで笑ったことが無いくらい、二人で沢山笑い合った。

お互いの笑顔に癒され、こだまするように、また笑顔になることができた。

出逢った時、最初から芙蓉と向き合い、素直に気持ちを伝えられていたら、芙蓉はマダラと出逢うことも愛し合うことも、そして今こうして互いに苦しむことも無く、二人は自然と愛し合う仲になれていたのかもしれない：

そう思うと、自分の罪深さに胸が苦しくなり、眩暈がする。

扉間は顔を鏡から逸らしたまま、衣装棚の扉をボタンと閉め、目を伏せ床を見つめる。

「扉間さまーっ。お蕎麦が茹で上がりましたよーっ」

一階から芙蓉の明るい声がした。

扉間は左右に頭を振る。

「ああ。今行く。」

扉間は部屋を出て、何事も無かったフリをして階段を下りていく。

(27) マダラとの必然

懇談会から里に帰って来た翌日。

芙蓉は朝陽を浴びながら、樹の住む家に向かって走っていた。

見上げると、里の桜も昨日の晴天でほぼ満開になっている。それを見て芙蓉の笑顔が更に大きな笑顔になる。

桜並木を抜けると、樹の家が見えた。息を切らし、歩みに変えて玄関に近づくと息を整える。

「おはようございます。橘芙蓉です。樹ちゃんいらつしやいますか?」

洗面所で出勤前の身支度をしていた樹は、返事よりも前に体がその声に反応し、自然と玄関に向かっていた。玄関に近い台所に居る母親よりも早く、玄関に出て扉を開ける。

「芙蓉おはよー! どうしたのこんな朝早くに息切らして…大丈夫?! 何かあった?!」

「朝早くにごめんね。樹ちゃん…私…沢山思い出したの! 樹ちゃんとの思い出も!」

樹は喜びの言葉を述べる前に、芙蓉を抱き締めていた。

長い間離れ離れになっていた恋人と、ようやく再会できたかのような感動を覚える。

「樹ちゃん・・・大好き!!」

「芙蓉!!」

春風よりも早く二人の顔は近づき、口づけを交わしていた。

台所から芙蓉に挨拶をしようと顔を出した樹の母親が、それを見て急いで引つ込む。

芙蓉と樹は木ノ葉本部へ向かう道で二人、手を繋いで歩いている。

「そつか・・・マダラとのことも全部・・・芙蓉、辛い、よね・・・」

「うん・・・正直ね。まだマダラさまのこと、愛してる・・・だから記憶が戻った時は本当に辛かった。でもね、それでも扉間さまのことを愛している気持に変化は無かった。」

過去に後悔や罪の意識は沢山あるけど、反省して未来に活かすしかないって思った。記憶を失くしている間に考えてきたこと、してきた生活を振り返ると、そう思うの。それにね・・・過去で未来の辻褄を合わせる気は、無いから。」

「芙蓉・・・たった一日で、ひとりで、良くそこまで考えられたね・・・凄いよ。」

樹は芙蓉の心の痛みを想像して辛くなり、足元に目線を落とす。マダラの事だけは出来れば思い出してほしくは無かったが、そんな都合のいい思い出し方も出来るはずがないと目をつぶる。

芙蓉は、晴れた青い空を見上げて眩しそうにしながらそれに答える。

「全然！カラ元気かもしれないし。きつとまた落ち込む時が来ると思う。その時は…樹ちゃんに甘えていい？」

「当ったり前じゃない！出来れば扉間様より先に、私に甘えてよねー！」

あははは。うふふふ。

二人が顔を見合わせて笑い合う。

芙蓉は、樹が親友で居てくれることに心から感謝した。

これまで、樹を傷つけ、裏切ったことも沢山あっただろう。

それなのに、樹は今でも芙蓉の親友で居てくれる。

自分も一生樹の親友として、樹を支えていこうと満開の桜に誓った。

「あ。芙蓉、私と扉間様の仲、疑ってたよね。誤解だつて解つたでしょ？もーっ！」

「あはは…ごめん。だつて、仲が良いのは事実じゃない。ね？」

二人は、里本部に着くまでずっと手を繋いで歩いて行つた。



本部の入口に着くと樹を先に見送り、芙蓉は時間になつてから火影室へと向かつた。

木ノ葉の里本部は今日も多くの忍達が行き交つており、芙蓉に見惚れる者だけではなく、冷やかな目を向けてくる者も居た。芙蓉は、今ならその冷たい目線の意味を理解できた。

俯きそうになるのを耐え、顔を上げ気丈に歩いて行く。

「失礼いたします。柱間さ……いえ火影様、懇談会はお疲れ様でした。」

「ワハハハ！よいよい、柱間と呼んでくれ。そのほうが嬉しいぞ！まさか懇談会で芙蓉の記憶が戻るとはこのう。やはり芙蓉を同伴させて良かっただろう？な？扉間！」

「懇談会に二人で出席して記憶が戻ったという根拠は無い。」

先に火影室に来ていた扉間は柱間の机に軽く腰を掛け、ぶすつとした顔をしている。

「どうだ、樹とは話せたか？喜んでおつただろう？」

そう訊く柱間の後ろで、扉間が部屋の間から椅子を芙蓉の所へ運ぼうとした。芙蓉がそれに駆け寄りお気遣い無くと言い、扉間と二人で椅子の背を持つ。

「あ、はい！やはり親友の樹ちゃんとの想い出は絶対思い出したかったですし、樹ちゃんもとても喜んでくれました！」

そう返事すると、芙蓉は扉間に小さい声で礼を言い、柱間の正面に椅子を置いて座る。

「そうか……。だが嬉しい反面、辛い部分もあるだろう。だがいつかきつと、心の整理が付く日が必ず来るはずぞ……」

柱間は優しく微笑んでそう言った。芙蓉は、はいと小さく頷く。

「さて、昨日の今日で悪いが、里の危機管理に関することだ。いくつか訊かせてくれぬか？」

柱間が背筋を正して言った。

「ワダチの件について思い出せる事はどんな些細な事でも全て教えてくれ。頼むぞ。」

扉間も家にいる時には見せない厳しい表情でそう言った。

柱間は昨日記憶を思い出したばかりの芙蓉に尋問することは酷であると反対したが、扉間は今ならまだ記憶を芋づる式に思い出しやすい時期で、直ぐに尋問するべきだと言いつ張った。

扉間は、芙蓉という木ではなく、木ノ葉の里という森で物事を見ていた。

今ここで芙蓉の記憶を蘇らせ、ワダチに関する情報を得られれば、ワダチの脅威から里を、そして芙蓉自身を守ることになる。

もちろん尋問は芙蓉にとって辛い事だろう。しかし芙蓉が苦しむ時は必ず、自分が支えると扉間は誓っていた。そして、今の自分なら必ず芙蓉を救えるという自信があった。

そうして、芙蓉が記憶を失くした原因であり、里の脅威となり続けているワダチの事件についての尋問が始まった。

「去年の十月一日。お前が椿の家に行き、その時に起きた事は何か思い出せるか？」

柱間もいっになく真剣な表情で芙蓉に問う。

「すみません……その日の事は思い出せていません。事件の詳細を教えてください、何か

思い出せるかもしれません：」

椿は芙蓉の誘拐犯の忍二人によって殺害された。

芙蓉はその現場を目の当たりにし誘拐されたとあつて、それを記憶の無い芙蓉に伝えれば、再び大きなショックを与えるのは必至で、扉間も柱間もこれまで事件については固く口を閉ざしてきた。

芙蓉も二人が口を開こうとしないことに、事件は凄烈なものだろうと想像はしていた。それでも初めは、その事実を知らない事への不安が勝り何度も聞かせてほしいと頼んだが、拒まれる度に、次第に知る事への不安のほうに勝つていったのだ。

しかし、今こそ、その事実を知らなければならぬ時だと芙蓉は覚悟していた。

柱間はちらりと扉間の顔を見ると、二人の目が合った。

すると、扉間が立ち上がつて芙蓉に一步近づき、一息置いた後に話し始める。

「椿とお前は、事件の三週間ほど前に、椿がうちは私塾に訪問して再会した。その後お前は何度も椿の家に通っていた。事件の当日、お前は椿の家に一泊するために出掛けた。そしてお前が家に着いた時、家の中で椿の死体を発見した：」

ガタンッ！

「えっ!? 死体!? 椿さん……」

芙蓉は思わず椅子から立ち上がり、声を震わせる。扉間はその芙蓉の肩に手を置く。

「落ち着け芙蓉。椿はお前を誘拐した男の忍二人によつて殺されたのだ。辛いのは解るが最後まで話を聞いてくれ。：椿の死体を発見したお前をその二人が誘拐し、千手温泉街へ連れて行き、ワダチと名乗る男に引き渡した。誘拐された直後、お前は気絶させられていたようだがな。これまでの話はカガミが写輪眼の能力で見分けている事だ。問題はその後だ。ワダチがどんな人物か、何を話したか、ワダチがお前に何をしたか、思ひ出してほしい。」

扉間が話し終わると、柱間が握りしめた手を額に当て小さく溜息をついて俯く。

しかし扉間は表情を変えることなく、悶絶する芙蓉の顔を真つすぐ見ている。

暫くすると芙蓉はふらふらと椅子に戻り、力なく腰を沈めた。

両手で頭を抱え、固く目を閉じて必死に思い出そうと試みる。

しかし、椿の笑顔しか思い出せない。椿と再会した日すら思い出せない。

そのうち深く暗い記憶の海の底で溺れそうになり、必死で息をする。

「……………思い、出せま、せん……………」

息苦しさに耐えきれず海面に浮上した芙蓉は、体を震わせながら言葉を洩らす。その様子を見て柱間が席を立てて芙蓉に駆け寄り、芙蓉の両肩を抱いた。

「芙蓉、無理せんでいいぞ！よく頑張ったな…何か思い出したらまた教えてくれ。扉間、今日はこれくらいにしようぞ。これ以上は芙蓉に負担が大きすぎる。」

「まだだ。…芙蓉。ワダチは忍だ。しかも千手一族とうちは一族両方のチャクラを持っていて、両方の一族の血を引く者の可能性もある。年は兄者と同じくらいだ。背は…」
「扉間！やめろ！」

「…柱間さま、大丈夫です。聞かせて下さい。私、きちんと事件の事を思い出して、解決したいんです…これ以上、里に迷惑を掛けたくないんです。」

「いいんだ！焦らなくて。昨日の今日だ。ゆつくり思い出せばいい…里のことも心配は要らぬ。それに、芙蓉が責任を感じる必要のない事ぞ！」

「確かに誘拐されたこと、椿殺害事件に関して芙蓉の責任は無い。だが、ワダチが里の脅威になっていることは現在進行中の事実だ。それを解決するカギは芙蓉、お前が持っている。早く思い出せるよう努力してくれ。」

「はい。もちろんです。」

柱間は頭を掻いて、ハアーツつと大袈裟に溜息を吐く。

身内だからと言って私情を挟まない扉間には感心するが、もう少し芙蓉の立場になって考えるべきではないかと柱間は思った。



快晴の空、満開の桜の下、芙蓉はうちは一族の子供たちに囲まれ、皆で笑顔になってはしゃいでいる。

カガミは少し離れた石の上に座り、目を細めてその様子を見つめている。昨日。

「芙蓉先生！話って何？」

私塾が終わった後、カガミは芙蓉に教室に残るよう言われ、今、向かい合っている。玄関から聞こえる塾生の声数も次第に少なくなつてゆく。

好い話なのか悪い話か分からないのに、芙蓉が自分と二人きりで話があると云つてきたことにカガミは内心舞い上がっており、それを必死に隠そうとしていた。

「カガミ君…あのね…私、記憶を思い出したの。思い出せていない事も多いんだけど…」
「ほ、本当かよっ!!良かったな!!先生!!本当に良かった…」

…てことは、俺との思い出も…

カガミはこれまでどこか胸の奥につかえていたものが、すうつと消えていくのを感じる。

「…私が記憶を失くしてから沢山支えてくれている事、本当に感謝しています。カガミ君はその前からずっと、私のことを支えてくれていたんだよね。それを思い出したら、直接ちゃんとお礼を言いたかったの…カガミ君、ありがとう。」

カガミは、それがまるで芙蓉からの愛の告白のように錯覚してしまう。

思わず顔が赤くなるのを感じ、顔を逸らしてしまった。

「でも、私が誘拐された事件の事だけは、なぜか思い出せないの……カガミ君も助けてくれたのに……ごめんさい。里の為に、早くワダチという人について思い出さなきゃいけないのに、どうしてもダメで……」

そう言つて芙蓉は悲しそうに微笑みながら、斜め下に視線を落とす。

「芙蓉先生が落ち込む必要なんて無いよ！俺は先生を助けられただけで嬉しいんだ。それに、俺はワダチについて調査を任されているけど、事件後の状況からも、今のところ大きな危険は無いし先生が無理して思い出さなくても大丈夫なんだから落込まないでよ……ね？」

そう言つてカガミは芙蓉の肩に手を乗せ、俯く芙蓉の顔を少しだけ覗き込む。

しかし実際は、芙蓉がワダチについて思い出せば、ワダチ問題の解決の糸口はみえるだろう。

だが、芙蓉の記憶喪失がワダチの仕業によるものだとしても、ワダチが芙蓉に自分の情報を安易に晒していたとは思えない。

そう考えると、芙蓉が辛い想いをしてまで凄惨で辛い事件を思い出す必要は、必ずしも必須では無い気もする。カガミは、扉間は今頃どう考えているだろうかと思いを巡らす。

気付けば、芙蓉が恐る恐る顔を上げ、カガミのことを不安そうに見つめていた。

「でも・・・私のせいで・・・里は・・・椿さんは・・・」

「先生のせいじゃない!!自分を責めないで。先生が何も思い出せなくたって全く問題ないよ!里は俺が、いや俺たちが必ず守る。だから安心して・・・」

真剣な眼差しで芙蓉を諭すカガミの目を見て、芙蓉の目からついに一筋、涙がこぼれた。

その瞬間、思わずカガミは芙蓉を抱き締めていた。

芙蓉もそのまま、いつの間にかすっかり自分のの背を追い越したカガミの胸に身を委ねて泣いている。

・・・扉間さまは何をやってんだ!芙蓉先生をこんなに悲しませておいて・・・

カガミは扉間に怒りを覚える。

その時カガミは芙蓉が柱間と扉間から尋問を受けていたことは知らなかったが、記憶を取り戻した芙蓉に対して扉間がどういう対応をしたかは容易に想像がついた。

芙蓉が焦って体を離す。

「ご、ごめんね・・・教え子のカガミ君に甘えちゃって、私ったら本当にダメな先生だね。」

「・・・芙蓉先生。俺との約束、覚えてる?」

「約束?・・・」

「俺が十八になって、その時写輪眼を開眼して上忍になっていたら、俺のこと男として見

てくれるっていう約束……」

芙蓉は半信半疑という顔をして目を泳がす。だがすぐに、あの夕暮れの場面を思い出し、何度か瞬きをしたあと、俯いた。

「うん……覚えてるよ。」

カガミは芙蓉の両腕を掴み、見据えた。

「俺、やっと来月で十六だけど、写輪眼開眼してるし上忍だ。約束の歳には早いけど、俺のこと、一人の男として見てくれないかな？」

そこには、初めて出会った時のあどけない顔の少年ではなく、見た事のない美しい少年が居た。

その迫真の表情から、芙蓉は目を逸らすことができない。

「扉間様にはまだ及ばないけど、必ず追い越して見せる。俺は絶対に芙蓉先生を悲しませない。絶対に幸せにする。」

……でも、と言いかけた瞬間、カガミの顔が見えなくなり目の前がぼやける。

カガミの唇が自分の唇に触れていた。

強く吸い付いたまま、動かない。

「……だめっ……カガミ君……」

芙蓉がカガミを突き放した。

カガミは動揺もせず、先ほどの迫真の表情を崩していない。

しかし芙蓉はその顔を直視することができず、急いでカガミに背を向けた。

「…気持ち嬉しいわ。でも、カガミ君は私の教え子よ。男性として見ることもなんてできない…ごめんさい。」

「先生。扉間様と結婚しないのは求婚されないからじゃないだろ？マダラに未練があるからだろ。扉間様はマダラの弟を殺した。マダラはその事をずっと恨んでた。そんな男と夫婦同然でこれからも一緒に暮らすのか？それとも流されて結婚するの？それでいいのかよ？先生が結婚してもんをしたくないなら、してくれなくていい。なら扉間様じゃなく、俺の傍に居てよ！うちのは皆だつてそのほうが喜ぶ!!」

カガミは声は荒げないものの、力を込めてそう芙蓉に言葉を投げかける。

芙蓉はゆっくりと振り返り、涙のあとが残る悲しい顔でカガミを見た。

「……………」

芙蓉は何も言わずにカガミの隣りをすり抜け、小走りで教室を出て行った。

カガミは固く目をつぶって頭を垂れ、自分を落ち着かせるために小さな溜息を吐いた。

僅かに体が震えていた。

カガミが昨日の出来事を思い出していると、ふいに芙蓉と目が合った。

芙蓉はニコツといつもと変わらない笑顔をかガミに返してくれた。

昨日あの後、うちは領地の学校の生徒だった友に、芙蓉の記憶が戻ったことを知らせた。

そこで、芙蓉が町に買物に出掛ける際に皆で押しかけ驚かせようという話になり、今に至る。

芙蓉は、喜ぶ元生徒と塾生たちに囲まれ、本当に嬉しそうである。

うちは領地の学校での風景が、そのままこの場に蘇っているようだ。

すると、芙蓉と子供たちがかガミの前にやってきた。

「かガミ君、皆に知らせてくれて本当にありがとうね。」

芙蓉が石の上に座っているかガミの顔の高さに腰を屈め、礼を言った。

「流石かガミ！昔から先生が好きだったもんなあ？」「先生のこと好きなのは男子全員でしょ？ていうか私たち女子も芙蓉先生のこと大好きだしっ！」「そうよ、そうよ！」「あくまた昔みたいに先生と勉強してえなあ。」「ほんと、懐かし〜！」

そう言つて子供たちがまた楽しそうに笑い合う。

しかし、他の子供が何言う「好き」とかガミが芙蓉を好きな気持には、既に大きな違いがある。

その事実にて、かガミがフツと笑つて少し俯く。

「ねえねえ芙蓉先生。こんど塾の教室で、うちのは元生徒も集めて先生の記憶復活お祝いパーティーを開くから、楽しみにしててね！」

「本当に？嬉しい!!楽しみにしてますね！」

カガミの愁いに気づく者など一人も居らず、皆で盛り上がっている。

しかし、芙蓉だけはその愁いに気が付いていた。

「カガミ君。パーティー、楽しみにしていますね。」

芙蓉はカガミを気遣ったつもりなのだろうか。それとも、カガミも生徒の一人と念を押したつもりなのだろうか。

カガミはぎこちない笑顔でハイと答えた。



花冷えの夜空には新月に近い月が浮かび、深い闇に星が輝いている。

芙蓉は食卓に扉間と向かい合って座り、昼間、家は一族の子供たちが来てくれた事を楽しそうに話して聞かせている。

「そうか。それは良かったな。」

「はい…実は私、記憶が戻るのが怖かったです。このまま記憶が戻らなければいいのについて、思っていました。でもやっぱり思い出せて良かったです！大切な思い出は、無くしたくないから…」

「過去など無くとも生きてはゆけるが、やはり兄者が言うように過去があるから今があるのは事実だしな。せつかく思い出せたんだ。その思い出と子供たちを大切にしてくれよ。」

「はー！」

芙蓉は尋問直後に酷く落ち込んでいたが、うちの子供たちのお陰で思いのほか元気を取り戻していることに扉間は安堵した。

しかし、芙蓉のことである。ワダチの件で内心は苦しんでいるに違いない。

扉間は嬉しそうに話しを続ける芙蓉を見ながら、自分も出来るだけ芙蓉を慰めようと思つた。

そして話に区切りがつくと芙蓉は立ち上がり、台所で明日の朝食の下準備を始めた。暫くすると、扉間も台所にやってきて芙蓉の背後に立つて言う。

「頑張りすぎるなよ……」

扉間はそう言つて芙蓉の両肩に手を置く。芙蓉の手がピタリと止まる。

「は、はい……ありがとうございませう。もうこれで終わりですから。」

扉間がゆつくりと芙蓉の身体を自分の方に向かせる。腰に手を回し、口づけをしようとした。

「ご、ごめんなさい。今日はちよつと……あの、まだ塾の仕事があつて……」

芙蓉は急いで扉間に背を向け、再び小口切りの小松菜を皿に載せていく。「そうか。あまり根を詰めてやるなよ。」

はいと背中で返事をする芙蓉に、扉間は少し不安になる。

扉間は何事も無かったかのように食卓に戻り、自分も書類を広げて仕事を始めた。頬杖を突きながら、手を洗っている芙蓉の背中をちらりと見る。

：扉間が尋問で問い詰めたことに怒っているのだろうか。

それとも、蘇った記憶によって芙蓉の心が揺れているからなのだろうか。訊きたかったが、扉間にはどうしてもそれが出来なかった。

芙蓉は眠れずに机で本を読んでいるが、心はそこに無い。

昨日カガミから言われた言葉が頭から離れないのだ。

『扉間様はマダラの弟を殺した。マダラはその事をずっと恨んでた』

そして、マダラの言葉を思い出す。

『俺はな、弟たちを千手の忍に殺された。最後の一人の弟は、扉間によってな』

芙蓉の視線は既に本の上には無かった。

ぼんやりと目の前の壁を見ている。そして、静かに俯き、目を閉じる。

：扉間さまのことが許せないんじゃない。ただ過去を思い出した以上、ううん、マ

ダラさまへの愛を想い出してしまった以上、やっぱり考えずにはいられない……

芙蓉は本を閉じ、寝台に腰かけ布団を被って横になる。

……でも、それも過去の感情を今の感情の様に錯覚しているだけよ……

マダラさまを思い出すと辛い。でも扉間さまだって、これまでずっと、千手一族や私たちを守るために戦ってくれていた。だから、私は扉間さまに命を助けられたも同然だわ。……

そう結論づけると、不意に、さっき扉間を拒んでしまったことを後ろめたく感じた。

芙蓉はそれ以上何も考えまいと、固く目をつむった。

温かい……

懐かしい温もりだった。

目を開けると、そこにはマダラの顔があった。

「状況が飲み込めないようだな。俺は死んでいない。お前もな。ここは檜枝岐神社だ。」

……マダラさま！ やっぱり死んでないなかつたのね！……

「お前が愛しているのは、誰だ？」

……え？……

「ならば俺の前に、跪け。」

・・・愛の前に跪くのか、契約の前に跪くのか、それとも・・・
これは夢じゃない！ 私の記憶だわ。

思い出した。ワダチは、マダラさまだったんだ!!

『へッ。どうせ裏切るなら、涙ぐらい見せろよ・・・』

マダラさまは今も・・・生きている！

それを思い出した瞬間、強い頭痛が襲う。夢の中のはずなのに現に頭が痛い。
しかもその痛みは、覚えのある痛みだった。

突然目の前が真っ白になり、眩しさを目で閉じた。

「せっかく楽にしてやったのに。本当に馬鹿。いや、天然だなお前は・・・」

その声に、芙蓉はゆっくりと目を開ける。

真っ白な世界で、マダラと二人、向かい合って立っていた。

「・・・」

「ここは檜枝岐神社。な、わけないな。ここはお前の心の中だ。」

「マダラさま・・・なぜ、ここに？」

「それは、俺が折角消してやった記憶を今、お前が思い出しやがったからだろう。まさかとは思ったが、本当に自力で記憶を取り戻すとはな…。万が一でもお前が、俺が生き

ているという記憶を取り戻した時こうして俺がお前の精神に現れるよう、術を仕込んでおいたのさ。しかしまあ…お前の精神世界には忍術が及ばないようだ。どんな能力なのか、これからじっくり調べさせてもらおうぞ。」

「……?……」

「今度こそ、問答無用に連れてくからな。」

「……えっ?! それは……それは出来」

「後日、迎えを遣る。」

「マダラさま!!」

芙蓉がそう叫んだ瞬間、黒い球体が飛んできて、棒状に変化したと思ったとたん、芙蓉の首に巻きついた。

巻き付いた感覚はあつたのだが、痛くも苦しくもない。

芙蓉は反射的に首を掻きむしり、それを外そうとした。しかし確かに巻き付いたはずのその黒い物体の感触は指では分らない。

「それは俺からのプレゼントだ。俺が生きていると誰かに伝えようとした瞬間、その黒いのがお前の息の根を止める。変な真似すんなよ。」

「私は……私はもう、木ノ葉の里の為に生きると決めたのです!」

「そうか。だがもうそんなことはどうでも良い事だ。これからお前は俺の奴隷だ。お前

の意思など関係無い…フツ。せいぜい俺に尽くしてもらおうかな。」
「……………っ。」

「恨むなら自分自身を恨むことだ。ハハハハ……………」

「…待って!!」

芙蓉はそう叫んで目を覚ました。息は上がり、汗をかいている。

飛び起きるといふ表現があるが、今まさにそういう状態にもかかわらず、身体は全く動かない。

……………どうしよう。あれは夢じゃない。どうしよう……………

ガチャツッ!

「どうした芙蓉!!」

芙蓉の叫び声を聞いて扉間が部屋に飛び込んできた。

「……………」

扉間の顔を見て芙蓉の脈が更に速くなる。言葉を発するのが怖い。

「大丈夫か?…無理して話さなくてもいい。まずは落ち着くんだ。」

扉間は跪いて芙蓉の右手を握り、もう片方の手で頭を優しく撫でる。

芙蓉はその感覚と温もりに、ここは夢の中ではなく現実なのだと自分に言い聞かせる。

すると次第に心拍数が収まってゆく。

芙蓉はゆっくりと起き上がろうとした。扉間はその身体を支える。上半身を起こした芙蓉は、無言で扉間の首に腕を回して抱き着いた。扉間も芙蓉の背中に腕を回し、背中をさする。

「扉間……さま……」

「なんだ？」

芙蓉は扉間の返事にほっとして涙が溢れてきた。

「……私が、死ぬ夢を、見ました……」

「そうか。それは恐ろしいな。もう大丈夫だ。安心しろ。」

扉間は今になり、芙蓉に尋問を強要してしまったことを強く反省した。

芙蓉は追い詰められた気持になり、そんな夢を見てしまったに違いない。

「悪かった。俺が無理に尋問をして、お前を追い詰めてしまった。」

「……」

尋問は確かに辛かったが、扉間を責める気持ちなど微塵もなかった。

しかし、その尋問でマダラが生きているという記憶を思い出したのだとしたら……

そう思ってしまった、芙蓉は扉間の言葉に返事が出来なかった。

それから暫く扉間は芙蓉の傍で静かに寄り添っていたが、芙蓉が落ち着いたのを確認

すると、芙蓉を布団の中に戻し、部屋を出て行った。

芙蓉は目を閉じ、扉間のお出で行く足音を聞いていた。

そしてその足音が扉間の部屋の中に消えるのを確認すると、急いで布団から出て机の灯りを付け、手鏡で首を確認する。

さつき、巻き付いた（はずであろう）黒い物体はそこには無かった。

・・・もしかして、あれは、ただの夢だったの？

でも確かにあれはマダラさまだったし、私の心の中だつて言つてた：

頭痛も、首に巻きつく感覚も確かに現実と同じ感覚だった。

記憶を取り戻してしまった私を、今も生きているマダラさまが口封じで再び連れ去ろうとしているのなら合点がいくし・・・

芙蓉の背中に冷たいものが走る。しかし、今はどうすることも出来ない。

ふらふらと寝台に戻り、布団の中に入る。僅かに残っている布団の温もりが、否応なしに先ほどの出来事を思い出させる。

寝られるはずもない。

そう思っていたが、芙蓉はいつの間にか、何かに導かれるように眠りに落ちていた。

(28) 扉間の求婚。マダラの意味

「何?! 五体目の尾獣が実体化しかけているだど?!」

扉間が組んでいた腕を離し、早足で柱間に歩み寄る。

「うむ。人里離れた場所ですぐに被害が出る恐れは低いですが、近日中に回収に向かうぞ。」

木ノ葉の里には現在、四体の尾獣が封印されている。

一体はマダラを倒した時に捕獲した九尾。これはミトを人柱力にして封印している。

残り三体は封印石の中に封印してあるが、こちらは人柱力よりも安定性は悪い。いわば仮封印といったところである。

しかし、それには理由があった。

木ノ葉の里が出来て一年が過ぎた頃、水の国、風の国、土の国、雷の国、それらの国にも木ノ葉の里のシステムを取り入れた忍の里が興った。

柱間と扉間はきつと近いうちにそれらの里と協定を結ばなければならない時が必ず来ると考えている。

その時に対等に協定を結ぶ為の材料として、尾獣をそれらの国に分配しようと考えて

いるのだ。勿論、無料（タダ）ではないが。

とにかく、その時の為に木ノ葉の里に残す九尾以外は、人柱力ではなく敢えて簡易的な封印にしてあるのだ。

「扉間。俺が居ない間、里を頼むぞ。」

「言われなくてもだ。兄者も気を付けて行って来いよ。しくじるなよ。」



先日まで満開だったはずの桜は風に吹かれ、哀れに空から剥がれ舞い散ってゆく。

芙蓉はそれを見上げ惜春の想いと共に、苦しくて堪らない胸に両手を当てた。

目を伏せ、藤の買物籠を肩に掛け直し、歩いてゆく。

・・・トン。

家続く坂道を上り切った所で、誰かにぶつかってしまった。

「も、申し訳ありません！」

「おかえり。って、さつきからずっと名前を呼んでいたんだが……」

ぶつかっただのは扉間の胸だった。芙蓉は焦って一步後ずさる。

「と、扉間さま！すみません……」

「どうした。ぼーっとして。そんな状態で町から歩いて帰って来たんじゃないだろうな。」

「い、いえ……」

「事件の事は無理して思い出そうとしなくてもいい。それに、歩きながらはやめろ。危ない。」

俯いていた芙蓉はそつと扉間の顔を見上げた。心配そうな顔をしてこちらを見てい

る。「はい……気を付けます。あつ、すぐに夕食の用意をしますね。せつかく扉間さまが早く帰宅されたんですもの。ゆつくり二人でご飯を食べましょう。ね?」

芙蓉はそう言うのと大股で扉間の一步前に出て振り返ると、扉間に微笑んで見せた。傾いた陽に照らされながら、風に靡く芙蓉の髪の毛がキラキラと光って美しい。

「……他に、何か悩んでいることがあるなら、言えよ。」

そう言われると芙蓉は困ったような笑顔で少し俯き、何かを考える。

「私……貴方を独り占めにしたくないなんて我儘は言いません。ただ、多くの人から必要とされる貴方を癒せる存在になりたいんです。それには、どうしたらいいかなって……」

そして再び扉間を見つめ、少し悲しそうに微笑んだ。

まるで扉間に返事を催促するかのようになり、芙蓉の後ろから扉間へ向かって花風が吹き抜けた。

「芙蓉……お前は既に、俺を癒してくれるたった一人の存在だ。」

「・・・嬉しい・・・良かった！」

そう言つてニッコリとしたあと、芙蓉は軽い足取りで門を抜け玄関へ歩いて行く。

「扉間さま、早く〜！」

玄関の前で芙蓉が手を振ってくる。

・・・今の言葉の意味は？・・・

扉間もフツと笑顔を作つて片手を上げ、玄関に向かつて歩き出す。

今度は、扉間の後ろから花風が家に向かつて吹き抜け、どこからか運ばれてきた桜の花びらが舞い落ちた。

菜の花の白和え、露の甘露煮、えんどう豆ご飯、三つ葉と卵豆腐の吸物、そして主菜には扉間の好物である岩魚の塩焼きが揃い、食卓に並んだ。

芙蓉が扉間の猪口に冷や酒（常温の酒）をゆつくりと注ぐ。

「明日から兄者が戻るまで、火影代行をすることになった。」

「柱間さま、どこかにお出かけなさるのですか？」

「ああ、風の国の国境近くで他族と会談があつてな。」

「そうですか。扉間さま、頑張ってくださいね！」

扉間は注がれた猪口の酒を一口飲み、食卓の上に置く。

「いや、むしろあいつが居ない方が楽なくらいだ。兄者なんかの参謀・補佐よりも、俺が

決めて自分で命令したほうが物事早いしな。」

「フフフ。じゃあ、この機会に扉間さまが火影を代わって差し上げては？」

「ハハ。まあそうは言っても、俺はまだ長の器じゃない。兄者のカリスマ性は天性のものだ。今の俺では到底敵わん。：いただきます。」

扉間が菜の花の白和えに手を付ける。それを見て芙蓉が言う。

「またまた御謙遜を。扉間さまだつて、柱間さまとは違うカリスマ性ありますよ！例えば、（こ）ことか！」

そう言つて両手の人差し指と小指を上げ、自分の両頬と顎を指さして見せる。

「刺青のことか？これは後天的なものだな。つて、オイ！違うだろ！」

芙蓉は手に口を当ててアハハハと大笑いし、扉間は苦笑いしながら猪口の酒を飲む。

「岩魚、冷めないうちに食べて下さいね。焼けばまだありますから、たくさん食べて下さい。あ！あとから骨酒も造りましょうね。」

「ああ。」

いつもと変わらない、いや、いつも以上に和やかな夕食だった。

「扉間さま……」

風呂から上がり、卓袱台で夕刊を読んでいた扉間の背中に、芙蓉がそつと寄り添つて

きた。

そして、両手を扉間の腹に回して抱き着いた。

「……」

扉間は暫く固まっていたが、ようやく意味に気が付き、芙蓉を胸に抱き寄せる。

「…今日は、ここでしてくれませんか？」

「えっ、は？」

「駄目、ですか…？」

「いやー駄目じゃない。駄目じゃないが…」

恥ずかしい。

なぜか無性に恥ずかしいのである。だがそんなことは男として、言えない。

「じゃあいつもの様に上の部屋でも…」

「いやー！ここでしよう。うん…」

扉間は立ち上がり、居間の照明を消し、卓袱台のある部屋の照明も消そうとした。

「消さないで…灯りを点けたままで、しましよう？」

「はっ、は？いや、でも…いいのか？」

「見て欲しいんです…私のこと、もつとしっかり…。私も、扉間さまのこと、しっかり見

たい…」

「……っ。」

突然大胆になつてゐる芙蓉に扉間は大いに戸惑う。だが、同時に胸が高鳴る。確かに明るい中で芙蓉の裸をじっくり見た事は無い。見てみたい。

扉間は黙つて座布団の上に芙蓉の頭を載せ、横たわらせると、自分は上着を脱ぎ、次に芙蓉の服を脱がせ始めた。

緊張する。下着を脱がす時は、若干手が震えていたかもしれぬ。

・・・ヤバイ。眩しすぎる。なんで今まで一度も明るい中で見なかつたんだ・・・

芙蓉の真っ白でしなやかな肢体、美しい形の乳房と桃色の乳首、見事にくびれた腰、濃くも薄くもない陰毛が艶めかしい……

暗がりで見ても美しいが、明るい光の下で見るとそれは、まさに神々しかった。

これまで、こんなに美しい女を抱いていたのかと思うと、喉が詰まる感覚になり、思わず唾を飲む。

「扉間さま……」

芙蓉が固まる扉間を見て不思議そうに名を呼ぶ。

「あ、ああ。すまん。見惚れていた……」

扉間は片手で口を押え、思わず顔を逸らす。顔が熱い。

芙蓉はゆっくり起き上がり、扉間の裸の胸に頬を寄せた。そして指先で扉間の見事な

腹筋をなぞってみる。

「扉間さまも、とつても素敵ですよ…」

おのずと二人の唇が重なる。

そして扉間は芙蓉を後ろから抱きかかえると、髪の毛を優しくかき上げ、首筋を舌でなぞった。

「あんっ」

そして、扉間の指が芙蓉の両方の乳首に触れた。

「はああんっ…」

芙蓉は痺れる快感で閉じていた目を開けると、その指先と自分の乳首を見た。

扉間の大きな手が芙蓉の乳房を包み、長い指先が乳首を弄んでいる。

芙蓉の乳首は野苺の様に赤く膨らみ、どんどん敏感になってゆく。いつも自分の乳首は、扉間の手によってこんな風になっているのかと思うと下腹部がますます熱くなる。

「あんっ…ああ…はあはあはあ…」

芙蓉の甘い声を聞くと扉間は、右手を乳房から離し、芙蓉の顎を掴んで引き寄せ後ろから口づけをした。そして一層激しく乳首を弄ぶ。

「んっんっ…!」

塞がれた芙蓉の口から洩れる声が大きくなると、今度は芙蓉の股間に手を遣り、優し

く撫でる。芙蓉はもどかしそうに、その腕を掴み、僅かに爪を立てた。しかし扉間は芙蓉の腕を離し、もう片方の腕と一緒に身体の後ろに回させると、自分の男根を掴ませ、しごかせる。

扉間に両腕を拘束され、身をよじらせている芙蓉の姿を後ろから見下ろすと、扉間はこれまでになく興奮し、拙い芙蓉の指の動きで男根は固くなる。

そして芙蓉を再び仰向けに横たえると、扉間は左手で芙蓉の両手首を掴み芙蓉の頭上で床に押し付けた。

両手を拘束された芙蓉の乳房は呼吸と同時に大きく上下している。そして芙蓉の白い肌とは対照的に、乳首と唇は赤々として鮮やかである。

「扉間さま……」

少しだけ怯えたように自分の名を呼ぶ芙蓉の口を唇で塞ぎ、強引にむさぼる。空いている右手で芙蓉の股間を触ると、強く唇を吸うたびにどんどん濡れてゆくのが分かった。

今度は芙蓉の両手を自分の両手で床に押し付け、そして前からいつきに芙蓉の膣に挿入した。

「ああああっ……!!」

芙蓉は身体を反らし、快感に顔を歪めた。

扉間が芙蓉の子宮を激しく突き上げると芙蓉の乳房も同時に揺れ、芙蓉は更に身悶える。

喘ぎ声を響かせるその顔は淫らで、とてつもなくいやらしい。

これまで暗がりで見えてきていたその顔とは、まったく別の顔に見えた。

・・・ああ、芙蓉の全てを支配してやりたい・・・

「なあ。なんで今日はここにしたいって思ったんだ？」

行為が終わり、扉間の脇に頭を載せて一緒に寝転んでいる芙蓉に問う。

『『木ノ葉婦人画報』に書いてあったんです。夜の営みで男性を飽きさせない為にはスパイスが必要だって。その一つに、いつもと違う所ですると良いと書いてありました。』

「雑誌情報かよっ！って、あの雑誌そんなこと書いてあんのか？まったく：けしからんな。」

「でも役に立ったでしょう？駄目ですよ、廃刊にしちゃ。ウフフフ」

「……………」

恥ずかしがって口籠る扉間の横顔を笑顔で見ながらも、芙蓉は心の中で溜息をついた。

明日をも分らぬ身となり、二人で身体を重ねるのは今夜が最後かもしれない。

今の芙蓉には、こんな事でしか扉間との想い出を作ることが出来なかった。それが悲

しい。そして思考は思わず絶望へと向かってしいそうになる。

・ ・ ・マダラさまの奴隷なるくらいなら、今、扉間さまの胸の中で死んだ方がいい。でもそれじゃまたマダラさまが里を襲い、柱間さまと扉間さまと闘うことになる。

私一人でなんとかできないの？何か良い方法は・ ・ ・

扉間が少し上半身を起こし、自分の上着を拾い上げて芙蓉に掛けた。

「どうした？そんな険しい顔をして・ ・ ・」

「えっ、いえ。次は、どんなスパイスを用意しようかなあつて。ウフフフ・ ・ ・」

「もう、必要ない！・ ・ ・」

そう言つて扉間は顔を背けるが、明らかに顔はにやけていた。



芙蓉がマダラが生きていることを思い出し、自らの精神の中でマダラと再会してから既に三日が過ぎ、四日目の朝を迎えていた。

『後日、迎えを遣る』

あの時の様に、マダラに雇われた忍が現れるのだろうか・ ・ ・。

いずれにせよ、自分が姿を消せばまた事件になり、里に、扉間に、そしてかつて擁護してくれたうちは一族に迷惑をかけることになる。

そう考えると、自分がマダラの真実を火影である柱間に伝えて絶命することが、最良

の策なのではないかと何度も考えてしまう。

しかし、マダラのことだ。

芙蓉が死ぬだけで事が収まるとは到底思えない。

そうなることややはりマダラの奴隷となり、傍でマダラを里から遠ざけるほうが良いような気もする。

芙蓉はあまりのストレスで食事も殆ど喉を通らず、吐き気がして、腹を下していた。

ただ、不思議と眠る事だけは出来ていた。それはまるで夢の中でマダラに監視されているようであり、朝目覚めた時には息が上がりぐっしよりと寝汗をかいていた。

・・・今日も何事ありませんように。あれは、ただの夢でありますように・・・

芙蓉は雀の囀りを聞きながら、布団の中でもう一度目をつぶってそう祈った。

「どうですか？火影様のお仕事のほうは。」

芙蓉は朝食を食卓の上に並べながら、朝刊に目を通す扉間に向かって尋ねた。

「どうってことはない。むしろいつもより楽なくらいだ。ただ、里の細々とした行事や会合にも顔を出さねばならんのは少々面倒だがな。」

扉間は新聞を閉じ、箸を持っていただきますといい、味噌汁をすすする。

「そうですか…柱間さまはいつ頃帰って来られるのですか？」

「色々揉めているようで、まだ時間がかかるようだ。」

三日前、尾獣捕獲のために風の国との国境付近へ向かった柱間から、昨日連絡がきた。偶然にも砂隠れの里も同じ尾獣を発見したようで、あちらも捕獲のために動いていたという。

砂隠れ側より先に捕獲するか、それとも協力して捕獲するか、この先を見据えあちらに譲るのか見極めている状況だった。

その為、柱間の帰還はまだ先になりそうだった。

「大変ですね……うまくいくと良いですね！」

芙蓉も箸を持つ。しかし食欲がわかないため、何から手を付けようか一瞬迷う。しかし扉間に異変を察しられてはならないと、急いで芙蓉も味噌汁をすすった。

「あ、ごめんなさい。今日はちよつとお出汗が足りなかつたですね。」

「いや、気にならない。大丈夫だ。」

そう言つて扉間は芙蓉に口角を上げて見せる。その表情に、思わず胸が詰まり、芙蓉は俯いてしまった。

「落ち込むなよ。これも美味しいぞ？ 弘法にも筆の誤り。たまにはそういう事もあるだろ。」

……これが最後の料理だったら……

「……今晚のお味噌汁は、気を付けますね。」

芙蓉はなんとか涙が込み上げるのを抑え込み、大きな笑顔を作って言った。

「すまん。今日の夜は会食があるから夕食は要らない。」

「そうですか……分りました。」

「たまには樹と外に飯を食いに行ったらどうだ？今日は確か午後から休みのはずだぞ。後で伝えておいてやろうか？」

「あ、ありがとうございます！樹ちゃんの予定、空いているといいなあ。」

樹と二人で楽しく食事をする風景を思い浮かべると心が躍るが、自分がその予定を行えるのか不安になる。

再び心が曇りそうになるが、芙蓉は強制的にその思考回路を遮断した。



四月中旬。幾分日が長くなり、十八時でもまだ辺りはほの明るい。

繁華街は多くの人で賑わい店先の灯りが眩しく光っている。

「芙蓉——っ！お待たせ——！」

樹が手を振りながら、こちらに向かって走って来る。

この瞬間をこの日、芙蓉はどれほど待ちわびていただろうか。

「ううん。全然待ってないよ。急に誘ってごめんね。来てくれてありがとう！」

「何言ってるの！芙蓉と二人で外食なんて久しぶりだし、超嬉しいよ！こっちこそあり

がとー！」

二人は手を繋ぐと、扉間が予約を入れてくれた店に向かつて歩き始めた。

「でもさあ、扉間のやつ予約まで入れるなんて、本当に芙蓉のことが心配なんだね。」

「え？ そうかな？ そうかもしれないけど、気を遣ってくれただけだと思うよ？ お勘定も全部後で払ってくれるみたいだし。」

「マジで！！ よつしやー！ いっぱい食べて飲むぞお。ねっ？ 芙蓉！」

「もう、樹ちゃんつたら…フフフツ。」

店は、入り口からはそれとはすぐに判らない、隠れ家的な料亭だった。

二人は想定外の店に少々緊張しながら、女将に案内され個室に通された。

「お料理は扉間さまから季節の懐石を、ご予約頂いております。お飲み物は、そちらのほうからお好きなものをお選びくださいね。」

女将はそう言うのと静かに襖を閉めて出て行った。

「な、なんかちよつと緊張するね。いくらなんでも良いお店過ぎでしょーよ…これ。任務服で行くなって言ってたのはこういう事だったのか。」

樹が正座したまま部屋を見渡す。床の間には、いかにも高級そうな陶器や掛け軸、豪華な生け花が飾ってある。

「そうだね…なんだか申し訳ない気がするね…」

二人が思わず無言になって居ると、さつそく料理が運ばれてきた。最初は緊張していたものの、二人は目にも美しい料理の味に自然と笑顔になっていく。

「…美味しい！」

コゴミとウドの黄身とえを口にして、芙蓉が顔をほころばせる。

樹と二人でおしゃべりをし、日頃と違う場所と料理に、自然と食が進んだ。

「芙蓉の料理も綺麗で美味しいけど、たまにはこういう場所で食べるのもいいよね…：あつ、そうそうあのさ、明後日私休みなんだけど二人で遊びに出かけない？芙蓉も私塾休みでしょ？」

「えっ…：うん。行きたいけど、でも、まだ予定が判らないし…：」

「もう扉間からの許可は貰ってるよ！芙蓉を誘うのにいちいちあいつの許可を得ないといけないってのは癪だけどっ。」

もちろん芙蓉も樹と一緒に遊びに行きたい。

しかし、居間の芙蓉に自分の明後日のことなど、分らない。

「千手領地の女学校跡に行ってみない？あそこ、今は資料館になってるみたいだよ。」

「う、うん…：いいよ。行こう！女学校かぁ。懐かしいね…：」

芙蓉は断る理由を説明できるはずも無く、樹のガツカリした顔を見たくない気持ちでつい、約束をしてしまった。

そんな芙蓉の気持ちに気付くはずもない樹は、嬉しそうに当日の予定をつらつらと話
し続けている。芙蓉は樹の本当に嬉しそうな顔を見ながら、心が痛んだ。

帰りは樹が家まで送ってくれた。笑顔で手を振りその場から風のように立ち去った
樹に向かつて、芙蓉は力なく手を振り続けた。

そしてようやく、いつもよりも重く感じられる玄関の扉を開けた。

「おかえり。」

扉間が先に帰宅しており、玄関の前に立っていた。

「扉間さま、お早かったのですね。って、すみません！私が遅いんですよね。もう十時前
だし！申し訳ありません…」

「気にするな。樹と二人でゆっくりできたのなら良かった。こっちは思ったよりも早く
終わったからな。」

芙蓉は家に入り、二階の自室で着替えてから居間に下りてきて、扉間の前に座る。

「あんなに素敵なお店を用意して戴いて本当にありがとうございました。お料理も凄く
美味しかったですし、二人でゆっくり話ができました。」

「それは、良かった。」

扉間はそう言うと言書類を書く手を止め、両肘を食卓につくと手をこまねいて何かを考
えている。

そして意を決したかのように言う。

「……ところで、明日は早く仕事が終わえられそうなのだが、十六時に顔岩展望所まで来てくれないか？ 私塾の授業には間に合うようにする。」

「あ、は、はい……。展望所に、何かあるのですか？」

「見せたいものがある。行くまで秘密だ。」

「そう、なんですね……。分りました。」

「あ！一人で、来いよ。」

「はい……。」

明日も知れぬ身……。明日をも知れぬ命。

どうしてこういう時に限って次から次へと「約束」が現れるのだろうか。
いや違う。

こういう時だからこそ約束の数を多く感じ、小さな約束ですら重く感じるのだ。
多くの者が盲目的に明日は必ず来るものだと思っっているし、それを誰も疑わない。

数日先、数カ月先の約束も平気です。しかし、明日がどうなるかなど誰にとつても
平等に、どうなるかわからない事もまた、事実である。

そういう意味では、今の芙蓉が特別なわけでは無いのかもしれない。
しかし芙蓉は不確かな明日に怯えていた。

・・・お願い。何も起きないで。ただの夢で終わって!・・・
芙蓉は、もう、ただ祈ることしか出来なかった。

◆ 日付が変わる少し前、芙蓉は布団に入った。

「ねえ・・・」

芙蓉がまどろみ始めた時だった。誰かの声が聞こえた気がして意識が戻る。耳を澄ますが、何も聞こえない。気のせいだったようだ。再び目を閉じた。

「ねえ・・・僕の声、聞こえてるよね?」

「・・・?!」

「シッ!・・・静かにして。声出しちゃダメだよ。僕はいま君の首に巻き付いてる。名前
はゼツ。よろしくね。」

声を出すなど言われて黙っているのか、それとも恐怖のあまり声が出ないのか。
芙蓉の身体は固まり鼓動が速くなる。

「怖がらないで。何もしないから・・・君に、お願いがあるんだ。」

「・・・?」

「君がマダラにかけてるアレ、解いて欲しいんだよ。」

「・・・??」

「傾国の術、だよ。」

「・・・??」

「マダラと初めて性交渉した時、マダラを縛る術をかけたでしょ?」

『・・・な、何のことを言っているの? 傾国の術? そんなの知らない! それにこのゼツつて何者なの?! 気持ち悪い!』

芙蓉が心の中で叫んだ。

「なんだ、君、傾国の術を知らなでマダラにかけたの? ああそつか、母親が早くに死んで教えて貰ってないんだね。…じゃあ僕が教えてあげる。君たち橘一族の女だけが使える術で、性交渉で男を洗脳できるんだ。しかも処女の洗脳パワーは半端ない。君にとつてマダラは初めての男だったでしょ?」

『そ、そうだけど・・・洗脳なんてしてない!』

「一生マダラと二人で暮らせるようになって、マダラの目を見て強く想わなかった?」

「・・・!!」

「それぞれ。だからマダラは今でも君のこと、躍起になって取り戻そうとしてるんだよ。以前君がマダラを拒んだ時、君が命を賭したせいで無意識に引き下がっちゃったみたいだけれど、今回ばかりは無理そうだ。・・・でも、それじゃ困るんだよ。」

『困る・・・?』

「うん。僕はマダラの意識から生まれた存在なんだ。つまりマダラの心の一部ってわけ。だからマダラの本心を知ってる。：マダラは、君から解放されたがってる。」

「……………」

「マダラが、『先の夢』に盲目に突き進んでいるのは、君が原因でもあるんだよ？君と幸せな世界で暮らすという夢を実現する為、もう手段なんて関係無くなってる。完全に暴走しちゃってるよ。君にも、マダラを止める責任があるんじゃないのかな？」

『そんな……マダラさま！……その術を解くにはどうすればいいの？』

「簡単だよ。性的な接触をしながら、マダラの目をしっかりと見て『お前を開放する』って強く想えばいいだけ。簡単でしょ？」

『本当に、それだけでいいの？性的な接触って、具体的には？』

「出来れば性交渉。それが出来ないならせめて口づけして。」

『……………やっぱり突然現れて姿も見えないあなたの言うことなんて信用できないわ！私を騙して何かを企んでいるのかもしれないじゃない！』

「うーん。そんな事ないけど、まあ確かにね。僕は一応伝えるべき事は伝えたから、あとは君の判断に任せるよ。せいぜい君以外の、誰かが殺されないよう気を付けてね。じゃあ。」

「ちよつと待って!!」

芙蓉は声を出して叫んでしまった。

しかし、もうゼツからの返事は無かった。

そして間もなく、扉間が部屋に飛び込んできた。

「どうしたッ!」

「……す、すみません。また、夢を見てしまって……でも大丈夫です! 大丈夫ですか
ら!」

扉間の顔を見ず、両手を前に出して必死に誤魔化そうとしている芙蓉に、扉間は静かに歩み寄り、寝台に腰かける。

「無理をするなど言っているだろ……辛い時は辛いと言え。」

「……。」

言えるものなら全て言っけてしまいたい。

しかし言えない事が更に、増えてしまった。

自分自身のおぞましい秘密まで知ってしまったのだ。

芙蓉は必死に淀んだ心の中に、扉間へ返す言葉を探した。

「今夜は一緒に寝よう。ほら、そっちに寄れ。」

芙蓉は言われるがまま布団の端に寄り、扉間と並んで寝台に横になる。扉間は芙蓉の手をそっと握った。

「何かあったら起こせ。いいな？」

「……はい。分りました……」

芙蓉はかすれた小さな声で答えるが、まだ扉間の顔を直視できない。見てしまえば、後ろめたさと自己嫌悪、そして不安と恐怖で泣き叫んでしまいそうだった。

そつと目を閉じる。

扉間の温もりで自然と心が解けてゆく。そしてまた、まどろみが訪れる。

この四日間、四六時中辛いにもかかわらず、不思議と夜は眠れていた。眠り。それはいまの芙蓉にとって何よりの救いだだった。

芙蓉の苦悩とは関係無く、陽は昇り、時は過ぎてゆく。

いつもの事を、いつもの様に、何事も無かった様にこなさなければならぬ。

窓から朝陽が差し込み、囀り飛び去る数羽の鳥の影がその光を横切って行った。

「じゃあ。十六時に顔岩展望所だな。気を付けて来いよ。」

「はい。何を見せて貰えるのか楽しみにしてますね。いってらっしゃいませ。」

玄関でいつものように、芙蓉は扉間を笑顔で見送った。

「ハア——……」

扉間の姿が消えると、芙蓉は糸が切れたかのように大きな溜息を吐いてうずくまる。

ここからが、芙蓉の現実の始まりだった。

『君にも、マダラを止める責任があるんじゃないのかな』

堰き止めておいたはずの、昨夜の出来事が流れ出す。

心拍数が早くなり、吐き気がしてくる。

しかし、弱音を吐いている場合でも、泣いている場合でも無い。

幻であつてほしいと願つていた事は、やはり、残念ながら紛れもない現実のようだ。

いつかは分らない。

だが、マダラと対峙しなければならぬ時は必ず来る。

・・・ゼツが言つていた事が本当かどうか分からない。

でもこれで夢ではなかった事がはっきりした。

ならば、私が必ずマダラさまを止めてみせる・・・

ゆっくりと立ち上がり、目の前を強く見据える。

芙蓉はこの時、覚悟を決めた。



桜はすっかり葉桜となり、山々の新緑は色濃さを増し、その中に混じる紫色の山ツツジとのコントラストが鮮やかで美しい。

芙蓉はこの日、何度時計の針を見つめたか分らなかった。

緊張と焦りを抑えながらなんとか家事と買物、そして塾の授業の準備を終え、今、顔岩展望所に向かう階段を一步一步、踏みしめて上っている。

しかし、扉間の顔をこの眼で見るとまでは気を抜くことは出来ない。

祈る気持ちで最後の一段を上りきると、そこには既に扉間が居た。

思わず、胸に込み上げるもので涙が出そうになる。

扉間と目が合うかどうかの瞬間に駆け出した。

ガシッ。

「どうした。無理に走ってくることはないのに。」

芙蓉は扉間の腕の中にしつかりと納まり、扉間を抱き締めた。

「・・・良かった。」

「？」

芙蓉は思わず心を口にしていた。焦って扉間から身体を離す。

「い、いえ。間に合って良かったって…あ、でもお待たせしてすみません。」

「いや。俺のほうが早く来ていただけだから…別に。」

芙蓉はいま自分がどんな顔をしているか不安になり急いで扉間から離れ、里の風景に歩み寄り、見渡しながら言う。

「ここに来るのは、確か、私の誕生日以来・・・かな。」

「覚えているのか？」

「ええ。ちゃんと！扉間さまが摘んできてくれた桔梗をくれたことも…ウフフ。」

「そ、そうか…」

扉間が芙蓉の隣りに来て、里の風景では無く、芙蓉を見つめている。

「芙蓉。」

「はい？」

芙蓉は返事して扉間と向かい合う。これから何を見せてもらえるのだろうか。

すると、扉間は芙蓉の左手をそつと取り、芙蓉の顔を真つすぐ見つめながらゆっくり跪いた。

芙蓉は何が起きているのか分らず唖然としている。

扉間はポケットから何かを取り出した。

そしてそれを芙蓉の左薬指にはめようとしている。

芙蓉の指の付け根に届くと、キラリと光った。

「芙蓉。俺と、結婚してくれ。」

「……………」

「……嘘。なぜ、今なの……」

ずっと沈黙したままの芙蓉に、扉間が耐えきれず俯く。

「……駄目ならそう、言ってくれ。」

「ち、違います！嬉しいですよ！凄く、凄く、嬉しい……」

慌てて芙蓉はしゃがみ、跪いている扉間の顔を覗き込む。

「扉間さま……ありがとう。」

扉間は顔を上げ、芙蓉の顔を見る。返事は……？

「結婚、喜んでお受けします。」

「うん……。」

扉間の目が潤んでいく。扉間は焦って目をつぶり大きく息を吸うと、芙蓉の両手を持って一緒に立ち上がらせる。

「それが気に入らないなら言ってくれ。新しいのを用意する。」

芙蓉は改めて、指にはめられたそれを見る。

それは、あの夏、扉間が買ってくれた白金の野バラの指輪だった。

「……いいえ。これがいいです。また、これを私に贈ってくれて、凄く嬉しい。これから一生大切にしますね！扉間さま……。」

そう言っただけで自分に向かって微笑む芙蓉の顔は、言葉に反してどこか悲しげにも見える。

扉間はその表情が気になり少しだけ心がチクリと痛んだ。

ところがその瞬間、芙蓉の顔が近づき、二人の唇が触れあった。しかし芙蓉はつま先で精一杯背伸びをしていたため、唇はすぐに離れてしまった。

それでも芙蓉は満面の笑顔で扉間を見上げている。

その笑顔に一切の愁いは無かった。

扉間は芙蓉を抱き締めた。

きつく、しかしとても優しく、大切なものを壊れないよう、しっかりと守るように。

「芙蓉。ありがとう。」

「（ちんちん）そ．．．ありがとう。」

暫く黙って抱き合ったあと、二人はゆっくり身体を離すと、再び並んで里の風景を見渡した。

芙蓉は扉間に話しかけようと扉間の横顔を見上げた時、扉間越しに、後ろに在る柱間の顔岩が目に入ってきた。

「．．．扉間さま。いま、私たち、三人で一緒に里を見る．．．」

その言葉に扉間は芙蓉の顔を見て、そして右後ろの柱間の顔岩に目を遣る。

「．．．そうだな。三人で同じ方向を、同じ景色を見てるな。」

芙蓉は扉間が自分に見せたかったものは、指輪だけではなく、この景色だったのだと思った。

そして三人は再び、ほんのり黄色い光に包まれ今日も平和で穏やかな木ノ葉の里を、
見つめた。

(29) 永遠に、さようなら

昨日は思ってもよらない扉間からの求婚で、その後の塾の授業では集中力を欠いてしまった。

それは喜びから心が浮つくという良いものでは無く、明らかな動揺だった。

勿論、扉間からの求婚はとても嬉しかった。

求婚の返事に一瞬迷ってしまったが、同時に、マダラと決着をつけるといふ覚悟を確固たるものにする為にも、ハッキリと承諾した。

マダラと決着をつけ、必ず扉間と結婚する。

そう思っているものの、やはり不安と恐怖は消すことが出来ない。

…コンコンコン。部屋のドアを叩く音がした。

「芙蓉。樹が迎えに来ているぞ。」

「は、はい！今行きます！」

芙蓉は鞆を手に持ち、急いで部屋を出る。

「珍しいな。お前が樹の声に気付かないなんて。俺も下から何度も呼んだのに。」

部屋から出て来た芙蓉に、扉間が不思議そうな顔で言った。

「すみません。昨日の事を思い出してついぼーつとしちゃいました。エヘヘ…あの！樹ちゃんには伝えても大丈夫ですか？」

「あ、ああ。構わん。」

「ウフフ。良かった！じゃあ、行ってきますね。」

芙蓉はそう言うのと早足で階段を下りて玄関に向かった。

「樹ちゃんお待たせ！ごめんね。」

「全然大丈夫。じゃ、いこっか。扉間さま、んじや芙蓉借りて行きますね。」

「くれぐれも気を付けるんだぞ。十五時には迎えに行くからな。」

「ハイハイ。分つてますよ。」

「ハイは一回で良い。お前相変わらずホント態度悪いな。勤務時以外でももつと俺に

…」

「行くよ芙蓉！」

「い、行ってきます！」

扉間の話を無視して、樹は芙蓉の背中を押して玄関を出て行った。

「まったく…」

閉められた玄関に向かって扉間は一人、苦笑した。

「嘘でしょ！」

「い、樹ちゃん、声が大きいわ……!」

二人は元千手領地に着き、女学校近くの定食屋で昼食をとっていた。

この辺りは木ノ葉の里へ向かう人たちの休憩地点として栄えており、今でも多くの人が住み、食事処や宿屋が何件も立ち並んでいる。

食事を終えたタイミングで芙蓉は樹に、昨日扉間から求婚されたことを伝えたのだつた。

「だ、だって……驚くに決まってる……じゃん……」

「そうだよね……私も、凄く驚いたもん……」

「……」

「……樹、ちゃん?」

「で?返事はしたの?」

「うん……お受けしますって、答えたよ。」

「そ、そうなんだ……」

そう言う樹は空になった膳に目を落とし、黙ってしまった。芙蓉もその表情を見て俯き、何と言おうか言葉を探して無言になる。

「……さっ!ぐずぐずしてたら時間無くなっちゃうよ。早く女学校行こう!」

そう言う樹が沈黙を破り、席を立つ。芙蓉は樹が怒っているのかもしれないと不安

に思いつつ、焦って席を立ち樹の後ろを追った。

「あれ？休館日って書いてある…今日は休館日じゃないはずなのに…どうして？」

資料館になっていている元女学校の門は閉ざされ、休館日を知らせる看板が掛かっている。

「せつかく来たんだしき。こっそり入っちゃおうよ。ね？」

「で、でも…それは流石に…」

「いいじゃん！いいじゃん！ほら、鍵空いたし。」

樹は芙蓉の言葉を無視して開錠術で門の鍵を開けた。

「う、うん…じゃあ、少しだけだよ。ちよつと見たらすぐ出ようね。」

「分かっているって！さっ、行こう。」

樹は芙蓉の手を引つ張って門の中に入れ、再び門の鍵を閉めた。その様子を見て芙蓉は言い知れぬ不安を覚えたが、樹に手を引かれるまま行くしかなかった。

それから二人は校内を見て回った。

最初に教室、家庭科室、理科室、茶室、教員室と回った。

教室は千手一族の歴史や女学校の歴史などの展示室となっており、その他の場所は道具や器具が全て撤去され、ただの箱となっていた。

最後に、渡り廊下を渡り武道館へ向かう。

「校庭の桜はそのままだね。やっぱり、樹ちゃんと一緒に卒業式、出たかったなあ…」

芙蓉が足を止め、すっかり葉桜になっていく桜並木を見て呟いた。

「そうだね…。あの頃だっけ。芙蓉がマダラに出会ったの…」

「えり!!…うつ、うん…」

突然樹の口からマダラの名前が飛び出し、芙蓉は明らかに動揺してしまふ。

そこへ突然強い風が吹き、桜の枝木が一斉にザワワワと音を立てて大きく揺れた。

芙蓉は驚いて思わず身構えた。

その手を、樹がおもむろに掴む。

「芙蓉。行こう。」

「うん…」

武道館の重い扉を開けると、ヒンヤリとした空気が流れ出て来た。

中央まで進むと、樹は繋いでいた手を離し、芙蓉に背を向けて数歩前に出て黙り込む。

樹は芙蓉が扉間から求婚されたことが気に障ったのだと思い、芙蓉は何とか樹の気持ちを抑えようと昔の話を話し始める。

「剣術の稽古の時、樹ちゃん、皆からカッコイイ! って大人気だったよね。樹ちゃんは昔から本当に素敵でカッコ良かったなあ…」

「……………」

「樹ちゃん・・・扉間さまと結婚すること、怒ってる?」

樹は芙蓉の言葉を見無視し、更に数歩前に歩み出る。

「祝福はできないな。」

その声に、芙蓉が後ろを振り向くと、そこにはマダラが居た。

「・・・マダラ・・・さま」

しかし、すぐに目の前のマダラの姿は消え失せた。

再び振り返ると、樹の隣りにマダラが居るではないか。

「樹ちゃん!!」

マダラは樹の肩を持ち、芙蓉の方に振り向かせた。

樹の目には、写輪眼が映っている。

「樹を迎えに遣らせるなんて、気が利くだろ?」

「どっ、どうして・・・どうして樹ちゃんを!!」

「禁固呪の札。以前俺がお前を残して里を出る時、樹にも仕込んでおいたのさ。幻術を

かけたのは千手領地に入ってからだけだな。」

「っ:!! 私はどうしてあなたの前に来たわ。今すぐ樹ちゃんの術を解いて!!」

「その前に。お前にやってもらうことがある。」

「?」

「扉間を殺して来い。」

「!? そ、そんなこと、出来るわけがないじゃないっ!!」

「抱かれています時に寝首を掻け。それがダメなら、お前が死なないなら自分が死ぬと迫れ。」

まあ、あいつは卑劣な奴だから、それでもダメかもしれないが……。だが、信頼し愛した女に裏切られる苦しみは充分与えられるだろう。フフツ」

「そ、そんなっ……」

「出来ないと言うなら、樹の命は無いぞ。」

芙蓉は俯き、唇を噛みしめた。

しかしすぐに顔を上げマダラを睨みつける。

そして、突然壁に向かって勢いよく走り出した。

ガシツ!!

芙蓉は素早く壁に掛かっていた木刀を手に取り、マダラに向かって構えた。

「アハハハハ! おいおい。そんなもので俺とやるつもりか?」

芙蓉は両手でしっかりと木刀を握り直すと、一直線にマダラに向かって走っていく。

バシツ!

マダラがその木刀を片手で掴み、そのまま振り払う。

芙蓉は力いっぱい木刀を握っていたため床に倒れてしまった。

それでも芙蓉は木刀を握り締めている。

そして急いで立ち上がった。

「ヤー——っ!!」

声を上げ、再びマダラに木刀を振り下ろす。

しかし今度は掴むまでも無くマダラは木刀を片手で薙ぎ払うが、それでも芙蓉は木刀を離さない。

いくら振り払われても、何度も、何度も、諦めることなくマダラに木刀を振り下ろす。「ワハハハ……分った、分かった。芙蓉。お前が剣術が得意なのは……だが残念ながらお前如きの力では、俺の用心棒にはなれないがなあ。」

……なんとか、扉間さまが迎えに来てくれるまで時間を稼ぐしかないっ!……

芙蓉はいったん木刀を腰の位置に下げると、マダラの後ろに立ちまわる。

そして身体を低くし、マダラの足の甲めがけて木刀を打ちつけようとした。

ザシュツ!!

ついにマダラは右手で腰の刀を鞘から抜き、芙蓉の木刀を真っ二つに斬った。

「お遊びは、ここまでだ。」

それでも芙蓉はマダラの言葉を無視し、立ち上がると斬られて尖った木刀をマダラの

腹めがけて身体ごと突っ込んでいく。

マダラはその木刀を左手で掴んだ。

それでも芙蓉は力を込め、足を踏ん張り、マダラの腹めがけ、掴まれた木刀を刺そうと手を震わせる。

・・・負けない。絶対に!!!

「ハア……」

グサツ!

マダラは溜息を吐くと、右手に持っていた刀を樹の腹に刺した。

・・・ドサツ!

樹はその場に仰向けに倒れた。

「!!!」

「樹で終わりと思うなよ。次は誰だろうな……うちはカガミか?それとも扉間の弟子のガキ共にするか?お前が抗えば抗うほど誰かが死ぬだけだぞ。」

「……………」

カランカラン。

無音の空間に木刀が床に転がる音が短く響いた。

ついに芙蓉は、その場に力無く両膝を付き、木刀から手を離してしまった。

「・・・樹・・・ちゃん・・・」

「ようやく俺に跪いたな。」

マダラは芙蓉の前に立ち、その顎を持つと、無理やり顔を上げさせる。

「・・・」

「お前、今すぐえいい顔してるぜ。」

芙蓉は、すぐるような目でマダラを見上げ、弱弱しい声で言う。

「・・・分りました・・・あなたの、言う通りに、します・・・」

「フン。やつとかよ。頑固なところは相変わらずだな。」

芙蓉はマダラの目を見つめたまま、おもむろに、ゆっくりとマダラに向かって両手を伸ばした。

マダラにとってそれは懐かしくもあり、何度も思い出す忘れられない光景だった。

どんな宝石よりも美しいと疑わなかった芙蓉の二重の大きな目、長いまつ毛、そして琥珀色の潤んだ瞳はマダラを捕らえて離さない。

マダラは気付けば芙蓉の両腕を持ち、ゆっくり立ち上がらせていた。

そして、二人は見つめ合う。

「マダラさま・・・私、やっぱりあなたを、愛しています。」

その言葉に、おのずと二人の顔が近づいてゆく。

しかし芙蓉の心臓の鼓動はこれまで生きてきた中で一番速いのではないかと思うほど高鳴り、目の前にあるマダラの顔がその振動でグラグラと揺れているように見える。

芙蓉はそれに耐えられなくなり、そつと目を閉じた。

『芙蓉なら、絶対大丈夫』

その時、瞼の裏に自分に似た女性が現れ芙蓉に話しかけた。

．．．お母．．．さ．．．ま．．．？．．．

そう思った瞬間、芙蓉とマダラの唇が重なった。

芙蓉は反射的にマダラの頭を抱き寄せると強く唇を吸った。

．．．本当に愛してた。だから、もう．．．

『マダラさま。貴方を開放する。永遠に、さようなら。』

そう心の中で力強く、呟いた。

「．．．うっ！うっ！！．．．!!!」

マダラは突然、両目を抑え悶絶し始めた。

芙蓉は一瞬その様子にうろたえたが、その隙に急いで樹に駆け寄る。

まだ息がある。

急いで自分の帯を解き、樹の腹に巻いて傷口を抑えた。

「芙蓉．．．お前っ．．．俺に何をしたあ——っ!!!」

マダラはあまりの激痛に、ついには床に両膝を付き動けなくなっていた。

マダラに対しなすすべを無くした芙蓉は、気づけばゼツに言われた通りの行為をして
いた。

それで本当に、自分がマダラにかけたという『傾国の術』が解除されたのかは分ら
ない。

しかし、マダラは急に両目を抑えて苦しみ始めたのだ。

いったい何が起きたのか分らず、芙蓉は震えながら、ただ茫然とその様子を見つめて
いた。

「ゆ、許さんぞっ……芙蓉おっ……」

マダラの意識は次第に遠のいてゆく。

あまりの激痛に呼吸すらままらなくなり、悶絶しながらも、頭には芙蓉との、あの日
の残像が浮かんでくる。

マダラに抱え上げられ、芙蓉はマダラの顔の前にそれを差し出した。

思わず、鮮やかな赤いモミジ越しに、目が合う、そして…。

……芙蓉……

マダラは意識を失い、その場にうつ伏せて倒れた。

「やった。成功したみたいだ。」

「!」

芙蓉の首元から黒い物体が伸びて離れ、そのまま地を這いマダラの方へ向かって行った。

その黒い物体、ゼツは、マダラの頭の前に来ると再び喋り始めた。

「ありがとう。これでマダラは君から解放されたよ。あ、安心して。死んでないから。ただ、両目は失明しちゃったけどね。」

「えっ……」

「別に君は気にしなくていいよ。マダラは失明くらいで困るような弱い忍じやないし。君のことも記憶から無くなったし、これからは自由に生きてくよ。」

芙蓉はゼツの言葉を聞き唾然としながらも、思わず言葉を洩らす。

「……里には……木ノ葉の里には、戻って来ないの?……」

「アハハ。それは絶対に無いよ。それもマダラの意味だもん。……それじゃ、もう行くね。」

「待って!」

「何?もうマダラに何を言っても無意味だけど?」

「……」

ゼツとマダラの姿は次第に薄くなってゆき、気づけば姿を消していた。

「樹ちゃん！しつかりして!!樹ちゃんっ!!」

芙蓉は必死に樹に声を掛ける。

「……ん、んんっ……」

「樹ちゃん!!」

「……あれ？私、なんで横になってるの？ていうか、ここどこだっけ？」

そう言うと、樹はむくつと勢いよく起き上がった。

その勢いで樹の腹の傷を抑えていた芙蓉の手と帯が外れた。

芙蓉は焦って樹の傷口を見た。

「傷が……無い……?」

「え?傷?何のこと?」

樹の腹には傷も、傷から流れ出た血の跡も無くなっていた。

いや、最初から傷など、無かったのだ。

……マダラさま……やっぱり、貴方というひとは……

「ねえねえ!ホント、私どうしたんだっけ!!」

樹は青い瞳の目を大きく見開いて芙蓉の顔を凝視し、答えを待っている。

「えっ?!あつ、うん……実は……ワダチが現れたの。」

「ええっ！マジっ！！芙蓉、大丈夫だった！！てか、ワダチどこ！！」

「うん。・・・樹ちゃんが退治してくれたんだよ・・・でも樹ちゃん、勢いよく後ろに倒れちゃって、気を失ってたの。」

「嘘でしょ！！いや、全然覚えてないし！！」

「本当だよ！樹ちゃん、すっごくカッコ良かったんだから！助けてくれて、ありがとう・・・本当に、良かった・・・良かった・・・」

芙蓉は樹の首に抱き着き、泣き始めた。

「う、うん・・・」

樹は全く解せない様子だが、芙蓉の背中に手を回し、抱き締め慰める。

武道館の空気は変わらず冷たく、静まり返っている。

まるで、何事も無かったかの様に・・・

「おい！どうした！何があった！！」

扉間が現れ、二人の様子に驚いて駆け寄る。

「・・・扉間さま。」

芙蓉は、扉間の姿を目にすると、滝のように涙を流し始めた。一方、樹は茫然として扉間を見上げている。

「樹、何があったんだ。説明しろ。」

「それが……」

「ワダチが現れて、樹ちゃんが退治してくれたんです。」

「ワダチが!? 樹、本当か?」

「えつと……それが、何も覚えていなくて……」

「何!?!」

「扉間さま、私が説明します。」

「分かった。その前に感知してみる。」

扉間は芙蓉の説明を聞く前に、武道館と女学校内を感知してみたが、全く異常は無かった。

以前、穢土転生で尋問した忍から聞いた、千手とうちは両方のチャクラを併せ持つチャクラらしきものも感じない。

扉間は目を開け、ゆっくりと立ち上がる。

それから芙蓉は、扉間にワダチが現れ樹がワダチを倒した様子を説明した。

武道館に入った途端、面とマントのフードで顔を隠したワダチが現れ二人に襲いかかった。ワダチの目的はやはり芙蓉だった。ワダチは以前、芙蓉に求婚して断られたを恨んでいた忍だった。先の殺人事件を起こした目的は、事件の混乱に乗じて芙蓉を奪うという作戦だった。柱間と扉間の追跡に一旦は退散したが、芙蓉が里の外に出る機会を

窺っていた。

樹が風遁の術で応戦し、樹の渾身の一撃でワダチは倒れ絶命した。その時、樹も技の衝撃で後ろに倒れて気を失ってしまった。芙蓉がワダチの絶命を確かめている最中に、その死体は姿を消した。真つ二つになった木刀は、芙蓉が加勢しようとしたが、ワダチの刀によつて斬られたもの…。

勿論、全てが作り話である。

芙蓉の説明は完璧なものでは無く、扉間には矛盾を感じるものだった。

しかし、芙蓉は忍についても、忍術についても知識が無いのは扉間が一番知っている。それに今は恐怖で動揺している状態だ。矛盾と説明不足は、それが所以だと扉間は判断した。

ワダチの死体が無いため、本当に死んだのか不審が残るが、それらしいチャクラも感じないし、芙蓉が絶命を確かめたというのであればいったんは安心できるだろう。

扉間は二人を連れて里に戻ることにした。



いつもと変わらない松明の炎が揺れ、壁に影が伸びている。

その影は、横たわるマダラの影だ。

動くはずの無いその顔を天井から見下ろし、ゼツが呟き始める。

「まったく、芝居するのも疲れるねえ……。

マダラ。お前に己の意思なんてとつくの昔に無いんだよ。

お前が先の夢とほざいてる事も母さんの意思の一部に過ぎない……

これまで散々楽しませてやったんだ。

母さんの復活の為、死ぬまで、いいや死んでも働いて貰うからね。フフフ……」



「なんと!!俺のおらぬ間にそんな事が起きておつたとは!……とにかく、芙蓉が無事で良かったぞ!それに、これでもうワダチの脅威はほぼ無くなったわけだな。」

尾獣を砂隠れの里に譲る判断をし、先ほど帰還した柱間に、扉間は先日の出来事を報告するため屋敷に訪れていた。

ミトや使用人たちに話を聞かれないよう、二人は隠し部屋で話している。

「ああ……。だが引き続き定期的な警戒は続ける。他にも芙蓉を狙う者、木ノ葉を狙う者の存在と発生は否定できんからな。」

「うむ、そうだな。その為にもこの際、芙蓉と夫婦になった方が色々と楽ぞ?ハハハハツ!

「そうだな。その通りだ。」

「はっ?! え? い、いま同意したのか? ホントに?? えっ、えっ? マジ?」

「自分で話を振つといて、動揺しすぎだろ。」

「いやいや、まったくの冗談のつもりでは無かったが、いつもの調子でツッコまれることを期待、いや想定しておったからビックリしたぞ! あははははは。・・・はは。」

そう笑っているものの、柱間は明らかに落込んでいるように見える。その様子に勿論気付いている扉間が更に畳みかける。

「先日求婚して、承諾も貰った。結婚する。」

「はっ? ・・・そ、そうなんぞ? ・・・お、おめでどう! いやあくついにか! 良かったぞ! 本当に! わははははは。・・・はは。・・。」

柱間は胡坐をかいた足に両手をつき、うな垂れて何度も領きながら力なく笑っている。

・・・まったく。自分で結婚を迫っておいて、いざ結婚するとなると落ち込むとは。想定通りの反応だな。兄の心情と男の心情の狭間ってやつか。・・。

扉間はそう思い、少し苦笑しながら柱間の様子を見つめた。

ガバツ!

「ていうか、いつ求婚したんだ? 求婚の言葉は何ぞ?! どこでしたんぞ?! 芙蓉の反応は!! まさかデキ婚じゃあるまいな!!」

勢いよく顔を上げた柱間は目をギラつかせながら、質問ごとに扉間の顔に顔を近づけていく。

「あーっ！もうっ！そんなに矢継ぎ早に質問されては答えられん！てか顔近い！」

そう言つて扉間はグイッと柱間の顔を両手で押し返した。

「ゴホンっ…。兄者が出かけてから四日目だったかな。顔岩展望所で。その場で承諾を貰った。子供は出来ていない。以上だ。」

「任務報告じゃないんぞ？もつとこう、ワイドショー的にファンに向けて面白く話を広げて語れんのかあ？」

「お前はいつから芸能レポーターになつたんだ？」

「予行練習ぞ！お前の結婚を発表すれば里じゆう、いや火の国じゆうからもインタビュアーが詰めかけるぞ？お前にはしつかりと応対して貰わんとな。ガハハハ！」

「アホか。俺は結婚を公表するつもりは無い。結婚式もな。」

そう言つと扉間は腕を組み、目を閉じて少し俯いた。それを見て柱間が言う。

「何を言うておる！ワダチの問題も解決したのだ。めでたいことはしつかり祝うべきぞ！」

「芙蓉が嫌がる。それに…散々否定しておいて自分で言うのも難だが、同棲して長いしな。今更改まつて色々結婚の儀を行う必要も無いだろ。」

ダンツ！ゴンツ！

柱間は勢いよく立ち上がって天井で思いきり頭を打った。隠し部屋は狭く天井も低い。

「…つてえ！…と、とにかくだなつ、せめて身内だけでも結婚式はするんだ！一緒に居るのが当たり前になつてはならん。芙蓉にとって結婚は二度目かもしれぬが、それでも結婚式は女にとって特別なものなのだ。それに美しい芙蓉の晴れ姿、お前も見たいだらう？」

「クツクツクツ…アハハハハ…：兄者らしいというか、らしくないというか。ククツ…いや、うん、確かに正直言うくと、俺も見たいな。」

涙目で頭頂部を撫でて痛がつている柱間を上目遣いで見上げながら、扉間は口を押えて笑つて言った。

「だろ？お前が言えぬなら俺が言つてやろうか。」

「断る。」

「即答かよつ！」



五月も半ばになり、晴れた日には初夏の暑さで道に逃げ水が見られる日もあるほどだ。今日も見事な五月晴れで、田植えの終わった水田の畔には紫色の菖蒲が咲いてい

る。

芙蓉と樹は蝶屋に居た。

蝶屋は芙蓉の思つた通り、以前柱間の結婚式の引出物に蝶屋の菓子が使われたことで更に人氣が沸騰し、ついに先月店舗を拡張した。

二人はその改装後に出来た大きめの個室の席に仲良く並んで座っている。

「ねえ結局さあ、結婚式はどうするの?」

「うん…時期はまだ決めてないけど、することになったよ。扉間さまがね、絶対にしようって。」

「良かったじゃん!芙蓉あんなに結婚式は嫌がつてたから、しないのかなって心配してたんだよ。扉間もやっぱ芙蓉の晴れ姿が見たいんだねえ。フフフ。」

「だって…何度も言ってるけど、私には結婚式をするような資格、無いもん。今もそう思ってるよ。」

「もうっ、また!絶対そんなこと無いっ!過去の事は気になるだろうけど、マダラはもういない。柱間はもう結婚して幸せなんだし、どれももうとつくに清算されてる事!それに、結婚式は芙蓉だけのものじゃないんだよ?愛する芙蓉と結婚式がしたいっていう、扉間の顔に似合わない乙女な気持ちも考えてあげな。ね?」

「うん…そうだね!ありがとう。」

「でも、あの事件の日からもう二週間以上経つんだよね。早いなあ。私は私で身に覚えが無い事で賞なんて貰っちゃってさ、本当に変な感じだよお。」

「ウフフフ。でも紛れもなく、樹ちゃんがワダチをやっつけたんだよ！私、ちゃんと見てたんだから！」

「そんなこと言つて、本当は芙蓉がワダチを倒したんじゃないの？」

「……実はね、そうなの…… “お気心の術” でっ！」

「アハハハハ！なるほど。そりゃワダチもイチコロだっただろうね！」

二人は身体を揺らして笑い合った。

すると間もなくして、急に店内が黄色い悲鳴交じりでザワザワと騒ぎ始めると、すぐに扉間とその弟子たちが個室の暖簾をくぐって入ってきた。

「扉間さま、みんな！お疲れ様。来てくれてありがとう。さ、奥の席にどうぞ。座れなかったら私たちの隣りにも座れるからね。」

一番奥の上座に扉間、その隣にコハル、ホムラ、ダンゾウが座ると奥の席は埋まってしまう、カガミとヒルゼンは樹と芙蓉の隣りに座った。

「樹。何も狭苦しい甘味処にする事はないだろ。せつかく俺が、仕方なくだが、奢つてやると言っているのに。お前らしくないな。高級懷石料亭を指定されると思っていたぞ。」

「別にいいじゃないですかあ。文句言わないで下さいよ。私はここが良かったんです！」

「樹ちゃんだったらまたそんな言い方！…扉間さま、これでもこのお部屋は改装されて広くなっているんですよ？」

「フン！まあ安上がりで良いがな。で、食べたいものはいつもの白玉あんみつか？」

「樹ちゃんのお祝いですから、スペシャルな白玉あんみつですわ！ねえ？」

「そうそう。五人以上じゃないと絶対注文受けてもらえない、しかも数量限定の!!」

「え〜！なんですかそれ？すごく楽しみなんですけど！」

コハルが目を輝かせて樹に訊ねた。

「女性はホント、限定品に弱いですね。」

ホムラが苦笑してぼそりと言った。

「…俺、正直あんま甘い物好きじゃないんだけど…」

ダンゾウが不満そうに洩らす。

「コハル、最近里で流行ってるアレも入ってるよ〜？」

「もしかしてアイスクリームですか!!」

「そうそう！」

「キヤー！嬉しい!!」

「ダンゾウ君、扉間さまも甘い物あまり好きじゃないけど、ここの餅入り最中や白玉あんみつは美味しいって言って食べてるのよ。だからダンゾウ君のお口にも合うと思うな。」

芙蓉がそう言って、少しいたずらっぽいな笑顔でダンゾウに微笑みかけた。それを見ているカガミは明らかにムツとした顔をしている。そのカガミの横顔を見ていたヒルゼンは、少し呆れたように口角を上げる。

芙蓉が店員に注文した品を作って持つて来てくれるように頼み、出来上がるまでの間、ワダチに遭遇した時の話になった。

芙蓉は、樹が果敢に風遁の術で攻撃をした事、芙蓉も剣術で応戦したがあっという間に刀を真つ二つにされてしまったことなどを話して聞かせた。ワダチの存在が消えたか今だからこそ、話を聞く全員の顔が笑顔だった。

「お待ちせいたしました。『蝶屋スペシャル特大クリーム白玉あんみつ』でございます！」

若い女性店員が二人がかりで大きな盆に載ったそれを運んできた。

『でつかーっ!!!』

大皿には店名物のおはぎ、最中、紅・白・緑の白玉、わらび餅、寒天、蜜柑、サクランボ、桃などの果物、そしてアイスクリームが天高く盛られている。

「う、嘘だろ……どうツツコめばいいか分らん。」

扉間は腕を組み、顔を引きつらせている。弟子たちは驚いて何も言えないでいる。そして樹も予想以上のポリュームに苦笑している。

そんな空気を破るように芙蓉が言う。

「樹ちゃん、火影特別奨励賞、おめでどう！」

『おめでどうございませす』『ご苦労だつた。これからも精進しろよ』

パチパチパチパチ……！

「あははは……あ、ありがとうございます。なんか照れるなあ〜エへ……」

そう言つて樹は少し顔を赤らめてもじもじした。芙蓉はその両肩を抱き、樹の顔を覗き込む。

「さー樹ちゃんから好きな部分、食べてみて！」

「う、うん……えつと、あのさ、せつかくだから、最初にいつものアレ、してほしいんだけどお？」

「え!!で、でも……」

「芙蓉。してやれ。それも褒美の一つだ。」

「と、扉間さまあ〜!!」

「その顔止めろ。気持ち悪い。」

弟子たちは顔を見合わせて不思議がっている。そして芙蓉は銀の匙を持つと、そつとアイスクリームをすくった。

弟子たちがこれから何が起こるのかとその様子を凝視している。芙蓉はその匙に手を添え、ゆつくりと樹の顔の前に持つていくと、樹はいつもと違って少し恥ずかしそうに芙蓉の方を向き、小さ目に口を開ける。

「樹ちゃん。よく頑張りました！はい、あーん♪」

「あーん・・・お、おいひく!!ありがとう芙蓉!」

弟子たちはその一部始終を見終わり、顔を引きつらせた。明らかにドン引いている。

「と、扉間様…俺たちは今、何を、なぜ、見せつけられているんでしょうか?…」

「ダンゾウ…耐えろ。」

それから全員で特大のクリーム白玉あんみつの塔をつつき始めた。

そのボリユームに対してひつひつと素材の味は最高に美味で、全員の笑い声と歓喜と共に、五十センチはあったであろう塔はあつという間に低くなり、最後はきれいに消えた。

皆が満腹の腹を抱えて歓談していると、樹が真剣な顔をして話し始めた。

「扉間様。ありがとうございました…実は、以前扉間様と芙蓉と三人で来た時が本当に楽しくて、今度は後輩ちゃんたちも一緒に、あの時みたいな時間が過ぎたかつたんで

す。芙蓉が作るご馳走も、高級店の料理も美味しいけど、思い出の場所で大好きな仲間と甘味を囲むのって特別な気もするし…。あ、限定スペシャルが食べてみたかったっていうのが一番の理由だけ！エヘヘ…」

それを聞くと弟子たちは少し俯き、これまでの出来事に思いを巡らせながら、感慨深げに微笑んだ。

扉間は真つ直ぐ樹を見つめ、少し沈黙したあと口を開いた。

「まだまだ俺には及ばんが、立派になったな、樹。…ま、俺も予算が少なく済んで良かった。」

「おっ！ “遠く” が外れた！私が扉間様を追い越す日も近いですよ！」

「それは無い」

「無い無い」「無理だな」「それは流石にちよつと…」「難しいですね」

扉間が即答で否定したのに続き、ヒルゼン、ダンゾウ、コハル、ホムラも否定した。

「ちよつと！なんでアンタ達まで全否定すんだよ！！もーっ！もつと先輩を敬いなつつの！！」

「樹さん。それは無理なんじゃない？だって先輩のあんたが扉間様を敬ってないしさ。」

「カガミ。良く言った！」

扉間がそう言うのと全員がワハハハと爆笑した。

芙蓉は一緒に笑いながら、一人一人の笑顔を見てほっと胸を撫で下ろした。
今この瞬間、ようやくワダチの問題が終結したのだと思った。

(30) 芙蓉と扉間。紅葉の帳が下りる頃

梅雨時期の薄暑の昼下り。爽やかな風が吹き抜けて緑の葉と白い花びらを揺らしていった。

庭では今年もまた、可憐にハナミズキが花を咲かせている。

扉間は縁側で一人、胡坐をかいて座りその様子を静かに見つめていた。

『一緒に居るのが当たり前になつてはならん』

・・・解つてる。芙蓉と一緒に暮らせるようになってからの一日一日、その全てが奇跡の様だった。今でも結婚は夢で、いつか覚めてしまふんじゃないかと思うんだ・・・扉間は目を閉じると深呼吸をして、細く長く静かに息を吐いた。

結婚式と披露宴は、里の行事や火の国との外交、大きな任務の日程等を優先させ、少し先になるが十月下旬の大安に行くことが決まった。

最近の芙蓉はというと、うちは私塾の授業と家事の合間に、千手一族の婦人たちの助けを借りながら少しずつ結婚式の準備を始めている。来週末には二人で花嫁衣装のデザイン案と生地を見に行くことあり、扉間は今から楽しみだった。

ふと、芙蓉が花嫁衣裳を楽しそうに選ぶ顔が浮かび、愛おしくなる。

結婚するのだという実感が湧くと同時に、暫く忘れかけていた問い浮かんできた。

・ ・ ・俺は自分の罪を、きちんと償えているのだろうか・ ・ ・

マダラが死んだ時、自分が芙蓉を一生守っていいだろうかと決めた。

それと同時に、芙蓉を、これまで以上に愛するようになってしまった。

しかし芙蓉を消そうとした罪への罰は、マダラと芙蓉が愛し合うようになったことに

加え、芙蓉からはもう一生愛されることが罰なのだと言悟した。

その上で芙蓉を守るのが、償いだと思っていた。

それなのに、その覚悟はあつけなく砕けた。

芙蓉がマダラと姿を消す前に扉間の犯した罪を許してくれたこと・ ・ ・そして命がけでマダラの攻撃から自分を守ってくれたこと・ ・ ・そして、手を伸ばせば芙蓉に触れられる温かい生活・ ・ ・

それらが扉間の愛情を溢れさせ、扉間は罰を黙って受け入れることよりも、芙蓉を愛することを選んだ。

そして・ ・ ・芙蓉も、扉間を愛するようになった。まさに奇跡の様だった。

罪は消えない。

償いと愛情は違う。

しかし、愛することは償いになりえる。

いつからか扉間は、そう自らに言い聞かせるようになっていたのだった。

「夫婦か……俺はこれからも芙蓉を全力で愛し、そして守る……」

扉間は青空に向かってそう小さく呟いた。



授業終了を知らせる鐘が鳴り、教室がザワザワと賑やかになった。

しかし芙蓉は教科書を揃えて手に持ったまま教壇から動こうとせず、少し俯いている。その様子を不思議に思つてカガミが芙蓉の元へ歩み寄ろうとした時だった。

コンコンコン。ガラッ！

「えー皆さん。今日は芙蓉先生から大切なお知らせがあります。ね？芙蓉先生！」

教室に入るなり塾長のうちはドドメは芙蓉の隣りに立ち、そう言つて芙蓉の肩をポンと叩いた。

シーン……

教室は直ぐに静まり返り、皆が芙蓉の言葉を待った。

「あつ、は、はい……あの……」

「芙蓉先生、頑張つて！」

俯き言い籠る芙蓉をドドメが小声で励ました。

「この度、千手扉間様と結婚させて戴くことになりました。結婚後も教師は続けますの

で、皆さん、どうぞこれからもよろしくお願いします！」

芙蓉はそう言つて深々と頭を下げた。その顔は火を噴くほど真つ赤になっている。

『え———っ!!!』『キャ———!!!』パチパチパチパチ……!

教室がどつと沸き、女子全員が芙蓉の周りに駆け寄りおめでとうと言つたあと、結婚式はいつにするのか、求婚の言葉は何だったのかなど質問攻めを始めた。それに対しタジタジしながらも嬉しそうに微笑む芙蓉を見ながら、カガミは芙蓉に向かつて踏み出すはずだった足を後ろに下げ、芙蓉に背を向けて静かに教室を出て行つた。

サラサラサラサラ……

塾生が居なくなり灯りの消えた私塾の玄関にある七夕の竹飾りが、夜風に吹かれて音を立てる。

空には天の川が横たわり、小さきまざまな星が何も言わずに輝いている。

その夜空の下、竹飾りの横にカガミは腰かけていた。

「カガミ君……」

「芙蓉先生!……な、なんだ帰つて無かつたのかよ!扉間様が心配してるぜ?」

「ありがとう。そうやってカガミ君はいつも私のことを心配してくれて、そして守ってくれたよね。」

「たよねって……過去形かよ。」

「……ごめんね。」

「謝んな！虚しくなるだろ！」

芙蓉は、そう言つて膝を抱えうつ伏せるカガミの隣りに座つた。

「生徒に対して特別扱いは駄目なだけで……私にとつてカガミ君は特別よ。これからもずつとね……私、カガミ君が火影になること、これからもずつと応援してるよ。ね？」

芙蓉は顔の見えないカガミの顔を覗き込んで言つた。

「ぜつてー火影になつて、先生のこと後悔させてやるからな。」

「うん。」

芙蓉はそつとカガミの頭に手を載せ、優しく撫でた。くせ毛の黒髪は柔らかかつた。

カガミの真つ直ぐな気持ちに応える事も、どう対処して良いかも分らず心が痛んだが、芙蓉はカガミならこれを乗り越えきつと新しい恋を見つけてくれるだろうと信じた。

そしてカガミの頭から手を離すと、勢いよく立ち上がった。

「来週の授業も頑張ろうね。気を付けて帰るのよ。さようなら。」

「……」

カガミの返事は無く、芙蓉は教務室の方へ歩いて行つた。

カガミは芙蓉の足音が聞こえなくなると顔を上げ、夜空を見上げた。

・・・なんでだよ。やっと十六になったのに。こんなに好きなのに。愛して、いるのに・・・

カガミの頭上には、その問いに答えることなく、尚も無数の星が静かに輝いていた。



「兄者、少し落ち着け。座つてろ。…つて、なんで俺よりお前が緊張してるんだよ！」

柱間は結婚式会場に着いてからずっとソワソワしており、扉間が羽織袴に着替えている間も控室を行ったり来たり落ち着き無く歩き回っている。

「いやあ、まるで自分が結婚するようだな！アハハハ！」

「勝手に自分事にするな。」

「それより芙蓉の準備はまだ終わらんのかのおく？早く見たいぞ!!」

「俺より先に見るなよ！」

「分かっておるぞお〜」

「ホントかよ。先に見たら殺す！」

コンコンコン。

「芙蓉様のご準備が整いました。扉間様、どうぞ見て差し上げて下さい。」

控室の外から芙蓉の介添え人の女性が声を掛けてきた。

「待つてましたあー！よっしゃ行くぞっ!!」

「だーかーらっ！俺が先だっ!!」

扉間は真っ先に部屋を出て行くとした柱間の首根っこを掴んだ。

こんな日までアホで世話が焼けるお騒がせな兄だが、実はとてつもなく緊張しているいまの扉間にとつては大いに励ましになっていた。

コンコンコン。

「どうぞで。」

芙蓉の返事に、一気に緊張が高まる。口から心臓が飛び出しそうだ。

花嫁衣裳の姿は試着の時から何度も見ているはずなのに。

ガチャツツ……

「芙蓉……」

「扉間さま。お待たせしました。」

そこには、神々しいほど美しい芙蓉が、自分に向かって微笑んでいる。

一瞬、芙蓉の背中に差し込む午前中の白い光が、大きな翼に見えた。

扉間はゆっくり芙蓉に歩み寄り、向かい合って立った。

真っ白な絹の打掛に、腰の高い所で結んだ帯には銀糸と真珠で刺繍が施されキラキラ

と輝き、芙蓉の顔周りを明るく見せている。耳には大きな真珠の耳飾りが揺れている。髪の毛は美しく結び上げられ、銀製の簪が数本飾られており、後れ毛は芙蓉の自然なくせ毛を活かして艶やかにカールしている。

そして、手には桔梗の花の花束を握っていた。

「綺麗だ。世界一、美しい。」

「ウフフ。ありがとうございます。扉間さまもとても素敵。男前ですわ。」

二人は見つめ合い微笑んだ。いつの間にか、扉間の鼓動は心地良い速さになっていた。

「あつ、そうだね。ごめんなさい。ちよつとこれを持っていてくれますか？」

そう言って芙蓉は手に持っていた桔梗の花束を扉間に持たせ、背後の机に置いて在った布張りの小箱を手に取り、扉間の目の前でそれをゆつくりと開いて見せた。

「・・・これは！」

「扉間さまが私にくれた指輪とお揃いですよ。指輪の内側、ほら、野バラが彫つてあるんです！どこかの国では、夫婦の証に、お揃いの指輪を左薬指に着けるのが習わしなんだとか…。時々で良いので、着けてくれませんか？」

「あ、ああ。勿論だ！なるべくいつも着けるようにする。」

「良かった！じゃあ、左手を出して下さい。」

扉間は思つてもよらない芙蓉からの指輪の贈物にまだ少し戸惑つており、ぎこちなく芙蓉の前に左手を差し出した。

芙蓉はその手を優しく取り、薬指に指輪をゆつくりと通した。

扉間はその様子を今なお現実だと信じられない気持ちでぼんやりと見ていた。そして指輪はついに扉間の左薬指にぴたりと収まった。

「ああ良かったあ。サイズぴったりで。ドキドキしちゃいました。エへへ。」

「……。これ！これはどうしたんだ？高かっただろう？」

「以前の宝飾品店の店主さんにお願ひして作つて貰つたんです。私塾のお給料を貯金していたお金で……それにご祝儀価格にして貰つたので大丈夫ですよ。サイズは日頃から扉間さまの手を見て触つていて覚えていた感じで選びました。合わなかつたらまたサイズを……」

「芙蓉。ありがとう。」

扉間は、今度は最初から花束を潰さないよう気をつけて芙蓉を優しく抱き寄せた。

「いいえ。喜んで貰えて私も嬉しいです。……あ！そうだ！これも。」

芙蓉は扉間から身体を離し再び机の方を向くと、桔梗の花で作ったブローチ（ブートニア）を手に取つた。そしてそれを扉間の羽織の左胸に、丁寧に着けた。

「桔梗の花言葉は、『永遠の愛』ですよ。」

「お前……知ってたのか？」

「ええ、もちろん。私も、貴方のこと……」

ガチャツッ！

「まだかつ！もう待ちきれんぞ！……って、おおお——っ!!女神だ！女神がおるぞお!!」
柱間がノックも無く扉を開け乱入し、芙蓉の姿を見ていきなり号泣している。

「てつめえ……」

「ま、まあまあ扉間さま良いじゃないですか。実際お待たせしてしまっていたんですから。柱間さま、お待たせして申し訳ありませんでした。」

「なんの、なんの！こんなに美しい姿が見られて嬉しいぞ!!ありがとうございます！もうホント、扉間には勿体ないぞっ！ガハハハハ！」

「フン！……」

扉間は腕を組んでそっぽを向いた。左手で白金の指輪がキラリと光る。

「柱間さま。私のわがままを叶えて頂いてありがとうございます。」

「いやいや！……色葉神社の神主も神官・巫女たちも皆喜んで受けてくれたんぞ？一日でも二日でも貸切で使ってくれとな。ワハハハ！ところで、なんでここがよかつたのだ？以前訊いた時は費用を抑えたいということだったけど、それなら他の神社もあつただろう？」

「それは・・・扉間さまと私の、二人だけの秘密です。」

「ええ〜っ!! そんなあ。お兄ちゃんも知りたいぞお〜」

「キモいわ!」

すると、扉を叩く音がして介添え人が顔を覗かせ前撮りを行う時間だと知らせた。「ハイ。もう少しお二人共体をくつつけて下さい。そうそう。では撮ります。」

色葉神社には、木ノ葉の里が出来る前の森に自生していたモミジや楓の木を活かして造った『もみじ庭園』という庭園があつた。

小川を堰き止めて作つた池には赤い太鼓橋が掛かつており、その池を囲むように苔むした地面には天然のモミジと楓、里創設時に移植された若いモミジが生えている。

それらの木々は今まさに紅葉を始めており、赤・橙・黄・黄緑・緑が入り混じるグラデーションを作っている。透き通つた湖面は鏡のようにそれを映し込み、地上と湖面に見事な錦絵を作り上げ圧巻の美しさである。

芙蓉と扉間は太鼓橋の上に並んで立ち、その絶景を背負つて撮影をしている。

「フィルムを交換しますので少々お待ちください。」

二人は肩の力を抜き、顔を合わせてふうと息を吐いた。

扉間は数日前、最終的な下見に訪れた際の事を思い出していた。

・
・
・
・

「ね?ここ、小さな錦谷みたいでしょう?本当は錦谷で結婚式したかったんですけど、流石にそれは無理ですものね。ウフフフ!」

「ハハハ。ああ、錦谷に負けない美しさだ。でもよく夏の間こんな場所を見つけたな?」

「樹ちゃんと一緒に探しました。紅葉の中で結婚披露宴が出来そうな場所を調べて、見て回りました。まだ緑のモミジだったし、他の人に聞いて回れないからちよつと苦労しました。でも想像通り。ううん。想像以上に綺麗な場所が見つかって良かった!」

.....

扉間は、周りの風景にうっとりで見惚れている芙蓉の横顔をそつと見つめた。

成人の日の晴れ姿も美しかった。

だが、今の芙蓉はそれ以上に、畏敬するほど美しい。

微笑みを讃える赤い紅を差した唇は、人の魂を吸い取ってしまいそうだ。

琥珀色の瞳は世界唯一の宝石のように見え、黒く長いまつ毛が瞬きで揺れるたび黒蝶の鱗粉が舞っているようである。

芙蓉は扉間の視線に気づいたのか、それとも感動の同意を求めているのか、不意に扉間を見上げニッコリと微笑んだ。その笑顔にはどこか無垢な少女を感じる。卵型をした輪郭のせいだろうか。

「はい。ではあと三枚で終わりです。頑張りましたよー!」

二人はまたカメラの方を向き羽を交わすと、姿勢を正した。

・・・写真は白黒でも、俺は一生、この鮮やかさと美しさは絶対に忘れない・・・

扉間は二枚目の写真の時、芙蓉の肩に手を回した。

その後、神殿で柱間、ミト、千手一族の上役、そして樹に見守られながら挙式を終えた。それから先ほど撮影を行った庭園を会場にして披露宴を開いた。

芙蓉と扉間の登場に、会場に集まった人々は歓喜の声を上げ大きな喝采で迎えた。

披露宴の招待客は、千手一族とうちは一族の上忍、里の上役、うちは私塾の塾生とドドメ、うちは領地の元教え子たち。勿論、樹も、扉間の弟子の四人も居る。ミトも渋々の様だったが挙式に続いて披露宴にも参加してくれた。

主賓の挨拶や祝辞が終わり、食事が中盤に入って会場全体がワイワイと盛り上がってきた頃。芙蓉は恐る恐るミトの席へ挨拶のため赴いた。隣の席に居るはずの柱間は、他の席で扉間を引つ張り回して騒いでいる。

「あの…ミト様、今日はご臨席して頂き、本当にありがとうございます。これから色々ご指導宜しく願います。あの…ミト様の外交でのご活躍は兼ねてよりお聞…」
「誤解しないで下さいね。私は夫の弟である扉間様の結婚式だから出席したのです。そのお相手がたまたま貴方だっただけですわ。あまり会う機会も無いでしょうけど、よろ

しくお願いしますね。それから……これからお互いに、妻の立場で木ノ葉の里の重役を支えていきますよ。」

「は、はいっ！精一杯がんばります！」

言葉を遮られたうえミトの言葉には少々棘があつたが、ミトが自分のことを受け入れてくれているのかもしれないと感じ、芙蓉はホッとした。

「でも、結婚後も教師を続けると聞きましたけど、なぜですか？妻として扉間様をお支えする事に専念したほうが良いと思いますけれど。」

芙蓉はミトの問いに一瞬ドキリとしたが、姿勢を正してニコリとしてこう答える。

「扉間さまのことはこれから全力でお支えます。でも、教師の仕事は、扉間さまが里の発展の為に毎日お仕事に尽力されているのと同様、直接里に貢献出来る仕事だと思っております。それに……何より私は教師の仕事が大好きなんです！だからこれからも続けていきます！」

そう言つて芙蓉は満面の笑みをミトに向ける。

その笑顔から、ミトは芙蓉が心から教師という仕事が好きで、そして誇りに思っているのだということが伝わってきた。

「そう。それは頼もしいですわね。でも扉間様をお支えすることは貴方の責務。貴方にしか出来ないということを忘れてはなりませんよ。……無理せず、頑張つて下さいね。」

「ありがとうございます！ミト様！また今度、ぜひゆっくりお話しさせて下さい。」

芙蓉は大きくお辞儀をしてからミトの席を離れて歩いて行つた。

ミトはまだ胸の高鳴りが収まらない。

芙蓉の余りの美しさに緊張してしまい、芙蓉の顔を直視し続けられず、会話の途中何度も目を逸らしてしまつていた。

嬉しそうにニコニコしながら歩いてゆく芙蓉の後ろ姿を見てミトは思う。

・ ・ ・ 同じ女から見ても見惚れてしまうほど綺麗な人：それなのに男と対等に里の為に働こうなんて：相当芯が強いよね。

結婚したら女は内助の功が役目だと思つていたけれど、確かに、女だつて男と同じく活躍する権利はあるよね。なんだかこんな気持ち久しぶりだわ。もつと彼女のこと知りたくなつてきたかも。 ・ ・ ・

ミトは芙蓉に声援を送るつもりで、優しくも強い眼差しで芙蓉を見つめた。

「芙蓉おー！もう：：：本当に綺麗！美しい！絶世の美女つて芙蓉のことなんだねえ。」

「樹ちゃん、もう酔つてるの？大丈夫？」

ふらついている樹の脇を芙蓉が支えた。

・ ・ ・これが飲まずにやつてられるかつつの！芙蓉は一生私の親友。でも夫婦にはなれないんだ。これまでも、そして今日からもまた、永久に。 ・ ・ ・

「あつちで少し休もう?」

「だ、ダメだよ……主役が居なくなっちゃダメ!大丈夫だって、もう飲まないからさ……」

芙蓉は苦笑しながら樹を近くの椅子に座らせた。そしてしゃがんで樹を見上げる。

「樹ちゃんの千手一族の正装姿、初めて見たかも!振袖、良く似合ってるね!樹ちゃん
とつても美人さんだよ。素敵!」

樹は自分を見上げる芙蓉の顔を見下ろしていると、思わずその唇に吸い付きたい衝動に駆られ、焦って首を横に振り、そしてもう一度芙蓉の顔を見つめ直した。

芙蓉はもう、扉間のもの、いや扉間の妻である。

「樹ちゃん。色々手伝ってくれてありがとうね。私、最初結婚式はしたくなかったけど、樹ちゃんと準備している時とつても楽しかったよ。で、いざ本番を迎えてみたら、本当に結婚式をして良かったって思った!ありがとうね……」

「芙蓉……」

樹の目からは大粒の涙が流れた。芙蓉は焦って立ち上がり、ハンカチを取り出して樹の涙を拭い、そして樹を胸に抱き寄せて樹の頭の上で小さな声で言う。

「扉間さまへの愛情とは違うけど、樹ちゃんとの間にも、私たちだけの愛があると思ってる。前も言っただけど、私は樹ちゃんが居てくれたから生きてこられたの。これらも樹ちゃんが居ないと私、生きていけないんだよ……樹ちゃん、大好き。」

樹はついに芙蓉の胸に顔を埋め、大きな声で泣き始めた。

その鳴き声に周囲は驚き、一斉に視線が二人に集まる。

「つたく。樹さん、飲み過ぎだぜ。」「ほーんと。親友の結婚がそんなにまで嬉しいのかな？」

ふふふふふ……クスクスクス……あははははは……

周囲の人々は誰も、樹が悲しみに泣き叫んでいるとは思っていない。

樹が泣き上戸で芙蓉に絡んでいるのだと少し呆れた顔で見つつも、樹が芙蓉の結婚に心から感動しているのだと微笑ましく思い、再び各々の会話に戻っていった。

だが、騒いでいた柱間と、その柱間に引つ張り回されていた扉間だけは、樹の涙の訳に気が付いていた。

「樹には辛い日だろうのう……扉間、樹と俺の分まで、しっかりと芙蓉を幸せにするんだぞ！」

「解っている……。だが樹も解っているはずだ。これからも芙蓉を支えてくれるだろう。」

披露宴の最後に集合写真を撮ることになった。

池の前の広い場所で八十名近くの招待客が扉間と芙蓉を囲み、笑顔で写真に写った。しかし、そこにはカガミの姿だけ、無かった。

全ての予定が終わり、扉間と芙蓉は神社の入り口に立ち、帰ってゆく招待客たち一人

一人に礼を言い、見送った。

気づけば陽も傾き、空は赤と紫に染まっている。

「んじや、二次会行くぞおー!! 扉間、芙蓉、俺たちは先に行っておるから早く来いよ!」
見送ったはずの幾人かと柱間が参道からこちらに向かつて手を振っている。

「二次会? 聞いてねえぞ。まだ飲む気かあいつは……」
「……」
「大丈夫です。せつかくの機会ですもの。私も行きたいです!」

そして二人は招待客全員が参道から見えなくなるのを確認し、顔を見合わせた。

「……カガミ君、先に帰っちゃったのかな……居ませんでしたよね?」

「言うのを忘れていたが、カガミは夜から任務があるんだ。それで先に帰った。」

「そうでしたか。カガミ君は真面目だから、準備をする為に早めに帰ったのね。偉いわ……」

芙蓉は言葉に反して少し寂しそうな顔をしている。

扉間の言葉が嘘だと気づいているのだろうか。

二人は着替えるために控室に向った。

「社殿の回廊に差し掛かり、回廊越しに先ほどまで居た庭園が見えた。」

「ねえ扉間さま! 着替える前に少しだけ、もう一度庭園を見ておきませんか?」

「いいな！行こう。」

二人は手を繋ぐと小走りで庭園に向かった。

庭園の風景の下半分は影って暗くなっているが、上半分は夕陽を受けてモミジが鮮やか輝き、まるで燃えているようである。

二人は黙ってその景色を見つめた。

秋の冷えた夕風が二人の頬を撫でてゆく。

そしてサワワワ…とモミジと楓が擦れる音に耳を澄ます。

まるで先ほどまでの人々の楽しそうな話し声、笑い声がこだましているように感じる。

「良い結婚式だったな…。」

「ええ。本当に…。」

静かに、二人は自然と唇を重ねた。

◆

十二月中旬。

木ノ葉の里は年末年始に向けて人々の賑わいが増す一方、山々の木々はすっかり葉を落とし物悲しい風景である。寒さも厳しくなり、昨日は強風に風花が舞っていた。

今日もまだどんよりと空が鈍色の雲に覆われている昼下り。

芙蓉は庭で寒牡丹に被せていた藁苞（わらづと）を修理し掛け直している。三つある藁苞の中では、愛らしい紅色や濃い桃色の寒牡丹が咲いている。

「大丈夫か。もう一枚羽織った方が良い。」

芙蓉の背中に扉間がストールを被せ、後ろから肩を抱く。

「ありがとう…温かい。この子たちも早く暖かくしてあげなきゃ。」

「この寒さの中こんなにも美しく咲き誇れているのは、芙蓉のお陰だな。」

「いいえ。この子たちがもつ生命力と生きる知恵のお陰ですよ。見て？初夏の牡丹と比べて茎も細いし、葉っぱも薄く小さいし少ないでしょ？蕾も少ないし…これは花を咲かせる為に体中の養分を花に集中させているからなんです。そんな賢くて健気な寒牡丹を見ていると、私も守ってあげたくなくなるんです…」

扉間は、そう話す芙蓉の横顔から寒牡丹へと視線を移し、じつと見つめた。

「…俺が思うのも難だが、まるで芙蓉の生き様のようだな…」

「その知恵と強さがあるからこそ、この花は鮮やかで美しいのだろうな…」

「人間と同じかもしれないね。辛く厳しい状況や、悲しく辛い状況の中でも頑張っている人は素敵に見えるし、周りに感動を与えますものね…」

「…そうだ。お前のことだ。更にお前は自分がどんなに辛い状況でも、他人への優しさと思いやりを忘れなかった。お前を傷つけた、俺にさえも…」

扉間は胸が痛み眉を寄せ、寒牡丹の細い根元に視線を落とす。

「……俺は……俺の罪は……俺への罰は……」

「扉間さま？どうかしました？そんな険しい顔をして……」

「い、いや。何でもない。ちよつと仕事のことをな……。寒牡丹。いい花だな。植えてくれてありがとう。芙蓉。」

「はい……三〜四月は桜。五〜六月は扉間さまが植えてくれたハナミズキでしょ？そして十二〜一月にはこの寒牡丹。ほかの時期にも咲く花を植えて、一年中花が絶えないお庭を造りましょう？ね？」

「ああ。それはいいな……楽しみだ。」

すると先ほどまで雲に隠れていた太陽が顔を出し、二人に降り注いだ。

芙蓉は作業する手を止め、少し眩しそうな顔で扉間に微笑みかけた。

扉間は少しぎこちなく、それに笑顔で返した。そして自分の左手に視線を落とすと、指輪がキラリと光っていた。

その光は不意に、敵を殺す時に刃（やいば）を翻して突き刺す瞬間を思い起こさせた。扉間の胸に鋭い痛みが走る。

「……俺は、本当に自分の罪を償えているのだろうか。」

「……待て。なぜまたそんな事を考える。これ以上考えるのは無意味だ。」

生涯、芙蓉を愛し守ることが償いのはずだろ。

なら、俺への罰はどうなった？どうなるんだ？・・・

「扉間さま？扉間さま！・・・本当に大丈夫ですか？」

気付けば芙蓉が扉間の左腕を揺すって、心配そうに顔を歪ませている。

「あ、ああ・・・大丈夫だ。」

「私で良かったら何でも話して・・・お願い。一人で悩まないで？もう忍について知ること
も解禁されたんだし・・・ね？」

「芙蓉・・・俺は・・・幸せ過ぎて、怖いんだ。」

「・・・もしかして、昔の事でまだ何か気になる事が・・・あるんですか？」

「・・・」

芙蓉はどうしてこうも、時々ズバリと人の気持ちを読み当てるのだろうか。昔からだ。

「もし、いつか過去の行いに辻褄を合わせなくてはならない時が来るとしても、過去に現在（いま）と未来を支配させては駄目です。」

私だって償いきれない罪がある。それでも貴方は私と結婚してくれた。その瞬間から私たち二人の新しい未来は始まっているの。来年はきつと、二人で違う花を見て笑っているわ。それで良いじゃないですか。私はもう扉間さまに昔の事で苦しんで欲しくな

い。…心から愛しているから。」

そう言うのと芙蓉は氷のように冷たい手で、扉間の左手をそつと握った。

「芙蓉…そうだな。すまん…」

芙蓉はサツと立ち上がって扉間へ右手を差し出した。

「作業終了。さつ、お家の中に入って温かいお茶を淹れて、蝶屋の最中を食べましょ！」

「…ああ！」

扉間は立ち上がると同時に芙蓉の腰と膝を持ち、抱き上げた。

「きゃっ！もーっ、びつくりしたあ！アハハハ。」

太陽は再び雲に隠れ、辺りの空気は更に冷たくなっていた。

(31) 罪の向こう、愛の絆

「皆さん。明日から冬休みですね。年末年始、任務のある人も居るでしょうけれど、良い年を迎えて下さいね。その為に今から今年の反省と来年の抱負を・・・」

「もー先生！お説教はいいって！早く忘年会の店に行こうぜ！」「そうそう！お説教は美味いお鍋を食べながら聞きますから。」「あと新婚生活の話もね〜！」

ワハハハハ・・・

「まったくもう：ハイハイ。では片付けが終わった人からお店に向かつて下さいね。」

芙蓉は苦笑いしながらも嬉しそうに教科書を揃え、教室を出て行こうとした。

「芙蓉先生。」

廊下に出ると、カガミに呼び止められた。

「どうしたの？」

「二人だけで話したいんだけど・・・」

「じゃあ、理科室なら空いてるから、そこで話しましょう。」

「塾じゃちよつと・・・。それに先生はこの後忘年会でしょ？遅れたら皆から文句言われるよ。できれば忘年会の後：顔岩展望所まで来てほしいんだ。」

芙蓉は、それでは帰宅があまりにも遅くなつてしまい扉間に心配をかけてしまふと考へたが、カガミのこれまでになく深刻そうな様子に、カガミのことを最優先させることにした。

「分りました。じゃあ二十二時、展望所でもいいかしら？」

「はい。待つてます。」

そう言うときカガミは背を向けて歩いて行つた。

いつもと明らかに違うカガミの様子を心配に思ったが、芙蓉も急いで教員室へ向かつて行つた。



今日で大晦日まで残すところ一週間。

夜の北風は刺すように冷たい。今夜は雪が降るかもしれない。

芙蓉は雪が積もつてしまう前に、年用意をしなければと考へながら歩いている。

鍋料理と温かい店内で身体が温まつているとはいえ、寒さが堪える。

だが、カガミの話の話を早く聞かなければと、芙蓉は展望所の階段を急いで上り始めた。中腹を過ぎると息が上がり、再び体が温まってきた。

最後の数段を上る時、不意に扉間から求婚された日のことを思い出した。階段を上り終えたが、カガミはまだ来ていない。夜の展望所は街灯が四つほどあるのみで、暗く恐

ろしい。その恐怖に、あの頃の数日間、マダラに怯えていた恐怖が重なる。

少しでも明るい場所に居ようと、街灯の下（もと）、町明かりが輝く里の風景が見渡せる手摺の柵に歩み寄る。

恐怖と苦々しい気持を打ち消そうと、手袋を外し左薬指の指輪を撫でてみる。

芙蓉が結婚式の日には扉間に贈った指輪も、扉間は家では必ず着けてくれている。その光景を想い出すと、胸に甘く温かい感覚が広がり、同時に先ほど店で女子たちと話した事も思い出した。

芙蓉は結婚式の衣装を里に寄付した。

結婚式を行う希望者に無料で貸し出し利用して貰うことにしたのだ。それを聞いた女子たちは、いつか自分もその衣装を着て結婚式がしたいと言ってくれた。

・・・私も、あの子たちの誰かがあの衣装を着てくれる日が楽しみだなあ。家に帰ったら扉間さまに話そうと・・・

そして急いで手袋をはめ、辺りをキョロキョロと見回しながらカガミの到着を待った。

すると、つむじ風に乗って木の葉が足元を舞い、街灯の灯りに照らされて琥珀色に輝いた。芙蓉はそれを見て、一瞬、マダラのことを想い出し、思わず目をつぶった。

・・・マダラさまはいま、どうしているだろうか。本当に私にことを忘れてしまった

のだろうか……

駄目だ。考えてはいけない。

思考回路を遮断し、かつと目を見開いて気持ちを取り直し、また辺りを見回す。

「芙蓉先生。お待たせ。遅くなってごめんなさい。」

後ろからカガミが声をかけ、芙蓉は笑顔で振り向いた。

「ううん。今さつき来たばかりよ。それで、話というのは何かしら？」

カガミは芙蓉の元へ歩み寄ると、黙って俯いた。

よく見るとカガミは任務服を身に着け、腰には刀を刺し、背には荷物を背負っている。

「カガミ君。今から任務なの？」

「うん……。当分、里には帰らない。」

「えっ？どれくらい？」

「分らない。一〜二年……もつとかも。」

「ええ!! いつ決まったの!! どうして早く言ってくれなかったのよ!」

「一ヶ月前、長期スパイ任務に志願したんだ。それで今夜、出発する。」

「……そんな……。どうして? どうしてスパイ任務なんて! 貴方なら里に居て任務を行うほうが適任でしょう? ……扉間さまは知ってるの!!」

「知ってる。扉間様に直接志願し、許可したのも扉間様だよ。．．．いいんだ。俺はまだ未熟だから、スパイ任務でキャリアを積みたいしさ。」

「．．．．．。」

芙蓉はカガミが突然居なくなるシヨックと、扉間が自分に何も教えてくれなかったことにシヨックを受け、俯いて何も言えなくなった。

ふわり．．．クルツ．．．

「これ、俺からのプレゼント。先生寒がりだからさ。使つてよ。」

カガミは芙蓉の首に白いマフラーを巻いた。

芙蓉はそれを触りながら、目を潤ませカガミの顔を見上げた。

「カガミ君．．．。ありがとう．．．。」

「うん．．．。それでさ．．．俺も、先生から欲しいものがあるんだけど．．．」

「何？」

カガミは芙蓉にピタリと体を寄せ、芙蓉の両肩を掴んだ。

そして、芙蓉の顔に顔を近づけ、唇を重ねようとした。

「駄目っ!!!」

芙蓉は顔を大きく逸らし、カガミを突き飛ばした。

「ご、ごめんね．．．それだけはあげられない。」

しかしカガミは黙って再び芙蓉に近づき、無理やり芙蓉を抱き寄せた。

「やめてっ！離してっ!!」

「せめて、せめて抱き締めさせて！先生の温もりを覚えておきたいんだ!!」

しかし芙蓉は激しく抵抗した。

手を掴まれ両手の手袋が外れ、肩を引つ張られマフラーも地面に落ちた。

体格でも力でもカガミに敵うはずが無いのだが、それでも芙蓉は全力で暴れた。

カガミもそんな芙蓉の腕を力づくで掴んで引つ張り、何とか抱き締めようとする。

その手を振りほどこうと芙蓉が思い切り腕を後ろに引く。カガミは、流石に芙蓉が痛がつているだろうと思い、その腕からぱつと手を離れた。

すると、その反動で芙蓉の身体は勢いよく後ろに倒れ、手摺の柵を乗り越えてしまつた。

カガミが焦って柵の下を覗き込むと、芙蓉は柵の根元に右手で捕まり、つま先を崖に掛けて、かろうじて留まっている。

しかしその身体は震え、今にも落ちてしまふそうである。

カガミは、苦しうに自分を見上げている芙蓉を見下ろした。

「……芙蓉。一度でいいから、俺のものになつて。なら、助けてあげる。」

「……っ……い、嫌よー!」

芙蓉はなんとか左手でも柵を掴み、懸命に自力で這い上がろうとあがいている。

その左薬指には、今年の春の終わりに突然現れた白金の指輪が光り、鉄の柵に擦れてギリギリと音を立てている。

カガミはその様子を見て、心の中で何かプツンと音を立てて切れたのを感じた。それは、芙蓉と繋がっていると信じていた細く、強い糸だった。

「……芙蓉。永遠に愛してるよ……さようなら。」

カガミは芙蓉の両手を柵から外した。数秒後、崖の下から鈍い音が聞こえた。

時計は二十二時を三十分も過ぎている。

忘年会は二十一時半前には終わり、塾生たちが家まで送ってくれると聞いていた。

店から家まではゆっくり歩いても三十分あれば着くはずである。

皆で盛り上がって長引いているだけだろうか。

しかし、教師である芙蓉がこんなにも会を延長させるとは思えない。

そう思いながら扉間は自ずと上着を羽織って靴を履いていた。

そして飛雷神の術で芙蓉の元へ飛んだ。

・・・この光景は、何だ？ 誰かの幻術か？・・・

一瞬、扉間は自分の目を疑った。

しかし直ぐに正気に戻り、目の前に仰向けに横たわっている芙蓉の元へ駆け寄った。仰向けに横たわる芙蓉の後頭部からは大量の血が流れ、血溜りが出来ている。動かさない方がいい。

「芙蓉！芙蓉！！しつかりしろ！！」

「……と……扉……間……さ……」

芙蓉はかろうじて意識があつたが虫の息である。

急いで医療忍術で後頭部の傷を回復せる。

「……これは、私への罰……なの……どうか……カガミ君を責めないで……愛……し……てる……」

「芙蓉！！頑張れ！！今助けてやる！！目を閉じるな！！芙蓉ーっ！！」

扉間は心臓マッサージと人工呼吸を始めたが、芙蓉の脈は戻らない。

芙蓉を抱きかかえると柱間の屋敷に飛んだ。

「!? ど、どうした!? 何があつた!?」

「いいから来い!!!」

柱間を連れ、木ノ葉病院へ飛んだ。

そして直ぐに柱間と医療忍者による手術が行われた。しかし、再び芙蓉の心臓が動くことは無かった。

「扉間様。俺を今すぐ殺して下さい。反省も後悔も、していません。許してほしいとも思っていないません。」

扉間が顔岩展望所に着くと、そこにはカガミが里の方を眺めながら立ち尽くしていた。

カガミは扉間が現れたことに気が付くと、背を向けたまま落ち着いた声でそう言った。

「なぜ芙蓉を殺した。」

「手に入らないなら、いつそ殺して自分のものにしたかったからです。」

「それで…芙蓉はいま、貴様のものになったのか？」

「……………」

「芙蓉は貴様を責めないでほしいと言って息を引き取った。そして、俺には愛していると言った。」

その言葉を聞くとカガミは扉間の方に振り向き、取り乱し始めた。

目からは涙が流れている。

「……俺は！俺はただ、最後に芙蓉先生の温もりを、この身に刻みつけただけだった!!!でも、先生がそれをかたくなに拒んで……それで、柵から落ちそうになつて居るのを見ていたら……もう……もう……!!!」

「俺は今すぐ貴様をここで殺してやりたい。貴様のことは決して許さん。だが、芙蓉の遺言だからではなく……俺にはその資格が無いのだ。」

「……?」

「去れ。カガミ。当分貴様を里には戻さん。その間、自分の犯した罪を良く考えろ。そしてこの瞬間から、その命を芙蓉が愛するこの里の為だけに一生捧げろ。そして償え。」

「……は……はい……」

カガミは擦れた声で答えると、よろよろと後ずさりそのまま姿を消した。

その後、芙蓉の死は扉間によって事故死と断定された。

扉間と顔岩展望所で待ち合わせをしており、扉間が到着する前に誤つて柵を乗り越え転落した。手摺の柵からも芙蓉の指紋と血痕、崖には靴跡も見つかり、芙蓉が最後に扉間に残した遺言から、事故死を疑う者は誰も居なかつた。

真実を知るのは、犯人のカガミ。

そして扉間だけだつた。

・・・そうか。

これが俺への本当の罰だったのか。

過去の行いに辻褃を合わせなくてはならない時がきたというわけだな。
ならばこの命が尽きるまで贖おう。

今日から俺の命は、木ノ葉の里のものだ・・・

「扉間：最後に芙蓉と話せただけでも良かったと思え。あの怪我で話せた方が不思議ぞ。即死していてもおかしくなかった：」

柱間はそう言って、芙蓉に寄り添う扉間の肩に手を載せた。

「：：：そうだな。本当にそうだ：」

「・・・」

柱間は涙を堪えながら、静かに病室を出て行った。



・・・せめて最後に扉間さまに会いたい！お願いっ・・・

暗い奈落の底へ吸い込まれながら芙蓉は願った。

すると何かにそつと頭を抱えられている感覚がした。

『あなたを助けることはできないけれど、その願いだけは私が必ず叶えるから』
そう聞こえた瞬間、芙蓉の身体は奈落の底へ叩きつけられ、意識を失った。

全身に心地良いそよ風を感じる。

ゆつくりと目を開けると、野花が咲き乱れる草原の上に一人で立っていた。

無意識に足が一步前へ出て、歩み始める。

すると、目の前に夕陽を受け黄金に輝く木ノ葉の里の風景が広がった。

空は、芙蓉の大好きな晩夏の壮大な夕焼け空だった。美しい。

芙蓉は胸の前で両手を組み、目を閉じた。

・
・
・

今が全ての罪を贖う時。そして罪から解放される時なのね……

もつと生きたい。だけど、もう充分生き抜いた。

それに私はもう、ちゃんと全てを知ることが出来た。

本当の愛……本当の幸せ……本当の悲しみ……本当の痛みを……

ちゃんと伝えることが出来た。

本当の言葉を……想いを……愛を……

何より私は、幸せだった。

だからもう、私は・・・

芙蓉は目を開けると里の風景に背を向け、そつとまた目を閉じて満天の星空に向かつて歩き始めた。

「芙蓉!!」

その声に目を開けると、目の前に扉間の顔があつた。

芙蓉は最後に伝えなくてはならない言葉を伝えた。

しかし、何と言ったのか自分自身では分らない。

・・・ああ、扉間さま。

そんな顔しないで。泣かないで。

また目にゴミが入っただけだって言つて…

やつぱり私、死にたくない。

もつと、もつと、もつともつと…貴方の隣りで里を見ていたい。

美味しい料理を作つてあげたい。肩を揉んであげたい。

また錦谷にも行きたい・・・

ねえ、扉間さま。愛してる・・・



「何か変わったことはあったか。」

マダラは机で古い書物や古典を眺めながら、偵察から戻ったゼツに向かって背中であう。

マダラの両目は、マダラの意識が戻る前にゼツが移植していた。

「ううん。最近では各地の里作りが活発になっていて特に目立った戦は無いね。ただ、興味無いかもしれないけど、マダラの大嫌いな扉間の奥さんが死んだよ。その奥さんに片思いしていた教え子に殺されたみたいだね。恋愛のもつれかな？」

「あいつに妻なんて居たのか。・・・殺された、か。フツ。扉間の奴さまあみろだな。いつかあいつ自身も悲惨な死に方させてやる。・・・ゼツ、前から思っていたが、お前結構ゴシツプネタが好きだな。」

「え？マダラも嫌いじゃないでしょ？嫌いじゃないから僕も嫌いじゃないんだけど。」

「ややこしい事を言うな。」

マダラはあの日、芙蓉によって芙蓉についての全ての記憶を失った。

つまり、マダラの人生に芙蓉という人間だけが初めから居なかつたことになっていく。

ゼツの報告を聞き終わると、マダラは再び書物を読み始めようとしたが、ふと手を止めた。

「なんか、無性にいなり寿司が食いたくなってきたな・・・」

マダラは宙を仰ぎ少し何かを考えた後、何事も無かったかのように書物を開いた。その背中を見ながら、ゼツが心の中で呟く。

・・・芙蓉。これまで何度もチャンスあげたのに。今頃マダラに着いて行かなかつたこと後悔してるかもねえ。フフツ：まあでもあれ以上マダラが芙蓉に入れ込むのは番外編が続いちやつて面倒だったし、これで良かったかもね。・・・
ゼツは再び壁の隙間から、何処かへ消えて行つた。



芙蓉の四十九日が過ぎ、扉間は意を決して芙蓉の部屋に入った。

部屋に入るのは、芙蓉の葬儀の日以来である。

あの日、芙蓉に着せる服を探そうと急いでいたため、衣装棚は開けっ放しになっていた。

その様子を見て否応なしに葬儀の日の事を思い出す。

空の青さがいつもよりも濃い、良く晴れた冬の日だった。

埋葬する芙蓉には、扉間が昨年の誕生日に贈った洋服を着せた。樹が泣きじゃくりながらその服を着せ髪をとかしたあと、樹の母親が芙蓉に美しく化粧をしてくれた。

芙蓉の死は多くの者にシヨツクを与え、皆が深い悲しみに涙を流しながら献花した。柱間は泣きもせず、ただ黙って芙蓉を見つめていた。

今にも目を覚ましそうに眠る芙蓉の頬、唇は冷たく、そして硬かった。それは寒牡丹の蘂苞を直したあの日の、芙蓉の手の冷たさよりもずっとずっと冷たかった。

葬儀の時の場面が、まるで紙芝居のようにパラパラと扉間の頭の中で切り替わる。

気が付けばまた、涙が浮かんでいた。

どうやら涙が底をつくということは無いらしい。

扉間も柱間も、芙蓉の葬儀の次の日からは仕事に戻り、いつも以上に働いた。里の為に身を粉にして働くことしか、もう、芙蓉にしてやれることが無いと思っていた。

柱間から屋敷で一緒に住まないかと言われたが、そんな気持ちになどなれなかった。そして、今も家に居るだろう芙蓉のことを独りにしたくもなかった。

なので今、こうして芙蓉に黙って部屋に入っているのは申し訳ない気持になる。

扉間は衣装棚の扉を静かに閉じると、おもむろに芙蓉の机の上に在る結婚式の二人の写真が入った写真立てを手に取った。

すると何かがパサツと床に落ちた。

拾い上げると、それは封筒に入った手紙だった。

扉間は急いで便箋を取り出し広げて読み始めた。

「…私はこれまで『絆』という言葉が好きではありませんでした。

幼くして家族を失った私は、この先誰と一緒に居ようが一生独りだと思っていたからです。

けれど私は、木ノ葉の里で、柱間様、扉間様、樹ちゃん、そしてマダラ様、他にも多くの人たちと暮らして、ようやく絆とは何かを知ることが出来ました。

絆とは、人から貰って育てるものですね。

私は、両親から『芙蓉』という名前を貰った時から親子の絆を貰い、仏間様に引取って頂いた時から柱間様、扉間様、板間様、椿さんと家族の絆を貰った。女学校では、樹ちゃんから友情という絆を貰った。マダラ様に助けられた時、うちは一族の人たちとの繋がり、愛という絆を貰った。私塾では子供たちから信頼という絆を貰い、そして私も子供たち同士の絆を育てる手伝いが出来ました。他にも数え挙げればきりがありません。

私は気付かぬうちに、ちゃんと貰った絆を育てていたのでですね。

扉間様に求婚して貰えて本当に嬉しかった。

二人で育てた絆が美しい形を成したことを感じました。

そして、これからも二人でその絆を固く大きく育てていくこと、それが結婚なのでね。

私は誰よりも木ノ葉の里を想い、多くの絆を守る千手扉間という立派な男性の妻になれたことを心から誇りに思います。愛しています。

どうか、死がふたりを別つとしても、ふたりの物語が永遠に続きますように。

蓉
」

千手 芙

扉間は手紙に涙を落さないよう、そして何度も同じ部分を読み返しながら読んでいたため、最後まで読み終わるまで十分以上かかった。

そしてよく見ると、千手芙蓉という名前の左端には、扉間が求婚した卯月の日付が小さく記されていた。

まるでそれは芙蓉の遺書のように思え、ますます悲しみが溢れてきた。

「…俺には過去に支配されるなど言っておきながら、自分は死ぬ準備をしているなんて、どうかしている…馬鹿だな…。お前が死ぬ必要なんて全く無い。お前が罪だつて言つてた事も、元はと言えば全部俺がした事のせいだろ！死ぬべきは俺のはずだ！」

お前はババアになって、近所のガキ共に勉強教えたり説教したり、相変わらず樹とつるんで甘味食べたり、俺を放つて二人で旅行三昧したり、俺のこと尻に敷いたりしな

きやならなかつたんだよ……なんでだよ。なんでお前が死ななきやならないんだよつ!!!

あれだけ俺より先に死ぬなど言つただろ……!!!」

扉間は床に突つ伏し、拳を床に何度も打ち付けながら、大声で泣いた。

芙蓉が死んだ時も、葬儀の時も、この四十九日間も、こんなに泣いたことは無かつた。これまで何度も何度も、大切な人を、仲間を失つてきた。

しかし芙蓉の死だけはどうしても受け入れられない。

認めることもしたくない。

戦で死ぬこと。平和な生活の中で死ぬこと。

尊い命が失われることに違いは無いはずなのに、残念ながら、そこには大きな違いがあるように感じた。

平和と幸福という眩しい光に対して、死という闇はあまりに暗く深く、悲しい。

いまの扉間の目には、この世界の全てが灰色に写っていた。

庭では、雪を被つた藁苞の中で、紅色の寒牡丹の新たな蕾がほころび始めていた。



「扉間様つてさあ、奥さん亡くなつてから更に性格キツくなつたんだよなあ。一時期ず

いぶん丸くなってたんだけどなあ。」

「そうなのか？丸い扉間様なんて想像がつかないぞ。」

「まあでも、あれでこそ本来の千手扉間って感じもするけどなあ！」

「お、おい……」

木ノ葉の里本部の廊下で中忍二人が話していると、正面から樹が歩いて来た。

「本来の千手扉間？なにそれ。知ったフリしてんじゃねーよ。」

樹はそう言つて二人を思い切り睨んですれ違つて行つた。

「お疲れ様でーす……で、話つて何でしょう？」

樹は参謀室に入り、扉間の机の前に立つた。

芙蓉が亡くなって七年が経つていた。

樹は、芙蓉の死後一年間、自暴自棄になつて荒れに荒れた。

しかし、扉間から芙蓉の死の真相を聞かされ、樹は忍を続ける決意をし、更生した。

それからは誰よりも任務に励み、その活躍はめまぐるしく、今は扉間の右腕、そして上役の一人にまでなつていた。

「うちはカガミを里に戻す。」

「そうですか。」

「驚かないんだな。」

「だてに六年も監視してませーん。扉間様の期待通り、里への忠誠心は千手一族以上に育つてますよ。で、何に使うんですか？」

「里の警務部門の責任者にする。」

樹は流石に驚き、一步前に出て訴える。

「いや、芙蓉を殺した犯罪者を警務部門のトップにするなんて！何か考えがあるんでしょうけど、いくら何でも：私は賛成できません。」

「犯罪者だからだ。カガミは今も罪悪感に苦しんでいる。芙蓉を殺した罪を償う方法は、木ノ葉の里に命を捧げることだと信じ、何とか生きている状態だ。法で裁かれる方がまだマシかもしれないな。まあ：だからと言って罪が消えるわけでは無いが。」

「何が言いたいんですか？」

「罪悪感に苛まれ苦しむ己が、罪人を取り締まる全責務を負う。どんな気持ちだろうな。」

「：ハハッ。相変わらずエグいこと考えますねえー。今のカガミなら、徹底的に取り締まるでしょうね。で、更に自分の犯した罪の罪悪感に苛まれるでしょ。心を病んで自殺しないと良いけど：フフフ。」

樹は腕を組み、不敵な笑みを浮かべた。

すると春風が桜の花びらを舞い上げ、窓ガラスを揺らして音を立てた。

一瞬、二人は同じことを思い出し、沈黙する。

「将来、うちは一族で忍の犯罪を取り締まる警務部隊を作り、刑務所を併設した施設を里の外れに造り、うちは一族全員をそこへ移住させる計画を考えている。」

「それって体のいい迫害政策に聞こえますけど？」

「・ああ。兄者が火影であるうちは絶対に認めないだろうな。兄者は今でもうちは一族に肩入れし、奴らの本性など全く解っていない。だが、最近はやいうちに火影の役を退きミトと外交活動に専念したいと言っている。」

「へえー。いいじゃないですか。そうなればやっぱ次の火影は……」

「必ず俺が二代目火影になる。その時まではこの計画の基礎を作る。貴様も協力しろ。」

樹は扉間の机に歩み寄り、机に手をつくると扉間に向かって前のめりになって小声で言う。

「……もちろん！芙蓉を殺したカガミ、芙蓉を不幸にしたマダラ……芙蓉はうちは一族に関わらなければ死ななかつた……私、忌まわしきうちは一族なんて大っ嫌いですから。」

「……話以上だ。下がれ。」

ハイイと言つて片手を挙げ、樹はくるりと扉間に背中を向けた。

しかしドアの取っ手を掴むと、思い出したかのように扉間に振り返つてこう言つた。

「扉間様つて昔、あまりの無慈悲っぷりに卑劣様なんて呼ばれてましたけど、ここからが

本當の卑劣様傳説の始まりですなっ！アハハハ！じゃっ。失礼しまーす。」

ボタンとドアが閉まると扉間は立ち上がり、窓の外から里を眺めた。

木ノ葉の里は七年前よりも発展し、今日も多くの人々が今日も大通りを行き交っている。

そして振り返り、返機の引き出しを開けた。そして写真を手取る。

写真が在る横には布張りの小箱が在り、伴侶を失った白金の指輪が入っている。指輪には細い鎖が通され首に着けられるようにしてあり、扉間の任務時には必ず共に連れて行かれています。

扉間は手に持った写真を見つめた。

「お前がいなくなつて、もう七年か……芙蓉。」

そう呟くと写真の中の芙蓉の顔をそつと指でなぞる。

「見ていてくれ芙蓉。俺がこの里を在るべき姿にしてみせる。里こそ要だ。そうだろ？」

その問いに芙蓉は何も答えず、ただ扉間に向かつて微笑み続けている。

窓の外の桜は満開で、今年もまた扉間の脳裏に初々しい袴姿の芙蓉を蘇らせる。

・・・・あの頃に戻れたなら・・・

何度考えたか知れない。春だけではない。

春夏秋冬、季節の輝きを感じる瞬間、芙蓉との輝かしい日々を想って止まないのである。

『一年中花が絶えないお庭を造りましょう？ね？』

芙蓉の四十九日の法要後、扉間は芙蓉の言葉通り、庭に花木を植えた。

二、三月に咲く沈丁花。十月、十一月に咲く金木犀。

そして、八月に盛りを迎える芙蓉の木を。

想い出は美化されていくものだと言う。

しかしいくら美化しても芙蓉の美貌、美しい声、優しさ、聡明さ、そして共に過ごした美しく幸せな日々を完璧に思い出すことなど出来ない気がする。

扉間は写真をそつと引き出しにしようと、再び机について書類をさばき始めた。

この一枚、次の一枚、その次の一枚が、木ノ葉の里の未来に繋がると思つて。

完

「 if you XXX No. 1 」嗜欲の奴隸・柱
間

昨夜、初雪が降った。

屋根の上、田畑、陰になつてゐる場所にはまだ雪が残つてゐるものの、正午を過ぎる頃には道の雪は解け、ほぼ乾いてゐた。

芙蓉はその道を一人、歩いている。

見上げた空には、昨夜あれだけ雪を降らせていつた雲の姿はもう無く、紺碧の空と小さな白い雲が浮かんでゐた。

・・・御用があるからとはいへ、やはりミト様のいらつしやるお屋敷に私なんか一人で行くのは罪悪感があるなあ・・・

芙蓉は再び足元に目線を落とし、とぼとぼと歩き続けた。

「……めんくださいませ。」

恐る恐る屋敷の玄関の扉を開けると、廊下の奥から誰かが走つて来る足音が聞こえた。

「おーっ！芙蓉、良く来たのう！寒かったであろう。さっ！早く中へ入れ！」

「・・・いえ、ここでご入用の物をお渡ししたらすぐに帰りますので、大丈夫です。」

「何を言う、冷えておろう。中でしっかき温まつてから帰れ。さ！早く！」

「で、でも・・・は、はい。では、失礼いたします・・・」

芙蓉は家にかかるのはかなり躊躇われたが、ここまで柱間に言われては断ることは逆に失礼だと思い、仕方なく上がることにした。靴を脱いで揃え、小上がりに上がった。

廊下を、柱間の後ろを歩きながら、芙蓉の心臓はドクドクと心拍数を上げ、とても緊張していた。

かつて、自分は柱間と結婚する約束をしていたという。きつとこの廊下も何度も歩いていたのだろう。記憶には無いが、そう考えると胸が痛んだ。

うちは私塾のうちはドドメ塾長から預かった書類を柱間に渡したら早々に退散しよう：芙蓉は俯いて一瞬だけ目を閉じ、柱間の背中を見た。

しかし、いつまで経つてもどの部屋に入る様子が無く、延々と廊下を歩いて行く。

芙蓉は更に不安が高まり、ついに柱間を呼び止めた。

「あ、あの・・・本当に私は大丈夫です。こちらが塾長からお預かりした書類です。どうぞ。」

「・・・。うむ。ありがとう。でもせっかく久しぶりに来たのだから、ゆっくりしてつて

くれ。それに、芙蓉にぜひ見せたいものがあるのだ！な？頼む。」

「見せたい、もの・・・ですか？でも、ミト様にもご迷惑でしようし・・・」

「ああ、ミトの事を気にしておったのか！ワハハハ。ミトは娘と一緒に一ヶ月ほど入院することになっておるんだ。」

「えっ・・・どうか、なされたのですか？」

「ああ、娘が麻疹（はしか）にかかつてのう。ミトは子供の頃にかかつていなかったように、一緒に感染してしまつてな。娘の方よりもミトの方が思つたより症状が重くてな・・・母子揃つて入院しておるんだ。」

「それはご心配ですね・・・早く善くなられると良いですね。」

「うむ。ありがとう！・・・さつ、こつちぞ！来てくれ！」

「えっ・・・は、はい・・・」

芙蓉はミトが不在だとはいえ、それはそれで、妻が不在の柱間の屋敷に長居することに罪悪感を感じた。

こうなつたら、早く柱間の見せたいと言うものを見たほうが早く帰られそうだと、芙蓉は仕方なくいつたん罪悪感を横に置き、再び柱間の後ろを歩き出した。

そしてついに屋敷の一番奥の角にある小さな部屋の前に着いた。

「さつ。着いたぞ！扉を開けてみてくれ！」

「は、はい……」

柱間に促され、芙蓉は恐る恐る、ゆっくりとその扉を開けた。

「……」

その部屋は正方形で、奥に窓があり、手前には美しい赤い漆塗りの鏡台、その隣に大きめの長机がある。更にその隣には本棚が在り本がぎっしりと納まっている。人は居ないのに、火鉢が焚かれており中は暖かかった。

特に驚くようなものは無い。

柱間はこの部屋の何を自分に見せたいのだろうかと疑問に思った。

「どうだ？この部屋を見て、何か思い出せないか？」

ワダチ事件で記憶を失くしている芙蓉は、未だに殆ど全くと言っていいほど記憶を取り戻せてはいない。

芙蓉は目を凝らしてもう一度部屋をじっくりと見直し、そして目を固く閉じて何か思い出せないか試みた。

「………すみません……何も……」

「そっか。いやいや、いきなり思い出せるわけがないのう。こちらこそ、すまん！ハハハハ……」

「あの、このお部屋は……？」

「この部屋はお前の部屋ぞ!!」

「え? 私のですか!!」

「ミトには女中の部屋だったと言ってあるがな。」

柱間はそう言つて少し気まずそうに頭を搔いた。

そう言えば、柱間と婚約している時、僅かな間だが芙蓉もこの屋敷に住んでいたと扉間から聞いたことを思い出した。それがこの部屋なのか…。

芙蓉は、先ほどミトに対して感じた罪悪感とはまた違う罪悪感が胸に込み上げ、苦しくなつてきた。

「…み、見せて頂き、ありがとうございます…。私はこれで失礼いたします。」

芙蓉は部屋に背を向け、もと来た廊下を歩いて行こうとした。

その腕を柱間が掴んだ。

「!」

「せつかくだ。ぜひ入つてみてくれ。な?」

「…はい。」

芙蓉は一刻もこの場を後にしたいのだが、柱間の心遣いと、柱間への罪の罪悪感で、断ることが出来なかつた。

芙蓉は敷居に目を遣りながら、ゆつくりと部屋に足を踏み入れた。

その後ろから続いて柱間も入り、扉を閉めた。
すると同時に耳がツンと詰まるような感覚がした。

「！」

芙蓉は耳を気にしながら、扉の方を振り返った。

柱間が芙蓉の目の前に立ち、穏やかな笑顔で芙蓉の顔を見て言う。

「ぜひ、ミトが入院している間、ここに来て過ごしてみてください。何か思い出せるやもしれぬぞ。な・・・？」

「で、でもいくらなんでもそれは・・・扉間さまにも相談してみないと・・・」

「扉間には伝えてあるぞ。あいつも賛成していた。安心せい。ハハハハ！」

陽気に笑っている柱間の顔を見ても、芙蓉はその言葉がいまいち信じられない。

こんな大切なことを、扉間が自分に何も言わないでいるわけが無い。

だが、柱間が嘘をつくとは思えないし…。ただの行違いだろうか。

不安そうに柱間を見上げている芙蓉の両肩に、柱間が手を置いた。

「お前が以前の生活を再現してみていることは聞いている。もつとそれ以前の過去の経験も、再現してみれば記憶を思い出せる確率は上がるはずぞ…」

「・・・？」

芙蓉の返事を待たず、柱間は芙蓉を自分の胸に抱き寄せた。

芙蓉は何が起こっているのか分らず、そして恐怖で、拒むことが出来ない。身体が動かない。

「芙蓉・・・お前は以前、俺に対して償うと言ってくれた。」
「つぐ、な、う・・・」

それは、芙蓉が柱間を騙し、マダラと里を出て結婚した罪の事だと直ぐに分った。
だが・・・

「俺は、お前にそう言って貰えて嬉しかったぞ。お前が扉間の傍に居るのも、間接的に俺に対して償う為だと言っていた。お前の罪を償おうとする気持ちは、それだけ強いものだった。」

「・・・」

柱間は僅かに身体を離し、再び芙蓉の目を、強い視線で見つめた。

その目が訴えていることが何か、芙蓉には直ぐに判った。

しかし芙蓉は目を逸らし、言う。

「申し訳ありません・・・何も思い出せなくて・・・でも、私は償う気持ちは忘れてはいません。今の私が出来る償いは、再びうちは私塾の教壇に立ち、木ノ葉の里に貢献する子供たちを育てることです。そして、扉間さまのお傍に居ることです。」

そう言い終わると、柱間の腕を外そうとした。

しかし、柱間は芙蓉の後頭部に手を回し、顔を引き寄せて口づけをしてきた。

「んっ！んっ！！」

口を塞がれたまま、その場に座らされる。そして口が離れた。

「やっ！やめてください！！」

柱間はその言葉を無視して芙蓉を畳の上に張り倒し、両腕を押さえつけた。

「俺とあんなにも愛し合っていたことも、思い出させてやろう。」

優しく細めている目の奥には、怒りを湛えているようにも見え、芙蓉は更に恐ろしく

なった。柱間は芙蓉の首筋に吸い付いた。

「やめてくださいっ！！…私は確かに貴方に対して大きな罪を犯しました。でも、こんな

の駄目です！！」

「俺への償いの気持ちで扉間に抱かれているのだろうか？ならば俺に抱かれるのも同じだ

ろ。」

「ミト様が！貴方にはミト様がいらっしやるじゃないですか！！」

柱間はその言葉も無視して芙蓉の上着を剥ぎ取り、ズボンも剥ぎ取る。芙蓉の力で

は、それに抗っても敵うはずが無い。あつという間に下着姿にされてしまった。柱間も

芙蓉に跨って押さえつけながら、上着を全て脱ぎ棄てた。

そして柱間は芙蓉の身体の上に四つん這いになると、芙蓉の下着をずらして乳首に吸

い付く。

「いやあああつ!!!」

反対の乳房を鷲掴みにされ、乱暴に揉みしだかれる。

芙蓉は柱間の肩を必死に、爪を立てて押す。

「やめてっ！誰か助けてえっ!!!」

「俺が好きでミトと結婚したと思うか？確かにミトに対して家族の情はある。だが、俺はお前のことを忘れることなどできぬ。お前が、お前がマダラなど愛さなければ俺たちは……!」

そう言つて柱間は芙蓉の股間に手を伸ばして下着を脱がせ、強引に指をこすりつける。

「ゆ、許してください!!お願いします!!お願いっ……」

柱間は無視して中指を芙蓉の膣の中にねじ込んだ。

「痛いっ!いやっあつ!!!やめてえ!!扉間さま!扉間さま助けてーっ!!!」

芙蓉の悲痛な声が響く。

しかしその声は、この屋敷の誰にも、そして扉間にも決して届きはしない。

柱間は指を出し入れながら、膣の奥の感じる部分を刺激する。

「フツ。嫌だといいつつ、もうこんなに濡れておるぞ。ん?」

芙蓉の意思に反し、芙蓉の膺からは温かい蜜が流れ出し、柱間の指で糸を引いていた。「ち、違う!!」

柱間は口づけで芙蓉の口を塞ぐ。

そして今度は人差し指と中指、二本の指を膺の中に入れた。柱間の太く長い指二本は、男根ではないかと感じてしまう。

芙蓉は膺の奥がきゅんと締まるのを感じる。こんな状況でも、自分の身体が男を受け入れる状態になっていくことが憎くて堪らない。

「フフ。お前は首筋が性感帯だったのう。」

柱間が先ほどよりも強く芙蓉の首筋に吸い付く。そして舌でなぞりながら、指で膺の中を刺激し続ける。

「あっ……んっ……」

「いっても良いんだぞ? ほら!! いくんだ!!」

「……っ!!!」

芙蓉は声押し殺し、果ててしまった。

胸が、まるで、剣で貫かれて床まで突き刺さっている様で、動けない。

柱間は袴を脱ぐと、動けない芙蓉の両膝を持って足を広げた。

すると蕩けた秘部が口を開ける。

「……やめ、て……お願い……」

芙蓉の目からは涙が流れ、声は擦れて震えている。

今生最後の頼みのごとく、柱間に懇願する。

「俺は、お前の犯した罪だけじゃなく、俺への愛も思い出させてやるぞ。」

そう言うのと、いつきに芙蓉の膣を男根で貫いた。

「ひゃああああんっ!!!」

柱間は芙蓉の悲鳴を聞き、更に興奮した。

何度も何度も芙蓉の子宮を突き上げる。

その度に柱間の男根は固く大きくなり、芙蓉の膣は濡れて蜜が溢れ出す。

芙蓉の揺れる乳房が柱間に、昔芙蓉を抱いていた時のことを思い起こさせた。

……あの時、芙蓉はマダラを想いながら俺に抱かれていたのか……

怒りと悲しみ、嫉妬、それに比例するように芙蓉を愛おしく思う愛情が込み上げる。

「芙蓉……芙蓉!!……っ!!!」

柱間は激しく芙蓉の中で射精したが、尚も腰を動かし続ける。すると、すぐに再び男

根が固くなってゆく。

「……この先、お前が誰に抱かれようと、お前は一生俺のものだ!」

そう言うのと芙蓉の細い首を両手で掴んだ。徐々にその手に力がこもってゆく。

信じられないことに、息苦しさで子宮を突き上げられる快感が同時に押し寄せる。

「はあっはあっはあっ……い、いやっ……んんっあああっ……」

芙蓉は頭が真っ白になり、果ててしまった。

柱間の手が、苦しうに茫然とする芙蓉の首から両頬に移り、包み込む。そして柱間は芙蓉の唇を激しくむさぼる。

芙蓉は、柱間の言葉と激しい欲情に、かつて自分が柱間に対して犯した罪の大きさ、重さを、思い知る。

だが、今その記憶が無い事は、幸いなかもしれない。

これは事故だ。

不可抗力だ。

自分は、被害者だ。

記憶の無い今なら、自分の事を被害者として今日の事を忘れることが出来るだろう。

芙蓉は今のこの状況に目をつぶり、全てが終わるのをひたすら待つことにした。

「これから毎日、必ず家に来るんだぞ……」

柱間はそう耳元で囁くと、再び芙蓉の腰を両手で掴み、素早く腰を動かし頂点に上っていく。

芙蓉は胸に突き刺さった剣越しに、その柱間の顔を見た。

いったい、誰が、この剣を抜いてくれるのだろうか…

おしまい

「 if you XXX No. 0 心の上に刃を置いて・仏間と水蓮

真つ暗な道を、手に持った小さな灯りと僅かな月明りを頼りに先を急いでいる。

吐く息が空気に触れて、頬をかすめる時には冷たい霧に変わってゆく。

雪が降っていないことだけが幸いである。

仏間の家までは歩いて三十分ほど。走れば二十分弱で着く。

しかし水蓮は晴着の振袖を着て、足元は足袋に底が厚い草履を履いている為、小走り
でしか走れず、早歩きとさほど変わらない速さである。しかも晴着が着崩れないよう気
を付けなければならない。

・・・新しい年に最初に会うのは、仏間じゃなきや、嫌・・・
家を出て十分ほど。

子の刻を過ぎた頃、千手一族の集落の入り口に着いた。

仏間の家に続く大通りには、もう既に晴着を着て集落の一番端に在る、千手一族の信
仰する神が祭られている大神神社へ向かう人々の姿が見られた。

水蓮はやつと明るい場所に辿り着き、人の姿を目にしてホツとした。

零時にはまだ余裕があるが、誰とも顔を合わせないよう、俯きながら再び小走りで走りだした。

見慣れているはずの大きな屋敷の前に着いたが、正面の大きな門は固く閉ざされている。しかし小さな明かりが門や塀に点々と灯されているため周囲はほの明るい。

水蓮は塀の左側に回り、ある場所で立ち止まった。

そして中着の中に入れていた、丸い花崗岩を取り出した。この石は、仏間と出逢つて暫くした頃、河原で剣術の稽古をしていた時、仏間がくれた想い出のものである。近くの明かりに照らされ、花崗岩の中の白雲母がキラキラと光った。その様子を見て水蓮は微笑んだ。だんだんと胸が高鳴ってくる。

カン：カン：カンカンカン：カン。

カン：カン：カンカンカン：カン。

その花崗岩で、塀に付いた×印の部分のリズミカルに叩いた。すると、三十秒も経たないうちに、フツと晴着姿の仏間が塀の上に現れた。

「ようーずいぶん早かったじゃないか。道中大丈夫だったか？」

そう言うのと飛び降りて水蓮の隣りに着地した。腰には、念の為なのか刀を差している。

「うん。大丈夫だったよ。家の近くは暗くてちよつと怖かったけど。」

「だから俺の方が迎えに行くって言ったのに：なんかあったらどうすんだよ。帰りは問答無用に送つてくからな。」

「泊つてくからいいよ。」

「はあ!! いやそれはっ・・・俺は良いけど・・・さ、流石に駄目だろ・・・」

「冗談に決まつてるでしょ。ばーか。フフツ。」

「・・・・・・」

「もおゝそんな事いいから早く行こう！お汗粉が売切れちゃうっつ！」

「それが目当てでこんなになんか早く来たのかよ：はあ。」

二人は大神神社に向かつて歩き出した。

大通りに出ると、水蓮がそつと手を握つてきた。仏間はドキツとして水蓮を見た。

先ほどまで薄暗くてよく見えなかったが、水蓮は赤地に蝶・藤・桜が描かれた鮮やかな振袖に金糸で織られた帯を福良雀（ふくらすずめ）で巻き、鶯色の帯揚と帯締をしている。そして黒く長い髪を綺麗に編み込み、可愛らしいつまみ細工の花の髪飾りをつけている。

その姿はとても美しい。

歩きながら水蓮の姿と横顔に見惚れていると、その視線に気づいて水蓮が仏間の顔を

見た。

「今、私に見惚れてたでしょお？」

「み、見惚れてなんてねーよ！向こうの出店見てただけだ。」

「フフツ。素直に可愛いぞって言っても、いいんだぜ？」

「……。」

ゴーン……ゴーン……。

二人は除夜の鐘の横で、無事に買うことが出来た汁粉を食べながら休憩所の長椅子に並んで座って居る。

神社の境内には千手一族だけではなく領地内の一般市民も混じり、思ったよりも多くの人で賑わっていた。

「もうすぐ年明けかあ……今年も早かったなあ。」

「うん。来年は私たち、もう十八歳だね……」

「そう、だな……」

二人の間に沈黙が訪れる。

しかし、二人の考えていることは同じである。

十二歳のとき偶然森で出会い、十四歳で許嫁になり、そしてついに来年は結婚する十

八歳を迎える。ちょうど一年後、結婚式を行うことになっている。

長かったようで、過ぎてしまえばあつという間だった。

だが、喜びに胸を高鳴らせている仏間とは対照的に、水蓮は再び胸が苦しくなっていた。

・・・傾国の術・・・

十四歳のあの日、母から聞かされた生々しく、おぞましい一族の秘術。

仏間と交わってしまえば、仏間を洗脳する術にかけてしまう・・・

この三年間、仏間が一生自分を愛してくれるならそれでいいと自分に言い聞かせてきたものの、やはり自己嫌悪と不安は完全には払しよくなできなかった。

水蓮はふと、隣に座る仏間の横顔を見上げた。

掘りの深い顔に太い眉毛、力強い一重の大きな瞳、高い鼻、意志の強そうな口元…それから仏間の手に目を移した。関節が太く長い指は男らしく、何とも言えず色気がある。水蓮はその指を見つめながら、自分の胸だけではなく、違う部分まで熱くなるのを感じた。

頭の中で首を振る。

・・・だめ。いけないわ…こんな気持ち・・・

「…ん？どうかしたのか？」

「仏間の白玉団子、分けて♪」

「嫌だよっ！お前のそれ大盛りだろ？相変わらず食いしん坊だなあお前は。肥えるぞ？」

そう言つて汗粉をすすする仏間の横顔を見て、水蓮はなんとか先ほどまでの邪な気持を押し殺した。

・・・ゴーン・・・

また一つ、除夜の鐘が鳴った。

その鐘は、一〇八あるという人間の煩惱を祓う為に鳴らすものだ。一〇八の煩惱の中に、人の心に迷いを生じさせる六つ、『六根』というものがあるらしい。

それは、眼、耳、舌、鼻、身、意（意識）の六つである。

水蓮はその事を思い出し、その六根の穢れが祓われるどころか、鐘の音を聞きながらその六根の煩惱が膨らんでいく自分を嫌悪し、恥じた。

しかし、愛する仏間の隣りに居ると、そこがどんなに神聖な場所だろうとも、いまは煩惱しか生まれないのである。

「いよいよ最後の音だ。年が明けるぞ。」

「うっ、うん。そうだね。」

・・・ゴーン。

一〇八回目の鐘が打たれ、年が明けた。

「明けましておめでとうございます」

二人は顔を見合わせ、にこやかに挨拶を交わした。

「今年はいよいよ結婚だな。忙しくなりそうだけど、よろしくな。」

「うん、よろしくね・・・仏間。」

「・・・？」

仏間は水蓮の様子が少しおかしい事に気が付いた。

「無理して夜中に出て来てくれてありがとうね…。私、どうしても新しい年の最初に会う人は、仏間じゃなきゃ嫌だったの。だから…嬉しい！」

「水蓮……。ああ、俺も嬉しいぞ。」

二人は笑顔を見せ合った後、立ち上がった。

「じゃあ、帰るか。」「そうだね。」

二人は千手一族の集落を出て、芙蓉の家に続く暗い道を歩き始めた。

今度は仏間から水蓮の手を握った。水蓮もその手をぎゅっと握り返す。

ザツ!!

「!?」

二人の前に突然、黒い人影が現れた。

「何者だ!!」

仏間は芙蓉の前に立って庇い、明かりを人影に向けて身構えた。

すると、目の前の人影が露になり、そこには180cmを越える仏間と変わらない、大柄の男が身構えて立っていた。

「フン…男と一緒にとは面倒だが、せつかく見つけた上玉だ。男、お前には死んでもらうぞ。」

「水蓮、ここを動くなよ。」

仏間はそう言うのと明かりを水蓮に持たせ、刀を抜いて構えた。水蓮は驚きと恐怖で声も出ず、ただ仏間に言われる通り足に力を込めて立って居る。

バサツ!!

ガシイインツ!!!

仏間が先に男に仕掛け、その男も即座に刀を抜き、二人の刀がぶつかった。

男が刀を離して空中に飛び上がり、仏間に向けてクナイの雨を降らせてきた。

仏間は刀でそれを全て薙ぎ払った。

「お前…忍か?」

「ああ。千手一族だ。そのチャクラ、お前は千手の忍ではないな。どこから来た?」

「それを知ってどうする。お前はここで死ぬのだ。まあ、そこに居る女を差し出すなら助けてやってもいいがな……」

「なぜこいつを狙っている。言え!!」

仏間の問いに答えることなく、男はその場で印を結ぶ。

「土遁・焦土召還!」

地面が急激に熱くなり、石が焼けて赤く光りはじめた。

「きやつ!」

仏間は水蓮のもとに走って行き抱きかかえると、そのまま片手で印を結ぶ。

「水遁・雲水烈雨!!」

ズアアアアツ!!!

上空から鋭いガラスの破片の様な水の塊が、灼熱の道と男の頭上に降り注ぐ。灼熱に熱された地面からは水蒸気が一瞬立ち上るがすぐに消え、地面の温度は下がってゆく。

仏間は水蓮を離れた場所に座らせると再び走って男へ向かって行く。

男は土の壁を作って仏間の術を防いでいたのだが、仏間の術のほうがり、数本の水の板がその壁を突き抜け男の身に突き刺さった。

「ぐっ……クソツ!!!」

男が腕や足から血を流しながら、土壁の上に上り、再び印を結ぼうとした。

しかし仏間は手裏剣を何枚も投げつけ、それを阻止した。男が手裏剣を防いでいる間に仏間は刀を構えて男の頭に現れ、刀を振り下ろした。

ザシユツ!!!

「ぐああああっ!!!」

男の上半身を切りつけ、男は土壁から地面に落ちて気を失った。

「…口ほども無い。クズがッ!!!」

仏間は倒れた男を見てそう呟くと、急いで水蓮のもとへ駆け寄った。

「大丈夫か?! 怪我は無いか?!」

「…うん…うん…」

仏間は水蓮の身体を支え、ゆっくりと立ち上がらせると水蓮の晴着に付いた土を手で払う。

「着物…汚れちまったな。悪い。」

「…仏間っ!!!」

水蓮は今になって恐怖が押し寄せてきて、震えながら仏間の胸に抱きついた。

「もう大丈夫だ…泣くなよ。」

「怖かった! 怖かったよ!!! …… 仏間! 仏間は怪我してない? 大丈夫?!」

水蓮は顔を上げて涙を浮かべた険しい顔で仏間の顔を不安そうに見つめた。

「ああ。俺は全く大丈夫だ。大した相手じゃなかったしな。」

「……」

その後、すぐに仏間は父の鏡間と上忍たちに報告に行き、男は拘束された。

仏間は男が水蓮を狙っていた理由が分からなかった事、相手が自分よりも格下の相手であった事もあり、男を取り調べる為に敢えてとどめを刺さなかった。

尋問した結果、男は土の国から来た抜け忍だった。

様々な犯罪に手を染め生活しているようだ。水蓮が仏間の家に向かう際、千手一族の集落の入り口で水蓮を見かけ目を付けていたという。水蓮を攫って弄んだあと豪商へ売ろうと考えたらしい。

二人は仏間の部屋で、二つ布団を並べ、揃って横になっていた。

先ほどの事件で当然、すぐに急いで水蓮の両親も仏間の家に駆け付けた。

もう心配は要らないのだが、未だ怯えている水蓮に両親は仏間の家に泊まらせて貰うように言った。水蓮は少し気は引けたが、やはり先ほどの恐怖が消えず、仏間と離れたくは無かった。

許嫁の二人。

当然のように芙蓉の布団は仏間の部屋に敷かれたのだった。

「この距離、意味なくね？」

「うるさい。文句言うな。」

二人の布団の間には、80センチほど微妙な距離が空いている。

「・・・助けてくれて、本当にありがとうね。仏間・・・」

「礼なんて言わなくていいよ。」

「・・・」

水蓮は先ほどの仏間が戦っている姿を思い出す。

・・・あれが忍……。仏間はやはり忍なんだ。私は忍の妻になるのね・・・

そつと仏間の方を見る。

柔らかく温かい明かりに照らされながら仏間は頭の後ろで手を組み、難しい顔をして天井を見上げていた。

「仏間？・・・どうしたの？」

「ん？ああ・・・俺は、駄目な奴だなあつて思つてさ。」

「なんで？」

「お前が何と言おうと、お前を夜中に一人で来させるべきじゃなかった。本当にすまない。お前を危険な目に遭わせたのは俺のせいだ。」

「仏間のせいじゃないよ!!だって、仏間が迎えに来てくれたとしても、その時に襲わ

れていたかもしれないだし……でも、やっぱり仏間の言うことは聞いておくべきだったね。私も、ごめんね……」

水蓮は身体を仏間の方に向け、涙目になって言った。そして、布団から左手を出し、仏間に向かって伸ばした。それを見て、仏間も右手を出してその手を握った。

「…手え、寒いんだけど…もつと、こつち寄れば？」

「んもうっ！」

水蓮はバサツと布団を除けて身体を起こすと、四つん這いになって仏間の布団に這って行った。

「!?」

「ほら、もつと右に寄ってよ。入れないじゃない。」

水蓮は仏間の布団にもぐり込み、身体をぐりぐりと仏間に寄せ、布団の中で自分の場所を確保した。

「…寄れって言ったけど、まさかこうなるとは……」

仏間の心臓が高鳴る。恥ずかしくて水蓮の顔が見れず、それとなく顔を逸らす。

「あのね。実は今夜、お母様には泊まって来いって言われていたの……」

「え?!」

「で、でも…流石にそれは気まずかったから、私は泊まるつもりは無かったの。でも仏間

が家に私を迎えに来たら、母様が『今夜はよろしく』なんて仏間に言っちゃうと思つて……そうになったら泊まらざるを得なくなるでしょ？……だから……迎えに来なくていいつて言つたの。ごめん……」

「そ、そうだったんだ……」

二人は次の言葉に詰まる。

いや、言おうか戸惑つていた。

「仏間……私仏間のこと大好きだよ。仏間は？私のこと、好き？」

「あ、当たり前だろ！……す、好きだ。」

「一生？一生好きでいてくれる？私がどんな罪を犯しても……」

「ああ。俺は一生お前の味方だ。お前がどんな罪人、悪人になろうともな。」

「……嬉しい。」

仏間は身体を水蓮の方に向け、抱き締めた。

「水蓮……」

仏間の抱擁に、水蓮の身体には再び神社で感じた微熱、そして疼きが蘇つてきた。

胸が高鳴り、頭はぼうつとしてきて、このまま仏間に身体を委ねたくなる。

しかし……

『仏間に抱かれそうになったら、拒まず抱かれなさい。一刻でも早く、男を自分の虜、思

い通りに洗脳するのよ。』

十四歳の頃のあの夜、あの母の言葉が蘇ってきた。

一瞬、心臓が止まるような感覚に息が詰まる。

その時、仏間が身体を離し、水蓮の顔を覗き込むようにして顔を近づけてきた。目が合う。

水蓮は思わず目を泳がせ何度も瞬きをしたが、仏間は目を閉じ、水蓮に口づけをした。このまま目を閉じてしまえば、全てが始まり、そして、全てが終わってしまう…。

・・・どうしよう、どうしよう。どうしたら良いの・・・

仏間は水蓮の唇を優しく吸い続けている。

・・・でも、もっと、もっと仏間に触れたい…触れてほしい・・・

抱かれることで仏間を洗脳してしまうことへの恐怖、自己嫌悪、迷い…

しかし、その迷いの中に混じって、確かに水蓮は仏間を求めていた。

気付けば、水蓮は仰向けにされ、仏間は身体を起こして水蓮の寝間着の帯を解こうと
していた。

「仏間・・・」

水蓮はその手を掴んだ。

「去年の夏のこととは本当に悪かったって思ってる。でも、俺は…俺は心からお前を愛し

てる。お前が、欲しいんだ……」

「……うん……私も……」

仏間と水蓮は裸になり、抱き合った。

パチツ……

「きゃっ！」

火鉢の中の炭が割れた音に水蓮が小さく悲鳴をあげ、仏間の背中に回している手に力が入る。先ほど襲われた恐怖が思い出された。

「大丈夫だ。大丈夫だから……お前を誰にも傷つけさせたりしない。絶対に……」

仏間も水蓮の背中をきつく抱き締めた。

「私……昔、仏間の前で、忍なんて嫌いって言っちゃったこと……本当に、ごめんね。凄く反省してる。」

そう言うとき水蓮は身体を離し、潤んだ目で仏間の顔を見上げた。そして続ける。

「仏間はいつも、私の知らない所で、ああやって私たちのことを命を懸けて守ってくれているのに……ごめんなさい。」

そう声を震わせて言うと、両目から涙が零れ落ちた。

「いいんだもう。あの言葉は俺にとつて刃(やいば)だった。あれからいつも、あの言葉を心に突きつけ、忍として何が正しいのか問うて、そして律してきた。俺がここまで忍

として成長できたのも、お前のあの言葉のお陰なんだ。感謝してる。」

仏間はそう言いながら、長い人差し指で優しく水蓮の涙を拭った。

「仏間……」

水蓮は仏間の頭を抱き寄せ口づけた。

これまで一ヶ月、二ヶ月：長い間会えない事は何度もあった。

再会した時はいつも、熱く長い口づけを交わしてきた。

しかし今の口づけは、これまでになく熱烈なものだった。

互いに愛と身体を欲し、そして互いに与え合う。

仏間は水蓮を横たえると、その唇を真つ白な乳房に移した。丸く柔らかい乳房を舌でなぞり、もう片方の乳房を左手で優しく揉みしだく。それから舌と左手の指先を水蓮の乳首に移して愛撫する。

「あつ……あんっ……」

甘い声を洩らし、水蓮は仏間の頭を優しく抱き締めた。

暫くすると仏間は顔を上げ、息を上げて虚ろな目をしている水蓮の顔を見た。

「水蓮……可愛い。いや、綺麗だ……」

そう言うとき度は水蓮の首筋を舌でなぞる。

「あんっあああつ……ん」

水蓮の下腹部は更に熱を帯び、まるでそこに心臓があるかと思うほどに疼く。

堪らなくなつて仏間の背中を抱き締めると身体を起こし、今度は仏間の身体を押し仏間を仰向けにさせるとその上に載つた。

「仏間もとってもカッコいい。本当に素敵よ・・・愛してる。」

そう言うとき水蓮は仏間の耳に、はあ、と熱い吐息を吹きかけた。

「んっ・・・」

仏間が僅かに身悶える。それを確認すると水蓮は仏間の耳を唇で軽く噛み、舌でなぞつた。そのまま首筋に舌を移して上下に何度もなぞつた。

「あっ・・・水蓮・・・」

仏間は水蓮の顎を掴んで引き寄せ口づけをし、自分の身体の上に載る水蓮の滑らかな背中を指先で愛撫した。

「はあっ・・・あん・・・あああっ・・・」

水蓮は快感に思わず唇を離し、身体を反らせた。

その浮いた尻を仏間が両手で鷲掴みにし、まさぐる。尻を押さえつけられた水蓮のへその下に、仏間の固いものが当たっている。

水蓮は右手を伸ばし、その固くなつた男根を握つた。

「仏間、凄いです・・・」

水蓮は母に教わった通り、握った手を動かして固くなったそれをしごき始めた。仏間の男根は更に固く大きくなってゆく。もういつでも中には入れそうだ。

「うあつ……うつ……」

……気持ち良すぎる。このままじゃすぐ出てしまう……

仏間は急いで身体を起こし、また水蓮を仰向けに横たえた。

そしてその両足をもつてゆっくりと開いた。

初めて見る女の秘部は、まるで夏の夕方に咲く、八重咲の酔芙蓉の花の様だった。

仏間はそこへ誘われるように顔を埋めた。

もうそこはじつとりと濡れており、甘酸っぱい香りを醸し出している。頭がくらくらしてきそうだった。だが、なんとか舌で探るようにそこを舐める。

「あつ……んっ……もつと、もつと上……そう、そこ。そこよ、仏間っ……気持ち良い……ハアハアハア……」

水蓮が仏間を誘導し、仏間も探していた地点に辿り着いた。そこを何度も舌で弾き、吸い付く。

じゆるじゆるじゆるじゅ……

思わずいやらしい音を立ててしまい、仏間が焦って顔を上げた。

「……仏間。気持ち良いよ……ねえお願い……きて。」

あれだけ仏間と一つになることを迷っていたはずなのに、気が付けば水蓮は自ら仏間を招き入れようとしていた。

・・・もうどうなってもいい。仏間となら・・・

仏間は少し震えた手で、男根を芙蓉の陰部に当てた。そして上下に動かし、蕩けた蜜が溢れ出している入り口に辿り着くと、恐る恐るそこへ挿入する。するりと龟头がそこへ入った。

「あっ!!!」

「だ、大丈夫か? 痛いかな?」

「大丈夫・・・」

仏間は水蓮の腰を両手で掴むと、更に奥に挿入した。

「ああああっ!!! あんっ・・・」

水蓮は痛みと快感に両手で敷布団を掴んで身をよじらせる。

仏間はその様子を見て、これまでになく興奮してきた。

・・・やっつと、やっつと水蓮は俺だけのものになった・・・

気づけば一気に、水蓮の奥まで貫ていた。

「ああああああんっ・・・んっ・・・ぶ、仏間・・・」

水蓮は少し苦しそうな顔で仏間に微笑んで見せた。

「水蓮ー」

仏間は無心で腰を振る。水蓮の膺がその度に締め、更に腰の動きを速くさせる。もう理性という文字は無い。

ひたすら、これまでずっと夢見て見上げていただけの、憧れの絶頂に向かってゆく。

「あんっあんっあんっ…はあっはあっ…ああああん…」

水蓮にも痛みと共に、痛みより大きな快感の波が押し寄せていた。

「水…蓮…愛して…るっ!!」

仏間は思い切り子宮を突き上げ、その中で射精した。

その瞬間の感覚に、水蓮の快感も絶頂を迎え、仏間の男根を締め上げた。それでもな

お男根は暫くびくびくと波打っている。

水蓮は仏間の顔を、目を見なかった。

しかし、ただ願った。

仏間が今以上に多くの人を守る立派な忍になれますように…と。

おしまい

【 if you XXX No. 2 】芙蓉と樹のすれ
違い

「オシヤレな雑貨屋が出来たんだったよ。芙蓉新しい食器が欲しいって言ってたじゃん。明後日の夕方一緒に行ってみようよ?」

「あ、ごめんね……明後日はうちは私塾の先生方と勉強会があるの。」

「塾は休みなの?へー。皆さん熱心なんだね……」

樹は明らかに不機嫌になっている。

この一ヶ月、芙蓉を何度誘っても断られてばかりなのだ。ようやく今日、買物帰りの芙蓉と三十分ばかり会えたのだが、またも誘いを断られた。

上忍である樹も忙しく、任務で里を不在にすることもあり、なかなか休みが取れず自分自身も芙蓉と予定を合わせるの難しい。

仕方ないと解つてはいても、せつかく自分に時間や休みがある時に芙蓉から断られるのはそれだけで落込む。それが続くと寂しさともどかしさで、つい不機嫌さが表に出てしまうようになっていた。

「今日もこれから扉間さまとお出掛けする予定なの。ごめん、もう行くね。樹ちゃんも風邪引いたりしないようにね。それじゃまた！」

芙蓉はそう言うのと足早に家に向かって坂道を走って行ってしまった。

“風邪引いたりしないようにね”

芙蓉の優しい気遣いも、今の樹には、“また長い間会えないから”と言われている様に感じられてしまう。そして、これから扉間と一緒にでかけるといふ事もどこか許せない気持ちになる。

冷たい冬の風が樹の束ねた金色の髪を揺らし、ぶるつと震えた。

・・・このまま風邪引いちやおうかな・・・

樹は芙蓉の姿が消えた坂道を睨んでいた。



この日、樹は芙蓉に誘いを断られたため、残業をして溜まっている仕事をこなすことにした。

他の秘書たちは合コンがあるとかで、いつものように定時でさっさと帰って行った。

「おっ。いつも定時ピツタリで帰るお前が残業とは、めずらしいのう！台風でも来るんじゃないか？ワハハハ！まだ暫く本部に残っておるか？」

「…あ、ハイ。」

「いま作っている書類を警備部に届けてほしいのだ。そのまま直帰してくれて構わん。頼まれてくれるか？」

「…別に構いませんけど。なるべく早くお願いします。」

樹は柱間の方は見えず、書類を眺めながら明らかに不機嫌な口調で答えた。

「なんだ、なんだ？今日は機嫌が悪いのう！俺で良かったら話を聞くぞ？」

「結つ構です！」

樹は完成した資料を下の階の部署へ届ける為立ち上がり、秘書室を出て行った。

柱間は苦笑しながら不機嫌な樹の後ろ姿を見送った。

十九時前。

樹は柱間から頼まれた書類が入った封筒を手に、足早に大通りを歩いていた。

この日は特に冷える。芙蓉が編んでくれたマフラーをしっかりと巻き直した。

・・・芙蓉、寒がりだから大丈夫かなあ。風邪引かないといいけど・・・

大通りから店の立ち並ぶ路地に入った。警備部の施設まではこの道が近道だ。

ふと大きな窓ガラスに映る自分の姿が目に入った。

気にせずまた前を向いて歩き出そうとした時、目を疑った。

その窓ガラスの向こう、店内で芙蓉が見知らぬ女と二人で楽しそうに話をしているで

はないか。

樹は立ち止まり、窓ガラスに近づいて芙蓉の様子を眺めた。店の中央付近の席に座る芙蓉は全くこちらに気付かない。

「なんで・・・今日は塾で勉強会だつて言つてたじゃん・・・」

芙蓉は向かい合つて座る、自分たちよりも少し年上と思われる二十代後半の女性と何度も笑い合っている。

樹の脈が上がり、拳に力が入る。

店に入ろうとも考えたが、一度目を閉じて俯き、そしてまた前を向くとそのまま走り去つて行つた。



「樹ちゃんー!」

芙蓉が里本部の廊下で樹を呼び止めた。

樹は反射的に振り返つたが、すぐに芙蓉から視線を逸らした。

「樹ちゃん・・・最近家にも来てくれないし、なかなか会えないから心配してたんだよ? 元気だった?」

芙蓉と会う、いや、芙蓉を目にするのはあの夕方以来、一週間ぶりだった。

「・・・うん。どうしたの? 扉間様に何か用?」

「う、うん・・・ちよつと、ね・・・。樹ちゃん、この後時間ある? お昼ごはん一緒に食べない

「？」

「ごめん。忙しいから無理。芙蓉なら、他に一緒にご飯食べてくれる女友達、居るでしょ？」

「え？」

樹は芙蓉に背を向けて足早に歩いて行ってしまった。

しかし、本当は芙蓉に会いたくて堪らなかった。

芙蓉から声を掛けてくれたことも、食事に誘ってくれたことも嬉しかった。そして、先日のことを芙蓉に訊きたかった。しかし訊けなかった。

芙蓉への憤りと、訊きたいことを訊けないもどかしさについ意地を張ってしまった。

秘書室に戻って自分の椅子に座った途端、激しい後悔が襲ってくる。

・・・芙蓉に嫌われたら、どうしよう・・・

肘をついた両手で顔を覆う。

沸き上がる衝動に、気づけば立ち上がり、走って先ほどの廊下へ向かっていた。

・・・もう、居るはず無いよね・・・

樹は先ほどの廊下に着き、先ほどよりも行きかう忍の数が増えている廊下を見回した。しかし、その中に芙蓉の姿は無かった。

樹はさらに激しい後悔に襲われ、両膝に手をつき前かがみになった。そして大きなた

め息を吐く。

暫くして体を起こし、うな垂れたまま、目だけで廊下を見た。

すると、人波が途切れた隙間から、廊下の端の窓際に立っている芙蓉が見えた。

樹は急いで人波をかき分け、芙蓉の所へ向かった。

すると芙蓉も樹に気が付いた。

「樹ちゃん！お仕事は？大丈夫?？」

「・・・うん。ごめん。私・・・あんな事言っちゃって。」

「うん・・・ちよつとびつくりしたけど、大丈夫。でもね、私には一緒に食事してくれる人は居るかもしれないけど、一緒に食事したいお友達は、樹ちゃんしかいないんだよ？」

芙蓉はそう言つて微笑んだ。

「芙蓉！」

樹は人目も気にせず芙蓉に抱き着いた。

「…実はね、樹ちゃんが戻つて来てくれる気がして待つてたの。やっぱり私たち、テレパシーが使えるのかな？フフフ。」



「樹ちゃん、本当にごめんね。嫌な想いさせて…」

「ううん！私が勝手に勘違いしただけだし、芙蓉は全く悪くないのに…私こそ本当にご」

めんね……」

樹は仕事を終え、芙蓉の部屋に来て先日 of 事を打ち明けた。

そして、芙蓉があの日会っていた女性は、今度私塾に新しく入る教員で、塾での勉強会が早く終わり、一緒に参加していたその女性に私塾の話が聞きたいと言われ、あの店に入つて話していたと判つた。

それが分かると、樹は自分の子供っぽさと愚かさに落ち込んだ。

そして芙蓉の前でいま、落ち込みまくっている。

「それにね、最近芙蓉から断られることが多くて、なかなか二人でゆっくり会えないことにイライラしてたんだ……。芙蓉にだつてそう言う時もあるのにさ……。それに扉間様と暮らして居たら尚更だよ。ほんと、ガキっぽくて自分が情けないよ……」

「そんな顔しないで！ 樹ちゃんの気持ち、よく理解できるから。私も樹ちゃんとすれ違えばかりで、なんとなくイライラしてたもん。もう！ なんて会えないのおーつて！」

「え？ ほんとに？ 芙蓉でもそんな風に思うの？！」

芙蓉は天然な性格ゆえに、人を和ませ愛される反面、時に人を笑顔で傷つけてしまう所が唯一の欠点であると樹は思っていた。

それ以外は嫉妬したり、苛ついたり、恨んだり嫌つたりしない、聖女のような女性だと思つていた。しかし、芙蓉でも、正当な理由に対して個人的な感情だけでイライラす

ることもあるのだと、驚いた。

「アハハハ。思うよ？どうでもいい事、どうでもいい人に対しては『仕方ない』で終わるけど、大切な人の事になると、頭では理解できるんだけど、心はイライラしちゃうんだよね…本当はそんなのダメなんだろうけど。」

「芙蓉・・・」

樹は、芙蓉も自分とまったく同じ心と思考回路を持っていることに嬉しくなった。

そして芙蓉にとって自分が他の誰よりも特別な存在であり、理性や正当性よりも感情が先立つほど情を注いでくれていている相手であることに感激した。

「だって私、樹ちゃんのこと、だーい好きなんだもん!!」

そう言って芙蓉は樹の胸に抱き着いた。

『樹ちゃん大好き』・・・

樹にとって昔から最強の言葉だ。

その言葉に喜びが溢れ、励まされ、底知れぬ力を貰った。

また時には、怒りを収め、悲しみを隠し、耐え、目をつぶったこともあった。

そして、時には・・・

愛情の奥にある、欲情が引きずり出されるのである。

樹は芙蓉の顎をそっと支え、顔を上に向かせると、何も言わずに口づけをした。

芙蓉もそつと目を閉じ、その優しく甘い感覚に浸っている。

「芙蓉、愛してるよ。」

「…今日は扉間様、会食があつて夜遅くなるの…」

それを聞くと樹は、芙蓉を抱きかかえ寝台に運んだ。

芙蓉は抱きかかえられながら、樹の美しい顔を見上げ、まるで絵本の中に出てくる白

馬の王子様のようなだと思ひ、うつとりとした。

樹は芙蓉の頭を支え、ゆつくりと横たえた。

そして左手を芙蓉の頭の上につき、右手で芙蓉の左手を握り締めながら口づけをす

る。

チュツチュツとわざと可愛らしい音を立て、芙蓉の唇を吸う。

「…フフツ。」

唇が離れ、樹と目が合うと芙蓉が笑った。

樹はその少女のような顔を見て愛おしさがこみ上げ、両手で芙蓉の顔を優しく包み、

確かめるようになぞった。芙蓉は快感でぶるつと小さく震え、目を閉じる。

それを見た樹は芙蓉の腰紐を解いてスカートを脱がせ、上着の薄手のセーターを脱がせた。純白の絹の下着で支えられている白い胸は、しっかりとした谷間が出来ている。樹はその谷間に顔をうずめ、舌で優しくなぞる。

「あんっ……」

芙蓉の甘い声が洩れると、今度は下着と胸の境目を舌で丁寧になぞってゆく。気持ちは良いのだが、芙蓉はその行動がじれったく感じてしまい、更にその先を期待する。

そしてやつと下着のホックが外され、芙蓉の白い胸が露になった。乳首は赤く、固くなっている。樹も自分の服と下着を脱ぎ、裸になった。

そして樹は芙蓉の乳首をそつと撫でた。

「もうこんなに固くなってる……」

「樹ちゃん……」

ねだる様に自分の名前を呼ぶ芙蓉は可愛らしい。芙蓉の左乳首に吸い付いた。

「ああああっん……」

口の中で芙蓉の乳首を弄びながら、もう片方の乳首を右手で愛撫する。

「あつあつあつ……あああんっ……いやあ……」

芙蓉がいつてしまいそうになるところで止める。

そして芙蓉の腹からへそ、そして下腹部までを一直線に舌で舐める。

ハアハアと芙蓉の息は上がり、腹も上下している。

下着の上から芙蓉の股間の堅い部分を何度も舌で刺激すると、その度その部分は固く

膨らんでいく。芙蓉の純白の下着が自分の唾液で汚れる様を見て、樹は更に興奮する。そして下着を脱がせ、股間をじゆるじゆると音を立てて吸い始めた。

「やつ・・・樹ちゃん、恥ずかしいっ・・・ああんっ・・・」

「芙蓉は本当に恥ずかしがり屋だね。そこも可愛いけど。もつと恥ずかしくしてあげるよ・・・」

そう言つて芙蓉の膝を立て両足を思い切り開くと、膣の中に舌を入れる。

「んっ・・・!!!」

芙蓉は男根とは違う挿入の感覚に痺れる。膣がきゅつと締まり、樹の舌を押し戻す。それでも樹は構わず舌をねじ込み、刺激する。

「あんっあんっあああ・・・もつと、もつと奥までして!」

そう言う芙蓉のいやらしく歪んだ顔を見ると、樹は少し不敵に微笑んだ。

・・・今、紛れもなく、芙蓉は私だけのもの。私を欲しがってる・・・

樹は左手で芙蓉の腰を掴むと、右手人差し指と中指を芙蓉の膣の中にゆつくりと入れた。そしてゆくりと出し入れを繰り返す。

「はあ・・・っ・・・ああああんっ!」

膣の中央あたりに指がたどり着くと、芙蓉の腹側に指を曲げ、その部分を刺激した。

「あああああっんっ!!!」

芙蓉は大きく腰を逸らせ、身悶える。

「芙蓉、すつごくいやらしくて、恥ずかしい顔してるよ……」

「やだっ……やめっ」

「だめ、もつともつといやらしくならないと……ね？最高に気持ちよくしてあげる。」

無意識に動いてしまう芙蓉の腰をぐつと抑え、その部分を更に激しく刺激する。

「あああああつん!! あんあんあんあつ……もう、だめえ!!! いっちゃうよお!!」

樹は左手で芙蓉の乳房を鷲掴みにして揉みしだきながら、更に芙蓉を追い詰める。

「ああ、なんていやらしい子なの……恥ずかしいね、芙蓉?」

「樹ちゃん! 樹ちゃんつ!!……あああああつんつ!!……」

芙蓉は樹の名前を何度も叫びながら激しく果ててしまった。

息を切らし茫然とする芙蓉の唇に、樹はそつと口づけをする。そして自分も芙蓉の隣

りに横になり、芙蓉を自分の胸に抱き寄せた。

暫く呆然としていた芙蓉が、おもむろに、樹の乳首に吸い付いた。

「あんっ……」

樹は声を洩らすと、自分の乳首を優しく吸い続けている芙蓉の頭を優しく撫でた。

「樹ちゃん、気持ち良い? 私、下手でごめんね」

「そんなことない。すつごく気持ち良いよ……最高。」

芙蓉は起き上がり、横になっていた樹の身体を仰向けにし、その身体にまたがって乳首を吸い始めた。

樹は快感と愛おしさに、その芙蓉の背中に手を回して優しく愛撫する。

「……あんっ……」

樹の愛撫に感じてしまい、芙蓉が乳首から口を離し、軽く身悶えた。

「芙蓉、続けて……ほら。」

そう言つて芙蓉の頭を再び自分の胸に近づけた。そして芙蓉は、舌でチロチロと子猫の様に樹の乳首を舐め始めた。樹も芙蓉の性感帯である骨盤周りを優しく愛撫する。

芙蓉はその快感に体をピクンピクンと動かしながら、必死に舐め続けている。

「可愛い……本当に可愛いよ……芙蓉。」

樹は身を起こし、股の間に芙蓉を座らせた。そして自分は両手を後ろにつき、胸を張った。

「私の可愛い芙蓉……もつと可愛いところ、私に見せて。」

芙蓉は少し恥ずかしそうに微笑んだ後、左手で樹の乳房と乳首を触りながら、右手は樹の股間に伸ばし、固く勃起した部分を擦り始めた。

「私、樹ちゃんが気持ち良くなるためなら、なんでもするよ……?」

「ああっ……芙蓉……あんっあんっああああ……」

芙蓉は片方の乳首に吸い付いた。樹の感じる部分三か所を同時に刺激する。

「はぁぁんっ……芙蓉っ愛してる!!! ……あぁあぁあぁあつん……!!!」

樹は芙蓉の拙い愛撫であつたという間に果ててしまった。

二人は横たわり抱き合った。

「芙蓉……ありがとう。すっごく気落ち良かったよ……ああ、幸せ……」

「ホント？ 私、樹ちゃんの為にもっと上手になるね！」

「ふ、芙蓉……ありがとう!!愛してる!!!」

樹は芙蓉が自分への愛情表現の為に努力すると言つて貰えて、この上なく幸せを感じていた。

間違いなく、いまは、芙蓉は樹だけのものだった。

二人はいつの間にか眠っていた。気が付くと、もう二十時半を過ぎていた。

「うわっ！ごめん！寝すぎちゃったね。」

「うん。でも気持ち良かったし……扉間様も遅いし大丈夫だよ。お腹空かない？簡単な物しか作れないけど晩御飯作るから食べて帰って。」

「わーい！ありがとう♪」

ガラ!

「帰ったぞー。……ん、樹が来てるのか？」

一階の玄関の扉が開き、扉間の声が聞こえた。

「うっそ、マジ!!ちよ、早く服・・・」

「は、はい!お帰りなさいませ、扉間さま!いまちよつと手が離せないの、暫くしたら下に下りますね!」

「?・・・。ああ。」

トントントン・・・

階段を上がつて来る扉間の足音が聞こえる。

二人は音を立てないように、必死に急いで服を着る。

「まったく、くだらん会食だったぞ。お前のことも気になるし、早く切り上げてきた。」

芙蓉の部屋の前で立ち止まった扉間が、扉越しに話しかけてきた。

二人はビクツ!!とする。

「あ、あらあら。そうなんですわ・・・あは・・・それは大変でしたわ・・・」

服を着ながら芙蓉がなんとかそれに返事をする。

・・・早く帰ってくんじやねえよ!!!馬鹿つ!!!

樹は心の中でそう叫びながら、なんとかズボンを履き終えた。

「・・・?」

扉間はなんとなくいつもと違う雰囲気を感じつつも、自室に入り着替えを始めた。

「で、お前はいつから家に来てたんだ？」

「ええ、あ、仕事定時で終わってすぐ来たんで、十七時半くらいかなあ……」

「飯も食わずにこんな時間まで二人で何をしてたんだ？」

台所に立ち、鍋でうどんを茹でる為の湯を沸かしている芙蓉と、扉間と向かい合って座っている樹が同時にドキッとすする。

「じ、実は、二人で部屋で話してたら途中から眠たくなってきたって、お昼寝しちゃってたんです……あはは……私たちは最近疲れのみたいで。あ、扉間さまはいつも通り、うどんは柔らかめで良いですよ？ 樹ちゃんは固めだっけ？ コシがあるのが好きなんだよね？」

芙蓉がなんとか誤魔化した。

「ああ。いつも通り、腰砕け（コシが限りなく無い柔らかい麵・九州地方でよく食べられている）で頼む。」

「扉間様って腰砕け派なんだあ〜フフツ！ お子ちやまだなあ〜！ ていうか会食してきたのにまだ食べるんですか？」

「黙れ。自分の家で何を食おうがお前に関係無い。文句あるなら今すぐ帰れ！ 会食なんてのはな、会話と酒がメインでじっくり食事などできんのだ。」

「でも、忍で『腰砕け』とか、なんか縁起悪い。クククツ……」

「なんだと、てめえ・・・」

「もう二人共！仲良くして！樹ちゃん、扉間さまはうどんは腰砕け派だけど、扉間さまの腰はすつごく強いんだから！」

「・・・・・・・・・・」

「…ん？二人共どうしたの？なんか顔が赤いけど？」

扉間と樹は顔を少し引きつらせながら、ううんと首を振って笑顔を見せた。

・・・芙蓉、天然すぎっ!!!

おしまい

「 if you XXX No. 3 【マダラと一緒に
お風呂タイム

「えっ！脱衣所まで一緒なんですか!!」

「当然だろ。一緒に風呂に入るんだぜ。」

芙蓉は先ほど、自分が柱間と扉間の許嫁である（あつた）ことをマダラに告白した。

「これまでそれを黙っていた罪滅ぼし（？）で、今夜はマダラと一緒に入浴することになったのだ。」

「いや、それは、湯船に入るといってお約束だったはずじゃ・・・」

「つべこべ言うんじゃないやねえ！早く脱げ！腕がねえんなら俺が引っぺがしてやるぞ。」

「わ、分りました。じゃあ、マダラさまは向こうを向いて脱いでください。私もあつちを向いて脱ぎますから。」

「それじゃ意味ねえだろ！あーもうホント頑なだな。往生際が悪いぞ！」

そう言うときマダラは芙蓉の腰紐に手をかけ、解き始めた。

「止めて下さい！自分で脱ぎますからっ！きやつ！」

帯が解かれ、スカートが床に落ち、下半身が下着姿になってしまった。

「フン。じゃあ代わりに俺の服を脱がせろ。」

「いや、代わりにっていう意味が分かりません!」

「罪滅ぼしするんじゃないかなかったのかあ?俺はお前が柱間と扉間の許嫁だったこと、シヨックだったなあ、傷ついちゃったなあ……」

「……。わ、わかりました。」

フンと勝ち誇るマダラの帯を芙蓉が解き始めた。

帯が外れ着物がはだけると、素肌の胸が覗く。

そしてマダラの後ろに回り、着物の腕を抜き、脱がせた。

「ほら。最後は前からだぞ。」

「え!!無理です!無理です!」

「笑く蓉く許く嫁く……」

「ああもうっ!分りました!!」

芙蓉は渋々マダラの前に回り、目を閉じて下着を下ろす。

「目えつぶんな!いつも見てんだろーが。ったく!」

「だって、それはそういう時だから……」

「今もそういう時だぞ?」

「えっ?」

驚いて目を開け、見上げた先には、マダラの大きくなつた男根があつた。

「……」

「いやいやいや!なんで目え逸らすんだよ!!」

芙蓉は床に目を逸らし、顔を真っ赤にしている。そして勢いよく立ち上がると、後ろを向いて自分の服を脱ぎ始めた。そして裸になつた。

「お先に入ります。」

そう言いマダラから顔を逸らしたまま、そそくさと浴室へ入つてゆく。

「チィ……つたく。」

マダラは頑なな芙蓉の背中を見ながら小さく溜息をついた。

しかし、お楽しみはこれからだ。

マダラも着物を拾い籠に投げ込むとゆつくりと浴室に入つて行つた。

芙蓉は既に体を流して湯船に漬かっている。

「おい、それ息できてんのか?」

芙蓉はなんとか口が見え隠れするくらい、深く湯船に浸かっている。

「できて……まふ……ブクブクブク……」

「ブツ!喋れてねえーし。ハハツ!まったくよお、お前、なんでそこまで恥ずかしがるん

だよ？ んん？」

マダラはしやがんで身体を流しながら、笑いながら優しく言った。

「ぶはっ！・・・だって・・・恥ずかしいものは、恥ずかしいんですもん。それ以上でも以下でもありません。」

芙蓉は少しいじけて、上目遣いでマダラの顔を見ながら答えた。

マダラはその顔を見てフツツと笑うと立ち上がった。芙蓉は反射的にさつと顔を逸らす。そしてマダラは湯船に入ろうと片足を漬ける。

「おっ。いいカンだなあ。」

「ええ・・・」

ザパン・・・

マダラが湯船に浸かると湯が溢れて流れ出た。湯気が立ち上り、一瞬互いの顔が見えなくなる。

「お前も足伸ばせよ。広えんだから。」

「大丈夫です・・・」

「んじゃあ・・・」

マダラはそう言うと言と芙蓉の両手を引っ張って自分の股の間に引き寄せた。

「・・・」。ひ、広いですから、こんなに近づいて入らなくてもいいのでは？」

マダラの股の間にちよこんと収まった芙蓉はもつともらしい理由を言った。マダラはそんなことはお構いなしに、伸ばしていた足を芙蓉の身体に絡ませる。

「さつき、今もそういう時」って言ったよな。今日はここでするぞ。」

「えええーっ!!む、無理ですっ無理です!私、もう出ますっ!」

芙蓉は焦つて立ち上がろうとしたがマダラの足が更にぎゅつと絡みつき、動けない。

「一緒に風呂に入るってのはそういう意味だつて分んだろ普通。ああ?」

「分りません!」

「分れ!」

「嫌です!」

「そういうもんなんだつ!」

「絶対に違いますっ!!」

「あーもーホント頑なだなあお前は!」

そう言うのとマダラは芙蓉の頭を引き寄せて唇で芙蓉の口を塞いだ。

マダラは強く芙蓉の唇を吸い、無理やり舌を入れ、絡ませる。

「んんっ・・・んんっ・・・」

少々強引でも、こうしてマダラに口づけをされ、温かく柔らかかで蕩けるような感触にふれると否応なしに「スイッチ」が入ってしまう。芙蓉は脱力しその感触と自分の下

腹部がじんわりと熱くなってゆく感覚に浸った。

マダラは芙蓉が自分に身を委ねたのが分ると口を離し、芙蓉の顔を見た。

目はトロンとして、先ほどまでの口づけを名残惜しそうに、そしてその先をねだる様にマダラを見つめている。

マダラは湯船に浸かっている芙蓉の両胸に手を遣り、揉み始めた。指先が乳首に移り、弄ぶ。

「あつああんっ……」

温かいお湯の中で触られる感覚はいつもとは違う。身体が温まり柔らかくなっているせいなのだろうか、ずつと敏感になっっている気がする。

目を閉じて眉を寄せ身悶える芙蓉の耳元でマダラが囁く。

「……したく、なってきただろ？」

「っ……」

否定したい。したいのだが、出来ない。

……したい。

その気持ちの方が高まり、風呂場で行為をする恥ずかしさと背徳感は、次第に湯けむりに霞んでゆく。

芙蓉の返事は待たず、マダラがそのまま芙蓉の首筋に唇を這わせる。

チュツ・・・チュツ・・・チュツ・・・

「あつ・・・あつ・・・あつ・・・」

首を一周、優しく吸われて芙蓉は身体が次第に痺れてゆく。マダラの右手が乳首から芙蓉の股間に伸び、膣の入り口に指を少し入れた。

「トロトロだな…湯の中でも分るぞ。」

「やつ、やだもうっ・・・」

芙蓉は恥ずかしがって大きく顔を逸らした。

ザパン・・・

その音に芙蓉がマダラの方を見る。

マダラは立ち上がると檜の浴槽のふちに腰かけた。芙蓉は再び顔を逸らす。

「だから目え逸らすなって！」

「・・・。」

「ほら、いつものようにしてみろよ。」

「えっ！・・・は、恥ずかしいです・・・」

「この期に及んでまだ恥ずかしがるのかよ。まったく・・・」

そう言いつつも、マダラは芙蓉が顔を赤らめてまで恥ずかしがる様子に興奮する。

そして、もつといじめてしまいたくなる。

支配欲。

芙蓉から柱間と扉間の許嫁であることを聞いた時、正直一瞬だけ怒りを感じた。

しかし芙蓉にああ言ったのは嘘ではない。自分も芙蓉と同じ立場ならそれを隠したはずだ。勿論芙蓉を責める気持ちは無い。

それどころか、今は言い知れぬ優越感を感じている。

そして、これまで以上に芙蓉のすべてを支配してしまいたいと思った。

「お前は誰のものだ？」

「……マダラさまです。」

芙蓉は俯いて答えると、ずっと消えないマダラへの罪悪感が、再び胸を締め付けてきた。

「……マダラさまは私を許してくれた。罪滅ぼし……こんなことで罪滅ぼしになるなら……」

芙蓉は腰かけているマダラの股の間に入り、両手でマダラの男根を掴んだ。そしていつもの様にしごき始めた。

「……お前のその乳も俺のもんだよな？」

「……？は、はい。」

「じゃあ、俺の好きなようにしてもいいよな？」

「……………」

芙蓉は少し怯えた顔で何度も瞬きをした。

「返事はどうした。」

「は、はい……………」

いったい何をされるのだろうか…。不安がよぎる。

マダラは浴槽の近くに置いて在った石鹸を手を取った。そして芙蓉の胸の谷間に入る。

「!!」

芙蓉はその冷たさと、ぬるつとした感触にビクツとした。

マダラはゆっくりと石鹸を芙蓉の谷間で上下させて擦りつけ、次に芙蓉の首の付け根、首筋となぞってゆく。

「……………んっ……………あっ」

「気持ち良いだろ……………」

「……………はい……………」

石鹸が芙蓉の胸元に戻り、芙蓉は目を開けてそつとその様子を見た。

マダラは石鹸を元の場所に戻し、石鹸のついた芙蓉の胸を揉み始めた。

「ああんっ!」

何とも言えない快感に芙蓉は身悶えた。マダラは泡だった手の掌で乳首を転がす。
「やあつああん・・・あんつあああ・・・」

これまでに感じたことが無い愛撫の不思議な快感に、芙蓉は果ててしまいそうになる。その瞬間、マダラは胸を鷲掴みにしたまま手を止め、芙蓉に口づけをし、それから芙蓉の目を見て言う。

「これで、俺のを挟むんだ。」

「えっ・・・」

芙蓉は思わず、泡の付いた自分の乳房とマダラの男根、両方を見た。そしてマダラの顔を見るとマダラは少し意地悪そうな顔で微笑み、目と口角で催促をしている。

芙蓉は自分の両方の乳房を下から手で抱えた。

そしてゆっくりとマダラに近づき、根元から挟んだ。

戸惑いながら上目遣いでマダラを見上げる。

「どうすれば、俺が気持ち良くなるか、分るよな。」
「・・・」

芙蓉は自分の胸の谷間に視線を落とし、見つめる。そしておもむろに両方の乳房を揉むようにして挟んだマダラの男根を、ゆっくりとしごき始めた。

「・・・そうだ・・・上手いぞ・・・芙蓉」

マダラは芙蓉の頭を優しく撫でながら、快感に目を細める。

芙蓉もぬるぬるとマダラの男根と自分の乳房が擦れる感覚、そして自分で乳房を揉む感覚に快感を感じて膣の奥がぎゅっとしまる。これまでにない新しい快感だ。そして、目の前で自分の乳房に挟まれてマダラの男根がしごかれている様は、言葉では決して表現してはならないような、禁断の光景に見える。

いけないことをしているような感覚に、マダラに許嫁の事を隠し続けていたときの罪悪感が重なりチクリと胸が痛む。それをかき消そうと、芙蓉は初めての快感とマダラを気持ち良くさせることに集中し、乳房と身体を必死に動かした。

「……ああ……いいぞ、芙蓉……」

するとマダラは乳房を握る芙蓉の手を掴んで固定すると、自ら腰を動かし始めた。男根は芙蓉の胸の谷間でスルスルとよく滑り、あつという間にマダラの快感が頂点に向かっていく。一層腰の動きが速くなる。

「ま、マダラさまっ……」

芙蓉の戸惑い震える声は今のマダラには聞こえない。

……ドピュツ……

「っ……っ!!」

芙蓉は突然のことに目を閉じたが、顔に温かくねっとりとしたものがかかった感触に

直ぐに目を開ける。

そして大きく目を見開き、ぱちくりと瞬きをしながらマダラを見上げた。

その様子は本来、とてつもなくいやらしいはずの光景なのに、自分の精液がべつとりとかった芙蓉の表情は豆鉄砲を喰らった鳩のようで、マダラは思わず笑えてきた。

「っ……く……っ……」

自分の顔を見ながら笑いをこらえているマダラに反し、芙蓉は今の状況に至る経緯を思い出してしまい、あまりの恥ずかしさに顔を赤らめて俯いた。

マダラはその顎を持ち、芙蓉の顔を上げさせる。

「いや……悪い悪い。お前、いい顔してたぜ」

そう言うのと芙蓉に口づけをし、舌を入れて優しく絡ませる。

芙蓉は、先ほどもまでの新しい快感を、今感じているいつもの愛おしい快感に重ねてみる。身体は自然と痺れてゆき、湯の中でも自分の膣が更に濡れていくのが分かった。

「今度はお前のことも、たっぷり気持ち良くさせてやる……」

そう言うのとマダラは芙蓉の両脇を持ち、立ち上がらせた。

バシヤツ……

芙蓉が立ちあがると同時に浴槽の外にお湯が飛び散り、湯気が立つ。

マダラも立ち上がり芙蓉と向かい合うと、おもむろに芙蓉の両肩を掴んで後ろに向か

せた。

「なっ・・・まさか、ここ（湯船）でするんですか!？」

「決まってるんだろ。ほら!」

「やっ!」

マダラは右手で芙蓉の頭を押し、左手で芙蓉の腰を掴んで前屈みにさせた。そして右手を芙蓉の股間に移し、膣の入り口に指を這わせた。

「フフツ。芙蓉：お前だつてすつかり準備万端じゃねえーか。」

「ちっ、違いますっ!!やめてっ!恥ずかしいっ」

「違わねえだろ!今更恥ずかしがんなっ」

「!?! あああっんっ・・・!いやあ・・・んっ!」

マダラは後ろからぐいと芙蓉に挿入した。とろりと蕩けた芙蓉の膣の中にするりと入り、あつという間に根元までしつかりと入ってしまった。

「嫌じゃねえだろ。これが欲しかったんだろ?んん?ほら!どうなんだよ!」

「・・・。」

「頑なところも悪くないが、たまには素直にならねえと可愛くねえぞ!」

・・・可愛く、ない?・・・

芙蓉はその言葉に反応してしまった。

愛するマダラに可愛げが無いと思われたくない。

「・・・ほ、欲しかった・・・ですつ・・・マダラさまのが・・・」

「良い子だな。よし、褒美をやるぞ」

マダラは芙蓉の腰を両手で掴み、芙蓉の腰、自分の腰両方を動かし、ぶつける。芙蓉は浴槽のふちに両手で捕まり、されるがままである。

パンパンパンパン・・・

「あんっあんっあんっ・・・」

二人の身体がぶつかる音に合わせて芙蓉が喘ぎ声を洩らす。

いつもと違う場所、違う態勢、違うシチュエーション・・・

芙蓉は快感に悶えながら、ふいにマダラの方を振り返ってみた。

マダラにはその顔がもつととしてくれとねだっている様に見えた。

「これが気に入ったか？」

「・・・はい・・・」

マダラは芙蓉の腰を強く掴んで固定し、自分の腰を素早く動かし始めた。

何度も子宮口まで突き上げられ、かき混ぜられる快感に、芙蓉はだんだんと頭が真っ白になってゆく。

「はあっはあっはあっ・・・あんあんあんあああっ!!!」

「今度はお前の中で出すぞ！」

二人は同時に果ててしまった。

暫くその体勢で余韻に浸ったあと、マダラは芙蓉を後ろから抱きかかえると一緒に湯船に浸かった。

ザパ——・・・

ゆつくりとお湯が湯船から溢れ出てゆく。

だが、お湯はすっかり冷めており湯気はもうほとんど上がらない。

しかし二人の身体は十分すぎるほど温まっていた。

「良かっただろ？」

「……………」

マダラが後ろから芙蓉の肩に顎を載せ、顔を覗き込むようにして訊いたが、芙蓉は頬を膨らませて反対側に顔を逸らした。

「チイ！せつかく素直になつたと思つたのに。やっぱ可愛くねえな！」

「……………だつて……………やっぱり恥ずかしいんだもん……………」

「慣れるって！」

「え！またする気ですか!!」

「当然だろ？一回で罪滅ぼしが終わると思つてたのか？許嫁を黙つてたんだぞ？そんな

デツカイこと、たった一回で許せるかよ。ハハハハ！」
「・・・本当に・・・ごめんなさい・・・」

芙蓉は潤んだ目でマダラの方を振り返り見上げた。

「じよ、冗談だ！・・・おいっ！泣くな！」

「本当に？本当に許してくれますか？」

「・・・ああ。さつきも言っただろ。俺がお前でも同じようにしていた。それにお前は今日正式に許嫁を解消してきたんだろ？もう何も問題無い。」

「でも、柱間さまとマダラさまは・・・その・・・」

芙蓉は俯き、お湯の中で自分の腹に回されているマダラの腕を見つめた。

「お前が気にすることじゃねえよ。柱間との友情と、お前との関係は別だ。柱間もそれは解っている。馬鹿な奴だが、それが解らねえほど愚かな奴じゃねえよ。」

「はい・・・。」

「・・・そうね。そうようね。柱間さまは本当に立派で優しい方だもの。きつと解つてくれるはず・・・」

芙蓉はマダラの腕をぎゅつと握った。

どうか自ら選んだ道が許されますようにと願いながら…。

お
し
ま
い

木ノ葉の里に観光協会を！

木ノ葉の里が設立して二年が過ぎ、里も安定し、繁栄を迎えていた。

これまで人の往来というと、行商や交易、そして他里からの忍の視察が大半であり、「観光」という目的で訪れる人は少なかつた。

しかし最近は様々な施設が整い、楽しめる場所や見物できるものも増え、観光目的で訪れる一般人も増えてきていた。しかしこれらの観光客の一番の目的はやはり、千手一族とうちは一族が手を組んだという証拠をこの目で見ようという目的が多いようである。

そこで木ノ葉本部では、それらの観光客が木ノ葉の里で安全に過ごし、楽しみ、多くの買い物をして、そして里創設について知って貰うため、『観光協会』の設立が検討されていた。



「はあー…まだまだ里作りの実務で忙しいってのに、観光協会だと？もう少し後でも良
いんじゃないの？。俺は今はまだ、里の基礎固めのために一丸となって臨む時期だと

思うがな。」

「マダラ、そうは言うが、現にもう一般人の観光客日に日が増えてきておるのだ。やはりその者たちの為の組織が必要ぞ。客人は大いに歓迎し、もてなさなければならん!」
「そうだ。観光目的の者たちは里に金を落としていく。その事によつて里はますます栄え、人々の生活も豊かになる。そして里本部の活動資金にもなるのだ。観光客を軽視するわけにはいかない。早急に対処せねばならん。」

マダラは柱間と扉間の意見に再び大きなため息をつき、椅子の背にだらりとまたれ掛かつて天を仰ぐ。

「また金かよ…金はうちは一族の賞金稼ぎと火の国からの任務でかなり稼げてるはずだがなあ…。まあだが、お前らの意見も理解できる。観光協会設立に反対はしない。だが、誰が主導してやるんだよ?俺たち三人共そんな暇ねえだろ。」

三人はうーんと考え込む。

「上忍の誰かに…」

ガチャツ! ドン!!

「ハイ!! それ、私がやりまーす!」

突然、火影室の扉が開いて勢いよく樹が入ってきた。

「お前、立ち聞きしていたのか?! マジで査定下げるぞっ!!」

扉間が樹に向かって怒鳴るが、全く悪びれる様子もなく樹が言う。

「私、秘書室の室長ですよ？ご用件でここに来たらたまたま聞こえただけですう」

「ていうか扉間お前、感知出来なかったのかよ。ククツ…」

「いやっそれは…今チャクラを練っていないだけだ。」

「出た！『今チャクラ練って無いから』発言ーっ！感知の扉間って呼ばれるくらいなら、常にチャクラ練つとくべきじゃないんですかあ？ねえマダラ様？」

「そうだな。その通りだ。」

「ぬああにいいく!!お前らあーっ・・・」

「こ、ここらこら！いきなり喧嘩を始めるでないぞ！樹は秘書室長だ。別に立ち聞きするつもりではなかったのだろう。で、本当におぬしが観光協会設立の主導してくれるのか？樹よ。」

「はい！もちろんです。私にお任せください！」

樹とマダラVS扉間で睨み合っていた三人だが、柱間の言葉に樹が一抜けして柱間の前に身を乗り出した。自信満々の顔である。

「そ、そうか。では任せるとしようぞ！まずはおぬしの他のメンバーの人事案を作ってくれ。そうなの…まずは四く五人位か？」

「上忍を五人もかよ!!ただでさえ上忍不足なんだ。二人も居ればいいんじゃないの？」

「いや全員が上忍である必要性もないぞ。樹が上忍なのであれば他は中忍でよいのではないか？」

「ハイハイハイ！思うんですけど、やっぱり一般人を一人、メンバーに入れた方が良いと思うんですよ。ここは忍だけの里じゃないわけでしょう？それに観光客のほとんどは一般人なわけですから、やっぱり一般人の視点が必要だと思うんですよ。」

三人は確かに、という顔をする。

「確かにそうだ！流石は樹！良い事言うのう。ワハハハ！では一般人を含めた人事案を楽しみにしておるぞ。」

樹は火影室の扉を閉め、ウシシシと笑んだ。

・・・やった!!狙い通り観光協会設立決定!!

でもまさか主導役になれるなんて、それは超ラッキー♪・・・

樹は鼻歌を歌いながらスキップをして秘書室の前を通り過ぎて行った。



「えー…なんで俺が？これ以上忙しくなるの嫌なんだけど…」

「千手代表が私だから、アンタはうちは代表つてことよ。それにアンタは上忍になったばっかなんだから、実績を作らなきゃ。」

「…まあ、確かに。それに火影様と扉間様、そしてマダラ様も推している重要案件なら絶

対に成功させないとな……」

「それで、やる？やらない？」

「フンツ！仕方ないな……やってやるよ。こんな重要な事、アンタだけに任せられねえしな。」

「よしじゃあ決まりね！芙蓉も喜ぶわ〜」

「おい、そうやって先生の名前を簡単に使う……」

「芙蓉もメンバーだよ？」

「え!!な、なんでそれを早く言わないんだよ!!」

「だって、芙蓉がメンバーって言ったらアンタ、やりたくなくてもやったでしょ？そんなんじゃ困るんだよね。里の忍の大半が、たかが観光協会って思ってるけど、里の発展に関わる重要な事なんだ。それを解って無くて、色恋だけでやられちゃ困るからさ。」

その言葉を聞いてカガミは下を向いて頭を掻く。

「確かにまあ……芙蓉先生が居るなら二つ返事でOKしてたかもな……でも先生は関係無く、観光協会設立は重要だと思うぜ。観光客が里で金を使えば里の経済は潤う。一度だけではなく何度も里に来て貰うためにも、しかもてなさねえとな。」

「アンタ、良く解ってんじゃない！流石芙蓉の教え子、扉間の弟子だ！アンタを選んだ私の目にも狂いは無いってことね。フフツ。」

樹は考えていた以上にカガミが賢く、先見の目をもつ立派な忍だと感心した。そして嬉しくなつてカガミの頭をクシヤクシヤと撫でた。

「や、やめろよっ! ガキ扱いすんな。」

「まだ十五歳じゃん。それに私よりまだ背え低いしねー。アハハハ。」

「背は関係ない。俺はもう上忍だ。まあ背丈の事をからかえるのもあと僅かだろうし、今のうち好きだけ言えればいいさ。」

・・・か、可愛くないなあ・・・



「うちはカガミ、猿飛ヒルゼン、…んっ? 橘…芙蓉!」

観光協会設立メンバー案を読み上げていた柱間と、それを聞いていたマダラと扉間が驚いて一斉に樹の方を向く。

「何か、問題でも?」

「い、いや、何も問題など無いぞ…だがそうなると…やはり…」

柱間が何か言いかけると、マダラがそれを遮る。

「あれから考えたんだが、やはり俺たち三人の誰かが観光協会を主導すべきじゃないか?」

「ああ! そうだな。だが火影は忙しい。ここは火影の右腕である俺が…」

「扉間！気を遣う必要は無いぞ！やはり俺自らが主導して民にアピールを…」

「てめえらに務まるかよ！里の名付け親である俺がやるのが適任つてもんだろーが！」

観光協会の主導役を押し付け合っていた三人が、芙蓉がメンバーと知っていきなり主導権を握りたがる様子に、樹は顔をしかめて思い切り睨みつけた。

「……まったくコイツらはあ（怒）……」

「ちよつと皆さん、あまりにも解りやす過ぎです！芙蓉が居るからつて…そんな不純な理由でメンバーに入られては困ります。それに、主導役は私のハズですよ？」

『うっ……』

三人は何も言い返すことが出来ない。

「観光協会の活動の中で皆さんには色々ご協力して頂きますので、その時は、よろしくお願います。いいですねっ!？」

「も、勿論だぞ！ワハハハ！」

「ああ……」

「ま、任せろ。」

三人は芙蓉をメンバーにするという案を思いつかなかつたことに後悔し、こんなことなら最初から自分が主導役になっておけば良かったと心の中でうな垂れたのだった。



里本部の一室。今日から当分はここが木ノ葉観光協会の本部となる。

樹、芙蓉、カガミ、ヒルゼン、そして本人希望で後日加入したコハルが机を囲んでい
る。

「・・・よし。観光案内パンフレット、観光案内図の制作は手分けして情報を集めて、それを基に原稿を作って業者に発注するってことでOKだね。常設の観光案内所の設置場所は里の入り口の茶屋の隣りの敷地を借りられるよう交渉する。で、職員はとりあえず三人で求人を出す。なる早で予算案作って火影に提出しよう。」

そう言つて主導役の樹がこれまでの話をまとめた。

「じゃあ早速明日から情報収集だなー」

ヒルゼンが腕を頭の後ろで組んで胸を張り、はりきる。

「そうだな。・・・あのさ、でも、なーんか物足りなくないか? 目玉が無いつて言うかなんて言うか・・・」

カガミはそう言つて腕を組んで適切な言葉を探す。

「あ、私も思った! 里は出来たばかりで正直これっていう目玉の名所とか、名物つてまだ無いんだよねえ: : せてなんかイベントでもあればいいんだけど。」

コハルがカガミの意見に賛同し、付け加えた。

「コハル! それよ! イベント! これから恒例になるイベントを作るのよ!」

樹がそう言つて思い切り立ち上がり、拳を握る。

それを見上げて芙蓉が言う。

「確かに今は節句や季節のお祭りくらいで、木ノ葉の里ならではのイベントつて無いね。里ならではつていうと・・・やっぱり火影さまなんじゃない？」

「火影??？」

全員が頭をかしげる。確かに火影は木ノ葉隠れの里の「顔」ではあるが・・・

「火影さま自ら、イベントに参加して貰うのはどうかな？」

「うん確かに…。それは観光客が沢山集まりそうだね。いいかも！」

樹が芙蓉に同意して、早速考えを巡らせ始めた。

「いやいや。流石にそれは…火影様はお忙しいし…」

そこへカガミが苦言を呈した。

「一日くらいならいいんじゃない？扉間様もいらつしやるし。火影様もそういうの好きそうじゃない？」

コハルは芙蓉と樹に賛成のようである。

「俺は個人的に、火影様が忍以外のことやつてるの見てみたいかも！」

ヒルゼンは好奇心のほうが優っているようだ。

「柱間さまだけじゃなく、せっかくだから扉間さまとマダラさまにも参加して貰ったら、

もつと盛り上がるんじゃないかしら?」

そして芙蓉は笑顔でとんでもないことをさらりと言った。

「いや・・・流石にあの二人は嫌がるんじゃないかなあ?・・・」

流石の樹も少し引きつった笑顔で答える。

扉間もマダラも協力してくれると言ってくれたものの、流石にあの二人は表舞台に出るのは嫌がりそうだ。他の三人も同意見のようで、うんうんと頷いた。

「うーん・・・でも、扉間さまもマダラさまも、女性中心に人気があるから、盛り上がると思っただけだなあ。」

「ああ確かにね・・・女性の消費、影響力って侮れないからなあ・・・。協力するつつつてたし。それに、芙蓉が頼めば二人共断れないだろうし。いいかもね!じゃあイベントの企画考えて持つて行ってみる?」

「賛—成—!!!」

「ええ——・・・」

うな垂れるカガミ以外の全員が右手を上げてニコニコと笑っている。

確かに芙蓉の頼みなら扉間とマダラも断れないだろう。

だが、柱間VSマダラ、マダラVS扉間・・・

その構図がイベントを混乱させなければいいのだが・・・とカガミはとても不安に思っ

た。

◆ 「ちよつと・・・なにこれ・・・」

樹が顔を引きつらせて、怒りを込めて目の前の三人を見ている。

「これじゃ人力車の意味、全く無いな・・・」

カガミも腕を組み、冷たい目でそれを見ている。

まず試しに開催してみる事にしたイベント第一弾として考え付いたのは、火影自らが抽選で選ばれた観光客を人力車で観光案内するというものだった。

火影だけではなく、扉間とマダラにも参加してもらうことになった。勿論、二人は最初嫌がったのだが、芙蓉が潤んだ目で訴えると速効OKした。

各人が案内するのは一人10人。コースは僅か500m。里の入り口から里本部までだ。

「順番ぞーちゃんと皆と握手と自撮りするから安心せい。ワハハハハ！」

扉間は抽選で選ばれた若い女性たちに囲まれ、その肩を抱きながらデレデレし、一緒に写真を撮り続けている。いっせうに人力車が出発する気配は、無い。

「ちよつとーっ！早く出発して下さあい!!後つかえてますからあつ!!!」

樹が柱間に叫ぶが聞こえていない。

「運べばいいんだろ。何か問題あるのか?俺の術を体験できるだけでも充分すぎる価値があるだろ。」

扉間は、飛雷神の術で目的地まで往復していた。あつという間に順番待ちの客の数が減ってゆく。

「いやいやいや!!人力車の意味無いしっ!!ちゃんと歩いてっ!!」

「……めんどくさっ……」

「いや、結局めんどろなだけ!!」

そして、マダラはというと……

「なんで俺が背中を見せんといかんだ。フンツ。有り得ん。」

引いて行くはずの人力車を、なぜか押している。

しかも、当然押して動かす物ではないため、途中で動かすのが面倒になったのか、連れて来ていた部下二人に押させている。

「せめて、せめて自分で押して下さいあーっ!!」

樹が涙目で叫ぶ。

「俺に指図するな!」

「はあ?!私、観光協会の主導役ですけどお!!」

「マダラさま!お願いします。私もお手伝いしますから、一緒に人力車を引きましょう」

「？」

芙蓉がマダラと樹の間に割って入り、マダラを説得する。

すると人力車に乗っていた五十代とおぼしき女性が申し訳なさそうに、恥ずかしそうに、言つて来た。

「あ、いえ．．．これだと里の景色も、マダラ様のお顔も同時に見られるので、むしろ嬉しいですわあ。ウフフツ！」

「．．．．．」

三人は固まった。

これはこれで、需要があるようだ…。



「駄目!!!ずえんつぜえん、駄目!!!何、あいつら．．．」

樹が机を叩いて怒っている。

グダグダなお試しイベント第一弾が終わり、樹と芙蓉たちは観光協会本部の部屋で反省会を始めていた。

「樹ちゃん、ごめんね．．．私が柱間さま、扉間さま、マダラさま達なんかには、お願いしようって言ったから．．．」

「芙蓉先生は悪くないよ。案自体は、良い案だったと思うよ?」

カガミが落ち込む芙蓉を励ました。内心は三人が変に争い合わないで済んだだけで良かったと安堵している。

「いやいや芙蓉さん、遠回しにあの御三人やつぱダメって言ってますよ? それ…」

コハルが申し訳なきように突っ込んだ。

「俺はあれはあれで良かったって思ったぜ? 三人の個性が出てて。忍の里ならではって感じだったんじゃないか? なんだかんだお客さんも見てる観客も盛り上がったしな。」

ヒルゼンがニコニコしながら言った。

「ま、まあ、確かにヒルゼンが言う通りな所もあるけど…でも、見てるこっちが恥ずかしかつたつっの。あれが里を代表する三人だよ? 最初くらい真面目にして欲しかった!」

樹はそう言うのとブスツとして腕を組み、ドスンと椅子に腰かけた。

「どうします? もう一度、人力車企画、リベンジしてみます?」

コハルが樹に訊ねた。

「もういいんじゃないの。違う案だそうぜ…出来れば火影様だけに参加してもらおうイベントをさあ。」

カガミが斜めに視線を落としてぼそりと言った。

「でもやつぱり、柱間さまだけより、せめて扉間さまかマダラさま、どちらか一緒にして貰った方が良いと思うなあ・・・」

芙蓉が少し申し訳なさそうな笑顔で言った。

「うん。だってアホだもんね火影様。一人だと何かやらかしそうで心配だわ」
「失礼ですよ！樹さんっ!!!ちよつと天然さんなだけですよ。」

コハルが樹をすかさず諫めた。流石に火影は尊敬しなくては…。

「あのね、マダラさまから聞いたんだけど、柱間さまと昔子供の頃、色んな事を競って修行してたんですって。だから里を作った二人の友情を表現できるような、何か二人で競争するものが良いんじゃないかな？」

その芙蓉の発言に、カガミがぎよつとして芙蓉を見つめた。

・・・何を言いつすんだ先生っ!!トラブル起こすだけだつてえーっ!・・・

「あ、それいいんじゃない?柱間VSマダラ。かつてのライバル対決再びって、ウケるよ絶対!」

「俺もそれすつげー見てみたい!!!」

「ヒルゼン、あんたの興味はどうでもいいんだって…」

コハルがそう言つて目を輝かしているヒルゼンの肩を叩いた。

「で、でも競争って、どんなことで?平和の象徴の里なんだからさ、ゆつたり、穏やかな

やつが良いと思うんだけど……。たとえば将棋とか!」

柱間VSマダラ企画の話の流れを変えられないと悟ったカガミが、せめて穏便に済むようにと考えて発言した。

「えーでもそれって見てて楽しい? 私楽しくない。」

コハルがカガミに意見した。

「お、おい、お前の興味は良いのかよっ!」

ヒルゼンが焦ってコハルに突っ込む。

「昔よくやっていたのは『垂直崖上り』だつて言つてたかな……ほら、顔岩がある崖があるでしょ? あそこを上つていたんですって。」

「おっ、それいいじゃん! エピソードもちゃんとあるし、スピード感があつて見る方も盛り上がるよ!!!」

樹がぼんつと手を叩いて明るい顔になった。

「それにしようぜ!!!俺も絶対それが良いと思う!!!」

「かつての修行を今また二人で再現する……いい話ですよ。私もそれが良いと思う!」
……どうなつても知んねえからなあ……

◆ カガミはまた、ひとりうな垂れた。

「柱間、お前とまた勝負できるとは嬉しいぜ。まあ勝つのは俺だがな！」
「何を言う、勝つのは俺ぞ！」

柱間とマダラが甲冑を身に纏い、顔岩の足元に並んで互いに睨み合っている。

周りには観光客だけではなく、多くの観客が集まり、スタート前の二人に声援を送っている。

屋台や出店まで出て、まさにお祭り騒ぎ。イベントとしては実に良い盛り上がりだった。

「二人共ノリノリだし、お客さんもこんなに集まってすごく盛り上がってる。良かったよね、この企画にして!!」

コハルが隣に居るヒルゼンに嬉しそうに話しかけた。

「うん。良かったぜ！やっぱ真剣勝負は盛り上がるよな！あく楽しみ!!」

風が吹き抜け、そして無風になる。

スタート進行役の樹がそれを確認すると、向かいに居るカガミに目で合図する。

・・・つたく。なんで俺の写輪眼をこんなことに・・・

カガミはフライングや不正が無いかわ写輪眼で見ている役立たず。

「それじゃ御二人共、そろそろスタートしますよ・・・準備はいいですか？」

「ああ。」

「おう!!」

二人が身構え、ゴールのある頂上を見上げた時だった。

「柱間さま〜! マダラさま〜! 頑張つて〜!!」

扉間と二人でゴールテープを握っている芙蓉が僅かに顔を出し、二人に手を振っているのが見えた。

・・・絶対、負けられない戦いが、ここにあるつつ・・・

崖の上に居る扉間には、芙蓉の声援で二人のチャクラが更に強まり、更に張り切っているのが伝わってきた。明らかに先ほどとは気合の入りようが違う。

「……………」

扉間も少し顔を出し、無言で二人を眺めた。

「では、よいい、スタート!!」

「うおおおおおー!!!」

二人が物凄いスピードで垂直に崖を走り、上り始めた。

観客の声援の声も更に大きくなる。

最強の忍の二人である。あつという間にゴールに近づいてゆく。

「…………すつげ。二人共まったく差がねえし…………」

カガミが写輪眼で見上げながら驚いている。

「さあ、どっちが勝つかねえ。まあ同着でもいいんだけどさ。」

樹も額に手を当てながら二人を見上げている。

二人の目にゴールテープが見えた。

あと一歩踏み出せば崖を上りきる。

「!?」

二人の目の前に一瞬だけ、扉間が写った。

「うっわぁー！ー！ー！ー!!!」

ゴールを目の前に、二人が崖から落ちてゆく。

「え!!なに!!何が起こったんでしょ!急に二人共落ちて行きましたけど…」

「さあな。」

驚く芙蓉の問いに扉間が先ほどと変わらず二人でゴールテープを握ったまま、無表情

で答えた。

「と、扉間ア・・・てめえ許さんぞ!!!ぜってー殺す!!!」

「コラ!扉間!!なんてことをするんぞ!!危ないだろう!!」

「すまーん。足が滑ったー。」

「はあ!!」

二人が崖の下に着地し、崖の上の扉間に向かって叫んでいる。

観客は急に崖の上から落ちてきた二人を見て爆笑している。

「.....」

樹とカガミは呆れて何も言えない。

ゴールに扉間を置いてのが間違いだった...

その後、二人は改めて勝負をすることになった。

ゴール地点に写輪眼のカガミを置いたが、何度やつても同着ばかりが続いた。もういい加減、同着で終了しようかと皆で説得したが聞かなかつた。

勝負の回数が四十回を超えたあたりから、観客が目に見えて減っていった。

「あのお...まだあの御二人、勝負続けてるんですか?」

「うん。勝敗がつくまで続けるんですって。あ、コハルちゃんも白いご飯要る?」

陽はとつぷりと暮れ、空には満月が浮かんでいる。

観光協会のメンバーは、芙蓉の家で水炊き鍋をつついていた。

「やっぱアホでも火影様ピンのほうがいいねー。で、なんで、卑劣、様がここに居るんですかあ?」

樹が無表情で鶏肉を口に運びながら言った。

「うるさい。文句があるならお前が出て行け。」

扉間が無表情で熱爛の猪口をぐつと飲み干す。

「ねえヒルゼン君もまだ勝負を見ているの？」

「二人の熱い勝負を見届けるんだってさ……」

芙蓉が追加の鍋の具を運んできてカガミに訊くと、カガミは無表情で白飯を口にかき込みながら答えた。

「ぜってー負けねえっ!!!!いい加減諦めろ柱間ア!!!!」

「俺だって負けんぞお!!!!お前が降参しろマダラ!!!!」

この日も、平和に木ノ葉の里の夜がふけてゆく。

おしまい♪

「 if you XXX No. 4 」 ちはカガミが
見つけた答え

天の川。

今年も、昨年と驚くほど変わらない星たちが広大な夜空に横たわって輝いている。

しかし、いまカガミがその天の川を見上げている場所はもう、ちはは私塾ではない。私塾は昨年十六歳になり、規定により昨年末で退塾した。

しかし今でも、友と机を並べて勉強に打ち込んでいた頃が恋しくなる。任務だけの毎日
は正直、味気なかった。

カガミは顔を空から正面の道に戻し、家路を急いだ。

七月だというのに、真つ暗な家の中はひんやりとしている。

…ポチャツ。

蛇口から水が滴った音だけがカガミの帰りを迎えた。

明かりをつけ荷物を床に降ろすと、今夜もまた、机上に置いて在る写真が目に入つて
来た。

にこやかに微笑み、まるでカガミの帰りを待ちわびてくれていたかのようなのである。

「芙蓉……ただいま。」

カガミは洗面所で手を洗い着替えると夕食の支度をし、それを机に運んで椅子に座つた。

頬杖をついて、また写真を見つめる。

芙蓉は昨年の秋、扉間と結婚した。

カガミも披露宴に出席したが、芙蓉の花嫁姿、幸せそうな笑顔を見ていたら耐えられなくなり、途中で黙って帰ってしまった。

目の前の芙蓉の写真は、カガミが退塾する日に二人並んで撮影した写真だ。

しかしカガミはその写真を見ていると芙蓉の結婚の事実までも思い出されてしまい、また胸が苦しくなってきた。急いで箸を持つと白飯に沢庵をのせ口にかき込んだ。

……初めて食べた芙蓉先生の卵焼き、美味かったな……錦谷の時のいなり寿司も美味かった。また、食いたいな。先生が俺の奥さんだったら、今頃……

カガミは箸を置き、下を向いて首を横に振る。

もう何百回考えたか知れないことをまた考えてしまった。

食事を早々に済ませ、風呂に入り、忍術書に目を通して勉強を始める。

それが終わると、忍術書の隣りに立ててある私塾の数学の教科書を広げ、久しぶりに

問題を解いてみる事にした。

・・・この問題、何度やっても間違えるんだよなあ。あれだけ芙蓉先生に教えて貰ったのに。くそっ！・・・

カガミは間違えた問題を復習すること無く、教科書とノートを閉じて強引に本棚に押し込んだ。

そしてバタンと寝台に横になった。

まだ部屋はひんやりと冷たい。ぎゅつと身体を丸めて毛布に包まる。

・・・なんでこんなに肌寒いんだよ・・・

「カガミくん、おはよう。朝ごはんは卵焼きと目玉焼き、どっちがいい？」

「・・・ああ、うん。卵焼きかな・・・」

バサッ！

カガミは飛び起きた。

・・・夢かよ・・・

再び寝台の上に横になった。朝の六時だった。いつもなら起きる時間だ。

しかし今日は休み。再び目を閉じて、もうひと眠りすることにした。

だがもう陽は昇り雀がチュンチュンと囀り、部屋の中も随分と明るい。

その爽やかさと明るさ、そして先ほどまで見ていた夢を思い出し、無駄に元気な下半身だけが疼いて一向に眠れない。

「ああもうっ！」

自分に苛立ちながらも、つい下半身に手が伸びてしまう。

『カガミくん大好きよ．．．もっと、もっと、もっとして．．．ああん．．．』

どれだけ頭の中で芙蓉のことを汚したか分らない。

もうこれだけ汚してしまえば、いつそのこと、本当に汚してしまいたい…。

そう思った瞬間にカガミは果ててしまった。

そして再び深い眠りに入ってしまった。

コンコンコン！

「ごめんください。カガミ君、居ますか？芙蓉です。」

バサッ!!!

カガミは飛び起きた。

．．．なんだ、また夢かよ。いい加減に．．．

コンコンコン。

「カガミ君。居ませんかあ？．．．」

「は、はいっ！居ます！！」

夢じゃない!!

カガミは立ち上がり、急いで髪を手櫛で整えながら自分の姿を見て確認し、走って玄関に向かう。途中洗面所の鏡で顔を確認し、そして玄関の扉を開けた。

「芙蓉先生・・・ど、どうしたの!!」

「おはよう。お久しぶり。ごめんね、突然家まで来ちゃつて。今日はお休みだつて聞いたから・・・ちよつといいかしら？」

「う、うん。散らかつてるけど、どうぞ。」

カガミは、突然の芙蓉の訪問にドクドクと心臓が高鳴り続けるのをなんとか抑えながら、芙蓉を家に招き入れた。

芙蓉に会うのは退塾したあの日以来、約半年ぶりである。

会おうと思えばいくらでも会う機会があった。

しかし、退塾を機会に、カガミは芙蓉への想いを断ち切ろうと決心した。敢えて芙蓉を避けてきたのだ。

本来なら芙蓉を家に上げるべきでは無いだろう。

しかしそんな事も考えられない程、芙蓉が訪問したことに驚き、そして舞い上がるほど嬉しかった。

ずっと忘れられなかった。ずっと会いたかった。

芙蓉は玄関に入ると靴を脱ごうとはせず、カガミを見て言う。

「まだ寝てた？ごめんさい。起こしちゃったかな？」

「ああ全然！最近疲れが溜つてるみたいでさ……久しぶりの休みだったからつい二度寝しちゃつて。ははは……」

「本当に毎日忙しそうだな。お疲れさま……扉間さまから聞いてるよ。直ぐ帰るか。ごめんね。」

そう言いながら芙蓉は鞆の中に手を入れて何かを取り出した。

「遅れてしまったけど、十七歳のお誕生日おめでとう！これ、私からのプレゼント。この半年間全然会えなかったから、どうしても顔を見て渡したかったの。」

カガミは驚きで声も出せず、茫然としながらそれを受け取った。白い和紙の包みに赤い水引で華やかな蝶結びがしてある。

「……あ、ありがとう……。ございます……」

「でも疲れている以外は元気そうで良かった！顔色も良いし。あまり無理をしないでね。たまにはまた家に遊びに来て。ご馳走するから。じゃあね。」

芙蓉は部屋を後にしようとして扉のノブに手をかけた。

「待つてよ！せ、せつかくだから、お茶でも飲んで行つてよ！」

「だけど、ご迷惑じゃない?」

「だってほら、これ、先生の前で開けてみたいし!…それに!それに昨夜久しぶりに数学の問題解いてたらまた同じ所で間違つてき…ちようどまた先生に教えて欲しかったんだ。ダメ…かな?」

「うん! 勿論いいわよ! じゃあ、ちよつとお邪魔するね。」

その言葉を聞いて芙蓉の表情は更に明るくなり、靴を脱ぎ始めた。

カガミは急いで部屋の中に入り、机の上を片づける。写真も慌てて一緒に片づけた。

「あら。全然散らかつてないじゃない。綺麗にしてるのね。偉いわ。」

カガミの部屋は確かに整理整頓されているのだが、驚くほど物が少なかった。

芙蓉は感心する言葉を言いながらも、その部屋の風景を見て、毎日ここでカガミが独りで暮らして居るのかと思うと寂しい気持になった。

「先生、どうぞ座つて。」

カガミは机に二つある片方の椅子を引き、芙蓉を座らせた。そしてもう片方の椅子の前に芙蓉から受け取ったプレゼントを置く。

「お茶、冷たい麦茶でいい?」 「うん、ありがとう。」

カガミはコップに入れた麦茶を芙蓉の前に置くと、芙蓉と向かい合つて座つた。

「開けていい?」

「うん。どうぞ。大したものじゃないんだけど……気に入ってくると嬉しいな。」
芙蓉から貰えるものならなんだって嬉しい。

だが、こうして芙蓉が自分の家にわざわざ贈物を届けに来てくれて、今、二人だけで向かい合つて座り、芙蓉の目の前でそれを開けようとしているのだ。

これまでになく胸が躍る。

ゆつくりと水引を解き、丁寧に白い和紙を開いた。

すると、薄紫の扇子模様の手拭いが出て来た。

手拭いの端には、黄色の刺繍糸で『鏡』と自分の名前が刺繍されている。

いつ以来だろう。こんな気持ちは……

気付けば両親が生きていた幼い頃、誕生日に二人からプレゼントを貰った時のことをぼんやりと思い出していた。

「……カガミ君？カガミ君？大丈夫？」

芙蓉の声に我に返ると、目の前が滲んでいた。

カガミはそれを隠そうと俯いて斜めに顔を逸らし、鼻を吸って涙を喉の奥に押し流すと、大きな笑顔を作つて芙蓉に向けた。

「芙蓉先生。ありがとう！カッコいいじゃん！凄く気に入ったよ！」

「うん……良かった！“うちは”と“扇子”をかけたんだけど、安直過ぎたかな？」

「いや、意外と団扇や扇子の柄って家紋以外に持つてないから、嬉しいよ。」

「扇子や団扇の末広がりには未来への展望が広がるって、縁起も良いのよ。カガミ君が火影になる夢が叶いますようになって、願いを込めたの。任務の時使つてね…」

「…うん。大切に使うよ…ありがとう…」

「…カガミ君…。そうだ！お腹空いてない？お昼ごはん一緒に食べに出かけない？何が食べたい？私がお馳走するよ。」

芙蓉はカガミの目が潤んだ理由が、贈物に感激しているだけでは無いことに直ぐに気が付いた。

しかし、もう芙蓉はカガミの家族になってやることは出来ない。

それでも、今もなお、カガミとは教師と生徒を越え、芙蓉にとっては本当の弟の様な、二人の間には特別な絆が在ると思つている。温かい時間を二人で過ごしたかった。

カガミは芙蓉の言葉を聞いて、一瞬目を輝かせたかと思うと、俯いて小声で言う。

「うん…ありがとう先生。あの…出来れば、外食じゃなく…先生の手料理が、食べたんだけど…ダメかな？」

「私の手料理なんかで良いの？」

「芙蓉先生の…卵焼きが、また、食べたい…」

「そ、そう…分つた。じゃあ、一緒にお買物に行きましよう！ね？」

十一時前。二人は町へ出かけた。

梅雨はまだ明けていないが今日は天気が良い。青空が広がり白い雲が浮かんでいる。「お天気が良くて良かったわね！」

芙蓉がニコニコしながら右隣のカガミを見上げた。すると目が合った。カガミは空でも前でもなく、芙蓉を見ていた。

「あ、うん。今年は空梅雨だね。水不足が心配だなあ……はは。」

カガミは急いで空を見上げて誤魔化した。それを見て芙蓉がクスツと笑う。

生鮮食品の店に着くと、二人であれこれ話しながら食材を選んだ。何気ない会話、珍しくも無い行動、そして芙蓉の笑顔……しかしその全てがカガミにとって新鮮だった。

……毎日こうして、二人で買い物に来られたら……

カガミはまた、芙蓉の横顔を見つめていた。

それから二人は必要な食材を買い終え、カガミの家に戻ってきた。

カガミは玄関の扉を開け、芙蓉を先に入れてから自分も中に入った。すると部屋の空気が暖かく、蒸し暑く感じるほどだった。

「今、窓開けるね。」

カガミは急いで部屋に上がり、窓を開ける。爽やかな風が吹き抜けてゆく。

「ああ、気持ち良い……ありがとう。じゃあ、お台所借りるわね。」

芙蓉はその風に目を細めて深呼吸をした後、台所に立ち早速調理を始めた。

「芙蓉先生、俺も何か手伝うよ。いつも自炊してるし、けっこう何でも出来るんだぜ？」
「ありがとう。じゃあ、お言葉に甘えようかな。ごはんを炊いてくれる？それからキャベツの千切りでできるならお願い。」

「当つたり前だろ。任せろ！」

カガミは手を洗うと、米を研ぎ始めた。そして釜に入れる。米の吸水の間に、まな板にキャベツを載せて刻み始めた。

芙蓉は隣で、水から煮干しで味噌汁の出汁を取りつつ、醤油・砂糖・酒・生姜のすり下ろしを平皿に入れて混ぜ、そこに薄切りの豚肉を並べてゆく。

「あら、千切り凄く上手ね！私より全然上手！すごい！」

芙蓉はカガミの華麗な包丁さばきに感心した。

「へへっ。凄いだろ？」

二人で笑い合いながら調理を進めてゆく。

あとは米の蒸らしが終わるのを待つだけになった時、芙蓉は卵焼きを焼き始めた。カガミは隣でワクワクしながらそれを見守っている。

甘く香ばしい香りと共に、黄金色の見事な卵焼きが出来上がり皿に載せられた。

「はい。これ先に運んでおいてくれる?」

芙蓉はカガミに笑顔で卵焼きの載った皿を手渡す。

「う、うん・・・」

カガミの目は小さな子供の様にキラキラと輝いており、芙蓉はそれを見て堪らなく嬉しくなった。

机の上にはずらりと二人分のおかずが並んだ。

キャベツの千切りとトマトが添えられた豚の生姜焼き、油揚げとネギの入った味噌汁、オクラの胡麻和え、そして卵焼き。

「ごはんも上手に炊けているわね。ありがとう!」

最後に芙蓉は茶碗に白飯を盛り、カガミに手渡した。

カガミはもう既に満腹感でいっぱいだった。

この光景が、ずっとずっと続けばいいのに・・・。

「ん?どうしたの?私の顔に何か付いてる?さつきネギを切った後の手で顔を触ったのよね。」

芙蓉はそう言ってハンカチを取り出し顔を拭って見せた。

「ううん。何もついてないよ。大丈夫。」

二人は料理の並んだ机に向かい合って座った。

「結局ほとんど手伝って貰っちゃったね…。でも男の人と料理するのって楽しいのね！」

「うん。俺もすげー楽しかった！…。扉間様は料理、手伝ってくれないの？」

「う、うん。だつて家事や料理は妻の仕事だし。夫を台所に立たせるなんて…」

「…妻じゃない時から、先生しか台所に立つてなかつたじゃん…」

「ふーん…俺ならそんなの関係無く、手が空いてればいつでも手伝うけどな。」

「フッフ。カガミ君は本当に優しいのね。そういう所がカガミ君の素敵な所の一つね。」

「…素敵な所？扉間様に無くて、俺には在るつてことだろ？…」

「さっ！冷めないうちに食べてね。」

「あ、うん！いただきます!!!」

カガミは早速、卵焼きから手をつけた。

「…うつま!!!すっげー美味しい!!!世界一美味しいよ！」

「フッフ。大袈裟ね…ありがとう。」

芙蓉はカガミが望んだ卵焼きがカガミの口に合ったようで安心しつつ、先ほどのカガミの質問が頭に浮かぶ。

確かに扉間は料理を手伝ってくれることはまず無いが、それに不満を感じた事など一度も無い。しかし、今のカガミの様に「美味しい、美味しい」と感動して言ってくれたこと

も、無い…。

芙蓉は、ふと心に影が落ちるのを感じたが、目の前の、美味しい美味しいと言いながら食事を頬張るカガミの顔を眺めてそれをかき消した。

「間違ったのはまたあの問題？どれどれ見せて。」

食事を終え、二人で片付けや皿洗いをし、綺麗になった机の上でカガミは数学の教科書を広げて芙蓉に見せた。

「ノートも見せて・・・なるほど、またこの解き方で引つかかったのね。ここは確かに間違いやすいわよね。でもまずはこつちを・・・」

芙蓉の解説が始まった。芙蓉の解説は解りやすいのだが、なぜにこうも何度も間違ってしまうのだろう…カガミは解説を聞きながら自分に対して苛立ちを感じた。

「じゃあ似た問題を出してあげるから解いてみて。大丈夫。類似問題を沢山解いてアプローチ方法を覚えれば、数字が変わってもちゃんと出来るようになるよ。」

芙蓉はノートをめくって新しいページに類似問題を書き、カガミに解かせることにした。カガミは早速、今教えて貰ったアプローチ方法で挑み始める。その眼差しはとても真剣だ。芙蓉はそんなカガミを見て微笑むとそつと立ち上がった。

「さっき買って来たジャスミン茶、淹れましようね。」

カガミは反射的に手を止め、芙蓉の後ろ姿を見た。

あの日、芙蓉が熱爛で火傷をし、扉間にひどく叱られていた時のことを思い出す。

『芙蓉先生。火傷には気を付けて』

そう言おうと思つたが、カガミは立ち上がり、台所に立つ芙蓉の元へ静かに歩いて行つた。

芙蓉はカガミが後ろに立つて居ることに気付かず、茶葉を急須に入れている。

先ほど開けた窓からは爽やかな風が吹き続け、後ろで束ねられた芙蓉の長い髪と白いうなじの後れ毛を僅かに揺らしてゆく。

この後ろ姿を、どれだけ長い間、見つめ続けてきただろう。

しかし、教室以外でこんなにも見つめるのはこれが初めてだった。

ジャ——…

芙蓉はやかんの蓋を開け水を注ぐ。

・・・水の音・・・水通・・・扉間・・・芙蓉・・・

だけど、今、芙蓉は俺の目の前に居る。

この時間は、誰が何と言おうと、俺たち二人だけのものだ。

「¹⁹」

カガミは芙蓉を後ろから抱きしめた。

バシヤ——・・・

芙蓉は突然の事に身体が固まり、やかんからは水が溢れた。

「ど、どうしたの？急に・・・」

芙蓉は気を取り直し、冷静を装いながら蛇口を閉めた。

「なんで俺があの問題を何度やっても間違うか、解ったよ・・・」

「そ、そう・・・良かった、わね。」

そう言つて芙蓉はカガミの手を外そうとした。しかし、カガミは更に強く芙蓉を抱き締める。

「セオリー通りにしてるから、解けないんだよ。」

「・・・？」

「先生、数学は答えは一つだけ解き方は沢山あるつて教えてくれたよね・・・」

「え、ええ・・・」

「でも公式通りにやるのがセオリーだ。それが正しくあり、近道でもある。」

「・・・？」

「だけどそれでも解けなかったら、どんな手を使つても良いつてことですよ？」

「そ、そうね・・・何か、他に、新しい解答方法・・・見つけられたの？」

「うん。」

カガミは芙蓉の身体を自分の方に振り向かせると、芙蓉の背中と後頭部を抱え、思い

切り芙蓉の唇に吸い付いた。

「んっ…んっんん!!! いやっ!!! んん!! やめっ…んん…んん…」

夢中で芙蓉の唇をむさぼる。

芙蓉は必死にカガミの胸を押して身体を離そうとするが、敵わない。

暫くすると芙蓉は諦めたかのように抗うのをやめ、脱力する。

カガミはそれを感じると、今度は芙蓉の首筋に吸い付いた。

「…やめなさい…やめなさいっ!!!」

これまで聞いたことのない、強く厳しい声で芙蓉が叫んだ。

カガミは思わずビクリとした。ゆっくりと顔を上げ、その芙蓉の顔を見る。

しかし、カガミは全く動揺などしていない。

カガミもまた、強く厳しい目で芙蓉を見つめ返した。

それに反してそよ風はカガミの柔らかいくせ毛の黒髪を優しく揺らしてゆく。

芙蓉は自ら叱っておきながら、カガミの強い視線に思わずうろたえ目を逸らした。

「…帰ります。」

芙蓉は自分の両腕を握っているカガミの手を払おうとした。しかし、その手に力がこ

もり更に強く握られる。痛い…。

「やっど問題の解き方をみつけたんだ…帰さないよ。芙蓉…」

そう言うとカガミは芙蓉を抱きかかえた。

「やめなさいっ!!離して!!」

ドサツ!!

「きやつー!」

バサツ!!

乱暴に寝台に落された芙蓉の上に、カガミが四つん這いに覆いかぶさった。

「…自分が何をしているのか、解つてるの?!やめなさい。貴方はそんなに愚かな子じゃないはずよ。」

芙蓉は必死に、しかし冷静な口調でカガミを見上げて言った。

「もう『子』じゃないぜ。先生の前に居るのは、うちはカガミという、男だ。」

「!!」

カガミは芙蓉の左手を抑えながら、芙蓉の腰帯を強引に解いて床に投げた。そしてスカートを剥ぎ取る。腰帯とスカートを外され、左合わせの白い半袖ブラウスが全開になり、白い絹の下着に支えられている芙蓉の真っ白な胸が現れた。

「やめてーっ!!!!」

芙蓉の両手首を寝台に押し付け、カガミはその胸の谷間に顔を埋める。

これまで芙蓉の通り過ぎた後に微かに感じるだけだった甘い香りが、いま強烈に鼻と

脳、そして下半身を刺激する。

「いやあっ!!! やめて!!! やめてえっっ!!!」

芙蓉は何とか抗おうと身体をくねらせるが、白い肢体と栗色の髪が乱れる様子が、更にカガミの興奮を刺激する。

胸の谷間から芙蓉の顔を見上げる。

涙ぐみ怯えて震える琥珀色の瞳、苦しそうに歪めた顔が：堪らない。

口づけをする。

強引に舌をねじ込み口を開かせ、舌を絡ませる。芙蓉は舌を喉の奥に引っ込めようとしたが、カガミは更に口を強引に開けさせ、その舌を唇で吸った。

「っ……!!!」

口づけを拒もうと必死になっているうちに、カガミの右手が芙蓉の股間に伸び、まさぐり始めた。そしてカガミの口が離れ、その口で強引に芙蓉の上の下着をずらすと、露になった乳首に吸い付いた。

「やめてっ!!! お願ひ!!! …… やめて……」

……誰か助けて!!! 扉間さま、助けて!!!

そう叫びたい。しかし、芙蓉はこんな状況でも戸惑っていた。

こんな事が明らかになってしまえば、カガミの将来は…。

それに妻がこんな目に遭ったとなれば扉間の立場は…。

自分の貞操を守る事よりも、カガミと扉間を守らなければという気持ちで頭から離れないのだ。

「カガミ君、こんな事許されない！今ならまだ間に合う。やめなさい！」

乳首を吸われ、股間をまさぐられながら芙蓉はカガミの頭に向かつて言った。

しかしカガミは全く耳を貸さない。

それどころか、ついに芙蓉の上下の下着を無理やり剥ぎ取り、全裸にさせられてしまった。

カガミは全裸になった芙蓉に跨りながら、自らも上着を脱ぎ棄て上半身裸になった。

「俺はもう、どんな手段だつて使う…先生が俺のものになるんなら…」

「こんなことをしたつて、私は貴方のものにはならない。そんなことくらい解るでしよう！」

「そんなこといいんだ…俺にとつての答えが何か、分かったから…」

「…?!」

カガミは両手で芙蓉の左右の乳房を優しく掴んで揉み始めた。

乳房は温かく、そして柔らかい。カガミが妄想していたよりも小ぶりな乳房だが、掌から僅かに溢れる大ききさで、品の良い丸い形をしている。揉むたびに転がる乳首の感覚

に、掌が痺れる。

「ああ……とつても綺麗だよ……芙蓉。」

カガミの顔はもう、芙蓉の知っている顔では無かった。

紛れもなく、そこに居るのは、一人の男だった。

……もう、何を言つても無駄、かもしれない……

芙蓉はそつと目を閉じた。

抗うことを諦めた芙蓉の身体に、カガミの口づけの雨が降る。

顔、耳、髪の毛、腕、指先、胸、脇、腹、背中、尻……足の甲、ふくらはぎ、足の指先……そして、手で愛撫しながら何度も何度も太腿を唇と舌でなぞっている。

カガミにとって芙蓉の身体の部位はどこも欲情を駆り立てるのだが、カガミが昔から目で追っていたのは芙蓉の太腿だった。

ひざ丈のスカートやズボンからチラチラと覗く、見えそうで見えない白い太腿が、堪らなかつた。一度でいいからその太腿の素肌を見たい、触つてみたいと願っていた。

そして、カガミの口は芙蓉の陰部に辿り着く。

ゆつくりと足を広げ、そこに顔を埋めた。

じつとりと湿った部分全体を舌で舐めてみる。

「……………ん」

芙蓉は顔を両手で覆い横に逸らしていたが、その掌の間から思わず声が洩れた。

「芙蓉……芙蓉のこども、すごく美味しいよ……」

カガミはそう言うのと先ほどよりも固く大きく勃起した部分を舌ではじき始めた。

「……んっ……あっ……いやっ！」

押し殺している芙蓉の声に反して、芙蓉の陰部からは甘酸っぱい香りがより強く漏れ始める。そしてカガミは、顎が当たっている部分から温かくねっとりとした蜜が溢れていることに気が付いた。そこへゆっくりと右手の指を這わせ、中指の先端を入れてみた。

「あっ……」

芙蓉の小さな声が聞こえると、カガミはその指を更に奥まで入れた。

「やあっ……んっ……」

芙蓉は必死に声を殺しながら、身をよじらせた。何度か指を出し入れすると、さらに蜜が溢れ出し、カガミの掌までをべっとり濡らしていく。その様子を見てカガミは喜びと沸き立つ欲情で、胸が焦げてしまうかと思うほど熱くなる。

もう我慢などできない。

ズボンと下着を脱ぎ棄てると芙蓉の足を大きく広げ、蜜壺の入り口に、これまで見てきた中で一番大きく固くなっている男根を挿入した。

「やめてっ……!! ああああああっ……んっ……!!!」

抗うことを諦めていたと思っていた芙蓉が、再び抗おうと上半身をじたばたと動かし始めた。カガミはその両手首を寝台に強く押し付けて身体を密着させ、男根で奥まで貫き、芙蓉の動きを封じた。

「……んっ……んんっああっ!」

芙蓉は子宮を突き上げられ、その快感に思わず身悶えてしまった。

……駄目なのに、こんなこと、許されないのに、どうして! ……

カガミを守る為、夫・扉間を守る為、自分の身体を犠牲にしようと思っていたものの、その行為に否応なしに芙蓉の身体は反応してしまう。

憎らしい、忌まわしい、汚らわしい快感が芙蓉の身体と頭を支配してゆく。

「芙蓉の中、すっごく気持ち良いよ……たまらない……」

カガミは天井を仰ぎながら激しく腰を動かし始めた。

「んっんんっ……はあはあ……んっんんんっ……あっ……ん」

「我慢しなくていいんだよ? 芙蓉のいやらしい声、もっと聴かせてよ……」

カガミは芙蓉の顔に顔を近づけてそう囁くと、腰を止め、乳首に吸い付いて舌で舐め

回す。

「……んっ! いやああっ!! はああんっ!」

芙蓉の膣の中がぎゅうつと締まり、カガミの男根を締め上げた。カガミはその感覚に驚いたが、芙蓉が快感を感じているのだと気づき嬉しくなる。

そしてカガミの男根が更に大きくなると、芙蓉はその感覚に思わず目を見開き、カガミの顔を見てしまった。目が合った。

ハアハアハアハア・・・

二人の視線と呼吸が一つになった。

先ほどまで爽やかな風で心地良かった部屋の中は、温度を上げ、二人の身体はじつとりと汗ばんでいる。

「芙蓉・・・心から愛してる・・・君は俺のものだ」

そう言うときカガミは再び腰を動かし始める。

パンパンパンパン：クチュクチュクチュクチュ：

いやらしい音が響く。

「ああもう出る・・・出すよ・・・芙蓉の中で・・・っ」

「やめてっ！中で出すのは！やめっ・・・ああ・・・」

「うっ・・・ああっ!!!」

カガミは芙蓉の中で思い切り射精した。男根は芙蓉の子宮の中にびくびくと精液を注ぎ続けている。

「.....」

芙蓉はその感覚に目を閉じると、両目から涙が流れ頬を伝う。

カガミはその涙を無視して芙蓉の唇に口づけをすると、うつ伏せにさせた。ぐったりとしている芙蓉の背中を愛撫すると、ピクンピクンと反応する。

そして芙蓉の尻を持ち上げ、今度は後ろから挿入する。

「んあっ！いやああもう、もうやめてえっ!!」

「芙蓉の中、もうぐちやぐちやだね・・・もっとめちやくちやにしてあげる」

芙蓉の膣の中は先ほど自分が放った精子と芙蓉の愛液でドロドロとしている。先ほどとは違ったいやらしい感触に男根はあつという間に元の大きさと固さになる。そして芙蓉の膣の中をこれでもかというほど掻き回した。芙蓉もグチュグチュグといやらしい音を立て、ねばねばと泡立つ膣の感触に、もう理性は保てなかった。強い快感が押し寄せる。

「いやっあっあっあっあああ...あんあんあんああああんっ!!!」

ついに、芙蓉は果ててしまった。

カガミは脱力し茫然としている芙蓉を再び仰向けにさせ、また前から挿入する。腫れあがりねばつく芙蓉の膣は、カガミの男根を抱き締めるように包み込んでくる。すぐにまた頂点へと近づいてゆく。

涙を浮かべた虚ろな目で口を開け舌を浮かせている芙蓉のいやらしい顔を見ながら、カガミはいつきに頂点に達した。再び芙蓉の子宮にカガミの精液が大量に注がれる。

芙蓉は涙を流しながら、カガミをじっと見つめた。

肩で息をしながら、カガミも芙蓉の目を見た。

愛する者を守り、尊重し、慈しむ。

それが「恋」のセオリー。

それが愛だと信じ、貫いてきた。

でもそれでは欲しいものは手に入らない。

ならばどうするか？

感情のまま強引に奪うまでだ。

「これが俺の答えだ……」

そう言うとかガミの目に、真つ赤な写輪眼が浮かんだ。

芙蓉はそれを見て、息が止まり、心臓まで止まりそうになる。

大きく顔を背け、何とか息を飲み込んだ。動揺して目は泳いでいる。

「先生はまた俺に抱かれに来る……絶対に。この眼を見た反応で、分る……」

「!!」

「先生は忍としての扉間様のことを知らなすぎる。これから知れば知るほど、きつと先

生の気持ちは揺れる…卑劣と呼ばれるあの人の本性を知っても、愛して居られるかな？
…」

そう言つてカガミは写輪眼の目でほくそ笑んだ。

…卑劣。知っているわ。私がきつと一番知っている…

夕方の家路を一人、トボトボと歩きながら芙蓉は心の中で呟いた。

…それでも、私は扉間さまを心から愛してる。もうマダラさまのことなんて…
ほんの少しだけ陽が傾いて色を薄めた空を見上げると、再び、先ほど見たカガミの写輪眼とマダラの写輪眼が重なって見えた。芙蓉は急いで下を向き、目を閉じる。

忘れよう。もう思い出さない。

今日の事も。

過去の事も…

おしまい

【 if you XXX No. 5】卑劣使いの嫁（も
卑劣）前編

「そこをなんとか…お願いします！扉間様!!」

「他を当たれ。その役目、俺である必要性が無い。」

「で、すから、扉間様は女性だけではなく、男性からも憧れの存在で…。」

若い編集部員の男が、先ほど説明した事を繰り返して説明しようとすると、それまで隣で黙っていた四十代の男が口を開いた。

「あの所で、扉間様は先日、革婚式（結婚三周年）を迎えられたとか。おめでとうございます。」

「は？…ああ。それがどうした。」

「お二人はご結婚前の同棲、許嫁の期間を含めると随分長い間ご一緒にいらつしやいますよね。」

その男は机に両肘をつき、両手を組み合わせると、そうにこやかに扉間に言った。若い編集部員はぎよっとして男の方を見る。扉間に結婚の話はNGの筈では…？

「だつたらなんだ。お前には関係無いだろう……私的な事を詮索する気ならもう帰れ！」
「大変失礼しました。お二人が長い間、仲睦まじくいらつしやる秘訣を教えてくださいたくて……ウチは結婚して二十年近く経ちますが、子供が独り立ちしてからは会話すらままならなくて、いやはや羨ましい……ははは」

その言葉に扉間は荒げたチャクラ、そして怒りで強張らせた顔を少しだけ緩めた。

この日、木ノ葉の里の男性ファッション情報誌の編集長と若い編集部員が、扉間のインタビュー掲載とモデルとして誌面に登場してほしいと依頼にやってきて、扉間の参謀室で机を挟み三人で話をしている。だが、扉間は派手に目立つことを嫌い即答で断つた。しかし若い編集部員が粘つてなんとか説得しようと悪戦苦闘していたのだった。

「扉間様はさぞ奥様に対していつも愛情を注いで、お気遣いもなさつていらつしやるのでしようね。いや本当に素晴らしい！」

顎に少し髭をたくわえ、四十代にしては若々しい男前の編集長は少し頭をかしげ、目を細めて白い歯を覗かせながら大きな笑顔で言った。

「……」

扉間はその言葉を聞くと、黙つて腕を組んだまま椅子にもたれ、顔を逸らし、鼻から息をふーつと吐きながら何度か瞬きをした。

その様子を見て若い編集部員が編集長と顔を合わせ、目が合うと軽く頷いた。そして

続いて扉間に質問をする。

「結婚記念日には何かお祝いをされたのですか？」

「・・・いや。特には。」

「では、奥様が喜ばれるようなサプライズプレゼントをなさってみてはどうでしょうか？」

若い編集部員は目を輝かせて言った。扉間の反応を待たずに編集長がそれに言葉を畳みかける。

「いいですね。ぜひ私たちにもお手伝いさせて下さい！」

「はあ？・・・必要ない！余計な世話だ・・・」

「・・・そうですね。申し訳ありません。出過ぎた事を申しました。先日、火影様にご協力頂いた時、コーディネートした服でミト様をデートに誘ったら大変喜ばれたと言われたものでつい、凶に乗っておりまして・・・。本日はお忙しい中、お時間を頂きありがとうございます。またいつかご協力お願いします・・・では我々はこれで・・・」

編集長はそう言うのと、隣の編集部員を促し一緒に席を立とうとした。

「・・・さつき、柱間とセツトの企画だと言ったな？」

「はい。そうですね・・・」

「柱間がしたのに、俺はしないと妻が知れば機嫌を損ねるかもしれん・・・それは厄介だ。

少しだけなら……出てやってもいいぞ。」

「本当ですかあつ？」

若い編集部員は立ち上がって扉間の方に身を乗り出し目を輝かせた。ただ、その輝きは驚きというより演技がかかっているのだが、扉間はそれに気付かない。

「ありがとうございます。奥様が惚れ直すような素敵なコーディネートで撮影させて頂きますので、お任せください。」

「…別にそんなことはどうでもいい。家庭内に波が立つのが嫌なだけだ。但し。少しだけだぞ。私的な質問にも一切答えん。いいな！」

◆ こうして扉間はまんまと雑誌編集長にのせられ、雑誌にも載せられることになった。

「どう？美味しい？」

卵焼きを口に入れて咀嚼し始めると、不意に芙蓉から尋ねられ、扉間は思わず顔を上げた。

「…ああ。いつも通りだぞ。」

「そう…良かった…」

「何だ急に。」

「いいえ。今日はお塩を多く入れ過ぎた気がしたので… “いつも通り” なら良かった

わ。」

芙蓉は微笑んでそう言うのと、自分も卵焼きを口に入れると、うん美味しいと呟き、少しだけ俯いて食事を始めた。扉間はその様子に、芙蓉が自分を気にかけてくれていると思ひ、可愛らしいと感じた。そして雑誌に登場する件を思い出し、再び目の前で上品に食事をしている美しい妻を見据えると、何とも言えずワクワクしてくる。それを気付かれまいと片手で新聞を広げた。

「朝ごはんくらい、ゆっくり食べたらどうですか？」

「いつも言ってるだろ。時間を有効に使っているだけだ。」

芙蓉は肩で小さく溜息をつくと上目遣いで、新聞と食事と交互に見ている扉間を見つめた。しかし扉間はその視線に気づかない。

扉間の言うことはいつも正しい。

しかしいつからか、芙蓉はそれに従う中で二人の心がすれ違っている様に感じてしまっていた。決して仲が悪いわけでも、扉間が優しく無いわけでも、互いの愛情が色褪せたわけでもないのに、二人で居ても時々、こうして寂しさを感じてしまうのである。

・・・もつと私を見てほしい。私に関心をもつてほしい・・・

しかし、芙蓉はその寂しさをいつものように自己嫌悪で蓋をした。

結婚後も相変わらず扉間は参謀として里の為に激務をこなしている。それと同時に

弟子たちの指導や術の開発などにも時間を割き、毎日多忙である。

・ ・ ・ なのに、私はなんて我儘なの…

二人、同じ方向を見て歩いているだけで幸せなのに…

私は扉間さまを理解して、すっかり支えないといけないのに…

ちなみに芙蓉は今でも、うちは私塾で週三日、教師を続けている。

扉間と共に、木ノ葉の里の役に立てていることは大きな幸せであり、芙蓉の誇りだった。

ふと芙蓉は扉間の左手を見ると、そこには互いに贈り合った白金の指輪が変わりなく輝いている。

しかし、その光は少しだけ冷たいものにも感じられた。



「はい！では今度は笑顔を下さい。お願いします。」

・ ・ ・ に、にっこり…

「もう少し、自然に…さりげなくでけっこうですよ。」

・ ・ ・ に、にっ…

「もう少し、もう少し自然に。力を抜いて下さい。」

「あーもっう！俺にあれこれ指図するな!!!」

「あ、今の怒った顔も良いですね。いただきました〜！」

「うっ……フン!!」

「では、少し休憩しましょうか。」

ノリノリのカメラマンに対して、扉間はイライラして顔を引きつらせている。それを見兼ねた編集長が撮影を中断した。

扉間はドスンと不機嫌そうに、赤いビロードが張られた椅子に座った。

撮影場所は火の国恩賜公園。

ここはその名の通り、里創設が決まった際に火の国によって建設・賜った公園で、大きな池を中心に伝統的な造園がされ、いくつかの東屋と池に面した大きな御茶屋がある、里で最大の庭園だ。今は御茶屋の中で池を背景にして撮影中である。

扉間は用意された衣装、赤紫色のVネックニットに紺のジャケットを羽織り、タイトなワンウオツシユデニムに先のとがった黒のチャッカーブーツを履いている。

ところが、最初はポーゾングへの注文だけだったのが徐々に表情への注文が入り始めると、扉間は目に見えて苛つき始めた。確かに怒った顔も人気があるようだが、ここはどうしても自然な笑顔が欲しい。

椅子に座った扉間にヘアメイクの女性が近づき髪と服を直す。そして若い男性編集部員が冷茶の入った切子グラスを、黒光りする漆塗りの机の上に茶托と共に置く。扉間

は直ぐにグラスを手に取り、ぐいっと一口飲んで大きな溜息を吐く。

それを少し離れた所で見ながら、編集長がカメラマンに何かを耳打ちした。それから扉間の向かいの椅子に座った。

「お疲れ様です。申し訳ありません。色々注文してしまいました…あと少しで終わりますので。」

「撮影とは服を着て撮っておわりではないのか？あれこれ、表情にまで指図されるとは聞いていないぞ。」

「ははは…すみません。でもこちらも皆プロです。この仕事に誇りを持っています。扉間様の魅力を最大に引き出し読者に伝える為に必死なんですよ。どうぞお許しく下さい。」

「…そうか。」

『仕事に誇りを持つている』…その言葉を聞くと、扉間は苛立ちを収め、今しばらく協力しようという気持ちを切り替えることにした。

「あの、ところでその左手の指輪。素敵ですね。とてもお似合いですよ。」

「あ、ああ…仕事以外の時には着けている。」

「もしかして、奥様からの贈物ですか？」

「…そうだ。」

「いや素晴らしい！あんなに美人で知的で、そのうえ扉間様にこんなにお似合いの指輪を選ばれる高いセンスをお持ちだなんて。そんな女性はまずいないですよ。」

・・・当たり前だろ。芙蓉以上にいい女なんて、居ない・・・

思わず扉間は顔を緩ませ、余裕の表情でまたそつと切子グラスを口に運んだ。

「奥様は料理の腕前も素晴らしいとか。もう非の打ちどころが無いですね。」

「・・・まあ料理はあいつの趣味のひとつだしな。だが時々作り過ぎるのが玉に傷だ。」
「あはは。でもそんな所もまた可愛らしいんじゃないですか？」

「・・・」

その質問には答えなかったが、扉間は編集長と目を合わせると、無自覚に微笑んでしまった。その顔を見て、編集長は更に言葉を続ける。

「しかも奥様はご結婚後も教師を続けながら、重責で多忙な扉間様を支えていらつしやるんですよ。普通出来ませんよそんな事。本当に心から尊敬します。」

扉間は目を細め感慨深げに微笑みながら、両手で握った切子グラスに目を落とす。

「ああ。妻には本当に感謝している。」

「本当にお二人共、素晴らしいご夫婦ですね・・・さて。そろそろ撮影再開しましょうか。早く奥様の待つお家に帰って頂くためにも。ね！」

そう言って編集長は白い歯を覗かせて大きく笑うと、両膝に手をつけて勢いよく立ち

上がった。扉間もゆっくり立ち上がる。

「いやー良い表情撮れましたね！さっすが編集長！御見せしました！」

若い編集部員がさっそく現像した写真を見ながら大喜びしている。

「ああいうタイプは正面からぶつかつてもダメなんだよ。まあそれにしても想像以上に奥さんにベタ惚れだったな。ははは。」



こういう夜に限って芙蓉は居ない。

今夜芙蓉は、ミト、樹と三人で久しぶりの女子会に出かけている。

扉間と芙蓉の結婚披露宴をきっかけに、芙蓉とミトは会って話すようになり、樹とは同じ風通使いのくノ一ということもあって三人はすっかり仲良くなっていた。

昼間から昂っている情熱、いや欲情を持って余しながら、扉間は今日の撮影後に編集長から渡された雑誌のバックナンバーを広げて読んでいた。

「つたく、兄者め、ノリノリじゃないか…火影の威厳が全く感じられんな。あ、別に日頃から威厳は無いか…」

誌面でなんとも言えない不思議なポーズをきめ、モデル気取りで写っている柱間のページを見ながら扉間は苦笑した。

これまでこういった雑誌には一切関心は無かったが、読み始めるとなかなか興味深

い。ついつい読み進めてしまう。

「……」

『LIFE STYLE』のコーナーの特集に扉間の目が釘付けになり、思わず雑誌に前のめりになった。芙蓉も、当然他の誰も居ないのに、つい周りを見回して誰も居ないか確かめてしまう。そしてその特集記事を読み始めた。



「えっ！美味しいも言わないの？あり得ん！私がビシツと言ったげようか？」

樹が腕を組み、眉間にしわを寄せて息巻いた。

「う、うん：でも、美味しいって思ってくれてるのも、感謝してくれてるのは解ってるの。笑顔とか箸の進み具合とか：」

芙蓉が興奮気味の樹を宥めるように、扉間のフォローした。

「でもせっかく芙蓉さんが頑張って毎日、朝・お弁当・晩、毎食作っているのだから、たまには美味しいとハッキリ名言すべきよ。あの柱間様ですら『上手いぞガハハハ』って毎回、わざとらしく大袈裟に喜ぶわよ？」

ミトも少し眉間を寄せつつ、頭をかしげて苦言を呈した。

「美味しいって言って欲しいというか：要は私にもつと関心を持ってほしいの：：かも。」

「まあ確かにあの人、五影会談で協定締結してから更に激務だもんねえ…。でも結婚す

る時に芙蓉のことを一生愛する、守るつて宣言したくせに、たった三年でこんな想いさせてるなんて許せないっ！」

寂しそうに俯く芙蓉と、更に息巻く樹を見て、ミトは少し苦笑しながら言う。

「火影である柱間様もつとしっかりとっかりしていてくれれば…そういう意味では私も少し責任を感じてしまっわ…」

「そ、そんな！火影様は火影様にしか出来ないお役目を果たしていらつしやいます！」

芙蓉は顔を上げ焦つてミトに向かつて言った。

「扉間様が柱間様を火影たるものにしてるのは事実だし、扉間様が居なくなつたら里は立ち行かなくなる…でもね、仕事を理由に女に寂しい想いをさせるのは、いくら仕事が出来てもイイ男とは言えないと思うの。だつて一日二十四時間しか無いのは女も男もみな平等。仕事を理由に家庭を疎かにするのはただの言い訳よ。」

ミトが真剣な顔をして芙蓉に言った。

「そうだよ！ミト様の言う通りだ！あんな奴もう放つといてウチにおいでよ！」

「で、でも…いくらなんでもそれは…」

「家出したつて男は鈍感だから何故出て行つたかなんて気付かないし解決にはならないわ。それに芙蓉さんが居なければ本当に支障が出来るでしようし、里まで困るわ。」

三人がうーんと考え込み、沈黙が訪れる。

三人の手元にあるミルクティーは、もうすっかり冷めてしまっている。ケーキの皿は既に空だ。

「…あ！そうだ！だったらショック療法だよ！！ドッキリ仕掛けるのはどう？好きな男が出来たから別れてくれつつその男を紹介して反応を見んの。なんだかんだあいつは芙蓉にベタ惚れだし、絶対ショック受ける！あ、勿論すぐ私たちが出て行くよ？」

「ええっ！！流石にそれはやり過ぎだよ…それに扉間様が『別れてもいいぞ』って言ったら私、死んじゃう…」

そう言つて芙蓉は本当に泣き出してしまいそんな顔をした。

「ウフフ…大丈夫よ。扉間様は絶対に芙蓉さんと別れない。言い切れる。それに死ぬのはその紹介された男のほうだろうしね。アハハ。」

「……」

ミトの言葉に、樹と芙蓉の頭には荒ぶる扉間の顔が浮かんだ。

しかし、二人のその想像にはかなり大きな差が在るのだが…。

「あははは！ミト様ってほんと冗談がお上手ですね！」

そう言つて笑う芙蓉の肩に、樹がポンと手を置いて満面の笑顔で言う。

「うん。やめとこうか。その案は！」

……三十分後……

「いかに日頃の芙蓉さんの言動・性格が扉間様にとって有難いものなのか気付かせ、思い知らせるってことね？」

ミトがくりつとした目でニッコリして、顎に人差し指を当てながら言った。

「そう！ 芙蓉も女学校で演劇すごく上手かったじゃん。できるって！」

芙蓉は、大きな目と大きな笑顔で同意を求めている二人の顔を交互に見て少し俯いた。

「でも、どんなキャラを演じれば良いのかなあ？」

「ここに良い見本が居るじゃーん？」

「…そ、そんな！ミト様を演じるなんて畏れ多いわ！」

「ちっがーう!! 私、わ・た・し・だよっ!!」

二人のやり取りを見て、ミトはアハハハと口に手を当て大笑いしている。

「樹ちゃん?…うん…確かに扉間さまにいつもつつかかると、遠慮は無いし、言いたい事ズバズバ言っちゃうし、とにかく失礼な事ばかりしてるよね。なるほど！」

その通りなのだが、改めて芙蓉の口から説明されるとなんだが複雑な気持ちになり、樹は苦いものを口にした時の様な顔をして肩をすくめる。そして、それを見てミトがまた更にアハハハと大声で笑い、芙蓉に言う。

「アハハハ…うん、樹さんをお手本にしてみたらいいんじゃない?…ウフフツツ…」

あまりに大笑いしているミトを見ながら、芙蓉は、本当にミトはそう思っているのだろうかといささか疑問に思ったが、確かに樹の様な性格を真似てみるのは良いかもしれない。

「じゃあ私、やってみる！この先ずっとモヤモヤ自己嫌悪しながら過ごしたくないし、頑張ってみよう！」

三人は笑い合った後、カップに残った冷めたミルクティーを飲み干し、新しい飲み物と追加のケーキを注文して作戦会議を始めることにした。



収穫を終えた畑に白菊、黄菊、紫菊が咲き乱れ秋麗の風景が広がる。

今日も穏やかに晴れた朝である。

扉間はいつもの様に朝刊を広げて朝食が出来上がるのを待っている。

しかし、その心は穏やかではない。

今日は自分が登場している雑誌が刷上がり、この後、編集長が撮影時に着用した服一式とその雑誌を届けに来る予定である。

芙蓉が手際よく朝食と弁当を同時に準備している後ろ姿に目を遣る。

あの雑誌を見たら、芙蓉はどんな反応をするだろうか：期待と不安で胸が高鳴る。

「今日は早く帰って来られるんですよね？何時頃になりそうですか？」

芙蓉が出来上がった味噌汁と焼き魚を盆に載せてこちらに來ながら訊いた。

「あ、ああ……六時には帰宅できるぞ。」

「久しぶりにゆつくり夕食が食べられるわあ。お酒も何種類か用意します?」

「そうだな。ありがとう。お前に任せる。」

二人はテーブルに着いて朝食を始めた。

芙蓉は味噌汁の椀を口に着け、そつと扉間の顔を見る。

芙蓉もまた心中穏やかでは無かった。

今夜は、ついに、先日女子会で考えた作戦を執行するからだ。

上手くいくだろうか……演技をするのは数年前、水の国の女『コウ』を演じて以來であ

る。

しかも今回の相手は扉間である。演技を突き通せるか不安だ。

自ずと二人の間に無言の時間が流れていた。



「あら、扉間様。まだ柱間様はお帰りではありませんよ?」

扉間の訪問を知らされたミトが、急いで扉間の居る居間へやって来た。

「い、いや……今日はミトに話があつて来た。」

「あら私に?……ほら、母上はおじさまと大切なお話があるの。あなたたちはお部屋に

戻つて居なさい。」

「えー私もおじさまとお話したい!」「私も一緒にするう〜」

自分と一緒に居たいとぐずる可愛い姪たちを見て扉間は微笑み、すまないまたなど言つて謝り手を振る。

ミトは使用人を呼び、長女と次女を部屋の外へ出して扉間と二人になった。

「で、お話つて?」

「あ、ああ…えつと…。先月、兄者とデートして貴女がとても喜んだと聞いたんだが…その、何がそんなに良かったんだ?」

扉間は膝の上で組んだ手の指を何度も組み替えながら、顔を少し赤らめて訊いてきた。ミトはその様子を見て、扉間がなぜそんな事を聞きにやつて来たのか直ぐに察しがついた。しかし…

「サプライズ感、ですかしら。洋服の夫を初めて見ましたし、大きな薔薇の花束も驚きました。突然子供たち抜きで二人でお洒落なお店に連れて行かれ、そこで日頃の感謝を口にして頂けたのも嬉しかったですわね。」

「そうか…やはりサプライズか…あ、いや、兄者でもそんな手の込んだ事が出来るんだな…それなら仕事にも活かして欲しいが。ハハ…」

扉間は口では皮肉を交えながらも、なぜかホツとしたように笑つて見せた。

「でも、それはきつと日頃から意思疎通が出来ているからだと思えますわ。」

「?」

「日頃から態度だけでは無く、言葉でお互いに愛情と感謝を伝えているからこそ、大きなサプライズを素直に喜べるんだと思います。だって毎日餌を貰えずお腹を空かせて泣いているのに、突然、食べきれもしない大きな餌を貰ってもただ不安になるだけですよ。」

「うむ。そうだな…」

・・・フン。釣った魚に餌をやらないか。その点、俺は全く問題無いな。・・・
余裕の表情をして腕を組んでいる扉間を見て、ミトが言葉が続ける。

「芙蓉さんなら飢え死する前に自分で餌を探しに行くでしょうね。まあ彼女なら実際、教師のお仕事でご飯は食べて行けるでしょうし。」

「!!」

思ってもよらないミトの刺々しい言葉に扉間は驚き、ぎよつとした顔をした。しかし直ぐにとても不機嫌な顔になる。

「俺が餌を与えていないとでも…?」

「いいえ。もしもの話ですわ。サプライズ、成功すると良いですわね。」

ミトは悪びれた様子も無く、にこやかな顔で答えた。

「ど、どうしてそれを…」

「どうしてって、バレバレですわよ？ウフフフフ！…とにかく、常に芙蓉さんを労わってあげて下さいね。」

「ああ。解っている。」

そう言つて扉間は立ち上がり、帰ろうと背を向ける。

「だが、芙蓉が食える餌はこの里には無いぞ。いやこの世界中どこにもな。」

「そ、そうですわね…お二人以上にお似合いの夫婦は居ないものね。フフ…」

…怖っわ！普通チャクラ発動してまで言う!!この人いま卑劣な事考えてるわよ、絶
対…

ミトはドン引きしながら扉間を見送った。



扉間はムカムカとした気持ちを抑えながら玄關の小上がりに腰かけ、隣に大きな紙袋二つを置き、靴を脱ぎながらたぐいまを言う。

しかし、芙蓉の返事は無い。

「おい！芙蓉、帰ったぞ…居ないのか！」

「そんなに大声で呼ばなくつたつて聞こえてるよ！こんなに小さな家なんだからさあ
！」

そういう言いながら芙蓉が居間から出てこちらに大股で歩いて来る。

扉間はいつもと違う芙蓉の様子に驚き、言葉さえ出ない。

「おかえり。もう六時を三十分も過ぎてるよ！あんた、六時には家に着くつて言っただろ！仕事と同じく時間は守りな！」

「・・・・・・・・・・」

「何ぼさつとしてんのさ。さつさと上がつて着替えて来ておくれ。もうとつくに夕飯の用意できてんだ。」

「・・・・・・・・・・」

扉間は冷や汗しか出ない。言葉が出ない。

そんな扉間を無視して芙蓉はズカズカと居間へ戻つて行つた。

「・・・・・・・・な、なんなんだ？！あれはあーっ！！・・」

「ふ、芙蓉……？」

服を着替えて居間に下りてきた扉間が、恐る恐る芙蓉に声を掛けた。

「なにー！」

「……ど、どうしたんだ？……いったい何が、あつたんだ？」

「はあ？！あんたこそ今まで何してたんだよ！遅くなつた理由をちゃんと説明しな。仕事

だから仕方ないだろとか、いつもみたいな事言うんじゃないよ？じつと待つてるあたしの気持ち、考えたことあるのか？」

「……す、すまない。兄者の家に用事で行ってミトと話していたら遅くなっちゃった。」

「フン。そうかい。さつさと座んな。今日はあんたの好きなヒメマスの塩麴焼き、白菜・人参・豚肉のスープ、春菊の白和え、ついでにヒメマスで刺身も作ったよ。」

「あ、ああ。ありが、とう……」

……もう、これ、一体どうしたらいいんだ!!

なんかもうツツコミすら許されてないじゃないか!!!

どう対処しろと!!

ていうか本当に芙蓉は大丈夫なのか？何か悪い病気だったり……でも口調とキャラ以外は特におかしくはないし……

「はい。お疲れ様。今日も仕事頑張ってきてくれてありがとうな。」

二人でテーブルに着き、向かいの芙蓉が徳利をこちらに向けている。扉間は急いで猪口を持って差し出した。そして注がれた酒をぐいっと一気に飲み干す。

「……んっ!」

すると芙蓉が猪口を持ち、自分の方に差し出している。

「あ、ああ。」

これまで芙蓉から酒を注いでくれと催促してきた事など無い。初めて命令された。僅かに震える手で芙蓉の猪口に酒を注ぐ。注ぎ終わると芙蓉がまた口を開く。

「おい。なんか言う事は無いのかい？」

「え？は？・・・えつと、お、お前も、ご苦労だったな・・・」

「それだけか？」

「…他に何と言えと言うんだ？！てか、お前ホントさつきからおかしいぞ！いったいどうしたんだ？！」

扉間はついに怒りを露にして言った。芙蓉は思わずそれに怯んでしまいそうになるが、心の中でぐつと耐える。

「どうもしちやいないよ。そつちこそ、ちゃんと言葉で言わないとこつちには理解出来ないんだ。いつも、そうだ・・・」

「・・・？」

芙蓉は注がれた酒をぐいつと飲み干すと、箸を手にし、いただきますと言って食事を始めた。

扉間は何も言えず、二人は口を閉じたまま、食事を始めた。

「どうだい？味は。」

芙蓉が突然口を開き、訊いた。扉間は箸を止めて芙蓉の方を見た。

「いつも通りだ……」

「いつも通りつてどんなだよ？」

「……う、美味しい。言わなくても分るだろうが！」

「いいや、言わないと分らないな！美味しいならうまい、他にも具体的に味がどうか、きちんと口に出して言いなよ。言葉で言わないと……あたしには、分らないんだ！」

「……そうか。分った。」

扉間はそう小さく言うと、再び静かに食べ始めた。

その様子を見て芙蓉は、演技・キャラ・作戦とはいえ、罪悪感に胸が痛み、負けてしまいうようになる。今すぐこの演技を止めたい。しかし、最後までやり通さなければ意味が無い。

『言葉で言わないと……あたしには、分らないんだ！』

この言葉の真意……扉間にきちんと伝わっただろうか。言いたいことはズバツと伝えたいものの、キャラと演技の影に霞んでしまったのではないかと少し不安になる。

食事の後、扉間は早々に自室に上り籠ってしまった。

芙蓉は皿を洗いながらガツクリと肩を落とす。泣きたい……。

……扉間さま、きつと私のことすごく怒ってるわ。伝えたい事も伝わって無い気が

する・・・

後編へ続く

【 if you XXX No. 6】卑劣使いの嫁（も
卑劣）後編

皿洗いの後、風呂を沸かし、扉間の着替えを用意した。一階から二階に居る扉間を呼ぼうと声を掛けようとしたが、言葉に詰まる。いや、でもここでくじけてはいけない。「おい！風呂が沸いたよ！冷める前に入っておくれ。」

「・・・ああ。わかった。」

暫くすると扉間が階段を下りる音が聞こえ、風呂場に向かって行つた。芙蓉は食卓にうつ伏せながらそれを聞いていた。すると足音がこちらに向かつてくる。緊張で芙蓉の胸がドキドキと心拍数を上げる。

「おい。久しぶりに、一緒に入らないか？」

「・・・ああ！いいよ。」

芙蓉は顔を上げて笑顔で答えた。自分の言葉遣いはさておき、とても嬉しい。扉間もその顔を見て少しほっとして苦笑する。

「寒くなってきたから、こうして二人で入るのもいいな。よく温まる。」

「ああ・・・そうだな。あんたから誘ってくれて・・・嬉しかったよ。」

「そうか。俺もお前と一緒に入れて、嬉しいぞ。」

扉間はそう言つて向かい合つて湯船に浸かっている芙蓉を抱き寄せた。

・・・と、扉間さまあゝ・・・

芙蓉はその嬉しさに、いつもの自分に戻つて甘えたくなくなるがグツと堪える。

「なあ芙蓉。たまには洋食でも食べに行かないか？」

「え？あ、ああ。いいね。行きたいよ。いつ？いつ行く？」

いつもの芙蓉であれば自分からいつ行くかと催促することは無い。扉間が言いだすまで待っている。だがそれをきちんと言うのも、この演技をしている理由である。

「明日だ。」

「え？でも、貴：あんた、明日は仕事だろ？夜に行くのか？」

「いや、明日は休みを取つた。たまにはお前と一日ゆっくり過ごしたいんだ。」

・・・どうせ、あの二人（樹・ミト）の入れ知恵なんだろうが、いつまでこのキャラを続けるつもりなんだあ？ハア・・・

・・・と、扉間さまあゝああつ！・・・

心の中で大きく溜息を吐きながら顔では微笑する扉間。そして明らかに、はにや〜んと蕩けている芙蓉の顔は演じている『コウ』ではなく、芙蓉そのものだった。

二人は背中を流し合つた後、風呂を出た。

「今夜はセックスするぞ。」

「はっ、はあ!!」

「なんだ？嫌なのか？」

「い、嫌……では、ないけど……そんなにハッキリ言わなくても……」

「ハッキリ言葉で言わないと分らないんだろう？ほら、行くぞ」

「えっええええ……そ、そうだけど……」

芙蓉は顔を真っ赤にして下を向いたまま、扉間に手を引かれて二階に上がる。

バタン。扉が閉められた。

芙蓉は部屋の中央でまだ俯いて突っ立ってる。

……ど、どうしよう。今日はしないって決めてたのに。扉間さまの勢いに負けちゃった……演技したままするの!!でも今更断れないし……樹ちゃん、ミト様、どうしよう!!……
「ほら、来いよ。」

扉間が寝台の上に先に座って芙蓉を呼んだ。しかし、どうしていいか分からず芙蓉は固まったままだ。すると扉間はすくつと立ち上がり、芙蓉に歩み寄った。

「きやつ!……な、なにするんだよーじ、自分で行けるってー!」

抱きかかえられた。芙蓉は反射的に演技を続けることを選んでしまった。

「呼んでも来ないからだろ？」

「や、や、やつぱり、今日はやめよう！明日にしよう！な？」

ドサツ。

「俺は今、芙蓉と、セックスが、したいんだ。」

・・・二回も言葉にして言わないでえええっ！・・・

扉間が仰向けになった芙蓉の服と下着を脱がしてゆく。芙蓉はどうすることも出来ずにされるがままで、間もなく芙蓉の真つ白な全裸が露になる。

・・・よし。黙って居よう。しゃべらなければいつも通り終わるわ・・・

「今日はどの体位からしたい？」

扉間が自分も裸になりながら訊いてきた。

「えっ、いや・・・どれでも、いいぞ・・・」

「言葉でハッキリ言わないと分らないんだろう？今日は全てお前の望み通りにしてやる。その代わり、ハッキリ言葉にして言うんだぞ。」

・・・木乃伊取りが木乃伊になるってこの事ねえ（号泣）・・・

「どこから触って欲しい？それともキスからか？ほら言え！」

「き、キスからで・・・」

・・・ああ・・・死んだわ、これ・・・

チュツチュツチュツ…扉間が優しく芙蓉の唇を吸う。そして顔を上げる。
「次は？何をして欲しい？」

「えっと、じゃあ、胸を…触って…く、くれ。」

芙蓉はあまりの恥ずかしさで頭も回らず、なんとかコウの演技で答えた。

扉間の両手が芙蓉の両胸に伸び、鷲掴みにして揉みしだく。

「これだけで良いのか？んん？」

「あ、ああ…それだけで、いい。」

「そうか。じゃあ、次は？どうして欲しい？」

「……………」

……………これがずっと続くの!!これじゃ拷問だわ!耐えられない!!

こっとなつたら兎に角早く終わらせるしかないわ……

「い、入れてくれ。」

「何をだ？」

「扉間さまの……その……のを。」

「俺の何をどこにだ？ちゃんと言葉にして言え。分らんぞ。」

「……………これだ!これをあたしの膣の中に入れてくれ。」

芙蓉は何とか明言を避けようと扉間の男根を掴んだ。

「……」

扉間は黙って芙蓉の股間に手を伸ばして膣の入り口を触った。

「全然濡れて無いが？これじゃ入らんな…濡らす方法はいくらでもあるなあ…どうして欲しい？早く入れて欲しいんだろう？」

芙蓉の頭の中で、いつも扉間がしてくれる前戯がいくつか浮かぶ。しかし、それの一つ一つ全て言葉に出して指示しなければならぬのか？考えるだけで恥ずかしくて死にそうになる。濡れるものも濡れるわけが無い。

「……私が悪かったです!!ごめんなさいっ!!もう許して!」

ついに芙蓉が負けてしまった。いや必然的に負けてしまったというほうが正しい。

「ハハハハッ! やつと普通に戻ったか。ハハハ…いや、俺もやり過ぎた。悪い悪い。ハハハハッ! ……って、おい、泣くなよ!!」

「だ、だって…酷いっ…酷すぎよっ…あんまりだわっ…」

芙蓉は顔を覆って泣き始めてしまった。

「俺が悪かった、悪かったって!泣くなって!!…」

扉間は寝台に横になり、芙蓉を抱き締め頭を撫でて慰めるが芙蓉は泣きじやくる。相当辛かったようだ。扉間はつい乗り気、いや、やり過ぎた事を、僅かだけ、反省した。背中もさすり芙蓉が泣き止むのを待ちながらも、扉間の顔は明らかにやけている。

そしてようやく芙蓉が泣き止んだ。

扉間から身体を少し離し、扉間の胸元を見ながら言葉を絞り出す。

「・・・私も、ごめんなさい。あんな演技しちやつて・・・。言葉でちゃんと伝えて欲しかったの・・・色々。美味しいなら美味しい。愛してるなら愛してるって・・・それに、結婚する前みたいに、もっと私に関心を持って欲しかったの・・・」

扉間は夕食中の会話で、その意味に気が付いていた。

そうして直ぐに気が付くことが出来たのは、夕方、ミトに言われた言葉のお陰でもあった。

“釣った魚に餌をやらない”

そんな自覚は無かったし、むしろ自分はその辺の夫よりも妻を愛し、それを充分伝えられているとさえ思っていた。だが、ミトの発言といい、芙蓉の突然の演技といい、自分に至らない点があり、そのことで芙蓉を悩ませているのだと分った。

それは、きちんと言葉で表現し、伝えられていないという事だった。

芙蓉の性格だ。面と向かって不平不満言うことは出来なかつたのだろう。そこにきて、親友二人から入れ知恵された結果がこれだろう。

・・・それであんな演技をし、俺に不満を伝えようとしていたのか・・・

「お前には辛く寂しい想いをさせてしまっていたな・・・これからはもっと感謝や感想、愛

情をきちんと言葉で言うよう気を付ける。許してくれ。」

そう言つて扉間は芙蓉の額に口づけをした。

ようやく芙蓉は笑顔を見せ、二人は顔を見合せて笑つた。

そして、芙蓉は演技をすることになった経緯と理由を改めて扉間に説明して聞かせた。

「でも、扉間さまがあんな対応してくるなんて思つてもなかった…本当に死ぬほど恥ずかしかつたんですからねっ！」

「いや、スマン。俺も悪ノリしすぎた。お前が頑なにキャラを突き通すから、つい楽しいや、ムキになつてしまつてな。はははは。」

「た、楽しい？…ひどいっ！」

芙蓉はそう言つて頬を膨らまし、扉間の胸に抱き着いた。直ぐにその身体を扉間が離し、芙蓉に優しく口づけをする。そして再び仰向けにし、芙蓉の上に覆いかぶさると芙蓉の両手首を握り、耳元で囁く。

「…お前だつて、して欲しい事はきちんと言葉で言わんと俺には伝わらないんだぞ？…昔も言つただろ。お前が望むことは全てしてやると…」

芙蓉はその言葉と熱い吐息に胸が高鳴り、身体が熱くなつてゆく。

「でも…恥ずかしいんだもん…」

「だろ？俺だつて恥ずかしいんだ…お互い様つてことだ。」

扉間は左手で芙蓉の乳房を掴み、もう片方の乳首に吸い付いた。そして舌で舐め回す。

「あつああんっ…それ、すごく気持ち良いわ。扉間さま…」

「…確かに。そう言葉で伝えられると更に嬉しいものだな。」

二人は見つめ合った。

「愛してる」

言葉が重なった。

芙蓉は身体を起こすと、扉間の両肩を持つて仰向けにさせ、今度は自分がその上に覆いかぶさった。

「重くない？」

「フツ。いやまつたく。」

芙蓉はその言葉を聞くと扉間の首筋にそつと口づけをし、舌でゆつくり上下させてなぞつてゆく。

「ねえ、扉間さまも首、気持ち良い？」

「ああ…気持ち良いぞ。」

芙蓉は舌を首筋から鎖骨へとなぞつていく。その快感に扉間は目を閉じ、芙蓉の頭を

そつと抱える。そして今度は鎖骨へチュツチュツと口づけを始めた。

タートルネックを着ることが多い扉間の鎖骨は、きつと妻である自分しか滅多に見られないだろう。かつて結婚前、自分だけが知っている扉間の情熱を知った時の、あの何とも言えないむず痒さと嬉しさと胸がときめく。

そしてその唇は扉間の左の乳首に辿り着き、舌で丁寧に舐め始めた。

「ねえ、乳首も、気持ち良い？」

「ああ・・・そこも、気持ちが良いな。」

芙蓉は扉間の顔を見てニコツと微笑むと、今度は右の乳首を舐め始める。扉間はその芙蓉の背中を指先で触れるか触れないかで愛撫する。

「あつ・・・あつ・・・」

扉間の愛撫で芙蓉が乳首から口を離し、背中を反らす。

そして今度は扉間が芙蓉の両乳首を両手で弄び始めた。

「あああんっ・・・あつあつ・・・はああんっ・・・」

芙蓉は果ててしまいそうになり、急いでぐつと扉間の男根を握った。

「・・・ふふっ。扉間さま、こんなにおおきくなつてますよ？・・・早く入れたいの？」

「・・・ああ・・・早く、芙蓉の中に、入れたい」

「だーめ」

芙蓉はそう言うのと扉間の足の間に入り、大きくなった男根を両手で握った。それ越しに、扉間の顔を見て不敵な笑みを浮かべる。

「……？」

「扉間さまがもう我慢の限界ってなるまで、入れさせてあげないわ」

そう言うのと芙蓉は男根を啜えた。何度か大きく口を開けながら、頑張つて口の奥まで啜えると、舌と唇を使ってしゃぶり始めた。

じゆるじゆるじゆるじゆる……

大袈裟に音を立てる。

「うっ……」

思わず扉間が身悶えて声を洩らした。その声を聞くと芙蓉は更に激しくしゃぶりつく。

「うっ……あっ……芙蓉……」

芙蓉はすぽっと男根から口を離した。そして目を細め快感に浸っている扉間を見て、再び不敵に微笑むと、右手で男根を掴んだ。そして唾液でねばつく男根を激しくしゃぶり始めた。

「……っ!!!」

……ヤバイ、ヤバイっ！いく!!……

「ふ、芙蓉・・・もう、もうお前の中に入れさせて、くれ」

「ふふっ。だめですわ」

そう言つて芙蓉は扉間の左の乳首を舐めながら、さらに右手を動かし、しごき続ける。

「芙蓉！だめだ！でる！やめろつて!!・・・」

焦る扉間の言葉も完全に無視し、芙蓉は刺激を止めない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・つ!!!うああつ!!!」

ついに扉間は果ててしまい、芙蓉の手と扉間のへその上に大量の精液が射精された。

「あらあら。扉間さまつたら、お行儀が悪いですわ。ちゃんと私の中で出さないとだめじゃないの。ふふっ。」

扉間はいつになく大胆でいやらしい芙蓉の様子と、味わったことのない敗北感で顔を赤らめ、それを右腕で覆つて隠した。

射精したばかりの男根は、その何とも言えない興奮で直ぐに再び大きくなる。芙蓉も精液で更にもるつく男根を再びしごき始めた。ぬるぬるとした感触が芙蓉の膺の中を連想させ、あつという間に男根はすっかり大きく、固くなつてしまった。

「芙蓉・・・頼む。もう中に、お前の中に入れさせてくれ」

「はっ」

芙蓉は子供の様な屈託のない笑顔で返事をする、扉間の上に跨つた。

「!?」

そして扉間の男根を支えながら、自分の膣の中へ挿入する。

「ああんっ……気持ち良い。扉間さまのおちんちん、すっごく気持ちが良いわ。大好き」

……だああああああつ!!!

さきほど芙蓉をいじめて無理やり言わせようとしていた言葉を、いま、言われ、扉間が恥ずかしさで思わず乙女のように顔を両手で覆って隠した。

「ふふふっ。扉間さまつたら、かわいいっ♪」

「うっ、うるさいわっ!!!」

扉間は芙蓉の腰を両手で掴み、鬱憤を晴らすように激しく芙蓉の中を突き上げた。

「あんっあんっあんっあんっ……ああっ……ああんっ……やっ……激しいっ……」

芙蓉の乳房と身体全体が激しく上下する。芙蓉は天を仰ぎ、快感の頂点に向かってゆく。

「ああっだめえ……もう、いっっちゃうっ……扉間さまあつ!!!」

「俺もお前の中にめいっばいぶちまけてやる!」

「ああああああああんっ……んっ……んっ……」

芙蓉が激しく果てた後、続いて扉間も果ててしまった。

・ハアハアハアハア……

この夜、二人は久しぶりに思う存分、時間を忘れて夜の営みを愉しんだ。

◆ 「悪いな。だがすぐ終わる。先に恩賜公園の御茶屋に行つてくれ。」

「分りました。焦らなくて大丈夫ですよ。私もお庭見えますから。」

「ああそうだ。お前の部屋（いまは二人の寝室）の入り口に茶色の紙袋が置いて在る。後でその中を出しておいてくれないか。頼む。」

「はい……あつ……いつてらつしやいませ！」

芙蓉が紙袋の中身は何なのかを聞く前に扉間の姿は消えてしまった。

二階に上がつて寝室の扉を開けると、すぐそこに茶色い紙袋が在った。芙蓉はしゃがんでそれを開けて中を覗き込む。

「どうやら衣類のようだ。だが扉間の服にしては鮮やか過ぎるような……手を入れてそれを引っ張り出した。」

「……！！」

それは、女性ものの洋服だった。

明るい赤紫色のベロア生地、スカートが綺麗なドレープを描いているひざ丈のワンピースだった。襟と袖には白いレース飾りが付いている。

「……素敵……」

芙蓉は暫くワンピースに見惚れた後、ふと紙袋の中に目を遣ると、袋の中にはまだ白いコートが入っており、その横に水色の封筒が挟まって入っていた。

急いで封筒を取り出し開けてみると一枚、便箋が入っていた。

『芙蓉へ 今日はこの服を着てきてくれ 楽しみにしている 扉間』

扉間の文字でそう書いてあり、芙蓉は思わず目をぎゅつと閉じて笑顔になり、その手紙を胸に抱き締め身をよじらせ深呼吸をした。喜びで胸が熱くなる…嬉しい。

芙蓉は逸る気持ちをなんとか抑えながら、早速その服に着替えることにした。



「扉間さま・・・先に、来てたのね。」

その声に茶室の窓枠に手を掛けて池を眺めていた扉間が振り返る。無論、芙蓉の気配にはとづくに気づいていたのだが、自分から先に振り返ることが出来なかった。

「あ、ああ。早く終わったんだ・・・うん。よく、似合ってるじゃないか。それ」

「フフツ！そうですか？良かったあ！」

芙蓉はそう言つてその場でくるつと一周回つて見せる。スカートのドレープが空中で美しい流線を描くと同時に芙蓉がまた前を向いた。

「扉間さま！こんな素敵なお洋服、ありがとうございました！…つて、あ！扉間のセーターの色とお揃い？…扉間さまもとっても素敵！カッコいいですわ!!!」

そう言つて芙蓉は扉間に駆け寄つた。目を輝かせ自分を見上げてゐるその視線に恥ずかしくなり、「扉間は目を逸らして言う。」

「そ、そうか？…いや、せつかく貰つた服だからな…着てみようと思つて…」

扉間はそう言つて漆塗りの机の上に置いて在つた雑誌を手に取り、ページを捲ると芙蓉の目の前に差し出した。

「ほ、ほら…これだ。」

「あら!!!扉間さまが雑誌に載つてる!!!…あ、しかも、この写真、この場所ですね!わあ〜扉間さま本物のモデルさんみたい…つて、これいつ撮影したんですか?知らなかつた!」

芙蓉は驚きと感動で更に目を輝かせ、扉間の写真が載つてゐる数ページを何度も捲り返して写真をじっくり眺めてゐる。

写真はカメラに向かつてポーズを取らされて撮つた写真だけでは無く、休憩時間に椅子で冷茶を飲みながら編集長と雑談してゐた時の顔も載つてゐた。

最初は素に近い自分の表情（かお）を撮られて恥ずかしいとも思つたが、自画自賛ながら、なかなかイイ感じ（男前）でもあると扉間は思った。

本当は昨夜、雑誌を見せるつもりだった。しかし、芙蓉の思わぬ演技によつてその夕イミングをすっかり失つてしまつたのだ。しかし、撮影場所で見せるというのもいいか

もしれないと思つて扉間は今、見せた。

芙蓉は扉間に促され、赤いビロード張りの椅子に腰かけると、扉間のインタビュー記事を読み始めた。扉間は片膝をついてしゃがみ、一緒にその雑誌を覗き込む。

「…うん、うん…なるほど…流石、扉間さまですね。素晴らしい言葉ですわ!!!…えっと、それから…奥様に一言?…うん、うん…扉間さま…いつも私に対してこんな風に思つて下さっているのね…嬉しい!ありがたい!ありがとうございます!!しかも、それを大勢の人が見る雑誌で言つてくれるなんて…大丈夫でした?」

「ん?ああ……つて、はあ!!」

芙蓉の言葉に扉間は若干の違和感を感じ、芙蓉の目線の先の文章を読み、驚いた。

『左手に光る指輪は奥様の贈りもだそうで、任務以外では必ず着けていると嬉しそうに教えて頂きました。「妻は料理が趣味でつい作り過ぎていしまうのが玉に傷」と言いつつ顔ほころばせるその表情からは愛情が溢れていました。最後に「仕事と家庭を両立しながら自分を支えてくれていることに心から感謝している」と奥様に感謝の言葉を述べられていました…』

…つて、俺は自分でこんな事言つてなあ——いっ!!!

「どうかしました?」

「い、いや…なんでも無い…ははは。」

・・・しまった。昨日、編集長が見せてきたページしかチェックしてなかった！
まだ後ろにもインタビュー記事が載っていたとは・・・

って、あの休憩時の写真といい、この休憩時の会話といい、まんまとあの編集長に嵌められたな・・・

「扉間さま：私、昨日は本当にごめんなさい：扉間さまは私に今でもしつかり関心をもってくれていて、感謝までしてくれているのに：私ったら・・・」

扉間の動揺に気付かない芙蓉は悲しい顔になつて雑誌の扉間を見つめている。

「き、気にするな!!意外と、楽しかったぞ?ははは：それに言葉に出して伝え合うことは大切だ。な?ははは：はは：」

・・・言葉にしないと伝わらないとはいえ、こうも文章であれこれ書き立るのは勘弁してくれっ!・・・

「そうですよね!ありがとう!!扉間さま!」

そう言つて芙蓉は右隣にしゃがんでいる扉間に口づけをした。

ガチャツ!

「結婚三周年、おめでとーっ!!!」

ヒューヒュー!パチパチパチパチ!

「!!」

突然茶室の扉が開くと、柱間、樹、ミトが手を叩きながら乱入してきた。

「お、お前らっ！今日は休館日で貸しきりにしてあるのに！」

「だからでしょ。ここでサプライズするの丸分かりですよ？アハハハハ！」

樹はそう言うと、顔を引きつらせ固まっている扉間の顔を見て大笑いをした。

「お前がサプライズをすると聞いたからのう、俺たちもサプライズしてやろうと思つてな!!これぞ『必殺・サプライズ潰しの術!』なんてな。ガハハハハ！」

柱間も腹を抱えて大笑いしている。

「ふふっ。サプライズ、大成功だったみたいですね。扉間様。それに、芙蓉さんも。うふふふっ!・・・はい、結婚三周年おめでとう！」

そう言つてミトは椅子に座つて固まっている芙蓉に大きな花束を手渡した。

「あつ、ありがとうございます!!・・・つて、もおービックリしたあ・・・アハハハハ！」

芙蓉も入つて来た三人の顔を見ながら一緒に大笑いをはじめた。

「ひとのサプライズを潰すんじゃねえっ!!」

扉間が柱間の背後から首を絞めるが、柱間はそれでもゲラゲラと大笑いしている。

その隙に樹とミトが芙蓉に近寄つて顔を寄せる。

「ねえ、昨日どうだった？扉間の奴、驚いてたでしょ？」

「う、うんまあうまくいったよ・・・でも途中から逆手を取られて大変だったよ・・・」

「けど、いい刺激になったんじゃない？フフフッ」

「はい！それに扉間さまの“参った”って顔も見られたしスッキリしました！」

「わあそれも見てみたかったわあ！フフッ！やったじゃん芙蓉！」

柱間に向かって散々文句を言いつつ、扉間は横目でコソコソ、クスクス笑っている三人を見た。芙蓉はとても嬉しそうに笑っている。そして昨夜のことを思い出した。

「な、なんぞ？急に笑って。気持ちが悪いのう！」

「フフツ…ああ、いや。ありがとう。兄者。」

「……。フフツ。つたく、最初から素直にその一言を言わぬか！ガハハハハ！」

扉間は今のこの状況に、そして、大切な人たちに囲まれている現実に胸が熱くなる。

自分は大切な人たちに囲まれ生きている。

日頃、里の為に里全体を見渡して尽力しているが、ふと立ち止まって自分の近くを見渡した時、自分もまた大切な人たちに支えられ、愛され、尽くされて生きている事に気が付く。

扉間はこれからも愛する者の為、誰かが誰かを愛し愛されるこの里の為に、尽力していこうと心に誓った。

おしまい

扉間の旅（1）

「水遁・水龍弾の術！」

「土遁・煉瓦の術！」

ズンツ!! ブワツシヤアアア…

土遁で現れた土壁に扉間の放った水遁の水龍がぶつかると、それと同時に土壁に吸収されて消えてゆく。

…土遁の壁に、いくら水龍弾をぶつけても無駄か…

扉間はクナイを取り出して投げたと同時に姿を消した。

宙を斬るクナイの場所に影分身の扉間が現れる。そしてまたクナイを五本、敵に向かって投げた。

「フツ…無駄な事を…」

そう言う敵の背後に落ちたクナイの場所に扉間が現れた。しかし。

ビリビリビリビリツ!!!

扉間の全身に強烈な電流が走り、身動きが取れなくなった。

「貴様…土遁だけでなく、雷遁…もか…」



「ついにお前に火影を譲る日が来るとはのう！わしも年を取るはずぞ！ワハハハ！」

「つて、俺たち二歳しか変わらんだろ…それに見た目年齢は三十代くらいのままだしな。まあ兄者は外交に専念してくれた方が俺も色々やりやすい。…本音を言えばもつと早く退いて欲しかったがな…」

「初孫だ！これからはジイジ業に専念せねばなあ！…まあ、娘が結婚したいと言つてきた時は早婚だと反対したものの、いざ孫が産まれるとなるとやはり嬉しいものぞ！ワハハハハ！」

「フウ…姪っ子も結婚し、子を産む歳か…確かに…」

「なんだ、やはりお前も歳を実感しておるではないか！」

「あ？…ああ。」

火影室の机で柱間と向かい合つて椅子に座っていた扉間は、おもむろに立ち上がると窓辺に歩み寄り、里の風景を僅かに細めた目で見渡した。

里が出来てもうすぐ二十年になる。

その間、危機はいくつもあつた。

他里も出来上がり、それらとは協定を結んでいるものの、やはり対立や冷戦もあつた。

しかし、それでもなんとか、木ノ葉隠れの忍一丸となってここまで里を発展させてきた。師走という事もあってか、里はいつもより多くの人が行き交い賑わっている様に見える。扉間はつい、その人混みの中に在るはずの無い姿をまた、探していた。

「・・・そうか。もうすぐ、芙蓉の命日だな・・・」

「ああ。」

「芙蓉が生きていれば、お前たちにも子が居たかもしれんな。」

「・・・・・・・・」

「・・・すまん・・・。今年は法要の年ではないが、命日には芙蓉の所へ、お前の火影就任を皆で揃って報告に行こうぞ。きつと喜ぶ・・・」

「そうだな・・・・・・・・。兄者、ひとつ頼みがあるんだが。」

そう言う扉間の顔には、どこか陰りが見える。その様子を見て柱間は心配になった。そして扉間がこんな深刻な顔をして頼み事をしてくるのは初めてだ。思わず扉間の方へぐいつと身を乗り出す。

「な、なんぞぞ？どうした？言ってみろ！」

「火影になれば今まで以上に自由は無くなる。その前に・・・一人旅をしたい。」

「一人旅？お前ひとりでか？いや、だがかしだの・・・うむ・・・。もう行く場所は決めておるのか？」

「ああ。海を見に行きたい。年内には帰つて来る。」

「そうか…：そうだな。周りには視察と言つておけばよからう…：行つて来い!! あつ、土産を買つてくるのを忘れるなよ? ワハハハハ!」

キシツ…

居間に足を踏み入れると床が鳴つた。

この家も随分と年を取つた。

目を凝らして台所を見つめる。

しかし、その姿は見えるはずもない。

キシツ、キシツ、キシツ、キシツ…

扉間はゆつくりと二階へ繋がる階段を上る。踊り場からすぐの扉を開けてその部屋に入った。そこには冬の鋭角の強い斜陽が窓から差し込み、扉間の顔を照らした。思わずその眩しさに片眼をつむり、左手でそれを防いだ。しかし直ぐにその手を外し、目を細めてその光を真つ直ぐ強い眼差しで見つめる。やがて、また眩しさに耐えられなくなつて目を閉じた。

瞼の奥に、懐かしい姿が蘇る。

斜陽を受けて輝く亜麻色の髪、琥珀色の瞳、濡れた唇…：そして白く透き通る冷た

い両手は自分の両頬を優しく包み込んでいる。

そつと、二人の唇が重なる。

斜陽が窓枠の外に消え部屋の中が薄暗くなると、寝台の上で二人は初めて裸で抱き合った・・・

ザアアアーツという音で扉間は目を開け、現実には引き戻された。

その音は家の周囲の梢が風に吹かれ、色褪せた葉が散り積もる木の葉の雨の音だった。

落葉・・・

扉間は目の前の机に歩み寄り、その上に立てて在るいくつかの写真の一つを手を取った。

『ね?ここ、小さな錦谷みたいでしょう?本当は錦谷で結婚式したかったんですけど、流石にそれは無理ですものね。ウフフフ!』

その言葉で、目の前の白黒写真が一瞬で色鮮やかな色付きの写真に変わってゆく。そこに写る、扉間の手で肩を抱かれニツコリと微笑む芙蓉の顔はまるで生きているかのようだ。すると扉間の両手が小刻みに震え、左手薬指の白金の指輪が放つ光りも一緒に揺らいだ。

・・・ポタツ。

「フフツ…すまん。俺はこの時のような笑顔を、お前に見せてやるのがなかなか出来ん…すまん…芙蓉。だが、お前以外に俺を笑顔にさせる奴なんて、もうどこにも居ないんだから、しようがないだろ…ハハツ…」



「二泊したいのだが、空いているだろうか。」

「あ、はい。二〜三名用の十三畳のお部屋ならご用意があるのですが、そちらで宜しければ…お一人用よりはお値段は上がりますが、部屋に露天風呂が付いております、お好きな時に温泉をお楽しみ戴けますのでお勧めでございます。」

「ああ。それで構わない。頼む。」

「ありがとうございます。畏まりました。」

接遇教育がしっかりと施されているであろう背筋がすつと伸びた受付係の青年は、穏やかな微笑みで返事をする、優雅な動きで扉間の前に用紙と万年筆を静かに差し出した。

「では、こちらの宿泊名簿の欄に、お名前、性別、ご年齢、ご住所、ご職業のご記入をお願い致します。最後に誓約事項にご同意戴きましたら丸を付けて下さい。」

「…。これらは全て記入しなければならぬか？」

扉間は柔らかい口調で訊ねた。すると受付係は指をきれいに揃えた右手で、その用紙

の欄の一番下を差し、少しだけ申し訳なきような口調で答える。

「申し訳ございません。当館ではご宿泊者皆様に安全に、安心してお過ごし戴く為、全ての項目の記入をお願い致しております。」

手で差された部分には、

「私は反社会的勢力・抜け忍ではありません。（ ）」という誓約事項と、

「上記事項及び誓約事項が虚偽だった場合、即刻退館して戴きます。また場合によっては適切な対処をさせて戴きます。」と、小さな文字ではあるが、しっかりと明記されていた。

「なるほど。山岳の墓場に近い温泉旅館とあつて気を遣っているのだな・・・

「分った。しつかり記入しよう。」

「ありがとうございます。」

扉間が全ての記入を終えると、受付係が受付台の奥に待機していた若い女に手で合図をすると、その女は早歩きで受付にやって来た。そして扉間が記入した宿泊者名簿に目を通し、受付係から部屋の鍵を受け取ると、早歩きで扉間の所へ来た。

「この者がお部屋までご案内致します。どうぞごゆっくりお過ごし下さいませ。」

「千手様、いらつしやいます。仲居のホロと申します。お部屋までお荷物お持ち致します。」

仲居はそう言うのと荷物置きに置いてあつた扉間の荷物を手に持った。

「あ、ああ……よろしく頼む。」

扉間は、仲居と言えども初対面の女、そして子供にも見える背の低い小柄な女に己の大きな荷物を持たせることに少し戸惑ったが、これがこのルールだろうと思ひ任せることにした。

「左手奥は温泉浴場、右手奥が休憩所になつておりましてそちらの飲物はご自由にお飲み頂けます。浴場は朝四時から夜一時まで開いておりまして……」

仲居は両手でしっかりと扉間の荷物を抱えながら、時々後ろの扉間の顔に振り返りながら館内の説明をしながら前を歩いていく。しかし扉間は、何度も荷物を抱え直しながら懸命に説明と歩みを進める仲居の様子を見て、感心しつつも少々申し訳ない気持ちになり僅かに俯いた。

「お待たせ致しました。こちらが翡翠の間でございます。どうぞお先にお入り下さいませ。」

仲居はそう言うのと片手で扉を開けた。扉間が急いで中に入ると仲居が続いて入り、ようやく畳の上にくっきりと荷物を置いた。そして部屋の説明を端的に終わらせると、座卓の上にある茶器でお茶を淹れ始める。扉間は立ったまま、障子を開けて窓の外の風景を目的も無く見ながら、それが終わるのを待つていた。

「千手様、どうぞお座り下さいませ。お疲れでございましょう？煎茶と茶菓子をどうぞ。こちらの茶菓子の温泉饅頭は温泉水を使っておりまして…」

気まずい想いをしている扉間とは正反対に、仲居は明るくハキハキと楽しそうに説明を続けながらお茶を差し出してきた。扉間は座布団の上にゆつくりドスンと座った。

おそらく部屋に入って仲居が部屋の説明と茶を準備するまで五分もかかっていないだろう。（扉間にはずつと長い時間に感じられたのだが）扉間は仲居のその無駄のない動きと説明に、これは接客の達人だな、と最後は感心して仲居の顔を眺めていた。

「ではごゆつくりお寛ぎ下さいませ。御用の際は何なりとお申し付け下さいませ。失礼致します。」

「丁寧にありがとう。助かった。…荷物も、重かっただろう。本を沢山持ってきて過ぎてしまつてな。悪かつたな。」

「いいえ！とんでもないことでございます！子供の頃から力仕事をしておりますので力自慢です！それにもくつと重い荷物のお客様の方が多いですし！あははっ」

そう言つて仲居は、先ほどまでの接客の笑顔とは違う、おそらく素の笑顔だろう顔で笑つた。扉間もそれを見て緊張が解け、思わず微笑んでしまった。



バシヤ、バシヤ・・・

「フウー……落ち着くなあ……」

扉間は部屋に在る温泉の露天風呂に入り、両手でお湯をすくって顔にかけると、ヒノキの湯船に背を預け大きく息を吐き、呟いた。

こんなにもゆつたりと過ごすのはとても久しぶりである。家の風呂だと、どうしても仕事や新術開発に思考を巡らせてしまう。だが今は、開放的な空間と時間の束縛からの解放感、そしてトロリとした湯の温もりが五臓六腑に染み渡る感覚に浸っていた。

……自分への被け物（ご褒美）か、それとも、最後の晚餐か……

外の風景に目を向けると、目の前にそびえる低い山の木々はすっかり葉を落とし灰色の枝だけが空に向かって伸びている。正直言つて面白味も無い、ただ物悲しい冬ざれの風景である。寒風が吹き湯船の表面の湯気を攫っていく。湯船の外に出していた扉間の腕も一気に冷たくなった。

その冷たさに、否応なしに思い出す。

ほどけたはずの心が、また、絡まってゆく。

しかし、扉間はその感覚にホツとするのだ。

芙蓉との美しく輝かしい想い出は勿論だが、芙蓉が死んだあの日の事を忘れてしまうなど、絶対にしたくはなかった。

あの痛みと悲しみを繰り返し、繰り返し、何度も思い出すことで、芙蓉の存在を近く

に感じられるような気がしていた。

そして同時に、その更に底に在る、どす黒い感情も否応なしに浮上してきた。怒りと憎しみ。

あの時の、写輪眼。

・・・だが、ついにこの時が来た・・・

扉間が二代目火影の座に就くのだ。

この十数年間、周到に進めてきた計画をようやく完遂することが出来る。

芙蓉の死後七年が経った頃、うちはカガミのスパイ任務を解いて里に戻し、警務部門の責任者に就任させた。それ以降、扉間の思惑通りカガミは己の罪に苛まれ、心を削り苦悩しながら現在も罪人たちに罰を与え償わせ続けている。

そして、うちは一族の殆どの忍には、今や警備・警務の任務を与えられていた。

“里の平和の守り人” そう言えば聞こえが好いが、反面、嫌われ者でもある…。

・・・計画が完遂すれば、うちは一族は・・・

扉間はいつの間にか、目を細め微笑していた。

その目に映っているのはもう、冬ざれの風景では無かった。

「温泉はいかがでしたか？ここの温泉は疲労回復だけではなく、美肌にも効果があつて

女性に大人気なんですよ！」

そう話ながら仲居のホロの手で座卓の上に次々と料理が並べられてゆく。扉間は腕を組んで少し背中を反らせながらその様子を眺めている。

「いい湯だった。温泉に入るのは久しいが、やはり身体の芯まで温まるな……」

「はい！朝、夜、一日二回、二十分ずつ入ると効果抜群ですよ。では、お食事の御説明をさせて頂きますね。まず……」

仲居はテキパキと料理の説明をしてゆく。簡潔で分りやすく食欲を掻き立てるその説明に、扉間はまたまた感心した。かなり若そうに見えるのに、しっかりしている。

「ありがとう。食すのが楽しみだ。」

そう言うとうち扉間はまず一口酒を飲もうと銚子に手を伸ばした。

「お注ぎ致します。」

「あ、ああ……」

仲居はサツと銚子を手に持つとニコリとして「扉間の方へ差し出す。扉間は少し戸惑いながらもぐい呑みを差し出した。

トクトクトク……ゆっくりと酒が注がれる。

「名はホロと言ったか。君はここで何年くらい働いているのだ？」

「まだそんなに長くはありません。二十三の時だから……まだ二年ちよつとです。」

「いま二十五なのか？ 見えないな！」

「あはは…よく言われます。背が低いのと童顔のせいで十五くらいに見られることもあつて…」

そう言つて、ホロは少し恥ずかしそうに目を伏せながら銚子を座卓の上にそつと置いた。トンボ玉の髪留で前髪を留めた黒いおかつぱ髪、太めの眉、黒目がちの大きな丸い瞳。小さな丸顔の頬にはそばかす、すつぴんにも見える薄化粧…確かに、扉間も十代後半の少女だと思つていた。しかし随分と若く見える女性も居るものだと思つた。まあ、自分とて人のことは言えないのだが…。

「まあでも歳は関係無いな。君の接客は素晴らしいと思う。ありがとう。」

その言葉に一瞬ホロの顔が固まり、直ぐに顔が真っ赤になる。ホロは焦つて俯き、そのまま扉間に向かつて頭を下げた。

「あつ、ありがとうございます！ 勿体無いお言葉でございます…で、では、温かいお料理は随時お持ち致しますね。お銚子のお代わりはいつでもお申し付け下さい。失礼致します。」

ホロは顔を赤らめたまま、襖を閉めてそそくさと部屋を出て行つた。扉間は少し微笑んでその襖を見つめた。

「あの…お口に合いませんでしたでしょうか？」

ホ口は気まずそうな笑顔でそう訊ねた。

「あ、いや。そんな事は無い。どれも美味かった。すまない。今日は少し食が進まなくてな……」

扉間は後半に出された料理には殆ど箸をつけていなかった。

料理は本当にどれも美味かった。

しかし、次々と出される料理を見てみると、次第に箸が進まなくなっていった。

美しく美味そうな料理が並んでいくほどに、目の前に居ない、いや居るべきは存在を思い知るのだ。

『わあ、凄く綺麗な料理！ね？扉間さま。今度、家でも真似してみようかしら……』

この十数年の間、豪華で美味しい料理を数知れないほど前にしてきた。その場、その場でそれを食せていたのはひとりでは無かったからだ。柱間、義姉、姪、樹、弟子、部下、そして大名、豪商、他里の影……誰かしらと一緒にだった。

……いや、実際は味など感じていなかったのかもしれない。

事実、芙蓉が居なくなつて以来初めて、今たった一人でこのような美しく美味しい料理の数々を味わつたとたん、急に味覚というものを想い出し扉間はひどく戸惑った。

……芙蓉が見たら喜びそうだ。芙蓉が食べたらどう思うだろう……

料理を味わえば味わうほど、どんどん喉を通らなくなつていったのだった。

「あの…差し出がましいようですが、空腹に近いままお酒をそれほどの量召し上がって
いては胃腸に悪うございます。宜しければ雑炊でも作ってまいりましょうか？」

「いや……ああ、うん。では頼もうか。」

断ろうとも思つたが、これから火影になる身だ。これまで以上に健康管理も職務の一
つになる。旅行で体調を壊して帰つては周囲に示しがない。扉間はホロに雑炊を
頼んだ。

暫くするとホロが鮭とミツ葉入りの雑炊を作つて持つてきた。ホロが雑炊の入つた
土鍋の蓋を開けながら扉間に訊く。

「あの、千手様は日頃お仕事がお忙しくていらつしやるのですか？温泉に入って日頃の
お疲れがいつきに出たのかもしれませんがね。」

「あ、ああ。仕事はまあそれなりだな。あ、扉間と呼んでくれ。千手様というの呼ばれ慣
れていなくてどうも変な感じがする。」

「畏まりました。扉間様。もし胃腸薬などが必要な時は仰つて下さい。お持ちします。」
「ありがとう。」

ホロが静かに部屋を出て行くと扉間は雑炊を茶碗によそつてレンゲで口に運んだ。

「……うまい。」

そう呟いてそつと目を閉じた。とても懐かしい味がした。

扉間の旅（２）　くあまつさえ



「ふあーっ．．．よく寝たな．．．」

翌朝。

ホロの気遣いのお陰で胃腸の調子も悪くならず、酒も残らず、気持ち良く目覚めることが出来た。昨夜布団に入った時は気が塞いでいてなかなか寝付けなかったが、寝てしまえば夢さえ見ないほどに熟睡してしまった。気づけば腹も減っている。

浴衣を整え絆纏を羽織ると朝食を摂るため部屋を出て食事処へと向かった。

「扉間様おはようございませう。あれからご気分はいかがですか？」

指定された半個室の席に座ると直ぐに、ホロが明るい笑顔で現れテーブルの上に煎茶を置いた。

「昨夜は助かった。お陰で体調も好いし、よく眠れた。」

「それは良かったです！ではお食事をお持ち致しますね。」

ホロは扉間の返事を聞くと心から嬉しそうな笑顔をして厨房へ料理を取りに向かった。そしてホロ手によって扉間の目の前に朝食の品がずらりと並べられた。昨夜の料

理同様、とても美味そうである。

…ドサササッ。

窓から突然何かが落ちる音がして、扉間は箸を止め窓の方を見た。そこに丁度ホロが最後の水菓子を持ってきて言う。

「ああ、屋根から雪が落ちたようです。」

「昨夜、雪が降ったのか…全く気が付かなかつたな。」

「でもうつつですよ。もう道の雪は融けかけていますし。今日はどちらかにお出かけされるご予定ですか？」

ホロがそう訊ねながら真つ赤な苺が入った皿を置く。瑞々しく輝く苺に、扉間は不意に目を細めた。

「…。あつ、ああ。土産を頼まれているので買いに行こうと思つていのだが…何か君のおススメの物はあるか？」

「色々ございますよ！ちなみに、どういった方へのお土産ですか？」

「酒好きの中年男とその妻、あとはその娘の十代後半女子二人…か。」

扉間はそう話しながら、銘柄など気にせず浴びるように酒を呑み賭けては負ける兄、それを甲斐甲斐しく世話する真面目な妻、その両親を反面教師にして早々に恋愛結婚してしまった現在妊娠中の姪、最近反抗期を迎え叔父の自分とも口を利かないもう一人の

姪の姿が頭に浮かび、思わず扉間は苦笑した。その表情を見て、ホロは優しく微笑んだ。「それならおススメの地酒がいくつかありますよ。あとは、この地域は柘植（ツゲ）が名産品でして、櫛はもちろん、髪飾りやブローチ、印鑑なんかも女性には大人気です。」

「それは良いな。店の場所を教えてくださいか？」

「…あの、もし宜しければ私が、ご案内いたしましょうか?…」

そう言つて口元はニコリとしているのだが、目では申し訳なさそうに扉間の反応を窺っている。

「それは有難いが、仕事は大丈夫なのか？」

「私、明日の朝まで非番なんです。ぜひお役に立たせて下さい！」

「あ、ああ・・・悪いな。じゃあ、店まで案内を頼む。」

「はい！お任せ下さい！」

ホロの親切は嬉しかったが、非番の時間を割いて貰うのは気が引けた。しかし扉間も土産探しに時間を費やしたくも無かったので、後でホロに礼を渡そうと決め、その申し出を受けることにした。



扉間とホロが旅館を出る頃には、昨夜降ったという雪は地面から姿を消していた。そして澄み渡る青空には白い雲が低く浮かび、眩しい太陽が濃い影を作っている。

「こちらが柘植製品の老舗店です。この辺りでは一番品揃えが良いと思います。」

「あ…すまんが代わりに選んではくれないか…その、女の好みは良く分らんので…」

「いいえ！せつかくの扉間様の旅のお土産でございます。扉間様がご自身でお選びになるべきだと思いますよ。もちろん、お手伝いなら喜んでさせて戴きます！フッフ。」

「あ、ああ…じゃあ、それで、頼む。」

扉間はホロの上手な物言いに少し戸惑いながらも二人で店に入った。

そしてホロのアドバイスを受け、ミトには大ぶりで蝶が彫られた解かし櫛を、上の姪には梅の花が彫られた持ち手の付いた解かし櫛、下の姪には小ぶりで赤い漆に鈴が付いた挿し櫛を買った。ホロのアドバイスは素晴らしかった。特に妊娠中の姪に対しては髪が抜けやすい事や漆でかぶれる危険がある事を気にして無垢の物を薦めてくれた。どれも扉間一人では絶対に選べなかつただろう。

「本当に助かった。君のお陰で良い物が選べた。ありがとう。これは薄謝だが今日の礼だ。受け取ってくれ。」

「とんでもないことです！ありがとうございます！受け取れません！私はそういうつもりではございません！それに、まだ酒屋へご案内しておりませんし！」

「酒屋には一人で行く。せつかくの休息時間を使わせたのだ。受け取ってくれ。」

「本当にお礼なんて要りません！私が勝手にしたくてしている事なんです。だから、ぜ

ひ、酒屋までご案内させて下さい！お願いします!!」

「……分った。ならば酒屋にも案内してもらおうか。」

扉間は、なぜホロが自ら案内したいと言い出したのか、なぜここまで必死になるのか、色々疑問はあったが、ここは様子を見ることにした。礼は明日、宿を出る時に無理やりにも渡せばいいのだし…。

それに、何か企んでいるのだとしても跳ね返す自信はある。

二人は地元の酒屋に行き、店主イチオシの銘酒の一升瓶を一本、柱間の為に買った。どうせ酒豪の兄には味など分らないだろうが…。

「御所望のものが全て見つかって本当に良かったです!」

「これで今日の用事は全て済んだ。…頼む。受け取ってくれ。受け取ってもらわねば俺の気が済まない。」

地酒屋を出て少し行った道で立ち止まり、扉間は懐から再び謝礼の入った封筒をホロに差し出した。

「本当に要りません!あの……でも……その……その代わり、お尋ねしたい事がございます。あと、出来ればお頼みしたい事も……宜しいでしょうか?」

……ほら来た。本当の目的は、なんだ?……

……ぐううう。

突然、ホロの腹の虫が鳴いた。

「すつ！すみませんつ！やだつ…私ったら恥ずかしい…!!」

「ハハハハツ！いやいや、俺も丁度腹が減った所だ。では昼飯が礼ではどうだ？何でも好きな物を馳走するぞ。話もそこで聴こう。」

「…すみま…せん…」

ホロは顔を真っ赤にして何度も頷いた。



「おつ。ホロちゃんいらつしやい！あれくそのひと彼氏？」

「もう！おじさんやめて！この方は旅館のお客様！失礼なこと言わないでよ！」

「しつづれいしやしたくつてな。ハハハハ！ゆつくりしてつてね。」

ホロが店の扉を開けると、店主と思われる陽気な初老の男が入って来た二人を見て冗談を言ったあと、笑いながら厨房の奥に入って行った。その手前に立って調理をしている妻と思しき初老の女は申し訳なきように苦笑いしながら、いらつしやいませと言つて扉間に頭を下げる。ホロがその女に向かって「奥のお座敷予約入つて無いよね」と確認すると、扉間をその座敷へ案内した。

「失礼しました。ここの店主良い人なんですけど、いつつも悪ふざけが過ぎて…あ、味は美味しいのでご安心くださいね！」

「フフツ。君はこの街の人気者なんだな。」

扉間は座敷に腰を下ろし、胡坐をかきながら言った。

「いいいえ。狭い街ですから皆顔見知りというだけですよ。」

この定食屋に来るまでの道中、ホ口は色んな店の店員や行き交う住人、男女関係なしに話しかけられたり挨拶を交わしていた。本人は謙遜しているものの、扉間にはホ口がこの小さな温泉街の人気者であることがよく判った。

二人はこの店の名物で、ホ口の好物だという親子丼定食を揃って注文した。丼の蓋を開けると食欲をそそる出汁の香りが立ちのぼる。朝採りの新鮮な卵は半熟で、若鶏の肉は柔らかい。魚醬がブレンドされているという寒露醬油が染みた玉ねぎもアクセントになっている。旅館で食べた昨夜の懐石も今朝の朝食も美味かったが、こちらは胃が待ち望んでいたかのような愛おしい美味さである。

「美味しいな。」

「良かったです。お口に合ったようですね！」

とりあえず二人は、他愛もない話でその場の空気を繋ぎながら箸を進めた。

そして、扉間がホ口の親子丼の皿が空になったのを確認したところで話を切り出した。

「で、俺に訊きたい事、頼みたいという事は何だ？」

それを聞いてホロが急いで口の中に残っているものを咀嚼し飲み込むと、胸をトントンと叩いてお茶を飲み、姿勢を正して扉間を見据えた。

「あの、扉間様は木ノ葉の里から来られたのですよね？」

「そうだが。なんだ？」

「あの・・・『芙蓉』さん、という女性をご存知ではありませんか？・・・」

「！」

扉間はその名前に一瞬動揺したが、それを見せることなくホロの話の聞き進める。

「姓は？」

「…姓は分らないのですが、今の年齢はおそらく四十歳前後だと…あのでも！もの凄く美人なので里でも有名なんじゃないかなって…お心当たりはありませんか？」

「その女性と君の関係は？」

「昔、お世話になったんです。というより、命の恩人なんです。…私が八歳の頃、まだ山岳の墓場の港町で兄と二人、孤児として暮らして居た時に出逢つて、読み書きや計算、他にも生きる為に必要な事をたくさん教えて貰いました。そのお陰で今こうして、まっとうに生きていられるんです…私。」

そう言うときホロは唇を噛みしめ俯いて眉を寄せ、今にも泣きそうな顔をした。

「なぜその女性を探しているのだ？」

「それがある日突然、芙蓉さんは居なくなってしまうたんです。ああいう場所だから、犯罪に巻き込まれたんじゃないかって心配で、兄と二人で一生懸命探しました。でも見つからなくて…それで、そう言えば木ノ葉の里から来たって言っていたのを想い出したんです。だから里に帰ったのかもしれないと思って…でも、日々暮らすのに精いっぱい、木ノ葉の里まで探しに行く事は出来ませんでした。だから、旅館なら木ノ葉の里から来たお客さんで誰か芙蓉さんを知っている人に会えるんじゃないかって思って、兄が結婚したのを機に働き始めたんです。でも、誰も知らなくて…。ただ、元気なのか知りたいんです。そして、私も兄も元気で生きていると伝えてもらいたいんです…」

ホロは顔と目を真っ赤にして、今にも涙が溢れそうになりながら必死に言葉を絞り出していた。それを見て扉間は、ホロの言っている話はおそらく嘘では無いだろうと判断した。

事実、芙蓉は十数年前、自分と結婚する前、山岳の墓場でマダラと暮らして居た。

そして、そこから連れ帰ったのは他でもない…俺だ。

「…その女性は、この者か？」

扉間は懐に手を入れると、小さな楕円形の銀製の額縁に入った写真をホロに見せた。

ホロは扉間の手からその写真を受け取ると自分の掌におさめ、ハツと小さく声を上げた。そして掌に顔をずいっと近づけ、目を見開き、何度も瞬きをして穴が開くほど見つ

めた。

「……この、ひとです……。でも……。でもどうして?！」

「俺の妻だ。」

「ええっ?! 本当に?! 嘘……。嘘みたい……。芙蓉さん。芙蓉さんだ……。わあ! 芙蓉さんの旦那さんに会えるなんて嘘みたい!!!……。あの! 芙蓉さんはお元気ですか?!」

扉間は、組んでいた腕の左手を右手でグツと握り締め、少し俯き、息と唾をぐくりと飲み込み目を泳を泳がせた。そして、ホロの目を見ずに答える。

「……。十五年前に、事故で……。死んだのだ。」

「え……。嘘。……。そんな……。そんな……。あつ」

ホロは掌の写真を両手でぎゅつと握り締めるとそれを額に当て、声を殺して泣き始めた。

扉間は何も言わず、その様子をただぼうつと見つめた。すると、目の前のホロの姿に、十五年前の自分、樹、柱間、その他、あの日に泣き崩れていた人たち一人一人の泣いている姿が重なって見えてくる。

そして、あの日の感情も否応なしに蘇る。

「……私にとつて芙蓉さんは、お姉ちゃん、ううん、お母さん同然の存在なんです……。本当は会いたかった……。幸せに暮らしてるところ、見たかった……。お礼が、ありがとうつて……。言い

たかつたっ！・・・」

ガタツ。カタンツ：ガラガラ。店の玄関口から小さく音がした。

開店前に入店したとあつて、店内には扉間とホ口以外の客はまだ居なかつた。ホ口の話し声と泣き声を聞き、店主が暖簾をしまい準備中の札を下げて扉を閉めた音だつた。厨房で店主は指で目頭を押さえ、その妻は布巾で涙を拭つていた。

扉間はその気配を察知し、我に返つた。俯いて一度大きく深呼吸をすると、顔を上げ、泣きじゃくるホ口の頭の上にポンと掌を置いた。

「こんな形だか、芙蓉も君に会えて喜んでいると思う。俺からも礼を言わせてくれ。今まで、芙蓉のことを探していてくれてありがとう。」

ホ口はゆっくり顔を上げ、黙つて、真つ赤な目で扉間の腕越しに扉間の顔を見つめた。すると再びその瞳からは大粒の涙が流れ落ちる。そして、歪めながらも無理やり大きな笑顔を作つて答える。

「・・・はい！」

その返事を聞くと扉間はホ口の頭から掌をのけ、フツと笑つて見せた。

「それ、良かったら君が持つていてやってくれ。」

「え!!でも、大切な物なのでは！」

「焼き増しすればいい。それに家に帰れば他の写真が沢山あるしな。」

「あつ、ありがとうございませす!!本当に嬉しい・・・」

今度は写真を握つた手を胸に当てて前屈みになり、ホロは喜びに堪えない様子で微笑んだ。すると最後の涙が頬を伝い、空になった親子丼の皿にぼたりと落ちた。

◆ 「世話になつたな。君のお陰で良い時間が過ごせた。」

扉間は旅館の玄関の敷居を跨いで外に出ると振り返り、後ろに居るホロに礼を言った。

「(こちら)そ…本当にありがとうございませす。芙蓉さんのことは悲しいですけど、旦那様である扉間様に出逢えて本当に良かったです。これ、一生大切にします!」

そう言つて、首から下げた芙蓉の写真が入つた銀の額縁を取り出して見せた。それが太陽の光を受けきらりと光る。そこへ不意に風が吹き、扉間の前髪を揺らして視界を遮つた。扉間はその前髪を左手で抑えながら、少し寂しそうに微笑んでその額縁を見た。その左手に光るものにホロの視線が行く。

・・・結婚指輪かあ。扉間様は今でも芙蓉さんのこと愛しているんだ。良かった・・・

ホロは扉間の顔に視線を戻し、何も言わず三日月のように細めた目で微笑んだ。

扉間はその笑顔を確認すると再び背を向け歩き出そうとした。

「あの!いつか、芙蓉さんのお墓参りに行つてもいいですか?」

「勿論だ。芙蓉も待つているだろう。」

扉間は立ち止まってそう笑顔で答えると、軽く左手を挙げながら歩いて行った。その背中にホロは深々と頭を下げ、ゆっくり頭を上げると扉間の背中が見えなくなるまで見送った。

「^り」

坂道を下ったところで扉間は振り返った。

一瞬だが、複数のチャクラが大きく膨らんだのを察知した。辺りを見回す。そのチャクラは旅館の方向にまだ存在している。

「ホロ……」

嫌な予感がした。だが扉間は動き出そうとしている右足を止めて考える。

自分の実力ならたいいの忍は倒せるだろう。

しかし、二代目火影就任を前にして、いま火の国の外に居る。ここで揉め事に関われば、後々厄介な事に繋がりがかねない。それが里の危機になるおそれだつてある。

「……」

扉間は勢いよく走りだした。

扉間の旅（3） 扉間の選択

◆ 旅館の玄関前には誰も居らず、静まり返っている。

「！」

扉間はそれを見つけると走り寄った。

水色と黄色で色付けされたトンボ玉の髪留め：ホロのものだ。

扉間はその場にしゃがむと目を閉じ、地に指をつけて己のチャクラを追跡する。

まだそう遠くには行っていないようだ。すぐに飛雷神で飛んだ。

ガンッ！ ガンッ！

「うおっ!!」「ぐあっ!!」

「誰だお前!!」

扉間は何も言わず倒れた男二人を踏みつけてズンズンと向かって行く。

「くそっ!!」

気を失ってぐったりしているホロを抱きかかえた男は、こちらに向かつて来る扉間の

迫力にたじろぎ、その場から飛び立とうとした。

ビュンツッ！グサ！グサ！グサツ！

「ぐわあっ!!」

ドサツ!!

扉間が放ったクナイが男の両足首と右腕の三ヶ所に突き刺さり、男は勢いよく後ろに倒れた。クナイが刺さった瞬間、扉間は男の腕の中からホロを救出すると、再び元の場所に着地した。

「お前たちの目的はなんだ？なぜこの女を攫った？答えろ……つて、それは貴様に聞いたほうがいいか？」

振り向くと、そこには2mはあろうかという大柄の男が立つて居た。

鍛え抜かれているだろう大きな筋肉のついた体は浅黒く、坊主頭。頬と顎に白毛交じりの髭をたくわえている。扉間よりも十は年上に見える忍だった。

「これはこれは……どこかで覚えのあるチャクラ、見覚えのある顔かと思えば、アンタは火影の弟じゃねえか。」

その言葉にほんの僅かに扉間の眉がピクリとした。

「火影の弟」何度、幾人に言われ続けてきたか分らないが、どこの馬の骨ともしれないゴロツキの忍に言われるのは胸がむかつく。だが今はそれどころではない。チャク

ラの強さからしてかなりの手練れの忍のようだ。しかも自分の腕には敵の目的であるホロが居る。

…どうする…

「その女にちよつと聴きたい事がある。なに、用事が済んだらすぐに帰らせる。アンタは強い。ワシも無駄な戦いはしたくねえ。こちらに渡してくれんか？」

男はにこやかな顔、穏やかな口調でそう言った。

「ならば今、俺の目の前で聴け。」

そう言って扉がホロの首元にスツと掌を添えると、ホロがゆっくりと目を開けた。

「…んっ…んん？…と、扉間様っ!」

「落ち着け。大丈夫だ。」

そう言つてホロをゆっくりと降ろし、地に立たせた。ホロは地に足を着けても扉間の右腕をしっかりと掴み、目の前の見知らぬ男を見て怯えている。

「ハア…まいったな。」

男は苦笑いしながら仁王立ちしている。

「さあ、聴け。」

「ハハッ。いや、聴いてもいいけどよお、アンタには関係の無い事」だつてこと、承知しておいてくれよ。ワシたちは、山岳の墓場で商売をしている。」

「そうか。なら確かに『関係無い』な。」

「フツ。良かったよ、物分りの良いひとで……お嬢ちゃん、昨日の晩、塩専売店で何を見たか正直に教えてくれねえか？」

「……？ な、何も見てません！ 私はただお塩を買いに行っただけで、おばちゃんとちよつと話してすぐ帰っただけです！ 何も見てませんっ！」

ホ口は更にしつかりと扉間の右腕に抱き着き、震えた声で答えた。

「ほらな？ 正直に答えるわけねえだろ普通……」

男が扉間に向かって言葉を出したのと同時に、扉間は男の後ろに瞬間移動し頭上から刀を振り下ろした。しかし男も直ぐにそれに気が付きその場から姿を消した。そして目の前に残り残されたホ口を捕まえようとして男がホ口の前に立ちはだかると、扉間の影分身が現れ先にホ口を抱きかかえ口から忍術を放つ。

「天泣……」

幾つもの水の針が男の顔面に飛んでいく。

「土遁・土壁防……」

男が顔の前で両手を交差させると瞬時に腕が茶色い土に覆われ、扉間の放った水針の数本を跳ね除け、残りの水針は男の腕に吸収されてしまった。しかし、男が防御している間にホ口を抱きかかえた扉間の影分身はその場から姿を消していた。

男が振り向いた瞬間、目の前に扉間だけが現れた。

「水遁・水龍弾の術！」

「土遁・煉瓦の術！」

ズンツ!! ブワツシヤアアア…

土遁で現れた土壁に扉間の放った水遁の水龍がぶつかると、それと同時に土壁に吸収されて消えてゆく。

・・・土遁の壁に、いくら水龍弾をぶつけても無駄か…

扉間はクナイを取り出して投げたと同時に姿を消した。

宙を斬るクナイの場所に扉間の影分身が現れる。そしてまたクナイを五本、男に向かって投げた。

「フツ…無駄な事を…」

そう言った男の背後に落ちたクナイの場所に扉間が降り立った瞬間だった。

ビリビリビリビリイツ!!!

扉間の全身に強烈な電流が走り、身動きが取れなくなった。

「貴様…土遁だけでなく、雷遁…もか…」

扉間の影分身は消え、扉間本人は意識があるものの、不意の強烈な電流に身体が痺れて動けない。

「きゃあつー！」

男は遠くに座らされていたホ口の所へ瞬間移動するとサツと抱き上げた。そして動けない扉間を見て笑いながら言う。

「ハハハハッ！アンタの有名税つてやつだな。くれぐれも暗黙の了解を忘れないでくれよ。じゃあな」

「待て!!……くそうっ!!」

男はホ口を連れ去って行ってしまった。

しかし、扉間は身体を僅に動かすことしか出来ず、その場で痺れが切れるのを待つしかなかった。

ようやく手の痺れが薄れると、扉間は回復術の印を結んで全身の痺れを取った。そしてゆっくりと立ち上がり、まだほんの僅かに痺れが残る足を見つめて考える。

「暗黙の了解」

それは、山岳の墓場で起こる事に対して五里は無言・無関係を貫くことである。

三回目の五影会談で締結した条約の中には、『他里の内戦争には干渉しない事及びそれ以外の他国・他領地・無法地帯に於いても同じとする。但し自国・自里の忍による犯罪取締りの場合は例外として五影で協議し判断する』と明記されており、山岳の墓場は

“無法地帯”に含まれる。そしてなによりも、里が興る以前からの慣例・教訓として『山岳の墓場について見聞きするべからず、近づくべからず、関わるべからず』といった“暗黙の了解”が忍の間にはあった。

それは、山岳の墓場で一番価値のあるものは金でも、命でも、地位や名誉でもなく、“情報”だからである。山岳の墓場に関わり持ちうる全ての情報を奪われれば、己の命だけではなく一族全てを危機に陥れる。

・・・暗黙の了解を破れば・・・

扉間の頭に、里の風景と、己が火影となりそれを見渡している姿が浮かんだ。そして、柱間とその妻や子、樹や弟子たち・部下。それから……しかし、最後のひとりはもう、居ない。

・・・いや、居るではないか。ここに。そして、ホロの中にも・・・

◆ 「タダナカ様。やっぱり昨日店に居たのは黒寅一家の忍でしたね。あのイサリビって若頭、俺たちの取引先を片っ端から買収してやがる！」

ここは温泉街と山岳の墓場の中間地点に在る毒蛾一家アジトの一つである。

ホロを連れてきたタダナカと呼ばれる男が、幻術でホロから聞き出した情報に憤っている部下を尻目に、壁に寄りかかって座っているホロの頭を愛おしそうに優しく撫でて

いる。しかし、ホ口の視点は定まらず、頭を撫でられても何も反応しない。ホ口の周りに居る三人の部下たちはその様子を見てクスクス笑っている。

「お嬢ちゃん。正直に話してくれて礼を言うぞ。まだ子供なのに偉いなあ。」

「あいつら、さつさと幻術をかけてコイツから情報を聴き出しとけば死なずに済んだのにな…まったく、タダナカ様に手間取らせやがって。」

先ほどホ口を攫った部下の三人は、扉間の前から姿を消す際、タダナカの手によつて殺された。

「ふふん。いや、この娘を手に入れるのも目的だったからな。だが、まさか、あの火影の弟・千手扉間が現れるとは…フツ。流石に運が悪いとかしか言いようがねえ。」

タダナカはホ口の頭の上に置いていた掌を頬の方へと移し、丸い顔の輪郭を優しく撫でながらそう言った。

「千手扉間といえば感知能力で右に出るものは居ないと言います。もしかまだ生きているのならば、間もなくここへもやって来るのでは!？」

「うむ。ワシの『雷遁・電衣蛾』を喰らえば即死、そうでなくても丸一日は動けねえもんだが、扉間はあの程度の術で死ぬような忍じやねえ。残念だがゆつくりもしてられんな…」

「あの…タダナカ様が本気を出せば、扉間を殺すことが出来たのでは？」

「解つてねえな馬鹿か？ 暗黙の了解があるとはいえ、火影の弟を殺せば五里・五影を敵に回すことになる。そうなりやワシら毒蛾一家は終わりだ。なあに、用が済んだら娘を返してやろうと思つてな。…ハア。だがこれほどワシ好みの娘はなかなか居らんぞ。ああ、本当に残念だ…解！」

タダナカは喋り終わると印を結び、ホロの幻術を解いた。

「…っん、んん…んん？」

ホロの目の前の視界が次第に鮮明になつてゆく。しかしまるで酒に酔っているように身体は気怠く、思うように動かすことができない。

「お嬢ちゃん。ご褒美に、これからワシがたっぷり気持ち良くしてやるぞ…へへへ…」

そう言つてタダナカはホロの帯を掴み、強引に解き始めた。

「…っん、いやあ!!…っん、やめ…っん、てえ!!…っん…」

部下たちがタダナカの後ろに近づいて二人の様子を覗き込む。これから始まる中年男と少女（に見える女）の禁断の房事をニヤニヤしながら期待している。そして、ホロの抵抗は敵うはずもなく、着物は剥ぎ取られ、タダナカは肌襦袢の襟を両手でぐいと開くと、露になつたホロの小さな乳房に吸い付いた。ホロはそのおぞましい感触に戦慄が身体を突き抜け、朦朧だつた意識が否応なしにくつきりと輪郭を作つてゆく。

「いやああああ!!! 誰か助けてえええ!!!」

ホ口は昨晚、旅館の料理長に「来月の納品まで塩が足りそうになから買い足してくれ」と遣いを頼まれていた事をすっかり忘れており、閉店間際の塩専売店に駆け込んだ。高級旅館とはいえ小規模な旅館である。内情は家族経営で少ない従業員と経営しているため、ホ口は仲居の業務以外の事でも頼まれれば嫌な顔一つせず何でも引き受けていた。それもホ口が信頼され好かれる由縁でもあった。

店内はすでに勘定所と、背の高い商品棚の奥にある接客用の席以外、灯りは消されていた。ホ口は勘定所でおばさんに塩を注文すると、商品棚の間から洩れる奥の席の灯りが気になって目を遣った。すると、用心棒らしき大柄の男二人に挟まれた若い男が、5キロ用の塩袋を店主のおじさんから受け取っている様子が見えた。

塩専売店といってもタバコや日用品も一緒に売っているので、時たまタバコを大量に購入する客が居ることは知っていた。その客も大方そうだろうと思った。しかしホ口は、本能的につい、中性的で美しい若い男の顔に見惚れてしまっていた。すると、横に居る大柄男の一人が黒革の平箱を取り出し、その蓋を僅かに開いて店主に見せた瞬間、そこで何かがキラリと光り、ホ口は思わず眉を寄せて目を細めた。そして店主は頭を深く下げながら、笑いを堪えた顔でその箱を受け取ったのだ。

…あれはどう見ても、金（純金）の板だった。海からそう遠くないこの温泉街で塩は5キロといえど千円もしない。なのに、支払いが『金』？…

ホ口はそう思った瞬間、見てはいけないものを見た気がして背筋が凍り付いた。急いで茶袋に塩を量り入れてくれてあるおばさんの方に顔を戻し、支払いを済まして礼を言うのと直ぐに店を出て走って帰って行った。

最近、タダナカ率いる毒蛾一家のシマが荒らされるようになっていた。だがその犯人たちは直ぐに判明した。それは毒蛾一家とは因縁のある、黒寅一家の者たちだった。

両者は十年前の闘争終結後なんとか均衡を保ちつつ、うまく互いのシマで儲けていたはずだった。しかし、つい三ヶ月前に二十五歳という若さで若頭になったイサリビという男はかなりの強硬派で、どうやら再び毒蛾一家に闘争を仕掛けようとしている様だった。

タダナカは憤ったが、直ぐには手を出さずに暫く様子を見ていた。イサリビという人物とその本当の目的を探るためだった。

昨晚ホ口が見惚れた若い男：それがイサリビだった。

毒蛾一家が使っている運び屋がイサリビたちを買取されているという情報を仕入れ、その日、タダナカとその部下三人は、運び屋である表向きは塩専売店のその店を見張っていた。そこへ、それらしき三人組の男が店に入ったのを確認したのだが、その中にイサリビの姿は無かった。しかし不審に思つて暫く外から見張っていた所、明らかに動揺した様子で店から逃げるように走り去るホ口の姿を見た。そして間もなく、再び三人組

も店を出ていったのだが、店に入る時に手にしていた黒革の平箱はそこには無かった。その一連の様子を見てタダナカは、ホロが「見てはならない何か」を見たのだろうと思いい、ホロが何を見たのかを知るために誘拐したのだった。

ただ、ホロは遅かれ早かれ、タダナカに誘拐される予定だったのだが…。

「ハハハ。お嬢ちゃん、そんなに怖がらなくてもいいんだぞ？命など取りやしない。お家に帰る前に、ワシと最高に気持ちのいい思い出を作ろうってだけだ…」

上半身を裸にされ、両腕を頭上で床に押さえつけられたホロの唯一残った下着にタダナカが手をつけた。固く閉じられた目頭から涙が溢れ出し、ホロはあまりの恐怖で悲鳴すらも出せなかった。

「おい、知ってるか？」

その声にタダナカは勢いよく振り返った。

「貴様の様な物狂いは、死、以外に矯正方法は無いらしいぞ。」

ブンツ!!!

扉間はタダナカの首に刀を振り下ろした。

ズツシャアツ!!!

「チツ。そろそろ来る頃だとは思ったがこんなに早えとはな。流石、火影の弟…どうだ？何ならアンタも一緒に楽しまねえか？終わったらちゃんとして返してやるよへへッ…」

土遁・土塀防の泥で強化した腕で扉間の刀を受け止めたタダナカは、そう言つて気食の悪い笑みで扉間を見上げた。その顔を見た扉間に虫唾が走る。

扉間は後ろに飛び退くと同時に数本のクナイを投げつけると、タダナカは両腕をクロスしてそれを防ぎ、クナイは跳ね返つて地面に落ちてゆく。扉間は刀を構え直し、再び宙に飛んでタダナカに刀を振り下ろす。

「無駄だああ!!」

笑い交じりでが叫びながら、タダナカはその刀を両腕で受け止めようと更に泥を強化した瞬間。目の前から扉間の姿が消えた。

「……」

腕を強化し衝撃に備えていたタダナカは数秒の空白の後、クロスした手を解き辺りを見回した。目の前には周りに居たはずの部下たちが全員うつ伏せに倒れているだけで、扉間とホコの姿は消えていた。

「扉間様！ありがとうございますございますつ、ありがとうございます……うつつうつつ……」

旅館の玄関前に着地し、抱きかかえていたホコを下ろすとホコは泣きだした。そして近くに居た仲居と、旅館の客たちが驚いて集まつて来た。扉間は泣きだすホコと、どうした・どうしたと騒ぐ人々を無視して言う。

「ホロ、昨夜いったい何を見たのだ？」「そ、それが怪しい取引現場を見てしまつて……」
ホロはしゃくりあげながらも、なんとか昨夜見た一部始終を扉間に話して聞かせた。

「おい。この子は悪党から狙われている。警務の忍を呼んできて警護してやれ。」

話を聞き終わると、扉間はホロの身体を支えて心配している仲居に向かつてそう言つた。それを聞いた周囲の男たちが頷き、焦つた様子で警務忍者の要る駐在所に走つて行つた。

「ホロ、お前はおそらく昨夜見た件で口封じされる事は無いだろう。だが、あの変態ジジイがお前目当てにまたやってくるかもしれない。」

「ええっ……ど、どうしたら……」

「お前は芙蓉のことを母だと言つたな。ならば、お前は俺の娘だ。娘を守るのは父の務め。俺がお前を必ず守る。」

「扉間様！」

ホロが名前を叫んだ瞬間、扉間は目の前から姿を消した。

扉間の旅（完） 続け、物語・・・



「アンタ、しつげえなあ…娘は返した。もう用は無いはずだろ？…まさか、暗黙の了解の事忘れてんのか？…ワシはアンタとやり合う気はねえ。五里五影に目えつけられちゃあ商売できなくなるしな。」

「その口ぶり、まるで俺を殺せるとも言っているように聞こえるが？」
「ハハッ。そりや被害者妄想つてもんだぜ。アンタに怪我でもさせちやあ大変つてことだ。」

ヒユウウウウウ・・・

冷たい木枯らしが荒野の枯れ草を揺らし、砂埃を立ててゆく。干上がりひび割れた小川を挟み、扉間とタダナカは向かい合っている。

「・・・イサリビ・・・」

「何でアンタがその名を知っている？」

「あいつは砂隠れの抜け忍…里を抜ける時、多額の金品を奪ったうえ、十人もの上忍を殺している重罪人だ。砂の里にとっては面汚しだから公表はしていないが、そんな危険な

抜け忍が木ノ葉の里に来られては困るからな…こちらも調査していた所だった。」

扉間はここに向かう途中、塩専売店に行き店主を尋問した後、感知を行い、昨晚そこに来て居たのはイサリビ本人と突き止めていた。

「なるほど。家業を継ぐ前は砂隠れの里で忍として修行していたって事までは調べがついてたが、アイツ抜け忍だったのか…だとしても、アイツも俺たちと同じく、山岳の墓場で商売する黒寅一家の若頭になったんだ。もうアンタ達には関係ねえだろ。」

「フフツ…」

扉間は腕を組み、斜めに俯いて不敵な笑みを浮かべた。

「？ 何がおかしい。」

「いや。関係など、後から幾らでも作れる。貴様を殺せば尚更、な…」

「!!」

扉間はその場で宙に飛び、そこからタダナカに向かって数本のクナイを放った。だがそのクナイはタダナカではなく、全て明後日の方向へ飛んで行ってしまった。

「ハハハハッ！ さっきのワシの攻撃がまだ効いてるのか？ 手元が狂い過ぎだぜ？…仕方ない、やるしかねえみてえだな。まあ今のアンタなら簡単そうだ！…『超土雷』!!!」

タダナカが印を組み口から泥を吐き出すと、その土はいくつもの固い塊となり、その全てはバチバチと電流を纏っており、扉間へ向かってものすごいスピードで飛んでい

く。

「水遁・水龍弾の術!!!」

扉間が水龍でそれを迎え撃つ。本来なら土遁に対して劣勢の水遁は威力が低下するのだが、そこは実力の差で扉間の水龍が勝り、電流を帯びた土の塊を相殺した。水を吸収して土に還った塊が扉間の下、そしてタダナカの足元にポトポトと勢いよく落下し、地面を水浸しにしていく。

しかし、バチバチと光る電流だけは勢いを止まらず、そのまま扉間に襲いかかってきた。扉間は瞬時にその場から姿を消す。

そしてタダナカの頭上に現れた。

「無駄だと言ってるだろ! 雷遁・朝日!!!」

タダナカが扉間に両掌を向け、そこから強烈な電流を放ってきた。そして同時に先ほどの電流も方向を変え、再び扉間に向かってくる。

・・・やはり、こいつ電流を操れるのか。ならば・・・

「水遁・水龍咬爆!!!」

ズウアアアアアアアアアア・・・!!!

扉間がその場で印を結んだ瞬間、桶をひっくり返したかのような大雨がタダナカの頭上に降り注いだ。

バチバチバチバチイイ!!

しかしその雨をものともせず、タダナカが放っている電流と、もう一方の電流が水を突き抜け同時に扉間の身体を直撃した。

「何?」

電流を喰らった瞬間、扉間の姿は消え失せた。影分身だった。

その様子に驚くタダナカの周囲5メートルにだけ、扉間の放ったクナイが作る結界によつて円形に水溜まりが出来ていた。そこから水龍と無数の水弾が現れてタダナカに襲いかかり、その身体はあつという間に水の塊に包まれた。

ビリビリビリビリ：バリバリバリバリ：

水中に居るタダナカは、自分の掌から放たれている電流で感電していた。

「フーン・俺の水遁の中で、貴様自身の電流で感電死しろ。」

扉間は結界の外に現れ、タダナカの様子を見ると目を見開きニヤリとした。

しかし。

タダナカは苦しむどころか、笑っている。

そして素早く印を結ぶと、ビカビカと光る電流がタダナカの身体全体を包み込んだ。

「電流を、身体に纏ったぞと?」

ブワッシャアアアアアッー!!!

そして、その電流はタダナカを包围していた全ての水を撥ね飛ばした。

…パチツ。ピチツ…パチパチ…

ガハハハと大笑いしているタダナカの身体の表面で電流が小さな音を立てている。

「……」

「ワシは電気を身体に纏い、体内に電流を流して操れる血継限界でな…感電死なんてしねえんだ。…さて、これでもまだやるか？火影の弟さんよお…へへへ…」

扉間は、そつと目を閉じた。

「ワシの勝ち。つてことでもいいよな？ワシもアンタほどの忍と手合わせできて楽しかったぜ。」

チャツ。

扉間は腰に差している刀を抜こうと、柄に手を添えた。

「オイオイ、まだやる気かよ！刀で向かってきたって感電して死ぬただぞ？」

扉間は無視して刀を抜いた。そして、その刀を地面に放った。

「……」

その行動にタダナカが驚き反応する前に、更にその次の扉間の行動に驚いてタダナカは身構えた。

が、扉間の速さには勝てなかった。

扉間は刀を放った瞬間、タダナカの身体にマーキングしておいた事を利用し、タダナカの懐に飛び込み腰を低くし、先端を鋭く切り取られた刀の鞘を構えた。

ブスツツ!!!

扉間はその鞘でタダナカの心臓を一突きにした。鞘は心臓を貫通し、背中からどす黒い血の付いた尖った先端が顔を出す。

その鞘は柱間の木通で作られた特殊な木材で出来ており、そして扉間自身のマダラとも対等に讃えるほどの剣術の腕前、忍最速を誇る瞬身の扉間を前に、タダナカには為す術は無かった。

ドシツイ!!!

大きな音を立て、タダナカは地面に倒れ動かなくなった。

・・・・・・・・・・

「そんなに逃げ回っているだけでは稽古にもならんし、俺には勝てんぞ。」

「・・・・・・・・。」

扉間が芙蓉の頭上に木刀を振り下ろそうとした瞬間、芙蓉はすつと腰を落とし、扉間の腹めがけて木刀を突きだした。

剣先が僅かに扉間の術着の胸元をかすめそうになった所で、扉間の木刀が芙蓉の木刀に追いつく。

カアアアン！・・・ドシヤツ！

扉間は芙蓉を木刀もろとも弾き飛ばし、芙蓉はかなりの距離を飛ばされて地面に倒れた。

ハア…ハア…ハア…ハア…

扉間の息が上がっている。体を動かしたからではない。

・・・俺は、芙蓉が好きだ。

・・・

「芙蓉…お前の口癖から取って今のは『杯音剣』って技名でどうだ？…お前のお陰で、俺とお前の娘を、守れたぞ…」



ザザアアアン・・・ザザン・・・サアアア・・・

青い空に少し灰色がかった白い雲の塊がいくつも浮かんだ冬晴れ。そして海は紺碧に輝いている。打ち寄せる穏やかな白波が、ゆつくりと白い砂浜を潤わせてゆく。

扉間は濡れないように波を避けながら、ゆつくりと波打際を歩いている。

いつか見た、光景と重なる。

タダナカを倒したあと扉間はホ口の元へ戻り、もう心配は要らない事を伝えた。ホ口は助けて貰ったことに対し何度も、何度も頭を下げて礼を言った。

そして、

「それから…私のことを娘だと言ってくれた扉間様が、『ホ口（幌）』って私の名前を呼んでくれて、凄く嬉しかったです！

実は芙蓉さんに出逢った頃、幌って名前が大嫌いだったんです。そしたら、芙蓉さんも自分の名前があんまり好きじゃなかったって教えてくれて…でも、いつか本当に大切な人ができた時、その人から名前を呼ばれたらきつと自分の名前が好きになれるからって。自分がそうだったって教えてくれたんです。この温泉街に来て、色んな人に名前を呼ばれるようになって、少し自分の名前が好きになってきてたんですけど…でも、今日心からそれを実感しました！」

扉間は、そう言って嬉しそうに微笑むホ口の顔を見てホツとすると同時に、少しだけ胸がチクリと痛んだ。

ホ口の話のその頃、芙蓉の名を呼んでいたのは、いや、芙蓉にとつて大切な人は、自分では無かったからである。

扉間は、波打際から離れたところに在った大きな岩の上に腰かけ、目を細めて海を眺めた。

『ねえ、暖かくなったら『新婚旅行』に行きましよう？…新婚旅行っていうのはね、どこかのお侍さんが結婚の記念に奥さんと二人で旅行をしたのをきっかけに、今流行ってい

るらしいの！私も扉間さまと行きたいな…』

「お前の写真はホロにやっってしまったが、お前も隣で見ているよな…。」

「はー！」

「……。」

その声に隣りを見ると、そこには、見慣れたひとが座って居た。

長い亜麻色の髪を海風に靡かせ、長いまつ毛の大きな目を少し細め、ニコニコしながら扉間の顔を見つめている。膝の上で重ねている左手左薬指には自分と揃いの、白金の野薔薇の指輪が輝いている。

「……芙蓉……？」

「私にも良く分らないのですが、扉間さまの声が聞こえて歩いて来たらここに居たんです。どうやらマダラさまの忍術がまだこの近くに残っていて、チャクラがなんとか、術がどうこう……良く分らないけど余り時間……」

芙蓉が話し終わる前に、扉間は芙蓉を抱き締めた。

しかし、確かに抱きしめている感触はあるのだが、その身体は海風のように冷たい。

「会いたかった。芙蓉」

扉間の声は震えている。芙蓉も扉間の背中にそっと、優しく両手を回した。

「うふふ。私も……でもほら、言ったでしょ？私たちの物語は終わらないって。ね？」

扉間はバツと身体を離して芙蓉の両腕をしつかりと掴み、芙蓉の目を強く見つめた。

「ああ。もう一生お前を離さない。一緒に木ノ葉の里に帰ろう！」

芙蓉は何も言わず、ただ優しく微笑みながら扉間の顔を見つめている。

「俺は、俺はもうすぐ二代目火影に就任するんだ。お前が居なければやれない。頼む、傍に居てくれ。ずっと、ずっと……」

「わあ！おめでとうございます！扉間さま！……火影のお役目、扉間さまなら絶対、大丈夫！」

芙蓉はそう言い終わると、そつと扉間に口づけをした。

気のせいか、その唇はとても温かかった気がした。

芙蓉はそつと身体を離すと、また扉間の顔を見つめて微笑んだ。

扉間も芙蓉の琥珀色の瞳を瞬きもせず、じつと見つめた。一瞬一秒でも長く芙蓉を見ていたかった。扉間の唇は何か言葉を発しようかと震えるが、言葉にならない。何か、何か言わなければ……

「……愛している。芙蓉」

「はい。私も、愛しています。扉間さま……」

次に会う時は、里やお仕事の話たくさん聞かせてね。あ、でも早くこつちに来ちゃ駄目よ？約束！ね？うふふふ……」

気付けば、芙蓉の姿は消えていた。

しかし、扉間の耳にはいつまでも芙蓉の声がこだましていた。

「こんなにも、人を愛することが出来て、本当に良かった。ありがとう。…これからも、永遠に愛している。」

芙蓉を失つてからの十数年、扉間は愛する人を失つてまでも愛し続ける苦しみで、こんなにも苦しいのなら最初から愛さなければ良かったという思考回路すら作り上げていた。

しかし、この時ようやくその苦しみから解放され、芙蓉を愛することが出来て良かったと、心の底からそう思い直すことが出来た。



扉間が里に帰ると柱間の孫が産まれそうだと聞き、急いで病院へ行くと女児が産まれた。

名は、『綱手』と決まっていた。男でも女でも良いように柱間が考えてつけたという。(勿論、まだ十代で反抗期の姪は自分たち夫婦で名付けると猛反対したようだが…)

しかし柱間は娘二人に続いて初孫までも女とあつて、また女か・と少しばかり残念そうにしていた。だが扉間は、性別など関係なく、新しい命が無事に生まれた事に感動し、心から嬉しく思った。

そして二ヶ月後、姪の体調が落ち着いたと聞き、改めて屋敷に又姪（兄弟の孫娘のこと）を見に行つた。

扉間がそうつと赤ん坊の顔を覗いてみると、美しい琥珀色の瞳をしていた。

芙蓉の生まれ変わりなどとは思わなかったが、芙蓉のことを母同然だと必死に探してくれていたホロの事を想い出した。改めて、芙蓉が母として慕われていた事実がとても嬉しくなり、愛おしく温かなものが胸に押し寄せてきた。そして、己の弟子や部下、里の人々の笑顔を思い出し、そして、思った。

・・・俺の命は木ノ葉の里のものだ。そしてここに生きる全ての者たちの為の命だ。そしてそれら全ては、俺たちの子供だな。なあ？芙蓉・・・

「行ってくる。」

バタン：

今日も芙蓉は、扉間の背中を笑顔で見送っていた。

完

六花の森（1）お前の名は・・・

「マダラ。誕生日おめでとう！これから死ぬまで頑張つてね！」

「・・・なんだそいつは。何者だ」

マダラが死んだとされた時から二十年以上の時間が流れていた。

その間ずっと、マダラは「山岳の墓場」の地下に在るアジトで生きていた。時には自ら情報収集する為に出掛けてはいたが、主な行動はゼツにさせ、自分はアジトで新術の開発をしたり「先の夢」実現への周到なシナリオを練る日々だった。

そしてこの日、ゼツによって初めてこの地下アジトに「客人」が招かれた。

しかし、客人はなぜか板の上に横たえられ眠っている。

「人生の黄昏時を目の前に男独りじゃ寂しいんじゃないかなあ〜つて。ていか寂しいんでしょ？だから僕からの誕生日プレゼントだよ。」

「…邪魔だ。戻してこい」

「まあまあそんなこと言わないで。ほら見てよ！マダラのタイプでしょ？この子探すのに何年かかったと思ってるの〜？ほら今起こすからよく見てみてよ！」

マダラは不服そうな顔で腕を組んだままゆっくりと、そこで横たわる女に近づいた。

目が覚めて騒がれれば、術でまた眠らせ記憶を消して捨てればいいのだし……

マダラはそう思いながら少しだけ身体を屈ませて女の顔をじっと見下ろした。

ゼツが術を解くと、女はゆっくりと目を開けたが茫然としており、身体はまったく動かない。起きたと言っても幻術はかけられたままだ。

「写輪眼……うちは一族ではないようだが、何をした？」

「うん。ストックしてあったのを移植したんだ。あ、ちなみに記憶は全て消してる。それから中忍レベルの忍術も使えるようにしてあるから、これから修行をつけてあげてよ。マダラが天寿を終えて転生する間、小間使いにすればいい。」

「チツ。面倒な事を……必要ない。」

「あのさあ、僕一人で色々暗躍するのも限界あるんだよ？だってこんな身体でしょ。生身の人間の下僕がいたら便利だと思っけど？役に立たなかつたら捨てればいいんだしさ。」

「……。フンツ！」

「もう素直じゃないんだから。とりあえず幻術解くよ？あ、そうそう、この子は紛争に捲込まれていた所をマダラに助けられて、マダラが『これから俺の下僕として一生働けえー！』ってなる設定ね。よろしく〜」

そう言うどぜツは女の幻術を解いた。

「……………?……………」

「あ?目が覚めた?紛争に捲込まれて死になつてた君を、この人、うちはマダラが見つけて助けてくれたんだよ。良かったね。はい、お礼言つて!」

「……………きゃあつ!」

女は、目と口が付いた黒くて丸い物体がしゃべる姿に驚いて悲鳴を上げた。

「ブフツ…ゴホン…」

何年も探していたという対象にゼツ自身が怯えられている様子を見て、マダラは無性におかしくなり思わず笑つてしまった。しかし。

「……………あなた、喋れるの?……………かわいい……………」

「マダラ!僕、かわいいつて言われたよ!やったあ!!つて、ちよつと、そんな事よりほら、マダラにお礼言つて!早く!」

それを聞いて、女はゆっくりと身を起こし、マダラを見上げた。そしてマダラの顔を見ると明らかに怯えて両手を胸の前で握りしめた。唇が震えるが言葉は出てこない。

ポチャンツ。天井から雫が落ち、再び沈黙を作る。

……………くそう。なんだこの敗北感は!……………」

「あ、あの……………た、助けて頂いて、ありがとう、ございました……………」

女は俯き、ようやく震えた声でマダラに礼を言った。隣では「かわいい」と言われてよほど嬉しかったのか、ゼツがびよんぴよん跳ねている。腹が立つ。

「お前には、俺の下僕として一生働いて貰う。」

「・・・あ、えつと・・・」

「お前の記憶は俺が全て消した。何も考えず、ただ俺に従え。」

「・・・」

「あのね、マダラって見ての通り、超怖い人だから、逆らったら殺されちゃうよ？命を助けて貰ったんだしさ、とりあえずここはハイって言つとこ。ね！」

「・・・ゼツ、てめえ！なんかさつきから腹立つな！・・・」

「は、はい・・・」

女はそう返事をしたが、これまでの記憶が全て消され、そして突然恐ろしい男の下僕にされる現実をまだ受け止められない様で、地面に向かって目を泳がせていた。

「ハイ決まり！じゃ、さつきこの子の名前決めようよ。なんか良いのある？」

マダラは昨日、久しぶりに外に出た時の事を想い出した。

枯れ野を駆けていた時、ピタツと何か冷たいものが頬に当たり、その場に足を止めた。すると、僅かに青空を残した灰色の空から、牡丹雪がフワリ、フワリと降っていた。そつと目の前に掌を差し出すと、その上に雪の欠片が舞い降りた。マダラはそれをじつと見

た。黒い手袋をしていたため、六角形の結晶の形までしつかりと見て取れて美しかった。
：

「思いつかないなら、月…」

「六花だ。お前の名前は、六花（ろつか）だ。」

暫く沈黙していたマダラを見てゼツが自分の思いついた名前を言いかけたのを遮り、マダラはその女に六花という名前を与えた。

「は…はい。分りました。」

女は名前を与えられてようやく現実を受け入れられてきたのか、俯いていた顔を上げ、まだ少しだけ怯えた表情でマダラの顔を見つめてきた。

マダラも、改めて六花の顔をじっくりと見た。

腰まである長い髪は亜麻色、きめ細かい肌は雪の様に白い。写輪眼の消えた大きな瞳は琥珀色で、上下のまつ毛がとても長い。鼻筋がスツと通り、唇は紅を差しているかのように赤く、頬の柔らかい輪郭が僅かに幼さを感じさせる…

確かに、マダラが好む容姿だった。

まじまじと顔を見られてすることに耐えられなくなった六花は、再びそつと俯いた。

その俯く視線を追うように、マダラは視線を六花の顔から身体に移す。冬服を着ていても痩せているのが分かる。袖からのぞく、赤い平紐が巻かれている左手首も、か細

かった。

「ゼツ。まずはコイツに何か食わせろ。…それと、俺はガキには全く興味無い。」

そう言つてマダラは六花に背を向けて歩いて行つた。一年中気温が一定で冬はむしろ温かく感じる地下空間に、マダラの足音だけが響いていく。

「・・・」

六花は先程天井から落ちた雫の音を頭の中で繰り返すと、遠ざかるマダラの背中を黙つて見つめた。

・・・私、この人と、どこかで会っている気がする・・・

「ほら、ぼうつとしてないで、さっさと立つてこつちに来て。六花！」



「六花！…六花つてば！聞こえてんの？」

「シツ！静かにして…」

「また独りで勝手な事して…今度こそ叱られるだけじゃ済まないよ？」

「そんなこと言いながらゼツだつて、また、一緒に居るじゃない？フフ…つて、ほら！奴が来た。行くよ!!」

マダラの下僕となつてからの二年間、毎日マダラに厳しい忍術の修行をつけられた。六花には予め中忍程度の力が与えられていたとはいえ、マダラの修行に手加減は無く、

命の危機すら感じる厳しいものだった。しかし全てを失っていた六花は、そこに自分が生きる理由を見出し、何度も必死に立ち上がった。そして今では、熟達した忍に育っていた。

三年が経って六花が実力をつけてきた頃、マダラは偵察に六花を従えるようになった。そして六花の実力が確かなものになると、これからの「先の夢」に繋がる軌道を整備すべく、現実社会を書き換える為、六花にそれを手伝わせるようになった。

そして今では、最初の足掛かりだけをマダラが作り、後は六花とゼツに任務を任せるといったようになっていた。

この日も、六花はマダラに命令された任務を無事に完遂した。

しかし、マダラに速やかに帰還するように言われているにもかかわらず、この日もまた、その命令に反して六花は寄り道をしていた。

スツ・・・

「わあっ！だつ、誰……」写輪眼！

子の刻（23時頃）の静寂の暗闇の中から、提灯を手に持った年寄男の前に六花が静かに姿を現した。

男が驚いて提灯を手から落としそうになると同時に、六花は写輪眼で男に幻術をかけた。

「……………」

茫然と立ち尽くす男の瞳に写輪眼が写る。六花は男に近づくと、その手から提灯を乱暴に奪い取り、それを男の顔に近づけた。意識の無い男の影が男の代わりに怯える様に、地面でガタガタと揺れている。

「……もうこの町から手を引け。傭兵たちも全て撤退させるんだ。さもないと、お前だけではなくお前の家族、血縁全員をオレが殺しに行くぞ……」

六花は幻術と同時に、男にそう冷たく、強い怒りを込めて話しかけた。

「……分りました。すぐにその様に致します……」

男がそう返事をする、男の目からスツと写輪眼が消え、気を失って膝から崩れ落ちそうになるのを六花がすぐさま支えた。そしてゆっくりと地面に座らせ、横たえた。

六花は立ち上がり、少し顎を上げ、まだ写輪眼の浮かんでいる冷たい目で男を見下ろした。

「こっわい顔。なんか最近マダラに似てきたよねえ。死神みたい。フツツ」

そう言いながらゼツがぴよんと六花の左肩に乗った。六花はそつとゼツに目を遣るとそのまま目を閉じ、フーツと鼻から息を吐いた。そして再び目を開けると、手に持った提灯を横たわっている男の傍に置き、背を向けて数歩歩くと地面を蹴り、姿を消した。「良い事したつもりかもしれないけどさ、絶対マダラに超々怒られるよ？なんでいつも

命令を聞かないで勝手な事ばかりするのさ。」

六花は漆黒の森を木から木に飛び移りながら、自分の左肩に載っているゼツを思い切り睨みつけて言う。

「もうっ！うるさいな！…困っている人を見て見ぬふりするなんて、私にはどうしても出来ないの…どうせこの世界は無くなるんだし、なら、目の前の人を助けたって別に良いじゃない！」

ストーン。ザツ。

そう言い終わると六花はアジトの入り口に着地した。同時にゼツが六花の顔に近寄り、耳元で囁く。

「あのさ、僕はマダラの意識から生まれた存在だよ？マダラの代わりに歴史や忍の動向について記録する為の存在なの。そして君の監視役…そりゃ僕だって六花の味方をしてあげたいよ。でもそれが出来ないから、いつもあれほど止めてるんじゃない。困るのは六花自身なの…！」

「……」

六花は何も言わず僅かに下唇を噛んで俯いた。

もうとつくに日付が変わってしまっており、十六夜の月も随分と西に傾いている。

遅くなった理由を何とマダラに説明したら良いのだろう。帰路で感じていた胸の痛

みに加え、更に大きな痛みが心にのしかかる。そんな六花の心を知る由もない秋風が、ススキを揺らし優しい音を奏でながら通り過ぎてゆく。

「とにかく早く中に入ろう。自分でした事だよ。責任取るしかないじゃん。」

「…わかつてるよ…」

ゼツに促され、六花は俯いたままアジトへと入って行つた。

「…任務は、うまくいったんだろうな？」

部屋の中央ではマダラが仁王立ちになつており、芙蓉を見るなりそう訊いてきた。

その声は穏やかだが、マダラのチャクラでピリピリ震える空気から、明らかに憤っていることが伝わって来る。

六花は小走りでマダラに近寄ると、その足元に片足で跪きマダラの顔をしっかりと見
て言う。

「はい。確かにご命令通り完遂して参りました。遅くなり申し訳ありませんでした。」

「ゼツ。何故遅くなつた？」

六花の報告を聞き終わると、マダラは表情一つ変えずにゼツへと訊ねた。

「偵察で把握していた忍の数より、実際は倍以上いたんだよ。中には手ごわい奴もいて、流石の六花も手こずつたんだ。一人でよく頑張つてたよ。そうだよ、六花？」

「…はい。」

六花はマダラの足元を見ながら小さく答えた。その様子に、マダラはハア〜と大きなため息を吐くと、六花の左側に歩み寄り、言う。

「下僕の分際で、主に嘘をつくとはな・・・」

六花はその言葉を聞くと、ごくりと小さく唾を呑み、地面で目を泳がせた。全身に冷たいものが走り心臓が鼓動を上げる。

ガンツ！…ドシツ！

「っ…」

マダラが六花の左肩を蹴り、六花は右肘から地面に倒れた。蹴られた左肩と右肘に痛みが走るが何とかそれを堪え、ゆっくり上半身を起こそうとすると、マダラが六花の左腕を掴み立ち上がらせた。

そしてその腕を引っ張りながら、六花を部屋の隅に在る地下水が溜まって出来た浅い池まで連れて行き、六花を池に向かって突き飛ばして落した。

バシャンツツ!!

六花は右半身からその池に落ちた。

左腕を池の底につき、なんとかゆっくりと上半身を起こした。そして、濡れて顔に張り付く前髪の間から恐る恐るマダラを見る。

「俺の分身であるゼツまで丸め込むとは良い度胸だ。立て!!」

「マダラ！僕が勝手に嘘をついたんだ。」

「黙れ。俺が何も知らないとでも思っているのか？」

六花はゆっくりと立ち上がり、そろりそろりと水溜りから出た。全身から滴る水で、六花の立つ地面の色が変わってゆく。一年中一定の地下アジトの気温、一定の水温の地下水とはいえ、十五℃ほどの水を纏えばすぐに寒さで体が震えてくる。マダラの瞳は怒りでついに写輪眼が浮かび上がり、それを見て六花の震えは更に激しくなる。

「服を脱げ」

「・・・は・・・い。」

六花は震える手で、濡れて固くなった帯の結び目をなんとか解き、服を全て脱いで全裸になった。

そしてマダラは、六花が服を脱いでいる間にゼツに持つて来させた鉄製の首輪と手錠を六花に装着した。その冷たくずっしりとした重たさに、六花は意識が押し潰されてしまいそのような感覚になり眩暈がした。

マダラは首輪から繋がる鎖を引っ張り、部屋の中央に向かって歩き出した。六花は裸足で歩く岩の地面の冷たさで、ついに自分の身体の血が全て凍てついてしまったように感じ、ぐつと目を閉じて強制的に思考回路を遮断した。

「座れ」

六花はガクガクと震える膝をゆっくり折り曲げ、冷たい地面の上に正座をした。しかも六花には、その冷たさも寒さも感じられなかった。

マダラは鎖の先端をクナイに通し、地面に突き刺して固定すると、六花の目の前にしゃがみ、六花の顎をぐいつと掴んだ。

「また俺の命令を無視して、余計な事をしてきたな。」

「……」

六花の身体も唇も小刻みに震えているが、その瞳だけは真っ直ぐ、揺らぐこと無くマダラの目を見つめている。あたかもそれは、己が正しいと言い張っている様であり、マダラは更に怒りが膨らむ。しかし、マダラはフツと小さく笑うと六花の顎から手を離れた。

「お前が人助けと思っしてしている事は、単なるお前の自己満足に過ぎん。いや、むしろ余計な事だ。新たな争いの種、問題、そして苦しむ人間を生んでいる……」

「えっ……」

マダラの言葉に六花の瞳が思わず揺らいだ。

「まず、今回お前がした事。確かにあの町はあの大名の植民地同然にされ、駐屯する傭兵たちの搾取や犯罪に苦しんでいる。だが、一方であの大名の占領と傭兵の駐屯により、資源も無く痩せた土地で飢餓と貧困に苦しんでいたあの町は、今では商売が成り立ち多

くの人間が潤っているのも事実だ。今、あの大名と傭兵たちが一斉に姿を消せば、大方の人間がまた貧困に苦しむことになるだろう。それでもお前は、人助けをしたと言えるのか？」

「そ、それはっ・・・」

六花が反論しようとするのを遮り、マダラは更に続ける。

「その前もだ。お前が売られた娘たち二十人余りを解放したな。だが、娘を売った家族はどうなったと思う？娘たちに逃げられた買手は娘たちの行方が分からない事で、その家族に騙されたと疑い、金を奪い返しただけではなく、その家族を皆殺しにした。解放された娘たちはその事にシヨックを受け、自害する者、女一人で生きてゆくことが出来ず結局女郎になった者が殆どだ。なぜか。それは、あの娘らは自ら望んで、家族を助ける為、そして己が生きてゆく為に売られたからだ。」

「・・・でも・・・」

マダラは更にその前、そしてもつと前：芙蓉が人助けと思つて行つた行為全てについて、その末路を言つて聞かせた。

六花は、途中から何も言えなくなり、俯き、首を横に振り、最後は涙を流しながら唇を噛んでそれを聞いていた。

マダラは、六花の涙がその震える膝の上に止めどなく落ちる様を見ながら言う。

「どうだ？これでもお前のやった事は本当に正しかったと言えるか？」
「……」

六花は何も言えなかった。

それは全て、自分の軽率な判断、上辺だけの手助け、単なる自己満足に過ぎなかったからだ。

「第一、俺の命令に背いて何度も勝手な事をする時点で、お前の全てが間違っているがな……」

マダラはそう言うのと六花に背を向け歩き出した。その背中に六花がすがりつくように言う。

「私！私は……いったいどうしたらいいのですか！どうしたら……」

「お前に出来る事はただ一つ。俺の命令に絶対に従う事だけだ。まずは、そのまま一晚反省しろ。……なに、いずれ全ての人間が楽になる……」

そう言うのと、マダラは振り返ることなく別の部屋へ行ってしまった。

マダラの姿が目の前から消えると、六花は地面にうつ伏せ、声を殺して泣き始めた。

僅かに洩れる鳴き声が部屋に反響している。

「六花、大丈夫？」

六花が泣き疲れてウトウトとしていると、ゼツが布を引っ張ってきて六花の背中に掛

けた。

「・・・ゼツ。ありがと・・・でも、これは私への罰だから・・・」

「うん。でも風邪引かれても僕が困るし。」

「フフ：そんなこと言つて、優しいんだから：マダラ様にそっくり。」

「そりや分身だからね。」

「ごめんね・・・ゼツがあんなに止めてくれたのに、私・・・結局多くの人を不幸にしただけだった・・・もう、死にたいくらい、辛いよ・・・」

六花が地面にうつ伏せたままそう洩らすと、ゼツはぴよんとその頭の上に載る。

「気にしすぎじゃない？ いいじゃん。百人や二百人不幸になつたつて別に。」

「フツ：それ、慰めてるの？ 責めてるの？」

「どつちでも無いけど。とにかくマダラが六花を殺さなくて良かったよ。ホントこんな事で死なないでね。困るからさ。」

「・・・うん・・・」

六花は頷き、肩に掛けられた布を手錠の着いた両手でなんとか身体に巻き付けた。

その様子を見ながらゼツは思う。

・・・困つた人をほっとけない。人助けしたい・・・この惑星に来た頃の母さんにそっくりだ・・・

マダラと柱間と交わってもダメ、死にかけてもダメ……
 若返らせて身体をリセットして、両目に写輪眼を移植して、これでもダメなら僕一人
 でなんとかするしかないかもしれない。でもそれは困る……

頼むよ、芙蓉……



黄色い竹落ち葉の竹林を歩きながら、六花は遠くの青嶺を見てそつと目を細めた。ふ
 と、いつかの自分が犯した軽率な行動の数々を想い出し、心が痛んだ。

だが、直ぐにまた正面を向く。

「地図を確認するぞ。」

六花の後ろを歩いているマダラが言い、ハイと言つて六花が足を止め振り返る。

そこへ強い風が吹き、天から黄色い竹落ち葉がはらりはらりと舞い散り、六花の後ろ
 で束ねた髪の毛と、それを束ねる赤い平紐と一緒に揺らした。

マダラと目が合った。

三秒ほど無言で見つめ合ったが、マダラが先に目を逸らし、道端の岩に歩み寄つて腰
 かけると、被っていたマントのフードを下ろして眩しそうに天を仰いだ。

この日も二人で偵察に行った帰りだった。

今回の目的地は新たに訪れる不慣れな場所だった為、行きはマダラが先導し、帰りは

こうしてマダラが後ろを警戒し、六花が前を歩いて地理を調査しながら帰っている。

最近、マダラの長い髪には白髪が目立つようになっていた。マダラは還暦手前であるが、最強の忍と恐れられた男とあって、実際はそんな歳には見えないし、そんな感じも無いのだが、やはり出会った時よりも年齢を重ねたマダラの姿を見ると、あとのくらしい一緒に居られるのだろうかとい、考えてしまう。

そんな事を今日も考えながら、六花もマダラの隣りに腰を下ろし鞆から地図を取り出そうとした。しかし、直ぐに手を止め立ち上がる。

「女。ジジイ。有り金、全て出せ。」

目の前に、頭と顔を布で覆った一人の男が出現し、落ち着いた声でそう言った。するともう三人、同じような格好をした男たちの姿がその場にすうーっと浮かび上がり、六花とマダラを取り囲んだ。

「いや、金はいい。女。お前を頂こうか。」

その内の一人がそう言い、腰から刀を抜いた。それを合図に全員が刀を抜き構える。

しかし、六花は顔色一つ変えない。マダラもフードを被り直し俯いている。

「フフ…恐怖で声も出ないか。まあいい。そのまま大人しくしておけ。」

男たちが一斉に六花に向かって駆け寄って行った。

六花が瞬きをする、その目には写輪眼が浮かんだ。

『』

「良い景色だろうか？これがお前たちが見る最後の景色だ。」

四人の男たちの目の前には、美しい真つ青な初夏の空が広がっていた。

六花は腰の刀を抜くと周囲の竹を打ち切った。

『ぐわああつ!!』『ぎやああ!!』……

六花が刀をカチンと鞘に収めた瞬間、四人の叫び声が竹林に響き渡る。

暫く男たちは呻き声を上げていたが、直ぐにその声は聞こえなくなった。

「おい。やり過ぎだろう」

マダラは立ち上がり、目の前の光景を見て、腰に手を当てると小さなため息を吐いた。

六花が打ち切り出来た竹槍に、四人の男たちが串刺しになって息絶えている。周囲の黄色い竹落ち葉は鮮血で真つ赤に染まっていた。

「いいえ。マダラ様をジジイ呼ばわりするなんて万死に値します。それにこいつらは山賊に堕ちた忍です。」

「やり過ぎだ……」

そう言つてマダラは、尚も無表情の六花の右肩をポンと叩くと先に歩き出した。

「……」

六花が無言で目の前の惨状を見つめっていると、鞆の中からゼツが這い出てきて左肩に

載る。

「わあく派手にやちやったね。何？六花、ストレス溜まってるのか？そーいえば最近甘いもの食べて無いもんね。帰ったらおはぎでも買いに行こうよ」
「うん。」

六花はその光景に背を向け、小走りでマダラの後を追った。

六花の森（2） 六花とマダラ、終わりの始まり

橙色の灯りが壁にくつきりとした影を作る。

その影は昔よりもずっと曲線を増し、美しい。

マダラがそう思っていると、目の前に六花の顔が現れる。そして、ぎこちなくマダラの唇に自分の唇を重ねた。

・・・これだけは相変わらず下手だな・・・

そう心の中で呟くと、六花の後頭部を抱き寄せ、舌を入れて強く唇を吸う。

「あっ・・・」

マダラが右手で六花の左乳房を掴み、親指で乳首を撫でると、六花は小さく悶えて唇を離れた。しかしマダラは強引に六花の頭を引き寄せ、再び唇を重ね舌を入れる。

「んっん・・・んっんっん・・・はああっ！」

マダラが右手で六花の乳首を弄びつつ左手を六花の下腹部に這わせて擦ると、六花は堪らず唇を離し両手をマダラの顔の横について身体を反らせ、目をつぶって身悶えた。

「マダラ・・・さま・・・」

虚ろな目と僅かに開いた唇でマダラを見下ろす。マダラはその左乳首に吸い付いた。

両乳首、下腹部の三ヶ所を同時に刺激する。あまりの快感に六花は大きな喘ぎ声をあげる。

「はあああんっ……あんっ……あっ……あああんっ！」

六花はマダラに激しく追い込まれ、遂に果ててしまった。

「ハアハアハアハア……」

六花はぐったりとマダラの右脇に顔を埋め、肩で息をしながらそつと顔を右に逸らした。

虚ろな視線の先に、マダラでは無い男の顔が在る。

その顔は決して目を開ける事など無いのだが、第三者に見られているようで恥ずかしくなり、六花はまたそつと顔を埋めた。するとマダラが六花の肩を押して顔を上げさせる。

「主よりも先にいくとは、けしからん奴だな。」

そう言つて、マダラは意地悪そうに微笑を浮かべている。

「……申し訳、ありません……」

六花は少し戸惑いながら答えて身体を起こすと、マダラの下半身に移動してその股の間に座った。

そして既に大きくなっているマダラの男根を両手でそつと支えた。目を閉じ、口を開

けてそれを啜える。

一度では口に入らず、何度も口を開け、舌を使って奥まで啜えた。

そして、頭だけではなく、身体全体を上下させて、舌と唾液で滑らせながらそれをしゃぶる。

じゆるじゆるぐぼっ・・・

その音に六花は、この恥ずかしく屈辱的な、しかし、主に使える喜びを感じさせられる行為をいつ覚えたのか、思い出そうとした。しかし直ぐにその思考を止める。そんなもの思い出しても仕方が無い。今は行為に集中しないと…

マダラは懸命に、しかしいつまでも恥じらいを捨てられずに男根をしゃぶる六花の顔を見ながら、満足そうに小さく息を上げていた。

そしていつものように、六花の長いまつ毛に目がいく。どこかで見覚えがあるように感じるのだが、思い出せない。過去に関係を持った似たような女だろうか…。そう思っている六花が上目遣いでマダラを見上げ、目が合った。

「乗れ」

そう言われ、六花はしゃぶるのを止めて身体を起こした。その肩はゆつくりと上下している。

黙ってマダラの上に跨ると、マダラの男根の根元を支え、自分の膣の入り口に押し当

てた。

「あつ……」

膣の入り口に亀頭が入ると六花は小さく声を洩らした。

「愚図愚図するな」

マダラは六花の腰を両手で掴むと、強引に男根を膣の奥へとねじ込んだ。

「ひゃあああああんっ——…」

六花は一気に身体を貫かれ、怯えるような声で叫んだ。

「ほら、早く動け」

六花はマダラの両腕を掴み、自分の身体を上下に動かし始めた。

眉を寄せ快感に悶えながら、懸命にマダラの快感を高めようと動いている。

上品な丸い形の胸がゆさゆさと上下に揺れ、腰のくびれはよりくつきりと際立っており、程よく筋肉と脂肪が付いた身体は、出会った頃の幼さなどもう微塵も無い、艶めかしい大人の女の身体だった。それを実感すると、マダラの快感は頂点へと向かっていった。

気付けば、マダラはまた六花の腰を両手で掴み、自ら六花の身体を上下に動かしていた。

「んっうっ……!!」

「あんあんあんっ……あああっ!!」

マダラの男根がより固くなり、ビクビクと身体の中に熱いものを注ぐ感覚に、六花もまた絶頂を迎えた。

……マダラ様、愛してる……

決して口には出せない言葉を心の中で呟き、六花はマダラに口づけをした。

その背中を、マダラは優しく抱き締めた。

「木を見て森を見ず」

寝台に腰かけ寝間着を着ている六花の背中に、寝そべるマダラが話しかけた。六花はゆっくりと振り返り、何のことだか分らずに不思議そうにマダラの顔を見た。

「昔のお前は、木しか見れてなかったな。」

その言葉に六花は己が下僕であることも忘れ、マダラに褒められるのかと思えば表情を緩めて目を輝かせた。

「だが、今もまだ、林くらいしか見れていない。」

「……?」

「今日のはやり過ぎだ。俺の正体が割れることはまず無い。だがお前には俺が死んだ後も働いてもらうんだ。派手な事をして五里五影にお前の存在が知られては厄介だ。もつとよく考えろ。いいな?」

「……はい……」

六花は己の期待が外れ、マダラから叱られて、悲しい顔を見ると目を伏せた。その顔を見てマダラが苦笑して問う。

「不服か？」

「いつ、いえ……ただ、自分の愚かさが嫌になって……昔と変わってないなんて……申し訳ありませんでした。」

「お前はまだ若い。学ぶ時間も成長する時間もまだある。まあ俺の為にもっと早く成長して貰わなければ困るがな。」

「……はい。」

六花は悲しそうな笑顔で俯いたまま答えた。

今の六花には、どうしても、マダラの顔を見ることは出来なかった。



どんよりと分厚い雲が広がる鈍色の空。

その色に姿を紛らせるように、灰色の大きな羽を広げた一羽のハチクマが南へと飛んで行った。

その空の下には、真つ黒な焦土と化した平原が広がり、無数の死体が転がっている。所々から立ち上る白い煙は、未だ鎮火しない炎から立ち上っているものなのか、それ

とも、これから始まるもつと大きな戦火の火種なのか…

六花はそう思いながら、崖の上からその風景を眺めていた。

「第二次忍界大戦ねえ。あはは。相変わらず人間は殺し合つてばかりだよ。焦げ臭いし早く帰ろうよ六花。」

六花の頭上でゼツが笑いながら言った。

第一次忍界大戦後、五里五影が興り、里間で条約締結を結んだ。そして各国各里は発展を遂げ、泰平の時が過ぎていた。

しかし、皮肉にもその発展により新たな争いの火種が生じていた。

資本主義を基礎とした発展の中、当然ながら各国の間には経済格差が生じた。それを各里間条約の不平等のせいだと訴え、*“公平なる利権拡大”*を理由に各里で武闘派が台頭し、武力行使による領土拡大が進められ始めたのだ。

かくして第二次忍界大戦が勃発した。

「マダラ様の先の夢が実現するまでの間、どれだけの戦が起て、どれだけの人が死ぬんだらう…その人たちも皆、幸せになれるのかな…？」

「なれるんじゃない？でもその為にも早く先の夢を実現しないとね！さ、ほら早く帰ろ！」

六花は物憂げな顔でもう一度目の前の風景を見据えた後、そつと背を向けた。

すると目の前からマダラが歩いてこちらに向かって来ていた。

「マダラ様……遅くなって申し訳ありません。」

「問題ない。いや、俺もこの眼で戦場を見ておこうと思つてな。」

マダラは六花の左隣に立つと、腕を組んで目の前の風景を見渡し、そして急に大声で笑い始めた。

「ハハハハハッ！……見てるか柱間。これがお前の夢の成れの果てだぞ。里という枠組みに縛られた結果がこれだ。所詮、敵同士、腑を見せ合い手を取り合うことなど永久にできないのだ。この世で、人間が己の利益と幸福を追求し続ける限りな……ハハハハッ……」

六花は少しだけ目を凝らして、そのマダラの様子を見ていた。

すると先ほど飛び去ったはずのハチクマがピーエーと鳴きながら戻ってきた。隣には、つがいを思われるもう一羽を連れている。

六花はその二羽を見上げた。

人間の憎悪・厭悪・怨恨・激憤、そして死への恐怖が潰えた焼け野原の上で、そんな事はどうでもいいと言わんばかりに、二羽が仲良く愛を語りながら飛び回る。

六花は、これもまた人間が争い合うのと同じ自然の摂理なのだろうと思ひ、それ以上は何も思わなかった。

「六花。次の任務、失敗は許さんぞ。」

その言葉に急いでマダラの方を向く。

「はい。承知しております。必ず、完遂いたします。」

「多少手間がかかったとしても確実に目的を果たさなければ意味が無い。無理だと思つたらすぐに戻つて来い。バックアップはある。判断を誤るなよ。」

「はい。」

「僕もついでるし大丈夫だよ。」

ゼツがそう言つて六花の頭からマダラの右肩へ飛び載つた。

そして三人は、再び目の前の風景を見渡す。

ハチクマのつがいの姿は消えていた。



「お二人の間に座つても、よろしいかしら?…:金角様と銀角様…」

髪を下ろし、真っ赤な紅を引き、金の耳飾りと首飾り、腕飾りを着け、下着が透ける薄桃色の羽衣を羽織つて金糸の帯を締めた婆婆羅（バサラ）な六花は、カウンターで並んで酒を飲む男二人の背中に向かって言った。

その声に男二人は同時に振り向いた。

「誰だてめえ。なんでここに入つて来てんだ!」

二人は身構え、チャクラを発動して警戒している。しかし六花は気にすること無く、

微笑みを讀ませてゆつくりと二人に近づいていく。

「この店には誰も入れるなど、入り口の部下に命令していたはずだが…」

「私、お二人のファンなんですの。ずっとお話ししたくて機会を探しておりました。そう言ったら、皆さん眠ってくださいましたわよ。うふふ。」

そう言いながら二人を見て、六花はそつと体をくねらせ、耳に髪を掛け直しながら上目遣いでニツコリと微笑んで見せた。

二人は顔を見合わせてニヤリとした。

「そうか。俺たちのファンなら仕方ねえな。少しだけ相手してやるよ。なあ金角。」

「おう銀角。お前、こつちに来い。」

「ありがとうございます。嬉しいですよ…」

六花は二人の間に一つ空いていた足の高い椅子に、二人の視線が自分の胸と太ももに注がれるのを感じながらゆつくりと腰掛けた。そして改めて二人の顔を交互に見て微笑んで見せる。

銀角が目の前に並んでいる空いたグラスを一つ手に取り、酒を注いで六花の前に置いた。

「で、何が本当の目的だ？こんな女に化けて。」

「確かに私は忍ですけど、化けてなんていませんわ。確かめてみます？」

そう言つて六花は右側に座る銀角の右手をそつと握りその手を自分の乳房に当て、そして次に左に座る金閣の左手を握ると自分の股間にその手を当てた。二人の手は自然と六花の乳房と股間をぎゅつと握る。

「はは。なんだ娼婦か。」

「まあ…そんな所ですわ。」

そう言つて六花は二人の手を退けた。

「いくら欲しいんだ？」

「お金は要りません。ただ、私のお話を聞いて戴ければそれで…」

「話？」

「私、屈強で野望に溢れてる男性でなきや抱かれたくないんです。お二人共もう充分素敵な男性ですけれど、お二人には里に仕える忍のまま、収まつていて欲しくないんです…」

二人はそれを聞き、再びちらりと互いに目を合わせると、まんざらでもない顔で酒をぐいつと飲んだ。

「そうか。じゃあ奥で、三人でじっくり楽しみながら話さねえか？なあ銀角よ。」

「いいえ。これでも私、真剣なんですよ。お話を先に聞いて戴けません？ね？お願いですわ…」

六花はそう言つて二人の太腿に手を遣り、いやらしい手つきでさすりながら、困つたような顔をして見せた。

「しようがねえなあ……じゃあ話してみろ。」

「ありがとうございます……お二人はいま、七星剣、芭蕉扇の二つの宝具を里から授けられてお持ちですよ。でもあと三つ……五つ全ての宝具が欲しいと思いませんか？それに、雷影の座も……」

「確かにあと三つ、幌金繩、紅葫蘆、そして琥珀の浄瓶が揃つてこそ七星剣の正しい使い方が出来るつてもんだがな……」

「俺たちは雷影の座なんざ興味はねえが、今の雷影の生ぬるいやり方にはイライラさせられる。ついに木ノ葉の里と同盟を結ぶなんて事になつてるしな。そうなつちや俺たち戦闘部隊の権限まで削られるだろう。」

二人はそう言うのと正面を向いて、苦い顔をしてまた酒を飲んだ。

「私も、これまで里の為に戦つてきたお二人と戦闘部隊の方々を蔑ろにされるなんて許せませんわ。それに、お二人にはぜひ、この雲隠れの里を五里最強の里にして欲しいんです！私も協力いたします。その為ならこの身体、いくらでも差し出します……どうか、立ち上がって頂けませんか？……」

六花は必死の形相で二人の顔を交互に見ながら力説して見せた。

「…クーデターか。悪かねえな…」

「…ああ。それにはまず、宝具を手に入れねえとな。」

二人がそう言つて沈黙すると、六花が口を開く。

「決行するなら木ノ葉との同盟締結式の当日です。警備は影たち周辺に集中し、その他の警備は手薄になります。」

「でも…俺たち封印術が苦手だよ。なあ金角。」

「ああ。まずは封印術に長けた忍を探さねえとな。なあ銀角。」

話の流れから、二人の関心がクーデターへ傾いていることを察して六花はそつと微笑んだ。そして言う。

「あの…私、封印術を得意としておりますの。ですから勿論、解印術も出来ます。実はこの能力のせいで、最近まで木ノ葉の里で捕虜にされていたんです…大戦に乗じて、何とかこうして雲隠れの里まで逃げ帰ってきたんですの…」

「マジかよ?! 雲隠れの忍を捕虜にしてやがる木ノ葉なんかと同盟なんて、やつぱり雷影は馬鹿だ! 許せねえ! なあ金角よ!」

「ああ…その話が本当なら許せねえな…。だが、お前の話が本当かどうか証拠はあるのか?」

金角が急に厳しい目で六花を睨んだ。

「はい。私がお二人の前で、宝具の封印を解いてお見せいたしますわ。」

金角・銀角の二人は目を見開いて互いに顔を合わせると、金角の方が口を開こうとしたが、六花がすかさず言葉を付け加える。

「その代わり、封印を解いたらクーデターを起こして下さい。それがダメでも、私を捕虜にして甚振った二代目火影を…殺して下さい。お願いします。」

真剣な顔で二人の顔を交互に見ながらそう言うと、六花は深々と頭を下げた。二人はずつと頭を下げ続けている六花を暫く黙って見つめた後、また顔を見合わせると頷き合った。

「よし。分った。封印が解けたらお前の願いを聞いてやる。いいよな、銀角？」

「ああ、それでいい金角。だが、封印が解けなかった時は…覚悟しとけよ。ククツ…」

「じゃあ今夜はその約束の印に…」

金角がそう言って芙蓉の腰に手を回そうとすると、芙蓉はするりとそれを除け、椅子から降り数歩行った所で立ち止まり、満面の笑みで振り返る。

「では明日のこの時間に、封印塔の前で待っていますね。お楽しみは、その後で…うふふつ。では…」

そう言いう六花の姿は次第に薄れてその場から消えてしまった。

「ケツ。食えない女だぜ…」

「なあに、封印が解けても解けなくても、たつぷり味わってやろうぜ。ま、約束なんて守らねえがな。ハハッ。」

「ハアハアハアハア・・・」

六花は取つていた宿の部屋の窓から室内に入ると、畳の上に両手をついて俯き、肩で大きく息をしている。鼓動は速く身体もまだ震えている。顔は高熱でもあるかのよう
に熱い。

暫くすると、閉めた窓の隙間をゼツがするつと通り抜けて、六花の視線の先の畳に
やつて来た。

「六花！めっちゃエロかったね。演技上手いじゃん！」

「う、うるさいな！余計な事言うな…で、ちゃんと洗脳できたの？」

「当然じゃん！完璧。六花が演技してしつかりその気にさせてくれてたから超楽勝だつ
たよ。僕の力は要らなかつたんじゃない？だつて超どエ…」

「うるーさーいっ！黙れ！言うな！」

「あはは。顔真っ赤。あ、ちゃんとマダラにもさつきの演技の様子、報告しておくね！」

「やめて！もうっ！さつき買っておいた雲隠れ名物・雷饅頭、ゼツにはあげない！」

「いいよ奪つてでも食べるから」

「させるかー！」

六花はゼツを捕まえようと狭い部屋を走り回っていると、隣の客からうるさいと怒鳴られた。

次の日の夜。

暖かかった昨夜とは打って変わって、今夜は雁渡しの北風が吹いており、肌寒い。

その風で髪を揺らしながら、戦闘服姿の六花は封印塔の前に立って居る。

周囲の足元には警備の忍十人ほどが、六花の幻術で眠らされ転がっている。

「金角様、銀角様。来てくださったんですね。ありがとうございます。」

目の前にスツと音もなく現れた二人を見て、六花はニツコリと微笑んだ。

「早速、封印を解いて貰おうじゃねえか。」

「はい。お任せください。」

六花は封印塔の扉に歩み寄ると、右手の人差し指と中指を揃えてそつと扉にかざし、その右手の甲を左手で覆って目を閉じた。

・・・いい？やるわよ？ゼツ・・・

・・・うん。オーケー・・・

「解!!!」

瓶の三つが現れた。

「す、すげえ……本当に解けた……」

「お、お前……本当に一人でこの封印を解くなんて……」

二人は唾然としている。しかし六花は気にすること無く二人に歩み寄り笑顔で言う。

「さあ、どうぞ。お手に取ってください。あなた方お二人にしか触れられない代物ですわ。」

二人は駆け寄ると早速その三つの宝具を手を取った。

「やったぞ銀角！これで俺たちは最強だぜ!!」

「ああ金角！この五つの宝具が有れば雷影なんてたやすく倒せるぜ！」

二人は五つ全て揃った宝具を撫でながら喜び合っている。

六花は目を見開き、口角をきゅつと上げてその様子を見つめた。そしておもむろに二人に近づいてゆく。

「お二人共……」

その声に二人が反射的に六花の顔を見た。

すると二人の動きがピタリと止まる。

六花の目には、写輪眼が真っ赤に浮かんでいる。

そしてゼツは身体を棒状に変化させ、二人の後頭部に同時にくっ付いた。

「二週間後の同盟締結式の後、クーデターを起こせ。そこで二代目火影を殺すんだ。その後はこの里を抜ける。二度と里に戻って来るな。オレの言うことは絶対だ。いいな？」

「……分った……」

フツ……

「お願いします。クーデターを起こしてこの里を木ノ葉から守り、そして憎き二代目火影を殺して下さい。どうか、どうか、お願いでございます！」

六花は二人に向かって深々と頭を下げて懇願した。

「……分った。任せておけ……」「……宝具、感謝するぜ……」

そう言うと二人は頭を下げ続ける六花の横をすり抜け、走って出て行った。

「お疲れ。ねえねえ昨日の雷鰻頭美味しかったからマダラにもお土産で買って帰ろうよ。」

「ハア……自分が食べたいだけでしょ？ていうかもこの時間じゃ店やってないし！それにマダラ様にはいなり寿司のほうがいいでしょ？って、そうじゃなくて兎に角!!まずは封印を元に戻すよ！ほらっもう！」

「へーい。あ、一週間後また来た時には買おうね。雷鰻頭。」

「はあ……」

ゼツに呆れて溜息を吐く六花だったが、実は無事に任務を遂行した安堵の溜息だった。

六花の幻術とゼツの洗脳により、間違いなく金角・銀角は一週間後に行動を起こすだろう。

だが、絶対に大丈夫などと決めつけるのは危険だ。

一旦は安堵したものの、一週間後、二人がマダラの思惑通りに行動するのを見届けるまで安心はできないのだ。

六花とゼツは協力して封印術をかけ終わると、秋風に紛れてその場から姿を消した。



「あく早く雷饅頭食べたいな。」

「あれから毎日言ってるし。フフフツ！」

六花は左肩に載るゼツと共に栗拾いをしている。足元の笑み栗同様、六花も笑顔である。

雲隠れの里に赴き任務を遂行して帰って来ると、珍しくマダラから褒められた。

いや、初めて褒められたかもしれない。

『よくやったな。褒めてやる。』

まさか任務で褒められるなどと思ってもおらず、六花は嬉しい驚きで有頂天になって

いた。

一週間後も、きつと計画通り、うまくいく。

浮かれる心で、いつのまにか緊張と不安は消えていた。

「きゃあ！」

「びつ栗した？なんちゃって。」

「も〜ゼツつたら何やってんのお？アハハハハ！」

六花が開いた毬（イガ）の中にゼツが入っていて、六花を驚かせた。二人は笑い合う。

その様子を、マダラは遠くから見ている。

マダラは無意識にいつも寄せている眉間のしわを緩め、口角も上げている。どこか懐かしい気持と、愛おしく温かい気持になる。

そして、遠い昔に亡くなった、弟たちのことを想い出した。

戦の日々の中でも、束の間の休息には皆でこうして笑い合って遊んでいた：

ふと、森の木々が風に吹かれ揺れる木洩れ日が、幼い弟たちが走り回る姿に重なって見えた気がした。

『兄さん、騙されるな…』

その言葉にマダラはハッと目を見開いた。

「……イズナ……」

目線の先に在る六花の姿が、一瞬、誰だか分らなくなる。

マダラは恐る恐る、両方の掌を開いて見つめた。すると、あの日の生温かい鮮血が掌のうえに蘇る。

マダラは小さく頭を振り、急いで六花の方向に背を向けた。

暗く重く、しかし決して消えることのない胸の奥の赤黒いマグマが、沸々と熱を上げるのを感じていた。

それは、怒りと憎しみだった。

その対象は勿論：

しかし、その対象に対してイズナを殺された怒りと憎しみ以外の、もつと他の感情もあるのだが、それがなんだかマダラ自身にも良く解らない。

確かにその感情も怒りの類なのだが、イズナを殺された事とはまた違う、別の何かに対する感情である。

しかし、そんな事はどうでも良い。

扉間が、千手一族が、戦が、人間が、この世界が、そして：友であった柱間が憎いだ。

それでいい。それで：

「マダラ様——栗が沢山採れましたあ！」

その声に振り返ると、六花が満面の笑みでこちらに手を振っている。

マダラは、ほっと心の中で小さく息を吐いた。

「…ガキみたいにはしゃぐな。帰るぞ。」

マダラはそう言つて六花に背を向け、顔がほころぶのを隠して歩き出した。

すると直ぐに六花がマダラに追いつき、斜め後ろから自分の顔を窺っているのが分かったが、マダラはそつと反対側に顔を逸らした。

そして、思う。

・・・コイツは…六花を…失いたくはない・・・

夕暮れ迫る静かな森の中、落ち葉を踏みしめる二人の足音だけが鳴っていた。

六花の森（3）金銀兄弟のクーデター、扉間班の戦い

◆
コトツ。

扉間は署名し終わると静かに筆を置いた。

そして今一度、二代目雷影と向き合った。

「この同盟に至るまでに再び大戦が起こってしまった。しかしこうして火影自ら我ら赴いてもらい、木ノ葉と同盟を結べた事を本当に嬉しく思う。心から礼を言う。」

「こちらもだ、雷影殿。心からこの同盟締結に礼を言わせてもらいたい。いまのこの戦火を収めるには時間がかかるかもしれないが、共に協力し、民と里を守ろう。」

パチパチパチパチパチパチ……

二人が固く握手をすると大きな拍手がおこり、鳴りやまない。

扉間と雷影は互いに笑顔を見せて頷いている。

その様子を、扉間の護衛で同行した、猿飛ヒルゼン、志村ダンゾウ、水戸門ホムラ、うたたねコハル、秋道トリフ、そして、うちはカガミが拍手をしながら見守っている。

「なんか昔に戻ったみたいだよな！」

「確かに！こうやって皆で一つの部屋に泊ってワイワイやるなんて何年ぶりだろう」

ヒルゼンが酒を片手に嬉しそうに言うのと、コハルもヒルゼンの顔を覗き込むようにして嬉しそうに言った。ホムラ、トリフ、ダンゾウも、そうだなと言つてにこやかに酒を飲む。

その様子を見て、扉間も微笑んでいた。そして一口酒を飲むと、僅かに目を伏せて言う。

「今回の同盟締結でこの戦の終息も早まるだろう。いや、早く終息させなければならぬ……木ノ葉だけではなく、五里の市民たちの為にもな……」

全員が少し俯き、口を閉じて何度も頷く。

扉間を護衛する為の都合もあるが、久しぶりに扉間とその弟子・部下たちが揃つたとあり、全員一緒に大広間で就寝することになった。

寝る前に皆で今日の労いとして、ぐい呑み一杯だけのささやかな酒盛りをしている。カガミも一緒に頷いていたが、今考えていることはきつと、他の誰とも違う事だろう。『……さつ、食べましょう！皆さんお腹空いてるでしょ？遠慮しないで沢山食べてね。

まだ茶碗蒸しや豚の角煮、シジミのお味噌汁もあるのよ』

いや、もしかしたら扉間だけは、自分と同じ事を想っているかもしれない。

カガミはそう考えると、芙蓉を手にかけてからの毎日：24時間365日：決して消えることのない、胸に突き刺さった楔（クサビ）が、更に奥へと深く突き刺さるのを感じた。その痛みで、ぐい呑みを持つ左手が僅かに震え始める。

「そういうカガミ、お前んとこ子供は何歳になったんだ？」

いつの間にか普通の会話がスタートしており、不意にヒルゼンから話しかけられてカガミはハツと我に返った。全員の視線が自分に向いている。勿論、扉間の視線も。

「あつ、ああ…もうすぐ十二歳かな。」

「もうそんなになるのかよ。はえーなあ。」

カガミの答えに、ダンゾウが珍しく優しい表情をして言った。

「あーあ。なんで女の私よりカガミとヒルゼンが先に結婚して子供までいるかなー。あ、そういうえばヒルゼンとこは二人が目産まれるんだっけ？」

「二人目なんてまだ出来てねえって！どっからそんな話出てきたんだよ！」

「まだ」だつてさく！予定はしてるんだあ。アハハハ！」

コハルがヒルゼンに話を振り、照れるヒルゼンを全員がからかい笑いが起こる。カガミは話題の中心が自分から逸れた事にほっとする。

カガミがふと顔を上げると扉間と目が合った。

扉間だけは、真顔でじつとカガミの顔を見つめていた。

カガミは焦って顔を逸らす。

動揺し、止まっただはずの手がまた震える。

扉間以外誰も、カガミの様子に気付くこと無く楽しそうに笑い合って話していた。

◆ 「貴様ら起きろ!!!」

未明、扉間の声で皆が飛び起きた。

扉間は障子を開け廊下に出て、ガラツと勢いよくガラス戸を開け、遠くを見つめる。

「どうしたのですか?」

皆が扉間の所へ集まり、その視線の先に目を凝らす。

「伏せろ!」

ドン!バン!ババン!バン!バン!・・・

カガミが大声で叫ぶと同時に目の前で複数の爆音が鳴る。

音が鳴りやむと、全員が腕を盾にしながらゆっくりと立ち上がり目の前を見た。

目の前、200mほど先でいくつも炎が上がっている。

扉間が即座に感知をする。

「この里の忍が・・・暴れている。内紛か!貴様ら準備しろ。」

扉間が言うとうと全員が服を着替え戦闘態勢を整えた。扉間も素早く甲冑と額当てを

纏った。

すると、部屋の扉を勢いよく開けて一人の忍が転がり込んできた。

「火影様！直ぐにお逃げ下さい！我が里の戦闘部隊がクーデターを起こしたようです。もしかしたらあなた達のこと狙っているやもしれません！」

「クーデターか・・・」

「扉間様、直ぐに里を出しましょう。」

コハルが隣で冷静な声で言った。

そして全員で直ぐに別邸を出た。

「俺たちを追跡している！何故だ！」

「やはり狙いは扉間様か！」

「うん。とにかく、扉間様を皆で守るよ！」

別宅を後にして木ノ葉の里へ向けて漆黒の森を走っていたが、すぐに追手が迫って来ていることに気付いた。

「もしかしたら、他里と共謀しているのかもしれない・・・」

「だとしたら、敵はさらに増える可能性も・・・」

コハルとホムラがそう言うのと、扉間は全員止まる様に指示をし、一斉に地上に着地し

た。

「七人で固まって逃げるのは不利だ。別行動にする。猿、貴様はダンゾウ、カガミ、トリフと行け。コハル、ホムラ、貴様らはワシと行くぞ。」

全員が頷くと直ぐに二班に分かれ、再び木の上に飛び上がると、別々の方向へと走って行った。

・・・ガン！キイン！カン！キイン！・・・

ヒルゼン、ダンゾウ、カガミ、トリフの前に無数のクナイと手裏剣が降ってきたが全員それを防いだ。

『!!』

ドカアアアン!!!

四人の頭上で突然大きな爆発が起こった。瞬時に四人はそれぞれ別の方向へ逃げた。クナイと手裏剣、そして鉄の針があらゆる方向から降って来る。どうやらあらかじめ忍術によって仕掛けられた罠の様だ。四人はそれを防ぎ、避けながら前へと走って行く。

そしてダンゾウが何とか罠をすり抜け、いったん茂みに身を隠した時。

ザザッ！

「!!』

ビュン！ビュン！ビュン！・・・ドカァン！！

「っ！！」

茂みの向こうから敵が起爆札の付いたクナイを投げつけてきて、ダンゾウの目の前で爆発した。ダンゾウは一瞬動きが遅れてしまい、なんとか両腕で頭を守った。

「大丈夫か！！」

気が付くとヒルゼンがダンゾウの肩を抱え、一緒に走っていた。

「余計な真似だ！」

ダンゾウは焦ってヒルゼンをつき飛ばした。

「フツ。まあそう言うなよ。ここで仲間を失うわけにはいかないだろう？」

「チツ！」

するとヒルゼンが目の前にカガミとトリフのチャクラをみつけ、ダンゾウと共に急いで追いついた。

「お前から無事だったんだな！トリフ、カガミ！」

「ああ、なんとかね」

「敵が多すぎる。どうする？ヒルゼン」

「扉間様と合流しよう。カガミ、扉間様の位置を感知してくれ。」

そして四人は扉間が居る方へと方向を変え、走り出した。

「囲まれたな．．．敵は．．．二十。この追跡力からして雲隠れ．．．手練れの金角部隊か。」

何とか無事に七人全員が扉間と合流し、扉間が地に指をつけて敵を感知する。

しかし、既に敵に囲まれていた。

しかも敵は雲隠れ最強と言われる、金角銀角兄弟が率いる戦闘部隊だった。

「こちらは扉間様を含めて七人．．．これじゃとても．．．」

「ホムラー！そんな弱腰でどうする！敵はこちらの正確な位置は把握できていない。ここは待ち伏せして逃げ道の突破口を作りましょう。」

「無理だコハル．．．この場合、誰か一人、陽動で気を引くしかない。」

「囹役か．．．誰が．．．」

カガミとトリフがそう言うのと、即座に手を挙げた者が居た。

「俺がやります。」

「ヒルゼン！お前！」

「ヘッ！心配すんな！こう見てもお前らの中じゃ一番出来るって自負してる。なに、死にやしないよ。」

そして呆然として自分を見ているダンゾウの肩に手を置いてヒルゼンが続ける。

「これから皆を頼むぞ！ダンゾウ！お前なら……」

「黙れ！……俺が手を挙げようと思っていた。一人で良い格好するな！囃役は、俺がやる！」

ダンゾウはその手を振り払うと、そう言っただけだ。

「ダンゾウ……」

ヒルゼンが複雑な表情でダンゾウを見つめていると、カガミが口を開いた。

「いや。囃役は俺が行く……いいですよ。扉間様」

「カガミ！何言ってるんだよ！ダンゾウ、カガミ、お前ら二人じゃ務まらない。俺が行く！」

ヒルゼンはダンゾウとカガミの顔を見ながら言った。

そして、これまでのやり取りを黙って聞いていた扉間が、ついに口を開く。

「囃役は勿論、ワシが行く。貴様らはこれからの里を守っていく若き火の意思たちだ。」

「駄目です！貴方は火影なんですよ！里に貴方以上の忍は居ない！」

ダンゾウがすかさず扉間に意見した。

「ダンゾウよ。貴様は何かある毎に猿と張り合ってきたな。だがこの場で必要なのは仲間同士の結束だ。私的な争いを持ち込むな。決断が遅かったのは事実。まずは己を見つめ、冷静さを欠くこと無く己を知る事だ。今のままでは仲間を危機に陥れる」

ヒルゼンはゆるぎない意志を宿した目で扉間の目を見てその話を聞いていたが、ダンゾウは目を伏せ唇を噛みながら聞いていた。その二人の様子を見て扉間は続ける。

「とにかくダンゾウ、猿。その歳で焦る必要は無い。いずれその時が来る。その時までその命、とっておけ。」

そう言うのと扉間は静かに立ち上がった。しかし全員が何も言えずに黙って扉間を見上げるしかなかった。

「猿よ。里を慕い貴様を信じる者たちを守れ。そして育てるのだ。次の時代を託す者を……明日からは、貴様が火影だ。」

『!!』

扉間の思わぬ発言に全員が驚き更に何も言えなくなるが、反射的に全員の視線が一斉にヒルゼンに集まる。しかし、ダンゾウ以外の者は直ぐに地面に目を伏せる。その表情は悲壮の色に染まっている。

扉間が、今、ヒルゼンを次の火影に指名した。

それは、扉間が己の命に代えて自分達を守ろうとしている事を明示していた。

「猿、木ノ葉を頼むぞ」

「はいっ!」

ヒルゼンも悲しい気持ちは同じだった。しかしそれを打ち消し、扉間の火の意思で己

の意思に大きな火を興す様に、揺るぎない大きな声で答えた。

全員が顔を上げて扉間を見た瞬間、扉間の姿は消えた。

「待つてください」

その言葉に、扉間は足を止め振り返った。

そこにはカガミが居た。

「囃役は私がやります。これまで木ノ葉の里の為に生かされてきたこの命……今こそこの命を役立て、そして償う時です。私に行かせて下さい。」

「……貴様に囃役は務まらない。貴様が失敗し他の者まで犠牲になつては意味が無い。貴様には写輪眼がある。その力で皆を里まで守り通せ。」

「……扉間様……」

扉間はカガミに背を向け歩き出したが、直ぐに足を止めた。そして背を向けたまま言う。

「……俺はかつて、芙蓉を殺そうとした。だが、マダラによつて芙蓉の命は助かった。マダラが居なければ俺が……芙蓉を殺していた。貴様と芙蓉が出逢うことも無かつただろう。」

「……」

カガミの言葉を待つことなく扉間の姿は消えた。

「……………」

目の前の真つ暗な森はまるで、芙蓉を殺してしまつてからの自分の心の様だとカガミは思った。

しかし、その闇の向こうに、一瞬、芙蓉がこちらに振り返る姿を見た気がした。



「水遁・水陣壁！」

スザザザアアア……!!!

分厚い水の壁が暗い夜空に向かって伸びてゆく。

ほぼ全員の雲隠れの忍がその壁に跳ね返されたり足止めされたが、その二人だけはその壁を難なく破り、扉間の目の前に飛び出て来た。

「てめえが二代目火影か……なんだ独りかよ。部下は全滅したのか？ハハッ！」

「まあ雑魚はどうでもいい。てめえをぶつ殺すことが目的だからな。」

「狙いはワシか……木ノ葉の里にも攻め入るつもりか？」

二人は扉間の問いには答えず、二人で顔を見合わせてニヤリと笑うと扉間に飛びかかつて行った。

「芭蕉扇！」

金角が宝具の一つを振りかざすと雷・風・土・火・水の性質を帯びた突風が起こり、扉間へと向かっていく。扉間はすかさず飛び立ちそれを避けたが、扉間を追うように飛んできた大量の火の粉を受け、腕で顔を覆った。

「扉間様、右へ！」

その声に扉間は直ぐに右へ飛んだ。

「……カガミ！」

「この暗闇の中、五つの性質全てを操る宝具を相手にするのはいくら扉間様とは言え不利です。この写輪眼があれば見極められます。」

カガミは扉間の前に立ち、背中と言った。

「何だ、まだ雑魚が残ってたのかよ。まあ何の問題もねえよな。銀角よ。」

「ああそうだな金角。写輪眼ごんごとき、俺たちの前では無意味だぜ。はははっ」

まだ夜明けは遠い森の中、金角と銀角の二人対、扉間とカガミの二人の戦いが始まった。



広い森が作る空との水平線は薄青く、朝またぎを迎えていた。

六花は少し不満そうな顔で、冷たい空気を胸いっぱい吸い込みながら走っている。

ゼツは金角銀角兄弟が火影を殺す場面を記録・確認する為、夜中に一人で出て行った。

戦闘は壮絶なものになる事が想定された為、六花はそれに巻き込まれないように雲隠れの里の隅で待機していた。そして先ほどゼツは六花に火影の死を伝え終わると、急いでマダラに知らせるからと言って先に帰ってしまった。

「何よ。いつも私と一緒に報告してるのに今日に限って…さてはアイツ、雷餛飩を一人で全部食べる気じゃ…」

六花はそう呟くと不機嫌な顔になり、足を速めた。

ザツ。

六花は森が開けた土地の上で足を止め、顔をしかめた。

そしてゆっくと歩み寄る。

・・・死んでる。雲隠れ？木ノ葉？どっちの忍かな…まあいいか・・・

甲冑と思しき防具はボロボロに壊れ、全身傷だらけで右脚は骨が見えている部分もある。額から顎にかけて血で染まっている。

六花はその死体から急いで目を逸らし、横を避けて通ろうとした時だった。

「いっふっ…」「ホ」「ホ…ぐっ…」

「!!」

六花は驚いて後ろに飛び退いた。

「いっ、生きてる??…」

死体と思っていたその男は、まだ息があるようで、咳き込み口から血を吹き出した。

六花はゆつくりと男に歩み寄り、そっと男の顔を覗き込んだ。

男は薄目を開け、弱弱しく息をしていた。

死にかけの人間や死体など山ほど見て来たのに、その男の白か銀かの髪の毛が血で濡れている様子を見たたん、急に胸に何かが届いてきて喉が詰まり、苦しくなってきた。

その理由を考える前に、六花は気づけばしゃがみこみ、二本の指で男の顎を上に向けて気道を確保すると、心臓の辺りに両手を当てて回復術を始めていた。そして男の胸に耳を当て、心臓の音が少しだけ安定したのを確かめると、次は足の傷を回復に当たった。

辺りは随分と明るくなり、あとは太陽が森から顔を出すだけとなった。

「……ふ、芙蓉……」

男の微かなその声に、六花は男の顔を見た。

「……芙蓉……迎えに……来てくれた……のか……」

「ふよう？ 誰だそれ。黙ってる、死ぬぞ。」

六花は死にかけている男のうわ言など気にせず回復術を続ける。しかし男も言葉を続ける。

「じゃあ・・・君は・・・誰だ？・・・」

「お前に教える名など無い。」

そう言うのと六花はすくつと立ち上がった。そして、険しい表情で男の顔を見下ろして言う。

「オレの力で回復出来るのはここまでだ。里まで帰れるかどうかはお前の運次第だ。じゃあな。」

「礼を・・・言う・・・ありがとう・・・」

「・・・なに、ただの気まぐれだ。」

六花は険しかった表情を少し緩め、唇を尖らせて少し恥ずかしそうに顔を逸らし、そう言うとその場を走って去って行った。

扉間はその足音が聞こえなくなると、両手を地に着け、力を入れてみる。なんとか起き上がれそうだった。そしてゆっくりと、全身の痛みに堪えなが上半身を起す。

そして、森の水平線から僅かに覗く眩しい太陽に目を凝らした。

・・・他人の、空似か。それとも、幻覚か・・・



「遅かったな。何かあったのか」

「申し訳ありません・・・途中、雲隠れの残党に絡まれて・・・問題はございません。」

アジトに帰還しマダラの前に跪いて報告をしながら、六花はいつかと同じ胸の苦しさを想い出したが、それを隠そうと真っ直ぐにマダラの顔を見つめていた。

そう、あの時とは違うのだ。

「反射的だったとはいえ、死にかけていた男一人を助けただけだ。

クーデターに巻き込まれて死にかけてるような弱い忍一人を助けた所で、なんて事はないだろう。

マダラはそうかと言つて背を向けると、六花は少し目を泳がせ、後ろめたさを飲み込んだ。

「ご苦労だったな。しっかり休め」

「はっ、はい！」

マダラからの労いの言葉に、嬉しきで声が上がった。その一言で、後ろめたさなど一瞬で消化されてしまった。

「そういえばゼツから聞いたぞ…一週間前、名演技だったそうだな。フッフ。」

「つ・・・。」

六花の顔が赤くなり、俯いて両手で顔を覆った。

「六花くお帰り。雷饅頭美味しかったよねえ。でもあの店、焼けちゃったかな？」

「ゼツあんた、私のこないだの演技、マダラ様に脚色して伝えたでしょ!! もう!」
「そんなこと無いよ。見たマンマ伝えただけだけど?」

六花は疑いの眼差しで頬を膨らまし、ゼツをジトツと睨みつけた。

「ていうかさ、ホントに残党に絡まれてたの? まさかまた余計な事してたんじゃないだろうね。」

「別に…何もしてない。」

六花はそう言つてさつと顔を横に逸らし、僅かに目を泳がせた。

「やつぱり…。何したのさ? マダラには言わないから教えてよ。」

「男を…。死にかけてたから、助けた。」

「まさか何人も助けたんじゃないだろうね!」

「一人だよ! 死体だと思つたら急に意識を取り戻して、驚いて…それでつい…」

「ねえ、”つい”で助けるもの?」

「いいじゃん! クーデーターに巻き込まれて死にかけるような弱い忍だよ? そんな奴一人助けたくらい別に問題無い。火影は死んで、任務は無事に完遂したしさ!」

「それを判断するのは君じゃないよ、六花。この数年で成長したと思つたのに、そんな事も分らないの?」

六花は堪らず立ち上がり、目の前のゼツに叫ぶ。

「マダラ様みたいな口ぶりで言わないで!!」

「六花。僕はマダラだよ。」

ゼツはこれまでに無い、冷たい声でそう答えた。

さつき消化したはずの後ろめたさが再び喉を突き、六花は顔を歪めた。

「いくら毎日仲良くしてるからって、君と僕は対等じゃない。自分の立場忘れられないね。」

「……はい。」

「じゃあ次からまた気を付けてね。僕、六花のこと大好きだよ。」

そう言うのとゼツはびよんと六花の左肩に載り、頬に擦り寄った。六花は苦い笑顔でそれに頷いた。



空は分厚い雲に覆われ、野分の強風が吹き、これから来る嵐を予感させる。しかし雨はまだ降っていない。

その窓辺にもたれながら、樹は苦笑交じりで言う。

「ヒルゼンの奴、突然火影になって四苦八苦してますよ。早く扉間様が指南してやって下さいよ!こっちまで業務に支障出てるんですからあ。まったく。」

勿論皮肉も忘れない。寝台に横たわったまま、扉間はそう言う樹の顔を見てフツと鼻

で笑つて見せた。

四日前。扉間は自力で木ノ葉の境界線付近まで辿り着き、そこで保護された。

しかし容体は思わしく無く、丸二日間意識不明で眠り続けた。そして、今里に居る医療忍者と今の医療技術ではそれ以上の回復は難しいものがあつた。それでも周囲は懸命に治療に当たろうとしたが、扉間の強い希望で自宅での緩和治療を行うことになつた。

そこへ樹が見舞いへ来ている。

「猿なら問題ない…。貴様こそ何年ワシについておつたんだ？それを活かして支えてやらんか…：まったたく」

扉間もいつものように、皮肉交じりに樹へ言葉を返した。

「嫌です。」

「ハア…：貴様も火の意思を継ぐ木ノ葉の忍なら…」

「解つてるんですからね！貴方だけ先に芙蓉の所へ行こうつたつて、そうはさせないから…：芙蓉だつて、喜ばないつっの…」

「忍が自分の最後を選ぶのだ…：こんなに幸せな事は無いのだがな…」

「はあ？どんだけ我儘なんですかあ。火影のくせに、ありえないし！」

そう言う樹の声は震えている。涙を見せまいと窓の外を見ながら話している。

扉間自身も、そして樹も、扉間の命が長く無い事は解っていた。

「それがなあ…芙蓉に会ったんだ。いや、芙蓉に、助けられたのだ…」

「ちよ、死にそうアピール止めてくれますう？」

樹は扉間の方へ振り返り、いい加減にしてくれと言わんばかりの表情で抗議した。

強い風が窓ガラスをガタガタと揺らして音を立てた。

しかし、桜は咲いていない。強風で剥がれた木の葉だけが風に舞っている。

しばしの沈黙の後、扉間が続ける。

「死にかけていたワシを、芙蓉に瓜二つのくノ一が回復術で助けてくれたのだ…本当だ。名は教えてくれなかったがな…」

それを聞いて樹は静かに深呼吸し、そつと目を伏せた。そしてまた顔を上げ、僅かに微笑みを讃えて天井を見つめている扉間の横顔を見た。もう、樹には何も言えなかった。

そこへ再び強い風が吹き、木の葉がパチパチとガラス窓に当たって落ちた。

「秋の嵐が来そうだな…こんな所で油を売ってる暇があったら早く本部に帰って嵐に備えろ。水路と電線電柱の点検も忘れるな…」

「ハイハイ、分かりましたよ〜だ」

樹はヒラヒラと右手を振りながら、つかつかと部屋を出て行った。

「ハイは一回で良い……フツ、まったく……」

◆ 六花はマダラと呼ばれ、アジトの一室に向かつて歩いている。

何の用事だろうかと考えつつも、頭の半分では今夜の夕飯を何にしようかと呑気な事を考えていた。

失礼しますと言つて中に入ると、マダラはこちらに背を向けて立つて居た。足元にはゼツが居る。

「何の御用でしょうか。マダラ様。」

マダラはゆっくりと六花の方へ振り返つた。腕を組んだまま、無表情で何も言わずに六花の顔を見つめる。重い空気に、六花の心臓がドクンと音を立てる。そしてマダラが口を開いた。

「お前は、俺の数十年を無駄にした。今回ばかりは許すことは出来ん。」

「……?」

六花は全く何の事だか分からないのだが、全身がいつきに冷たくなるのを感じ、動揺して目を泳がす。そして何の事なのか必死に思い当たる事を頭の中で検索する。しかし全く分からない。

「六花……君が助けた男は、二代目火影だったんだよ。」

ゼツがマダラの足元で六花に向かって言った。

「ええっ!!だつて、火影は確かに死んだはずじゃ!!」

「おそらく仮死状態だったんだろう。扉間は千手一族、そして柱間の弟だ。生命力は並外れている。それを知った上で、お前とゼツだけに任せた俺も間違っていたがな…」

「申し訳ありません!!!どうか、どうか今一度チャンスを下さい!!!私が必ず火影の息の根を止めて参りますっ!!!」

「その必要は無い。助かったとはいえ、奴はもう虫の息だ。間もなく死ぬ。」

その言葉に六花は思わずホツとした。自分が助けてしまったとはいえ、火影は死ぬ：良かった。しかし、マダラは続ける。

「だが問題は、お前がまた俺の命令に背き勝手な行動をした事だ。数年前の反省から学んでいたと思っていたが、何も成長していなかったようだな。よりにもよって俺が悲願としていた扉間殺害の任務で、その扉間を助けるとは…心底失望したぞ。」

「マダラ様!!!お許しください!!!どうか、どうか…」

六花はマダラの足元に駆け寄り、土下座をしてマダラを見上げて必死に懇願するが、マダラは大きな声で怒鳴りつける。

「黙れ!!!今すぐ俺の前から消えろ!二度と現れるな。そして六花という名前も返せ。今後その名を名乗る事は許さん。そして俺のことを他言すれば殺す!」

六花はすがりつくような目でマダラを見つめながら首を横に振り、はあはあと息を上げていた。動揺しすぎて言葉が出てこない。

マダラは六花を無視して部屋の出口に向かって歩き出した。

「マダラ様!!!私を…私を今すぐ殺して下さい…貴方に捨てられ、名も無くし、生きる意味まで無くしては、私は死したも同然です。この先、肉体だけで生きていく事など出来ません…お願いします…」

六花はやつとのことですう言葉にした。本心だった。

マダラは足を止めたが、振り返りはしない。

「なぜ俺が、お前の為に、お前を殺してやらなければならん…最後の命令だ。今すぐここを出て行け。消えろ。」

「マダラ様つ!!!」

本当は立ち上がり、マダラの背中に駆け寄りしが見付きたかった。

殴られても蹴られても、必死にしがみ付きたかった。

しかしその激しい感情の反面、マダラの命令に従わなければならないという思考回路が働き、六花の足を動かさなかった。

居なくなったマダラの背中を真つすぐ見つめ続けるその目からは、涙だけが滝のように流れ落ちる。

そして、ゆっくりと立ち上がった。

強風の中、髪を振り乱しながら六花はとぼとぼと、黄金色の枯れスキの草原を歩いている。

耳障りな風の音、飛んでくる枯れ草、まとわりつく髪の毛が不快に感じるが、そんな事で今の悲しみが紛れるはずもない。

「六花！待って！」

今はもう失った名を呼ばれ、六花は虚ろな目で振り返る。

強風で真横になって揺れる枯れスキの中から、ゼツがぴよんと飛び出して六花の掌に載った。

「ゼツ……今までありがとう」

「死ぬ気？」

「……だって、もう生きてたって……」

「六花、君はまだマダラのこと愛してる？」

六花は黙って、しっかりと頷いた。目にはじわりと涙が浮かんだ。

「マダラも本当は君のこと、今でも愛しているよ。でも流石に今回はマダラも簡単に君を許すことは出来ない。それは解るでしょう？」

「うん…」

「君が以上にマダラの為に役に立てる存在になって、時間が経てば、きっとマダラも許してくれる。だからその為に、今やれる事をやろう。」

「今、やれる…事？」

「そう。マダラと同じ力を手に入れるんだよ…！」

「…？？」

六花の森（４）扉間から全てを取り戻す為に



大戦中というのに、この里の人々はどこか呑気で、夕方の町は平和そのものといった感じで賑わっている。

野分の嵐が過ぎ、吹き返しの風が吹いている。

そして今、六花はその町を髪を靡かせながら歩いている。

客に元氣よく声を掛ける店員、手を繋いで買物をする親子、酒を飲む男達、吟じている旅芸人：初めて見るはずの光景だが、どこか懐かしい気持になる。

六花はふと、自分はマダラに救出され下僕にされる前はいつたいどんな町で、どんな暮らしをしていたのだろうかと思いを巡らせてみる。

そして気づけば長い坂道の前に立って居た。

・ ・ ・ 何をぼーっとしているんだ。失敗すれば二度とマダラ様の所に戻れないぞ。 ・ ・ ・

六花は自分を戒めると拳をギュツと握り締め、陽が沈んで暗くなった坂の上をギロリ

と睨みつけた。

夜は更け辺りは完全に暗闇に包まれた。目の前にある家にも、灯りが煌々とついている。

風は止み、静かになっている。

六花は林の影からその家を見張っている。夕方から合計五人ほどが家に入ったが、そのうち四人は直ぐに出て行き、入るのを見ていない医療忍者と思しき男一人が出て行った。おそらく、さつき入って出てこない女一人と任務を交代したのだろう。

・・・中には医療忍者の女一人と…風性質の忍が一人か。この時間になっても護衛が増えないとは、やはりもうお役目御免の人間の護衛はそんなものか。いや、だが真夜中になって増えるかもしれない。ここは夜明け前、夜間の護衛達が一瞬気を抜く瞬間を狙うのが正解か・・・

六花は未明に襲撃すると決め、それまで、このまま様子を見ることにした。

「！！」

医療忍者二人が交代してから、まだ一時間も経っていない頃だった。

六花は気配を消しつつも、身体を少し木の幹から乗り出してその姿を見た。

誰かは判らないが、少なくとも今日、その家を出入りした忍の中では一番強い忍であ

る。

「…こいつが二人目の護衛か!!こんな強い忍が護衛につくなんて…」

六花は想定外の事に心の中で少しばかり焦る。

元・火影とはいえ、今や死を待つばかりの人間にこれほど強い忍の護衛がつくとは考え難かった。

しかし、*“絶対無い”*などと決めつけることは出来ない。

勿論、六花も想定はしていた。

…このままだと扉間が死んだ後に死体を狙うしか無くなる。だがそれではマダラ様と同じ能力が得られる保証は無い。どうすれば…

六花は必死に頭の中で策を講じる。そう、必死に。



「…猿か。貴様、こんな所に来ている場合では無いだろう…嵐の被害調査は終わったのか?…」

扉間は横になったまま、ヒルゼンが部屋に入って来るや否や、直ぐにそう言った。

「…申し訳ございません。先に雲隠れと結んだ同盟の件でお話があります。宜しいでしょうか。」

「そうだったか…ああ、構わん。聞かせろ…」

ヒルゼンはクーデターによって雲隠れと結んだ条約を白紙にすべきか検討していたが、扉間が生存して帰還し同盟は続行しろと言った事により、同盟関係を続行するための会談に向けた手続きに追われていた。

今日はその相談の為に来た。

だけ、では無かった。

ヒルゼンは扉間が里に帰還してから毎日、扉間の所へ通っているのだ。

火影の任務を最優先することが今の自分の責務。

だが、やはり敬愛する師匠であり、先代火影の扉間のことが心から心配だった。

出来れば回復し、後進の育成に携わって欲しかった。そして改めて扉間と酒盛りがしたかった。

しかし、怪我の後遺症と感染症に冒されている扉間が助かる確率は極めて低い。

そして兄弟弟子であるカガミは、もう居ない。

ヒルゼンは毎日布団に入り眠りにつく前、声を殺して一人で泣いていたのだった。

「解りました。ご指摘、ありがとうございます。その様にしてみます。それでは、失礼いたします…」

「…ああ。ご苦労だったな…頼んだぞ」

ヒルゼンは頭を下げた後、一度扉間に背を向けたが直ぐに振り返って言う。

「あの…やはり護衛に上忍をもう一人増やしましょう。万全を期した方が良いと…」
「突然火影が交代し混乱している時に、死にそんなジジイの護衛の為、数少ない上忍をつけるだど？馬鹿者…必要ない。」

「…解りました。失礼致します。」

ヒルゼンは再び扉間に背を向けて部屋を出て行った。俯くその顔は、唇を噛み、やり切れない表情だった。



六花の心配は杞憂に終わった。

先ほど目の前の家に入っていった強い忍は、三十分も経たないうちに急ぎ足で帰って行ったのだ。

扉間の護衛以上に重要な任務があるのだろう。

…だよな。扉間はチャクラからしてまだ意識があるようだし、余程の馬鹿でなければ死を間近にした己の護衛など、寧ろ断るはずだ。

よし、予定通り夜明け前に行く！…

芙蓉は大きく目を見開き、うっすらと齒を覗かせ、口角をぐつと上げて微笑んだ。

朝またぎ。

秋冷。

その二つが六花に色々な事を思い出させる。

朝またぎは、今のこの六花の状況を作り出したあの日の事を思い出させる。

・・・あの日、あの時、あんな男を助けたりしなければ・・・

しかし、扉間への怒りと憎しみと共に、何故かその底に熱いものを感じる。

その熱いものとは、マダラを想う時に感じるそれと似ており、六花は酷く戸惑い、自分を嫌悪し、苦虫を嘔み潰したような顔をした。その原因について自然と思考を働かせてしまう。

…秋冷。群青色の空。それから…

「！」

六花は思考を停止して目を見開き、前を見据えた。

その家から、女が一人出て来たのだ。

どうやら見張り役の風性質の忍で間違いなさそうである。

女は玄関を出ると、石畳の短い通路を歩いて門の所まで歩いて来た。

六花は息を殺し気配を消したまま、写輪眼の目を細めてそれを見つめた。

すると女は大きなあくびをしながら両手を天に伸ばし、首をぐるりと回した。そして大きなため息をつく険しい顔になり、当たりを見回している。

・・・もう見張りの交代の時間なのか？ならば交代し、この女が去った後の隙を突くか・・・

六花が猛烈な速さで頭を回転させて作戦を立て直していると、その女はこちらに背を向け再び玄関の方へ歩き出した。また家の中に戻るようだ。

ガシイイインツ・・・!!!

六花が宙から女の背中に刀を振り下ろすと、女は腰に携えていた幅の広い大刀でそれを即座に防いだ。二人の刀が交わり、静寂の朝またぎの空間に甲高い音が響か渡った。

ストツ。六花は地に足を突き、刀を真つすぐ女に向ける。

ズサツ。女は足を踏ん張り、刀を両手で構える。しかし。

「・・・ふ、芙蓉^{つばき}」

女は急に怯えたような悲しむような、しかしどこか嬉しそうな顔で六花の顔を見て刀を降ろした。

六花はその隙に瞬足で女に向かって行くと無表情で女に向かって刀を振り下ろす。

ガンツ!!

女は一瞬遅れ大刀で何とか六花の攻撃を防いだものの、六花の勢いに押され、数メートル後ろに飛ばされ地面に倒れた。

六花は表情一つ変えずにズンズンと女に向かって歩いて行く。

「芙蓉!!芙蓉なんでしょ!ねえ!!私だつて!樹だよ!覚えて無いの!!」

六花は右目をピクリと引きつらせ、立ち止まった

「…芙蓉。誰だそれは?…答えろ」

「誰つて!…もしかして、記憶が無いの?!」

「芙蓉とは誰だと聞いているんだ。さつさと答えろ」

「橘…いや、今は千手芙蓉…私の親友。私の愛する人…そして、扉間様の妻…」

「…フフツ…あはははは!なるほどな。解つたぞ」

「?」

六花は十五歳の時にマダラに命を救われ下僕にされた。

現在還暦手前の扉間の妻であるはずが無い。それに目の前の女はどう見ても三十路半ばである。そんな女と親友などという事は不自然すぎる。

故に六花は樹の言葉に動揺することなく笑い飛ばした。

しかし目の前の女の反応から、自分は扉間の妻と瓜二つなのは事実のようである。

六花は少しだけ面白くなってきた。

自分の事を親友だと思っている女、そして妻だと思っている扉間。

…お前たちの愛する芙蓉とやらに殺されるがいい…

六花は残酷な結末を想像すると、楽しみで堪らなくなり身震いがしてきた。そして、

とても優しい微笑を浮かべて見せた。

「芙蓉……やつと私の事思い出したんだね!!」

六花の優しい微笑みを見た樹は涙をにじませ、嬉しそうにそう言った。

「うん、樹……私、貴方の事、思い出したよ……」

「……芙蓉」

六花は樹のことを愛おしそうに見つめながら、再び樹の方へ歩き出した。

ビュン!

「何するの! 樹!」

樹は懐からクナイを取り出して六花に投げつけ、六花はそれを避けた。

「……お前。芙蓉じゃないな……誰だ!! 扉間様を狙いに来たのか!」

「何言ってるの? ほら、よく見て樹? 私よ。芙蓉だよ?」

「……芙蓉はな、私のことをいつも『樹ちゃん』って呼ぶんだよ!!」

樹はそう叫ぶと再び大刀を両手で構えて立ち上がり、六花に向かって飛びかかった。

しかし目の前の六花の姿は一瞬にして消えた。分身だった。

「火遁・豪火球!」

樹の後ろから六花が火遁を繰り出して来た。樹は地を蹴りそれを避けると、宙に浮かんで大刀を大きく振りかぶった。

「風遁・羽砂亜斗！」

すると六花の放った炎が船の形に変わり、六花に向かって物凄いスピードで跳ね返っていった。

「須佐能乎！」

六花が両手をクロスさせると、六花を包み込むように半透明の巨人が現れ、大きく口を開いくとその炎をパクリと食べてしまった。

「樹とやら・・・お前、なかなかやるな。」

「なめんな！芙蓉の姿を装うなんて絶対に許さない！その化けの皮、剥いでやる！」

樹は大刀を再び強く握り締めた。ふっと頭の中に初代火影・柱間の顔が過ぎる。この大刀は柱間から譲り受けたものだった。

◆ この大刀を手にして以上、誰にも負けるわけにはいかない。

タンタンタンタン…ガチャ！

「扉間様!!!大変ですっ!!!…」

「落ち着け…」

扉間はそう言うと、なんとか寝台から起き上がろうとした。

「駄目です！…」無理をなさらないで下さい！隙を見て私が三代目様に知らせて来ますの

で！」

医療忍者の女が必死に扉間が起き上がろうとするのを止めるが、扉間はその手を振り払って起き上がり、寝台に腰かけた。

「知らせなくていい。貴様は直ぐにここから逃げろ。」

「何故ですか!!」

扉間は答えることなく、ゆっくりと立ち上がると、窓辺に向かつて歩き出した。医療忍者の女がすぐさま脇を支える。

「止めて下さい！何をなさるおつもりなのですか?! そんな身体では危険です！」

「…なに、ワシはもう長くない。だか今直ぐは死なない…一人で歩ける。」

そう言つてゆっくりと窓辺に立つとカーテンを開け、窓を開けようとした。医療忍者は察したように何も言わずに窓を開けるのを手伝った。

『?!』

ガタンと窓の開く音とそのチャクラに、六花と樹は同時にその窓を見上げた。

「…ワシに用があるのだろうか?…入れ」

「何言つてんですか?! こいつ、芙蓉の姿に化けて貴方の命を狙いに来たんですよ!」

「樹…ワシはその娘に命を助けられたのだ。その心配は無い」

「はあ?!」

樹は改めて怪訝な顔で六花の顔から足まで見た。

六花は須佐能乎を解き、無表情で扉間を見上げて言う。

「今日は、アンタに返して貰いたいものがあつて来た」

「…ああ。入れ」

「ちよつと扉間様!!!」

「樹、貴様はコサトと共に里本部へ帰れ。だがこの事は誰にも言うな」

「そんな事できるわけ・・・」

そう言いかけると、樹はゾツと身体に冷たいものが走った。扉間はチャクラを強め、険しい顔でジツと樹の顔を睨んでいる。どうやら本気の様である。

「ワシもその娘に礼が言いたいのだ…心配要らない。」

「でも・・・・・・」

すると家から医療忍者のコサトが出て来て、樹の隣りに駆け寄った。

そして樹とコサトは並んで六花の顔を見た。

その視線に、六花は二人の眼を交互に見てニツコリと微笑みながら言う。

「安心してくれ。用が済んだらすぐ帰る。」

「・・・解った。誰にも言わない」

「・・・解りました。誰にも言いません」

二人の眼には写輪眼が浮かんでいる。そしてその写輪眼が消えるとおもむろに歩き出し、六花の隣りを通り過ぎて長い坂道を二人並んで下って行った。

六花は二人が振り返らない事を改めて確認すると、また窓を見上げた。

しかし、そこには扉間の姿は無かった。

何かを考えるように何度か瞬きをしながらその窓を見つめた後、六花は一人、家の中に入っていた。



六花は部屋の扉の前に立ち、その扉をジッと睨んだ。

扉間のチャクラは先ほどより格段と弱くなっており、下忍レベルと言ったところだった。

しかし木ノ葉の里の元・火影である。油断は出来ない。

六花は意を決して扉の取手に手を掛けた。

ガチャ：

「まさか、君の方から会いに来てくれるとはな…」

六花はその言葉に扉間がもう一度自分に会いたがっていた事を察した。ゆっくりと寝台に横たわる扉間の元へ歩いてゆく。

六花が扉間の枕元に立つと、扉間はとても優しい眼差しで六花を見上げて言う。

「…ワシの、命を取り戻しに来たのだろうか？」

「なぜ解る？」

「フツ…それは樹とあれだけの戦闘をしていたのだから、解るだろ…。それにおそらく君はどこかの里の忍なんだろう？ワシを助けた事を上司に咎められたのではないのか？」

六花は最後の言葉に思わず、無意識にほんの少し目を斜め下に伏せて瞬きをしてしまった。

「…やはりか。ワシは君のお陰でこうして里へ帰り、自宅の寢床の上で死ぬる。本当に感謝している。ありがとう。さあ…やれ。」

扉間は尚も優しい顔で六花の顔を見つめている。六花は今度は明らかに大きく顔を逸らすと、目をつぶって大きく深呼吸をした。

ストーン・・・

「？」

六花は寢台に横たわる扉間の上に跨った。

扉間は思いもよらないその行動に驚き戸惑ったが、首を絞めて殺すつもりなのだろうと思い、気持ち落ち着かせ、再び六花の顔を見つめる。

・・・芙蓉の生き写し。いや、やはり、この者は芙蓉だ・・・

扉間は無表情で冷たい眼差しを向けている六花の顔を見て、改めてそう思った。

亜麻色の髪、琥珀色の大きな瞳、長いまつ毛、真っ白な肌、卵型の顔、上品な口元……毎日眺めている生前の芙蓉の写真、そのものだった。

六花は冷静を装いつつも、心臓の鼓動は初めて一人で任務を任された時以上に高鳴り、緊張していた。

そして、迷っていた。

ゼツの言う通り、扉間と性交渉して細胞を体内に取り込みマダラと同じ能力を手に入れば、マダラの下僕としてまた傍に置いて貰える。

ただその想いだけで、今、ここまで来た。

それまでに迷いなど無かった。しかし。

……でも扉間などと関係をもった私のことを、本当にマダラ様は受け入れてくれるだろうか。嫌悪されるのではないだろうか……

……迷うな。やるんだ。やらなければマダラ様の元へ戻れることは二度と無い。しかしやり遂げれば一割以下でも戻れる可能性はあるんだから……

自分の上に跨り、無言でジッと自分の顔を見つめている六花に、扉間は僅かに苦笑し
て言う。

「どうした？一度助けた人間を殺すのは、やはり苦痛か？……」

その言葉にハツと六花は瞬きを何度かした後、もう一度扉間を見つめた。どれくらいの間見つめ合っただろうか。

それは数秒だったが、六花にはもつともつと長い時間に感じた。そしてやっと、六花が口を開く。

「お前を殺す前に、お前にはして貰うことがある。黙って従え……」

そう言うのと素早く印を結び、六花の出来る最上級の回復術を扉間に施した。

「……!!……」

扉間は六花が何をしたいのか全く分からず、何も言えずにその様子を見ていた。すると、先ほどまで鉛の様に重く息をするのも辛かった身体が軽くなってゆく。

「今、お前を走れる程度の体力まで回復させた。だが勘違いするな。お前を助けるつもりは無い。変な真似をしたらお前を殺して、さっきの女ども、そしてこの里の人間を殺すぞ……」

六花は両手を扉間の顔につき、顔を近づけ、小さな声でそう言った。

「何をするつもりだ?」

「黙れ! お前に質問する権利は無い!」

そう言うのと同時に、扉間の目の前に六花の亜麻色の髪の毛が写っていた。

一瞬、何が起こっているのか分らなかった。

六花は扉間の口を塞ぐように口づけをし、強く唇を吸った。

扉間は驚き、どうしていいのか分らない。

しかし、拙いながらも必死に自分の唇をむさぼり続ける六花に、扉間は自然と両手を六花の背中に手を回した。しかしその瞬間、六花が口を離して身体を起こした。

扉間が次の思考をする前に、六花は扉間の浴衣の襟をグイッと両手で開き、露になった扉間の胸に顔を埋め、右の乳首を舐め始めた。

「!!」

扉間は驚きと快感に思わず首を上げて、六花の顔を覗き込む。六花は気にせず舐め続け、扉間は気づけば六花の頭を抱いていた。すると六花の頭はその舌と共に下腹部の方へ下がってゆく。そしてその舌は扉間の脇腹に移り、上下になぞっている。

「……っ」

・・・こんな事をして、どういうつもりなのだ・・・

扉間は小さく悶えながらそう心の中で呟いた。

六花は舐めるのを止め、扉間の浴衣の角帯を解いて脱がせた。そして自分も服を脱ぎ裸になる。

すると扉間の足を開いてその間に座り、左手を寝台につき、右手で扉間の男根をしごき始めた。

扉間は本能的に高鳴る胸の鼓動に小さく唾を呑む。

六花の顔、美しい肢体、行動から目が離せない。

そして、もう何十年も忘れていた快感に身体全体が熱くなってゆく。

男根が固くなると六花は根元を支え、それを啜えた。

「^{んっ}」

扉間は更に驚き上半身を僅かに起こしてその様子に目を凝らす。もう、これが現実なのか信じられなくなってきた。死ぬ前の幻覚なのではなからうかと思う。

六花は何も言わず、ただただ、扉間を刺激し続ける。

そう、早くこの悍ましい行為を終わらせ、欲しいものを手に入れる為だけに、ただひたすらに。

しかし、心までは騙すことは出来なかった。

自然と涙が込み上げてくる。

そして否応なしに、閉じた瞼の裏にマダラの顔が浮かぶのである。

それを打ち消そうと更に激しく扉間の男根をしゃぶり、舐め回す。そして口を外して唾液にまみれた男根をまた片手でしごき始めた。

「^{んっ}」

それまで一度も扉間の顔を見なかった六花は、その声に思わず扉間の顔を見た。

目が合う。

扉間は目を細め、快感に悶えながらも、口元は少し微笑している。

六花はそれを見て、今すぐ扉間を殺してやりたい衝動に駆られた。

しかし、怒りの写輪眼と殺意を心の奥に何とか収めると、身体を起こし、扉間の男根を膣の入り口に当て挿入しようとした。

しかし、心と子宮は繋がっているらしい。六花の膣は乾いており、入らない。

すると扉間が突然起き上がった。

「!?」

六花は驚き一瞬固まった。その身体を扉間は優しく抱き締めた。

そして、六花の首筋に優しく口づけをする。

「あっ」

六花は思わず声を洩らし、唇を噛んで固く口を閉じた。六花の小さな喘ぎ声を聞く
と、扉間は舌で首筋を優しく何度もなぞってみた。

六花は主導権を扉間に握られ、口惜しきで直ぐにその身体を押し退けたのだが、快感で痺れる身体には力が入らない。

「ああんっ・・・んっ」

遂に六花は大きな声を洩らしてしまった。

扉間は更に首筋を吸い、舌で舐める。

「ハアハアハアハア……い、いやっ！」

その声に扉間は舐めるのを止め、俯く六花の顎をそつと支えて自分の方へ向かせると、その顔を優しい目でまじまじと眺めた。

「やっ、やめろ！見るな！」

六花は扉間の手を払って顔を背けた。すると扉間はクスツと笑ったかと思うと、六花の左の乳首に吸い付いた。

「やっ……やめろお!!!」

扉間はその言葉を無視して、右手を六花の陰部に伸ばし擦り始めた。

「お前っ……やめろ！……んんっ……」

「だがこのままでは、君が欲しいものは入らないぞ？」

六花はその言葉に何も言えなくなり、ただ憎らしい快感に身を委ねるしかなかった。

そして、否応無しに六花の膺からは蜜がみるみる溢れ出して潤っていった。扉間は指でそれを確認すると、六花の両肩を持ってゆつくりと寝台に仰向けに横たえた。六花は肩で息をしており、虚ろな顔で扉間の顔を見上げ、思う。

……もう、もう本当に、後戻りはできない。でも、もう直ぐ終わる……

「君は……本当に美しい。畏怖するほどに」

扉間は目頭をうつすらと光らせた眼で、六花を見て言った。

その言葉は六花の頭の中で何度もこだまし、過去の何かを浮かび上がらせようとした。しかしその瞬間、扉間は六花の両足を持つと左右に開いた。そして自分の男根を六花の膣の入り口に押し当てた。

「!!……ああんっ」

六花は固く目をつぶると、その両目から涙が溢れて頬を伝う。

扉間は六花と一つになった身体を動かさず、そつと六花の涙を指で拭った。

「何故泣く？これが君の望みだろうか？それとも、痛いのか？」

扉間は六花の耳元でそつと囁いた。そしておもむろに六花に口づけをする。

……ああ。マダラ様。愛してる……

口づけが終わると六花は目を開け、愛おしそうな顔で扉間の顔を見つめた。

今の六花にはもう、そこにマダラを見出すしか、壊れてしまっような心を守る方法は無かった。

そんな六花の気持ちを知る由も無い扉間は、六花の顔を見て微笑むと、六花の腰を掴み自分の腰を動かし始めた。

「……あつあつあつ……ああんっああ……」

六花の喘ぎ声が扉間の脳天まで響き、眩暈がするような快感に浸る。

それは欲しくて堪らなかつたモノをやつと手に入れた時の様な、理性など持たない幼い子供に戻つたような、それは本能だけで感じる快感だつた。

そしてその本能は、目の前の女が芙蓉である事を教えてくれた。

・・・この娘は、間違ひなく芙蓉だ。芙蓉は生きているのだ・・・

六花は制御できない快感と、ひどく冷静な頭でシーツを掴んでいた。

『よくやつたな。褒めてやる』

・・・これ以上何を失えば貴方に許して貰える？どれほどの痛みを耐え抜けば貴方に会える？・・・

六花は目の前の「マダラ」に手を伸ばした。

その掌を、「扉間は指を絡ませぎゅつと握り締めた。」

「うっ・・・ああっ!!？」

扉間は絶頂を迎え、六花の中には熱いものが注がれた。

そして扉間はボタンと六花の右隣りにうっ伏せに倒れ、大きく肩で息をしている。

「君は・・・君の名前は・・・なんというんだ？教えて、くれ」

「・・・名前など、もう、無い。お前のせいで、名も、愛する人も、居場所も、生きる意味も、全て失つたんだから・・・」

扉間はその言葉に顔を少し上げて六花の顔を見た。

六花は天井を睨みながら、唇を震わせて泣いていた。

扉間は力の入らない右手をなんとか動かし、六花を自分の胸に抱き寄せた。

不覚にも、六花は扉間の胸の中で一瞬ほっとしてしまった。その感覚に焦って扉間を突き飛ばし、飛び起きた。そして急いで服を着る。

扉間も何とか上半身を起こし、浴衣を羽織り角帯を締めた。

そして服を着終わった六花が扉間の方へ振り返ると、扉間が寝台の上で正座していた。

「…さあ、この命、君に返そう。それで君が失ったものが元に戻るかは判らないが…悪かったな…」

扉間は目を伏せ、悲しそうに微笑みながらそう言った。

六花は、腰の刀を鞘から抜いた。

するとカーテンの開いた窓から差し込む朝陽を受け、刀がギラッと光った。

扉間はそれを見て、いつかの場面を想い出す。

一生消えない罪。

これまで受けてきた罰。

そして今、こうして目の前に在る愛の絆。

芙蓉は生きている。

今度は自分が冥界、芙蓉が穢土：

再び二人は引き離されるのだ。

死しても罪は消えないようである。

六花は、目の前で正座をして自分を見据えている扉間に向かって刀を向けた。

一歩、二歩、前に出た。

そして三歩・・・

「・・・どうした。迷うことは無い。君がワシを殺すことは罪ではない。君に殺されることで己の罪が贖えるとも思っていないが、君に殺されるのは本望なのだ。頼む、やってくれ。」

六花は三步前に出た所で足が止まり、刀を持つ手はガタガタと震えていた。目には再び涙が浮かんでいる。

・・・なぜだ！なぜ迷う。殺せ。殺すんだ。こいつはマダラ様の敵だ。私から全てを奪った男だ・・・

いつまで経っても、立ち止まり手を震わせ泣いている六花を見兼ねた扉間は、寝台か

ら降りるとよろよろと六花の所へ歩み寄った。しかし尚も六花は前に向かって刀を構え、前を見据えて涙を流している。

扉間は六花の震える両手を握り、刀を自分の方へ向けさせた。

「永遠に愛している。芙蓉……」

扉間はそう言うのと刀を自分の首に突き刺そうとした。

カチャンツ!!

六花は焦つて扉間の手を振り払い、刀を床に落とした。

ハアハアハアハア……

六花は肩で息をしながら、ギツと扉間を睨んだ。

「……お前はオレが手を下さずとも間もなく死ぬ。せいぜい後悔しながら死ぬが良い。」

六花はそう言うのと刀を拾い上げ、部屋を飛び出して行ってしまった。

一人残された扉間は、床に両膝から崩れ落ち、うな垂れた。

朝陽が床に扉間の哀しい影を映していた。

六花の森（5） ついに覚醒の時



六花は木ノ葉の里を出て、木漏れ日の雨が降る森の中を歩いていった。

あれから二日が経っていた。

扉間の家を飛び出した直後は、下腹部に残る僅かな痛みと違和感が長らく続き、否応なしに悍ましい行為の一部始終が六花の頭の中で繰り返された。

とにかく気持ちが悪い。その一言に尽きた。道端で何度か吐いたほどだった。

しかしそれ以外、今のところ体に変化は無い。

本当に、マダラと同じ能力を手に入れられたのだろうか：

一刻も早くゼツに会って確認したいのだが、何度も呼んでいるにも関わらず、ゼツは現れない。

更にこれまでの疲労に加え、何度も吐き続けているため、チャクラと体力を随分消耗しており本来のスピードで走り抜けることも出来なかった。

・・・焦る事は無い。目的のモノは手に入ったのだ。必ず、マダラ様と同じ能力に目覚められる。大丈夫・・・

六花はそう自分に何度も言い聞かせながら、ゆっくりと歩みを進めていた。

『せいぜい後悔しながら』

体調が善くなり気持ちも随分落ち着いた頃、六花は扉間へと最後に放った言葉を思い出していた。

なぜあんな事を言ったのが自分でもその理由が分からない。扉間が何かに後悔しているかなど知る由もないのに：しかし、それが妙に心に引つかかるのだ。

六花は立ち止まり、下を向いて頭を振り、その思考を何とか振り払った。

その夜は満月だった。森が作る丸い空の上に煌々と輝いている。

六花は火を起こして暖を取り、里で調達した僅かな食べ物に運びながらその月を見上げていた。

今まで何度、一人で月を見上げてきただろう：

しかし、それ以上の回数、マダラとゼツと一緒に月を見上げきた。

寂しかった。

食事を終えると鞆から薄い毛布を取り出して羽織った。鞆を枕にして横になる。

パチパチと燃える炎を見ていると、何か口から溢れて来そうな感覚になる。

六花はここ数日の出来事から、なんとなくそれは、マダラによつて消された己の過去

の記憶なのではないかと感じていた。

・・・でも、思い出したくない。私の人生はマダラ様との七年間だけでいい・・・
そう思いながら六花は目を閉じた。

六花が目を覚ますと、そこは真っ白で何も無い世界だった。

そして、両手に何かずっしりと重いものを抱えている事に気付いて腕の中を見る。

するとそこには二人の赤ん坊がスヤスヤと眠っているではないか。しかし六花は驚くどころか、その二人のことが愛おしくてたまらない。

優しい眼差しでその二人を見てみると、キャツキャと騒ぐ子供の声が聞こえてきた。

顔を上げて前を見ると、二人の少年が追いかけてっこをして遊んでいる。その後ろを幼女がヨチヨチと懸命に追いかけている。気づけば腕の中に視線を戻すと赤ん坊は消えていた。

六花は目の前の少年と幼女に近づこうとした。

すると少年たちは六花に気付き、笑顔で駆け寄ってきた。

六花はその三人を両手を広げて受け止めようとしたが、受け止める瞬間にその姿は消えてしまった。

そして不意に後ろに振り返った瞬間。

若い男二人が武器を持って襲いかかって来た。六花はそれを防ごうと両手で顔と頭を覆った。

「……………」

六花が顔を上げると、そこには白く長い髪、額には二本の角の様なものが生えており、瞳は日向一族がもっている白眼、額には見た事のない第三の眼をもつ女が立って居た。

しかし、六花はその女に見覚えがあった。

とても懐かしかった…そしていつのまにかその女へ微笑みを向けていた。

するとその女も微笑んで、六花に向かって両手をかざして来た。

「母さん。やっと、やっと会えたね！」

「ゼツ…良くやった…誉めてやろうぞ」

森の中、六花とゼツが対峙して会話をしている。

しかし六花の人格は、芙蓉でも六花でも無かった。

「ヒミコは母親孝行の娘で良かったよね。ハゴロモとハムラとは大違いで、ヒミコは母さんっ子だったもんね。あれからしつかり後世に母さんの魂の欠片を繋いでくれたよ。で、マダラと柱間、二人の世代でようやく条件が揃ったんだ！」

「…ヒミコの転生者がハゴロモの…アシユラとインドラの能力を手に入れたか…」

「うん。でもハゴロモが母さんの魂の欠片がヒミコの魂に封印されてる事に気付いちやつて、ヒミコからチャクラを奪ったんだ。だからその血を引く橘一族は皆チャクラが無くて、ヒミコの転生者にアシユラとインドラの細胞や血を手に入れさせても、母さんを覚醒させられなかった…チャクラを与えることがカギだったんだね。それは教えておいて欲しかったかも。」

「…お前がそれに気づく時…それがわらわの覚醒の時だったのだ…それもわらわが仕組んだ事…わらわの苗床が人間の欲で肥沃に満ちる時だ…」

「なるほど。そうだったんだね！じゃあ、やつぱり母さんを復活させる世代はマダラなの？」

「…インドラの転生者であるマダラはわらわの歴史を読み解きアシユラの能力を手に入れた…もうすぐ輪廻眼も開眼する…マダラこそ人柱力となりわらわの封印を解く者…」

「やつぱりそうか！でもマダラが寿命で死んだあと、復活させる人間を誰にしようか迷っているんだ…いま母さんが入ってる芙蓉でいいかな？」

「…この者は生かしておけ…再びわらわの魂を宿せる身だ…マダラの輪廻眼はアシユラの血を引く者に預け転生術を使わせてマダラを復活させよ…おおよそ十年後うちは一族の中にマダラの血を色濃く受継ぐ男が産まれる…その男を役者として使え…」

「わかった。じゃあそういう風にシナリオをしっかりと作っていくね。あのね、それか

ら・・・」

「…もうチャクラが切れる…必ずやマダラの世代でわらわを復活させるのだ…次のアシユラとインドラの転生者に邪魔させるでない…解ったなゼツ…」

「うん！月に封印された母さんの身体と魂は、僕が絶対に復活させるからね！」

フラツ・・・ストン。

別人格の魂が消え、気を失っていた六花が地面に倒れそうになり、ゼツが体の形を大きく変えてそれを受け止めた。

「・・・？」

六花は眩しさを堪えながら、ゆっくりと目を開けた。

空には太陽が昇っており、青空に白い雲が浮かぶ秋晴れだった。

「目が覚めた？芙蓉」

「…あつ、あなたは確かマダラさまの…！というか、私、確か展望所から落ちて…えつと…」

「ああ。あれからもうウン十年経ってるよ？君、いま浦島太郎つてやつ？あははは！」

「えつ？・・・」

「色々説明するの面倒だし、適当に言うね。君が崖から落とされて死にそうになってるのを僕が知って、マダラに助けさせたんだ。んで、身体と魂の回復の為に仮死状態で封

印し、七年前に復活させた。その時ついでに十五歳に若返らせてあげただよ、感謝してね。で、君は芙蓉じゃなく、六花”っていう名前で君の記憶が無いマダラと一緒に暮らしてきたんだ。君たち、幸せそうだったよ。でもまたこうして君はマダラに捨てられてるけどね。あはは

「………。それを、どう信じろというの?」

「相変わらず疑い深いねえ。木ノ葉の里に行つてみると良いんじゃない? 柱間も扉間も死んでるし……あ、君を殺そうとしたカガミも死んでる。樹は生きてるみたいだけどね……」

「そつ、そんなつ……!!」

「とにかく里に行つてみたら? これから僕が里まで案内してあげるよ。道中、木ノ葉の人間のことやマダラと君との生活についてゆっくり教えてあげるし。」

「……」

芙蓉はあの日、カガミと顔岩展望所に行つて揉み合いになり、崖から落ちた以降の記憶が無い。

目が覚めたら突然森の中で、以前マダラの分身と名乗つて現れたゼツと対峙していた。

しかも自分が崖から落ちたあの日から何十年も経過していると言う……

もう何が何だか全く分からない。

どうしていいか分からず、とりあえずゼツの言う通り木ノ葉の里へ向かうことにした。

図々しくも自分の左肩に載るゼツの道案内に従い森を抜け、橋を渡り、草原を歩いた。芙蓉の足では木ノ葉まで一日で辿り着ける距離ではなく、ゼツの勧めで途中宿場で一泊することにした。

夕方前、まだ明るい時間に宿場町に入った。多くの人が行き交っている。

確かに、目の前の人々の格好、建物、道具や乗り物など、見慣れないものがいくつもあつた。

芙蓉はそれらを見て、ゼツが言っている事は嘘では無いのかもしれないと少しばかり感じた。

宿の部屋に入ると、芙蓉は肩に掛けていた鞆を床に下ろした。

ふと、横にある姿見に写る自分が目に入り、ゆっくりともう一人の自分へと歩み寄る。

「これが…六…花…?」

姿見に写るその顔は、紛れもなく自分の顔だった。

しかし、目が覚めた時から気になっていた服装は芙蓉が所有しているどの服とも明ら

かに違い、忍が纏っているような装束だった。

それはまさに、道中ゼツに聞かされた、マダラと共に戦っていた忍・六花の姿だった。

芙蓉は目の前の六花と両掌を合わせたまま、俯いた。

・・・扉間さま・・・

芙蓉が想いを馳せるのは、マダラではなく、扉間だった。

ゼツの話が本当ならば、扉間はもうこの世に居ない。

そう考えるとこんな所で休んでいるどころでは無く、一晩中走り続けてでも木ノ葉の里に、扉間の所へ向かいたい。しかし悔しい事に、今の芙蓉にその体力は無かった。長時間歩いたのもあるが、目が覚めた時から身体が風邪でも引いているかのように気怠くて堪らないのだ。

芙蓉は六花と両掌を合わせたまま、ゆっくりその場にしゃがみ、うな垂れる。

「あのさ、信じなくてもいいけど、柱間も扉間も力ガミもその他、君の慕う人殆どは死んでるのは事実だから焦っても意味ないよ。とりあえず今日は、何も考えずゆっくり寝たら。」

鞆の中に隠れていたゼツが這い出てきて、芙蓉の隣でそう言った。芙蓉は少し戸惑った顔をして小さく首を傾けてゼツの方を見た。

・・・なぜこの子は、私にこんなに親切に、優しくしてくれるのかしら？ やっぱり、マ

ダラさまの分身だからなの？ううん。でも・・・

「そ、そうね…明日、早く木ノ葉の里に着く為にもそうするわ。」

芙蓉は風呂に入ろうとしていた。

服を全て脱ぎ、後ろで一つに束ねていた髪を解こうと結んでいる赤い紐をほどいた。

「…綺麗な赤色…」

身に着けていた装束同様、見覚えの無いその赤い紐を手にとって小さく呟くと、くるくと丁寧なそれを巻き始めた。

「……!!……、ここれって……」

芙蓉は、紐の両端に一ヶ所づつ施されている小さな刺繍を見て驚いた。

芙蓉から見て右端には芙蓉の花、左端には親友である樹の御印「鴨脚樹（銀杏）」の葉が刺繍されてあるではないか。

『…仮死状態の君は埋葬されたけど、直ぐに僕が救い出して封印していたんだ』
道中のゼツの説明が蘇る。

やはり、自分は一度死んだ事になっているらしい。

……赤い紐の両端に、自分と想い人の御印を刺繍して身に着けると恋人同士になれる……

木ノ葉の里が出来る前、千手一族の領地内の女学校で流行っていた「まじない」だった。

これは間違い無く、樹の物だろう。芙蓉には解る。

自分が埋葬される際、樹が棺に入れてくれたに違いなかった。

芙蓉はその赤い紐を裸の胸に抱き締めた。

愛しい樹への想いと、樹がどんな想いでこの紐を棺に入れたのかを思い遣ると涙が溢れ、止まらなくなった。



「じゃあ、僕はここで。また会いに来るよ。あ、そうだ今更なだけどさ、またマダラとまた一緒に暮らしたとか、少しも思わないわけ？」

「ええ。思わないわ。だって、私の居場所は……ここだもの。」

芙蓉はゼツの問いにそう答えると後ろに振り返り、その家を見上げた。

「あつそ。でも、また気が変わったら教えてね。」

「それは無いと思う。例え浦島太郎状態だとしても、今生きているは事実……フツツ、まあ貴方に生かされている命のただれ……だとしても、木ノ葉の里の為に生きていくという私の償いを、たとえ独りでも、この命が続く限り続けていくわ。」

芙蓉はそう言いながら坂の下に広がる木ノ葉の里の風景を目を細めて見渡した。

良く晴れた秋晴れの午後。

薄い水色の空には刷毛ではいたように雲が描かれている。

里は太陽に照らされていて、芙蓉の記憶の中の風景よりも色鮮やかに見えた。

「物好きだねえ……いざれこの里もこの世界も無くなるって何度も説明したのにさあ……」

「私が死んでから何十年と長い時が経っている現在（いま）、忍でもない私がマダラ様の事を誰かに話してもきつと誰も信じない。実際、もうこの家にだって住むことは出来ないだろうし……だから私をこうして自由にしてくるんでしよう？」

「良く解ってるじゃん。まあそもそもマダラの事を他言できない様にガツチリ術かけてるけどね〜」

「あつそ……。だけどね、私は思うの。木ノ葉の里は永遠に続くって……。きつとマダラさまを止める誰かが現れる。そしていつか、柱間さまが願ったように、全ての忍がひとつになる時が来る。必ず……」

「はあ……。頑なだね、ホント。マダラの気持ちが良い解るよ。」

そう言うのとゼツは一度地上に降りていたのに、ぴよんと勢いよく再び芙蓉の左肩に飛び載った。芙蓉はそのゼツを見て苦笑しながら答える。

「フフツ。だってあなたはマダラさまの分身なんでしょう？」

「そうだけど……。まあいいや。じゃあまたね！」

ゼツは芙蓉の肩から飛び降りると、そのまま地面に吸い込まれて消えていった。

ガチャツ、ガチャツ。

玄関の扉には鍵がかかかっており、開かない。当然か。

芙蓉は庭の方へまわってみた。

「!!」

驚いた。

そこには沢山の花木が植えられていた。

秋になり殆どが葉を落としていたが、ハナミズキの葉は赤く紅葉している。

そして、その隣には見覚えのない金木犀の木が在り、今まさに花盛りを迎えて甘い香りを放っている。

芙蓉はその香りに胸が締め付けられた。堪らずそつと目を逸らすと、目線の先に見覚えのある木が在った。

いや、しかし芙蓉の記憶ではその木は、敢えてここには、植えていなかった筈である。

「・・・芙蓉の・・・木?・・・扉間さま?・・・」

芙蓉は両手で顔を覆い、その場にしゃがんで泣き始めた。

『一年中花が絶えないお庭を造りましょう?ね?』

いつか、扉間へ言った己の言葉が蘇る。

庭の花木の数々、そして、芙蓉の木は間違ひなく扉間が植えたものだった。

芙蓉は何か涙を取めると立ち上がった。ここにいつまで居ても仕方が無い。

ゼツの言うことを丸呑みする気は無かったが、二代目火影に就任した扉間が雲隠れの忍のクーデターに巻き込まれた事は、時代背景や現在の忍社会の状況からも信ぴょう性は高かった。また、先ほど見た柱間の顔岩の隣には確かに扉間の顔があり、その隣には三代目となる人物の顔が今まさに彫られている作業が進められていたのを見た。

扉間の生死について木ノ葉の人間に訊ねてみても良かったが、今の芙蓉にその勇気はどうしても出なかった。

真実を己の眼で確かめる為、芙蓉は千手一族の墓地に向かおうと考えていた。

芙蓉はゆっくり立ち上がると、再び玄関の方へ歩いて行った。

ふと立ち止まり、もう一度玄関の扉に振り返る。

開くはずのない扉をもう一度、なんとなく開けてみたくなった。愚かな事だと思いつつ、芙蓉は玄関の扉に手を掛けてみる。

・・・お願い。開いて。一度だけで良いの。中に入れてほしいの・・・

目を閉じて心の中で呟いた。

カチャツ・・・

「…あ、開いた!」

確かに、先ほどは施錠されていたはずの玄関の扉が、開いた。

元から鍵はかかっていたいなかったのだろうか?

疑問と罪悪感を抱きつつも、芙蓉は恐る恐る、ゆっくりと扉を横に開く。

ガラガラガラ・・・

20センチほど開いた扉の隙間から、頭を左右に動かし、目を凝らして中を覗く。

窓から差し込む光で廊下の床がピカピカと光っている。よく手入れがされているようだった。

思い切つて扉を開けて中に入ると直ぐに扉を閉める。そして誰も居ない廊下に向かつて呼んでみた。

「扉間さま・・・扉間さま・・・?」

返事は無い。

静けさで耳鳴りがしそうなほど静かである。

芙蓉は俯く。

先ほど見た庭、年を重ねたこの家の風貌…その他の様々な事象から、長い年月が経過している事に間違い無いようだ。

しかし、やはり柱間と扉間、カガミが亡くなった事は最後まで信じたくはなかった。

・・・もしかしたらまだ扉間さまは里本部でお仕事なのかもしれないし・・・
限りなく低い可能性を信じたかった。

それでも、僅かな可能性があると思うと、急に今この家に居ることが愛おしくなり、
ほっとしてくる。

芙蓉は急いで短い廊下を走り、台所と居間の在る部屋の扉を開けた。

シン・・・。

灯りをつけてみると、部屋全体が良く見て取れた。

一步、二歩、部屋の中に入って見回す。

居間の食卓は以前そのまま変わっていない。そして台所は・・・

芙蓉は居間を抜けて台所に立った。綺麗に片付いており、何も物は置いてない。

左に目を遣ると食器棚もそのままだった。中には、見慣れた芙蓉のお気に入りの皿たちがお行儀よく並んでいる。

芙蓉はその様子に嬉しくなり、食器棚に近寄って観音開きの扉を開けると満面の笑顔になった。

「やっぱり、扉間様は生きてるんだわ！」

笑顔の芙蓉は、急いで台所と居間をすり抜け、階段を上る。

キシッキシッキシッ・・・

きしむ音に思わず昇る速度を緩め、慎重に足を進める。

そして踊り場に着き、自分の部屋の前に立った。

：ゴクリ。

ほんの少しだけ緊張する。

芙蓉はゆつくり取手を押して扉を開いた。

カーテンは閉められ、部屋は目が慣れるまで何も見えないほど暗い。一歩中に入り灯りをつけた。

「・・・何にも、変わって・・・無い・・・？」

明るくなった部屋は芙蓉の記憶のままだった。

寝具も、絨毯も、机も、本棚も、壁にかかる絵も…。

芙蓉は自然と、いつもの様に机に歩み寄る。

机の上に在る写真立ての位置まで全く変わっていない。その中の一つを手を取って見た。

芙蓉が扉間に肩を抱かれ、二人共笑顔で写る写真。

そう、ついこの前、秋に行った結婚式の写真だ。直近の記憶の笑顔と何も変わらない。しかし、写真は日に焼けて少し色褪せていた。

苦いものが胸に込み上げて苦しくなるのを抑えようと、芙蓉はその写真立てをぎゅっ

と胸に抱き締めた。

そしてその写真立てを胸に当てたまま、部屋を出て行った。

今度は扉間の部屋の前に立つ。

胸に写真立てを押し当てている左手は震えている。

…カチャツ。パチ…扉を開けて、灯りをつける。

「………」

閉められているカーテン、綺麗に整えられた寝台、何も置かれていない机…

しかし本棚には、本も忍術書も巻物も無く、空っぽだった。

芙蓉は急いで衣装棚の扉を開けた。

しかし、そこも空っぽだった。

『俺が死んだ時は忍術書の類は里に寄付し、衣類や日用品は全て処分してくれ…まあ詳

しくはこのノートに書いてあるから読んでおいてくれ』

『何を言ってるの!? やめて下さい! 縁起でもない…!』

『お前は忍の妻になつたんだ。解れ…だが心配するな。俺はそう簡単に死にはせん。だ

がお前よりは必ず先に死ぬからな。ハハハ…!』

芙蓉は再び写真立てを両手で握ると胸に抱き締め、膝から床に崩れ落ちた。

「……私は……私はっ……もう、いまの木ノ葉の里に生きてはならない人間なんだ

わ・・・」

そう眩くと芙蓉は俯き、その頬からは静かに涙だけが流れ落ちて絨毯にシミを作る。
ビュンツ!!グサツ!!

反射的に身体が動き、芙蓉は床に突き刺さったそのクナイを避け、即座に後ろに振り返った。

「・・・!?」

六花の森（完）その結晶はいつかまた輝く

「・・・樹・・・ちゃん!!」

「フン! “ちゃん” 付けした所で、今更私を騙せると思ってたのか!!」

「え?」

芙蓉が反応すると同時に樹がこちらに大刀を構えて走って来る。そして芙蓉の前で大刀を振り下ろして来た。

ガシインソツ!!・・・コソツ。

気付けば芙蓉は腰の刀を抜き、樹のそれを受け止めていた。しかし手に持っていた写真立ては床へ落としてしまった。

芙蓉は自分自身でも今何が起きているのか、自分がどうしてこんな動きが出来るのか分らず、そのまま固まり、怯えた目で樹を見た。

「なんだ。次は演技まで覚えて来たのか? そんな目で私を見るな!!」

「・・・い、樹ちゃん・・・私・・・私のことが分らないの?」

良く見ると、樹の美貌は昔と変わらないのだが自分より十歳以上は年上に見える。

「ああ分かんねえーな。お前はいつたい何者だ! 目的は何だ!! あの日、扉間に何をした

!! 答えろ!!」

芙蓉（六花）が樹にかけた幻術は、芙蓉が別人格の魂を覚醒したと同時に消えていた。樹だけではなく、芙蓉がこれまで幻術をかけてきた全ての人間の幻術が消えている。樹が幻術から覚めた事により、芙蓉が六花の姿で扉間を襲撃した日の事が明らかになった。

そして、六花の襲撃は扉間の死因とは関係無かったものの、三代目火影・ヒルゼンの命令で上忍数人が六花を捜索していたのである。

しかし樹はこの日、捜査の為では無く芙蓉の遺品を引取るために扉間邸にやって来たところ、六花のチャクラを感知し、今に至っている。

・・・あの日?・・・もしかして私は、六花で居る時に扉間さまに会ってるの?・・・芙蓉が何も答えず黙っている間にも、樹の殺意のこもった大刀がグイグイと芙蓉の刀を押しこめる。このままでは切りつけられてしまう。

「い、樹ちゃん・・・とりあえず、落ち着いて話をしない?」

「うるさい! お前に策を練る暇など与えるか! 早く質問に答えろ!!」

樹は、芙蓉の言動を受けて更に怒りが煮えたぎる。

「答えないなら拷問して吐かせるだけだ!!」

樹は大刀をいったん離すと、後ろに飛び上がり、再び大刀を振りかざし芙蓉へ身体ご

の頭の上から襲いかかって来た。

「キヤアアアーツ!!」

芙蓉は悲鳴と共にその竜巻に飲み込まれ、風の渦で姿が見えなくなった。

そして芙蓉を捕らえた竜巻は次第に消え、白く太い縄にグルグル巻きにされている芙蓉の姿が現れた。

「さあ……これから楽しい拷問の時間だぞ……ハハハツ……」

締め上げられて苦しそうな顔をしている芙蓉へとニヤニヤしながら歩み寄っていく。

そして寝台に上がって芙蓉の前でしゃがみ、左手で六花の顎を掴み、右手を芙蓉の下半身に手を伸ばそうとした時だった。

ガシイイイイン!!

「!!」

芙蓉は樹の後ろから、樹の背中に収まる大刀に切りつけた。

大刀を支える革紐は切れ、大刀が床に落ちた。樹は急いで後ろに飛び退く。

そして締め上げられて居たはずの芙蓉を見たがその姿は無く、縄だけが寝台の上に落ちていた。分身だったようだ。

樹は直ぐにまた目の前の芙蓉を見据えた。

樹の大刀は芙蓉の足元に在る。

・・・どうする？風遁だけで戦うか？それとも・・・

すると芙蓉は足元に転がる樹の大刀を左手で拾い上げると、樹の方へ放り投げた。

「はい、これ」

「！！・・・」

敵が自分に向かって武器を返してきた事にも動揺したが、同時に芙蓉が片手で軽々とその大刀を持ち上げて自分に放り投げて来たことにも驚いた。

この大刀は柱間が木遁と秘術で作ったチャクラの詰まった大刀である。

その重さ、比重たるや見た目以上で扱うには腕力だけでは無く、繊細なチャクラのコントロールも必要である。樹が柱間からこの大刀を受継ぎ、使いこなせるようになるまで二年近くもかかったほどだ。

・・・それなのに、この女は・・・

樹に緊張が走り、ごくりと唾を呑み込んで芙蓉を睨みつけた。

「真剣勝負しよう。忍術は無し。貴方が勝ったら、私の全てを教えてあげるわ。」

そう言うのと芙蓉も右手に持っていた刀を両手で握り締め、樹に向かって構えた。

先ほど樹が屋根を吹き飛ばして出来た穴には、四角い青い空が出来ている。

その青はどこまでも永遠に続いていそうなほど、青かった。

「・・・いいだろう。受けて立つ！！」

樹も大刀を両手で握り締め、芙蓉に向かって構えた。

四角い空から風が吹き込み、部屋の塵を舞い上げる。

ガシン!! カン!カン! ガンツツ!!

再び二人は刀を交えて、互いの顔を見た。

死する直前の姿と全く変わらない、若く、美しい芙蓉：亜麻色の髪は風に靡き、写輪眼の消えた琥珀色の大きな瞳は、真つ直ぐ樹の瞳を見つめている。

生命力の強い千手一族とはいえ三十年近くの時が経ち、年齢のサインが現れている顔に、昔腰までであった長い金髪は、今では肩にからないほど短くなっておりサラサラと樹の顔にまとわり付く。その髪の間から、殺意を放つ強い視線で芙蓉の瞳の奥を見つめている。

バツ!!!

二人は同時に刀を離し、後ろに飛び退いた。

そして体勢を整え刀を握り締めると、再び相手に向かって行く。

ザシュツツ!!!

ポタツ。ポタ、ポタ・・・ バタンツ。

血が床に数滴落ちたあと、うつ伏せに倒れた。

ハアハアハアハア・・・

樹はバタンと床に倒れる音を聞くと、肩で息をしながらゆっくり後ろへ振り返った。目の前には芙蓉がうつ伏せに倒れ、腹からは血が流れている。動かない。

樹はそれを見た瞬間、何かを考える前に、身体が動いていた。

「芙蓉!!」

「・・・樹・・・ちゃん・・・ありがとう」

気付けば芙蓉を起こして抱きかかえていた。

すると、芙蓉は震える手で自分の髪に巻かれている赤い紐を触って見せた。樹の視線がその紐の端に行くと、眼球が落ちそうになるほど大きく目を見開いた。息は止まっていた。

「・・・芙蓉。本当に、芙蓉だったんだね・・・」

樹は茫然とし、続かない息で言い終わると、過呼吸になり始めた。瞬きすら出来ない樹の眼からは、大粒の涙がボタボタと芙蓉の顔に落ち始めた。

芙蓉はその樹の顔に手を伸ばし、頬に優しく触れた。

「…私の命を…終わらせてくれるのが…樹ちゃんで良かった…樹ちゃん…大好き…」

「芙蓉?!芙蓉?!…嘘?!嫌っ!!!嫌あああ——っ!!!」

芙蓉は静かに目を閉じ、樹の腕の中で息を引き取った。



紅葉し始めた木々、それに絡まるツタ、紫色のアケビ、山葡萄、鈴生りの山柿や棗……豊かな秋の到来を知らせる森の中で二人は向かい合っている。

「こんな早く僕を呼ぶなんて、どうかしたの？」

「……知ってるくせに……」

「うん。知ってる。あはは。六花の記憶が無いのに、影分身と幻術を使ってあそこまで戦うなんて、やるじゃん！」

ゼツはまたも馴れ馴れしく、当然の様に芙蓉の左肩にぴよんと飛び載ると笑ってそう言った。

「私をまた、マダラさまの所に置いてほしいの。芙蓉ではなく、六花として……」

「別にいいけど……僕ならマダラに君を許させる事は出来るだろうし……でもたった一日でどう心変わりしたってのさ？ 樹に何か言われた？」

「マダラさまは、もうこの世に生きてはいはいけない存在よ……」

「それは君が決めることじゃないでしょ。」

「ううん……私と同じ、この世に留まって居てはいけない存在なの。」

「で？ マダラの事を殺して自分も死ぬとか？ そんな事させないよ。」

「同じ存在のマダラさまと一緒に居たいの……それに私は自ら命を絶つ気は無い……私はこ

の命が尽きるまで、マダラさまと一緒にこの世界の為に生きるわ。」

「なーんか矛盾してない？君もマダラも、生きてちゃいけない存在なんですよ？」

「…マダラさまのことを縛ることが出来るのは、同じ存在の私しかない…」

「なるほど。でもそんな穏やかじゃない事言う奴をマダラの所に連れて行くと思う？」

「うん。思ってるわ。連れて行って…くれるでしょ？…ゼツ…貴方なら。ね？」

芙蓉はそう言うのと、ゼツを両手の上に載せてそつと優しく包み込み、心から愛する者を見る眼で見つめ、微笑んだ。

…芙蓉は母さんの器だった人間。母さんの言葉では芙蓉は生かしておけと言っていた。それに…

「ちえ。しょうがないなあ。まあどうせ君はまたマダラに惚れて恋に盲目になるのさ。」

「ふふ…そうかもね…」

僅かに黄色い空の方向へ二人は走り始めた。

深い森は、その姿を直ぐに見えなくした。



——芙蓉とゼツが落ち合う数時間前——

…私は、死んだの？…

思考が働くことに気が付き、芙蓉はゆつくりと目を開けた。

真つ白な世界に横たわっていた。

しかし、なんとなく見覚えのある景色である。

「ようやく会えたな……ヒミコの転生者よ……名は、芙蓉」

その声には芙蓉は飛び起き、立ち上がった。

目の前には見た事の無い男の老人が居る。

胡坐をかき、宙に浮いてこちらを見ている。

左手に錫杖（しゃくじょう）を持ち、額には二本の角の様なものが生えている。そして老人の周りには黒い球体がいくつか浮んでいる。この世の人とは思えない姿だった。

「……どなたですか？……それに、ここは一体どこですか？」

芙蓉は両手を胸に当て不安そうに周りを見回した。

「我は安寧秩序をもたらず者……名はハゴロモ……忍宗の祖、六道仙人とも呼ばれている……」

「六道仙人……様……マダラさまの言っていたあの……じゃあここはやはり冥界ですか？」

「ここは御主の精神世界……ワシは遠い昔に死し、チャクラだけでこの世を彷徨っておる」

「……」

芙蓉は訳が分からず、眉をひそめて俯いた。すると足元には水が張っており、その水面に不安そうな顔をした自分が写っている。

いったいこれから自分はどうなるのだろうか……

「御主は我が妹、ヒミコの転生者…そして御主には、これからして貰わなければならない事がある…」

「私に…ですか？ いったい、何を…？」

「生きることだ。いま死ぬでない。生き続けてほしい」

「ヒミコ…？ 生きろ…？ 何のことだかさっぱり分かりませんが、私はもうこの世に生きていてはならない存在なのです。他者の力と都合によつて生かされているに過ぎません。貴方が安寧秩序を成すお方なら、そんな事くらいお判りでしょう！」

「まあそう興奮するでない…どうかワシの話を聞いてほしい。この世界の為に…御主にはその役目がまだ残つておる」

芙蓉の返事を待たず、ハゴロモが錫杖を水面に当てると、波紋が広がり何か水面に浮かび上がってきた。

「…！！」

水面には白く長い髪、白い眼、頭に二本の角の様なものを生やした美しい女性が映し出され、芙蓉は驚いた。しかしその女性は恐ろしく冷たい表情をしている。

「これは我が母、大筒木カグヤ…遙か彼方より御主達の住むこの地に来た。そして母はこの地に在る大きな力を手に入れ、戦や飢餓、疫病で混沌としていたこの地を、その力を使い一人で平穩に治めた」

「……救世主？」

「最初はそうだったかもしれない……人々は母を兔の女神だの、鬼だのと呼び崇め怖れていた」

「……」

「その後母は双子の息子を産んだ。その一人がワシ、もう一人をハムラという。そして数年後、娘であり、我が妹であるヒミコを産んだのだ」

ハゴロモは再び水面に錫杖を当てると、そこには芙蓉自身にどこか雰囲気が似ている白く長い髪の女性が写っていた。しかし額には目の前のハゴロモ同様の角があり、瞳には写輪眼が浮かんでいる。

「これが……ヒミコさん？……私はこの人の生まれ変わりなのですか？」

「うむ……そうだ」

「だから、そのヒミコさんの代わりに何かしろというのですか？」

「代わりにではない……理由を最後まで聴いてほしい……」

「は、はい……すみません。」

芙蓉は謝りつつも自分の謝罪の言葉が腑に落ちず、少しモヤつとした気持になる。

自分がヒミコの生まれ変わりだからと言って、自分が何かをする義務があるのだろうか。そもそも自分の意思を曲げ、六道仙人に従わなければならないのか？……

芙蓉に僅かな苛立ちと不安が込み上げてきた。しかしそれをぐっと抑え、真剣な目でハゴロモを見据えた。

「母は我々息子、娘を産んでかから、徐々に人が変わっていった」

「変わった？」

「力に固執し始めたのだ。力で民を押さえつけ、逆らう者達には殺戮すら厭わなくなつた…完全な支配者と化した」

「そ、そんな…」

「御主には解っておるのではないか？力が独りに集中すればどうなるか…」

「……」

芙蓉は少し俯き、目を逸らした。

「ワシら兄弟は母を止める為に母と闘うことにした。しかし妹のヒミコだけは母の味方だった。どんなやり方であれ母が正しいと言ってきたきかなかつた」

「えっ！」

「……。結局ワシとハムラ二人で母と闘い、そして母を月へと封印した。ヒミコは母の封印直後は酷く嘆き悲しんでいたが、数日後、突然自ら現実を受け入れ立直つた…」

芙蓉は何も言えず、怪訝な顔でハゴロモの顔を見つめ次の言葉を待った。

「母を封印した後ハムラは封印を見守る為に月へと向かうことに、そしてワシはこの地

で母の罪を贖う事となつた。我々二人は妹が生まれた時から、母からどちらかが妹と結婚せよと言われて育てられてきた。しかし母を封印した事でその命も意味を無くし、ヒミコ自身に意思を問うてみた……」

芙蓉はドキリとした。

なんとなく自分の境遇に重なるものがあつたからだ。

しかし、カグヤと自分とでは許嫁の意味が違う……その先を聞くのが怖い。

息を飲み、ハゴロモの次の言葉を待つ。

「カグヤは我々兄のどちらとも結婚したくないと言つた」

芙蓉はその言葉にほっと胸を撫で下ろす。芙蓉は自然とカグヤに感情移入してしまつていた。

「しかしハムラはヒミコに結婚を申込み共に月へ行つて欲しいと言つた。ヒミコはそれを頑なに断り続けた。だがハムラは決して諦めなかつた……そして遂に、ヒミコを無理やり己のものにしたのだ……」

「……」

「……所詮我々兄妹も母の子という事だろう……力だねじ伏せる術しか持つていなかつた」

芙蓉はその事実には然然とし、更に何も言えなくなつた。

「喪心したヒミコは自ら命を断とうとしたがワシが阻止した。しかしその時、重大な事

が発覚した：ヒミコの魂に母の魂の欠片が封印させていたのだ。それは母が自らの身に何か起きた時、母がヒミコの身体を利用していた証だった。そしてワシはヒミコから力を奪った。つまりチャクラを永遠に使えなくしたのだ。その為ヒミコの子孫にあたる橘一族はチャクラをもたない。その代わりにヒミコと同じ特殊な能力は受け継いでいるようだが：」

「・・・傾国の術・・・」

「そうだ。ヒミコはハムラからされた非業とワシにチャクラを奪われた事で人が変わってしまった。乱心のままワシの元を去った後、ヒミコは特殊な瞳力を生み出し、その力で多くの男を支配して一国を作り上げたのだ」

「結局、お母様と同じ事道を辿ったのですね・・・」

「その通りだ。やがてその国も突如消滅す：強力な力の独裁では決して民は幸せになどなれはしない：なに、そんな顔をするでない。御主にその罪を償えと言いたいわけでは無い」

「：なぜ、ヒミコさんを殺さなかったのですか？ヒミコさんを殺せばカグヤさんの魂も消えたのでは？」

芙蓉は自分自身がなんて恐ろしい事を言っているのだろうと驚きつつも、無意識に口から飛び出した疑問をハゴロモに言った。言い終わると両手で口を押え、俯いた。

「それはワシの甘さだったのかもしれない。ワシも妹を愛していた。チャクラさえ奪えば母はヒミコを使って復活できないと考えた。しかし時を経て、母の本当の狙いが解つたのだ」

「本当の狙い?…何ですか?」

「ワシにはアシユラとインドラという二人の息子がいた。アシユラの転生者は柱間、インドラの転生者がマダラだ。母はヒミコの転生者の魂に自分の魂の欠片を受継がせ、アシユラかインドラどちらかの転生者に接触させて月の封印を解かせようとしているのだ。御主も知っている通り、マダラはワシの残した碑石の文章を読み解き柱間の力を得た。それは御主と出逢い交わることで母の魂がマダラの意思を動かしたからだ。今のマダラはインドラの転生を終えてたのち、復活して母と同じ事をしようとしている」

「マダラさまの先の夢って・・・」

「無限月読とは云わば、幻術で人間を奴隷と化す術だ・・・」

それを聞き、芙蓉の眼には涙が浮かべ悔しそうに顔を歪めて唇を噛み、声を震わせて言う。

「・・・なんだが、私が産まれてきてこと自体が罪のように、感じます」

「それは違う。御主には御主の人生があり幸せがあつたはずだ…御主が愛する者達との幸せが・・・」

「……そうですね!!その通りです!!私はず、私は芙蓉です!ヒミコじゃない!私はず、愛する人の元へ行きたいのっ!……」

そう言つて芙蓉は両手を覆い声をあげ泣き出した。

自分はヒミコではないと否定し、自分の人生は自分のものだと言張みても、マダラをあのようになさせてしまったのは自分自身だと思つと、余りに罪深く、息をしているのさえ辛かつた。

今すぐ消えてしまいたい気持ちになる。

「落ち着くのだ……御主の今の気持ちは良く解る。改めて言うが、ワシは御主に母とヒミコの罪を贖えと言いたいのでは無い……」

「じゃあ何だつて言うの?!!」

「御主はマダラを、そして柱間のことを良く知つているはずだ。彼らもまたアシユラとインドラの魂を受継ぎ、運命的に対立していた。だがそこには憎しみだけでは無く、愛も在つた。そして柱間とマダラが手を取り新たな時代を作り出した……それは御主が二人の愛を繋いだからに他ならない。御主が居なければ彼らもこれまでの転生者たち同様共倒れし、憎しみを後世に残しただけだったかもしれない」

「……木ノ葉の里……でも、でも結局二人は……マダラさまは……私なんて、全く無力でした……」

「そんな事は無い。これまででにワシを呼び寄せられたヒミコの転生者は御主以外、誰一人居ない：母の強い思念を越え、愛を結び、そしてワシを呼び寄せてくれた：御主はそういう存在なのだ。ありがとう：」

「・・・」

芙蓉はハゴロモから礼を言われ、思わず顔を上げてハゴロモの顔をじつと見つめた。

「マダラが復活した際、次のヒミコの転生者が現れマダラに接触すれば世界がどうなるかわからない：頼む。生きてくれぬか」

芙蓉は、ようやく生きろと言われている意味が分かった。

そして今、自分が死の淵に在る事も。

芙蓉の心には、もう自らの力では取り除くことが出来ないほど重いものが押し掛かっていた。その重圧に潰されそうな気持になる。

しかし、その心の中に一瞬“青色”に光る美しい光を見た気がした。

それを確かめるように瞬きをして、もう一度ハゴロモを見据える。

「約二十年後“九匹のケモノ”の名を呼び戯れる碧眼の少年”が産まれる。その子がこの世界を救うだろう：その時まで生きてほしい」

「・・・フツ。なにそれ」

「？」

「そんな事を言われたら、普通、断る事なんて出来ないじゃないですか……」

芙蓉は頬に涙を伝わせながらそう言い、ゴロモに向かつて微笑んで見せた。

「ありがとう……そして心から謝罪する。御主が愛する者の元へ行かせない事に……」

「そうですね!!もう嫌っ!!せつかく生き返ったと思つたら愛する人は先に逝き、今度は愛する人にもあと何十年つて会えないなんて……そのうえ世界を救う為に生きろなんて……一方的だし勝手過ぎます!流石に私だつて怒りますっ!」

芙蓉は泣き笑いしながら、両手でぶんぶん宙を斬り、大声でそう言った。

「すまぬ……」

「でも良かったあ!私、教師なんです。その碧眼の少年くんにも、何か教えてあげられるかもしれないし。ふふっ。この世での楽しみも出来ましたわ!」

芙蓉は両手で顔をの涙を拭い、改めてニッコリとして見せた。

「……うむ。そうか」

「もおく。仕方無いですね。分かりました!私、困つた人を放つておけないたちなんです。それに今回は世界の運命がかかっているみたいだし……」

「そういう所は昔の母に、そしてヒミコに良く似ておるな……ありがとう……さあ御主に力を授けよう。両手を出してくれ」

芙蓉は戸惑いながらもハゴロモに近づき、腕を伸ばし、両掌を差し出した。するとハゴロモは錫杖を芙蓉の頭上に浮かせると、自分の両掌を芙蓉の両掌にかざす。

「右手に御主を加護する力を．．．左手に生命力を授ける．．．」

「．．．!!!」

二人の掌の間から白く強い光が現れると、芙蓉はその眩しさに目を閉じた。

芙蓉が目を覚ますと森の中で、大きな楠木の根元に横たわっていた。

ゆっくりと起き上がり、空を見上げる。

先ほど樹と闘っていた時と変わらない、真つ青な空がそこには在った。

今なら解る。

この青空の向こうには、もっと果てしない世界が永遠に続いているのだと。永遠は美しいが、しかし、恐ろしい。

「．．．さようなら木ノ葉の里．．．また、いつか．．．」

そう呟いた後、地面に右掌をつき、目を閉じてゼツを呼んだ。



ポチャン…。

天井から落ちた雫が沈黙を作る。

地下アジトの中。

六花とマダラ、二人は向かい合って立って居る。

マダラは雫が作ったこの沈黙に、二人の始まりを想い出していた。

「頭は、冷えたか？」

「はい。貴方の傍に居る為なら、これからはどんな命令にも従います…そして、この世界の為に。『先の夢』を叶える為に」

「…そうか」

実は、マダラは六花を追い出した後、ゼツに六花を見張らせ様子を報告させていた。

六花が反省してまた自分の元へ戻ってくるようにと…

マダラは六花が自分と同じ千手一族の力を得る為、そして扉間を殺す為に木ノ葉の里に向かった事も知っている。

そして勿論、扉間からどうやってその力を得たかも…。

マダラは六花を愛している。

それは単なる色恋ではなく、二人の間には『先の夢』という決して譲れない目的があり、その目的とそれまでの道程が二人を固く繋いでいた。

その意味で六花はもう、マダラの一部だった。

その為、六花がマダラに捨てられたことで自暴自棄、即ち恋に盲目になり『先の夢』の事までも忘れて自害するなら、それまでの存在だったと切り捨てるつもりだった。

しかし六花は自らの身体を犠牲にしても、マダラの元へ戻る為、そして『先の夢』の為に力を得て戻ってきた。

それが全てであり、六花が力を得る方法など二人の愛にとっては何の支障にもならなかった。

六花がマダラの目の前に現れた瞬間。

それは、ようやく六花がマダラと一心同体になった瞬間だった。

芙蓉（六花）にとってもそれは同じだった。

マダラと対峙した瞬間、この世界を救う碧眼の少年が現れるその瞬間まで、自分の存在はマダラとは一心同体で居ようと心に誓った。

ハゴロモから告げられ、頼まれたからだけではない。

使命感だけでもない。

芙蓉は知っている。

マダラが誰かと手を取れば、必ず新しい世界が拓けると。

柱間の次は、その碧眼の少年……その人に違いない。

・・・それまで私はどんな事でもする。世界が救われるその日を見届けるまで、生き続ける・・・

“芙蓉”とマダラは黙って抱き合った。

遠い昔、初めて二人の心が通じ合ったあの夕暮れ同様、地面には一つになった二人の影が伸びている。

その足元には、どこからか運ばれてきた赤いモミジが一枚、落ちていた。

完

六花の森（番外編） 六花とマダラ。 五月雨のふたり

空が泣いている。

誰がそう最初に例えた言葉だろうか。

いや、きつと誰もが一度は心の中で呟く言葉ではなからうか。

六花はそう思いながら霧雨で煙る景色に目を細めた。

「この時期の雨は待つてたつて止まないよ。濡れながらも走つた方がいいんじゃない？」

左肩に載るゼツが六花に向かって言った。

六花がゼツに目線を遣ると同時に、六花の後ろでマダラが口を開く。

「不満ならお前だけ先に帰つてろ」

その言葉にドキツとして、六花は後ろへ振り返つた。

マダラは六花に背を向け、左腕を枕にして横たわっている。

六花が焦つて口を開こうとすると先にゼツが喋り出した。

「ちえ。じゃあお言葉に甘えて先に帰つてるよ。あと一里（約4km）も無いこんな古寺

で、もう一時間も雨宿りしてるほうが意味不明だし。六花も一緒に帰ろうよ？」

「お前も、帰りたいなら先に帰っても構わん」

「いいえ。私はマダラ様のお傍に居ります。」

「…フン」

マダラは少し不機嫌そうに寝返りをする。と仰向けになり、今度は両腕を枕にして天井を見つめた。

六花はふと視線をマダラ越しの景色の方へと移す。

煙る景色の中、鮮やかな水色と濃い紫の紫陽花だけがくつきりと浮かび上がっており、その様はとても美しかった。

すると六花は、ふっと少しだけ微笑むとそのまま俯いた。

実は先ほどまで六花も、ゼツと同じ考えだった。アジトに近いにもかかわらず、こんな古寺で長時間雨宿りしている事に疑問を抱いていた。いつものマダラならば、例えば雷雨だったとしてもアジトに急ぐはずなのに。

しかし、紫陽花と沈黙の後ろで響く優しい雨音で、その理由に気が付いた。

「あつそ。じゃ勝手にすれば〜」

ゼツは六花の左肩からぴよんと飛び降りると、そのまま床の板の隙間をすり抜け地面へと吸い込まれ消えていった。

「ゼツったら、昨日買った団子が食べたくて仕方無いんだわ。ふふつ。ふふふふつ…」
「なんだよ、その笑いは……。ちよつと、こつち来い。」

「はい」

六花は微笑みながらマダラの隣りに歩み寄り、ゆつくり腰を下ろして正座した。そしてこちらに全く目線を遣らず、尚も天井を見つめているマダラの顔をそつと覗き込む。

「紫陽花、綺麗ですよ。いつも地下に居たら雨音も聞こえないし、お花も見えないですから…」

「ゼツの奴。俺の分身のくせに風情のひとつも分らんとはな…花より団子かよ。」

「あはははっ！お上手ですねマダラ様！」

「何がだよ…つたく。お前もゼツと同じ事考えてやがるくせに」

そう言つて六花の顔をジツと睨みつけるマダラの表情は、どこか拗ねた少年のようである。六花は少し困つたように微笑み一度床に目線を落とした後、再びマダラの顔を見て言う。

「今後、ご命令が無くても、こうしてマダラ様のお隣に来ててもよろしいでしょうか？」

「…ああ。」

「ありがとうございます」

サアアアア——…

先ほどよりも雨脚が強くなり、湿気を含みヒンヤリとした空気が室内まで流れ込んでくる。

「マダラ様、右手をお借りしてもよろしいですか？」

「……ああ。ほら」

マダラは不思議そうにしながらも右手を六花の膝の上に置いた。

「失礼します」

六花はその右手を優しく両手で握ると、丁寧に裏返して掌を上に向けた。そして自分の両手の親指をその掌の腹に当てると、ぎゅっぎゅっ指で押し始めた。

「ん……」

マダラは小さく深呼吸をして目を閉じた。掌を指圧される心地良さに身を委ねると、自然と全身の身体の力が抜けてゆく。

六花はそのマダラの様子を見て優しく微笑み、再び掌に視線を移すと丁寧に揉んでゆく。

全身を包み込む冷たい空気の中、二人の掌だけがポカポカと温かい。

二人は何も言わず、雨音と互いの温もりだけに意識を遣る。

すると、二人はその沈黙の中で互いの鼓動が聞こえてくるように感じてきた。その感覚に焦ってマダラが口を開く。

「脚を崩せ。痺れるぞ」

「あ、はい。ありがとうございます。では反対側に移ってから……」

六花は立ち上がりマダラの左側へ移動し、腰を下ろして横座りをすると、今度は左掌を揉み始めた。

ザアアアアアア——…

雨脚は更に強くなっていた。

「閉められる雨戸だけでも閉めましょう。」

そう言って、六花がマダラの左手をマダラの腹の上に戻して立ち上がろうとしたが、マダラは六花の左手を引っ張ってそれを制止した。

バタツ！

「す、すみません!!」

六花は既に顔を横に向け足を浮かしていた為、思わぬ制止に身体が付いてゆけず、引っ張られた勢いでマダラの胸の上にうつ伏せて倒れてしまった。

六花はマダラの顔を見る前に急いで起き上がろうとしたが、左手はマダラに握られたままで、更にマダラはもう片方の手で六花の背中を抱いていた。

六花は恐る恐るマダラの顔を見上げる。

二人の目が合う。

マダラも六花の顔を見た。その瞳は紫陽花の葉の上に載った雨粒の様に丸く、そしてゆらゆらと揺らぎながら光っている。

「……こうしてりや、寒かねえだろ」

「……は、はい」

六花は少し戸惑いつつも、マダラ言葉と行動に胸が熱くなる。顔を横に向けて、そつと頭をマダラの胸に委ねると目を閉じた。その口角はきゅつと上がっている。

そして、マダラの目には、真つ白な六花のうなじと首筋が写っていた。見慣れているはずの光景だが、自然光を受けて微かに青白く光って見えるその光景は、とてもそそのものだった。

しかも急所である首筋を何のためらいもなくマダラに晒しているのは、いつでも私を食べてくれ”と言っている様にも見える。また、それは一方で犬が主に対して腹を見せ服従している光景にも見える。実際、六花はマダラの下僕だ。

そう考えると腹の中のもう一人の自分が笑った気がした。その笑いの振動で身震いがし、身体全体が熱くなってゆく。

マダラは右手の指先を六花の首筋に這わせ、優しく撫でた。

「あつ……」

六花が驚きと快感でピクンと小さく悶え、微かな声を洩らした。ただそれだけなの

に、マダラの下腹部が急速に熱くなる。

マダラは上半身ごと六花を起こして床に座らせると、そのままかぷつと六花の左の首筋に食いついた。

「あんっ！いい、いけません……こんな場所で……」

六花の言葉を見無視し、マダラは六花の首筋に何度も舌を這わす。六花は戸惑いつつも主であるマダラに逆らうことが出来ず、じつと目を閉じ声を殺した。

そしてマダラは舌を首の付け根の少し内側で止めると、唇と舌を使ってちゅうつと強く吸い付いた。

「あっ……んん……っ」

チュツ、チュツ、チュツ……チュツ。

「んっ」

マダラの唇は六花の首筋を上ると、ついに六花の唇に辿り着いた。そして舌は六花の舌に絡みつく。

六花は堪らず両腿を擦り合わせて身悶えた。

マダラは唇を離さず、六花の左合わせの上着の両襟を掴むとぐいつと下に引つ張つて脱がせた。そしていつもの様に唇を六花の乳首へと移そうとした。

「……」

「ぬ、脱ぎます…」

「いや、いい。」

「えっ！」

マダラは芙蓉の鎖帷子を引っ張ってたくし上げると、裾から右手を入れ、下着の肩ひもを下げた。乳房が現れ、赤く勃起した乳首が鎖帷子から透けて見てとれる。

マダラはその乳首を指でつまんだ。

「ああっ！」

六花は歪んだ顔を逸らし、身をよじらせた。

「おい、しつかり見てろ」

その声と、乳首にかかる息に、六花は恐る恐るマダラの顔を見た。

マダラはつまんだ乳首に顔を寄せると、更にきゅつとその乳首をつまみ鎖帷子へ押し当てた。そして六花の顔を横目で見ながら、鎖帷子の上から乳首を舐め始めた。

「ひゃあんっ！…ああっ」

「顔を背けるんじゃない。しつかり見てろ」

「は…いい」

六花はマダラの舌の温かく柔らかい感触と共に鎖帷子の硬い感触が加わり、これまで感じた事の無い、なんとも形容しがたい快感…そして淫らな光景に恥ずかしさを感じて

顔を歪め、閉じかけた瞼の間から、なんとかマダラに舐め回される己の乳首を見た。

「あつ……んんっ!!はあはあはあ……」

マダラは六花の乳首をねつとりと舐めながら、横目で乱れる六花の顔を見て眼で笑った。

六花はその眼を見てごくりと唾を呑んだ。

マダラは更に左手も鎖帷子の中に入れ、六花の右乳首を指で擦り始めると、六花は堪らず両手を後ろに突き、また顔を逸らした。マダラはそれでも両乳首を責め続ける。

「あんっ……んん……んんんんっ……はあっ!!!」

六花は声を殺しつつ、遂に果ててしまった。

脱力し、後ろに倒れそうになる背中をマダラが受け止める。

「マダラ……さまっ……」

虚ろな目でマダラの名を呼ぶ。

マダラは六花の顔を見て舌なめずりをすると、ゆっくり六花を床に寝かせた。

それから上着を全て脱いで上半身裸になると、その上着を床に敷く。そして六花を抱き上げるとその上に寝かせ、帯を解き、上着とズボン、下着を剥ぎ取る。

六花は上半身は鎖帷子と下着、下半身はふくらはぎに布を巻いているだけという不思議な格好になった。

再びニヤリと笑うと左手で六花の鎖帷子を首元まで捲し上げ、露になつた左の乳首に吸い付いた。

「あんっ……んんっんん……んんんっ」

膣と乳首の両方を同時に刺激され、芙蓉は快感を抑える耐える苦しみの方が優り、苦しそうに声を洩らす。喉は風邪でも引いた時の様に熱を帯び、気管支は狭まっている。喘ぎ声をあげられないことが、これほどまでに苦しい事とは知らなかつた。

しかし「芙蓉」は初めて味わう苦しみで、また思い出してしまふ。

自分にとって男は、マダラだけでは無いという事を。

そして、今でも己の心は扉間の妻のままである事を。

それからもう一人の自分。いや、今マダラの目の前に居る「六花」の事を考える。

六花にとってマダラは、この世でたつた一人の男だつただらう。

たつた一人の男に抱かれていた六花は、どれほど幸せだつただらうか……

そう考えると、芙蓉は六花のことを妬ましく思つてしまい、胸が苦しくなるのである。芙蓉が耐え苦しんでいる事など関係無く、マダラの指と唇・舌は止まるどころか勢いを増して追い詰めてくる。

「んんっ……ああっ!!マダラさま許してっ!」

その声にマダラは顔を上げる。

六花の顔は眉を寄せ涙目になり、唇を噛みながら顔を歪めている。これまで何度と無く厳しい修行をつけたが、こんなに辛そうな顔をしているところは見たことが無い。余程苦しいのだろうか。

サ———

いつの間にか雨脚は弱まり、辺りは少し明るくなっていた。

マダラは身体を起こすと、黙って六花の鎖帷子と下着を脱がせて裸にした。そして六花の股の間に両膝をついて座ると固く大きく勃起した男根を膣の入り口に押しつける。

「フツ…仕方が無いな。じゃあ思いつきり声を出せ。誰か来てお前の裸を見たら、俺がそいつを殺してやる。」

「そつ、そんな…そんなの駄目です！」

「そうか。じゃあ声を出さなきゃいい。フフツ！」

そう言うマダラは六花の腰を掴み、いっきに男根を膣の中に挿入した。

「ひゃああああんっ…あっ…あっ…」

「声出しても良いんだぞ。ほら出せ！」

「だめえっ…」

マダラは激しく腰を動かしながら、両手で口を強く抑え顔を背ける六花を覗き込む。

来るかどうか分からない誰かの為に、必死に声を殺している六花の様子を見て、マ

ダラの胸の中で何か柔らかい物が転がるような感覚がした。それが左右に転がる度に、六花の理性を壊してやりたい気持ちと、優しく抱き締めたい気持ちに揺れる。

マダラは六花の両手を無理やり退け、その両手首を握って床に押し付けた。そしてまた腰を動かし六花の膣の中の感じる部分を擦り上げる。

「んんっ!!……あつ……ん」

「出せと言っているんだ。俺の命令が聞けないのか」

「でっ、でも……誰か……来たらっ……」

「お前は誰のものだ？」

「……『お前は、誰の、もの』?……」

いつかの記憶と重なる。

あの時、確かに二人はこの世にたった二人だけの存在……夫婦だった。

「答えられないのか？」

マダラは不敵に笑いながら細めた目で問うている。

その表情は明らかに今の状況を楽しんでおり、あの時とは全く異なっていた。

そして、目尻にはカラスの足跡の様なシワが在り、髪には白が目立っている。

何より、マダラが見ているのは、もう芙蓉ではなく、六花なのだ。

芙蓉は目を閉じてマダラの問いに答える。

「・・・マダラさまの・・・ものです・・・」

「だったら俺の言う事をきけ」

マダラはそう言つて六花の両方の乳房を鷲掴みにすると、尖つた乳首を親指で擦り始めた。

芙蓉は硬く口を結んだまま、薄く目を開け、眉を寄せながらマダラを見ると目が合った。マダラはそれを合図に再び腰を動かし始める。

「・・・っ・・・あつ・・・ああんっああんっ!!ああああ!!ああんっ!!」

堰を切つたように芙蓉は声を上げた。そしてマダラの両腕を掴み、僅かに腰を浮かせると膣の中の感覚に集中し始めた。

マダラは六花の様子と、急にぎゅつと男根を締め上げられる感覚に、ようやく六花が理性を捨てた事を感じ取つた。そしてマダラも男根の感覚だけに集中し、更に素早く腰を振る。

激しく、しかし確実にその場所を男根に突き上げられ、芙蓉はもう高まる快感に迷ふことなく身を委ねる。快感を思う存分噛みしめることを許された膣は更にぎゅうぎゅうと締めまり、マダラの男根を捕らえて離さない。

「六花・・・んっ・・・ああつ」

「あんっ・・・マダラ、さまっ・・・はあんっああ!」

マダラが絶頂を迎えビクビクと男根が暴れる感覚に芙蓉も一緒に小さく絶頂を迎えたが、尚も固いままのマダラの男根に刺激され続け、後から来た大きな波に飲まれそうになつて深呼吸をした。そのまま大きな声で叫んでしまいそうになり、芙蓉は咄嗟に身体を少し起こしてマダラの頭を抱き寄せると口づけをした。

「んっーんっーんっーんんんんっっっ……!!!」

芙蓉は大きく絶頂を迎えた喘ぎ声に、何とかマダラの口で蓋をした。

マダラは六花の声が口腔内を通じて脳天まで響いている感覚に、果てた後に残る快感の余韻が震え再び大きくなるのを感じ、マダラも芙蓉の頭を抱き寄せた。

しかしマダラの男根は固さと大きさを保つことは出来ず、少しづつ小さくなつてゆく。マダラはそれを悟られまいと急いで男根を膣から抜いた。

「んっあっー!」

芙蓉は、ぬるりと男根が膣から引き抜かれる感覚に最後に小さく悶えた。

そして、二人はどちらからともなくゆっくりと唇を離し、肩で息をしながら見つめ合う。

「フツ…うまい事考えるじゃないか。俺の口で声を殺すなんてな」

「そつ、それは…咄嗟の事で、その…すみません…」

「謝らなくていい」

マダラは優しくそう言いながら六花の頬を両手で包み込み、再び口づけをした。

「遅かったね。もうとうの昔に雨止んでるのに、いったい何してたの？」

「フン…」

アジトの入り口で二人を待っていたゼツが、並んで入って来たマダラと六花に声を掛けた。マダラはその言葉を無視して、ゆっくり奥へと歩いて行ってしまった。六花はそれを横目にゼツへと歩み寄り、前屈みになると掌を揃えて差し出した。するとゼツはぴよんとその掌の上に載る。芙蓉は掌のゼツを顔に近づけると、優しくニコニコと微笑んで見せた。

「何？妙に嬉しそうにしちゃってさ。さてはマダラと甘味でも食べて来たんじゃないだろうねっ」

「・・・ふふふつ。まあ、そんな所かな。」

「えええつ！僕を出し抜いたのっ」

「情緒も趣も分らない子供には、まだ早いつてさ」

「はああ!!意味わかんないしっ！ずるいよ！ずるい！」

「ゼツだって昨日買ったお団子、どうせ私の分まで食べちゃったんでしょう？お相子よ。」

「うっ。それは…」

水色・灰色・紫・桃色・黄色・橙・・

そして、雨上がりの夕焼け空には短い七色の虹が架かっている。

芙蓉はアジトから出て、ひとり木の上からその空を見晴らしていた。

「虹なんて、いつ以来だろう」

夕焼け空は大好きなのだが、それは、昔らか芙蓉に死者の世界を連想させる。母が死んだ時からだろうか。また、死することを「虹の橋を渡る」と表現をするのを聞いたことがあるが、夕焼け空に虹がかかる風景は、まさに死者の世界への入り口に思えてならなかった。

芙蓉は目を閉じて思う。

・・・ごめんなさい扉間さま。この世に生きる間だけ、マダラさまのもので居ることを許して下さい。そして、マダラさまのことを再び愛してしまうことも・・

おしまい

〔 i f y o u XXX No. 7〕 犯してでも～夏の白昼夢～樹と芙蓉

「われはこの山を千年守る役目を仰せつかつておつた銀孤（ぎんこ）という。そなたのお陰でわれは呪いから解かれ、無事に故郷である明来峰へと帰還することが出来る。ありがとう。感謝するぞ・・・」

「ええつとお、ああ、いえいえ。そりやあ良かったですね・・・」

・・・つて、なんだあこの白いキツネみたいなの？オオカミみたいなの？ものけは。目つき悪つ！誰か（扉間）にソツクリなんだけど。つて、私は倒れてた碑石（推定2トン）を起こしたただけなんだけどなあ・・・

樹は左手で頭をぼりぼり掻きながら、苦笑いしつつ銀孤に向かってそう答えた。

樹は護衛部隊と、樹がまとめる秘書室の部下の女子たち8人で、昨日火の国の大名の屋敷で行われた会議に出席して来た帰りだった。

しかし会議の内容は報告を急ぐ必要のあるものでは無かつた事、そして次の日はそのまま休日ということもあつて、木ノ葉の里へ帰る途中にある「千手温泉」に立ち寄つて

温泉と食事（護衛部隊との合コン）を楽しんで帰ろうという話になった。

しかし、樹だけは先に里へ帰る事にした。貴重な休日は芙蓉と一緒に過ごしたかったし、土産を渡した時の芙蓉の笑顔も早く見たかった。

皆と別れ、ひとり里に向かう山道を、後ろで束ねた長い金髪を揺らしながら急いでいた所、道を塞ぐように2 mはあろうかという平たい御影石で出来た碑石が倒れており、道を塞いでいた。碑石は古の人々からの重要な教訓や啓示が書いてある貴重なものがあり、それをそのまま跨いで通り過ぎるのも気が引けたため、樹はとりあえず道の傍らにそれを起こして立てることにした。くノ一の実力者である樹にとつて、高さ2 m・重さ2トン以上あろうとも、風遁を微細に操って立て起こす事など容易い事だった。

樹は手も服も汚すことなく、あつという間に碑石を道の端に直立させ、下部50 cm程は地中に埋め、その足元は大きめの石を敷き詰めて転倒防止まで施した。

「もう倒れんじゃねーよ。迷惑だし、何より危ないからさ」

そう言つて前を向いたとたん、今、対峙しているもののけが目の前に現れたのだった。「…それで、われを助けた札にそなたの望みを一つだけ、何でも叶えてやろう。但し、われの残りの魔力では叶うのは一日限定だがな。それでも良ければ申してみよ」

「え？は？ほ、ホントに？で、す、か？やったあー!!わあく何叶えて貰おうかなあ！えつと、えつとお・・・」

「もう一度言うが、一日限定だぞ……」

「えっ。そうなんですかあ!!ちえくケチだなあ」

「…さつきも、そう言ったのだが、なあ…」

「うーん、じゃあ芙蓉、あ、私の親友なんですけど、その子と二人つきりで海の見える高級温泉旅館で贅沢三昧したいな!どうですか?」

「…うむ。構わんが…そなた、他にもつと昔から願っている事があるのではないか?…われにはそなたの心が見えるぞ…ああ、いや、何を叶えるかはそなたの自由だが」

「…昔から…願ひ、続けてる…事……」

男になりたい。

男になって……

「あつ、いや、それ一日じゃ無理だし、芙蓉はもう扉間の妻だし…って、あーもう、私何言ってるんだろ、もののけ相手にっ!」

樹は赤面し、頭を両手で抱えながら首を横に振った。

「もののけではない。山の守り神・銀孤(ぎんこ)だ!」

「ああ、サーセン。……あつ!でも!たった一日だけでもいいから、やっぱり男になりたい…うん!じゃあそれをお願いします。私を男にして下さい!」

「本当にそれで良いのだな?」

「はい！男になった私を見た芙蓉の反応を見てみたいし！」

「それは無理かもしれない。他の者の力で願いを叶えているという事が他人に知られれば、その場で魔力は解けてしまう。大きな力にはそれなりの代償も必要だという事だ。まあ人間の魂を生贄にすれば別だがな。魔力も50年は持続するだろうし……だが、もうわれにはその生贄を待つている時間は無いがな。」

「ええ——。なんか制限ばつかじやないですかあ。」

「文句があるなら、われはもう消えるぞ。」

「ちよちよちよちよ、ちよつと待つて下さい！分りました！私の正体を誰にも言えなくていいから、それでもいいから、私を一日男にして下さい!!」

「うむ。その願い、確かに受け取ったぞ……」

「!!」

銀孤が話し終わると、その姿はまばゆい光を放ち、辺りの森の景色までを真っ白に変えた。樹はあまりの眩しさに目を閉じ、両腕で顔を覆った。

暫くすると音も無くその光は徐々に薄れ、辺りの景色が戻ってきた。

樹は恐る恐る腕を除け、眼をゆつくりと開けると銀孤の姿は既に無く、目の前には先ほどまでと変わらない山道が木ノ葉の里に向かって伸びている。碑石も見てみたが、何の変化も無かった。

小鳥が囁り、木洩れ日は揺れ、まるで全く何事も無かったの様な景色である。

「ふう……ったく。やっぱキツネに化かされたってやつかな？ははっ。」

そう小さく呟くと、樹は一步前に足を踏み出した。

「ん？」

思わず足元を見た。

いつもよりも歩幅が大きい気がする。

そして何より、股間にこれまで感じた事の無い異物感がある。それに、足元を見ているにもかかわらず、いつもならその視線を邪魔する豊満な乳房が無いではないか。

「えっ！えっ！えええ？マジでっ？」

樹はその場でぐるぐると回りながら自分の身体を触って、見直し、確かめてみた。

あるはずのものは無く、無かったものが、ある。

それに、心なしか着ている服も窮屈な気がする。身長が175cmもある樹だが、それ以上に身長も伸び、肩幅や腕の太さ、足の太さなど身体全体が大きくなっている様だった。

樹は急いで鞆の中から芙蓉に貰った手鏡が入っている巾着を取り出し、震える手で袋から鏡を出した。そして、恐る恐る、鏡を覗き込む。

「うっわああ!!誰だこの男っ!!?!」

つい大声で叫んでしまい、直ぐに焦って肩をすくめ360℃、辺りに誰も居ないか確かめる。叫んだその声も、低く男そのものの声だった。そしてもう一度、鏡の中の自分の顔を見た。

樹は、もともと「男装の麗人」と呼ばれるほど、中性的で美男子の様な顔立ちとスタイルを持ち、里の一部の女性からは絶大な人気がある。女学校の頃から続く「樹ファンクラブ」も存続しているほどだ。

しかし今、鏡に映る「男」になつた樹はどうだろう。

・・・この顔に口説かれて落ちない女なんて居るのか？・・・

樹は大きく見開いていた目を細め、うっすらと歯を覗かせて微笑した。

「あの銀ギツネ、本当に神様だったんだなあ・・・よし！里に帰るまでにこの一日の使い方をしっかり考えるぞお〜！」

樹は股間で揺れるものを手で確かめながら、その感触に満足そうにニヤケつつ、顎を少し上に上げ、大股でズンズンと木ノ葉の里に向かって歩いて行きだした。



里の玄関「阿吽の門」をくぐると、ここに辿り着く道すがら以上に、婦女子の視線が自分に集まるのを感じる。

樹を指さして、きつきやつとざわつき顔を赤らめる若い女子の集団のいくつかの横

を、知らんぷりのフリをして前を見て真っ直ぐ歩く。しかし。

「…ねえねえ、でも木ノ葉の忍にあんなに美男子で男前なんて居たっけ?」

「…うん見た事ない。居たら気付くって!新しく里の忍になった人かなあ?」

・ ・ ・ ヤツベ!木ノ葉の額当て、したままだった!! ・ ・ ・

樹は歩みを早め、そのまま走り去って行った。多くの婦女子が名残惜しそうにうつとりとした顔でその後ろ姿を見送っていた。

「はあー。変に騒がれて、火影や扉間の耳に入って正体バレたら全部水の泡だよ」

樹は細く暗い路地に入ると壁にもたれてそう洩らし、額当てを殴り捨てる勢いで外して靴に入れた。そして代わりに靴の中から手拭いを出し、少しでも顔を見られない様に頭から被った。初夏のこの季節、帽子・日傘替わりに手拭いを被っている人間など珍しくないだろうし…

そして気を取り直し、行った事は無いが思い当たる衣料品店へと急いだ。

しかし樹は、正体がバレないか不安と焦りを感じつつも、頭の中の九割は冷静にこれかの計画を周到に練り上げていた。



「火影様!火影様!」

「おおくなんぞ?どうしたんぞ?そんな可愛らしい顔をして。何か良い事でもあったん

ぞぞ？」

久しぶりに木ノ葉の里本部の食堂で、柱間が扉間と二人で視察を兼ねて食事をとつていたところ、若い中忍のくノ一・四人組がニコニコしながら駆け寄つてきた。女好きの柱間は鼻の下を伸ばして破顔している。扉間は向かいの席からそんな柱間を睨んだ。

「あの、最近男の忍で、金髪・長身の超イケメンが里の忍に入隊しましたか？お名前をご存知なら教えて下さいませ！」

「はて、そんな忍、最近新しく入隊した奴の中にいたかのう……なあ、扉間？」

「新人採用人事は火影ではなく、この、俺が、全て管轄しているがそんな奴はおらん。フーン！貴様ら！わざわざそんな下らんことを休憩中の火影に訊きに來るな！」

その言葉に四人は身を寄せ合い怯えて後ずさると、震えた声で申し訳ありませんと言つた。

「コラ扉間！良いではないか！皆の者、すまぬな。何でも訊いてくれていいんぞ？俺も皆と話すのがとても楽しみなのだ！わはははははは！」

「〴〵但し女に限る〴〵だろーが……つたく。」

「で、おぬしらは、そんな情報どこから仕入れてきたんぞ？」

「あ、はい。さつき十時前頃に、里の入り口で木ノ葉の額当てをした金髪のそのイケメンを見たんです。周りに居る女性も皆、色めきだつていて凄かったですよ。だから真相が

知りたくて、つい…」

「まあ土産物用に木ノ葉の額当ては売つてあるからのう。おぬしら、そのイケメンの顔に見惚れて額当てが土産物用だと気づかなかつただけではないのか？ わはははは！」

「土産用は布が黒ではなく、似紅色（にせべにいろ）だ。板の部分も合金ではなくただの錫（すず）の安ものだ。貴様ら、惚けておるからそんな見間違いをするのだ。それに万が一、それが里の忍に変装して何かを企んでいるとしても、そんな目立つ風貌でやつて来るとは考えにくい。貴様たちも任務外だとしても気を引き締め、忍としての観察眼と洞察力と緊張感を…」

「あーあーもうその辺にしておけ扉間！ 皆泣きそうになつておるではないか！ おお、おお、可哀そうに。気にせんでもいいぞお？ おぬしらも忍の前に年頃の娘だから。また何か面白い話があつたらせひ聞かせてくれ！」

『…あ、ありがとうございます…』

四人組はそう言つて柱間の方に向かつて深く頭を下げると、そそくさと去つて行つた。

「ファン!!」

「妬いておるのかあ？ 自分がモテないからつて。ニシシシシ…」

「うっさい！ 俺だつて…モテとるわ。つーか芙蓉以外の女に好かれないとも、好かれる

必要も無い！」

「わはははは！よっ！さっすが男前♪」

「お前、いま絶対俺のこと馬鹿にしてるだろ？」

・・・木ノ葉の額当てをした美男子か。少々気になるが、木ノ葉創設の歴史の演劇をする旅芸人達も増えているしな。そこまで気にする必要もないか・・・

若いくノ一に囲まれた事が余程嬉しかったのか、水菓子の水ようかんを満面の笑みでパクついている柱間を横目に、扉間は心の中でそう結論づけた。



「お急ぎの所、申し訳ありません。ちよつと道をお尋ねしたいのですが」

芙蓉が夕食の買い物を終え、家に帰ろうと住宅街を歩いていた所、見知らぬ青年が現れた。

その青年は夫の扉間と変わらない長身で、長く美しい金髪を靡かせ、眼は切れ長の奥二重で瞳は青色、凛々しい眉、筋の通った高い鼻、面長で男らしい輪郭の顔、程よく厚みのある色つばい唇をしており、芙蓉は思わず見惚れてしまった。

「・・・あつ、は、はい。どちらでしよう？」

「私は今日、翡翠亭という割烹旅館で行われる会合に参加する為に水の国から地図を頼りに何とかここまでやって来たのですが・・・恥ずかしながら男のくせに地図に弱くて。

最後の最後で道に迷ってしまったのです……ここです。」

そう言いながら男は芙蓉に一歩近づくと地図を広げ目的地を指さした。

「翡翠亭……名前は知りませんが、この辺りの地理なら解ります。ちよつと距離はありますがそんなに遠くないですよ。まず、この角を右に曲がつて……」

「あの、本当に申し訳無いのですが、待合せ時間に間に合いそうに無んです。お礼は致しますので、近くまで道案内して頂けませんでしょうか？」

「そうでしたか。解りました。ではご案内いたします。あ、お礼は結構ですよ。木ノ葉の里に来て下さったお客様ですもの。おもてなしさせて下さいませ！ふふっ」

芙蓉はそう言う肩に掛けた藤の籠を掛け直し、頭を少し傾げて微笑んで見せた。

「ありがとうございます……本当に助かります。よろしく願います。」

こうして二人は並んで歩き出した。

翡翠亭という割烹旅館がある場所までは人通りの少ない住宅街の道を抜け、竹林の遊歩道を通る約700mほどの距離である。ゆっくり歩いて15分もあれば着く。互いに一度一会。暗黙の了解で互いに名前を名乗りはしなかった。

「水の国から来られたのなら、木ノ葉の里の初夏はとても暑く感じるんじゃないでしょうか？」

「ああ、確かに。でもここまでくる道中で慣れましたよ。ははは。」

少し照れたように苦笑いするその男の顔はとても爽やかで、芙蓉は思わずドキツとしてしまった。それを隠そうと正面を向くと、前から歩いて来る年配の女性や子供連れの女性が隣の男の見ながら通り過ぎていく。

「……このひと、なんて美男子なの。隣に居て気まずいし恥ずかしくなっちゃう……芙蓉は下を向き、両手で藤の籠の持ち手をギュツと握り締めた。

「……ふふつ。芙蓉ったら、なんて可愛いのに……芙蓉の隣に居る男。」

そう、樹は、顔を赤らめて俯いている芙蓉の横顔を見下ろしながら微笑んだ。出来れば握り締められた芙蓉の手を優しく握ってやりたくなる。

「その籠、重くありませんか？ 沢山荷物が入っているみたいですけど。良かったら私がお持ちしますよ？」

そう言つて樹は芙蓉が籠を持つ手に手を伸ばしたが、芙蓉は焦つてそれを避けた。

「あつ、いえ！ 今日そんなに重たい物は買っていませんし、慣れてるので大丈夫です！ あ、ありがとうございます……」

そう言う芙蓉は、ついに耳まで真っ赤にしてしまった。

しかし、樹はその様子を見て、なぜか喉に苦いものを感じる。

「……芙蓉も本物の美男子には弱いんだな。しかも、私じゃなく、その美男子の

前ではこんな恥じらった姿を見せるなんて・・・

樹は思わず下唇を噛んだ。

夢にまで見た男という性別になれたのに、やはり自分以外の現実は変わっていない事を実感した。

「本当はもつと広い道が在るのですが、お急ぎとのことなので近道を通ろうと思うのですが、その道はこの時期竹落ち葉で足元が滑りやすいんです。それでも宜しいでしょうか?」

「はい大丈夫ですよ。その道でお願いします。」

二人は竹林の遊歩道に入った。

サワサワと笹が擦れる音がとても涼やかで、目の前には黄色い竹落ち葉がちらほらと舞っていた。

「木ノ葉の里にはいつまでいらつしやるのですか?」

樹はその質問にドキリとする。芙蓉の質問の真意は…?」

「明日までの予定です。明日の昼前には国へ帰ります。」

「あら、そうですね!とんぼ返りなんて大変ですわね。木ノ葉の里が創設してもう直ぐ7年が経つのですが、随分と見どころや名物も増えて、里の外れにある千手温泉も人気なんですよ。次、里に來られた際はぜひ、色々楽しんで帰って下さいね。」

芙蓉はそう言つてにこやかに男の顔を見上げた。深い意味は無かつたようだ。

樹は安堵と共に少しばかり残念な気持ちになる。いや、それでいいのかも思う。芙蓉の目の前に居るのは樹であつて樹ではない、全く別人の美男子なのだから：

しかし、その気持ちのお陰で樹の心の複雑さは解消され、本来の目的を再度見据えることが出来た。

「この辺のはずだけど．．．あつ！あつた！あの建物ですわ！」

「あ、本当だ！ここだ、ここだ．．．ありがとうございませう。お陰で間に合いました。しかも随分早く着けましたよ。あの、ここは喫茶室もあるようですから、良かったら時間まで一緒に冷たいお茶でも飲みませんか？お礼もお渡ししたいし」

「いいえ！お礼だなんて本当に結構です！それに、私も家に帰つて夕食の支度をしなければなりませんので、せっかくですけど．．．どうかお帰りの際はお気を付けて。ではこれで。」

芙蓉は口早にそう言い終わると、少し後ろめたい気持ちを隠す様に男に背を向けてもと来た道へ歩き出そうとした。

夕食の支度。嘘ではない。ただ、*“夫と食べる”* 夕食の支度だ。

「あの、すみません、さっきの竹落ち葉が頭に付いていますよ！」

「えっ？」

芙蓉は反射的に男の方へ振り返り、ハーフアップにしている髪の毛を触り始めた。すると男が芙蓉に歩み寄って目の前に前に立った。

「ちよつとじつとしておいて。取ってさしあげますから」

そう言つて男は芙蓉の返事も待たずに、芙蓉の頭を両手で包み込んだ。咄嗟の事に芙蓉も身動きが出来ず、眼を見開いて男のその次の行動を待った。

チユツ

ドサツ。

芙蓉が持つていた藤の籠が地面に落ちた。



上半分は障子、下半分はガラス窓になつており、ガラス窓からは専用の小さな中庭が見えている。青々とした苔と新緑のモミジが美しい。床の間には季節の花々の生け花が置かれ、その上には漆塗りの丸い壁飾りが掛かっている。

そして、手入れが行き届いている艶々とした畳の上には真つ白なりネンを被された羽根布団が二人分くつつけて並んでいる。

その左側に、芙蓉は仰向けに横になつていた。

「ごめんね芙蓉……こんな真似して……でも罪を犯しても、芙蓉を犯してでも、一度でいいからこの想いを遂げさせて欲しいんだ……お願い」

静かに眠っている芙蓉の上に樹は裸になって四つん這いに覆いかぶさり、芙蓉の顔を左手で優しく撫でながら小さな声で囁いた。

そしてその左手は芙蓉の胸に下り、白いブラウスのボタンを、ゆつくり、ひとつずつ外してゆく。やがて芙蓉の上品な胸をすっかり支えている白の絹の下着が現れ、丸い二つの乳房の間にくつきりと谷間ができていた。その胸は汗ばんでおり、山と谷はまるで真っ白い陶器のように輝き、妖艶で美しい。

樹はそれを確かめると唾を呑み込み、芙蓉に優しく口づけをする。

最初は音もなく上下の唇をなぞり、そして次はチュツチュツと音を立て唇を吸う。

ハアハアハアハア・・・

それだけで樹の呼吸と鼓動は速くなる。

樹は既に、芙蓉の身体のすべてを知っている。

そして女同士、何度も抱き合ってきた。

しかし、女である限りどうしてもすること出来なかつた行為、知ることの出来なかつた快感を知りたい衝動が樹の気持ちも逸らせる。

今は美しい芙蓉の身体全てを味わい尽くすよりも、一刻も早く、それを知りたかつた。知りたい衝動と共に、下半身でドクドクと脈打っているモノの感覚に気が付く。

「!!」

見ると、男になった樹の男根は太く、大きく、長く、腹に向かってそそり立っているではないか。赤黒く大きな亀頭に、太く長い陰茎体は血管が浮き出て真っ赤に充血している。

“男性経験”の無い樹にはある意味衝撃的な光景だったが、いつたい何度、自分の股間にこれほど立派な男根が生える事を願い、そして妄想したか分らない。妄想の中だけでは、その男根で何度も何度も芙蓉の中に挿入し、射精してきたのだが：

樹は芙蓉のスカートを脱がし、ショーツの中に手を入れ、膣の入り口を触ってみた。

当然だが乾いており、男を迎えられる状態では無さそうだった。

一刻も早く、芙蓉の中に、挿れたい：

しかし、樹の望みは野蛮に芙蓉を姦淫する事では無い。

芙蓉と、男と女同士、身も心も一つになって愛し合いたいのだ。

樹は芙蓉のブラウスを全て脱がせ、絹の下着、ショーツ、全てを脱がせて全裸にした。そして、優しく包み込むように芙蓉を抱き締める。

いつもなら自分の豊満な胸と芙蓉の上品な胸がくつつき、柔らかな感覚同士が温かな快感と安堵感を呼び起こすのだが、今は、樹自身の硬く分厚い胸板に芙蓉の柔らかな胸が触れ、樹のつづらな乳首が刺激されてゾクゾクとする。男になっても乳首は性感帯の様だ。そして、そのたびに男根も一緒にドクドクと脈を速める。

これまで樹は、男がやたら女の中に挿入する事ばかりに拘る事に対して嫌悪し、下等な生き物だと見下して来た。しかし、いざ自分が男になってみると、その理由が少しだけ解った気がした。

樹は身体を離し、芙蓉の右乳首にちゅうつと吸い付きながら、おもむろに自分の男根に手を伸ばし、握ってみた。

すると、本能的とでもいえるのだろうか、握った手を上下に動かし、しごき始めた。自分でもその行動に驚く。男根をしごく快感は、まさにクリトリスを擦る快感と同じだった。樹の男根は更に破裂しそうなほどに膨らんでゆく。

樹は一旦しごくのを止め、芙蓉の唇から口を外し、今度は芙蓉の左の乳首に吸い付き右手で自分の唾液で濡れている芙蓉の右乳首を転がしてみた。

「…あつ…ああん…」

眠っている芙蓉がいやらしい声を洩らした。しかし顔は苦しそうに歪めている。

「芙蓉・・・気持ちいいだね」

そう呟くと芙蓉の性感帯である首筋に吸い付いた。舌で上下になぞり、チュツチュツと口づけをしたり、舐め回す。そして同時に、両手は芙蓉の両乳首をつまんでトントンと優しく刺激し続けてみた。

「はあああんっ、はあああん・・・あああつ・・・えっ!!」

芙蓉はパチリと目を開けた。

自分に何が起こっているのか、どういう状況なのかも分らず、全身を硬直させている。樹も芙蓉が目覚めたことに気付き、顔を上げて芙蓉の顔を見た。

芙蓉は硬直しつつも、眼球をきよろきよろと泳がせる。驚きと恐怖で言葉も出ないようだ。

「ハアハアハア・・・」

そのうち芙蓉の息が速くなる。肩が激しく上下し、眼はみるみるうちに潤んでいく。

「怖がらないで・・・君を、最高に気持ち良くさせてあげるだけだから・・・」

「な、なん、で・・・？」

「君がこんなにも美しく、魅力的だから悪いんだよ。私の心を、君は全て奪ったんだから」

樹は優しい目でそう言うのと芙蓉を抱き締めた。すると、いきりたっている樹の男根が芙蓉の下腹部に当たった。

「!!・・・い、いやあああつ!!やめて!助けてつ!!誰かつ!!誰か来て!!扉間さまあ!!扉間さまつ!!!」

芙蓉は何とか力を振り絞り、ジタバタと身体と手足を動かして抵抗する。しかし、樹は芙蓉の両手首を握ると、布団に押し付けた。

「いつ……た」

それはとても強い力で、手首が折れてしまいそうだった。芙蓉は女の自分の力で敵わない男の腕力に恐怖を感じる。そして自分に覆いかぶさっているその男の姿はとても大きく、芙蓉の視界を全て覆っていた。そして再び、芙蓉の体は固まってしまった。だが、それでも何とか声を洩らす。

「や、やめて……お願い……やめて……やめてください……」

芙蓉の顔は恐怖で歪み、潤んだ瞳は恐怖で揺れ、唇を震わせている。

樹にはその様子がまるで、

『早く、きて』

と懇願している様に見える。

樹は一度目をつぶってハアアッと大きく息を吐くと、再びゆっくりと目を開ける。

そして、樹は左手で芙蓉の両手首を芙蓉の頭上に押さえつけると、右手で芙蓉の秘部に手を伸ばした。

もう膺はトロリと蕩けており、簡単に中指が入ってしまうほどだった。

「い、いやっ!! どうして! どうしてこんなことを?」

「さっきも言っただろ? ……君が、君だから……だよ」

そう言う樹は芙蓉の手を離し、今度は芙蓉の両ふくらはぎを持って無理やり股を広

げ、膝を突いてその間に入る。そして左手で芙蓉の腰を抑え、右手で男根を支えながら芙蓉の膣の入り口に押しつけた。

『んんっ』

二人の声が重なる。亀頭が芙蓉の膣の中に入った。

もつと奥へと挿入しようとするが、なかなか入らない。

しかし、樹は先ほど男根をしごいた様に、無意識に腰をゆっくり動かし始め、男根を僅かに出し入れした。すると男根は少しずつ、少しずつ、狭い芙蓉の膣を押し広げながら奥へと入ってゆく。

「ああっ気持ちいいっ！」

樹は思わず声を上げ、眼を閉じて天を仰いだ。

・・・なんだこの感覚は！指で感じる比じゃない！これが「ひとつになる」快感なのか。気持ち良すぎてもう、直ぐにでもいきそう・・・

樹は更に腰を動かし、もつと奥へと男根を入れようとした。

しかし、ある部分で男根が固（つか）えた。樹は腰を止める。

芙蓉はシーツを握り締め、今生の頼みのごとく声を震わせながら樹に向かって言う。

「・・・お願い・・・お願いだからやめて・・・もう、これ以上は・・・」

・・・なるほど、ここから先が男しか知ることの出来ない聖域なんだ・・・

樹はそう悟ると、いつきに男根を更に奥へとねじ込んだ。

「つ!!!いやあああつ……」

樹の亀頭がふわふわとした柔らかな部分に突き当たると、芙蓉の声が途切れた。

芙蓉の顔を見てみると、虚ろな瞳には諦めと快感が写っており、先ほどまでの恐怖と苦痛の表情は消えていた。

樹はその瞳を確かめると芙蓉の腰を両手で掴み、無心に腰を振り始めた。

何も考えなくとも、自分の快感を高めようと自然に腰が素早く動く。

それはまるで、生まれる前から知っていた、まさに本能だった。

……ああ。やつぱり、私は生まれる前から男だったんだ……

「あんあんあんっ!ハアハアハア……や、やめてえ……お願いっ!お願いっ!」

無心で腰を振っていた樹は、芙蓉のその声で我に戻る。

芙蓉のことも、存分に気持ち良くさせなければ。

「……やめないよ。これから、どんな男たちよりも私が、芙蓉を最高に気持ち良くさせてあげる……」

今度は少し挿入する角度を変え、いつも指で擦る膣の腹側の場所めがけ亀頭を激しくぶつけてみる。

スポスポ、ぐちゅちゅ、ぐちゅつ、ぐぼつぐぼといやらしい音が響く。

「ああああああ…あんあんあんっはあんはあん、はああんっ!!だめっ!だめえやめてっ
!」

「本当にやめていいの?いきたくないの?いかないとずっと苦しいままだよ?ほら、い
かせて下さいって言ってみて、芙蓉」

「…だ、だめっ!嫌!」

「…そう、分かった」

樹は腰を止めると、男根を挿入したまま、再び芙蓉の両手首を布団に押し付け、乳首
を舐め始めた。

「あっ…あっ…はああんっ。はああんっ」

「だめって言いながら腰がピクンピクン動いて、いやらしい声も出してるね。フフッ」

樹はそう言いながら芙蓉の顔を見てほくそ笑んだ。

そして、また芙蓉の右乳首を舐め回したり吸ったりしながら、再び腰をリズムカルに
振り、男根を出し入れする。

「はあああああんっ!らめえっ!らめえええ!い、いっちゃう…お願い…いかせて、いか
せてくraisaiいっ…」

「うん、いかせてあげるよ。素直でいい子だね、芙蓉は」

樹は上半身を起こし、今度は芙蓉の両方の乳房を両手で掴み、揉みしだきながら激し

く腰を振り、芙蓉の膣の中を掻き回す。

「あんっあんっあんっあんっ!! ひゃああんっはあああんっ…だ、だめっ、いく! いくううううっ!!」

「ああ芙蓉、私もいつちやう…出すよ、芙蓉の中に私の精子、いっぱい出すよ?」

「それはだめえ、外で、外で出し…」

「うっ! あああっうあああっ!!」

「いやあああんっ! ああああっああ、はあああん…き、気持ちい…んっ」

樹は芙蓉の言葉を無視して膣で思い切り射精した。ドビユウツつと男根から熱いものが放たれ、ドクドクと脈打ちながら、芙蓉の子宮の中へとそれを注ぎ続けている。

芙蓉も射精された感覚に強い快感を感じて同時に果ててしまい、つい「気持ち良い」と洩らしてしまった。そして芙蓉はハアハアハアと息を切らしながら、ぐったりと脱力して顔を横に向けた。

樹はその芙蓉の顎を持って上を向かせ、優しく唇に口づけをする。芙蓉はその口づけを嫌がることなく、脱力したまま男の優しく甘い口づけに浸っていた。むしろ、芙蓉は自ら男の唇をむさぼっていた。

長い口づけを終えると、二人はぎゅつと抱き締め合った。

「…愛してるよ。芙蓉。」

「・・・うん。私も、愛してる・・・樹ちゃん・・・」

「!!」

樹は思わず顔を上げ、眼を見開いて芙蓉の顔を見た。

芙蓉は少し困ったように微笑んでいる。

「えっ、なんで・・・?」

「・・・分るよ。」

芙蓉は呆れたように言うと、左手で樹の柔らかい頬を、右手で豊満な乳房を優しく揉んだ。

「はっ!」

「・・・樹ちゃん、これはいったいどういう事?」

「えっと、それは、あのっ・・・」

「とりあえず、そこに正座して。きちんと私に解る様にちゃんと説明しなさい。」

芙蓉は真顔だが、明らかに怒っているのが判る。

樹はいそいそと芙蓉の上から退いて、布団の足元に正座した。芙蓉も起き上がり、隣の布団の掛け布団を引っ張って身体に巻き付け、樹と向かい合って座る。

「あのね、話すと長くなるんだけど・・・まずは、本当にごめんなさい!!!許して!!!許されない事だっけ解ってる。でも、でも!私の事嫌いにならないで!!!」

樹は敷布団に穴が開く勢いで土下座をした。

「いいから。兎に角、こんな事をした理由をしつかり説明してちょうだい。」

「……こんなに怒ってる芙蓉、初めてだよ……当然だよね……」

「今朝、木ノ葉の里に帰ってくる途中、山の中で大きな碑石が倒れて道を塞いでたんだ。そのまま放っておくのも難だから、風遁で道端に立て直したの。そしたら、銀孤（ぎんこ）“つて名乗る山の神が現れて、碑石を起こして自分を助けてくれた礼に、一つだけ何でも願いを叶えてくれるって言ってきたんだ。信じて貰えないかもしれないけど……それで、その願い事は一日限定で、しかも他者の力でその望みが叶えられている事がバシたら即・魔力は解けてしまうっていう条件付きで……で、私は、それでもいいから私を一日男にしてくれって言ったんだ……」

「私を強姦するために?」

「つ……それは……」

否定など出来るはずもない。間違い無いのだから。

樹は膝の上で拳を握り締め、泣きそうな顔でその拳に目線を落としたり。

「本当に、本当にごめんなさい……一度でいいから、男として芙蓉と愛し合ってみたかったんだ……。これは言い訳だけど、芙蓉と出逢って以来ずっと、ずうっと男になりたいって願ってた!扉間様より、柱間様より、そしてマダラより芙蓉を愛している自信があった

！けど、私は女で在る限り、芙蓉と結ばれる事も、芙蓉と夫婦になつて幸せにする事も出来ない。それがとても苦しかったんだ…。一度でいい。想いを遂げられたら、自分から正体を言つて芙蓉に謝るつもりだった。でもだから言つてこんな事するのは間違つてた！この世で一番大切に愛している芙蓉を、傷つけたんだから・・・」

「樹ちゃん・・・。うん。樹ちゃんのした事は間違つてる。あの男の人の正体が樹ちゃんじゃ無かつたらつて思うと、今でも死にたくなるほど悍ましい。本当に怖かつた…。でも途中、目の前の男の人の正体が樹ちゃんだつて気付いた瞬間、樹ちゃんにこんな事をさせた理由も、分かつた気がしたよ。扉間様への愛情とは違うけれど、私は樹ちゃんを愛してる。でも、樹ちゃんにとっては男の扉間様が私を愛しているのと同じく、私の事を愛してくれているよね。私、その事にずっと前から気づいてた。でも、気づいていない振りをして、樹ちゃんの愛情と我慢と友情に甘えてきた。だから樹ちゃんにこんな事をさせたのは、私にも原因があるわ。」

芙蓉は目に涙を浮かべ、樹の眼を見てフツと微笑んだ。

「芙蓉・・・」

「樹ちゃん、ごめんね。ずっと長い間、辛い想いをさせて。」

「なんで芙蓉が謝るのさ！芙蓉は悪くない!!悪く無いよ!!」

樹はそう言うのと、両手で顔を覆つて声をあげて泣き始めた。

芙蓉はゆつくりと樹に近寄り、樹の身体をそっと抱き締めた。

「夏の白昼夢・・・そうしておこう。ね？」

「…私のこと、許して、くれるの？」

「うん。だから樹ちゃんも、これからも私の親友で居てくれない？愛し合う親友として傍に居て。お願い…」

「うん！うん！！芙蓉、愛してるっ！芙蓉！！」

樹は芙蓉に抱き着くと、芙蓉の裸の胸に顔を埋めて泣いた。



六月も末になり夏至を迎え、夜の闇より昼の明るさの方が長くなった。

しかし腹時計は正確なもので、まだ明るくとも時間になれば腹は減る。

ガラガラツ。ピシヤツ。

「おーい。帰ったぞ。」

扉間は腹をさすりながら玄関を入り、暗い廊下の向こうに声を掛ける。

しかし、返事は無い。

それにいつもならば、扉間の帰りに合わせ廊下の灯りも付いているはずである。

芙蓉の今日の予定では私塾での授業は無く、何か用事があっても19時までには家に帰っているのが普通である。扉間は急いで靴を脱ぎながら再び廊下に向かって叫ぶ。

「おーい、芙蓉!!」

やはり返事は無い。寝ているのだろうか。

以前、上役との会食の日、帰って来た時に芙蓉と樹が部屋で昼寝をしていた事があつたのを想い出す。しかし玄関にはやはり、芙蓉の普段履きの靴も、樹の靴も無い。

『・・・最近男の忍で、金髪・長身の超イケメンが里の忍に・・・』

不意に扉間の頭に昼間、くノ一たちが言っていた言葉が浮かんだ。

「いやいや、まさか・・・芙蓉に限ってそんな事・・・いやでも、無理やりその男に何かされていたら・・・!」

扉間は急いで再び靴を履く。

そして飛雷神の術で飛んだ。

(結婚しても芙蓉の手首に付けられたマーキングは消されはしなかった)

「芙蓉!!」

そう叫ぶと同時に、扉間は目の前の芙蓉にズンズンと歩み寄る。

「と、扉間さま・・・あ、あの、帰りが遅くなってごめんなさい・・・」

芙蓉はその迫力に少し怯え、後ずさる。

そして、隣の樹が芙蓉を庇うように芙蓉の前に出た。

「樹！お前、こんな時間まで無断で芙蓉を……って、あつ……ああーっ!!」
『??』

芙蓉と樹は驚いて顔を見合わせる。

「ど、どうされたんですか？扉間さま……」

「……………いや、何でもない。ほら、早く帰るぞ！樹、今度無断で芙蓉を遅くまで連れ回したらただじゃ置かんからな！」

「はあ!!まだ19時ですけどお!!単に腹減ってるだけでしょお？腹減るとカリカリするとかガキですか。バツカみたい！」

「なんだと！今日ばかりは許さんっ！」

「まあまあ二人共、落ち着いて！扉間様、私がついつい長話をして樹ちゃんを引き留めてしまったの。大名様の所での話も楽しかったし。だから樹ちゃんを怒らないで下さい！」

「そ、そうか……兎に角、帰るぞ。……それから樹、お前もう少し女らしい格好をしたらどうなんだ？それでは男に間違えられるぞ。」

「あ、それセクハラ発言！火影様に報告しちやおーつと。」

「……………くっ!!」

「あははは！そうそう、最近忍の間でもセクハラやパワハラ撲滅が推進されていますか

らね。気を付けて下さいね、扉間さま！フフツ！」

「お前らなあ……ハア。」

扉間は腰に手を当て、うな垂れ溜息を吐いた。

「あつ！そうだ！そんなに腹減ってるなら、皆で何か食べて帰りましょうよ！勿論、扉間様の奢りでえ〜！」

「あ、それいいね。たまには私も外食したい！」

「よつしや決まりい〜！レッツツゴ〜！！何食べよつか、芙蓉？」

「はああ？俺はいいとは言ってないぞ。って、おいコラ！待て！！」

二人は手を繋いでスキップしながら扉間の隣りをすり抜け先に進み始めた。扉間は焦ってその背中を追いかける。

貴重な梅雨晴れのこの日、美しい夕陽が辺りを桃色に染めていた。

おしまい

マダラと扉間の共闘（1）　　過去の傷跡

『扉間さまには感謝しているんです』

「……ああ。」

「扉間様……扉間様？」

「あつ。ああ。何の用だ？」

気付けば扉間の机の前に、火影である兄・柱間の秘書をしている千手樹が立つて居た。「ちよつ、なんなんですかその顔！怖いんですけど……えつと、火影様が上忍のみで緊急に話し合いたい議題があるそうで、扉間様の今日の予定を聞いてくるように言われたんですよ！今日はいつなら時間ありますか？」

「……」。今日は他に会議は入っていない。兄者の都合に合わせてと伝えろ。」

「了解です。あの、からだ大丈夫ですか？ろくに休みも取つてらつしやらないみたいだし。里も完成間近だし、今倒れられたら皆が困るんですからね。」

そう言いながら、樹は扉間の背後にある窓辺に歩み寄り、眩しそうに里を見渡した。

処暑を迎え、里と森の境界線に在る稲田は薄つすらと黄色く色づき、早くも豊かな秋

を感じさせる。

「解っている。心配は無用だ。」

「あの、そういうえば扉間様はもう芙蓉のことは諦めたんですか？」

樹の問いを受け、扉間は今し方頭の中で考えていた事を見透かされたのかと思ひ、ドキリとした。しかし動揺を見せることなく、手元の資料を広げながら問い返す。

「何の話だ？」

「何って、結婚ですよ。許嫁は解消したって聞いてますけど、柱間様は全く芙蓉のこと諦めて無くて、私から芙蓉の情報を聞こうとして秘書にしたくらい未練タラタラだし…扉間様はもう、芙蓉のことはいいのかなあって」

「今は勤務中だ。私的な話は止めろ。急ぎの要件なのだろう？早く兄者へ伝えに行け！それに、兄者は馬鹿だが色恋沙汰の為に前を秘書にしたりはしない。そんな気構えで秘書をしているなら即刻辞めることだ。」

扉間は窓辺の樹に振り返り、怒りの形相でそう言った。

「は、はい…すみません…失礼しました。」

樹は先ほどとは比べ物にならない険しく怒りを露にした扉間の顔を見ると、焦って部屋を出て行った。

独りに戻った扉間は、再び資料を手を取ったが、また手を止め、目をつぶってうな垂

れると首を何度も横に振り、ハアーと大きく息を吐く。

・・・いい加減、この思考回路を止めなければ・・・

「結論から言うと、三隅村からの石炭および砂鉄の供給停止の原因は、忍犯罪集団による村の占領だ。」

午後四時。

会議室には柱間、扉間、その他には上忍の一部が集められていた。

そして、調査任務から戻ってきたマダラが皆の前で調査報告を始めていた。しかしマダラが次の言葉を発する前に、柱間が立ち上がり発言する。

「と、いう事だ皆の者！今すぐ討伐隊を結成し、奴らを退治しに行くぞ！」

「おい柱間、人の話を最後まで聴け・・・」

「まだ他に何かあるんぞ？」

「・・・はあ。敵の詳細とか、状況説明とか色々あんだろ・・・つたく・・・」

「兄者、この会議はマダラの調査報告と、それを踏まえての対策会議だろうか？最後まで話を聞け。」

「う、うむ。そうだったのう。すまぬ・・・マダラ、続けてくれ。」

「・・・でだ、敵の数は五十人程と大したこたあ無い。だがそれよりも、現在三隅村で起き

ている原因不明の自然災害の原因のほうが大問題だ。ちなみに犯罪集団の親玉はどうやら女三人。奴らは村人から横取りした石炭と砂鉄を横流しして金品を得、忍術によって災害から逃れて贅沢三昧をしているがな……。で、その自然災害の原因というのは、おそらく、村の近くに眠る尾獣のチャクラの仕業だ。現在の村の状況からして、尾獣の復活は予断を許さない状態だ。犯罪集団はそれを知ってか知らずか、この状況を利用して。そこで俺は、忍犯罪集団の討伐よりも先に、尾獣の捕獲及び封印に向かう事を提案する。以上だ！」

マダラが尾獣の単語を口にしたとたん、会議室がざわつき始めていた。

一方、柱間は思っていた以上に状況が深刻な事に、腕を組み渋い顔をして目を閉じ黙って聞いていたが、マダラの報告が終わるとバツと顔を上げ、両手の拳を机にドンと置いて口を開いた。

「尾獣となると……俺とマダラ、二人で行くのがベストだな！扉間は里を頼む。」

「いや、俺一人で充分だ。この万華鏡写輪眼があれば、尾獣くらい手懐けるのは容易だ。お前の出番は無い。お前は里で火影の役目をしている。」

マダラの発言に対し、うちは一族の上忍たちは頷くが、その他の一族の上忍たちは一層ざわつき始めた。

「いや、そうかもしれないが、九尾だったらどうする？他の尾獣に比べて相当な力ぞ？（こ

は二人で行くのが最善というものだ！念には念を入れるべきぞ！」

柱間は立ち上がり、マダラの方に身を乗り出してそう言った。その発言を受け、更に会議室はザワザワとやかましくなった。

「静かにしろ！」

それまで腕を組んで黙っていた扉間が騒ぐ上忍たちを一喝すると、ぴたりと静かになる。そして扉間が言葉を続ける。

「確かに兄者とマダラ二人で向かえば万全だろう。しかし、火影が里を空けるにはリスクがある。会談ならともかく、尾獣捕獲の為だと他里や他の犯罪集団に知られば、漁夫の利を狙う者が出てくる上に、木ノ葉の里の戦力が兄者とマダラ一極であると認識されてしまう。それではこの先、他里と交渉する際に不利になりかねん。ここは、俺とマダラ二人で行く。しかし、万が一犯罪集団の親玉である忍が尾獣を操れる能力としたら、マダラの瞳力だけではどうにもならないかもしれない。状況を見て、兄者の力が必要な場合は戻って来る。」

「何だと？俺一人の力じゃ無理だつて言うのかよオイ！」

マダラの言葉を無視して扉間が話を続ける。

「また、尾獣捕獲は俺とマダラ二人で遂行するが、お前たち上忍たちには、炭坑入り口を塞ぐ班、犯罪集団の食糧庫を開ける班、住民を結界内で保護する班に分かれて任務を

行つて貰う。まず炭坑の入り口を破壊して奴らを引き付け…」

「ちよ、ちよ、ちよ、たんま扉間！ 一気に言われても分らんぞお。それに俺はお前とマダラ二人で行く事をまだ認めるとは言つておらんし」

「反対なのか？」

「いや、反対ではないのだが、のう…」

「じゃあ黙つてろ。それに、ここに居る奴らは俺の話が解らんほど馬鹿じゃない」

そう言つて扉間が話を続けようとしたが、マダラが大声でそれを遮る。

「いや、てめえが黙れよ！ 俺もお前と二人で行く事を認めちやいねえぞ。」

「…。何、マダラ、お前の邪魔はしない。寧ろやりやすいよう俺が結界を張つてやる。そのほうが早いし村にも被害が…」

「必要ねえ!! てめえも『兄者』と一緒に里を守つてろ！ 今日の報告会議では尾獣確保の許可さえ貰えりやそれでいいのさ。尾獣捕獲は俺一人でやる。そして忍犯罪集団は俺の部下、うちは一族の上忍に始末させる。他の一族の上忍にやできやしねえーさ。」

マダラの発言に、再びうちは一族以外の上忍たちがざわつき始める。

「マダラ、確かにうちは一族の上忍は優秀だ。だが他の一族の得意な能力を借り、チームワークで事を運んだほうがいい。」

「それは、うちは一族に欠点があるっていう意味か、柱間？」

「そうは言っていない。だがどの一族にも不得意分野はあるものぞ。これまでの大戦とはちがうのだ。一族という縛りではなく、里という単位で考えてくれマダラ！」

「里という単位、か：フツ。取敢えず今日はこれ以上話し合っても無駄だな。オレに反対するなら代案を持ってこい。：帰るぞ。」

マダラは言い終わる前に立ち上がり、うちは一族の部下たちを連れて出口へ向かってゆく。

「マダラ！・・・おい待て！・・・ハア。」

柱間も立ち上がってマダラの背中に向かって叫んだが、マダラは振り向きもせずさつさと出て行ってしまい、それを見て柱間は大きな溜息を吐いて椅子に座りこうべを垂れた。

◆
ハアハアハアハア・・・

裸で仰向けになったマダラの右肩に、同じく裸の芙蓉が左手を回して抱き着つき覆いかぶさる。まだ芙蓉の息も上がっており、肩で息をしている。

ふと、マダラの眼が、自分の肩に回されている芙蓉の左肩に行く。

枕元の灯りに照らされ、そこに在る傷跡がくつきりと浮かび上がっていた。

その傷跡は、マダラと芙蓉が出逢った日に出来たものである。

瀕死の芙蓉をマダラが助けた。しかし、マダラの医療忍術でもクナイが貫通した深い傷の跡は完全に消えなかったのだ。

マダラは芙蓉の下敷きになっていた左手を出して、その傷跡に手を伸ばした。そしてその傷跡を撫でながら芙蓉に問う。

「…芙蓉。お前、扉間のこと、いまも憎んでいるか？」

「えっ！……いいえ。もう、憎んではいません。」

芙蓉はそう答えると、マダラの胸に顔を埋める。

「何故だ？」

その問いに、芙蓉はゆっくりと顔を上げると、マダラと眼を合わせた。そして芙蓉はどこか悲しそうに微笑みながら答える。

「扉間さまのことは正直今でも恐ろしいです。でも、扉間さまの謀が無ければ…扉間さまが私を消そうとしなければ、私はマダラさまとは出逢えなかったかもしれない。だから私、扉間さまには感謝しているんです。」

芙蓉はゆっくりとした口調で答えると、再びマダラの胸に顔を埋めた。

一方、マダラは天井を仰ぎ、揺れる明かりを見つめて言う。

「だが扉間はどうだろうな。お前のことを今も恨んでいるんじゃないのか？」

「それは…おそらく大丈夫だと思います。少し前にお会いした時、私に謝ってくれたん

です。だから……」

「おい、どこで会ったんだ！女学校か？まさか会いに行つたんじゃないやねえだろうな」

芙蓉の左肩を握るマダラの手に力がこもる。芙蓉はその感覚が恐ろしくなり心拍数が上がる。しかし、なんとか冷静に答える。

「違います。夏の初め、女学校の帰りに偶然、ノウゼンカズラが咲いているあの坂の角でぶつかりそうになって……それで、その時『謝罪してもしきれない事をした』って……謝ってくれたんです。その時、私も扉間さまに、もう恨んでいない事、扉間さまのお陰でマダラさまに出逢えて良かったと伝えました。だからもう……」

マダラは芙蓉の左肩をグイッと胸に抱き寄せ、芙蓉の顔を覗き込むようにして言う。

「何故それを俺に言わなかった？」

「そ、それは……なんだか言い難くて……ごめんなさい」

「芙蓉、俺は扉間の謀など無くて、俺たちはこうなつていたと確信している。俺たちの出逢いは扉間のお陰じゃあ無い……イズナの、弟の導きだからな……だからこそ、お前を殺そうとしたあいつが俺は許せない。イズナを殺された恨みもある。……扉間は卑劣な奴だ。謝罪の言葉も本心じゃねえかもしれん」

芙蓉はマダラの話の聞きながら途中で顔を上げ、心配そうに顔を歪めてマダラの顔を見た。その眼は動揺で泳いでいる。

「私の事はもういいんです！お願い…変な事考えないで…もう二人で仲良く、静かに暮らしましょう…ね？お願い…」

「…ああ。そうだな。」

目に涙を浮かべて懇願している芙蓉の顔を撫でながら、マダラは目を細めて優しく微笑んでみせた。

芙蓉もその笑顔を見てホッと胸を撫で下ろし、そっとマダラに口づけをした。

◆
翌日。

再び昨日の会議の続きが開かれる事になった。

会議が始まる一時間ほど前、マダラは火影室に柱間と扉間、三人で居た。

「会議が始まる前に言つとききたい事がある。」

「なんぞ？マダラ。」

マダラは柱間では無く、扉間の方に顔を向ける。窓の外を見ていた扉間がその視線に気づいて何度か瞬きをした。そしてマダラは扉間と目を合わせたまま、扉間に向かって言う。

「一緒に来てくれ、扉間。」

「どういう心境の変化だ？」

扉間は驚きも動揺もせず、腕を組み直しながらマダラに問うた。

「感知能力と速さでお前の右に出る者は居ない。残念ながらうちは一族の中にもな……ここはやはり柱間の言う通り、互いの得意な能力を活かしつつ任務を行う方がベストだと思つてな。昨日は少々意地を張つてしまった。悪かつたな。」

すると柱間が火影席から立ち上がり、扉間とマダラの間に出て来て、二人を交互に見ながら言う。

「マダラ！俺は絶対にお前なら扉間と手を組むと言つてくれると信じておつたぞ！流石、男の中の男！うちはマダラぞ！ガハハハハ！良かった良かった!!」

はしゃぐ柱間を無視して、扉間がマダラに向かつて問う。

「じゃあ、昨日俺が言いかけた計画で良いつて事か？それとも、忍犯罪集団の方はお前たちうちは一族だけでやるつもりか？」

「いや、そこもお前の考える計画で構わない。うちは一族の上忍も入れ、このあとの会議で班割をしよう。」

「ああ。解つた……俺は先に会議室に行つてゐるぞ。」

そう言うのと扉間はひとり、先に火影室を出て行つてしまった。

「マダラ、扉間はお前と負けず劣らず、意見を曲げない奴だ。苦勞するかもしれんがよろしく頼む。」

「ああ。私情は挟まないさ。重要な任務だからな。」

「うむ…では俺は、里で待機しておる事にしようぞ！わははは」

“私情” という言葉に、柱間は思わず内心僅かに動揺したが、それを隠す様に笑って見せた。

つづく

マダラと扉間の共闘（2）　　〽本当の敵は・・・

まだ八月だというのに肌寒い気温で、野分の様な強風が吹き荒れている。

雨は降っていないものの、鉛色の重苦しい雲が太陽をしっかりと隠しており、昼前とは思えない暗さである。

ここはマダラが調査時に術で造っておいた横穴の中。

マダラと扉間、そして二人の部下の上忍と中忍から選ばれた先鋭たちで結成されたスリーマンセル×五班の十五人がマダラの描いた地図を覗き込んでいる。

「ここから北東に二キロ先が三隅村、北西に六キロ先辺りが尾獣の居るであろう場所だ。手順は何度も確認した通りだ。まずは第一班が炭坑を破壊しそれを伝書鷹で全班に知らせる。二班から五班までがそれを合図に第一弾の任務を開始し、完了したら五班が俺たちに向かって伝書鷹を飛ばす。：何か質問は？」

マダラが言い終わると一人が左手を軽く上げ、発言する。

「あの：敵の親玉の女三人が我々の力でも敵わないようなら即撤退」というのは本当にそれで良いのでしょうか？やはり、誰かマダラ様と扉間様に知らせに行くほうが：」

「それも何度も言ったはずだ。尾獣の捕獲・封印にお前たちが来るのは邪魔だ。」

マダラが答えると、扉間もそれに言葉を付け加える。

「敵との戦いを長引かしても、俺たちの所へ知らせに来ても、ただ犠牲者を増やすだけになる。一刻も早く里に帰り兄者に報告をして作戦を立て直すんだ。いいな。」

『ハイ！』

部下たち全員が返事をした。

全員で横穴を出るとマダラと扉間、そして十五人で向かい合う。

「あれこれ考えず自分の任務だけに集中しろ。」

『ハイ！』

十五人全員がマダラの言葉に返事をする、今度は扉間の言葉を待つように全員が扉間の顔を見る。

扉間は特に何も言う気は無かったのだが、その視線に応える様に、ひとつ咳払いをして口を開く。

「貴様ら、頼んだぞ」

『ハイ！！』

「では、散！」

部下たちは一斉にその場から姿を消した。

二人きりになったマダラと扉間は、暫く黙って前を向いたままでいた。

するとマダラが先に背を向ける。

「こんな所で突っ立って待っているつもりか？俺は中に入ってるぞ。」

「…ああ。俺は暫くここで、部下たちの動きを感知する。」

「フツ…お前、自分の部下が信じられないのか？」

「違う。貴様は撤収しろと言うが、実際に敵の親玉が強敵なら、逃げるどころか全滅する可能性もある。ならば俺たちが行って先にその敵を倒すべきだ。我々木ノ葉の里側の優秀な人材を犠牲にしてまで、あの小さな炭鉱の村を助ける重要性は低い。新たな取引先を探せばいいだけだ。」

「俺は行かん。尾獣捕獲を最優先にする。行きたいならお前ひとりで行け。尾獣が完全復活すれば木ノ葉にも被害が及ぶぞ？部下十五人の比ではない犠牲が出る。」

「…そうか。解った。」

「…ま、尾獣の封印なんて俺に取っっちゃ朝飯前だ。直ぐに終わらせて助っ人に行つてやつてもいいけどな。寧ろその展開の方が良いんじゃないか？フン…」

そう言うともダラは横穴の中へと向かって歩いて行ってしまった。

「……………」

扉間は顔だけマダラの方に向け、その足音が小さくなるのを黙って聞いていた。

カアツ カツカツカツ。カアツ カツカツカツ。

伝書鷹が上空からマダラと扉間に向かって、部下たちの第一弾任務遂行を知らせた。「フン。お前の心配も杞憂に終わったようだな。」

「ああ・・・行くか。」

「せいぜい俺の足を引つ張んなよ、扉間。」

二人は同時に飛び上がり、北西に向かって走り始めた。

深い森。

二人は大木の枝から枝へと飛び移りながら無言で走つてゆく。

扉間は右斜め前を走るマダラの背中に、ふと目線を遣る。

・・・マダラは毎日芙蓉と：今この時も、芙蓉はマダラの帰りを・・・

「この森を抜けたら作戦開始だ。手筈は解つてるよな？」

扉間の視線に気づいたのかどうかは分からないが、マダラは扉間へと振り返つて言った。

「ああ。一度聞けば理解できている。心配するな。」

扉間はマダラと眼を合わすこと無く、そう答えた。

尾獣の居るであろう場所へは、ここから約二キロ。

マダラと扉間は冷静な頭と共に、僅かの緊張を抱きながら走り続けた。

ズサツ!!

二人が同時に森から飛び出し、目の前の草原へと着地した。

『!?』

二人は身構える。

「あら、なかなかイイ男じゃない。ねえ?青藤(せいとう)、青柳(せいりゅう)?」

「本当ね、青蘭(せいらん)姉さま。左の髪の長い男なんて、青柳の好みじゃない?でもなんだかとても野蛮そうだわ。」

「うくん、顔はまあまあだけどヤル事が姑息!こういう男見ると、私イジメたくなっちゃう〜」

マダラと扉間の目の前の空中に、突然、三人の青い髪の毛をした美女が現れた。

「…親玉がこつちに現れたか…俺たちの動きに気付けるとは、やるじゃないか。だがこれも想定内…扉間、チャクラからしてもやはり大した奴らじゃ無い。第一、女だしな…さつさと片づけるぞ!」

「ああ。まずは…」

「あーっはははははっ!」

二人の会話を、ストレートの髪の毛が腰まである長女・青蘭が大笑いして遮った。そして続ける。

「この世で一番強い生き物は何か、知ってるう〜？」

『かわいい女！』

ショートカットの次女・青藤とツインテールの三女・青柳が二人同時に背中を見せ、声を揃えて答えた。

二人の背中には「KAWAII？」と書いてある。

『……………』

マダラと扉間は、眉毛をびくつかせたまま言葉が出ない。

「行くわよ二人共！」

青蘭の声にマダラと扉間が我に帰り、同時に地を蹴りその場から姿を消す。

「あら？三人の中で私が一番好きなの？嬉しいわあ？」

マダラと扉間に挟まれた長女・青蘭は、焦ることなく両頬に手を遣り、首をかしげて微笑んでいる。

「この毒婦が!!」

マダラは「神器・うちは」の鎌を、思い切り青蘭に向かって振り下ろした。扉間も同時に青蘭に向かって刀を振り下ろす。

ガアンツ!!!・・・ズジャヤツ!!!

『…何?』

青蘭は二人の攻撃を両腕の服の袖で防ぎ、マダラと扉間の鎌と刀はその勢いで跳ね返され、二人は地面に着地した。

「今のは何だ?チャクラの変化は感じなかった…何かの法具か?」

扉間が、空中の三人を睨みながら落ち着いた声で言った。

「ガードが堅い女ですってか…フン」

マダラも三人を睨みつつ、口角を上げて言った。

「私たちのこの服、素敵でしょ?『返照布帛』っていう布で出来てて、野蛮な物理攻撃ならすべて跳ね返してくれるのよ。難点は、身体のラインがハッキリ出ちゃうことだけ?」

青蘭はそう言って体をくねらせて見せた。そして妹二人も言葉を続ける。

「ところでアンタ達ふたり、女難の相が出てるわよ」「特にそっちの髪の毛の長い方!」

そう言う二人は青蘭の前に出てきて並び、構える。

「混元銅鈴!!」

最初に仕掛けてきたのは三女・青柳だった。

両手に持った青銅の鐘を振ると、カラーン・カラーンときほど大きくもない音が鳴る。

しかし、その音の振動は津波の様にマダラと扉間に襲いかかって来た。

マダラの鎌、扉間の刀が振動し、それを握っている手がジンジンと震えたかと思つたとたん、鼓膜に強烈な痛みが走り、二人は咄嗟に武器を捨て、口を開き、耳を塞いだ。（※鼓膜破裂を防ぐ為）

「ふふ。驚いて開いた口が塞がらない？次は私の番よ。混元銀鏡!!」

続いて次女・青藤が丸い銀製の鏡を胸元に両手で構えた。すると、太陽は分厚い雲に隠れ辺りは薄暗いにも関わらず、あらゆる方向から光の玉が線になつてその鏡に集まつてゆく。そしてその鏡はギラつと光ると、マダラと扉間に向かつてまばゆい光線を放つた。

マダラと扉間は目を閉じると前転し、その光線を避けた。

しかし目を開けると、目の前に横断幕の様に光が広がっており、再び二人は眩しきで目を閉じてしまった。

「黄河陣!!」

長女・青蘭の声が響いたと同時に、マダラと扉間は目を開けた。

「・・・・ハ、ハハハハ」

「どうやら相手の作った異空間に閉じ込められちゃったようだな」

マダラと扉間は気が付くと、小さな丸テーブルに着き、小さな椅子に座って二人で向かい合っていた。

二人は辺りを見回す。

そこはピンクを基調とした可愛らしい裝飾が施された洋室で、ウサギや熊の縫いぐるみがいくつも置いて在り、フリルの付いたクッションが並んだソファ、サイドテーブルにはティーセットが置かれ、反対には白い鏡台も在る。

しかし、これだけ物が在るのに、その部屋はとても小さい。

二人が着いている丸テーブルも直径60センチ程と小さく、椅子も子供用だ。

すると、頭上から声がした。

「おーい、おーい！お二人共ここっちここっち〜！」

『！！』

さつきまで目の前に居た三姉妹が、天井から顔を覗かせ、こちらに手を振っている。

「で、でかいな……」

「いや、俺たちが小さいのか？」

実は、マダラと扉間、二人は人形遊びの人形ほどの大きさ（約20cm）になっている。

「あはは！可愛い。握り潰せちゃいそうだよ〜」

「青柳、お人形は優しく扱わないとダメよ。いくら男でもね。ねえ？青蘭姉さま？」

「そうね青藤。…お二人共、ここで一生お人形として私たちと遊び続けるか、それとも降参して三隅村から手を引くか、どちらがいい？選ばせてあげるわ」

青蘭は冷たくも美しい笑顔で、マダラと扉間を交互に見つめながら問うた。

「人形かあ…そりや苦痛だな。だが俺にとつちや今、この男とこの距離で向かい合つて
る方が苦痛なんだがなあ」

「貴様！それは俺も同じだつ！…で、どちらも断ると言つたら…？」

「このお部屋から出て、灰になってお空に消えて貰います？」

「なあ。お前ら三人、こうやって顔見ると、すげえいい女だな！俺はお前らの人形になら、なつてもいいぜ？」

その言葉に、三姉妹は目を見開いてマダラの顔を見たかと思うと、急に恥じらつてもじもじとし、三人でヒソヒソと話し始めた。

「マダラ！何言つてる！！」

扉間がマダラに怒鳴つたが、マダラは写輪眼を浮かべ、三姉妹を見てニヤついている。

「じゃくあく、あなたには“大きなお人形”になつて遊んでもらおうかしら？」

「いいなあ。それ」

三姉妹は笑いを堪えるような、何かを期待するかのようないやらしい笑顔でマダラを

見つめている。

「俺はこんな奴らの人形にされるなんて御免だ。」

「俺もに決まってんだろ。」

マダラと扉間の目の前の草原には、幸せそうな笑顔で眠っている三姉妹が寝転がっている。

「こいつらが幻術と空間忍術を組み合わせた術を使ってくれたお陰で、逆に俺の幻術をかけ、万華鏡写輪眼でカンタンに脱出することが出来たぜ。あ、お前も出れてたのか？」
「あれくらい空間忍術くらい直ぐに術式は解ける。貴様こそ、女と思つて手を抜き過ぎだ。物理攻撃が効かない法具と分かった時点で須佐能乎を使えば良かっただろ！」

「五月蠅い。そのままあの部屋に一生閉じこめられておけばいいものを……」

「貴様やはり俺を……」

「本当の敵は無能な身内、なんて言うしな。あの程度の術を己で破れないなら、俺の足手纏いつてことだ……さあ尾獣の所へ急ぐぞ。さっさと感知を始めろ」

「まったく貴様は減らず口だな……言われなくてもする！」

扉間はしゃがんで人差し指と中指の二本を地面に着けると、尾獣の正確な位置を感知し始めた。

……このまま終わると思うなよ……

二人は心の中で同じ事を呟いた。

つづく

マダラと扉間の共闘（完）　　く交差する殺意

「何て邪悪なチャクラだ……しかもまだ覚醒前でこの強さ……やはり九尾の可能性が高いな……」

そう言つて、扉間が目の間にそびえ立つ大きな岩の壁を見つめて息を飲む。

「ああ。その可能性が高いだろうな。まあ何にせよさつさと捕獲してやるぜ。」

マダラは腕を組み、不敵な笑みを浮かべている。

「手筈通り、これから俺がこの山全体を囲む結界を張る。そのあとは貴様に任せろが、この岩をどうやって砕く？ 派手に砕けば尾獣が暴れ出し、俺の結界と言えども長くは持たないかもしれない。どういう方法でやるんだ？」

「“火遁・灰塵隠れの術”を使う。これは印を結ぶ必要が無い上に、岩と言えども灰に変える。その高熱で尾獣を攻撃するだけではなく、灰で目をくくれます。それが出来る。だが結界内も高温になるし俺たちの視野まで無くなるから、そこでお前の出番だ。水遁で俺

とお前、そして尾獣のラインだけをクリアにしてくれ。」

「……いい案だな。了解した。では早速封印を始めるぞ。」

扉間は飛び上がり、マダラの後ろ10mほどの所へ着地すると、その場で印を結ぶ。

「結界・封不祥陣!!」

ズズズズズズ……

透明だが表面にパチパチと電気を帯びた結界の壁が、尾獣が居る箇所を中心に半径50mほどの円筒形が空へ伸びていく。そして上空50m辺りで結合し天井を作った。

扉間とマダラはその結界の中に居る。扉間も結界内に居るのは勿論、万が一の時にマダラをサポートする為である。

「火遁・灰塵隠れの術!!」

結界が完成したのを確認すると、マダラは印を結ぶこと無く、術を発動した。

バチバチ!ボオオ!!

瞬時に勢いよく辺りの木や草が燃え上がったが、余りの高温で直ぐに燃える音は消えてしまった。そして遂に、岩も灰と塵に変わっていった。

それを確認すると扉間も術を発動させる。

「水遁・水衝波!!」

扉間は口から水を吹き出した。

その水は尾獣の居る場所まで一直線に伸びてゆく。水が通って行った後は灰と水が蒸発して二人の目の前をクリアになる。

『!!』

遂に、二人の目の前に尾獣の姿が現れた。

そして、そこに現れた尾獣は、九本の尾をもつ「九尾」だった。

「・・・グルウウウウウウ・・・誰だ・・・」

「よう。バケモノ」

瞬足で九尾の目の前に移動したマダラは、万華鏡写輪眼が浮かんだ目で九尾に声を掛けた。

「……!!……」

すると、マダラと目が合った九尾の動きがピタリと止まる。

そして九尾の目にも、同じく万華鏡写輪眼が浮かび上がり、そのまま瞼を閉じてその場にうずくまってしまった。

「…本当に写輪眼だけで九尾の動きを止めるとは!…マダラの瞳術はどこまでの力なんだ!!」

柱間と対等に闘える唯一の忍とも言えるマダラなら、一尾から九尾まで、どの尾獣であろうと捕獲する事は可能だと、扉間も確信はしていた。

しかし流石に九尾相手とあつてはマダラも少々手こずるだろうという予想に反し、マダラはあっさりりと九尾の動きを封じてしまい、扉間は驚いた。

「扉間、こいつはもう動けん。これから俺の作った異空間へ仮封印する。もう結界を解いても構わんぞ。」

「しかし……ああ。解つた。」

まだ封印前とあり、扉間は結界を解く事に少々戸惑つたが、マダラの幻術により九尾のチャクラの荒々しさは消えており、この後の行動を考えて結界を解くことにした。

……親玉三人は潰したが、この後再び忍集団の手下との戦闘が起こる可能性もある。それに……

扉間は印を結び、結界を解除した。

マダラは、扉間が結界を解いたと同時に、九尾を異空間に仮封印をする為に印を結び始めた。

「子・丑・酉・酉・丑……」

仮封印とはいえど、封印術の印は複雑である。マダラは集中し、慎重に一つ一つ印を結んでゆく。

扉間は、そのマダラの背中を、ジッと見つめた。

……今なら……

扉間はぐつと眉間に力を入れると、マダラの背中を睨みつけ、腰にさしている刀の柄をそうつと握った。

そして静かに深呼吸をした。

刀を握る右手に、徐々に力がこもってゆく。

しかし――。

『本当です！扉間さまを責めないで！！喧嘩、しないで…』

一瞬。

あの夏の日、柱間と自分の間で泣き出す芙蓉の姿が蘇った。

「終わったぞ」

気付けば目の前のマダラは九尾の仮封印を終え、扉間に振り向いて告げていた。

「ああ」

マダラは涼しい顔をしてこちらに歩いて来る。

扉間も何事も無かった様に腰に手を当て、先ほどまで九尾が居た場所を眺めた。

チラツ。

扉間の横をすれ違う瞬間、マダラは横目で一瞬だけ扉間の眼を見たが、また前を向き、先にもと来た道を歩き出す。そして、背中で扉間に向かって言う。

「ほら、さっさと三隅村へ向かうぞ」

「そうだな…急ごう」

そう返事をする、扉間もマダラの後ろを歩き始め、二人揃ってその場から姿を消した。



ザッザッザッザッザッザッザッザッザッザッ！！

草原を走っていたマダラと扉間は足を止めた。

九尾を封印したことで天候が回復し、強風は止み、空は晴れ、青い空に眩しい太陽が輝いている。

しかし、目の前に邪悪なチャクラを感じる。

「このチャクラは…!!」

「君たちだね。僕の超絶可愛い妹たちを弄んだのは…うちはマダラ、そして千手扉間！」

二人の目の前に突然、マダラたちと同じ年くらいの青年が現れた。

その姿は、派手な金髪に青いビロードで仕立てた燕尾服に、白いブーツカットパンツを履き、腰に鞭を携えている。ちなみに、声はやけに良く通る“ええ声”である…。

「…また変なのが湧いてきた…」

扉間は遠い目をして肩を落とした。

「もしかして、お前が犯罪集団の本当の頭か？」

マダラは腰から刀を抜き、男に向けてそう訊いた。

「僕の名は、燕尾！美しきダークサイドプリンス☆そして美しき青蘭・青藤・青柳三姉妹の兄さー！」

「燕尾が燕尾服……って、そのままかつ……てかやつぱ兄妹か！」

「ぶっ……美しき、プリンス……自分で言うかよクククッ」

扉間がツツコみ、マダラは顔を背けて笑った。

「ドラゴン・キャッチ・ウィップ!!」

ビシイイイインンン!!!

『!!』

燕尾は腰に携えていた鞭を握って振うと、鞭は長く伸び、マダラと扉間に勢いよく襲いかかってきた。二人は互いに左右に飛び、何とかそれを避ける。

「君たち！初対面の人間に対して失敬だな。マナーを知らない輩には、こちらもそれ相應の対応をさせて貰うよ！」

「うっせえ！悪党に対して失敬もマナーもあるかつ！」

「貴様が妹たちを使って三隅村を支配していたのか？答えろ！」

マダラと扉間、二人が燕尾を10mほど先の両側から挟み、叫んだ。

しかし燕尾は焦る様子は無く、胸元にさしていた赤い薔薇を手に取り顔に近づけ、愛おしそうに目を細める。

「すべては超絶可愛い妹たちの為さ！妹たちに一生エレガントでビューティフルな暮らしをさせる為、僕が愚民どもに奉仕させてやっているのさ。支配なんて人聞きが悪い：超絶可愛い妹たちに奉仕できるんだ。愚民どももさぞ幸せだろう！あはははは！」

燕尾は天に両手を広げて笑った。そして手に持った薔薇を飛ばして、術を発動する。

「ラブリールーム・黄河陣!!」

そう叫ぶと、燕尾の頭上に不透明なピンク色の直方体の空間が現れた。

「あれはさっきの異空間忍術！」二度も同じ手に引つかかるか！」

扉間とマダラがそう言つて身構えると、不透明な空間はだんだんと鮮明になり、その空間の中に先ほどの三姉妹の姿が現れた。

「妹たちよ、お前たちを弄んだこの二人を殺してあげるから、そこでしつかり見ていなさい」

すると、燕尾に対して三姉妹が声を揃えて叫ぶ。

『止めてお兄様!! “マララさま” は私のフィアンセなのよ!』

「ま、マララ?」

扉間が苦笑しながらマダラの方を見た。

「幻術の中だったし適当に刷込んで、写輪眼で記憶を書き換えといた」
マダラはケロリとした顔で答える。

「な、なぜだ！幻術は解いたはずなのに…お前たち！しつかりしないか！こいつらは野蛮なオオカミ、我々の敵なんだよ！」

「青藤、青柳、マララさまは長女の私と結婚するのよ！」

「いいえ、私と結婚するって言ってたわ！」「違うよ私と結婚するんだよーっ!!」

言い合いをしていた三姉妹はついに、掴み合いのケンカを始めてしまった。

「……………」

スウウ——…

三姉妹が居る黄河陣は、三人の姿と共に消えた。

「ゴ、ゴホン！…で、私の役目は妹たちの邪魔をし、狙う敵を薙ぎ払う事…でも、妹たちには最低限自己防衛の術を教えて来たんだけどね…君たち、なかなかやるじゃないか。久しぶりに楽しめそうだよ。フツツ！ハハハ！」

「あ、こいつ誤魔化しやがった」「ああ、完全に無かった事にしたな」

マダラと扉間が呆れた顔をしていると、燕尾は空中に飛び上がると同時に鞭を振ってマダラと扉間の足をすくおうとした。しかし二人は素早くそれを避けて姿を消す。

「須佐能乎!!」

最初に燕尾に仕掛けたのはマダラだった。半透明の巨人が剣を燕尾に振り下ろす。

ガシイン!!!

燕尾は空間から取り出した2 m近程はある大きな銀の鉞（なた）で、更に大きな5 mはあろうかという巨人の剣を受け止めた。

「須佐能乎の剣を武器一つで受け止めやがるとは…やるな」

「君、とても禍々しいチャクラをしているね。素晴らしい…」

そう言うのと燕尾は剣と交わっている鉞を思い切り振り回した。

ザシユツ!!! ドズサツ!!

巨人の剣は真つ二つに斬れ、こぼれた刃は勢いよく地面に突き刺さった。それとほぼ同時に燕尾も地面に着地する。マダラは上空からそれを見て悔しがる。

「くそつ。須佐能乎の剣を斬りやがった!」

「飛雷神斬り!!」

「!!」

今度は扉間が刀で燕尾の背後から切りつけた。燕尾は驚いた顔を見せる。

ギシインン!!!

しかし、燕尾は先ほど巨人の剣を斬った鉞とは別、もう一本の鉞を空間から取り出して扉間の刀を受け止めた。

扉間は無言で刀を離し、その場から姿を消す。

ガツシインン!!!

消えたと思つた扉間は、今度は燕尾の頭上に現れ再び飛雷神斬りで切りつけたが、燕尾は二本の鉈をクロスさせてそれを防いだ。

「ワ〜オ☆速いねえ、君!」

しかし、既に燕尾の目の前には扉間の姿は無い。

「火遁・豪火滅却!!」

マダラが燕尾の目の前に現れ、口から業火を吹き付けた。

燕尾は後ろの空中に飛び上がってそれを避けると、二本の鉈を合体させハサミにしてジヨキツと空を切った。

「金蛟剪!!」

すると交差している二本の鉈から七色の大きな龍が現れ、猛スピードでマダラの放った炎に向かってゆく。そして、龍は口を開けて炎に突っ込むと、全ての炎を食べてしまった。そのままの勢いでマダラの頭から食らいつく。

「うちは返し!!」

マダラは神器うちはを盾にし、その龍を逆に跳ね返そうとした。しかし、龍の勢いの方が圧倒的に勝っており、マダラは片膝を突いて後ろに押されてゆく。

「水遁・水龍弾の術!!」

扉間の放つたいくつもの龍のかたちをした水が七色の龍に向かって襲いかかり、水の龍たちが全員でそれに絡みつくると七色の龍は暴れながら小さくなってゆく。

マダラはその隙にうちはを振り、七色の龍を跳ね返した。するとその龍は、空中で水の龍と共に蒸発してしまった。

「あの龍も火遁の一種か…」

扉間がその様子を見て呟いた。

「?!」

空中に居た燕尾の目の前に扉間が現れた。後ろを見るともう一人、扉間が居る。

燕尾が鞭を構えようとしたがその瞬間、二人の扉間は消えた。と、思ったとたん、今度は燕尾の左右両側に現れ、同時に燕尾を殴りつける。

ドゴツツ!!

「ぐあっ!!」

燕尾は後ろに倒れ、地面に落ちてゆく。

「片をつけてやる」

マダラが刀を構えて地面から飛び上がり、落ちてくる燕尾に振りかぶる。しかし。

「ドラゴン・キャッチ・ウィップ!!」

燕尾は空中でぐるりとバツク転をすると鞭をマダラに向かつて振った。マダラは急いでその鞭を刀で振り払い、その場から姿を消す。

…ストン。

燕尾が地面に着地し、地上に居た扉間と対峙する。

「…この僕の、美しい顔に傷をつけるなんて…殺してやる!!」

鬼の形相の燕尾は、口から流れる血をハンカチで拭きながら扉間にズンズンと歩み寄る。

しかし扉間はそんな事は気にせず、印を結ぶ。

「水遁・水陣壁!!」

ズズズザザザ・・・

扉間と燕尾の間に分厚く巨大な水の壁が現れた。

「そんな水の壁で僕の攻撃を遮る事など出来ない!!くらえ、究極・金蛟剪!!」

燕尾が再び鉈を交差させると、頭が三つある先ほどよりも巨大な七色の龍が現れ、水陣壁に向かつて飛んで行く。

「水遁・水龍弾の術!!」

水陣壁の壁から水龍が現れ、燕尾の放った龍に向かつて飛んで行く。

「そんな水の龍じゃ、この究極体・レインボードラゴンに敵いは…なんだと!!」

「火遁・龍炎放歌の術!!」

よく見ると水の壁には丸く穴が開いており、そこからマダラの放った龍のかたちをした炎がいくつも飛び出し、扉間の放った水の龍と交差しながら七色の龍に向かって飛んで来るではないか。

ズバッシャアアアアア!!・・・シユウウウウ・・・

燕尾の七色の龍に、扉間の水の龍とマダラの炎の龍が激しくぶつかり、全ての龍がその場で蒸発して消えてしまった。

「くっ・・・僕の究極金蛟剪が・・・」

「火にはもつと強い火をつてな」

「火には水ではなく、高圧の水を」

水陣壁の向こうで二人が呟いた。

「いくぞ扉間!今度こそこれで片をつける!!」

「解っている!・・・起爆札・起爆!!そして、水遁・水龍咬爆!!」

バアアン!バアアアン!!

「ぐああああっ!!」

先ほど扉間が燕尾を殴った際、燕尾の両肩の裏に張り付けておいた起爆札が爆破した。それと同時に、燕尾が浮いている下の地面に水が湧き出し、そこからの二匹の水龍

が伸びて燕尾を包み込むと動きを封じた。

扉間の後ろにいるマダラは写輪眼を発動し水陣壁の向こうの燕尾の姿をしつかりと見据えつつ、須佐能乎を纏っている。

そして、一瞬、扉間の背中を見た。

ブンツツ!!!

須佐能乎の巨人が槍を投げた。

「!!」

バシヤアツ!!・・・グサツ!!!

「!!・・・ぐつ!!!・・・」

ドサアツ!!・・・

巨人が投げた槍は水陣壁を突き抜け、一直線に燕尾を射抜いた。

燕尾は地面に仰向けに落ち、動かない。即死だった。

それとほぼ同時に水陣壁は薄くなり、消えてしまった。

「・・・マダラ、貴様あつ!!」

マダラは、うずくまり左腕から血を流す扉間に歩み寄る。

「悪いな。俺としたことが、手元が狂っちゃった」

そう言うマダラの口角は僅かに上がっているが、目は笑っていない。

そして、少し顎を上げて、まるで扉間を見下している様にも見える。

「流石、速さにおいて右に出る者は居ないと言われる男だな…お前じゃなかったら避けられずに死んでた。お前と来て良かったぜ。フツ」

そう言うつて扉間の横を通り過ぎる。

しかし、三步ほど歩いた所で足を止め、再び口を開く。

「その傷だ。自分で回復できるだろうが無理はしないほうが良い。三隅村の事は俺に任せて、お前は先に『兄者』の所へ帰つてるといい。」

「…何故だ…なぜ殺さない!」

「お前に俺は殺せないさ…絶対にな。」

マダラはそう言う走りだし、直ぐに姿を消してしまった。

「……………くそおつ!!!」

扉間は、骨がむき出しになった左腕を回復術で処置しながら、怒りに身体を震わせた。



ガコオオオンン…

「ふうー。これで一安心だのう! 本当にご苦労だったな、マダラ!」

ここはマダラと扉間の帰還を待つ間、柱間が木ノ葉の里から少し離れた山の洞窟内に

木遁で作った尾獣封印用の施設。

そして、無事に今、マダラと柱間二人で九尾を封印した。

「いや、大したこたあ無かつたぜ。だが扉間には悪い事をした…すまない。」

「強力な敵と戦闘中だったのだろう？仕方ない。今はすっかり回復して、家でもう仕事しとるぞ！まあ見舞いにくらい来てやってれ！美味い酒を持ってな！わははは！」

「ああ。」

二人は並んで洞窟の出口へと歩いてゆく。

マダラは、にこやかな柱間の横顔を見た。

・・・これで九尾は、俺のものだ・・・



扉間が負った怪我は思ったよりも深く、不本意であつたがあのまま里に先に帰還した。

マダラと部下たちは三隅村の残党の逮捕、そして村の復興へ向けての準備をする為に、木ノ葉の里に帰還するのは五日後と聞かされた。

そして今朝マダラが帰還し、先ほど柱間と九尾の封印を終えたと連絡を受けていた。

今回の件でうちのスパイ部門に伝えるべき事があり、いま、扉間は書類が入った木箱を手に歩いている。

途中、思いもよらない場所に差し掛かってしまった。

そこは以前、芙蓉とぶつかりそうになったノウゼンカズラの咲く坂道だった。

『扉間さまには感謝しているんです』

想い出したくない言葉が否応なしに思い出され、扉間は立ち止まる。

「!?」

その気配に、扉間は急いで生垣に身を隠した。

「マダラさま！おかえりなさい!!」

「家で待っていていりゃいいのに」

「だって、少しでも早く会いたかったから…でも本部には行けないし…それに扉間さまがお怪我をして先に帰還されたって聞いて、マダラさまのことが心配で…」

「フンツ。これしきの任務で死ぬかよ。ほら早く家へ帰るぞ。腹が減った!」

「もおマダラさまったら…ハイハイ。ちゃんといなり寿司、作ってありますよ〜うふふっ」

「あつ、お前、また俺のこと小馬鹿にしたな!」

「してませんよ。フフフフ!」

「ほら、その笑いだよ!」

マダラと芙蓉は仲良く並んで角を曲がり、二人で住む家に帰って行った。

扉間は二人の姿が消えた坂に立ち、もう居ない二人の後ろ姿をみつめた。
「……あの時、殺しておけば良かった……」

おしまい

続・六花の森（1）序章～マダラの輪廻眼

「影に咲く花にしては、美しすぎるな」

「……？」

芙蓉はマダラの右腕を拭いている手を止め、マダラの顔を見て首を少し傾げると、不思議そうに微笑んだ。

「六花……お前は俺が蘇るまでの間、決して誰のものにもなるんじゃないぞ……」

寝台に横になっているマダラは、弱弱しい声だが、威圧を込めて芙蓉に向かって言った。

芙蓉はフツと少し笑って少し目を伏せると、再びマダラの右腕を優しく拭き始める。

「はい……承知しております」

芙蓉が六道仙人に会い、自分がヒミコの転生者であり、次の転生者をこの世に生まない為、そして世界の救世主になる「碧眼の少年」が現れ世界を救うまで生きることを決めた。

「六花」そして、マダラの下僕として……

そして、あれから十五年の月日が過ぎていた。

右腕を拭き終わると、芙蓉はもう一度お湯の入った桶でタオルを絞り、今度はマダラの首から胸にかけて拭き始める。

「…俺は影だ。だが、蘇ったその時は、この世界にはもう、光しなくなる…」
「私にとつてマダラ様は、今でも光ですよ？」

そう言つて、マダラの左脇を拭き始めると、マダラがその腕を握つてきた。芙蓉はマダラが不快だったかもしれないと思い、心配そうな表情でマダラの顔を見る。

「…俺にとつて今のお前は…眩しすぎる」

芙蓉の容姿は六道仙人の力により、今でも二十代のままである。

亜麻色の長い髪、琥珀色の輝く大きな瞳、雪の様な白く滑らかな肌、紅を差したかのような唇…

芙蓉は少し息まぶくなり、口を結んで俯いた。

マダラは握つた芙蓉の腕をぐいっと引つ張り、芙蓉を胸に抱き寄せた。芙蓉はマダラの胸に頬を埋めて目を閉じる。

マダラの体温、心臓の鼓動が芙蓉を安堵させ、しかしその反面、寂しくもさせた。

「……」

気付けは、マダラは眠りに入っていた。

芙蓉は寝たきりが続いているマダラの身体を拭き終わると、丁寧に服を着せ、布団を

掛けた。そして道具を片づけて立ち上がり、静かに部屋を出て行った。

「マダラもそろそろだね」

「……」

「木ノ葉の里に住めるから楽しみなんですよ？」

「……」

「ねえつてば六花！無視しないでよっ！」

その声に「六花」は洗濯物を畳む手を止める。そしてハア〜と大きな溜息を吐いてゼツの方を見る。

「別に楽しみじゃないわ。任務だし……それにゼツ、あなたも一緒だしね」

「言い方に棘があるよね〜。芙蓉じゃなくて六花のままの方が可愛かったなあ」

「この十五年、同じ事ばかり言うわね」

六花は畳み終わった洗濯物を抱えて立ち上がる。その左肩にぴよんとゼツが載った。

「でもホント、ようやくマダラの代役になりえる子が見つかって良かったよね〜」

ゼツは芙蓉（六花）の身体から覚醒した母・大筒木カグヤの魂と対面し、マダラが寿命を迎えたのち復活する迄のマダラの代役を、『うちは一族の中にマダラの血を色濃く受継ぐ男が産まれる……その男を役者として使え』と母から告げられていた。

マダラへは代役・兼・マダラを転生させる役は、うちは一族が良いのではないかと提案し、マダラもその案を飲んだ。（例えマダラが許否をしてもゼツによつて思考は変えられていたが）

そして母・カグヤの予言通り、三年前、木ノ葉の里のうちは一族、しかもマダラの血縁にあたる家系に当該の男児が生れたのだった。

それにより六花は、マダラの死後、その子を木ノ葉の里で影ながら見張り、写輪眼を開眼したところを誘拐し、マダラの代役として六花とゼツが教育・洗脳する計画になっている。

「でも、まだ幼い子供よ……」

「マダラが復活するまで、その子が六花のご主人様だね、あはははは」

「だったら何？」

「その子が大きくなつたらマダラとした事、その子ともするの？」

「調子に乗らないで。」

「おーこわつ。あはははは」

六花は右手でゼツを払い落とそうとしたが、ゼツはその手を除け、ぴよんと六花の頭の上に移つてまだ笑っている。六花は不機嫌な顔をして再び大きな溜め息を吐いた。

マダラの死期は確実に迫っている。

予定通りの事とはいえ、やはりマダラの死は辛い。

そして、たとえばマダラの為とはいえ、これから人ひとりの…いやこれからきつと多くの人の人生を変えてしまわなければならない事も辛かった。



「マダラ様！マダラ様!!」

「マダラ〜」

六花は寝台に横たわり朦朧としているマダラの右手を両手でしっかりと握り、必死に名前を呼び続ける。傍にはゼツも居て一緒にマダラを呼んでいる。

「…そんな…顔をする…な…」

「そーだよ六花。予定通りなんだからさあ。泣くだけ疲れるよ?」

「でもっ…!!」

六花は目に涙を浮かべ、唇を震わせている。

何年か分からない。長い間会えなくなる…そう考えると息苦しくて堪らなくなるのだ。

しかし六花はその感情を押さえて必死に、しかし優しく、マダラの手を甲をさすり続ける。

そして、ついにマダラは静かに目を閉じた。

「マダラ様っ!!」

「……」

「……………!!」

マダラは突然、両目をぱちりと大きく見開いた。

「マダラ…様?…そ、その目は?!」

今し方まで死の淵にあつたマダラは、眼を見開いたままバツと勢いよく上半身を起こした。

「ああ…やつとだ…今の寿命のうちに開眼できたぞ!!六花、鏡を持って来い!!」

「は、はいっ!!」

「…輪廻眼だ!!」

「これが…輪廻眼…」

「元気まで戻ったね、マダラ。寿命伸びたの?」

マダラはバサツと布団を除け、寝台から降りて部屋の出口へ向かおうとした。六花は焦つてマダラに近寄るとその脇を支える。

「ご無理をなさらないで下さい!」

「大丈夫だ。この眼を開眼できたら暫くの間は死なん。六花、外へ出るぞ。一緒に来い」

「は、はい…」

二人は部屋を出て行く。

しかし、ゼツはその二人の姿を後ろから静かに見つめていた。

・・・予定通りだよ。母さん・・・

マダラと六花は夜空を見上げる。

まるでこの日、この時を待っていたかのように、空には満月が浮かんでいた。

地面の草には白露が付いており、秋冷が更に冷たく感じる。

「これから封印石から口寄せをする。少し離れている。」

「はい・・・」

六花は少し戸惑いながらマダラの脇から身体を離すと、後ろに下がって行った。

パンツ！

マダラは勢いよく両手を合わせると、素早く印を結んでゆく。

六花は不安そうに胸の前で両手を握ってその様子を見つめている。

本当にマダラの言っていた“外道魔像”なるものを、あの夜空に浮かぶ月から口寄せできるのだろうか・・・

・・・ゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・

すると、足元から轟音が鳴り響き、地面が揺れ始めた。

轟音と揺れが収まると、マダラは再び地下のアジトへと急ぎ足で降りて行く。六花も急いでその後ろをついて行く。

「…成功だ。外道魔像を口寄せ出来たぞ！」

「!!」

二人の目の前には、禍々しい姿をした巨大な魔人が立っていた。

それを見た六花は、恐怖で思わずマダラの腕に抱き着く。

「心配するな。動きはせん。こいつはまだ、ただの抜け殻だ。」

「わくこれが外道魔像？マダラ、やったじゃん！」

するとゼツが現れ、ぴよんと六花の頭に載ってマダラに向かって言った。

「ゼツ、六花。シナリオの変更だ。まずは俺のこの輪廻眼を預けられる人物を見つけて。

そいつに“輪廻転生の術”を使わせて俺を復活させる。そして“うちはマダラ”を演

じさせるあの者が成長し、写輪眼を開眼し次第ここに連れて来るのだ。その間、俺は魔

像と繋がって生き続ける。」

「はっ、はい……！」

「うん、でも輪廻眼の所有に耐えうる素質じゃなきゃダメだよ。ってことは、マダラと

同じくこの外道魔像を口寄せできる能力の持ち主ってことかあ……」

「ということは、うちは一族？」

「いや、輪廻眼を開眼できたのは千手の、柱間の力を手に入れられたからだ。外道魔像を口寄せ出来たのも千手の能力の一つ…千手一族の血族を当たれ。」

「…畏まりました」「へーい」



ザアアアアアア——…

六花は黒いマントのフードを被り、雨の中、木の上からその家の中を覗いている。

家の中では母親が台所に立ち、目の前に居る六く七歳くらいの男児と白衣を着た父親がオモチャで一緒に遊んでいる光景をニコニコしながら眺めている。

幸せを絵にかいたような風景に、六花は目を細めた。

「やっと思つけたと思つたら、まだ子供だなんて…」

「何？可哀想とか思つてんの？」

「…」

「やっば君、〃六花〃のままの方が使えたのにね。いいよ、僕が行ってくるから。」

「駄目！…ううん。私も一緒に行くわ。」

「失敗しないでよお？」

「しないわ。絶対に…」

…あの子の両親、あの子の残りの人生の為にも…

夜中になり、家の灯りが消えるのを確認すると、六花は開錠術で玄関の鍵を開け、静かに中に入って行った。

廊下を歩き、先ほど木の上から覗いていた部屋の前に立つ。

静かに扉を開けると、母親、男児、父親が仲良く川の字になって眠っている。

六花は部屋に入ると、三人の頭元に行き、片膝を突いてしゃがんだ。そして、両親の頭にかざすと目を閉じる。

「……………これで、良しと。」

両親に幻術をかけた。これで朝まで決して目を覚ます事はない。

そして更に、夢の中で両親の記憶を書き換えた。

この子は生まれた時から、「この眼」だったと…。

「面倒くさい事するよねえ。親なんてきつさと殺しちゃえばいいじゃん」

「両親を殺されたこの子はどうなるの？ 一人で生きてはいけないわよ？」

「まあそうだけどさあ〜」

「さあ、眼の移植はゼツの仕事よ。お願い」

「うん。任せて」

「ごめんね…坊や…」

六花はスヤスヤと眠る男児の頭を優しく撫でた。男児の髪の毛は枕元の小さな明か

りでも分るほど赤毛で、そして柔らかかった。

六花はスツと立ち上がると、目線の先には額縁に入った写真が在った。

そのまま静かに写真に近寄り、目を凝らして眺めてみる。

そこには、目の前の親子三人が大きなケーキの前で仲良く寄り添い写っていた。

ケーキには『長門 七才 おめでとう』と書いてある。

六花は振り返ると、暫く親子三人を見つめた後、家から出て闇夜へと姿を消した。

◆

コツ、コツ、コツ、コツ・・・

ポチャン。

…コツ。

六花は天井から落ちた雫の音で足を止めた。そして、目の前にそびえ立つ巨大な植物を見上げる。

「・・・六花。帰って来たのなら直ぐに報告しに来ないか」

「はい…申し訳ありませんでした。マダラ様」

六花は再び歩き出し、巨大な植物の根元に座るマダラの元へと歩み寄り、マダラの足元に跪く。マダラは右手を伸ばし、六花の頬を撫でながら問う。

「あれから、長門は問題無さそうか？」

「はい。輪廻眼もすっかり身体に馴染み、健康な様子です」
「うむ……」

マダラは目を細め、手を六花の頬から唇へと移し、人差し指で上下の唇をなぞった。六花は唇の力を抜き少し口を開けると、ゆっくり瞬きをしながらマダラの顔を見つめる。

「俺の寿命が延びて、お前の自由もお預けだな……ガツカリしてるんだろ？」
「そんな事はありません。」

そう言うのと六花は自分の顔に触れているマダラの掌を握り、先ほどまで唇をなぞっていた人差し指を咥えてしゃぶった。

…チュパッ。

音を立てて指から口を離すと、立ち上がり、おもむろにマダラの首に手を回すと口づけをした。マダラは六花の腰を持ち、自分の太腿の上に座らせて口づけを続ける。暫くして、六花は唇を離すと、再びマダラの顔を見つめる。

「…今でも、マダラ様は私の光……この先も、ずっと……」

六花は目を細め、愛おしそうに、そして嬉しそうに微笑んだ。

そしてマダラも、フツと小さく笑った。

続・六花の森（2）　　うちはオビトの開眼

「姉ちゃん、どした？ 具合悪いのか？」

「あつ…うん、ちよつと足をくじいちゃったみたいで…」

「この先に診療所があるから、俺がおぶってつてやるよ！」

「いいえ、そこまでじゃないし！ 私、重いから…」

　　ゴグルをつけた元気のいい少年が話しかけてきた。

　　六花は足をさすり苦笑しながらも、その少年をじっくりと観察する。少年は、自分は忍だから大人の女一人くらい背負えるから任せとけと息巻いている。

　　…大きく変わったわね。オビト君…

　　六花はこの十年間、定期的に木ノ葉の里に訪れはオビトの成長を見澄まし、マダラに報告してきた。

　　まだまだ忍としては未熟だが、心根の優しい元気いっぱいの男の子に育っている。優しい性格はマダラに似ており…そして、どこかしら若い頃のマダラの面影もある気がしていた。

　　しかし今はもう、感慨に浸っている時では無い。

すると、正面から黄色い髪で青い瞳をした青年と、銀髪で顔半分をマスクで隠している少年、そして茶色いおかつば髪に大きな瞳の少女が歩いて来た。

「…大丈夫ですか？どうかされましたか？」

・・・青い、瞳の、男・・・

六花は、その青年の顔をじつと見つめた。

「足くじいちゃつたらしいぜ。今から俺が診療所に連れて行ってやろうと思つてたんだ。」

「オビト、お前また遅刻！先にミナト先生に知らせに来ればいいだろ？」

「まあまあカカシ、お姉さんを一人にするのは心配じゃん。ね、オビト？」

「ああ、そうだ！リンの言う通りだ!!」

三人の少年少女の言い合いをよそに、六花はまだ青年の顔をじいつと見つめていた。

「あ、ええつと、どこかで、お会いしましたっけ？…あはは」

ミナト先生と呼ばれている青年は、目の前の美女の熱い視線に耐えきれず、気まずそうな顔をして頭を掻いた。

「ミナト先生、それナンパの常套句だけ？」

オビトがニヤニヤしながらミナトを指さして言った。

「すみません…知人に似ていたもので…失礼しました」

六花は俯き、目線を外した。

「そ、そうでしたか…私たちが診療所までお連れします。どうぞ、私の背中に乗って下さい。」

「あつ、いえ…でも…」

「お姉さん、遠慮しないで下さい。今は戦争中でのこの辺も他里の忍が来ることがあるし、危ないから一緒に行きましょう。荷物は私が持ちます」

リンと呼ばれていた少女が腰を屈め、切り株の上に座って居る芙蓉の顔の高さに合わせてニコニコしながら手を差し出した。

「…あ、ありがとうございます。ではお言葉に甘えて…お願いします」

六花はまずリンに医療忍術で応急処置をしてもらい、ミナトの背中におぶさり、リンの代わりにオビトが荷物を持ってくれ、カカシがミナトの鞆を持ち、みんなで診療所に連れて行って貰うことにした。

…この男性が隊長、そしてあの「黄色い閃光」か…やはりかなりの実力者みたいね…あのマスクの子も上忍並みの力だわ…女の子は平均的な中忍レベルで医療忍術も得意なのね…オビト君は、やっぱりまだ写輪眼は開眼していない…

「では、私たちはここで。どうぞこの先の道中もお気を付けて。」

六花は診療室の診察台の上に座らされると、目の前に四人が並んで別れを告げた。

「あの、本当にありがとうございます！ございました！！これ、お礼です。大したものでは無いですけど、どうか受け取って下さい」

六花は鞆の中から急いで巾着を取り出すと、その中から純金で出来た米粒を四つ取り出し、それぞれに一粒ずつ手渡ししていった。

「これは金じゃないですか！こんな高価な物受け取れません。私たちは忍として当然の事をしたままでです。礼など必要ありません！」

ミナトが焦って六花にそれを返そうとしたが、六花がその手を押し返す。

「お守りです。それにこれは只のメツキなので安物です。私の故郷では金の米粒を持っていると飢えや病気、怪我から身を守られると言われていきます。戦争で戦っている忍の皆さんに私ができることはこれくらいだし…お願いです。皆さんのご無事を願う私の気持ちとして受け取って下さい。」

「わ、分りました…ではそのお気持ち有難く頂きます。みんな、ちゃんとお姉さんにお礼を言つて。」

『ありがとうございます！』

「こちらこそ…本当にありがとうございます。親切で優しい皆さんは、きつと立派な忍になれますね。頑張つて。」

『はい！』

オビト、リン、カカシは互いに顔を合わせてニコニコした。六花もその顔を見て一緒に微笑み、最後にミナトの顔を見てニコツと微笑んで見せると、顔を赤くしたミナトは頭を掻いていた。

「遠回りなやり方するよねえ。六花があの中のをオビトの前で殺しちゃえばいい話じゃん！あつという間に開眼するって」

「一緒に居たミナトという男性はかなりの実力者よ。私と互角かそれより上…無駄な戦闘はしたくないし、木ノ葉の里に目をつけられても厄介だわ」

「ホント言い訳だけは上手だよね」

「思考回路と顔だけは超単純よね」

六花は掌に載ったゼツを目の高さに持ち上げ、ゼツの顔を指さしながら嫌味を込めて言つてやった。そしてゼツを優しく地面に降ろすと、六花はその場に地図を広げる。

「これからミナトさんとあの子たちは別々に任務を行うわ。オビト君たちは地図のここ、神無毘橋の破壊を任されている。その時、リンちゃんを岩隠れの忍に攫わせるのよ」

「自分の手は汚さない…六花って実は卑怯だよな」

「何とでも言いなさい…オビト君の性格なら確実にリンちゃんを救出しに行くわ。それ

に、オビト君はリンちゃんに好意を持っている…岩隠れのとの戦闘の際、オビト君の写輪眼を開眼させてみせるわ」

「結局、リンが死ぬんじゃない」

「死なせはしない。岩隠れの忍には勿論、私が幻術をかけて操るに決まっているでしょ」

「まあたメンドクサイ事を…もうホント、いい加減にしてよおくハア」

「じゃあマダラ様の所に帰っていないさい。この計画を報告しても構わないわよ」

「マダラが自力で動けないからって強気なんだから…ハイハイ、じゃあ六花のお手並み拝見させて貰うよ。あ、開眼しなかったら僕がリンとカカシをオビトの目の前で殺すから、よろしくね。そしたら万華鏡写輪眼まで開眼できるだろうし一石二鳥じゃん。あはは」

「…」

六花は黙って立ち上がると、戦闘服に着替え始めた。



「…仲間を大切にしない奴は、それ以上のクズだ！どうせ同じクズなら、俺は掟を破る！

…それが正しい忍じゃないってんなら、忍なんてのはこの俺がぶっ潰してやる…!!」

…オビト君、かつこいい…

「…ちよつと、なに感動してんのさっ…早く行くよー」

「…わ、わかってるわよ…」

「やっと見つけた…俺にだってできる。待つてろよ、リン！よし行くぞ…」

「…オビト君、頑張つて！敵は後ろよ、後ろに気を付けて！…」

「…あのさ、こういうのを自作自演っていうんだよ？楽しい？…」

「…うるさいな。…えっ?!」

「…あっ?!」

ザシュツ…!!

「ぐあっ!…」

「か、カカシ!!お前どうして?!」

「ま、お前みたいな泣き虫忍者一人に任せておけないでしょ」

「…ねえ見て！カカシ君が来てくれたわ！私、カカシ君は絶対来てくれるって信じてた

！…」

「…いや、だから自分が幻術かけて操ってる奴と闘わせて何が楽しいのさ…」

「…行けー！カカシ！オビト！頑張れー!!…」

「…駄目だこりゃ…」

「オビト!!敵は後ろだ!!」

「!?」

「ぐあああつ！目がっ!!!」

「カカシ!!大丈夫か!?!」

「…あーあ、カカシがやられちゃったけど?六花のせいだよお?…」

「…あ、後で私が治療してあげるわ!…でも、これでオビト君の開眼が近づいたわ!あと少し、あと少しよ。頑張って、頑張るのよオビト!…」

「…あの言葉だけは、口先だけにしたくはないんだ!!…」

「…そこだ!!!」

グサツ!!!

「な、何故だつ!?!…迷彩隠れの術が見える筈はないのにつ…」

「…ここは、仲間は、俺が守る!!!」

「…やったあ!!遂に、遂にオビト君が写輪眼を開眼したわよっ!!!…」

「…うんうん、良かった、良かった…」

「…まったく。これ以上君の甘さに付き合ってもらえないんだよ。いい加減甘さが招く結果を知りな六花!…」

「オビト…お前、その目…」

「おう、これが写輪眼みてえだ。チャクラの動きが目に見える!」

「うつ・・・どうやら左目はもうダメみたいだ。リンから貰ったこれが有る・・・応急処置ならすぐ出来る。直ぐにリンを助けに行くぞ！」

「おう・・・」

「・・・まったく、どいつもこいつもガキ相手にだらしねえ・・・が、タダのガキじゃねえみてえだな。」

「一度手合わせしたがかなりの早業だ、オビト、気を付けろ！」

「おう！」

ガン！キイン！！カアン！ガンツ！ザザツ！ドシツ！・・・

ザシユツ！！・・・ドサツ！

「解！」

「・・・カカシ・・・オビト！」

「助けに来たぞ、リン！もう大丈夫だ！」

「・・・なるほど。良いコンビネーションだが所詮ガキだな。」

「・・・よし、これで終ね・・・！！って、なぜ！！あの忍にかけておいた幻術が解けてるの！！・・・」

「・・・違うよ。あれは僕がかけてる幻術だよ・・・」

「・・・ど、どうして！！・・・」

「・・・ほら、早くオビトを助けに行きな・・・六花・・・」

「…ゼツ、あなた!!…」

「今お前たちが居るのは敵の手の中だぜ…土遁・岩山崩し!!」

ドカンツ!! ガラガラガラガラ…

「ヤバイ!! 出口に走れ!!」

…ゼツの奴、オビト君以外を殺そうとして!! 許せないっ…

六花は急いで木から飛び降り、洞窟の入り口へと走った。しかし。

「…嘘…」

六花の目の前の洞窟は天井が崩落し、無数の大きな岩が積み上がり山になっていた。

急いで感知をし、中の三人の様子を確認する。

「!!…生きてる…まだ三人とも生きてる!!」

六花は膝から崩れ落ち、その場にへたり込んだ。

「それはどうかな? ターゲットが死にそうだけど?」

ゼツの声に六花が急いで顔を上げる。そして気配を消しつつ急いで岩山を登り、僅かな岩の隙間から下を覗き込んだ。

しかし、そこには、信じられない光景があった。

「ほくら見てごらん六花。君の甘さが招いた結果がこれだよ」

「!!…」

「・・・やめろ。いいんだカカシ・・・俺はもうダメみたいだ・・・体の右側はほとんど潰れちまつて・・・感覚すら・・・ねえ・・・」

「くそうっ!!!」

「・・・嫌っ・・・そんな・・・オビト、どうして!!!」

「・・・かはっ・・・」

「お、オビトっ!!!・・・」

「・・・ちくしょう!!!・・・ちくしょう!!!俺が最初からお前の言う通り、リンを助けに来てたらこんな事にはならなかったんだ!!!・・・」

「・・・う、嘘でしょ・・・ど、どうして・・・どうしてっ!!!・・・」

「フフツ・・・哀想だねえ。せつかく写輪眼を開眼したつて言うのに・・・それにこのままオビトが死んだら、代わりを探すのに何年かかるかな?マダラの計画はまた振り出しに戻るね・・・マダラ、超―怒るよ。オビトも無駄死にだしね。フフツ・・・」

「・・・ど、どうゆうつもり?!マダラ様を、分身のあなたが裏切るの?!・・・」

「勘違いしないで。君はマダラの下僕。即ち、僕の下僕なんだよ。いい加減、調子に乗り過ぎ、甘過ぎるんだよ六花は!」

「……………」

「助けて欲しい?助けて欲しいなら僕に『一生ゼツに服従するからオビトを助けて下さ

「い』ってお願いして?」

「こんな時に何をふざけているの! いい加減にして!」

「このままじゃ、〃全員〃、死んじやうよ? いいの?」

「…ゼツ、あなた本気!!…」

六花は目を泳がす。これが冗談ならいい。しかしゼツが本気ならば…

「さあ! どうするの!!」

「お…お願い…します…ゼツに…一生服従するから…助けて…下さい…」

「うんいいよ♪僕の愛する六花。その代わり、今の言葉絶対に忘れるんじゃないよ…」

六花は涙を浮かべ、怒りに身体を震わせながら、左肩に載るゼツを思い切り睨みつけた。

「…早く! 早くオビトを、みんなを助けてっ!!…」

「あーあ、六花が返事するのが遅かったから、なんか始まっちゃってるじゃん。助かるかなあこれ」

六花は急いで下を見る。

すると、リンがオビトの左目を摘出し、先ほどの怪我で失明してしまったカカシの左目に移植手術を行おうとしている所だった。

「…写輪眼がっ!!…」

「あらら。せつかく残つてた写輪眼がカカシに渡されちやうみただね。オビトの命は僕が助けてあげるよ。どうする？カカシを殺して取り戻す？ほら、早く決めて？」

「…ど、どうしよう…どうしよう…」

六花ならば、カカシを殺さずともオビトの左目を取り戻すことは容易だろう。

しかし、すっかり動揺して冷静な判断が下せる状態に無い六花は、それすら躊躇われ、決断できない。

「ハイ。タイムオーバー♪」

「!!」

六花は急いでその場を離れ、離れた木の茂みに身を隠した。

ドガアアアン!!…

岩を砕く音と共に、岩山の上にカカシが現れた。

近くに座つて居る、先ほどゼツに幻術をかけられた敵がそれに気づき、立ち上がる。カカシは背中に背負っている刀を抜くと、敵に向かって走つてゆく。

「…カカシ君…」

六花が立ち上がろうとした途端。

「六花。動くんじゃない。ここに居るんだ。」

「…どうして!!…」

「僕に一生服従するって約束したよね。なら黙って従うんだ。」

「っ……!!」

キーン！ガンツ！シュツ！カアン!!!ギシンツ!!

カカシと敵との戦いが続いている。

六花は顔をしかめ、唇を噛みしめて、ただカカシを信じて見ているしかない。

ここで動けば、オビトが、リンが、そして目の前のカカシが助からない。

グサアツ!!……ドシツ。

「あ、決着がついたみたい。あのカカシって子、やるね。まあ雑魚相手だけど。」

「ハア——……」

六花は大きく胸を撫で下ろした。しかし、我に返ってゼツを見る。

「オビト君は!!オビト君を早く助けて!!」

「大丈夫だって、もう手は打ってあるから。死にはしないよ。六花が僕と約束してくれ
たから、僕もちゃんと六花のお願いは叶えてあげる」

「……」

六花は半信半疑でゼツを見つめた。

「……ちよつと、ねえ！岩隠れの忍が大勢ここに向かってるわ！」

「焦らない、焦らない。」

そして、あっという間に岩隠れの増援が集まり、オビト、リン、カカシの居る岩山を取り囲んだ。

しかし、六花は居ても立っても居られない気持ちで手を握り締め、ただ目の前の光景を見つめているしかない。

「土遁・裂土転掌!!」

岩隠れの忍の術により、大地がひび割れ、目の前の岩山も崩れはじめた。

カカシは、岩の山の下を覗き込んで手を伸ばし、何とかリンを引き上げた。しかし、既に岩隠れの忍たちに包囲されている。

カカシはリンと手を繋ぎ、森の中へ消えてゆく。

「まさかこれもゼツの仕業なの☒」

「うるさい!!黙ってる!!」

「¹⁹!!」

ゼツの怒鳴り声に六花は驚き、左肩を見る。

「・・・ゼツ?・・・」

しかし、そこにはゼツの姿は無かった。

「・・・今だわ!・・・」

六花はカカシとリンの方へ走りだした。

しかし、ようやく二人の姿を確認できた途端…

「あっ！危ない!!」

ガシインン!!

『あなたは・・・!』

二人の声が揃った。

六花が飛び出した大木の上には、気を失ったカカシとリンが横たわり、そして、ミナトが立って居たのだ。

「アナタは右からの敵を、僕は左からのをやります。行きます!」

「はい!」

・・・

「やはり、アナタは忍だったんですね」

六花はミナトと二人、岩隠れの増援を全て片付けた。

そして今、夕映えに光る草原で、ミナトと向き合っている。

「気付いていらっしやったのですね…でももう、私は忍を引退しています。」

「この金色の米粒。これで僕の部下たちの位置を追跡していたんでしょ？目的は何ですか？」

「目的なんて…。私はただ、親切にしてくれた子供達を助けたかっただけです…。でも、オ

ビト君の事は助けられなくて…申し訳ありませんでした…」

「すみません。アナタの行動からはどうしても、その言葉を信じることは出来ません。今は戦争中ですし。申し訳ないですが、木ノ葉の里まで一緒に来て貰います」

「それは出来ません。私、急ぎますので…では」

ザッ！

後ろを向いた六花の目の前に、ミナトが立った。

「通して下さい。本当に私に目的なんてありません」

「ごめんなさい」

そう言つてミナトは六花の左手首を握つた。

「!!」

「これは僕の術のマーキングです。アナタがどこに居ても瞬身の術で追うことが出来ます」

・・・これは、扉間さまの術だわ!・・・

六花は愛おしそうにも悲しそうにも見える顔でミナトを見上げる。

夕陽に照らされたミナトの髪の毛の先が、一瞬、あの夏の日の扉間の髪に見えた。六花は思わず下を向く。

「このマーキングを外すためには里に来てもらう必要があります。」

「行くことは出来ません。」

「なら、どこまでも追うだけです。」

六花は下を向いたまま、フウーつと大きく息を吐いた。そして、ゆっくりと顔を上げる。

「・・・写輪眼?! アナタ、うちは一族なんですか?!」

ミナトを悲しそうに見つめる六花の眼は、写輪眼から万華鏡写輪眼へと変化してゆく。

ミナトは急いで目を閉じ、後ろに飛び退いた。

六花はそれを確認すると自分の左腕に付けられたマーキングをジッと強く見つめた。すると、マーキングはスツーツと音も無く消滅してしまった。

そして、その手首をミナトの方へ向けて言う。

「ミナトさん。あなたのマーキングは異空間へ飛ばしました…私はあなたと戦う気はありません。さようなら…」

そう言つて六花は姿を消した。

ミナトはマーキングを目の前で消されるといふ初めての出来事に驚き、暫く六花が居た場所を見つめて茫然としていた。

続・六花の森（3） ～対面～オビトとマダラ、六花とヒミ

コ

「そうか・・・六花が・・・」

「うん。もう『白ゼツ』も居るし、僕の分身の『黒ゼツ』も居るし、六花なんて必要ないんじゃない？これ以上感情に流されて失敗されても困るしさあ」

「うむ・・・」

マダラは頬杖を外すと、ゆっくりと前を見た。

マダラの目の前には、意識の無いオビトが横たわっている。

オビトは重症を負ったものの、マダラが培養した柱間細胞の人造体を潰れた右半身に移植し、命は助かった。

実はその前に、ゼツが分裂した自分の身体をオビトが挟まっている岩の間に入れて救命処置をしていたのだが…。

「あいつの甘さはいつか、己を危機に曝すことになる…俺が居ない間、お前が六花を守れ」

「うん任せて。僕と六花、仲良しだから。大丈夫だよ」
「……。」

マダラは、今度は右側を向いた。

そこはこのアジトと地上を繋げる通路の入り口だが、今は大きな一枚岩でその入り口はしっかりと閉じられており、もうこのアジトへは出入りできない。

『…今でも、マダラ様は私の光…この先も、ずっと…』

「……六花……」

マダラは小さく眩き一瞬目を伏せたが、再び鋭い眼光で目の前のオビトを見据えた。



「どういう事?…」

六花はアジトの入り口で戸惑っていた。

アジトの入り口があつた筈の場所は、土と岩で埋まっているではないか。

先ほどのゼツの言動…まさか…

「マダラ様はっ…?!!」

陽は山派に沈み、辺りは暗くなり始めている。急がないと…

六花が須佐能乎を出し、巨人の持つ槍で入り口に穴を開けようとしたその時だった。

「止めるんだ六花!」

その声に、六花は後ろに振り向いた。

「ゼツ！何があったの？マダラ様は無事!?オビト君はどうなったの?」

六花は須佐能乎を収めるとゼツに駆け寄り、掌を揃えて差し出す。するとそこへゼツがいつもの様にぴよんと飛び載った。

「大丈夫。マダラもオビトも無事。まあ、オビトは無事とは言わないけどね…誰かさんのせいでえ〜!」

「……。」

「アジトの入り口と通路を閉じたのはマダラだよ。もう誰も入れないし、出れない」
「えっ!?!」

「六花、君は今回の件でもうお役目御免つてわけさ。あ、但し、マダラが復活するまでの間だけだけどね〜」

「ど、どういう事?」

「どうもこうも無いでしょ。自業自得じゃん」

「そ、そんな…マダラ様…」

「でも自由の身になったわけじゃないからね!さっきの約束、覚えてる?」

「…服…従?」

「うん、そう!」

そう言うのとゼツは掌から飛び、鎖帷子の襟口からスルツと六花の胸の谷間に入った。「きやつ！ど、どこに入ってるのよ!!早く出て!」

「オビトもマダラの所へ来たし、もう六花が木ノ葉の里に行く必要も無くなったね。どこかで僕とふたりで暮らそうよ!」

ゼツは六花の言葉を無視し、胸の谷間に埋もれながら言った。

「私はともかく…ゼツ、あなたにはマダラ様の代役、オビト君を見張る役目があるでしょう…?」

「ああ、それなら大丈夫。白ゼツと、僕に分離体・黒ゼツが居るからね。」

「じゃ、じゃあ、私がオビト君に仕えるという任務は…?」

「だからさつき、お役目御免だつて言ったでしょ? 君のご主人様は、今日から僕だよつ!」

六花は塞がれたアジトの入り口に数歩ゆつくりと近づくと、上を見上げる。

空には既に星が輝き始めていた。

しかし、月の姿は無い。

「…。マダラ様は…その…独りで、最後を迎えるつもりなの?」

「みたいだね。もういいじゃんマダラの事は。復活したらまた会えるんだしさあ」

ゼツの言葉を聞き、六花の眼がみるみるうちに潤んでゆく。そしてついに一筋涙が頬

を伝い、胸の谷間に挟まっているゼツの上にポツリと落ちた。

「泣くなっ！今日から僕が君のご主人様だつて言つてるだろ！」

「……………」

六花は、未だ黙つて入り口を見上げて立ち尽くし、泣き続けている。

マダラが死ぬところを見るのも辛い。

しかし、こんなたちで別れなければならないのは生木を裂かれる思いである。

「六花っ!!」

ビクッ!…ゼツの怒鳴り声に、ようやく六花はゼツの方を見た。

「今すぐここから離れるんだ。取り敢えずは山岳の墓場の一軒家(アジト)へ行くよ。ほ

ら! さっさと行くんだ!」

それでも、六花は肩で息をしながら首を横に振り、動こうとはしない。

完全に陽は沈み、辺りの視界は殆ど無くなってしまっている。

「……………」

「本当に悪い子だね…六花は」

突然ゼツは身体のかたちを複雑に変化させ、六花の首を絞め、口の中に入って舌を抑

えた。

「苦しい? 六花? フフツ…死にたくないでしょ? 助けて欲しい?」

・・・まだ、こんな所で死ぬわけにはいかない！・・・
六花は震えながらなんとか首を縦に振った。

「かつ・・・かはっ!!・・・ハアハアハアハア!!・・・」

ゼツは六花を解放したが、六花はその場に倒れ込んでしまった。その身体をゼツが起す。

虚ろな目をした六花の前に、ゼツの顔が現れた。

「君のご主人様は誰だっけ？」

「・・・ゼツ・・・あなたよ・・・」

・・・こんな屈辱くらい、私の苦しみくらい、なんて事は無いわ・・・



六花が去ったアジトの中は薄暗い。

ポチャン・・・。

・・・俺は死んだ::のか?・・・

「!!・・・(、)は・・・?」

「あの世との狭間だ・・・うちはその者よ・・・」

オビトは意識を取り戻し、遂にマダラと対面していた。

「・・・!!その眼・・・じいちゃんも、うちは一族・・・?」

「……さあ、どうだろうな……」

「イテテツ！テツ……」

「痛みを感じるといふ事はまだ生きているといふ事だ。といつても、身体の半分はほぼ潰れていた……一応手当はしておいてやったが……」

「……じいちゃんが助けてくれたのか……ありがとう。」

オビトは少しほつとしたかのように、マダラの顔を見て礼を言った。

その右目にはまだ、写輪眼が浮かんでいる。

身体の半分はほぼ潰れてしまったものの、ゼツの防護と処置により、右目の眼球は助かっていた。

マダラはその写輪眼を見つめ、口を開く。

「礼を言うのはまだ早い……その分の恩はしっかり返して貰うつもりだ。」

「じゃ、じゃあ、何すりやいいんだ？悪いけど、ずっとここには居られねえーよ！生きてるんだって分ったんだ……木ノ葉の里に帰る！今は戦争中だ。写輪眼もやつと開眼したし……これで今度は、もつと、仲間を守る！」

傷の痛みすら忘れてしまっているかのようになり、オビトは嬉しそうに応えた。

しかし、マダラは小さく溜息を吐き目を伏せ、口を開く。

「……もつと仲間を守る、か……」

「?・・・な、何だよ!!」

「お前のその身体・・・もう忍としてはやっていけまい・・・」

「!!?・・・イヤイヤイヤ!! やつとこの眼を手に入れたんだ! 今度こそ仲間を守る忍に俺が」

「現実を見ろ」

「・・・」

オビトの反論を待たずして、マダラが言葉が続ける。

「この世は思い通りにいかぬ事ばかりだ。長く生きれば生きるほど・・・現実が苦しみと痛みと虚しさだけが漂っている事に気付く・・・」

・・・何だ? このじじい?・・・

オビトはマダラの話を黙って聞き続けるが、自分を助けてくれたという割に目の前の老人の不可解な話に対し、怪訝な顔をする。

「いいか・・・この世の全てにおいて、光が当たるところには必ず影が在る。勝者と言う概念がある以上、敗者は同じくして存在する。・・・」

マダラの頭の中に、あの時、目の前に居た柱間の姿が浮かぶ。

一度目は初めて背中を地面に付けた時に自分を覗き込む柱間の顔。

そして二度目は、あの谷で、木遁の変わり身だった柱間の姿だった。

「…平和を保ちたいとする利己的な意思が戦争を起こし、愛を守るために憎しみが生まれる…」

マダラの眼の前には、火影の制服を纏い顔岩の上から木ノ葉の里を眺めている。誰かの姿が浮かぶ。

そして、直ぐにその風景は無数の死体が転がる光景に変わる。

「…これらには因果関係が有り切り離すことは出来ん…本来はな…」

…うわあ。スイッチ入っちゃってるよ…こうなるとじじいの話は長えーんだよなあ。はあ…

オビトはこの話の終着点はどこまで続いていくのかと、いい加減耐えきれなくなり口を開く。

「で…ここはどの辺なんだ？」

「お前が傷ついたからこそ、代わりに、助かった者がいる…違うか？」

「…！」

オビトの頭に「先ほど」、カカシと共に戦った時の光景が浮かぶ。

そして、その結末が…

「…さつきからうつせーよ!!俺はこんなところに長居したくねーんだ!さつきと!…!」

「出て行きたければ出て行くといい．．．動ければの話だな。」
 そう言うと、マダラはオビトに背を向け、ゆっくりと歩き出す。

オビトはハアハアと上がった息を何とか抑えながら、思う。

．．．待てよ。これって．．．おかしいだろ．．．?! なんて写輪眼のじじいが独りでこんな所にいんだ?．．．

「じじい!! てめえ、さては木ノ葉の抜け忍だな?! 何者だ?!」

しかし、マダラはオビトの言葉を見無視をし、先ほどまで座って居た場所に戻るとゆっくりと腰かけようとした。オビトは薄暗い中、その光景に目を凝らす。

!!?」

マダラの背後に何か巨大なものが見えた。しかし何かまでは分からない。

マダラはそこへ腰かけると、再びオビトを見据えた。

「俺は．．．うちはの亡霊．．．うちはマダラだ。」

「．．．．．!!!」

◆

チュンチュン、チュンチュン．．．

翌朝。

朝陽が部屋を照らし始める頃、スズメも囀り始めた。

一軒家のアジトの部屋の中は秋冷でひんやりとし、やがてくる冬を予感させる。冬は、六花に後悔を蘇らせる。

「ふう——」

六花はテーブルに着き、両肘をついて顔の前で手を握り締め、そこに頭をもたげて長く息を吐いた。そしておもむろに顔を上げると目線の先の本棚の前に、いつかの自分の姿が浮かんでくる。

あの日、芙蓉はマダラを見送った後、洗濯をして外に干し、それからこの場所で本の整理をしていた。

すると突然、目の前に扉間が現れ、そのまま木ノ葉の里に連れて行かれたのだった：

その後、マダラは…柱間は…扉間は…そして、自分は…

『いなり作って待っとけ』

今はもう、それすら出来ない。いや、もうずっと前からそうだったではないか。

今更考えても仕方が無い事が頭を巡る。六花は急いで立ち上がったって台所に立った。

「過去に現在（いま）と未来を支配させては駄目…」

そう小さく、いつか自分が誰かに言った言葉を呟いてみた。

「ねえ、住みたい場所決まった？」

「ううん、まだ」

六花は部屋の整理をしながら背中では答えた。すると机の上でザラメせんべいを食べていたゼツは、せんべいを丸呑みしてから六花の頭の上に飛び載った。

「ここに来てもう三日目だよ？早く決めなよ！」

六花は手を止めた。そしてゼツではなく、正面を向いて言う。

「だから、ここに住み続けるのでは駄目なの？ここなら用心棒や寺子屋の仕事もあるし、何より暮らし慣れているから問題無いし……なぜそんなにここ（山岳の墓場）を離れたがるのよ？」

「だって、せつかくだから違う場所に住んでみたいじゃん。国が違えば食べ物も変わるよ？まだ食べたことが無い甘味が世の中にはいっぱいあるんだよ!!」

「はあー。結局甘い物目当てなわけ？」

「はい、六花のご主人様は誰？」

「ゼツさまです」

「なら言う事聞いて。いい？」

「ハイハイ……」

六花は再び手を動かし、整理を再開する。

本当は、直ぐにでも木ノ葉の里に行きたかった。

しかしオビトが里に居ない今、木ノ葉の里では故人になつてゐる自分が大義名分が無いのにも関わらず、再びあの場所で暮らす事は許されないのではないかと気が咎めた。勿論、木ノ葉の忍であるミナトに六花が忍だと知られてゐる事も気になる。

「……！」

その時手に取つたのは、分厚い理科の参考書だつた。

六花は再び手を止め、眼を閉じ俯いた。

「あ……んっ……？」

「六花……」

「んんっ。もう、だから変な所に入らないでつてば……つてー！だつ、誰!!」

六花は飛び起き、チャクラと写輪眼を発動して身構える。真つ暗な部屋の中を眼球だけで見回したが、異変は無いく、誰も居ない。

「なーんだゼツかあ……もう、びっくりしたあ……」

……でも今、確かに人影が見えた気がしたんだけど……

六花は再び横になり、布団を被つて目をつぶつた。

「!!?」

「僕だよ？六花……」

「な、何してるの?・・・」

布団の中。

その“手”は、六花を後ろからしっかりと抱き締めていた。“足”は六花の足に絡まっている。

ゼツが自在に身体のかたちを変化できることは知っているが、今のかたちは…いや、しかしそんなはずは無い。見た事が無いではないか…。

六花が横を向いて戸惑っていると、その手は六花の腕の隙間をすり抜け、左の乳房を鷲掴みにした。

「・・・!!」

「六花、愛してるよ・・・」

「ふ、ふざけないで!!!やめてっ!!」

六花は再び起き上がって布団から出ようとしたが、その手は六花の両肩を引っ張って無理やり布団に仰向けに寝かせた。

すると、六花の目の前に、ゆっくりと真っ黒い人のかたちが目の前に現れる。

その顔は、ゼツだった。

「なんの・・・つもり?」

「だってもう六花は僕のものでしょ?」

「いっ……！！」

その時、六花の身体に戦慄が走った。

空にはこの秋最後の満月が浮かんでいる。

しかし今宵は月の光で星の姿が見えない。

「……うっうっ……」

六花は一人、食卓にうつ伏せて泣いていた。

ゼツは元々得体の知れない存在ではあったが、マダラの分身であり、記憶を取り戻してからこの二十五年近く一緒に過ごしたことで、相棒とも友達とも兄弟ともペットとも分らないが、心を許す存在になっていた。

しかしそこには明らかな線引きがあり、それが破られる事があるなどあり得ないし、想像すらしたことが無かった。

いや、想像する事すら悍ましい……

その悍ましい感覚に、六花はハゴロモから聞いた自分の前世・ヒミコの身に起きた事を想い出していた。

……ヒミコさんも、こんな感覚だったのかな……

「ええ。似ているかもね」

「!?」

六花が顔を上げると、目の前の縁側に、髪の毛の長い女性が立って居るではないか。

その頭上には南中の満月が輝いている。逆光で目がくらみ、その女性の顔ははつきりとは見えない。そして、チャクラも感じない。どうやら忍ではなさそうである。

「ねえ、何をそんなに泣いているの?」

「えっ?・・・だ、誰!?」

すると女性は芙蓉に歩み寄り、ゆっくりと顔を六花の顔に近づけてきた。しかし、芙蓉は不思議と恐怖を感じない。

・・・あつ!この人は!!!

「私が、大筒木ヒミコ。ハゴロモが言っていた、ね:はじめてましてだけど、実はずっとあなたの中に居たのよ?ふふっ」

「なぜ・・・ここに?」

「マダラが外道魔像を口寄せしたでしょ?あの力を使って、あなたの中から出て可視化されるようになったの。いわゆる幽霊ってやつだけどね」

{IMG43820}

「.....」

六花は言葉が見つからず、ただ茫然と、満月に照らされ青白く闇に浮かび上がるヒミ

コを見つめた。

白く長い髪、額に生えている角の様な物、写輪眼の瞳……

確かにその姿かたちは、ハゴロモに見せられたヒミコの姿、そのものだった。

「ところで、もしその涙がゼツに凌辱されて泣いているなら無駄だからやめなさい。好機だと思うべきよ」

「えっ……」

「ゼツはね、私の弟なの。この世には生まれなかつたけれど。死産だと分つた時、私の母が自らゼツの魂だけを取り出し作り出した存在、それがゼツ。その存在を知っているのは母と私だけよ」

「……?」

六花は、その話を直ぐには理解が出来なかつた。

一生懸命、頭の中でこれまで見聞きしてきた単語を繋げて事実関係を整理しようと試みる。

するとヒミコは、再びズイツと芙蓉に顔を近づけてきた。大きく見開いた目で六花の瞳の奥を探る様に見つめながら言う。

「兎に角、ゼツはあなたを愛している。あなたはゼツのモノなんじゃない、ゼツがあなた
のモノなの。それを利用しないでどうするの……芙蓉！」

六花はゼツが自分のことを愛しているゼツはお前のものだという言葉よりも、ヒミコが自分の本名を呼んでくれたことに少し動揺してしまった。ごくりと唾を呑み込み、俯く。

一方ヒミコは月を見上げながら言葉が続ける。

「あなたはこの世の摂理を解つてない。男はね、女が生きる為に存在しているの。女に生まれたあなたには男を利用する権利があり、利用する義務がある：何故なら、この世を支配するのは女だから！」

六花も流石にその過激な発言には驚き顔を上げ、愕然としてヒミコの横顔を見つめた。

芙蓉が想像していたヒミコの人物像とは余りにかけ離れている。

「で、でも……」

「これまでマダラに命令されてあなたが心を痛めながら行ってきた任務。どれもあなたは何も悪くない。あなたのその美しく、清らかな手を汚す必要なんて無い。本当に汚い事は全て、ゼツに、マダラに、男共にやらせればいいの！お箸があるのに素手でご飯を食べて手を汚すの？使える道具を使って当然でしょう？」

ヒミコは満月を背負い、ニコニコしながら芙蓉を見ている。しかし芙蓉は怪訝な顔をしてヒミコを一目見たが、直ぐに視線を斜め下に落して言う。

「……でも、食べている事には変わりはないです……罪も、責任も、私にあります」
「あはははっ！芙蓉、あなたはこれまでの転生者の中で私に一番似ていない。だから私はあなたのことが大好きなの！」

「……？」

ヒミコは芙蓉に背を向けた。そして顔だけで振り返って言う。

「残念だけでもう時間が無い。私があなたの前に現れる事が出来るのは満月の夜、満月が南中に在る数分間だけなの。ロマンチックでしょ？ふふっ……じゃあ、またね」

「……!!」

ヒミコの姿は、スツと音も無く六花の目の前から消えてしまった。

目の前にはほんの少しだけ西に傾いた月だけが浮かんでいる。

「……ヒミコ……さん……」

川にかかる低い橋、稲の刈り取られた後の田んぼ、大きな楠木……

どこか懐かしさを感じる風景に、六花は目を細める。

「結局、木ノ葉の里って……。やっぱり扉間にまだ未練があるんでしょ？」

左肩に載るゼツが不満そうに、低い声で六花に言った。

「未練も何も……扉間さまは私の夫よ。今でもね……」

「六花つてき、良い人ぶつてホント八方美人だよね。そういう奴が実は一番悪い奴なんだ！」

その言葉に六花は足を止めた。

「…うん。解つてるわ。」

「でも！今は、六花は僕のものだからね！」

「…」



「ほーら、やっぱり。これが目的じゃん」

「いいじゃない、少しくらい」

六花は固く閉じられた門から、首を伸ばしてその家の庭を見ている。

常緑樹の濃緑の葉なら見えるのだが、その足元にあるかもしれない寒牡丹までは見えない。

忍術を使えば庭に入る事など容易いのだが、六花は木ノ葉の里では一般人であり、昼間に堂々と不審な行動をする事は出来ない。

「充分、不審だよ？」

「う、うん…」

心の中の声に対し、鞆の中に居るゼツからツッコまれ、六花は気まずそうに首をひつ

こめる。

庭を見ることは諦め、六花はその場を後にした。

しかし六花の顔はにこやかで、足取りも軽い。

扉間が亡くなって二十五年近くが経った今でも、二人の家はちゃんと在った。その事実だけで充分、嬉しかった。

しかもこの家は今、三代目火影・猿飛ヒルゼンの直接の指示の元、他里からの要人・来客の為の宿泊施設として運営管理されているそうだ。その事実もまた、“芙蓉”にはとても嬉しい…。

「ごめんください。こんにちは…あの、表の求人紙を見たのですが…」

開店前の蕎麦屋に入ると、店主と思しき初老の男性、同じく初老の女性、二十代半ばくらいの男性三人が忙しく準備をしていた。

『…!』

六花の顔を見るなり、三人の動きが同時にピタリと止まった。

その反応を見て、六花は思わず少し俯いたが、思い切つて顔を上げ口を開く。

「あの、厨房と後片付けのお仕事をさせて戴きたいのですが、まだ求人されていらつしやいますか？」

しかし、三人は口を半開きにしたまま、まだ固まっている。

六花はまさか、鞆の中に居るゼツが術でもかけたのではないかと不安になり鞆を開いたとたん、二十代半ばくらいの男性が突然喋り始めた。

「あつ、はい！こんな店で良ければ是非つ是非につ！どうぞ、どうぞ、こちらに座つて下さい！」

そう言つて若い方の男性が急いで客席の椅子を引いた。そして初老の男性も焦つて口を開く。

「お、お母さん、早くお茶を出して差し上げないか！」

「ああ、はいはい！」

「あの、お構いなく…働かせて頂く身ですし…」

その後、お茶だけではなく何故か六花の目の前には店で一番高いメニュー「大海老入り天ぷら五種盛付き蕎麦御膳」が出され、六花は申し訳ない気持でそれを食べつつ、舞い上がつてニコニコと話し続ける三人の話を聞かされ、六花の身の上話もあれこれと訊かれた。

この店は店主のウスタ、その妻のムギ、そして一人息子のキネタ三人での家族経営だという。先日、厨房を担当していた年配の女性が辞め、急募で求人を出していたらしい。

「どうせ働くなら蕎麦屋なんかじゃなく、甘味処にすればいいのに」

帰り道、鞆の中からゼツが六花に不満そうに言った。

「だってそんな所で働いてたらゼツが商品食べ尽くしちゃうじゃない！駄目！」

「あ、でもさっきの蕎麦団子美味しかったな」

「まったく、もう……」

師走の良く晴れた正午。忙しく多くの人が行きかっている。六花は苦笑しながら、人をかき分けてゆく。そして、ようやく広い場所に出た。

「甘味処……か……」

そう呟くと立ち止まった。

「やっぱり六花だつて食べたいんじゃない。ねえ、食べに行こうよ？」

六花の頭には、あの日、「蝶屋」でその日の主役である樹、そして扉間、カガミ、ヒルゼン、ダンゾウ、ホムラ、コハルと一緒に樹の火影奨励賞受賞祝いをした思い出が蘇り、胸が締め付けられた。甘い思い出の筈なのに、苦い味が口の中に広がる。

「また、今度ね……」

「え〜！いいじゃん行こうよお！」

「何かお菓子を買って帰るから……」

次の日。

早速今日から六花は蕎麦屋で働き始めることになり、再び蕎麦屋の扉を開いた。

「おはよう！今日からよろしく！分からない事があつたら何でも俺に訊いてね」

「はい。よろしくお願いいたします！」

六花は笑顔でキネタに頭を下げた。そして頭を上げると、キネタは手に女物の服を持っていった。しかし、三人の制服とは明らかに違うような…

「あの、六花ちゃんには厨房の手伝いもなんだけどさ…接客もして欲しんだけどいいかい？」

「あ、は、はい…」

…どうしよう。人目に付かない厨房の仕事だから働くことにしたのに。でもここで断ることは出来ないし…

「で、これが制服！これに着替えてくれるかい？」

キネタは少し照れた様子で六花に制服を手渡した。

『…』

奥の部屋で制服に着替えて店内に出て来た六花を見て、三人は昨日と同じ反応をした。完全に固まっている。

「あの…」

「…超可愛い!!」「美しいっ!!」「お人形さんみたいだわ!」

六花の着ている制服は、赤い矢絣の着物に赤い鼻緒の草履、その上にフリフリのフリルが着いた白いエプロン、頭にもフリルが着いたカチューシャだった。よもや蕎麦屋とは結び付かない風体である。

・・・これじゃ目立ちに来たようなものじゃない!・・・

はしやぎまくる三人を前に、六花はうな垂れた。

「まだ大晦日まで十日近くあるのに、蕎麦屋に行列っておかしくね?」

「なんか可愛い看板娘が入ったとかで、みんなそれ目当てみたいだぜ」

六花が蕎麦屋で働き始めて僅か三日ほどで六花の噂は広がり、木ノ葉の里の外れにあるにも関わらず、六花見たさに多くの客が里外れの小さな蕎麦屋に押し掛けてきていた。

六花はその状況に直ぐにでも店を辞めたかったのだが、責任感の強い六花は自ら働かせてくれと頼んでおきながら一週間もしないで辞めるのは躊躇われた。ようやく一週間が経ち、流石にこれではまずいと思つて厨房のみで働かせてほしいとウスタとキネタに頼んだが、「年の瀬までは接客の人手が圧倒的に足りないだよ。時給上げるから接客で頑張つて貰えないだろうか」と懇願され、仕方なく今でも接客を中心に働いている。

ガラツ…。

ようやく人の波が引き閉店間際だった店の扉が開いた。

「ギリギリに、すみません」

「いらつしやいま…！」

「!?」

「ん? ミナトどうしたの?」

店に入つて来たのは、ミナトと、赤毛で長い髪的女性二人だった。任務の帰りなのか、二人とも木ノ葉隠れの任務服を着ている。

「わあく! 本当に可愛い!! 噂以上だつてばね! ねえ? ミナト!」

「えっと、あの、お二人様ですよ。あちらの奥の席へどうぞ…」

自分を見て両掌を口の前で合わせてはしゃぐその女性から目を逸らし、六花は二人を奥の席に案内した。そして六花は急いで厨房へ引つ込む。

…まさかこんな早くミナトさんに会つてしまうなんて。でも、それも想定内よ…。六花は何事も無かつた顔をして二人の席へお茶を運んで行く。

ミナトも特に無反応のまま、少しだけ笑みを浮かべて六花を見ていた。

そして六花は笑顔で二人の前にお茶を置きながら口を開く。

「ミナトさん、お久しぶりです。この前はご迷惑をおかけしました。」

「また木ノ葉の里へ戻って来られてたんですね。」

「え？二人共知り合いだったの？！」

「うん。一ヶ月前のあの任務の時の…ね」

ミナトの言葉を聞くと女性の顔色は変わり、少し厳しい顔で六花を黙って見つめてきた。どうやらミナトはあの日の事をこの女性に話している様である。

「申し遅れました。六花と申します。昔、火の国の大名付きの忍をしておりますが、今は引退して両親の故郷である木ノ葉に暮らしております。あの、あれからカカシ君とリンちゃんは どうしていますか？」

「こちらこそあの時はご迷惑をおかけしました。お陰で、二人とも元気です。」

「そうですか…良かった。あ、すみません。ご注文はお済みですか？」

六花は敢えて自分から個人情報を伝え、カカシとリンを心配して見せた。その程度でミナトの疑惑を晴らすことは出来ないだろうが、ここで下手に隠す方が疑惑を深めるだけである。今は疑惑を晴らすのではなく、疑惑を深めない事が何よりも重要だった。

六花は注文を聞き終わると穏やかな笑顔を見せ、厨房へ歩いて行った。

「ねえ、スパイが看板娘なんてするかな？あんな派手な格好で…」

「うん。そうだね。だけど可能性はゼロじゃないよ。もしかしたら任務は終わっているのかもしれないね。戦争も終結に向かっているし…」

ミナトとクシナは蕎麦屋の帰り道、二人で歩きながら六花のことを話していた。二人の頭に、帰り際の六花の顔が浮かぶ。

『ありがとうございました。次はぜひ、カカシ君とリンちゃんも一緒に…あと、私にできる事があつたら何でも仰つて下さい。ご協力しますので』

ミナトがふと、帰り際に六花から手渡された蕎麦団子の入った袋に目を落とす。

「暫く様子を見ようつてばね。もしかしたら本当に平穏な生活をしているのかもしれないし。そうだったら、なんだか可哀想…同じ女として」

クシナがミナトの視線を追いながら言った。

「うん。そうだね…」

微笑むミナトの横顔を見て、クシナが口を尖らせて言う。

「でもミナトつたら嘘ついてた。『女』じゃなくて、『美女』だったつてばね!」

「い、いや、それは…」

六花は今、里の外れの二階建てのアパートの二階の小さな部屋に住んで居る。

夜は更け、外は静まり返っている。

「やめてっ……」

「やめるのは六花のほうでしょ? あんなに人気者になっちゃつて…楽しい?」

「ち、違うわ．．．いやっ!」

「お金はマダラが沢山残してるから生活には困らないのに、どうしてそこまでして働くのさ? そんなに男にチャホヤされてたいの? ねえ!」

「違う!．．．お願い、もう、もうやめてっ．．．」

「やめないよ。六花のご主人様は誰だっけ?」

「．．．ああつんっ．．．っ!!」

「もう我慢の限界だよ．．．僕。毎日、毎日、目の前で六花が沢山の男たちの眼で犯されていることがっ!!」

「辞める．．．辞めるから! お願い．．．やめてっ．．．」

六花の言葉は虚しく消え、悍ましい営みは夜もすがら続いた。

つづく

続・六花の森（3）く対面くオビトとマダラ、六花とヒミコ

「そうか・・・六花が・・・」

「うん。もう『白ゼツ』も居るし、僕の分身の『黒ゼツ』も居るし、六花なんて必要ないんじゃない？これ以上感情に流されて失敗されても困るしさあ」

「うむ・・・」

マダラは頬杖を外すと、ゆっくりと前を見た。

マダラの目の前には、意識の無いオビトが横たわっている。

オビトは重症を負ったものの、マダラが培養した柱間細胞の人造体を潰れた右半身に移植し、命は助かった。

実はその前に、ゼツが分裂した自分の身体をオビトが挟まっている岩の間に入れて救命処置をしていたのだが…。

「あいつの甘さはいつか、己を危機に曝すことになる…俺が居ない間、お前が六花を守れ」

「うん任せて。僕と六花、仲良しだから。大丈夫だよ」

「……」

マダラは、今度は右側を向いた。

そこはこのアジトと地上を繋げる通路の入り口だが、今は大きな一枚岩でその入り口はしっかりと閉じられており、もうこのアジトへは出入りできない。

『…今でも、マダラ様は私の光…この先も、ずっと…』

「……六花……」

マダラは小さく眩き一瞬目を伏せたが、再び鋭い眼光で目の前のオビトを見据えた。



「どういう事?…」

六花はアジトの入り口で戸惑っていた。

アジトの入り口があった筈の場所は、土と岩で埋まっているではないか。

先ほどのゼツの言動…まさか…

「マダラ様はっ…?」

陽は山派に沈み、辺りは暗くなり始めている。急がないと…

六花が須佐能乎を出し、巨人の持つ槍で入り口に穴を開けようとしたその時だった。

「止めるんだ六花!」

その声に、六花は後ろに振り向いた。

「ゼツ！何があつたの？マダラ様は無事!!オビト君はどうなつたの？」

六花は須佐能乎を取めるとゼツに駆け寄り、掌を揃えて差し出す。するとそこへゼツがいつもの様にぴよんと飛び載つた。

「大丈夫。マダラもオビトも無事。まあ、オビトは無事とは言わないけどね…誰かさんのせいでえ〜！」

「……」

「アジトの入り口と通路を閉じたのはマダラだよ。もう誰も入れないし、出れない」

「えっ!!」

「六花、君は今回の件でもうお役目御免つてわけさ。あ、但し、マダラが復活するまでの間だけだけどね〜」

「ど、どういう事？」

「どうもこうも無いでしょ。自業自得じゃん」

「そ、そんな…マダラ様…」

「でも自由の身になつたわけじゃないからね！さっきの約束、覚えてる？」

「…服…従？」

「うん、そう！」

そう言うのとゼツは掌から飛び、鎖帷子の襟口からスルツと六花の胸の谷間に入った。

「きゃつー！ど、どこに入ってるのよ！早く出て！」

「オビトもマダラの所へ来たし、もう六花が木ノ葉の里に行く必要も無くなったね。どこかで僕とふたりで暮らそうよ！」

ゼツは六花の言葉を無視し、胸の谷間に埋もれながら言った。

「私はともかく…ゼツ、あなたにはマダラ様の代役、オビト君を見張る役目があるでしょう…？」

「ああ、それなら大丈夫。白ゼツと、僕の分離体・黒ゼツが居るからね。」

「じゃ、じゃあ、私がオビト君に仕えるという任務は…？」

「だからさつき、お役目御免だつて言ったでしょ？君のご主人様は、今日から僕だよ！」

六花は塞がれたアジトの入り口に数歩ゆっくりと近づくと、上を見上げる。

空には既に星が輝き始めていた。

しかし、月の姿は無い。

「…」。マダラ様は…その…独りで、最後を迎えるつもりなの？」

「みたいだね。もういいじゃんマダラの事は。復活したらまた会えるんだしさあ」

ゼツの言葉を聞き、六花の眼がみるみるうちに潤んでゆく。そしてついに一筋涙が頬

を伝い、胸の谷間に挟まっているゼツの上にポツリと落ちた。

「泣くなっ！今日から僕が君の主人様だって言ってるだろ！」

「……………」

六花は、未だ黙って入り口を見上げて立ち尽くし、泣き続けている。

マダラが死ぬところを見るのも辛い。

しかし、こんなたちで別れなければならないのは生木を裂かれる思いである。

「六花っ!!」

ビクッ!…ゼツの怒鳴り声に、ようやく六花はゼツの方を見た。

「今すぐここから離れるんだ。取り敢えずは山岳の墓場の一軒家(アジト)へ行くよ。ほ

ら! さっさと行くんだ!」

それでも、六花は肩で息をしながら首を横に振り、動こうとはしない。

完全に陽は沈み、辺りの視界は殆ど無くなってしまっている。

「……………」

「本当に悪い子だね…六花は」

突然ゼツは身体のかたちを複雑に変化させ、六花の首を絞め、口の中に入って舌を抑

えた。

「苦しい? 六花? フフツ…死にたくないでしょ? 助けて欲しい?」

・・・まだ、こんな所で死ぬわけにはいかない！・・・

六花は震えながらなんとか首を縦に振った。

「かつ・・・かはっ!!・・・ハアハアハアハア!!・・・」

ゼツは六花を解放したが、六花はその場に倒れ込んでしまった。その身体をゼツが起こす。

虚ろな目をした六花の前に、ゼツの顔が現れた。

「君のご主人様は誰だっけ？」

「・・・ゼツ・・・あなたよ・・・」

・・・こんな屈辱くらい、私の苦しみくらい、なんて事は無いわ・・・



六花が去ったアジトの中は薄暗い。

ポチャン・・・。

・・・俺は死んだ・・・のか？・・・

「!!・・・(こ)、(こ)は・・・?」

「あの世との狭間だ・・・うちはその者よ・・・」

オビトは意識を取り戻し、遂にマダラと対面していた。

「・・・!!その眼・・・じいちゃんも、うちは一族・・・?」

「・・・さあ、どうだろうな・・・」

「イテテツ！テツ・・・」

「痛みを感じるといふ事はまだ生きているといふ事だ。といつても、身体の半分はほぼ潰れていた・・・一応手当はしておいてやったが・・・」

「・・・じいちゃんが助けてくれたのか・・・ありがとう。」

オビトは少しほっとしたかのように、マダラの顔を見て礼を言った。

その右目にはまだ、写輪眼が浮かんでいる。

身体の半分はほぼ潰れてしまったものの、ゼツの防護と処置により、右目の眼球は助かっていた。

マダラはその写輪眼を見つめ、口を開く。

「礼を言うのはまだ早い・・・その分の恩はしっかりと返して貰うつもりだ。」

「じゃ、じゃあ、何すりやいいんだ？悪いけど、ずっとここには居られねえーよ！生きてるんだって分ったんだ・・・木ノ葉の里に帰る！今は戦争中だ。写輪眼もやつと開眼したし・・・これで今度は、もつと、仲間を守る！」

傷の痛みすら忘れてしまっているかのように、オビトは嬉しそうに応えた。

しかし、マダラは小さく溜息を吐き目を伏せ、口を開く。

「・・・もつと仲間を守る、か・・・」

「?・・・な、何だよ!!」

「お前のその身体・・・もう忍としてはやっていけまい・・・」

「!!?・・・イヤイヤイヤ!! やつとこの眼を手に入れたんだ! 今度こそ仲間を守る忍に俺が」

「現実を見ろ」

「・・・」

オビトの反論を待たずして、マダラが言葉が続ける。

「この世は思い通りにいかぬ事ばかりだ。長く生きれば生きるほど…現実には苦しみと痛みと虚しさだけが漂っている事に気付く・・・」

・・・何だ? このじじい?・・・

オビトはマダラの話を黙って聞き続けるが、自分を助けてくれたという割に目の前の老人の不可解な話に対し、怪訝な顔をする。

「いいか…この世の全てにおいて、光が当たるところには必ず影が在る。勝者と言う概念がある以上、敗者は同じくして存在する。…」

マダラの頭の中に、あの時、目の前に居た柱間の姿が浮かぶ。

一度目は初めて背中を地面に付けた時に自分を覗き込む柱間の顔。

そして二度目は、あの谷で、木遁の変わり身だった柱間の姿だった。

「…平和を保ちたいとする利己的な意思が戦争を起こし、愛を守るために憎しみが生まれる…」

マダラの眼の前には、火影の制服を纏い顔岩の上から木ノ葉の里を眺めている。誰かの姿が浮かぶ。

そして、直ぐにその風景は無数の死体が転がる光景に変わる。

「…これらには因果関係が有り切り離すことは出来ん…本来はな…」

…うわあ。スイツチ入っちゃってるよ…こうなるとじじいの話は長えーんだよなあ。はあ…

オビトはこの話の終着点はどこまで続いていくのかと、いい加減耐えきれなくなり口を開く。

「で…ここはどの辺なんだ？」

「お前が傷ついたからこそ、代わりに、助かった者がいる…違うか？」

「…!」

オビトの頭に「先ほど」、カカシと共に戦った時の光景が浮かぶ。

そして、その結末が…。

「…さつきからうっせーよ!!俺はこんなとこに長居したくねーんだ!さつきと!…!」

「出て行きたければ出て行くといい．．．動ければの話だな。」

そう言うのと、マダラはオビトに背を向け、ゆっくりと歩き出す。

オビトはハアハアと上がった息を何とか抑えながら、思う。

．．．待てよ。これって：おかしいだろ：!! なんて写輪眼のじじいが独りでこんな所にいんだ？．．．

「じじい!! てめえ、さては木ノ葉の抜け忍だな!! 何者だ!!」

しかし、マダラはオビトの言葉を無視をし、先ほどまで座って居た場所に戻るとゆっくりと腰かけようとした。オビトは薄暗い中、その光景に目を凝らす。

!!?」

マダラの背後に何か巨大なものが見えた。しかし何かまでは分からない。

マダラはそこへ腰かけると、再びオビトを見据えた。

「俺は．．．うちはの亡霊．．．うちはマダラだ。」

「．．．．．!!!」

◆

チュンチュン、チュンチュン．．．

翌朝。

朝陽が部屋を照らし始める頃、スズメも囀り始めた。

一軒家のアジトの部屋の中は秋冷でひんやりとし、やがてくる冬を予感させる。冬は、六花に後悔を蘇らせる。

「ふう——」

六花はテーブルに着き、両肘をついて顔の前で手を握り締め、そこに頭をもたげて長く息を吐いた。そしておもむろに顔を上げると目線の先の本棚の前に、いつかの自分の姿が浮かんでくる。

あの日、芙蓉はマダラを見送った後、洗濯をして外に干し、それからこの場所で本の整理をしていた。

すると突然、目の前に扉間が現れ、そのまま木ノ葉の里に連れて行かれたのだった。その後、マダラは：柱間は：扉間は：そして、自分は：

『いなり作って待つとけ』

今はもう、それすら出来ない。いや、もうずっと前からそうだったのではないか。

今更考えても仕方が無い事が頭を巡る。六花は急いで立ち上がって台所に立った。

「過去に現在（いま）と未来を支配させては駄目……」

そう小さく、いつか自分が誰かに言った言葉を呟いてみた。

「ねえ、住みたい場所決まった？」

「ううん、まだ」

六花は部屋の整理をしながら背中中で答えた。すると机の上でザラメせんべいを食べていたゼツは、せんべいを丸呑みしてから六花の頭の上に飛び載った。

「ここに来てもう三日目だよ？早く決めなよ！」

六花は手を止めた。そしてゼツではなく、正面を向いて言う。

「だから、ここに住み続けるのでは駄目なの？ここに用心棒や寺子屋の仕事もあるし、何より暮らし慣れているから問題無いし：なぜそんなにここ（山岳の墓場）を離れたがるのよ？」

「だって、せつかくだから違う場所に住んでみたいじゃん。国が違えば食べ物も変わるよ？まだ食べたことが無い甘味が世の中にはいっぱいあるんだよ！！」

「はあー。結局甘い物目当てなわけ？」

「はい、六花のご主人様は誰？」

「ゼツさまです」

「なら言う事聞いて。いい？」

「ハイハイ・・・」

六花は再び手を動かし、整理を再開する。

本当は、直ぐにでも木ノ葉の里に行きたかった。

しかしオビトが里に居ない今、木ノ葉の里では故人になつてゐる自分が大義名分が無いのにも関わらず、再びあの場所で暮らす事は許されないのではないかと気が咎めた。勿論、木ノ葉の忍であるミナトに六花が忍だと知られてゐる事も気になる。

「……！」

その時手に取つたのは、分厚い理科の参考書だつた。

六花は再び手を止め、眼を閉じ俯いた。

「あ……んっ……?」

「六花……」

「んんっ。もう、だから変な所に入らないでつてば……つて！だつ、誰?」

六花は飛び起き、チャクラと写輪眼を発動して身構える。真つ暗な部屋の中を眼球だけで見回したが、異変は無いく、誰も居ない。

「なーんだゼツかあ……もう、びつくりしたあ……」

……でも今、確かに人影が見えた気がしたんだけど……

六花は再び横になり、布団を被つて目をつぶつた。

「!!?」

「僕だよ?六花……」

「な、何してるの?・・・」

布団の中。

その“手”は、六花を後ろからしつかりと抱き締めていた。“足”は六花の足に絡まっている。

ゼツが自在に身体のかたちを変化できることは知っているが、今のかたちは…いや、しかしそんなはずは無い。見た事が無いではないか…。

六花が横を向いて戸惑っていると、その手は六花の腕の隙間をすり抜け、左の乳房を鷲掴みにした。

「・・・!!」

「六花、愛してるよ・・・」

「ふ、ふざけないで!!!やめてっ!!」

六花は再び起き上がって布団から出ようとしたが、その手は六花の両肩を引っ張って無理やり布団に仰向けに寝かせた。

すると、六花の目の前に、ゆっくりと真っ黒い人のかたちが目の前に現れる。

その顔は、ゼツだった。

「なんの・・・つもり?」

「だってもう六花は僕のものでしょ?」

「いつ……!!」

その時、六花の身体に戦慄が走った。

空にはこの秋最後の満月が浮かんでいる。

しかし今宵は月の光で星の姿が見えない。

「……うつつうつつ……」

六花は一人、食卓にうつ伏せて泣いていた。

ゼツは元々得体の知れない存在ではあったが、マダラの分身であり、記憶を取り戻してからこの二十五年近く一緒に過ごしたことで、相棒とも友達とも兄弟ともペットとも分からないが、心を許す存在になっていた。

しかしそこには明らかな線引きがあり、それが破られる事があるなどあり得ないし、想像すらしたことが無かった。

いや、想像する事すら悍ましい……

その悍ましい感覚に、六花はハゴロモから聞いた自分の前世・ヒミコの身に起きた事を想い出していた。

……ヒミコさんも、こんな感覚だったのかな……

「ええ。似ているかもね」

「!!」

六花が顔を上げると、目の前の縁側に、髪の毛の長い女性が立って居るではないか。

その頭上には南中の満月が輝いている。逆光で目がくらみ、その女性の顔ははつきりとは見えない。そして、チャクラも感じない。どうやら忍ではなさそうである。

「ねえ、何をそんなに泣いているの?」

「えっ?・・・だ、誰!!」

すると女性は芙蓉に歩み寄り、ゆっくりと顔を六花の顔に近づけてきた。しかし、芙蓉は不思議と恐怖を感じない。

・・・あつ!この人は!!!

「私が、大筒木ヒミコ。ハゴロモが言っていた、ね:はじめましてだけど、実はずっとあなたの中に居たのよ?ふふっ」

「なぜ・・・ここに?」

「マダラが外道魔像を口寄せしたでしょ?あの力を使って、あなたの中から出て可視化されるようになったの。いわゆる幽霊ってやつだけどね」

〔IMG43820〕

「・・・・・・・・」

六花は言葉が見つからず、ただ茫然と、満月に照らされ青白く闇に浮かび上がるヒミ

コを見つめた。

白く長い髪、額に生えている角の様な物、写輪眼の瞳……

確かにその姿かたちは、ハゴロモに見せられたヒミコの姿、そのものだった。

「ところで、もしその涙がゼツに凌辱されて泣いているなら無駄だからやめなさい。好機だと思うべきよ」

「えっ……」

「ゼツはね、私の弟なの。この世には生まれなかったけれど。死産だと分った時、私の母が自らゼツの魂だけを取り出し作り出した存在、それがゼツ。その存在を知っているのは母と私だけよ」

「……?」

六花は、その話を直ぐには理解が出来なかった。

一生懸命、頭の中でこれまで見聞きしてきた単語を繋げて事実関係を整理しようとする。みる。

するとヒミコは、再びズイツと芙蓉に顔を近づけてきた。大きく見開いた眼で六花の瞳の奥を探る様に見つめながら言う。

「兎に角、ゼツはあなたを愛している。あなたはゼツのモノなんじゃない、ゼツがあなたのモノなの。それを利用しないでどうするの……芙蓉！」

六花はゼツが自分のことを愛している。ゼツはお前のものだという言葉よりも、ヒミコが自分の本名を呼んでくれたことに少し動揺してしまった。ごくりと唾を呑み込み、俯く。

一方ヒミコは月を見上げながら言葉を続ける。

「あなたはこの世の摂理を解つてない。男はね、女が生きる為に存在しているの。女に生まれたあなたには男を利用する権利があり、利用する義務がある：何故なら、この世を支配するのは女だから！」

六花も流石にその過激な発言には驚き顔を上げ、愕然としてヒミコの横顔を見つめた。

芙蓉が想像していたヒミコの人物像とは余りにかけ離れている。

「で、でも……」

「これまでマダラに命令されてあなたが心を痛めながら行ってきた任務。どれもあなたは何も悪くない。あなたのその美しく、清らかな手を汚す必要なんて無い。本当に汚い事は全て、ゼツに、マダラに、男共にやらせればいいの！お箸があるのに素手でご飯を食べて手を汚すの？使える道具を使って当然でしょう？」

ヒミコは満月を背負い、ニコニコしながら芙蓉を見ている。しかし芙蓉は怪訝な顔をしてヒミコを一目見たが、直ぐに視線を斜め下に落して言う。

「・・・でも、食べている事には変わりはないです・・・罪も、責任も、私にあります」
 「あはははっ！芙蓉、あなたはこれまでの転生者の中で私に一番似ていない。だから私はあなたのことが大好きなの！」

「・・・？」

ヒミコは芙蓉に背を向けた。そして顔だけで振り返つて言う。

「残念だけでもう時間が無い。私があなたの前に現れる事が出来るのは満月の夜、満月が南中に在る数分間だけなの。ロマンチックでしょ？ふふっ…じゃあ、またね」

「・・・!!」

ヒミコの姿は、スツと音も無く六花の目の前から消えてしまった。

目の前にはほんの少しだけ西に傾いた月だけが浮かんでいる。

「・・・ヒミコ・・・さん・・・」

川にかかる低い橋、稲の刈り取られた後の田んぼ、大きな楠木…

どこか懐かしさを感じる風景に、六花は目を細める。

「結局、木ノ葉の里って…。やっぱり扉間にまだ未練があるんでしょ？」

左肩に載るゼツが不満そうに、低い声で六花に言った。

「未練も何も…扉間さまは私の夫よ。今でもね…」

「六花ってさ、良い人ぶってホント八方美人だよね。そういう奴が実は一番悪い奴なんだ！」

その言葉に六花は足を止めた。

「…うん。解ってるわ。」

「でも！今は、六花は僕のものだからね！」

「…」



「ほーら、やっぱり。これが目的じゃん」

「いいじゃない、少しくらい」

六花は固く閉じられた門から、首を伸ばしてその家の庭を見ている。

常緑樹の濃緑の葉なら見えるのだが、その足元にあるかもしれない寒牡丹までは見えない。

忍術を使えば庭に入る事など容易いのだが、六花は木ノ葉の里では一般人であり、昼間に堂々と不審な行動をする事は出来ない。

「充分、不審だよ？」

「う、うん…」

心の中の声に対し、鞆の中に居るゼツからツツコまれ、六花は気まずそうに首をひつ

こめる。

庭を見ることは諦め、六花はその場を後にした。

しかし六花の顔はにこやかで、足取りも軽い。

扉間が亡くなって二十五年近くが経った今でも、二人の家はちゃんと在った。その事実だけで充分、嬉しかった。

しかもこの家は今、三代目火影・猿飛ヒルゼンの直接の指示の元、他里からの要人・来客の為の宿泊施設として運営管理されているそうだ。その事実もまた、『芙蓉』にはとても嬉しい……。

「ごめんください。こんにちは……あの、表の求人紙を見たのですが……」

開店前の蕎麦屋に入ると、店主と思しき初老の男性、同じく初老の女性、二十代半ばくらいの男性三人が忙しく準備をしていた。

『……!』

六花の顔を見るなり、三人の動きが同時にピタリと止まった。

その反応を見て、六花は思わず少し俯いたが、思い切つて顔を上げ口を開く。

「あの、厨房と後片付けのお仕事をさせて戴きたいのですが、まだ求人されていらつしやいますか？」

しかし、三人は口を半開きにしたまま、まだ固まっている。

六花はまさか、鞆の中に居るゼツが術でもかけたのではないかと不安になり鞆を開いたとたん、二十代半ばくらいの男性が突然喋り始めた。

「あつ、はい！こんな店で良ければ是非つ是非につ！どうぞ、どうぞ、こちらに座って下さい！」

そう言つて若い方の男性が急いで客席の椅子を引いた。そして初老の男性も焦つて口を開く。

「お、おい母さん、早くお茶を出して差し上げないか！」

「ああ、はいはい！」

「あの、お構いなく…働かせて頂く身ですし…」

その後、お茶だけではなく何故か六花の目の前には店で一番高いメニュー「大海老入り天ぷら五種盛付き蕎麦御膳」が出され、六花は申し訳ない気持でそれを食べつつ、舞い上がつてニコニコと話し続ける三人の話の話を聞かされ、六花の身の上話もあれこれと訊かれた。

この店は店主のウスタ、その妻のムギ、そして一人息子のキネタ三人での家族経営だという。先日、厨房を担当していた年配の女性が辞め、急募で求人を出していたらしい。

「どうせ働くなら蕎麦屋なんかじゃなく、甘味処にすればいいのに」

帰り道、鞆の中からゼツが六花に不満そうに言った。

「だってそんな所で働いてたらゼツが商品食べ尽くしちゃうじゃない！駄目！」

「あ、でもさっきの蕎麦団子美味しかったな」

「まったくと、もう……」

師走の良く晴れた正午。忙しく多くの人が行きかっている。六花は苦笑しながら、人をかき分けてゆく。そして、ようやく広い場所に出た。

「甘味処……か……」

そう呟くと立ち止まった。

「やつぱり六花だつて食べたいんじゃない。ねえ、食べに行こうよ？」

六花の頭には、あの日、「蝶屋」でその日の主役である樹、そして扉間、カガミ、ヒルゼン、ダンゾウ、ホムラ、コハルと一緒に樹の火影奨励賞受賞祝いをした思い出が蘇り、胸が締め付けられた。甘い思い出の筈なのに、苦い味が口の中に広がる。

「また、今度ね……」

「え〜！いいじゃん行こうよお！」

「何かお菓子を買って帰るから……」

次の日。

早速今日から六花は蕎麦屋で働き始めることになり、再び蕎麦屋の扉を開いた。

「おはよう！今日からよろしく！分からない事があつたら何でも俺に訊いてね」

「はい。よろしくお願いいたします！」

六花は笑顔でキネタに頭を下げた。そして頭を上げると、キネタは手に女物の服を持っていった。しかし、三人の制服とは明らかに違うような…

「あの、六花ちゃんには厨房の手伝いもなんだけどさ…接客もして欲しんだけどいいかい？」

「あ、は、はい…」

…どうしよう。人目に付かない厨房の仕事だから働くことにしたのに。でもここで断ることは出来ないし…

「で、これが制服…これに着替えてくれるかい？」

キネタは少し照れた様子で六花に制服を手渡した。

『…』

奥の部屋で制服に着替えて店内に出て来た六花を見て、三人は昨日と同じ反応をした。完全に固まっている。

「あの…」

「…超可愛い!!」「美しいっ!!」「お人形さんみたいだわ!」

六花の着ている制服は、赤い矢絣の着物に赤い鼻緒の草履、その上にフリフリのフリルが着いた白いエプロン、頭にもフリルが着いたカチューシャだった。よもや蕎麦屋とは結び付かない風体である。

・・・これじゃ目立ちに来たようなものじゃない!・・・

はしやぎまくる三人を前に、六花はうな垂れた。

「まだ大晦日まで十日近くあるのに、蕎麦屋に行列っておかしくね?」

「なんか可愛い看板娘が入ったとかで、みんなそれ目当てみたいだぜ」

六花が蕎麦屋で働き始めて僅か三日ほどで六花の噂は広がり、木ノ葉の里の外れにあるにも関わらず、六花見たさに多くの客が里外れの小さな蕎麦屋に押し掛けてきていた。

六花はその状況に直ぐにでも店を辞めたかったのだが、責任感の強い六花は自ら働かせてくれと頼んでおきながら一週間もしないで辞めるのは躊躇われた。ようやく一週間が経ち、流石にこれではまずいと思つて厨房のみで働かせてほしいとウスタとキネタに頼んだが、「年の瀬までは接客の人手が圧倒的に足りないだよ。時給上げるから接客で頑張つて貰えないだろうか」と懇願され、仕方なく今でも接客を中心に働いている。

ガラツ…。

ようやく人の波が引き閉店間際だった店の扉が開いた。

「ギリギリに、すみません」

「いらつしやいま…！」

「!!」

「ん？ミナトどうしたの？」

店に入つて来たのは、ミナトと、赤毛で長い髪的女性二人だった。任務の帰りなのか、二人とも木ノ葉隠れの任務服を着ている。

「わあ〜！本当に可愛い!!噂以上だつてばね！ねえ？ミナト！」

「えっと、あの、お二人様ですよね。あちらの奥の席へどうぞ…」

自分を見て両掌を口の前で合わせてはしゃぐその女性から目を逸らし、六花は二人を奥の席に案内した。そして六花は急いで厨房へ引つ込む。

…まさかこんなに早くミナトさんに会つてしまうなんて。でも、それも想定内よ…

六花は何事も無かつた顔をして二人の席へお茶を運んで行く。

ミナトも特に無反応のまま、少しだけ笑みを浮かべて六花を見ていた。

そして六花は笑顔で二人の前にお茶を置きながら口を開く。

「ミナトさん、お久しぶりです。この前はご迷惑をおかけしました。」

「また木ノ葉の里へ戻って来られてたんですね。」

「え？二人共知り合いだったの!?!」

「うん。一ヶ月前のあの任務の時の…ね」

ミナトの言葉を聞くと女性の顔色は変わり、少し厳しい顔で六花を黙って見つめてきた。どうやらミナトはあの日の事をこの女性に話している様である。

「申し遅れました。六花と申します。昔、火の国の大名付きの忍をしておりましたが、今は引退して両親の故郷である木ノ葉に暮らしております。あの、あれからカカシ君とリンちゃんは どうしていますか？」

「こちらこそあの時はご迷惑をおかけしました。お陰で、二人とも元気です。」

「そうですか…良かった。あ、すみません。ご注文はお決まりですか？」

六花は敢えて自分から個人情報を伝え、カカシとリンを心配して見せた。その程度でミナトの疑惑を晴らすことは出来ないだろうが、ここで下手に隠す方が疑惑を深めるだけである。今は疑惑を晴らすのではなく、疑惑を深めない事が何よりも重要だった。

六花は注文を聞き終わると穏やかな笑顔を見せ、厨房へ歩いて行った。

「ねえ、スパイが看板娘なんてするかな？あんな派手な格好で…」

「うん。そうだね。だけど可能性はゼロじゃないよ。もしかしたら任務は終わっているのかもしれないね。戦争も終結に向かっているし…」

ミナトとクシナは蕎麦屋の帰り道、二人で歩きながら六花のことを話していた。二人の頭に、帰り際の六花の顔が浮かぶ。

『ありがとうございました。次はぜひ、カカシ君とリンちゃんも一緒に…あと、私にできる事があつたら何でも仰つて下さい。ご協力しますので』

ミナトがふと、帰り際に六花から手渡された蕎麦団子の入った袋に目を落とす。

「暫く様子を見ようつてばね。もしかしたら本当に平穏な生活をしているのかもしれないし。そうだったら、なんだか可哀想…同じ女として」

クシナがミナトの視線を追いながら言った。

「うん。そうだね…」

微笑むミナトの横顔を見て、クシナが口を尖らせて言う。

「でもミナトったら嘘ついてた。『女』じゃなくて、『美女』だったつてばね!」

「い、いや、それは…」

六花は今、里の外れの二階建てのアパートの二階の小さな部屋に住んで居る。

夜は更け、外は静まり返っている。

「やめてっ……」

「やめるのは六花のほうでしょ? あんなに人気者になっちゃつて…楽しい?」

「ち、違うわ．．．いやっ！」

「お金はマダラが沢山残してるから生活には困らないのに、どうしてそこまでして働くのさ？ そんなに男にチヤホヤされてたいの？ ねえ！」

「違う！．．．お願い、もう、もうやめてっ．．．」

「やめないよ。六花のご主人様は誰だっけ？」

「．．．ああつんっ．．．っ!!」

「もう我慢の限界だよ．．．僕。毎日、毎日、目の前で六花が沢山の男たちの眼で犯されてる．．．!!」

「辞める．．．辞めるから！ お願い．．．やめてっ．．．」

六花の言葉は虚しく消え、悍ましい営みは夜もすがら続いた。

つづく

続・六花の森（3） ～対面～オビトとマダラ、六花とヒミコ

「そうか・・・六花が・・・」

「うん。もう『白ゼツ』も居るし、僕の分身の『黒ゼツ』も居るし、六花なんて必要ないんじゃない？これ以上感情に流されて失敗されても困るしさあ」

「うむ・・・」

マダラは頬杖を外すと、ゆっくりと前を見た。

マダラの目の前には、意識の無いオビトが横たわっている。

オビトは重症を負ったものの、マダラが培養した柱間細胞の人造体を潰れた右半身に移植し、命は助かった。

実はその前に、ゼツが分裂した自分の身体をオビトが挟まっている岩の間に入れて救命処置をしていたのだが…。

「あいつの甘さはいつか、己を危機に曝すことになる…俺が居ない間、お前が六花を守れ」

「うん任せて。僕と六花、仲良しだから。大丈夫だよ」
「……。」

マダラは、今度は右側を向いた。

そこはこのアジトと地上を繋げる通路の入り口だが、今は大きな一枚岩でその入り口はしっかりと閉じられており、もうこのアジトへは出入りできない。

『…今でも、マダラ様は私の光…この先も、ずっと…』

「……六花……」

マダラは小さく眩き一瞬目を伏せたが、再び鋭い眼光で目の前のオビトを見据えた。



「どういう事?…」

六花はアジトの入り口で戸惑っていた。

アジトの入り口があつた筈の場所は、土と岩で埋まっているではないか。

先ほどのゼツの言動…まさか…

「マダラ様はっ…?!!」

陽は山派に沈み、辺りは暗くなり始めている。急がないと…

六花が須佐能乎を出し、巨人の持つ槍で入り口に穴を開けようとしたその時だった。

「止めるんだ六花!」

その声に、六花は後ろに振り向いた。

「ゼツ！何があったの？マダラ様は無事?! オビト君はどうなったの?」

六花は須佐能乎を収めるとゼツに駆け寄り、掌を揃えて差し出す。するとそこへゼツがいつもの様にぴよんと飛び載った。

「大丈夫。マダラもオビトも無事。まあ、オビトは無事とは言わないけどね…誰かさんのせいでえ〜!」

「……。」

「アジトの入り口と通路を閉じたのはマダラだよ。もう誰も入れないし、出れない」
「えっ?!」

「六花、君は今回の件でもうお役目御免つてわけさ。あ、但し、マダラが復活するまでの間だけだけどね〜」

「ど、どういう事?」

「どうもこうも無いでしょ。自業自得じゃん」

「そ、そんな…マダラ様…」

「でも自由の身になったわけじゃないからね! さっきの約束、覚えてる?」

「…服…従?」

「うん、そう!」

そう言うのとゼツは掌から飛び、鎖帷子の襟口からスルツと六花の胸の谷間に入った。「きやつ！ど、どこに入ってるのよ！！早く出て！」

「オビトもマダラの所へ来たし、もう六花が木ノ葉の里に行く必要も無くなったね。どこかで僕とふたりで暮らそうよ！」

ゼツは六花の言葉を無視し、胸の谷間に埋もれながら言った。

「私はともかく…ゼツ、あなたにはマダラ様の代役、オビト君を見張る役目があるでしょう…？」

「ああ、それなら大丈夫。白ゼツと、僕に分離体・黒ゼツが居るからね。」

「じゃ、じゃあ、私がオビト君に仕えるという任務は…？」

「だからさつき、お役目御免だつて言ったでしょ？君のご主人様は、今日から僕だよつ！」

六花は塞がれたアジトの入り口に数歩ゆつくりと近づくと、上を見上げる。

空には既に星が輝き始めていた。

しかし、月の姿は無い。

「…。。マダラ様は…その…独りで、最後を迎えるつもりなの？」

「みたいだね。もういいじゃんマダラの事は。復活したらまた会えるんだしさあ」

ゼツの言葉を聞き、六花の眼がみるみるうちに潤んでゆく。そしてついに一筋涙が頬

を伝い、胸の谷間に挟まっているゼツの上にポツリと落ちた。

「泣くなっ！今日から僕が君のご主人様だつて言つてるだろ！」

「……………」

六花は、未だ黙つて入り口を見上げて立ち尽くし、泣き続けている。

マダラが死ぬところを見るのも辛い。

しかし、こんなたちで別れなければならないのは生木を裂かれる思いである。

「六花っ!!」

ビクッ!…ゼツの怒鳴り声に、ようやく六花はゼツの方を見た。

「今すぐここから離れるんだ。取り敢えずは山岳の墓場の一軒家(アジト)へ行くよ。ほ

ら! さっさと行くんだ!」

それでも、六花は肩で息をしながら首を横に振り、動こうとはしない。

完全に陽は沈み、辺りの視界は殆ど無くなってしまっている。

「……………」

「本当に悪い子だね…六花は」

突然ゼツは身体のかたちを複雑に変化させ、六花の首を絞め、口の中に入って舌を抑

えた。

「苦しい? 六花? フフツ…死にたくないでしょ? 助けて欲しい?」

・・・まだ、こんな所で死ぬわけにはいかない！・・・
六花は震えながらなんとか首を縦に振った。

「かつ・・・かはっ!!・・・ハアハアハアハア!!・・・」

ゼツは六花を解放したが、六花はその場に倒れ込んでしまった。その身体をゼツが起す。

虚ろな目をした六花の前に、ゼツの顔が現れた。

「君のご主人様は誰だっけ？」

「・・・ゼツ・・・あなたよ・・・」

・・・こんな屈辱くらい、私の苦しみくらい、なんて事は無いわ・・・



六花が去ったアジトの中は薄暗い。

ポチャン・・・。

・・・俺は死んだ::のか?・・・

「!!・・・(、)は・・・?」

「あの世との狭間だ・・・うちはその者よ・・・」

オビトは意識を取り戻し、遂にマダラと対面していた。

「・・・!!その眼・・・じいちゃんも、うちは一族・・・?」

「……さあ、どうだろうな……」

「イテテツ！テツ……」

「痛みを感じるといふ事はまだ生きているといふ事だ。といつても、身体の半分はほぼ潰れていた……一応手当はしておいてやったが……」

「……じいちゃんが助けてくれたのか……ありがとう。」

オビトは少しほつとしたかのように、マダラの顔を見て礼を言った。

その右目にはまだ、写輪眼が浮かんでいる。

身体の半分はほぼ潰れてしまったものの、ゼツの防護と処置により、右目の眼球は助かっていた。

マダラはその写輪眼を見つめ、口を開く。

「礼を言うのはまだ早い……その分の恩はしっかり返して貰うつもりだ。」

「じゃ、じゃあ、何すりやいいんだ？悪いけど、ずっとここには居られねえーよ！生きてるんだって分ったんだ……木ノ葉の里に帰る！今は戦争中だ。写輪眼もやつと開眼したし……これで今度は、もつと、仲間を守る！」

傷の痛みすら忘れてしまっているかのようには、オビトは嬉しそうに応えた。

しかし、マダラは小さく溜息を吐き目を伏せ、口を開く。

「……もつと仲間を守る、か……」

「?・・・な、何だよ!!」

「お前のその身体・・・もう忍としてはやっていけまい・・・」

「!!?・・・イヤイヤイヤ!! やつとこの眼を手に入れたんだ! 今度こそ仲間を守る忍に俺が」

「現実を見ろ」

「・・・」

オビトの反論を待たずして、マダラが言葉が続ける。

「この世は思い通りにいかぬ事ばかりだ。長く生きれば生きるほど・・・現実には苦しみと痛みと虚しさだけが漂っている事に気付く・・・」

・・・何だ? このじじい?・・・

オビトはマダラの話を黙って聞き続けるが、自分を助けてくれたという割に目の前の老人の不可解な話に対し、怪訝な顔をする。

「いいか・・・この世の全てにおいて、光が当たるところには必ず影が在る。勝者と言う概念がある以上、敗者は同じくして存在する。・・・」

マダラの頭の中に、あの時、目の前に居た柱間の姿が浮かぶ。

一度目は初めて背中を地面に付けた時に自分を覗き込む柱間の顔。

そして二度目は、あの谷で、木遁の変わり身だった柱間の姿だった。

「…平和を保ちたいとする利己的な意思が戦争を起こし、愛を守るために憎しみが生まれる…」

マダラの眼の前には、火影の制服を纏い顔岩の上から木ノ葉の里を眺めている。誰かの姿が浮かぶ。

そして、直ぐにその風景は無数の死体が転がる光景に変わる。

「…これらには因果関係が有り切り離すことは出来ん…本来はな…」

…うわあ。スイツチ入っちゃってるよ…こうなるとじじいの話は長えーんだよなあ。はあ…

オビトはこの話の終着点はどこまで続いていくのかと、いい加減耐えきれなくなり口を開く。

「で…ここはどの辺なんだ？」

「お前が傷ついたからこそ、代わりに、助かった者がいる…違うか？」

「…！」

オビトの頭に「先ほど」、カカシと共に戦った時の光景が浮かぶ。

そして、その結末が…

「…さつきからうつせーよ!!俺はこんなとこに長居したくねーんだ!さつきと!…!」

「出て行きたければ出て行くといい．．．動ければの話だな。」

そう言うと、マダラはオビトに背を向け、ゆっくりと歩き出す。

オビトはハアハアと上がった息を何とか抑えながら、思う。

．．．待てよ。これって．．．おかしいだろ．．．?! なんて写輪眼のじじいが独りでこんな所にいんだ?．．．

「じじい!! てめえ、さては木ノ葉の抜け忍だな?! 何者だ?!」

しかし、マダラはオビトの言葉を見無視をし、先ほどまで座って居た場所に戻るとゆっくりと腰かけようとした。オビトは薄暗い中、その光景に目を凝らす。

!!?」

マダラの背後に何か巨大なものが見えた。しかし何かまでは分からない。

マダラはそこへ腰かけると、再びオビトを見据えた。

「俺は．．．うちはの亡霊．．．うちはマダラだ。」

「．．．．．!!!」

◆

チュンチュン、チュンチュン．．．

翌朝。

朝陽が部屋を照らし始める頃、スズメも囁き始めた。

一軒家のアジトの部屋の中は秋冷でひんやりとし、やがてくる冬を予感させる。冬は、六花に後悔を蘇らせる。

「ふう——」

六花はテーブルに着き、両肘をついて顔の前で手を握り締め、そこに頭をもたげて長く息を吐いた。そしておもむろに顔を上げると目線の先の本棚の前に、いつかの自分の姿が浮かんでくる。

あの日、芙蓉はマダラを見送った後、洗濯をして外に干し、それからこの場所で本の整理をしていた。

すると突然、目の前に扉間が現れ、そのまま木ノ葉の里に連れて行かれたのだった：

その後、マダラは…：柱間は…：扉間は…：そして、自分は…

『いなり作って待っとけ』

今はもう、それすら出来ない。いや、もうずっと前からそうだったではないか。

今更考えても仕方が無い事が頭を巡る。六花は急いで立ち上がったって台所に立った。

「過去に現在（いま）と未来を支配させては駄目…」

そう小さく、いつか自分が誰かに言った言葉を呟いてみた。

「ねえ、住みたい場所決まった？」

「ううん、まだ」

六花は部屋の整理をしながら背中では答えた。すると机の上でザラメせんべいを食べていたゼツは、せんべいを丸呑みしてから六花の頭の上に飛び載った。

「ここに来てもう三日目だよ？早く決めなよ！」

六花は手を止めた。そしてゼツではなく、正面を向いて言う。

「だから、ここに住み続けるのでは駄目なの？ここなら用心棒や寺子屋の仕事もあるし、何より暮らし慣れているから問題無いし……なぜそんなにここ（山岳の墓場）を離れたがるのよ？」

「だって、せつかくだから違う場所に住んでみたいじゃん。国が違えば食べ物も変わるよ？まだ食べたことが無い甘味が世の中にはいっぱいあるんだよ!!」

「はあー。結局甘い物目当てなわけ？」

「はい、六花のご主人様は誰？」

「ゼツさまです」

「なら言う事聞いて。いい？」

「ハイハイ……」

六花は再び手を動かし、整理を再開する。

本当は、直ぐにでも木ノ葉の里に行きたかった。

しかしオビトが里に居ない今、木ノ葉の里では故人になつてゐる自分が大義名分が無いのにも関わらず、再びあの場所で暮らす事は許されないのではないかと気が咎めた。勿論、木ノ葉の忍であるミナトに六花が忍だと知られてゐる事も気になる。

「……！」

その時手に取つたのは、分厚い理科の参考書だつた。

六花は再び手を止め、眼を閉じ俯いた。

「あ……んっ……？」

「六花……」

「んんっ。もう、だから変な所に入らないでつてば……つてー！だつ、誰!!」

六花は飛び起き、チャクラと写輪眼を発動して身構える。真つ暗な部屋の中を眼球だけで見回したが、異変は無いく、誰も居ない。

「なーんだゼツかあ……もう、びっくりしたあ……」

……でも今、確かに人影が見えた気がしたんだけど……

六花は再び横になり、布団を被つて目をつぶつた。

「!!?」

「僕だよ？六花……」

「な、何してるの?・・・」
布団の中。

その「手」は、六花を後ろからしつかりと抱き締めていた。「足」は六花の足に絡まっている。

ゼツが自在に身体のかたちを変化できることは知っているが、今のかたちは…いや、しかしそんなはずは無い。見た事が無いではないか…。

六花が横を向いて戸惑っていると、その手は六花の腕の隙間をすり抜け、左の乳房を驚掴みにした。

「・・・!!」

「六花、愛してるよ・・・」

「ふ、ふざけないで!!!やめてっ!!」

六花は再び起き上がって布団から出ようとしたが、その手は六花の両肩を引っ張って無理やり布団に仰向けに寝かせた。

すると、六花の目の前に、ゆっくりと真っ黒い人のかたちが目の前に現れる。

その顔は、ゼツだった。

「なんの・・・つもり?」

「だってもう六花は僕のものでしょ?」

「いっ……！！」

その時、六花の身体に戦慄が走った。

空にはこの秋最後の満月が浮かんでいる。

しかし今宵は月の光で星の姿が見えない。

「……うっうっ……」

六花は一人、食卓にうつ伏せて泣いていた。

ゼツは元々得体の知れない存在ではあったが、マダラの分身であり、記憶を取り戻してからこの二十五年近く一緒に過ごしたことで、相棒とも友達とも兄弟ともペットとも分らないが、心を許す存在になっていた。

しかしそこには明らかな線引きがあり、それが破られる事があるなどあり得ないし、想像すらしたことが無かった。

いや、想像する事すら悍ましい…

その悍ましい感覚に、六花はハゴロモから聞いた自分の前世・ヒミコの身に起きた事を想い出していた。

……ヒミコさんも、こんな感覚だったのかな…

「ええ。似ているかもね」

「!?」

六花が顔を上げると、目の前の縁側に、髪の毛の長い女性が立って居るではないか。

その頭上には南中の満月が輝いている。逆光で目がくらみ、その女性の顔ははつきりとは見えない。そして、チャクラも感じない。どうやら忍ではなさそうである。

「ねえ、何をそんなに泣いているの?」

「えっ?・・・だ、誰!?」

すると女性は芙蓉に歩み寄り、ゆっくりと顔を六花の顔に近づけてきた。しかし、芙蓉は不思議と恐怖を感じない。

・・・あつ!この人は!!!

「私が、大筒木ヒミコ。ハゴロモが言っていた、ね:はじめてましてだけど、実はずっとあなたの中に居たのよ?ふふっ」

「なぜ・・・ここに?」

「マダラが外道魔像を口寄せしたでしょ?あの力を使って、あなたの中から出て可視化されるようになったの。いわゆる幽霊ってやつだけどね」

{IMG43820}

「.....」

六花は言葉が見つからず、ただ茫然と、満月に照らされ青白く闇に浮かび上がるヒミ

コを見つめた。

白く長い髪、額に生えている角の様な物、写輪眼の瞳……

確かにその姿かたちは、ハゴロモに見せられたヒミコの姿、そのものだった。

「ところで、もしその涙がゼツに凌辱されて泣いているなら無駄だからやめなさい。好機だと思うべきよ」

「えっ……」

「ゼツはね、私の弟なの。この世には生まれなかつたけれど。死産だと分つた時、私の母が自らゼツの魂だけを取り出し作り出した存在、それがゼツ。その存在を知っているのは母と私だけよ」

「……?」

六花は、その話を直ぐには理解が出来なかつた。

一生懸命、頭の中でこれまで見聞きしてきた単語を繋げて事実関係を整理しようと試みる。

するとヒミコは、再びズイツと芙蓉に顔を近づけてきた。大きく見開いた眼で六花の瞳の奥を探る様に見つめながら言う。

「兎に角、ゼツはあなたを愛している。あなたはゼツのモノなんじゃない、ゼツがあなた
のモノなの。それを利用しないでどうするの……芙蓉！」

六花はゼツが自分のことを愛しているゼツはお前のものだという言葉よりも、ヒミコが自分の本名を呼んでくれたことに少し動揺してしまった。ごくりと唾を呑み込み、俯く。

一方ヒミコは月を見上げながら言葉が続ける。

「あなたはこの世の摂理を解つてない。男はね、女が生きる為に存在しているの。女に生まれたあなたには男を利用する権利があり、利用する義務がある：何故なら、この世を支配するのは女だから！」

六花も流石にその過激な発言には驚き顔を上げ、愕然としてヒミコの横顔を見つめた。

芙蓉が想像していたヒミコの人物像とは余りにかけ離れている。

「で、でも……」

「これまでマダラに命令されてあなたが心を痛めながら行ってきた任務。どれもあなたは何も悪くない。あなたのその美しく、清らかな手を汚す必要なんて無い。本当に汚い事は全て、ゼツに、マダラに、男共にやらせればいいの！お箸があるのに素手でご飯を食べて手を汚すの？使える道具を使って当然でしょう？」

ヒミコは満月を背負い、ニコニコしながら芙蓉を見ている。しかし芙蓉は怪訝な顔をしてヒミコを一目見たが、直ぐに視線を斜め下に落して言う。

「……でも、食べている事には変わりはないです……罪も、責任も、私にあります」
「あはははっ！芙蓉、あなたはこれまでの転生者の中で私に一番似ていない。だから私はあなたのことが大好きなの！」

「……？」

ヒミコは芙蓉に背を向けた。そして顔だけで振り返って言う。

「残念だけでもう時間が無い。私があなたの前に現れる事が出来るのは満月の夜、満月が南中に在る数分間だけなの。ロマンチックでしょ？ふふっ……じゃあ、またね」

「……!!」

ヒミコの姿は、スッと音も無く六花の目の前から消えてしまった。

目の前にはほんの少しだけ西に傾いた月だけが浮かんでいる。

「……ヒミコ……さん……」

川にかかる低い橋、稲の刈り取られた後の田んぼ、大きな楠木……

どこか懐かしさを感じる風景に、六花は目を細める。

「結局、木ノ葉の里って……。やっぱり扉間にまだ未練があるんでしょ？」

左肩に載るゼツが不満そうに、低い声で六花に言った。

「未練も何も……扉間さまは私の夫よ。今でもね……」

「六花つてき、良い人ぶつてホント八方美人だよね。そういう奴が実は一番悪い奴なんだ！」

その言葉に六花は足を止めた。

「…うん。解つてるわ。」

「でも！今は、六花は僕のものだからね！」

「…」



「ほーら、やっぱり。これが目的じゃん」

「いいじゃない、少しくらい」

六花は固く閉じられた門から、首を伸ばしてその家の庭を見ている。

常緑樹の濃緑の葉なら見えるのだが、その足元にあるかもしれない寒牡丹までは見えない。

忍術を使えば庭に入る事など容易いのだが、六花は木ノ葉の里では一般人であり、昼間に堂々と不審な行動をする事は出来ない。

「充分、不審だよ？」

「う、うん…」

心の中の声に対し、鞆の中に居るゼツからツッコまれ、六花は気まずそうに首をひつ

こめる。

庭を見ることは諦め、六花はその場を後にした。

しかし六花の顔はにこやかで、足取りも軽い。

扉間が亡くなって二十五年近くが経った今でも、二人の家はちゃんと在った。その事実だけで充分、嬉しかった。

しかもこの家は今、三代目火影・猿飛ヒルゼンの直接の指示の元、他里からの要人・来客の為の宿泊施設として運営管理されているそうだ。その事実もまた、“芙蓉”にはとても嬉しい…。

「ごめんください。こんにちは…あの、表の求人紙を見たのですが…」

開店前の蕎麦屋に入ると、店主と思しき初老の男性、同じく初老の女性、二十代半ばくらいの男性三人が忙しく準備をしていた。

『…!』

六花の顔を見るなり、三人の動きが同時にピタリと止まった。

その反応を見て、六花は思わず少し俯いたが、思い切つて顔を上げ口を開く。

「あの、厨房と後片付けのお仕事をさせて戴きたいのですが、まだ求人されていらつしやいますか？」

しかし、三人は口を半開きにしたまま、まだ固まっている。

六花はまさか、鞆の中に居るゼツが術でもかけたのではないかと不安になり鞆を開いたとたん、二十代半ばくらいの男性が突然喋り始めた。

「あつ、はい！こんな店で良ければ是非つ是非につ！どうぞ、どうぞ、こちらに座つて下さい！」

そう言つて若い方の男性が急いで客席の椅子を引いた。そして初老の男性も焦つて口を開く。

「お、お母さん、早くお茶を出して差し上げないか！」

「ああ、はいはい！」

「あの、お構いなく…働かせて頂く身ですし…」

その後、お茶だけではなく何故か六花の目の前には店で一番高いメニュー「大海老入り天ぷら五種盛付き蕎麦御膳」が出され、六花は申し訳ない気持ちでそれを食べつつ、舞い上がつてニコニコと話し続ける三人の話を聞かされ、六花の身の上話もあれこれと訊かれた。

この店は店主のウスタ、その妻のムギ、そして一人息子のキネタ三人での家族経営だという。先日、厨房を担当していた年配の女性が辞め、急募で求人を出していたらしい。

「どうせ働くなら蕎麦屋なんかじゃなく、甘味処にすればいいのに」

帰り道、鞆の中からゼツが六花に不満そうに言った。

「だってそんな所で働いてたらゼツが商品食べ尽くしちゃうじゃない！駄目！」

「あ、でもさっきの蕎麦団子美味しかったな」

「まったくと、もう……」

師走の良く晴れた正午。忙しく多くの人が行きかっている。六花は苦笑しながら、人をかき分けてゆく。そして、ようやく広い場所に出た。

「甘味処……か……」

そう呟くと立ち止まった。

「やっぱり六花だつて食べたいんじゃない。ねえ、食べに行こうよ？」

六花の頭には、あの日、「蝶屋」でその日の主役である樹、そして扉間、カガミ、ヒルゼン、ダンゾウ、ホムラ、コハルと一緒に樹の火影奨励賞受賞祝いをした思い出が蘇り、胸が締め付けられた。甘い思い出の筈なのに、苦い味が口の中に広がる。

「また、今度ね……」

「え〜！いいじゃん行こうよお！」

「何かお菓子を買って帰るから……」

次の日。

早速今日から六花は蕎麦屋で働き始めることになり、再び蕎麦屋の扉を開いた。

「おはよう！今日からよろしく！分からない事があつたら何でも俺に訊いてね」

「はい。よろしくお願いいたします！」

六花は笑顔でキネタに頭を下げた。そして頭を上げると、キネタは手に女物の服を持っていった。しかし、三人の制服とは明らかに違うような…

「あの、六花ちゃんには厨房の手伝いもなんだけどさ…接客もして欲しんだけどいいかい？」

「あ、は、はい…」

…どうしよう。人目に付かない厨房の仕事だから働くことにしたのに。でもここで断ることは出来ないし…

「で、これが制服！これに着替えてくれるかい？」

キネタは少し照れた様子で六花に制服を手渡した。

『…』

奥の部屋で制服に着替えて店内に出て来た六花を見て、三人は昨日と同じ反応をした。完全に固まっている。

「あの…」

「…超可愛い!!」「美しいっ!!」「お人形さんみたいだわ!」

六花の着ている制服は、赤い矢絣の着物に赤い鼻緒の草履、その上にフリフリのリルが着いた白いエプロン、頭にもフリルが着いたカチューシャだった。よもや蕎麦屋とは結び付かない風体である。

・・・これじゃ目立ちに来たようなものじゃない!・・・

はしやぎまくる三人を前に、六花はうな垂れた。

「まだ大晦日まで十日近くあるのに、蕎麦屋に行列っておかしくね?」

「なんか可愛い看板娘が入ったとかで、みんなそれ目当てみたいだぜ」

六花が蕎麦屋で働き始めて僅か三日ほどで六花の噂は広がり、木ノ葉の里の外れにあるにも関わらず、六花見たさに多くの客が里外れの小さな蕎麦屋に押し掛けてきていた。

六花はその状況に直ぐにでも店を辞めたかったのだが、責任感の強い六花は自ら働かせてくれと頼んでおきながら一週間もしないで辞めるのは躊躇われた。ようやく一週間が経ち、流石にこれではまずいと思つて厨房のみで働かせてほしいとウスタとキネタに頼んだが、「年の瀬までは接客の人手が圧倒的に足りないだよ。時給上げるから接客で頑張つて貰えないだろうか」と懇願され、仕方なく今でも接客を中心に働いている。

ガラツ…。

ようやく人の波が引き閉店間際だった店の扉が開いた。

「ギリギリに、すみません」

「いらつしやいま…！」

「!?」

「ん? ミナトどうしたの?」

店に入つて来たのは、ミナトと、赤毛で長い髪的女性二人だった。任務の帰りなのか、二人とも木ノ葉隠れの任務服を着ている。

「わあく! 本当に可愛い!! 噂以上だつてばね! ねえ? ミナト!」

「えっと、あの、お二人様ですよ。あちらの奥の席へどうぞ…」

自分を見て両掌を口の前で合わせてはしゃぐその女性から目を逸らし、六花は二人を奥の席に案内した。そして六花は急いで厨房へ引つ込む。

…まさかこんなに早くミナトさんに会つてしまうなんて。でも、それも想定内よ…。六花は何事も無かつた顔をして二人の席へお茶を運んで行く。

ミナトも特に無反応のまま、少しだけ笑みを浮かべて六花を見ていた。

そして六花は笑顔で二人の前にお茶を置きながら口を開く。

「ミナトさん、お久しぶりです。この前はご迷惑をおかけしました。」

「また木ノ葉の里へ戻って来られてたんですね。」

「え？二人共知り合いだったの？！」

「うん。一ヶ月前のあの任務の時の…ね」

ミナトの言葉を聞くと女性の顔色は変わり、少し厳しい顔で六花を黙って見つめてきた。どうやらミナトはあの日の事をこの女性に話している様である。

「申し遅れました。六花と申します。昔、火の国の大名付きの忍をしておりますが、今は引退して両親の故郷である木ノ葉に暮らしております。あの、あれからカカシ君とリンちゃんは どうしていますか？」

「こちらこそあの時はご迷惑をおかけしました。お陰で、二人とも元気です。」

「そうですか…良かった。あ、すみません。ご注文はお決まりですか？」

六花は敢えて自分から個人情報を伝え、カカシとリンを心配して見せた。その程度でミナトの疑惑を晴らすことは出来ないだろうが、ここで下手に隠す方が疑惑を深めるだけである。今は疑惑を晴らすのではなく、疑惑を深めない事が何よりも重要だった。

六花は注文を聞き終わると穏やかな笑顔を見せ、厨房へ歩いて行った。

「ねえ、スパイが看板娘なんてするかな？あんな派手な格好で…」

「うん。そうだね。だけど可能性はゼロじゃないよ。もしかしたら任務は終わっているのかもしれないね。戦争も終結に向かっているし…」

ミナトとクシナは蕎麦屋の帰り道、二人で歩きながら六花のことを話していた。二人の頭に、帰り際の六花の顔が浮かぶ。

『ありがとうございました。次はぜひ、カカシ君とリンちゃんも一緒に…あと、私にできる事があつたら何でも仰つて下さい。ご協力しますので』

ミナトがふと、帰り際に六花から手渡された蕎麦団子の入った袋に目を落とす。

「暫く様子を見ようつてばね。もしかしたら本当に平穏な生活をしているのかもしれないし。そうだったら、なんだか可哀想…同じ女として」

クシナがミナトの視線を追いながら言った。

「うん。そうだね…」

微笑むミナトの横顔を見て、クシナが口を尖らせて言う。

「でもミナトつたら嘘ついてた。『女』じゃなくて、『美女』だったつてばね!」

「い、いや、それは…」

六花は今、里の外れの二階建てのアパートの二階の小さな部屋に住んで居る。

夜は更け、外は静まり返っている。

「やめてっ……」

「やめるのは六花のほうでしょ? あんなに人気者になっちゃつて…楽しい?」

「ち、違うわ．．．いやっ!」

「お金はマダラが沢山残してるから生活には困らないのに、どうしてそこまでして働くのさ? そんなに男にチャホヤされてたいの? ねえ!」

「違う!．．．お願い、もう、もうやめてっ．．．」

「やめないよ。六花のご主人様は誰だっけ?」

「．．．ああつんっ．．．っ!!」

「もう我慢の限界だよ．．．僕。毎日、毎日、目の前で六花が沢山の男たちの眼で犯されていることがっ!!」

「辞める．．．辞めるから! お願い．．．やめてっ．．．」

六花の言葉は虚しく消え、悍ましい営みは夜もすがら続いた。

つづく

続・六花の森（４）　　～新たな救世主の誕生

桜が散り、気温が高い日が続いている。

多くの人が行き交い陽炎が立つ、里の大通りの風景がまぶしい。

しかし、建物の軒先で手拭を頭から被って顔を隠し、その光景を眺めている六花の表情は暗かった。

四カ月前、年が明けて間もなく、六花はあの蕎麦屋を辞めた。

大晦日の前日にミナトが再びクシナと、そしてカカシとリンを連れて店に蕎麦を食べに来てくれた。きつとミナトが抱く疑惑は晴れてはいないだろうが、カカシとリンを連れて来てくれたことで、疑惑は深まっていない事を確認できて安堵した。そして、大晦日の営業が終わった後、キネタから求婚された。その二つを理由に、六花はようやく店を辞めることが出来たのだった。

それから今日まで、昼間は寂しい時間を過ごし、夜は悍ましい営みに耐える日々だった。

そして、ヒミコとは数ヶ月会っていない。

どうやら満月の日であったても、曇りや雨で月が隠れている時は現れることが出来ないように、会えない時が続き寂しかった。

しかし、六花は只ぼうつとしていたわけでは無い。

六花は、木ノ葉の忍の動きを偵察し、常に忍界の情勢について把握するようにしていた。

六花の暗い表情の理由：それは昨日知った、カカシとリンの任務についてだった。

現在、ミナトは数名の忍を連れて二日前から別の任務で里を不在にしている。

そこへカカシを隊長とした三人一組の班が作られ、火影から任務を任される事になった。任務の内容は、霧隠れの忍が湯の里に侵入して不穏な動きをしている件についての調査だ。戦争は終息したものの未だに各地で火の粉はくすぶっており、木ノ葉の里の忍たちにとって、その火消しが重要な任務になっていた。

カカシはあの日、オビトから写輪眼を譲り受けた事により新術を完成させることができ、精神面でも成長し、それから幾つも難しい任務をこなしていた。

しかし、そこには毎回ミナトの姿があった。

今回はミナトが居ない初めての任務である。

成長したカカシと、同じく医療忍者として更に成長しているリンならば、きつとうまくやってくれるだろう。

しかし、六花は言い知れぬ不安を感じていた。

そこに、自分の仕組んだ事でオビト、カカシ、リンに傷を負わせてしまった罪の意識も加わり、助けてやらねばという気持ちに更に不安を助長させていた。だが今の自分の立場を考えると、下手に手を出して事態を悪化させては元も子も失う。

色々と省みて、六花は黙って二人を見送ることに決めたのだが、やはり不安な気持ちと何も出来ないもどかしさで表情は暗くなつてゆくのである。

そして、六花の表情を暗くさせるもう一つの理由……

それは勿論、マダラのことである。

ゼツはどうやらアジトを出入りできるらしく、時々アジトに戻つて来てはマダラの様子を伝えてくれるのだが、なんと、マダラはまだ生きているというのだ。

嬉しい反面、何か問題でもあったのだろうか、マダラは一体何を考えていて、どうするつもりなのだろうかと心配になる。

しかしその心配はマダラの死を願うようでもあり、やり切れない気持ちになる。今すぐにもマダラの元へ飛んでゆきたい。

しかしそれは出来ないし、マダラが望むことでは無いだろう。

六花は空を見上げた。空は、白い雲が浮かぶ薄い青空だった。

……同じ空の下に居るのに、なぜ会えないの？……

◆
「…身体が…馴染んできてる…もう少し…もう少しで会えるぞ…リン！カカシ！…
「ねえ！さっき外行ってきたんだけど、君の言つてたリンとバカカシっていうのがヤバ
イよ！！」

「！！何があつた！！」

岩壁から出て来た白ゼツの言葉に、オビトは飛び起きた。

「二人きりで霧隠れの忍達に囲まれてる！！」

それを聞いてオビトは寝台から飛び降り、入り口を塞ぐ一枚岩に向かって走つて行つた。

ダツダダダダツ…ガツ!!!

そして思い切り右腕で岩を殴った。しかし。

ズリュツ!!

「ぐあつ!!…」

オビトの右腕は千切れそうになり、かろうじて肩にくっついたまま床に落ちた。

白ゼツはオビトに駆け寄った。

「その身体じゃ岩は壊せやしないよ」

「ぐつ…リンとカカシを…助けに行かなきゃ…!!」

「僕の体を着るといいよ」

すると白ゼツは顔面から身体を蔦状に広げると、オビトの身体にまとわりつき、そのまま身体を包み込んでゆく。

「…お前ら…マダラの部下だろ…いいのかわ？」

するともう一人の白ゼツが壁から現れ、答える。

「その子は…良い子だ」「リンとカカシを助けたいんでしょ？」

「…ありがたうお前ら!!」



ダダダダダダツ…

六花は急いでいた。

数ヶ月ぶりに戦闘服を身に纏い、夕方の曇天のもと、六花は春の野をひたすら走っている。

「ねえ、僕の言うことを聞かないでこんな事して、後でどうなるか解ってる？」

「そんなこと言いながら、ちゃんと一緒に来てくれてるくせに」

「無駄足だと思おうよ？大丈夫だってあの二人なら。ねえ、今引き返すなら許してあげても良いよお？」

「うん。そう思うけど、どうしても胸騒ぎが止まらないの…この眼でしっかり見ないと

！」

「ハア〜」

「あ！リンちゃんとカカシ君を見つけたわ！」

「うん、無事みたいだね。さ、帰る？」

「…!! ねえ、リンちゃんのチャクラがおかしいわ！このチャクラどこかで…あつ！」

「カカシ！直ぐに私を殺して！私は利用されている…霧隠れの忍に三尾を身体の中に入れてられた…このままじゃ木ノ葉を襲うかもしれないの！」

・・・そう、尾獣だわ！九尾と同じ!!・・・

六花はリンの言葉を聞き、心の中で叫んだ。そして、敵が三尾をリンの中に入れることにより木ノ葉の里で暴走させようという事を直ぐに察した。それが分かった以上、直ぐに二人に接触するのは危険だ。

六花は焦りを何とか抑えつつ、霧で煙る森の中、二人と並走する。

「オビトにお前を守るって約束した！そんな事は絶対に出来ない。何か必ず別の方法があるはずだ！…」

「…私の万華鏡写輪眼なら、マダラさまが九尾を操ったように三尾を操れるはず!!…」

「…うん。でも一度人柱力になった人間は尾獣を抜かれたら死ぬよ…」

「…そんな!!じゃあどうしたら…!!…!!…!!」

ビュンビュン・・・ガン！ガン！

リンとカカシを追う霧隠れの忍が二人を攻撃した。

「このままじゃ二人が敵に捕らわれてしまう！」

…シユ！…シユ！

六花は刀を抜いて霧に身を紛らせると、後方からリンとカカシを狙う敵二人を写輪眼で動きを止め、静かに息の根を止めた。

しかし、もう二人、敵が横をすり抜けリンとカカシに近づいてゆく。六花はその敵二人を追う。

ダダダダダツ・・・ザツ！

ザツザツザツザツ・・・ザザツ！

!!?」

“二人”の眼に同時に映ったのは、信じられない光景だった。

カカシの右腕が、リンの心臓を貫いていた。

「・・・嫌っ・・・」

六花は両手で顔を覆った。

ブワッ！ザシユツ!!グサアツ!!

ゼツが体のかたちを変え、後ろから六花を切りつけて来た霧隠れの忍からガードし、

そして体を尖らせ突き刺して倒した。

「六花！ぼうつとししないで！早くここから離れるんだ！早く!!」

「・・・っ！」

六花は急いでその場を走り去った。

ハアハアハアハア・・・

六花は河原に出ると、石の上に両手をつけて肩で大きく息をしている。ボタバタと汗と涙が入り混じった大粒の雫が河原の石に滴り落ちてゆく。

「・・・リンちゃん・・・カカシ君・・・私が・・・私が最初から着いて行つていればこんな事には・・・」

「今回は全く六花に責任なんて無いじゃん！まあ僕が止めたのに言うこと聞かずに来ちゃったからこんな場面見る事になっちゃったけどねえ。さ、少し休んだら家に帰ろう」

・・・あーあ。あれを見せない為に、せっかく六花をアジトから遠ざけておいたのに・・・

ゼツは心の中で大きく溜息を吐いた。

そして六花はゆっくりと顔を上げる。

目の前の河の川面にはキラキラと揺れる水溜りが出来ていた。

フツと空を見上げると今宵は満月で、辺りは煌々と月明りで照らされている。

「・・・満・・・月・・・」

．．．ザツザツザツ．．．

「!?」

音の方を見ると、黒いマントを身に纏った人影が走っている姿が見えた。感知をしてみるとそれはオビトだった。

「オビト君だわ!? どうしてこんな所に!?」

そう眩き終わる前に六花は立ち上がり、オビトの後を追って走り出した。

◆

「この世の因果を．．．断ち切る。その為に戻ってきた。」

オビトは二度と戻ることは無いと思っていたマダラのアジトに再び戻って来た。

そして、マダラと距離を取って対峙している。

「フツ．．．誰にも見られてはいないだろうな?」

マダラの問いに白ゼツが答える。

「見たのは僕だけ。オビト：敵を皆殺しにしちやつたから大丈夫。ただ、カカシだけは殺す気なかったみたい。でもカカシは何も見えて無いよ：木ノ葉の増援が来た時『誰が敵を!?』ってわめいてたし：」

「．．．かつての仲間だけに未練があつたか．．．?」

「違う：：どうでも良かったただけだ。この世にアイツが生きていようが死んでいようがも

うどうでもいい…これから創る世界にカカシは居る…リンも…俺に、夢の創り方を教えてくれ…マダラ」

オビトのその言葉を聞くと、マダラは得も言われぬ顔でニヤリとした。

「もう礼は要らん…こつちへ来い…今日からお前が救世主だ」

…

「…この黒い棒は俺の意思をカタチにして作ったものだ。これは六道の術の時に使え」

オビトはその黒い棒をマダラからしつかりと受け取った。

そして、マダラに背を向け出口へと歩いてゆく。

…ブチブチブチツッ！

その音に、オビトはマダラの方へ振り返った。

すると、マダラは魔像と繋がっていた蔦を切っていた。

そして苦しそうな目と荒い息でオビトを見据えて言う。

「…さあ動け…俺が復活する…までの間…お前が…うちはマダラだ…」

オビトは頷き、また前を向いて出口に向かって走って行った。

「…いつまで…隠れてる…気だ…六花…」

その声と同時に六花が入り口の岩の影から飛び出し、マダラに駆け寄った。

「マダラ様っ!!!」

「…本当に…世話の焼ける…奴だ…お前は…」

「ホントだよ。せっかくここから遠ざけといたのにさ、自分の足でここまで来ちゃったんだよ？六花ったら。」

ゼツが六花の左肩に載ってマダラに言った。

「…六花…見ていた通りだ…俺が復活…するまで…オビトを…手助けしろ…」

「は、はい!!…マダラ様!マダラ様!!」

「だーかーらー焦り過ぎだつて六花。予定通りなんだからさあ〜」

「…フンツ…」

マダラは僅かに笑うと六花を抱き締めた。六花もマダラをギュツと抱き締める。

しかし、徐々にマダラの腕の力は抜け、心臓の鼓動は小さくなってゆく。それに反比例して六花の腕にはますます力がこもり、鼓動は速くなってゆく…

遂にマダラの力は全て抜け、マダラの全体重が六花に押し掛かった。

六花は、しっかりとマダラの身体を受け止め、最後にもう一度ギュツと抱き締めた。

そしてマダラの身体をゆっくりと地面に寝かせると、その顔を覗き込む。

「…待ってる…待ってるから…あなたが…皆と一緒に世界を救うのを…ずっと!」

六花はマダラの両頬を優しく両手で包み込むと、そつと口づけをした。

「待って」

その声に、オビトはゆっくりと振り返った。

その右目には、万華鏡写輪眼が浮かんでいる。

・・・万華鏡写輪眼：やっぱり、オビト君はさっきの場面を見ていたのね・・・

「・・・アンタは、確か・・・俺に何の用だ？」

目の前に居るオビトは、以前自分を介抱してくれた元気で優しいオビトとは、まったくの別人だった。

その事に六花は胸が苦しくなり、思わず俯く。そしてまた、ゆっくりと顔を上げた。

「その眼：：アンタもうちは一族か？」

「私は、うちはマダラの・・・下僕です。六花と申します。」

「・・・」

「本当のうちはマダラが復活するまでの間、あなたの手助けをしろと命令されています。これから私も、あなたと行動を共にします。」

「必要ない。邪魔だ消えろ！」

ビュウウウ・・・

先ほどまで吹いていなかった、湿気を帯びた風が吹き抜けてゆく。

月はもう随分と高く昇っていた。

「でも……」

「邪魔するなら、お前を殺す！」

「……！」

六花は少し怯えた顔になり、目を泳がせた。

すると、肩に載るゼツが口を開く。

「六花、帰ろう。いいよ、こんなガキに着いて行かなくて。必要な時だけ手を貸してやればいい」

「……お前は、黒ゼツ？」

「ああ、さつきマダラが白ゼツの半身にくっ付けてた黒いやつの本体が僕ね。あっち分身だから」

「お前らが誰なんてどうでもいい。俺に構うな！消えろ！」

「言われなくたって消えてやるよ。でも言つとくけど、お前に六花は殺せやしないよ。ううん、殺させない。絶対にね……それがマダラの意味だから。」

「ゼツ……」

「ほら六花、家に帰るよ」

その言葉に、六花は静かに頷いた。

そして悲しそうな目でもう一度オビトを見て言う。

「私は木ノ葉の里に居ます。必要な時は黒ゼツを使つて連絡を下さい。では・・・」
そう言うのと六花はオビトの前から姿を消した。

「・・・」

オビトは少しだけ何かを考えた後、また直ぐに歩き出した。



今日中に木ノ葉の里まで帰ることは諦め、六花は野営をする事にした。

薪を焚き、暖と灯りを取る。しかし今宵の月光は強く、それでも当たりの月明りは薄れない。

満月を見上げると、先ほどのマダラの死の悲しみが急激に込み上げてきて、そのまま涙になって目から溢れ出た。

またきつと、会える。

しかし、今度こそもう、マダラはこの世に居ない…幻術では無い。

初めて二人が結ばれたあの夜も満月だった…

そして夫婦の契りを交わしたあの夜も満月だった…

月はいつても、例えふたりが遠く離れていても、同じく照らしてくれていた。

しかし、今はもう、マダラは居ない。

「やっぱり人が死ぬのは辛いわよね。予定通りだとしても」

その声に六花は顔を正面に向けた。

カグヤがゆつくりと歩み寄り、六花の隣りに座った。炎に照らされている体の部分だけ、透けている。

「……ヒミコさん……あつ！でもゼツが！」

「大丈夫よ。私が現れる時はゼツを眠らせてあるから。それより、大変だったわね。今日、も」

そう言つてヒミコは拭えるはずもない六花の涙を人差し指で優しく拭つてくれた。

「今日も?……ああ、ええ……」

六花はハンカチを取り出して涙を拭いながら、少し苦笑して答えた。

「あなたは男に尽くし過ぎよ。ゼツのことも甘やかし過ぎ。まあでも、それがあなたの男の操り方なんだろうし、それもアリなのかしら?」

「操るなんて!私はただ……」

「愛してるだけ?夫が居るのに?ふふつ」

六花は眉間を寄せ苦しい表情になつて俯いた。返す言葉など無い。

「ごめんごめん、意地悪言つて。あなたを責めたりなんかしないわ。男なんて女を抱くことではしか愛を確認できない下等な生き物よ?それに比べて女は心を捧げる崇高な生

き物：一方、常に男の愛情を確認しないと安心できない脆さもある」

六花は顔を上げて、不思議そうな顔でヒミコを見た。前回のヒミコの発言に対し矛盾を感じる。ヒミコも自分の弱さを自覚しているのだろうか？

ヒミコは微笑みを湛えたまま、遠くを眺めている。そしてまた六花を見て言う。

「だからこそ、男を利用していいのよ」

「・・・？」

「マダラは愛に対して絶望する一方、あなたの愛に支えられていた矛盾する存在だった。あなたが芙蓉の時も、そして六花の今も：あなたは女神よ。搾取されているんじゃない。与えてあげてるの：ゼツにもね。そこに快感の一つも無くてどうするのよ。ねえ？」

「・・・！」

六花は目を見開き、地面に視線を泳がす。心臓の鼓動が速くなり、六花はそれを収めようと胸を手で押さえた。

「あのオビトって子もそうね。リンを愛し守るっていうその強い気持ちに支えられていた。結局それを果たせず自ら闇に落ちてしまったようだけど：そう、それだけ女が男に愛されるということは、女が男を支配しているも同然のことなのよ」

六花は歪めた顔を少し緩め、今度は寂しい顔をし、膝の上にゆつくりと手を重ねると

ヒミコに向かつて問う。

「・・・でも、私は本当に、マダラ様に愛されていたんでしょうか？」

「あはははは！・・・本当は解つてるくせに・・・でしょ？芙蓉」

「・・・」

「大丈夫よ。マダラにはまた必ず会えるから。それまでこの世に生きている毎日を精一杯楽しみなさい。それは罪なんかじゃない。あなたに与えられた権利。そして、私の願いよ」

ヒミコはにっこり笑つて、膝に載せている六花の手の上に左手を載せた。その手はすうっと六花の手をすり抜けたが、確かに六花の手を握つている。

「失うものがあるから得るものがある。それもこの世の摂理ね。ふふっ」

そう言つて笑うヒミコの顔を、六花は少し目を細めて見つめた。

ヒミコが失つたものはどれほどのもので、得たものはどれほどだったのだろうか・・・。

「そんな顔しないの。ね？笑つて？」

六花はまだぎこちないが、精一杯笑つて見せた。

月明りに照らされ、六花の瞳はキラキラと輝いている。

「そう。それでいいわ。ふふふっ」

そう言つと、ヒミコはすうっと姿を消してしまった。

六花は身体を正面に戻し、ボウボウと燃える炎に目を凝らすと、炎の温かさが最後に感じたマダラの体温と重なる。

あの体温をまた感じられる日を、感じ続けられる日々を想像する。
ゆつくりとその場にうづくまって横になると、そつと目を閉じた。

つづく

続・六花の森（5） ～六花VS大蛇丸!!

「あら？六花さんじゃない！お久しぶりってばね！」

六花が商店街の生鮮食品の店から出たところでバツタリとクシナに会った。

「クシナさん…お久しぶりです」

六花は胸がチクリとするのを感じながら笑顔で会釈をした。

クシナは鞆を肩に掛け直すとニコニコしながら六花に歩み寄ってきた。

「元気？もう新しい仕事は見つかった？」

「はい。実は六月から小さな喫茶店を一人で始めたんです」

「へ～喫茶店！素敵ね！今度ミナトと一緒に行っていい？」

・・・あれ？クシナさんお腹、大きい？・・・

六花の視線に気づき、クシナは少し照れくさそうにお腹を摩りながら言う。

「あのね。ほら、見ての通りで私はいま産休なんだってばね。へへっ」

「おめでとうございます！予定日はもう直ぐですか？」

「うん。まあね…」

「あのこれ、私のお店の名刺です。狭いお店ですけど、いつか良かったら」

六花は鞆から名刺を取り出し、クシナに手渡した。

「ありがとつてばね！女性一人でお店は大変だろうけど頑張つてね」

「こちらこそ、ありがとうございませう！クシナさんもお身体大切に」

二人は笑顔で手を振り別れた。

カチャカチャ。ガチャツツ・・バタン。パチツツ。

六花は店に入ると早足でキッチンへ行き、買って来た荷物と鞆を台の上に置く。そして生鮮品を冷蔵庫にしまっていると、鞆の中からゼツが這い出てきた。

「昨日は閉店時間を三十分もオーバーしてたよ。今日は絶対に閉店時間を守る事！」

「分かっているわよ。そうは言ってもお客さんが居るんじやピシヤって閉めるなんて無理よ」

「じゃあ閉店時間を早めればいいだろ？」

「これ以上営業時間を縮めたら何のためにお店をしているか分からないわ」

何度繰り返されたか分からないこの押し問答が今日もまた始まり、六花はうんざりとする。

カカシとリンの事件…そしてマダラが死んだ日からもう直ぐ四カ月が経とうとしている。

あの日から一週間後、六花は飲食店を始めると決めた。

勿論ゼツからは大反対されたが、「飲食店なら客から里や忍についての情報が得られる。喫茶店ならゼツも毎日お菓子が食べられる」というメリツトを説明した上で、マダラの死後ひとりでも何もしないで過ごすのは辛いと本音を訴えた。それでも渋るゼツに、「午後一時〜五時までの営業で」という条件を提示し、何とか認めさせたのだった。

しかし、本当は食事をメインとする店がやりたかった。

「食」はこれまでの人生の中で自分と大切な人たちを繋げる大切なものであり、料理は「芙蓉」の生き甲斐でもあったからだ。

それでも、菓子だって料理には違いないし大切な「食」である。菓子メインでしか作れないにしても、食べに来てくれる誰かの為に料理することが毎日楽しかった。

「ついにあの『黄色い閃光』が四代目かあ」

「ああ。まだ若いけど彼なら文句なしだよ」

カウンター席に座る二人の忍の会話が耳に入り、六花はそつと目だけを上げて二人を見た。しかし会話に入ることはせず、静かに珈琲を淹れている。

「お待たせしました。珈琲です」

六花はカウンターの席まで行き、二人の目の前にそれを置いた。

二人は「どうも」と言って直ぐに会話に戻る。

「でも大蛇丸も、最後まで自分に任せろってしつこかったよなあ」

「大蛇丸は三代目の愛弟子で三忍の一人。確かに実力から言ってもミナトと同じかそれ以上だしな。でも人望が無いっつかーか、まあ火影の器じゃねえな」

・ ・ ・クシナさん、喜んでるんだろうな ・ ・ ・

六花は心の中でそう思いながら片づけた皿を洗い始めた。そして少しだけ寂しく、そして羨ましい気持ちになる。

・ ・ ・私も二代目火影になった扉間さまのこと、傍で支えてあげたかったな ・ ・ ・

この日は閉店時間の五時丁度に店を閉めることができ、六花は店内の清掃を始めた。客席のテーブルを拭きながら、六花は満足そうな顔で店内を見回す。

店は二十畳ほどと狭く、築三十年と少し古い物件だが、六花が磨き上げたチーク材の床は黒光りしている。客席もカウンターと四人掛けテーブル席が二つ、二人掛けが四つだけ。古物店でデザインは違いではあるがウォールナット素材で揃えた。各席の上には白熱灯の灯りを設置し読書や書き物をしやすくした、六花のこだわりの客席である。

この光景は、毎日見ても飽きない。

カウンターの内側のキツチンで、ゼツが余った商品のパウンドケーキと白玉団子を食べながら六花に向かって話しかける。

「さっきの客が言ってた大蛇丸。六花も気を付けるんだよ?」

「ええ。なんだか前から怪しい動きをしているわ。怖い…」

「六花の身体の秘密が奴にバレたら何されるか分からないよ」（ゼツは六花の不老は母・カグヤの力によるものだと思っている）

「うん…でもミナトさんも四代目火影に就任したし、三代目火影も流石にもう大蛇丸の行動を見てみぬ振りは出来ないんじゃないかしら？」

「あんなヤバイ奴、さっさと始末して欲しいよ。まったく！」

六花は清掃と片付けが終わるとゼツを左肩に載せ、二階の住居へと続く階段を上って行った。

「もう…またなのゼツ？さっきも…」

ようやく眠りについたものにも関わらず、再びゼツが六花の太腿に触れてきた。

と、思ったのだが…

布団を避けて覗いてみると、それは細長く白い物体で、ニョロニョロと動いている。良く目を凝らして見ると…

「キヤア!!」

六花が悲鳴を上げると同時にその白い物体は六花の太腿に噛みついた。それを合図に、白く細長い物体がどこからか次々と現れ、あっという間に六花の身体を覆い尽くし

てゆく。

「キモツ!!」

六花の左肩に載るゼツが叫んだ。

「噂をすれば・・・みたいね。」

「あら、私の蛇に気が付いて変わり身の術で即座に逃れられるなんて、やはりただのくノ

一じゃ無さそうね。アナタ」

開錠され開け放たれた寢室の扉の前に、大蛇丸が立つて居た。

「・・・。」

シユンツ!

六花は無言で大蛇丸の目の前から消えた。

「逃がさないわよ…フツツ」

「あんな奴、あの部屋でやつつけられたじゃん! わざわざ外に出る必要がある? 人に見られたら面倒だよ?」

「だってせっかく借りたばかりの店舗兼住居を破壊されたら困るでしょ!!」

「こんな時までお店のことかよー」

「当然!!」

六花は街灯の無い真つ暗な住宅街を抜け、公園に出た所で足を止めた。公園には一つ

だけ小さな灯りがついており、夏に湧く虫たちがその灯りに群がっている。

そして、六花は素早く後ろに振り返った。

「女が夜中にそんな格好で全力疾走なんて、はしたないわねえ。ま、かき捨てるの恥になるでしょうけど。」

六花は寝間着の浴衣のまま飛び出してきており、下着はショーツしか履いていない。髪は乱れ、はだけた浴衣からは胸の谷間がのぞいており、足は裸足である。

しかし左手には、マダラから授かった愛用の刀がしっかりと握られていた。

「……………」

「無口な子ねえ。アナタやっぱりどこかの里のスパイなの？」

「なぜオレを狙う？」

「ミナトが話していたのを聞いちゃったのよ。瞬身の術のマーキングを消した女が居るってね…で、その女が今里に居るって。アナタのその術について教えてほしいの」

…なるほど。じゃあ直ぐに写輪眼を使うのは面倒な事になるかな…

六花は黙って刀を抜くと、大蛇丸へと構えた。

「剣術も得意なの？じゃあちよつとだけ遊んであげるわ…」

そう言うと、大蛇丸は口を大きく開けた。

すると喉の奥から一匹の蛇が現れた。更に、その蛇が口を開けると、口の中から剣の

柄が出て来た。

「…キツモ！あんな奴、刀じゃなく写輪眼と須佐能乎でサツサとぶつ殺しなよっ…」

六花の左肩に載るゼツが小声で言った。

「…殺したら私は里に居られなくなる！アイツは剣と同時に口寄せの蛇を使ってくるはずよ。私が火遁で蛇を焼くから、その間にアイツの動きを止めて。それから、里の忍に知らせてきて！…」

六花がゼツにそう言い終わる頃、目の前の大蛇丸は蛇の口から出て来た剣を右手で引き抜いていた。

そしてゼツは身体を半分に分裂させると、二つは地面に潜って消えた。

「これは神器・草薙の剣よ。アナタのその刀で敵うかしら…来なさい！」

六花は構えた刀を握り直すと、大蛇丸に向かって一直線に走り出した。

ダダダダダッ…ダンッ！

六花は空中に飛び、大蛇丸の頭上から刀を振り下ろす。

「真正面から来るなんて…馬鹿ね…!!…」

トンッ！ グッ！ バッ！

なんと六花は刀を振り下ろすフリをして、大蛇丸が防御で顔の前に斜めに両手で構え

ていた草薙の剣に片足で乗り、グツとふんばるとその反発力で大蛇丸の背後へと、前転しながらジャンプをした。

ガキイイーン!!!

六花は地面に着く寸前、刀を大蛇丸の背中に切りつけたが、大蛇丸はそれを何とか草薙の剣で防いだ。六花は十メートルほど後ろに飛び退き、再び刀を構える。

「動きはかなり良いわね。やっぱり『眼』が良いからかしら？早く、アナタの写輪眼を見せて貰いたいのだけど？」

六花はその言葉を見無視して再び大蛇丸へ向かって走り出す。

「悪いけどもう遊んでいる時間は無いみたいだわ。潜影多蛇手！」

大蛇丸は六花に向かって右腕を伸ばすと、その袖から無数の蛇が束になって出て来て六花めがけて飛んで来る。

六花は足を止め、顔の前で素早く印を結ぶ。

「火遁・豪火滅失！」

六花は口から激しい炎を蛇の束めがけて噴き出した。

ボオワアアッ!!!

「私の潜影多蛇手が一瞬で燃えた！・・・はっ!!」

蛇の束が空中で激しく燃え上がる隙に、六花はその下を滑り、大蛇丸の足元に腰を低

くして現れた。

「終わりだ」

「何?! 身体が動かない!」

ザシユツ!!!

「ぐあああつ!!!」

ドシツ!!

大蛇丸は勢いよく地面へと背中から倒れた。

六花はサツと大蛇丸に近づくとその顔を覗き込む。

大蛇丸は右足をふくらはぎから切断され、直ぐには起き上がれない状態だ。

「私を殺すつもり?…甘いわね…っ?!」

六花と目が合った大蛇丸は背中を地面に付けつつ尚もまだ何か攻撃をしようと印を

結ぼうとしていたが、その手が直ぐに止まった。

六花の眼には万華鏡写輪眼が浮かんでいる。

大蛇丸が瞼を閉じるのを確認すると、六花は直ぐにその場から姿を消した。

間もなく遠くから数人の足音が聞こえ、公園に入ってきて来た。

「大蛇丸さん?! 大丈夫ですか?!」

.....

ザアアアア．．．ザアアアア．．．

「とんだ夜になちやつたねえ。まさか本当に来るとは。こんな事になるなら先に三代目火影にチクつとけば良かったよ」

「うん、そうだねって何入ってきてるのよ！出てって！」

浴室でシャワーを浴びる六花の足元に、気付けばちよこんとゼツが居り、六花は追い払おうとシャワーを掛けたが、むしろ気持ち良さそうに目を細めているゼツを見て腹が立つ。

「明日ってもう今日か。今日は店、休みにしたら？」

「そうね…寝室の掃除もしたいし、早速三代目に密告しに行かなきゃならないしね…」

「ほんと、僕らの神聖な寝室に潜り込むなんて許せないよ！」

「怒る所、そこ？．．．ハア」

六花とゼツは木ノ葉の里についての偵察の中で、大蛇丸の怪しい動きについて知っていた。

きつかけは死体安置所から死体が無くなる事件が多発するようになった事である。

最初は他里が木ノ葉の忍の死体から情報を取ろうとしているのかと思われたが、犯人は大蛇丸だったのだ。

その後、ついに生きている人間まで居なくなるようになった。最初は下忍と中忍だったのが、最近は上忍や暗部の忍まで失踪するようになっていた。

六花とゼツはおそらく大蛇丸の仕業だろうと思っていたが、今夜の事でそれは決定的なものになったのだった。

「殺すんですか？この私を。出来ませうかねえ…アナタに…猿飛先生！」

大蛇丸はそう言うのと素早く印を結ぶ。

猿飛ヒルゼン、ヒルゼンが口寄せした猿魔、そして部下たちも身構える。

ガゴツ！ゴツ!!

ヒルゼンたちは激しく床に倒れた。全員が流血している。

その光景に背を向け、大蛇丸は隠し通路に向かって走り出そうとしたが、足を止めて振り返る。

そして、ヒルゼンと目が合った。

「……………」

ザツ！

僅かな沈黙の後、大蛇丸は暗い通路へと姿を消してしまった。

「猿飛…お前…！」

うな垂れるヒルゼンに向かつて猿魔が声を荒げた。

「…ヒルゼン…くん…」

「…わあく見逃しちやつたよ。甘いねえ。誰かさんにソックリ！ねえく六花？」

六花とゼツはこの日、六花が匿名でした密告を受けて大蛇丸のアジトに向かう事になったヒルゼンたちを追跡してきた。

そして、この部屋の天井にある通気口から一部始終を見ていた。

・ ・ ・ 大切な教え子だったのね。でも、流石にこの場合は・ ・ ・

六花はそう思ったが、不意にカガミのことが蘇った。

自分も、もっと厳しくカガミに対して線引きを突き付けておけば、あの日、あんな事にはならなかったかもしれない。

突き放す事こそ本当の愛情だったかもしれない。そう思った。

「芙蓉」を殺してしまったカガミは、あの後、一体どうなったのだろうか…。

扉間は本当に、カガミを罪には問わないでくれたのだろうか…。

「…これって絶対あとでツケが回ってくるパターンだよ。まあ僕たちには関係無い事だからどうでもいいけど。大蛇丸は六花の事覚えてないみたいだし。さっ、帰ろく…」

「…うん…」

六花は重苦しい胸を引きずりながら、静かにその場を離れた。

つ
づ
く

続・六花の森（6）　　く陽だまり。　　ミナトとクシナ

六花は白と黄色の菊が入った花束を手に、真つ赤な彼岸花が両側に咲き乱れる細い道を歩いている。

その美しい光景に目を細めていると、その中にポツンと白い存在を発見した。

小走りで近寄って見ると、それは一つだけ白い彼岸花だった。

・・・扉間・・・さま・・・

悲しそうにも嬉しそうにも見える表情で暫くそれを見つめた後、再び歩き出す。

彼岸花の細道を抜けて角を曲がると、墓地の入り口に着く。そしてその一番奥に在る墓を指して歩き出した。

西日を受けてまばゆく光る二つの大きな墓石の前に来ると、その場にしゃがみ、花束の包装紙を解いて花を四等分に分ける。

その二つを、先に左側の墓に供え、もう二つを右側に供えた。それから線香を取り出し、マッチで火をつけ、最初に花を供えた墓に置くとその前でしゃがみ、眼を閉じて手を合わせた。

…豪快に笑う顔、大きくて優しい手の温もり、いたずらっぽい笑顔…

暫くして、そつと目を開けて立ち上がると、墓石に彫られた名前が目に入る。

『初代火影 千手柱間』

そして次は右側の墓の前に移動し、その墓石を見つめながらゆっくりとしゃがむ。

線香は供えない。

生前、この香りが嫌いだと言っていたから…。

六花は少し目を細めて墓石を見上げる。

墓石の角は夕陽を受けて黄色く光っており、まるで「芙蓉」のことを待っていてくれたように思えた。

「…扉間さま…」

小さく名前を呟くと、ゆっくりと目を閉じ、手を合わせる。

…自分だけが知る歯を見せて笑う笑顔、拗ねたように照れる顔、誰よりも厳しく真剣な強い眼差し、そしてあの日、剣術の稽古のとき初めて見た涙…

秋の彼岸の中日。

他にも墓参りに来た先客が多く、六花の持ってきた線香以外の香りも漂って来る。その香りが、ここが死者の眠る場所なのだと六花に再確認させ、胸をギュツと強く締め付けた。

そして、固く閉じた目の目頭には、うっすらと涙が光った。

…コトツ。

その音に六花は目を開け、隣を見た。

「ああ…すまない。邪魔をしてしまったかな。熱心に拝んで居るものだから、声を掛けては悪いと思うてな…」

そう言つて男は、柱間の墓前に置いた酒瓶から手を離した。

六花は思わず、その男の顔を見て固まった。

しかし直ぐに微笑んで見せる。

「いいえ。こちらこそ通路と墓前を占領していて、お邪魔しました」

「ああいや、そんな事は…んん!!…んん!!…」

今度は、六花の顔を見た男の顔が固まる。

「ど、どこかで会つた事はありましたかな?」

「いいえ。でも私は三代目様のお顔は良く存じておりますわ…ふふっ」

そう言つて六花は立ち上がると、ヒルゼンの方を向いて立つた。

「お先に失礼致します」

ヒルゼンとほぼ同じ目線の六花はそう言つて頭を下げると、もと来た道に向かつて歩き出した。

ヒルゼンは茫然とその様子を見つめていたが、不意に六花が無心で拜んでいた墓石を見た。

それはヒルゼンの師である千手扉間の墓だった。

「！」

ヒルゼンはもう一度、遠ざかる六花の後ろ姿を見つめた。

・・・あの女（ひと）は！……いやしかし、そんな筈は！……

ヒルゼンが戸惑っているうちに六花は角を曲がって姿を消してしまった。

◆

開店三十分前。

六花は鼻歌交じりで、白・ピンク・深紅の三色の秋桜を花瓶に生けていた。

「何？ 妙に今日は機嫌がいいじゃん」

むしやむしやとクツキーを頬張りながらゼツがぴよんと六花の左肩に載った。

「ちよつと！ 何食べてるの？！ それさつき焼き立てのクツキーじゃない！ それはこれからミナトさんとクシナさんに出すものなの！」

「疑われている相手に会うのがそんな嬉しいの？ 変なの〜」

「二人に会うのも嬉しいけど、この花を見ると……気分が明るくなるの。だってこの花は……マダラさまが好きでしょ？」

「顔に似合わず花好きだったよね〜マダラ」

「過去形で言わないで・・・つて、あ！二人が来るわ！早く隠れて！」

・・・ガチャツ。

「六花さん、こんにちは〜」「お邪魔します」

ミナトが店のドアを開けると、クシナが大きなお腹を支えながらゆつくりと先に店内に入り、ミナトがそれを見届けると後から入ってドアを閉めた。

「ミナトさん、クシナさん、ようこそ！いらっしやいませ！」

六花はクシナに駆け寄ると、触れはしませんがクシナの背中に左手を当てて、右手で一番奥の四人掛けの席へと誘導する。

「…開店前から入っちゃつて、本当に良かったの？悪いつてばね」

「ええ。最近是有難い事に満席になることもあるので…それにミナトさんは時の人でしょう？開店後じゃ入りにくいでしょうし…それに、お二人は私に訊きたいことがあるんじゃないかなつて…ふふつ」

そう言つて笑う六花を見て、クシナとミナトは顔を見合せて苦笑した。

「でも、本当に素敵な店だつてばね！満席になるのも納得だわ〜あはは」

「うん。シンプルで統一感があつて落ち着く空間だね！」

「ふふつ。ありがとうございます。飲み物は何になさいますか？あ、本日のケーキは栗

のパウンドケーキです」

二人は焦って目の前に出されたメニユー表に目を落とす。

「わあく珈琲と紅茶だけじゃなくて、日本茶も色々あるんだってばね！あ、ジュースもあるし。妊婦にも嬉しいし」

「妊婦さんには牛蒡茶とタンポポ茶がおススメですよ。カフェインも無いし栄養豊富です。香ばしいから意外とケーキにも合うんですよ」

「へ〜じゃあ私タンポポ茶にしてみよつと。えつとケーキはどれにしようかな。あ、ミナトは？…」

二人は肩を寄せ合い仲良くメニユーを見て楽しそうに相談している。

六花はキッチンでお湯を沸かしながら、その様子を、先ほど生けた秋桜越しに微笑ましく見ていた。

窓からは九月最後の秋晴れの陽射しが床を照らしており、反射した光がちょうど二人の顔を明るく照らしている。

「お待たせしました。タンポポ茶と珈琲、本日のケーキとチーズケーキです。あと、これは私から、クッキーです。さつき焼いたばかりなんですよ。良かったら、どうぞ」

六花はテーブルの上に飲み物とケーキ、そしてクッキーを並べ終わると、二人の前に

椅子を引いて腰かけた。

「ミナトさんも火影に就任されたばかりで、クシナさんもご出産前の大変な時に、わざわざありがとうございます。なんだか少し申し訳ないです…」

「だって、甘い物が食べたくなってもう我慢の限界だったんだもん！いつ行くの？今でしよって感じだったんだってばね！」

「ははは…そういう事です」

六花は二人の言葉を聞いて、僅かに目を伏せた。そして口を開く。

「それで、あれから何か、私について分かりましたか？」

「えっ…いいえ…大蛇丸さんの事を密告したのがあなただという事しか…」

「私については以前ミナトさんにお話した事、そして年末にお話した事が全てです。ただ…本当はもう、私は木ノ葉の里に居てはいけない人間だという自覚があります」

「木ノ葉の里に居ては、いけない…?」

クシナが怪訝な顔で問うた。

「身内が…うちは一族の父が、里を裏切つて抜け忍になったんです。それで、母は共犯を疑われ裁判にかけられました。その後母と里を出たんです。それから結婚して、昨年夫が亡くなつてた一人になった時、最初に思い浮かんだのは木ノ葉の里でした。もう私に生きている家族はいませんが、火の意思”さえもつていれば、今でもこの里と、

里の人たちと家族として繋がっていられるかなって…都合がいい考え方ですけど…私、やっぱり木ノ葉の里が大好きなんです」

「火の意思…か…」

ミナトは小さく息を吐いて、目の前の珈琲に目を落とした。クシナもその視線を追うように、一緒に目を落とす。

火の意思。

それは木ノ葉の忍しか口にしない言葉である。

「…あの…六花さんの旦那さんって、どんな人だったの？」

六花はクシナの質問に、フツと優しい顔で微笑むと、寂しそうに俯いた。

そして少し沈黙した後、六花は話し始める。

「火の意思って、木ノ葉の里を守る強い意志のことですよね…でもそれって、忍が居るこの世界が、やがて手を取り合い平和を築こうという意思へと繋がっていると思うんです」

その言葉を聞いて、クシナとミナトは目を見開くと顔を見合わせる。

「私の夫は、その火の意思を宿しているひとでした…」

「今も、大好きなんだってばね…旦那さんのこと！」

「ええ。愛してます」

三人は顔を見合わせ、ニツコリとした。

「だから、本当に、私に協力出来る事があれば何でも言ってお下さい。忍として、木ノ葉の一員として、何でもしますから……！」

六花がそう言い終わると、クシナがクツキーに手を伸ばす。

「じゃあ、まずは六花さんのクツキーいただきちやおつと……ん！美味しいく!!」

「……うん、チーズケーキも絶品だよ！」

あははは……

三人は笑い合つて和やかな時間を過ごした。

やがて開店の時間になり、六花は外に看板を出すと、早速三人の客が入店してきて六花は明るく挨拶をする。

ミナトとクシナは、六花が本当に楽しそうに働いている様子を柔らかな表情で見ている。

そして、クシナはミナトの膝の上にある掌にそつと自分の掌を重ね、二人は笑顔を見せ合つた。

短い営業時間を終え、六花は笑み笑みと皿洗いをしている。

その目線の先には秋桜と、あの二人が居たテーブルがある。

「六花、もうあの二人とは会わない方が良いよ」

ゼツがぴよんと飛び跳ね、その視界の中に現れた。

「え？どうして？まだ疑われてるから？」

「うん」

「疑いなんてそんなに簡単に晴れないわよ。いいの、疑われていても。少しづつ信用して貰って、そして、里の人たちの力になれば……」

そう言つて六花は再び目を細めて、二人の居たテーブルを見た。

するとゼツがぴよんと飛び跳ね、いつもの様に六花の左肩に載る。

「あの二人だけじゃなく、この里の人間とは仲良くしない方が良い。悲しい想いをするのは、六花だよ？」

ゼツの言葉を聞き、六花は何度か瞬きをすると悲しい顔に変わり、そのまま目線を手元の泡の付いた皿に落す。そして力を込めて皿を洗う。

「……そうだね。やつぱり、私なんか今の時代の人と深く付き合うのは良くないね……」

「僕が居るんだからいいじゃん」

「えええー」

「何だよ！」



空はどこまでも青く、吹く風も澄んでおり、里の風景もくつきりと鮮明に見える。

六花は店先の落ち葉を箒で掃きながら、ふと手を止めてその空を見上げた。

・・・十月かあ…錦谷の紅葉は今年も綺麗なのかな。一人でも、観に行つてみようかな・・・

「ちよつと六花！ぼうつとししないで早く終わらせなよ」

エプロンのポケットの中からゼツが声を掛けてきた。

「いいじゃない、空を見上げるくらい」

「六花が空を見上げてる姿を、さっきから男どもがたくさん見てるんだよーもうー」

六花は、えつと小さく呟いて急いで辺りを見回すと、確かに通りすがりの男がこちらを見て歩いてゆく。

六花はハアと溜息を吐いて地面を見た。

そして、もう一度行き交う人々に目を凝らし、足音や話し声に耳を澄ます。

「…居るわけない…か」

六花は小さく溜息を吐き、目を伏せて微笑むと、箒とチリトリを片づける。

そして愛しい人の姿が心に乗り、寂しい気持ちのまま店に入つて行つた。

今日も無事に店の営業が終わり、六花はいつも通り部屋でゼツと一緒に夕食をとって

いた。

「新米は甘くて美味しいよね〜」

「ゼツにお米の味なんて分かるのお？うふふふっ・・・!!」

「六花!」

「うん!・・・これって・・・!」

「稗だあ〜」

あははは。米の中に稗の粒が混ざっていた。

二人は食事を済ませ、六花は一階のキッチンへと食器を下げようと畳から立ち上がったが。ふと足を止める。

・・・そういえば、今日は満月だわ。ヒミコさんに会えるかなあ・・・

「・・・!!」

六花は食器をその場に置き、急いで窓に駆け寄ると勢いよく窓を開けて外を見た。

「あ・・・あれは!!」

つづく

続・六花の森（7）　く九尾の出現！

遠くに、見覚えのある姿が、見えた。

『…これは尾獣という九匹いる怪物の一匹で、九尾というんだ。尾が九本ある狐のバケモノみたいなもんだ。邪悪なチャクラを持ち人間を襲う。並の忍が束になつても敵わない強さだ…』

「六花、オビトが九尾を回収に来たみたいだ！ここに居たら巻き込まれる。早く逃げよう」

「オビト君が^{!!}でも、なぜ九尾が里を壊しているのよ^{!!}」

「操るのに失敗したか、もしくはは里を潰す気なんじゃない？」

「そんな！止めないとっ^{!!}」

「まずは九尾の眼を確認して。写輪眼が浮かんでいるなら、昔マダラがやったようにオビトは九尾を術にかけて操ってるはずだから、術者のオビトを先に止めたほうが良い…尾獣回収はマダラが命令した事の一つだけど、里を潰せとまでは言つて無いからね。それに、六花のお店が壊れたらケーキ食べられなくなるし」

「ゼツ…ありがとー！」

六花は急いで戦闘服に着替え、刀を腰に差すと、左肩にゼツを載せて二階の窓から飛び出して行った。

ガルルルル…

ぎやああー！　ぐわあー！　きやああ！

六花は荒ぶる巨大な九尾の足元に来た。

以前、マダラが見せてくれた縮小された九尾の何倍もある大きで、何とか九尾を止めようと飛びかかる木ノ葉の忍たちは哀れに空中で散ってゆく。

そして、九尾の瞳には写輪眼がくつきりと浮かんでいた。

「…オビト君…どうしてこんな事を!!…?」

六花は奥歯を噛みしめ、鋭い目つきで九尾を睨みながら走り出した。

あちこちに移動するオビトのチャクラを追うのに苦勞し、ようやく見つけた。

「…ミナトさん…」

しかしそこは、面をつけたオビトと四代目火影の服を着たミナトが森の中で戦闘している場面だった。

「…六花、いま出て行くのは危険だよ。二人とも時空間忍術を駆使して戦ってる。巻き

添えになるだけだ……」

「……でも早く九尾を止めさせないと……」

「……いいから。じつとしてろ……」

「……」

確かにゼツの言うことは正しく、二人のレベルの時空間忍術を使うことが出来ない六花はミナトに加勢することも、オビトを止めることも出来ず、今はただ苦しい顔で二人の戦いを眺めているしかなかった。

すると突然、オビトとミナトの動きが止まった。

……今だわ!……

六花が二人の前に飛び出そうとした瞬間。

「うちはマダラなのか?」

……!?!……

ミナトの言葉に六花の足が、いや身体全体が固まる。

六花は息を飲み、再びうずくまった。

オビトは、おもむろに被っていたマントのフードを下ろす。

六花はその動きを見て、再び身体に力を入れると構え直した。

「いや……そんな筈は無い……彼は死んだ」

「……さあ……どうだろうなあ……」

「……この際アナタが何者かなのかはいい……なぜ木ノ葉を狙う？」

茂みの中で、六花はごくりと唾を呑みオビトを睨みつける。

「……そうよ！なぜ木ノ葉の里を襲う必要があるのよ!! それにあなたの先生であるミナトさんのことも!!……」

「言うなら……気まぐれであり……計画であり……戦争の為でもあり……平和の為でもある……」

オビトはそう言うと、袖口から長い鎖を取り出し、その両端を両手首に繋げた。そしてミナトに向かって走り出す。

「すでに希望などお前にはない！」

オビトはミナトに突込み、オビトの身体はそのままミナトをすり抜けた。しかしミナトはオビトの後からついてきた鎖の輪に縛られてしまった。

「!!？」

しかしミナトは瞬身の術でその場から直ぐに姿を消し、数メートル先に姿を現した。そして直ぐに振り返り再びオビトへと向かって走ってゆく。その右手にはチャクラを乱回転ながら球状に圧縮した螺旋玉がある。

オビトもそれを迎え撃つかのように走り出した。

シュツ！・・・ズツ。

ミナトが放ったクナイはオビトの身体をすり抜けてしまった。

そして遂に二人が近づき、オビトの右手がミナトの左肩に触れた瞬間。

「螺旋玉!!」「ぐはっ!!」

ズゴゴゴ!!

ミナトは先ほど投げたクナイへと飛び、オビトの背後から螺旋玉を放った。

オビトは螺旋玉の勢いで強く地面へと打ち付けられ、その衝撃で地面は激しく割れて隆起した。

「・・・オビト君!!・・・」

六花は思わず立ち上がった。

「・・・こりやオビトのほうがヤバイかもね・・・」

「・・・どうしよう。オビト君のことも助けなきゃ・・・」

マダラの代役であるオビトが死ぬことだけは絶対に避けなければならない。

しかし六花はどうやって二人の間に割って入れれば良いかますます判らなくなる。

「・・・焦るなって。オビトは死なない。今のオビトのチャクラじゃ九尾を操ってられる時間にも限界があるし自分から退散するはずだよ。もう少し様子を見よう・・・」

「・・・でも・・・!?・・・」

六花はこれまでにないスピードで地を蹴り走った。

・・・柱間さま、扉間さま、木ノ葉の里と人は、私が絶対に守るから・・・お願い力を貸して!!・・・

ズザザッ!

「!!」

「六花・・・だっけか?何をそんなに急いでる?」

「お、オビト君!!・・・話は後よ・・・っ!!」

オビトは横をすり抜けて行こうとした六花の右手首を掴んで制止した。そしてもう片方の手首も掴む。

「離して!!」

「おい、お前。俺の手助けを言ったな」

「・・・?」

「なら、九尾を俺の所へ持って来い」

「!!?」

「六花・・・コイツの命令だからじゃなく、九尾を捕獲したらコイツの所へ持って行って」

「ゼツ!あなたまで何を言ってるの!!」

「さっきも言ったけど、尾獣回収はマダラの命令なんだ。マダラの復活の為、そしてマダ

ラの『先の夢』を実現させる為には九匹全ての尾獣を揃える必要があるんだよ」

六花は愕然とし、オビトとゼツの顔を交互に見る。

尾獣はいま、各里に分配されており、その全てが人柱力によって封印されている。

その全てを回収するという事は…

「ゼツ！どうしてそのこと教えてくれなかったのよ!!」

「お前、俺の手助けを命令されているのにそんな事も知らされてなかったのか？…フツ！…まあそんな事はいい。お前も夢を実現させたいなら、九尾を俺の所へ持って来い」

六花は顔を歪め、唇を噛んで俯いたまま返事をしない。

「尾獣回収…優しすぎる六花にはできないでしょ？それを解っているからマダラは何も言わなかったんだ。でも里を守る為にも、今は九尾を止めて捕獲しないと。そうでしょ？」

六花の左肩のゼツは、落ち着いた優しい口調で言った。

しかしその言葉を聞き、オビトは態度を変えた。

「…やはり九尾はいい。後からどうにでもなるしな。その代わり、お前には一緒に来てもらうぞ」

そう言うオビトは六花の手を離し、自分の両手についた鎖を交差させて六花を縛ろうとした。

バツ！ グググツ・・・

六花はオビトに背を向けると両手で鎖を掴み、オビトと睨み合う。

「なぜ…なぜ木ノ葉の里を潰そうとするの?! あなたにはもう関係無いはずよ!!」

「夢を、希望を、未来を、奴らから奪ってやりたいんだよ・・・里の奴らにこの先の夢なんて必要ない!」

オビトの面の奥の右目には、憎しみの炎で染まった万華鏡写輪眼が真っ赤に光っている。

そして、六花の両目に浮かぶ万華鏡写輪眼も激しい怒りで震えている。

「時間稼ぎのつもりだろうけど、六花が本気を出せば今のお前なんて簡単に倒せる。千手一族の力をもっているのはお前だけじゃないんだ。マダラの命令を遂行出来れば手間は問わないけど、六花の大事なものを奪うことは僕が許さない」

ゼツはそう言うのと身体を広げ、オビトの胸に張り付き、更にその身体を広げてゆく。

「マダラの意思の切れ端の分際で出しやばりやがって・・・ぐっ!」

ゼツがオビトの首を締めると、オビトは六花を縛ろうとしていた鎖から手を離し、首を掻きむしり始めた。六花はその隙に、急いでオビトから離れる。

「愛する人間を守る力も無かったガキに言われたか無いね」

「ぐっ・・・うっ」

「ゼツ！止めて！もういいから!!」

ゼツは六花の言葉を聞くとオビトの首を絞めるのを止め、身体を球状に戻し、六花の左肩に戻った。

「かはっ!・・・ハアハア・・・」

オビトは首元を抑えて息を上げ、少し前屈みになりながら六花を睨んでいる。その視線を無視して六花は里へと向かおうとした。

「無駄だあ!・・・例え今助かったとしても、また俺が里を潰してやる!」

オビトの言葉を更に無視して六花はその場から姿を消した。



「何?これ・・・結界?・・・」

木ノ葉の忍の奮闘により、九尾はなんとか里の外の森へ追い出されていた。

そして何者かによって九尾は強力な結界の中へ閉じ込められている。

「九尾がさつきより小さくなってる!・・・ねえ、あの九尾を縛っている鎖は何かしら?」

「あれは、うずまき一族がもつ尾獣を捕らえられるチャクラの鎖だね」

「うずまき一族・・・じゃあくシナさんも一緒に戦っているのね。でも、彼女はお腹に赤ちゃんが!」

タタタタタツ・・・タツタツタツ。

「・・・!!?」

茂みを抜け、ようやく結界の足元が見える場所まで移動すると、信じられない光景が目飛び込んできた。

封印石の上に寝かされた嬰兒の前には、九尾の長い爪に二人一緒に串刺しにされているミナトとクシナの姿がある。

「ナルト・・・これから辛い事・・・苦しい事もたくさんある・・・自分を・・・ちゃんと持つて・・・：そして夢をもって・・・夢を叶えようとする・・・自信をもって!!」

クシナは最後の力を振り絞り、子供へと言葉をかけた。

六花はそれを見て、両手で口を押えると両目から大量に涙を流し始めた。

「・・・クシナ・・・さん・・・そんなつ・・・こんなことつて・・・」

震える六花の身体に揺られながら、ゼツは冷静に心の中で呟く。

・・・凄いな。九尾を抜かれても直ぐに死なない上にここまで出来るなんて・・・この様子だとあの子供にこれから九尾を封印する気か。これじゃもう六花が九尾を奪うなんて不可能だ。というか、きつとこれからあの子を守ろうとするだろうし・・・

つくづく六花は見なくて良いモノばかりを見てくれるよ。まさか、これも母さんの思念か?・・・

そして、ミナトはナルトに九尾を封印し、クシナと共に倒れた。

二人の命が潰えると同時に結界が消え、近くに居た三代目火影と暗部の忍が数人、九尾が体内へと封印された嬰兒と、ミナトとクシナのものへとへ駆け寄って行った。

当然、六花には何もできる筈も無く、涙を流しながらただ茫然とその様子を眺めている。

「六花！」

その声にゼツの方を見る。

「一応聞くけど、どうする？九尾を回収する？言つとくけど、遅かれ早かれ九尾は必ず回収するよ。マダラ復活と先の夢の実現の為にね」

六花は俯き、涙を飲みながらゼツに問う。

「・・・ねえ、尾獣を抜かれても死なないで居る方法は・・・無いの？・・・」

「無いね」

「・・・」

六花は思い切つて顔を上げると、心を決める。

強い眼差しで、三代目火影の腕に抱かれる嬰兒を見た。

◆

コツコツコツ・・・コツ。

ポチャン。

懐かしい足音と懐かしい水の音。

しかし、目の前に居るのはマダラではない。

「九尾を持つて来た……んじやないみたいだな。失敗したのか」

六花を待つていたかのように、一面を付けたオビトが魔像の前に立つて居る。

「あなたの夢と言うのは何？」

六花は無表情でオビトに問うた。

「うちはマダラの、描く夢だ」

「……」

「まさか、それすら知らないのかお前？」

「マダラ様の夢は真の平和よ。無差別殺人でも無秩序な破壊でもない」

「はははは！」

オビトは六花の言葉を笑い飛ばすと、数歩、六花に近づいて言う。

「俺こそが、うちはマダラだ！ 真の平和が在る夢の世界を作る計画は、この俺が実行していく。その過程には平和も秩序も必要無い……！ お前はうちはマダラの下僕だろ。じゃあ俺のやる事に口出しするな」

六花は目をつぶって小さく首を横に振ると小さく溜息を吐き、目を開け、オビトを厳

しい眼で睨みつける。

「あなたはマダラ様のただの代役であって、私の主じゃない。あなたのやり方にも賛成できない」

「フツ。まあそう言うな・・・お前もその『主』の復活を待っているんだろ？先の夢を、叶えたいんだろ？ここは協力しようじゃないか・・・なあ？」

オビトはそう言いながら、距離を取って六花の右隣りに来た。

六花は疑うような表情でオビトを見る。

しかし、確かにオビトに反発してばかりも居られないのが現実だ。だとしても、オビトのやり方に同調する事など出来ない。

「輪廻眼を預けている人物・・・長門という男のことだが」

「!!」

六花は焦って身体をオビトのほうへ向ける。

「あいつは今、俺が作った組織に居る・・・お前も、その組織のメンバーにならないか？」

「なんの・・・何をやる為の組織なの？」

「六花、君はそんな組織に入る必要は無いよ。コイツは君を捨て駒にする気だ。それに六花はもう何もしくなくていい。ただマダラの復活を待ってればいいんだ」

ゼツはそう言うのと、六花の鞆から這い出て左肩に載る。

「・・・ゼツ？」

「ほら、オビトに言うことがあるでしょ？早く言つて」

「うん・・・九尾はミナトさんとクシナさんの子に封印されたわ。今後、その子は私に任せて。そして、もう二度と里に手を出さないで」

「ミナトは自分の子に九尾を封印したのか・・・ウケるな。いいだろう。九尾の回収は最後にしてやる・・・それにしてもお前は甘いな。本当にマダラの下僕なのか？ただの情婦だろ？フツ」

六花は何度か瞬きをした後、ゆっくりと魔像を見上げた。

巨大な植物に囲まれた魔像は何も変わらない・・・以前のままである。

そしてもう一度、オビトを見て言う。

「愛する人が居ない世界は、只の荒野にしか見えないわよね・・・でも、その荒野は誰かにとつては愛在る場所だという事を忘れてはいけないわ・・・今のあなたに何を言つても無駄だろうけど」

そう言うのと、オビトに背を向け歩き出す。

「何を訳の分からなことを・・・さつさと消えろ」

六花は振り返ることなく、黙ってアジトを出て行つた。

続・六花の森（8）　くその名は、うずまきナルト

「はて、どうしたものか・・・」

ヒルゼンは火影の席に座り、右肘を机についてその手で頭を抱えた。

四代目火影・波風ミナトが殉職し、急遽ヒルゼンが火影の役に戻ることになった。

あの事件から二ヶ月。

木ノ葉の里の復興も少しずつ進んでおり、年の瀬に向けて里も徐々に活気を取り戻している。ヒルゼンも引退していたといえ、ミナトへの引継ぎ中で火影の事務仕事はヒルゼンも共に行っていた為、再び火影に戻った所でそれほど変化は無かった。

しかし、やはり四代目火影が就任わずかで落命したことは里に大きな衝撃を与え、九尾の事件を知る大人の忍の間に大きく影を落としていた。

その影は、人柱力になったナルトにも差していた。

“九尾事件”については、事件当日から箝口令が引かれた。

他里に対し事件を完全に隠蔽するのは難しくとも、出来るだけ詳細は悟られてはならない。また事件について今後も流布されては、里市民に不安と混乱を招くことになる。

また、ミナトの最後の意思と思惑を知らないヒルゼンは、ナルトの人生の重荷になら

ない様、時が来るまでナルトが九尾の人柱力である事を隠すことにした。

その為、ヒルゼンは『ナルトに九尾が封じられていることの口外を禁じる』という掟を作り、掟を破った者には厳罰に処した。

それに伴い、九尾の封印をしたミナトとクシナの子である事実も、ナルト本人およびその事実を知らない里の人々に対し極秘にされる事となった。

ナルトはこれまでヒルゼン直轄の暗部の監視のもと、病院で面倒を見られていたが、このままずっと病院と暗部で育てるわけにもいかない。

そこで木ノ葉の忍達にナルトの里親を募ったのだが、今現在、誰一人として名乗り出る者は居ないのだ。

ヒルゼン自身が育てたいのはやまやまだが、妻のビワコは九尾事件で命を落としていて。ヒルゼンには娘もいるが嫁入り前と言うこともあり、やはり任せるには父親として気が引けた。また、孤児院に入れるという手もあったが、ミナトとクシナが命と引き換えに守った存在、そしてヒルゼンのナルトを里の英雄として見て欲しいと願う気持ちから、それも出来なかった。

「まだ里親の募集をかけて一ヶ月ですし、もう少し様子を見てもいいのでは」

今日もまだ里親希望者が居ないという報告をしにきた暗部の忍が、目の前で顔をしかめているヒルゼンに向かって冷静な声で言った。

「うむ……だが、やはりナルトの将来の為に早く里親を見つけてやりたいからのう……」
「里親と同時に、養育係の募集をかけてみるのも手では無いでしょうか？やはり里親だとハードルが高すぎますし、養育係と言う仕事なら求職者からの応募があるでしょう。それに養育係なら、忍ではなくとも事情を知らない一般人にも任せることが出来ます」
「そうじゃな……養育係がつけば気長に里親を待てるしのう。そうしよう」

こうしてその日のうちに、ナルトの名前と素性を伏せ、忍だけではなく一般人へも「殉職した上忍夫婦の乳児の養育係募集」として求人を出したのだった。

「えええー嫌だよ！僕は絶対嫌だからねっ！六花のご主人様は誰だっけ！」

「ゼツよ。だから、二人の子供だと思えばいいじゃない。ね？」

「はあ……無理だよ、そんなの」

「あ、いまし笑ったわね？ふふっ」

あれからナルトの様子をずっと見守っていた六花は、もちろん『ナルト』の養育係の求人が出たことも直ぐに知った。

本当は里親になりたかったのだが、里親になるは色々条件が厳しく、大前提として結婚し夫と妻二人が揃っていることが絶対条件であったため無理だった。

ということ、六花はゼツに養育係になると宣言し、当然ながら反対されている。

しかし「二人の子供」という言葉にゼツの気持ちも傾き始めたようである。

「養育係の契約期間はたった一年間だし、途中で里親が見つかればそこで仕事は終わるわ。ね、お願いっ！」

六花はテーブルの上に鎮座するゼツに向かって掌を合わせて頭を下げた。

「お店はどうすんのさ。まさか僕に子守をさせる気じゃないだろうね」

「養育係に専念する。それにまだ乳児よ？ つきつきりでお世話しないと。だから暫くお店は休むわ」

「ていうかさ、そもそも六花に赤ん坊の面倒が見られるの？ 経験は？」

「・・・無い。へへっ」

「はいダメー！ 却下！」

「勉強するわ！ それに初めて子供を産んだお母さんたちだって子育て未経験だわ。条件は同じよ。だから、ゼツパパも手伝って！ ねえ？」

六花は合わせた掌の上に頬を載せ、首をかしげて上目遣いをして言った。

「ゼツパパ言うなっ。なんでこれから九尾を取ろうとしている人柱力の子育てなんかしなきゃならないんだよ！」

「そこも考える。人柱力が尾獣を抜かれても死なない方法を探すわ！」

・・・無くもないんだけど…輪廻転生の術。それを言うと六花は絶対やるからなあ…

「分かったよ。じゃあ一年間だけね！それ過ぎたら僕がナルトから九尾を抜くからね！
てか、絶対採用されるとも限らないしね！」

「ありがとう！ゼツ大好き！」

「こんな時に初めて『大好き』なんて言うのかよ。まったく…相変わらず卑怯なんだか
ら…」

コンコンコン。

「おお、もう来たか…．．．どうぞー！」

ノックの音にヒルゼンは慌てて机の上の書類を片づけ、返事をする。

ガチャツ…

「三代目様、養育係志望者の方をお連れしました」「失礼いたします」

「．．．!!」

暗部の忍の後ろに続いて入って来た女の顔を見て、ヒルゼンは驚いた。

「さあ、どうぞ、こちらに．．．」

ヒルゼンは立ち上がり、火影の席の前に置かれた椅子を掌で差した。

女は椅子の隣りに立つと、ヒルゼンに向かって一礼した。

「どうぞ、かけてください」

「失礼いたします」

女は椅子に座り、ヒルゼンと目を合わせるとニツコリと笑顔を見せた。ヒルゼンは一瞬ぼうつと女を見つめてしまったが、焦って瞬きをして目を逸らし、手元に準備していた女の志望書に目を遣る。

「ええと・・・橘 六花さん・・・で、よろしいかな?」

「はい。橘六花と申します。よろしくお願いいたします」

「あの・・・その、先日、柱間様と扉間様の墓前でお会いしましたな」

「はい。あの時はご迷惑おかけしました」

「いやいや何も迷惑など・・・早速だが、これまでの経歴と、今回志望した理由を聞かせて貰えますかな」

「出身は旧・千手領地で、夫と死別した事を機に、昨年十一月に木ノ葉の里に引越してきました。旧領地では、十歳から十六歳までを教える私塾で、十八歳の時から五年間教師をしておりました。現在は小さな喫茶店を経営しておりますが、採用された場合はこちらのお仕事に専念するつもりです。今回志望した理由は、亡き夫と私には子供が出来ず、赤ちゃんを抱っこしたかったという未練が正直な所です。子育ては未経験ですが、自分の子供同然に大切にお世話したいと思っておりますので、よろしくお願いいたします」

六花は落ち着いた口調で嘘の履歴を述べ終わると、軽く微笑んで見せた。

「うむ。なるほどな……ここには忍ではないと書いてあるが、間違いないかの？」

「はい。間違いありません。ただ、剣術は子供の頃より習っておりましたので得意です」
「おお、それは頼もしいのう。ははは。その、養育を頼みたい乳児についてだが、ちょうど生後二ヶ月を迎えたばかりの男児じゃ。先日任務で殉職した上忍の両親の遺言通り、将来は忍アカデミーに入学させる。まあ一年間ということとでそこまで気にする必要は無いが、一応その前提で養育して貰いたいと思っておる。養育して貰う場所は、里が準備した住居か自宅かを選べるのだが、どちらが希望ですかな？」

「はい。出来れば私の自宅でお預かりしたいです」

「その場合は調査にいかせて貰うことになるが、それは問題は無いかの？」

「はい。問題ございません」

「うむ。分った。では採用結果は後日直接知らせに行かせますゆえ、それまでお待ちください」

「はい。どうぞよろしく願います」

六花は立ち上がり、ヒルゼンに一礼すると出口に向かおうとした。

「ああ……ちよつと個人的な事をお尋ねするが、あなたの両親、いや祖父の名前はなんとおっしゃるのかの？」

六花は足を止め、再びヒルゼンのほうを向く。そして少し寂しい顔をして答える。

「申し訳ありません。父とは二歳の頃、母とは六歳の頃に死別しており、親戚もおりませんので覚えておりません。あの、それが何か……」

「ああいや、すまぬ。あなたが昔の知人にあまりにも似ておるので、血縁の方かと思うてな……申し訳ない」

その夜。

ヒルゼンは自宅の本棚から昔の写真アルバムを取り出した。

一ページ目を開くと、すっかり色褪せてセピア色になっている写真が現れる。

その一枚目は、扉間の弟子になってすぐ柱間と扉間、そして兄妹弟子のダンゾウ、ホムラ、コハルと一緒に写っている写真である。それを見てヒルゼンは目を細め、口角を上げた。

暫く思い出に浸ると、慎重に次のページを捲ってゆく。

そして、十ページほど捲ったページで手が止まった。

「……やはり……生き写し……いや本人としか思えぬ」

老眼鏡をかけたヒルゼンは、アルバムを手元から少し引いて目を細めた。

それは扉間とその妻・芙蓉の結婚披露宴での写真だった。

左に扉間、右に芙蓉、その二人を挟んで扉間側にヒルゼン、ダンゾウ、ホムラ、芙蓉側にコハルと芙蓉の親友・千手樹が写っている。

その写真の中の一人：芙蓉に、六花は瓜二つなのである。

写真はモノクロだが、実物の芙蓉の美しさは今でも忘れない。

ヒルゼンの眼の奥に芙蓉の容姿が蘇る：亜麻色の髪に、まつ毛の長い大きな目、琥珀色の瞳、雪の様な白い肌：

顔かたちが似ているだけなら偶然かもしれないが、六花はその髪の色、瞳の色、肌の色まで全く同じだった。いや、佇まいまでも同じなのだ：

しかし、芙蓉は扉間と結婚して僅か二ヶ月後に顔岩展望台から転落死している。

もし、たとえ生きていたとしても、現在は六十歳をゆうに超えているはずである。

ふと、ヒルゼンの頭に今日の六花の言葉が浮かんだ。

『夫と私には子供が出来ず、赤ちゃんを抱っこしたかったという未練が正直な所です』
「もしか、生まれ変わりか・・・」

ヒルゼンはおもむろに顔を上げると、窓の外を眺めた。

その夜は満月で、その光が煌々と里を照らしていた。



「久しぶりね」

その声に、窓辺で満月を眺めていた六花は振り返った。

そこにはカグヤが居た。

目が合うと、六花は微笑んでヒミコの前に歩み寄る。

そして暫く二人は無言で微笑み合うと、六花から口を開いた。

「最近、ヒミコさんの夢をよく見ていたんです」

「どんな夢？」

ヒミコはそう言うのと、六花の後ろの窓へ歩み寄り、月を見上げる。

「ヒミコさんが出てくる夢というか：ヒミコさん自身の記憶の一部なのだと思います」

「芙蓉。あなたは私と会えた唯一の転生者だからでしょ。で、何か言いたいことでもあるの？」

「いいえ。でも、ヒミコさんも辛い想いを沢山されてたんだなって・・・」

「・・・。ごめんね。芙蓉が辛い想いを沢山するのは、私との因縁なのかもね・・・」

六花は少し寂しげな笑顔のまま黙って首を横に振ると、ヒミコの隣に立った。

二人の顔は青白い月の光に照らされ、その顔は二人が今この世に生きている同じ存在とも、異世界に居る同じ存在にも見える。

月は、二人の魂と時空を水平にした。

「でも、芙蓉はやっぱ優しすぎよ。時々私が変わってあげたくなるわ。ふふふ」

「優しいんじゃないやありません…：ゼツが言うように、ただ甘いだけなんです。八方美人で、結局周りを傷つけ、苦しめている…」

「ふふつ。私はあなたのそんな所も好きよ。でもね、あなたが迷おうが心を痛めようが、尾獣をすべて集めなければ、愛するマダラは復活しないし世界は救われぬ…：それが現実よ。それが出来ないなら今すぐ“六花”を止め、時が来るまで身を潜めて生きることね」

初めて見るヒミコの厳しい表情と厳しい言葉に、六花は啞然として言葉が出ない。

しかし、六花は解っている。良く解っているのだ。

六道仙人と会ったあの日。

“芙蓉”は誓った。

この世界を救う“碧眼の少年”が現れるまでマダラとは一心同体で居よう。

マダラが誰かと手を取り合えば、必ず新しい世界が拓ける。柱間の次は、その碧眼の少年…：その人に違いない。そう信じよう。

それまで私はどんな事でもする。世界が救われるその日を見届けるまで、生き続ける

：

そう誓った。

しかし、この三十年間で、やはり自分の性分では、マダラの計画を手伝うことには限界があると充分解った。

六道仙人の言うことに従うだけならばマダラに協力せずとも、時が来るまで生きながらえていればいいだけである。

しかし六花にそれをさせないのは、マダラへの愛情と、マダラをもう一度信じたいという強い気持だった。

その為に、“その時”まで、マダラの計画に従うしか無い…。

たとえマダラの計画が間違っていようとも、世界が救われる時、そこに必ずマダラの手が必要であるはずだ…そう信じて。

「そんな顔しないの。言っただでしょ？あなたの手を汚す必要は無い。すべてオビトに任せておきなさい。あなたは現実を受け止め、その結果を淡々と待っていればいいのよ、芙蓉」

「…解っています。でも私は、マダラさまが誰かと手を取り合っただけで、世界が救われると私は信じています…オビト君にも」

「ふーん。でも相手を変えるのはほぼ不可能だと思うけど。男を信じるなんて愚行よ。信じて裏切られるのが関の山だと思うわよ」

ヒミコの言いたいことも解る。

しかし、人は「自ら」変わることならできる。

そう、マダラなら…

「きつとマダラさまなら変わることが出来ます…それに、これは私が一方的に信じているだけだから…だから、マダラさまが最後に何を選ぼうと、裏切られたなんて思いません。」

「本当にお人好しね…ううん。甘いわ」

日付が変わり、押し迫る寒さと静けさの中、霜夜は更けてゆく。

◆
良く晴れた冬晴れ。

いよいよ今年も残すところ三日となり、年用意為の客で商店街は賑わい、行き交う人々も忙しい様子である。

六花は今、前と後ろを私服警備の暗部の忍に挟まれて里の大通りを歩いている。

「くしゅっ」

「あら大変。寒いのかしら？もう一枚毛布を掛けましょうね」

六花はそういうと立ち止まり、鞆の中から小さな毛布を取り出して、クーフアンの中に居るナルトの首までしつかりと毛布を掛けた。その間、暗部の二人も立ち止まり、六花とは少し距離を取ったまま素知らぬ顔で辺りを見回している。

—— 一時間前 ——

「これがおぬしに任せる子じや。名前は『うずまきナルト』という」

ヒルゼン、暗部のくノ一と男の忍、そして六花が里本部の和室で、布団に寝かされて
いるナルトを囲んでいる。

「健康状態や注意点の引継ぎはこの者が行うので後で聞いてくれ。どれ、まずは抱いて
やってくれぬか？」

「えっ、あつ、はいっ!!」

六花は恐る恐るナルトに手を伸ばす。左手を頭の下に入れ右手は尻に回すと、慎重に
抱き上げた。

「ううっ……ほぎやあ……」

ナルトは明らかに嫌な顔をして泣きそうな顔になる。

六花は抱くのを一瞬躊躇ったが、思い切つて胸に抱き上げてみた。

温かい……そして甘いミルクの香りがする。

首は座つておらず、ナルトの頭は六花の左腕にもたれており、手足の動きもまだ小さい。
また、四キ口に満たない体重はそれ以上に軽く感じられ、その感覚に六花はほんの
少し恐ろしくなる。

それでも気を引き締め、しっかりと、しかし優しくナルトを抱きかかえた。

するとナルトは歪めた顔を緩め、また穏やかな顔に戻り、安心して六花に身を委ねた。その様子に、六花は安堵で身体から汗がどつと出るような感覚になり、はあと息を吐く。「抱っこがお上手ですね。でもそんなに力まなくても大丈夫ですよ。この子は色んな人間に世話されていたので、初めての人にもすぐ慣れてくれますよ」

くノ一が穏やかな顔で六花に言った。

「はい…」

六花は弓の様に目を細め、愛おしそうに微笑んでナルトを見つめながら返事をした。

その様子を見て、ヒルゼンもようやく胸を撫で下ろすことが出来た。

実は他にも四人ほど養育係の志望者があり、中には子育て経験が豊富な者も居た。しかし、ヒルゼンは敢えて六花に任せることにした。

その大きな理由は、六花ならナルトに仕事の枠を超えて我が子同然に愛情を与えてくれるだろうと思つたことが一番。

そして、運命を感じたからだ。

勿論、運命を感じたなどと部下たちには言うことは決して出来ないが、ヒルゼンはあの扉間の妻である芙蓉に容姿も性格も生き写しの六花が現れたことは、ナルトにとっての運命なのだと感じたのだった。

「ようこそ。ナルトくん。今日から暫くは、ここがあなたのお家よ」
「あうう」

「わあくお返事できるのね！お利口さんだわ！」

「いや、絶対違うし」

六花はゼツのツツコみを無視して、ベビーベッドの中に寝かせたナルトの顔に顔を近づけ、改めてナルトの顔をじっくり見てみる。

ナルトも、六花の額あたりをじっと目つめている。

六花はナルトを慈しむ瞳で、静かに見つめ続けた。

「……！」

「どうしたの？」

ベッドの柵の隅に居るゼツが、急に驚いた表情になった六花を見て問う。

「……青い眼……ナルトくんが『碧眼の少年』……!!?」

「う、ううん。ナルトくん、目が青くて綺麗だなあって思っただけ」

「そうかな……六花の眼のほうが……綺麗だけど？」

「何よ急にううふふ。ありがとう。ゼツパパ！」

「だからゼツパパ言うなっ！」

青い眼の少年なら、きっと沢山居るだろう。

しかし六花はこの時、ナルトこそ六道仙人が言う世界を救う“碧眼の少年”だと思っ
た。

それは、ナルトがミナトとクシナから産まれ、九尾を身体に宿して過酷な人生のス
タートを切った境遇が一番大きな理由だが、それよりも“直感”のほうが大きかった。
しかし。

・・・それは私の都合の好い解釈かもしれない。もし、この子がそうでなくても構わ
ないわ。元気に育ってくれば、それで・・・

六花はそう思うと、ナルトに毛布をしつかりとかけ、眠るまで静かに見守っていた。

つづく

続・六花の森（9）～『暁』のメンバーに・・・

二人が歩いている大通りには逃げ水が見られ、季節は春から夏へと変わったことを知らせている。街路樹の緑も随分濃くなり、二人の足元に濃い陰を作っている。

「今夜は何が食べたい？」

「うーん・・・」

六花の問いに、ナルトは隣の六花を一度見上げると、再び正面を向いて歩きながら考える。

するとその時、ナルトの眼には、数多くの冷たい瞳が次々と入ってきた。

それは、物心ついた時から見慣れた瞳であるが、決して慣れることなど無い。

ナルトは俯き気味に答える。

「・・・ラーメンでいいってばよ」

「え？ラーメンならいつも食べてるでしょ？いいの？たまには・・・」

「いいんだってばよ！」

ナルトは目をつぶり、下を向いて叫ぶように言った。

「……うーん、じゃあ野菜たつぷりの野菜ラーメンにしようか？うふふっ」

「……や、やつぱりカレー！」

「うん。カレーにしよう！お肉も沢山入れてあげるね。野菜と同じくらい。ふふふっ」

六花はそう言うのと、ナルトの左手を握り、手を繋いだ。

ナルトは少し驚いて、パツと六花の顔を見上げる。

「もう七歳なのに、手を繋ぐのは恥ずかしい？」

その言葉に、ナルトはプイッと顔を背けて言う。

「六花ねえちゃん繋ぎてえんなら仕方ねえつてばよ……繋いでやるつてばよ……」

「フフツ。ありがとう、ナルトくん」

「その代わり、野菜は少なくしてくれつてばよお」

「ダメー！」

野菜に対して文句を言い続けるナルトを見ながら六花は笑っているが、ナルトが俯いた瞬間も、その理由も見逃してはいなかった。

六花はナルトの養育係を当初、一年の契約で務めたが、ヒルゼンの頼みでもう一年延長し、二年間務めた。（ゼツもなんだかんだ言いつつ付き合ってくれた）

それ以降も、ヒルゼンからはナルトの里親が見つかるまで、または自立できるまでは養育係として働いてほしいと何度も頼まれた。

しかし、六花はそれを断り続けてきた。

理由は二つある。

一つは、里ではもう死んだことになっている自分が今の世代に深く関わる事は避けたという思いからだ。

ナルトのことは預かった次の日から、まるで我が子同然の情が湧き、可愛くて堪らなかった。手放したくない：そう思った。

それに、この子がもし本当に「予言の子・碧眼の少年」ならば、自分が世界を救う人物を育てられるなど、これほど嬉しいことは無い。

しかし、六花は自分にその資格が無いことをしっかりと自覚していた。

だから影ながら見守り、時々こうしてナルトを励ますことが出来ればそれでいい：そう思った。

二つ目の理由は、オビトからの強迫だった。

オビトが作った、というよりも乗っ取った組織「暁」は世界征服をもくろみ、まずはその為に力をつけようとメンバーを増やし、資金集めの為に各国や里、大名などから秘密裏の仕事を請け負うようになっていた。

しかも、その最終目的は九匹すべての尾獣を集めること……つまり、オビトはマダラの「先の夢」の為に暁を利用しているのだ。

ナルトが四歳になった頃、オビトが六花の前に現れ、その時、暁の行動について聞かされた。

ゼツは全て知っていたようだが、敢えて六花には言っではいなかった。

.....

「……というわけで、九尾も近いうちに奪いに来る。覚悟しておけ。今度邪魔をしたら容赦はしない。ただし、お前が暁のメンバーになり、俺に協力するなら話は別だ」

「六花、協力なんてする必要は無いよ」

「ゼツ……でも……うん……オビト君、あなたに協力は出来ないわ」

「お前のことは白ゼツの記憶を読んで調べたぞ。マダラが動けなくなつてからも命令されて色々していたようだな。義賊気取りで悪人を情け容赦無く退治していた割に、随分弱腰なんだな。マダラの命令が無いと何もできないのか？」

「六花。こいつは君を煽つて利用しようとしてるだけだ」

「私はマダラ様の下僕よ。命令された事はするし、されてない事は、しない……」

「フンツ。俺の手助けをするように言われてたんじゃなかったか？」

「オビト、お前はマダラを演じてるだけだ。僕はマダラの意思から生まれたいわばマダ

ラの分身。六花はその僕の命令に従ってる。お前の命令は聞かない」

「『輪廻転生の術』・・・って、知ってるか？」

「・・・死者を生き返らせる術・・・？」

「六花！聞くな!!」

「あれは術者の命と引き換えに死者を蘇らせる術だ。お前がマダラから言い聞かされていた尾獣の力を借りて行う術というのは嘘だ！」

「!!?じゃ、じゃあ、長門君は・・・命と引き換えにマダラ様を・・・!!」

「そうだ！その通りだ!!」

「止めろオビト!!」

「いいのゼツ!!・・・解ったわ。あなたに協力します。その代わりに、ナルトくんの九尾の回収は一番最後にして頂戴！じゃないと協力はしない！」

「・・・」

六花はゼツの力と言葉もあり、暁のメンバーにはなりはしないものの、協力することになった。

それゆえ、木ノ葉の里を不在にすることが多くなってしまったのだ。

何より、犯罪組織ともいえる危険な集団に協力しながらナルトの養育係をするなど、そんなことは六花に出来る筈は無かったのである。

「六花ねえちゃん・・・あのさ、あのさ、月に一回とかじやなくて、もつといっぱい来てくれないの？てかさ、てかさ、またいつか、オレと一緒に住めないの？」

その言葉に六花はカレーを食べるスプーンを止め、申し訳なさそうに、そして心から悲しい笑顔をして言う。

同じ質問はもう、何度も聞いてきた…。

「ごめんね…。どうしてもやらなきゃいけない仕事があるの。その仕事が終わるにはまだまだ長い時間がかかってね…きつと、その仕事が終わる頃には、ナルトくんは結婚してお嫁さんや子供が居るかもしれないわ」

「もお、いつつもそればっかだつてばよ！・・・それに、オレはケツコンなんてしねーし・・・」

唇を噛み、悲しそうにも悔しそうにも見える表情で俯くナルトを見て、六花は優しく言う。

「うん。確かに結婚だけが家族を作る方法ではないわね。友達とか、仲間とか、恋人とか、先生、生徒…他にもいっぱい。人との繋がりが出来れば、それは家族も同然なのかもしれない」

「何言つてんのか分かんねえーよ！・・・」

「ごめん…でもね、繋がりというのは作るものなの。その為には自分の殻に閉じこもっていては駄目。人と関わらないとね…だけどその関わりの中ではどうしても嫌われたり、否定されることもある。だって人は一人一人みんな違うんだもん。でもね、ナルトくんの良さに気付いてくれる人は必ず居る。私が保証する！ね？だから明日から忍者アカデミーでも頑張つて！」

「なんか難しいことは良く分かんねえーけど、オレつてば、頑張るつてばよ！それで、それで、ぜつてえ火影になってやるんだつてばよ！」

「うん!!ナルトくんならきつと、なれるつてばよ！」

二人は笑顔でカレーをスプーンですくうと、それを口に運んで笑い合った。

翌朝。

六花はナルトを忍者アカデミーの近くまで送つて行つた。

「じゃあ、いつてらつしやい。頑張つてね！みんなと仲良くね」

「おう！六花ねえちゃんも仕事頑張つてね！早くまた会いに来てくれつてばよ！そしてらここでの武勇伝をたつとくさん教えてやつからよ。へへっ！」

「うん。ありがとう。楽しみにしてるね」

笑顔で手を振りながら校門へと走つてゆくナルトの姿が校舎の奥へ消えるまで、六花

はその後ろ姿に手を振り続けた。

そして、真顔になってキツと道の向こうを睨むと、足早に歩いて行つた。

◆「…六花。アナタが本部にまで来るなんて珍しいじゃない」

暁のアジトの入り口を入ると、正面から大蛇丸が現れ声を掛けてきた。

大蛇丸は木ノ葉の里を抜けた後、この暁のメンバーになつており、六花は思いもよらず大蛇丸と再会したのだった。しかし大蛇丸は六花と戦つた際、六花の写輪眼により六花の記憶を消されている。

「直ぐに帰る。そこを退け」

「ねえ、あのトビつて愚図な子と一緒に居ても退屈じゃない？リーダーに言つて私と組みましようよ？」

「オレは暁のメンバーではない。只の協力者だ」

六花はそう言うと、大蛇丸の肩をわざとかすめて横を通り抜けて行つた。

その背中に大蛇丸が投げかける。

「まだ木ノ葉の里に住んで居るんでしょう？まさか、弱みでも握られているとか」

その言葉に六花は立ち止まり、首だけを後ろに向けるが大蛇丸のことは見ずに答える。

「もしそうだとしても、お前にはオレの弱みは握れはしない……」

六花はまた前を向き、通路を歩いて行った。

「六花、トビ、今回の任務は非戦闘行為だが、かなりの金になる仕事だ。しくじるなよ」
「分かってますってリーダー！僕も早く暁の正式なメンバーになれるように日々頑張ってるんですからっ！ねえ六花さん？僕の活躍、リーダーにも説明してあげて下さいよお」

六花は話を振られたが、トビ、いやオビトの相変わらずわざとらしい芝居に眼を閉じフンツと顔を背けた。

「オレはこの任務が終わり次第すぐに木ノ葉に戻る。報告はトビにさせる」

「六花、次回の任務では木ノ葉の里でお前にして貰いたいことがある。一度ここに戻って来い」

「木ノ葉の里で……？何だ？」

「今は言えない。ここへ戻って来てからだ。いいな」

暁のリーダーであるペインは六花に向かって無表情で念を押すと、その場から姿を消してしまった。

六花は焦ってペインの隣に立って居た暁の創設メンバーの一人、小南に向かって言

う。

「おい。オレはいいとは言っていないぞ」

「でも、あなただつて大切な木ノ葉の里に無断で暁の誰かが入るのも嫌でしょう？ならここに戻つて来て話を聞くほうがあなたにもとつても良いと思うけれど」

小南はそう言うと、ペインを追うように消えてしまった。

六花は肩を落として、いぶかしそうな顔をした。

確かに小南の言う通り、六花の知らぬところで暁のメンバーが里に入って何かをするのは気に食わない。

しかし、なぜ今ここで任務の内容を言えないのか…

六花の頭に一瞬、嫌な予感が過ぎり、隣に居るトビを思い切り睨んだ。

「六花さくん、顔、怖いっすよ！あはは！大丈夫ですって〜」

面をつけていてもトビのヘラヘラしている表情が見てとれるようで、六花は更に腹が立つ。更に強くトビを睨みつけた。

「九尾は最後だからな・・・」

「！」

「まあその約束を守るかは、お前の働き次第だが・・・行くぞ」

そう言って先にアジトの出口に向かってゆくトビの背中を見て、六花はごくりと唾を

飲んだ。そしてゆっくりとその後ろをついて出て行った。

つづく

続・六花の森（10）〜六花とトビのコンビ。最後の任務

薄暗い店内では、着飾った女に挟まれた男性客たちが各ソファ席に座り、酒を飲みながら談笑している。

六花はその中で、ある男と二人きりで座り、男のためにウイスキーの水割りを作っている。

「なあキラリ、今夜こそ、いいだろう？ 気持を確認してからもう二週間経つよ」

「でも貴方には奥様がいらつしやるし…駄目よ。それに貴方の地位をおびやかす様なこととしたいくない…だって私、本気で貴方のこと愛してるから」

「キラリ…僕も君のこと本気で愛してる。僕たちの出会いは運命だ！」

「ありがとう…」

六花は優しく微笑み、男の目の前に水割りをそつと置いた。

……

「…ああ。寝ていたよ。ごめん」

六花の幻術にかけられていたとも知らない男が、六花の隣りで目を覚ました。

「ううん。とつても気持ち良かったから私も少し寝てた。ふふっ」

ベッドの中、下着姿の六花は上半身裸の男に抱き着つくと、男の腕を枕にして男の顔を見た。そして上目遣いで甘えるように言う。

「あの計画、まだ終わらないの？あとどれくらいかかる？早くゆつくり会えるようになりたいなあ」

「尾獣兵器のことか…あれはまだ一年以上はかかりそうだよ。技術者が足りないんだ。だが僕たちが開発した尾獣のチャクラを抽出する技術があれば、兵器に転用することは可能だ。これが成功すれば僕も主任から上官に昇進できる…そうしたら妻とも別れる。キラリ、結婚しよう」

男も六花の顔を覗き込み、笑顔で答えた。そして六花は、さりげなく質問を続ける。「うん！待ってる…でも今はこうやって、こつそりでも貴方と抱き合えていれば幸せ…ねえ、その技術者って今は何人位なの？」

「今は八人だよ。あと二人は最低でも欲しいんだが…技術者不足で計画が遅れていることに風影も怒っててね。来週、火の国で目星をつけている技術者を誘拐して来るらしい」

「そつか…ちよつと怖いね。でも開発つてすぐお金がかかるんでしょう？お金つてどうなっているの？だってうち（風の国）って資源も少ないし…」

「これは極秘なんだけどね、隣国の川の国が小国なのを良い事に、国境沿いの資源地帯で発掘してそれを売りさばいているらしい。まあその金は、風の国民全員の生活の役にも立ってるわけだけど」

「じゃあ私も風影様に感謝しなきゃ。暮らしに困らないこと、そしてこんな素敵な貴方に出会えたことに・・・ねえ、もう一回、しよう？」

「ああ・・・キラリ、愛してるよ」

ガチャツ。バタンツ!!

二人の唇が触れそうになった瞬間、突然部屋の扉が勢いよく開いた。

「ヨモギ主任!ご無事ですか!」

猫の面をつけた男を先頭に、砂隠れの忍が五人なだれ込んできた。

「なっ、何事だ!」

「その女は土の国のスパイです!情報を得た後アナタを殺害するつもりです!」

猫の面をつけた男がそう言うと、五人の忍が六花をベッドから引きずり出した。

六花は舌打ちをし、顔を歪めて悔しがっている。

「直ぐにその女を牢にぶち込め!」

猫の面の男がそう言うと、五人は嫌がる六花を連れて部屋から出て行こうとしたが、そこで六花が猫の面の男に向かって叫んだ。

「フーン！オレを殺したところで、もうその男から聞き出した尾獣兵器の情報は電信の術で仲間に伝えたぞ。遅かったなあ!!」

そう言い、髪を振り乱し暴れる六花を五人の忍は無理やり引つ張り、牢へと連れて行ってしまった。

面の男は六花の言葉を無視し、ベッドで放心状態のヨモギに歩み寄った。

「大丈夫ですか？お怪我などはありませんか？」

「・・・あ、ああ大丈夫だ・・・」

それを聞くと面の男は窓辺に立ち、おもむろに窓枠にもたれると腕を組み、話し始める。

「はあ・・・しかし参ったなあ。アナタ、あの女に情報を洩らしたんですか？」

「いや、それは！確かに少し話をしたが核心は教えてない！問題無いレベルだ！」

ヨモギは身体を起こし、両手を振りながら必死で男に向かって訴えた。しかし男は更に畳みかける。

「それはどうでしょうね・・・第一、アナタが土の国の女スパイに騙され、ベッドを共にした時点で刑罰の対象です。主任の役職は勿論、下忍にまで格下げされて一生奴隷同然で働かせることになるでしょう。いや、今の風影様は冷酷なお方だ。即死刑かもしれない」

「・・・くそっ!!なんでこんな事につ・・・!!」

ヨモギは目を固くつぶり、両手の拳をベッドに叩きつけてうな垂れた。

「・・・今、アナタがスパイに騙された事を知っているのは、私たちだけです」

「頼む!!誰にも言わないでくれ!!頼む!!」

ヨモギは顔を赤くして必死に男に向かって頭を何度も下げた。

「アナタは優秀な技術者だ。いまアナタに居なくなられては尾獣兵器の開発も遅れてしまふ。…解りました。誰にも言いません。しかし！タダではお受けできませんよ？こちらのお願ひも聞いて戴かないと…」

男はそう言うのと、ベッドに近づいてしゃがむんでヨモギの顔を見上げる。するとヨモギは布団を剥ぎ、男に向かって土下座をした。

「解った!!なんでも言うことを聞く!」

男は猫の面の下でフツツと笑うと、立ち上がり、今度はヨモギを見下す。

「尾獣兵器の開発には潤沢な資金があるようですね・・・それを、我々にも少し回して頂けませんか?」

「?!・・・お、横領しろと言うのか?!そんなこと・・・」

「スパイに騙され情報漏えいをした罪と、横領の罪、どちらが重いでしょうかね…?」

「…わ、解った!!言う事を聞く、だから、頼む!スパイの件は黙っててくれ!!」

「はい。我々は金さえ手に入ればそれでいいので…ヨモギ主任、くれぐれも頼みましたよ…。」

ガチャン…キイイイ…

「あーあ。せつかく寸劇に出演してくれた礼に、砂の忍どもを楽しませてやろうと思つたのに…お前のほうが随分楽しんでたみたいだな」

そう言うと、トビ（オビト）は猫の面の顎を撫でた。

牢の中では、後ろ手にされ手錠を鎖で繋がれた六花が地べたに座り、血の気の引いた青い顔でうな垂れて居る。

そしてその周りには、先ほどの五人の忍たちが血を流して倒れている。

トビが死体を跨いで六花のもとへ歩み寄ろうとすると、目の前に身体を大きく広げたゼツが立ちはだかった。

「それ以上、六花に近づくな」

「フン！そんな薄汚い女に手など出さん。全く、*「下僕」*に忠実な*「主」*の番犬とは笑わせるな…ほら、早く服を着ろ。帰るぞ」

トビはそう言うとゼツに向かって六花の服を投げ、ゼツはそれを受け取った。

「ヨモギから得た情報は、ペインに報告する前に俺に教えろ」
「・・・解った」

六花はうな垂れたまま小さな声で返事をする、トビは先に部屋を出て行った。
「ゼツ・・・やり過ぎよ・・・」

六花は開錠術で手錠を外しながらゼツに向かつて言った。

「何言ってるの？六花が甘すぎるんだ。アイツ（トビ）が幻術で六花を襲わせてるって判った時点で本気で倒しに行くべきだった。ていうか、今すぐ”アイツを殺してやりたいよ”」

「私なら殺さずに気絶させるだけで済ませられたわ！殺す必要は無いでしょ!!」

「うるさい！いいから早く服を着るんだ！」

「・・・」



「ご苦労だったな、六花、トビ・・・」

「いや、相変わらず六花さんのエッチな幻術とお芝居すんごく上手で僕、ホント感動しちゃいましたあ！それに砂の上忍と中忍五人を一瞬で倒しちゃうんだもん。凄いですよー！」

オビトは腰を屈めてわざとらしく六花のことを褒めて拍手をした。

いま、六花とトビ（オビト）は暁のアジトに戻り、椅子に座るリーダーのペインとその隣に座る小南の二人の前に立って居る。

「トビ、静かにしなさい：六花、あなたは作業員としての働きも素晴らしいけど、戦闘能力も高い。常々言っているけれど、正式に暁のメンバーになつてはどう？」

小南は、はしやぐトビを諫めると六花に向かって言った。そしてペインもそれに続ける。

「今回の任務成功により、長期的に相当な額の金を風の国から得られるようになる。そして、砂隠れの尾獣兵器についての情報を対立している土の国に売れば莫大な金になる。今回の成果は暁の正式メンバーとして相応しい働きだ。正式なメンバーになれば、同じく正式なメンバーと組める。そうすれば今後の任務も更にやりやすくなるだろう。お前にとつても悪い話ではないと思うが……？」

六花は俯き気味に話を聞いていたが、ペインが話し終わると顔を上げた。

そして真つ直ぐペインを見ると、ゆっくりと瞬きをしてから答える。

「断る。何度も言っているがオレはメンバーになる気は無い……わざわざここに戻つて来てやったんだ。さっさと次の任務の話をしてくれ」

その言葉を聞くとペインは顔の前で手を組み、小さく溜息を吐いて目を閉じた。そして言う。

「…そうか…残念だな。次の任務は、お前と縁の深い者を連れて来てもらう任務だ…詳しくは隣のトビに訊け…あとは任せただぞ」

ペインはそう言うのと立ち上がった。

「ちよつと待ってくれ！ちゃんと説明しろ！コイツから聞けってどういうことだ!!」

「…うちはマダラ」の指示の元に動けということだ。」

「…!」

「…健闘を祈るわ」

そう言うのと小南も立ち上がり、ペインと二人一緒に姿を消してしまった。

「ちよつと、どういふ事!! いったい私に何をさせるつもり!!」

「こういうことだ」

「!!?」

六花はトビをまくし立てたが、トビの右目を見たとき、直ぐにその場にうずくまっていた。

「…何?…今のは…?」

六花はトビに幻術を見せられた。

一瞬、血の海を見た気がしたが死体は見えなかった。

「新たにメンバーに加える男を、迎えに行くのだ」

「私はメンバーの勧誘にも無関係の約束の筈よ……それに今の幻術、いったい何をするつもり？」

「無血で終わらせたいのなら、もう一度選ばせてやろう……お前が暁の正式なメンバーになるか、それとも自分の代わりの人間を共に迎えに行くか……どうする？」

六花は困惑し、俯いて瞬きをする。

「そんなことがあっても、オビトの思惑で動かされているこの犯罪組織『暁』の正式なメンバーになる気は無い。」

自分が加入しなくとも、これまでにもう何名か加入しており、この先新たに勧誘するメンバーも既に決まっている。

しかし、『自分の代わりに』という言葉が引つかかる。どういふ事なのか？

「六花……」

「おっと、番犬は黙ってろよ。俺はコイツに訊いているんだ……さあどうする？」

いつもの様にゼツか六花の左肩に載り言葉を発しようとしたが、トビはそれを制止し、六花に詰め寄る。

すると六花は顔を上げ、揺るがない瞳で真っ直ぐトビを見て言う。

「暁のメンバーになるつもりは無い。その意思はこれからも変わらない」

「…フン。まったく頑固だな。まあいい。これから迎えるメンバーが加われば、お前な

ど用無しだろうしな…いや、娼婦を演じられる奴は他に居ないか？ははは。

お前がメンバーになりたくない理由は人柱力を殺して尾獣を奪うのが嫌だからだろ？自分の手を汚したくないだけの卑怯者め」

『…男は女に支配される為に生きている存在…あなたが手を汚す必要は無い。すべてオビトに任せておきなさい。あなたは現実を受け止め、その結果を淡々と待つていればいいのよ、芙蓉…』

六花が言葉を発しようとして口を開いたと同時に、六花の頭にヒミコの言葉が思い浮かんだ。

六花もう一度口を閉じ、トビに向かってそつと微笑んで見せた。そして、答える。

「そうね…私は卑怯者だわ。汚いことはあなたに全て押し付けてる…ごめんなさい。でも、私に出来る事ならば、何でもする…」

「…」。新しいメンバーになる男は、うちは一族だ。名は『うちはイタチ』。イタチとは既に接触し、暁に加入する意思も確認済みだ」

六花はそれを聞いても驚きもせず、真顔で頷いた。

しかし内心では驚き、心が痛んだ。

オビトに続いてまたも、うちは一族…

その事もだが、愛する木ノ葉の里の仲間のひとりが暁に加わる事に胸が痛む。

一瞬だけ、自分がメンバーに加わらない事への罪悪感が頭によぎり、それを追うように六花は目線を逸らした。

「三日後の夜十一時、旧うちは領地に在る檜枝岐神社に来い。作戦はそこで説明する」
「…作戦？ どうしてメンバーを迎えに行くだけなのに作戦があるの？」

六花は怪訝な顔でトビに問うた。

「…チツ。コイツ、いつも勘だけはいいな…」

トビは六花の事を完全に舐めているため、言葉を選ぶのを忘れ、心の中で舌打ちをした。

「まあ、イタチはそれだけ一筋縄にはいかない人物だということだ…」

そう言うのとトビはその場から姿を消した。

「ちよつと待って！…はあ…はあ…」

六花が眉を寄せて大きく溜息を吐くと、それまでトビの言動を黙って観察していたゼツが口を開く。

「六花、アイツの言うことは聞かなくていい」

「え？…」

「僕の半身の黒ゼツの報告だと『オビト』は、うちは一族を皆殺しにするつもりだよ」
「なんですって!! なぜ!! だってオビト君もうちは一族なのに…!!」

六花はそう言うと、驚いて開いた口のままゼツを凝視する。

「オビトは完全に“うちはマダラ”になりきるつもりなんだ。芙蓉である君が知っている通り、マダラはうちは一族に失望し里を後にした。マダラが死ぬ前、その経緯もオビトに話して聞かせたんだ。

現在、うちは一族の存在は二代目火影の政策を受継いだ志村ダンゾウにより必要以上に危険視されている…今、そのことで迫害されているうちは一族により里は危機にあり、うちは一族もまた取り潰しにされる危機に直面してる。

里の中でまさに戦争勃発の構図が出来上がってるのさ。そんなうちは一族と木ノ葉の里に、あの時マダラの忠告を聞かなかったことを今こそ“思い知らせる”気なんだよ」

六花は話を聞き終わると、ゆっくりと顔を正面に向け、悲しい顔になり目を細めた。

あの時のマダラとの会話で、自分がマダラに問うた言葉を思い出す。

『…腹癒せ…ですか？うちは一族を差別し、マダラさまの忠告を聞かなかったことへの…』

「…やっぱりマダラさまは、ずっと木ノ葉の里とうちは一族を、恨んでいたの…？」

「あれ？気付かなかったの？うつそおーマジで」

「軽いわね・・・兎に角オビト君を止めないと」

ゼツは肩から六花の胸の谷間に移り、六花を見上げて言う。

「マダラの意思を潰す気？今回は黙って目をつぶってな。おそらくオビトは六花にうち一族抹殺の手伝いをさせる気だ。アイツはこの数年で六花がマダラを愛していることに気付いている。その事が腹立たしいんだよ。自分はリンを失ってるからね。だから六花は暫く木ノ葉には帰らないで。解った？」

「・・・待つて。なにか引つかかる・・・」

六花は胸の前で掌を組み、その上に顎を載せて考え始めた。六花の両腕で寄せられた胸の谷間でゼツが潰される。

「…三週間前、オビトは私に『九尾を最後にする約束を守るかはお前の働き次第だ』って言った。それにペインと小南の二人から、今までになく強く正規メンバーに勧誘され、断ったら初めて『残念だ』って言われた…」

きつとオビトにとつて、イタチが加入する今、正規メンバーとしてオビトに協力しない私はもう用済みなんだわ。

…だからもしかして、うちは一族の混乱に乗じて九尾を回収し、再び九尾で里を襲わせる気なのかもしれない!!」

「もういいって！それ以上考えなくて。うちは一族抹殺はマダラの意思…でもそこに下

手にオビトの私情が入ってるから厄介なんだよ…六花はもうこれ以上関わらない、考えない。以上、終わり！さっ、行くよ。宿を探さなきゃ」

しかし、六花は俯き考え込んだまま動かない。

「ゼツ……」

「なあに？さっ、行こう。話は歩きながら聞くから」

「あなたがこれまで私に全てを教えてこなかったのは、私のことを気遣ってくれてきたからよね……ありがとう。」

「どうしたのさ、急に」

六花はゆっくりと顔を上げると、強い意志を宿した眼差しで正面を見据える。

その視線は真つ直ぐ、揺らぐこと無く、決意の先を見つめている。

「私……ナルトくんを、守る」

「もういい加減に母親ごっこはやめろよ！ナルトを救いたい気持ちは解る。でも人柱力はナルトだけじゃない。情に流されて命を捨てるなんて、そんな馬鹿げたこと僕がさせやしないからな！」

しかし六花は尚も真つ直ぐ、正面を見据えている。そして表情を変えることなく言う。

「大丈夫よ。輪廻転生の術は使わないから…だけど、オビトにはナルトくん指一本触

れさせない……お願い、力を貸して、ゼツ……」

「貸すわけではないだろ」

「なら……私が、マダラさまを蘇らせるわ」

「!?」

「私ね、マダラさまが柱間さまの次に手を取り合う相手は、ナルトくんだって信じてるの。でもそれはきつと一筋縄にはいかないと思う。柱間さまのように争いが続くかもしれない。でもね、絶対、マダラさまなら大丈夫だから……それに、ナルトくんも」

「六花!ちよつ」

「ゼツ、今まで本当にありがとう。守ってくれて……そして愛してくれて」

「ちよつと待ってって!分かった、オビトを止めてナルトを守るのに協力するよ。その代わり、マダラからでつかいお仕置きされても知らないからねっ」

その言葉を聞き、六花は胸の谷間のゼツを見てクスツと笑う。

その眼にはうつすらと涙が滲んでいた。そして言う。

「また池に突き飛ばされて、裸にされて首輪と手錠で繋がれて、一晩放置されるかな?それとも今度こそ殺されるかな?フフフツ」

「笑って言うことかよ!って……君、芙蓉に戻る前の記憶、思い出してたの!」

「うん、全部じゃないと思うけどね」

「六花・・・」

ゼツは涙ぐみつつニコニコしながら自分を見ている六花の顔を見上げて、考える。

・・・仕方ない、計画変更だ。長門に輪廻転生の術を使わせ、尾獣はマダラ自身に回収させるか…六花だけは絶対に死なせない。六花は再び母さんの器になれる人間、それに何より・・・

つづく

続・六花の森（11）　　さようなら、ナルトくん・・・

秋日和の午後。空は天高く澄み渡っている。

目の前では幼い子供達がキャツキヤと元気に走り回り、その隣では母親たちが笑顔で井戸端会議をしている。店番をする老人たちの顔も明るく、道行く男の忍たちと仲良さそうに挨拶を交わしている。

ここも、木ノ葉の里にある平和な風景、そのものだった。

六花はふと目に留まった茶屋に入ってみた。店内に客は居ない。

「いらっしやうい。どうぞお好きな席に座って頂戴ね」

見た目以上に元気な老婆が、大きな声と大きな笑顔で迎えてくれた。

六花は窓から町の様子が見える席に着き、先ほど見た平和な風景をもう一度見渡してみよう。

すると老婆が冷たいお茶とおしほりを持って来てくれた。

「今日は十月なのに暑いわねえ。お茶、温かいのもあるから欲しかったら言って頂戴ね。今日はちょうど味噌饅頭が出来立てなのよ。良かったら」

「ありがとうございます。ではその味噌饅頭を五つお願いします…ああ、あとこの柿羊羹も四つお願いします」

「あらお嬢さん、痩せてるのに沢山食べるのねえ！うちはの人間じゃ無さそうだけど、くノ一？」

「あはは…甘い物に目が無くて…それに、うちはお味噌は絶品だつて里でも昔から有名です。あ、私は一般人です」

「昔は里でも良く売れてたんだけど、八年くらい前からすっかり売れなくなつてね…でも味は落ちてないわよ」

老婆はそう言うのと、笑顔だが少し目を伏せ、いそいそと台所へ向かった。

六花は固い表情で老婆の後ろ姿を見つめながら思う。

…八年前…九尾事件…うちは一族の仕業だつて噂が立ったのよね。そのせいで、もともと扉間様の政策で他の一族とは隔離されていた居住地が、復興の際に更に里外れに追いやられた…

「…六花、なんで味噌饅頭十個頼まないんだよ！あと柿羊羹も！…」

ゼツが鞆の中から小さな声で六花に向かって抗議した。

「…独りで十個も注文したら変でしょ？！恥ずかしいし！…」

暫くすると、老婆が盆に味噌饅頭と柿羊羹を載せて持つて来た。

「はい、おまたせ。味噌饅頭一個サービスね」

「ありがとうございます！…あの、おばあちゃんはお一人でこのお店をされていらつしやるのですか？」

「いいえ。警務部に勤める息子夫婦と孫が、時々手伝ってくれるの。今夜はね、孫が上忍に就任したお祝いでここでお祝いをするのよ。ほほほほ」

老婆は顔をくしゃくしゃにして笑いながら、テーブルの上に饅頭を置いた。老婆にとつて、家族は宝物なのだろう。六花も微笑みながらその顔を見る。

「それはおめでとうございます。ご活躍をお祈りいたします」

「ありがとう。今日は本当に嬉しい日だわ。孫のことに加えて、とつても久しぶりにうちは以外のお客さん、しかもこんな美人が来てくれるなんて！」

六花は茶屋を出て、再び道を歩き始めた。

結局、土産で味噌饅頭十個を（ゼツに）買わされた。その紙袋を手に、緩い坂を上る。坂の両側には住宅地が立ち並んでおり、その全ての家の門には、うちはの家紋が入っている。

何人かとすれ違ったが、うちは一族以外の人間らしき人は一人もいなかった。

気付けば六花は、俯いて歩いていった。

重い足取りを何とか前に進めながら、再びゼツの言葉を思い出す。

『…うちは一族の存在は二代目火影の政策を受継いだ志村ダンゾウにより必要以上に危険視されている…』

遂に、六花の足は止まってしまった。そして坂の下を見下ろす。

…扉間さま、なぜ?…私のせい?…マダラさまのこと?カガミ君のこと?…いいえ。何か理由があつたのよ。そうに決まつてる。そうじゃなきゃ私…

そう思おうとしたが、六花の瞳は暗いままである。

そして更に、遠い昔、扉間の謀によつて殺されそうになつたあの事件を思い出した。しかし扉間のことは許している。

心の底からそう言える。

マダラが柱間に敗れた後、短い間とはいえ互いに心から愛し合い、結婚もした。

その間に、扉間のひとの上に立つ人物としての才能、人望、忍としての強さを改めて知ることができた。

それでも残念ながら、扉間が私情で動く人間ではないと断言することは「芙蓉」には出来なかつた…。

六花は、完璧な人間などこの世には一人としていなのだ、そう思うほかなかつた。

道が水平になると、右手にひときわ大きな屋敷が見えた。

六花はその屋敷の門の入り口の数メートル前で立ち止まる。前の道に人は居らず、屋敷も静まり返っている。六花は神妙な面持ちで屋敷を眺めた。

すると、六花の前方からナルトと同じ年くらいの黒髪の少年が歩いて来た。

「あの、ウチに何か用ですか？」

少年は睨むような目つきで六花を見て言った。

「…あ、いいえ。随分大きなお屋敷だからつい見たの。ごめんなさい」

六花はそう言うのと申し訳無さそうに微笑み、ゆっくり歩き始め、少年とすれ違う時に軽く会釈をして歩いて行った。

少年は六花が歩き去るのを見届けると、走って門をくぐり屋敷の中へ入って「ただいま」と大きな声で言った。

「さっきの子は、イタチの弟かしら？」

「うん、年頃からしてそうだろうね。ていっても、イタチもまだ十三歳のガキみただけだね」

「……」

六花は大きな池の前で立ち止まった。キラキラと光る池の中央付近には、シロサギが

数羽立って居る。その様子に眼を細めた。

・・・十三歳・・・

六花の頭には、あの時自分に向かつて手を差し伸べてくれた、元気で優しいオビトの笑顔が浮かんだ。

「…なんとしても、オビトを止めないと…」

六花は、大股でズンズンと歩いて行った。



「ナルトくん、気を付けてね。いつてらっしやい！」

「オウ！行つてくるつてばよ！晩飯、お汁粉も忘れないでくれつてばよお？」

「ハイハイ。分かつてます。でもケーキとお汁粉なんてちよつと変じゃない？」

「いいんだつてばよ！今日はオレの食べたい物、なんでも作つてくれんだろ？」

「うん。もちろん！じゃあ、ナルトくんも寄り道しないで早く帰つて来てね！」

ナルトはアパートのドアをなかなか閉めず、何度も開けたり閉めたりして六花に手を振つてから、気が済むと元氣よく走つて登校して行った。その足音が聞こえなくなるのと、六花は笑いながら玄関の鍵を閉めた。

六花は昨夜からナルトの住むアパートに来て居る。

そして今夜は、ついにオビト（トビ）と会う…

ゼツにはああ言ったが、六花はオビトがナルトから九尾を抜いた場合、自分がナルトを輪廻転生の術で助けると決めている。（勿論、その前にオビトをナルトに近づけないが）

ナルトがもし「予言の子・世界を救う碧眼の少年」ではなかった場合、六花が死んでしまえば、六道仙人との約束を守れない事になってしまいかもしれない。

しかし、六花はこう考えていた。

予言も、運命も、自ら切り開いてこそ実現するものだ。

ナルトは最初から万能の救世主として生まれたのではない。

これから救世主へと成長してゆくのだ。

きつと多くの仲間と、愛すべき人たちと共に：ナルトにはその才能と可能性が存分に
ある。

ナルトを命がけで守ることは、この先きつと、世界を救うことに繋がっているはずで
ある。

いや、そうに違いないのだから。

◆

秋の日暮れは釣瓶落として、あつという間に暗くなった。

六花は夕闇に埋もれてゆく町の風景を窓から眺めながら洗濯物を畳んでいる。料理

は既に全て出来上がっており、ナルトの帰宅を待つばかりである。

…ガチャ、ガチャ、バン!

「六花姉ちゃん、ただいまーだつてばよ!」

「お帰り!ナルトくん!」

六花は洗濯物をその場に置くと、玄関で靴を脱ぐナルトに駆け寄つて行つた。ナルトは六花の顔を見上げてニシシと嬉しそうに笑っている。

テーブルの上にはところ狭しとナルトの大好物が並べられた。それを見て、ナルトは目を輝かせている。

六花はその様子が堪らなく愛おしく、そして、辛くなる…。

「…六花ねえちゃんつてば!ねえ?聞こえてんの?食つていい?」

「…ああ、ごめんね。どうぞ召し上がれ!あ、野菜から食べるのよ!」

「嫌だねえーつと…うん、唐揚げうめえー!!」

「まったくもう。ウフフフ」

二人は笑み笑みと楽しく食事をした。

いつものように。

そして、いつも以上に…。

食事を終えると六花はテーブルの上を綺麗に片づけた。そして今、部屋の電気を消し

た。

ナルトは暗闇の中、テーブルに着いて胸を躍らせている。

「じゃんじゃーん！」

「わあー！あつははは！」

六花は台所から、灯りの付いた八本のロウソクが立てられたホールケーキを手に、ナルトの前に現れた。

ナルトは歓声をあげ、手を叩く。その瞳はロウソクの灯りを受けて、先ほどよりもっと輝いている。

そして六花はゆつくりとテーブルの上にケーキを置いた。置くと同時にナルトがジタバタしながら言う。

「これ、消していい？消していい？」

「ウフフ。いいわよ。そおっとね！」

ふう——。

ナルトがゆつくりと八本すべてのロウソクの火を吹き消した。

「ナルトくん、八歳のお誕生日おめでとう！これからも元気で勉強と修行頑張つてね！」

「おう！六花ねえちゃん、ありがとうつてばよっ！！」

屈託のない満面の笑顔で礼を言うナルトの顔かたちも、身体も、昨年よりもずっと成長している。六花は暫く、そのナルトの顔を深く慈しむ瞳で見つめた。

ナルトは途中、六花のその様子を不思議に思ったが、気づけばナルトも六花の顔をじつと見つめていた。

ナルトにとつて、このような温かい瞳で見つめてくれるのは、里において、三代目火影と、ラーメン一樂の店主、そして六花くらいだった。

六花の優しい瞳と表情はまるで温かい春の太陽のようで、ナルトはずっとずっと、この温かい目に見つめられていたいと願った。

一方、六花は今にも泣き出し、ナルトをぎゅつと強く抱き締めて離したくないと思っていた。

いま見つめているナルトの顔は、来年、再来年、五年後、十年後、いつたいどんな風に成長するのだろうか：それが楽しみであればあるほど、それ以上に、その姿を見ることが出来ない事実があまりにも悲しく、息が出来なくなりそうだった。

そして六花は何事も無いように立ち上がって部屋の灯りをつけると、その手に紙袋を持って戻って来た。

「はい！これ、今年のお誕生日プレゼントよ」

「やったあ!!なんだろ!なんだろ!ねえ開けていい?」

「うん！ 気に入ってくれるといいなあ〜ウフフ」

ナルトは紙袋からプレゼントを取り出し、リボンを解くと包装紙をビリビリと勢いよく破り始めた。

六花はその様子さえも愛おしく感じる。

ナルトが物心ついた頃から、プレゼントを渡すたびにこうして目を輝かせながら勢いよく包装紙を破いてきた姿が、目の前のナルトに何人も重なる…。そして目の前のナルトが本当に三人くらい居る様に見えた。

「わあ！ これってば、欲しかったゴーグル!! 覚えててくれたんだ!! サンキュー! ……って、六花ねえちゃん? ……だいじよぶか?」

「うん、ちよつと煙が滲みただけ…もちろんよ! ナルトくんのことならぜーんぶ、何だっで覚えてるんだってばよ? ウフフフ!」

「うん。オレも六花ねえちゃんとの想い出は、いっぱい覚えてるってばよ! へへ!」
「…ありが…とう…」



午後十時。

ナルトは九時前に就寝し、隣の部屋でゴーグルを握りしめて熟睡している。

六花は暗いリビングで、手元を照らす小さな明かりをつけて短い手紙を書いていた。

「ナルトくんへ。今日のごはんののこりは、れいぞうこに入っています。早めに食べてね。こんどの私のしごとはたいへんです。とうぶん里には帰ってこられません。ごめんね。つぎにナルトくんに会えるときは、おともだちをしようかいしてほしいな。楽しみにしてるね。六花」

本当は、もつと書きたい事は山ほどある。

この短い手紙一枚を書くのに、十枚もメモ用紙を使ってしまった。それでもようやく書き終えたのだが、ペンを置くことが躊躇われ、何度も首を振る。

なんとか思い切つてペンを置くと、六花は静かに立ち上がった。

そして洗面所に行つて服を脱ぎ、戦闘服に着替え始める。

着替え終わると、ナルトの部屋の扉を僅かに開け、月明りに照らされているナルトの寝顔を見つめた。

「…ナルトくん…ナルトくんなら絶対立派な火影になれるよ。頑張つて…愛してる…」

小声でそう呟くと、目の前が滲む前に扉を閉め、玄関に向かつて歩いてゆく。

そして静かに玄関を出てドアを閉めると鍵をかけ、いつものようにポストに鍵を入れた。

そして、その場から姿を消した。

六花は建物の屋根、電信柱伝いに夜の街を駆けている。

すると左肩に載るゼツが言う。

「まず間違いないくオビトは六花に抹殺を手伝わせる気だ。もう一度聞くけど、手伝う気はないんだね？」

「うん…だって私にはそんなこと、到底…出来ない…」

「だよ。じゃあキツパリ拒否して。どんな脅しをされてもね。それでもし戦闘になるようならオビトを殺すんだ」

「…けど、オビトを殺してはマダラさまの代役が…それに私にそんな事…」

「オビトはもういいよ。代案はある。マダラとナルトが協力して世界を救う所を見たいなら、ここで非情になるんだ。いいね？」

ゼツの言葉を聞き、六花は唇を噛んで顔をしかめたが、直ぐに口を真一文字に結びキツと強い眼差しで前を見た。ゼツが言葉を続ける。

「それと、うちは一族の抹殺を止めようなんて絶対にするな。これはマダラの意思でもあるけど、木ノ葉の忍とうちは一族が招いた結果であり、必然なんだ。それに抹殺の場にはイタチも居る。オビトに加えて万華鏡写輪眼を開眼しているイタチ、あの二人同時相手じゃ僕が居たとしても勝てない。分った？絶対だよ」

その話を聞き終わると、六花は里と旧うちは領地の森との境界線である高い壁の上で

足を止めた。

そして後ろに振り返り月明りに照らされている里を眺め、言う。

「結果…その結果に至るまでの道筋をつけたのは・・・」

六花は歴代火影たちの顔岩に目を移す。

左から、初代火影・千手柱間、二代目火影・千手扉間、三代目火影・猿飛ヒルゼン、四代目火影・波風ミナトの顔岩が在る。

「うん。その道筋をつけたのは芙蓉の元夫で六花が命を助けてマダラから超キレられた
“あの”二代目火影だね。うちは一族の戦闘能力を活かす名目で警務部隊を組織させたのは建前。体のいい迫害さ。だから恨むんならマダラじゃなく君の元夫を恨むべき
だと思うよ」

「私に、恨むべき人など一人もいないわ…居るとしたら、私自身。只一人」

そう言ううと六花は壁を飛び降り、森の中に消えて行った。

つづく

続・六花の森（12）　　うちはイタチの裁断と大罪

暗闇の中に、月明りに照らされ見覚えのある建物が浮かび上がっている。

ギイイイ：

六花は階段を上ると扉に手を掛け、ゆっくりと開けた。

「遅かったな。十分も遅刻だぞ」

「遅刻常習犯だったお前になんて言われたかないね」

二人を迎えたオビト（トビ）の言葉に、ゼツがすかさず言葉を返した。

神社の社の中にはオビト一人で、イタチは居なかった。

六花は神棚の下に立って居るオビトの前に立つ。

「それで、今回の任務と言うのは何？」

「フン。その番犬にもう聞いているんじゃないのか？」

「……」

六花はオビトを見据えつつも、思わず息を飲み、瞬きをしてしまった。

「今日、イタチは木ノ葉の闇、『根』のリーダー・志村ダンゾウの命令でうちは一族を討

ち滅ぼす。たった一人、自分の弟だけは助けるといふ条件でな。で、俺とお前で抹殺を手伝ってやるのが今回の任務だ……一人でも多く、殺せ」

六花は真顔でオビトに問う。

「……嫌だ、と言ったら？」

「別に拒否するのは自由だ。ただ、これ以上うちはマダラの下僕であるお前が、暁の正式なメンバーにもならず、マダラが命じた先の夢……そう、『月の眼計画』への行動から外れて生きることなど許さん……」

オビトは六花の顔を指さしながらそう言った。

しかし、六花は顔色一つ変えずにオビトを見据えている。

そしてオビトは言葉を続ける。

「任務を拒否するなら、お前には死んでもらう。但し死に方だけは選ばせてやろう……」

うちはマダラである俺に殺されるか、可愛がつている九尾のガキの為に命を捨てるか。

……だが任務を遂行するなら、お前の命も九尾のガキの命も助けてやる。さあどうする？」

六花は不意に、床に眼を落とした。

あの時とは違い、床は塵とホコリでくすんでいる。

もう何年も人の出入りは無かったようで、既にここは、うちは一族にとって忘却の場所となっていた。

そう、うちはマダラという人物同様…。

顔を上げ、もう一度目の前のトビを見据える。

「その任務、拒否するわ。」

「フン！最後まで我儘で卑怯な奴だな。…最後だから教えてやろう。うちは一族をここまで追い込んだ元凶は、二代目火影・千手扉間だ。お前の夫だろ？」

「…なぜ、そのことを知ってるの？」

「俺がこれまで木ノ葉の里に出入りしていなかったとでも思うのか？里を調べれば橘芙蓉という人物とお前が同一人物だという事くらい直ぐに分った。それに芙蓉はマダラをはじめ、うちは一族とお前は和気藹々たる関係だったようだしな」

六花は思わず悲しい顔になってしまい、目を伏せる。

そして、自然と言葉を洩らしてしまう。

「…なんとか、うちは一族抹殺を、やめさせることは出来ないの？…」

「六花！そんなことは出来ないよ。余計なこと言うな！」

六花の左肩に載るゼツが、その様子を見て叫んだ。

「おお。番犬、珍しく気が合うな。いや、合って当然だよなあ！お前はマダラの意味なん

だからなあ!!」

「六花、さすがに君がここまでマダラの意思に反すると思わなかったよ。ホント役立たずだね。だけど最後まで最後くらいはしつかり役に立ってもらおうよ。オビト、六花はこの八年、人柱力の傍に居て九尾封印の鍵穴の一つを見つけている。六花に鍵を開けさせ封印が弱まった所で九尾を抜くんだ。それまで僕が南賀乃神社で六花を待機させておく」

「ゼツ、やっとお前も正氣に戻ったか…解った。ではこれから共に南賀乃神社に向かう。そこでイタチと合流し、俺はうちは一族の居住地へと向かい抹殺を実行する。その間、六花、お前は神社で大人しくしている。変なまねをしたらお前を殺してから里を九尾で破壊してやるぞ。解ったな?」

「…分ったわ」

六花は俯きながらゼツとオビトの話を聞いていた。

しかし、六花の心は既にここに在らずであった。

午後十一時半を過ぎた頃。

六花、ゼツ、オビトは、うちは一族居住地の一角に在る南賀乃神社に到着した。

三人は黙って立ち尽くし、イタチが来るのを待った。

「…来たな」

オビトがそう言うのと、三十秒ほどして扉が開き、イタチが入って来た。

そして三人の前に立った。

その顔は、先日うちは居住地で会ったイタチの弟に少し似ているが、十三歳とは思えない凄然たるものだった。六花には、その様子はまるですべての感情を失くしているようにも見えた。

「マダラ…隣の女は誰だ？」

イタチはオビト（マダラ）に向かって静かに訊いた。

「暁の協力者の一人だ。うちは抹殺を手伝わせようと思つて連れて来たんだが、ここに来て報酬が少ないと言つて拒否されてな。仕方が無いから留守番をさせる。気にしないでいい…さあ行くか」

「ああ」

イタチが先に神社を出て行き、その後をトビが続く。

しかしトビは出口で立ち止まり、六花に振り向いて言う。

「お前はそこで、うちは一族の断末魔を聞きながら転生術の復習でもして居ろ。フツ」
そして六花とゼツを残し、二人は出て行ってしまった。

六花は、小さな窓から差し込む月明りを眺めていた。

今夜は満月である。

「僕が耳栓しててあげよつか？」

「…うん」

六花はゆつくりとその場に座るとゼツは身体を広げ、いつものかたちになり、六花を後ろから抱き締める。

そしてその手で優しく、六花の両頬と両耳を覆った。

「…ありがとう。ゼツ…」

「…オビトに情けはかけるんじゃないよ。確実に殺すんだ。アイツだって六花とナルトを殺すことが目的なんだから。オビトはもう要らない。僕が白ゼツと魔像を使ってなんとかマダラを復活させる。尾獣はマダラ自身に回収して貰おう。その時は六花もちゃんと手伝うんだよ？」

「…でも私にオビトを殺せるか不安よ。怖い…怖い…」

六花は両手で顔を覆い、うな垂れた。

「…何も怖くなんて無いよ。僕が付いてる…愛してるよ。六花」

「…ありがとう。ゼツ。私も、愛してる…」

そう言うと、六花は顔を覆った手をゆつくりと除けた。

「さあ、行きなさい。ゼツのことは出来る限り止めるから」

「ありがとう！ヒミコさん！」

目の前にヒミコの姿が現れた瞬間、六花は立ち上がり、神社を飛び出して行った。

ヒミコはそれを見届けるとその場にしゃがみ、球状に戻って床に転がるゼツに両手をかざした。

「チャクラの無い私にはゼツをいつもより五分程度長く眠らせることしか出来ない…芙蓉、頑張るのよ…」



ザシュツ！「ぐあつああ！」ドス！「きやあああ！」…

イタチは刀の血を振り払い、顔に着いた生温かい返り血を腕で拭いながら、また前に歩き出す。

その目の前に、月光を背にした人影が現れた。

イタチは黙って再び刀を構える。

「あなたは一族と一緒に、自分自身のことでも殺している」

「？…お前は、さっきの…退け。邪魔をするな」

六花は静かにイタチに歩み寄る。

「時間が無い。邪魔するならお前も殺す」

「あなたを助けたいの！…うちは一族のことも、そしてこの木ノ葉の里も！」

「何も知らぬ部外者が口を出すな」

「万華鏡写輪眼：あなたももっているんでしょう？私ももっているの」

そう言うと、六花はイタチに万華鏡写輪眼を見せた。

「・・・だつたらなんだ。俺と戦うつもりか？」

「違う。一族に幻術をかけて、クーデター計画や里への反発思考を書き換えましょう。そしてあなたに命令している、志村ダンゾウの思考も！私たち二人でならやれるわ!!」
その言葉に、イタチは目を見開き、ごくりと唾を飲む。

頭に、先日死亡した親友・うちはシスイが試みようとしていた事が浮かぶ。

だがそれは失敗に終わった。

しかし、いま二人の万華鏡写輪眼をもつ者が力を合わせれば…

イタチは構えた刀を下ろし、六花に歩み寄ろうとした。

ビュン!!・・・ズガッ!

空から飛んできたクナイを、六花がかわし、クナイは斜め後ろの壁に深く突き刺さった。

「お前は役立たずというより害虫だな…イタチ、この女に耳を貸すな。こいつは二代目火影・千手扉間の妻だ。お前を騙してお前の弟を含め、うちは一族を殲滅させ里を牛耳

る気だ！」

電柱の上に居るオビトが、イタチに向かって言った。

「!!?」

イタチは急いで後ろに飛び退き、再び六花に向かって刀を構える。

今度は殺意を込めた厳しい眼で六花を睨みつけている。

「…私は確かに千手扉間の妻です。でも私は、私に出来る精一杯の贖いをするつもりです！」

「…。一族の枠に拘り、自ら破滅の道を選ぶ愚かな奴らなど消えればいい。今の俺にはもう、一族という概念はない。」

そう言うといタチは姿を消してしまった。

そして、トビは電柱から六花の前に飛び降り六花に歩み寄る。

「お前、死を前にして保身に走ったか。とことんクズだな…あとでたつぷり甚振って殺してやる。逃げてても無駄だぞ」

「逃げたりしなんてしないわ。檜枝岐神社で待つてる…あの場所は私の思い出の場所だから…」

「フン」

トビはその場から消えた。

六花は踵を返し、歩き出す。

すると目の前の地面からゼツが飛び出して来た。

「六花！馬鹿じゃないの！いや馬鹿だろ！バーカバーカ!!馬鹿六花!!」

「・・・ごめん」

「ごめんて済んだらマダラは要らないんだよっ！」

「フツ。何それ・・・」

「あれだけうちは抹殺を止めようとするなつて言ったのに！どんだけ馬鹿なの!!オビトがイタチと組んで攻撃してきてたら死んでたかもしんじゃないんだよ!!」

球状のゼツは目を吊り上げ、六花の顔の高さまで何度もびよんびよん飛び跳ねながら抗議した。

「・・・ごめんつたら」

六花は少しだけ苦笑して掌を揃えて差し出した。するとゼツはその上にちよこんと載った。そのゼツに向かって六花は目に涙を滲ませながら言う。

「イタチをあんな行動にまで追い込んだのは、もとはと言えば、扉間さま…扉間さまを追い詰めたのは、この私。だからイタチの罪は私の罪よ。彼の罪は私が持つて行くわ」

「どんだけ自虐的なのさ。ホント、君は馬鹿みたいに優しすぎるんだよ…いいから直ぐ気持ち切り替えて！オビトとの対決に備えるよ！」

「…うん」

六花は顔を上げ、正面の闇を睨みつけた。

「…どうせすべてが許されないのなら、もう逃げ場は要らない…」



辺りは真つ黒な血の海が広がり、その上に満月が浮かんでいる。

その隣でトビとイタチが落ち合っていた。

「あとはお前の両親か…一人でやれるか?」

「父も万華鏡写輪眼を開眼している。壮絶な戦いになるかもしれないが、実力は俺のほうが上だ。決して負けはしない」

「俺はこれからあの裏切り者の女を片づける。お前よりは時間はかからんだろう。南賀乃神社で待っているぞ」

「いや、すべてが終わればダンゾウと火影に念を押しに行く。先に行っていてくれ」
「分った」

イタチは音一つ立てることなく自宅の屋敷に入った。

庭を通り、一つだけ灯りのついている部屋の前に立つ。

僅かに障子戸を開け、中を覗いた。

「こつちだ」

「！」

「罨など無い。入って来い」

隣りの部屋から父の声がした。

イタチはゆつくりとその部屋の前に移動し、慎重にドアを押し開ける。

・・・キイ・・・

「・・・！」

ドアを開けると、部屋の中には父と母がこちらに背を向け、二人で並んで正座していた。

「俺の子と、殺し合いはしたくない…：そうか、お前は向こうについたか」

イタチは右手に持つ刀を握り締め、何とか口を開く。

「父さん・・・母さん・・・俺は・・・」

「解っているわ・・・イタチ」

母は正面を向いたまま、気丈な声で言った。

「イタチ。最後に約束しろ。サスケのこと、頼んだぞ」

イタチは刀を二人の背中に向け、数歩、歩み寄る。

「・・・解ってる」

そして両手で刀を構えた。

しかしその手はぶるぶると震え、写輪眼の瞳には涙が浮かんでいる。

「怖れるな。それがお前の決めた道だろ。お前の痛みに比べれば、我らの痛みは一瞬で終わる…考え方は違っても、お前を誇りに思う…」

遂にイタチの眼から大粒の涙が滝のように流れ、刀を握りしめた両手の上に滴り落ちていた。

「お前は本当に優しい子だ…」「ええ、本当に…」

その言葉が、父と母の最後の言葉になった。

つづく

続・六花の森（13）　くオビト vs 六花の闘い。そして、 六花の夢

「選べと言われたけれど、選ぶことは出来ないわ」

そう言うのと、六花はゆっくり振り返った。

その眼には真つ赤な写輪眼が浮かんでいる。

急に強まった風は六花の後ろで束ねた髪を真横に揺らし、朽ち果てた檜枝岐神社の屋根がピュウウーと音を立てている。

同じく、オビトの伸びた髪も強風で真横に揺れていた。

「それは、俺を倒すという意味か？」

「その通りよ」

「フン・・・そうか。だがお前が負けければ九尾のガキも死ぬということだぞ」

「あなたはどうぞせ最初からそう言うつもりでしょう？ 私にナルトくんを救わせた後、殺す」

「…解ってるじゃないか。お前はマダラの夢の実現を口にするくせに、自分の手を汚す

ことを嫌い、行動を選び好みする。いや何もしない…お前は邪魔だ。いい加減俺の前から消えろ」

「許せないんでしょう？私とマダラさまが夢の世界ではなく、この世界で幸せになる事が…本当は解っているんじゃないの？夢の世界で幸せになれても、この世界で幸せにならないければ意味は無いってことを」

その言葉を聞き、オビトは六花に向かって一歩近づき、言う。

「本当の愛も、希望も、夢も、この世界には最初から存在などしないのだ！そして、その世界を終わらせるのはこの俺だ！」

六花は目を伏せ、静かに言う。

「あなたをそんな風にしてしまったのは私にも責任がある…そんな私があなたを殺すなんてこれ以上の自分勝手は無い。でもこれが私の…夢の叶え方よ！」

そう言い終わると刀を抜き、オビトに向かって走り出す。

オビトは両手に繋いでいる鎖を掴み、一直線にして身体の前に構えた。

ガシン！！

六花の刀が勢いよくオビトの鎖に交わった。

交わった刀と鎖越しに、六花の眼とオビトの右目が合う。

すると六花はニヤリとして見せた。

「雷遁・鎖雷！」

パチツパチイ！チュイイイイン！！

六花の刀の淵に電流の鎖が現れ、淵に沿って高速で回転し始めた。

…バチンツ！！

「！！」

するとオビトの鎖はあつという間に切れてしまった。

鎖を切った刀はその勢いでそのままオビトの身体も真つ二つに切り裂いたが、それはただオビトの身体をすり抜けたただけだった。

「…フン。火遁・爆風乱舞！」

ゴオオオオオオ…！！

オビトは右目から異空間より呼び寄せた竜巻に火遁で火をつけた火炎風を六花に向けて繰り出した。

六花は瞬時に後ろに飛び退く。しかし火炎風は直ぐに六花を飲み込んでしまった。

この距離で喰らえば丸焦げだ…とオビトはほくそ笑んだ。しかし。

「くそっ…」いつ須佐能乎が使えるのか！！

爆風が消えると、そこには、青色の半透明のチャクラを纏った骸骨の肋骨に守られている六花の姿があった。その両眼には万華鏡写輪眼が浮かんでいる。

そして六花が地面に着地すると、六花を守った骸骨の骨が増え、肉付きがすっかりとした巨人の姿になった。

巨人の眼は冷たくも眩しく光っている。しかし、六花の瞳はそれ以上に冷たかった。オビトは初めて見る六花の表情に一瞬息を飲んだ。

・・・本気の殺気だ・・・

「神威・魔風手裏剣！」

オビトの右目から大型手裏剣がいくつも飛び出し、六花本体に飛んで行った。

巨人はその大型手裏剣を左手で払い除けようとしたが、その瞬間に手裏剣は回転を速めた。

ザシユツ！・・・

巨人の左手が切れ、切り落とされた手先はその場で消えた。しかし直ぐに再び剣を握った左手が現れる。そして同時に、巨人のもう片方の手には、先端が半円形をした鉄鎚が出現していた。

「須佐能乎・智慧の鉄鎚！」

巨人はその鉄鎚をオビトに向かって放り投げた。

ビュン・・・！

オビトの身長のは倍はあろうかというその鉄鎚はオビトの身体をすり抜けた。

「無駄だ!!たとえ須佐能乎の攻撃だろうと俺には当たらん!!」

オビトをすり抜けた鉄鎚は空中で円を描いて再びオビトの背中めがけて飛んでゆく。

オビトは振り返り、その鉄鎚を睨んだ。

「神威!!」

しかし、その鉄鎚に変化は無い。異空間へ吸い込み飛ばすことが出来なかった。

「…なんだと?!!」

「智慧の鉄鎚はあなたに命中するまで決して止まらない…私とあなたに真理を知らせ、迷いを破るまでは、決して!!」

そう言うと六花は須佐能乎を纏ったままオビトに向かって走り出す。

巨人の左手は元通りになっており、その手には剣が握られている。

「土遁・土竜隠れの術!」

オビトは地中に潜り込んだ。

しかし、鉄鎚はオビトという標的を確実に追う。

ドスウウン!!

オビトが居る場所に鉄鎚が喰い込んだ。と同時に…

グサアアツ!!

その場所を六花が巨人の剣で突き刺した。

しかし、その剣も地中に居るオビトをすり抜けた。

オビトは素早く地中を移動していく。

しかし鉄鎚はひとりでに地面から抜けると、地中のオビトに引き寄せられるようにオビトを追い始める。

そしてまた地中に居るオビトの頭上に鉄鎚が喰い込む…そこを巨人の剣が突き刺す…その繰り返しが三回ほど続いた。

そしてとうとう、オビトは地中から飛び出して空中に舞う。

「まるで、現実から逃げているあなた、そのものね…でも現実はあるあなたを逃がさない」
そう言つて、六花は美しい顔で微笑んだ。

空中から地面に着地し、オビトは落ちて来る鉄鎚に向かって両手を顔の前で組んで防ぐ仕草をした。

鉄鎚はなおもオビトの身体をすり抜け地面に突き刺さる。

・・・まずい。もうすぐ五分が経つてしまふ・・・

オビトはその場を飛び退き、数メートル先の地上に立つと印を結ぶ。

「うちは火炎陣!!」

するとオビトを囲うように炎の防壁が空へと延びてゆく。

しかし、鉄鎚はその防壁の中に居るオビトめがけて飛んでいった。
そして、それと同時に：

「須佐能乎・火遁・豪火滅失!!」

六花が印を組むと、巨人は口から業火を噴出し、鉄鎚とまったく同時にオビトを囲う防壁にぶち当てた。

ズオオオオオツゴオオオオオオ・・!!

鉄鎚と炎はオビトの防壁を破り、オビトに襲いかかる。

「ぐあああつ!!」

炎の海の中からオビトの叫び声が聞こえ、鉄鎚はその場から姿を消した。

六花は炎を収めると、その場で仰向けに倒れているオビトに歩み寄って行った。

そして、尚も冷たい瞳でオビトを見下ろす。

面は割れ、オビトの素顔が露になっていた。

左目は閉じており、開いたままの右目の写輪眼はすでに消えていた。

六花は左の手袋を外しながらその場にしゃがむと、人差し指と中指二本でオビトの首の脈を診た。

「・・・死んでる。」

そう言うのと立ち上がった。

すると、どこからともなくゼツが現れ、六花の左肩に載る。

「やったね六花！僕の力無しでオビトを倒すなんて！惚れ直…」

ドスッ！

「死ぬのは、お前だ」

六花は、地面を見た。

しかし、そこにオビトの死体は無い。

オビトは木遁・挿木の術で出した鋭い木棒で六花の背後から心臓を貫いていた。

六花の眼に、身体を貫通して血の付いた木棒の先端が写る。

「あなたに…真理は分らなかった様ね…」

!!?

オビトが刺した筈の六花の姿は消え、目の前に、自分と向かい合って六花が立って居る。その左肩にはゼツも居る。

「影分身か！」

「あなたのは…イザナギ…でしょう？あなたのうちは抹殺の目的はマダラさまになりきる事だけじゃない。写輪眼の収集の為。なら、その眼を使ってイザナギを使う事くらい想定内よ」

「お前らっ…！」

「二対一……まだやる?」

「僕はお前の味方なんて一言も言っていない。むしろもうお前は用済みだ。六花、さっさと殺しな」

しかし、六花は動かない。

真つ直ぐ、未だ殺気を宿した瞳でオビトを見据えている。

「六花!早くしろ!」

「待つてゼツ……。ねえオビト、私の話を聞いてくれる?」

「…俺の負けだ。いまの俺にお前は倒せないようだ…フン。話を聞いてやる」

「ありがとう…。あのね、私の夢はマダラさまと同じ。世界を救い真の平和を築くこと。だけどそれは“うちはマダラ”だけでは実現できないと思ってるの」

「どういう意味だ?」

「あなたはうちはマダラの代役、つまりマダラさまの協力者。それに、役立たずだけど下僕の私、そしてこのゼツ…。それだけでもマダラさまは一人じゃないってことじゃない?」

「……」

「それに、私たち以外の、今は対立している誰かとも、きつとこの先手を取り合ってくれと信じてる。それまで私も、あなたと一緒に『月の眼計画』を手伝う。そしてようや

く、私もその正義に従う覚悟が出来たの。あなたのお陰でね……」

「フツ……馬鹿げた事を考えているんだな……本当に甘い」

「もつと笑われると思うんだけど、その誰かの一人は、ナルトくんだと私は思ってる」

「フフツ。お前、頭大丈夫か？」

「へへっ。だよね……。でも二人が手を取り合う為に、ナルトくんの中に居る九尾がど

うしても必要なら、あなたが九尾を抜いて。だけど、今はその時じゃないんでしよう？」

「お前、知っていたのか!!」

「うん。ゼツから聞いている。一尾から九尾まで居るうちの九尾をいきなり最初に入れちやうと魔像の中のチャクラのバランスが崩れるのよね？」

「……ああ、そうだ」

「その時が来たら、私が輪廻転生の術でナルトくんを助ける……。でもね、それは必要無い気がするの。ナルトくんはきつと、どの火影をも越える強い忍びになってくれる。そして最強の忍であるマダラさまと手を取り合ってくれるはず!絶対にね!ウフフフ!」

「フフツ、あははは!……お前、意外と面白い女なんだな……。まあでも、俺は俺のやり方でこれからもやる。それは変わらない。それを邪魔するというなら、次こそ負けない」

「……つちこそ。私が許せないやり方をするなら、あなたを止める」

「…はあ。まったくもう。なんでこうなるのさ…」

ゼツは六花の左肩で溜息を吐いた。

月は随分と西に傾き、高い山の頂に届きそうになっていた。



今夜、秘密裏に惨憺たる結末に追い込まれたうちは一族とは対照的に、うちは一族居住地区以外の里の風景は、いつもと変わらず秋冷と月明りに照らされ静まり返っている。

「良かった…ナルトくん…」

六花は、カーテンが僅かに開いているベランダの窓から、ナルトの穏やかな寝顔を確認すると静かにその場から姿を消した。

「もう今日は寝かせてよ…」

「駄目だよ！」

六花は自宅の玄関を入ると、ドスンと床に座って靴を脱ぎ始めるが、その左肩でゼツは先ほどからずつと同じことを言い続けている。

「六花のその甘い性格、八方美人な性格でこれまでどんだけ痛い目に遭ってきたか忘れたの?! 周りにも大迷惑かけてきた事も! オビトは絶対今回の仕返しをしてくるよ。イザナギを使えば暫くは全力で戦えない。明日オビトを改めて殺しに行くよ!」

「もう、今日は本当に疲れているの。その話は明日にさせてつてば」

「忍になって何年経つのさ！こんな事で疲れた言うな！反省は今日中にしとくの！」

「あ、一緒にお風呂に入る？」

「はあ!!…話を、逸らすなよ」

「だって今日は本当に辛かったし、ゼツにも悪い事したし…ゼツと一緒に居たいなつて。」

それにお風呂に入りながらなら少しは話せるでしょ」

「し、仕方ないなつ」

狭い湯船の中、六花は足を折り曲げ、膝を立てて浸かっている。

湯から出ているその膝の間にゼツが載っている。

「…あのね、オビトを殺さなかったのには理由があるの」

「何?」

「三日前、私がマダラさまを蘇らせるつて言ったけど…本当は今、マダラさまに復活してほしくないの」

「なんで? あんなにマダラに会いたがつてたのに。それに僕だつて…」

六花は僅かに唇を噛み、俯いた。

マダラには早く会いたい。しかし、今は…

「今はまだナルトくんは幼すぎる。忍としてもまだまだだし。今のナルトくとマダラさまが会つてもナルトくんが殺されて終わりだわ」

「なるほど。だからオビトには代役を続けて貰わないと困るって思ったわけね」

「うん…。私はいつでも輪廻転生の術を使う覚悟は出来てる。でもそれは今じゃない。ナルトくんが強く成長するまでは…」

「ナルトが強くなるかなんてどうしてわかるのさ！父親がデキる忍だったからって遺伝するとは限らないよ」

「心の痛み、本当の孤独を知っているひとは、人を深く理解できるものよ…。だから、きつとナルトくん自身も誰かに理解して貰える日が来る。沢山の仲間を支えられる日が来る。だからよ」

「『芙蓉』がそうだったように？」

ゼツのその言葉に、六花はゼツごと膝を抱えた。ゼツの身体が六花の柔らかい頬に吸い付き、ゼツは心地よさそうに目を細める。

「…私は強く居続けることなんて出来なかつたけど、ナルトくんは強くなる…絶対に」

「なーんだ。ぜんぶ六花の希望的観測じゃん。ま、なんにせよ六花に輪廻転生の術は絶対に使わせないけどね！」

そう言うゼツは六花の頬に軽く口づけをした。

「うん…私も出来れば使いたくない…だってマダラさまと会いたいし、ナルトくんと手を取り合うところ見たいし…」

「はあ…まったく相変わらず頑だなね…ていうかここまで来たら信念を曲げないってやつ？」

「そんな立派な物じゃないわ…私の…我儘だから…」

つづく

続・六花の森（14）　　暁に入りて暁達す

「新しくこの暁のメンバーになった者を紹介する」

ペインが宣言する前から、小南を加えて円陣になっている他の暁のメンバーたちの眼は既にその二人に注がれていた。

「元・木ノ葉隠れの忍、うちはイタチ。それから、六花だ。十歳、お前はイタチと組め。ゼツは六花とだ」

「おい、俺はどうするんだ？」

角都が間髪入れずに質問をした。すると大蛇丸も口を開く。

「私も以前から言っている様に、いい加減六花と組ませて欲しいわ。それかイタチ君でもいい」

「角都は暫く一人でやれ。新しいメンバーと組ませる。大蛇丸、お前には六花もイタチも組ませることは出来ない。同じ木ノ葉出身同士を組ませれば反逆を企てないとも限らないからな」

「そんなの有り得ないわ！木ノ葉に未練たっぷりな六花ならまだしも、イタチ君は違う」

でしょう。私と同じく木ノ葉の里を全否定しているじゃない。むしろ気が合うわ」

「黙れ。企むのはむしろ、お前のほうではないのか？疑われたくなければ言う事を聞け」
「フン。そう。分ったわ・・・」

「…では、それぞれ任務に当たってくれ。解散だ」

他のメンバーがアジトの出口へ向かおうと足を動かし始めるなか、六花は先ほどから感じている視線に縛られ、動けない。

右隣りに居るイタチは写輪眼を浮かべて六花を横目で睨んでいる。

六花は思い切ってイタチのほうを見て、言う。

「…オレも、目的はお前と同じだ。」

そう言っつてイタチから目を逸らすと、六花は出口に向かって歩いて行った。

「お前ら知り合いなのか？」

イタチの右隣りに居る、イタチとツーマンセルを組むことに決まった十歳がイタチに訊ねた。

「いや…さつき初めて会った」

イタチは振り返り、写輪眼の消えた眼で六花の後ろ姿を見た。

——オビトが六花に敗北した次の日。山岳の墓場のアジト——

「・・・俺にトドメを刺しに来たのか？」

面で顔を隠しているオビトは、魔像があつたはずの場所の近くに座つて居る。

魔像はいま暁のアジトに在り、ここには柱間の細胞を培養した巨大な植物だけが残つてゐる。

『そう』『じゃないわ。』

ゼツと六花が同時に言葉を発した。

「俺はお前にも木ノ葉の里にも、そして九尾にも、もう手を出すつもりは無い……」

「んなわけないだろ。暁の組織が強固になつて、他の尾獣が揃えばまた里を潰す気だろ」

「ゼツ……。オビト、私も今はあなたと戦う気は無いわ。その代わり、私の言う事を聞いて頂戴」

「言う事を……聞けどと?……昨日も言った通り俺は俺のやり方を変えるつもりは無いぞ」

六花は俯いたまま小さく深呼吸をすると、思い切り顔を上げ、強い眼でオビトを見て言う。

「私を……暁の正式なメンバーにして。そして白黒ゼツと組ませて」

「……なるほど。内部から俺のことを監視するつもりか」

六花は尚も真つ直ぐオビトを見て言う。

「昨夜のあなたとの戦いで、やっぱり私も直接マダラさまの『月の眼計画』をこの手で進めたいって思った……。でも私には貴方と同じやり方は出来ない。私なりにこの暁を強

固にする役目を負うわ。その為には…非情になる！」

六花の言葉にゼツが付け加える。

「オビト。以前も言ったけどお前に六花は殺せはしないし殺させない。絶対にな。お前の仕事はマダラ復活までなら、六花の仕事はマダラ復活の後が本番だ。それまではお前が裏切らないか見張ることが役目さ」

「私はあなたの月の眼計画の進め方については口出しはしない。だけど、あなたが少しでも計画から逸脱している事、そして計画を放棄する事は許さないわ」

その言葉にオビトは胸の前で固く組んでいた腕を解き、今度は膝を組むとその上に軽く手を置いた。そして考える。

「…これまで非協力的だったのに俺に勝ったら急にこの態度…気に食わないが仕方が無い。」

六花は厄介だ。俺がもつと力を付け、尾獣がある程度揃うまで近くに置くほうが俺にとつてもコイツの動きを把握ができる。互いに見張り合う均衡状態が今はベストだな…

「解つた。ようやく利害の一致というわけだな…月の眼計画に向けて」

「そうね。改めて、これからよろしく」

「解つているとは思いますが、暁の支配者は俺だ。それを忘れるな」

「ええ。解つてるわ」

.....



紺碧の海には白波が立っており、砂浜では哀切な声で鳴きながら親鳥を探す一羽の千鳥がちよこちよここと歩いていく。

六花はその紺碧の海と千鳥の姿それぞれに、愛する二人の姿を重ねていた。

『よく飽きないな』

『飽きませんよ。だってこんなに綺麗なんだから。それに……』

しかし、隣にマダラは居ない。ずっと、ずっと前から……もう。

今年も残り数日となっていた。毎年この時期になると必ず思い出す、あの日。

初めて胸に抱いたナルトの体重と、体温、そして母を求める、あの瞳……

その瞳は海のように深く無限大の可能性を秘めていた。そして堪らなく愛おしかった

……

その想い出に、いつも六花の胸は強く締め付けられるのだった。

すると突然大きな風が吹き、六花の纏う装束の裾を翻した。

左肩に載るゼツがその様子を見て言う。

「この装束六花に似合ってるよね。前より良いよ」

「…えっ？ああ、そう？正直私は好きにはなれないけど…まあ覚悟の証だからね」

「だって前の格好（戦闘服）は胸の谷間が丸見えだったもん。これくらい全身隠れてる方が安心だよ」

「でも私はマダラさまが選んでくれた服だから、あっちのほうが好きだし安心よ」

「あーあ。でもまた六花の作ったケーキが食べたいなあ」

「…うん。でももう二度と木ノ葉の里には住めないからね…（山岳の墓場の町に在る）一軒家のアジトも随分片付いてきたし、また作ってあげるわよ」

「わーい。大福も作ってね」

「ハイハイ…って、ちゃんと、来てくれたみたいだわ」

六花がそう言うのと、ゼツは六花の襟の内側に入り身を隠した。

一分ほどすると、後ろの松林の中からその人物が歩いて現れた。

「来てくれて、ありがとう。イタチ…」

「俺もアンタに聞きたいことがあるからな」

先日イタチはツーマンセルを組まされた十蔵との任務中、十蔵が水の国で死亡した。

その為、今日は暁のリーダーであるペインが選んだ新メンバーに会うことになり、イタチは暁のアジトに呼ばれていた。

そしてイタチがペインに会った後、その新しいメンバーと合流する前、六花は話があると言つてイタチをこの場所へ呼び出したのだった。

「そうよね・・・どうぞ、何でも訊いて」

「まずは、今日ここに呼び出した理由だ」

「あの日：私があなたに言つたことは本心よ。私は木ノ葉の里を、木ノ葉に生きる仲間を守りたいって思つてる。夫・扉間がうちは一族にしたことへの償いの気持ちもあるけれど、あの時は純粹にあなたのことを救いたかつた。信じて貰えない事を承知の上で更に言つと、だから、私が暁に入った目的はあなたと同じだと伝えたかつたの」

「なぜ暁に入った理由が俺と同じだと言える？何を知つている？」

「夫の政策を受継いだ志村ダンゾウの行き過ぎたうちは迫害について調べていたの。それであなたが暗部に入つてからの経緯も知つた。：二重スパイ。辛かつたでしょうね。心に血を流しながら働いていたあなたが、たかが一族に失望しただけで、あんなことをするとは思えない。うちは一族を犠牲に木ノ葉の里を守つた：だから今度は、犯罪組織である暁を内部から監視する為に加入したんじゃないの？」

「・・・俺はアンタのことを木ノ葉の里で何度も見た事がある。ナルトの養育係を辞めた後もずっと。ナルトに九尾が封印されていることも知つているのか？」

「ええ。知つているわ。でもそんな事関係無くあの子を育てたかつた：養育係になつた

ことも、辞めた後もあの子の傍に居たのも全ては私のエゴよ……」

「……だが、千手扉間の妻・芙蓉は随分前に死んでいる。アンタは一体何者で目的はなんだ？」

「……私は確かに一度死にかけたわ。でも、うちはマダラに助けられたの。うちは一族のあなたなら知っているかもしれないけれど、私は扉間と結婚する前、マダラとも結婚していた……」

「要するに、アンタはマダラの仲間というわけだな」

「ええ……。 فقط」

イタチは一度目をつぶると、再びゆっくりと目を開けた。

次の瞬間。

六花とイタチは真っ白な空間に居た。

……。なんだここは！何も無いなんてあり得ない！……

イタチは向かい合っている六花に動揺は見せず、心の中で動揺した。

一方、六花は燃える写輪眼でイタチを睨んだ。

「私の心の中に勝手に入って来ないで……ここに入って良いのは……私の愛するひとだけよ……」

気付けば、二人は再び元の場所に戻っていた。

背後では変わらず波の音と千鳥の声が出ている。いや、千鳥の声は増えていた。親鳥がやってきたようだ。

イタチも写輪眼を浮かべ、ごくりと息を飲むと口を開いた。

「……本当に、何者なんだ？」

六花は悲しそうに眼を細めて答える。

「私にも……もう解らない……だけど、私は木ノ葉の里を、そしてナルトくんを守りたい。それだけの。もうそれだけの存在で良い……」

私を信じてくれなくてもいいわ。でも、私の力が必要な時は言つて。これは二人だけの秘密。表向きは私も暁のメンバーとして世界征服が目的だから……」

六花はそう言つて静かに目を閉じると、左目から一筋の涙が頬へと流れた。

そして、そのままその場から姿を消してしまった。

「……。取敢えず、敵では無いという事か……」

イタチは写輪眼を取めると、千鳥が飛び去った砂浜を静かに眺めた。



「私……ハゴロモお兄さまのことも、ハムラお兄さまのことも、大好きです。でも……今は……誰とも結婚したいと思えないんです！」

……これはあの時、私が扉間さまに言つた言葉……でもハゴロモ？ハムラ？……誰、だつ

け。あれ、でもあの時の気持ちと、違う。私、本当は・・・

「うむ・・・お前の感覚のほうがこの世界の価値観に近く、正しいのかもしれない。母の因果を断ち切る為にも、その気持ちを優先させることが最善だろう・・・」

ハゴロモは優しい顔でそう言うが、隣のハムラは身を乗り出し大きな声で言う。

「ヒミコ！兄と妹だろうと、元々この地のヒトではない我らに、そんな事は懸る事ではない。仕方が無かつたとはいえ母を封印した俺たちのことを考えたくない気持ちも解る。だが俺と二人で居れば気持ちも変わる。頼む、一緒に月に来てくれ！」

・・・そうだ、これはヒミコさんの記憶。でも本当はヒミコさんは・・・

目の前のハゴロモとハムラの姿が消え、気づけば床に座りうな垂れて、顔を覆って泣いていた。

「・・・ヒミコ・・・」

「嫌っ!!触らないで!!・・・こんな身体の内はもう、もう月に行くしか・・・」

「そんな事は無い!ハムラは一人で行かせる。お前は自由に生きればいいのだ。時が経てば体の傷も、心の傷も必ず癒える。それに、お前には母の魂の欠片が封印されているのだ。その魂を封印する為にもお前のチャクラすべてを封印しなければならぬ。お前はこれからこの地のひとりの女性となり、幸せに生きるのだ・・・」

・・・なぜ?どうして?私がこんなに傷ついても、あなたは『一緒に居よう』と言っ

てくれないの!・・・

「!!!・・・ハアハアハア・・・」

六花は飛び起きた。

息が上がリ、寝汗をびっしょりとかいている。

「六花大丈夫?どうしたの!」

ゼツも焦って六花の左肩に載り、心配そうに六花の顔を覗き込んだ。

「・・・うん・・・ちよつと怖い夢、見ちゃっただけ・・・」

「最近多いね。暁に入ってから五年近く、六花が嫌なこと沢山してきてるもんね・・・ストレスがずつと溜り続けてるんだよ。そろそろ暁を抜けたら?最初から君が暁なんかに入る必要は無かったわけだし。もうこれ以上無理することない」

そう言つてゼツは六花の頬に擦り寄った。

「ありがとう・・・私は大丈夫よ。暁は辞めない。尾獣狩りもいよいよ本格的に始まるし・・・オビトの行動をしつかり監視しなきゃ・・・」

「気持ちは解らなくもないけどさ、ストレスはお肌に悪いよ?マダラが復活して六花が老けてたらガツカリするんじゃない?」

「フフツ。それは困るね・・・」

六花は苦笑しつつ、ゼツを優しく撫でた。

確かにこの五年間、潜入捜査が主だったとはいえ、六花は暁の正式なメンバーとして汚い事にも手を染めてきた。

そのストレスは計り知れないもので、自分を見失いそうになることが何度もあった。自己嫌悪と罪悪感で、いつしか自らナルトを遠ざけてしまっていた。

六花はナルトの八歳の誕生日を祝ったあの夜以来五年間、ナルトに会っていない。

六花はいまの自分にはもう、ナルトの前に笑顔で現れて抱き締める資格など無いと思っている。

幸い、六花に敗れたオビトには、九尾の捕獲は最後にするよう約束させている。

また、木ノ葉の里と弟を守るという六花の同志ともいえるイタチの存在のお陰で少しだけだがナルトに対する心配の気持ちは深まらずに済んでいた。

それでも、ゼツの言う理由の通りで悪夢にうなされることも増えていた。

だが今し方見ていた夢は悪夢ではなく、ヒミコに初めてあった日から定期的に見る、ヒミコ自身の記憶であった。

翌朝。

六花は久しぶりに普段着に身を包み、山岳の墓場の港町を歩いていた。

昨夜はうなされて飛び起きて以降なかなか寝付けず、仕方が無いので日の出前にベッ

ドから出た。怠きはあるが折角早起きをしたので、漁港で毎朝行われている朝市に行つてみる事にした。

それから新鮮な鱈とハマグリ、菜の花や蕪などの野菜を買い、今は一軒家のアジトに帰る途中である。

五月に入つてから雨や曇りの天気が続いていたが、この日ようやく晴れ、太陽の光に踊るような涼やかな風が六花の頬をかすめていった。

ふと足を止め、目の前の木を見上げる。

それは、緑の葉と白い花のコントラストが美しい、ハナミズキだった。

遠い昔、扉間が弟子である猿飛ヒルゼン、志村ダンゾウ、水戸門ホムラ、うたたねコハル、そして『芙蓉』の教え子でその日から扉間の弟子に加わったうちはカガミを自宅に招いて、芙蓉が料理を振る舞い、皆で楽しい時間を過ごしたことを想い出した。

あの日、弟子たちが帰って静かになった縁側で、扉間と二人肩を寄せ合い、扉間が芙蓉のためにと植えてくれたハナミズキの花を眺めた…。

…だけど私はもう、自分が何者か、いよいよ分らなくなってきた…。そう心の中で呟くと、視線を足元に落してゆっくりと歩き始めた。すると。

「……」「うん、ペインからの通信だね」

ゼツが六花の胸の谷間から出て左肩に載り、六花は再び立ち止まって斜めに視線を落

として耳を澄ませる。

「…木ノ葉隠れの里で事件が起きた。大蛇丸が音隠れと砂隠れの忍を使い、木ノ葉崩しと謳って戦争をしかけた…」

「…!!」

六花の心臓がドクンと大きく音を立てた。

「…ナルトくん!…」

「…しかし木ノ葉崩しには失敗したようだ。この戦争で三代目火影が死んだ。引いた大蛇丸だが行方は分からない。誰かに調査に言っ貰う…」

「…ヒルゼンくんが、大蛇丸に…」

六花は大きく目を見開き、少し開いた口に手を当て俯いた。その時。

「…俺が行こう…」

うちはイタチが真つ先に調査に名乗り出た。

「…ではお前たちに任せる。九尾の人柱力の件もな…」

「ほら僕が言った通りになった。三代目火影はやっぱりあの時のつけを払わされたよ。

あはは」

「ゼツ!笑わないの!…私たちも木ノ葉の里に向かうわよ!」

「行く必要無いって。僕が白黒ゼツにナルトの無事を確認させるから。それに九尾捕獲

も今はその時じゃないんだから大丈夫だつて」

・・・六花がいま壊滅的な被害を受けた直後の里と、中忍昇格試験中に怪我を負ったナルトの様子を見たら、また感情的になって余計な事をし始めたら厄介だ・・・

「解つてる。でも・・・」

「今行つてイタチの相棒の鬼鮫に、ペインの指令も無い六花が見つかったら怪しまれて面倒な事になる。白黒ゼツにはイタチたちの様子も合せて見に行かせるから、六花は取敢えず待つてなつて。それにいま買った鱈とかの生モノどうすんのさ？勿体ないし」

「そ、そうね・・・解つた」

六花は少し戸惑いつつもそう返事をし、再びゆっくりと家に向かつて歩き出した。

ゼツは、眉を寄せ俯き気味に歩く六花の顔を見ながら思った。

・・・流石に六花も冷静に考えられるようになったね。暁での汚い仕事も、六花にとつて己の感情に流される甘い性格を見つめ直す良い経験になったのかも・・・

・・・つて、やつぱこうなるよね。ハア・・・

六花の左肩で大きな溜め息を吐くゼツを横目に、六花は建物の屋根の上で、離れた場所に広がる悲しい光景に涙を流していた。

ペインの通信の翌日。白黒ゼツからの報告があつた。

ゼツにとっては全て既知の事実だったが、そこで初めて里とナルトの状況を知った六花はゼツの反対を押し切り、こうして木ノ葉の里へやって来たのだった。

そして今、木ノ葉の里に到着した六花の眼の前には、三代目火影の遺影と、怪我を負っているものの元気な様子のナルトがある。

そこは三代目火影と、火影と共に犠牲になった殉職者たちの葬儀の場面だった。

「ナルトくん、良かった無事で・・・」

六花はそう洩らすと、しゃがんで屋根に指を当てて目を閉じた。

そして感知を始める。

すると、ナルトの声が聞こえてきた。

『イルカ先生、なんで人は、人のために命をかけたりますんのかな』

「・・・ナルト：：くん・・・」

六花は目を閉じたまま、眉を寄せた。

するとナルトの問いに居るイルカという教師の声が、静かにそれに答える。

『人間が一人亡くなる：：過去や今の生活、そしてその未来と一緒に：：。沢山の人が任務や戦争で死んでゆく。それも驚くほどあっさり、簡単に：：死にゆく人にも夢や目指すものがある。しかし、誰しもそれと同じくらい大切な物があるんだ。家族、両親、兄弟、友達や恋人、自分にとって大切な人達：：互いに信頼し合い助け合う、生れ落ちて来

た時からずつと大切に思ってきた人たちとの繋がりに：そしてその繋がった糸は、時を経るごとに太く強くなつてゆく。理屈じゃないのさ。その意図を持ちまった奴は、そうしちまうんだ：大切だから』

その答えを聞き、六花はハッと大きく目を開くと、眼の前の小さな二人の姿を見つめた。

イルカの答えは六花の、いや、芙蓉のもっている答えと全く同じだった。

・・・絆：貫つて、紡いでゆくもの・・・

六花の二つの眼から大粒の涙が静かに滴った。

そして再びナルトの声がする。

『うん。なんとなくは俺にも解るつてばよ。でも、死ぬのは辛いよ：』

その言葉に、ナルトの後ろに居る別の忍が静かに答える。

『三代目だつてただ死んだわけじゃないよ。ちゃんと俺たちに大切な物を残してくれてる。ま、いざれお前にも解るようになるさ』

『：うん。それもなんとなく解るつてばよ』

「良かった・・・ナルトくんにも、沢山の絆が出来ているのね・・・ヒルゼンくんありがとう・・・あなたは扉間さまの光を受継いでくれた。その光で木ノ葉の里とひとを照らしていたのね・・・」

六花はそう眩くと再び静かに立ち上がった。

先ほどまでの雨は止み、鈍色の空の隙間からは青空がのぞいている。そこから午後のもやもやした光が差し始める。

六花は被っていた笠を取ると、三代目火影・猿飛ヒルゼンの遺影に向かって深く頭を下げた。

そして頭を挙げ、数秒そのまま真っ直ぐ前を見据えた後、再び笠を被るとその場から姿を消した。

しかし……

「今の女……確かナルトの……」

六花が姿を消す直前、建物の下の狭い街路から、大柄の白い長髪の中年男が六花を見上げていた

つづく

続・六花の森（15）　く流されながらも舵を取る

コンコンコン……。

「?……なんだ、もう帰って来たのかってばよ」

ガチャツ。

「……!」

……誰だ?! サスケの写輪眼とおんなじ……

「しかし、こんなお子さんに九尾がねえ」

……なんでこいつら、九尾のこと知ってんだってばよ……

「ナルト君。一緒に来てもらおう。外へ出ようか」

……こいつら、タダもんじゃねえ……

「イタチさん、チョロチョロされても面倒ですし、足の一本でも切っておきましょうか」

「?!……」

「……久しぶりだな……サスケ……」

「……うちは……イタチ!!」

この日、ナルトは“木ノ葉の三忍”のひとりである自来也と共に、同じく三忍のひとり綱手を探しに宿場町に来ていた。

しかし自来也は道端で目の合った呑屋の女に誘われ出かけてゆき、呑屋の部屋に一人残されていたナルトの前に突然、うちはイタチと干柿鬼鮫が現れた。そしてそこに、イタチの弟である、うちはサスケも駆けてきたのだった。

しかしナルトは突然現れた強者と、サスケとイタチの關係に、ただ驚き固まるしかない。

一方のサスケは写輪眼を発動し、イタチを睨みつけている。

「アンタを憎み、アンタを殺すためだけに俺は……生きてきた!!……アンタを殺す!!!」

サスケは千鳥という術を左手に発動すると、イタチに向かって一直線に走り出した。

…ガシッ!

しかし、イタチはサスケのその左手を掴むと簡単に術を抑え込んでしまった。

……オレがなんとかしないと!!……

ナルトは印を結ぶが、鬼鮫の大刀・サメハダによつてチャクラは吸い取られてしまった。鬼鮫はその大刀をナルトに振り下ろす。

ガチインッ!!

すると、ナルトの目の前に口寄せ蛙が現れ、鬼鮫の攻撃を防いだ。

「…お前ら、ワシのことを知らなすぎだのう…男・自来也、女の誘いに乗るよりや口説き落とすがめっぼう得意つてな！女の色香にホイホイ着いて行く様には出来とらんのう！」

そして、ナルトの背後に白い長髪の大柄な中年男が現れた。

しかし、その場の全員が自来也のセリフにシラケて居る。

自来也は顔を引きつらせながらも、目の前のイタチと鬼鮫の装束を見て驚いていた。

…この装束。葬儀の日に見たあの女と同じ！…だがなぜナルトの養育係だった女が、ナルトを狙うこやつらと同じ装束を…まさかあの女がこやつらを手引きしたのか
!!
…

「キャツ！…ああ〜びつくりした」

「いい加減慣れろ…いちおう相棒だ…」

六花は三代目火影の葬儀を見届けた後、一通り木ノ葉の里の状況調査をした。そして木ノ葉の里に向かっていているイタチと鬼鮫に鉢合わせないように、早めに里を後にして山岳の墓場へ向けて出発した。

そして今、小川のほとりの木陰で休憩を取っていた所、木の幹から白黒ゼツが現れ六花は驚いた。

六花の左肩に載るゼツが、白黒ゼツへと尋ねる。

「イタチたちの様子はどうだった？」

「ナルトを襲っていた…」

「なんですって!!」

「落ち着いて。それは見せかけだから。で、どうなった？」

「ナルトは全く相手にならなかった。自来也が来なければ大怪我だったかもな…だがナルトの仲間でイタチの弟のサスケは重症だ。自来也はこれからナルトを強くするため修行をつけるらしい。少しはナルトも強くなるだろう…」

「だってさ。良かったね、六花。ナルトに師匠がつけば強くなれるね」

・・・まあ無駄な努力だけど・・・

ゼツはそう思いながら、明るい声で六花に言った。

「うん！あの三忍の自来也様はナルトのお父さん・ミナトさんのお師匠様だったら嬉しいし、安心だわ。きっとナルトも三忍を越える強い忍になるに決まってるわ！」

「浮かれている場合じゃない。その自来也に六花が暁のメンバーだとバレている…」

「えっ、どういうこと・・・？」

「どうやら葬儀の時に六花の姿を目撃していたようだ。そしてイタチたちと同じ装束を着ていたことで仲間と気付いた…」

「あーあ。これじゃもう二度と木ノ葉の里には行けないね。それにこれからの行動はもつと気をつけなきゃね」

「軽いわね…まさか…気づいてたの？」

「さあね〜でも六花はもう二度と木ノ葉の里にもナルトにも近づいちゃダメだからね」
「……」

六花は悲しい顔をして小川に目を遣った。

ゼツの仕業でなくとも、暁のメンバーになった時から、遅かれ早かれ木ノ葉の忍から危険人物としてマークされ、そして付け狙われる日が来ることは覚悟していた。

・・・きつとナルトくんにも直ぐに知られるんだろうな。そうしたら私のこと…しかしそれが現実になった今、それは想像以上に悲しい事に感じられた。

同時に、六花はイタチの生き方に身につまされた。

イタチは自ら木ノ葉の里の敵、そして弟にとつての仇になってまで両者を守っている。

六花はイタチと二人で会った日、
「あなたと同じ」と口にしたことが今になって軽々しい言葉だったと感じられ、胸が痛む。

しかし、イタチも六花も、もう二度と船の様に川の流れを逆らって過去へ戻ることは出来ない。

◆ 出来ることは、下流へ流されながらもなんとか舵を取ることだけだった。

ナルトが約二年半の自来也との修行を終え、木ノ葉の里に戻って来てから暫く経ったある日。

暁のアジトにメンバーたちはリーダーであるペインに緊急招集され、全員が分身としてアジトに集まっていた。

しかし、イタチと鬼鮫だけが遅れている。

六花は、九尾を捕獲するのは最後までと解つていても、こうして緊急の招集がある度に、九尾の人柱力であるナルトの身に何かあったのではないかと動揺してしまう。

しかし、ナルトは自来也に二年半のあいだ師事し、十六歳になった今、かなりの実力をつけている。そして暁の動きや友であるうちはサスケの搜索に注力している。

何より、もうナルトには心強い仲間、友達、師が揃っている…。

六花は気を取り直し、イタチと鬼鮫を待とうとした所、二人の分身が目の前に現れた。そしてペインが話し始める。

「緊急に伝えたいことがある…大蛇丸が殺された」

その言葉に誰も周章する様子は無いが、鬼鮫が苦笑交じりに口を開く。

「あの大蛇丸をやったとは大した手練れですね。誰です？」

「うちはサスケだ」

ペインの答えに、六花は横目でそつとイタチの横顔を見た。表情一つ変えていない。しかし感情を出す者が居た。

「大蛇丸はオイラがぶつ倒すつて決めてたのによ！うん」

「デイダラはサスケに大蛇丸を殺されたことが気に食わない。

「フン。やりますねえ。流石、イタチさんの弟だ」

イタチに向かつて鬼鮫が言ったが、それでもイタチは無言、無表情のままである。

白黒ゼツが六花の左隣りで口を開く。

「今サスケは仲間を集めまわつてる。それも厄介な忍ばかりだ……」

そしてペインがそれに付け加える。

「鬼鮫。お前も良く知っているだろう。霧隠れの鬼灯兄弟。あの片割れだ」

「…水月かあ。懐かしいですね」

「それに天秤の重吾も居る。せいぜい気をつけろ。イタチ、鬼鮫。おそらくお前たちを狙っている…他の者も一応うちはサスケのことを頭に入れておけ。イタチや鬼鮫の情報を得ようと暁を標的にするかも知れん…兎に角、イタチと鬼鮫は四尾を早く連れて来

い。三尾と一緒に封印するぞ」

「解った」

ペインの言葉に返事をする、イタチは真つ先に消えてしまった。

「ほーんと尾獣の封印ってしんどいですよね。こんながあと何回あるんでしょう？
考えただけでウンザリ！」

魔像への三尾と四尾の封印が終わり、トビ（オビト）が大袈裟に言った。

その場には暁のメンバー全員が揃っており、実体なのは四尾を連れてきたイタチと鬼
鮫、そして実体として駆けつけてきた六花だった。

「…さて、どつちにいくかな。うん」

デイダラが不敵な笑みを浮かべて言う、それに対してトビが問う。

「あのセンパイ？どつちに行くかなって、どつちとどつちのことを言ってるんすか？」

「そんなん決まってるんだろ！カカシ率いる九尾の人柱力。それか、うちはサスケかだ！」

そう言うデイダラをイタチが横目で見た。そしてそのイタチを六花が見ている。

「いやいやいや！もうどつちもやめましょうよおくだいたい僕らのノルマは終わってる
し、そもそもサスケは尾獣でも何でも無いしい」

「冗談じゃねえ！九尾の人柱力には殴られた借りがある。カカシには右腕やられたし

な。うん：それにオイラが殺すはずだった大蛇丸をやりやがったうちはサスケも許さねえ！」

「ああ・・・もう・・・この人つたら言い出したらホント聞かないんだから・・・」

「何か言ったか？フン！」

「いいえーっ！」

「行くぞトビ！」

デイダラとトビは揃って消えてしまった。それを見届けると他のメンバーの分身も次々と消えてゆく。

その場には、実体の六花、イタチ、鬼鮫だけが残った。

「デイダラの奴、直ぐにでも私たちのノルマか弟さんの所へ向かう勢いでしたが、いいんですかあ？イタチさん・・・」

「・・・。鬼鮫、俺は六花と話がある。悪いが先に木ノ葉へ向かっていてくれないか。直ぐに追いつく」

「九尾のほうへ向かうんですね。解りました。まあお二人ともお時間の限られている同士ですからねえ：：どうぞ、ごゆっくり」

イタチと二人きりになった六花は少し不安そうにイタチの顔を見ると、数歩歩み寄ってイタチと向き合った。

「俺はこれから木ノ葉に向かうが、ナルトには手を出さない…確認したいことがあるだけだ」

「確認…したいこと？」

「ナルトとサスケ。今は正反対に在るが、いつか二人が手を取り合う日が来るかもしれない。そう、あつて欲しい…。その為にも俺は、サスケと闘い倒されなければならぬ」

「ナルトくんとサスケ君が手を取り合う…ええ、私もそう思うわ。あなたが命を懸けて守り抜いたサスケ君にも、最後にあなたの気持ちがちやんと伝わるよう、私も祈ってる…」

六花の言葉に、イタチはそつと目を伏せた。

そしてまた六花を見据えて、言う。

「サスケが俺を倒したあと、マダラはサスケを利用しようと俺の真実を教えるかもしれない…アンタは自分が俺と同じだと言ったな。ならば、サスケのことも見守ってやってくれ」

六花は悲しい顔で頷くと、そのまま俯いた。

すると遠いあの夜の悲惨な光景が目には浮かんでしまい、思わずぐつと目をつむる。

イタチは六花に背を向け、出口に向かって歩き出した。

「…ちゃんと！あなたにとつてサスケ君はかけがえのない存在なんだってこと…伝えてあげてね」

「…ああ」

イタチはそう返事をする、その場から消えてしまった。

六花は消えてしまったイタチの背中を見つめ、思う。

何が正義で、何が平和なのか？

それは人それぞれ、守りたいもの、愛する人によつて異なるのではないかと。

きつとこの世には「誰にとつても正しく幸せしかない世界」など無いのかもしれない。

しかしそうだとしても、太陽に向かって咲く向日葵の様に、永久不変の光に向かって皆が同じ方向を向く必要がある。

それが「世界を救う」という事なのかもしれない。



「イタチが死に、ようやく目の上のたんこぶが無くなった。木ノ葉の里に手を出さないという約束も白紙だ…だがイタチはやはりサスケに保険を掛けていた…天照だ。イタ

チの奴。俺がサスケを仲間に取り入れることを危惧していたんだろう」

数日前、イタチはサスケとの戦いの末、死んだ。

その戦いで負傷したサスケを収容したオビトは、自らをうちはマダラと名乗り、イタチがうちは一族を抹殺した真実をサスケに話して聞かせた。

しかし、サスケがオビトの右目の写輪眼を見たとき、イタチがサスケの左目に仕込んでおいた瞳術・天照によって攻撃され、危機一髪それを逃れたのだった。

「しかし……まで来るのにこれほど暁のメンバーがやられるとはな……」

寂れた石橋の上、オビトの隣りに立って居る白黒ゼツが言った。

「どこかしら問題はあったが皆、暁に貢献してくれた。お陰で俺の計画通りに進んでいる……何より、サスケを手懐けた……」

そう言ってオビトは面の下で不敵に笑った。

「サスケは今どこに居る?……」

「暁と手を組む利益として尾獣を分けてやると言った。もちろん嘘だがな……それで今、サスケには八尾を取りに行かせている。それに、ペインのほうもそろそろ木ノ葉の里に入った頃だろう」

「六花にペインのことを言っていないだろうな……」

「その六花のことなんだが……勿論ペインに九尾を狩らせることは言っていない。だが勘

の良い女だ。特に木ノ葉と九尾に対しては……。だから念の為、ペインが九尾を狩り終えるまで、六花を俺の作った時空間に隔離しておいてはどうだ？」

オビトは白黒ゼツのほうへ身体を向けてそう言い終わると、ある筈のない白黒ゼツの表情を窺った。

「そうだな……ゼツに訊いておいてやる……」

「あつちのゼツに言えば六花に知られるんじゃないのか？六花は知れば拒むだろ」
「報告しないわけにはいかない……ゼツの返事を待て……」

「……。そうか、分った」

ボウツ……

その人影がアジトに現れたと同時に、部屋の松明の炎が大きく揺れた。

「俺一人で来いとはどういう用件だ？」

サスケは不満そうに目の椅子に腰かけているオビトに向かって言った。

「お前の仲間に教えても良いが、ややこしくなっても面倒だからな。それにこれは、俺たち一族の問題だ」

「うちは一族の問題だと？何だ？早く言え！」

サスケはオビトの言葉を聞き一歩前に出ると、鋭い視線で答えを催促した。

「イタチを追い込んだ元凶…それは現在の木ノ葉の上層部…だけじゃない」

「それは一体どういう事だ！」

サスケはこれから抹殺しようとしている者達がイタチを追い込んだ元凶では無いと言うマダラ（オビト）の言葉に興奮し、瞳には写輪眼が浮かんだ。

「二代目火影…千手扉間だ」

「…！」

「扉間は、俺（マダラ）と柱間が手を取り木ノ葉の里を設立した後もうちは一族のことを危険因子として敵視していた。扉間は戦争の最後まで、うちは一族を殲滅させて戦争を終わらせようとしていたからな」

「…それで自分が火影になったことを良い事に、迫害政策を始めたってわけか」

「その通りだ。そしてその思想と意思、政策を受継ぎ更に強固にしたのが志村ダンゾウだ」

サスケは顔を斜めに逸らし、歯を食いしばる。

「くそっ！…うちは一族を追い込んだのは火影の意思だったのか…やはり木ノ葉は上層部だけではなく、うちは一族を無視してのうのと平和に暮らしている里の奴ら全てが許せねえ！」

「実はその意思を受継いでいる者が…この曉にも居るのだ」

「!?」

「今は六花と名乗っているが、本名は橘芙蓉……いや千手芙蓉か」

「扉間の妻が生きているのか? ……だがなぜ暁に居る!」

オビトは椅子から立ち上がり数歩出ると後ろを向き、巨大な植物を見上げた。そして笑い交じりに言う。

「芙蓉を六花という忍に育て暁のメンバーにしたのは、俺の扉間への復讐だ。芙蓉はもともと俺の妻だった。それをあいつが奪ったのだ。だが俺を捨てて扉間と結婚した芙蓉のことも許せない。そんな女を忍にして、俺たちちは一族が味わってきた痛みを身をもって教えてやろうと思ってるな」

「それは俺には関係無い。色恋などつまらぬことは一人で勝手にやれ」

サスケはそう言うのと直ぐに後ろを向いて出口へ歩き始めた。するとその背中にオビトが落ち着いた声で言う。

「たとえばあのイタチでも、たった一人でうちは一族全員を殺せたと思うか?」
「!!?」

サスケは思わず足を止め、急いでオビトに振り返った。

「最後までうちは抹殺に迷っていたイタチの背中を押し、抹殺に手を貸したのは六花だ。六花が背中を押しなければ、イタチもうちは一族も三代目火影の言う事を聞き入れ和解

に向けて歩んでいたかもしれんな」

「……」

「六花は今でも木ノ葉を愛している。その点ではイタチと気が合っていたようだがな……だがこれからの俺とお前の計画にとつて六花は邪魔だ。俺一人でやってもいいんだが、
“芙蓉”を殺せば少しはお前の気晴らしになるかと思つてな……どうだ？」

サスケの瞳には写輪眼が浮かび、そしてそれは、万華鏡写輪眼へと変化していった。

つづく

続・六花の森（16）　　全てを背負う者。　　うちはサスケV S 六花

チリンチリン・・・

縁側に吊るされた鉄製の風鈴が夜風に揺られ、透き通った音を立てる。

「はあく美味しい。ホント冷蔵庫って便利だよねえ。冷凍できるのが更に便利！」
「うん。いつでも家でアイスが食べられるしね」

「ほーんと。この暑いなか饅頭を作らされた後のアイスは美味しいなあ」

「ご苦労さま」

「ちよつとお！」

六花は頬を膨らまし、膝の上に載っているゼツの顔を覗き込んだ。

「しかもあんなにいっぱい作らせて…どういうつもり？」

「冷蔵庫と冷凍室に入れとけば十日間は充分もつよね」

・・・本当は僕だって出来立てが食べたいよ。一日だって六花と離れたくない・・・

ゼツはオビトの提案を飲み、ペインが九尾を狩り終えるまで六花をオビトの作った異

空間に閉じ込めておくことにした。

しかし、万華鏡写輪眼をもつ六花ならばオビトの異空間から抜けるのは容易である。ゼツが何とか六花に嘘をついて異空間に留まらせることが理想なのだが、六花が万華鏡写輪眼で術を使えばゼツには止められない。

その為、仕方なくオビトに「この空間にマダラの探し物が在る」と言つて六花を見張らせることにした。

「まあ確かにまた作る手間は省けるけど……だけどねっ」

「あれ〜六花のご主人様は誰だっけ？言うこと聞かない子はお置きだよ」
「もう!!」

六花は再び頬を膨らまして目を閉じると、フンと顎を上逸らした。

そして、不機嫌な表情のままゆっくりと目を開ける。

すると六花の瞳に満天の星空が写った。

チリンチリン……

風鈴の音が、いつかの笹飾りの音と重なる。

六花は不意に隣を見た。

うちは私塾の笹飾りはとても豪華だった。そしてその笹飾りに付けられていた、うちはカガミの願い事は……

六花は一度床に目を落としたあと、再び空を見上げる。

・・・死んだら星になるって、あれはなんとなく嘘だと思う・・・

カガミ君も扉間さまも、柱間さまも、樹ちゃんも、椿さんも、仏間さまも、そしてマダラさまも、私以外みんな、きつとどこかで楽しく暮らしているんだわ・・・

そう思うと急に、寂しさと孤独で体の芯を締め上げられるような感覚がして苦しくなった。

再び膝の上のゼツを見ると、ゼツも六花の顔を見ていたようで目が合う。

「そんな顔するなよ。もうすぐ寂しい気持なんて無くなるからさ」

「・・・うん。」

・・・ゼツ。あなたも本当はヒミコさんのこと・・・今もずっと・・・

六花は少し悲しそうな顔で微笑みながらゼツを優しく撫でると、ゼツは幸せそうに目を細めた。

・・・こんな時、ヒミコさんに会えたらな・・・

しかし、今日は新月である。

翌朝。

「よし。準備できた。やっぱりこの格好のほうがいいわ」

六花は戦闘服に着替え、姿見の前で満足そうに微笑みポーズを取った。今日は暁の装束を纏う必要はない。

木ノ葉の里ではナルトたちが本格的に暁の捜査に乗り出している今、暁の任務以外では暁の装束を着ないようにしている。

六花は戸締りをしてから一軒家のアジトを出た。

ふと気になり、玄関から庭に目を遣った。

一瞬、そこに白い冬物のロングスカートを揺らして歩く自分の姿が見えた気がした。

思わず何度も瞬きをするが、やはり庭には誰も居ない。遅咲きの朝顔が、六花を笑うように揺れている。

『もうすぐ寂しい気持なんて無くなるからさ』

昨夜のゼツの言葉が蘇った。

先ほど見た過去の自分はあの直後、扉間によって木ノ葉の里に連れ帰られた。そしてマダラは柱間に敗れ、マダラが死んではいかなかった事を知らずに芙蓉は扉間と結ばた。その事で、マダラと別れることとなってしまった。

そして芙蓉はゼツの力で六花となり、再びマダラの傍に居たが、今度はマダラの死が二人を別けてしまった…そして今、砂時計の残りの砂が僅かになつて、日々感じて

次、再びマダラに会う時。

それは本当に永遠の別れの時なのかもしれない。

少なくともまた当分は会えないだろう。

マダラが蘇る時。

それは六花が思うに即ち、マダラとナルトが手を取り合い、世界を救う時である。そして同時に、六花がこの世に生きている役目が終わる時だ。

そんな事は六道仙人に出会ってから何十年もの間、数えきれないほど覚悟してきた事である。むしろ、早く役目を終えて扉間たちに会いたいと願っていた。

それなのに、今はもつと生きて居たいと思う。

別人の六花とはいえマダラに愛された数十年間を経て：

そして、赤ん坊のナルトを抱いたあの日から：

六花は目をつぶって俯くと激しく首を横に振った。

「どうしたの？大丈夫？」

左肩に載っているゼツが心配そうに六花の顔を覗き込む。

「……うん！大丈夫！行こっか」

六花は顔を上げて明るく言うと、颯爽と出かけて行った。

「急に『オビト』として話したいだなんて、いったいどういふつもりなのかしら…」

六花は昨夜も訊ねた事を、再びゼツに訊ねた。

「尾獣も残すは八尾と九尾だけになったからね。ナルトも凄く強くなってるしオビトも内心は六花と同じ事を考えているのかもよ？」

「そうだと良いなあ…マダラさまとナルトくんが手を取り合って、そこにオビトも協力してくれる気になってくれたのなら…嬉しい」

「確かに。ナルトに興味が湧いてきているのは事実だな」

「!!?」

突然、目の前の道にオビトが現れた。

しかも、一人ではない。

オビトの斜め後ろにはサスケが立って居るではないか。

「なぜここに？アジトで話をするんじゃないや…それになぜサスケ君まで！」

「サスケがお前に話があるそうだな。サスケを迎えに来たついでにこちらから出向いたんだ」

・・・ズズズズ・・・

すると地面から白黒ゼツが六花の隣に現れ、オビト（トビ）に向かって言う。

「トビ…話が違うぞ…」

「そうか。自分の手で六花を殺せないからサスケに殺させるつもりだな。だけど殺せと命令だつて出来ないぞ」

六花の左肩に載るゼツも目を吊り上げてオビトに言った。

「勘違いして貰つては困るな。俺は暁の協力者であるサスケにも、俺の仲間である六花と話をして貰いたいと思つただけだ」

六花は白黒ゼツとゼツ、そしてオビトの会話に戸惑うばかりで何も言えずに居る。

そんな六花に構うことなくサスケがオビトの隣りに歩み寄り、六花に向かつて言う。

「おい。お前が二代目火影の妻というのは本当か？」

「!!?」

六花はサスケの発言に固まった。

驚きと恐怖で瞬きも出来ない。

「答えろ！」

その声に六花はギュツと目を閉じて唾を飲み下す。青天の霹靂とまでは言わないまでも、サスケがその事実を知ってしまったことに驚いた。

そして、その事実をしたサスケがどう考えるか……

六花はゆっくりサスケのほうを向いて口を開く。

「……ええ。私は、千手扉間の妻……でした」

「うちはイタチに手を貸したのも、お前か？」

「そつ、それは!!・・・」

六花は慌ててオビトの方を見て僅かに戸惑う。

サスケの問いを聞き、オビトがサスケに嘘を吹き込み、六花を攻撃させようとしている事に気が付いた。

しかしうちは一族抹殺に手を貸したのは自分では無くオビトであると言えば、オビトをマダラと信じているサスケを疑心暗鬼にさせ、これまで進めてきた月の眼計画に支障が出るかもしれない……

「お前がイタチうちは抹殺実行に向かわせた……そうなのか？」

サスケは今にも六花に襲い掛かりそうな状態で六花を問い詰める。

しかし、六花はサスケの眼を真っすぐ見て、揺るがない瞳で答える。

「違います。あなたのお兄さんは自らの意思で抹殺を行ったの。里を守るために。私は一切関与していません。」

「フツ。言っただろ……この女が素直にハイそうですと認めるわけがないと」

サスケの隣で腕を組んで立って居るオビトは笑い交じりに、呆れた様に言った。

「いや、二代目火影の妻だという事は認めた。それで充分だ」

六花はサスケの言葉に、少し目を細めて悲しそうな顔をした。

サスケが扉間を恨む気持ちは理解できる。

その憎しみが現在も生きている六花に向くことも…

サスケは写輪眼を発動させると素早く腰の刀を抜いた。

「俺は、うちは一族を迫害し滅亡にまで追い込んだ奴らだけではなく、うちはの犠牲を無視して平和を享受する木ノ葉の全てを否定する。すなわち、お前の存在もな…」

サスケは刀を六花に真つ直ぐ向けて言った。

「六花、逃げよう。サスケは須佐能乎を使える。オビトも昔のままじゃない」

落ちて着いた小さな声で左肩のゼツが言うが、六花は首を横に振りその場から動こうとはしない。

「冷静になれよ！サスケはオビトに丸め込まれてる。何を言っても無駄だ！」

六花は苦しい顔で目の前のサスケを見据えた。

すると、オビトも背中にも背負っていた神器・うちはを取り出してこちらに構える。

「さあサスケ。お前のしたいようにしろ。俺は援護してやる」

「援護など必要ない！」

サスケは刀を構えて六花に向かって走り出した。

「六花！早く逃げろ！」

六花は動かなかった足を何とか動かし、その場から姿を消した。

「逃がすか！」

青い空を背負ったサスケが六花の眼の前に現れた。

六花は仕方なく宙に浮きながら腰の刀を抜いた。

ガシイーン!!

サスケは六花に構える暇を与えず刀を振り下ろし、六花は何とかそれを刀で防いだ。

ザザッ！ザザッ！

二人同時に地面に着地する。

「…お前の様な奴に、写輪眼をもつ資格は無い！」

サスケはそう言うのと再び刀を構えて六花に走ってゆく。

六花は写輪眼の瞳でサスケを見た。

チャクラが激しく体中を回っているが、幻術にかけている様子は無い。本当にサ

スケの意思だけで戦っているようだ。

ザッ！………

サスケは地を蹴り舞い上がった。そして空中で前転をし、勢いをつけて六花に刀を振

り下ろす。

ガシイイイーン!!

六花は両手で刀を支えてそれを防いだが、サスケの圧力に押され、左膝を地に着け手

を震わす。

すかさずサスケは刀を離して、今度は六花の左わき腹めがけて刀を突き出した。キーン!!

寸での所で六花はそれを刀で防ぎ、勢いをつけてサスケの刀を押し返す。

バツ………ザッツ!

六花はサスケの右側数メートル先に飛び退き、刀を構えた。

「逃げ回るだけか？」

「………」

「俺と勝負しろ。かかって来い」

「………」

六花はその場を動かさず、ただ黙ってサスケを見据えている。

「六花、サスケが須佐能乎を出す前に早く逃げろ！僕も援護する！」

左肩のゼツが強い口調で言ってきた。

「逃がすものか。俺はお前と戦ったうえでお前を倒す。俺と戦え！」

シヤツ!……パチパチパチイ……

サスケが刀を振ると、その刀に青白い電流が流れパチパチと音を立てて始めた。

「六花！あれは須佐能乎じゃないと防げないよ！」

「うん！」

ダダダダダッ……猛スピードでサスケが向かって来きた。

「千鳥刀!!」

「須佐能乎！」

ガンッ!……バチバチバチイイッ!!

六花を守る様に骸骨と青い半透明の身体が現れサスケの刀を受け止めた。電流だけが須佐能乎の表面を流れ放電した。

「これがお前の須佐能乎か。ならば俺も須佐能乎で答えてやる」

「六花! 須佐能乎のまま逃げるんだ! 無駄な戦いはするな!」

六花は須佐能乎を纏ったまま後ろに飛び退くと、その場に須佐能乎を置いて盾にする
と、須佐能乎から出て走り去ろうとした。しかし。

「逃がすものか!」

六花の眼の前にサスケが立ちはだかる。その手に握られた刀にはまだ電流が流れている。

六花は須佐能乎を纏おうとしたが、サスケはもうすぐ目の前まで来ていた。サスケの千鳥刀を避けようとは何とか右側に飛び退こうとしたが間に合わない。

ザシユッ!!バチバチバチイイ!!

「ゼツ!!!」

ゼツは身体を広げてサスケの刀を受けたが、そのまま切られてしまい、身体はバラバラになって地面に落ちた。

だがそのお陰でサスケの刀の方向を変えることは出来、六花に怪我は無かった。

六花は地面に倒れ、茫然と地面に散らばるゼツを見つめたまま動けない。

「…六花…大丈夫?」

「ゼツ?!」

すると六花が地についている左手の傍でゼツの声がし、見ると小さな球体になったゼツの顔がそこに在った。

「六花…逃げて…君は僕が守るから」

「逃がさんと言っている!」

六花がゼツに返事をしようとした瞬間、眼の前にサスケが立った。しかし握られた刀の電流は消えている。

六花は怯えた眼でサスケを見上げた。

「立て。真剣に俺と戦え」

「……」

「ざつきから黙ってないで何とか言え!」

「……………」

「お前はただひとり罪から逃れ、これからも生き延びるつもりか？」

「……………」

「逃げてても無駄だ。どこまでも追いかけてお前に罪を認めさせてやる」

「……………」

六花はひたすら黙っている。

しかし、サスケを見上げるその瞳には揺るがない意思が宿っていた。

サスケは小さく溜息を吐くと視線を地面に落とし、言う。

「ならば……これでどうだ？」

「!!？」

……ドスツ!!

「うああああああつ!!……………」

サスケが地面に転がる小さなゼツを刀で突き刺そうとしたが、その瞬間、六花がゼツに覆いかぶさり庇った。そしてサスケの刀は六花の右腕を貫通し、六花はあまりの激痛にうめき声をあげた。

「六花っ！なんで!!僕は死なないのに!!」

「……やめて……ゼツを……傷つけないで……悪いのは私だけよっ……」

「どうだ。少しはやる気になっただろうか？」

しかし六花はサスケの問いを無視し、目の前のゼツに歪んだ笑顔で言う。

「…愛してるから…ゼツのこと…傷つけられたくない…もん…」

「卑怯だよ…いつもいつも…なんでこんな時に初めて愛してるなんて言うんだよ…」

見つめ合う六花とゼツを見て、サスケは目を閉じた。

ズシャツ!!

「きゃあああぁっ!!…」

サスケは六花の右腕に刺さっていた刀を勢いよく引き抜き、六花は悲鳴を上げて身体を逸らせた。

「サスケ!!殺してやる!!」

ゼツは地面に散らばる身体を針の様に変えると一斉にサスケに向かって飛びかかった。

「火遁・豪火球の術…」

ポオオオツ!!…ポタポタポタツ!!

サスケは口から炎を吹き出しゼツの身体を全て防ぎ、ゼツの身体は地面に全て落ちた。

六花は流血している右腕を抑えながら地べたに座り俯いている。

…カチャツ。

首の左側に冷たい刃が当たり、六花は顔を上げる。既にその眼には写輪眼は消えていた。

「うちは一族の多くは、今のお前と同じように目の前で愛するものを殺され、苦しみながら死んでいったんだ。少しは痛みが解ったか？」

「ぐっ!!」

六花とサスケの様子を離れた所で眺めていたオビトの首を突然何かが締め上げてきた。

「サスケを止めろ。僕はマダラの意思だぞ。『見殺し』なんてさせない!」

「フン…禁固呪の札か…見殺しも許さないかは…最後まで分かんぞ…ぐあっ!」

「…マダラさま…」

『お前を幸せにできるのはこの世で俺、一人だけだ。そして、お前を不幸にできるのもなあ』

意識が朦朧とし始めた六花の眼には目の前のサスケが、芙蓉とマダラが別れた日、檜枝岐神社でのマダラの姿として映っていた。

「フン。命乞いか」

「……あ、あなたがもし、本当のマダラさまに会ったら、伝えて欲しいの……私は」
『!!?』

突然、六花の身体が薄くなり消え始めた。

そしてサスケと六花は驚くまま、六花の姿はその場から消えてしまった。

「マダラ、あの女をどこへやった?」

サスケは目の前に現れたオビトを睨んだ。

「やはりトドメは俺自身がさしてやりたくなくなつてな。悪く思うな」

「殺すつもりは無かった。罪を受け入れているあの女を殺すことに意味は無い」

そう言うと、サスケは背を向けその場を離れて行った。

「……ん、んんは?……痛っ」

気が付くとそこは無機質な空間だった。

周囲は何も無いわけではないのだが、何も無い。

ただ無機質な立方体がいくつも在るだけである。

六花はそこに仰向けに横たわっていた。起き上がろうとしたが、痛みと貧血で起き上がれない。

「六花! 大丈夫?」

六花の顔の隣りには元の大きさに戻った丸いゼツが居り、心配そうに六花の顔を見つめていた。

「うん・・・なんとか・・・」

「僕の手じや回復させるのに時間がかかる。まずはチャクラを回復させるから自分で回復術を使って・・・」

「その必要は無いわ」

『!!?』

六花とゼツが声の方向に顔を遣ると、そこにはヒミコが立って居た。

『ヒミコ!』『さん!』

「ゼツ。どいてなさい。この空間では私はチャクラを操る」

そう言ってヒミコは六花の隣りに膝を突いて座ると、六花の右腕の傷に手をかざして治療し始めた。

「どうしてヒミコがここにいるんだ!?!」

「どうしてもこうしても、芙蓉は私の転生者よ。ずっとこの子の中に居たわ」

「だったらどうしてもっと早く現れなかったのさ!」

「少し黙ってなさい。芙蓉は意識を失いかけているじゃない。チャクラを使うのは久しぶりなの。集中させて」

「う、うん……」

「……ヒミコさん。ありがとうございました」

右腕の傷は塞がり、意識もはつきりとした六花は急いで起き上がる。

「まだ暫く横になっていなさい」「そうだよ六花!」

「ここはおそらくオビトの忍術で造った異空間です。早く出ないと」

「オビトがここに現れなかったということは、禁固呪の札に逆らってあなたを見殺しに出来たという事よ。いまその状態で外に出ればまたサスケにやられかねない」

「禁固呪の札?!……」

「うん。昔六花に、いや芙蓉にマダラが仕込んでたやつさ。マダラが自分の意思に反した行動をしない為に仕込んでいる。アイツも、それに気が付いているみたいけどね」

六花は悲しい顔で目の前のヒミコとゼツ、二人の顔を交互に見ると俯いた。

「またそんな顔をする。マダラがあなたを守るのは当然であり義務よ。オビトに同情する必要なんて無い」

「そうだよ。確かにオビトは六花を殺せないけど六花はオビト以上に強いんだし」

六花は顔を上げ、歪めた顔のまま再び二人の顔を見た。そして大きく溜息をつく。

「オビトが私を殺せないなら尚更、外に出ます!ナルトくんになにかするつもりかもし

れない。急がないと」

するとヒミコは首をかしげてニッコリ微笑んだ。

「あなたはもう、マダラが復活するまでここに居るのよ、芙蓉」

「!!…………ど、どうして……………」

フラツ……ストン。

六花はヒミコの術で意識を奪われてしまった。

そして倒れそうになったのをゼツが身体を広げて受け止め、静かにその場に横たえた。

「さあ。ゆっくり話しましょうか。ゼツ……」

ヒミコは冷たい微笑を浮かべてゼツを見下ろした。

「六花をこの空間に閉じ込めておくのをなぜ知っていたの?」

「そんなこと知らなかったわ。ただ、私もオビトの異空間に入るよう芙蓉を仕向けるつもりだっただけよ。だってこの子に死んでもらっては困るもの!」

「あれからずっとヒミコも母さんの復活を待っていたんだね」

「懐かしいわ……あなたと初めて会ったのもあの時だったわね」

そう言うと、ヒミコはゼツを見下したまま右側に移動した。

ゼツはじっと、ヒミコの顔を見つめる。

「…もしかして、六花の身体を使う気？」

「当然じゃない。男だったかも知れない、今は只の物体（モノ）と化した身体に入らないといけないなんて真つ平ごめんよ。この子は唯一お母様の意識を覚醒し、私と会えた人物なのよ。この子以外の身体なんて考えられない」

「母さんが復活すれば、この地の人間の多くがまた神樹に繋がれる。その中の女を使うのは駄目なの？」

「あははははは！ふふっ…ふふふ」

ゼツの言葉を聞くとヒミコは口に手を当てて大きな声で笑った。そしてうつすら齒をのぞかせた不敵な笑みでゼツに問う。

「そんなにこの子のことを愛しているの？…私のことよりも？」

「………」

「私以上にこの子を愛するなんて、許さないわよ？」

「君は、一度でも僕のことを愛してくれたことがあるの？」

「ふふっ。それは被害妄想よ。あなたがお母様に肉体を与えられればちゃんと『対等』に愛し合えるわ」

「違う。君が愛しているのはただ一人。それは…」

「黙りなさい。あなたはさっさとこの空間から出て、引き続きお母様復活の為に働くの

よー！」

「ヒミコ!!」

ズズズズズズ・・・

ヒミコが両手を目の前にかざすと空間が歪み、ゼツはその隙間に吸い込まれていった。

「フーン！・・・これだから男なんて嫌いなのよ・・・」

ヒミコはキツと強い眼で、静かに眠る六花を睨んだ。

つづく

★千手柱間さん、10月23日・お誕生日おめでとう!! 次回は柱間さんも登場します
よー★

続・六花の森（17）　　マダラとの再会

見覚えのある風景だった。

晩夏の壮大な夕焼け空に照らされる、木ノ葉の里…

「芙蓉」

その声に振り向くと、懐かしい人が居た。

その人は、申し訳なさそうに微笑んでいる。

「すまない。俺は、お前より先に死ぬと言ったのに約束を守れなかった」

芙蓉の瞳も、唇も、小さく震えるが言葉が出ない。そして、罪悪感がその人に歩み寄ろうとする足を引き留めている。

すると、その人はゆっくり芙蓉に歩み寄り、黙って芙蓉を抱き締めた。

「…扉間さま…私こそ、ごめんなさい…」

「お前に謝る事など何も無い。それにもう、これで互いに謝るのは最後にしよう」

その言葉を聞いて、芙蓉は不意に扉間の顔を見上げた。

扉間は、寂しげな影が宿った眼で自分の顔を見つめてくる芙蓉の頬を、優しく掌で包

み込む。

「桔梗の花言葉、覚えているか？」

「…永遠に…あなたを…愛する…」

「俺たちの罪の向こうには、もうその言葉しかない」

「でも…」

「正義だけが全てじゃない。お前が守りたいものを最後まで守れ」

「扉間さま…」

「さあ行け。互いに選ぶ道は違っても俺たちの物語は続く。そうだろう？」

そう言うのと扉間は芙蓉から身体を離れた。

芙蓉はゆっくりと目を閉じ、そして再び開く。その短い瞬きの間に、扉間との記憶が無数に蘇った。

互いに近づくことを怖れていた幼少期…

互いの気持ちで刺し違え、芙蓉が命の危機に晒されたあの時…

そして二人は咎人となり、繋がった…

いま別れば、もう二度と会えなくなる。

そんな気がした。

「大丈夫だ。また会える。ほら、行け。早く」

「本当に?・・・」

「ああ。」



「六花」

その声に六花は目を覚ました。

ゆっくり上半身を起こして声の主を探す。

すると、立方体の隙間から動く人影が見えた。

!!!

それはオビトとカカシの姿だった。

オビトは面を外しており、素顔を晒していることに芙蓉は更に驚いた。

一体どういう状況なのか全く分からない。

六花は息を殺し気配を消して二人を見つめる。

「俺が戦争を起こした理由がお前とリンのことだけだと思っ
ているなら、見当違いもい
いところだ」

・・・戦争?! どういうこと?! ナルトくんは?! マダラさまは?! ..

六花はオビトの言葉に思わず両手で口を押え、俯き目を泳がせた。

…ズボツ!!

「!!?」

その音に六花ら急いで顔を上げ、二人を見ると、カカシの右腕がオビトの心臓を貫いていた。

そして同時にオビトが話し始める。

「知っているのき……全て……たとえお前がどう言おうと俺にとつてリンを守れなかつたお前はニセモノだ。リンは俺の中で死ぬべきひとではない……よつて死んだリンはニセモノでしかない。リンは生きていてこそリンなのだ」

……オビト……あなたは今でもずっと……

六花はうな垂れ固く目を閉じた。

否応なしにあの日、リンとカカシを守れなかつた後悔が鮮明に蘇る。六花はその場面に必死に手を伸ばすが届くはずは無く、二人の姿はその手をすり抜ける。

「こんな状況ばかりを作ってきた忍のシステム……里……そしてその忍達……俺が本当に絶望したのはこの世界そのもの……このニセモノの世界にだ」

その言葉に、うな垂れ地面を見つめる六花の頭に、今度は病床の仏間の言葉が蘇る。

『……そして忍のことが嫌いだった。この忍の世界が、嫌いだった』

今になり、どうして母がそんなことを言っていたのか、解った気がした。

すなわち、忍になっていなければ母の言葉も、オビトの言葉も理解することなど出来

なかつただろう…そう思った。

すると、カカシが口を開く。

「ナルトが言ったはずだ。心に本物の仲間が居ないのが一番痛いんだって…」

・・・そうよ。ナルトくんにはもう本物の仲間が居る。認められている・・・

六花は目を見開き、ゆっくりと顔を上げた。

・・・ナルトくんの所へ行かなきゃ・・・

六花は静かに立ち上がると、両目に写輪眼を発動した。そしてそれは直ぐに万華鏡写輪眼に変わる。印を結び、この空間から出ようとした。

しかしその時。

「まだその時じゃないわ。ここに居なさい」

目の前に現れたヒミコは六花に向かって両手掌を向けた。

「ごめんなさい…どうしても行かないと!」

六花は急いで印を結ぶと、その姿は次第に消えてゆく。

「どうして?!私の力が効かないなんて!!」

ヒミコは舌打ちをし悔しがる。しかしヒミコにはまだ、この空間から出る力は無い。



ストーン…

地に足が着く感覚と同時に、目の前の視野が明瞭になつてゆく。

「…芙蓉?!…芙蓉じゃないか!」

「…?!…は、柱間さま?!なぜここに?!」

「いやあく説明すると長くなるのだがのう〜って!お前もなぜここに居るのだ?!」

「えーつと…私も説明すると長くなります。って、柱間さま、そのお身体!どうされたのですか!大丈夫ですか!」

六花は濁つた眼にひび割れた肌の柱間の顔から足先まで、何往復も見回し心配した。

「扉間の忍術だ。心配ないぞ!わははは!って、笑つておる場合ではない…芙蓉、ここは危険だ。一緒に安全な所まで避難しよう」

「あの!うずまきナルトというひとに会いませんでしたか?あと…マダラさまにも」

「兎に角逃げようぞ。話はそれから」

「早く!今すぐに教えてください!!」

「…お、おう。ええつと、マダラは…」

「マダラさまは蘇っているのですか?!」

「蘇つておるといふか、何というか…」

「あつ!…このチャクラ!ナルトくんだわ!仲間と一緒に戦っているのね!」

「チャクラつて?!芙蓉、お前忍になつたんぞ?!…む?!…いかん!お前は隠れて居ろ!」

「いいえ。私もマダラさまに会わなければなりません……」
そう言つて六花はゆつくりと後ろに振り向いた。

「六花……こんな所に居たのか。柱間の分身と何を話していた？」

闇から現れたマダラの姿は「芙蓉」と出逢つた頃の青年の姿であるが、柱間と同じ術にかけている様子で普通の身体ではなかつた。

しかし、その目は輪廻眼である。

姿は違えど、約二十年ぶりに会う愛しいマダラに六花は目を凝らす。

「マダラさま……この方が私と芙蓉という人が似ていると言ひ、絡まれました」

「はあ!!何を言い出すのだ芙蓉!さつきまで感動の再会をだのう……」

「柱間……お前、穢土転生されても色好みとは恥ずかしくないのか……」

「なんつー事を言うんだ!お前たちこそ一体どうしたというのだ!」

「六花、今までどこに居た？」

「オビトの作つた時空間に居ました」

「無視するなあーっ!」

「オビトもあの空間に居たはずだ。連れ戻して来い。オビトに俺を復活させる」

「輪廻転生の術、ですか？」

「いったい・・・お前たち二人はどうなっているのだ・・・って、おい、輪廻転生の術だと!!マダラお前!」

無視されうな垂れていた柱間は慌てて顔を上げた。

「この身体は扉間の穢土転生という術によるもので生きた身体ではない。生身の身体にならなければ話にならない・・・柱間、お前と闘う為にもなあ・・・」

六花を見ながらそう言うのと、マダラは柱間に視線を移してニヤリとした。

「マダラさま。私がオビトの代わりに輪廻転生の術を行います」

「ちよつ!何を言うておる芙蓉!!マダラ、お前もいい加減にしろ!もう俺たちは死者なのだ。今ならまだ間に合う。戦争などやめるんだ!」

「・・・。六花、もう一度言うぞ。オビトを連れて来い」

「・・・マダラさま、うずまきナルトというひとには会いましたか?」

「あの砂利がどうした。何を知っている?」

「あの子に会ってみて・・・何も感じなかったのですか?・・・何も気づかなかったのですか?」

そう訊ねる六花の横顔を、柱間は驚きにも悲しみにも似た複雑な表情で見つめた。

しかし、マダラは鼻で笑って見せた。

「フツ。まああれだけの数の忍の先頭に立って戦うだけあって只の砂利ではなさそうだ

な。お前も敵うか分らんぞ？ 気をつけろ」

六花は俯き唇を噛んだ。

そして顔を上げると、涙で潤んだ瞳でマダラを見た。

「私は・・・あなたがナルトくんと手を取り合ってくれることを願っています」

そう言い終わると、六花は素早く印を結び始めた。

「やめろ!!」

柱間は急いで六花の左手首を握った。

そして、六花の右手を見る。

「言う事を聞かんのはいつまで経っても変わらんな…呆れる」

六花の右手首を握っているマダラが言った。

「離して!!」

「落ち着け！お前がそんな術を使う必要は無い！マダラは皆が必ず止める！」

大声でそう言う柱間の顔を、マダラは怪訝そうに見た後、片方の手で印を結んだ。

「っ！.....」

六花は気を失い、マダラの腕に受け止められ、マダラがそのまま六花を抱きかかえた。

しかし、柱間は六花の左手首を握って離さない。

「その手を離せ。分身のお前と闘っても面白く無い。早く本体で来い」

「お前たちが、ワシが死んだ後どうやってこうなったかは知らん。だがあの時と同じだ。今のお前に芙蓉は渡せん！」

「何を訳の分からぬことを言っている。こいつは俺が拾った女だ。お前に関係無い」

「マダラ・・・お前・・・」

ザシュツ!!

マダラは手刀で柱間の手首を切り落とすと、六花を抱えその場から消えてしまった。

「六花！」

目の前にマダラが現れると、ゼツはマダラの腕に抱かれる六花の左肩に飛び載り、六花の顔に擦り寄った。

「ゼツ。お前がついていながらどうしてこうなる。すべてが終わったら詳しく話せ。とりあえず六花を離れた場所へ連れてゆけ」

マダラは六花を地面に降ろし、そう言い残すと再び消えてしまった。

「六花：ヒミコの力に逆らってあの空間から出て来たんだね：だけでも頼むから大人しくしててよ。母さんが復活すれば君の苦悩も無くなる。二人で幸せになろう。必ず
：」



グサアツ!!・・・

「分身とやるつもりは無いと言ったはずだ」

須佐能乎で串刺しにした柱間の分身に向かつて言った。

マダラは半身の須佐能乎を纏い、地面に胡坐をかいて座って居る。

「マダラ…お前もずっと…何かを…」

柱間の木遁分身は木に戻って消えてしまった。

そしてマダラは、目の前を見つめて微笑む。

「フン・・・流石、俺が育てただけはあるな・・・六花よ」

そう言うともマダラは須佐能乎を収めた。

するとマダラの眼の前の岩の後ろから、六花が静かに歩み出てきた。

「あの程度の術、お前なら直ぐに解けて当然か。だがゼツもまるで役に立たんな。お前

の守（もり）すらできんとは…輪廻転生の術をしようとしているなら無駄だぞ」

「はい…もうそのつもりはありません」

「なら何故来た。今はまだ再会を懐かしむ時ではない」

「お願いです。忍連合側とこれからの忍の世界の在り方について話をしてみして下さい。

マダラさまの計画をもっと良いもの出来る何か得られるはずです」

「フフツ…」

マダラは胡坐をかいた膝に右ひじを置いて頬杖をつくと、軽く笑って見せた。

「マダラさまが亡くなつてこの二十年…当然世界は変わつています。新しい世代が新しい価値観と変わらぬ信念をもつてこの世界を動かしているのです。その者達の話の聞けばきつと忘れていたものを想い出し、気付けなかつた事に気付けるはずですよ！」

「ハハハハ…分つた分つた。お前には随分寂しい想いをさせたようだな。だが俺を年寄扱いするのはやめろ。この世界は何も変わつちやいない。この世に人間が居る限り憎しみと争いの連鎖は消えぬ」

六花は寂しい顔で目を閉じる。

そして静かに、深く深呼吸をする。

「お前の頑固が変わらないようにな…言つても聞かないだろ？ 計画が完了するまで結界の中から見て居ろ…!!…」

ヒュンツ！

バツ！

マダラが結界を作ろうと印を結ぼうとしたが、その瞬間六花がマダラの眼の前に瞬間移動し刀を振り下ろした。マダラは手を解き後ろに飛び退く。

「あなたを復活させ、計画を成功させるわけにはいかない」

——六花がマダラの前に戻つて来る前——

「!」

地面に横たわっていた六花はパチリと目を開けた。

「…ゼツ…良かった…無事だったのね」

六花はゆっくり起き上がり、両掌を揃えてゼツの前に差し出した。その上にゼツがぴよんと飛び載る。

「六花…マダラの術を解くなんて! どうしてそこまで」

「私がマダラさまを輪廻転生の術で復活させる。オビトはまだ引き返せる…」

「何を言い出すんだよ! もうオビトが尾獣すべてを揃えて十尾は復活してるんだ。マダラ復活もオビト自身が望んでいることだよ」

「本当にそうかな…私はそうは思えない。だってオビトを仲間から引き離し、マダラさまに引き合わせたのは、私だもの…」

「今更何を言ってるの! マダラとナルトが手を取り合う為だったら非情になるんじゃないのか!」

「もう、私の役目は終わっているから…」

「何言ってるのさ。君の本当の役目はこの先だろ?」

「あのね、ずっとあなたに黙っていた事があるの…」

「何?」

「私、芙蓉の記憶を取り戻した直後に、六道仙人に会ってるの。それで、あの時マダラさまの元へ戻ったのは、予言の子が世界を救うまでヒミコさんの次の転生者をこの世に生まない為、生きていて欲しいって頼まれたからなの…この身体も六道仙人の力よ」

「それが何だつて言うんだよ！」

「予言の子はナルトくんよ。マダラさまの計画を止め、世界を救うのはナルトくんなの。その時、マダラさまと手を取ってくれるかは分からない…でももう、私がこの世に生きていく役目は終わっているのよ」

「六花…僕のこと愛してるって言ったじゃないか。あれは嘘だったの？」

「嘘じゃないわ。愛している」

「だったらこれからは僕の為に生きてよ。新しい世界で二人で幸せになろう。もうこの先君がマダラのことでも思い悩む必要は無いんだ」

それを聞くと六花はゼツを掌から膝の上に移して、戸惑うそぶりを見せる。

「私、あなたのことも知っているの。ヒミコさんに聞いてる」

「……」

「そんなあなたがどうしてマダラさまの傍に居て、マダラさまの命令を聞いていたのか…もしかして、ヒミコさんの事と関係があるんじゃないの？」

…六花はホント、鋭いんだから…

「僕の正体を知っていたんだね。なんか、凄く嬉しいよ……」

「?……」

「僕はこの世に肉体をもつて生まれることが出来なかった。ずっと母の意思として存在していたんだ」

「大筒木……カグヤさん?」

「そう。母がハゴロモとハムラに月へと封印された瞬間、この形になって産み落とされた。いつか母が復活する為にね。だからこの世界を変えようとしているマダラの傍に居たんだ」

「そんな……!」

「……でも、どうやったら母が復活するかなんて分からなかったよ」

「ゼツ……」

「でも分ったこともあった。君はヒミコじゃなく『芙蓉』というひとりの人間なんだってこと。だから死なないで。お願いだから……」

六花は再び掌を差し出し、ゼツもそこに載った。

ゼツを顔に近づけると、六花は慈しむ目でゼツを見つめる。

「私、あなたが傍に居てくれなければ、ここまで生きてこられなかった。あなたはもう、私の一部よ。愛してる……」

…チユツ…

「ありがとう、ゼツ…ごめんね」

ゼツは目を閉じ、そのまま眠ってしまった。

六花は優しくゼツを地面に降ろすと立ち上がる。

そして辺りを鋭い目つきで見回したあと、駆けだして行った。

「芙蓉！無事だったか…」

マダラの元へ向かう途中の柱間の分身の前に六花が現れた。

「…柱間さま…どうか、私にお力を貸して下さい」

「輪廻転生の術なら力は貸せぬぞ！」

「あれはしません。その代わり、マダラさまを止めます。ナルトくんたちが十尾を抑えればマダラさまの計画は白紙です。それまでマダラさまを捕らえるのです」

「うむ。だが二人でやれるかのう…俺はいま分身の身だ」

「私が死んだとされた後、私は何十年もマダラさまに忍術を教えられました。マダラさまの戦い方なら柱間さまと同じくらい理解しているつもりです」

「そうだったのか…マダラの奴、そこまでお前のことを愛していたとは…」

「違います。マダラさまに芙蓉の記憶はありません。マダラさまにとって私は下僕の六

花なのです。詳しく話している時間はありません。向かいながら作戦を話しましょう」

・・・・・・・・・・・・・・・・

つづく

続・六花の森（18）～信じる心を守る為に。マダラとの対決!!

「あなたを復活させ、計画を成功させるわけにはいかない」

「俺を裏切るのか？」

秋冷の夜風に吹かれ、マダラの長い髪が僅かに靡く。

その髪の毛の先端が、青白い月夜を受けて僅かに光っている。

今夜は、もう、満月である。

「いいえ・・・私は、永遠にあなたの味方です」

・・・バシイ!!

「お前も結局、女だな。言ってる事とやってる事が違い過ぎる」

マダラは刀で襲い掛かって来た六花の両手を右手だけで握って止めた。

ググググツ・・・

何とかマダラの手を振り離そうと六花は両手に力を入れるが全く敵わない。しかしそれでも六花は力を込める。

フツ…一瞬、マダラが握る力が弱まった。

六花はその隙に更に両手に力を入れると、思いきり左にひねった。しかし。

ドシッ！

「つつっ!!」

再びマダラの手にかがこもったかと思うと、マダラは六花の力と体重をを左側に集中させ、隙ができた六花の右わき腹を左膝で強く蹴った。

六花は両手を拘束されたまま逃げることもできず、その蹴りを喰らってしまった。だがなんとか膝に力を入れて立って居る。

そして痛みを堪えて顔を上げると、写輪眼の眼で刀越しにマダラの顔を見た。

「隙だらけだぞ。何の為の写輪眼だ。先読みしろ」

マダラが言ったと同時に、六花は両足で右膝に飛び載り、そこからジャンプする勢いでマダラ両腕を拘束しているマダラの右手を振りほどいた。

ズシヤ!

六花は地面に着地して構えると、マダラの首めがけて足刀を繰り出した。

ドシッ!…

「!…!」

「蹴りに重さが足りんぞ。ちゃんと飯は食っているのか」

マダラは首に六花の蹴りを受け、六花の手を離れた手でその足を掴んでいる。

マダラの眼には、遠い昔、まだ痩せつぽちで刀すらまともに握れなかった少女の六花が浮かんでいた。

六花の渾身の蹴りを喰らっても微動だにしないマダラに一瞬動揺したが、六花は直ぐに気を取り直し、自由になった刀をマダラの左わき腹に打ち付けようとした。

しかしマダラは、掴んでいる六花の右足ごと六花を放り投げた。

ドン！・・・ゴロンツ・・・バツ！

六花は地面に打ち付けられたが、受け身を取って身体を翻して起き上がった。

チャツ。

そして立ち上がり、身体の前に刀を構え直して考える。

・・・焦るな。いま須佐能乎を出してもマダラさまとの闘いじゃチャクラが持たない。マダラさまは私を殺さない。一分でも長く闘い続けるんだ・・・

「良い眼だ。だが俺を本気で殺す気概は無いな。そんなことでは俺は止められんぞ」

ダツ！

六花はマダラに向かって走り出す。

ガシッ!

「いいで……」

六花は直立しているマダラの懐に入ると両肩に手をかけ、抱き着いた。

それだけではなく、六花の影分身二体がマダラを両側から挟んで腕を抱き締めている。

そして正面の六花はマダラを見つめる。

その眼は、その先に誘っている……

……チユツ……

「火遁・豪火大滅却!」

ゴオオオオオオ!ゴオオオオオオオ!ゴオオオオオオ!

マダラの唇に六花の唇が触れた瞬間。

背後に居る六花本体と、マダラを挟んでいる二体の影分身がマダラに向かって口から業火を繰り出した。

炎に包まれたマダラと六花の影分身三体が燃え上がり、あっという間に塵になってしまった。

六花は炎を収めると、目の前に眼を凝らす。

マダラの姿は無くなっていった。

「マダラさまを…倒せた!!」

すると、地面に散らばった塵がパラパラと音を立てて集まってゆく。

それはみるみるうちに人のかたちを成し、元のマダラの姿がそこに現れた。

「相変わらず、お前にしか出来ない良い技だ。これでこれまで何人の男を倒してきた？」

「…!!」

「穢土転生とはこういう術だ。だが苦痛も快感も無いのはつまらん」

「……」

六花は唇を噛み、何度も瞬きしながら肩で息をしている。しかし瞳は鋭くマダラを睨んでいる。

「六花。俺がなぜ、か弱い女のお前をここまで育てたか分かるか？ 下僕として役に立つようにする為だけじゃない」

「?……」

「俺以外の誰にも負けない強い女にする為だ。だがすなわち、お前は俺という唯一無二の存在にだけは勝てないのだ」

六花は悲しそうに顔を歪めて斜めに目を伏せる。

そしてもう一度、ゆっくりとマダラを見て言う。

「私は…負けない為に強くなったんじゃない。守るために強くなった!」

「フン。負けないことと守ること、それは同じことだ。お前が何かを守れば、何かを守れない者が生じる。いい加減理解したらどうだ。俺はそんな道理が無い世界を作る。それこそが真の平和だ」

「私が負けたくなかった相手は私自身……弱くて甘くて卑怯な私にです！そして、守りたかったのは……守りたかったのは……信じる心です。すべての人が自分自身に勝てたら、他の誰かと争う必要なんて無くなるのに……」

「話が噛み合わないな……お前が信じる心とやらを守りたいなら、俺がやることも信じたらどうなんだ？それとも俺のことは信じられないと言うのか？」

「信じています。私はマダラさまが仲間と手を取り合える強さに再び気づいてくれるよう、そしてまた誰かと……ナルトくんと手を取り合ってくれることを信じています！だから、今は闘わなければなりません!!」

……穢土転生は不死身の術……ならば仕方が無い……
六花は須佐能乎を発動させた。

須佐能乎は半身から全身へと変わり、最後に女神の顔が現れた。

その右手には鉄鎚が握られている。

「美しい……」

マダラは小さく呟くと、自分も須佐能乎を出した。

六花は須佐能乎を纏ったまま、マダラに一直線に走ってゆく。

ドシイインンンン・・・

鈍い音を立てて二人の須佐能乎がぶつかる。

しかしマダラは腕を組んだまま、須佐能乎の中から目の前の六花を静観している。

ズズツ・・・ズツ・・・

六花は足を踏ん張り、己の須佐能乎ごとくマダラの須佐能乎の中に入ろうとしているが、僅かに入っただけでそれ以上は進めない。

「智慧の鉄鎚！」

六花の須佐能乎が右手の鉄鎚を振り下ろした。

ドシイイン!!

ズズズズズ・・・

マダラの須佐能乎に亀裂が走り、その亀裂を開くように六花は更に前に進み、ついに六花の須佐能乎の半分以上がマダラの須佐能乎の中に入った。

「ほう・・・お前の須佐能乎も強くなつたな。さて、ここからどうする？」

マダラは必死の形相の六花を見ると、口角を上げて見せた。

・・・ズボツ！グサアアツ!!!

「うむ。須佐能乎を侵入させ俺の足元の地中から攻撃とは、良い手だな」

マダラは地中から突き出した六花の須佐能乎の剣に串刺しにされ、宙に浮いている。

「だが、お前は俺に対してだけ気を抜くのが速すぎる」

「さつきから写輪眼をもつと使えと言っているだろう」

二人のマダラの声が重なる。

六花が振り返った途端、背後からマダラに羽交い締めにされた。

ハアハアハアハア・・・

羽交い締めされて突き出した六花の胸が大きく上下している。

六花は大きく目を見開き、なんとか振り返りマダラの顔を見た。

「降参するか？」

懐かしい場面だった。

修行の時、いつも最後はこうして羽交い締めにされて終わっていた。

最後まで、マダラに勝てたことは無かった：

「木遁・木龍の術！」

「！！」

バキバキツ・・・ギシイイ・・・

柱間の攻撃を、マダラは纏っている須佐能乎の剣でなんとか受け止めた。

「ナイスタイミングだった芙蓉！マダラここからはワシが相手ぞ！」

「はあ・・・お前とはもう飽きた。てか、まだ居たのか分身柱間め」

「芙蓉、良い闘いだっただのう！きてここからは共に闘うとしようぞ」

「まさかお前ら・・・フツツ、ハハハ！・・・」

マダラは六花を締め上げる力を強めて笑った。そして六花を見て言う。

「使えるものは敵でも使う・・・いいぞ。褒めてやる六花！」

ズズズズズ・・・ズズズズズ・・・

するとマダラの須佐能乎には、二本の手に加えて更にその上に二本の腕が現れた。四本すべての手には青白く燃える剣が握られている。

ビュン！ビュン！ビュン！ビュン！

そして四本の手は持っている剣を、柱間の放った巨大な木龍と柱間、それぞれに向かって投げたつけた。

バキィィイツ!!バキキキツ!!

二本の剣は木龍の頭と尾を地面に釘付けに刺した。

そしてもう二本は、逃げる柱間を追尾する。

「！」

ついに剣は柱間に追いついた。

二本の剣が同時に柱間めがけて落ちてゆき、柱間に触れそうになったその瞬間、柱間

の姿は消えた。

ズボオツ!!バキバキバキ・・・

「!!」

六花はそれに驚いて正面を向くと、目の前に地中に這わせていた木の根の中を移動して来た柱間が、その木の根と共に勢いよく地面から飛び出して来た。

六花と、未だに六花を羽交い締めに行っているマダラはそれを見上げる。

柱間が術を発動しようと両手を合わせて印を結んだ瞬間。

バキイイイ!!

「まったく…分身に攻撃を特化させ過ぎたせいでチャクラ切れか。情けないぞ柱間」

マダラは木龍に刺さった剣の一本を須佐能乎に引き抜かせており、その剣で柱間の身体の側面から突き刺した。

「…芙蓉…無事で…いてく…」

そして、柱間の分身は木に戻ってしまった。

「……っ」

六花が苦しそうに俯くと、六花の須佐能乎は徐々に薄くなつて消えてしまった。

「安心しろ。お前のスタミナ不足じゃない。俺の須佐能乎がお前の須佐能乎からチャクラを吸い取っただけだ」

マダラはそう言うとうとうやく羽交い締めしている手を緩め、六花をゆつくりと地面に座らせた。

しかし六花は直ぐに立ち上がり、ゆらゆらと身体を揺らしながらも、なんとか腰に携えた刀を抜いてマダラに向ける。

瞳だけは、揺らいではない。

その瞳を見て、マダラはいつかの六花の瞳を思い出した。

そう、あの時と同じ。

六花は今の自分を強く信じている。

「気丈夫になったな・・・」

マダラはそう言うとうと六花に歩み寄り、抱き寄せると刀を奪い取った。

そしてそれを六花の首元に突きつける。

「あの時と同じだ。お前の優しさは万人の正義とは成りえない。お前自身がまた苦しむただけぞ」

しかし、六花の瞳に宿る光は鋭いままである。マダラの腕の中で刀を首に突きつけられたまま、ジッとマダラの眼を見つめ、言う。

「万人の正義など無くて当然なのです。それでも、皆が平和と言う太陽の方に向いていなければなりません。支配者は太陽にはなり得ない！」

すると、いつかのように、マダラの握る刀はギラリと光って刃を翻した。

六花は反射的にその光の先、空に視線を向けてしまった。

空には大きな満月が輝いている。

・・・そうよ。マダラさまに出会った時から、私に帰り道なんてもう無いんだから・・・
そう思った瞬間、六花は左手で首元に突きつけられている刀を握った。

六花の掌から青白い刃を伝って黒い筋が出来てゆく。

「あなたは・・・マダラさまは誰より痛みを知っていて、そして誰より優しいひと・・・お願い、
もう一度、世界を信じて・・・みて・・・」

「もういい。お前はもう眠って居ろ」

マダラは再び、六花を瞳術で眠らせようとした。

しかし六花は万華鏡写輪眼の目を見開き、マダラに隙が出来ていた一瞬に腕の中をすり抜けて姿を消した。

「いい加減に諦めろ！」

マダラは姿が見えなくなった六花に向かって叫んだ。

だが返事は無い。

キラッ。

マダラはその光に空を見上げる。

満月が先ほどより何倍も眩しく光っているように見えた。

すると、もう一度須佐能乎を纏った六花がそれに重なり、マダラの前に立ちはだかつた。

「真経津鏡（まふつのかがみ）…!!」

六花の須佐能乎の額には丸い銀鏡が現れており、そこに集まった月光はマダラに向かつて一直線に照射されている。

穢土転生の身体であるマダラには光を眩しく感じる機能も無いはずなのに、マダラはあまりの眩しさに目を細め腕で光を遮った。

「フフツ…：六花の奴め、遂に血を使って真経津鏡を口寄せ出来るようになったのか…：それでこそ俺の下僕だ!!」

パラツ…：パラパラ…：パラツ…

すると、マダラの身体は表面から少しずつ塵になり次第に薄れ始めた。

六花はその様子を見ながら、額でマダラを強く睨んでごくりと唾を飲み下した。

…：マダラさま…：あなたを信じてる。だけど今は消えて貰います…！…

マダラは顔を隠していた腕を除けると、優しく目を細めて六花を見上げ、言う。

「まさに天照大御神のようだな…：素晴らしい。良いモノが見られた。礼を言うぞ」

「マダラさま…：」

「できればお前とも生身の身体でやりたかった……」

「……」

六花がその気配に気づいて後ろに振り返った時、それはもう六花の眼と鼻の先だった。

なんとか須佐能乎が持っている鉄鎚で、マダラの分身が纏った須佐能乎の剣を防ごうとしたが間に合わない。六花にはもうチャクラが無かった。

ザシユツツ！……ドタツ。

六花の須佐能乎は切り裂かれ、その姿を消し始める。同時に六花は地面に落ちて倒れてしまった。

「良い闘いをするようになったな……六花」

その声に、うつ伏せに倒れている六花は何か顔を上げた。

マダラは六花の頭の前にしゃがむと、六花の左の掌を握って傷を癒し始める。

「……」

「馬鹿だな……要らぬ怪我をしておつて」

六花はマダラに握られた左掌に感覚が蘇ってくると、そつとマダラの掌を握り返した。そして朦朧としながらも何とか言葉を発しようとしたその時だった。

「……アレは……」

マダラは後ろに振り返って遠くに目を凝らした。

ズオオオオオオツ・・・ドサツ!

「ぐっあああ・・・」

マダラの見つめる遠い先の空間が歪み、怪我を負い瀕死のオビトが飛び出して落下した。

落下した場所、それは十尾の頭の上だった。

「アレはもう使いものにならんか・・・」

「・・・?」

六花は霞む眼でなんとかマダラを見た。アレとは何なのか：

「六花、お前は計画が完了するまでオビトの作った時空間に居ろ。出てくるなら殺す。いいな」

「・・・まさか・・・オビト・・・?」

マダラは右手を宙にかざし、オビトの作った時空間への入り口が閉じる前にその入り口をここへ引き寄せた。そして六花に思考する暇を与えることなく、マダラは六花の身体を抱えてその空間へと入れると、入り口は直ぐに消えてしまった。

・・・ドサツ!

「おかえり芙蓉。やっと帰って来たわね…つて、あらあら。傷だらけじゃない。チャクラももう殆ど残っていないし」

ヒミコは、目の前に現れて仰向けに倒れた六花に歩み寄ると、ニコニコしながらその顔を覗き込んだ。

「…ヒミコ…さん」

「大丈夫よ。いまキレイに治してあげるから。あなたはゆっくり眠って、しっかりと休みなさい」

「で…でも…」

「マダラなら大丈夫よ。きつとうまくやってくれるから。ゼツだつてついているんだし…さ、いい子だから眼を閉じて。まずは回復しないと何もできないわよ？ね？」

「…はい…」

六花はそう言うのと眼を閉じた。六花の体力は限界に達しており、その瞬間に意識を失ってしまった。

「まったく。大切な身体をこんなに傷だらけにして。どう足掻いたつて無駄だつて言うのに…まあでも、最後までいいこの子の意思を尊重してあげなきゃね。フツ、この子が男に…マダラに絶望する顔を見るのが楽しみだわあ…」

続・六花の森（19）　　失意　　マダラの語る計画の裏側

「私の可愛い芙蓉……こんなに安らかな顔で眠って、どんな夢を見ているのしから」
オビトの時空間。

六花の傷を治癒し、チャクラを回復させたヒミコは、地面に座って六花に膝枕をしてやりながら、六花の頭から頬へと優しく撫でている。

「私の転生者はどれも美しかったけれど、芙蓉、あなたは本当に特別ね……アシユラとインドラの転生者両方の心を奪って結ばれ、そしてチャクラまで使えるようになった。そのお陰で私はようやく復活できるのだけれど……」

今のヒミコにとってこの立方体が転がる無機質な空間は、待ちわびた主演舞台の本番を待つ楽屋のように、緊張感と高揚感が漂う温かいものになっていた。

「……愛することには理由なんて要らないわ」

「!!」

ヒミコは六花の明瞭な寝言に驚き、思わず身体を逸らしてしまった。
しかし、六花は何事も無かったように安らかな顔で眠り続けている。

ヒミコは胸を撫で下ろし、再び六花の顔に眼を落とした。

その時だった。

サアアア——・・・

その音にヒミコは顔を上げた。

立方体の壁の隙間から、砂の塊に載っている女の後ろ姿が見えた。服装からして、どうやら忍のようだ。

ヒミコは眉間を寄せ、眼を細めて女の後ろ姿を睨みつける。

すると砂の塊は崩れ、女が地面に着地した瞬間、その砂の塊に隠れて見えなかったもう一人の姿が見え、ヒミコは思わず驚く。

「……ハアハアハア……ここはどこだろう？……ナルト!!……とにかくナルトの蘇生を続けないと！」

……あれはナルト？……死にかけてるじゃない。九尾を抜かれたのね。ということは、もう直ぐね。フフフ……

六花は二人の姿を見てニヤリと口角を上げた。

しかし、なぜナルトがこの空間に来たかは分からない。だが九尾を抜かれた人柱力はもう助からない。

ヒミコは六花の代わりにナルトの最後を見届けてやろうと、ナルトの死の瞬間を楽し

みに待つことにした。

「オビト!」

目の前に現れたオビトを見て女が声を上げると同時に、ヒミコは目を大きく見開き、わくわくとした。

・・・あのオビトの身体はもう十尾が抜けた身体。しかも左半身にはゼツまでくついている。死ぬ前にナルトを殺すためにこの空間に連れて来たって訳ね・・・

「大丈夫だ。俺がナルトを助けてやる」

・・・なんですって?!なぜお前がナルトを助けるのよ!・・・

オビトの想定外の言葉を聞き、ヒミコは大きく目を見開いたまま強張った顔になる。

「信用できるの!!!」

女もオビトの言葉に驚き、声を上ずらせた。

「俺は昔から真っ直ぐ素直に歩けなくてね…だが、やっと辿り着いた」

オビトはそう言うとナルトの腹に手を当てた。

・・・その身体じゃもう輪廻転生の術も使えないくせに、どうやって助けるって言うのよ・・・

ヒミコは強張った笑顔でオビトを強く見つめた。

ズオオオ…!!

オビトの掌から、目に見えるほどの強いチャクラがナルトの体内へ流し込まれてゆき、ナルトの体内のチャクラが蘇ってゆくではないか。

・・・あれは！九尾のチャクラ：いや、それだけじゃない。

あれは：ハゴロモ!!・・・

ついにヒミコは顔を歪め、その顔は悔しきで熱を帯びてゆく。

ナルトが生きようが死のうが、つまりはヒミコにとつてどうでもいい事なのだが、ナルトの中にハゴロモのチャクラを察知しまった以上、安易に出てゆくわけにもいかない。いまここでハゴロモに己の存在が気付かれればこの先の計画が：

・・・ハゴロモのやつ：まさかナルトを使ってお母様の邪魔をする気じゃ。無駄よ：

この私が居るもの！・・・

ヒミコは焦りの色を現わしながらも、ほくそ笑んでナルトを見つめた。

「ナルト・・・」

「・・・」

ナルトは目を覚ますと、ゆっくり立ち上がった。

「サクラちゃん：ありがとうってばよ。もう大丈夫だ」

「う、うん：オビトが：ナルトに九尾を入れて助けてくれたのよ」

「そうか…ありがと、オビト」

「いや…俺こそお前のお陰で、やっと辿り着けたよ」

「へへっ…そりや良かったつてばよ。で、ここはどこだ?」

「俺の時空間だ。向こうでカカシと四代目がマダラと戦っている。お前は先に行け」

「ああ!」

ナルトはそう返事をする。オビトが開けた時空間の出口に飛び込み、姿を消した。

サクラは急いで安堵の涙を指で拭うとサツと立ち上がり、僅かに戸惑いつつ、地面に膝を突いてしゃがんでいるオビトを見据え、言う。

「アナタは敵…仲間をいっばい傷つけ殺した…だから本当はこんなこと言いたくないけど、この一回だけは特別…ナルトを助けてくれてありがとう」

サクラは目を閉じて、不本意な気持を押し殺しながら強く念を押すような声でオビトに礼を言った。

そしてオビトは苦しそうに息を切らしながら、サクラを見上げて言う。

「……………最後に頼みたいことがある。味方でなくていい…敵としてだ」

「……………」

「俺はもう動くことすらできない…少しでも気を抜けば…黒ゼツにこの輪廻眼ごと身体を奪われてしまう。そうなれば黒ゼツは俺の右目を使い外へ…そのまま輪廻眼がマダ

ラに渡ってしまう…マダラの両目に輪廻眼が揃ってしまえば恐ろしいことになる…」

「恐ろしいこと?!これ以上どうなるって言うのよ!もう嫌ってほど…」

「俺も輪廻眼を両目に移植することは出来なかった…この左目ひとつでさえ…強すぎるチャクラと瞳力で己を失いかけた。本来の主に輪廻眼の両目が揃えば、恐らく誰も太刀打ちできなくなる…」

「そんな…」

「瞳力とは二つ揃って初めてその力を発揮する…さあ!早い方が良い。一刻も早くこの左目を潰してくれ!」

「わ、分った!」

「…オビトの奴…マダラを裏切ったのね。どいつもこいつも、男は使えない奴ばかり…」

ヒミコは怒りを湛えた冷たい顔を見ると、膝枕で安らかに眠る六花の顔に両手をかざした。

「…早くしろ!輪廻眼を潰すんだ!」

「分かってる!」

「…させるか!」

ヒュン!…

『!!』

ガンツ!!

オビトの時空間に現れたマダラの上半身がサクラに向かって黒い棒を投げたが、その瞬間、サクラはオビトの神威によって外の空間へ瞬間移動させられ姿を消した。

そして、黒い棒が突き刺さった音に、眠っていた六花は驚き上半身を起こした。そして辺りを見回し、すっかり変わり果てた二人の姿を見つけると息を飲む。

「…あれは?! マダラさま…なの?」

それを確かめようと立ち上がると声が出た。

『そうよ芙蓉。あれは十尾の人柱力となったマダラ…』

「?! …頭の中…ヒミコさん?」

六花はその声に頭を抱えて少し戸惑った。

『ついさっきまでオビトの左目に入っているマダラの輪廻眼が潰されそうで危なかったのよ。それを止めようとしてあなたの中に入って目を覚ましたけど、マダラ自らそれに気づいて取り戻しに来たみたいね…』

「輪廻眼が?! …?!?」

グサアッ!

突然、マダラは右手でオビトの胸を突き刺し、そのままオビトの身体を宙に持ち上げ

た。そしてオビトに問う。

「心臓に仕込んでいた禁固呪の札が消えているな…どうやって取った？己を自分で傷つけることは出来なかつた筈だ」

「…カカシに貫かせ…排除した…俺自身が十尾の人柱力になるにはあれが邪魔だったからな…死ぬかもしれない賭けだったが…俺は…アンタの思い通りにはならないのさ」

六花は握つた両手を口に当て、悲しそうにオビトを見つめる。しかし、オビトがマダラの単なる操り人形では無かつたことに僅かに嬉しさも感じてしまった。その気持ち直ぐに振り払い、二人の目の前に行こうと立ち上がったが、マダラの言葉に足を止める。

「ククク…いや、お前は俺の思い通りに動いてくれた。いや、期待以上か…フツ」

マダラはオビトにそう言い笑つて見せた。

「…!!…何が…可笑しい…!!」

「操り人形にする禁固呪の札…知っていたようだなオビト。お前達”に仕込んでおいたこの札…無論、自害することも出来なかつた筈だ。俺にとつて大切な駒だったからな」

「…お前…達…!!」

オビトと同時に、六花もマダラの言葉に反応した。禁固呪の札を仕込まれていたのは

オビトだけでは無かったというのか。だとしたら、マダラは他には誰に…？ 六花は地面に眼を泳がせて考える。

「何の因果か… 二人とも、まったく同じやり方で排除するとは面白い」

……！……

「リン……」

六花とオビト、同時に気が付いた。二人の頭にリンの最後が蘇る。

「そうだ。あの小娘を三尾の人柱力にし木ノ葉で暴れさせる計画は俺が仕込んだ事だ…霧隠れではない。小娘はそれを、カカシが敵に向けた技を利用して命がけで阻止したが…あれも計画の内…お前を闇へ堕とし俺の駒にする為のな」

「嘘でしょ……」

六花はその場に膝から崩れ落ちた。

地面についた膝から身体全体へと冷たくなり、まるで凍り付くように感じる。余りの冷たさに、頭までズキンズキンと痛んでくる。

「貴様…俺をわざと、あの場に…!!」

良き絶え絶えのオビトの瞳に怒りで火が灯る。その瞳でマダラを睨んだ。

「ミナトが別の任務に出ていた時を狙い、カカシ一人を残してリンを連れ出させ、霧隠れの忍を操り追わせたのも全て計画。お前の力を開放させ、その程を見る為でもあった。

白ゼツ共がお前を煽り地下からタイミング良く出られたのも全て偶然だと思うか？」

「ぐっ……」

オビトの脳裏にあの日の絶望が鮮明に蘇り、再びオビトを激しく絶望させる。

「カカシの手で小娘が死んだのは出来過ぎだったかな。どちらにせよ傀儡の忍で殺すつもりだったんだが……」

「……そんなつ！あれは偶然じゃなくマダラさまが全て仕組んだ事だったというの！！
私は、何も知らずに……」

六花はついに地面にうつ伏せ、両手の掌を骨が折れるほどの力で握り締め、身体を震わせた。

絶望という一言では表せない苦しみが喉まで上がり、息も出来ない。

音を立てるまでもなく、瞼の裏にあるマダラ的笑顔は消え失せた。

「人を操るには心の闇を利用しろと教えたな、オビトよ。闇が無ければ作ればよい……自分だけが違うと思うのはおこがましくないか？」

「……自分だけが違うのは……おこがましい……」

「なら、私もなの？……」

「ぐっ……なぜ……なぜ俺だったんだ!!」

「お前は心の底から人に優しく愛情深かった。老人介護は得意だっただろう？リンへ

の、仲間への、火影への、忍への深い愛情……いったん闇に落ちてしまえばそれは、逆にこの世界への深い憎しみへと変わるからだ。そういう奴ほど」

「もう止めてえーっ!!!」

六花は堪らず声を上げた。両目からは大量の涙が流れている。

しかし、マダラは構わず続ける。

「オビト、お前のような奴ほどなあー!」

「うっ!ぐっ!」

マダラはオビトの心臓を掴む力を強め、オビトの身体を引き寄せた。そしてオビトの左目を、カカシから奪って来た万華鏡写輪眼の眼で強く見つめた。

……マダラさまに輪廻眼を揃えさせるわけにはいかない!!……

六花は右足に力を含めると立ち上がって走り出そうとした。

しかし、身体が動かない。

『大丈夫よ芙蓉、あなただけは違うから……』

「私のことはどうだっていいの!マダラさまに世界を救う資格なんて、無い!」

『あらそうかしら?マダラは自らが経験したことをオビトにも経験させただけでしょう?それが一番強くなれる方法だと知っているから。それで世界が救われるのだから別にいいじゃない』

「…うるさい!! 黙れっつ!!」

六花は全身に力を込めると、ヒミコの見えない呪縛を振り払い、震えながら立ち上がった。そして万華鏡写輪眼の両目でマダラを見据え、立方体の隙間を一直線に向かって走ってゆく。

『そんな！私が中に入っているのに何故?!』

ドスン!!

マダラは左手を振り上げ、向かって来た六花を撥ね飛ばし、六花は激しく左腕から地面に倒れた。しかし六花は直ぐに立ち上がりマダラに向かつて構える。

六花に背を向けていたマダラは、ゆっくりと六花へ振り返った。

「…」

マダラの両眼には、既に輪廻眼が揃っていた。

六花は瞬きすらできずに大きく目を見開き、マダラを見つめる。すると、瞳の奥で待っていたかのように、熱くも冷たくも無い涙が既に泣き濡れた頬にこぼれ落ちてゆく。

「六花…酷い顔だな。お前はまだ暫くここに居ろ。なに、時間はかからん」

「…闇に墜ちているのは、あなたも同じよ」

「お前と話している暇は無い」

六花は一度目を閉じると、両目から最後の涙が頬を伝っていった。そしてゆっくりと眼を開ける。六花の万華鏡写輪眼の瞳は、変わらず怒りの炎で真っ赤に燃えている。

「行かせないわ」

「!!・・・う、動けぬだと!・・・万華鏡写輪眼ごときがこの輪廻眼に敵う筈が・・・」

…ボタンツ! オビトの胸からマダラの右腕が抜け、オビトは地面に落ちた。

マダラの両手はだらんと脱力し、下半身の無いマダラの身体が地に足をつけた。

六花はマダラの元へと歩み寄ると、上半身だけのマダラの首に飛び付き、足が地面に着くと顔を上げてマダラの顔をジッと見た。

「・・・何をやる気だ!・・・」

六花は黙って、今はもう何も見て取れることの出来ないマダラの輪廻眼の奥を見つめる。

その顔は落ち着きはらい、すべてを諦め、そしてすべてを悟った無表情だった。

「これが私の写輪眼の能力。最初で最後の・・・」

「・・・!!!」

マダラはついに言葉すら出なくなり、六花の瞳から目を逸すこともできない。

六花はそつと、マダラの唇に口づけし、目を閉じた。

・・・今すぐ月の眼計画を止め、降伏せよ・・・

そう心の中で強く呟くと、六花の瞳は沸くように熱くなり激痛が走った。それでも口づけを続ける。

マダラは身動きできず、ただ六花に唇を吸われている。

「うっ!!」

最初に唇を離れたのは、六花の方だった。

六花はもう殆ど視界の無い眼を細め、衝撃が走った箇所を見た。

「危なかつたな…マダラ…」

「黒ゼツ…遅いぞ」

オビトの左半身に張り付いている黒ゼツの手が伸び、マダラの背中を貫通して六花の腹に突き刺さっていた。

ズボツ…!」

「ぐあっ!」

黒ゼツが刺している手を引き抜くと、六花の腹からボタボタと血が地面に滴り落ち、脱力して後ろに倒れそうになった。その肩をマダラが支える。

「ハアハアハア…マダラ…さま…」

虚ろな表情でマダラを見る六花の眼にはもう、マダラの顔は映ってはいなかった。すると後ろから黒ゼツがマダラに言う。

「六花の写輪眼の本当の能力……失明と引換えに相手の命の半分を体内に取り込み意のままに操る……知らなかったのか……」

「そうか。真経津鏡（まふつのかがみ）だけでは無かったか……俺に隠していたとはな」
そう言うと、マダラは六花を地面に仰向けに横たえた。

「六花、俺の計画が完結すればこの世には光しなくなると言ったな。その光のひとつは、お前だと思っていた」

「……私にとつて……あなたは……光でした。」

マダラはもう何も言わず六花に背を向けると、先ほど輪廻眼と交換したオビトの左目に写輪眼の能力を使い、黒ゼツと共に時空間から消えてしまった。

六花は、目の前の真つ暗な視界が今の現実そのものだと思い、そつと瞼を閉じた。

脈打つ激しい痛みも次第に遠のいてゆく。

すると、目の前が明るくなり、夕陽に照らされ赤く染まったマダラの顔が目の前に現れた。

マダラに抱き上げられた「芙蓉」は手を伸ばす。

マダラの頭頂部に着いている真つ赤なモミジに手が届くと、そつとそれを取り除き、マダラの顔の前に差し出した。

そして、モミジ越しに目が合うと、芙蓉とマダラは目を細めて微笑み合った。
・・・あの日に戻れて、良かった・・・

つづく

続・六花の森（完）　　その結晶が朝陽で昇華するとき

ポチャン・・・

その音に、六花はもう見える筈のない眼を開けた。

「!!?」

「これまで、本当にご苦労だった…芙蓉」

六花の視界に六道仙人こと、ハゴロモが胡坐をかいて宙に浮いており、六花はハゴロモと向かい合って立って居た。

「……………」

「御主の眼はワシが治した…致命傷の傷もな」

「……………なら……………は？」

六花は足元を見た。

地面には水が張っており、水鏡にはぼうつとした自分の顔が写っている。

「……は御主の精神世界と浄土との境だ。以前、ワシと会った場所だ」

「……………」。私の役目は終わりました。もうこの先に行かせて下さい」

「うむ…だが、ナルトが世界を救う瞬間を見届けなくても良いのか？」

「…世界を救うのは、ナルトじゃない」

「…御主…」

「久しぶりね、ハゴロモ。チャクラだけの存在になってまで色々画策していたなんて、ア
ンタらしいわ」

ヒミコは六花の顔でニヤリとハゴロモに笑って見せた。

「それはお互い様だろう」

「私は魂で生きているわ」

「ああ。だから今までお前の存在に気付けなかった」

「残念がることは無いわ。アンタが使えなくしたチャクラも、十尾復活と神樹降誕で完
全に取り戻すことができたしね…せっかくだからアンタも私の一部としてこれからも
活かしてあげる」

「ワシを取り込むつもりか」

「ええ。あなたがこれまで”生かして”きたこの身体でね…」

六花の人格を乗っ取ったヒミコは唇に人差し指を当て、上目遣いでハゴロモを見なが
ら続ける。

「それが嫌なら、折角助けたこの子を殺す？もう役目は終わっているしね。私がアンタ

を吸収しなくても、どの道お母様がアンタを吸収するだろうけど。アハハハ！アンタも男じゃなく、女に産まれれば良かったのにねえ……」

「芙蓉はお前の転生者であり、器かもしれない。だが、お前自身ではない、全くの別人だ。お前の思い通りにはならない」

「ハハハハ！もう遅い。こうして精神世界で芙蓉の人格を支配すればこの子の身体は完全に私のモノ!!この瞬間をどれほど……!!?!……うっ！ううう……」

ヒミコは頭を抱えて前屈みになり苦しみ始めた。ハゴロモは只、眼を細めてそれを見ている。

「うああああっ!!……」

身体を反らし天を仰いで叫び声をあげると、地に膝を突き、そのままうつ伏せた。

……ハアハアハア……

ヒミコは震えながら顔を上げて横を見ると、芙蓉が立ちあがりながら自分を見下ろしていた。

バシヤアアン!!

「どうして?!さつきから何度も何度も私の力を……でも今回は逆らうことなんて有り得ないの!!」

ヒミコは水が張っている地面を拳で激しく叩き、芙蓉に向かって叫んだ。

「…だって、私は芙蓉だから…あなたじゃ…ない」

芙蓉は優しくも厳しい声で、静かに言い放った。ヒミコは歯を食いしばり芙蓉を見上げて睨みつけていたが、口を閉じ、震えながら深呼吸を言う。

「フン！そう…まあ今のうちに言いたいことを言っておくといいわ。お母様が戦いを終え、ここから出る時には、もう貴方の身体は私のモノになる。あなたは死ぬのよ」

「ええ。私の命はもうすぐ終わる」

ハゴロモは芙蓉の言葉を聞き、僅かに俯いた。

「ヒミコさんも知っている通り、私はハゴロモさんとの約束で生きている。その約束も、もうすぐ本当に終わる…ナルトくんがこの世界を救ってくれるから」

「まだそんな事を言っているの?! さっき見たでしょ! マダラは…」

「ハゴロモさんのこと、いまでも愛しているんですよ?」

「な、何を言い出すのよ」

「でも、ハムラさんのことも兄弟として大切だった。だから敢えてどちらとも結婚しないって言った。だけどハムラさんはあなたを傷つけた。その時、本当はハゴロモさんに結婚してもらいたかったんでしょ? お母さんの魂が自分に入っているって気づいた時も、汚れてしまった自分もすべて受け入れて欲しかった。そうでしょ?」

「黙りなさい!!」

「自分から告白も出来ない、ハゴロモさんも自分を受け入れてくれない。それが悲しかった…辛かったのよね？」

「黙れ!! 解ったような口を利くな! 男はみな下等な生き物。私たち女を傷つけ、苦しめる存在…だから女が男を支配しておかなければならないのよ! それだけよ!」

「ねえ、神様って一人だと思う?」

「?」

「もし神様がいるとして、この世の全ての生き物を作ったのなら、それは神様も一人じゃないからだと思うの。だから男がいて、女が居る。女だけで良いなら男は作らなかつたと思う。この世界は男と女が居るから回り、未来が生れる。…まあ、単細胞で分裂して増える生き物もいるけどね。ふふっ」

「…フフ」

芙蓉の言葉にハゴロモが笑った。

ヒミコは、笑うのと泣くのを同時に堪えたような顔になり、困惑した声で言う。「意味が分からないわ。何を言っているのよ…」

「大丈夫。今からでも遅くない。だって、あなたの目の前には今、ハゴロモさんが居るじゃない」

ヒミコは恐る恐る、ハゴロモを見上げた。

するとハゴロモは微笑み、頷き、ヒミコの傍に寄ると、地べたに座るヒミコにそつと左手を差し出した。そして芙蓉もヒミコに寄り添い、ハゴロモの顔を見つめて固まっているヒミコを見て微笑みながら言う。

「一人じゃないから・・・あなたも、私も・・・」

「ヒミコ・・・待たせて悪かった。これからは共に居よう・・・愛している」

ハゴロモの言葉に、ヒミコはガクンと首を垂れた。

そして暫くすると、ゆっくり顔を上げた。

「・・・遅いわよ・・・まったく」

ヒミコは左手を伸ばしてハゴロモの手を握り締めると、ゆっくり立ち上がった。

その顔にはもう、愛と慈しみ、そして優しさしか無かった。

「・・・愛してる・・・」

ヒミコは小さく呟くように言うと、その姿は次第に薄れ始めた。ヒミコは隣りに居る芙蓉に顔を向ける。

「芙蓉：ゼツのこと、よろしくね」

そう言うヒミコの姿は光となって消えてしまった。

「ヒミコさん・・・」

「ヒミコの事でも御主には迷惑を掛けてしまったな。だがお陰でようやくワシらも素直

になれた。ありがとう…」

「いいえ…私はこれまでヒミコさんに沢山助けて貰いました。感謝しています…。あの、ヒミコさんは？」

「先に浄土へ行つた。母とこの世に復活するのでは無く、ワシとあの世で共に居ることを選んでくれた…。さて、最後の時だ。我々もゆこう」

「でも…」

「御主も見届けるべきではないのか？愛する者の行く末を…。確かに御主には酷なことももしれん。だが今のマダラ、いやマダラの生き様を認めてやれるのは御主しかおらぬ」

「……」

六花は俯き、足元を見た。

六花の頭には先ほど目撃したマダラとオビトの会話の場面が蘇り、足元の水鏡にそれが映し出された。

すると、引いていた筈の怒りの波が再び芙蓉の身体全体に広がってゆく。

しかし六花は必死にその波をかき、深い水の下にあるものを見つめようと懸命に目を凝らした。

六花としてマダラと共に居た年月…。

忍であるマダラの姿を見つめてきた。

それは最盛期のマダラの姿では無かったかもしれない。それでも同じ忍である六花の眼を通して見たマダラの生き様と信念は、芙蓉として見ていた姿とは少し違っていた。

少しだけ方向は違っている、マダラと同じ方向を見て傍に居た日々のなか、二人で紡いできたものは怒りと言う感情だけで押し流されるほど容易いものでは無かった。

いま、二人で紡いできたそれは、細く長く…今にも切れてしまいそうである。しかし確かにまだ繋がっている。

そして、それは、六花が紡ぎ続ける限り、マダラを必要とする限り、切れはしないのだ。

それならば手繰り寄せることができるではないか。

「・・・はい。」



暁の満月は随分と山入端に近づき、辺りは群青色に染まって静まり返っている。

夜明けが近づいていた。

柱間、そして柱間と同じく大蛇丸によって穢土転生された扉間と猿飛ヒルゼンの前に、こちらも三人と同時に穢土転生された波風ミナトが走って戻ってきた。

「…何か、分りましたか？」

ミナトは暫く前までナルトと共にマダラと闘っていたが、ナルトと離れてしまつてからその行方が分からなくなっていた。

しかも、マダラとオビトだけではなく、数多く居た忍連合の忍たちの姿も見当たらない。

「誰もおらぬ…ただマダラの下半身があるだけで」

柱間は地面に転がるマダラの下半身をしゃがんで見ながら背中でミナトに答えた。

「マダラの下半身が転がっているなら、マダラは死んだものと考えてもいいのでしょうか？嫌な予感もしますが…」

ミナトの言葉に、今度は扉間が空を見上げながら答える。

「どちらにせよ奴の無限月読とやらは完成してしまつた様だな。死者の我々にはかからぬ様だが…。四代目、そっちはどうだったのだ？」

「はい。その術にかかった人々を開放しようと、皆を包む木を木を切つて救出しても目覚めませんでした。そして直ぐ次の木のツタが絡みとつてしまう」

「…やはり同じか」

ヒルゼンがミナトの言葉に眉をひそめて呟いた。

そして扉間が一息置いて口を開く。

「…マダラの生死を確認しつつ事を知るなら、その下半身を使って穢土転生してみればハッキリする。そして吐かせる」

「それには別の生贄が要るではないか！」

そう言い柱間は扉間へ振り向き睨んだが、扉間は腕を組んだまま目を細める。

「ここにきてまだそんな甘いことを…！」

「何か他の方法で…」

柱間は再び地面に転がるマダラの下半身を見つめ左手でその足に触れた、その時だった。

「!!」

メリメリ… シュウウウウ…

マダラの下半身からチャクラが噴出したかと思うと、それはあつという間に宙でかたちを成した。

『!!』

四人は驚いてそれを見上げる。

「…やはりお前は優しい奴よ。アシユラの前任者よ」

「…アナタは？」

「名をハゴロモ…忍宗の開祖にして六道仙人ともいう」

「んんっ………?」

六花は意識を取り戻すとゆっくりと身体を起こし、霞む眼で何度も瞬きしながら全方向にめを凝らしてみた。

「……あ………」

二十メートルほど離れた場所に柱間と、懐かしい三人の姿があつた。そしてその四人の目の前にはハゴロモが居る。

しかし、六花は地べたに座つたまま俯いた。

地面にはもう自分の姿は映っておらず、影すらまだ無い。それは六花に己の存在が透明なもののように感じさせた。

そして、先ほどのハゴロモとの会話が頭に蘇る。

………

「……はい。私も一緒に行きます」

「今、ナルトとサスケが主体となり異空間で母と戦っている。もう直ぐ二人が母を封印するだろう。そこには十尾の人柱力、つまり母に身体を乗っ取られたマダラと、母の元へと戻ったゼツも居る」

「……マダラさまとゼツも、一緒に封印されてしまうのですか?」

「母本体を封印すれば魔像に入っている尾獣たちも含め、人柱力のマダラも剥がされる。運が良ければマダラは封印をまぬかれるかもしれない。だがゼツは恐らく母と共に封印されるだろう。いや、されなければならぬ存在だ」

「どういうことですか？」

「ゼツは母が封印されてから今まで、忍たちを言葉巧みに操り争わせてはそれに乗じて母の封印を解かせようと働いていたのだ。ゼツが居なければ奪われなかった命、変わることが無かった平和もあつただろう。ゼツとはそういう存在だ」

「ゼツが居なければ、マダラさまは…」

「うむ…だが、ゼツは人間を洗脳することはできん。マダラの意味があつてこそ、今の結晶が導かれたとも言えよう」

.....

「ゼツ…」

芙蓉は小さくその名前を呼ぶと、グツと強く目をつぶった。

ゼツとの様々な想い出が必然的に浮かぶ…その前に、六花は目を開け立ち上がった。

夜明け前の秋冷は、いつも芙蓉と六花に何かをもたららし、思い出させ、そして奪つてゆく。



「…で…アナタが先ほど言われた術のことですが…具体的にはどの様にするのですか？」

ミナトがハゴロモに訊ねた。

ハゴロモは柱間たちに母・カグヤの事、息子のアシユラとインドラの事を語って聞かせ、そしてナルトたちの現状と、ナルト達がカグヤを封印した後の対応について話して聞かせていた。

「術の印はワシがやる。ただこの術には膨大なチャクラが要る。ワシには今そのチャクラは無い…渡してしまった。余り時間も無い。ワシの言う通りにしてくれ」

「私も一緒に手伝わせて下さい」

「!!？」

その声に全員が驚き、声の主の方を向いた。

「芙蓉・・・」

最初にその名を呼んだのは、扉間だった。

「芙蓉！良かった無事だったんぞ!!」

柱間が大きな笑顔で六花に向かって両手を振る。

「やはり貴女は芙蓉さんだったか…」

ヒルゼンも少し困った笑顔をして見せた。

「芙蓉…さん？六花さんではなくてですか？」

ミナトは一人で不思議そうに皆の顔を見て困惑している。

「御主の力は有り難い…僅かな時間だがワシが他の助っ人を呼び寄せる間、皆と話すと良い」

「ありがとうございます」

六花はハゴロモに礼を言うと、四人の前に駆け寄った。

「ワシはさつき芙蓉と一緒にマダラと戦ったんぞ！だからほれ扉間、お前がいつぱい喋れ！」

「ハア!!なんだソレ!!聞いてねえぞ!…っつて、えつと…」

扉間は組んでいた腕を解くと、気まずそうに右手で頭を搔いてそっぽを向いた。

「おお。扉間様が照れていらっしやる。久しぶりに見ましたのう！」

「猿っ!貴様…」

「扉間さま…お久しぶりです。色々と申し訳あり…いえ、ありがとうございます」

六花はそう言って、芙蓉の笑顔で扉間を優しく見つめた。

「…。。いや、俺のほうこそ…ありがとうございます」

「詳しく事情を説明する時間はありませんが、私はいま六花という名の忍です。六道仙人さんの力で生き長らえています。そして…マダラさまの…仲間です」

「!?」

「…やはりか」

ヒルゼンとミナトは六花の言葉に驚いて六花の顔を凝視するが、柱間と扉間は少し苦い顔をして何度か瞬きをして目線を逸らした。

「私の使命は、予言の子…つまりナルトくんが世界を救うまで生きながらえることです。けれど、私はずっと、自分の意思でマダラさまと共に生きてきました…」

『芙蓉…』

扉間と柱間の声が揃った。そして扉間のほうが言葉が続ける。

「お前はいつから蘇っていたのだ？確かにあの時、お前は…」

「扉間さま、柱間さま。最後までわがままで、自分勝手にごめんなさい。でも、これが私の選んだ道だから…」

・・・ブワアアア・・・!!

その音と眩しい光に、五人は後ろに振り返った。

すると、そこには見覚えのある人物たちがずらりと並んでいる。

「うおおー！なっつかしいのう!!初・五影会談の感動が蘇るようぞぞ！」

「はしゃぐなっつーの」

「なんだと！お前だつてさつき穢土転生しようとか嬉しそうに言つてたくせに！」

「嬉しそうになんてしとらんー！」

「ふふっ……ふふふ」

柱間と扉間の隣りで、握った手を口に当てて笑う芙蓉を見て、二人は顔を見合わせフツと笑った。そしてまた、揃って芙蓉の顔を見る。

すると芙蓉も二人の顔を見た。困ったように笑うその顔は、二人にとつて懐かしかった。しかし芙蓉の眼には涙が滲んでいるのだが、二人には気付くことが出来なかった。



満月はもう山入端に沈んでしまい、東の空は白んできている。

きつとこれから始まる一日で、いや、この秋で一番冷たいであろう空気を、六花は胸いっぱい吸い込んだ。

いま六花は、柱間と扉間、ヒルゼンとミナト、そしてハゴロモによって浄土より呼び寄せられたかつての五影たちと共に直径百メートルはあろうかという術印の大きな円周を囲んで座って居る。

六花は、左右十数メートル隣に居る扉間と柱間を交互に見た後、群青色の空を見上げた。

『…そんな顔するなよ。もうすぐ寂しい気持なんて無くなるからさ……』

いつかのゼツの言葉が蘇るが、この先に寂しい気持が無い世界など無いのではないか

と思う。

それとも、死ねば全ての感情は昇華されるのだろうか…

「ゼツ・・・マダラさま・・・」

六花は空を見上げ小さく呟いた。

しかし六花が気がかりだったのは、ゼツのほうだった。

ゼツは身体を得てヒミコに愛されることを願いながら母の復活の為に生きていた。

果たしてゼツは自身の人生を生きられていたのだろうか？

だがいつの間にか、六花とゼツの間には愛が生れ、二人の心は通じ合った。

しかしそれはマダラに抱く愛とは違う。

つまり、ゼツが望んでいる愛とは違う…

心の奥でもどかしく絡まり解いて見せて説明することができないゼツへの愛情に対し、六花は申し訳なささと悔しさを感じていた。その絡まった愛情は、永遠に絡まったままで構わないと思っていた。うやむやにしたまま自分が先にこの世を去るものだと思いい込んでいた。

どうやら、最後まで自分は卑怯で甘いようだと六花は諦めるしかなかった。

そんな自分だからこそ、ゼツが居なければこの長い年月、一人で生き抜くことなど出来なかった。

例えばゼツが悪と言われる存在だったとしても、六花にとってはかけがえのない愛する存在だった。

六花はもう居ない左肩に載るゼツを見て、思う。

・・・マダラさま：あなたの言う事は正しかった。

平和の始まりは新たな影の始まりなんだってこと、いま解りました。

世界平和より、一億人の幸せより、目の前の愛を守りたい…その為なら罪を犯すことさえ厭わないその気持ちがある・・・

すると、空から声が聞こえた。

「…愛してるなんて言葉、聞かなくて良かったよ。こんなに別れが辛くなるなら…」

「……」

確かに聞こえたゼツの声に、六花がゼツの名を呼ぼうとしたその時。ハゴロモが円の中央で声を上げた。

六花も急いで印を結ぶ。

「皆の者準備はよいか。ゆくぞ」

『口寄せの術!!!』



『?』

「お帰り・・・ナルト」

「・・・・。父ちゃん?・・・それに六道の大じいちゃん!!これってば・・・」

「そうだ。戻って来たのだ。かつての五影皆で口寄せの術をしてな・・・よくぞ世界を救ってくれた」

「オウ!!」

無事に口寄せの術が成功し、術印の中央に現れたナルト、サスケ、サクラ、カカシはハゴロモと会話を始めた。円の後ろには、外道魔像から解放された九匹の尾獣たちも居り、口寄せを終えた五影たちはその姿を見て驚嘆すると同時に今ようやく伝説の六道仙人に目を凝らしている。

しかし、柱間と芙蓉だけは違う方向を見つめていた。

そして柱間と芙蓉は、ほぼ同時に立ち上がった。一方、扉間は離れた隣りの芙蓉を心配そうに見つめる。

二人は歩き始めたが、互に別々の方向へと歩いてゆく。

その時、サスケが柱間の向かう方向へ走り出そうとしたが、ハゴロモがそれを制止した。そして言う。

「マダラは一度人柱力となった。尾獣たちが抜けた今・・・助からん」

「そんなものを利用するからああなる」

サスケは冷たい声で言い放った。

「……。サスケ、ナルト、お前たちの前任者の最後だ……見ておくといい」

サスケと共にナルトも、地面に仰向けに横たわるマダラと、マダラに寄添う柱間の様子を見つめた。

「芙蓉……良いのか？」

円の外へ一人出て行こうとする六花を扉間が呼び止めた。

「はい。世界が救われた瞬間を見届けることができた……それで充分です」

「悪いな。どうやらあの世で言った事は忘れる様になっっているみたいだ。今思い出した……正義だけが全てじゃない。お前が守りたいものを最後まで守れ……そう言っただろ？」

「……扉間……さま……」

「今がその時だろ」

「……はい……」

芙蓉は後ろに振り返ると勢いよく走り出した。

マダラまでは僅か数十メートル。

六花の足なら数秒のはずなのに、その距離は山一つにも感じられるほど長かった。必死で足を前に進める。

「マダラさまっ!!」

マダラの傍にしゃがんでいた柱間は、六花の姿が目に入ると立ち上がったその場から離れた。

そして遂に六花がマダラの元へと辿り着き、膝をつくときマダラの左手を握り締め、顔を覗き込む。

「マダラさま……」

「……六花……」

マダラは宙を仰いだまま少し微笑んだが、もうその眼に光は無く、六花の姿は見えなくなってしまった。

六花はマダラの顔に左手を伸ばすと、しっかりと確かめるように、そして労わるように優しくマダラの頬に掌を這わせる。

掌から伝わるマダラの残り僅かな体温に、六花の眼から涙が否応なしに溢れ出だす。

かたちの無い愛に触れられる奇跡があるならば、やつと今、この手で触れることができた気がした。

ぼやけてくる視界を何とか鮮明にしようと六花はその涙を何度も拭いたが、涙は次から次へと止めどなく流れ、マダラの顔にぼたぼたと落ち続ける。

遂に視界がぼやけてしまうと、六花は左手でマダラの頭を抱き、マダラの首元に顔を埋めた。

そして、耳元で囁く。

「あなたは間違つてなんかいなかった。ごめんなさい……最後まで理解出来なくて」

「……お前は充分……解つてくれて……いた……芙蓉」

「！」

芙蓉という名に六花は閉じていた目を大きく開いた。そして僅かに顔を上げ、マダラの端正な横顔を見た。

その横顔は、夜明けの東雲色に照らされていた。

しかしその光は月明りと似て非なるものであり、弱々しいにもかかわらず全てを突き刺す様である。

そしてマダラの横顔は、夜明けを前にして血色を取り戻すどころか、次第に白黒へと変わつてゆく。

六花はなんとか体を起こし、マダラの瞳を見つめながら訊ねた。

「私にはマダラさまが必要です……必要なのです……昔も、今も、そしてこれからも……。私とあなたは、まだ一緒に居ますか？」

だがマダラはもう声を発することは出来ず、代わりに六花に握られている左手を僅かだが、しっかりと握り返した。

六花にとってその感覚はこれまでの中で最も力強く、心臓を同時に掴まれているよう

な切なく苦しい感覚だった。

そして六花はマダラに向かって微笑み、小さく頷くと、再び顔を埋める。

柱間は芙蓉とマダラの様子を少し離れた所で黙って見ていた。

だがその様子は、柱間がマダラを倒したあの日、マダラの遺体に抱き着いて泣きじゃくる芙蓉の光景と重なり、柱間はそれに耐えられずに目を逸らしていた。

しかし、流石にいつまで経っても泣きもせず沈黙して顔を上げない芙蓉のことが心配になり、躊躇いながら歩み寄った。

そしてそつと六花の肩に手を遣り、声を掛ける。

「芙蓉………芙蓉!!芙蓉!!大丈夫か!!」

柱間は焦って芙蓉を抱き起し、腕に抱えたが、六花はもう虫の息であった。

離れた所で、柱間とマダラの会話に続き、六花とマダラの様子を見ていたナルトは、仰向けになってようやくハッキリ見て取れた六花の顔を見て驚いた。

「六花……姉ちゃん!!」

ナルトは六花の元へと駆け寄って行った。

そして柱間の胸に抱かれる六花の顔を急いで覗き込む。

「やつぱり六花姉ちゃんだ!大丈夫か?!いま助けてやるってばよ!」

「……ナルトくん……大きくなったねえ……ありがと……」

芙蓉は穏やかな顔で、僅かに光る瞳を細めてナルトを見つめた。

「サクラちゃん！急いでこっちに…」

「残念だがもう助からない。これが六花の…芙蓉の寿命だ」

ハゴロモがナルトに向かってそう言った。ナルトに呼ばれたサクラは、ハゴロモとナルト両方の顔を見てその場で戸惑っている。

「はあ!!何言ってるんだってばよ!!」

「ナルト…」

柱間が怒鳴るナルトを静かに止め、一度唇を噛むと芙蓉の顔を見つめ、握っている芙蓉の右手をギョツと握り直した。

「やつと、やつと会えたつてのに…何でだよ!!…」

ナルトは拳を握り締め、眉を寄せて視線を膝に落した。

そしてハゴロモが再びナルトに言う。

「芙蓉も見えない所でこの世界を救った一人だ…。かつて芙蓉とマダラは夫婦だった。カグヤの思念など無ければ離れることは無かったかもしれない…」

離れた場所で見守っていた扉間は、ハゴロモの言葉を聞きながら俯いた。

そして、悔しがり俯くナルトに向かって六花が言う。

「…素敵なお友達か…沢山できて…良かったね…見て…たよ…」

それを聞いてナルトは顔を上げ、潤んだ瞳で六花の顔を見て無理やり笑って見せる。「オウ！友達も仲間も沢山できたってばよ！姉ちゃんとしてた約束、守れて良かったってばよお！それからそれから、今は額当てしてつけどき、あの日貰ったゴーグルだって、ちゃんとかと大切にもってるんだってばよ？」

六花はナルトの話を聞きながら何度も瞬きで頷いていた。

そして、次の瞬きのあと、六花は目を開けなかった。

「六花姉ちゃんっ!!」

「芙蓉」

柱間は六花が眠りにつくのを看取ると、六花を抱き上げ、マダラの隣りに並ぶように横たえた。

「六花姉ちゃん・・・本当にありがとう」

「芙蓉にとつてお前は息子の様な存在だったのかもしれないな……。ナルト、悲しいがお前は早く父親の所へ行け。もう時間が無い様だぞ」

柱間の言葉にナルトは袖でごしごしと顔を拭くと思いついて立ち上がり、六花に向かって深く一礼し、そして父・ミナトの方へと走って行った。

柱間もナルトの背中を見ながら立ち上がると、寂しそうに軽く微笑みながら並んで眠るマダラと芙蓉の顔を見た。

その瞬間、山入端から遂に太陽が顔を出し、薄黄色の朝陽が辺りを明るく照らし始めた。

朝陽に照らされるマダラと芙蓉、ふたりの顔には、今はもう苦悩の皺は無く、穏やかで、満足そうな表情をしている様にも見えた。

「マダラ…芙蓉。お前たちの『先の夢』は叶わなかったのだろうか、きつとお前たちが守りたかったものへの想いは、受け継がれてゆく筈ぞ…」

そう言うのと柱間は一度目を閉じた。

そして目を開けると、離れた場所でこちらを見ている扉間の元へと歩いて行った。

柱間が扉間の隣りに並んだ時、二人の身体は眩しい光に包まれ、その光は天に向かつて一直線に伸びてゆく。

それは柱間と扉間だけではなく、穢土転生されたヒルゼン、ミナト、そして浄土から召還された五影たちも同じく光に包まれゆく。

そして、皆の姿は次第に光の中で薄れ始めた。

「本当に良かったのか？最後に芙蓉に声を掛けてやらなくて…」

「…いいんだ。これで」

「フツ。あの世でマダラと喧嘩するなよ？」

「…フーン！」

太陽は何も知らない顔をして、昨日と同じく大地を照らし始めた。
ここからまた、新しい未来が始まる。

完

【続・六花の森番外編】ふたりのマダラ（一）～目印

「マダラ……さま……？」

六花は目の前に居るマダラを見て驚き、急いで右隣へ顔を向けた。

しかしマダラといえば、全く動揺する様子も無く前を見据えている。

「クククツ……それは貴様の完全なる複製だ。能力も技もチャクラの量も同じ。……だが一つ違う所がある」

『!!』

男の言葉に、六花とその左肩に載るゼツの二人が目を見開いた。そして六花は忙しく頭を動かし、右隣りのマダラと目の前のマダラを交互に見る。

しかし隣のマダラは相変わらず、腕を組んだまま目の前自分を見据えている。

そして六花の目の前のマダラも同じく腕を組んで目の前自分を見据えている。

「この複製には、貴様にとって大切な物が無い。つまりその分、本体の貴様よりも強いという……ことだな」

「……なるほど」

マダラは少し口角を上げ、そう答えた。

が、やはり二人のマダラは全く動かない。

「大切な物つて…いつたい…?」

六花は不安な顔で隣のマダラを見た後、目の前のマダラの方を見た。

「複製は貴様を殺せば本物になれる…まあせいぜい自分に殺されないよう頑張るんだな。ハハッ!じゃあな!」

「待ちなさいっ!」

六花はその場から姿を消した男を追おうとしたが、六花の目の前のマダラが六花の正面に瞬間移動し、それを制止した。

「追わんでいい…フン。面白いじゃないか」

六花の右隣りに居るマダラはそう言うと、六花の両腕を掴んでいるマダラの背後に瞬間移動し踵落としをした。

しかし、踵落としをされた方のマダラはそれを受け止めるまでもなくその場から姿を消し、マダラの足は鋭く宙を斬りながら六花の鼻先をかすめ、ドシンと大きな音を立てて地面に穴を開けた。

六花は身体をのけ反らせ、地面の穴を見てごくりと唾を飲む。直ぐには言葉が出ない。

「…マダラさま…」

「六花、お前は避難して居ろ」

マダラは背中ですう言うのと、腰の刀を抜いた。

それとほぼ同時に、目の前のマダラの複製も刀を抜く。

「マダラがこの世に二人も居るとか嫌だよねえ。さ、巻き込まれないように逃げよう。六花に手出しが出来るとか闘いじゃないよ」

「…は、はい！」

六花は急いでその場から姿を消した。

ビュン！ビュン！ビュン！…

「?!」

走っていた六花は頭上から落ちてくるクナイを前転して何とか避けると、飛び上がって地面に着地した。

『六花』

目の前に居る二人のマダラの声が重なる。

「…どっちが本物のマダラさまなの?!」

「落ち着いて。本物の方がコピーマダラを止めてくれるからじっとしてるんだ」

ゼツの言葉に六花は静かに固まった。

すると、冬晴れの空を越冬の為に北国からやって来たシメがピチ、ジューつと鳴きな

から横切って行った。そしてシメに連れられてやってきた北風が、その場に居る三人の長い髪を揺らしてゆく。

「お前の目的は俺だろ」

「……」

マダラは刀をいったん鞘に収めると、コピーマダラに向かって走り出した。コピーマダラは向かって来るマダラに向かって刀を構えたまま無言で走り出す。

二人は直ぐにぶつかり、マダラはコピーマダラの刀を素早く避けると懐に入ってしまった。コピーマダラの顎めがけて右手を突き上げた。

その拳は確実に当たったように見えたのだが、マダラの視界にはもうコピーマダラの姿は無い。

そしてコピーマダラがしゃがんでいるマダラの背後に現れ、後頭部を左手で殴ろうとしたが、マダラは腕でそれを受け止めると、刀を握っているコピーマダラの右手首を右足で蹴り上げた。

コピーマダラの右手の握力が弱まったと同時にマダラはジャンプしてコピーマダラの両肩に飛び乗り、その勢いと圧力でコピーマダラの右手から遂に刀は離れて落ちてしまった。

そうして、二人の体術での組み合い勝負が始まった。

「…もう完全にどつちが本物のマダラさまか分からないわ」

「今のうちに逃げて。コピーマダラは六花を狙ってくるよ」

「でもそれなら逃げてもまた追われて逃げての繰り返しだわ！体力も消耗するし、かえってマダラさまの足手纏いになる。逃げるくらいなら一緒に戦った方がいい」

「ここに留まるにしても逃げるにしてもせめて見た目で見分けがつけばいいんだけどね。コピーには大切な物が無いって、それは目には見えないものだしね」

「ゼツ、大切な物って何か分つたの？！」

「え？逆に分かんないの？コピーマダラが何で君を狙うかも？…心が無いからじゃん！」

「…心が…無い…？」

六花は目の前で激しく殴り、蹴り、交互に左右と天地を入れ替わりながら戦っている二人を改めて見据えた。

…それならば…

六花は深呼吸をし、胸いっぱい空気溜め、そつと両掌を口の両側にそえる。そして。

「マダラさまのお弁当のいなり寿司、川に落としましたあああああーっ！！」

「なんだとテメエふざけんな！」

ガンッ！

「ぐっ！」

マダラは顔にコピーマダラの右ストレートを喰らい、唇が切れて血が流れた。

「ちよつと六花!!本物を動揺させてどうすんのさ!!殴られちゃってるし！」

「これで目印は付いたわ」

「鬼かつ！」

「須佐能乎の闘いになる前にコピーを止めるわよ」

「目印は付いたけどこの激しい闘いに割って入るなんて無茶だ！」

「私に良い考えがある・・・あっ!!二人が森の方へ!追うわよ!」

「なんか今の六花ならやれる気がしてきたよ...でも気を付けてね」

六花が二人を追って森へ入ると、開けた場所で、未だ二人は素手で取っ組み合っている。

・・・まだ体術だけで戦っているということとは、やっぱりマダラさまも同じ事を考えているのね・・・

六花は音を立てないよう少しずつ茂みを進み、二人との距離を縮めてゆく。

そして遂に、二人との距離は十メートルを切った。

二人はこちらに気付いているのかいないのかは分からない。だが、互いにそれを見せ

る隙もなく真剣に闘っている。二人の眼には全く同じ写輪眼が浮かんでおり、全く互角の闘いである。

六花は唇から血を流す本物のマダラ、ではなくコピーマダラの方を懸命に目で追った。

開けた森の、丸い空の端に浮かぶ太陽は、白く分厚い雲に隠れている。

先ほどから北風も吹き続けており、それが森の針葉樹の葉を揺らしてくれるお陰で、六花の気配は一層消されている。

上空の風は地上よりも強く吹いているため、分厚い雲は直ぐに形を変えた。するとその隙間から太陽が顔を出して光が差し始めた。

その時だった。

六花の写輪眼が光る。そして…

「マダラさまのベッドの下のえっちな本、全部捨てましたあああっ!!!」

『!!』

マダラとゼツは顔で驚いたが、その後の言葉が出てこない。

マダラは昔、絶対に大人にはバレないと思っていた子供だけの秘密の悪さが、ある日突然、母親からその証拠を目の前に突きつけられた時に味わった首筋の冷たさと、顔全体の熱さを思い出した。

その隙に、コピーマダラは素早く腰から刀を抜くと振りかぶる。が、目の前に居る筈のマダラの姿は消え、そこにはクナイを構えた六花が居るではないか。

コピーマダラもこれには流石に驚き、僅かの動揺を見せた。

しかし、コピーとはいえマダラの方が実力は上だった。

スパッ。ドス！

「……っ……」

コピーマダラの刀の先端が六花の胸に触れ、その襟を切り開いた。

その瞬間だった。

マダラはコピーマダラを背後から羽交い締めして動きを封じ、それと同時に六花はコピーマダラのみぞおち目がけクナイを力いっぱい突き刺したのだった。

顔を歪めて動きを止めたコピーマダラと、六花の眼が合う。

「ふっふっ」

六花はコピーマダラ、の背後のマダラに向かって微笑んで見せた。

・・・バタン!!・・・

「やったね!!すごいじゃん六花!!」

六花の左肩のゼツは喜びの声を上げると地面に飛び降りた。

そして仰向けに倒れて動かなくなったコピーマダラへと近づいて行った。

「なぜ殺さなかった？」

「ちよつと六花！死んでないじゃん!!」

ゼツは焦つて六花に、そして六花の隣に立つて居るマダラに振り返つて叫んだ。

「殺しに行くほうがリスクは高い。うまく痺れの急所が突けた様だな。俺に隙を作り、複製が俺をやれると確信したその隙を漁夫の利で狙う…よくやったな」

「はい…でも、マダラさまの援護が無ければどうなっていたか…」

「うむ。だが俺の本気の殺気を見られて良い経験になっただろ？」

「は、はい…けど…すごく怖かったです…」

六花は今になり、恐怖で全身が震えてきた。自分の身体を抱き寄せ、腕を擦りながらその場にしゃがみこんでしまった。

「ハハハハツ…つてオオオイ!!さつき叫んでいた事は本当か!!」

「あ、はい。いえ、もちろん嘘です。でも本の中身は見ちやいました…へへつ」

六花は眉を寄せ泣きそうな顔でマダラを見上げると、笑つて答えた。

「つ。…マジか…」

つ
つ
く

問
【続・六花の森番外編】ふたりのマダラ（二） ～二十四時

「さてと。さつさとトドメを刺して写輪眼を奪うぞ」

「えっ！マダラさまも、敵の居場所と情報を聞き出すおつもりじゃ…？」

「バーカ。遊んでたに決まってるんだろ。俺自身と闘えるなんてこんな楽しい事があるかよ。飽きたら殺すつもりだった」

「あの…その…いくらニセモノとは言え、ああして血を流し苦しんでいるということは生きて居るといふことですし、それに…マダラさまのコピーなわけですし…助け」

「ない！…お前の言いそうな事くらいすぐ解る。全く！見るに耐えられぬなら先に帰っている」

「でも！せめて殺すんじゃないかと、術を解いてあげるとか、もつと違う方法は無いでしょうか？」

「別にいいじゃん。あれは影分身って思えばさ。それに第一アイツは君を殺そうとしてたんだよ？」

「でも…」

「しつこいぞー!」「もういい!」

二人のマダラの声が重なった。

驚いた三人の視線はコピーマダラへと向けられる。

コピーマダラは、なんとか眼だけを六花に向けると言葉が続ける。

「…どうせ俺の存在は二十四時間だ。本体を倒せなければ必然的に消える…さっさと殺せ!」

「そ、そうなんですか!?!」

「俺に訊くなよ!」

マダラはそう言い、渋い顔で六花を見た。

しかし、六花の眼はマダラではなく、コピーマダラを心悲し気に見つめている。六花が訊ねた相手はコピーマダラだった。

それが判ると、マダラはフンツと不機嫌そうに顔を背けた。

「本当だ。お前が見たく無いのなら、俺の眼を取って後は放置しておけばいい!」

「そんな!…マダラさまっ! どうしましょ!?!」

「五月蠅い! どうするも無い。眼を取って殺す! お前はニセモノの言う事を信じるのか? 嘘に決まっているだろ。そう言っただけで近づいた隙に反撃して来る気だ。まあそんな事

はさせんがな」

つい数秒前までコピーマダラを見つめていた六花の思慮の眼は、今は何の後ろめたさも無くマダラの顔を見つめており、腕まで掴んできたことにマダラは苛立ち、声を荒げてその腕を振り払った。

「フツ…せつかく守つたつてのに、今度は仲間割れか？」

「…んだと？」

「止めて下さい！コピーマダラさんの言う事はきつと本当です！」

六花は、コピーマダラの元へ足を踏み出そうとしたマダラの前に立ちはだかりマダラの両腕を掴んだ。

「六花、アイツには心が無いんだよ？僕も嘘ついてると思うけど」

六花の左肩のゼツが、マダラが再び写輪眼を出す前にそう言った。

「心が無い人が『お前が見たく無いのなら』なんて言わないわ！」

「……ハア……」

六花の言葉に、マダラは写輪眼を出すのを止め、眼を閉じて大きなため息を吐き、自分の腕を掴んでいる六花の腕を除けた。

そして六花の右横に踏み出した時だった。

「あのっ…二十四時間だけ、コピーマダラさんを仲間にしてあげるとは出来ません

か?…」

「ハア?」

マダラは眼を開け、怒りと呆れの顔で六花の顔を見た。

「お願いします!」

「六花やめなつて!ダメに決まってるじゃん」

「じゃあせめて…眼を取るだけにして、コピーマダラさんが消えるまで…私に見張らせて頂けないですか?…」

「テメエな…」

「俺からも頼む…敵の情報を教える代わりに、仲間にしてくれ」

『!?!』

三人が目を見開き一斉にコピーマダラを凝視した。そして目の前の現実言葉に言葉を失う。

「仲間でなくとも構わん。俺の事が信じられないなら眼を取るといい。術に繋いでもいい。僅かな時間だとしても…生きていたい」

その言葉に、六花は堪らずコピーマダラに向かって走り出した。

「危ないつて六花!!マダラ!六花を止めてよ!!」

しかし、マダラは腕を組んで仁王立ちのままだ。

遂に六花はコピーマダラの右隣りに辿り着くと、しゃがんでその顔を覗き込んだ。

すると北風が強く吹いて、六花の後ろで束ねた長い髪が舞って顔に纏わり着き、六花の表情を覆い隠した。

六花は急いでその髪を指ではらうと、更にコピーマダラに向かって膝を寄せた。

目の前に六花の表情が現れると、コピーマダラも六花のその表情を見た。

たった数秒の間に、コピーマダラは僅かに眼球を動かしただけで六花の眼、鼻、口、輪郭全てを見回し観察した。

力んだ眉間、細めた眼の中にある琥珀色の瞳は潤んでおり、下唇を軽く噛んでいる。

しかし、寒さで肌の表面の血の気が引いて白磁の様に冷たく光る白い肌、輝き開いた瞳孔が強い意志を物語っている様だった。

その六花の表情を見て取ると、コピーマダラは六花に向かって口角を上げて見せた。

しかし六花はそれに気づかず、後ろのマダラに振り返ると瞳で強く懇願した。

「……わああったよ！……くそっ！」

「マダラさま……ありがとうございます！」

「勘違いするな。俺の姿をした奴が命乞いしているのをこれ以上見るに耐えられんだけだ！」

「じゃ……」

「その代わり……先に眼を取る。信用など出来んからな」

マダラの言葉に六花は振り返り、心配そうにコピーマダラの顔を見た。

「…構わん。好きにするといい」

「でもそれじゃ……」

「眼が見えぬくらいで困る様な『俺』じゃないってことくらい、お前が一番知っているんじゃないのか？」

「……」

六花は僅かに驚き、それを隠すように俯いた。

そしてコピーマダラは続ける。

「一つ教えておいてやる。眼を取るのはいいが、俺を生んだあの魔鏡の光に当てなければ俺の身体と同時に消滅するぞ」

「チィ……つたく面倒な！」

マダラは大きく舌打ちをして腕を組み直した。

「マダラどうすんの？ていうかそもそもホントに仲間にするの？僕はここで始末しておいたほうが良いと思うけどね。六花を甘やかさない為にも」

ゼツが六花の肩でマダラに向かって冷静な声で訊ねた。

「ゼツ?…」

「勿論仲間にするつもりなど無い。捕虜だ。まあ二十四時間の命らしいから捕虜と言えるのかってのはあるが…生かしてやる代わりに情報と眼はいたたく。あの山賊墮ちの忍どもが占拠する土地には十尾の器（のちの外道魔像）の召喚方法に係わる遺跡がある。何としても討伐せねばならん。それに写輪眼はいくつあっても良い。しかも複製とはいえ俺の眼だ。欲しい」

マダラはそう言うのと組んでいた腕を解き、コピーマダラと六花の元へゆくりと歩き始めた。

「でも眼を手に入れる為には魔鏡を取りに行く必要があるじゃん。どうすんのさ?」

こちらに歩いて来るマダラに向かってゼツが声を上げる。

しかしマダラはその問いに答えず、無言で歩いて向かって来る。六花は、その姿に感じる威圧で何も言えないで居た。

そしてマダラの大きな影が六花の顔に差し掛かかると、マダラは立ち止まった。

…ゴクリ。

六花は唾を飲み込み、眩しそうに眼を細め、陰るマダラの顔を見上げた。

するとマダラは腰に付けているポーチに手を入れ、術札を一枚取り出した。

「まぎか…」

「そうだ。禁固術の札を使い複製の行動を制御する。俺が魔鏡を取って来る間、六花、お前はゼツと一緒にアジトで複製から情報を聞き出せ」

そう言いながらマダラは左手で術札を持つと右手で素早く印を結んだ。

「やはりそう来るか」

「てめえは黙ってろ」

マダラは六花と向かい合ってコピーマダラの左隣にしゃがむと、術札をコピーマダラの心臓の上に置いた。すると術札はあつという間にその場から姿を消し、コピーマダラの心臓の中へと取り込まれてしまった。

「あーあ。またそうやって六花を甘やかす。六花の我儘に付き合わされる僕の苦労も少しは考えてよね！」

「……ゼツはアジトまで複製の身体に張り付いて連れて行け。六花はアジトの監禁室へ複製を入れ、敵と十尾の器について情報を聞き出したあと封印錠をしておけ。術で嘘は付けないようにしてあるから全て吐くだろう」

「じゃあマダラはせめて早く帰って来てよね」

ゼツはそう言うのと六花の左肩から飛び降り、そのままコピーマダラの鎖骨辺りに着地した。そして体を広げ包帯のようにコピーマダラの身体全体を包み込んだ。眼と口とだけ、ゼツの顔の形に空いている。

「マダラさ……」

「黙れ。お前には何も言わさんぞ」

「……きゃつー！」

マダラは六花に言葉を掛けたと同時にコピーマダラの両目に手を伸ばし、眼球を奪った。

六花はその光景に思わず小さく悲鳴を上げ、両掌で顔を覆ってしまった。

「悲鳴など上げるな！何年忍をやっている。しつかりしろ」

「も、申し訳ありません……」

勿論、六花とて上忍以上の忍である。普段ならこれしきの光景で悲鳴など上げない。

しかし、眼を奪われた人物は“マダラ”の姿をしているのである。

マダラは奪った両目を素早く術で真空状態の小瓶の様な空間に入れると、それをポーチの中に入れた。

「……」

絶句する六花を無視してマダラは勢いよく立ち上がった。

北風がそれと同時にマダラの長い髪を横に揺らした。そして気づけば先ほど顔を出した太陽は再び厚い雲に隠れ、周囲には北風に乗って来た木葉が舞っていた。

「俺は行く。情報を聞き出し、しつかり精査と分析をしておけ。解ったか」

「…は、はい」

「しつかりしろ!!」

「はいっ!」

六花は焦つて眼を見開き、大声で返事をした。

「それからニセモノ! おかしな真似をすれば即、お前の寿命は終わりだ。素直に全て吐けば魔鏡でお前も消滅させないで置いてやらんでもない…」

「心配は要らん。早く行け」

「……」

マダラは一度瞼を閉じた。そして再び目を開けコピーマダラを見据えると、その顔を見て僅かに戸惑う様な、気疎い表情になり、次に言おうとした言葉を飲み込んだ。

「…ゼツ。頼んだぞ」

「へーい」

「マダラさまもどうかお気をつけて」

「六花。俺の姿をしているからといって油断するなよ…」

「は、はい」

六花が返事をする、マダラは口をへの字にし六花に向かって左手を伸ばした。

「…オイ!」

「?…ああ!はいっ!」

六花は急いで背負っていた鞆を下ろして開けると、中からいなり寿司が詰められた小さな風呂敷包みを取り出して立ち上がり、マダラの左手にそれを手渡した。

「すみません。ちよつと崩れてしまっているかもしれませんが」

「構わん。味は変わらんだろ」

マダラはそう言うのと三人に背を向け、その場から姿を消した。

つづく

ふたりのマダラ（3）　　く追憶と現実

「これで、俺が知っている事は全てだ」

「話して頂きありがとうございます」

「礼なんて言う必要無いよ。話の内容が本当かなんて分からないしね」

「ゼツ！そんな言い方しなくたって…」

パチツ…ボウ…ボオオオオオ…

部屋の片隅に在る松明が弾けて音を立てると、炎の姿が大きくなった。

コピーマダラは閉じた眼をその方向に向け、言う。

「構わん。敵の話を鵜呑みにする方がおかしいだろ」

「…」

六花は少し困った顔をして俯いた。

「大体さマダラが本当にコイツから情報を得る為に助けたわけ無いじゃん」

「えっ!? どういうこと?」

六花は顔を上げ、眼を見開いて左肩のゼツを見た。

「フツ…」

すると、暖炉の方を見つめたままコピーマダラが横顔で笑った。六花は怪訝そうに何度も瞬きをしながらその横顔を見つめる。

そしてゼツが六花に向かって口を開く。

「マダラは君の我儘を聞いてくれたんだよ。コピーマダラを殺さないで欲しいっていうね！分からないの？マダラだって禁固術の札ごときでコイツが本当の事を言うなんて思っちゃいけないよ。何か有益な情報が有ればラッキーくらいには思ってるだろうけど」
「でも！さつきマダラさまは全部正直に言えば消滅させないでおいでやるって、コピーさんに…」

「お前を守る為だ」

「お前が言うな！」

六花に対しコピーマダラが答えると、すかさずゼツが叫んだ。

しかしコピーマダラは気にせず言葉が続ける。

「眼を奪われ、禁固術の札を埋め込まれたとしても俺が本気を出せば、お前ひとりくらい殺せる」

「！！…」

その言葉に六花は僅かに身体をのけ反らす。ゼツは眼を三角にして身を乗り出す。「…怯えるな。あつちの俺も、俺が消滅を免れたいと望まぬとも、お前を殺さぬと解っているからこうして二人きりにしたんだろう」

「は？ちよつと何言ってるか分かんないんだけど。何の根拠があつて言ってるんだよ。それに僕の存在忘れんな！」

ゼツはコピーマダラを睨み語気を強めた。

「お前には解らんでも良いことだ」

「はあ？僕は『本物』マダラの意思から生まれた存在だ。ニセモノのお前なんかよりマダラのこととはよく知ってる」

「ちよつとゼツ！ケンカ腰で話さないの…」

六花はそう言つて、ゼツを宥めようと身体を撫でようとしたが、ゼツはその手をすり抜けて六花の膝の上に乗移ると、六花を見上げて言う。

「六花もいい加減にしなよ。自分が下僕だつていう自覚が無さ過ぎ！マダラが許してくれるからつて調子に乗つてさあ。大体君がさつき…」

ゼツの説教が始まった。

六花は太腿の上に重ねた掌の上に視線を落とす、悲しそうな顔でそれを聞いている。

コピーマダラは見えない眼を二人の方へ向け、ゼツの説教に耳を傾けた。

「…君はもう芙蓉じゃない。マダラに愛されてるからって対等じゃないんだ。以前の六花同様に下僕として役に立たないなら僕がここから追い出してやる。君の甘さはいつか今以上に大きな危機を招くかもしれないしね！」

「…ごめん…なさい…」

「もちろん。僕とも対等じゃないってことも忘れないでね」

「…はい」

コピーマダラはゼツの説教に対して素直に謝っている六花の表情を想い浮かべていた。

先ほど自分の顔を覗き込んでいた時にしていた様な表情なのだろうが、きつと少し違うのだろうと思った。

「さ、部屋を出るよ。話は聴き終わったしコイツと一緒に居るのも危険だからね」

そう言うのと六花の膝の上でゼツは身体を二つに分裂させた。

「片方の僕がコイツに張り付いて見張る。何かあればもう片方の僕にすぐ伝える。六花は外に出て扉に二重に封印錠をかけな」

「分かったわ」

六花が立ち上がると同時に、片方のゼツはコピーマダラに飛び付き、身体を広げて貼りついた。しかしコピーマダラは微動だにせず、黙っている。

「コピーさん…マダラさまが帰って来るまでそのまま待っていて下さい」
「余計なこと言わなくていいから早く出て！」

六花の左肩に載る方のゼツは口で六花の髪を引っ張り、出口へ向かうよう促した。

六花は文字通り後ろ髪を引かれながら、最後にコピーマダラの顔を見た。

「…！」

「どうしたの？」

「…う、ううん…何でもないわ…」

六花はコピーマダラから顔を背けると急いで重い扉を開け、部屋の外に出た。

…ガシイイーン…

扉をしつかりと閉め鍵をかけると、印を結び封印錠をかけた。それから外側にあるもう一枚の観音開きの扉を閉じ、その扉にも封印錠をかけた。

そして、六花は振り返ること無くその場を離れて行った。

「もう十九時を過ぎていたのね…マダラさま、遅いなあ…」

一度自室に戻り、戦闘服から普段着に着替えてから台所に立っている六花は、前屈みになって袖を捲りながら小さな置き時計を覗き込み、呟いた。

「一人で千人の敵を討伐してるのかもね」

左肩から落ちそうで落ちないゼツが六花の顔を覗き込んで言った。

「だとしてもマダラさまにしては遅過ぎる気がする…お一人で遺跡の調査をされているのかも」

「兎に角サツサと早く帰って来て欲しいよ。あ、六花。僕はきな粉餅が食べたい。今日はまだ甘いもの食べて無いし」

「はい。承知致しましたゼツ様」

「なんか嫌味を感じるけどいつもそういうものの言い方して欲しいね」

六花は目を閉じ小さくため息を吐くと、身体を起こして夕食の準備に取り掛かった。

人参、里芋、蓮根、牛蒡、椎茸、鶏肉を手際良く下ごしらえすると、火にかけて鍋に油を入れて炒め始める。

ジューウウウという油と水分が反発する音が小さくなり、具材の表面に軽く火が通ってきたら水を加える。水は多くても少なくてもならない。具材が軽く浸る位だ。

次に砂糖、酒、塩、醤油の順で加えてゆく。鍋の中が沸騰したら弱火にし、おたまで小皿に汁をすくうと味見をする。

「…もう少し砂糖かな」

小さじ一杯分の砂糖を追加すると木ベラで鍋を優しく混ぜ、落とし蓋をした。

そして六花は再び時計を見る。

カチツ。時計の長針が一つ目盛を進めた。

その時、六花の頭に、遠い昔の想い出と共にその頃の感情が蘇ってきた。

あの頃もこうして、一日に何度も時計を見ていた：

しかしいくら遅くなっても、帰って来てくれていた頃は良かった。

しかしある頃からマダラは家を、木ノ葉の里を、度々空ける様になった。

そして遂に、マダラは二度と里へは帰って来なかつた：

六花はギユツと胸が強く締め付けられ、胸に手を当てて俯いた。

最後に、一輪挿しに生けられたリンドウと置手紙が目に見えかぶ。そして。

・・・禁固術の札・・・

その後の芙蓉とマダラの物語が堰を切ったように流れ出し、六花は耐えられなくなつてその場にしゃがんだ。

……くつくつくつ……

幸せな音と共に、食欲をそそる香りが六花の鼻をくすぐつた。

六花はグスンと鼻をすするとサツと立ち上がり、何事も無かつた様に春菊をまな板に載せて刻み始めた。

「ねえ六花も食べなよ。この調子じゃマダラはいつ帰って来るか分からないよ?」

その声に六花はハッと時計からゼツに顔を向けた。気づけばまた、時計を見つめていた。

ゼツはきな粉で顔を黄色くしながら五つ目のきな粉餅を食べている。

「ありがとう…でも私は大丈夫よ」

「痩せるよ?そしたらまたマダラに怒られるよ?」

「大丈夫、大丈夫!…もおゼツ様、顔じゆうきな粉だらけですわよ?」

そう言つて六花がハンカチを取り出し優しくゼツの顔を拭き始めると、ゼツは眼を閉じて黙つて拭かれていた。

顔がキレイになるとゼツは眼と口の両方を同時に開ける。

「いいから食べなつて!これは僕の命令だよ!早く!」

「…。分かつたわ」

そう言つて六花は目の前の沢庵をつまんで口に入れ、大袈裟にモグモグと咀嚼しながらゼツに笑顔を見せた。

「もう!本当に六花は頑ななんだから」

…バタン。

六花は自室に戻ると、机の上の時計を見た。

二十三時。

「マダラさま、今夜は帰って来ないのかしら…」

椅子を引いて机に着くと、ノートを広げて先ほどコピーマダラから聞き出した話のメモ書きを整理して書き始める。しかし、直ぐに書き終わってしまった。

正直、これといった有力な情報は無かったのだ。

大きな情報といったら、山賊とその支配下の忍の数が約千人位だという事か。

あとは、山賊たちは十尾の器（のちの外道魔像）についての碑石の存在には気づいていないという事。

六花はまた再び時計を見た。

・・・もう直ぐ十二時間が経つ…あの人の命はあと・・・

六花は気を取り直してノートを閉じると、本棚から適当に忍術書を取り出して読み始める。なるべくコピーマダラのことは考えたくなかった。

「……………」

六花は焦って眼を開け、何度も瞬きをした。

「大丈夫？六花。少しだけ横になつたら？」

「そんな訳にはいかないわ…大丈夫よこれくらい」

・・・おかしいな。いつもならこれくらいで眠くなったりしないのに・・・

パンパンと両頬を叩くと再び忍術書を広げて読み始めた。

「・・・・・・・・」

「コピーといえどマダラの本気の殺意を見せられてよっぼど精神的に参ったんだね……よく頑張ったね。六花」

ゼツはひざ掛けを口で引っ張って来て、机にうつ伏せて眠る六花の肩に掛けた。

「んん……」

「少し眠ってちよつとは楽になった？」

「……ええ」

ガタン。

「どこ行くのさ?」

「……御手洗よ」

「真つ直ぐ帰っておいでよ!間違ってもコピーマダラの所になんて行くんじゃないよ!」

「……解ってるわよ。でもついでにマダラさまの着替えや寢床の準備もして来るわ」

「今日は帰って来ないと思うけどねえマダラ。いいから早く戻って来てよ」

「・・・うん。・・・ねえゼツ?」

六花が掌をゼツの前に揃えて出すと、ゼツはぴよんとその上に飛び載った。

「なあに? 六花」

六花は何も言わずにゼツを自分の顔の高さまで持ち上げ、眼を閉じた。

しかし口元だけは軽く開いている。

…チユツ。

六花は目を開けると、掌の上で目を閉じ眠ってしまったゼツを静かに机の上に置き、部屋を出て行った。

フツ!・・・ギイイイ…

六花は封印錠を解き、その扉を押して開けた。

真つ暗な部屋の中に入ると写輪眼を発動し、真つ直ぐその場所に向かって歩いてゆく。

「・・・」

そしてその場所の前に立つと、柵の鍵を術で開錠し、その奥に手を伸ばした。六花の真つ赤な写輪眼は、その手に握られたものを刺すように見つめていた。



ギィィィィ…バタン。

「六花」

マダラは六花が部屋に入って扉を閉めると立ち上がり、名を呼んだ。

「…マダラさま…」

六花はマダラを目の前にして微笑すると、マダラの方へゆつくりと歩き出した。

ボウ…ボオオオオツ…

六花が横を通り過ぎると、松明の火が大きく揺れた。その足元には黒い影が伸びている。六花はその影を踏んで歩いてゆく。

しかしそれは影ではなく、床に貼り付けられ気絶しているゼツだった。

「ご入用の物を持って参りました」

六花は手に持って居る物をマダラに向かって差し出した。

「うむ」

マダラはそれを受け取ると、直ぐに開封しその中身を取り出した。

そして、それを、両眼に入れた。

何度か瞬きをし、最後に目を開けるとその眼は写輪眼に変わる。

そして、その眼でジツと強く六花の瞳の奥を見つめた。

「…?!…マダラさま…いつお帰りに？」

「フツ……俺はコピーの方だぞ」

「えっ!!……じゃあその眼は!!」

「今お前が持つて来たんだろう?」

「!!」

六花は反射的に後ろに飛び退き、身構えた。

しかし武器や防具は戦闘服を脱ぐと同時に全て外しており、丸腰である。有るのは写輪眼と自らの体術のみである。

それでも動揺を見せない様、なんとか冷静にコピーマダラを見据え、問う。

「いつ術をかけた?」

「昼間、倒れた俺にお前が駆け寄って来て俺の顔を覗き込んだ時さ」

「最初からこれを狙っていたのか?」

「さあ、どうだろうな…….それを知ってどうなる?あのゼツとかいう奴もとつくの昔に始末している。出入口も開かんぞ」

「やってみないと判らないだろう?」

「俺に守らなければ俺に殺されていたような女となぞ、やるつもりは無い」

六花は微動だにせず、しかし静かに唾を飲み込み瞬きをした。そして問う。

「やはり狙いはマダラさま本体か?」

その問いに、コピーマダラはフツと不敵に笑って見せると、後ろにある椅子にドスンと腰かけて足を組んだ。

「ああ。あつちが帰って来るまでお前にはここに居て貰うぞ」

「オレは人質というわけか……だがマダラさまが明日の正午までに帰って来るとは限らないぞ？ その場合、おまえは必然的に消える」

「アハハハ。本当に俺が二十四時間で俺が消えるとも思っていたのか？ つくづく馬鹿な奴め」

「……っ!!おまえ……」

「敵である俺に情けをかけるお前を見て、そう言えば落ちると思つてな。あの時俺のこのを見ていたお前の顔……傑作だった……」

「……」

六花はあの時のコピーマダラに、柱間との戦いに敗れ、遺骸となり冷たく暗い横穴の中に横たえられているマダラの姿を重ねてしまっていた。

二度も、マダラが死ぬところなど見たくなかったのだ。

そんな我儘で弱い自分に対して腹が立ってきて、六花は僅かに視線を下げ沈黙してしまふ。

「あの時、俺が二十四時間の命だと分からなければ、俺を殺していたか？」

「…いや。結果は変わらなかつた…」

「ならばなぜ今は戦おうとしている？」

「…それは…お前に答える義務は無い」

「…。」とここで、その言葉遣いはやめろ。俺に対して粹がなくても滑稽なだけだ。女なら女らしくしろ」

その言葉に、六花は堪らず苦虫を嘔み潰したように顔をしかめ、写輪眼を発動するとコピーマダラを睨みつけて叫ぶ。

「ニセモノのお前の言う事など聞かか！」

「フツ…」

バタアン!!

「ぐっ！」

「ならば力づくで女に戻してやろう」

コピーマダラに覆い被さられ、両手を地面に押し付けられている六花は、それでも諦めることなく持てる力を全て込めて抗っている。しかしそれに反して頭の中では力なくうな垂れていた。

『君の甘さはいつか今以上に大きな危機を招くかもしれないしね!』

…あの時、マダラさまの言うことを聞いていればこんな事には…

ゼツの言葉と激しい後悔と共に、何とか命だけは守らねばならないという使命を思い出す。

六道仙人との約束…

碧眼の少年が世界を救うまで生きねばならない…

六花は目を閉じると、抗うのを止めて脱力した。

「…解りました。あなたに従います。ですから…許して下さい。命だけは…助けて下さい」

「いいだろう。殺しはせん」

つづく

【続・六花の森番外編】ふたりのマダラ（完）　　く選択

パチツ…ボウ…

ビクツ！

薪が弾けた音に、服を羽織る六花の手が止まった。

そして再び、震える手でゆっくりと服を着始める。

「お前、本当に甘いな」

その言葉に、再び六花の手が止まる。

そして、ここまですらなんとか堪えていた涙が溢れ、頬を伝った。それを見せまいとコ

ピーマダラに向けた背を丸めた。

「後悔しているだろ？俺を助けた事を」

胡坐をかいて座るコピーマダラは、手を伸ばせば届く距離の六花の背中に向かって言った。

「…。確かに私は甘いです。すぐ感情的になって流されるし…でも…だからこそ、自らの決断の結果は黙って受け入れます」

「偉そうに言い切ってみても、お前は下僕失格だな。命惜しさにあっけなく主を裏切るんだからな」

その言葉に、六花はゆっくりとコピーマダラのほうへ振り返った。

「……」

その瞳には松明の炎が映り込み、怒りに震えている様にも、悲しみに打ちひしがれている様にも見える。しかし、六花は落ち着いた声でコピーマダラに問う。

「あの。お腹空きませんか？」

「は？」

「さっき夕食を作ったのですが…宜しければ召し上がりませんか？」

「毒でも盛ろうというなら無駄だぞ。そんなものでは死なん。それに逃げようと…」

「居間に行つて、一緒に食べませんか？」

「……。俺の身体は腹も減らんし喉も乾かん。必要ない」

コピーマダラは腕を組み、六花から視線を外した。

「そうですか…じゃあもしマダラさまが明日になつても帰つて来なくて、コピーさんも食べて下さらず、私もここから出られないのなら全て無駄になつてしまいますね…」

六花はあからさまに落ち込んだ様子で眉をひそめ、地面に目を落とした。

ぐうう…。その時、タイミング良く六花の腹の虫が鳴った。

六花は大袈裟に腹を摩りながら、思い出す。

…お前が見たくないのなら…

頭の中で、昼間のコピーマダラの言葉を反芻してみた。

マダラと同じ心をもっているならば、コピーマダラはきつと…

「……つてやつても構わん…」

「はい？」

「食ってやると言ってる！外に出てこのアジトについても調べたいしな…」

「ありがとうございます」

六花は少し悲しそうに眼を細めた笑顔でコピーマダラに向かって礼を言った。

「フン…」



…うまい…

「あの、お味はいかがですか？」

「…悪くない」

素つ気なく答えると、コピーマダラは二口目の筑前煮を口に運ぶ。

その光景を見て、六花は目尻を下げると口角を上げた。

「何をニヤけている？やはり何か仕込ん…」

「いいえ。昔の事を思い出して…すみません。どうぞ安心して食べて下さい」

そう言うと六花は背筋を伸ばし、箸置き箸を持つ。

まず右手で箸の真ん中より少し上の部分を掴み、左手を軽く添えてから持ち方を整える。そして筑前煮を箸の一寸より短い部分だけでつまむと、ゆっくり口へと運ぶ。

コピーマダラは箸を止め、その一連の光景を眺めていたが、六花の所作はとても上品で美しく、思いもよらず感心してしまった。そして同時にどこか懐かしさにも似た気持ちになり、ある筈の無い過去に目を凝らそうとした。すると、口の中のものを飲み下した六花が口を開く。

「うん。美味しい。お店に出せそうです」

「自分で言うか」

上品な所作とはギャップのある発言に、思わずコピーマダラは笑ってしまいそうになり、大きく顔を逸らした。しかし、六花は笑った。

「ふふふ…あ、ごめんなさい…本当にコピーさんはマダラさまそのものなんだあって、思ってしまった」

「当たり前だ。違うのは過去の記憶が無いことと“大切なもの”が無いくらいだ」

「過去の記憶も無いのですね…あの、その大切なものって、何なのですか？」

「文字通り、大切なものだ」

「……大切なものが無い、つまり、失うものが無いということでしょうか？」
「だな。」

「そうだったのですね……でも……あ、いえ」

六花は口をつけて出そうになった言葉を急いで飲み込んだ。

「何だ？」

コピーマダラは少し怪訝そうに六花の顔を窺っている。

……大切なものが無いから、本体のマダラさまよりも強いと言っていたのね。

でも、それは逆だと思う……

「ええつと……ほら！大切な物、あるじゃないですか！……命です。生きている今というこの時です！」

「それは……もしかして俺を馬鹿にしているのか？」

「とんでもありません！自分の命を大切に出来なければ、強くなることなど出来ません。忍は己の命より任務と君主を優先させよと教えられるようですが、それは心を捨てて無心で死ぬという意味では無いと思うのです。自分を大切にすることこそ、自分を生かしてくれている全て人とモノに思い遣ることが出来る。その思い遣りがあつてこそその自己犠牲なのですから」

「フツ。語ってくれるじゃないか」

「すみません…つい熱くなつて…」

コピーマダラは再びフツと口角を上げると味噌汁の椀を持ち、口をつけ食事を再開した。

六花は、おそらく最初で最後であろうこの奇妙な食事に、再び初めてマダラと食卓を共にしたあの日の事を思い出していた。

「お前、いつから俺の下僕なんだ？」

その問いに、六花は口に付けた湯呑を離し、目の前のコピーマダラを見据えて答える。

「十五歳の頃からですから、十年ほど経ちます」

「ふーん……」

「……？」

「さつき、あの黒い玉から説教されていたが、そもそもお前、自分のことを下僕だなんて思っていないだろ？」

その問いに、六花は大きく目を見開くと、そのまま目を伏せた。

「凶星か？」

「…いいえ。私は下僕の六花です」

そう言うのと六花は湯呑に口をつけ、静かにひと口、茶をすすった。

そして湯呑の中に目を落としながら言う。

「でも……愛しています。そんなこと、マダラさま本人には言えませぬけれど」

「……。何故だ」

「下僕だからです」

「無意味だな」

「いいんです」

そして二人は暫く沈黙の中で茶をすすった。



食事を終え、六花はコピーマダラの命令に従い、アジトの中を案内して周った。

しかし、マダラの部屋だけはコピーマダラの力をもつてしても開かなかつた。本当は六花が解錠方法を知っているのではないかと、コピーマダラは写輪眼で六花の意識の中を見てみたのだが、やはり開ける為の手掛かりは無かつた。

そして仕方なく、再びコピーマダラが監禁されていた部屋へと二人で戻つて来たの
だつた。

「一番肝心の俺の部屋が開かないとはな」

「私一人の時は絶対に開きません。ゼツが居てもです。ご覧になった通り、私もどんな
術式なのか知りません……」

「術式だけなら簡単に解ける。鍵もあるのだろうが、それが何か分らん。…いや、大方の予想はつくのだがな…」

そして、二人の間に再び沈黙が訪れた。

六花は、椅子に腰かけるコピーマダラと向かい合って椅子に座って居るが、二人の間には三メートルほどの距離がある。

しかし、六花にとつては先ほど食卓で向かい合って座って居た時と同じ短距離に感じる。いや、距離が無いのと変わらない。

恐る恐る、眼球だけをコピーマダラのほうに向けてみると、ピタリと眼が合った。コピーマダラも六花の顔を見つめていた。

六花は焦って視線を外した。

ここまですべて何とかがコピーマダラの懐に入ろうと振舞ってきたが、やはり、いつ殺されるかも分からない恐怖は完全に払しょくする事など出来ない。そして、先ほどと同じ行為が繰り返されないと限らない。

今の六花にはもう、心の中でマダラの名を呼び早く戻って来てくれるよう訴えるしかなかった。

「お前、自分があつちの俺に愛されていると思っっているか？」

沈黙からの思いも寄らない問いに、六花は更に固まった。

そしていつまでも答えない六花に、コピーマダラが右手を挙げ、六花の顔を指差して言う。

「お前は愛されてなどいない。見ろ。この状況を。お前を愛しているならお前をこんな目に遭わせないだろ。どうだ？」

六花は一度目を伏せたあと、ゆっくりと顔を上げ、コピーマダラを見据えた。

その瞳には揺れも、ブレも無い。

ただ真つ直ぐコピーマダラを射抜く様に見据えている。

「私はマダラに愛されています。それはこの状況が、あなたが、証明しています」

「お前は甘く、忍には向いていないが、実におもしろい女だな」

コピーマダラはそう言うと言つと椅子から立ち上がり、六花に向かって歩き始めた。

しかし、六花はもう、全く恐怖は感じなかった。

コピーマダラが目の前に立つと、六花もスツと椅子から立ち上がって向かい合った。

そして更に六花へと近寄ると六花の右腕を掴み、眼を細めて言う。

「俺が本体になればお前を下僕ではなく、俺の女にしてやろう。忍もやめるといい。どうだ、二人であつちを消さないか？」

その言葉を聞くと、六花は眼を閉じた。

そして考える。

…月の眼計画を知らないコピーマダラさんが本体になれば、世界の危機を遅れさせることが出来るかもしれない。それに私も…

六花が眼を開けようとした瞬間、遠くから鐘の音の如く、ある人物の声の頭の中に響いた。

『俺は、お前の過去を含めてお前を愛している』

…扉間…さま…私は…

六花はパチリと目を開け、再びコピーマダラを見据えた。

「それは出来ません。私にとってマダラさまは、たったひとりだから」

「…やはり、そうか…」

どちらのマダラの声だっただろうか。

そう聞こえた瞬間に、目の前が真っ暗になった。

ドシンン！…

その音と同時に視界の縦半分が開けて明るくなった。

明るくなった先には、マダラが地面に倒れているのが見えた。

「マ…マ…」

すると六花が叫ぶ前に、地面に倒れているマダラの姿は音も無く、光になって消えて

しまった。

「死ぬところだったな」

その言葉に、六花は目の前の影を見上げた。

「お前がニセモノを選んでいたら俺が迷わず殺していた」

「マダラさま…!!」

六花は思わずマダラに抱きつき、その胸に顔を埋めて泣き始めた。

その頭をわしやわしやと撫でながらマダラは言う。

「これで解っただろう。自分の甘さが招く絶望がどんなものかが…」

「…はい…でも」

「でもお？」

「やつぱり、マダラさまはコピーでも優しいんだなって、分かりました!」

「ハア?…つたく、やつぱり懲りて無い様だな、お前は…」

「いいえ。懲りています。懲りてますけど…」

「けどお？」

「…いえ。何でもありません。己の性格と思考をもう一度見直します。ご迷惑をお掛けして、本当に申し訳ありませんでした…マダラさま」

六花はそう言うってから身体を離すと、マダラに向かつて深く頭を下げた。

「はあー。その言葉、忘れるなよ」

「はい」

二人は揃って、消えてしまったコピーマダラが居た場所を見つめた。



ガツシヤアア——ン……

「もう！下僕失格の誰かさんのせいで酷い目に遭ったよ！」

「ごめんなさい……」

マダラによって救出されたゼツが、六花の左肩で飛び跳ねながら文句を言った。

二人の目の前では、マダラが山賊から奪い取って来た魔鏡を結界の中で粉々に破壊している最中である。

——十五分ほど前——

「……あの。でもどうやってコピーを消したのですか？」

「なんて事は無い。この魔鏡は両面鏡になっていて、片方は複製を生み出すが、もう反対側の鏡の光で照らせば複製は簡単に消える」

「ではなぜ、コピーはマダラさまに魔鏡を取りに行かせるよう仕向けたのでしょうか？消されてしまう可能性があったのに」

「アイツが二十四時間で消えると言っていたのは本当だ。最初は半分死を覚悟していた

ようだが、もう半分は時間稼ぎをしてでももう一度俺とやり合って、いや、お前を味方につけて俺に勝つ事に賭けていたんだろうな」

その言葉に、六花は顔がカツと熱くなり、反対に身体は氷のように冷たく固まった。しかし、なんとか横眼で恐る恐るマダラの横顔を見上げた。

「い、いつから…アジトに戻って来ていらつしやつたの…ですか?」

「尋問の途中あたりだったか…。お前が森でアイツに近づいた時に瞳術をかけられていたから、アイツがどう出るか泳がせてみたのだ」

「そ、そんな…」

・・・どうして助けてくれなかったの!!・・・

六花は思わず口をへの字にして、恨めしそうにマダラをジトツと見つめてしまった。

すると、その視線に気づいたマダラが六花のほうへ顔を向け、言う。

「ま、今回は相手が俺だったからな」

「?」

「フフフツ」

「??・・・!!!マ、マダラさま…つたら…」

きつとその場面を思い出しているだろう、ニヤニヤと笑うマダラの顔を見ると、六花は顔を両手で覆ってうな垂れた。

コピーマダラとマダラは全く同じと思いきや、実はコピーのほうが心優しいのではなからうかと六花は思った。

「腹減った。魔鏡を壊した後、すぐ飯にしろ」

「マダラさまの分はもうありませーん！」

「はあああ!?!」

おしまい

【六花の森番外編】 大海の木ノ葉（一）

扉間は酒を注いだ猪口を仏壇に供え、数珠をもって手を合わせて暫く眼を閉じた。

「まったく。最強の忍が病でぼっくり早死になんて、笑えんぞ……」

再び目を開けると、目新しい位牌に向かって苦笑いしながら、そう呟いた。

位牌を見つめていると、今にもガハハハという馬鹿笑いが聞こえてきそうだった。

その位牌の隣りには、時を経た位牌が他に四つある。

扉間はそれらすべての位牌を見ていると、まるで大海へ舞い降りた木の葉のように、為すすべ無く漂う孤独に胸の奥がきつく締め付けられ、思わず下を向いた。

……せめて、芙蓉が傍に居てくれたなら……

いつもの思考に回路が回りそうになり、扉間は急いでその思考を止め立ち上がり、縁側越しの庭を眺めた。

石の庭園の隅には黄色い鼓草（Ⅱたんぽぽ）が寄り添うように咲いており、どこからともなくやってきた初蝶がひらひらと、扉間の眼の間を横切つて行った。

桜はもう、散っている。

「気持ちは解るが、その……あまり考え過ぎないように……。また来る」

扉間は居間に居るミトに向かって、ミトの顔を見ずにそう言った。

「ええ。大丈夫ですわ。次女の出産も近いですし、孫の世話もありますから、落込んでばかりいられませんもの。それより、もうお帰りですか？四十九日についてご相談したかったのですけれど」

ミトは気丈に明るく振舞い、笑顔で扉間に問うた。

「すまんが姉上に任せる。ワシは明日から任務で風の国へ行かねばならんだ」

「…そうですか。どうぞお気をつけて」

すると、廊下から小さな足音がこちらに向かってくる音が聞こえた。その足音はあつという間に角を曲がり、一直線に扉間へと駆け寄って来て、そのまま扉間の腰に抱き着いた。

「大おじ様、もうお帰りなの？もつと綱と一緒に居てよ！」

「綱手…すまん。ワシはこれから大切な任務があるのだ。おじい様から受け継いだ大切な任務だ」

扉間は申し訳無きような笑顔で、綱手の頭を優しく撫でながら言った。綱手はそれを感じ終わると、黙って扉間の腰に顔を埋めた。しかし、直ぐに顔を上げる。

「わたしもおじい様と一緒に、大おじ様のご無事をお祈りしてるから…早く帰って来てね」

「ああ勿論だ。綱も、おばあ様のこと、しつかり頼むぞ」
「はいー！」

それから綱手とミトは玄関まで見送ってくれた。

二人の笑顔が痛々しかったが、この玄関の扉を閉めたなら、自分の悲しみと共に、二人の顔も忘れなければならぬと覚悟を決めた。



「六花」

「わあっ！」

「いやビツクリし過ぎだし。緊張してるの？」

「う、うん…ちよつとね」

「気楽にいこうよ。さ、マダラの所へ行こう」

「そうね…」

六花はもう一度、忘れ物が無いか荷物を確かめた。そして部屋の中をぐるりと一周見回すと、はあーつと大きく息を吐き、両頬をパンパンと軽くたたいた後、出て行った。

「まあ、どこの里も尾獣を利用してはいるから、尾獣兵器など今更な気もするが、いずれ九体すべての尾獣を集める為にも現状は常に把握しておかねばならぬ。今回は潜入捜査だ。気を抜くなよ、六花」

「はい。マダラさま」

「ゼツ、何かあれば直ぐに分身をよこせ。いいな」

「うん。分かった」

跪き、マダラの顔を見上げる六花の顔を、マダラは黙ってじつと見つめた。六花も何度か瞬きしつつも、眼を逸らすことなく、マダラの眼を見つめている。

マダラの瞳の色は真つ黒で、特に何の感情も読み取れない。平常心の様である。しかしその無色の瞳は、六花にとって無言のプレッシャーにも感じられた。

「行け」

「はい」

六花はマダラから視線を外して深く頭を下げた後、素早く立ち上がり部屋を出て行った。

「いらつしやいませー！」

六花はその客の顔をみるなり、目尻を下げて大きな声で挨拶をした。

「あらあら「ユエ」ちゃんつたら今日一番の笑顔ね」

カウンターの途中で煮物を皿に盛りつけている、この店の女将が六花の反応を見て、くすくすと笑いながら言った。するとその客は、照れくさそうに頭を掻きながら笑いを堪

えるような難しい顔をして俯いた。

ここは砂隠れの里の中心街の狭い路地に在る小さな小料理屋。

そして時は閉店五分前で、店内にはもう客は居ない。居るのは和服が似合う四十路過ぎの美人女将、そして同じく和服姿がぎこちない六花が二人で後片付けと、その客用の料理を準備している所だった。

「沙門様、お酒と先附の準備は出来てますよ。どうぞお席へ。女将さん、私、暖簾外して来ますね」

「ええ、お願い」

六花は笑顔で玄関の外へ出て行った。

「今日は少しお早いですわね。フフ」

女将は、カウンターから見える小上がり席の上がりの席に上がろうとしている沙門に向かってそう言うと、沙門は軽く咳払いをし、座布団の上にドシンと腰を下ろすとそれに答える。

「たまたま…早く着いただけだ」

「フフフ。そうですか」

ガラガラ、ピシヤ。

「あら、お二人で何を楽しそうに話してたんですか？」

「沙門様がね、ユエちゃんの顔が見たくて急いで仕事を終わらせて来たんですって」

「おい……そ、そんなこと言っていないだろ……」

「あらく違うんですの？ユエちゃんは一昨日沙門様が帰られてからずっと、今日を『ただか、まだか』って言ってたんですのよ。ねえ、ユエちゃん？」

「はい。一日置きにお見えになられるって解ってはいても、やはり待ち遠しいですもの」
六花は暖簾を店の隅に仕舞いながら、照れることなくさらりと答えた。

一方、徳利を持つ沙門の手はほんの僅か震えている。それを見て六花は急いで沙門の席へ行き、沙門の隣りにしゃがむと、その手から徳利を取り上げて微笑んだ。

「待って。私がお注ぎしますから……」

「……ほぼ……毎日会っているじゃないか……昼の仕出しを持って来て貰っている時に……それに、どうせ他の客にも同じことを言っているんだろ……」

沙門はボソリボソリと呟くように言うのと左手で猪口を持った。六花は頬を膨らますと、沙門の顔と猪口の中、両方を覗き込みながら黙ってゆっくりと酒を注ぐ。

「ゴ、ゴホン。そんな顔を、するな……仕方ないだろう。昼間は勤務中なんだ」

沙門はそう言うのと俯き気味に猪口の酒を飲み干した。すると六花はずいっと沙門に身体を寄せると、パツと顔を明るくし、沙門の顔を覗き込んだ。

「なら、お店の外でも会って戴けませんか？」

その言葉に驚き、沙門は思わず身体をのけ反らし、眼を見開いて六花を見た。

六花はニコニコして沙門の答えを待っている。その顔は少し悪戯っぽくも見えるものの、混じり気の無い純粋な六花の性格を映している様でもあり、冗談とも本気とも取れる。

しかし実は沙門も、同じことをいつ六花に言い出そうかと迷っていた所であり、六花から先にそれを言われた事は嬉しくもあり、男として奥手な自分が恥ずかしくもあつた。沙門は黙つて空の猪口に眼を落とす。

「ごめんなさい。困らせてしまつて…」

「会おう…外でも会おう。いつ会う？」

「え？あ、はい！ありがとうございます！えっと、じゃあ沙門様の次のお休みではどうですか？」

しかし、二代目風影である沙門は忙しく、特に今は特別な状況で休みなど取っている暇は無い。

「…逆に、お前の休みはいつなんだ？」

「私の休みは…沙門様がお店に来ない日です！」

「…だ、だから、それはいつなんだ？」

「次のお休みは明後日です」

「では明後日の夜、六時にこの店の前で待ち合わせよう。どうだ？」

「はいっ！わあく！とつても楽しみです！ありがとうございます！」

明らかに上機嫌になつてゐる六花は再び沙門の猪口へと徳利を近づけ、花が咲いた様な笑顔で沙門と猪口を交互に見ながら酒を注ぎ始めた。また沙門も自然と頬が上がり微笑んでいた。そして心の中で、初めて意中の女から約束を取り付けられたことに胸を撫で下ろしていた。同時に、六花の俯いた時の長いまつ毛がこれまで以上に妖艶に想え、色々な事を想像させていた。

「はあー疲れた」

「疲れたつて、ゼツは何もしてないじゃない」

部屋の電気をつけ、鞆を畳の上に置きながら、六花は呆れた顔でその鞆の中から顔を覗かせているゼツを見た。そして鞆が床に着くと同時にゼツは鞆から飛び出し、六花の左肩に載つた。

「疲れるに決まつてるじゃん。長いよ外で会うことになるまでさ。一ヶ月もかかつてんじゃん。もうこれ以上は仲良くなれないかもつて僕諦めかけてたし」

「ああいうタイプは強引に誘つても怪しまれるだけなの。焦りは禁物よ」

「面倒くさいよね。自分のルックスに自信が無くて女経験たぶんゼロな上にこじらせて女不審になちやつてるタイプ。しかもオッサン」

「いいじゃない。自信過剰で慢心しているひとよりは…」

「それマダラのこと？あーあマダラなら速攻ベッドインなのにな」

「何言ってるの?!…そ、そんな事無いわよ!」

「まあその分マダラは口は堅いだろうけどね。あはは」

「沙門も風影よ、口は堅いわ。でも、ああいう堅物で真面目で奥手で、仕事一筋みたいなタイプは墮としてしまえば全てこっちのモノになる。それまでは慎重に行かなきゃ」

「モテない男って一言で言えば?」

「兎に角!まだ気は抜けないわ」

六花はそう言うとう上着を脱ぎ、左肩のゼツは振り落とされた。六花はそれを無視して着物の帯を解き始める。肌襦袢の紐を解こうとした時、畳に転がるゼツが六花を見上げて問う。

「ねえホントにするの?」

六花の手が止まった。しかしゼツの方は見ず黙っている。

「マダラも酷いよね。ってまあ下僕って本来そういうものだけだ」

それでも六花は何も言わず、再び紐を解き始めた。そして裸になると浴室へ向かった。

「ちよつと。まだ風呂入れてないじゃん」

「ジャワーで済ます」

「えー僕風呂に漬かりたいよ」

ゼツが遅れて浴室に飛び込むと、六花は勢いよく扉を閉めた。



気が付くと一昨日の夜と同じく、汁物の椀に口をつけ目を伏せているユエ（＝六花）の長いまつ毛を見つめていた。しかしその光景は一昨日とは違う。日頃店で見えるユエの振る舞いや所作も美しいのだが、食事をしている姿は惚れ惚れするほど美しかった。そして沙門の中では、今のユエは仲居ではなく、たったひとりの女だった。

すると沙門の視線に気づいたのか、六花が顔を上げた。

「女将さんの料理も美味しいけれど、このお店のお料理も本当にとても美味しかったです。ありがとうございました」

「…まだ、水菓子も出て来る」

「あら。そうなんですか？どれどれ…わあメロンだね。大好きです！」

品書きを握り締め、六花は嬉しそうに首をかしげて見せた。

「そうだ…その…この前、お前が作ってくれた卵焼きも、美味かった。その…料理は得意なのか？」

沙門は六花から視線を逸らすと、唐突に言い忘れていた事を言った。

「そうですね。得意な、ほうかなあ。ふふ。沙門様に褒めて頂けてとっても嬉しい！」
「その…他の客にも作つてやるのか？」

コンコンコン。

「失礼致します。風影様、そろそろ水菓子をお持ちしても宜しいでしょうか」

「ああ。頼む」

扉の向こうからこの店の女将の声が聞こえ、沙門は返事をした。そしてすまなそうに六花の顔を見て言う。

「すまないな。急がせて」

「いいえ。わざわざお仕事を中断して会つて戴けたんですもの。本当に嬉しかったです。ありがとうございます。でも、こんな事を言つては怒られてしまいそうですけど、そう言えば沙門様は二代目風影様なんですよ。いつも沙門様つてお名前と呼ばせて頂いているし、お昼にお役所にお伺いしても殆ど風影室にはいらつしやらないから忘れておりました。申し訳ありません」

六花は少し眉を寄せて申し訳なさそうに微笑んで見せた。

「いや、謝る必要は無い。そのほうが…助かる。いや、う、嬉しい…」

「あの…近々またお会いして戴けますか？今度は私が沙門様をおもてなししたいし」

「おもてなし」その言葉に、六花の煌びやかな料亭の背景が、見た事の無い六花の家

の壁に変わった気がした。思わず言葉に詰まる。

「ゆ、ユエ……」

コンコンコン。ガラッ。

「水菓子とお茶をお持ちしました」

「……」

沙門は言いかけた言葉をいったん飲み込み、龍の刺青の入ったスキンヘッドをぼりぼりと搔いていた。六花は大きく目を見開き、口元だけで笑顔を作り、目の前に並べられる水菓子と茶と茶菓子を見つめる振りをしながら沙門の顔をチラチラと窺っていた。

「お料理は以上です。風影様、お忙しくていらっしやるご様子ですが、お身体にはくれぐれもお気を付け下さいませ。またのお越しをお待ちしております」

女将は正座をして深々と頭を下げると、静かに部屋を出て行った。六花と沙門、ふたりは何も言わずに水菓子を見つめる。六花は沙門の言葉を待ち、沙門は言葉を探している。

「ユエ……」

「はい」

「……た、食べようか」

「はい」

六花は沙門が水菓子に手をつけるのを確認すると自分も食べ始めた。

沙門は堅い表情で黙々と食べている。六花から口火を切っても良いのだが、ここは沙門からの言葉を待つべきだと思っていた。

遂に六花が全て水菓子を平らげ、フオークをそつと皿に置いた瞬間だった。

「ユエ」

「はい」

「その…」

「はい？」

沙門は胡坐を組んでいた足を急いで正座に変えると、六花をジツと強い眼で見つめた。

「俺と…結婚前提に交際してほしい」

「…でも…私は家族もいないし、家柄も悪いし…その…やっぱり…」

「そんなことは関係無い。お前が…ユエがいいんだ。好き…なんだ」

「沙門…さま…本当に？本当に私でいいの？」

「ああ」

「ありがとうございます…嬉しい！」

「お、おい！泣くことはないだろ…」

背の高い沙門は急いで手を伸ばし、向かい合つて座つて居る六花の頭を撫でた。

「お忙しいのに送つて頂きありがとうございます。今日も午前様なのですか？」

六花の住む（借りている）築六十年ほどの風化が見える石造・三階建ての長屋を見上げて、六花が言った。

「あ、ああ。もう直ぐ木ノ葉の火影との会談があるからな。それに早く進めたい案件もある」

「あの…一つお願いがあるのですが、聞いて頂けますか？」

「なんだ？」

「今日は二十三時五十九分までにお役所を出て下さい。お願いします」

「…。そう、だな。分かった。今日くらいは早く帰るとしようか」

「ふふっ。絶対よ？」

六花は沙門の大きな右手を取つて両手で握り締めると、悪戯っぽく上目遣いで睨んで見せた。

「ああ。ユエも、ゆつくり休むんだぞ」

「はい」

六花は沙門の手をゆつくり離すと、長屋の玄関へと向かつて行つた。そして玄関の前で振り返ると、沙門に向かつて手を振る。沙門も軽く手を挙げ、六花が階段を上つて行

くのを確認するとその場を後にした。

ガチャン。

「お疲れーやったね六花。とりあえず今夜はもうお菓子でも食べてのんびりしよう」

六花が部屋の玄関のドアを閉めると、ゼツが鞆の隙間から顔を出して声をあげた。

「まだよ」

「は？求婚引き出したんだしもういいじゃん」

「木ノ葉の火影が来る前になんとか情報を聞き出したいわ」

「焦りは禁物だつて自分で言つてたじゃん」

「会談で沙門の考えや砂隠れの里の方針が変わる前に全体像を掴んでおきたいの。会談で何か変化があつてからでは情報が錯綜する」

「情報は僕が潜入して結構な量集めたし六花は沙門から核心を聞き出して一尾兵器を阻止すればそれでいいんだしき。ねえお菓子食べようよ。自分はメロン食べたんだろっけど僕まだ何も食べて無いんだからね」

「その核心を今日聞き出せそうなきがしてるの。今日の沙門の様子なら、いけそうなきがする…。ゼツはここで待つて居てもいいわよ」

「うーん…あーもう仕方ないな！分かったよ。確かに僕も一日でも早くアジトに帰りたしいしね」

「早く帰らないと和菓子屋の草餅の販売が終わっちゃうからでしょ？ふふっ。私も早く帰りたい。でも焦っているわけでは無いわ。深追いはしないから安心して」

そう言うのと六花はスカートのポケットから先ほどの店で出された茶菓子の最中を取り出してゼツに見せた。

「沙門さまー！」

役所の玄関で部下と別れ、隣接する高層住宅の頂上に在る風影宅へと向かおうと歩き始めた沙門へと六花が駆け寄って行った。

「ユエー！どうしたんだ!!こんな時間に…女ひとりで危ないだらー！」

「約束…守って下さったんですね。嬉しい…」

「あ、ああ…。いや、だが、どうしてここに？何かあったのか」

「不安で…怖くて…居てもたつても居られなかったの…。今夜、沙門様が言ってくれた言葉は幻だったんじゃないかって…」

「幻なんかじゃない。俺は本気だ。兎に角、もう遅い。家まで送ろう」

「私、小さい頃に両親を亡くして天涯孤独になって以来、怖いんです。大切な人が出来ても、また私の前から居なくなってしまうんじゃないかって…お願い。今夜だけで良いの。お傍に居させてくれませんか？」

沙門は六花の思いもよらない言葉に驚き、固まった。一晚共に過ごす…いや、だが流石にそれは…。

「心配は要らない。俺はお前の前から居なくなったりしない。だから、今日は家に帰るんだ」

俯いていた六花はゆっくりと顔を上げた。そして、沙門の顔を見つめる。その顔は街灯に照らされ、潤んだ琥珀色の瞳は光を吸い込み黄金に輝いて揺れており、そのまつ毛の先は濡れている。

「…お願い…」

「…わ、分かった。分かったら泣くな！…少し、ただだぞ。落ち着いたら送って行くからな」

「はい…」

沙門は押しつぶした様な溜息を吐くと、少し俯き気味に風影邸に向かって歩き出した。六花は嘘泣きの涙をサツと拭うと、その後ろを着いて行く。

「随分片付いていらっしやるんですね」

六花は台所に立ち、水を入れたやかんを火にかけると、沙門の方へ振り返って言った。「二日にいっぺんは家政婦が家事をしに来てくれている。それに…ここは、寝に帰っていいだけのようなものだしな…」

六花は改めて部屋の中を見回した。二十畳はあろうかという広々とした居間には大きなソファがふたつ向かい合って置いてあり、その間には大きなローテーブルが在る。カーテンが半分開いている大きなガラス窓からは砂隠れの里の夜景が見えている。壁際には仕事机と革張りの椅子が在り、沙門はそこに座って書類をめくっている。六花が立っている居間と繋がった台所も広々として最新の器具が揃えられており、照明も明るい。

「もしかして、このソファで寝られているんですか？」

「まさか。流石にベッドで寝ている。ここは六部屋もあるんだが使っているのは居間と寝室くらいだし、正直こんな広い家である必要は無いけどな……」

沙門はそう言いながら、先ほど見たユエ（六花）の住む家を思い出していった。あんなところに一人で住むくらいなら、ここに住んではどうだ……そう思ったが、それを口に出す勇氣は無かった。それでも、不安な想いをしている今のユエにはそれを提言してやる事が一番の安心材料だと解っていた為、なんとか口に出そうと表現方法を考えていた。

「お茶も一通り揃っていて素晴らしいですね。これも家政婦さんが？」

気が付くと六花が隣に立っており、沙門は必要以上に驚いてしまった。六花はその様子を不思議そうに見ながら机の上にほうじ茶を置いた。

「私にも何かお手伝いできることがあれば、何でも言ってお下さいね」

そう言うと、六花は椅子に座る沙門の後ろに回って肩を揉み始めた。固く大きな筋肉で覆われた肩を揉むことなどほぼ無理であるのだが、六花はなんとか力を入れて揉んでいる。

「…ユエ」

「はい？」

「…」

バツ。

「沙門…さま」

「愛している」

「私も、愛しています」

沙門の胸に抱き締められても目を閉じず、六花は真顔だった。そして数十秒ほどの抱擁と沈黙の後、沙門は六花から身体を離れた。かと思うと、黙って六花を抱きかかえて立ち上がった。

「…その…嫌なら別に…」

「私を、沙門様のものにしてください」

抱きかかえられたまま長い廊下を通って、その部屋の前に着いた。その間、そして今も尚、沙門の手は震えている。だが六花の胸の鼓動もまた急速に高鳴っており、その鼓

動は体中に響いている為、沙門の手の震えには気づけないでいた。

灯りを点けぬまま暗い部屋に入り、数歩歩いた所で六花の身体はふわりとその上に沈み込んだ。

パチ。

沙門が枕元の小さな灯りを点けると、闇から互いの顔が黄色く照らし出された。

「ユエ……き、綺麗だ」

六花は何も言わずにニツコリとして見せた。沙門もぎこちない笑顔を返すと唾を飲み下し、上着を脱ぎ始めた。それを見ながら、六花の頭には一カ月前、マダラから言われた命令が蘇っていた。

「相手は風影だ。写輪眼を使わない軽度の幻術は効かんだろう。だが写輪眼を使おうにも相手を操るだけの大掛かりな幻術をかけるには、その僅かな時間に返り討ちに遭うリスクもある」

「ではどうしたら……?」

「お前が使えるのは忍術だけではないだろうか?」

「?」

「相手の心を掌握しろ。そして必要があれば、抱かれる」

「…ユエ? ユエ? 本当に大丈夫か?」

「は、はい。見惚れていて…つい」

六花は僅かに震える指先で裸の沙門の分厚い胸板を撫でた。沙門はその手をぎゅつと握り締めると、六花に口づけをした。

そして唇が離れると、沙門は六花の上着のボタンを外し始めた。すると、六花の身体の全身の血が冷たくなり、激しく昂っていた鼓動もスツと静まった。逃げだしてしまいたいほど恐ろしく、そして悲しいのに…。

やがて下着まで外され、六花の白い胸が露になった。沙門はそれを見て眼を泳がせていたが、いったん眼を閉じると六花の首に顔を埋め、震える唇を首筋に這わせた。

〔IMG51818〕

「んっ」

沙門はその声に顔を上げ、再び正面から六花の顔を見つめた。

静まっていた筈の鼓動が再び高鳴り、六花の胸は大きく上下している。しかし、六花の頭の中は冷静だった。

六花は沙門の両頬を掌で包むと、遠くを見つめる眼で沙門の瞳の中を見た。そしてそのまま沙門の顔を引き寄せ、ゆっくり、口づけをした。

・・・全ての情報を私に渡して！お願い：お願い：お願い誰か…助けて！！

六花は目を開けた。

天井が見える。

しかしその色は黄色ではなく、白んでいた。

すると左半身の感触に気が付き、ゆっくりとそちらに顔を向けた。

「……？」

そこには、沙門がベッドにうつ伏せ、寝息を立てて眠っていた。

「終わった……の？……」

「眼が覚めた？」

「！」

「何ぼうつとしてんのさ。凄いじゃん六花！」

床から六花の右肩に登って来たゼツが小さな声で言った。

「……ゼツ……す……凄いつて？」

「幻術。成功したんでしょ？でも同時に六花まで気を失っちゃったから焦ったよ。六花の上にコイツの身体が載ったまんまだったし。僕が居なかったら圧死してたよ」

「幻術？私、幻術なんて使ってない！写輪眼だつて使ってないし」

「確かに正確には幻術とは違うけど。まあ六花にしか使えない特別な能力だよ。これでコイツは目が覚めれば六花としたと思って上機嫌で情報ベラベラ喋るんじゃない？今回喋んなくても毎回この力を使えばそのうち喋るさ」

「私しか使えない能力？なに、それ…」

「あ、コイツもう直ぐ目を覚ますよ。頑張ってね」

「えっ…」

「…。んん…ん。すまない。すっかり寝てしまっていた」

「大丈夫です。私もさつきまで眠っていましたし…」

「…でも、私とした記憶なんてあるわけないのに、喋るわけが無い。一体どうすればいいの?!…」

「その…えつと…痛みは、大丈夫か？最初かなり痛がっていたが」

「えっ？え、ええ。問題ありません。大丈夫です…」

「ああユエ…もうお前を離したくない」

沙門は胸に六花を抱き寄せた。

「…どういふ事なんだろう？でもこの状況なら情報を何か聴き出せるかもしれない
い…」

「明日からここに引越して来い。そして直ぐにでも籍を入れよう」

「で、でも、沙門様は今とてもお忙しいのでは？明後日には木ノ葉との会談もあるんで
しょう？それが終わってからでも…」

「なに、会談なんて大した事じゃない。あれはただの茶番だ。奴らが心配しているのは

我々の尾獣兵器開発による軍事拡大。あくまでそれは防衛策だと言ひ、これ以上の拡大はしないと約束だけしてやる」

「お言葉ですけど、これまで軍師だった切れ者の初代火影の弟が二代目火影になってから、木ノ葉もかなり強硬な政策や軍事策を打ち出しているようです。表面的な譲歩で本当に納得するでしょうか？」

「俺のことが信用できないか？…」

「い、いえ！そんな事はありません。出過ぎたことを申しました…」

「フフ。構わん。俺の妻になるんだ。それくらい口が立たなければな。あちらが納得しようがすまいが、それは問題じゃない。確かに、譲歩するように見せかけてこの先も尾獣兵器開発を進めるのは事実だ。だが、我々の本当の目的はそれじゃない」

「なんなのですか？…」

すると、沙門はこれまで見せない不敵な笑顔を見せた。そして六花に顔を近づけると小声で言う。

「傀儡兵器だ」

「くぐつ…へいきっ…」

「そうだ。人と同じように動き、戦う傀儡を戦の主戦力として使うんだ。これからの戦は生身の人間が先頭に立って戦うのではなく、兵器を利用した少数精鋭で戦う時代だ。」

ただ尾獣兵器は大きな戦には良いが、目立ちすぎるし保持するリスクも大きい。迅速かつ隠密に敵を殺すには傀儡のほうが勝っているだろう」

「素晴らしいですね…傀儡兵器が完成すれば、この里で、私の様に大切な人を亡くして悲しむ人も少なくなるかもしれませんね」

「ああ、そうだ。ただ今は傀儡兵器についてはごく一部の上忍しか知らない極秘情報だ。くれぐれも口外しないように気を付けるんだぞ」

「はい。私、木ノ葉の忍に捕まって拷問されても決して喋りませんわ!」

「ははは。そんな事、俺がさせるものか。…ユエ…」

「だ、だめです。もう日が昇っていますしっ…」

「時間はまだある」

カラン、カラン、カラン。カラン、カラン、カラン。

突然、玄関の鐘が鳴った。

「何事だ!」

沙門は飛び起き、急いでズボンを履くと玄関へと走って行った。それを見て、六花も急いでベッドから出ると服を着始めた。すると、足元からゼツが現れた。

「鐘を鳴らしたの僕だよ。続けて二回も力を使うのは止めときな」

「う、うん。ありがとう」

六花は全ての服を着終わると、急いで台所へ向かった。そして食器棚からコップを二つ取り出し、水を注いでいると沙門が台所に飛び込んできた。

「大丈夫ですか？ 取敢えずお水を…」

「いや、それが誰も居ないんだ。チャクラを感知してみたが感じない。誰かの悪戯か…」
「こんな早朝に？ けしからん人もいるものですね！」

「ただの悪戯ならいいんだが…木ノ葉との会談も近い。警戒するでしょう。お前も今日はここに居ろ。後で家政婦を連れて来るから何かあれば頼むといい」

「あ、は、はい…」

「心配要らない。出勤までは俺もここに一緒に居る。それまで…」

「じゃあ私、朝食を作りますわ！ 冷蔵庫に色々あったので、それで」

「…。あ、ああ。じゃあ、頼む」

「あー眠い。疲れた」

「ねえ、睡眠なんて必要ない身体のくせに眠たいとか疲れたとか言わないでくれる？」

「六花の気持ちに代弁してあげただけだよ」

「そんな事はいいいから、ちゃんと説明して」

午前九時。

六花は沙門の言葉を無視し、家政婦には仕事があると云って借家に帰ってきた。

部屋に入ると畳の上に座り、左肩に載るゼツを下ろして卓袱台の上に載せた。

「怖い顔しないでよ。なんか僕が悪い事してるみたいじゃん」

「どうして私自身が知らない私の能力についてゼツが知っているの？それに、知っているならどうして教えてくれなかったの？」

「マダラから口止めされていたのさ。口止めしていた理由は僕も知らない」

ゼツは嘘をついている。

「芙蓉」の時に一度死にかけて六花は、カグヤから力を託されていたゼツによって助けられ、失っていたチャクラを取り戻し、マダラの手によって忍に成長した。

しかしマダラ本人はゼツの本当の意味も目的も、六花が本当は何者なのかも知らない。

そして、六花自身も今は未だ芙蓉の時の記憶を失ったままであり、己が橘一族であり、人と性的に接触して操ることが出来る能力を有していることを知らない。

「さつき説明したように君の『写輪眼の能力』は性的に接触しながら相手に心で命令すれば相手を操れるってものなんだよ」

「……。マダラさまはもしかして、私がこの能力に気付かないように隠していたのかな

……」

「そうかもね。君がこの力をマダラに使わないとも限らないし」

「つ、使わないわ・・・使う、理由が無いもん・・・」

「本当に？ “私の下僕になれ”とか “私を自由にしろ”とか色々あるんじゃない？ま、あんまり無理な命令したら失明しちゃうけど」

「私はマダラさまに命を助けられた：マダラさまは命の恩人：そして、私の絶対的な主（あるじ）よ」

「あつそ。でもマダラには能力に気付いたことは黙つてた方がいいよ」

「え？でも・・・それにあなたはマダラさまの分身でしょ？どうして私に味方するような事を言うの？」

「六花が大好きだから」

「えっ」

「冗談。この借りは草餅五十個で許してあげる。さあ早くお風呂に入ってから寝よう。起きたら明後日の木ノ葉との会談中にする傀儡兵器の調査について打ち合わせしよう」

「う、うん：分かった」



「二代目様。今回の護衛はヒルゼン、ダンゾウ、ホムラ、私の四名だけということですが、本当によろしいのですか？中忍を何人か連れて行ったほうがよろしいのでは？今から

でも間に合います」

出発前のミーティングが始まり、コハルが真つ先に扉間に向かって質問した。

「会談とはいえ、他里には通しておらん非公式の話し合いだ。護衛を余り多く連れて行けば他里に不信を抱かれ、砂隠れ側にも憶測を与えかねん。それに向こうとて、軍事を拡大しているとはいえ、火影に危害を加えて五里間の均衡を一気に崩すことはせぬだろうしな」

「しかし…」

「コハル、お前の気持ちも解るが二代目様のご意見を優先させよう。それに、オレたち自身の手をもつと信じようぜ」

渋い顔をしているコハルの左隣りに座つて居たヒルゼンがコハルの肩に手を置いて「そう言うのと、二人の両端に座るホムラとダンゾウも領いた。だがコハルはまだ納得がいかない様である。」

「せめてカガミを連れて行けませんでしょうか。カガミの写輪眼は役に立ちますし、二代目様に鍛えられた感知能力もずば抜けています。今は警務部門の長とはいえ実務派は下の者に任せられるでしょうし」

懸命な様子のコハルを見て、扉間は少しだけ微笑んだ。

コハルの言っていることは正しい。

しかし扉間にカガミを連れて行く気は皆無だった。

芙蓉がカガミの手によってこの世を去ってから十年後、扉間は二代目火影に就任した。

それと同時に、扉間がかねてより考えていた、うちは一族への締め出しとも言える政策が始まった。それは里の罪人を取締る警務部門の設立と、その任をうちは一族に一任し、同時に里の外れへと集団で移住させるというものだった。そして、芙蓉を殺した罪に苛まれている「罪人」のカガミには、自身が他の罪人を取締るという役を与えたのだった。

だが、カガミを今回の護衛に入れないのはそれが理由ではない。

長らく続いた平和の中、市民が平和を享受して経済や文化が盛り上がっている一方、大戦が無い事により忍の収入源は減り、忍を辞めて一般市民になる者が続出し、火の国の戦力を担う木ノ葉の存続も危ぶまれるようになっていた。

また、それだけにとどまらず、犯罪行為に手を出す忍も現れ、抜け忍になる者も増加していた。その様な状況の中、里の罪人、とりわけ忍を取締る警務部門の重要性は増している。先日も忍による豪商襲撃事件が起こったばかりであり、指名手配犯の搜索が懸命に行われている所だ。そのため、カガミには里で警備・警務の指揮を執り、里の安全と秩序を守ってもらう必要があった。

「全ての事に万全の準備と全力で当たる姿勢は貴様の最大の長所だな、コハル。だが今回はお前達四人で行く。では、ミーティングを始める」

扉間はコハルの話をそこで止め、ミーティングを開始した。

会談での議題の確認や対応のまとめ、そして砂隠れの里までの道の確認、扉間が不在の木ノ葉の里の管理などを話し合い、四十分ほどのミーティングを終えた。

そして、部下の四人が出て行った部屋で扉間はひとり、窓の外を眺めていた。

窓の外には、桜の花のガクがこびり付いた葉桜が見える。

「今年も、散ってしまったか…」

扉間は服の中から首にかけている鎖を取り出した。そして、その鎖に通されている白金の指輪を見つめた。すると、指輪に上半分映っている自分の顔が、芙蓉の顔に見えた気がして思わず眩暈がした。



砂隠れの里に入り、繁華街と通り抜け、残り一キロほどで風影が待つ砂隠れ本部だという所の住宅街を歩いている時だった。

「…?」

「二代目様、どうかされましたか!」

先頭にヒルゼンとホムラ、そして背後にコハルとダンゾウに挟まれて歩いていた扉間

が突然足を止めた。

「……いや、何でもない。見覚えのある人間を見かけたような気がしたが、気のせいだったようだ」

「砂隠れに知り合いがいるんですか？」

ヒルゼンが驚いて扉間に訊ねた。他の三人は警戒し、辺りを見回している。

「問題無い。先に進むぞ」

扉間が再び歩き出すと、四人も急いで隊列を組み直して歩き出した。

六花は、先ほどすれ違った五人の隊列に振り返った。

額当てはしていなかったものの、あれは忍だった。わざわざ額当てを外し普段着で一

般人を装っているという事は、もしや…。

「六花どうしたの?」

「見て。あの五人組。あれって木ノ葉の忍?もしかして火影じゃないかな」

「どれ? 鞆の中からじゃや人が邪魔でよく分かんないよ」

「縦一列になっていて、真ん中に背の高い銀髪の男が居るでしょ? あのひとたちは砂の忍じゃないわ」

「そうだね。でも火影じゃないと思うよ。火影はもつと年取ってるはずだもん。あんな若くないよ。第一もし火影だとしても六花には関係無いでしょ」

「そう…ね。他の里の忍かもしれないしね」

「ほら早く沙門の家に行こう。アイツが帰って来る前に家を検索しなきゃ」

「うん…」

六花は不思議とその銀髪の男が無性に気になった。初めて会った気がしないとは、こういう感覚なのだと思っていた。しかし、六花はその理由を考え込むことは無く、直ぐに気持ちを切り替えて前を向いて歩き出した。今は尾獣兵器阻止任務と、新たに明らかになった傀儡兵器についての調査という任務に集中せねばならない。

ほどなくして六花は沙門が留守の風影邸に着いた。

時刻は午後四時半。

火影との会談が明日に迫り、沙門は今晚は早めに帰って来ると言っていたので出来ればもっと早く来たかったのだが、今日は家政婦が来る日で、彼女が家事を終えて帰るのは午後四時だった為、来られなかった。沙門が帰って来る前に、何とか傀儡兵器の開發研究所の場所が分かる物を探し当てなければならぬ。

ちなみに火影邸の鍵は一昨日、沙門から渡されている。沙門と一晚を共にしたあの日、六花は無断で自宅へ戻り、夕方には勤務先の割烹料理店に出勤した。すると沙門は仕事を途中で切り上げ、血相を変えて店にやって来た。その時、会談が終わるまでに必ず引越してくるようになると言われ、火影邸の合鍵を無理やり渡されたのだった。

六花は玄関の中に入ると床に目を遣り、家政婦が帰っていることを確認した。そして玄関扉の内鍵を閉めると、真つ直ぐ居間に入って行った。

そして広い居間を見回しながら、居間の壁に向かって置いてある仕事机まで歩いてゆく。部屋の中は特に昨日と変わっていない（昨日も沙門の命令で家に来たが搜索する隙は無かった）。そして机の前に立つと引出しに手を遣る。

「鍵がかかっている。当然ね……」

「そんな機密情報を家政婦や客も入る居間の机の中になんて入れてるかな」

「兎に角開けてみないと。でも何かトラップが仕掛けてあるかもしれない。写輪眼で見してみるわ」

六花は写輪眼を発動すると机を凝視した。

「どう?」

「……。チャクラの類は感じ無いわ。単なる鍵による施錠みたいね。きつと鍵は沙門本人が持つてるだろうね」

「だろうね。でも開錠術で開けたらチャクラの痕跡が残っちゃうし僕が鍵穴に入って開けてあげるよ」

「ありがとう。お願い」

ゼツは六花の左肩から机の前の椅子に飛び降りると、身体を糸状に伸ばし、鍵穴の中

へと入って行つた。六花は腰を屈めてその様子を窺っていた。

カチャ、カチャカチャ、カチャ……

「大丈夫？開きそう？」

「結構複雑だねこれ。身体ちぎれそうだよ。ま、ちぎれても問題無いんだけど」

「いいから早く！」

……カチャン。

遂に施錠された鍵が開いた。そしてゼツはスルリと鍵穴から抜け出し、元の球体に戻って再び六花の左肩に載つた。

「ふう……。ありがとうゼツ」

六花は胸を撫で下ろすと、ゆっくり引出しを引いてみた。

スススウ……

「¹⁹」

「空っぽだね」

「……。でもこの中に傀儡に関する何かあつたのは間違いないわね。出勤する時に持つて行つてるんだわ」

「じゃあ沙門が帰宅するまで待つしかないね」

「うん……。でも他の部屋に何かあるかもしれない。探してみよう」

それから六花は、この邸宅の六部屋全てを探してみた。しかし、やはり傀儡兵器に関するものは何も見つからなかった。

六花は再び居間に戻って来るとソファの上に腰かけ、大きなため息を吐いて頭を抱えた。すると六花が探せない部屋の隅々を搜索していた。ゼツも戻って来て六花の左肩に載る。

「絨毯の下とか天井の裏も探してみたけど特に何も無かったよ。もう時間が無いし今日には取敢えず沙門が帰って来るのを待つしかないね」

「そうね。今日も机の中のものを持って帰って来るだろうし。私が沙門の気を引いている間に、ゼツは沙門の鞆の中に入って確認してみて。文章ならそれを記憶してくれる？」

「分かった。でも沙門の鞆の中に何も無かったら厄介だよ。砂の役所の中に潜入しなきゃならないね。でもあの場所は五里の中でも一番セキユリティが高く危険な場所だし、六花ひとりじゃ無理かもね」

ガチャガチャ。ガチャン。

すると玄関の鍵と扉が開く音が聞こえ、六花は立ち上がると急いで玄関へ向かい、ゼツはソファの下に潜った。

「おかえりなさいませ」

「た、ただいま…何時ごろに来たんだ？」

「ついさつきです。お買物をしていたら遅くなつてしまつて…直ぐに夕飯の用意をしますね」

六花はそう言つて沙門の左手に握られた鞆を持つと手を伸ばした。

「…ああこれは自分で持つて行くから大丈夫だ。相当重いからな…ありがとう」

「いいえ…」

六花も先に居間に向かつて歩き出した沙門の後ろを着いて行つた。

そして居間に入ると、沙門は一直線に机に向かい、首にかけて服の中に入れていた鍵を取り出し引出しを開けた。六花はそれを台所から横目で見ていた。

…書類?…あの中に傀儡兵器の情報も?…

沙門は全ての書類を引き出しに入れ終わると再び施錠し、鍵を首にかけて服の中にし
まつた。

「今日の晩飯は何を作つてくれるんだ？」

「ひよこ豆のコロッケとバター焼き飯です。明日は木ノ葉との会談後には会食でしょう?
?なので普通の家庭料理が一番かなつて」

「ひよこ豆のコロッケか。昔ガキの頃、よく母親が作つてくれたもんだ。先に着替えてくる」

「はこ」

沙門が居間を出て行くと、ゼツが六花の足元に這い寄つて来た。

「あの書類の中に何かありそうじゃない？あとで六花がまたアイツに力を使つて眠らせたら見てみよう」

「…うん」

そう返事をするものの、一昨日、そして昨夜も使つた能力を三度使わなければならぬのかと思うと、いや、正確にはその能力を使うまでの過程を考えると六花の胸はズシリと重くなる。

すると早くも着替え終わつた沙門の足音が聞こえてきた。ゼツは急いで姿を消し、六花は再び料理を始めた。

沙門は居間を通り抜け台所に入ると、静かに六花の真後ろに立つた。

「…ええつと…その、今日は…一緒に風呂に入らないか？」

「えつ…は、はい」

六花ははにかんで答えたが、心の中で大きくうな垂れた。

夕食が終わると、沙門は机に向かつて仕事を始めた。しかし机の上に広げているのは、先ほど引出しに仕舞つた資料ではなく、どうやら明日の木ノ葉の里との会談についての資料の様である。六花は夕食中も沙門の話は上の空で聞きながら、時折、横目で机

の引き出しを見ていた。そして今も洗った皿を拭きながら沙門が引出しを開けないかと動きを窺っている。

「六花」

「は、はい！」

突然、沙門が六花へ振り返った。

「風呂を沸かしてくれ。もう仕事は終わりだ」

「分かりました……」

六花は手に持っていた皿を食器棚にしまうと、台所を出て風呂場へ向かった。

風呂場に着くと、六花のエプロンのポケットに入っていたゼツが僅かに顔を出した。

「お風呂は流石に力を使つてごまかせないね。どうすんの？入るの？」

「仕方ないけど……。なるべく時間を稼ぐから、その間にゼツがまたあの引き出しの中に入つて中身を見ておいて。沙門を眠らせたなら私も見るつもりだけど、念のために」

「ダブルチェック了解」

「サアア……パチパチパチパチ……」

今夜は風が強く、その風に乗つて来た砂漠の砂が窓を打った。

「ハア……やつと終わった」

六花は起き上がり、ベッドに腰かけるとガウンを羽織つて小さく溜息を吐いた。そし

て直ぐに立ち上がると寢室の出口へ向かった。静かに部屋を出ると、小走りで居間へ向かう。

「ゼツ…ゼツ…」

「居るよ」

真つ暗な居間に立つと、足元からゼツが左肩に這い上がって来た。

「どうだった!!」

「うん。やっぱり傀儡に関する資料だったね。沙門はぐつすりでしょ? 今なら六花も直接見れるんじゃない?」

「そうね…」

六花は机に走り寄り、ゆっくりと引出しを開けた。そして写輪眼を発動し、中に入っている数枚の紙の束を手に取り、表紙を捲ると目を凝らして読み始めた。

「こ、これは…!!」

つづく

【六花の森番外編】 大海の木ノ葉（二）

翌日。

この日は朝から空は晴れ渡り、会談が始まる午後一時には初夏を思わせるような暖かさだった。一方、いま、穏やかな笑顔で握手をする扉間と沙門の両者の内心はというと、実に冷やかなものだった。

砂隠れの里本部役所の最上階にある会議室。

入り口から入って左手の席には扉間とその部下四人が並んで座った。それに対して向かいの席に座った砂隠れの里側はといえば、沙門とその部下がたった二人だけであり、砂隠れの里の側がこの会談をいかに軽視しているかは一目瞭然であった。

「風影殿。今回は半ば強引に会談を開いて貰って礼を言う。多忙だと聞いていたが、側近が会談に出席できないほどかのか？」

扉間は沙門の両隣に座る二人の部下を交互に見ながら冷静な声で言った。沙門は少しだけ微笑み、両隣の部下を見てからそれに答える。

「ははは。心配は要らない。この二人は軍事と条約法務担当の長官だ。俺よりも詳しいくらいだ。そちらこそ、火影が貴殿に代わってからの多忙ぶりは伝わってきているぞ。

そんな中わざわざ足を運んでもらわなくても、先代同士が締結した条約についての再確認なら、文章かそちらの部下数人に任せてもよかったんじゃないのか？」

一瞬、双方の部下同士の視線がぶつかり、その場の空気が凍った様に重たくなったが、直ぐに沙門が再び口を開く。

「せっかく来て貰ったんだ。夜は盛大にもてなさせて貰うよ。それに、色々見て回りたいただろうしなあ…。さ、早速そちらが確認したい条約条文について聴こうか」

「ああ。…コハル、頼む」

「はい。こちらが再確認・再締結を要望している条文は、第三条・尾獣均衡（通称：尾獣バランス）についてです。砂隠れの里は尾獣の分配は無かったものの一尾を所有しておられ、五里条約全文に同意し締結されました。しかし最近になり一尾を利用した兵器開発を行っており、それについては既に多くの忍里が知る所です。そこで、砂影殿の条約への解釈をお聞かせ願いたい」

「ふむ…条約解釈か…条文通りとしか言いようがないがな。詳しくはこちらの条約法務長官から…」

「すまないが、風影自らの口から解釈を聞かせ願いたい。風影殿は協定・条約締結時にワシと同じく会談に出席していたはずだ。当然、初代風影と同等の理解をしていると思っ
ているのだがな」

「火影殿、ハッキリ言つてはどうだ？尾獣兵器の開発は条約違反だから止めろと」

「それを判断するのはワシ一人ではない。五影すべての判断による。それには風影の条約の解釈と、尾獣兵器開発についての情報全てを開示する必要がある。しかしいきなり五影会談を開けばそれは即ち、砂隠れが条約を破っていると断言されるのと同じだ。その前に個人的に風影殿の意見を聞きたいのだ」

「それは、木ノ葉が砂の味方になるという意味にも取れるが？」

「橋渡しになりたいのだ。五里同盟から孤立する前にな……」

「なるほど……だが、卑劣とも呼ばれる冷徹な貴殿だ。ただの善意とは受け取れんな。要求はなんだ？」

「その前に、条約の解釈について答えて欲しい」

すると、沙門の右隣りに座っている軍事担当者が口を開く。

「こちらを切る時に必要な条件が、条約解釈と言うわけですね……」

それを聞いて、書記をしているホムラが顔を上げた。そして、沙門がクスツと笑つてから言う。

「橋渡しはするが危ない橋を共に渡つてやる気は無いつてことか。流石、それでこそ俺の知つている千手扉間だ。ははは。いいだろう。正直に答えよう……。第三条を順守するつもりなど無い。尾獣均衡など、初代火影、いや実質的には貴殿が考え提案し決まっ

た事。砂隠れは最初から一尾を持つていたが他里は均衡という冷戦状態を金で買わされ、我々砂は、初代風影が要求した通りの資金と資源は得られなかった。だが他里はまだいい。冷戦とはいえこの均衡状態の中、産業・工業などの発展を遂げて豊かになっている。しかし我々は風の国からの支援も無く、資源の乏しい中、忍と市民の暮らしを支えるのがやつとだ。このままだと再び大戦がくれば里は、力をつけた他里に潰されてしまう」

「本音を聞かせてもらえて良かった。感謝する。…確かに、先代たちの結んだ協定と条約は完璧なものとは言い切れぬ。木ノ葉が提案して同意して貰ったものも多い。だからこそ時代と共に条約の確認や見直しが必要だ。その為にも風影殿だけではなく、他里の本音を知る必要があると考えている。だがまずは軍事拡大を進めている風影殿の意見が訊きたかったのだ」

「で、訊いてどうする?」

微笑みの消えた顔で沙門が扉間へ訊いた。

「今の本音を聞いて、条約の改正よりも先に、砂隠れの里への援助や支援が必要だと思つた。その支援をまずは木ノ葉から率先してさせて貰いたい。そうすれば他里へも支援呼びかけがしやすくなる。どうだろう?」

「援助や支援か…それが尾獣兵器を止める条件つてことだな?」

「そう捕らえて貰って構わないが、尾獣兵器開発中止は五里の話し合いで決めて貰ってもいい。その代わり、今現在の尾獣兵器開発情報についての全てを五影に開示してほしい」

扉間のその言葉を聞き、沙門は口角を軽く上げた。

・・・なるほど。木ノ葉は九尾の扱いに苦慮していると聞いていたが、欲しいのは尾獣兵器の情報だったのか。まあいい。不完全な尾獣兵器の情報と引換えに支援を取り付けられる。そうすればその金で傀儡兵器の開発も進む・・・

「分かった。軍事拡大は我々が真に望む事では無いからな。まして五影全てを敵に回して孤立しようとも考えていない。里の発展と安定の為に、火影殿の提言を前向きに考えさせて貰うでしょう」

「ぜひ前向きに考えて欲しい。具体的な話はこれから部下が説明する。コハル、ホムラ、頼む」



砂漠の大海に夕陽が沈んでゆく。その光に照らされ、煉瓦や石で出来た家々は黄金に輝いている。

六花は五階立ての屋根の上に座り、その光景を眺めていた。六花の瞳もまた、黄金に輝いている。

「そろそろ会食が始まる時間だね」

「ええ。警備も想定以上に会食会場に集中しているみたいだし……そろそろ向かおうか」

「油断と深追いはしないでね。マダラの指示通り今日は下見だけにしといてよね」

「分かつてるわ……」

緊張して少し顔をこわばらせたまま、六花は勢いよく立ち上がると、屋根から飛び降り姿を消した。

「食事は口に合ったかな」

一時間半ほどの短い会食が間もなく終わろうとしていた。

扉間は食後に出されたジャスマン茶の茶器から口を離すと、フツと口角を上げて対面の席に座る沙門に顔を向けた。

「ああ。どれも素晴らしい味だった。次はぜひ、木ノ葉に来て木ノ葉名物を食べてみてくれ」

「そうだな。ぜひそうさせて貰おう」

互いの「いかにも」な社交辞令のやり取りと、顔の前で漂うジャスマン茶の良い香りが合わさって扉間の鼻をくすぐり、扉間は思わずクスツと笑ってしまい、俯いた。しかし直ぐに顔を上げる。そして次の言葉を発しようとした時だった。

コンコンコン。

「入れ」

「失礼します。沙門様、急ぎお伝えしたい事が…」

部屋の扉からこちらに顔を覗かせている部下に向かつて、沙門は手招きをして自分の側に呼び寄せた。部下は椅子に座って居る沙門の左隣に来ると腰を屈め、沙門に耳打ちをする。

その様子を見て、扉間とその部下たちも顔を見合わせた。

「…そうか。分かった。何としても捕まえるように伝えろ」

部下は深々と頭を下げると足早に部屋を出て行ってしまった。その様子にやはり何か問題が起きたのだらうと扉間は少し険しい顔になり、沙門の言葉を待った。沙門はジャスミン茶の茶器の中を覗き、一口それを飲むと大きなため息を吐いた。

「扉間殿…いや、火影殿。先ほどまでの話は一旦白紙に戻す必要がありそうだな」

「どうかしたのか？」

「一週間前、里の豪商の一軒が三人組の忍に水遁の術で襲撃され、金品を盗まれ、その当主が殺害される事件があったのだが、今度はその犯人共がこの会談の警備が手薄になつている間を狙つてか、先ほど貿易商の家を襲撃したと知らせを受けた。同時に、その犯人共の正体が判明したとな…」

「まさか…」

扉間の脳裏に思い当たる類似事件が思い出され、背中に冷たいものが走る。

「その三人組は全員、肩に赤い炎の刺青をしている。そして、木ノ葉の抜け忍だ……」

「やはり……」

……先ほど街で見かけた人物は奴らだったのか……

「二代目様!」「待てヒルゼン!」

思わず立ち上がったヒルゼンの腕を、隣に座つて居るホムラが掴んで止めた。それを横目に、扉間は冷静な顔で沙門に言う。

「話していかなかったが、十日ほど前、木ノ葉でも抜け忍三人組による豪商襲撃事件があった。水遁による襲撃という手口、肩の炎の入れ墨、いずれも共通している。おそらく同じ者達による犯行だろう」

「犯罪者を野放しにしていた結果、わが里の市民にも被害を与えたという事だな」

「申し訳も無い。ワシが至らぬ結果だ……今、ワシらに出来ることは今すぐ捜索に行き、何としても犯人共を確保することだ。行かせてもらえるだろうか?」

「火影殿。アンタほどの人が抜け忍三人ごときを捕まえないとは、にわかには信じがたい……アンタが砂の里に向かわせ襲撃させたと考える方が自然なんだがな」

「そんなことは有り得ん!……いや、言葉で言つたところで信じてはもらえぬだろう。頼む、捜査に行かせてくれ!」

「逮捕して連れて来るのは当然だが、その後の事も、解っているだろうか……」

「分かつておる。その話は後でさせて貰う。頼む、時間が無い！」

「分かった。行け。但し必ず捕まえて連れて帰れよ」

沙門の言葉が終わる前に扉間と四人の部下全員が立ち上がり、顔を見合わずと大きく頷いた。そして扉間が部屋を出るのに続いて全員が一瞬にして部屋から居なくなつた。

「沙門様、我々も行きますか？ 木ノ葉の奴ら、捜査すると言つて何をするか分かりません」

「うむ……お前達二人は扉間たちに同行しろ。決して傀儡の館には近づけるな。俺は念のために傀儡の館に行つて様子を見る」

「分かりました」



昨夜の風のお陰なのだろうか。空の霞は消え、夜空には満点の星が競うように輝いている。月は無い。新月の様だ。

「まさかこんな住宅街に在るなんて……信じられない」

「カムフラージュだね。警備も私服の忍にさせたし」

戦闘服に身を包み、頭と顔をストूलで隠している六花は、足元に横たわる二人の男の忍を飛び越えると、その館の大きな鉄製の柵門を押し開け、素早く中に入って再び

柵門を閉じた。

柵門からは五mほどの真つ直ぐな道が庭を縦断して館の玄関に続いている。道の両脇には小さな灯りが置いてあり、周囲はほの明るい。

この館は一見、裕福な住民の邸宅に見える。豪邸とは言えないが小さくも無い。ここ一帯は高級住宅街なのか、この館よりも大きな豪邸が立ち並んでおり、むしろ小さく見えるほどだった。

六花が玄関に向かって歩き始めると、先ほど倒した男二人とは別の男二人が左右から音もなく現れた。

『……』

「……」

無言の男二人に対して六花も無言で返す。そして音もなく腰から刀を抜くと宙に飛び上がった。

ガチイン！ガチイン！

六花の振り下ろした刀は、二人の構えた鉞（なた）にぶつかった。

『！』

刀と鉞がぶつかった音と同時に、男は二人共、何者かによつて後ろから羽交い締めにされた。

二人はそれを振り払おうと身体をよじらせると、羽交い締めになっている人物の顔が眼に入ってきた。

『!!』

『ふふっ』

男二人を羽交い締めに行っているのは、ふたりの六花だった。その眼には、写輪眼が浮かんでいる。写輪眼を見てしまった男二人の動きが止まる。しかし、男二人はそれでも何とか顔だけを正面に向けた。

ザシユツツツツ!!

男二人が正面に居る六花（本体）の顔を見る前に、六花はひと太刀で男二人を同時に切り裂いた。

ドタツ!ドタツ!…

男二人は最後まで無言だった。

「私、無口な男は嫌いじゃないわ」

六花は地面に倒れた二人の間を通り、悠然と館の玄関扉へと歩み寄った。すると玄関の入り口に灯りが灯った。人が近づくと明かりが点く忍術の様だ。

六花は一旦写輪眼をしまうと、その灯りを頼りに扉の取手を握り、その上にある南京錠を見つめた。

「これ絶対トラップ仕掛けてあるよね」

「ええ。開錠術で開けたら直ぐに沙門に知らせるようになっていと思うわ」

「窓とか壁を壊して中に入る？」

「きつとそれも同じ事が起こる」

「どうすんのさ？帰る？」

「問題は沙門が駆けつけるまでにどれくらいの時間があるかってことね。今日は下見だし、中に何かあるかを見ればそれでいいわけだし、取敢えず中に入るわ」

「いやいくら六花だって一人じゃ沙門には敵わないって。しかも一人で来るとは限らないしー。」

「館の中に簡単に入れるなんて最初から思って無いわ。こんな事想定内よ。さ、つべこべ言わないで入るわよ」

「もーっ！」

ゼツが六花の左肩で飛び跳ねると同時に、六花は開錠術で鍵を開け、直ぐに玄関の扉を開けて中に入って行った。

「火影様。ここから先は住宅街。火影様より立入厳禁のご命令を受けております」
「分かっておる！つべこべ言わずに手伝え！」

事件直後とあり扉間の感知によって木ノ葉の抜け忍強盗犯は直ぐに見つかった。

しかし、拘束することに手間取っている。

扉間の力と部下四人の力をもってすれば、上忍三人くらいの相手は難しくも無い。しかし、ここは砂の里の中心部。住宅街に隣接した場所である。そんなことも構いなしに大掛かりな水遁で攻撃をして来る三人組相手にもっと強力な水遁で応戦することは町の大規模破壊を意味する。

・・・そうなれば、多額の賠償金が・・・

扉間の頭の中では算用が働いており、なかなか捕まえられずにいたのだ。

「うああああー！」

扉間が抜け忍に接近して戦闘していると、見張りを言いつけられていた沙門の部下の一人がその戦いに巻き込まれて地面に叩きつけられてしまった。

「大丈夫か!! おい、アイツらはワシらだけで必ず捕まえるし住宅街にも立ち入らせぬ。だから貴様は早くコイツを救護班の所へ連れてゆけ！」

「しかし…それでは…」

「いいからいけええっ!!」

「は、はひひひいっ」

被害者が増える度に賠償金は跳ね上がる…。

扉間の荒ぶるチャクラと瞳に映る「？」マークに怯え、沙門の部下は怪我をした部下

を連れて逃げて行った。

「フーン…これで少しは自由に闘える…おおっと、逃がすものか」

扉間も急いで再び戦闘に加わった。

そしてほどなくし、抜け忍三人組はチャクラを切らし、しつこくも強力な扉間たちの攻撃に負けて拘束されたのだった。

「……」

「二代目様、どうかされました？」

拘束した三人組を沙門の所へ連行しようと歩いていた時、扉間の様子に気付いたダンゾウが声を掛けた。

「十時の方向…先ほどの住宅街の中ほど辺りに大きなチャクラを感じてな…あれは恐らく沙門だ」

「え!!でも強盗はこうして捕まえましたし、風影に何かあったのでしょうか!」

ダンゾウは慌てて訊き返した。

「向かいますか?」

コハルが冷静に扉間に訊いた。

「貴様ら四人はコイツらを砂の本部へ連れてゆけ。ワシひとりで見に来る。チャクラの大きさからまだ戦闘にはなっておらんようだ。それに沙門は風影だ。簡単に倒れはせ

ぬ」

「分かりました……くれぐれもお気をつけて！」

ヒルゼンが心配そうな笑顔で言った。

「ああ。貴様らも頼んだぞ」

『はい！』



「一階には何も無かったね」

「うん。流石に入ってすぐには何も無いでしょ。あるならここ、地下室ね」

六花は地下室の扉の前に立つと、その扉にも当然かかっている鍵を開け、扉をゆつくりと押し開いた。

ギイイイ……

六花は灯りが付いている三十畳はあろうかという広い部屋の中を見回しながら、その中へと進んで行った。そして、目の前に並んでいる意外なものに驚き呟いた。

「……人形？」

「どう見ても人形だよね。生身の人間には見えないけど」

「でも傀儡兵器は人体を利用した兵器だつて……これ、元は人間だったということ？」

そこには、数十体もの人のかたちをした人形たちが壁に立てかけられており、六つあ

る寝台は布を被っている。

六花は壁に並ぶ人形の顔や体をまじまじと見た。

「この人形、チャクラを感じるわ。沙門のものと、たぶんこの人形自身の持つチャクラ……」

「人間だった頃のチャクラってことだろうね」

「うん。でも生身の人間をどうやってこんな風にするのかしら。こんな技術が完成して戦争に投入されれば大変なことになるわ……」

六花は寝台に歩み寄ると、かかっている布をゆつくり捲ってみた。

「?!」

「キモツ。解剖されてる途中じゃん」

「やっぱり……ここに在る人形は生身の人間の身体を利用して作られているんだわ。早くマダラさまに報告しなきゃ……」

「誰だ貴様」

その声に振り返ると、地下室の入り口に男が立って居た。

「お前こそ誰だ。何故ここに居る?……あつ!」

六花は冷静な声で訊ねたが、その男の顔とチャクラで見覚えがあることに気が付いた。昨日、街ですれ違った五人のうちの一人だった。

「ワシは木ノ葉の里の二代目火影、千手扉間だ。貴様、チャクラとその格好からしてこの里の忍ではないようだな。誤魔化そうとしても無駄だぞ」

六花は戦闘服を身に纏い、頭と顔をストロールで隠しているために顔は見えない。

『六花！アレは本物の火影だよ！感知とスピードで右に出る者はいない。誤魔化しきれないよ。ここは味方につけた方が良い！』

六花の左肩に載るゼツが焦って囁いた。その言葉に、六花は数秒考えこんだ後、真つ直ぐ扉間に向き合つた。

「突然ですが火影様、話を聞いて下さい」

「悪党かもしれない貴様のか？まあいい。言ってみろ」

「この部屋に在るものは風影が極秘で開発している、人間の身体を利用して作った傀儡兵器です。これが完成すれば多くの人間が死ぬ。尾獣兵器よりも危険な物です。しかも直ぐここに風影も駆けつけて来るでしょう。そうなれば砂と木ノ葉の戦争にも発展しかねない。貴方は今すぐここを去って下さい」

「そんな話どうやって信じろというのだ」

「こつちへ来てください」

扉間は一瞬身構えたが、眼を細めると六花の方へと歩み寄り、六花の二メートルほど前で立ち止まった。すると六花は隣の寝台に被さつた布を勢いよく剥いだ。

「……これは!!」

「こうして解剖した人間を、このように人形に変えているのです」

「なんてことだ……だが一体貴様はなぜこんなことを知っている?」

「オレも世界の平和を願っている。それ以上は言えません」

「世界平和か……義賊か? いや、兎に角、これが本当に人間を利用した兵器なら戦争法や平和条約に反することだ。ワシが直接風影と話す。貴様は証言者として力を貸してくれ」

「それは出来ません。オレは世界の地下で生きる者。表には出られない。申し訳ないが先に去らせて貰います」

「待て!……今逃げるのは危険だ。もう、風影が」

扉間が入り口に振り返った瞬間だった。バンツと大きな音を立て、扉が開けられた。

「なるほど、流石に切れ者と名高い男だけはある。会談は隠れ蓑で、本当の狙いはこれだったか。どうやって情報を仕入れた? まさか抜け忍か?」

そう言いながら、腕を組んだ沙門がゆっくりと地下室の中に入って来た。

「いや。今知った。この者に聞かされてな」

「?……お前は何者だ? 扉間の手下か!」

「……」

六花は無言でストールを取った。

「ユエ!?」 「芙蓉!?」

「火遁・豪火球!!」

二人が驚くと同時に六花は口から火炎を沙門に向かって吹き出した。沙門と扉間は咄嗟にそれを飛び退いて避け地面にうつ伏せると、その隙に六花は入り口に向かって走った。

扉を通り抜け、右足が廊下の床に着地した瞬間。

ドン!

「!?」・・・速い・・・

「逃がすか」

あらかじめ廊下に待機していた沙門の影分身が六花を正面から抱き締めた。

・・・くっ・・・苦しい・・・

六花の肺、肋骨と背骨が悲鳴を上げる。

「やめろ!!」

沙門と六花の眼の前に扉間が現れかと思うと、沙門の腕に刀で切りつけた。沙門は寸での所でそれを除け、六花を抱きしめたまま部屋の中に移動した。そして今度は六花を羽交い締めにした。

「風影やめろ。その女は本当にワシと無関係だ。貴様のチャクラを追ってここに来てみ

たらその女がここに居た。それだけだ」

「…。じゃあ誰の命令でここへ侵入した？答える！」

「誰の命令でもない…オレの意思だ」

「そうか…」

一瞬うな垂れた沙門の腕の力が弱まり、六花は沙門に振り返った。そして沙門の瞳を潤んだ目で見つめる。

「沙門様…ごめんなさい…」

「…。ユエ」

六花の眼から涙が伝うと同時に、その瞳は赤く光った。

「…ユ…エ…はっ！」

沙門の影分身は瞬きをしながら頭を横に振ると姿を消した。その隙に六花はその場から消えた。

「写輪眼…うちは一族か。影分身でなければ危なかったぞ」

入り口に立った六花の前に、沙門の本体が立ちはだかった。

「チツ…」『六花どうするの！』

「風影！その女を殺すのは許さぬぞ！」

「やはり…お前ら二人は仲間なのか」

「違う。だが、その女から聞いた貴様の企みは見過ぎせぬ……人体を利用した傀儡兵器など許さぬ！」

「秘密を知られたからにはお前も生かして帰すつもりは無い。扉間、ユエ、二人まとめてここで殺してやる」

「今の発言、取り消すなら今だぞ？」

「五月蠅い！」

沙門は袖の内側からクナイを数本取り出すと、六花と扉間に向かって投げた。

六花は写輪眼でクナイの動きを瞬時に見極め全て避けると後ろに飛び上がった。扉間は腰から刀を抜くとそれでクナイをはじき落した。後ろに飛び上がった六花は、刀を抜き、地面に着地すると同時に反動をつけて再び飛び上がり、沙門に刀を振り下ろした。しかし沙門は右手にはめていた鉄拳で六花の刀を受け止め、身体をひねり、六花の腕を掴んで床に叩き落した。

ドンツ!! 「っ……」

六花は受け身を取ったが、沙門の怪力で大理石の床に叩きつけられたダメージは大きく、直ぐには立ち上がれない。

カチャン！ シュツ……

沙門は腰に二つに分割して携えていた鎌槍（かまやり）を素早く結合させると、立ち

上がろうとしている六花の顔の前に突き出した。

「そんな顔もするんだな。それがお前の本性ってわけか」

「やめろ風影！」「お前の相手は俺だ」

同じく鎌槍を構えた沙門の本体が扉間の前に立ちはだかった。

「フン！ 傀儡兵器の開発本丸で大術も使えぬくせに、ワシに勝てると思っっているのか？」

「ははは。この砂漠の大海に浮かぶ木の葉如きが何を言う。ここが壊れても全ての情報が失われるわけじゃない：風遁・砂塵岩刃!!」

ピキピキピキ：パラパラ：

床の大理石が剥がれ宙に浮いた。

ビュンツ!!!

その石の破片が一斉に扉間に向かって飛んでゆく。

グサグサグサツ!!! バツシヤアアアン!!!

「：水分身か」

「ユエ・・・本当は誰の命令なんだ？」

「・・・」

「正直に言えば、お前だけは助けてやってもいい」

「……」

チャツ：

六花に突きつけられている鎌槍の刃が光った。

「命を捨ててまで仕える主人なのか？」

「ああ……そうだ」

「……フフ。お前の力ごとくで俺の動きを止められるとでも？」

六花の影分身が沙門を後ろから羽交い締めにしていた。しかし沙門は動じることなく正面に居る六花に鎌槍を突きつけ笑っている。そして床に膝を突いている六花は、ゆっくり立ち上がるうとした。

「動くな」

その言葉を無視して六花は立ち上がった。そして伏せていた眼を上げ、沙門の顔を見つめた。

「二度も写輪眼にはかからん。先ずはその眼を潰してやる」

沙門は鎌槍を握り直し六花の顔に近づけたが、六花はその誇槍を掴むと、それを避けて沙門に近づいてゆく。そして沙門は、そこでようやく自分の身体が言うことを利かなくなっていることに気付いた。

「貴方は今、〃本体〃だろうか？ 貴方の本当の能力は、影分身と本体で身体を入れ替えられ

る事…それが仇に出たな。もうとつくの昔にオレの瞳術にかかっている」
「く…そう…」

六花は沙門に身体を密着させると、両肩に手を置いた。

「だがオレは、こうして貴方の優しさのお陰で助かったんだ…ありがとう」

「…？」

チユツ。

・・・バタアン！…

沙門は気を失い、背中から床に倒れた。

「・・・なんだと?!!」

しかし、六花は目の前の光景に眼を疑った。沙門本体を倒したというのに、扉間と戦っている沙門の影分身は消えていないのだ。

沙門の影分身は扉間と刀と鎌槍を交えていたが、いったん後ろへ飛び退いた。そして袖口から手裏剣を出すと六花に向かって投げた。六花はそれを軽くかわしたが、写輪眼で沙門を強く睨んだ。

「ユエ、よく俺の能力に気が付いたな。だがな、俺の能力は影分身と入れ替わるだけじゃない」

「…実体化…してる?!!」

「どうした？影分身で防げば良かっただろう…まさかもう影分身を出すチャクラは無い
か」

六花は須佐能乎の中から沙門に向かって冷酷な笑顔を向けて訊いた。そして体の前に刀を構えた。

「あのまま意識を失っていいものを…愚かだな」

六花は須佐能乎の中から飛び出すと一直線に沙門に向かって走ってゆく。

ガキイン!!・・・

「何故止める…」

「殺すな。風影を殺せばお前はS級犯罪者だぞ！あとはワシに任せろ！」

「…構わん。殺せ…ユエ」

「……？」

「お前になら、殺されても良い…」

「何を言う風影！貴様はまだやり直せる。傀儡兵器の開発を止め、市民の為の政策に転換すればいい」

「……」

六花が無言で刀をしまうと同時に須佐能は消え、そして扉間と沙門に背を向けた。

「馬鹿らしい。色ボケオヤジめ…」

「芙蓉！」

「それから！…オレは芙蓉という奴じゃない！人違いだ」

「待ってくれ!!」

芙蓉は走り出すと、そのまま地下室から姿を消した。

「待ってくれ」

民家の石造りの屋根の上、六花の前に扉間が立ちはだかった。

「しつこいぞ！邪魔をするなら殺す」

六花はしまっていた刀を抜くと扉間に向けた。しかしその手は、いや身体全体が上下に震えており、扉間はそれを見逃さなかった。

「君ももう限界なのだろう？…風影は君が誰の命令であんな事を行ったかを正直に言えば罪に問わないと言っている。一緒に戻ってくれ。そして正直に言ってくれ」

「オレに指図をするな…」

「だがこのまま逃げれば風影も、そして我々木ノ葉も君をどこまでも追うぞ。そうならば必然的に君の主にも辿り着く」

「…芙蓉とは、一体誰だ？」

「?…。うむ…」

「答えろ」

「知ってどうする?」

その言葉に、六花はフツと不敵に微笑み、刀を鞘に収めた。そして、ゆつくりと扉間に近づいてゆく。

「!」

六花は扉間に接近し向かい合った。直ぐにでも互いのクナイで心臓を突き刺せる距離である。しかし互いに微動だにしない。

「・・・」

六花は黙って、微かな街明かりに照らされている扉間の顔を見上げた。

「風影と同じ手にはかからぬぞ」

そう言うのと眼を閉じ、そして、思い切り六花の唇に吸い付いた。

「!!」

『六花! 今だよ力を使って早く!』

「・・・」

・・・そんなつ! こんな時にチャクラ切れだなんてつ! どうしよう!・・・

扉間は六花を抱きしめ、後頭部を抱き寄せて強く唇を吸い続けている。直ぐにでも扉間を突き飛ばしたいのだが、六花は力が使えないことに動転し、固まってしまっていた。

グサア!!

「!?」

「破廉恥な奴め。扉間」

「…ま、マダラ!?…うっ!写輪眼…」

バタンツ!!

「マ…ダラ…さま」

「まったく。相変わらず主に手間をとらせおって」

「来るのが遅いよ〜マダラ」

「馬鹿者。この距離を最速で来てやったんだ。感謝しろ」

「老体に鞭打って?笑」

「ジジイ扱いするな。…六花は気を失っているじゃないか。二人で連れて帰るぞ」

「へーい。ていうか扉間のこと遂に殺したの?」

「肩の関節を刺して写輪眼で気絶させただけだ。死にはせんだろう」

「なんで?殺すなら今じゃん。やっちやいなよ」

「…だつて芙蓉が生きていること知ったまま生かしておいたら厄介だし…」

「そうしたいが残念ながら今じゃない。扉間にはまだ火影として仕事をしてもらわねばならんしな。この状況（傀儡兵器発見と沙門が六花に倒された）を処理できるのもこいつだけだしな。って、記憶を消したからそれも難しいか…。さあ帰るぞ」

「うん」

マダラは六花を抱きかかえると、屋根の上に向つ伏せに倒れている扉間を見た。そして大きなため息を吐くとそのまま姿を消した。

◆
気怠いような春の午後。

六花は地下のアジトの真上に在る丘の上から海を眺めて小さく溜息を吐いた。

「春愁や束ねし髪に銀のピン。つて六花はピンつけて無いっけ」

「そんな歌どこで知ったのよ…」

「そんなに落込まなくても良くない？結果オーライだったわけだし。風影は傀儡兵器の開発を断念したし、木ノ葉も抜け忍の件は傀儡兵器について口外しない代わりに賠償金をまぬかれて砂と同盟まで結べたんだからさ。それになんたつてランダムでしか出せなかつた須佐能乎をコントロールして出せた事マダラから褒められてたじゃん」

「・・・マダラさまに、キスしてるところ、見られた…」

「え？そこ！落込む所そこの。別にマダラは気にしてないっばいよ」

「ぼい、でしょ？気にしているかもしれないじゃない！」

「いやいやあれは一方的にされたわけだしノーカウントでしょ」

「だといいいんだけど…。それと、火影が私を呼んでいた『芙蓉』つて誰なのかな？多分、

火影と親しい人物なのは間違いないんだろうけど」

「誰だつていいじゃん。世界には自分に似てる人物が三人は居るらしいし気にすること無いよ」

「あれ？四人じゃなかったっけ？」

「どつちでもいいってー」

・・・ヤバイなあ。このままだと六花が芙蓉の記憶を取り戻しちゃうかも。マダラに消させなきゃ・・・



「大おじ様！おかえりなさい！」

「綱、良い子にしとったか？」

「うん！だつて綱、もうお姉ちゃんだもん！叔母様に赤ちゃん産まれたし！もう見た？」

「ああ、この後見に行く。綱も一緒に行くか？」

「うん行く！準備してくるね！オシャレしなくっちゃ！」

綱手はスキップをしながら廊下を走つて行つた。

「ふふふ。あれは準備に時間がかかるわねえ。大丈夫ですよ？」

ミトは嬉しそうに微笑みながら扉間の前に茶を置くと、扉間と向かい合つてソファに腰かけた。

「大丈夫だ。その、姉上にちよつと聞いて貰いたいことがあつてな…」

「あら？何ですの？」

「その・・・芙蓉は、生きていると思うか？」

「は？」

「いや、その、もしもの話だ…」

「…。そうですね…柱間さまが私の心の中でいつまでも生き続けてゆくように、これまでも今からも、芙蓉さんは扉間様の心の中で生きていらつしやると思います」

「うむ。そうなのだが…。それが、先日砂の里で芙蓉に瓜二つの女と会つたんだ。いや、瓜二つと言うより芙蓉そのままだったのだ。顔かたち、声、身長も、芙蓉が死んだ当時そのままの姿だった」

「うーん…お気持ちはよく解りますけれど…。私も全く似ていない人と柱間さまと見間違えたり、重ねてしまいますし…。それに、この世には自分に似た人物が五人は居ると言いますし、生き写しのような人に会うこともあるでしょう」

「そう・・・だな。いや、すまぬ。変な事を言つてしまった」

「いいえ。お気持ちはよく解りますから…」

「…：そういえば、六人じゃなかつたか？」

姪の入院している産院に綱手と一緒に赤ん坊を見に行き、商店で綱手に駄菓子を買つ

てやった後家まで送り届け、扉間は自宅に帰って来た。

ようやく最近になって部屋の中は暖房が要らなくなってきた。寒がりの芙蓉は、いつも火鉢にあたりながら、部屋が扉間の術で暖かいことをニコニコしながら喜んでいた。

扉間はしまい忘れた火鉢に目を遣りながら、食卓の椅子にドスンと腰を下ろした。

「確かに生きている…芙蓉はこの胸の中に…だが、触れられないんだ…もう…芙蓉、芙蓉…」

「ん？呼んだ？」

「ううん」

「そう…いま誰かに名前を呼ばれた気がするんだけど」

「気のせいでしょ。さ、今回の任務も頑張ろう」

「うん！」

今年ももうすぐ、ハナミズキの花が咲く。

おしまい

【六花の森・番外編】雨名月

「残念ですね。今日はせつかくの十五夜なのに」

六花は、畳の上に胡坐をかいて座るマダラの右膝近くに、徳利と猪口が載せられた盆をそつと置いた。しかしマダラは夜空を見上げたままで居る。

夜空には雲が立ち込め、小さな雨粒が止めどなく降り注いでいる。しかし今夜は十五夜（満月）で雨雲の厚みも薄いため、空には鈍く不気味な明るさがある。

そして、八月の雨の夜は蒸し暑い。

「今日みたいな十五夜をなんて言うか知ってるか？」

「い、いえ……知りません……」

マダラの右斜め後ろで畳に膝を突いている六花は、こもった小さな声で答えると俯いた。その膝は僅かに震えており、早く畳から離れたがつている。その理由は、マダラは夜中に酒盛りをするのは独りきりだと決まっていると言うのもあるのだが、それよりも大きな理由は六花自身の内にあった。

兎に角、近頃、マダラと二人きりになるのが怖くて堪らないのだ。

六花は、こんな時に限って左肩に居ないゼツを睨んでいると、マダラが六花へ振り返った。

「お前も付き合え」

その手には徳利が握られている。六花は顔を上げ大きく目を見開いて、暗闇に浮かび上がるマダラの端正な輪郭を見たが、再び俯いた。

「で、でも私はまだ十六ですし…それに」

「いいから、自分の猪口早く持つて来い」

「…分かりました…」

六花はゆっくり立ち上がると、唇を噛みながら小走りで台所へ向かった。

しかし、このままアジトの自室へ戻ってしまいたかった（ここは地下アジトと地下通路で繋がっている一軒家）。だが下僕として、マダラの命令に逆らうことなど出来ない。早く猪口を持つて来なければならぬ。

今、こんな居たたまれない想いを抱え込んでいる状況にしたのは、ゼツのあの言葉である。それが本当に恨めしい。その想いに、握り締めた拳をぐつと胸に押し付けると、最近膨らみを増した乳房が両腕に押され、ハツとその両手を解いた。今はこの乳房さえもが恨めしく思えてくる。

そんな事を考えていたら、気付けば猪口を持ち、マダラの後ろに立つて居た。

「俺の後ろに立つなといつも言ってるだろ！」

「は、はいっ！申し訳ございません！」

六花はマダラの怒鳴り声に、猪口を握り締めて胸に当てたまま畳に土下座をし、頭を畳にこすりつけた。しかし、マダラの怒鳴り声と己の行動によつて六花は冷静を取り戻すことが出来た。

・・・そうだ。私が本当に怖れているのはそれじゃない。最も怖れているのは・・・早く。こつちに來て酒を注げ」

「はい！」

六花は急いで頭を上げて立ち上がるとマダラの右隣りに膝を突き、盆の上に自分の猪口を置いた代わりに徳利を手を取った。そしてマダラは六花に向けて猪口を差し出した。

「ん」

「…どのくらいまでお注ぎすれば宜しいでしょうか？」

「ストツプつて言う」

「分かりました。あの、燭台の灯りを点けても宜しいでしょうか？」

「ああ」

六花はいったん徳利を盆に戻すと、部屋の隅に置いてある燭台に灯りをつけた。小さ

なロウソクの灯りだというのに、部屋の中はまるで燃えているかのように明るくなつた。

そして再びマダラの元に戻つて猪口を手に取り、マダラの手に行っている猪口へと酒を注ぎ始めた。

・・・カタカタカタ・・・

「手え震えすぎだろ」

「すみません！緊張してしまつて…溢さないように」

「それじゃ逆に溢れるだろうに…つて、ストップ！」

「はい！」

六花が手を止めると、マダラは黙つてその酒をぐいっと飲み干した。それはあつという間の出来事で、六花が次の行動に迷つていると、マダラは盆の上に置かれていた六花の猪口を手に取つて差し出して来た。

「ほら、お前の番だ」

「そんな！マダラさまにお酒を注いで頂くなんて、恐れ多くて…出来ません…」

「さっきのな、今日みたいな十五夜の話。何ていうか想像で良いから言つてみる」

「あ、はい…。ええつと…雨の十五夜、満月、名月…雨…涙…露…雫…」

「ゆっくり考えろ」

マダラ徳利を持つと、自ら己の猪口に酒を注いだ。その横顔は明らかに嬉しそうな顔だった。その表情を見ると、六花もつられて笑顔になり、燭台の灯りでますます見えなくなつてしまった月を見上げ、腕を組んで考え始めた。

優しい雨音のなか、無言の時間が過ぎてゆく。

六花は思考に詰まり、ふと目を閉じた。すると、自然と目頭が熱くなつてきた。

マダラと出逢つてからの日々が瞼の裏に浮かんでくる。

それは、辛く厳しい修行の日々だった。

何度、涙で枕を濡らしたか分からない。

それでも、「絶対に大丈夫」、なぜかそう思えた。

それは、涙のあとには必ず、小さくも強い喜びが必ず訪れ、笑顔になれたからだった。

「えみ、まち・・・笑み待ち月です」

「笑み待ち月か…。ハズレだが、なかなか良い答えだな」

「ありがとうございます…」

「なんだ、泣いてやがるのか。情けない奴だな」

「あつ、い、いえ…。あの！えつと、正解は何なのですか」

「正解か。正解はなあ…」

マダラは六花の膝の上で握り締められている猪口に徳利を傾けると、丁寧に、ゆつく

りと酒を注ぎ始めた。その流れは自然で、六花は断る暇もなく、ただその様子を見つめるしかない。

そしてマダラは注ぎ終わると、二ツと口角を上げ六花の顔を見た。その顔は、日頃のマダラからはおおよそ想像も出来ない、遠い世界の人物の表情に見えた気がして、六花の心臓はドクンと大きく音を立てた。そして、まだ酒を飲んだわけでもないのに身体がカッと熱くなり、息が止まるような感覚がした。

「兩名月だ」

「あめ……めいげつ……。素敵……」

「ほら、飲んでみる。最初は口を付ける程度で良い」

六花は恐る恐る、ゆっくりと猪口に口を付け、スツと酒をすすって口に含んだ。

冷たい酒は舌の上に載ると不思議に熱く感じ、次に刺激、そして最後に鼻に抜けるような豊潤な甘さを感じた。

「……美味しい……」

「フツ。そりや良かった。数日早いが十七の誕生日だ」

「マダラさま……ありがとうございます……」

「……おい。見ろよ」

「あっ！」

六花はマダラに続いて空を見上げた。

すると、小雨を降らせる雲の隙間から満月が顔を覗かせていた。

・・・スツ・・・

マダラが燭台の方へと掌を向けると蠟燭の火が静かに消え、二人の目の前は真つ暗になった。暫くすると眼が慣れ、二人の目の前に青白い明るさが戻って来た。その月明りは畳の上に二人の影を作っている。マダラは再び空を見上げた。

「泣き笑いだな」

「ええ」

暫く月を見上げていた二人は、気付けば互いに顔を見合わせていた。その視線は、互いの顔の輪郭と瞳の奥をなぞっている。

「・・・申し訳、ありません・・・」

六花は我に戻るとマダラの顔を見つめていることに気が咎め、サツと顔を逸らして謝った。

するとマダラは俯く六花の顎先を掴み、顔を上げさせた。六花は誰に教えられたわけでもなく、自ずと目を閉じた。

六花は目を開けた。

目の前のマダラは、既に眠っている。

最近のマダラというと、一日の大半を椅子に腰掛けたまま、この世界と夢の世界とを行き来して過ごしている。

六花はマダラの身体を拭き終わると、服を着せ、それからマダラの背中を見た。六花の視線は、マダラ背中から天へ伸びているそれを伝って上へと向かう。

そして視線が止まった先には、月ではなく、悍ましい魔像の顔があった。

今のマダラはこの魔像に繋がる事で生き長らえているのだが、魔像の顔を見ていると、むしろマダラの命はこの魔像に吸い取られているのではなからうかと思えてくる。

六花は暫く魔像を見つめた後、俯いて眠るマダラの顔を覗き込んだ。

「マダラさま……きつと夢の中で、今夜の雨名月を見上げているのね。隣には……誰が居るのかしら……」

六花はマダラの肩に毛布を掛けたあと、布巾の入った桶を持ってゆつくりと立ち上ると部屋出口に向かって歩き始めた。しかし、直ぐに足を止めマダラへ振り返った。

「初めてがあれば、最後もある……解っているけど……」

あの日、あの夜、あの子の二人を思い出し、六花の身体は反射的に疼き唾を飲み下した。

六花は大きく深呼吸をしながら大きく顔を背けると、再び歩き始める。

・ ・ ・ でも終わりは新しい始まり。マダラさまは必ず戻って来てくれるから ・ ・ ・

おしまい

【続・六花の森・番外編】 1時間 46分59秒

目を開けると、六花の背中が小さく見えた。

・・・これは夢・・・？

それを確かめようとゼツは無意識に「手」を伸ばした。

すると間もなくその手は六花の背中触れ、その温かさでこれが現実世界であることを確かめられた。しかし。

「い、これ・・・は！！」

「？・・・ん・・・ゼツ？」

すると眠っていた六花が背中中の感覚に気が付き、ゼツの方へゆつくりと振り向いた。

「・・・だ、誰ー！」

六花は、飛び起きると、自分の隣に横たわっている見知らぬ男を見て驚き、枕元に置いてある刀を握り締めると飛び起きた。しかし男は何も言わずに、横向きに寝ころんだまま動かず、自分の両掌を眺めている。六花は即座に写輪眼を発動して男の顔と姿を見た。

体格は六花よりも少し背が高いくらいの中肉、この時代のものとは思えない服装をし

ている。サラサラと布団の上に流れる髪は真っ白で、額には二本の角らしきものが生えており、色白な肌の顔は中性的でとても可愛らしい青年だった。そして六花にはこの風貌に、どこか見覚えがあった。

・・・ハゴロモさんとヒミコさんに似てる・・・

すると男はゆっくりと起き上がり、六花の顔をみつめてきた。その顔には徐々に喜びが満ちてゆき、最後は歯を覗かせた大きな笑顔になって口から溢れ出した。

「六花僕ヒトになれたみたいだ！」

六花は目を更に大きく開け、今一度じっくりと青年の姿を見回した。誰かが変化の術を使っている様子は無い。そして、確かにその声は間違いなくゼツのそれだった。

「…貴方もしかして、ゼツなの？」

「うん」

「本当に…？」

六花は訝しげに訊ね、そして言い知れぬ緊張にゴクリと唾を飲み下した。

声はゼツのそれだと言つても、突然現れた青年（ヒト）が、あの黒い球体の身体に目と口が付いている単純なゼツといういきものであるとは俄かに信じることは出来ない。

「マダラの分身で六花のご主人様であるゼツ様だよっ！」

「……………どうやら、本当みたいね…」

青年がゼツと六花しか知りえない事実を口にしたことで、花は未だに信じられないが、このヒトはゼツだと思い握っていた刀をゆつくりと畳の上に置いた。

「で、でも、どうして急にヒトの姿になれたの?!というか、もしかしてそれがゼツの本当の姿なの?」

六花は恐る恐るだがゼツへと膝を寄せ、前のめりになって訊ねた。するとゼツも座つたままずいずいと六花に近づき、二人の顔が三十センチほどまでに近づいた。

「本当の姿というか将来の姿って言った方が正しいかもね」
「?」

そう言つてゼツは一度六花の顔を見てニカツとしたあとすぐ、窓の方へと顔を向け、眼を細めて語り始める。

「僕は以前も一度だけこの姿になれたことがある…あれからもう千年近く経つんだね。僕が人の姿になれるのは皆既月食の夜、しかもそれが年に三回ある年じゃなきゃダメ。その三回のうち皆既日食の継続時間が一番長い夜にだけこの姿になれるんだ。それが今夜だつたつてわけ」

難しい話だが聡明な六花は直ぐに理解した。確かに、これまで月食を年に三回観測できる年は意外にも多くあつたのだが、その月食が全て『皆既』月食という年は過去これまでも少なかった記憶がある。そして、月食の日は必然的に満月…。

・・・満月！そういうえばヒミコさんは月食の日には現れることが出来るのかしら？もし今夜ヒミコさんも現れたらゼツと・・・

「ねえ六花つてば話聞いている？」

「え、あ、うん、聞いているわ。色々な条件が千年近くの単位でようやく揃ったわけね！」

「そうだよ。でも・・・」

「でも？」

「何でもない。ねえこの姿になったら六花としたいことがあったんだ！今からそれしてよ！」

「な、何？・・・」

そう訊ねながらも、ゼツが自分としたい事はひとつしかないと思っていた。

六花は唇を軽く噛んで僅かに目を伏せてゼツの返事を待つ。

「！」

ゼツが膝の上で重ね慣れている六花の左手首をギュツと握つて来て六花は必要以上にビツクつと驚いてしまい、思わず顔を上げた。

「六花と手を繋いで外を歩きたい」

「え？・・・」

「え？じゃなくて！さあ行こう！」

ゼツは握っている六花の手を引っ張って立ち上がった。六花もつられて一緒に立ち上がる。

「で、でも今から？もう真夜中じゃない。明日にしましょう？」

「六花のご主人様は誰だっけ？」

「……。ぜ、ゼツ、だけど……」

「それに昼間は駄目だよ。ヒトの姿してるっていつても人間の姿とは違うんだしさ」

「それはそう、ね……」

そうして六花はなぜか必要以上に急かしてくるゼツに言われるがまま、寝間着から着替えて外出する準備を整えた。

……本当に今日は皆既月食なのね……

六花は空の上の月を見上げた。今夜は満月の筈だが、月は上弦の月のように上の一部分だけが僅かに光っていた。

いま六花とゼツは柳の植えてある小川の遊歩道を歩いている。

この遊歩道はかつて、初代火影・柱間が造ったもので、いまは「恋人たちの小径」と呼ばれ里のデートスポットとして人気の場所として親しまれている。街灯も消え、こんな夜中に歩いている者は他に誰も居ない。

空を見上げていた六花は、いつもの様に目線を左肩に落す。

その視線はゼツのいない左肩をかすめ、そのまま下へ下がってゆき、繋がれた二人の手を見た。しかし、その手には体温は無い。それが今の時間が限れたものに、それとも、血潮の果てにある永遠とも感じられ、六花は胸のざわつきを抑えられずにいた。そしてその何とも言えない緊張感に、いつの間にかヒミコのこととは忘れていた。

「六花。さつきから黙ってばかりだけど何か喋ってよ」

「うん・・・って、ゼツから喋ればいいじゃないの」

「ああそうだ。僕って六花の好み？」

ゼツは無邪気な笑顔で自分の顔を指さして六花の顔を覗き込んだ。

「えっ?…うーん」

「即答できないってNOってことじゃん」

ゼツは口を尖らせてそっぽを向いてしまった。

「だって写輪眼があるからってこの暗さだよ?はつきりは見えないもの」

「もういいよ!どうせ六花は僕のものなんだからさ」

「ふふふつ…ヒトになっても中身は変わらないのね」

「なんだよっ」

「そういえば、ゼツはお菓子が大好きだけど、その中でも何が一番好きなの?」

「六花の大福、六花の饅頭、六花のクッキー、六花のパウンドケーキ、六花の…って色々」

あり過ぎて一番なんてないかな。ああでもこないだの…」

そう言つて指折りしながら好きな物を数えるゼツを見て、六花は愛おしい気持ちになる。その反面、胸の奥がチクリと痛む。

ゼツが自分を好いている、いや愛してくれていることは十二分に伝わつて来る。

しかし、六花のゼツへの愛情はゼツのそれとは明らかに違う。ゼツがヒトの姿になつても、きつとそれは変わらない…。

「つて自分で質問しつて聞かないとかなんだよ！」

「聞いてる、聞いてる！」

途中ベンチを見つげ、どちらともなくそちらへ向かつてゆくと、揃つて腰を下ろした。そして二人は再び沈黙していた。

六花にはゼツに聞きたい事は沢山あった。しかしそれを訊くことは出来ないのだ。

六道仙人と会つたあの日、ゼツの正体のことも知つた。そして満月が南中にある数分間だけ

ヒミコの魂と会えるようになってからは夢でヒミコの記憶らしきものを見るようになり、ヒミコやその母・カグヤについての事も少しだが知るようになっていた。

だが六道仙人との約束を遂行するまで、即ち“予言の子・碧眼の少年”が世界を救うまではゼツにそれを知られるわけには決して行かないのである。

ぎゅっ…

その感覚に、六花は未だ繋がれたままの手を見た。

「今マダラのこと考えてるでしょ？」

「え…」

「六花のことなら解るんだからねっ」

そう言うのとゼツは手を解いて、六花をそつと抱き寄せた。そして六花の後頭部に手を回し、その手で優しく六花の頭を撫で始めた。

「六花…あつたかい。あつたかいよ」

しかし相変わらずゼツの手も、身体も冷たいままである。六花の体温はその冷たいゼツに奪われてゆくが、それと同時に心までも体温と共に奪われていくように感じて六花は固く目をつぶった。

どれくらいだろうか。数分後、ゼツはようやく六花から身体を離れた。

先ほどまで地球に侵食されていた月は、ようやくそこから脱して半分ほど姿を見せている。しかしその色はいつもとは違う、少し不気味な赤銅食だった。

七月とはいえ梅雨時期の今、夜は肌寒く感じる。冷たいはずのゼツの身体が離れ、六花はその寒暖差で一層気温の低さを感じる気がした。それに戸惑い僅かに目を泳がす。

「六花」

その声に六花は顔を上げてゼツの顔を見た。

“どこことなくヒミコに似ている美しい顔と、感情を見て取るのが難しいその瞳は”白眼である。

チユツ…

ゼツはぎこちなく、六花の唇を吸っている。

六花も自然と眼を閉じ、その感触に浸った。

本来なら満月の強い光に隠されているはずの天の川が輝いている。そして、その中の星が一つ、流れて消えていった。

先日の七夕には、織姫と彦星は再会できたのだろうか。そしてまた“いつか”再会することができのだろうか。六花は“今”が永遠では無い事に気が付いた。

そして、ゼツが先に唇を離れた。

「来月六花の誕生日だよね」

そう言うのと突然立ち上がり数歩前に歩み出ると、草むらにしゃがみ込んで何かを探し始めた。そして手を伸ばしプチプチとそれを摘み取ってゆく。六花は不思議そうにそれを眺めていた。

「ちよつと早いけど僕からのプレゼント」

ゼツは摘み取った数本の花を六花に向けて見せた。

「あ、ありがとう…」

「本当はもつともつと沢山摘んででつかい花束にして渡したいんだけどそれには時間足りないかな」

そう言いながら花を見つけては急いで摘んでゆく。六花はその姿を見て、何かを想うよりも先に、涙が頬を伝った。

「ゼツ！」

そしてためらうことなく、ゼツの背中に抱き着いた。

「もういいよ！時間が勿体ないわ。もつとゼツのしたい事をして！お願い」

「だから僕が六花にプレゼントあげたいんだってば。はいこれ」

ゼツは、強く背中に抱き着いて顔を埋めている六花の眼の前に花束を差し出して見せた。六花はゆっくり顔を上げる。

そこには、つゆ草、イヌダテ、カワラ撫子、ゲンノシヨウコ、ヒメジヨオンなど、数種類のちいさな夏の草花たちが顔を揃えて六花に向かって微笑んでいた。六花はゆっくりとその花からゼツの顔へと視線を移すと、ゼツの顔は草花よりも遥かに大きな笑顔だった。その顔が、いつものゼツ、丸くて黒くて目とニヤツとしている口しかない単純な顔が重なり、六花は思わずプツと吹き出してしまった。

「何だよひとの顔見て笑うとか失礼じゃない？せつかくプレゼントしてあげたのにさ」

「ふふふつ……ごめん」

六花はそう言つてゼツの手から花束を受け取ると、胸にギュツと抱き締めた。

「ありがとう……ゼツ。とつても嬉しい……」

その六花の切なくも喜びが溢れる表情を見て、ゼツはそつと顔を逸らすと地面を見ながら軽く唇を噛んだ。

「ホントはもつといいものあげたいんだけど。六花が作つてくれるお菓子みたいなさ……」「ううん！充分素敵なお誕生日プレゼントよ。これ、押し花にして栞に貼つて使うから。ずっと大切に作るから、だから……」

「でもいつか……いつかきつと僕が六花を幸せにするから。マダラが蘇ったら、そしたら……」

ゼツは六花の言葉を遮つてそう言つたが、途中で言葉を飲み込んで再び俯いた。

「……?」

「帰ろうよ。最後にこの身体で六花のお菓子食べてみたんだ」

「う、うん！急いで帰りましょう」

六花はゼツの手を握つて一緒に立ち上がった。

「走……れる?」

六花はゼツの手を握つたまま少し上目遣いで悪戯っぽく訊ねた。

「うん。走れるよ」

「コケないでよね」

「馬鹿にすんな！」

二人は手を繋いで小さく一步を踏み出すと、その歩みは徐々に早くなつてゆき、そして走り出した。

月はもう、西の山の派に近づいていた。

六花は健やかな顔で横向きになつて眠っている。その頭の上にゼツがぴよんと飛び載つた。

『私、今日のこと、ゼツの姿も絶対忘れない』

ゼツの頭に、別れ際に言われた六花の言葉が蘇る。ゼツは丸い小さな目でじつと六花の横顔を見つめた。六花の美しい横顔は月明りに照らされ、僅かに青白く光っている。

「残念だけど今夜の事は目が覚めたら忘れてしまふんだよ六花。でもいいんだ。だってまた直ぐあの姿で会えるから。そしたらその時は……」

満月の光と共に薄れてゆく記憶を、六花の枕元の草花たちだけがその身に宿し、そつと二人を見守っていた。

おしまい